KAIZO

改造

現代支那號

夏季增刊

血壓低下劑

動脈硬化症
腦溢血
早老及老衰

治療及豫防内服藥

アニマザ

獨逸オスナブルク臓器治療藥會社製



血壓昂進を伴ふ諸症……に對し**アニマザ**の有効なることは近年多數の興味ある臨床報告幷びに批判の結果確定的とされり乃ち異常の血壓が久しく持續する時は

精神的及肉體的老衰……現象を呈し腎臓炎、腦溢血、狭心症を誘起し放置する時は生命の危機を招くに至るも**アニマザ**の内服は血壓を低位に保ち頭痛、眩暈、不眠、倦怠等の自覺症状を輕快し

病症の進行を阻止し……現時に於ける最も有効なる治療及豫防劑なりと考へらるゝに至れり幼若動物の血管内膜及中膜の成分にして應用簡便、何等の有害作用を伴ふことなし。

三〇錠入……二圓四十錢
一〇〇錠入……六圓八十錢

各地藥店にあり

血壓昂進症及動脈硬化症に就て
と題する小冊子あり總代理店宛御申越次第送呈す

日本總代理店
株式會社田邊元三郎商店
東京日本橋區本町

A 58

我日本史を經濟的觀點に立ちて究明せる我國最始の權威ある試みで我知識階級は勿論、我總ての階級に必備の良書、内容空疎なりし我國經濟史の重大な發見的文獻。

日本經濟史研究

社會科學 七月特輯

特價貳圓 送料四錢 ◆ 發行所 振替東京八四〇二 東京市芝區愛宕下町二番 改造社

支那文學研究家の爲に

支那畫人傳

横川毅一郎著

四六特裝 三二〇頁

我國に初めて大成せる支那畫人の詳傳で唐代以降十大家の生活を豊かな想像と快い文章で描破した好個の叙事詩である。

定價 2.30
送料 .18

東京市外長崎村 振替東京四七六八二 中央美術社

東洋畫論集 上卷

四賀煌編

四六布裝 三七〇頁

東洋美學の基礎たる支那畫論の國譯集成で東洋美術研究者は勿論一般愛好家の必讀必携すべき基本的典範である。

定價 3.00
送料 .18

東京市外長崎村 振替東京四七六八二 中央美術社

狸横町の人々

浪六序 小松謙太郎著

四六判裝 三百餘頁

▼輕妙洒脱の表現裡に人生探究の眞摯な觀照を有せる文壇新進吾吟の長篇小說、浪六を現代化せる作風は獨自の内容と俟て讀者を魅す

定價 1.80
送料 .08

東京神田表神保町 振替東京四四八六〇 健文社

支那文化史講話

高桑駒吉著

菊判洋裝 五三四頁

支那上下四千年に亙りその文化の諸相を捉へて明確なる史眼に照し有ゆる問題、制度法律學術宗教文藝美術音樂等を說きつくしたり。

定價 4.30
送料 .27

東京神田西紅梅町 振替東京四六〇七四 共立社

支那小說戲曲史概說

宮原民平著

菊判布裝 三四〇頁

泰西文學に對し決して劣らぬ支那文學の眞髓を時代順に示し、各作品の梗概と作家の略傳を添ゆ。研究家にとつて絕好の參考書である。

定價 2.50
送料 .18

東京神田西紅梅町 振替東京四六〇七四 共立社

支那文學研究家の爲に

後藤朝太郎著

支那文化の研究

菊判布装 八〇〇頁

著者支那に往復すること前後十九回新しき支那の見方を説きて周到綿密從來の邦人の皮相なる支那觀を正しく導かんとす、好評重版。

定價 5.50
送料 .36

東京神田通神保町 振替東京五〇一番 富山房

當代碩學校訂頭註

漢文大系

菊判天金薄形美本 全二十二巻

漢文叢書の冠冕として定評あるもの復興版第一巻四書より第八巻韓非子まで八册出來、以下續刊各册發行後六十日間特價五圓五十錢

定價各 6.00
送料 .27

東京神田通神保町 振替東京五〇一番 富山房

胡適氏著

古代支那思想の新研究

楊祥蔭 内田繁隆 共譯

菊判布装 五四〇頁

北帝大學文學部長にして又民國思想界革新の先驅者たる著者が孔孟、老莊、楊墨其他刑名法術諸家の學説を剖判し之を系統的に論明す。

定價 4.50
送料 .18

東京神田猿樂町 振替東京五五六 巖松堂書店

明大教授 村瀬武比古著

政治哲學原理

菊版布製 參百余頁

政治の省察を認識論の立場から説いたもので人間存在から説き始め政黨政治の考察に至るまで説く所頗る正當である。

定價 3.50
送料 .27

東京神田南神保町九 振替東京三一七二五 太陽堂

幸田露伴著

洗心廣録

四六版特装 六五〇頁

碩學露伴博士の隨筆集支那の英雄聖賢を談じ修養、自然、趣味を語る。天衣無縫の名文、清高明朗の風懐は一讀人間の俗腸を洗ふ。

定價 3.80
送料 .18

東京日本橋本石町 振替東京一七四四 至誠堂書店

各科專門大家八十餘名執筆（順不同）

總論
- 理學博士　石原　純
- 農學士　渡邊白恩

物理學化學
- 理學士　竹内　潔
- 理學博士　松野吉松

天文學
- 理學士　關口鯉吉
- 理學士　神田　茂
- 東京天文台　井上四郎
- 東京天文台　小川清彦

地文學
- 理學士　石井重美
- 理學博士　渡邊萬次郎
- 理學士　原田三夫
- 理學士　佐藤傳藏
- 理學博士　中村左衛門太郎
- 水產講習所技師　丸川久俊
- 中央氣象臺技師　梶間百樹
- 理學士　西村傳三

動物學・植物學
- 理學博士　小熊　捍
- 理學士　阿部余四男
- 理學博士　岡村金太郎
- 理學士　恩田經介
- 　　牧野富太郎
- 理學博士　武田久吉
- 理學博士　松村松年
- 理學士　妹尾秀實
- 理學士　内田　亨
- 農學博士　内田清之助
- 理學博士　飯塚　啓
- 早大教授　西村眞次

醫學
- 醫學士　安田德太郎
- 醫學博士　川上　漸
- 理學博士　小泉　丹
- 理學博士　山内繁雄
- 醫學博士　藤浪剛一
- 醫學博士　杉田直樹
- 理學士　山本宣治
- 醫學博士　小酒井不木

心理學
- 文學士　小熊虎之助

農學
- 農學博士　栃内吉彦
- 農學博士　稻垣乙丙
- 林學博士　上原敬二
- 理學博士　藤田經信

機械工業
- 東京自動車學校　加藤芳夫
- 海軍中佐　高力諄藏
- 工學博士　矢野道也
- 工學博士　青木　保
- 工學士　和田小六

化學工業
- 工學博士　厚木勝基
- 工學博士　龜山直人
- 工學士　西松唯一
- 工學士　友田宣孝
- 理學士　西澤勇志智

電氣
- 工學博士　山本忠興
- 理學博士　宗　正路
- 工學博士　田中龍夫
- 工學博士　別宮貞俊

ラヂオ
- 通信省技師　丸毛　登
- 放送局技師長　北村政次郎

其他數科目二十餘大家

▲内容見本 申越次第進呈

▲入會申込 七月廿八日限

▲本誌の讀者には特に本廣告御覧次第申込有効

規略

申込金壹圓、毎月會費金貳圓、六ケ月分前金拾壹圓、一ケ年分全額一時拂金貳拾貳圓（申込金不要）、送料一册につき八錢、九月上旬より毎月一册宛刊行一ケ年完了。

體裁

本講座は會員にのみ頒つ、全十二卷菊判各二百五十頁、總紙數三千餘頁、口繪最新原色版、寫眞版、挿畫圖解毎卷數十面。

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

發行所　國民圖書株式會社

電話[illegible]七八三番　二一八八番　三六八[illegible]番　振替東京二二五九八番

最新の設備を誇る

東京朝日新聞社

東洋第一!!

帝都の中樞數寄屋橋畔に約千三十坪の地を相する鐵骨コンクリートの八層樓………

延建坪約三千五百坪

地平から屋上までの高さ百尺

無電用ポールまで百七十尺

十五年末に落成の見込

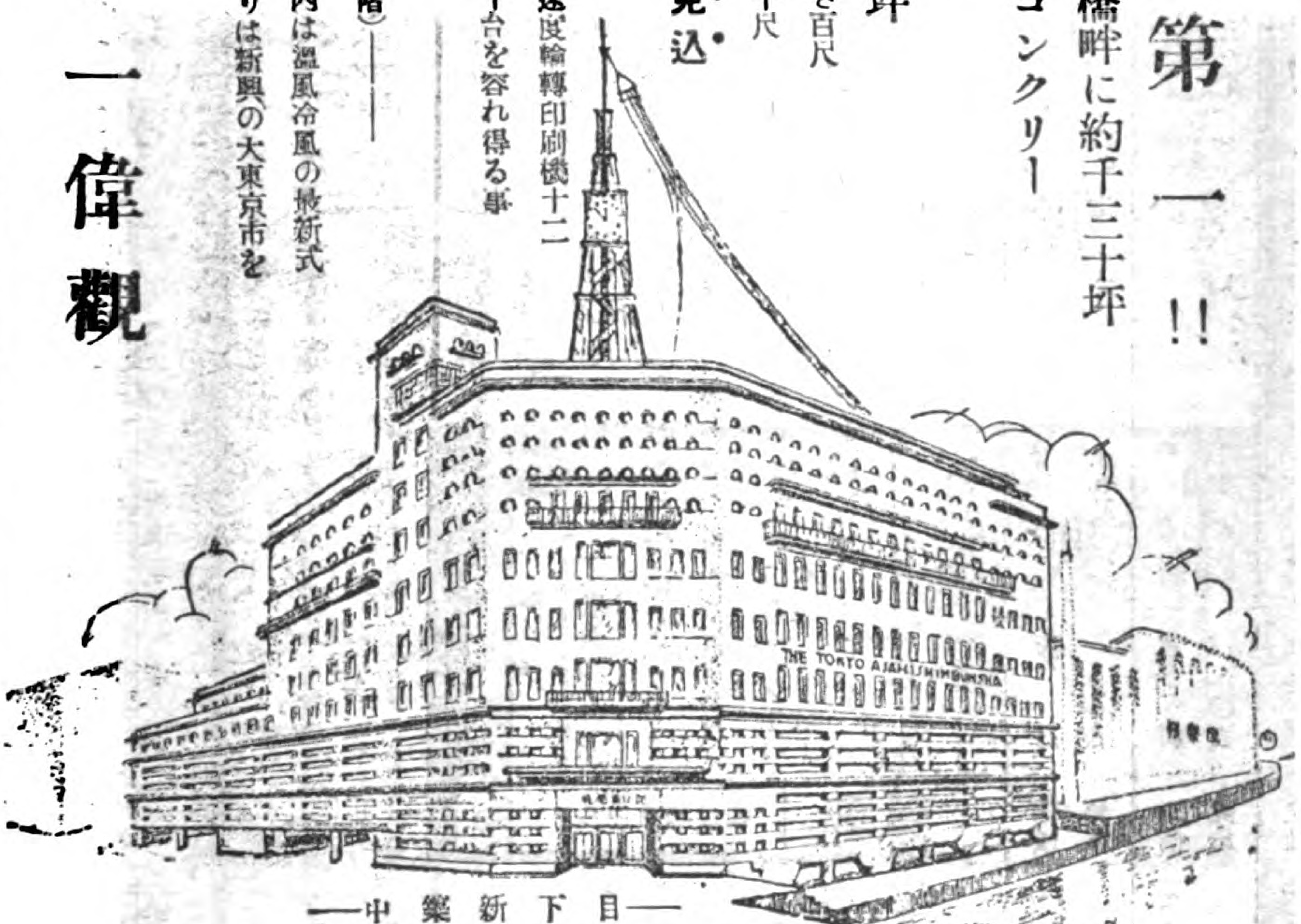
機械設備——

米國ホー會社製朝日式超高速度輪轉印刷機十二台分の設備をなし將來は三十台を容れ得る事になつてゐる

大集會場(六・七階)——

千三百人を收容し得べく室内は溫風冷風の最新式設備をまうけ屋上の庭園よりは新興の大東京市を俯瞰し得る

帝都の一偉觀



—目下新築中—

支那文學研究家の爲に

早稻田大學講師 渡邊秀方著

支那哲學史概論

▼類書中の白眉。人道の哲學、正義の哲學！

菊版七六〇頁 函入總布製 定價五圓 郵稅十八錢

支那哲學に於ける在來の研究は皮想的で史料の選擇にも學的根據の把握にも不備の點が頗る多い、之を補正して支那思想の淵源變遷を系統的に詳論したのが本書である。先秦時代に於ては諸子百家の由來する所を究め其論理的思想を詳にし胡適の別墨論を匡し名家と別墨との關係を闡明して其識見の警拔學殖の博大に歎服せしめる。中世に入りては其神祕的なる時代思想を背景として陰陽五行讖緯道佛の思想を分析的に詳述して時代精神を躍然ならしめ周邵張二程朱陸陽明の思想と關係とを詳論して其哲學上の地位を評定し清代に及び考證學公羊學の淵源內容を論述して斯學の性質を瞭然たらしめてゐる。要するに本書は支那哲學史中空前完璧の大著である。

文學博士 廣池千九郎著

支那文典

菊版一千頁 定價五、〇〇 郵稅、一八

早大教授 文學博士 遠藤隆吉著

老子をして今日に在らしめば

四六版三七〇頁 定價二、八〇 郵稅、一二

早大教授 文學博士 遠藤隆吉著

易の處世哲學

四六判三七〇頁 定價二、八〇 郵稅、一二

東京牛込 早稻田大學出版部發行 振替 東京一一二三 大阪六八九〇〇

河北新報

遼東新報

岸田國士著

言葉・言葉・言葉

價壹圓八十錢　送料金二十錢

新感覺派最前線の代表作

我文壇で一ばんの新空氣。華かな含蓄のある言葉、なんと素破らしい言葉だろう、新感覺の美しき眉といふ形。新感覺とは何ぞ！かくの如きものを云ふ！あの顏、あの聲、巴里素描、夏の夕、女優、ふらんす役者、玉突、チロルの旅！等、等二十八篇の一つ一つが若々しき異常の光を發す。ここに描かれた甘美の世界、大正十五年にこれほど輝かしい、そしていきいきするはなやかさを齎らした文人が又と他にあろうか。ヒタヒタと推奇する新人の新鋭ぶりを見て矢張り時代てふ背景の恐ろしさに文壇の初老以上の花形はいろ〳〵とさびしくなるだろう。

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

細井和喜藏著

無限の鐘

定價貳圓
送料二十二錢

新刊

眞のプロレタリア作家の第一人。細井君は「女工哀史」「工場」「奴隷」の三名著で劃期的の所産を公にして嘖々たる盛名を獲得した。のみか、我國の奴隷解放に此上なき貢献を遂げたことは誰人も否むことが出來ない。其後此人が、筐底に秘めた血に泌む力作が廿數篇發見された。小説、戯曲、隨筆そのうちから尤も生き生きした血の通つた十篇を此書に收めた。長篇作家として成功した君は、短篇作家としても成功した。今この思出で深い一著を手にするとき君の勇姿たる風貌は今尚ほ、無産戰線の最前衛にあるかのやうである。

細井和喜藏著 女工哀史（廿六版） 定價貳圓 送料廿二錢

細井和喜藏著 工場（廿五版） 定價貳圓 送料廿二錢

細井和喜藏著 奴隷（十二版） 定價貳圓 送料廿二錢

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

北海タイムス

朝刊八頁

名古屋新聞

本社　名古屋市東區針屋町

東京支局　京橋區宗十郎町
電話銀座一四四二〇
一四四二一

中部日本第一

地方附錄十一紙

夕刊四頁

名古屋新聞

大阪支局　東區今橋四丁目
電話本局七四七

岸田劉生著

初期肉筆浮世繪

〔著者裝幀〕

菊判 一六四頁
挿畫六十六枚入
表紙木版刷美裝
定價七圓八拾錢
送料内地書留 貳拾七錢

新刊

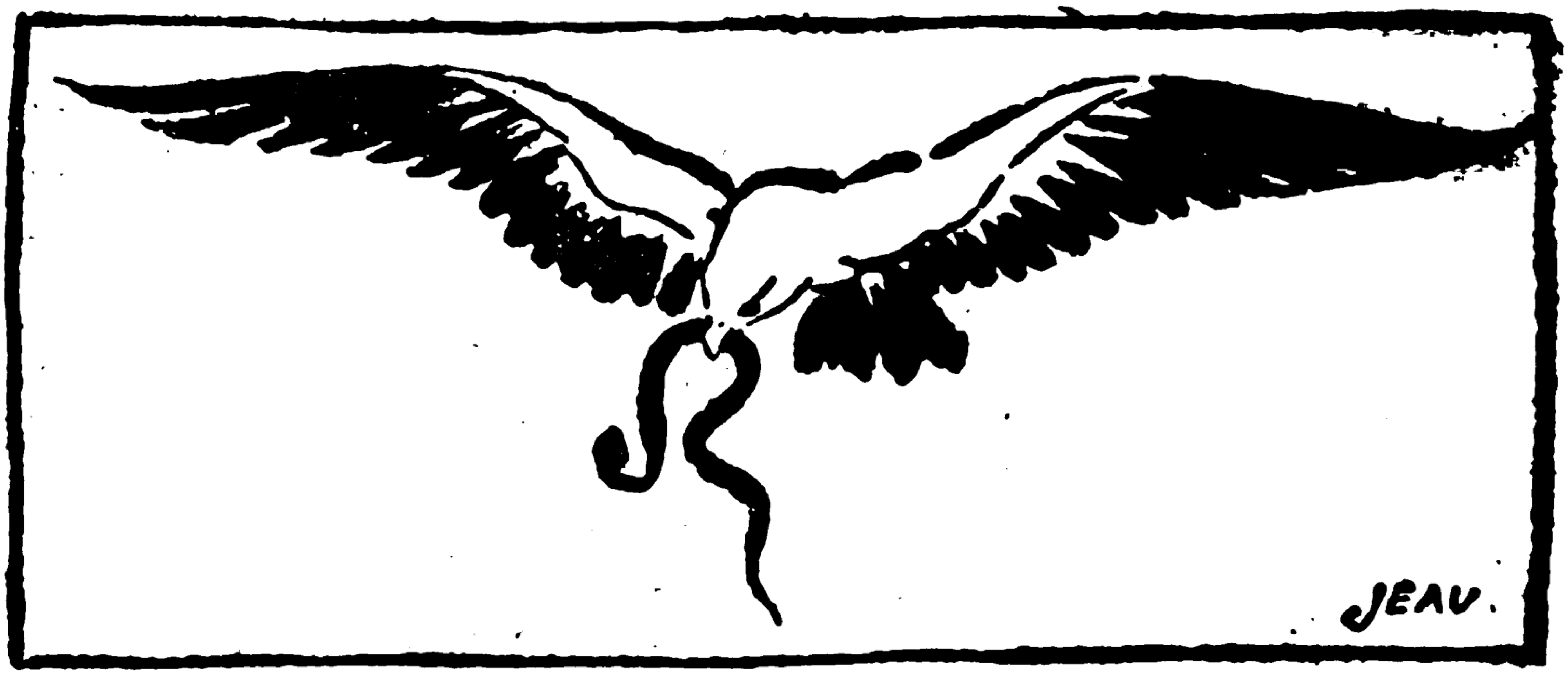
評論にして又壮麗なる一大浮世繪畫集を兼ぬ

本書は岸田劉生氏の多年の鑑賞と研究とから成つた、本邦唯一の初期肉筆浮世繪の評論であるが、只に初期肉筆浮世繪に關する考察のみでなく又浮世繪といふものを斯くまで根本的に深く觀察した著は未だ嘗てなかつたものである。殊に編中の浮世繪の審美的本質に關する考察の如きは、美學上の一發見とも云ふべき、深刻なる考察がされてある。實に依つてはじめて浮世繪は丸刻りに又根本的に考察され評論され評價されたのである。かくて坪内逍遙博士も序文に於て、從來の浮世繪評論が外國の鑑賞家や批評家の所說以上に出でなかつたが本書を得てはじめて多年の鬱懷を排く事を得たと推賞されてゐる。のみならず本書は又畫集としても從來の類書の追從出來ぬところのものであり實に六十餘種の珍品を收纂してゐる。畫家は勿論、考證家、愛好家の必購の珍書である。

挿畫印刷は田中松太郎氏が畢生の努力を傾け、一年有餘の苦心の結果完成せるもの。印刷の精巧なることは其極至に達し在來の美術印刷物に其比を見ず、以て特筆して眞に誇り得べきものである。

挿畫 四色版金色刷八枚(内四頁大一枚)。四色版刷十二枚(内二頁大一枚)。三色版刷六枚。網版刷三十七枚。凸版刷三枚。合計六十六枚。代表的傑作のみを集めたり。

發兌 東京神田南神保町 岩波書店
振替東京二六二四〇番
電話四谷｛五八七〇番 七一六七番



(現代支那號)

支那と現代

支那の事は支那人が考へる。外國人がとやかくと氣をもむには及ばない。また外國人に支那がわからう筈もない。

かうした意見が世間に多少ある。

しかし、これは、民族別や、國籍別を適當に位置づけるだけの識力に缺けた人にして、始めて持ちうる意見だ。

外國人が支那の事を考へる唯一の有意義な、そして正直な場合と可能は、かれが支那搾取、支那分割、支那横領、要するに支那侵略を内意とする時といふ條件つきだ。かれが支那のために考へるすべての場合と可能は、途方もない見當はづれか、僞善かのいづれかに必ず屬する。

かうした意見が世間にあるのだ。そしてこの意見は、民族別と國籍別に超經驗的權威を迷信してゐる人にして、始めて持ちうる意見であるのだ。

支那人は人でないか。われらも人でないか。數學、自然科學、人間科學、藝術、道德のすべてに於て、支那人と支那以外人との間には根本的共通または同一がある。支那人と支那以外人との差は、言語、土地、慣俗、傳統、歴史、血縁に屬する或不共通を基礎的事實とするだけのものではないか。そして、この不共通は、かの共通に比して、外在的、偶然的、一時的のものではないか。

人としての外國人が、人としての支那人を、その支那人の事を、支那を、どんなに深く關心しやうと、どんなに眞劍に問題としやうと、どんなに立ち入つ

岸田劉生著

初期肉筆浮世繪

〔著者裝幀〕

菊判　一六四頁
挿畫六十六枚入
表紙木版刷美裝
定價七圓八拾錢
送料内地書留　貳拾七錢

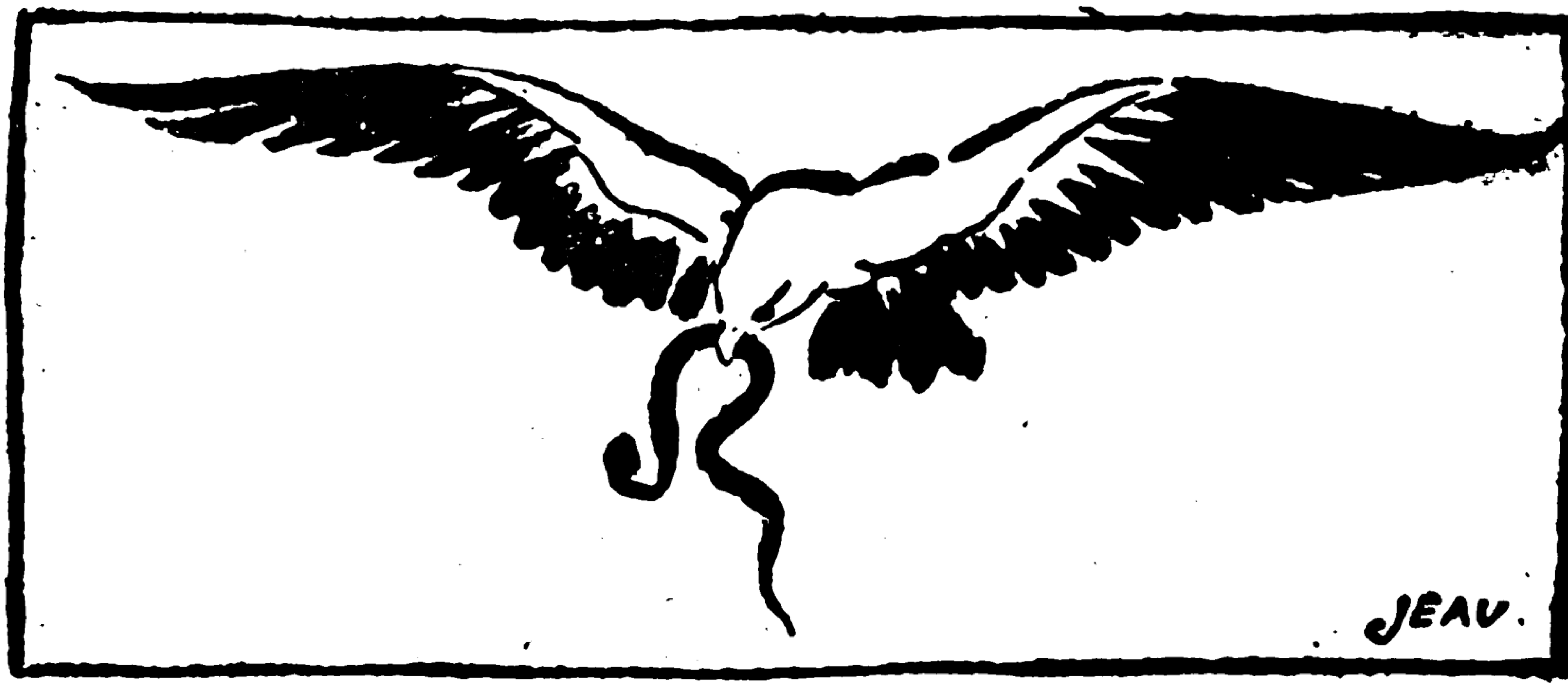
新刊　評論にして又壯麗なる一大浮世繪畫集を兼ぬ

本書は岸田劉生氏の多年の鑑賞と研究とから成つた、本邦唯一の初期肉筆浮世繪の評論であるが、只に初期肉筆浮世繪に關する考察のみでなく又浮世繪といふものを斯くまで根本的に深く觀察した著は未だ嘗てなかつたものである。殊に編中の浮世繪の靡美的本質に關する考察の如きは、美學上の一發見とも云ふべき、深刻なる考察がされてある。實に依つてはじめて浮世繪は丸刻りに又根本的に考察され評論され評價されたのである。かくて坪内逍遙博士も序文に於て、從來の浮世繪評論が外國の鑑賞家や批評家の所説以上に出でなかつたが本書を得てはじめて多年の鬱懷を排く事を得たと推賞されてゐる。のみならず本書は又畫集としても從來の類書の追從出來ぬところのものであり實に六十餘種の珍品を收纂してゐる。畫家は勿論、考證家、愛好家の必購の珍書である。

挿畫印刷は田中松太郎氏が畢生の努力を傾け、一年有餘の苦心の結果完成せるもの。印刷の精巧なることは其極至に達し在來の美術印刷物に其比を見ず、以て特筆して眞に誇り得べきものである。

挿畫　四色版金色刷八枚(内四頁大一枚)。四色版刷十二枚(内一頁大一枚)。三色版刷六枚。網版刷三十七枚。凸版刷三枚。合計六十六枚。代表的傑作のみを集めたり。

發兌　東京神田南神保町　**岩波書店**　振替東京二六二四〇番　電話四谷 五八七〇番 七一六七番



(現代支那號)

支那と現代

支那の事は支那人が考へる。外國人がとやかくと氣をもむには及ばない。また外國人に支那がわからう筈もない。

かうした意見が世間に多少ある。

しかし、これは、民族別や、國籍別を適當に位置づけるだけの識力に缺けた人にして、始めて持ちうる意見だ。

外國人が支那の事を考へる唯一の有意義な、そして正直な場合と可能は、かれが支那搾取、支那分割、支那横領、要するに支那侵略を内意とする時といふ條件つきだ。かれが支那のために考へるすべての場合と可能は、途方もない見當はづれか、僞善かのいづれかに必ず屬する。

かうした意見が世間にあるのだ。そしてこの意見は、民族別と國籍別に超經驗的權威を迷信してゐる人にして、始めて持ちうる意見であるのだ。

支那人は人でないか。われらも人でないか。數學、自然科學、人間科學、藝術、道德のすべてに於て、支那人と支那以外人との間には根本的共通または同一がある。支那人と支那以外人との差は、言語、土地、慣俗、傳統、歴史、血緣に屬する或不共通を基礎的事實とするだけのものではないか。そして、この不共通は、かの共通に比して、外在的、偶然的、一時的のものではないか。

人としての外國人が、人としての支那人を、その支那人の事を、支那を、どんなに深く關心しやうと、どんなに眞劍に問題としやうと、どんなに立ち入つ

てわが事の如く、わが事として考へやうと、絶對にかれの自由だ。それは、權利としての自由であるよりも深く自然的自由だ。内發的にさうする人にとつては、それはかれに於ける一とつの内的必然事だ。

權利としての自由は、制度や慣習の權力内の自由だが、自然的自由は制度や慣習の權力を決定する原動力だ。

現在の支那人及びかれらの子孫が、かれら自身の、したがつてまた關係世界の極めて近い及び多少遠い將來をどう形成するだらうか。これは現代のすべての人々にとつて至深の興味ある一問題だと結論される。かれらがそれをどう形成するだらうかといふ問題と相前後して、かれらはそれをどう形成することを善の立ち場からして至當または必要とするかといふ問題が不可避だ。そして、これがまた現代の至深關心事の一だと確認される。

それらの問題と關聯して、現在の支那國土の將來は、可能的及び理想的にいかなる構想をわれらに許すか。これもまた現代的至深關心事の一つであるほかない。

構想は各人の自由だが、一とつの構想が、支那の政治的完全自治の必要にあることは事實だ。

支那全衆が、組織された一民族化することは、それが最善自己保存をなすための一時の必要件そのものだと考へられる立ち場がある。

組織された多數者は强大なる一物だ。曾て人類は自己を組織することによつて猛獣その他の專制を苦もなく制した。組織された一團族内の各一員は、その團族の環境的外部からの專制を制する力に於てその團族大の怪物的一巨人だ。

現代に於ては、一民族が政治的に自己を組織しないならば、その民族内の各個人が生存、興榮の積極的自由を制限される通則的事情がある。一民族が政治的に自己を獨立させないならば、その民族内の各人の個性主義及びその民族に内、潜存する文化能が機會を享樂しえない通則的事情があるのだ

最近の支那の進歩的代表部分の傾向が、おのづから右の理性と聰明を示す性質のものであることは、天下識者の一様に深く自覺するほかありえない現象だ。最近の支那の進歩的代表部分の傾向は、民族的被專制の彈壓の時務價を知了してゐる證據に於て豐富且つ顯著だ。

帝國主義及び資本主義の客觀的善惡論よりも先きに、支那としては、外在帝國主義及び外在資本主義の專制下に自己を屈從させてゐる部分の存在に注意すべき理由がある。その注意が最近の進歩的支那に反映してゐることは極めて自然

であると同時に當然だ。

現代は經濟に特別の關心を示すべき理由を持つ。そして、支那が、その點に於てまた世界的一興味點たる位置は明著だ。一國内の原料は、その國人がそれを産業化さないならば、いかなる他國人たりともがそれを産業化する道德的必要と自然的必然が多少ある。人間に役立つべき自然を腐朽させて、なに人にも役立たせずにすますことは、道德的主權に忠義な國家的主權としては自他に許すことのできないことだ。

制度及び慣習の權力内の自由としての權利の問題よりも、その權力を決定し、創造する位置にある原動力的自由の獲得が、かくして、この問題の場合にも關心事だ。

その原動力は産業的實力だ。科學、技術、組織、經濟、企業だ。

産業的實力が一民族に内備されれば、手近かの自然資源はその民族の手によつて發展される理由がそれだけ準備されたことになる。

勿論、しかし、産業的實力が唯一の社會的必要ではない。現代の事實としては、集團形に於ての武勇の如きものさへもまだ一とつの社會的必要物だ。その理由は、それなしでは、いかに産業的實力は自民族に内備されても、單なる武力によつて、自民族の富を外國に奪取される可能があるからだ。單なる武力が、いかに近代に於て富の所有を決定したかは、從來の學者によつて充分に認識されてはゐない。

支那は、それゆゑに、武力的に他から輕侮されない準備を必要とする。實に、一八四〇年の阿片戰以來、現代に及ぶまでの支那の對外國的關係史に於ける被專制的部分は、武力的準備に於ける不充分を條件の一個要物としたものであつた。

産業的實力ある支那、他から輕侮されないだけの武力ある支那、かうした支那を發達させることが、進歩的支那の任務だと考へられる立ち場がある。

しからば、その方法はなにか。方法の問題となれば、先きだつ必要は常に知識だ。先づ、さうした支那の位置を明確に知ることが、できるだけ多くの人が知ることが、急務中の急務だ。

さらにしからば、その知識の方法はなにか。われらは、一切の私的事情から絶對に自由な、學的判斷の自覺に於て斷言する。それは、第一に、聰明な選擇を條件とした讀印刷物だと。したがつてまたこれを可能にする諸條件の實現だと。聰明な輿論が支那の内外に發達することが、支那再生のための第一要件だと明知される。



近代西洋文明に對する吾人の態度

胡　適

現代に於て最も根據のない且つ最も有害な妄言は實に西洋文明を貶義して唯物的（Materialistic）となし、東方文明を尊崇して精神的（Spiritual）と爲すことである、由來此の見解は古くより存したものであるが、今日に於てはいかにも新思想であるかの如き趣を呈して居る、これまで東方民族は西洋民族の壓迫を受けたので、往々かやうな辯解的見解を以て、自らを慰めて來たものである、然るに最近數年來、歐洲大戰の影響として一部の西洋人は近世の科學的文化に對して一種の嫌惡的反感を抱く樣になり、從て西洋の學者中にも東方の精神文明を崇拜するやうな議論を爲す者を時々耳にするのである。併しこの種の議論は本來たゞ一時の病的心理に出づるものであるにも拘らず、たま〳〵これが東方民族の誇大狂に投合し、玆に東方の舊勢力は少からざる氣焰を擧ぐるに至つたのである。

余は今敢て保守退嬰の青年にかゝる問題に對する徹底的見解と明晳なる說明とを要求しやうとは思はない。

所謂、東方の精神文明を崇拜する人は、西洋近代文明は物質的並に肉體的享受を偏重し、殆ど心靈的並に精神的要求を無視して居る、故に、これは唯物的文明だと說く。

吾人はかやうな說明に對して先づ其說自身の中に既に靈肉衝突の獨斷を含み、吾人の認めて錯誤と考へる獨斷を有し

て居ることを指摘しやう、吾人の深く信ずる所によれば、抑も、精神的文明は必ず物質的基礎の上に建設せらるべきものである。人類の物質上の享受を向上し、人類の物質上の便利と安樂とを增加することは、是れすべて人類の能力を解放する所以の道程にして、この事は即ち人間が單に生存の爲めにのみ其精力と思慮とを盡すことをせずして、其餘力を以て其精神的要求を滿足せしめるの方法である、東方の哲人の言に、

衣食足つて後榮辱を知り、倉廩實ちて後禮節を知る、

とこれは別に舶來の「經濟史觀」ではなく、全く平易な常識である、無數の人々が終身血と汗との生活を營みつゝ、而も最低限度の人生の幸福をも味ひ得ずして、凍えと饑えとに苦しむと云ふことは、實に人生の大なる悲劇である。而も、更に人類の先知、先覺者がこれら無數の人々の凍えと饑えとを面のあたり眺めながら、何等彼らの幸福を增進するの方法をも講ぜず、却つて「樂天」「安命」「知足」「安貧」等の催眠劑を彼らに與へ、かくして彼らをして自ら自己欺瞞と自己安慰とに陷らしめたことは、更に一層の大悲劇と云はねばならぬ、西洋の古い寓言にこんな話がある、狐が葡萄を食べやうと思つたが其木が高過ぎて食べられない、そこで狐は痩我慢を張つて、「俺は元來酸ばい葡萄は嫌ひだ！」とやつて退けたと云ふのである、狐は甘い葡萄が喰へないと却つて葡萄は酸ばいとやつた、人間は物質上の快樂を享受することが出來ないと、痩我慢を張つて物質上の享受は羨むに足らない、寧ろ貧賤は人に誇るべきものだと說く、かやうな自欺、自慰の精神が自然に懶惰の氣風を醸成したと云ふことは、又怪しむに足らない。是に於て狂狷の人は更に一步を進め、常軌を逸して、身體を損ひ、斷臂、絕食、焚身によつて幻想的な精神的安慰を求めやうとする、かくの如く自欺自慰よりして自殘自殺に至り、人生觀は變じて人死觀となるのは、要するにある一の道理より起り來つたものである、其道理とは即ち人類の根本的欲望を無視すると云ふ事である、此の道理に從ふ時、天に逆ひ性に悖り、必ずや懶惰の社

命を醸成するに至り、人は皆敢へて努力して人生の根本的欲望の滿足を求めやうともせず、又敢へて進んで心靈上並に精神上の發展を企圖しやうともしない、

西洋近代文明の特色は此の物質的享受の重要性を充分に承認することに存する　西洋近代文明は余の鄙見を以てすれば三個の基本觀念の上に成立して居る、

第一、人生の目的は幸福を求むるにあり、

第二、故に貧窮は是れ一種の罪惡である、

第三　故に衰病は是れ一種の罪惡である、

東方の古語を借用すれば、即ち一種の「利用厚生」の文明である、貧窮をば一種の罪惡と爲す故に、富源を開發し、生産を奬勵し、製法を改良し、商業を擴張することが必要となる譯である、又衰病を以て一種の罪惡と爲す故に、醫藥を研究し、衞生を提唱し、體育を講求し、傳染病を防止し、人種の遺傳を改善することが必要と爲る譯である、又人生の目的は幸福を求むるにありとする故に、安適な起居、便利な交通、清潔な都市、優美な藝術、安全な社會、清澄な政治を營むことが必要と爲るのである、西洋近代の一切の工藝、科學、法制を概觀する時、固より其中には殺人的利器や侵略的掠奪的制度の少からず存することは爭はれないとしても　而も吾人は其根本に利用厚生の精神の存することを承認せざるを得ないのである、

此の利用厚生の文明は、果して人類の心靈上並に精神上の要求を無視して居るであらうか？眞に是れは唯物的文明と稱すべきであらうか？

吾人は敢へて大膽に宣言する、西洋近代文明は斷じて人類の精神上の要求を輕視するものではない、否な更に一歩を

進めて、西洋近代文明が如何に能く人類の心靈上の要求を滿足せしめ得るかと云ふことは、到底東洋の舊文明の夢想だも爲し得ぬ所であると斷言するものである、か〻る見方に立つ時　西洋近代文明は斷じて唯物的ではなくして　是れ理想主義的（Idealistic）であり、精神的（Spiritual）である、吾人は先づ理智的方面より其理由を説明しやう、

西洋近代文明の精神的方面の第一の特色は即ち科學である、而して科學の根本精神は眞理の探求にある、人は一般に環境の影響を受け、社會の習慣に支配され、迷信と獨斷との拘束の中に生きて居る、只だ眞理のみは汝をして自由ならしめ、汝をして自信あらしめ、汝をして聰明叡智ならしめる、即ち汝をして環境の一切の束縛を打破し、天を征し地を服し、天を怕れず、地を怕れず、堂々として一個の人間たらしむるものは、實に眞理あるのみである。

知的欲求は人類の先天的な精神上の最大要求の一であつて、東方の舊文明はこの要求に對して、啻に其滿足を圖らないのみならず、却つて常にそれを制限せんとして、それを斷絶せんとする、そこで東方の古聖人は人に勸めて「無知」を強ひ、「聖を絶ち知を棄つる」ことを教へ、「思惟を斷ち」「識らず知らず、帝の則に順ふ」ことを要求した、是れ畢竟困難を畏れて、退いて懶惰に安ずる者である。

か〻る文明が果して能く心靈上の要求を滿足せしむるものであるとして自ら誇稱することが出來るであらうか！

東方の懶惰なる聖人は曰く、「吾が生や涯あり、而して知や涯なし、涯あるを以て涯なきを逐ふ、殆きのみ」と、故に彼らは人に對して靜坐澄心、不思不慮、物來つて順應すると云ふことを求めた、是れ自らを欺き人を欺くの誑語であり、是れ正しく人類の誇大狂である、由來眞理は事物の奥底に存在するものであつて、人が進んでこれを尋求探討するものでなければ、眞理は遂に表現するの時はない。

科學的文明は人間をして其官能智慧を利用せしめ、一點一滴づ〻眞理を尋求し、一絲一毫も忽せにせず、一分一厘づ

ゝ精察することを教へる、この事は實に眞理探求の唯一の法門である、自然（Nature）と云ふものは實に狡猾な妖魔であつて、これを探求し征服しこれに肉迫する時始めて其自身の眞情を吐露するものである、かの不思不慮の懶惰の徒は好んで永遠に愚昧たらむと欲し、永久に眞理の門に進む能はざるものである。

又東方の懶人の言に「眞理は是れ無窮無盡である、故に人の知的欲望を滿足せしめることは到底不可能である」と誠に然り、眞理は完全に其自身を發現するものではない、然し科學は其故を以て決して短縮するものでない

科學者は明に眞理の無窮、知識の無限を知つて居る、而も尙、そこに彼らは滿足を有し得るのである、即ち一寸を進めば一寸の愉快があり、一尺を進めば一尺の滿足がある、二千餘年の昔、希臘の一哲人は或る難問題を思索して、どうしても其道理を發見することが出來なかつた、一日彼は風呂に入つたところ、浴槽の水が溢れた、其時彼は忽然として其原理を發見することが出來た　彼は喜の餘り、裸の儘で外へ駈け出し、街上で吹鳴り散らした「見附けた！見附けた！」（Eureka! Eureka!）

これこそ科學者の滿足である、ニユートン、パスツールより、エヂソンに至るまで何れもかやうな喜悦があつた、一熱一滴も是れ進歩であり、一歩〱すべて是れ滿足である、かやうな心靈上の快樂は到底東方の懶惰なる聖人の夢想だも及ばない所である、

これが正しく東西文化の根本的不同の點である、一方は自暴自棄の不思不慮であり、他方は繼續不斷の眞理の尋求である、

友よ、畢竟何れの文化が果して能く吾等の心靈上の要求を滿足せしむるであらうか？

次に、吾人は人類の感情的並に想像的要求に就いて觀察しやう、

文藝と美術とに就いては今論じない、唯東洋人がよく世界を觀察しさへすれば、彼等西洋人がこの二つの重要な方面を未だ曾て輕視したことの無いことを承認することが出來るであらう、故に吾人は進んで道徳と宗教とに就いて述べたい。

古代人は只管感情の安慰を得んことを求め、其の爲めに人間の理智的要求を犧牲にすることを厭はず、專ら信仰（Faith）に頼つて、何等の實證を問はなかつたが爲めに、玆に鬼を信じ、神を信じ、上帝を信じ、天國を信じ、淨土を信じ、地獄を信ずるに至つたのである、然るに近世の科學はかくの如く專ら信仰に頼ることを許さない、然し科學は敢へて感情の安慰を輕視するものではない、唯科學の要求する所は、一切の信仰は斷じて理智的批判を越へてはならない、必ずそこには充分の證據がなければならぬと主張するのである、凡べて充分の證據の無いものは、唯疑を存すべきものであつて、信仰するに足らない、ハックスレーの言は如何にも適切である、

若し余が解剖學上或は生理學上の些々たる困難に對しても、證據の不充分な事は一切信を措かないと云ふ嚴格な態度を取る時、始めて其成績を擧げることが望み得らるゝであらう、況んや人生の神秘の解決に當つて、どうしてかくの如き嚴格なる態度を取るの要なしと斷ぜられやう？

と、是れは正に吾人の精神上の要求を充分尊重するものである、吾々が一畝の田地を買ひ、一軒の家を買るにすら、尚且つ一枚の證書を必要とする、況んや人生最高の希望の根據に關して、何等の證據もなくして漫りに信ずることが出來やう？

かくの如き「實證的」態度は、近世宗教の「理智化」と稱せらるべきものである、

從來人類は自然の爲めに支配せられ、自然界の秘密を探求することも出來ず、又自然の惡威に對して抵抗するの能力

をも有しなかつたが爲めに、自然に對して常に畏怖の心を懷いたのである、かの庶物を拜し、畜生を拜し、鬼を怕れ、神を怕れ「小心翼々、昭かに上帝に事ふ」と云ふことは、すべて是れ人類が自己の能力を信じ得ない爲めに、一種の超自然の偉力に倚頼せざるを得なかつた結果である、現代人は即ち然らず、其智力は確に自然界の無數の物質と勢力とを征服し、上は即ち飛行の自在を得、下は即ち海底の潜行を爲し、又遠くは星辰を窺ひ、近くは即ち極微を觀察し得るに至つた、雙手を有し一の大腦を持つ此の動物――人――は今や完全に世界の主人公となつたのである、人間は正に自重すべきである、一青年革命詩人は曾て歌つた、

我れ獨り戰ひ、勝敗我れ獨り受く
我は何人の來つて我を自由にするを願はず、
我は思ふを欲せずかのイエスキリストの、
我に替りて罪を贖ひ我に替りて死せしことを。

I fight alone and win or sink,
I need no one to make me free,
I want no Jesus Christ to think
that he could ever die for me,

これこそ現代「人化」の宗教である、天を信ずるは人を信ずるに如かず、上帝に頼るは自己に頼るに如かず、吾人は今や如何なる天堂天國をも夢見ず、唯此の現實世界に於て「人間の樂園」を建設せねばならぬ、吾々は最早や不死の神仙たらむとの夢想を捨てゝ、此の世界に於て活潑健全の人間たらんと願ふべきである、吾々は最早かの四禪定や六神通を

妄想する愚を已めて、此の世界に於て聖明叡智以て天を征し地を服する底の人たるべきである。吾々は輕々しく上帝の萬能を信ずる者ではない、只科學的方法の萬能、人間の將來の無窮を信じて疑はぬ者である、又吾々は靈魂の不滅をも信じない、寧ろ人格の神聖、人權の神聖を信ずる者である、之が即ち近世宗教の『人化』である。

更に最も重要なものとして近世道德宗教の「社會化」を擧げねばならぬ。

古代の宗教は大概個人の救濟に重きを置き、古代の道德も亦同じく個人の修養に其力點を置いたものである、尤も普く衆生を濟度すると自ら任じて居る宗教はあり、又廣く天下を救濟することを以て自任する道德は存したけれども、結局手を下すに何等の法もなく、又其の實行力もなく、却つて徒に相も變らず個人的身心の上に工夫を凝らして、內面的な修養を積むことに轉向したのである、而も內的工夫を用ふれば用ふる程、外的の現實世界を見ることが出來ず、又かの補足すべからざる心性上の遊戲を弄べば弄ぶ程、外的の實際問題に適應するの能力を失ふに至つたのである。

即ち支那の如き八百年の理學の工夫も明かにかの無慘なる非人道的な二億の婦女の纏足を看過して來たではないか！明心見性は人道の苦痛と困窮とに對して何の補ふ所があつたか！ 坐禪主敬は徒に幾多の「四體不勤、五穀不分」の廢物を養成したに過ぎないではないか！

近世文明は宗教的動機より起らずして、而も結果に於ては自ら一個の新宗教を成し、又道德的動機より發せずして、而も結果に於ては自ら一派の新道德を形成した、十五十六世紀の歐洲國家は全く幾つかの海賊的國家であつた、コロンバス、マゼラン、ドレーク等の探險家はすべて大海賊に過ぎない、彼らの目的は唯、金、銀、香料、象牙、黑奴の探索にあつた、然り而してこれらの海賊と其伴ひ來つた商人とは無數の新天地を開拓し、人間の眼界を擴大し、人間の想像力を高め、それは又同時に歐洲の富力を增加したのである、續いて工業の革命が起り、生產の方法は根本的に改變し、

生産能力は頓に發達するやうになつた、

其後二三百年間、實物上の享受を漸を逐ふて増加し、人類の同情心も亦漸次擴大するに至つた、此種の擴大せる同情心こそ即ち新宗教新道徳の基礎を爲すものである、人は各自自らの自由を要求すると同時に、又他人の自由にも想到しなければならぬ、そこで吾に他人の自由を侵害しないことを以て自由の限界と爲すに止らず、更に一歩を進めて最大多數人の自由を求めねばならぬ、又人は自己の享樂を要求すると同時に、他人の幸福にも想到する、そこで功利主義(Utilitarianism)の哲學者は『最大多數の最大幸福』なる目標を提出し來つて人類社會の目的と爲すに至つた、是れ皆謂ふ所の「社會化」の趨勢である、

十八世紀の新宗教の信條は自由、平等、博愛であつた、十九世紀中葉以後の新宗教の信條は社會主義である、これこそ實に西洋近代の精神文明であつて、東方民族の未だ曾て有しなかつた所の精神文明である、

固より東洋に於ても曾ては博愛を主張する宗教もあり、又公田均産の思想も存在した、併し此れ等は單に紙上の空文に過ぎず、未だ曾て社會生活の重要なる部分に事實上の變化を與へたこともなく、又人生を規範する勢力を變成したこともなく、又曾て東方文化の上に重大なる影響を與へたこともない、然るに西洋に於ては全くこれと其趣を異にし、自由、平等、博愛は十八世紀の革命の標語となつたのである、亞米利加獨立、佛蘭西革命、一八四八年の全歐洲の革命運動、一八六二年の亞米利加南北戰爭の如き、何れもこの三大主義の旗幟の下に行はれた大革命である、米國憲法、佛國憲法を始め、南米諸國の憲法は悉くこの三大主義の影響を受くること多大なるものが存するのである、舊階級の打破、專制政體の覆滅、法律上に於ける人民平等觀念の普及、信仰、思想、言論、出版等の幾多重要なる自由の保障と實行、教育の普及、婦人解放、女權運動、婦人參政の實現、……等これらは凡べてこの新宗教新道徳の實際的表現である、こ

れはある二三哲學者の机上の空論ではなくして、實に西洋近代の社會的政治的制度の重要部分を占むるものであつて、既に人生を規範し、實際生活に影響を與へて居る絶大なる偉力となつて居るものである。

十九世紀以來、個人主義的趨勢の流弊は漸次暴露され、又資本主義下に於ける苦痛も亦次第に明瞭に意識されるやうになつた、そこで達識の士は自由競爭の經濟制度は結局眞正の「自由、平等、博愛」の目的を達するの道でないことを悟り、又資本家に向つて公正なる待遇を要求することは、恰も「虎に向つて皮を相談する」に等しいことを知つた、かくの如き狀態を救濟するの方法は唯二途あるのみである、即ち其一は國家が其權力を利用して資本家を掣肘して、被壓迫者階級を保障することであり、他の一は被壓迫者階級が團結して、直接資本家の壓迫と掠奪とに抵抗することである、玆に於て、各種の社會主義の理論と運動とが絶えず發生するに至つたのである、西洋近代文明は本來個人の幸福を求むると云ふ基礎の上に建設せられたものである、故にこれまで「財產」をば神聖なる人權の一として承認し來つたのである、然るに十九世紀中葉以後に於て、此の觀念は根本的に動搖を來し、或人は「財產は是れ贓品なり」と說き、或者は「財產は是れ掠奪なり」とさへ論ずるに至つた、現在私有財產制度は尙存在して居るとは云へ、而も尙國家は極めて高率なる所得稅と遺產相續稅とを徵收することが出來る、かくの如くして財產は久しき以前より既に完全なる私有を許しては居ない、勞働はこれまで卑賤視されて來たのであるが、而も資本集中の制度は勞働者をして大組織を可能ならしめ、一方社會主義の宣傳と階級的自覺とは又勞働者をして團結の必要を悟らしめた、是に於てか此數十年來組織ある勞働階級は遂に社會上に於ける最も有力なる分子となつたのである、最近十年來勞働黨の領袖は世界に於ける强國の政權をも掌握するに至り、總同盟罷業は最も有力なる政府すらも屈服せしめ得るに至り、又露西亞の勞働階級の如きは終に全國的獨裁階級と爲つた、此の社會主義的大運動は現に今進行の途上にあるが、而も今日までの成績は頗る觀るべきもの

がある、各國の「社會立法」(Social legislation)の發達、工場の視察、工場衛生の改善、幼年勞働者並に婦人勞働者の救濟、利益分配制度の實行、勞働時間の短縮、勞働者保險、共濟制度の實施、最低賃銀（Minimum Wage）の運動、失業者の救濟、累進的（Progressive）所得税並に遺産相續税の實施……等、是等は皆、この運動の既に成就し得た、成績である、この事は單なる紙上の空文ではなくして、實に近代文明の重要なる部分をなして居るものである、これこそ即ち「社會化」せる新宗教であり新道徳である、

東洋の舊き頭腦の持主は或は謂はん、『これは權利の爭奪であつて、決して宗教、道徳と稱することは出來ない』と、これ亦正しく東西文化の根本的相違點である、一方は分に安じ、貧に安じ、天を樂み、爭はず、損を厭はざるものであり、他方は分に安ぜず、貧に安ぜず、損を肯んぜず、努力奮鬪、絶えず現在の境遇を改善するのである、東洋人は人の富貴を見ては『前世の宿善の然らしむる所だ』と云ひ、又已れの貧窮に就ては『前世に於て善業を修しなかつた結果だ』と云ふ、或は『是れも運命だ』と諦める、西洋人は即ち然らでない、『貧富の不平等や痛苦の待遇の存在は制度の然らしむる所である、制度は宜しく改善さるべきものである』と云ふのである、

彼等は決して權利の爭奪を事とするものではなく、自由を爭ひ、平等を爭ひ、正義を爭ふものである、彼等の爭ふ所は單なる利己の爲めではなく、彼等の奮鬪の結果は實に人類の絶大多數者の福利を齎すものである、最大多數者の最大幸福は袖手念佛を唱へたとて得らるべきものではなく、奮鬪力爭を俟つて始めて達し得られるものである。

友よ、畢竟するに何れの文化が果して能く其心靈上の要求を滿足せしめ得るであらうか？

×　×　×

吾人は次に西洋近代文明の綜合的批判を試みやう、西洋文明は「人生の幸福を求むる」と云ふ基礎の上に建設された

もので、確かに人類の爲めに尠からざる物質上の享受を增加した、而も同時に人類の精神上の要求をも滿足せしめたことも亦明らかな事實である。又其理智的の方面に於ては、精密なる方法を以て、不斷に眞理の追求を繼續し、自然界の窮なき秘密を探索した。又宗教道德方面に於ては、迷信的宗教を覆滅して、合理的宗教を建立し、神權を打破つて、人化の宗教を建立し、かの不可知の天國淨土を拋棄して「人間の樂園」「人生の天國」の建設に努力し、又かの個々の人の靈魂の救濟と云ふことより罷脫して、凡べての人間の新しい想像力と新しき智力とを以て、かの全然社會化した新宗教と新道德とを弘通し、以て人類の最大多數の最大幸福を謀ることに努力せんとするものである、東方文明の最大特色は「足ることを知る」にあり、西洋文明の最大特色は「足ることを知らざる」にある、

足ることを知る東洋人は自ら簡陋の生活に安ずる故に、物質的享樂の向上を求めず、自ら愚昧に安じ、自ら「不識不知」に安ずる故に、眞理の發見や技藝機械の發明に注意を拂はうとしない、自ら現在の環境と運命とに安ずる故に、自然を征服することを想はずして、唯天を樂しみ命に安ずることを想ひ、制度の改革を想はずして、唯分に安じ己を守ることを圖り、革命を想はずして、唯順民たらんことを願ふのである。

斯くの如く物質と環境との拘束と支配とを受けて、而もこれより超脫することを得ず、人間の心思智力を以て環境を改造し、現代の文明を改善し得ない者は、是れ懶惰にして進步なき民族の文明である。これこそ正しく唯物的文明と稱せらるべきものである、此種の文明は人類の精神上の要求に對し唯抑遏あるのみであつて決して之を滿足せしめ得るものでない。

西洋人は全く之と反對である。彼等は曰ふ「足るを知らざるは即ち神聖（Divine Discontent）と、物質上の足ることを知らざることが今日の鋼鐵の世界、蒸汽機關の世界、電力の世界を產出し、理智上の足ることを知らざることが宗

今日の科學の世界を産出した、又社會的、政治的制度上の足ることを知らざることが今日の民權の世界、自由政體、男女同權の社會、勞働神聖の喊聲、社會主義の運動を産出した、この神聖なる足ることを知らざるの精神こそは一切の革新、一切の進化の原動力である、斯くの如く充分に人間の聰明と智慧とを運用して眞理を尋求し、以て人間の心靈を解放し、自然を征服して以て人間の用に供し、物質的環境を改造し、社會的政治的制度を改革し、人類最大多數の最大幸福を謀る、「斯くの如き文明こそ應に能く人類の精神的要求を滿足せしめ得るものである、斯くの如き文明こそ精神文明であり、眞正の理想主義的（Idealistic）文明であつて、斷じて唯物的文明ではない。

固より眞理は無窮である、物質上の享受も無窮である、新器械の發明も亦無窮である、社會的政治的制度の改善も亦無窮である、唯一物を改せば一物だけの愉悅あり、一器を改良すれば一器だけの滿足あり、一制度を改善すれば一制度だけの滿足がある、今日成功する能はざれば、明日明年成功すべく、前人失敗すれば、後人、これを繼續助成することが出來るであらう、一分の力を盡せば一分の滿足がある、努力の人には無窮の進行の一歩一歩に充分の愉快が味はれるものである、かの大詩人テニソンは古の英雄ユリツシーズの口吻を借りて歌つて曰く、

かくて人生の行路は、かの虹にも似たるか、
未知の世界はそこに眺めつゝ
進めど進めど更に到るべくもなし、
されど路半ばにして悶え悲しまんや！
明、晃々たる快刀いかで容易く銹びん！
一脈の生氣豈能く我を生かさざらむや？

…………

友よ、來れ、

更新の世界を求むる未だ晩からず

…………

失へる精力は巡り來らずされど剩れる力尙ほ少しとせず

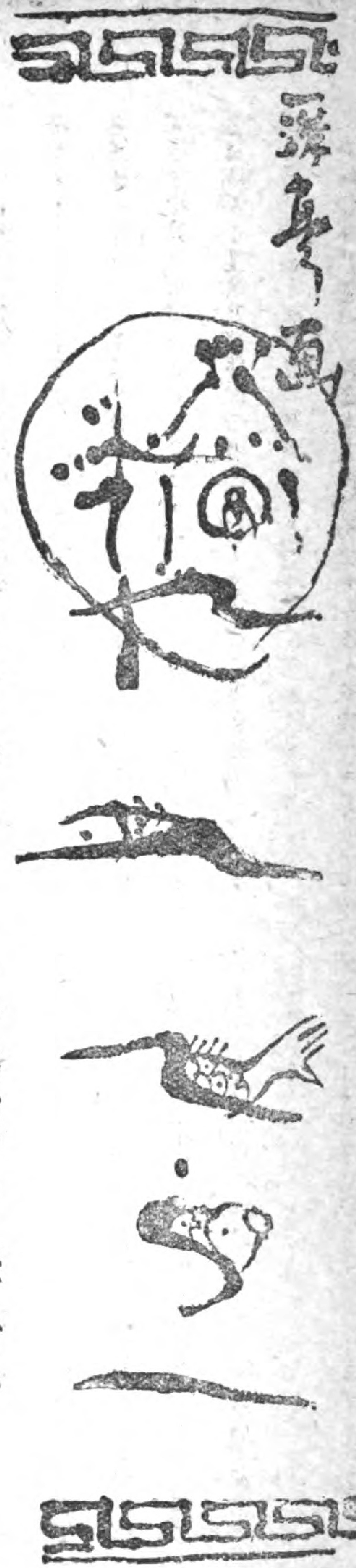
今や昔日の如く掀天動地の力はあらねど、而も依然として昔の我なり、——

光陰と運命とは何程か壯志を銷磨せしめしも、

不老の雄心尙ほやまず

努め、覓め、見出さん、

退かず、たゆまず、



中國無產階級及びその運動の特質

李　人　傑

一

中國無産階級及びその運動の特質を知らんとせば、先づ中國社會最低層の傳統的氣質と中國の現在世界に於ける經濟的地位を知らなければならぬ。

二

今の中國は國際資本主義の共同殖民地であり、且つその最後の殖民地である、隨てまたその失業者の掃溜場である。

中國は廣大の土地と衆多の人口と相當に歴史ある文化とを擁し、資本主義の搾取場、利潤の實現場としては、固よりインデアン・アメリカの比すべくもあらず、また歴史上の如何なる殖民地よりも理想に近き殖民地であらう。かるが故に中國はまた資本主義の最後の且つ最も效力ある續命湯とも云へるのである。正しくこの理由の爲に、所謂資本主義列强が中國を何時までも殖民地に止めて置く爲に努力せねばならず、また各々自己の殖民地として保持せんが爲に努力せねばならぬのである。發展の最高階段の帝國主義に進んで居る、生の爲にヂタバタして居る、强力なる且益々强力なりつゝある無産階級及び明白激烈なる且益々明白激烈なりつゝある階級鬪爭をその本國に控へたる現在の資本主義、かれがこの最後の續命湯に對して何んの控目を考へる餘裕があらう。單に之だけを以てしても、現の各資本主義帝國が如何に中國を搾取しなければならぬか且つ如何に搾取しつゝあるかを略々想像出來よう。

三

より老大なる資本、より雄大なる規模、より優秀なる技術、より豐富なる經驗、より多量なる熟練勞働の下に於ける資本主義によつて生産せられたる低廉の商品たる砲彈を用ゐ、種々の不平等條約特に關税の協定權及び紙幣の發行權なる重砲を通じて、中國の資本主義生産の發生を射止めたと同時に、又既存の舊式産業組織を射崩しつゝある。射崩されて手工道具を失ひたる手工業者及び土地を失ひたる農民は年々驚く可き比例を以て增加しつゝある。産業革命期に於ける英國手工業者及び農民の滅亡し行く過程は悲慘を極めたと云ふ、しかし今の中國に較ぶれば、恐らく雲泥の差があるだらう。何んとなれば、當時の生産力は現在のと較べものにならないからである。

それのみでない、各資本主義帝國はまた各々中國と云ふこの最後の續命湯を自己獨占のものにせんと競爭しなければ

ならず且つ競爭して居る。その最も露骨なる現はれは即ち軍閥の喰合ひである。各資本主義帝國は各々一人の軍閥を盛り立て、彼に軍器を供給し、軍資金を供給して（勿論借款の形式にて）、中國を統一せしめ、その武力的統一を透してこの績命湯を獨占せんとする。各資本主義帝國は皆こうする。だから內亂が絕えない。この內亂がまた中產者の財產を、手工業者の手工道具を、農民の土地を奪はなければならない。この現象は產業革命期の英國にはなかつた。

財產を失ひたる中產者、手工道具を失ひたる手工業者、土地を失ひたる農民は年々驚く可き數を以て增加して居る、しかし資本主義的生產の發生を射止められて居るがために、極々少數のものを除いては賃銀勞働者になる機會もない。この現象は尙更產業革命期の英國になかつた。彼等は財產を奪はれた、手工道具を奪はれた、土地を奪はれた、無一物になつた、勞働力を賣らなければならなくなつた、しかし買つて吳れるものがない、何うすればいゝか？とゞの詰り、土匪、兵隊、娼妓、竊偷、流浪、乞食になる外はない。土匪と兵隊とはまた土匪、兵隊、娼妓、竊偷、流浪、乞食を製造せざるを得ない。

ロ

國際的資本主義はその共同且つ最後の殖民地たるこの中國に大量の土匪、兵隊、娼妓、竊偷、乞食を製造した。且つ益々大量に製造しつゝある。中國のこの大量の且つ大量に增加しつゝある土匪、兵隊、娼妓、竊偷、流浪、乞食は決して多く聰明なる人々の考へて居るが如く、中國人の懶怠の產物ではない。彼等は正しく國際的失業者であり、資本主義列强の失業者の身替りである。彼等の現在數は國際資本主義の過去の射擊成績を表はすものであり、彼等の增加率はその射擊力を表はすものである。彼等の現在數及び增加率は果してどの位あるか、統計がない爲に、正確には云へないが、職工募集の

どうが單に工場門前に貼つたゞけで、一日の中に五六倍の應募者が集まり來ることが珍しくない。(こう云ふ例もある。民國十二年の暮上海の寶康製糸工場で職工を募集した所、第一日の午後一時の受付時間に女工が門前に殺到し、午後の三時には二千人に達した。しかし工場の需要數は僅かに三百名に過ない。)土匪が討剿すれば討剿する程ど殖えて居る、しかも軍隊の守城を攻め落す位のことは到る處で見られる。兵隊は毎年の軍閥戰爭に拘らず殖えるばかりで居る、しかも農村の民團及都會の商團(即ち農民商人の自衞兵)も益々その團數及び團員を殖やして居る。公私の娼妓が農村都會を問はず急速に殖えて居る。都會の旅館と云ふ旅館、路次と云ふ路次、彼女等の寓所のない所は殆んどない。窃偸、流浪、乞食は至る所にウヨウヨして居る。殆んど中國の名物と云ふことが出來る位である。(單に私の知つてゐる具體的例を云へば、民國十年に漢口の人力車は毎台毎日二人によつて曳かれて居たのであるか、民國十四年には毎台毎日五人によつて曳かれるようになつた。)これらの有樣を見れば、彼等の現在數及增加率が如何に多きかは、略々想像が付くと思ふ。彼等の增加率はまた商店の性質及び隆替からも窺ふことが出來る。農村と云はず、都會と云はず、今の中國で最も隆盛なる且つ益々隆盛になりつゝあるは舶來品を賣る店と輸出原料を集める店とである。何處に於いても、建築の宏壯、裝飾のきらびやかなるは必ず舶來品賣店である。國產品賣店は一概に中國の國家と民族を代表して居る如くに、町の隅つこに小さな倒れさうな且睡むたさうな建物に俯くんで居る。このコントラストは、何處に於いても益々顯著になりつゝある。これは何を表はして居るか?勿論國際資本主義の商品の勝利、中國固有產業の崩壞を、從つてその中產階級、手工業者、農民(其の副業を失ふことによつて)の崩壞を意味して居るのである。資本主義的生產を射止められて居るが爲に、從つてまた土匪、兵隊、娼妓、窃偸、流浪、乞食等の增加を意味して居るのである。そしてまたこれらのものが資本主義列强の失業者の身替りであることを表はすものである。

だから私は嘗て中國の人民を分類して見た。即ち軍閥は國際資本主義の警査であり、官僚政客はその家僕であり、商人はそのコンパラドール若くは商品販賣者であり、農民はその原料生産者であり、近代産業の下に働いて居る勞働者はその賃銀勞動者であり、土匪、兵隊、娼婦、窃偷、流浪、乞食はその失業者である。眞に中國の爲に存在して居るものは、交通不便の爲に未だ舶來品も入れず原料品も出られない地方の農民及手工業者と未だ崩壞し切らない舊時代の中産階級及手工業者とだけである。しかし前者は交通のもつと發達することによつて失業者になる運命に居る、後者は現に非常なる速度にて崩壞しつゝある、皆な國際資本主義の候補失業者と云ふことが出來る。眞に中國の爲に生存しようとして居るものは、少數の自覺ある軍人、兵士、智識者（智識者の一部分は生活難の爲に外國資本家のクラーク若くは通譯養成を目的とする外國人設立の教會若くは他種の學校に教員をして居る、また自ら進んでクラーク若くは通譯になるものもある、現在の教育經費狀態が續けば外國語を談せる智識者にしてクラーク若くは通譯になるものが殖えて來るに違ひない）商人、學生、勞働者だけである。それらのものは即ち國際帝國主義者の云ふ所の望ましくない支那人であり、暴徒であり、露西亞に買收されたものであり、赤化民であり、ボルセギツキである、軍閥の討伐せなければならぬものであり、撃殺しなければならぬものである。

五

國際資本主義によつて製造せられた失業者、即ち世界失業者の身替り者、即ち土匪、兵隊、娼妓、窃偷、流浪、乞食の現在數は、如何に少なく見積つても三千萬人を下らないだらう。しかし財產、手工道具、土地を奪はれたものにして新式産業の下に賃銀勞働者になり得たものが幾何あるか？苦力を入れても、如何に多く見積つても、二百萬人を出で

ないだらう。失業者二千萬人に、在業勞働者二百萬人、何んと云ふ少ない比例だらう！これなればこそ、國際資本主義者の羨望するが如く、中國の勞働力が豐富で、勞働時間が長く、賃銀が低いのである。中國勞働者の勞働時間の長く、賃銀の低きは日本の多くの支那經濟事情研究者の著書の示す通りである。世界一である。勞働時間は晝夜交代ならば十二時間、夜業なき處は十七八時間になるは珍しくない。民國十年上海に於ける紡績成年男工の日給を見れば、最高が六十錢で、最低が三十錢だ。上海の生活程度がそんなに低いかと云へば、日本とそう違つたものでもない。しかし賃銀の差はどうだ！彼等の生活程度は想像されよう。しかし彼等だつて人間である。如何にこんな非人間的生活に安んぜられるか？如何に反抗しないで居られるか？

中國の勞働爭議が民國八年の學生運動、即ち所謂五四運動以後に始めたものと、多くの人が考へて居るやうである。しかし實際に於いては、以前に於いても隨分あつたのである。只だ其時分は勞働者の間によき組織がなかつた爲に、何時も生活に逼迫せられて蜂起的に同盟罷業をやり、多くは失敗し、たとへ少しばかり賃銀を增加されても、勝利と云ふ程のことはなかつたのと、社會一般の人は彼等を眼中に置かない因襲の爲に、彼等の行動に注意しなかつただけのことである。

然らば彼等の鬪爭相手たる雇主若くは監督者は誰か？殆んど皆外國人である。中國にある新式的産業は僅に舶來商品及び輸出原料を運輸する鐵道及び船舶業、原料を抽き出す鑛山、原料を整理且つ荷造りをする事業、生原料のまゝで運輸に堪へず相當の加工を以て半製品にする事業（製蚕業の如き）煙草製造業、紡績業及び織物業、製電及び水道業である。中國の鐵道は、御存じの如く、京綏鐵道を除けば、皆外資で建設したものである。從つて外國人に管理されて居る。漢京鐵道は回收されて交通部の直營になつて居るけれども、實際管理權を握つて居る高級技術員はやはり外國人である。交通部直轄の郵便、電信、電話局もそうである。沿海及河川航行船舶も僅かの招商局を除けば、その四分の三以

くは五分の四は皆外國會社のものである。招商局の所屬船も船長等は外國人である。今でこそ、中國人設立の南洋兄弟煙草會社があるが、民國以前は只だ英米煙草會社あつたゞけである、しかもその規模は遠く南洋兄弟煙草會社の及ぶ所ではない。製電場及水道のある所は殆んど租界地に限られて居る、云はずもがな、外國人事業である。租界地でない湖北武昌の電燈會社でさへも日本人の經營だ。漢冶萍、撫順、開欒は中國の三大鑛山である。しかも撫順は日本人經營、開灤は英國人經營のものであり、漢冶萍も日本のものにならんとして居る。原料に關する事業は、勿論全部外國人經營のものである。歐洲大戰の御蔭でその間に中國人設立の紡織工場は大部殖へたが、まだ〳〵外國人設立の數に及ばない。また表面中國人經營のものでも、眞底そうでないものは幾らもある。よく勞働爭議の爲に、バケの皮が剝れることがある、例へば去年の夏の天津の裕豐紗廠の如きがそうである。たとへ眞に中國人の事業でも、外國人の技術員を聘用するものが幾らもある。

こう云ふ譯であるが故に、何處の勞働爭議でも必らず外國人にぶつかる。外國人もまだ殖民地心理の爲に、出しやばらなくて好い所でも必らず出しやばる。これだから、中國の勞働問題は必らず民族感情の色彩を帶んで來らざるを得ない。勞働者對資本家若くは支配者の關係には必らず中國人對外國人の關係が加はる。勞働爭議には必ず民族鬪爭の外衣が付き纒ふ。勞働者はその地位が困難になればなる程、外國人の壓迫を感ずる。その雇主若くは監督に對する惡感が加はれば加はる程、民族的惡感が深くなる。こゝに中國が資本主義の殖民地であり、中國の勞働者が外國資本主義の勞働者であると云ふ特質が現はれるのである。こう云ふ特質は凡ての殖民地に於ても同じであらうが、特に中國に於て顯著でなければならない。如何となれば、中國は國際資本主義の共同且つ最後の殖民地であり、その勞働者が國際資本主義の共同的勞働者であり、從つてまた最も苦痛の地位に居る勞働者であるからである。實に中國の勞働階級は凡ての他の中

國人が尙未だ民族的に覺醒して居ない間に、その體驗によつて覺醒したものである。それであるから、民國八年北京の學生が愛國運動を起した時に、彼等は心底からこれに同感し、これを應援したのである。商人も相應に聲援したには聲援したが、多くは心底からではなく、單に見榮からであつた。實にあの運動は彼等の支持を受けなかつたならば、全然失敗に終つたであらう。學生の罷課が一月に及んだ、しかし政府は相變らず態度強硬である、捕縛したものをも放免して呉れない。商人の外表的罷市も一週間に及んだ、しかし何の效果もない。彼等が立つに及んで、政府が始めて屈伏したのである。

六

また學生から云へば、あゝいふ二進も三進も行けなくなつた所へ、測らずも以前全然眼中になかつた勞働階級から熱烈なる應援を得、しかも單に同盟罷工を宣したゞけで外國人を狼狽させ、政府を屈伏せしめたから、自ら感激をせざるを得ない、また彼等の眞價値と眞精神を認めざるを得ない。――彼等こそ眞に國を救ひ且つ未來の國家を背負ひ立つべき唯一の要素であると思立たのである。これは卽ち學生と勞働者とは一緒になり、一緒になつて以後の一切の革新運動の中堅になつた機緣である。また勞働者の眞價が社會に認められ、その運動が以後强盛になり世人の注意を惹くに至つた機緣でもある。從つてまた中國の勞働運動が五四運動以後に於いて始めたものと世人に思はせた所以でもある。

學生が既に彼等が新中國を創造し且つ背負ひ立つべき唯一の要素であることを知つた以上、自ら彼等に接近を求め、且つ彼等の地位に同情を寄せざるを得ない。實際當時の學生にして、清朝末年に於ける秀才が革命の爲めに軍隊に入つた如く、勞働者に接近する爲に學校を捨てて、工場に入つたものが少なくなかつた。學生が彼等に接近し若くは彼等の

仲間になつて、彼等に教育と組織とを與へた。彼等はこれによつて實力を得、陣容を整へた。そうして運動が激烈になつて來た。これは即ち彼等が、學生から得た所である。しかし學生がまた彼等から教へられなければならなかつた。彼等の精神は民族的外衣を着て居た。この外衣をして彼等と一緒になる機緣を作つた。しかし外衣は何處までも外衣であつて、肉でもなく、靈魂でも尙更なかつた。この外衣の下はやはり勞働問題であつた、勞働對資本の關係であつた。彼等は民族的外衣を着し得ても、後に述ぶるが如く主觀的にも無國家の將來の特色あるが爲めに、國家主義者にはなり得なかつた。彼等は自分の國家を要求するやうになり得ても、決して他人の國家を愛し得なかつた。一方から云へば、彼等は客觀的に國際的勞働者であると同時に、主觀的にもまた國際的勞働者であつた。この故に、彼等の運動は國際的になり易きも決して國家的にはならないのである。こゝに中國の無產階級及びその運動の一特質が存するのである

しかし學生は純粹の上滑りの愛國主義者であり、國家主義者であつた（當時の一指導者胡適を見れば分る）。彼等に接觸したからには、彼等の精神は感染且つ同情せざるを得なかつた。こゝに於いて社會主義の研究及び宣傳が盛になつた。五四運動以後の中國に於ける社會主義の研究及び宣傳の盛んになつたのは、勿論露西亞革命の影響、特にその革命に對する同情による影響、特に同病相憐れむの同情による影響によるが、その根本原因から云へば、やはり學生が勞働者に教へられた精神にあるのである。この點から云へば、勞働者が學生に精神を教へたのである

學生は勞働者から精神を教へられて、社會主義の研究を始めた。またその研究の結果を勞働者に教へて、彼等の單なる感じに一定の型を與へた。これより、彼等の精神及び運動は一定的原則の上に立つ樣になつた。勞働者が學生に精神を教へ、學生は勞働者に知識を教へる。これによつて、彼等は中國の如何なる革新運動にも離るべからざる二つの中堅的要素になつた。如何なる運動にも、學生ある所必らず勞働者があり、勞働者ある所必らず學生がある。純粹な學生運

動に見ゆる運動にも、その眞底には必らず勞働者あり、純粹な勞働運動に見える運動にも、その眞底には必らず學生がある。御聰明な帝國主義者はこれを學生が赤露に買收されたと云ふ。豈に測らんや、學生は單に知識の供給者であつて、その精神に到つては反つて勞働者によつて敎へられて居ることを。正にこの精神の持主が國際的勞働者であるが爲に、その主人が外國資本家及びその代辯人であるが爲に、一切の革新運動は社會主義と云ふ肉と靈との外に民族的外衣を纒はざるを得ないのである。またこの民族的外衣を纒つて居ればこそ、如何なる勞働爭議も國民的運動になり易く、眞に中國の爲に生存しやうとする他の部分の人々、即ち自覺ある軍人、兵士、知識者、商人等もよく參加するのである。去年上海に於ける如き日本人經營紡績工場の職工殺し事件は、中國に於いてゞなければ、起らなかつたであらうし、また中國に於いてゞなければ、あんな大きなことにもならなかつたであらう。中國の勞働運動と云ふべき勞働運動が、あゝ云ふ短日月の間に、かう云ふ迅速の發達、殆んど直接に政治的鬪爭に突入したと云ふ程の發達をなし遂げたと云ふのは、この民族的外衣が最も大なる原因である。この民族的外衣がまた後に述ぶる如き無國家的關心と云ふ特質と結合して、中國の勞働運動を急速に國際的色彩を帶ばしめたのである。この間の消息を語るものは、中國共產黨の態度である。中國共產黨は一方世界の無產階級の階級鬪爭を代表する第三インターナショナルの支部であり、一方また中國の第三階級の民族鬪爭を代表する國民黨に加入して居る。一見、自家撞着の樣であるが、中國勞働階級及びその運動そのものの特質を見れば、決してさうではないことを見る。

七

世界周知の如く、中國は長い間、專制國であつた、奴隷制の專制國であつた、しかも支配者がその支配權を奴隷の中

より選ばれたものに託した專制國であつた。この奴隷を支配する奴隷の連鎖が非常に長かつた。上は宰相より下は秀才、保正、甲正、無賴漢に至るまで――非常に長い連鎖である、人數も非常に多い。中國が官國と云つていゝ位多い。この非常に多い中に、極少數の現に官職に居つて官祿を貰つて居るものの外は、即ち大部分の大部分は正當な收入がないのである。彼等は何によつて生活するか？最下層民の血を吸ふことによつて。只だ彼等が吸ふに止らない、職に居つて官祿を貰つて居るものも吸ふのである。實に中國に於いては、官吏になるは金持になる最近道である。過去に於いてさうであつた、現在に於いてもさうである。これは世界周知の事實である。彼の無職者等は實に彼等と結託して吸ふのである、或は彼等の手先になつて吸ふとも云へる、また或は彼等を助けて吸ふとも云へる。最下層民は只だ彼等が彼等の生活を吸ひ出す對象である、吸はれる丈吸はれる對象である――吸ふことによつてのみ始めて生活出來る人が多い爲に、吸はれる丈吸はれるのである。これだから、最下層民は國家と云ふものから吸はれる丈で、何らの保護若くは利益をも得られない。裁判も理非直曲によるのではない、吸はれる程度によるのである――より多く吸はれるものは勝ち、より少なく吸はれるものは負ける。だから彼等は成るべく官吏、紳士、顏利き等を避ける。蓋しこれのものにぶつ突かることが吸はれることを意味するからである。彼等を避けるには、事件を彼等の處に持つて行かないのも重要だが、事件があつても彼等に知られない樣に、知つても來られない樣に、且つ自分自身でそのことを内秘で解決することが出來る樣にしなければならぬ。農民が土地ある爲に、彼等を避け得ないが、工匠及びその他土地なきものが即ち秘密團體を拵へて彼等を避ける。これ即ち秘密結社が中國の最低社會層に發達した所以である。

社會の最低層は只だこの秘密結社によつてのみ、彼等の吸血鬼の壓迫に抵抗することが出來ると同時に、また相互間の事件をも吸血鬼の手を借らないで相互で解決することが出來る、だからこう云ふ秘密結社は防衞の機能があると同時

に、また自治の機能がある。如何なる時代に於いても、最低層のものにして官吏に裁判を仰いだ驗しがない。團體の成員若し團體外の誰かに侮辱され若くは危害を加へられた場合には、團體擧つてか若くは親方に指名された人によつてか若くは自願の人によつてか、秘密に復仇する。團體成員間に紛爭あるときは親方により裁判し且執行する。この裁判及び執行權は非常に大である、體刑は勿論、死刑も出來る。團體か若くは團體の爲にか若くは團體に取つて重要なる成員か若くは家族の負累の重き成員か、國法違犯の事をしでかし、どうしても法網を逃れることが出來ないときには、一人の成員を出してその犧牲に自首せしめる。この犧牲者は親方によつて指名されることもあり、自願によることもある。こう云ふ機能の外に、また職業紹介及び共濟の機能がある。即ち成員にして職を失つたものには親方より養つてやり、且つ職業を紹介してやる。何か婚嫁等の爲に臨時入費を必要とするものには、親方より補助してやる。こう云ふ生活は三つの習慣若くは精神を養成した。即ち第一に團體生活の習慣、第二に團體の規律に服從する習慣若くは精神、第三に客觀的にのみならず主觀的にも眞に無國家者になつたこと等である。こう云ふ秘密結社は最低社會層に非常に行き渡つて居る。殆んど如何なるものも必らず何らかの團體に屬して居ないものはない、寧しろ團體なくして生活することが出來ない習慣若くは精神が出來た位である。これは既に秘密結社の發生原因からも充分推斷され得ることゝ思ふ。何んとなれば、秘密結社と云ふものは、もと彼等が『上層』の壓迫に堪えないで、自己を保護する爲に出來た唯一的方法であつたからである。だから上述の習慣若くは精神は彼等の間に於いて、非常に行き渡つて居る。

要するに中國の最低社會層の間に於いては、團體生活の習慣か養はれたのみならず、團體なくしては生活が出來ない位の習慣若くは精神が養はれた。彼等の團體規律を守る習慣若くは精神に於いては、單に親方の命令若くは裁判に服從するのみならず、反つて服從せさることを不名譽に思ふ位である。だから團體若くは仲間の爲に犧牲になることを門閥

するものもあるのである。若しそれ彼等が主觀的にも無國家者であると云ふ精神に至つては寧ろ秘密結社の發生原因から來る當然の結論である。如何となれば、彼等は國家の力を避け、國家と云ふものと絕緣する爲に、始めて秘密結社をなすに至つたからである。彼等は寧ろ吸鬼血の國家を見捨てゝ、秘密結社に於いて自己の國家を見出したのである。

以上の諸習慣若くは諸精神は勿論非常に惡用されたことがある。例へば强盜に於ける如き、竊偸に於ける如き、破落戶に於ける如きである。しかし今の勞働階級に承け繼がれてその運動全般に非常に好い基調となつた。中國の勞働運動が、五四運動以後、これだけの短き間に、これだけの組織、殊にこれだけの階級的組織が出來たのは、この習慣若くは精神は最も大なる原因である。

八

中國の勞働者は舊時代の長き間の秘密結社によつて養はれた團體生活の習慣を承け繼いで、非常に勞働組合に組織され且つ適應し易かつた。だから新式組合は僅かの間で非常な數になつた。殊に團體なくして生活出來ない習慣がある爲に、同一工場同一產業若くは同一職業に組合が出來れば、その工場、產業若くは職業に屬する勞働者は大概全部加入する。殊に同一工場若くは同一產業に屬する者は、必らず全部加入する。組合規則には殆んど『……ものは加入するを得』と云ふ必要なく、直接に『……ものを組合員とす』とすることが出來る位である。例へば民國十二年二月七日虐殺以前の京漢鐵道組合の如きは、工場勞働者、乘込員、停車場勞働者、線路勞働者等を包括するばかりでなく、見習の如きものまでも包含して居る。私の經驗によつては、あの時代漢口にあつた二十幾つかの組合は皆そうであつた。だから、始め職業組織で育めたものでも、非常に迅速に產業的組合になり變はる。例へば漢冶萍總工會の如きである。また

一產業系統に屬する勞働者が何處かで組合が出來れば、必らず迅速に全產業に擴まる。例へば京漢鐵路總工會の如きである。また一地方に幾つかの組合が出來れば、必らず迅速に聯合會が出來る。例へば湖北工團聯合會の如きである。以上の組合は皆一年足らずの間に出來たものである。如何なる國、如何なる時代に於いても、こんなに迅速なる勞働組合發展がなかつたであらう。

彼等の間に團體規律を守る傳統的習慣があるが爲に、組合が出來れば、眞に彼等の國家になり、彼等の裁判所になる。組合員の間に紛爭があらば必らず自から進んで組合に若くは聯合會に告訴し、組合の間に紛爭があれば必らず聯合會に告訴する。その裁判が非常に權威がある、不服を云ふものはメッタにない。漢陽に於いて曾つてこう云ふことがあつた。或る巡査が摑み合をやつて居る二人の勞働者を捉まへた、漢冶萍總工會漢陽支部に屬する組合員であることを知つたので、その支部に送つた。その巡査のその時に云ふことが面白かつた、『即ち君達の方で解決出來ない時には引渡して呉れ給へ』と云つた。これによつて見れば、自分達の事を自分達の間で解決することは、獨り最低層のもの丶間に於ける習慣であるのみならず、彼等の間の事は彼等の間で解決せしめるのも、官吏の習慣とも見える。これは恐らく、彼等の間の習慣が久かつた爲に、自然に官吏にもこう云ふ習慣が出來たのであらう。

マルクスが『無產階級に丶丶丶丶』と云つた。しかし他國の無產階級に於いては、これは單に客觀的の事實である。歐洲大戰はその好例である。しかし中國の無產階級に於いては、これは主觀的にも事實である。だから彼等は殆んど完全に愛國的感情に累はされることがない。彼等が勞働運動と云ふべき勞働運動に入つたと殆んど同時に直ぐ猛烈なる階級鬪爭に突入したのはこれが爲であり、また民族的外衣を着ても偏狹な愛國主義者にならないで、反つて國際的階級鬪爭者になつたのもこれが爲である。中國の無產階級は實に彼等が客觀的に國際的無產階級である如くに、主觀的にも國

際的無產階級である。しかしかうなり得たのも、偏へにこの傳統的無國家的精神によつたのである。若し彼等にこの傳統的精神がなかつたならば、彼等は民族的精神を單に外衣にしたに止らず、進んでそれを肉とし骸とした非常に偏狹な愛國主義者になつたであらう。

彼等は單に主觀的に無國家者であつたのみならず、また實に舊時代に於いて秘密結社に於いて自己の國家を見出した如く、新時代に於いて勞働組合に自己の國家を見出したのである。中國の勞働組合は單に迅速に產業的組織及び地方的及び全國的聯合に進み得たのみならず、且つ迅速に中央集權的組織に入り得たのは、偏へにこの特質によつたのである。實に今の中國の勞働階級は勞働組合をその國家として居るのである。中國の普通の人々の習慣としては、官權を崇拜し、如何なる團體を組織するにも必らず官廳に登錄即ち立案若くは備案を請願する。請願せざるか若くは請願して許可されないときには、必らず不安を感ずる。しかし勞働者は素より國家がない、秘密結社の習慣が付いて居る。勞働組合を作るときには、立案若くは備案なんと云ふ樣なことは、全然頭にない、勿論請願する樣なこともない、衷心に不安なんと云ふ樣なこと勿論尙更ない。しかし聯合會が出來れば必らずその聯合會に立案若くは備案を願ひ出づる。その聯合會に批准されゝば、自分の組合が正式だと感じ、非常に喜ぶ、祝賀會までやる。若し批准されないときは、自己の組合が未だ非正式だと感じ、必らず批准されるまで請願する。このことが非常に聯合會の權力を大きくする。即ちこの批准權によつて各組合の規則改正、組織更へ、會費入納を命令する。各組合もまた批准されるまで、その命ずるまゝに規則改正組織更へをやり、且つ批准後も必ず滯りなく會費を入納する。それと同時に、聯合會もまたその組合が費用足らないときには必らず補助若くは貸してやる。若しその地方にまだ聯合會が出來て居ないときには、比較的强力ある組合があれば必らず他の組合の組織を助けてやり、新に組合を作り度いものもまた必らず應援を乞はれて應援してやらないのを耻と

する。大虐殺以前の京漢鐵道組合の漢口に於ける支部は、始め他を助ける地位に居つた、實に所謂湖北工團聯合會及びその團結の經路を通つて自然に出來たものである。組合が實にかくの如く彼等の國家である。これによつて、中國に於いて同情罷工の多い理由も首肯されよう。ひと頃組合法制定を請願したことがあつたが、寧ろ知識階級が京漢鐵道罷工事件以後、組合運動の便利を圖る爲に、なさしめたもので、決して勞働階級が自動的になしたのではない。軍閥が暴力を以て凡ての組織を潰ぶした樣に思つて居るだらうが、事實に於いては秘密結社に返つた丈である。

九

以上述ぶる所によつて、中國無產階級及びその運動の特質を總括すれば、彼等は國際的無產階級であるが爲にその運動には必らず民族的外衣を付き纏ふ。また秘密結社の傳統的特質あるが爲に、民族的外衣を着ても、偏狹的愛國主義にならないで、反つて社會主義を肉とし骨とする國際的階級鬪爭者になる。同時に、その團結も中央集權的大同團結になり易い。またその民族的外衣によつて社會の同情を集め、以てその運動の發達を速かならしめ、且つ學生を呼んで社會主義的精神を教へ、また社會主義的原則を教はれて、以てその運動を促進する。

然らば彼等には全然欠點がないか？曰はくある。第一には郷土的感情である。この郷土的感情は實に中國人一般に非常に廣く行き渡つた且つ最も深い根を張つた感情である。これは恐らく方言の餘り違ふための產物であり、階級自覺がもつと深くなれば壓伏されようが、現在に於ては、非常に大同團結の妨げになる。これは中國勞働階級に於ては、恐らく宗派の歐美の勞働階級に於けるが如きものであらう。しかし組合役員の數を增し、成る可く各地方より來るものを代表せしむる樣にすればよい。只だ選擧前には、非常な注意を要する。

第二には優點と云ふべきか、缺點と云ふべきか〻知らぬが、知識階級を心底から信用しないことである。これも無理がない。もと知識階級に壓迫され、彼等を仇敵位に惡み、彼等から逃れる爲に秘密結社をなした位であるから。學生があれ丈獻身的に彼等を助け、あれ丈彼等と一緒になつて如何なる運動にも行動を共にするも、學生が役員になつて直接指導する組合は、一般に成績が好くない。始めの間は組合員が多くても、漸次には少くなる。知識階級を逃れる本能的傳統感情によるのである。漢口に於て組合の援助するときに、一人位をして雇員として書記に入れ、他のものは彼等の中の比較的自覺あるものと接近し若くは共に勞働組合書記部と云ふ樣なものを拵へて間接に指導した所が、比較的好成績を得た。しかし知識階級の直接指導を得られない爲に、何うしても秘密結社より得た好き傳統的習慣及精神を充分に生かすことが出來ない。だからあれ丈の短き間にあれ丈の大同團結が出來得ても、それと同じ速さに整備せる組合が出來得ない。

最後に最も大なる缺點は、特質に於ける缺點ではないが、彼等の發展及び使命を果す上に於いては、殆んど致命的缺點である。即ち人數の非常に少なきことゝ財力の非常に弱きことゝである。三千萬の失業者に二百萬の在業者、如何にして高き財力が得られよう！彼等の財力は實に憐れな程弱いのである。だから同盟罷工をやつても何時も長く續くことが出來ない。多くの場合、暴動に終るのも無理がない。四億の人口に二百萬の勞働者の如何に小ない比例であらう！革命するに必要なるものが數多くても、革命の武器がなくては何がなし得よう！革命の必要があつて、しかして革命の武器あるものが、只だ二百萬である。二億に於ける二百萬では、如何にしてその使命を果すか？こゝに中國無產階級の悲哀、否な中國民族の悲哀があるのである。實にまた國際資本主義の共同的且つ最後の殖民地の否な續命湯たる中國の悲哀である。中國の革命は必然的に國際的資本主義に處する革命であり、勞働運動も必然的に國際的運動でなければならず、また事實に於てそうである。單にこれによつてのみその弱き財力と少ない人數の缺點を救ふことが出來るのである。

新生支那に於ける女性の地位

閨・秀　朱　胡　彬　夏

理論の上では、女子は男子に對立するものだといふことが支那では常に認められてゐるのである。すなはち、女子は一つの異つた領野に於て男子と對等の地位を有し、後者の仕事とは別個の仕事を遂行してをるものである。女子のさうした特別の仕事は則ち家事の面倒をみることと家政の管理に從ふことゝである。支那人の家庭は西洋諸國民のそれとは趣きを異にしてをる。西洋の家庭は一夫一婦の營みに對する聖淨な爐邊であり、それを取卷いて彼等の愛兒達が團欒してゐるのである。支那の家庭は寧ろ一個の共同團體の類ひである。——喧燥な煩忙な幾群かの人間達に對する一つの住居である。一つの大な家の內に老齡の父母を始め、幾人かの成人した息子達とその妻女達、多くの孫達や又未婚の息女達、といつた人數がごちやごちや一緒に暮してゐるとは何も珍しい例ではない。かうした直接の血族ばかりでなく亦他の親類達までが、例へば、他家に嫁した家長の妹が未亡人になつて子供を引連れて生家に戾つて來てゐるとか、或は家長の弟媳の生母や弟が嫁家先に來て厄介になつてゐるとかいつた工合で、矢張り一つ屋根の下に混棲してゐる場合も數あるのである。婢僕も含めて三十人位の人數から出來上つてゐる家族は決して大家族だとはいひ得ないのである。それくらゐの人數から成る家族はまあ中邊の大さのものに過ぎないのである。

幾世紀に亘てかうした大家庭の管理に當つてきてゐるやうな國民の女性たるものは、勢ひ如何なるものとなつてこざるを得なかつたらうか。すなはち、彼女等は並々ならぬ分別の程度と、笑顏を以て安じて困難に處し得るやうな性格の力と、又、死に至るまでも揺がぬ一つの義務觀念とを獲得してきてゐるのである。支那文學の多くの頁は斯ういつた女性の義烈と自己犧牲の健氣な物語りを以て滿されてゐる。そして各時代の若い娘達は或は口傳てに或は書物を通してさうした名譽の婦德を敎へ込まれ、彼女達の番になつては亦映稱すべき美德を發揮してきてゐ

るのである。

實に斯くの如きが、記憶せられぬ太古の時代から現代の支那婦人にまで傳へられてきた所の遺産であり訓練である。有能、寛恕、奉仕に對する愛好、心意の純潔、——此等のものは既に彼女の素質の中に展開せられ完成せられた特質となつてゐるのである。今日彼女を過去の女性から區別してゐる點は、諸種の活動に對する新しい機會が開かれてゐるといふ點と、從てその成就する諸種の業積に對する評價の標準が變化してきてゐるといふ點の二點である。從前は、女子はたゞ家庭にのみ閉ぢこめられてゐた。然るに今日では、在來の女子の仕事の外に、殆ど有らゆる種目の職業が開放されてゐるのである。少くとも、女子がさうした新しい職業の領野にはいつて行くといふことに對しては今日何等の反對も存しないのである。昔は、女子は善き妻であり母であることの美德を以て讃仰の的とされてゐたのであつたが、今や彼女は如何なる方面の仕事にでも從事して、或は學者として、或は實業家として、或は新聞雜誌記者として、或は政治家として、男子と同等の成功を贏ち得ることも出來るわけなのである。

支那の女性が斯うも急激に且つ斯うも一新的に變化したゞらうかといふことは惟かしく見えるかもしれない。併し乍ら、更に一層詳細に檢討してみるならば、當代の女性をその前代に於ける同性と比較して前者は根本的には後者と同一なものであるといふことが見出されるのである。すなはち、急激な改變に遭つてゐるものは、實は彼女の服飾の點だとか外見上の習癖の點だとかのみに止つてゐるのである。彼女の內的生活の方面に於てはたゞほんの僅許り啓發されてゐるのに過ぎないので、今日の女性は昨日の女性に比して些かたりとも偉大になつてゐるものではないのである。が、一面に於ては、彼女が前代から繼承してゐる所の固有の諸能力を用ひて、今や諸種の束縛が撤去された以上は、彼女は容易に大な世界に足を踏み入れて新しい幸運を握らうと努め又未知の領野の開拓に從ふといふことが出來たのであつた。それはたゞ仕事の種類が、靜かな單調な家政上の義務から複雜な始終神經を張詰めてゐる近代文明の勞務へと變化したまでのことである。併し乍ら、斯く變化したことには非常な歡喜が感ぜられてゐるのである。といふのは、支那の女性には非常に功名心に富み、そして常に人生に對する一つの動かない目的を懷いてゐるものだからである。すなはち、もし、昔は一つの頌德碑が榮譽の象徵として競ひ求められてゐたとすれば、それと同じやうに今日では、アメリカの大學から貰ふファイ・ベータ・カッパーの章だとか支那の政府から授けられる嘉禾動

章だとかといつたものが獲得する價値のある名譽として贍仰されてゐるものであるかもしれない。

教育の點については女子は今日實際上男子と同等の機會を獲得して來てゐる。初等の諸學校に於ては男兒と女兒とが教室で互に席を竝べて同一の教科を學んでゐるのである。無論今日でもなほ絶對に女生徒だけしか入學させない學校も存在してゐる。併しその場合は大概高等科の修學に對するものである。若干の私立中等學校に於ては數年來男女共學を實施して來てゐる。そして何等不都合なことも生じて來ないでゐる。却て、女生徒達は概して一層勤勉であり、大抵いつでも級中の優等生を出してきてるのである。同じ中等程度の學校でも官立の側では、どうしても私立側よりは保守的なので、目下漸く女生徒を入學せしめることの適否について考究中にあるのである。が結局、官立の中等學校側でも亦女生徒の入學を許可する方針に決定をみるだらうといふことは疑ひない所である。次に大學の方になると、官立の諸大學もキリスト教團で設けてゐる諸大學も共に以前は男子のみに對する機關であつたのだが、今日では普に女子の學生に對してもその門戸を開放してゐるといふばかりでなく、亦女子の大學教授や講師達まで歡迎するやうになつてゐるのである。又中等程度並びに初等程度の諸學校に於ても女子が教師となつてゐるのは今日では極めて普通の例となつてゐる、といふことを私は附言すべきであらう。

女子の職業のうちでは、兎も角これまでは教職が一番近づき易いものであつたので、多數の既婚並びに未婚の婦人が畢生の仕事としてそれを擇んでゐるのである。さうした婦人の間からは既に、若干の官立師範學校や又評判の善い高級の私立學校等の校長を出してゐるのである。教職に次で普及してゐる女子の職業は醫事關係のものである。衛生施設に注意の拂はれてゐる所の大な港やその他の近代化された諸都市に於ては、西洋式に仕上げられてをる女醫や看護婦達が盛に活動してをるやうになつてゐる。そして、この新しい女子の職業の領野に於ける先驅者達のうちには、その熟達と不斷の奉仕的努力とによつて非常な好成績を擧げてゐるものも少からざる數に上つてゐるのである。それで時としては、女子は醫術の方面に於て特別に惠まれた天分を有するものだといつた印象を與へるまでにもなつてゐるくらゐである。次に、音樂は支那婦人の間に殆ど忘れられて了つてゐる女藝の一つである。が、なほ、外人經營の諸學校の努力を通してそこここに若き天才が發見せられてをるのである。それらの或るものはやがて完成の域にまで到達するものだらうといふことは疑ひのないところであり、又或るものは目下海外

るのである。

實に斯くの如きが、記憶せられぬ太古の時代から現代の支那婦人にまで傳へられてきた所の遺産であり訓練である。有能、寛恕、奉仕に對する愛好、心意の純潔、——此等のものは既に彼女の素質の中に展開せられ完成せられた特質となつてゐるのである。今日彼女を過去の女性から區別してゐる點は、諸種の活動に對する新しい機會が開かれてゐるといふ點と、從てその成就する諸種の業積に對する評價の標準が變化してきてゐるといふ點の二點である。從前は、女子はたゞ家庭にのみ閉ぢこめられてゐた。然るに今日では、在來の女子の仕事の外に、殆ど有らゆる種目の職業が開放されてゐるのである。少くとも、女子がさうした新しい職業の領野にはいつて行くといふことに對しては今日何等の反對も存しないのである。昔は、女子は善き妻であり母であることの美德を以て讃仰の的とされてゐたのであつたが、今や彼女は如何なる方面の仕事にでも從事して、或は學者として、或は實業家として、或は新聞雜誌記者として、或は政治家として、男子と同等の成功を贏ち得ることも出來るわけなのである。

支那の女性が斯うも急激に且つ斯うも一新的に變化したゞらうかといふことは恠かしく見えるかもしれない。併し乍ら、更に一層詳細に檢討してみるならば、當代の女性をその前代に於ける同性と比較して前者は根本的には後者と同一なものであるといふことが見出されるのである。すなはち、急激な改變に遭つてゐるものは、實は彼女の服飾の點だとか外見上の習癖の點だとかのみに止つてゐるのである。彼女の內的生活の方面に於てはたゞほんの僅許り啓發されてゐるのに過ぎないので、今日の女性は昨日の女性に比して些かたりとも偉大になつてゐるものではないのである。が、一面に於ては、彼女が前代から繼承してゐる所の固有の諸能力を用ひて、今や諸種の束縛が撤去された以上は、彼女は容易に大な世界に足を踏み入れて新しい幸運を握らうと努め又未知の領野の開拓に從ふといふことが出來たのであつた。それはたゞ仕事の種類が、靜かな單調な家政上の義務から複雜な始終神經を張詰めてゐる近代文明の勞務へと變化したまでのことである。併し乍ら、斯く變化したことには非常な歡喜が感ぜられてゐるのである。といふのは、支那の女性には非常に功名心に富み、そして常に人生に對する一つの動かない目的を懷いてゐるものだからである。すなはち、もし、昔は一つの頌德碑が榮譽の象徵として競ひ求められてゐたとすれば、それと同じやうに今日では、アメリカの大學から貰ふファイ・ベータ・カッパーの章だとか支那の政府から授けられる嘉禾動

章だとかといつたものが獲得する價値のある名譽として贍仰されてゐるものであるかもしれない。

教育の點については女子は今日實際上男子と同等の機會を獲得して來てゐる。初等の諸學校に於ては男兒と女兒とが教室で互に席を並べて同一の教科を學んでゐるのである。無論今日でもなほ絕對に女生徒だけしか入學させない學校も存在してゐる。併しその場合は大概高等科の修學に對するものである。若干の私立中等學校に於ては數年來男女共學を實施して來てゐる。そして何等不都合なことも生じて來ないでゐる。扨て、女生徒達は概して一層勤勉であり、大抵いつでも級中の優等生を出してきてるのである。同じ中等程度の學校でも官立の側では、どうしても私立側よりは保守的なので、目下漸く女生徒を入學せしめることの適否について考究中にあるのである。が結局、官立の中等學校側でも亦女生徒の入學を許可する方針に決定をみるだらうといふことは疑ひない所である。次に大學の方になると、官立の諸大學もキリスト教團で設けてゐる諸大學も共に以前は男子のみに對する機關であつたのだが、今日では啻に女子の學生に對してもその門戶を開放してゐるといふばかりでなく、亦女子の大學教授や講師達まで歡迎するやうになつてゐるのである。又中等程度並びに初等程度の諸學校に於ても女子が教師となつてゐるのは今日では極めて普通の例となつてゐる、といふことを私は附言すべきであらう。

女子の職業のうちでは、兎も角これまでは教職が一番近づき易いものであつたので、多數の既婚並びに未婚の婦人が畢生の仕事としてそれを擇んでゐるのである。さうした婦人の間からは既に、若干の官立師範學校や又評判の善い高級の私立學校等の校長を出してゐるのである。教職に次で普及してゐる女子の職業は醫事關係のものである。衞生施設に注意の拂はれてゐる所の大な港やその他の近代化された諸都市に於ては、西洋式に仕上げられてをる女醫や看護婦達が盛に活動してをるやうになつてゐる。そして、この新しい女子の職業の領野に於ける先驅者達のうちには、その熟達と不斷の奉仕的努力とによつて非常な好成績を擧げてゐるものも少からざる數に上つてゐるのである。それで時としては、女子は醫術の方面に於て特別に恵まれた天分を有するものだといつた印象を與へるまでにもなつてゐるくらゐである。次に、音樂は支那婦人の間に殆ど忘れられて了つてゐる女藝の一つである。が、なほ、外人經營の諸學校の努力を通してそこここに若き天才が發見せられてをるのである。それらの或るものはやがて完成の域にまで到達するものだらうといふことは疑ひのないところであり、又或るものは目下海外

に於て修業を積んでをるものもあるのである。繪畫の方面は、元來過去に於ける教養ある婦人に依て一般に修習されてをつた少數の女藝中の一つであるので、今や新たな勢を以て復活してきてゐる。畫風は西洋畫の技法も亦東洋畫の技法も双方等しく學ばれてをり、專門の畫學校も澤山設立されてをつて、何百といふ少女が斯技の研鑽に沒頭してをるのである。文筆の方面は支那の女性にとつて何等新奇な領野ではない。古今の歷史を通じて多くの女流學者や又散文に於ても韻文に於ても卓越した婦人作家が輩出してゐるのである。今日吾々は非常に達者に讀み書きの出來るやうな婦人が益々殖えて行く趨勢に際會してゐる。が併し、まだ所謂著作家と呼ぶほどの女流は滅多にないのである。で、此の方面に於て更に一層女流の訓練を行ふための設施が計畫されてをるのである。そして、女學生中の或る者達は文學の研究に對する特別の嗜好を示してをり、且つ又異常な述作上の能力を見せてをるものがあるのである。現在のところ、雜誌記者として働いてをる少數の婦人があり、又本邦に於ける二つの日刊大新聞が婦人記者を採用してをるのである。次に、もし傳導事業も亦職業といふものゝ中に含められるものとするならば、吾々は既に淸朝時代の晚期に當て貧しきものにキリストの敎を說き救助を施すことに獻身した土着の支那婦人を持つてゐたのである。それ以來ずうつとさうした婦人達の跡を斷つことなく、現世に於ける一切の外見的な榮光を棄て去つて精神の自由と心靈の救濟を追求して今日に及んでゐるのである。

產業の方面に於ては、西洋で發達した近代的產業組織が支那に移入せられたそもそもの當初から女子が諸種の工場に入れられることゝなつてきてゐるのである。幾千の若い女達や十代の娘達が巨大な機械の耳を聾するやうな煤音のたゞ中で彼等の糊口の料を稼いでゐる。そして、實にそれらの工女達の或るものはその赤坊どもまでも工場の中に連れ込んで行つて、それらの乳吸兒に作業室の埃だらけな床の上を這ひまはらせたりそこらをひつかきまはらせて平氣でをるのである。諸所の商店や會社等にはぼつぼつ女店員や女事務員等も現れかけてゐる。しかし、それらはまだ數に於て極く僅かなものであり、且つ彼等は普通幾年かの學校教育を受けてゐるものたちで大抵相當な暮向きの家庭に屬する子女である。無錫は女子の電話交換手を採用した支那の最初の都市である。その結果は非常に好成績で婦人交換手の能率の高いものであることを示したので、次で上海も亦無錫に倣つて婦人交換手を採用することゝなつてきてゐるのである。而して、この交換手志願者達の多數が中等學校の卒業者であるといふ事實は、女子がその活動の途を見出すことを望ん

であることが如何に切なるものであるかといふことを指示してゐるものである。その他、上海の税關や或る二三の銀行等には出納掛や書記として婦人が働いてゐるのである。實際、從來夢想もされなかつたやうな職務に就く途が教育のある婦人達に對して急忽に開かれて行く現象を目擊して吾々は日毎に喫驚してゐる次第である。女子の就職といふ問題に關しては、吾々の同胞には推稱すべき二三の點がある。それは、先づ第一に、一定の職業が男女に共通に與へられてゐるやうな場合でも、或はまた全然女子の方に奪ひ取られて了つてゐるやうな場合でも 男子の側に女子の就職を嫉視する念が全く見出されないといふ點であり、第二には、同一量の勤勞の提供に對しては男子に對しても女子に對しても同一の標準を以て給與を支拂つてゐるといふ點であり、第三には、既婚の婦人に對しても獨身の婦人に對しても平等に就職を許してゐるといふ點である。

　更に、頭を廻らして將來に眼を向けるならば、そこには彼女等の開拓し得べき偉大なる領野が我國の若き女性を待受けてゐるのである。もし支那が今後なほ一の自由な民主國として存續してをるならば、半世紀を出でずして婦人の國會議員、婦人の外交官、婦人の辯護士、婦人の地方長官、等々、が彼女等の間から出てこないとは誰が知り得よう！ さうした現象は既に展開しつゝある。確かに、全然妄想といふ程度を超越した妄想の類ひではないのである。現にフランスの或る大學から法學博士の學位を獲てゐるやうな支那婦人もをり、又廣東省の婦人等は男子と平等の選擧權を要求する運動を起してきてをり、或は又浙江省の婦人達は目下同省の憲法を起草するために開かれてをる元老會議に代表者を送つてをるといつたやうな例も存するのである。我が支那婦人中の或るものたちは十分な推理の能力を有するものであり、又辯舌にも秀でゝゐるものである。で、もし此等の才能が力強い人格と氣品のある態度と相伴ふならば、――實際さうした女性も時々見掛けられるのであるが――、立派な女流外交官や女流辯護士等が造作なく出來上るわけである。次に我が支那婦人は行政上の才能に關しては、兎や角いふまでもなく、吾々はたゞ歷史に一瞥を與れるだけで十分である。すなはち、或は都城が敵の攻圍に陷つた場合とか、或は其の他種々なる危急多難の場合に際會して、よく膽略を揮ひ智謀を廻らしてその難局を處理し得たやうな皇太后だとか太守の夫人だとか、さうした傑出した女性の例は支那歷史の上に如何に多くを數へ得ることだらう！ 我が支那の女性は既に過去に於て大事に任ずるに足りたのである。豈に夫れ將來に於て然らざるを得んやではないか。

に於て修業を積んでをるものもあるのである。繪畫の方面は、元來過去に於ける教養ある婦人に依て一般に修習されてをつた少數の女藝中の一つであるので、今や新たな勢を以て復活してきてゐる。畫風は西洋畫の技法も亦東洋畫の技法も双方等しく學ばれてをり、專門の畫學校も澤山設立されてをつて、何百といふ少女が斯技の研鑽に沒頭してをるのである。文筆の方面は支那の女性にとつて何等新奇な領野ではない。古今の歴史を通じて多くの女流學者や又散文に於ても韻文に於ても卓越した婦人作家が輩出してゐるのである。今日吾々は非常に達者に讀み書きの出來るやうな婦人が益々殖えて行く趨勢に際會してゐる。が併し、まだ所謂著作家と呼ぶほどの女流は滅多にないのである。で、此の方面に於て更に一層女流の訓練を行ふための設施が計畫されてをるのである。そして、女學生中の或る者達は文學の研究に對する特別の嗜好を示してをり、且つ又異常な述作上の能力を見せてをるものがあるのである。現在のところ、雜誌記者として働いてをる少數の婦人があり、又本邦に於ける二つの日刊大新聞が婦人記者を採用してをるのである。次に、もし傳導事業も亦職業といふものゝ中に含められるものとするならば、吾々は既に清朝時代の晩期に當て貧しきものにキリストの教を説き救助を施すことに獻身した土着の支那婦人を持つてゐたのである。それ以來ずうつとさうした婦人達の跡を斷つことなく、現世に於ける一切の外見的な榮光を棄て去つて精神の自由と心靈の救濟を追求して今日に及んでゐるのである。

産業の方面に於ては、西洋で發達した近代的産業組織が支那に移入せられたそもそもの當初から女子が諸種の工場に入れられることゝなつてきてゐるのである。幾千の若い女達や十代の娘達が巨大な機械の耳を聾するやうな騒音のたゞ中で彼等の糊口の料を稼いでゐる。そして、實にそれらの工女達の或るものはその赤坊どもまでも工場の中に連れ込んで行つて、それらの乳吸兒に作業室の埃だらけな床の上を這ひまはらせたりそこらをひつかきまはらせて平氣でをるのである。諸所の商店や會社等にはぽつぽつ女店員や女事務員等も現れかけてゐる。しかし、それらはまだ數に於て極く僅かなものであり、且つ彼等は普通幾年かの學校教育を受けてゐるものたちで大抵相當な暮向きの家庭に屬する子女である。無錫は女子の電話交換手を採用した支那の最初の都市である。その結果は非常に好成績で婦人交換手の能率の高いものであることを示したので、次で上海も亦無錫に倣つて婦人交換手を採用することゝなつてきてゐるのである。而して、この交換手志願者達の多數が中等學校の卒業者であるといふ事實は、女子がその活動の途を見出すことを望ん

であることが如何に切なるものであるかといふことを指示してゐるものである。その他、上海の税關や或る二三の銀行等には出納掛や書記として婦人が働いてゐるのである。實際、從來夢想もされなかつたやうな職務に就く途が教育のある婦人達に對して急忽に開かれて行く現象を目撃して吾々は日毎に喫驚してゐる次第である。女子の就職といふ問題に關しては、吾々の同胞には推尙すべき二三の點がある。それは、先づ第一に、一定の職業が男女に共通に與へられてゐるやうな場合でも、或はまた全然女子の方に奪ひ取られて了つてゐるやうな場合でも　男子の側に女子の就職を嫉視する念が全く見出されないといふ點であり、第二には、同一量の勤勞の提供に對しては男子に對しても女子に對しても同一の標準を以て給與を支拂つてゐるといふ點であり、第三には、既婚の婦人に對しても獨身の婦人に對しても平等に就職を許してゐるといふ點である。

更に、頭を廻らして將來に眼を向けるならば、そこには彼女等の開拓し得べき偉大なる領野が我國の若き女性を待受けてゐるのである。もし支那が今後なほ一の自由な民主國として存續してをるならば、半世紀を出でずして婦人の國會議員、婦人の外交官、婦人の辯護士、婦人の地方長官、等々、が彼女等の間から出てこないとは誰が知り得よう！　さうした現象は既に展開しつゝある。確かに、全然隙想といふ程度を超越した妄想の類ひではないのである。現にフランスの或る大學から法學博士の學位を獲てゐるやうな支那婦人もをり、又廣東省の婦人等は男子と平等の選擧權を要求する運動を起してきてをり、或は又浙江省の婦人達は目下同省の憲法を起草するために開かれてをる元老會議に代表者を送つてをるといつたやうな例も存するのである。我が支那婦人中の或るものたちは十分な推理の能力を有するものであり、又辯舌にも秀でゝゐるものである。で、もし此等の才能が力強い人格と氣品のある態度と相伴ふならば、——實際さうした女性も時々見掛けられるのであるが——、立派な女流外交官や女流辯護士等が造作なく出來上るわけである。次に我が支那婦人は行政上の才能に關しては、兎や角いふまでもなく、吾々はたゞ歴史に一瞥を與れるだけで、十分である。すなはち、或は都城が敵の攻圍に陷つた場合とか、或は其の他種々なる危急多難の場合に際會して、よく膽略を揮ひ智謀を廻らしてその難局を處理し得たやうな皇太后だとか太守の夫人だとか、さうした傑出した女性の例は支那歴史の上に如何に多くを敎へ得ることだらう！　我が支那の女性は既に過去に於て大事に任ずるに足りたのである。豈に夫れ將來に於て然らさるを得んやではないか。

さて、かうした將來に於ける可能性の問題から離れて再び現實の事例に立ち戻ることゝしよう。ところで、支那の婦人達は追々と社會奉仕や團體運動に益々興味を起してきつゝあるのである。此の點に關しては基督教青年會が模範的な機關である。そこには五十名以上の支那人の若い女性――それは皆海外留學生の歸朝者や國内の高等程度並びに大學程度の諸學の卒業者達であるが――が本部の首腦者として働いてゐる。そして又、其の支部が所在する諸都會に散在してをる何百といふ他の婦人達が諸種の幹事會や委員會等を構成して働くために召請せられてゐるのである。又、今日大概の大都會には、社會奉仕聯盟だとか、無料で授業をする學校だとか、貧民敎化事業だとか、婦人倶樂部だとかいつたものが女性の活動によつて存在するやうになつてゐるのである。支那の婦人達がかうした重大な社會事業に手を出すことを好むことが段々加はつて行つてゐるといふばかりに止らず、彼女達は亦、念入りな饗宴だとか舞踏會だとか素人劇場だとかいつたやうな純然たる娛樂本位の諸種の輕い社交上の催しごとを急速に採り容れつゝあるのである。公の席上で、婦人達が男子達と膝を交へて男子と同等にもしくは男子以上にさへも縱橫の機智と自在な擧措とを以て輕妙な社交振りを發揮してゐる場合が今日では見られるやうになつてゐるのである。

我が同胞婦人の公的生活についてのかうした樂天的なスケッチの後で、私は其の家庭生活の方面についての論述に立歸りたいとおもふ。そこでは、條件がさほど有利なものではないのである。而して家庭生活上の舊慣と弊習は容易に改變し難いのである。殆ど大概の大都市に於ては、西洋流の夫妻單位の家庭の型を範として營まれてゐるやうな幾らかの善い家庭が存在してゐるけれども、しかし、さうした西洋の型を模した新しい家庭は國民全體の代表的家庭といふことは出來ないのである。加之、或る人々は、さうした家庭が餘りに外國風であるといふので、それに對して嫌惡の情を表はしてゐるのである。とはいへ、在來の古い物事の定まりは婦人の新たなる地位とは兩立し難いものである。蓄妾の風は今なほ止められないでゐる。それは我が國民の大なる恥辱であるが、海外の留學から歸朝した者の多數までがその有害な風習に屈從してゐる有樣である。同一家族の數世代に亘る人々が一つの共同の家庭内に一緒に生活して行くといふ制度は今なほ持續されてをる。そして、或るものはそれを强烈に非難してをるかとおもへば、また或る者は寧ろそれを狂熱的に愛護してゐるといつた情況である。賭事は多くの家庭に於て普通の娛樂となつてゐるものであり、喫煙や飮酒

は婦人の間でも別段怪しまれずに許されてゐるのである。要するに、大體に於て支那の家庭生活といふものは、一方に於てその厳格な古い美徳の或るものを失つて行つてをるに反して、所謂新しい自由の側からは特に擧示するに價ひするやうな何ものをも獲てゐないのである。

もう一つ右に述べた所と同じ程度に重大な悲觀的材料に見える點は、所謂近代かぶれをしてゐる女性の品性に關する點である。所謂近代的な女性はその過去の時代に於ける先行者達と較べて一層自由であり、一層活動的であり、又外見的には一層有能らしいのである。しかし、決してより偉大なものでありより高貴なものであるわけではないのである。時としては、かうした近代的女性はその新たに獲得したところの力を誤用して、保守的な人々に對して嘲弄の目的物となりつゝあり、又時としては甘い父親や鈍い亭主に依て溺愛され過ぎた結果どうも少し生いきな又我儘な振舞に流れてゐるといつたやうなこともあるのである。併し乍ら、斯ういつたやうな缺點は過渡的な時代に於ては亦止むを得ないものである。有らゆる方面から推して考へて、所謂新しい女達も早晩己れの所行を匡正するやうになつて行つて、吾々の傳統の粋を選つて造つた女性と匹敵するやうな貞潔の振舞を示すやうになるだらう、と信じてよいのである。

外國人である讀者諸彦の前に私の同胞婦人についての完全な一目瞭然たる叙述を提供するといふことに熱心になつたあまり、私は、圖らずも、私の同胞の女性の大部分が教育を受けてをるものであり、他の近代的諸國の婦人達と正しく同様のものとなつてきてゐるものだ。といつたやうな誤つた印象を與へてゐるものであるかもしれない。とすれば、それは事實からは甚だ遠いものであることを斷つておく。支那に於ける教育を受けた婦人の數は非常に限られてをる。それは支那の此の無數の人口のたゞ中にあつて太海に對する一滴の水玉の如きものに過ぎないのである。が、併し乍ら、女性に關しての新しい思想は此の國土の上に急激に擴がつてきてをり、機會は自由に押し開かれてをる。全國の女性を擧げて近代化されるに至るべきはたゞ時日の問題に過ぎないのである。

＊　＊　＊　＊

上述の論文が起草された時以來既に四歳半の日子が經過してゐる。當時私の豫言しておいたことが今日實際に事實となつて現れてきてゐるのを見ることは面白いことである。國民黨の當時著名な領袖の一人であつた宋教仁が、婦人參政に對して反對を公言したといふ廉で婦人參政運動者の一團によつて猛烈に攻

撃の矢を浴せかけられた。といつたやうな事件があつたのはつい一九二一年のことである。ところが、今や、支那で憲法を發布した最初の省である湖南省は男女の双方に對して平等の選擧權を賦與してゐるのである。そして同省の地方的議會には既に一人の婦人代議士が選出せられてをるのである。又、最近廣東に擧行せられた國民黨の全國大會に當ては、數人の婦人が同黨の中央委員に選出されたといつたやうな事實もあるのである。かういつたやうな出來事は、大して注意も向けられないでゐるうちに何時の間にか支那の國民生活中に喰ひ込んできて、男女兩性の双方の側の進歩主義者達に依て當然の事柄として一般に認容せられてをるのである。郭松齢氏の夫人がその夫君の冒險的な奉天反擊の軍に同伴して遂に夫君の義死——或るものはそれを不名譽と貶すかもしれないが——に殉ずるに至つたといふことは、教育ある支那の女性は國民的大事に當面しては場合によつて何時でも一身の安全を忘れ得るものである、といふことを實證する亦一つの例である。またその風說がもつぱらである所の劉清揚の死刑宣告の如きも、缺點はあるにもせよ有能な一婦人の大膽と不敵とを示す更に又一つの證例である。

廣東の航空隊が一支那婦人を其の隊長に、戴いで訓練を受けてゐるといふことは周知の事實である。そして、同隊が頓く近いうちに北部支那、滿州、日本、フイリッピン群島を歴訪する遠征飛行の壯圖を計畫してゐるといふことを吾々が聞かされたのはつひ先日のことである。又、例の郭松齢夫人は、平常はその内氣な性質と餘り簡素に過ぎる服飾とのために決して社交界の婦人としては光彩のあつた方ではなかつたにも拘らず、一度夫君の軍中に在ては異常な軍事的天才を示し全軍士氣の發源となつてゐたといはれてゐる。國家の非常時に際して支那人によつて組織せられる赤十字其の他の救恤團體は、いつでも女醫や女子社會事業家たちの先導に依て積極的に支持せられてゐるのである。

職業上の方面に關しては、全國的な聲價を有する女優の數が益々增して行つてゐることに加へて、今日では極めて少數ながらも映畫の方面のスターが出てゐるのである。そして、其等の映畫女優はみな高等女學校の卒業生や相當良家の子女である。かうした俳優といつたやうな派出な職業に於ては、眞に天分さへあれば莫大な財を積むとが出來又一擧にして世間から認められるやうになるといつたものであるのだから、標緻よしの快活な娘達が教師だとか醫者だとかいふ地味な職業に對して華やかな舞臺やスクリーンの上の境涯を選擇するといふことは至極自然なりゆきであらう。

社交の方面に於ては、支那婦人達は今日ではどこに出しても立派に附合ひが出來るやうになつてゐる。おやつし、ダンス、麻雀を弄ぶこと、之が社交界に於ける普通の日暮しの術である。從て、戀愛事件、婚約破毀、離婚沙汰、といつたことが自然さうした周圍の境遇に伴生してゐるところの結果となつてゐるのである。

併し乍ら、婦人の個性と獨立を尊重する意識が益々加はりつつある現象が存するのである。結婚は二個の自由なる人格の結合であり、斷じて一者が他者を所有することではない。結婚した婦人も希望によつては夫と獨立した仕事にたづさはり自分自身の境涯を持つことが出來、又それを持つ資格を具へるに至てゐるのである。『事業と獨立、愛と自由』――是れが現代のスローガンである。

最後に、我々同胞婦人の前途に對する有らゆる光明の中で最も希望を懸けるに足る徴候は、子供達に對する世話が一層よく行屆いたものになつてきてをり、又子供の人格といふものが一層尊重されるやうになつてをるといふ事實、從て又、子供達の元氣が一層潑剌たるものとなつてき一層改善された外貌を呈するやうになつてきてをるといふ事實である。この事實は、教育のある新女性が、諸種の過誤を冒してゐるといふ點があるものにもせよ、子供の母親としても在來の無智な女性より遙かに優つてゐるものとして十分の信賴をつなぐに足るものだといふことを立證してゐるものである。

撃の矢を浴せかけられた、といつたやうな事件があつたのはつい一九二一年のことである。ところが、今や、支那で憲法を發布した最初の省である湖南省は男女の双方に對して平等の選擧權を賦與してゐるのである。そして同省の地方的議會には既に一人の婦人代議士が選出せられてをるのである。又、最近廣東に擧行せられた國民黨の全國大會に當ては、數人の婦人が同黨の中央委員に選出されたといつたやうな事實もあるのである。かうしたやうな出來事は、大して注意も向けられないでゐるうちに何時の間にか支那の國民生活中に喰ひ込んできて、男女兩性の双方の側の進歩主義者達に依て當然の事柄として一般に認容せられてをるのである。郭松齢氏の夫人がその夫君の冒險的な奉天反撃の軍に同伴して遂に夫君の義死——或るものはそれを不名譽と貶すかもしれないが——に殉ずるに至つたといふことは、教育ある支那の女性は國民的大事に當面しては場合によつて何時でも一身の安全を忘れ得るものである、といふことを實證する亦一つの例である。またその風説がもつぱらである所の劉清揚の死刑宣告の如きも、缺點はあるにもせよ有能な一婦人の大膽と不敵とを示す更に又一つの證例である。

廣東の航空隊が一支那婦人を其の隊長に、戴いで訓練を受けてゐるといふことは周知の事實である。そして、同隊が極く近いうちに北部支那、滿州、日本、フイリッピン群島を歴訪する遠征飛行の壯圖を計畫してゐるといふことを吾々が聞かされたのはつひ先日のことである。又、例の郭松齢夫人は、平常はその內氣な性質と餘り簡素に過ぎる服飾とのために決して社交界の婦人としては光彩のあつた方ではなかつたにも拘らず、一度夫君の軍中に在ては異常な軍事的天才を示し全軍士氣の發源となつてゐたといはれてゐる。國家の非常時に際して支那人によつて組織せられる赤十字其の他の救恤團體は、いつでも女醫や女子社會事業家たちの先導に依て積極的に支持せられてゐるのである。

職業上の方面に關しては、全國的な聲價を有する女優の數が益々增して行つてゐることに加へて、今日では極めて少數ながらも映畫の方面のスターが出てゐるのである。そして、其等の映畫女優はみな高等女學校の卒業生や相當良家の子女である。かうした俳優といつたやうな派出な職業に於ては、眞に天分さへあれば莫大な財を積むとが出來又一擧にして世間から認められるやうになるといつたものであるのだから、縹緻よしの快活な娘達が教師だとか醫者だとかいふ地味な職業に對して華やかな舞臺やスクリーンの上の境涯を選擇するといふことは至極自然ななりゆきであらう。

社交の方面に於ては、支那婦人達は今日ではどこに出しても立派に附合ひが出來るやうになつてゐる。おやつし、ダンス、麻雀を弄ぶこと、之が社交界に於ける普通の日暮しの術である。從て、戀愛事件、婚約破毀、離婚沙汰、といつたことが自然さうした周圍の境遇に伴生してゐるところの結果となつてゐるのである。

併し乍ら、婦人の個性と獨立を尊重する意識が益々加はりつつある現象が存するのである。結婚は二個の自由なる人格の結合であり、斷じて一者が他者を所有することではない。結婚した婦人も希望によつては夫と獨立した仕事にたづさはり自分自身の境涯を待つことが出來、又それを待つ資格を具へるに至てゐるのである。『事業と獨立、愛と自由』――是れが現代のスローガンである。

最後に、我々同胞婦人の前途に對する有らゆる光明の中で最も希望を懸けるに足る徴候は、子供達に對する世話が一層よく行屆いたものになつてきてをり、又子供の人格といふものが一層尊重されるやうになつてをるといふ事實、從て又、子供達の元氣が一層潑剌たるものとなつてき一層改善された外貌を呈するやうになつてきてをるといふ事實である。この事實は、教育のある新女性が、諸種の過誤を冒してゐるといふ點があるものにもせよ、子供の母親としても在來の無智な女性より遙かに優つてゐるものとして十分の信頼をつなぐに足るものだといふことを立證してゐるものである。

中國哲學の貢獻

燕京大學教授　馮友蘭

西洋の近代科學が發達して以來、東方は殆んど事々に人後に落ちてしてしまつた。それまで、東方文化の柱石であつた支那哲學は未だ科學の洗禮を受けなかつた爲に、その取扱ふ問題も比較的に單純で、その形式も相當に混雜である。支那に科學がなかつた所以、及び、西洋に特にそれがあつた所以は既に他の處で私が詳言してゐる。（註一）。玆では只だ次のことを問題にしたいと思ふのである。支那哲學の取扱ふ問題は比較的に單純で、その形式も比較的に混雜であるが、その內に、西洋哲學が未だ論及しなかつた問題はあるだらうか？或は、ある種の問題は西洋哲學にも、既に討論されてゐるが、それよりも支那哲學の方がより詳細に、より明白にそれを討論し、より圓滿にそれを解決してゐないだらうか？一言で云へば、支那哲學は世界に對して特殊な貢獻があるかと云ふことである。此の第一の問題に對して私は肯定的答案を與へることが出來ないけれども、第二の問題に對しては可なり之れに然りと答へる可能性があると思ふ。而して、此の二つの問題の內の一つが肯定的な答案を得ることが出來れば、最後の問題も亦た肯定的な答を得ることが出來ると思ふのである。

支那哲學は人生の方面に對して、特に注意を拂つて來た。それ故にその中には人生論や人生術があつて、西洋哲學の未だ詳細に討論しなかつたところである。本論文で述べ度いと思ふのはその內の一である。

支那哲學者は所謂る「動靜合一」に就いて甚だ詳しく討論して來た。先秦の儒家、道家（道敎の先驅者のことだらうが直ちに道家と呼ぶは如何か—譯者）は皆な「動靜合一」を以て人生の最高の境地を考へた。易の繫辭には

「寂然不動、感じて隨ちに天地の故に通ず」

とあり、孟子は「心を動かず」と云ひ莊子も亦た「至人の心を用ふるや、鏡の如し。將らず、迎へず、應じて藏めず、故に能く物に勝つて、傷れざるなり」（應帝王）

と云つて居る。漢より以後、道家哲學は魏晉に榮え、儒家哲學は宋明に復興し、孰れも大いに「動靜合一」の理想を發展し、又たそれに達する道を考究した。

郭象は魏晉時代に於ける第一流の哲學者の一人であるが、その莊子の註に

「夫れ至人とはその動くや天、その靜まるや地、その行くや流水、その止まるや淵默、淵默の水流と與に、天行の地止と與に、その爲さずして自から爾るは一なり。……誠に應ずるに心を以てせず、而して、理自づと玄符し、變化と與に辨降し、而して世を以て量りとせば然る後に物の主となり而して極まるなく時に順ずるに足る」（應帝王註）

「夫れ物と與に冥ずるは群物の離るる能はざる所以なり。是を以て、無心に玄應し惟だ感ずるに從ひ、汎手として繫がざる船の如く、東西の己れが爲に非らざるなり。故に百姓と共にせざる行ひなくんば、亦た往くところ天下の君たらざるなし」（逍遙遊註）

と云つてゐる。此が即ち「至人の心を用ふるや鏡の如し」の謂れである。若し心が鏡の如くなれば、

「物來りて、乃ち、鑑し、鑑するに心を以てせざる故に天下廣しと雖ども神を勞するの累なし」（應帝王註）

と云ふことになり、又た、

「夫れ、聖人、廟堂の上に在りと雖、その心山林の中に於けるが如し、世豈に之を識るや。徒らにその黄（金の）屋を戴き、玉璽を佩けるを見て、便ちに、その心を纓紱（束縛）するに足ると謂ひ、その山川に歷し、民事を同にせるを見て、便ちに、その神を憔悴せしむるに足ると謂ふも豈に至れるものゝ斷かざるを知れるや」（逍遙遊註）。と云ふ譯である。若し本統によく此の樣になれば惟だ人間の出來事がその心を動かすに足らないばかりでなく、自然界の變化も亦その「和を滑る」（莊子、德充符）。に足らないものである故に莊子は

「至人神なり。大澤焚れども熱きこと能はず、河漢冱るとも寒きこと能はず、疾雷山を破り、風海を振かせども驚くこと能はず（郭註に曰はく『夫れ神を全うし、形を具へ、而して、體と物と冥すれば、至變に涉ると雖、未だ始めより我に非らざるにあらず、故に蕩然として胸中に萬足介するものなきなり』と、）然かるが若きなれば、雲氣に乘り（郭曰はく『物に寄りて行くは我動くに非らざるなり』）、日月を騎り、（郭曰く『晝夜ありて生死なきなり』）而して四海の外に遊び（郭曰く『夫れ惟だその知なくして、天下の自爲に任かす故に萬物を馳せて窮まざるなり』）、死生も已に變ることなしに（郭曰く『變と與に體となし、

中國哲學の貢獻

燕京大學教授 馮友蘭

西洋の近代科學が發達して以來、東方は殆んど事々に人後に落ちてしまつた。それまで、東方文化の柱石であつた支那哲學は未だ科學の洗禮を受けなかつた爲に、その取扱ふ問題も比較的に單純で、その形式も相當に混雜である。支那に科學がなかつた所以、及び、西洋に特にそれがあつた所以は既に他の處で私が詳言してゐる。（註一）。玆では只だ次のことを問題にしたいと思ふのである。支那哲學の取扱ふ問題は比較的に單純で、その形式も比較的に混雜であるが、その內に、西洋哲學が未だ論及しなかつた問題はあるだらうか？或は、ある種の問題は西洋哲學にも、既に討論されてゐるか、それよりも支那哲學の方がより詳細に、より明白にそれを討論し、より圓滿にそれを解決してゐないだらうか？一言で云へば、支那哲學は世界に對して特殊な貢獻があるかと云ふことである。此の第一の問題に對して私は肯定的答案を與へることが出來ないけれども、第二の問題に對しては可なり之れに然りと答へる可能性があると思ふ。而して、此の二つの問題の內の一つが肯定的な答案を得ることが出來れば、最後の問題も亦た肯定的な答を得ることが出來ると思ふのである。

支那哲學は人生の方面に對して、特に注意を拂つて來た。それ故にその中には人生論や人生術があつて、西洋哲學の未だ詳細に討論しなかつたところである。本論文で述べ度いと思ふのはその內の一である。

支那哲學者は所謂「動靜合一」に就いて甚だ詳しく討論して來た。先秦の儒家、道家（道教の先驅者のことだらうが直ちに道家と呼ぶは如何か―譯者）は皆な「動靜合一」を以て人生の最高の境地を考へた。易の繫辭には

「寂然不動、感じて隨ちに天地の故に通ず」

とあり、孟子は「心を動かず」と云ひ莊子も亦た「至人の心を用ふるや、鏡の如し。將らず、迎へず、應じて藏めず、故に能く物に勝つて、傷れざるなり」（應帝王）

と云つて居る。漢より以後、道家哲學は魏晋に榮え、儒家哲學は宋明に復興し、孰れも大いに「動靜合一」の理想を發展し、又たそれに達する道を考究した。

郭象は魏晋時代に於ける第一流の哲學者の一人であるが、その莊子の註に

「夫れ至人とはその動くや天、その靜まるや地、その行くや流水、その止まるや淵默、淵默の水流と與に、天行の地止と與に、その爲さずして自から爾るは一なり。……誠に應ずるに心を以てせず、而して、理自づと玄符し、變化と與に辨降し、而して世を以て惟りとせば然る後に物の主となり而して極まるなく時に順ずるに足る」(應帝王註)

「夫れ物と與に冥するは群物の離るる能はざる所以なり。是を以て、無心に玄應し惟だ感ずるに從ひ、汎乎として繋がざる船の如く、東西の己れが催に非らざるなり。故に百姓と共にせざる行ひなくんば、亦た往くところ天下の君たらざるなし」(逍遙遊註)

と云つてゐる。此が即ち「至人の心を用ふるや鏡の如し」の謂れである。若し心が鏡の如くなれば、

「物來りて、乃ち、鑑し、鑑するに心を以てせざる故に天下廣しと雖ども神を勞するの累なし」(應帝王註)

と云ふことになり、又た、

「夫れ、聖人、廟堂の上に在りと雖、その心山林の中に於けるが如し、世豈に之を識るや。徒らにその黄(金の)屋を戴き、玉璽を佩けるを見て、便ちに、その心を纓紱(束縛)するに足ると謂ひ、その山川に歷し、民事を同にせるを見て、便ちにその神を憔悴せしむるに足ると謂ふも豈に至れるもの丶斷かさるを知れるや」(逍遙遊註)。と云ふ譯である。若し本統によく此の樣になれば惟だ人間の出來事がその心を動かすに足らないばかりでなく、自然界の變化も亦その「和を滑る」(莊子、德充符)。に足らないものである故に莊子は

「至人神なり。大澤焚れども熱きこと能はず、河漢沍るとも寒きこと能はず、疾雷山を破り、風海を振かせども驚くこと能はず(郭註に曰はく『夫れ神を全うし、形を具へ、而して、體と物と冥すれば、至變に渉ると雖、未だ始めより我に非らざるにあらず、故に蕩然として胸中に蔕芥するものなきなり』と、)然かるが若きなれば、雲氣に乘り(郭曰はく『物に寄りて行くは我動くに非らざるなり』)、日月を騎り、(郭曰く『晝夜ありて生死なきなり』)而して四海の外に遊び(郭曰く『夫れ惟だその知なくして、天下の自爲に任かす故に萬物を馳せて窮まざるなり』)、死生も已に變ることなしに(郭曰く『變と與に體となし、

故に死生一の若し』」)況んや、利害の端に於てをや（郭曰く、況んや、利害の死生に於けるは愈々以て介意するに足らず』」)（齊物論）。

と言つたのである。

宋、元の哲學者の內、「動靜合一」を說く者は更に多く、程明道はその定性書に

「所謂る定めとは動も定め、靜も定め、將迎なく、內外なし。……夫れ、天地の常とはその心を以て萬物に普ねくして而して心なく、聖人の常とはその情を以て萬物に順ひて而して情なし。故に君子の學は郭然として大公、物來りて順應するに若かず。……人の情、各蔽ふ所あり、故に能く道に適せず、大率患ひは自私にして智を用ふるにある。自らに私すれば有爲を以て、應迹となす能はず、智を用ふれば明確を以て自然となす能はず。……孰れ、外を非とし內を是とするよりは、內外の二つともに忘るゝに若かざるなり。兩ツともに忘るれば澄んで事なくなれり。事なくば定め、定めば明かなり、明かなれば尙ほ何ぞ物に應ずるの累をなすものあらんや。聖人の喜ぶは物の當に喜ぶべきを以てし、聖人の怒るは物の當に怒るべきを以てす。是れ、聖人の喜怒の心に繫がずして、物に繫がるゝところなり。是なれば聖人豈に物に應ぜざらんや。烏んぞ以て、外に從ふものを非となし而して更に內にあるものを求めて是となし得んや。今自私にして智を用ふるもの、喜怒を以て聖人の喜怒の正しきを見ば、如何んとなすや夫れ、人の情、發し易くして制し難きものは、惟れ、怒のみ甚とす。能く怒る時に遽かにその怒を忘れて理の是非を觀れば、亦、外誘の惡むに足らざるを見るべく、而して道に於ても亦、思半ば過れり。」と云ひ、王陽明は

「聖人知を致すの功、至誠無息。その良知の體皦きこと明鏡の如く略しも纖翳なし。妍媸の來るや、物に隨ひて形見れ、而して明鏡曾つて留染するなし。所謂、情萬物に順ひて而して情なきものなり。住するところなくしてその心を生ずると佛氏曾つて是言あり、未だ非となすにあらざるなり。明鏡の物に應ずるや妍しきものは妍し、媸きものは媸し、一たび照らして皆な眞なるは即ちその心を生ずるところにして、一たび過ぎて留まざるは即ち住するところなきなり」（傳習錄中卷）

と云つてゐる。宋明哲學者の「動靜合一」の境地に關する叙述は甚だ多いが先づ此れを引いて概略する積りである。

此境地に至る爲の方法と云へば、知識を以て情感を遣り、「我」を遣るに外ならない。現代心理學說によれば情感は心理活動に附隨するトーン（註二）であつて、所謂る哀樂は皆な情感である。知識を以て情感を遣ると云ふのは、力を以て强ひて

抑へるとの謂れではない。我々が、若し情感を引起す事物に對して、充分なる知識があり相當の諒解があれば情感は自然に減少するのである。莊子は妻を喪つて、盆を鼓つて歌つた。惠子はその譯を問ふた。莊子曰く、

是れ、その始めて死するや、我れ獨り何んぞ概然たることなき能はんや。その始を察せば本より生なし。徒に生なきのみにあらず而して本より形なし。徒に形なきのみにあらず、而して本より氣なし。芒芴の間に雜り、變じて氣あり、氣變じて形あり、形變じて生ある。今、又た變じて死す。是れ、相與に春秋冬夏四時の行をなすなり。人且つ偃然として巨室(大自然)に寢せるに、而して我々噭々然として之に隨ひて哭すとは、自から以て命に通ぜざるものとなす、故に止む也」(至樂)と、郭象曰はく、

「未だ明かにならずして概し、既に達して止む。斯は有情者を誨える所以にして、將に、至理を推さしめ累を遣らしむるものなり。」(同上註)と。所謂る理を以て累を遣ると云ふのは即ち知識を以て情感を遣ることである。即ち、王弼の所謂る「情を以て理に從はしむ」(戲答荀融書)ことである。知識を以て情感を遣ることが出來なければ即ち莊子の所謂、

「天を遁れ、情に倍きその受くるところを忘る」ことである。

既に天を遁れ、情に背けば、必ず所謂る「天を遁れたる所の刑」即ち苦惱を受けるのである。若し情感を遣り得る知識があつて生れて來ることは時であり、死んで行くことは「順」であることを知り、「時に安んじて順に處すれば哀樂」が這入ることが出來なくなるのである。哀樂を超えれば至樂を得ることが出來哀樂を超える事の出來るものは、恰度、倒さまに懸さるゝの苦しみを解脫した人の樣に、所謂「帝の懸しを解したる」ものである(莊子養生主)。

知識を以て情感を遣ることが出來るものは必ずしも全く無感情ではない。莊子もその妻の死に對して、「その始め、概然たることなき能は」ずと云ふ。秦失が老子を弔うた時も「三たび號して出づ」(莊子養生主)と云はれてゐる。王弼も、

「聖人の人より茂なるは神明なり。人と同じうするは五情なり。神明茂なる故に、能く體沖和して無に通ず。五情を同じうする故に哀樂なくして物に應ずる能はず。然れども、聖人の情は物に應じて物に累はさるゝことなきものなり。」(難何晏聖人無喜怒哀樂論)と云つてゐる。人間は枯れ木や死灰の樣に少しも情感がないと云ふことは出來ない。故に、王弼又た曰く、

夫れ、明以て、極幽微を尋ぬるに足れども自然の性を去る能はず。顏子の量、孔父の豫在する所なれども之に遇ひて樂しみなき能はず、之に遇ひて哀れなき能はず。又た常に狹き斯人も

故に死生一の若し』)況んや、利害の端に於ておや(郭日く、況んや、利害の死生に於けるは愈々以て介意するに足らず』)(齊物論)。

と言つたのである。

宋、元の哲學者の內、「動靜合一」を說く者は更に多く、程明道はその定性書に

「所謂る定めとは動も定め、靜も定め、將迎なく、內外なし。……夫れ、天地の常とはその心を以て萬物に普ねくして而して心なく、聖人の常とはその情を以て萬物に順ひて而して情なし。故に君子の學は郭然として大公、物來りて順應するに若かず。……人の情、各蔽ふ所あり、故に能く道に適せず、大率患ひは自私にして智を用ふるにある。自らに私すれば有爲を以て、應迹となす能はず、智を用ふれば明確を以て自然となす能はず。……孰れ、外を非とし內を是とするよりは、內外の二つともに忘るゝに若かざるなり。兩ツともに忘るれば澄んで事なくなれり。事なくば定め、定めば明かなり、明かなれば尙ほ何ぞ物に應ずるの累をなすものあらんや。聖人の喜ぶは物の當に喜ぶべきを以てし、聖人の怒るは物の當に怒るべきを以てす。是れ、聖人の喜怒の心に繫がずして、物に繫がるゝところなり。是なれば聖人豈に物に應ぜざらんや。烏んぞ以て、外に從ふものを非となし而して更に內にあるものを求めて是となし得んや。今自私にして智を用ふるもの、喜怒を以て聖人の喜怒の正しきを見ば、如何んとなすや夫れ、人の情、發し易くして制し難きものは、惟れ、怒のみ甚とす。能く怒る時に遽かにその怒を忘れて理の是非を觀れば、亦、外誘の惡むに足らざるを見るべく、而して道に於ても亦、思半ば過れり。」と云ひ、王陽明は

「聖人知を致すの功、至誠無息。その良知の體皦きこと明鏡の如く略しも纖翳なし。姸媸の來るや、物に隨ひて形見れ、而して明鏡曾つて留染するなし。所謂、情萬物に順ひて而して情なきものなり。住するところなくしてその心を生ずると佛氏曾つて是言あり、未だ非となすにあらざるなり。明鏡の物に應ずるや姸しきものは姸し、媸きものは媸し、一たび照らして皆な眞なるは即ちその心を生ずるところにして、一たび過ぎて留まさるは即ち住するところなきなり」(傳習錄中卷)

と云つてゐる。宋明哲學者の「動靜合一」の境地に關する敍述は甚だ多いが先づ此れを引いて概略する積りである。

此境地に至る爲の方法と云へば、知識を以て情感を遣り、「我」を遣るに外ならない。現代心理學說によれば情感は心理活動に附隋するトーン(註二)であつて、所謂る哀樂は皆な情感である。知識を以て情感を遣ると云ふのは、力を以て强ひて

抑へるとの謂れではない。我々が、若し情感を引起す事物に對して、充分なる知識があり相當の諒解があれば情感は自然に減少するのである。莊子は妻を喪つて、盆を鼓つて歌つた。惠子はその譯を問ふた。莊子曰く、

是れ、その始めて死するや、我れ獨り何んぞ概然たることなき能はんや。その始を察せは本より生なし。徒に生なきのみにあらず而して本より形なし。徒に形なきのみにあらず、而して本より氣なし。芒芴の間に雜り、變じて氣あり、氣變じて形あり、形變じて生ある。今、又た變じて死す。是れ、相與に春秋冬夏四時の行をなすなり。人且つ偃然として巨室(大自然)に寢せるに、而して我々噭々然として之に隨ひて哭すとは、自から以て命に通ぜざるものとなす、故に止む也」(至樂)と、郭象曰はく、

「未だ明かにならずして概し、既に達して止む。斯は有情者を誨える所以にして、將に、至理を推さしめ累を遣らしむるものなり。」(同上註)と。所謂る理を以て累を遣ると云ふのは即ち知識を以て情感を遣ることである。即ち、王弼の所謂る「情を以て理に從はしむ」(戯荅荀融書)ことである。知識を以て情感を遣ることが出來なければ即ち莊子の所謂、

「天を遁れ、情に倍きその受くるところを忘る」ことである。

既に天を遁れ、情に背けば、必ず所謂る「天を遁れたる所の刑」即ち苦惱を受けるのである。若し情感を遣り得る知識があつて生れて來ることは時であり、死んで行くことは「順」であることを知り、「時に安んじて順に處すれば哀樂」が這入ることが出來なくなるのである。哀樂を超えれば至樂を得ることが出來哀樂を超える事の出來るものは、恰度、倒さまに懸さるゝの苦しみを解脫した人の樣に、所謂「帝の懸しを解したる」ものである(莊子養生主)。

知識を以て情感を遣ることが出來るものは必ずしも全く無感情ではない。莊子もその妻の死に對して、「その始め、概然たることなき能は」ずと云ふ。秦失が老子を弔うた時も「三たび號して出づ」(莊子養生主)と云はれてゐる。王弼も、

「聖人の人より茂なるは神明なり。人と同じうするは五情なり。神明茂なる故に、能く體沖和して無に通ず。五情を同じうする故に哀樂なくして物に應ずる能はず。然れども、聖人の情は物に應じて物に累はさるゝことなきものなり。」(雜何晏聖人無喜怒哀樂論)と云つてゐる。人間は枯れ木や死灰の樣に少しも情感がないと云ふことは出來ない。故に、王弼又た曰く、

夫れ、明以て、極幽微を尋ぬるに足れども自然の性を去る能はず。顏子の量、孔父の豫在する所なれども之に遇ひて樂しみなき能はず、之に遇ひて哀れなき能はず。又た常に狹き斯人も

情を以て理に從はしむる能はずと以てなすものなり。而るに、今乃ち自然の革むべからざるを知る」（戲答荀融書）と、既に「自然の革むべからざれば」情感を動かすこと物を見れば矢張り情感なきを得ない。然し情感が起ると智識がすぐ之を消つて、去らしめる。恰度、莊子が「慨然」たる後にすぐ盆を鼓ち、秦失「三たび號」した後にすぐ起つて出る樣に。此の如くなれば情感は胸中に沾滯せず、吾人の心も執着する所がなくなる。程明道の所謂る「怒る時に遽かにその怒りを忘れて理の是非を觀る」と云ふことは即ち此の道である。宋明の哲學者は尤も人の情感なき能はざるを指明することに重を置いた。王陽明曰く、

「佛氏は無善無惡に著きて便ちに一切管はざれば以て天下を治むべからず。聖人の無善無惡は只だ好みを作らず、惡みを作らず、氣に動かさゞること是なり。……好惡を作らずとは全く好惡なきにあらず、こは却つて無知覺の人なり。作らずとは、好惡一に理に循ひ、又た更に一分の意思を著かざることとなるのみ。此くの如きは好まず惜まざりしも一般なり。……草妨礙あり、理も亦た去らすべければ之を去らして已む。偶し、未だ即ちに去らしめずとも亦た心を累はさず。若し一分の意思を著けば即ち心體便ちに胎累あり、便ち、許多の、氣を動かすところあり。」（傳習錄上）と。「若し即ちに去らしめずとも、亦た心を累はさず、」かくの如く出來れば、「喜怒物に繋がず」「情萬物に順ひて而して情なき」事が出來る。此くの如くすれば情感の心に於けるは浮雲の太空に於ける如く、有つても害はないのである。

又、人は「我」を有するが故に將來に對しては常に憂慮を有し、過去に對しては常に追悔を持ち、事物に對しては「未だ之を得ざるや、之を得んとして患ひ、既に之を得たれば又た之を失はんことを患ふ。苟もその失はんことを患へば至らざるところなきなり。」明道の所謂る「自私にして智を用ふる」とは即ち此の樣なことである。かくの如くなるが故に、常に外物に執着し、爲にすることに意あり、故に、「有爲を以て應跡とする能はず、」「明覺を以て自然となす能はざる」ものである。若し、智識を以て「我」の本よりなきことを知り、已が身を以て宇宙に合し、莊子の所謂る「天下を天下に藏むる」（大宗師）ものゝ如くなれば（註三）、「內外兩つ、ともに忘れ」「廓然として大公」となるのである。かくの如く、一切の憂ひ、悔み、私意、計慮、打算など復び存しなくなり、故に程明道が、「兩ともに忘るれば澄んで事なくなれり」と云ふ。「澄んで事なく」なれば心は明鏡の如くなり、將來に對しても亦た憂慮はなく、所

謂る「迎へず、」過去に對しても亦た追悔はなく、所謂る「將らず」現在に對しても亦た執着はなく、所謂る「應じて藏めざる」ことである。此の境地に達すれば、即ち郭象の所謂る「體物と共に冥す」ることが出來れば如何なる變化を經ても皆な「蕩然として胸中に介する蔕なく」なるのである。萬づの變化に應して何ら胸中にわだかまるものがなければ「動靜合一」でなくして何んであらう？宋明の哲學者は最も無私に注意をした。莊子も逍遙遊篇の中に、亦た、首に、

「至人己れなく、神人功なく聖人名なし」

と云ふことを標出してゐる。

上に述べた二つの方法は或は亦た一方法の二方面であるとも云ふべきであらう。一つは實現的方面に力を致し、知識を以て事物の性質を知ることであり、他の一つは主觀的方面に力を致し知識を以て「我」の性質を知ることである（註四）。既に此の知識を有てば直ちに常に、此の知識を以て、事物に應用することである。程明道は

「此の理を識り得れば、誠敬を以て之を存するのみ。防檢することも須ひず、窮索することも須ひず。若し心懈れば防くことあるも、心苟し懈らざれば何ぞ之を防くことあらんや。理の未た得ざるところあれば窮索するを須ひるも存して久しく自から明かなれば安んぞ窮索するを得んや。」（識仁篇）

と云つてゐる。所謂る「誠敬を以て之を存す」とは即ち常に此の理を忘れず、常に此の理を以て事物に應用することである。之を保存して久しくなれば我々の心は眞に將迎せず、內外なく、物に應じて藏めない鏡となるのである。宋明哲學者の說く所の修養は大抵は此の如きものである。

西洋哲學の中ではスピノザの哲學は最も中國哲學の此方面に似てゐる。スピノザのエチカは五部に分たれ、第一部は神（宇宙全體）を說き、第二部は心の來源及びその性質を說き、第三部は情感の來源及びその性質、第四部は人の受くる所の束縛、第五部は人の自由を說く。情感は人の受けたる束縛にして、知識は人に自由を與へ得る。人若し諸物の然るは皆な必然によるを知り又た神を「愛」するを知れば感情の束縛を脫して自由を得べしと云ふ。此文篇幅の爲に限られ、僅かに中國哲學の此の方面の大概を略述せるのみ、詳しく他處にて論ぜんとす。

（民國十五年五月北京に於て）

註一 The International Journal of Ethics Vol. XXXII, No. 3. の中に於ける拙作 Why China Has no Science, Etc. 一文及び拙著、「人生理想の比較研究」"A Comparative study of Life Ideals"（上海商務印書館）第六章參照

註二 A. G. Tansley, The New Psychology 1st ed. p. 36.

註三 此れは必ずしも一の普通に云ふ唯心的宇宙を需要しない。說拙著「人生哲學」（印刷中）第十三章に詳かにす。

註四 佛教哲學の中で所謂る「法執」「我執」を破るも亦た即ちかくの如きに似たり。

情を以て理に從はしたる能はずと以てなすものなり。而るに、今乃ち自然の革むべからざるを知る」(戯荅荀融書)と、既に「自然の革むべからざれば」情感を動かすこと物を見れば矢張り情感なきを得ない。然し情感が起ると智識がすぐ之を滑つて、去らしめる。恰度、莊子が「慨然」たる後にすぐ盆を鼓ち、秦失「三たび號」した後にすぐ廻つて出る樣に。此の如くなれば情感は胸中に沾滯せず、吾人の心も執着する所がなくなる。程明道の所謂る「怒る時に遽かにその怒りを忘れて理の是非を觀る」と云ふことは即ち此の道である。宋明の哲學者は尤も人の情感なき能はざるを指明することに重を置いた。王陽明曰く、

「佛氏は無善無惡に著きて便ちに一切管はざれば以て天下を治むべからず。聖人の無善無惡は只だ好みを作らず、惡みを作らず、氣に動かさゞることと是なり。……好惡を作らずとは全く好惡なきにあらず、こは却つて無知覺の人なり。作らずとは、好惡一に理に循ひ、又た更に一分の意思を著かざることとなるのみ。此くの如きは好まず惡まざりしも一般なり。……草妨礙あり、理も亦た去らすべければ之を去らして已む。偖し、未だ即ちに去らしめずとも亦た心を累はさず。若し一分の意思を著けば即ち心體便ちに胎累あり、便ち、許多の、氣を動かすところあり。」(傳習錄上)と。「若し即ちに去らしめずとも、亦た心を累はさず、」かくの如く出來れば「喜怒物に繋がず」「情萬物に順ひて而して情なき」事が出來る。此くの如くすれば情感の心に於けるは浮雲の太空に於ける如く、有つても害はないのである。

又、人は「我」を有する故に將來に對しては常に憂慮を有し、過去に對しては常に追悔を持ち、事物に對しては「未だ之を得ざるや、之を得んとして患ひ、既に之を得たれば又た之を失はんことを患ふ。苟もその失はんことを患へば至らざるところなきなり。」明道の所謂る「自私にして智を用ふる」とは即ち此の樣なことである。かくの如くなるが故に、常に外物に執着し、爲にすることに意あり、故に「有爲を以て應跡とする能はず、」「明覺を以て自然となす能はざる」ものである。若し、智識を以て「我」の本よりなきことを知り、已が身を以て宇宙に合し、莊子の所謂る「天下を天下に藏むる」(大宗師)ものゝ如くなれば(註三)、「內外兩つ、ともに忘れ」「廓然として大公」となるのである。かくの如く、一切の憂ひ、悔み、私意、計慮、打算など復び存しなくなり、故に程明道が、「兩ともに忘るれば澄んで事なくなれり」と云ふ。「澄んで事なく」なれば心は明鏡の如くなり、將來に對しても亦た憂慮はなく、所

謂る「迎へず、」過去に對しても亦た追悔はなく、所謂る「將らず」現在に對しても亦た執着はなく、所謂る「應じて藏めざる」ことである。此の境地に達すれば、即ち郭象の所謂る「體物と共に冥す」ることが出來れば如何なる變化を經ても皆な「蕩然として胸中に介する慮なく」なるのである。萬つの變化に處して何ら胸中にわだかまるものがなければ「動靜合一」でなくして何んであらう?宋明の哲學者は最も無私に注意をした。莊子も逍遙遊篇の中に、亦た、肯に、

「至人己れなく、神人功なく聖人名なし」

と云ふことを標出してゐる。

上に述べた二つの方法は或は亦た一方法の二方面であるとも云ふべきであらう。一つは實現的方面に力を致し、知識を以て事物の性質を知ることであり、他の一つは主觀的方面に力を致し知識を以て「我」の性質を知ることである(註四)。既に此の知識を有てば直ちに常に、此の知識を以て、事物に應用することである。程明道は

「此の理を識り得れば、誠敬を以て之を存するのみ。防檢することも須ひず、窮索することも須ひず。若し心懈れば防くことあるも、心苟し懈らざれば何ぞ之を防くことあらんや。理の未だ得ざるところあれば窮索するを須ひるも存して久しく自から明かなれば安んぞ窮索するを得んや。」(識仁篇)

と云つてゐる。所謂る「誠敬を以て之を存す」とは即ち常に此の理を忘れず、常に此の理を以て事物に應用することである。之を保存して久しくなれば我々の心は眞に將迎せず、內外なく、物に應じて藏めない鏡となるのである。宋明哲學者の說く所の修養は大抵は此の如きものである。

西洋哲學の中ではスピノザの哲學は最も中國哲學の此方面に似てゐる。スピノザのエチカは五部に分たれ、第一部は神(宇宙全體)を說き、第二部は心の來源及びその性質を說き、第三部は情感の來源及びその性質、第四部は人の受くる所の束縛、第五部は人の自由を說く。情感は人の受けたる束縛にして、知識は人に自由を與へ得る。人若し諸物の然るは皆な必然によるを知り又た神を「愛」するを知れば感情の束縛を脫して自由を得べしと云ふ。此文篇幅の爲に限られ、僅かに中國哲學の此の方面の大概を略述せるのみ、詳しく他處にて論ぜんとす。

(民國十五年五月北京に於て)

註一　The International Journal of Ethics Vol. XXXII, No. 3. の中に於ける拙作 Why China Has no Science, Etc. 一文及び拙著、「人生理想の比較研究」"A Comparative study of Life Ideals"(上海商務印書館)第六章參照

註二　A. G. Tnusley, The New Psychology 1sted. p. 36.

註三　此れは必ずしも一の普通に云ふ唯心的宇宙を需要しない。說拙著「人生哲學」(印刷中)第十三章に詳かにす。

註四　佛教哲學の中で所謂る「法執」「我執」を破るも亦た即ちかくの如きに似たり。

中國の學生運動

北京大學教授　高一涵

古來中國には議院なるものがない。故に往々學校を以て民意の發表の機關とした。黄梨洲先生曰く『、、の是とする所必ずしも是でない。、、の非とする所必ずしも非でない。天子も遂に自ら敢て是非を爲さずして、其是非を學校に於て公決するに至つた』と。（明夷待訪錄）されば中國では古來學校を以て獨り人材養成の地としたばかりでなく、併せて之を清議發表の機關としたのである。凡そ權貴豪强の徒にして、國家の官吏を敢て彈劾し得なかつた者に對し、學校の諸生は往々淸議を代表して之を彈劾した。又凡そ忠君愛國の士にして、群小に忌まれ穢らはしい寃罪を蒙り、國家の官吏も敢て公正な判決を下し得なかつた者に對し、學校の諸生は往々群起して之を伸訴した。例へば東漢時代に太學の諸生三萬餘人が、各部黨を立て、公論を主持し、史に所謂『枯を噓し生を吹き、三府の辟召も常に其の口より出づ』るもの、公卿以下其の貶議を畏れぬ者はなかつた。宋代に至つて太學生は尤も不屈不撓に正義を主張した。靖康の末年李綱の採用を乞はんが爲めに、衆數千人を聚め、闕に伏して鼓を槌ち、宮使を擊殺するに及んで、宋の朝廷はこれを如何ともすることが出來なかつた。梨洲老人が出るに至つて、更に學校の地位を高めるべく、直接に學校を以て國家官吏の最高監督機關とし、彈劾罷免の權盡く之を師儒學生の手に委ねて措まなかつた。故に曰く、『郡縣の公議は名儒に請ふて之を司らしめる。』『學官にして少しく淸議を犯すものあれば、諸生は共に起つて之を易へる。』『郡縣官の政事に缺陷あれば、小なるものは糾彈し、大なるものは鼓を伐つて衆に向つて呼號する。』『若し郡縣官の少年にして實學無きに、妄に自ら老儒を壓して上に立てば、士子譁騷して之を退ける。』（以上明夷待訪錄）是に由つて見れば、學校の諸生は人物を可否し、官吏を進退し、失政を糾彈し、是非を主持することが出來るもので、此れ實に學校を認めて輿論代表の地とし、名儒學生を以て政府を監督する者とするのである。

中國に於て學校を尊重し師儒を崇拜する氣風は、其の由來已に久しい。歴代識見拔群の君主は、儒學尊崇の美名を藉つて、天下の人心を收拾し、一時の風紀を肅正せぬものはない。故に或人の如きは國子監祭酒は南面して學を講じ、天子も亦弟子の列に就き、若し政事に缺陷あれば、祭酒は直言して隱すことなかるべしと主張した。蓋し古代の學官は其の職重く其の位高かつた。漢代の博士は學官の首長で、當時朝廷の大事にして公卿に下して議する程のものは、皆博士をしてその議に預らしめた。出でゝ四方に使し、入つて宮禁に侍するなど、亦多く博士を其の任に充てた。故に學官の職は僅に生徒を教授するのみでなく、兼て顧問の用に備へたのである。漢代には經術を尊重した結果、博士は多く名流の士で、其の高弟に居る者は、往々九卿に列した。位三公に上つた人でも、猶必ず曾て博士の官にあつた事を引いて重きを爲した。之に由つても學校は一國崇高の地で、學官は一代清選の人であつたことが判る。

學官尊崇の氣風は、時に依つて幾分か衰へたけれども、承平の時到る毎に、又必ず此事を重しとした。故に此等の氣風は、脈々相襲いで今に至るまで變らない。清末以來教育の重心は一轉して京師大學堂に移つた。今の北京大學は即ち京師大學堂の化歩で、中國に於ける最高の學府であり、教育界に於ける教育の中心である。京師大學堂設置以來、この學堂の一言一行は擧げて社會各方面に重視され、政府方面は尤も此の一機關を重視し、德高誠直の士が多く玆に萃まつた。かくて學校方面の是とする所は、政府必ず多く之を非とし、政府方面の是とする所は、學校亦必ず多く之を非とするに至り、學校制度有つてより現在に到るまで、殆んど一日として政府と學校とが互に相嫉視するといふ狀態を脫したことが無い。惟、清代には官僚の勢力が頗る强かつたので、學校は轉た危疑不安の有様に陷つたが、民國に入つて以來、官僚の勢力漸く衰へ、學校は一變して社會革新の指導機關と成つた。『五四運動』以後は、遂に從來官吏養成の學校を變じて、革命人材養成の學校と爲すに至つた。此より學校と官僚とは更に一歩を進めて相衝突する時期に到達し、學校の勢が盛なれば官僚を打倒さゞれば止まず、官僚の勢が盛なれば學校を解散せざれば止まないといふ狀態に立至つた。

『五四運動』は山東問題から起つたもので、民國八年五月四日に發生したるが故に、之を五四運動と呼ぶのである。此の運動の目的を知るには、當時の北京學界全體宣言なるものを見るのが、最も適當である。該宣言書は謂ふ。

今や日本は萬國講和會議に於て、靑島を併吞し山東を管理

中國の學生運動

北京大學教授　高一涵

古來中國には議院なるものがない。故に往々學校を以て民意の發表の機關とした。黃梨洲先生曰く『、、の是とする所必ずしも是でない。、、の非とする所必ずしも非でない。天子も遂に自ら敢て是非を爲さずして、其是非を學校に於て公決するに至つた』と。（明夷待訪錄）されば中國では古來學校を以て獨り人材養成の地としたばかりでなく、併せて之を淸議發表の機關としたのである。凡そ權貴强豪の徒にして、國家の官吏を敢て彈劾し得なかつた者に對し、學校の諸生は往々淸議を代表して之を彈劾した。又凡そ忠君愛國の士にして、群小に忌まれ穢らはしい冤罪を蒙り、國家の官吏も敢て公正な判決を下し得なかつた者に對し、學校の諸生は往々群起して之を伸訴した。例へば東漢時代に太學の諸生三萬餘人が、各部黨を立て、公論を主持し、史に所謂『枯を噓し生を吹き、三府の辟召も常に其の口より出づ』るもの、公卿以下其の貶議を畏れぬ者はなかつた。宋代に至つて太學生は尤も不屈不撓に正義を主張した。靖康の末年李綱の採用を乞はんが爲めに、衆數千人を聚め、闕に伏して鼓を檛ち、宮使を毆殺するに及んで、宋の朝廷はこれを如何ともすることが出來なかつた。梨洲老人が出るに至つて、更に學校の地位を高めるべく、直接に學校を以て國家官吏の最高監督機關とし、彈劾罷免の權盡く之を師儒學生の手に委ねて措まなかつた。故に曰く、『郡縣の公議は名儒に請ふて之を司らしめる。』『學官にして少しく淸議を犯すものあれば、諸生は共に起つて之を易へる。』『郡縣官の政事に缺陷あれば、小なるものは糾彈し、大なるものは鼓を伐つて衆に向つて呼號する。』『若し郡縣官の少年にして實學無きに、妄に自ら老儒を壓して上に立てば、士子譁騷して之を退ける。』（以上明夷待訪錄）是に由つて見れば、學校の諸生は人物を可否し、官吏を進退し、失政を糾彈し、是非を主持することが出來るもので、此れ實に學校を認めて輿論代表の地とし、名儒學生を以て政府を監督する者とするのである。

中國に於て學校を尊重し師儒を崇拜する氣風は、其の由來已に久しい。歷代識見拔群の君主は、儒學尊崇の美名を藉つて、天下の人心を收拾し、一時の風紀を肅正せぬものはない。故に或人の如きは國子監祭酒は南面して學を講じ、天子も亦弟子の列に就き、若し政事に缺陷あれば、祭酒は直言して隱すことなかるべしと主張した。蓋し古代の學官は其の職重く其の位高かつた。漢代の博士は學官の首長で、當時朝廷の大事にして公卿に下して議する程のものは、皆博士をしてその議に預らしめた。出でゝ四方に使し、入つて宮禁に侍するなど、亦多く博士を其の任に充てた。故に學官の職は僅に生徒を教授するのみでなく、兼て顧問の用に備へたのである。漢代には經術を尊重した結果、博士は多く名流の士で、其の高弟に居る者は、往々九卿に列した。位三公に上つた人でも、猶必ず曾て博士の官にあつた事を引いて重きを爲した。之に由つても學校は一國崇高の地で、學官は一代淸選の人であつたことが判る。

學官尊崇の氣風は、時に依つて幾分か衰へたけれども、承平の時到る每に、又必ず此事を重しとした。故に此等の氣風は、脈々相襲いで今に至るまで變らない。淸末以來教育の重心は一轉して京師大學堂に移つた。今の北京大學は即ち京師大學堂の化身で、中國に於ける最高の學府であり、教育界に於ける教育の中心である。京師大學堂設置以來、この學堂の一言一行は擧げて社會各方面に重視され、政府方面は尤も此の一機關を重視し、淸高誠直の士が多く茲に萃まつた。かくて學校方面の是とする所は、政府必ず多く之を非とし、政府方面の是とする所は、學校亦必ず多く之を非とするに至り、學校制度有つてより現在に到るまで、殆んど一日として政府と學校とが互に相嫉視するといふ狀態を脫したことが無い。惟、淸代には官僚の勢力が頗る强かつたので、學校は轉た危疑不安の有様に陷つたが、民國に入つて以來、官僚の勢力漸く衰へ、學校は一變して社會革新の指導機關と成つた。『五四運動』以後は、遂に從來官吏養成の學校を變じて、革命人材養成の學校と爲すに至つた。此より學校と官僚とは更に一步を進めて相衝突する時期に到達し、學校の勢が盛なれば官僚を打倒さゞれば止まず、官僚の勢が盛なれば學校を解散せされば止まないといふ狀態に立至つた。

『五四運動』は山東問題から起つたもので、民國八年五月四日に發生したるが故に、之を五四運動と呼ぶのである。此の運動の目的を知るには、當時の北京學界全體宣言なるものを見るのが、最も適當である。該宣言書は謂ふ。

今や日本は萬國講和會議に於て、靑島を併呑し山東を管理

する一切の權利を要求して、將に成功せんとして居る。彼等の外交は大勝利である。我等の外交は大失敗である。山東の大勢一たび去つたならば、中國の領土は破壞する。中國の領土が破壞すれば、中國は亡びる。されば我等學界は今日隊伍を整へて各國公使館に到り、各國共に出でゝ公理を維持せんことを要求する。望むらくは全國の工商各界、一齊に起つて法を設けて國民大會を開き、外主權を爭ひ、內國賊を除かんことを。中國の存亡は此の一擧に在り。今全國の同胞と共に二個の信條を立てよう。

中國の土地は征服することは出來ても斷送させることは出來ない。

中國の人民は殺戮することは出來ても低頭させることは出來ない。

中國の學生が政治運動を爲すことを知つたのは、五四運動から始まつたと云つてよい。當時曹汝霖章宗祥等を毆打してから、俄に全國の同情心を喚起した。是迄國人が言はんと欲して言ひ得ず、心に隱忍して發しなかつたことを、學生が一度代つて之を發したのであるから、世を擧げて快と稱したのである。此から後、學校の名譽は漸く高まり、學生が改革途上に立つ責任愈々重くなり、學生も自ら其責任の重いことを知つて、知識を求める欲望がこれと共に增加した。其後の傾向は、一面學生自身の學業に重きを置き、一面國人の愛國心を喚起するに重きを置くに至つた。故に曾て自ら五四運動に從事した學生は、多く海外に往つて學を求め、其の知識研鑽の渴望を滿した。而して國內に在つて民衆を喚醒する出版物の、學校學生の主幹するもの、亦多いこと胡蝶の紛飛するが如くである。此等の精神は相繼いで今に至つて少しも衰へない。昨年の『五卅慘案運動』、今年『三一八』の大沽口八國通牒に對する運動、及び種々の帝國主義倒壞運動、不平等條約取消運動、關稅自主運動の如きは、皆此の精神に基いて行はれたものである。

由來清末以後、中國の列强に對する態度は凡そ三變した。海禁初めて解け、歐洲人が初めて中國に來た頃には、民智が開けなかつた爲に、一種盲目的排外心理を抱いて居た。此が第一期である。日清戰爭から拳匪の亂後迄は、外國人が中國に於ける勢力の最も强大な時であつたので、滿廷の官吏も商埠の人民も、多く盲目的媚外心理を抱いて居た。此が第二期である。民國に成つてから、中國人は漸く世界の大勢が明になり、歐米人が中國を遇すると他國を遇すると自らを遇すると相同じからさることが判つて來、其上民族自決の潮流が歐洲戰爭に因て傳播したので、中國の獨立を爭ふことゝ中華民族自決の思潮とが、

日一日と高まつた。隨て帝國主義の打破や不平等條約取消などの表示が現はれた。故に今日の中國々人は、最早盲目的排外心理でもなく盲目的媚外心理でも無い。唯公理を主とし、人道を主とし、公理に合せず人道に合せぬ所の國際的壓迫と侮辱とに對しては、公正なる抵抗をなすのみである。此が第三期である。

學生運動は適々此の第三期に當つたが爲に、其運動の十中八九は外交問題に對して爲されるものであり、眞正の原因は時代の影響を受けたのである。之に因て中國の學生運動は、遂に一種の特性を形成するに至つた。即ち此等學生運動と各國の階級運動とは同一でない。

例へば各國の女子參政運動の如き、爭ふ所の者は女界自身の權利であり、各國勞働運動の如き、爭ふ所の者は勞働階級自身の問題であるけれども、中國の學生運動は絕て學生自身の權利や問題を爭ふのではなく、自身以外に在つて、國家の爲に權利と獨立とを爭ふのである。又各國の各種運動は、消極的態度を取る者も固より多いとは云へ、其大部分は多く積極的態度を取つて建設的問題を爭ふにあるが、中國の學生運動は、元來帝國主義に反抗して起つたのであるから、其性質は消極的であり、列强外交上の壓迫を免れんとするにあるので、決して專ら積極的に本國內政上の建設を求める譯ではない。故に中國の學生運動は、列强の壓迫に對して正當防衛の運動を爲すもので、政府の野心を助長して、他國の土地を鯨併したり、他國の權利を侵犯したりする運動ではないのである。

外國人は中國の學生運動に對して、毎に誤解が多い。或は之を『赤化』と稱し、或は之を『排外』と稱する。其實は皆中國學生運動の實情に審かでない。所謂赤化とは、國家と民族の界限を取消し、全世界被壓迫の弱小民族を聯合して、共同に進行しつゝ、國家と民族の界域を分たざるもので、中國の學生中には其一小部分に、第三國際派に傾いた人が無いでもないが、併し其大多數は矢張民族自決と國家獨立の主義を抱いて、決して第三國際派の主張に贊同しない。如何にして之を赤化と稱することが出來よう。排外云云に至つては、乃ち是れ淸末中國人の心理を以て現在中國人の心理と爲すもの、猶更時代錯誤たるを免れないので、改めて辯論する價値が無い。將來に於ける中國學生運動の趨勢徑路は、未だ前知し難いけれども、已往の中國學生運動の事實は、確に此の如くである。余が故らに之を茲に述べたのは、中國學生運動を研究する者に對し、聊か參考の資料を提供せんと欲するに過ぎない。(五月十八日北京にて)

する一切の權利を要求して、將に成功せんとして居る。彼等の外交は大勝利である。我等の外交は大失敗である。山東の大勢一たび去つたならば、中國の領土は破壞する。中國の領土が破壞すれば、中國は亡びる。されば我等學界は今日隊伍を整へて各國公使館に到り、各國共に出でゝ公理を維持せんことを要求する。望むらくは全國の工商各界、一齊に起つて法を設けて國民大會を開き、外主權を爭ひ、內國賊を除かんことを。中國の存亡は此の一擧に在り。今全國の同胞と共に二個の信條を立てよう。

中國の土地は征服することは出來ても割讓させることは出來ない。

中國の人民は殺戮することは出來ても低頭させることは出來ない。

中國の學生が政治運動を爲すことを知つたのは、五四運動から始まつたと云つてよい。當時曹汝霖章宗祥等を毆打してから、俄に全國の同情心を喚起した。是迄國人が言はんと欲して言ひ得ず、心に隱忍して發しなかつたことを、學生が一度代つて之を發したのであるから、世を擧げて快と稱したのである。此から後、學校の名譽は漸く高まり、學生が改革途上に立つ責任愈々重くなり、學生も自ら其責任の重いことを知つて、知識を求める欲望がこれと共に增加した。其後の傾向は、一面學生自身の學業に重きを置き、一面國人の愛國心を喚起するに重きを置くに至つた。故に曾て自ら五四運動に從事した學生は、多く海外に往つて學を求め、其の知識研鑚の渴望を滿した。而して國內に在つて民衆を喚醒する出版物の、學校學生の主幹するもの、亦多いこと胡蝶の紛飛するが如くである。此等の精神は相繼いで今に至つて少しも衰へない。昨年の『五卅慘案運動』、今年『三一八』の大沽口八國通牒に對する運動、及び種々の帝國主義倒壞運動、不平等條約取消運動、關稅自主運動の如きは、皆此の精神に基いて行はれたものである。

由來清末以後、中國の列强に對する態度は凡そ三變した。海禁初めて解け、歐洲人が初めて中國に來た頃には、民智が開けなかつた爲に、一種盲目的排外心理を抱いて居た。此が第一期である。日清戰爭から拳匪の亂後迄は、外國人が中國に於ける勢力の最も强大な時であつたので、淸廷の官吏も商埠の人民も、多く盲目的媚外心理を抱いて居た。此が第二期である。民國に成つてから、中國人は漸く世界の大勢が明になり、歐米人が中國を遇すると他國を遇すると自らを遇すると相同じからざることが判つて來、其上民族自決の潮流が歐洲戰爭に因て傳播したので、中國の獨立を爭ふことゝ中華民族自決の思潮とが、

日一日と高まつた。隨て帝國主義の打破や不平等條約取消などの表示が現はれた。故に今日の中國々人は、最早盲目的排外心理でもなく盲目的媚外心理でも無い。唯公理を主とし、人道を主とし、公理に合せず人道に合せぬ所の國際的壓迫と侮辱とに對しては、公正なる抵抗をなすのみである。此が第三期である。

學生運動は適々此の第三期に當つたが爲に、其運動の十中八九は外交問題に對して爲されるものであり、眞正の原因は時代の影響を受けたのである。之に因て中國の學生運動は、遂に一種の特性を形成するに至つた。即ち此等學生運動と各國の階級運動とは同一でない。

例へば各國の女子參政運動の如き、爭ふ所の者は女界自身の權利であり、各國勞働運動の如き、爭ふ所の者は勞働階級自身の問題であるけれども、中國の學生運動は絕て學生自身の權利や問題を爭ふのではなく、自身以外に在つて、國家の爲に權利と獨立とを爭ふのである。又各國の各種運動は、消極的態度を取る者も固より多いとは云へ、其大部分は多く積極的態度を取つて建設的問題を爭ふにあるが、中國の學生運動は、元來帝國主義に反抗して起つたのであるから、其性質は消極的であり、列强外交上の壓迫を免れんとするにあるので、決して專ら積極的に本國內政上の建設を求める譯ではない。故に中國の學生運動は、列强の壓迫に對して正當防衛の運動を爲すもので、政府の野心を助長して、他國の土地を兼併したり、他國の權利を侵犯したりする運動ではないのである。

外國人は中國の學生運動に對して、每に誤解が多い。或は之を『赤化』と稱し、或は之を『排外』と稱する。其實は皆中國學生運動の實情に審かでない。所謂赤化とは、國家と民族の界限を取消し、全世界被壓迫の弱小民族を聯合して、共同に進行しつゝ、國家と民族の界域を分たざるもので、中國の學生中には其一小部分に、第三國際派に傾いた人が無いでもないが、併し其大多數は矢張民族自決と國家獨立の主義を抱いて、決して第三國際派の主張に贊同しない。如何にして之を赤化と稱することが出來よう。排外云云に至つては、乃ち是れ清末中國人の心理を以て現在中國人の心理と爲すもの、猶更時代錯誤たるを免れないので、改めて辯論する價値が無い。將來に於ける中國學生運動の趨勢徑路は、未だ前知し難いけれども、已往の中國學生運動の事實は、確に此の如くである。余が故らに之を玆に述べたのは、中國學生運動を研究する者に對し、聊か參考の資料を提供せんと欲するに過ぎない。（五月十八日北京にて）

中國の國家財政と地方財政の區分

中國銀行　馬寅初

財政は今日の中國に於ける最大問題であつて、就中外債が其の最も重要なるものである。經濟の發達せる國家に於ては、財政上の最大問題は決して外債ではなくして課税である。現在中國の外債に就て考へると、其の總額は二十四億元を越えて居らず、其の四分の一に當る約六億元は無抵當の借款である。此の六億元の無抵當の借款なるものは、今日の中國々民の眼光を以て見れば、甚だ多額の感あるも、其實價何等驚くに足らない。一旦内亂が鎭定し、社會の秩序が恢復され、人民の生産が旺盛となり、隨つて其の負擔力も增大するに至れば、此等外債の償還は固より甚しい難事ではなく、必ずしも憐憫として焦慮するには當らないのである。

今日の財政上の問題は、中央財政と地方財政との區分以上に、より重要なものはない。由來中國の中央政府には固有の財源なく、軍事政治の經費は、總て之を各省の分擔に依つたものである。蓋し各省の官吏は、上は都督巡撫から下は縣知事に至るまで、一として中央政府の指揮に從はないものは無く、中央に對しては擁護維持の義務を負はざるを得なかつた。而して斯の如き服從心を養成し得たのは、各省長官任免の權が、全く中央政府に存してゐたからである。長官が無能であつても、唯よく君主の意に聽從すれば事無きを得たのに反し、賢能の長官と雖も、若し中央と衝突する事あらんか、忽ち免職の憂目を見るのであつた。されば各省の長官たるものは、人民の歡心を博せんよりは、寧ろ皇帝の寵遇を得るに如かずとして、極端に中央に服從するに至つたのは、自然の勢然らしめたのである。中央政府に此の權威がある以上、假令獨立の財源を有せずとも、一切の經費は、中央の命令を以て之を各省に督促して、分擔せしめ得たのであつた。併し此の種の財政制度は最早民國時代には適用されなくなつた。中國は國土廣大で、四川省の一省のみでも優に日本全土に匹敵して、尚且綽々として餘りある程である。其上清朝の政治は寛大を貴んで、各省の行政には干渉を加へなかつたの

で、遂に中國をして一聯邦國なるかの如き局面を構成せしめるに至つた。されば一旦統制が頽廢され、中央政府が既に統御の勢力を失ひ、各地方も中央に對して昔日の如き君臣の觀念消滅するに及んでは、中央政府の經費は全く杜絶の止むなきに至つたのである。且辛亥革命以來、各省には種々の事故續發し、舊來の税源は多く抑留せられて各省の軍費に充當せられ、又各省の長官は多く其省の人を任用し、『浙江人は浙江を治め』『江蘇人は江蘇を治む』と云ふ輿論が日一日と高まり、隨て各省の收入は當然其の省の經費に充てらるべく抑留されるに至つたのである。故に民國元年二年の二ケ年度に於ける中央財政は頗る窮境に陷り、外債を借りて彌縫の策を講ぜざるべからざる立至つた。茲に於て民國二年に至り、舊來の税源を中央税と地方税に區分し、兩者の限界を明確にして、互に混淆せしめないことを主とする議論が生じて來た。之れが民國二年の國家地方税法草案の由來である。併し實際に就て之を見るに、此の種の税法は到底施行し能はざるものである。何となれば一切の重要なる税源は盡く國家税に編入され、地方に歸屬すべき所得は、唯幾種かの雜捐及び雜税に過ぎないことに成るからである。地方の税所得が斯くの如く微薄なるに於ては、地方自治は發展の見込が無い。

地方自治の潮流澎湃たる今日、此の種の區分が失敗に終るべきは、夙に推測せられたものである。民國十二年に至り憲法が成立し、中央税と地方税に對し、始めて、適切なる規定が設けられ、民國二年の草案とは大に其の趣きを異にするに至つた。その區分法は次の如くである。

甲、國家税に歸すべきもの

(1)關税　(2)鹽税　(3)印紙税　(4)煙酒税　(5)其の他の消費税　(6)税率が全國に同一に行はるべき租税

乙、地方に歸すべきもの

(1)田賦　(2)契税　(3)其の他の省税

之を要するに、國家税に歸すべきものは間接税を主とし、税率が全國に劃一に行はるべき租税を以て之が補助とした。例へば營業税の如きは直接税であるが、之を大會社から徴收する場合に、其の分支店は遍く各地方に設置されて居るから、課税は單に一二省のみの所得に歸せしめる事も出來なければ、亦重複を免れる爲に各省等しく之を課する事も出來得ないから、斯る營業税は國家税中に編入するが正當である。併し各省に於ける小規模の營業例へば牙行（仲買業）や質舖などは、其の營業範圍が省外に出ないから、之に課すべき營業税は、當然其の省の收入に歸すべきである。

地方に歸すべきものとしては、直接税なる田賦及び行爲税た

中國の國家財政と地方財政の區分

中國銀行　馬寅初

財政は今日の中國に於ける最大問題であつて、就中外債が其の最も重要なるものである。經濟の發達せる國家に於ては、財政上の最大問題は決して外債ではなくして課税である。現在中國の外債に就て考へると、其の總額は二十四億元を越えて居らす、其の四分の一に當る約六億元は無抵當の借款である。此の六億元の無抵當の借款なるものは、今日の中國々民の眼光を以て見れば、甚だ多額の感あるも、其實價何等驚くに足らない。一旦內亂が鎭定し、社會の秩序が恢復され、人民の生產が旺盛となり、隨つて其の負擔力も增大するに至れば、此等外債の償還は固より甚しい難事ではなく、必すしも齷齪として焦慮するには當らないのである。

今日の財政上の問題は、中央財政と地方財政との區分以上に、より重要なものはない。由來中國の中央政府には固有の財源なく、軍事政治の經費は、總て之を各省の分擔に依つたものである。蓋し各省の官吏は、上は都督巡撫から下は縣知事に至るまで、一として中央政府の指揮に從はないものは無く、中央に對しては擁護維持の義務を負はざるを得なかつた。而して斯の如き服從心を養成し得たのは、各省長官任免の權が、全く中央政府に存してゐたからである。長官が無能であつても、唯よく君主の意に聽從すれば事無きを得たのに反し、賢能の長官と雖も、若し中央と衝突する事あらんか、忽ち免職の憂目を見るのであつた。されば各省の長官たるものは、人民の歡心を博せんよりは、寧ろ皇帝の寵遇を得るに如かすとして、極端に中央に服從するに至つたのは、自然の勢然らしめたのである。中央政府に此の權威がある以上、假令獨立の財源を有せすとも、一切の經費は、中央の命令を以て之を各省に督促して、分擔せしめ得たのであつた。併し此の種の財政制度は最早民國時代には適用されなくなつた。中國は國土廣大で、四川省の一省のみでも優に日本全土に匹敵して、尙且綽々として餘りある程である。其上淸朝の政治は寬大を貴んで、各省の行政には干涉を加へなかつたの

で、遂に中國をして一聯邦國なるかの如き局面を構成せしめるに至つた。されば一旦帝制が顚覆され、中央政府が俄に統御の勢力を失ひ、各地方も中央に對して昔日の如き君臣の觀念消滅するに及んでは、中央政府の經費は全く杜絶の止むなきに至つたのである。且辛亥革命以來、各省には種々の事故續發し、舊來の税源は多く抑留せられて各省の軍費に充當せられ、又各省の長官は多く其省の人を任用し、『浙江人は浙江を治め』『江蘇人は江蘇を治む』と云ふ輿論が日一日と高まり、隨て各省の收入は當然其の省の經費に充てらるべく抑留さるゝに至つたのである。故に民國元年二年の二ケ年度に於ける中央財政は頗る窮境に陷り、外債を借りて彌縫の策を講ぜざるべからざる立至つた。雜に於て民國二年に至り、舊來の税源を中央税と地方税に區分し、兩者の限界を明確にして、互に混淆せしめないことを主とする議論が生じて來た。之れが民國二年の國家地方税法草案の出來である。併し實際に就て之を見るに、此の種の税法は到底施行し能はざるものである。何となれば一切の重要なる税源は盡く國家税に編入され、地方に歸屬すべき所得は、唯幾種かの雜捐及び雜税に過ぎないことに成るからである。地方の税所得が斯くの如く微薄なるに於ては、地方自治は發展の見込が無い。地方自治の潮流澎湃たる今日、此の種の區分が失敗に終るべきは、夙に推測せられたものである。民國十二年に至り憲法が成立し、中央税と地方税に對し、始めて、適切なる規定が設けられ、民國二年の草案とは大に其の趣きを異にするに至つた。その區分法は次の如くである。

甲、國家税に歸すべきもの

(1)關税 (2)鹽税 (3)印紙税 (4)煙酒税 (5)其の他の消費税 (6)税率が全國に同一に行はるべき租税

乙、地方に歸すべきもの

(1)田賦 (2)契税 (3)其の他の省税

之を要するに、國家税に歸すべきものは間接税を主とし、税率が全國に劃一に行はるべき租税を以て之が補助とした。例へば營業税の如きは直接税であるが、之を大會社から徴收する場合に、其の分支店は遍く各地方に設置されて居るから、課税は單に一二省のみの所得に歸せしめる事も出來なければ、亦重複を免れる爲に各省等しく之を課する事も出來得ないから、斯る營業税は國家税中に編入するが正當である。併し各省に於ける小規模の營業例へば牙行(仲買業)や質舖などは、其の營業範圍が省外に出ないから、之に課すべき營業税は、當然其の省の收入に歸すべきである。

地方に歸すべきものとしては、直接税なる田賦及び行爲税た

る契税を主とし、雜項税捐及び附加税並に其他の收入を以て之が補助とした。田賦は中國の收入の大部分を占めるものであつて、若し適當の方法を講じて之を整頓したならば歳入は大に增加されるに相違ないが、田賦の整理には土地の整理を先決問題とするから、若し田賦を國家税としたならば、國家は地方の實情に暗く、且つその事業が地方と直接關係を生じない爲めに、到底整理の效果を收める時が無いであらう。然るに若し之を地方の所得に歸するとせんか。其の利害は地方自身に直接關係することになり。增收された税額は其の地方の事業を辨じ得るに至るから、土地整理を困難ならしめる種々の弊害も、漸次之を除去するに難くないのである。次に契税なるものは多く地契から徴收せられるもので、田賦が既に地方税となつた以上、田契の納める税も當然地方税となすべきものである。併し此の税は極めて少額であるから、左程重要な關係を持つて居ない。

清朝時代の舊制では、地方收入は主として附加税であつて、即ち正税を國家税とし附加税を地方税としたものである。例へば江蘇省の田賦に就て見るに、之を地丁、屯租、漕糧、屯米の四種に分ち、地町の正税は國家税であつて、正税一兩(テール)（一圓五十錢）を課する毎に其の六分の一に當る二十五錢の附加税を加へた。屯租の場合に於ても其の附加税は之と同様であつた。漕糧及び屯米の國家に歸入すべき正税は一石に就き三圓であつて、これに省の附加が一圓、縣の附加税が一圓づゝ課せられたので、附加税率は孰れも國家税の三分の一に相當したものである。民國十二年の憲法では附加税に對しては何等說き及んで居らず、恰も其の存在を許さないかに見られるが、併し舊制に依る地方收入は全然附加税に賴つたもので、その用途は多く地方の教育及び公益事業に向けられたのであるから、若しこの附加税全部を削除したならば、地方自治は一層その發展を困難ならしめるに至るであらう。況して憲法は附加税に對して明白に之を認容して居ないけれども、亦之を禁止する明文も無いから、舊制に於ける附加税を正税と見做したならば、憲法にも抵觸せず、實際上にも支障を來さないで、兩全の策として寧ろ斯くするに如かずと考へられるのである。或は言はん、附加税は一種の二重課税であるから、憲法第二十七條の規定に違反すると。併し附加税は盛んに佛蘭西に行はれ、佛國の地方税は多く附加税に依つて充當されて居るに係らず、未だ嘗て二重課税なるが故に排斥されたこと有るを聞かない。

今日憲法擁護派の勢力は、約法擁護派より盛な樣であるから、憲法の恢復は必然的の事と思はれる。其實施の時期は未定であるけれども、國家財政と地方財政の分配は、既に約法時代

よりは遙に勝つてゐるのである。併しこの兩者限界の劃定を實行せんとするには、憲法を實施しなければならない。憲法を實施せんとするには、財政整理をしなければならない。財政を整理せんとするには、第一に軍費を緊縮しなければならない。茲に江蘇湖北兩省の國家收支と地方收支とを擧げて、その關係を說明して見よう。

江蘇は中國に於て最も富める省である。其の國家收入の實收數を見るに、民國五年より十年までの間に、毎年多きは一千八百幾十萬圓から、少きも一千五百幾十萬圓を下らない。此の額の中には、八百萬圓前後の田賦と、九十萬圓前後の契稅とを含んで居る。今若し之を地方に歸入すれば、該省の國家收入は減じて七八百萬圓前後となり、而して軍事、外交、內務、財政、教育、司法、農商等に要する各種經費は、合計已に一千百五十萬圓の巨額に上るから、之を收入に比較して著しき超過である。況んや軍備の一項に就ては、憲法第二十三條第四項に規定せる『國家ノ軍備費ハ歲出ノ四分ノ一ヲ越ユルコトヲ得ズ。但シ對外戰爭ノ場合ハ此ノ限リニ非ズ。』の條項に照して削減せるものであるから、若し此の標準に從つて削減し得ないとしたならば、歲出額は尙之に止まらないのである。

湖北省に就て見るに、その民國十一年度の國家歲入は四百三十萬圓前後に過ぎないが、其の國家歲出は八百十五萬圓の巨額に達し、差引歲入不足は三百八十五萬圓であつた。歲出中の軍費の一項のみでも六百四十八萬圓の多額を占め、(これは實際の支出額で憲法第二十三條第四項の規定に照して削減されたものではない。)歲入に比較して已に二百十八萬圓を超過して居る。其他の外交、內務、財政、司法、教育等の各種經費に至つては、全然之を支出すべき財源が無い。之を以て見るも憲法が果して實施し得るや否や、又實施の曉果して効果を擧げ得るや否やは、一に軍費が果して削減し得るや否やを以て其の標準とたすべきことが明かである。若し削減が爲し得るとすれば、其の不足額は別に稅源を求めて之を塡補するに難くない。關稅自主權の回收、煙酒稅の整頓、鹽稅の改良、及び各種新稅の施行(營業稅所得稅遺産稅の如きもの)等は、皆國家歲入の不足を補ひ得るものである。憲法第二十九條に『國家豫算ノ不足、或ハ財政ノ緊急處分ハ、國會ノ議決ヲ經テ、各省ノ歲入額ニ比例シ累進率ヲ以テ其負擔ヲ分配スルヲ得』と規定したのは、國家豫算の不足は地方よりの供給を仰ぎ得ることにしたのであつて、歷史的根據を持つたものではあるが、吾人は之に贊同を表し難い。これは啻に地方の歲入を侵蝕するばかりでなく、更に地方の財政を擾亂するものである。蓋し各省の豫算が既に編成を経

る契税を主とし、雜項税捐及び附加税並に其他の收入を以て之が補助とした。田賦は中國の收入の大部分を占めるものであつて、若し適當の方法を講じて之を整頓したならば歳入は大に增加されるに相違ないが、田賦の整理には土地の整理を先決問題とするから、若し田賦を國家税としたならば、國家は地方の實情に暗く、且つその事業が地方と直接關係を生じない爲めに、到底整理の效果を收める時が無いであらう。然るに若し之を地方の所得に歸するとせんか。其の利害は地方自身に直接關係することになり。增收された税額は其の地方の事業を辨じ得るに至るから、土地整理を困難ならしめる種々の弊害も、漸次之を除去するに難くないのである。次に契税なるものは多く地契から徴收せられるもので、田賦が既に地方税となつた以上、田契の納める税も當然地方税となすべきものである。併し此の税は極めて少額であるから、左程重要な關係を持つて居ない。

淸朝時代の舊制では、地方收入は主として附加税であつて、即ち正税を國家税とし附加税を地方税としたものである。例へば江蘇省の田賦に就て見るに、之を地丁、屯租、漕糧、屯米の四種に分ち、地丁の正税は國家税であつて、正税一兩(テール)（一圓五十錢）を課する毎に其の六分の一に當る二十五錢の附加税を加へた。屯租の場合に於ても其の附加税は之と同様であつた。漕糧及び屯米の國家に歸入すべき正税は一石に就き三圓であつて、これに省の附加が一圓、縣の附加税が一圓づゝ課せられたので、附加税率は孰れも國家税の三分の一に相當したものである。民國十二年の憲法では附加税に對しては何等説き及んで居らず、恰も其の存在を許さないかに見られるが、併し舊制に依る地方收入は全然附加税に賴つたもので、その用途は多く地方の教育及び公益事業に向けられたのであるから、若しこの附加税全部を削除したならば、地方自治は一層その發展を困難ならしめるに至るであらう。況して憲法は附加税に對して明白に之を認容して居ないけれども、亦之を禁止する明文も無いから、舊制に於ける附加税を正税と見做したならば、憲法にも抵觸せず、實際上にも支障を來さないで、兩全の策として寧ろ斯くするに如かずと考へられるのである。或は言はん、附加税は一種の二重課税であるから、憲法第二十七條の規定に違反すると。併し附加税は盛んに佛蘭西に行はれ、佛國の地方税は多く附加税に依つて充當されて居るに係らず、未だ嘗て二重課税なるが故に排斥されたこと有るを聞かない。

今日憲法擁護派の勢力は、約法擁護派より盛な様であるから、憲法の恢復は必然的の事と思はれる。其實施の時期は未定であるけれども、國家財政と地方財政の分配は、既に約法時代

よりは遙に勝つてゐるのである。併しこの兩者限界の劃定を實行せんとするには、憲法を實施しなければならない。憲法を實施せんとするには、財政整理をしなければならない。財政を整理せんとするには、第一に軍費を緊縮しなければならない。玆に江蘇湖北兩省の國家收支と地方收支とを擧げて、その關係を說明して見よう。

江蘇は中國に於て最も富める省である。其の國家收入の實收數を見るに、民國五年より十年までの間に、每年多きは一千八百幾十萬圓から、少きも一千五百幾十萬圓を下らない。此の額の中には、八百萬圓前後の田賦と、九十萬圓前後の契稅とを含んで居る。今若し之を地方に歸入すれば、該省の國家收入は減じて七八百萬圓前後となり、而して軍事、外交、內務、財政、教育、司法、農商等に要する各種經費は、合計已に一千百五十萬圓の巨額に上るから、之を收入に比較して著しき超過である。況んや軍備の一項に就ては、憲法第三十三條第四項に規定せる『國家ノ軍備費ハ歲出ノ四分ノ一ヲ超ユルコトヲ得ズ。但シ對外戰爭ノ場合ハ此ノ限リニ非ズ。』の條項に照して加減せるものであるから、若し此の標準に從つて削減し得ないとしたならば、歲出額は尙之に止まらないのである。

湖北省に就て見るに、その民國十一年度の國家歲入は四百三十萬圓前後に過ぎないが、其の國家歲出は八百十五萬圓の巨額に達し、差引歲入不足は三百八十五萬圓であつた。歲出中の軍費の一項のみでも六百四十八萬圓の多額を占め、（これは實際の支出額で憲法第三十二條第四項の規定に照して削減されたものではない。）歲入に比較して已に二百十八萬圓を超過して居る。其他の外交、內務、財政、司法、教育等の各種經費に至つては、全然之を支出すべき財源が無い。之を以て見るも憲法が果して實施し得るや否や、又實施の曉果して効果を擧げ得るや否やは、一に軍費が果して削減し得るや否やを以て其の標準となすべきことが明かである。若し削減が爲し得るとすれば、其の不足額は別に稅源を求めて之を塡補するに難くない。關稅自主權の回收、煙酒稅の整頓、鹽稅の改良、及び各種新稅の施行（營業稅所得稅遺產稅の如きもの）等は、皆國家歲入の不足を補ひ得るものである。憲法第二十九條に『國家豫算ノ不足、或ハ財政ノ緊急處分ハ、國會ノ議決ヲ經テ、各省ノ歲入額ニ比例シ累進率ヲ以テ其負擔ヲ分配スルヲ得』と規定したのは、國家豫算の不足は地方よりの供給を仰ぎ得ることにしたのであつて、歷史的根據を持つたものではあるが、吾人は之に贊同を表し難い。これは啻に地方の歲入を侵蝕するばかりでなく、更に地方の財政を擾亂するものである。蓋し各省の豫算が既に編成を經

つた後、國家が始めて歳入の不足を發見して其を分擔させるといふのは、これ各省の豫算を擾亂させるものでなくて何であらうか。

地方の收支の狀況に就て見るに、民國十年度江蘇一省の田賦（地丁漕糧並に租課）は六、三八四、四四〇圓、契稅は九〇七、一四九圓、合計七、二九一、五八九圓の收入に對し、支出の方面は內務、財政、敎育、實業の四項に亘つて、合計三、五七〇、八九〇圓であつて、差引收入は支出を超過すること三百七十二萬餘圓となつて居る。一見すれば地方財政が餘裕ある樣であるが、更に進んで考案すると、省自治の下には尙縣の自治があり、而して縣の經費も亦必ず同一目的物（田地）から取るのである。故に憲法第百二十九條には『省稅ト縣稅ノ區分ハ省議會ノ議決ニ依ル』とあり、又同第百二十八條第三項には『縣ハ負擔セル省稅總額ニ就キ保留權アリ。但シ總額ノ十分ノ四ヲ越エルコトヲ得ズ』と規定されて居る。之に依つても縣の經費が亦田賦契稅から仰ぐものなる事が分る。今日江蘇省の田賦契稅は約八百萬圓前後であるが（舊制に依る省附加稅と縣附加稅を合算する）其十分の四たる約三百二十萬圓を差引いても、尙四百八十萬圓內外の剩餘金は省自治經費の用に充てられるのである。憲法の規定に依ると、各省の最高級長官は省務院長であるが、現在に於ては未だ法定の省務院が成立して居ないから、各省の軍民長官は矢張り中央の任命に依るものであり、從つて省長督理署の經費は尙國家豫算中に編入されて居るが、將來省務院成立の曉には、此項の負擔は必ず省に移されることに成るから、省豫算案中の支出は增加するとも減少することは無い。これは將來の狀況であるが、現在に於て各省軍民長官は中央から任命されて居る以上、省の財政に就ては支配の全權を握つて居り、あらゆる法定軍費の超過せる場合、之を該省人民の負擔に移すことは、言を待たぬ所である。斯くて省財政は各方面からの制御を受けて、到底剩餘の餘地無きに至るのである。

財源を區分するには、先づ國內の情況を考察すべきは勿論であるが、尙各國の前例をも明にせねばならぬ。佛蘭西は中央集權制を行ひ、如何なる種類の地方稅を問はず、國會通過の手續を取らずには課稅することが出來ない。地方稅の稅率は尙更法律の制限を受け、任意に增加することは許されないが、其の稅源は國家正稅上の附加稅に外ならない。日本の地方財政も亦中央集權制を取つてゐる。獨逸は帝政を顚覆し共和制を建設して後、財政制度も昔日と異り、中央集權の範圍は日本や佛蘭西と比較してもつと廣くなつた。中國は領土廣大であつて、中央集權制は適當しない樣に思はれる。袁世凱在政當時は武力を恃ん

で、日佛兩國の財政制度に倣ひ、中央集權の政策を行つたが、武力の衰へるに及んで、地方の各省は紛々として國家費を停滯し、停滯するのみならず之を横領するに至つた。加之中央集權を行ふには、中央の實力を擴充する必要があるので、全國の軍隊は多く中央の直轄に移されたが、袁氏の死後に至り、各省は之に口實を借り爭つて中央の税款を抑留するに至つた。即ち集中せんとして反つて分散し、整理せんとして反つて紊亂するの結果となつた。かるが故に、日佛獨三國の中央集權制は中國の採用すべからざるものである。米國に至つては、その制度佛獨二國と大に異つて聯邦共和國である。その行政權は各州から賦與されたものであるから、聯邦政府は各州の行政に干渉することが出來ない。爲めに各州は殆んど半獨立國を形成してゐるのである。州には州税があつて中央に統屬されることなく、國税と截然區別せられて居る。州の中にも亦州政府と地方政府との區分があつて、州政府と地方政府との財政關係は、一部分は區分的であり、一部分は共有的である。併し米國の地方自治は極端に走り、殆んど無政府の狀態であつて、これも亦中國の模倣すべきものでない。されば最もよく吾人に規範を供するに足るものは英國ではあるまいか。英國の制度は日佛獨三國の集權制と米國の分權制の間に介在し、その長を取り短を舍てた觀がある。故に一面には地方に自治を與へて其の發展を充分ならしめると同時に、他面には行政上の監督を施して以て同一軌道上に在らしめるのである。且つ英國の財政は、中國憲法中に規定せる地方財政と、頗る類似の點を持つてゐる。英國の地方財源は次の三つである。

(一) 地方税。即ち不動産税であつて、Rates と稱せられ、中國の地方税に歸屬すべき田賦と同じものである。

(二) 中央政府が代つて徴收し之を地方に分與するもので、消費税 excise の如きもの。これは中國の將來の厘金、即ち各省の厘金税を撤廢した後、海關附加税の一部分を國家から各省に補給せられるものに同じものである。

(三) 國家補助金。Contributions。これは中國の各省から中央に請求する補助費と同じものである。併し中國憲法第二十九條の規定を見るに、國家豫算が不足の時にも亦反對に各省に向つて補助を要求し得ることに成つてゐるが、英國には斯る辦法の無い點が異るのである。中國の中央政府には元來固有の財源が無く、軍事政治の各費用は總て各省の分擔に依るものであるから、憲法第二十九條の規定は歴史上の習慣に基いたもので、深く非難すべきものでない。まして中央には本來政府自身の收入となるべきものが無いから、巨額の軍費が減縮出來ない以前に於ては、軍費が憲法の規定額に減縮される迄の期限を條件として、各省に分擔させるより外に方法がないのであらうと思はれる。

つた後、國家が始めて歳入の不足を發見して其を分擔させるといふのは、これ各省の豫算を擾亂させるものでなくて何であらうか。

地方の收支の狀況に就て見るに、民國十年度江蘇一省の田賦（地丁漕糧並に租課）は六、三八四、四四〇圓、契稅は九〇七、一四九圓、合計七、二九一、五八九圓の收入に對し、支出の方面は內務、財政、敎育、實業の四項に亘つて、合計三、五七〇、八九〇圓であつて、差引收入は支出を超過すること三百七十二萬餘圓となつて居る。一見すれば地方財政が餘裕ある樣であるが、更に進んで考案すると、省自治の下には尙縣の自治があり、而して縣の經費も亦必ず同一目的物（田地）から取るのである。故に憲法第百二十九條には『省稅ト縣稅ノ區分ハ省議會ノ議決ニ依ル』とあり、又同第百二十八條第三項には『縣ハ負擔セル省稅總額ニ就キ保留權アリ。但シ總額ノ十分ノ四ヲ越エルコトヲ得ズ』と規定されて居る。之に依つても縣の經費が亦田賦契稅から仰ぐものなる事が分る。今日江蘇省の田賦契稅は約八百萬圓前後であるが（舊制に依る省附加稅と縣附加稅を合算する）其十分の四たる約三百二十萬圓を差引いても、尙四百八十萬圓內外の剩餘金は省自治經費の用に充てられるのである。憲法の規定に依ると、各省の最高級長官は省務院長であるが、現在に於ては未だ法定の省務院が成立して居ないから、各省の軍民長官は矢張り中央の任命に依るものであり、從つて省長督理署の經費は尙國家豫算中に編入されて居るが、將來省務院成立の曉には、此項の負擔は必ず省に移されることに成るから、省豫算案中の支出は增加するとも減少することは無い。これは將來の狀況であるが、現在に於て各省軍民長官は中央から任命されて居る以上、省の財政に就ては支配の全權を握つて居り、あらゆる法定軍費の超過せる場合、之を該省人民の負擔に移すことは、言を待たぬ所である。斯くて省財政は各方面からの剝削を受けて、到底剩餘の餘地無きに至るのである。

財源を區分するには、先づ國內の情況を考察すべきは勿論であるが、尙各國の前例をも明にせねばならぬ。佛蘭西は中央集權制を行ひ、如何なる種類の地方稅を問はず、國會通過の手續を取らずには課稅することが出來ない。地方稅の稅率は尙更法律の制限を受け、任意に增加することは許されないが、其の稅源は國家正稅上の附加稅に外ならない。日本の地方財政も亦中央集權制を取つてゐる。獨逸は帝政を顚覆し共和制を建設して後、財政制度も昔日と異り、中央集權の範圍は日本や佛蘭西と比較してもつと廣くなつた。中國は領土廣大であつて、中央集權制は適當しない樣に思はれる。袁世凱在政當時は武力を恃ん

で、日佛兩國の財政制度に倣ひ、中央集權の政策を行つたが、武力の衰へるに及んで、地方の各省は紛々として國家費を停滯し、停滯するのみならず之を横領するに至つた。加之中央集權を行ふには、中央の實力を擴充する必要があるので、全國の軍隊は多く中央の直轄に移されたが、袁氏の死後に至り、各省は之に口實を借り爭つて中央の稅款を扣留するに至つた。即ち集中せんとして反つて分散し、整理せんとして反つて紊亂するの結果となつた。かるが故に、日佛獨三國の中央集權制は中國の採用すべからざるものである。米國に至つては、その制度佛獨二國と大に異つて聯邦共和國である。その行政權は各州から賦與されたものであるから、聯邦政府は各州の行政に干涉することが出來ない。爲めに各州は殆んど半獨立國を形成してゐるのである。州には州稅があつて中央に統屬されることなく、國稅と截然區別せられて居る。州の中にも亦州政府と地方政府との區分があつて、州政府と地方政府との財政關係は、一部分は區分的であり、一部分は共有的である。併し米國の地方自治は極端に走り、殆んど無政府の狀態であつて、これも亦中國の模倣すべきものでない。されば最もよく吾人に規範を供するに足るものは英國ではあるまいか。英國の制度は日佛獨三國の集權制と米國の分權制の間に介在し、その長を取り短を舍てた觀がある。故に一面には地方に自治を與へて其の發展を充分ならしめると同時に、他面には行政上の監督を施して以て同一軌道上に在らしめるのである。且つ英國の財政は、中國憲法中に規定せる地方財政と、頗る類似の點を持つてゐる。英國の地方財源は次の三つである。

（一）地方稅。即ち不動產稅であつて、Rates と稱せられ、中國の地方稅に歸屬すべき田賦と同じものである。

（二）中央政府が代つて徵收し之を地方に分與するもので、消費稅 excise の如きもの。これは中國の將來の厘金、即ち各省の厘金稅を撤廢した後、海關附加稅の一部分を國家から各省に補給せられるものに同じものである。

（三）國家補助金。Contributions。これは中國の各省から中央に請求する補助費と同じものである。併し中國憲法第二十九條の規定を見るに、國家豫算が不足の時にも亦反對に各省に向つて補助を要求し得ることに成つてゐるが、英國には斯る辦法の無い點が異るのである。中國の中央政府には元來固有の財源が無く、軍事政治の各費用は總て各省の分擔に依るものであるから、憲法第二十九條の規定は歷史上の習慣に基いたもので、深く非難すべきものでない。まして中央には本來政府自身の收入となるべきものが無いから、巨額の軍費が減縮出來ない以前に於ては、軍費が憲法の規定額に減縮される迄の期限を條件として、各省に分擔させるより外に方法がないのであらうと思はれる。

中國女子の覺醒

陳望道

中國の女子は夙に覺醒すべきであつた。足がせよりも酷き纏足の體刑、閨房若くは家庭を以て監獄とする終身的禁錮、何れも他國よりは餘計女子自身及びその兄弟達をして覺醒せしむる機會があつた筈である。然るにも拘はらず、やはり最近に至つて始めて覺醒の聲を聽くを得たゞけである。以前に於いても、例へば白居易の詩に於ける如く、吳敬梓の小說に於ける如く、相當の反抗がないではなかつた——中には非常に猛烈に且滑稽的に反抗するものもあつた。例へば李汝珍が鏡花緣と云ふ小說の中に於いて、男子をして纏足させ、女袴を穿かせ、耳環を垂らせて、家庭に蟄居させた。所謂矯揉造作的描寫を以つて、人をして既に慣れて自然になつたその矯揉造作の如何に馬鹿らしきかを覺らしめんとしたのである。しかしこう云ふ反射性的覺醒も、實は惡夢醒め際の狂喊若くはとぼけ言と異なることなく、古人を以て今人を嚇かす習慣ある文化政客の外は、直ちに以つて何程かの正氣の聲と見ることが出來ないだらう。

第一次の覺醒現象は、民國元年（一九一二年）前後に發生したものと見ることが出來る。天賦人權說はあの時に非常に流行して居た。女子にして革命事業に身を委ねたものが隨分あつた。現に浙江西湖畔で秋社を立てられた女俠秋瑾の如きは、革命運動の爲に殺害された位である。吾々の民國が南京に於いて成立を宣せられた時には、女子にして軍隊を組織して革命の未だ完成せざる業を完成せんとしたものが殊に多かつた。女子北伐隊、女子軍事團等と云ふもの〻消息が新聞紙上に現はれない日とては殆んどなかつた位である。私は當時曾てあゝ云ふ悲壯的美に引き付けられて、態々觀光の爲に浙江東部の僻地から南京に馳せ行つたことがある。所謂女子從軍と云ふものは當時の悲壯的情調の一特徵であつたから、また二三の友人を語らつて誠をこめて訪問に行つた。當時のことは今大概忘れたが、未だ忘れないのは、只だ次の如き事だけである、即ち所謂女子北伐隊と云ふものが確に南洋勸業場の舊址にあつて、正門は閉され、右側

の片扉の出入口の傍に、某軍司令部の長片の張紙があつた。その張紙に『妄りに入るもの斬に處すべし』と書いてあつたので、非常に嚇かされた。幸に同行の中一人の軍官があつて、入つても構はないと云つたから、とう／＼妄りに入つて仕舞つた。妄りに入つて見れば、果して既に幾人かの妄りに入つたものがあつて、彼の女等の『平動臂』『左右動臂』等の遊びごつこの如き柔軟體操を見て居た。あの柔軟の中に果して幾パーセントの英姿があつたであらうか？ 若し眞に誠をこめて英姿を仰ぎ見に妄りに入つたものを斬に處するものならば、それこそ寃の至りであらう！

この度の覺醒の特徴は、一歩々々男子との同等若くは平等を求むるにあつた、男子從軍すれば自分も從軍し、男子參政すれば自分も參政する。しかしてその平等說も、また大方天賦人權等の爛熟せる概念を前提としたものであつて、決して事實に基づいての研究を積んだ内容のあるものではなかつた。喩に云つて見れば、あの時の女子の努力は宛も小供が凧を放つ如く、只管眼を凧に付け、脚もとの山高水低を少しも顧みずして走り廻つた樣なものであつた。だから足を誤つて水溜に落ちさるを得なかつた。それ以來、只だに民國元年三月男女平等を約法に規定すべきことを爭ふ爲に參議を襲撃したあの樣な勇氣が消え失せたのみならず、口先の平等論もまた漸を逐うて聞くを得ざるに至つた。是に於いて、中國女子の第一次の覺醒運動が正式に終を告げたのではなかつたけれども、事實に於いては沈靜に歸したのである。

一時の沈靜を經て、民國八年（一九一九年）に至つてまた第二次に起つた。この度の運動の性質は第一次のと全然異つて居ると云ふことが出來る。しかし或る意義に於いては、また全然第一次の運動の繼續と云ふことも出來る。この時の風氣は、殆んど全部彼の女等をして足を誤らしめた根原を搜すにあつた、彼の女等は足もとを注意し、妨げになる所の地上の荊棘を出來る丈除かうとするに至つた。だからその運動の表現は、舊宗教、舊學問、舊藝術、舊政治、舊習慣、舊道德等を悉く破壞するにあつた。唐の詩人白居易が婦人苦の中に於いて、

『人言ふ夫婦親しく、義合一身の如しと、死生の際に至るに及び、何ぞ曾て苦樂を均しうせる？婦人一たび夫を喪はゞ、終身孤子を守る。林中の竹の如き有りて忽ちにして風に吹き折らるれば重ねて生えず、枯れ死するも猶ほ節を抱く、男子若し婦を喪はゞ、暫らくは情を傷まさるを能はざらんも、應に門前の柳に似て、春に逢へば易く發榮すべく、風吹いて一枚を折らば、還た一枚生えるあり。……』

中國女子の覺醒

陳望道

「中國の女子は夙に覺醒すべきであつた。足がせよりも酷き纒足の體刑、閨房若くは家庭を以て監獄とする終身的禁錮、何れも他國よりは餘計女子自身及びその兄弟達をして覺醒せしむる機會があつた筈である。然るにも拘はらず、やはり最近に至つて始めて覺醒の聲を聽くを得たゞけである。以前に於いても、例へば白居易の詩に於ける如く、吳敬梓の小說に於ける如く、相當の反抗がないではなかつた——中には非常に猛烈に且滑稽的に反抗するものもあつた。例へば李汝珍が鏡花緣と云ふ小說の中に於いて、男子をして纒足させ、女袴を穿かせ、耳環を垂らせて、家庭に蟄居させた。所謂矯揉造作的描寫を以つて、人をして既に慣れて自然になつたその矯揉造作の如何に馬鹿らしきかを覺らしめんとしたのである。しかしこう云ふ反射性的覺醒も、實は噩夢醒め際の狂喊若くはとぼけ言と異なることなく、古人を以て今人を嚇かす習慣ある文化政客の外は、直ちに以つて何程かの正氣の聲と見ることが出來ないだらう。

第一次の覺醒現象は、民國元年（一九一二年）前後に發生したものと見ることが出來る。天賦人權說はあの時に非常に流行して居た。女子にして革命事業に身を委ねたものが隨分あつた。現に浙江西湖畔で秋社を立てられた女俠秋瑾の如きは、革命運動の爲に殺害された位である。吾々の民國が南京に於いて成立を宣せられた時には、女子にして軍隊を組織して革命の未だ完成せざる業を完成せんとしたものが殊に多かつた。女子北伐隊、女子軍事團等と云ふものゝ消息が新聞紙上に現はれない日とては殆んどなかつた位である。私は當時曾てあゝ云ふ悲壯的美に引き付けられて、態々觀光の爲に浙江東部の僻地から南京に馳せ行つたことがある。所謂女子從軍と云ふものは當時の悲壯的情調の一特徵であつたから、また二三の友人を語らつて誠をこめて訪問に行つた。當時のことは今大概忘れたが、未だ忘れないのは、只だ次の如き事だけである、即ち所謂女子北伐隊と云ふものが確に南洋勸業場の舊址にあつて、正門は閉され、右側

の片扉の出入口の傍に、某軍司令部の長片の張紙があつた。その張紙に『妄りに入るもの斬に處すべし』と書いてあつたので、非常に嚇かされた。幸に同行の中一人の軍官があつて、入つても構はないと云つたから、とう〳〵妄りに入つて仕舞つた。妄りに入つて見れば、果して既に幾人かの妄りに入つたものがあつて、彼の女等の『平動背』『左右動背』等の遊びごつこの如き柔軟體操を見て居た。あの柔軟の中に果して幾パーセントの英姿があつたであらうか？ 若し眞に誠をこめて英姿を仰ぎ見に妄りに入つたものを斬に處するものならば、これこそ寃の至りであらう！

この度の覺醒の特徴は、一歩々々男子との同等若くは平等を求むるにあつた、男子從軍すれば自分も從軍し、男子參政すれば自分も參政する。しかしてその平等說も、また大方天賦人權等の爛熟せる概念を前提としたものであつて、決して事實に基づいての研究を積んだ内容のあるものではなかつた。喩に云つて見れば、あの時の女子の努力は宛も小供が凧を放つ如く、只管眼を凧に付け、脚もとの山高水低を少しも顧みずして走り廻つた樣なものであつた。だから足を誤つて水溜に落ちざるを得なかつた。それ以來、只だに民國元年三月男女平等を約法に規定すべきことを爭ふ爲に參議を襲撃したあの樣な勇氣が消え失せたのみならず、口先の平等論もまた漸を逐うて聞くを得ざるに至つた。是に於いて、中國女子の第一次の覺醒運動が正式に終を告げたのではなかつたけれども、事實に於いては沈靜に歸したのである。

一時の沈靜を經て、民國八年（一九一九年）に至つてまた第二次に起つた。この度の運動の性質は第一次のと全然異つて居ると云ふことが出來る。しかし或る意義に於いては、また全然第一次の運動の繼續と云ふことも出來る。この時の風氣は、殆んど全部彼の女等をして足を誤らしめた根原を搜すにあつた、彼の女等は足もとを注意し、妨げになる所の地上の荊棘を出來る丈除かうとするに至つた。だからその運動の表現は、舊宗教、舊學問、舊藝術、舊政治、舊習慣、舊道德等を悉く破壞するにあつた。唐の詩人白居易が婦人苦の中に於いて、

『人言ふ夫婦親しく、義合一身の如しと、死生の際に至るに及び、何ぞ曾て苦樂を均しうせる？婦人一たび夫を喪はゞ、終身孤子を守る。林中の竹の如き有りて忽ちにして風に吹き折らるれば重ねて生えず、枯れ死するも猶ほ節を抱く、男子若し婦を喪はゞ、暫らくは情を傷まざるを能はざらんも、應に門前の柳に似て、春に逢へば易く發榮すべく、風吹いて一枚を折らば、還た一枚生えるあり。……』

ど指摘した如き所謂半身不遂の道德、習慣は、この時の共通の攻擊目標であつた。全國大中小學校によつて出版された、三四百種にも上つた定期及び不定期の刊行物は、殆んどこれらの道德及習慣に云ひ及ばないものはなかつた。イプセンの人形の家、幽靈等の如き偶像破壞に關する文藝も、この時に多く輸入された。苟くも自ら覺醒分子と稱するもの、女子たると男子たるとを問はず、一人としてこれらの文藝的及非文藝的——即ちこの時の所謂新文化的文字に目をさらし、心を留め、若くはそれを筆にし、口にしないものはなかつた。潮流に入つて游泳するもの〻數多き、有史以來未だ曾てこの度の如き例が多く見えなかつたであらう。

當時社會の表面に出て運動する女子が餘り數多くなかつたが、その實女子のその最善を盡して努力して居ない所とてはなかつた。殊に歷來の非に慣れて是となした女子の見解及態度を矯正する上に、時缺かさず注意するものが多かつた。當時女子を以て人中の裝飾品と見る觀念は、固より根本的に排除されたが女子の學問を以て裝飾品と見る觀念の誤りであることもまた根本的に覺られた。當時の女子界は截然として新舊兩界に分たれた。意志の薄弱なる虛榮に富んだる、奴隸性のある、……等の女子は、皆な舊式女子と名付けられ、自ら自己の一個の人間なることを知らず、單に他人の一種の物品——他人の娘、他人の妻、他人の母——であり、自主の一個の人間でない女子と評せられた。所謂人間と云ふべき女子は、只だ當時の所謂新式女子だけであつた。

今日既に上中下各階級に行き渡つた女子の剪髮運動もあの時に始めたものである。只だあの時は多くの人が聲を嗄らして人格の上より剪髮を唱へても、應じたものが實に寥々たるものであつた、しかもこの寥々たるものも單に女學生界に限られて居た。最近一二年來審美の上より剪髮を主張するものあるに至つて、始めて急速に普及し、奧樣方にまでも普及した。これによつて、大多數の女子の覺醒程度も知られると思ふ。且つ聞く所に——實にまた見る所に——よれば、あの時恥となして排斥した白粉及び胭脂を塗る習慣も今日また一部の女學生間に復活して來た。だから現在剪髮の流行は、こう云ふ部分の女子の間に於いては、正しく當時それを主張した意義と相反して居ると見ることが出來る。當時は冶容に反對する爲に、髮に及んで始めて剪髮の主張があつたのであるが、今こう云ふ部分の人の間では反つて冶容をする爲に剪髮を剪つたのである。今では剪髮は既に所謂新式の標識ではなくなり、宛も旗袍は滿洲女子の標識ではなく、西洋服は西洋人の標識ではないが如くである。只だ

耳環を垂らすこと　臙脂を塗ること等は　舊きものでこそ色を粉す手段として居るが、新しきもの丶間ではやはり耻として居る。

要するに、この第二次の覺醒は、當時にありては、思想の大より服裝の微に至るまで、凡て相當の反省を經て來たことが爭はれない。第一次の上滑りに較べては、少し誇大して云へば、實に雲泥の差があると云へる。只だ惜しむらくは經ること久からずして、次第に疲れの態が現はれたことを。所謂父兄に當るべき人々が未だ潮流の洗禮を受けて居なかつたから、覺醒せる靑年が餘程苦しまなければならなかつた。彼等は屢々父と爭ひ兄と爭はねばならず、家庭にあつて一日の歡樂も得られなかつたのである。何時かの夏に、私は浙江の上虞城を距る三十里の或る湖畔に避暑して居た。城中の女子數十人あつて女界同志會と云ふものを發起し、私があの湖畔に居るを聞いて、成立大會の日に講演に賴んで吳れた。會場の中には會員として靑年女子約四十人、來賓として靑年男子約三十人、外に年寄も數人來賓席に列らなつて居た。聞けばこれの年寄は、農會長、商會長、教育會長等であつた。私が演説して『從來の男子間のこう云ふ不平等は實に不合理である』と云ふに至つた時、これらの年寄來賓中につひに舊式の扇を腰掛の上に打付けて、『當前だ』と怒鳴つたものがあつた。私は構はずに續けた。そうしたら、その怒鳴つた年寄は他の一人の年寄來賓を拉し出で、會場口で主席及び一記錄を呼び出し、彼の女等に退席することを命じ、以て集會を流會させようとした。呼び出された二人が彼の女等の父親の意を察し知り、構はずに主席々及記錄席に歸つた。そうしたら、その二人の年寄は勃然と怒つて曰く、『三綱五常までもなくなつた』また私を罵つて曰く、『何處から來た邪說か！官廳へ歸つて行け！』と。是に於いて、靑年男子が大に憤り、擧り出でゝ、罵り返し、殆んど毆り合ふ位になつた。年寄は多くカンテラを點し付けて電燈を恐れるのであるから、こう云ふ衝突は實に珍らしくないのである。

この頃、女子運動に付いては、只だ時折一聲二聲睡たさうな聲が聞えるだけである。眞に覺醒した女子の多くは、皆な專業修めに頭を埋めて居る。只だこの沈靜は民國八年以前の沈靜と同一ではない。或は帝國主義侵略の反抗運動に於いて、幾何かの有爲の女子が出るかも知れない。しかし何々香、何々芳、何々美、何々麗と云ふ樣な娛樂品たるを表はす一類の名前、及び何々貞何々淑と云ふ樣な私有品たるを表はす樣な名前が、また公然と復活して來た。甚しきに至つては、婦女運動者と自稱するものの中にも、こう云ふ名前を持つた婦女がある。これでは、民國八年前後に於ける運動の果して徒勞に終るのでないかと疑はれなければならぬ。

と指摘した如き所謂半身不遂の道徳、習慣は、この時の共通の攻撃目標であつた。全國大中小學校によつて出版された、三四百種にも上つた定期及び不定期の刊行物は、殆んどこれらの道徳及習慣に云ひ及ばないものはなかつた。イブセンの人形の家、幽霊等の如き偶像破壊に關する文藝も、この時に多く輸入された。苟くも自ら覺醒分子と稱するもの、女子たると男子たるとを問はず、一人としてこれらの文藝的及非文藝的——即ちこの時の所謂新文化的文字に目をさらし、心を留め、若くはそれを筆にし、口にしないものはなかつた。潮流に入つて游泳するもの〻數多き、有史以來未だ曾てこの度の如き例が多く見えなかつたであらう。

當時社會の表面に出て運動する女子が餘り數多くなかつたが、その實女子のその最善を盡して努力して居ない所とてはなかつた。殊に歴來の非に慣れて是となした女子の見解及態度を矯正する上に、時缺かさず注意するものが多かつた。當時女子を以て人中の装飾品と見る觀念は、固より根本的に排除されたが女子の學問を以て装飾品と見る觀念の誤りであることもまた根本的に覺られた。當時の女子界は截然として新舊兩界に分たれた。意志の薄弱なる虚榮に富んだる、奴隷性のある、……等の女子は、皆な舊式女子と名付けられ、自ら自己の一個の人間なることを知らず、單に他人の一種の物品——他人の娘、他人の妻、他人の母——であり、自主の一個の人間でない女子と評せられた。所謂人間と云ふべき女子は、只だ當時の所謂新式女子だけであつた。

今日既に上中下各階級に行き渡つた女子の剪髪運動もあの時に始めたものである。只だあの時は多くの人が聲を嗄らして人格の上より剪髪を唱へても、應じたものが實に寥々たるものであつた、しかもこの寥々たるものも單に女學生界に限られて居た。最近一二年來審美の上より剪髪を主張するものあるに至つて、始めて急速に普及し、奥様方にまでも普及した。これによつて、大多數の女子の覺醒程度も知られると思ふ。且つ聞く所に——實にまた見る所に——よれば、あの時耻となして排斥した白粉及び胭脂を塗る習慣も今日また一部の女學生間に復活して來た。だから現在剪髪の流行は、こう云ふ部分の女子の間に於いては、正しく當時それを主張した意義と相反して居ると見ることが出來る。當時は冶容に反對する爲に、髪に及んで始めて剪髪の主張があつたのであるが、今こう云ふ部分の人の間では反つて冶容をする爲に剪髪を剪つたのである。今では剪髪は既に所謂新式の標識ではなくなり、宛も旗袍は滿洲女子の標識ではなく、西洋服は西洋人の標識ではないが如くである。只だ

耳環を垂らすこと　胭脂を塗ること等は　舊きものでこそ色を均す手段として居るが、新しきもの丶間ではやはり此として居る。

要するに、この第二次の覺醒は、當時にありては、思想の大より服裝の微に至るまで、凡て相當の反省を經て來たことが爭はれない。第一次の上滑りに較べては、少し誇大して云へば、實に雲泥の差があると云へる。只だ惜しむらくは經ること久からずして、次第に疲れの態が現はれたことを。所謂父兄に當るべき人々が未だ潮流の洗禮を受けて居なかつたから、覺醒せる青年が餘程苦しまなければならなかつた。彼等は屡々父と爭ひ兄と爭はねばならず、家庭にあつて一日の歡樂も得られなかつたのである。何時かの夏に、私は浙江の上虞城を距る三十里の或る湖畔に避暑して居た。城中の女子數十人あつて女界同志會と云ふものを發起し、私があの湖畔に居るを聞いて、成立大會の日に講演に頼んで來れた。會場の中には會員として青年女子約四十人、來賓として青年男子約三十人、外に年寄も數人來賓席に列らなつて居た。聞けばこれの年寄は、農會長、商會長、教育會長等であつた。私が演說して『從來の男子間のこう云ふ不平等は實に不合理である』と云ふに至つた時、これらの年寄來賓中につひに舊式の扇を腰掛の上に打付けて、『當前だ』と怒鳴つたものがあつた。私は構はずに續けた。そうしたら、その怒鳴つた年寄は他の一人の年寄來賓を拉し出で、會場口で主席及び一記錄を呼び出し、彼の女等に退席することを命じ、以て集會を流會させようとした。呼び出された二人が彼の女等の父親の意を察し知り、構はずに主席々及記錄席に歸つた。そうしたら、その二人の年寄は勃然と怒つて曰く、『三綱五常までもなくなつた』また私を罵つて曰く、『何處から來た邪說か！官廳へ縛つて行け！』と。是に於いて、青年男子が大に憤り、擧り出でゝ、罵り返し、殆んど毆り合ふ位になつた。年寄は多くカンテラを點し付けて電燈を恐れるのであるから、こう云ふ衝突は實に珍らしくないのである。

この頃、女子運動に付いては、只だ時折一聲二聲睡たさうな聲が聞えるだけである。眞に覺醒した女子の多くは、皆な專業修めに頭を埋めて居る。只だこの沈靜は民國八年以前の沈靜と同一ではない。或は帝國主義侵略の反抗運動に於いて、幾何かの有爲の女子が出るかも知れない。しかし何々香、何々芳、何々美、何々麗と云ふ樣な娛樂品たるを表はす一類の名前、及び何々貞何々淑と云ふ樣な私有品たるを表はす樣な名前が、また公然と復活して來た。甚しきに至つては、婦女運動者と自稱するものの中にも、こう云ふ名前を持つた婦女がある。これでは、民國八年前後に於ける運動の果して徒勞に終るのでないかと疑はれなければならぬ。

新支那の青年運動と日本の立場

林　騤

一線の光明——過去は葬られた——新青年團體の出現及びかれ等の主張手段——改造に面せる新支那——日本と支那改造との關係及び日本人の今後とるべき方針

一　一線の光明

中華民國と云ふレパブリックの國家が誕生してから、最早十五年になつたが、この過去十五ケ年間は一日として平和な狀態を保つ事が出來ず、群雄の割據、戰亂の勃興到る處に發生して底止する時がなかつた。で、外國人は勿論支那人自身も一時はこの共和國はモウ助からぬものだらうと思つて頻りに歎聲を漏してやまなかつたのだ。

そこで熱心の人士は種々な救濟方策を出し、努めて將來の思想を輸入し、以て支那を救はうと企てた。あの有名な「五四運動」なる新文化運動は即、この思潮に應じて起つて來たものであつた。それが爲にはこれまで一般青年の知らなかつた、乃至は注意して居なかつたモノが、注意もし、流行もし出して來たが、然しながら同時に又非常に思想上の混亂を引起して來て、これまでの有形の病氣に加ふるに、無形の主義病とも云ふべき病氣が出來て遂に一般の青年をしてその適從すべき道の發見に苦しましめる。

時勢がこうなつて來ては、支那の青年もそれに應じて暫らくは岐路に迷はなければならなかつた。即、支那は眞に助からぬであろうか、それとも、或は一線の光明を認める事が出來るのであろうかの岐路に暫らく立たなければならなかつたのである。民國六七年頃の狀態は即、この彷徨狀を表して居つたのである。

が然し氣銳な支那青年は遂に暗黑の中から一線の光明を認めることが出來てそれによつて力つけられた。彼等は、自國の四千年の歴史を西洋のそれと對照して考へて見た。彼等は少くとも支那民族が平和的で、非侵略的であるのを發見した。秦の始皇の如き武功を貴ぶ皇帝でさへ「萬里の長城」の如き消極的な防禦工事を築き又、漢の武帝にしても匈奴を征伐したのは只だ「漢南に王庭をなからしめた」位に止まつたのに照して見れば分るのである。それから「周の太王等に至つては、一層無抵抗主義を取つたのではないか」。漢以下の朝代を見ても、何れも武力で外國を侵略して取つた例は殆どな

かつた。これによつて支那民族は如何に文化を尊び、武力を蔑して來たかが分るのである。詞を換へて云ふと、即、支那民族は民族性の然らしめる爲に、精神的文明が力を致し、物質的文明を輕ずる性分を持つて居るのであるが爲に、彼等獨特の歴史を作つて來たのである。それでかれら支那の青年は思つた『我々の民族は確かに固有の文化があるのだ。確かに西洋人の持つて居なかつた精神があるに違ひないのだ。我々の現に西洋人に及ばない物は、只だ科學的方法丈だがこれとしもそんなに學んで出來ない程六ケ敷しい物ではなかつた。國内の秩序さへ整つたら「十年生聚、十年教訓」と云ふ筆法でやつて二十年もあれば我々も物質的文明を誇る事が出來るのだ。そうして我々固有の精神的文明をさへ加味すれば、支那獨特の新しい文明となつて、世界の文明に貢獻することが出來るのだ、あの十五年來の紛亂は要するに改造を要求して居る社會の缺くべからざる現象で、改造にさへ力を盡せば、遲かれ早かれその内に國病が全癒するに違ひないのだ。』かれら支那の青年は、かくの如くして自國に對する確信を得て來た。かれらは、『五四運動』の時程、盲滅法に舶來品の模倣をしない樣になつた。彼等は舶來品を參考物として置く樣になつた。同時に彼等は十五年間の紛亂の原因に對しては、これは『辛亥革命』の改造が徹底的にやらなかつた爲だと結論した。又彼等は一社會の改造がそんなに容易に行くものではないと少くとも一定の長時間に渡る醞釀期の存在のあることを認識している、それによつて彼等は一線の光明を得ると同時に自分等青年の今後進むべき道を知るやうになつた。

予は『醒獅週報』の第一卷第十八號に『支那の國家抵抗及其の歩線』と云ふ題目の下に於いて、所謂西洋文明の本質を論じ上述の如き新青年の覺悟を道破して少なからず青年の同感を得たが、かれら青年は何故予のあの文に同感したかと云へば要するに上述の事が青年の心に等しく懷いて居るに他ならなかつたのである。

二　過去は葬られた

總て歴史を見ると改造に面せる國家の青年思想はいつも過去を葬らないものはなかつた。……………は確かに我々にいろ／＼な示唆を與へた。彼等ロシア青年は大革命が爆發するまでは所謂「虛無主義」が流行して居た。それによつて一切の過去のものを否認して仕舞つたが支那に於いても略ぼこの傾向がある樣に見えた。その中でモツトモ著しいのは過去の所謂る非革命的の政黨政策の葬送である。

第一革命後、一時雨後の春筍の如く政黨政派が起つた。今でも殘つて居るのを數ふれば、梁啓超達の率いて居る研究會や梁士詒達の引いて居る交通會や、又李根源章士釗達の主宰せる政學會や、又は知らぬ人のない安福會等がある。これらの政會は夫々系統こそあれ、又、夫々出來具合こそ異れ、一として非革命的でないものはなかつた。彼等は所謂妥協派で軍閥と妥協しては少し自分の勢力を張る

新支那の青年運動と日本の立場

林　騤

一線の光明――過去は葬られた――新青年團體の出現及びかれ等の主張手段――改造に面せる新支那――日本と支那改造との關係及び日本人の今後とるべき方針

一　一線の光明

中華民國と云ふレパブリックの國家が誕生してから、最早十五年になつたが、この過去十五ケ年間は一日として平和な狀態を保つ事が出來ず、群雄の割據、戰亂の勃興到る處に發生して底止する時がなかつた。で、外國人は勿論支那人自身も一時はこの共和國はモウ助からぬものだろうと思つて頻りに嘆聲を漏してやまなかつたのだ。

そこで熱心の人士は種々な救濟方策を出し、努めて新來の思想を輸入し、以て支那を救はうと企てた。あの有名な「五四運動」なる新文化運動は即、この思潮に應じて起つて來たものであつた。それが爲にはこれまで一般青年の知らなかつた、乃至は注意して居なかつたモノが、注意もし、流行もし出して來たが、然しながら同時に又非常に思想上の混亂を引起して來て、これまでの有形の病氣に加ふるに、無形の主義病とも云ふべき病氣が出來て遂に一般の青年をしてその適從すべき道の發見に苦しましめる。

時勢がこうなつて來ては、支那の青年もそれに應じて暫らくは岐路に迷はなければならなかつた。即、支那は眞に助からぬであろうか、それとも、或は一線の光明を認める事が出來るのであろうかの岐路に暫らく立たなければならなかつたのである。民國六七年頃の狀態は即、この彷徨狀を表して居つたのである。

が然し氣鋭な支那青年は遂に暗黑の中から一線の光明を認めるとが出來てそれによつて力つけられた。彼等は、自國の四千年の歷史を西洋のそれと對照して考へて見た。彼等は少くとも支那民族が平和的で、非侵略的であるのを發見した。秦の始皇の如き武功を貴ぶ皇帝でさへ「萬里の長城」の如き消極的な防禦工事を築き又、漢の武帝にしても匈奴を征伐したのは只だ「漢南に王庭をなからしめた」位に止まつたのに照して見れば分るのである。それから「周の太王等に至つては、一層無抵抗主義を取つたのではないか？。漢以下の朝代を見ても、何れも武力で外國を侵略して取つた例は殆どな

かつた。これによつて支那民族は如何に文化を尊び、武力を蔑して來たかが分るのである。詞を換へて云ふと、即、支那民族は民族性の然らしめる爲に、精神的文明が力を致し、物質的文明を輕ずる性分を持つて居るのであるが爲に、彼等獨特の歴史を作つて來たのである。それでかれら支那の青年は思つた『我々の民族は確かに固有の文化があるのだ。確かに西洋人の持つて居なかつた精神があるに違ひないのだ。我々の現に西洋人に及ばない物は、只だ科學的方法丈だがこれとしもそんなに學んで出來ない程六ケ敷しい物ではなかつた。國內の秩序さへ整つたら「十年生聚、十年教訓」と云ふ筆法でやつて二十年もあれば我々も物質的文明を誇る事が出來るのだ。そうして我々固有の精神的文明をさへ加味すれば、支那獨特の新しい文明となつて、世界の文明に貢獻するとが出來るのだ、あの十五年來の紛亂は要するに改造を要求して居る社會の缺くべからざる現象で、改造にさへ力を盡せば、遲かれ早かれその內に國病が全癒するに違ひないのだ。』かれら支那の青年は、かくの如くして自國に對する確信を得て來た。かれらは、『五四運動』の時程、盲滅法に舶來品の模倣をしない様になつた。彼等は舶來品を參考物として買く様になつた。同時に彼等は十五年間の紛亂の原因に對しては、これは『辛亥革命』の改造が徹底的にやらなかつた爲だと結論した。又彼等は一社會の改造がそんなに容易に行くものではないと少くとも一定の長時間に渡る醞釀期の存在のあることを認識している、それによつて彼等は一線の光明を得ると同時に自分等青年の今後進むべき道を知るやうになつた。

予は『醒獅週報』の第一卷第十八號に『支那の國家抵抗及其の步線』と云ふ題目の下に於いて、所謂西洋文明の本質を論じ上述の如き新青年の覺悟を道破して少なからず青年の同感を得たが、かれら青年は何故予のあの文に同感したかと云へば要するに上述の事が青年の心に等しく懷いて居るに他ならなかつたのである

二　過去は葬られた

總て歴史を見ると改造に面せる國家の青年思想はいつも過去を葬らないものはなかつた。…………は確かに我々にいろ〳〵な示唆を與へた。彼等ロシア青年は大革命が爆發するまでは所謂「虛無主義」が流行して居た。それによつて一切の過去のものを否認して仕舞つたが支那に於いても略ぼこの傾向がある様に見えた。その中でモツトモ著しいのは過去の所謂る非革命的の政黨政策の葬送である。

第一革命後、一時雨後の春筍の如く政黨政派が起つた。今でも殘つて居るのを數ふれば、梁啓超達の率いて居る研究會や梁啓士詒達の引いて居る交通會や、又李根源章士釗達の主宰せる政學會や、又は知らぬ人のない安福會等がある。これらの政會は夫々系統こそあれ、又、夫々出來具合こそ異れ、一として非革命的でないものはなかつた。彼等は所謂妥協派で軍閥と妥協しては少し自分の勢力を

ことを努めた。その惡いものになると軍閥と手を携へて軍閥の惡事をさへ助長するものも少くなかつた。而して軍閥と妥協するとが出來なければ、權謀術數を弄しては挑發離間をやつて漁翁の利を收めやうとした。

民國十五年來の動亂の後には一つも彼等の暗中飛躍がない時はなかつた。北に於いての「帝制運動」「復辟運動」「院の戰爭」「第一及第二の奉直戰」南方に於いての「孫陳の爭」乃至最近の戰爭等については彼等の內のどれかが屹度內幕で人形を繰つて居つたのである。

人民はすつかりかくの如き內戰に飽いて來た。人民の唯一の望む所は平和である。而して軍閥を排除しなければ一日たりとも平和を得る事が出來ないのだ。即軍閥を倒すとについては支那全國人の望む處で、しかも擧國一致して所謂る軍閥を仆すとに熱望して居るのだが、彼等政黨政會は着々として各々の軍閥を助けては戰亂を挑發するのだから、彼等が支那の政治に少しも誠意がないとをば一般の支那人に知られずには居られなかつた。

そこで、我々青年はどうして、彼等を葬らずに居られるでせうか？

かれら過去の政黨政會は、今はモハヤスッカリ青年に葬られた。梁啓超の如きものでも目下の處、只だその文章が旨い爲に時代青年の讀む處となつた丈でかれの言論がチットモ青年の行爲を左右するとが出來なかつたのに徵しても彼等過去の政黨政會が如何に青年に葬られたかが分るのであある。かれらは青年に葬られたのみならず又軍閥にも餘り信用されない樣になつた。

恐らく今度の新政治に對しては彼等過去のものは永久に過去のモノとして葬られて仕舞ふに異ひないでせうと思ふ。

三　新青年團體の出現及びかれらの主張手段

過去が葬られた以上、新青年は別の團體の下に集らなければならぬとも自明の理である。が、同時に新青年團體の要素とし生命とするものがなければならぬ。それは他ではない、只だ「革命的」である丈で充分である。即新青年團體は一つとして革命的團體でないものはない。彼等の目標は革命である。かれらの目論む處も革命である。かれらの軍閥排除に用ふる手段としても革命の外は認められなかつたのである。假へ革命の形式に關しては夫々多少の意見の不同があつても、革命でなければならぬと丈は皆一致して居るのである。だから新支那の青年運動を青年の革命運動と詞を換へて云つてもよい位である。これからこれ等革命團體に就いて少し述べやう。

第一に擧げなければならぬのは、孫文氏の發起になつて居る國民黨である。國民黨は所謂三民主義を旗印にしてあつて歷史も長いから黨員も從つて二三十萬を數へるとが出來る、確か支那切つての革命的大政黨と云はなければならぬ。現に廣東、廣西の如き好地盤もあり、學生軍と云ふ相當に有力な黨軍もあるから、一番有力な革命團體と云はなければならぬ。か國民黨の內には左派、右派又は左

派の左派、右派の右派黨があつてこれが爲に内訌の絶える時がなく、又た左右の調和についても、少からず苦心が入つた。右派の右派と云へば即馮自由馮君武達の北方軍閥と妥協して官吏にありつくものである。右派の右派は勿論反革命と云つてよいものでこれらのものも國民黨の名こそあれ、實の處モハヤ國民黨の精神がないからこれらを國民黨分に數へてもよいので現にかれら自身も黨内の各派に排斥されて居るのである。夫から右派の方は謝持居西鄒魯達のとでかれらは反革命ではないが、革命的遂行力については少くとも予の見た處では缺乏して居るのである。かれらは反共産を唱へて居るが、その内心は本當に主義上の反共産であるか、或は權力の爲の反共産であるかは頗る疑問がなければならぬ。次には左派のものでこれは「左派の左派」の共産黨を除いたものの凡てと云つてよい。かれらはこれまで共産黨との提携をして來て同時に非常に革命的精神に富んで居るものである。又國民黨中の實力派と云つてもよい位で殆ど實力の大部分はこの派の手中にある。蔣中正の如きはこの派の首領ではないかと予は認めて居るのである。將來革命事業は或はこの派によつて成功するかも知れぬが、殘念なことには國民黨の三民主義そのものは餘りものになつて居らぬ。特に民主主義黨の定義が曖昧で孫文氏自身の說によれば『民主主義は即社會主義で又共産主義と名付く。又即大同主義である。』處がこの民主主義なるものは予の意見によれば社會主義でもなく、共産主義でもない、只だ一つの社會政策であるに過ぎないのだ。彼はもし、民主主義は即社會政策であると云へば、誰でも何とも文句が云へないかも知れないがあゝ云ふ風に定義した爲に、少からず人々に疑念を與へた。それだから國民黨と共自身もこの民主主義については譯が分らなかつた。それから國民黨の革命後の建設については、又頗る專制的であつた。孫文氏はよく『我によつて黨を造り、黨を以て國を治める』と云つた。黨綱の中に又儼然『訓政』と云ふ期間を置いてあつた。即人民が民權主義を了解しない間は、一黨の獨裁を止めないのだからどんなに專制であるかが分る。かるが故に、國民黨は漸く軍閥を倒すとの革命に成功が出來るにしても、果して國民黨たる閥に對しての他の革命が起りやせぬかは保障することが出來ない。

第二に擧げなければならぬのは、云ふまでもなく共産黨である。共産黨も確かに革命黨であるが、かれらの現に一般の攻撃される處を擧げれば（一）共産黨は國際主義を奉じ支那を「ソギエット」の一支部にしソギエットロシヤの命令を仰ぐことで（二）共産黨は共産主義を標榜しながらその實少しも共産主義を實行するのではなく、只共産黨の全國民に對する共産で從つて政治に於いても經濟に就いても極端に專制的であることである。彼等は國民黨に入つては國民黨の看板を利用して自黨の爲に勢力を作つた。軍閥を倒すと主張しながら、什こは軍閥の張作霖と妥協した、最近に至つて又軍閥の馮玉祥と握 した。政黨道德の全然ないもの

ことを努めた。その惡いものになると軍閥と手を携へて軍閥の惡事をさへ助長するものも少くなかつた。而して軍閥と妥協することが出來なければ、權謀術數を弄しては挑發離間をやつて漁翁の利を收めやうとした。

民國十五年來の動亂の後には一つも彼等の暗中飛躍がない時はなかつた。北に於いての「帝制運動」「復辟運動」「皖の戰爭」「第一及第二の奉直戰」南方に於いての「孫陳の爭」乃至最近の戰爭等については彼等の內のどれかが乾度內幕で人形を操つて居つたのである。

人民はすつかりかくの如き內戰に飽いて來た。人民の唯一の望む所は平和である。而して軍閥を排除しなければ一日たりとも平和を得る事が出來ないのだ。即軍閥を倒すことについては支那全國人の望む處で、しかも擧國一致して所謂る軍閥を仆すことに熱望して居るのだが、彼等政黨政會は着々として各々の軍閥を助けては戰亂を挑發するのだから、彼等が支那の政治に少しも誠意がないことをば一般の支那人に知られずには居られなかつた。

そこで、我々青年はどうして、彼等を葬らずに居られるでせうか？

かれら過去の政黨政會は、今はモハヤスツカリ青年に葬られた。梁啓超の如きものでも目下の處、只だその文章が旨い爲に時代青年の讀む處となつた丈でかれの言論がチツトモ青年の行爲を左右することが出來なかつたのに徵しても彼等過去の政黨政會が如何に青年に葬られたかが分るのであある。かれらは青年に葬られたのみならず又軍閥にも餘り信用されない樣になつた。

恐らく今度の新政治に對しては彼等過去のものは永久に過去のモノとして葬られて仕舞ふに異ひないでせうと思ふ。

三　新青年團體の出現及びかれらの主張手段

過去が葬られた以上、新青年は別の團體の下に集らなければならぬことも自明の理である。が、同時に新青年團體の要素とし生命とするものがなければならぬ。それは他ではない、只だ「革命的」である丈で充分である。即新青年團體は一つとして革命的團體でないものはない。彼等の目標は革命である。かれらの目論む處も革命である。かれらの軍閥排除に用ふる手段としても革命の外は認められなかつたのである。假へ革命の形式に關しては夫々多少の意見の不同があつても、革命でなければならぬと丈は皆一致して居るのである。だから新支那の青年運動を青年の革命運動と詞を換へて云つてもよい位である。これからこれ等革命團體に就いて少し述べやう。

第一に擧げなければならぬのは、孫文氏の發起になつて居る國民黨である。國民黨は所謂三民主義を旗印にしてあつて歷史も長いから黨員も從つて二三十萬を數へることが出來る、確か支那切つての革命的大政黨と云はなければならぬ。現に廣東、廣西の如き好地盤もあり、學生軍と云ふ相當に有力な黨軍もあるから、一番有力な革命團體と云はなければならぬ。が國民黨の內にも左派、右派又は左

派の左派、右派の右派黨があつてこれが爲に內訌の絕える時がなく、又た左右の調和についても、少からず苦心が入つた。右派の右派と云へば即馮自由馬君武達の北方軍閥と妥協して官吏にありつくものである。右派の右派は勿論反革命と云つてよいものでこれらのものも國民黨の名こそあれ、實の處モハヤ國民黨の精神がないからこれらを國民黨分に數へてもよいので現にかれら自身も黨內の各派に排斥されて居るのである。夫から右派の方は謝持居西鄒魯達のヿでかれらは反革命ではないが、革命的遂行力については少くとも予の見た處では缺乏して居るのである。かれらは反共產を唱へて居るが、その內心まは本當に主義上の反共產であるか、或は權力の爲の反共產であるかは頗る疑問がなければならぬ。次には左派のものでこれは「左派の左派」の共產黨を除いたものの凡てと云つてよい。かれらはこれまで共產黨との提携をして來て同時に非常に革命的精神に富んで居るものである。又國民黨中の實力派と云つてもよい位で殆ど實力の大部分はこの派の手中にある。蔣中正の如きはこの派の首領ではないかと予は認めて居るのである。將來革命事業は或はこの派によつて成功するかも知れぬが、殘念なヿには國民黨の三民主義そのものは餘りものになつて居らぬ。特に民主主義黨の定義が曖昧で孫文氏自身の說によれば『民主主義は即社會主義で又共產主義と名付く。又即大同主義である。』處がこの民主主義なるものは予の意見によれば社會主義でもなく、共產主義でもない、只だ一つの社會政策であるに過ぎないのだ。彼はもし、民主主義は即社會政策であると云へば、誰でも何とも文句が云へないかも知れないがあゝ云ふ風に定義した爲に、少からず人々に疑念を與へた。それだから國民黨と共自身もこの民主主義については譯が分らなかつた。それから國民黨の革命後の建設については、又頗る專制的であつた。孫文氏はよく『我によつて黨を造り、黨を以て國を治める』と云つた黨綱の中に又儼然『訓政』と云ふ期間を置いてあつた。即人民が民權主義を了解しない間は、一黨の獨裁を止めないのだからどんなに專制であるかが分る。かるが故に、國民黨は漸く軍閥を倒すヿの革命に成功が出來るにしても、果して國民黨たる閥に對しての他の革命が起りやせぬかは保障するヿが出來ない。

第二に擧げなければならぬのは、云ふまでもなく共產黨である。共產黨も確かに革命黨であるが、かれらの現に一般の攻擊される處を擧げれば(一)共產黨は國際主義を奉じ支那を「ソギエツト」の一支部にしソギエツトロシヤの命令を仰ぐことで(二)共產黨は共產主義を標榜しながらその實少しも共產主義を實行するのではなく、只共產黨の全國民に對する共產で從つて政治に於いても經濟に就いても極端に專制的であるヿである。彼等は國民黨に入つては國民黨の看板を利用して自黨の爲に勢力を作つた。軍閥を倒すと主張しながら、曾ては軍閥の張作霖と妥協した、最近に至つて又軍閥の馮玉祥と提攜した。政黨道德の全然ないもの

で、目的の爲には凡ての手段を擇ばないものである。それだから反共産のものに力の强いものさへ出れば、共産黨はその一蹴にだも與えられない位である筈だ。

　國民黨と共産黨との他にもう二つ擧げなければならぬのは「國家主義派」と「獨立青年黨」との興りつゝある政黨である。かれらは、今の處、尙だ大政黨になつて居ず、只だ政黨の雛形に過ぎないが共に革命黨ではあるし又一部分の力もあるから述べて置く。國家主義派は國家主義を標榜して居るもので、共産黨の反動に出來たものである。かれらの取る手段は全然共産黨を眞似てゐる。即共産黨の共産主義に對しては國家主義を用ひ、共産黨の共産主義青年團に對しては、國家主義青年團を作つた。共産黨の一黨獨裁に對しても、かれらもその傾向があつた。この團體の發起人は曾琦、張子柱等で、矢張り「何々黨」と云ふ黨があるが目下は未だ黨名を公開して居ず、只だ「醒獅派」と云はれて活動して居る。（この黨名については著者は道義上秘密を守つてやらなければならぬから掲げずに置く）彼等發起人は相當に人格があるが、同時に、感情が非常に强い。從つて偏見も深い。國家主義は確かに支那の現狀に適するが、國家主義それ自身は帝國主義になり易いもので、しかも經濟政策上社會主義と相容れないものであるから、かれらは國家主義の上に「平和的」「防禦的」「非侵略的」等と云ふ制限的形容句を加へ、以てその帝國主義にならないことを表明し、同時に社會政策をその綱領の內に入れ以て個人資本主義でないことを示したが、こうなつて來ると、もはや本來の國家主義ではなくなつたと云はなければならぬが、「醒獅」と云ふ週刊は相當に青年の心を引いて、將來の革命に對しても確かに相當に貢獻が出來るでせうと思ふ。

　獨立青年黨は尙だこれと云ふ主義を標傍して居ないが民主主義であるに違ひない、彼等はマルクスの理論を承認し。同時に支那に對する應用として社會主義的政策を主張した點に於ては廣義のデモクラシーだと云はなければならぬ。政治について彼等が一切の名義に於ける獨裁を反對したのもデモクラシーの然らしめた處である。それから外交上の政策としては彼等は國家主義の政策を認めるがそうかと云つて餘り單獨に國家主義をも標傍したことはなかつた。軍閥のどれをも反對し、片方に於ては、又共産黨をも反對したから調子は頗る高いが同時に頗る孤立の狀態にあつた。この團體の成立は尙ほ日が淺く未だ一ケ年になつて居ないが然しかれらの過去の歷史はもう三十年以上あつた。即獨立青年の生れるまでは、孤軍討論會と云ふものがあつて、好人格者陳承濵氏の發起によつて過去三年間孤軍と云ふ雜誌を出して、國事を討論しては軍閥を反對して來た。而して討論した結果政治に關しても、經濟に關しても、外交に關しても、皆略ぼ結論があつた共同時に同志も大分集つたから獨立青年黨と云ふ旗擧をし「孤軍の」代りに「獨立青年」と云ふ雜誌を出して社會に於いて第一步の宣傳をし出したのである。かれらの標語としては「國賊を排除し、國權を恢復し、

民治を確立し、民生を保障す」とあつた。その他彼等は頗る法治の精神に富んで法律の軌道がある限り、無暗に革命する即武力を用ふるとを反對した。デモクラシーであるから國民黨や共産黨等の一黨總裁を反對するのは當然である。過去三年間からの堅苦しい奮鬪の爲に一般の青年からも大分同情されて居つた。

それからモウ一ツ二ツ政治と關係のないものでしかも擧げて置かなければならぬものがある。これは他ではなく、新文學と標榜する創造社である。創造社は郭沫若、耶達夫、成倣吾等の素人文藝家の發起になつた團體で、専ら文學によつて革命を鼓吹するものであるが、相當に力がある。かれらは目下「創造月刊」と云ふ純文藝のものの他に「洪水」と云ふ半文藝的半政治的の半月刊をも出して居つてもこれによつて盛に共産黨の聲援をやつて居るから帝國主義者から見れば頗る色の赤いものであるに違ひないが、我々から見るとその主義論等は頗る幼稚なもので彼等の文藝に較べるとその内容はずつと劣つて居る。が、然し餘り分別のないものに對してはその文章が挑發的であるだけそれだけ力がある。

文學方面の運動を云ふと創造の他にもう一ツ文學研究會と云ふものを紹介せねばならぬ。これは共産黨人の主宰する處となつて主に外國の革命文學を翻譯して政治方面には少しも觸れて居ない樣である。

四　改造に面せる支那

支那は今は確かに改造に面して居るのである。それであるからこんなに革命の氣分が漲つて來たのだが何時大革命が爆發するだらうと云ふ問題に對しては、恐くは何人でも豫言が出來ないでせうと思ふ。が、予の考へた處では革命運動が成熟するまでには二つの要件が入る。即(一)思想の統一(二)歩調の一致で而してそれに達するまでには又所謂る運動中の犧牲がなければならぬ。處が、今の支那に取つてはこれは皆まだ〳〵の状態にあるのだ。

第一思想から云つて今の青年に取つての中心思想は何だ?これは頗る疑問である。勿論中心思想と云つても全國人が皆例外なくこれを目標にし、これに贊成する譯には行かないが、少くとも大部分の人が皆首肯しなければならぬのだが、今の處は思想界の分野は大分現はれて來たけれども、どれが最も力のあるものであるかについては誰でも何とも云へない。國民黨に云はすれば、勿論三民主義が中心思想になつて居ると云はう、又國民黨の方では少からず黨員の數を誇りとして居るからそうも云はれやうが、それは何にもならぬことである。三十萬の人があつても、全國民の四億萬の大數に較べれば實に微小なものである。よし、この二三十萬の數が、智識階級の多數を占めたにしても、それは只だ量の上で質に於いては尙未だ誇りとすることは出來ないのだ。私しも、この二三十萬の黨にして皆全部十分に三民主義を了解し、堅く黨の爲に働き一切の犧牲を惜しまないならそれこそ實に一の大きい力と成れるのだ。

又實際こう云ふ黨でもあつたら、一萬人丈でも大した力になるのだ、それがあつたらもう國民黨の方は疾うから天下を統一したのだが、その今でもゴタ〳〵して居て十年も長く廣東の一省に屛居して居るのを見ては、その三民主義が中心思想になり得るかが頗る怪しまなければならぬ次第である。況んや、民生主義たるものの自身について頗る譯の分らぬに於いてをやだ！

それならば共產主義は如何。これは共產黨自身さへ採用しないもので、よし共產黨員全部この主義を信仰するにしても、その人數は萬を越えてない、その上その黨員の多くは主義の爲に働くのではなくループルの爲に働いて居る狀態だから十萬人あつても何でものになれやうか？

民主主義の方は、未だ日が淺いから今の處何とも批評が出來ない。が然し經濟的デモクラシーは社會主義を包含する丈それ丈共產黨に對抗が出來、政治的デモクラシーは、中華民國の民國を擁護する丈又それ丈民權主義民族主義と對立することが出來るから、民義のデモクラシーの思想さへ全國民に徹底すれば、少くとも將來に於いては支那共和國の基礎を堅固にすることに力があると云はなければならぬ。若し夫れ、國家主義についてはそれ自身現に三民主義の民族主義に包含されて居るから中心思想になることは六ケ敷しいだらうと思ふ。

論じてこゝに至れば、即支那には今の處何だ中心思想になつて居る思想がないことが分るだらうと思ふ。中心思想たるべき思想が未だない限りは支那青年の運動もその步調を一致にすることが出來ないに定つて居るではないか？ 現運動の形勢を見ても、その步調の揃はないことが分る。即共產黨でも、反共產黨でもよくお互に反革命だと罵り合つて居ることだが、お互に皆革命黨でありながらお互に反革命だと罵り合ふのはつまり步調が揃はない爲だ。と云はなければならぬ。こう云ふ風に步調が揃はない間は革命の運動もどうしてもこれが爲に鈍らなければならぬのだ。

それから運動中の犧牲について述べて見やう。どの革命史を繙いて見ても革命が爆發するまでには、澤山の犧牲者を出さなければならぬ。犧牲者が多い程、宣傳が屆くと同時に革命も徹底的に出來るのだ。ロシアの大革命までに犧牲になつたものは萬を數へると云ふ。支那の辛亥革命が爆發するまでにも澤山の犧牲者があつた。かようにして始めて…………………………………………………促がすことが出來るのだ。これら犧牲者は云はゞ先鋒である。然るに民國十五年以來幾人の犧牲者があつた？軍閥こそ恣に人民を蹂躙することが出來るが、これらの軍閥に對しては、曾て人民からの復仇を聞いたことがないではないか？ 又、革命黨と名の付いた團體からも一つも…………の手段を採用するものがない。その宣傳は孰れも筆と口との宣傳に止つて…………………の方は一向も尙ないのではないか？ こう云ふ狀態では、その宣傳でも生緩いに極つて居るのだ。少くとも…………………始つて始めて宣傳の効が著しくな

り、革命の運動も始めて自然的になるのであるがこれはこれからのことである。

詞を換へて云ふと即、これまでの青年は皆一つの謬見がある。彼等は誰も成功者になるのを望んで一人も犠牲者――先鋒隊――になるのを望んで居なかつた、それに考へが着かなかつたのだ。が、今の青年は大分覚悟して來た、これからが見物だ、種を播く人こそ新支那の改造者なれ！

五　日本と支那改造の關係及び日本人の今後取るべき方針

前に述べたにことに於いて、予は略ぼ新支那の青年運動について明にしたと思ふから、これから少しく簡單に日本の立場について論じて見やうと思ふ。

一體日本と支那とは、どんな關係にあるか？これは一寸智識のある支那青年に取つては一人も非常に密接な關係があると云はないものはない位だ。即日本がなければ支那はないと、又支那がなければ日本もない、日本と支那とは有色人種の屏障で、しかも單獨にはどつちも役に立たないのだ。支那にして列强に分割されたら縦へ日本が滿洲を分けて行つても澤山の列强が一齊に東亞に力を植えて來てはいくら强い日本でもこれには抵抗し難いに定つて居る。同時に、これまで、日本の力がなかつたら支那は疾うから列强の分割する處となつたのにも定つて居る。この位の考へは支那人の一寸智識のある人には誰れでも承知して居るのだが、然らば何故日支間の關係がこんなに圓滿に行かないのだらう？

予の考へではこれは(一)に日本政府の誤つた方針の爲(二)に日本人の支那を了解しない爲だと思ふ。

……………は何時でも、支那の軍閥を援けて居る。……………………………………………。又段祺瑞の政府を助けては軍事借款をして南方の討伐に力を與へた。袁が仆れ段が仆れてからは今度は張作霖の肩を持つた。…………の考へでは或は列强は皆一人づゝ支那の軍閥を援けて居るから、……にして張作霖等を助けなければ日本の滿洲に於ける利益は危くなると考へてゐるだらう、が、支那人特に支那の青年の考へは支那軍閥の仆しにくいのはつまり各國帝國主義がその後押しをして居るのだ、だから、帝國主義の援さへなければ軍閥等は仆すに足らぬのだ。而して日本は、我が同文同種の國で我を援けない處か反つて列强よりも酷い事をやる。それでは列强も憎らしいに違ひないが、……は一層憎らしいではないかと、こう云ふ風に、政治の爲の排日が惹いて一般の排日となつて、我々から考へれば日本人に對しては實に氣の毒千萬であるが仕方がなかつた。が、然しこれに關する救濟は容易いことである。予の考へでは、即日本政府の支那内亂に對しての嚴正中立で澤山だ。勿論、日本政府にして列强に運動して支那軍閥の援助を止めさせて與れるとが出來ればこの上もないよいとであるが、そうでなくとも只だ日本自身さへ手を引けばそれで澤山である。日支間の感情さへよければ、日

又實際こう云ふ黨でもあつたら、一萬人丈でも大した力になるのだ、それがあつたらもう國民黨の方は疾うから天下を統一したのだが、その今でもゴタ〳〵して居て十年も長く廣東の一省に屏居して居るのを見ては、その三民主義が中心思想になり得るかが頗る怪しまなければならぬ次第である。況んや、民生主義たるもののの自身について頗る譯の分らぬに於いてをやだ！

それならば共產主義は如何。これは共產黨自身さへ採用しないもので、よし共產黨員全部この主義を信仰するにしても、その人數は萬を越えてない、その上その黨員の多くは主義の爲に働くのではなくルーブルの爲に働いて居る狀態だから十萬人あつても何でものになれやうか？

民主主義の方は、未だ日が淺いから今の處何とも批評が出來ない。が然し經濟的デモクラシーは社會主義を包含する丈それ丈共產黨に對抗が出來、政治的デモクラシーは、中華民國の民國を擁護する丈又それ丈民權主義民族主義と對立するとが出來るから、民義のデモクラシーの思想さへ全國民に徹底すれば、少くとも將來に於いては支那共和國の基礎を堅固にするとに力があると云はなければならぬ。若し夫れ、國家主義についてはそれ自身現に三民主義の民族主義に包含されて居るから中心思想になるとは六ヶ敷しいだらうと思ふ。

論じてこゝに至れば、即支那には今の處何だ中心思想になつて居る思想がないとが分るだらうと思ふ。中心思想たるべき思想が未だない限りは支那青年の運動もその步調を一致にするとが出來ないに定つて居るではないか？　現運動の形勢を見ても、その步調の揃はないとが分る。即共產黨でも、反共產黨でもよくお互に反革命だと罵り合つて居るとだが、お互に皆革命黨でありながらお互に反革命だと罵り合ふのはつまり步調が揃はない爲だ。と云はなければならぬ。こう云ふ風に步調が揃はない間は革命の運動もどうしてもこれが爲に鈍らなければならぬのだ。

それから運動中の犧牲について述べて見やう。どの革命史を繙いて見ても革命が爆發するまでには、澤山の犧牲者を出さなければならぬ。犧牲者が多い程、宣傳が屆くと同時に革命も徹底的に出來るのだ。ロシアの大革命までに犧牲になつたものは萬を數へると云ふ。支那の辛亥革命が爆發するまでにも澤山の犧牲者があつた。かようにして始めて………………………………………………促がすとが出來るのだ。これら犧牲者は云はゞ先鋒である。然るに民國十五年以來幾人の犧牲者があつた？軍閥こそ恣に人民を蹂躙するとが出來るが、これらの軍閥に對しては、曾て人民からの復仇を聞いたとがないではないか？　又、革命黨と名の付いた團體からも一つも……………の手段を採用するものがない。その宣傳は孰れも筆と口との宣傳に止つて……………………の方は一回も何ないのではないか？　こう云ふ狀態では、その宣傳でも生殺いに極つて居るのだ。少くとも……………………始つて始めて宣傳の効が著しくな

り、革命の運動も始めて自然的になるのであるがこれはこれからのことである。

詞を換へて云ふと即、これまでの青年は皆一つの謬見がある。彼等は誰も成功者になるのを望んで一人も犠牲者——先鋒隊——になるのを望んで居なかつた、それに考へが着かなかつたのだ。が、今の青年は大分覺悟して來た、これからが見物だ、種を播く人こそ新支那の改造者なれ！

五　日本と支那改造の關係及び日本人の今後取るべき方針

前に述べたにことに於いて、予は略ぼ新支那の青年運動について明にしたと思ふから、これから少しく簡單に日本の立場について論じて見やうと思ふ。

一體日本と支那とは、どんな關係にあるか？これは一寸智識のある支那青年に取つては一人も非常に密接な關係があると云はないものはない位だ。即日本がなければ支那はないと、又支那がなければ日本もない、日本と支那とは有色人種の屏障で、しかも單獨にはどつちも役に立たないのだ。支那にして列強に分割されたら縱へ日本が滿洲を分けて行つても澤山の列强が一齊に東亞に力を植えて來てはいくら强い日本でもこれには抵抗し難いに定つて居る。同時に、これまで、日本の力がなかつたら支那は疾うから列强の分割する處となつたのにも定つて居る。この位の考へは支那人の一寸智識のある人には誰れでも承知して居るのだが、然らば何故日支間の關係がこんなに圓滿に行かないのだろう？

予の考へではこれは(一)に日本政府の誤つた方針の爲(二)に日本人の支那を了解しない爲だと思ふ。

……………は何時でも、支那の軍閥を援けて居る。…………………………………………。又段祺瑞の政府を助けては軍事借款をして南方の討伐に力を與へた。袁が仆れ段が仆れてからは今度は張作霖の肩を持つた。…………の考へでは或は列强は皆一人づゝ支那の軍閥を援けて居るから、……にして張作霖等を助けなければ日本の滿洲に於ける利益は危くなると考へてゐるだらう、が、支那人特に支那の青年の考へは支那軍閥の仆しにくいのはつまり各國帝國主義がその後押しをして居るのだ、だから、　帝國主義の援さへなければ軍閥等は仆すに足らぬのだ。而して日本は、我が同文同種の國で我を援けない處か反つて列强よりも酷い事をやる。それでは列强も憎らしいに違ひないが、……は一層憎らしいではないかと、こう云ふ風に、政治の爲の排日が惹いて一般の排日となつて、我々から考へれば日本人に對しては實に氣の毒千萬であるが仕方がなかつた。が、然しこれに關する救濟は容易いことである。予の考へでは、即日本政府の支那內亂に對しての嚴正中立で澤山だ。勿論、日本政府にして列强に運動して支那軍閥の援助を止めさせて具れるとが出來ればこの上もないよいとであるが、そうでなくとも只だ日本自身さへ手を引けばそれで澤山である。日支間の感情さへよければ、日

本人の支那發展は少くとも他の白色人類よりはずづと容易だと予は斷言する。

それから日本人も支那を了解しない極く重要の點がある。即、日本人は年寄りの支那通に誤まられて現支那の青年心理乃至は現支那の青年運動がどう云ふものであるかを知らなかつた事である。かれ等年寄りの支那通は、支那の年寄ばかりを知つて又支那の昔の事ばかりを知つてそれでもて支那對策を研究するからいかぬのだ。成る程、現支那でも年寄特に軍閥、官僚、政客等は尙だ相當に力を持つて居るが、今後の支那を主宰するものは今の青年でなければならぬ。今の支那青年の意見を尊重しなければどうして甘くやつて行けるか？　又、縱へ今暫らく甘くやつて行かれても今後はどうして甘くやつて行けるか？　我々青年は日本人——特に青年——との提携を勿論心から望んで居るがそうでなくとも日本が支那の內亂に對して中立の狀態さへ取つて呉れれば支那の青年は非常に滿足し非常に日本人に感謝するのだ。

だから日本の立場をモツトモ簡單に云ふと（一）日本政府は支那の軍閥を助けないと（二）日本人は政府のそうしない樣に有力な輿論を作り、政府を鞭撻し監督するとこれ丈である。　（終り）

（附り）筆者は獨立青年の主張に贊成する人の一人であるが本篇は最公正的に客觀的に立論したのだから讀者の諒解を願ふ。それから改造社に對する約束は五月一杯ですが丁度その前に社の方は軍閥の壓迫を受け社員の黃剛氏が逮捕された爲に暫らく筆を取る暇がなかつたのでかく遲れました若しも特別號に間に合はなかつたらこれも致し方がないから御諒恕を願ふそれから本稿の文責は筆者個人にあることを斷つて置きます。

十五、六、三、上海にて

北京政府と廣東政府

伊藤武雄

一 支那問題の三つの鍵

現代支那を觀る時、少くも三つの力點を注意しなければならぬ。其一つは四千年來傳統的文化を存する中夏民族(實際、中斷せられることなく獨自の文化をともかくも繼承した民族は支那の外にない)の世界は地大物博、列國に對して優越せるものなりと自信を抱く支配階級の存在。第二は支那の大陸と大民衆を、半殖民地的關係に於て圍繞する近代的國家組織文化に繁榮する諸強國の侵迫現實。第三に支那民族の現在に於ける國際的地位を自覺し、列強の對支態度に正面より反抗して、近代文化的國家の樹立を急ぎ、支那民族の自主獨立の生命を完成せんとする、在來の被支配階級の大部分を其背後に持つ革命勢力の存在の三である。

第一の勢力は現代支那の保守的勢力にして、一九〇〇年までは支那國土と民衆を政治的に支配し來り、支那を以て天下として、並び立つ列國の存在に對し殆ど無關心に生活し、(或は知ての後も其認識をいさぎよしとせずして種々の紛亂を醸した)自大侮外の思想に膠着し近代文化に背面し來つた清朝官僚階級の思想並に行動である。而もこの思想は尙今日相當の強さを以て(或は北方人の本質的意識として)依存して居る。北方精神として示される、東洋的、封建的、貴族的、武力的、政治的、思向行動となつて働いて居る。北京政府によつて示されるもの、其代表的のものである。第二の事實は南歐に發達した初期科學精神に根據して發展せる資本主義文明の東漸と共に、資本主義生活品が其市場を求めて海外殖民地の獲得競爭となり、殘された最後の市場として十八世紀中より支那大陸に及び、廣大な土地と衆多の民衆に對し搾取關係を成立さするに至つた。通商政

策に始まり、領土分割、勢力範圍占領となり、轉じて投資政策に及び、近代文明に對し理解と訓練なき民衆を壓迫の對照とし、全支那を列國の半殖民地的現狀におくに至り、其保持を對支政策の核心となす狀態である。北京の公使館區域は其策源地である。第三の要素は、內外兩方面に於ける現實を批判した、南方精神（靑年支那精神）が民族的獨立精神と組織國家への憧憬に動かされ、專制王國への革命運動、侵略列國に對する抗議的排外運動（國民運動）となつて「國民革命」（National Revolution）を志す、進化的、民主的、歐化的、組合的、商業的南方精神にして其中心は廣東（或は場合によりては上海、長沙なることあり）によつて代表せられる。

私は現代支那の諸現象は前述三條件の交錯の上に立つものと考へる。然し乍ら其力點の交錯程度は時所によつて相異の生ずるは當然のことである。例へば北方軍閥の相尅は、北方精神中の幼稚素朴な中世的封建的現象なるに對し、南方の民族運動と階級鬪爭のスロガーンに指導せらるる勞働爭議は極めて近代的色彩の濃き如きは夫れである。人々は支那問題に對し矛盾と不可解を結論し易いがこの三力點に對する觀察を誤るなくんば、實際に遠かること尠かるべきを信ずる。現代支那を流るる主潮は？と質された時、私は「近代的國家」の組織と認識行程と應ふるに躊躇しない。

二　國際資本主義と支那

天の覆ふところ地の載するところ、王土に非るなく王臣ならざるなし、とは支那國家最近までの哲學であつた。中夏以外の諸國民の存在は、支那に對し內服（屬國關係）に非れば、外服（朝貢關係）であり、國際通商の觀念も彼等を以てすれば對等貿易に非ずして、外國の缺乏せる必需品を支那に供給を仰ぐものにして、支那は之に對し恩惠を以て「物大」の一部を施與するに過ない。故に通商條約は双務的には非ずして一方的覺書に過ないと、十九世紀中葉の支那官吏は解釋して居た。

されどこの天衣無縫の理想的帝國の破壞期は近付いて居た。一八四〇年の阿片戰爭は其最初のものである。資本主義文明は市場を要する。東洋に殺倒した歐洲諸國は爭て弱小國を其市場とするために征服した。列國の殊に英國の支那に對して執た政策は通商政策である。對等通商要求は、世界帝國を以て任ずる支那にとつて非常な侮辱と感じた、夫がために露國公使を始め列國は阿片戰爭前數年を非常な虐遇に甘んぜねばならなんだのみならず、戰後に於ても、南京條約履行に對し解釋の相違は頻々として起り、次で太沽砲擊となり英佛聯合軍の北京占領とな

つた。列强の通商帝國主義は朝鮮問題に於て日本と支那との開戰を惹起せしめ、其結果は清廷政府の積弱暴露となり、列國は進んで領土侵略に轉じ、勢力範圍の劃定を以て他日の分割準備を進めた。

支那帝國の領土は天際無涯にして、國境線なるものは存在して居なかつた。列國の侵略によつて支那の領土の限界が消極的に定められた。所謂理論上の領土の多くは、北は露國に、西南は英佛に占領せられ又現にされつつある。「聲教四海に及ぶ」式領土に實際の支配權は存在して居ると主張することは出來ない。支那に於ける國境並に領土權上の自覺は、次で國中國の設けられた租界租借地の發生によつて刺戟された。此等の土地は支配權は勿論文化も完全に徹して居るに拘はらず、資本主義列國の經濟的勢力の中心として占領されるに至つた程、支那は近代國家の組織に缺陷があつた。エチ・エ・ギボンスといふ先生は支那の當時を說明して、……支那はステートではない。一つのシヴィリゼーションの民族集團に過ない。之を主權國家の如き外觀を呈せしめたのは、諸外國の便宜の結果にして彼等は支那國家及政府なるものを近代的意味に擬制したのであつた。何故なら條約を結び、地を割き、利權讓渡等の行爲をなすに當り、夫等の上に主權を有せぬ文化國家、道德政府では問題とはならぬので、國家組織上の政府に非るに拘はらず、擬制を以て夫等行爲の相手方となしたに過なかつた、と、しかし當時の支那帝國は近代國家とは緣遠いものであつた。

北京に於ける列國使臣は一九〇〇年以來「交民巷」と稱する一區域を劃して支那の主權の及ばざるところとなし、列國協同して支那政府（國土と人民上の政府と擬制せられた）を威壓して結局は國土と人民の負擔に歸すべき種々の特權利益を强奪するの策動地となした。故に列國使臣の外交團なるものは北京政府を監督指揮するの太上政府と稱せられた。（この狀態は支那が蘇露國政府承認まで續いた。）

かくて支那の商業權、金融權財政權交通權鑛山其他工業權が外國人の左右するところとなつて、支那國家は其近代的組織に進む前日に於て、既に不具にせられて居た。道德的古典帝國の支配階級官僚すら、其損害と不名譽の大を知つて、反抗運動を試みたこともなきに非れども、却て列國のために益々窮迫させられて奈何ともする能はざる狀態に立至り、民族的自覺に刺戟された南方精神の青年支那の勃興を促すに至つたのである。

三　近代國家組織の探求

於是、最早や世界國家の夢は醒めねばならなんだ。今や並び立

資に始まり、領土分割、勢力範圍占領となり、轉じて投資政策に及び、近代文明に對し理解と訓練なき民衆を壓迫の對照とし、全支那を列國の半殖民地的現狀におくに至り、其保持を對支政策の核心となす狀態である。北京の公使館區域は其策源地である、第三の要素は、內外兩方面に於ける現實を批判した、南方精神（靑年支那精神）が民族的獨立精神と組織國家への憧憬に動かされ、專制王國への革命運動、侵略列國に對する抗議的排外運動（國民運動）となつて「國民革命」（National Revolution）を志す、進化的、民主的、歐化的、組合的、商業的南方精神にして其中心は廣東（或は場合によりては上海、長沙なることあり）によつて代表せられる。

私は現代支那の諸現象は前述三條件の交錯の上に立つものと考へる。然し乍ら其力點の交錯程度は時所によつて相異の生ずるは當然のことである。例へば北方軍閥の相剋は、北方精神中の幼稚素朴な中世的封建的現象なるに對し、南方の民族運動と階級鬪爭のスロガーンに指導せらるる勞働爭議は極めて近代的色彩の濃き如きは夫れである。人々は支那問題に對し矛盾と不可解を結論し易いがこの三力點に對する觀察を誤るなくんば、實際に遠かること尠かるべきを信ずる。現代支那を流るる主潮は？と質された時、私は「近代的國家」の組織と認識行程と應ふるに躊躇しない。

二　國際資本主義と支那

天の覆ふところ地の載するところ、王土に非ざるなく王臣ならざるなし、とは支那國家最近までの哲學であつた。中夏以外の諸國民の存在は、支那に對し內服（屬國關係）に非れば、外服（朝貢關係）であり、國際通商の觀念も彼等を以てすれば對等貿易に非ずして、外國の缺乏せる必需品を支那に供給を仰ぐものにして、支那は之に對し恩惠を以て「物大」の一部を施與するに過ない。故に通商條約は双務的には非ずして一方的覺書に過ないと、十九世紀中葉の支那官吏は解釋して居た。

されどこの天衣無縫の理想的帝國の破壞期は近付いて居た。一八四〇年の阿片戰爭は其最初のものである。資本主義文明は市場を要する。東洋に殺倒した歐洲諸國は爭て弱小國を其市場とするために征服した。列國の殊に英國の支那に對して執た政策は通商政策である。對等通商要求は、世界帝國を以て任ずる支那にとつて非常な侮辱と感じた、夫がために露國公使を始め列國は阿片戰爭前數年を非常な虐遇に甘んぜねばならなんだのみならず、戰後に於ても、南京條約履行に對し解釋の相違は頻々として起り、次で太沽砲擊となり英佛聯合軍の北京占領とな

つた。列強の通商帝國主義は朝鮮問題に於て日本と支那との開戰を惹起せしめ、其結果は清廷政府の積弱暴露となり、列國は進んで領土侵略に轉じ、勢力範圍の劃定を以て他日の分割準備を進めた。

支那帝國の領土は天際無涯にして、國境線なるものは存在して居なかつた。列國の侵略によつて支那の領土の限界が消極的に定められた。所謂理論上の領土の多くは、北は露國に、西南は英佛に占領せられ又現にされつつある。「聲教四海に及ぶ」式領土に實際の支配權は存在して居ると主張することは出來ない。支那に於ける國境並に領土權上の自覺は、次で國中國の設けられた租界租借地の發生によつて刺戟された。此等の土地は支配權は勿論文化も完全に徹して居るに拘はらず、資本主義列國の經濟的勢力の中心として占領されるに至つた程、支那は近代國家の組織に缺陷があつた。エチ・エ・ギボンスといふ先生は支那の當時を說明して、……支那はステートではない。一つのシヴィリゼーションの民族集團に過ない。之を主權國家の如き外觀を呈せしめたのは、諸外國の便宜の結果にして彼等は支那國家及政府なるものを近代的意味に擬制したのであつた。何故なら條約を結び、地を割き、利權讓渡等の行爲をなすに當り、夫等の上に主權を有せぬ文化國家、道德政府では問題とはならぬので、國家組織上の政府に非るに拘はらず、擬制を以て夫等行爲の相手方となしたに過なかつた、と、しかし當時の支那帝國は近代國家とは緣遠いものであつた。

北京に於ける列國使臣は一九〇〇年以來「交民巷」と稱する一區域を劃して支那の主權の及ばざるところとなし、列國協同して支那政府（國土と人民上の政府と擬制せられた）を威壓して結局は國土と人民の負擔に歸すべき種々の特權利益を强奪するの策動地となした。故に列國使臣の外交團なるものは北京政府を監督指揮するの太上政府と稱せられた。（この狀態は支那が蘇露國政府承認まで續いた。）

かくて支那の商業權、金融權財政權交通權鑛山其他工業權が外國人の左右するところとなつて、支那國家は其近代的組織に進む前日に於て、旣に不具にせられて居た。道德的古典帝國の支配階級官僚すら、其損害と不名譽の大を知つて、反抗運動を試みたこともなきに非れども、却て列國のために益々窮迫させられて奈何ともする能はざる狀態に立至り、民族的自覺に刺戟された南方精神の青年支那の勃興を促すに至つたのである。

三　近代國家組織の探求

於是最早や世界國家の夢は醒めねばならなんだ。今や並び立

つ國家に於て支那より强いといふ現實に當面した。然し乍ら尙大部分の宮廷官僚は現實と慣行的幻夢との區別つかず、康有爲一派によつて企てられた變法自强新策による歐洲式政治形式への改革は「祖法成例不可變」の標語を以て鎮壓されてしまつた。固よりその變法の窮極は支那在來國家組織の根本的革命となり、道德國家は科學國家へ變革され、淸朝は滅亡に歸す筈である、改革者の積りは「聖經」を本とし洋學を用とする積であつたことは勿論であるが、尙夫すら容れられぬ程保守的勢力、支那的勢力は盛なものがあつた。

されど、洋夷の侵冦は傍若無人であつた。支那大陸はやがて分割の運命に立つ虞れが强く現れて來た。1900年山東の一角より起た拳匪の一隊は西敎排斥を旗幟とした。(廣東に起た(1850—1861)太平天國の徒が耶穌の弟と稱したに比して面白い對照である)輿論は之を讚し、宮廷も之に加擔して野蠻的攘夷手段に出た。列國は眠れる獅子の起てるものとし、一時大に恐怖したるも、結局資本主義文明の敵ではなかつた。列國聯合軍は北京城を包圍し、淸廷をして完全に帝國主義の前に攝伏させ其商權の擁護と共に、過大な搾取賠償金の擔保として關稅權を列國(英國を主班とする)の手に握てしまつた。淸朝政府は國內の疲弊紊亂と共に唯一の財源を失つて其滅亡は次第に近きつつあつた。三年前に「聖訓」を盾に排斥した變法改革者の方策を踏襲するの餘儀なき立場に至つた。支那世界帝國は名實共に其墓穴へ急ぎつゝあつた。一九一一年四川の邊陬に於て擧げられた鐵道國有反對の聲は遂に三百年の淸廷のみならず、三千年の世界帝國の末路は遂に來たのである。

淸廷の滅亡は支那の近代國家要求に對する對時代的發展を示したことは爭なき事實である。支那に於て最も早く、歐洲諸國との文化的交通を有した廣東地方には近代國家に對する理解と其必要を體驗して居た、のみならず傳來的に滿洲人政府に對する反感の明人の血が流れて居、孫文を中心とする革命主義青年の一派によつて代表せられて居る。武漢の一戰に、淸帝退位、帝制の覆滅、共和制の創建は決せられたが、革命勢力は完全に北方まで徹底せぬ中に共和國は成就した。北方は民國の衣裝を着た淸室の舊官僚軍閥により依然として支配せられて居た。南北妥協は南方革命主義の北方軍閥勢力に對する屈服の形をとつた。されど理想としての民主共和制は偶然出來たのではなく、少くも南方人二十年の血の跡が之を飾て居たが支那社會の實際は尙封建王國の畑であつた。北方の保守的傳統は南方の改革的破壞行動に對して大なる反對を表明し、進化なき秩序を欲した。北方には近代國家要求の精神は理解されなかつた。於

是南北の爭は、近代國家の認識を中心にして渦卷くに至つた。

列國は驕慢な世界帝王（既に其末期には何等の實際的恐怖はなかつたが）の滅亡により、合理的國家組織の出現は便宜ではあつたが、其國家の强盛は好むところではなかつた。故に近代國家の誕生に當ても從來奪取せる既得權利を堅く保持して放さなかつた。（之は新國家にとりて、生れ乍らの不具に相當する）のみならず、各地に割據せる北方軍閥、即ち地方的實力者と結托して、「勢力範圍」の保有に努力し、完全なる民國の組織には反對するの結果を示して居る。

於是近代國家建設を最後の目的とする南方革命主義者にとつては、北方の保守的封建勢力の征服と、支那を半殖民地的に侵犯して居る資本主義列國の退讓を要求するの戰とを控へて居る。「打倒軍閥」「打倒帝國主義」は彼等のスローガンである。民國創立後北方軍閥勢力に破れた南方革命主義精神は數年雌伏の後、歐洲戰中に醸された民族解放と社會革命思想に動かされて、陣容と作戰を更新し、政治的運動を社會的運動に轉じ學生運動勞働運動を以て、軍閥官僚の牙營に迫り、列國資本主義の陣營に突貫した。所謂排外運動（排貨運動、反基督教運動、經濟絶交等は其戰術である。）の興起は之である。拳匪の排外運動と最近の夫との相違は其戰術に、科學的なるや否やの差はあるが、民族獨立希求の精神は同一である。

「五四運動」以來の學生運動は、支那國民に對し、近代國家組織運動を啓蒙した功蹟は著しい。鼓腹擊壤の民は、政治的支配に對しては常に無關心に非れば、拒否的態度に習慣付けられて來て居る。然るに一九一九年以降の支那の小工業の發展は（歐洲戰亂による列國の東洋を顧みる能はざるに因る）「國貨」「愛國」語の大流行を見た程、支那歷史上に於ける特筆的事實を現した。

次で勞働階級の排外戰線への參加が是に續いた。支那に於ける近代工業の大部分は、外國資本の支配下に在り、僅に一部分が國營企業（鐵道の如き）之に次ぐものは軍閥官僚の投資せる官僚資本にして、純然たる商工階級の資本集積は微々たるものにして家内工業小企業の域を出でなかつた。勞働運動は先づ南方工業區なる英國の對支企業の中心點たる香港に黎明を見た。其他の工場に雇傭せらるる勞働者の大部分は廣東人である。支那各地に於ける技術職工の大部分は工業的先驅地たる香港に養成せられた廣東人の多いことは支那の勞働運動發展に大關係がある。歐洲戰後の物價騰貴と參戰支那勞働者の歸國により一九二一年以後支那に勞働階級解放思想（戰術は賃銀値上一天張りであつたが）が動き始めた（日本の思想的實際的教訓も大い）

つ國家に於支那より强いといふ現實に當面した。然し乍ら尙大部分の宮廷官僚は現實と慣行的幻夢との區別つかず、康有爲一派によつて企てられた變法自强新策による歐洲式政治形式への改革は「祖法成例不可變」の標語を以て鎭壓されてしまつた。固よりその變法の窮極は支那在來國家組織の根本的革命となり、道德國家は科學國家へ變革され、清朝は滅亡に歸す筈である、改革者の積りは「聖經」を本とし洋學を用とする積であつたことは勿論であるが、尙夫すら容れられぬ程保守的勢力、支那的勢力は盛なものがあつた。

されど、洋夷の侵寇は傍若無人であつた。支那大陸はやがて分割の運命に立つ傚れが强く現れて來た。1900年山東の一角より起た拳匪の一隊は西教排斥を旗幟とした。(廣東に起た(1850—1861)太平天國の徒が基督の弟と稱したに比して面白い對照である)輿論は之を讃し、宮廷も之に加擔して野蠻的攘夷手段に出た。列國は眠れる獅子の起てるものとし、一時大に恐怖したるも、結局資本主義文明の敵ではなかつた。列國聯合軍は北京城を包圍し、清廷をして完全に帝國主義の前に攝伏させ其商權の擁護と共に、過大な採取賠償金の擔保として關稅權を列國(英國を主班とする)の手に握てしまつた。清朝政府は國內の疲弊紊亂と共に唯一の財源を失つて其滅亡は次第に近きつつあつた。三年前に「聖訓」を盾に排斥した變法改革者の方策を踏襲するの餘儀なき立場に至つた。支那世界帝國は名實共に其墓穴へ急ぎつゝあつた。一九一一年四川の邊陬に於て擧げられた鐵道國有反對の聲は遂に三百年の清廷のみならず、三千年の世界帝國の末路は遂に來たのである。

清廷の滅亡は支那の近代國家要求に對する劃時代的發展を示したことは爭なき事實である。支那に於て最も早く、歐洲諸國との文化的交通を有した廣東地方には近代國家に對する理解と其必要を體驗して居た、のみならず傳來的に滿洲人政府に對する反感の明人の血が流れて居、孫文を中心とする革命主義青年の一派によつて之が代表せられて居る。武漢の一戰に、清帝退位、帝制の覆滅、共和制の創建は決せられたが、革命勢力は完全に北方まで徹底せぬ中に共和國は成就した。北方は民國の衣裳を着た清室の舊官僚軍閥により依然として支配せられて居た。南北妥協は南方革命主義の北方軍閥勢力に對する屈服の形をとつた。されど理想としての民主共和制は偶然出來たのではなく、少くも南方人二十年の血の跡が之を飾て居たが支那社會の實際は尙封建王國の畑であつた。北方の保守的傳統は南方の改革的破壞行動に對して大なる反對を表明し、進化なき秩序を欲した。北方には近代國家要求の精神は理解されなかつた。於

是南北の爭は、近代國家の認識を中心にして渦卷くに至つた。

列國は驕慢な世界帝王（既に其末期には何等の實際的恐怖はなかつたが）の滅亡により、合理的國家組織の出現は便宜ではあつたが、其國家の强盛は好むところではなかつた。故に近代國家の誕生に當ても從來奪取せる既得權利を堅く保持して放さなかつた。（之は新國家にとりて、生れ乍らの不具に相當する）のみならず、各地に割據せる北方軍閥、即ち地方的實力者と結托して、「勢力範圍」の保有に努力し、完全なる民國の組織には反對するの結果を示して居る。

於是近代國家建設を最後の目的とする南方革命主義者にとつては、北方の保守的封建勢力の征服と、支那を半殖民地的に侵犯して居る資本主義列國の退讓を要求するの戰とを控へて居る。「打倒軍閥」「打倒帝國主義」は彼等のスローガンである。民國創立後北方軍閥勢力に破れた南方革命主義精神は數年蟄伏の後、歐洲戰中に釀された民族解放と社會革命思想に動かされて、陣容と作戰を更新し、政治的運動を社會的運動に轉じ學生運動勞働運動を以て、軍閥官僚の牙營に迫り、列國資本主義の陣營に突貫した。所謂排外運動（排貨運動、反基督教運動、經濟絕交等は其戰術である。）の興起は之である。拳匪の排外運動と最近の夫との相違は其戰術に、科學的なるや否やの差はあるが、民族獨立希求の精神は同一である。

「五四運動」以來の學生運動は、支那國民に對し、近代國家組織運動を啓蒙した功蹟は著しい。鼓腹擊壤の民は、政治的支配に對しては常に無關心に非れば、拒否的態度に習慣付けられて來て居る。然るに一九一九年以降の支那の小工業の發展は（歐洲戰亂による列國の東洋を顧みる能はざるに因る）「國貨」「愛國」語の大流行を見た程、支那歷史上に於ける特筆的事實を現した。

次で勞働階級の排外戰線への參加が是に續いた。支那に於ける近代工業の大部分は、外國資本の支配下に在り、僅に一部分が國營企業（鐵道の如き）之に次ぐものは軍閥官僚の投資せる官僚資本にして、純然たる商工階級の資本集積は微々たるものにして家內工業小企業の域を出でなかつた。勞働運動は先づ南方工業區なる英國の對支企業の中心點たる香港に黎明を見た。其他の工場に雇傭せらるる勞働者の大部分は廣東人である。支那各地に於ける技術職工の大部分は工業的先驅地たる香港に養成せられた廣東人の多いことは支那の勞働運動發展に大關係がある。歐洲戰後の物價騰貴と參戰支那勞働者の歸國により一九二一年以後支那に勞働階級解放思想（戰術は賃銀値上一天張りであつたが）が動き始めた（日本の思想的實際的教訓も大い）

廣東人中心の勞働運動の戰線も當然に北方軍閥官僚との戰外國資本家への打撃として現はれた。而も勞働階級運動は國民革命運動戰術最も有効なものであつた。斯くして國民革命の戰線は國民黨の革命主義者に發し、次で學生階級により啓蒙され、小商工階級の共鳴となり、勞働大衆に至て完全なる武器を得た。階級鬪爭の戰術は支那に於ては近代國家組織の國民革命の戰術として應用せられる點に注意を要す。

廣東に於ける勞働運動と廣東政府との關係はこの事實を裏書く有力なものである。一九二〇年の香港機械工聯合會の同盟罷工は約二萬の廣東人職工十五日に亘り廣東政權の保護の下に目的を達し、一九二二年香港海員罷工は全香港の支那人勞働者の總罷工となり五十五日間の罷工となり、國民黨政府と香港政廳との對峙となり、香港政廳の屈服と船主側の讓歩によつて解決した。一九二四年には廣東沙面に於ける英國領事との間に爭端起り沙面支那人勞働者の罷工十五日を見、最近上海事件(沙基虐殺事件)以後一年に亘り二十數萬の對香港封鎖罷工の民族的色彩は驚くべきものがある。

四、南人と北人の爭鬪

支那に於ける南人北人の別は、史上既に幾多の文獻を有つ。最近十五ケ年民國史上の表面上の事實に徵しても南北の爭は人口に膾炙して居る自分は其表面史實のうらに流るるの思潮の上から一觀察を試みる。南人北人は必ずしも地域を劃界しない。強て求むれば現代に於ては長江の南北とすべきであらうが、思潮として南方精神と北方精神の爭として觀る。

先づ地圖を開いて見よ。滿蒙の北境は暫く措く。北方精神の中心北京の緯度は北四十度線に當り、南方の一中心廣東は北二十三度線に當る。其垂直距離の差十三度を示す。之を歐洲大陸に比較して見ると露都モスコーと伊太利のローマの距り、西班牙マドリツドと諾威コペンハーゲンの距りであり、歐洲列國の大部分は其間に含まれる。米洲に於ては紐育とメキシコの距り、日本では盛岡と臺南の距りである。この地理的環境の相違より來る人文上の影響は決して少くない。支那の史籍に「淮南の橘(柑橘)淮北に移植すると枳に變る」と。セリグマン氏は米國の地理的經濟環境と人文關係を論じて「東部地方の氣候不順、乾燥と地味の不良は其地に起される企業が國營に非れば政府の保護を要求するの類なるに對し、西部地方は氣候溫暖雨量に富み、土地肥澤なるの結果企業は私人的にして國家の干渉を悅ばず」と。支那の北方の寒冷乾燥瘦土なるに對し、南方は暖和濕潤肥沃である。其結果南方の富は北方に三倍し、民風も亦北

の標悍侵略的武力的官權的なるに對し、南方の典雅にして自由、自治的、組合的、商業的な特徴をもつ

從て之を歴史的に觀察すれば、北方民族は常に南方征服を以て一貫して居る。五胡十六國の昔は措く。近く明は淸に逐はれて南方に下り吳三桂鄭成功滅びて後は南洋印度支那に移る者すら少くなかつた。南方に於ける淸朝呪咀の傳統は淺くなかつた。十八世紀末廣東に起た洪秀全の太平天國が南方十省を風靡して北方朝廷をして脅威せしめたのも、南方なればこそであり。孫文が之に倣て興中會を起し、洪門會を利用し、排滿興漢の旗の下に明人遺孫の華僑の後援の下に、不撓の革命事業を繼續して來たのも南方の環境である。(孫文は南京政府に於て臨時大總統に推された第一日に明の太祖陵に親ら革命成就の報告祭を行つて居る。)

一八九八年支那王國に最初の近代國家組織の革命を與へんとした、康有爲梁啓超の徒も廣東人であり、之を拒んだ滿廷の權臣の大部分は、北方人であること勿論である。孫文の「興中會」と合同した黃興の「華興會」は湖南靑年の結社であり、章炳麟の「光復會」は江浙間の學徒の群である。この三團體の合同結社たる「中國同盟會」こそは近代國家組織の理想を行つ"Republic of China"を創造したものである。中華民國の實體たる現代支那が北方に於ては北方思想の代表たる袁世凱以下の北洋軍閥や徐世昌以下の官僚の手に握られて今日南北相對峙する所以のものは何が故であらうか。

支那の歴史を貫く北方民族の南方征服が經濟的原因であることは、何人も疑はぬところであらう。最近に於ける南方人の反撥的氣運は北方民族の標悍に拘はらず、其團體的無組織による弱點に對する進出であり、被搾取に對する自覺的反抗であらう。是の自覺が何によつて生れたか。私は之を歐洲に發達した科學文化の支那傳播が南方に開始されて、北方の之に背きしに因るものなりと信ずる。之に加ふるに經濟的環境の有利は南方をして北方の搾取に甘んぜざるに至らしめ、其自由精神は民主共和の理想國家を夢みて革命事業に走らしめたものであらう。

彼等南人は民國革命成就後の局面に於て、先づ袁世凱に打倒された。袁の死後は段祺瑞を中心とする北方軍閥の聯合戰線に敗北した。併し乍ら學生運動の精神に於て北方精神に反撥し、勞働運動に於て完全に北方精神を脅威して居る。廣東及國民黨は南方精神の根據地である。民國の將來は世界國家思想の子孫たる北方精神と、近代國家精神の南方精神との爭鬪が尙相當の年月戰はれるであらう。

五　北京政府と封建社會

清朝政府は王者の專制と共に德政を布いたが、清朝滅後の封建分裂は民衆にとつて禍である。兵亂と天災は增しても救はれる道は無かつた。外國貿易による資本主義的生產貨物の侵入と農民の疲弊とは、貿易の逆調を益甚しからしめ失業群は夥しき數に上る、封建軍閥はこの間に於て私兵を養成して勢力團體を形成し、各地方に其地盤を占有して抗爭する。擬制的存在物たる北京政府は、彼等に便宜的地方長官の承認を與ふることによつて、地方の秩序を維持せしめる。地方軍閥は其地盤內の民衆を誅求搾取して相剋に耽る。一省を征服し數省の勢力範圍を得、遂に北京上洛の野望を起す。敗挫せる軍閥配下の兵は或は相手方の軍隊に改編せられ或は散て土匪となる。故に支那に於ける兵と匪とは同質異名物である。一省の頭目を督軍（督辨、督理）といひ、數省に權力あるものを巡閱使といふ。小なるものは師長であり旅長であり、各其地盤に割據する。

其勢力大に兵增せば當然に地盤の大を要する。收稅多き土地は彼等の爭鬪の目的物となり易い。一九二三年末には、直隷派と安福派との上海爭奪戰より、第二奉直戰が生れ、一九二五年末の第三次奉直戰も上海爭奪戰であつた。北京天津は常に軍閥爭奪の目的となること既述せる通りである。北京はともかくも列國承認の政府の所在地にして一定の收入（北京入市稅、外國管理の鹽稅や關稅餘款、乃至は、借款の便宜があり得る）最も確實なるものがあるが故に、中央政府の主人翁たる虛榮心と共に、支那軍閥を誘惑することは想像に難くない。一度北京の主人翁たる軍閥は、其配下の訓練なき烏合衆の兵は相當の多數となり、部下諸將の分領するところとなり、又彼の全國統一の野心を誘起し、紛亂を惹起し遂に分解作用行はれて、彼の生命は久しからずして亡ぶること之を實例に徵せば明である。

×　×　×

共和民國成立以後の民國が南北の爭鬪なることはあまりによく知られて居る。南方革命主義者は南京に臨時政府を建てたが、悲しい哉革命勢力は北方に一指をも染め得なかつた。南北統一の惡夢にくらまされて、清廷を傀儡とした北方軍閥官僚の勢力は、南方の民主勢力を欺瞞して、都を北京に定めて實權を掌握した。袁世凱を中心とする北洋軍閥及彼以後の官僚の勢力は、北方に於て依然たる封建政治を形成した。南方派の擁れる國會（近代國家への第一步としての）は袁世凱のために破碎せられ、袁は洪憲帝への道を急いだ。されど偶然に成りし如く見えた民主國の名は環境的に何等の實力なかりしも、時勢の流れ

はこの逆轉を許さなかつた。

されど其後の拾收は依然として北洋軍閥の手に在つた。再び南方民衆派の據る國會は北方督軍團の聯合勢力に破壞された。手兵僅に六千を以て復辟を斷行した張勳、失意逃避中の段祺瑞の「共和恢復」の標榜何れも北方封建空氣中の産物ならぬはない。南方勢力が北京の舞台を斷念して、廣東に籠り、民國の正朔を海南に有するに甘んじた結果、北方封建社會は相尅の特徴を發揮し出した。段祺瑞を中心とする安徽派（北洋閥の一分派）は、自派專制に便利な新國會を招集し、夫によつて前淸の遺老徐世昌を總統とし、南方に對しては武力統一政策をとつた。北洋閥の他の一派直隸派は、奉天派と聯合して安徽系に對し打擊を加へた。（一九二〇年）次で奉直間に爭覇戰あり、直隸の勝利となり、名義上の舊國會を招集し、愚直なる曹錕を大總統に選ばしめ（議員の大部分の買收により）次で新憲法の發布を見た。この憲法と直隸軍閥の執政とは到底兩立せざるものなるに、之を同時に公布するところに支那の封建性の特徴がある。次で直隸派の武力統一政策は再び第二奉直戰爭を惹起させ、直隸派は敗退し、安福官僚と奉天軍閥の中央政府への復活となり、同時に直隸派から、國民軍系軍閥の分立となつた。次で奉國軍閥間の爭鬪となり、一時危殆に瀕せる奉天軍閥は幸運にも復活し、奉直聯合戰爭成立し（其離合集散の機械的なるを見よ）國民軍閥を中央より西北に逐ひ、今や中央政府を挾んで奉直の對峙せること、一九一九年安徽派敗退後の局面と同樣である。袁世凱死後の北洋軍閥間の分解作用は春秋戰國の夫に異るものなく、只各軍閥の背後に資本主義列國の魔手の動くことが大なる相異である。最近南方國民黨は、國民軍々閥を利用して其政策を北に宣傳せんとする戰術は注意に値する。との事實は安直、奉直戰時代の局面と稍異るもののあるを見る所以である。

斯くて北京を中心とする軍閥の爭覇戰は、彼等が並び立つ列強の脅威と、民衆精神の支那社會の一構成として擡頭しつつあることに無關心なるを示す中世的素朴な妄動と認むべきであらう。

× × ×

此局面の沈滯を轉回し得ざる一原因として、支那の經濟社會の非組織的なること、國民經濟の未成立を指摘する。國民經濟は政治的統一組織と或點まで並行する。現代支那を見よ、國境線の不確實なることは領土認識の薄弱を示し、擬制的北京政府の存在は主權の認識の薄弱を示す。列國承認の北京政府は其時々に變化する一軍閥の傀儡に過ない。第三に軍備に就て見よ、支那は各封建軍閥の私兵を有するも、國家の名に統制せられた一

五　北京政府と封建社會

清朝政府は王者の專制と共に德政を布いたが、清朝滅後の封建分裂は民衆にとつて禍である。兵亂と天災は增しても救はれる道は無かつた。外國貿易による資本主義的生產貨物の侵入と農民の疲弊とは、貿易の逆調を益甚しからしめ失業群は夥しき數に上る。封建軍閥はこの間に於て私兵を養成して勢力團體を形成し、各地方に其地盤を占有して抗爭する。擬制的存在物たる北京政府は、彼等に便宜的地方長官の承認を與ふることによつて、地方の秩序を維持せしめる。地方軍閥は其地盤內の民衆を誅求搾取して相尅に耽る。一省を征服し數省の勢力範圍を得、遂に北京上洛の野望を起す。敗挫せる軍閥配下の兵は或は相手方の軍隊に改編せられ或は散て土匪となる。故に支那に於ける兵と匪とは同質異名物である。一省の頭目を督軍（督辨、督理）といひ、數省に權力あるものを巡閱使といふ。小なるものは師長であり旅長であり、各其地盤に割據する。

其勢力大に兵增せば當然に地盤の大を要する。收稅多き土地は彼等の爭鬪の目的物となり易い。一九二三年末には、直隷派と安福派との上海爭奪戰より、第二奉直戰が生れ、一九二五年末の第三次奉直戰も上海爭奪戰であつた。北京天津は常に軍閥爭奪の目的となること既述せる通りである。北京はともかくも列國承認の政府の所在地にして一定の收入（北京入市稅、外國管理の鹽稅や關稅餘款、乃至は、借款の便宜があり得る）最も確實なるものがあるが故に、中央政府の主人翁たる虛榮心と共に、支那軍閥を誘惑することは想像に難くない。一度北京の主人翁たる軍閥は、其配下の訓練なき烏合衆の兵は相當の多數となり、部下諸將の分領するところとなり、又彼の全國統一の野心を誘起し、紛亂を惹起し遂に分解作用作はれて、彼の生命は久しからずして亡ぶること之を實例に徵せば明である。

× × ×

共和民國成立以後の民國が南北の爭鬪なることはあまりによく知られて居る。南方革命主義者は南京に臨時政府を建てたが、悲しい哉革命勢力は北方に一指をも染め得なかつた。南北統一の惡夢にくらまされて、清廷を傀儡とした北方軍閥官僚の勢力は、南方の民主勢力を欺瞞して、都を北京に定めて實權を掌握した。袁世凱を中心とする北洋軍閥及彼以後の官僚の勢力は、北方に於て依然たる封建政治を形成した。南方派の據れる國會（近代國家への第一步としての）は袁世凱のために破碎せられ、袁は洪憲帝への道を急いだ。されど偶然に成りし如く見えた民主國の名は環境的に何等の實力なかりしも、時勢の流れ

はこの逆轉を許さなかつた。

　されど其後の拾收は依然として北洋軍閥の手に在つた。再び南方民衆派の據る國會は北方督軍團の聯合勢力に破壊された。手兵僅に六千を以て復辟を斷行した張勳、失意逃避中の段祺瑞の「共和恢復」の標榜何れも北方封建空氣中の産物ならぬはない。南方勢力が北京の舞台を斷念して、廣東に籠り、民國の正朔を海南に有するに甘んじた結果、北方封建社會は相剋の特徴を發揮し出した。段祺瑞を中心とする安徽派（北洋閥の一分派）は、自派專制に便利な新國會を招集し、夫によつて前清の遺老徐世昌を總統とし、南方に對しては武力統一政策をとつた。北洋閥の他の一派直隷派は、奉天派と聯合して安徽系に對し打擊を加へた。（一九二〇年）次で奉直間に爭覇戰あり、直隷の勝利となり、名義上の舊國會を招集し、愚盲なる曹錕を大總統に選ばしめ（議員の大部分の買收により）次で新憲法の發布を見た。この憲法と直隷軍閥の執政とは到底兩立せざるものなるに、之を同時に公布するところに支那の封建性の特徴がある。次で直隷派の武力統一政策は再び第二奉直戰爭を惹起させ、直隷派は敗退し、安福官僚と奉天軍閥の中央政府への復活となり、同時に直隷派から、國民軍系軍閥の分立となつた。次で奉國軍閥間の爭鬪となり、一時危殆に瀕せる奉天軍閥は幸運にも復活し、奉直聯合戰爭成立し（其離合集散の機械的なるを見よ）國民軍閥を中央より西北に逐ひ、今や中央政府を挾んで奉直の對峙せること、一九一九年安徽派敗退後の局面と同樣である。袁世凱死後の北洋軍閥間の分解作用は春秋戰國の夫に異るものなく、只各軍閥の背後に資本主義列國の魔手の動くことが大なる相異である。最近南方國民黨は、國民軍々閥を利用して其政策を北に宣傳せんとする戰術は注意に値する。此の事實は安直、奉直戰時代の局面と稍異るものあるを見る所以である。

　斯くて北京を中心とする軍閥の爭覇戰は、彼等が並び立つ列強の脅威と、民衆精神の支那社會の一構成として擡頭しつつあることに無關心なるを示す中世的素朴な妄動と認むべきであらう。

× × ×

　此局面の沈滯を轉回し得ざる一原因として、支那の經濟社會の非組織的なること、國民經濟の未成立を指摘する。國民經濟は政治的統一組織と或點まで並行する。現代支那を見よ、國境線の不確實なることは領土認識の薄弱を示し、擬制的北京政府の存在は主權の認識の薄弱を示す。列國承認の北京政府は其時々に變化する一軍閥の傀儡に過ない。第三に軍備に就て見よ、支那は各封建軍閥の私兵を有するも、國家の名に統制せられた一

兵をも有しない。國防上一個の要塞をも有しない。海岸線の長きに拘はらず海軍力を有たない。(廣東上海等に浮ぶ小艦の何等の實用たらざるは明である)支那領土には國家として何等の防備が施されて居ない。

近代國家の基底は國民經濟に在る。然るに支那には國民經濟の萠芽はあるが何等の聯絡も系統もない。國民經濟の存在せざるところに近代國家の組織は成立しない。自然的に發達せる自然經濟としては割合に進歩して、意思經濟に類するものなきにしもあらざれど、是を以て國民經濟の存在と誤認することは出來ぬ。原來支那は物質的環境や、社會生活狀態四圍の民族關係等により、政治經濟の發展の可能性を弱くした。支那に於ける租稅の觀念犧は牲である。(報償ですらない)。貨幣制度は今日尙慣習上其改革統一を不便とするものの數より遙に多い。支那の社會的生活は國家的政治の拒否の歷史である。從つて民間社會の發達たる經濟行爲に何等の統制と連絡のない地方的分立たるは當然である。

六　廣東と國民黨と國民政府

廣東は支那解放運動に於ける地位として二つの重要な地位をもつ。其一は對北方封建軍閥に對する國民黨の策源地としての近代國家組織運動の本營なること。第二に英國帝國主義の對支策源地たる香港に對する關係に於て、無產階級團結の中心勢力の存在地たることである。この二つは近代支那解放途上の二大問題なるを以て、廣東は支那改造の大本營たるの地である。

廣東が支那に於ける、歐洲文化の消化者たりし所以は、淸朝政府の一般海禁時代に於ける特許開港地(一七一五年南京條約の開港前一世紀である)として英國東印度會社を通じて歐洲文明の輸入地となつて居た。廣東は珠江の海口を溯る約七十哩(香港との距り八十哩)の點に在り、現時人口百萬を有する南方支那有數の都市である。一八四〇年の阿片戰爭の火元にして、英國艦隊に蹂躪され、香港が英國に割取され、次で香港上海の發展となり、廣東の繁榮は奪はれた。對香港との爭鬪意識はこの秋より始まる。民國革命の狼火は、廣東の孫文により起され、北方の封建的武斷的勢力に對し南方精神を代表し終始對峙し來たのは其地理的文化的經濟環境上偶然ではない。孫文の義擧(一八九二年)以來其背後に在て之を援助せるものは華僑(明人の子孫の多くがある)の近代組織國家への希望が與て力あつた。(彼等は外國に於て何等自國々家の保護を受け得られないので。)一九一七年北京國會は北方軍閥團のために解散せられて、國民黨系(國民黨は既に一九一三年袁世凱のために解

散させられて居た）の議員は廣東に非常國會を開いて民國の正朔海南に存すの意氣を示した。されど當時の廣東の實力者は廣西の陸榮廷一派の軍閥であり、孫文系革命派にとつては尙安住の地ではなかつた。一九二〇年末廣東人の廣東熱の盛なるの機に於て陳炯明が東江より起て、廣東に進み陸榮廷の勢力を驅逐して以來、廣東は完全な國民黨系の根據地となつた。

× × ×

國民黨の歷史を略說する。民國革命の成就者中國同盟會（第三節參照）が、一九一二年「中國國民黨」を組織して北京の國會を支配し、袁世凱との戰に敗れて、同盟會一派は日本に亡命して、「中華革命黨」を組織したが、其後の黨務は沈滯して極めて悲慘な有樣であつた。歐洲戰中に起つた歐洲革命の刺戟により再び活機を得、一九二〇年上海に於て「中國國民黨」の復活となり、無產階級を共陣營内に收容するの方針が立てられた。國民黨復活の所以である。陳炯明により廣東が軍閥の手より恢復され、國民黨の政府が成立した。

孫文大總統（民黨派の國會にて選擧）の下に新政府は善政政府を組織し、支那の社會惡たる禁賭禁烟を勵行し、廣東市制を整頓し、廣東權領省により宣傳政策をとり、同時に北伐革命戰が實行せられたが、陳炯明との間に感情融和を缺き、孫文は廣東を逐はれて上海に流寓した。其後の孫文は銳意國民黨の充實に專心し一九二二年及二三年に發表せる新政綱は、民衆への叫びかけを見る…し支那民衆の痛苦は國内軍閥と列國帝國主義による。就中勞働階級の政治經濟上の發表は望ない。我黨は三民主義により奮鬪し來れるも努力足らず民間に徹底しない。今後は勞働階級と共に新國家の建設に猛進せんとす。」其具體的方針は、國際平等地位の取得、普選實行、言論集會結社信仰自由、地權平均、大企業國營、勞農保護、婦人平等等にある。其結果黨員次第に增加し、一九一三年時代とは異れる内容に於て、國民黨の支那に於ける意義は重大となり來つた。一九一九年以來の學生階級の組織團結と、國民黨との關係は密接となり、又一九二二年頭の香港海員罷工以後支那の勞働運動に對する國民黨の立場は有利となり、國内黨員二十六萬を數へ支那四百餘所に設立され、軍事政治を分離し、本部を擴大して宣傳に重きを置くに至つた。廣東上海北京を最も活躍の中心とし、漢口哈爾賓、南京、安慶、天津等之に次ぐの狀況を呈した。

一九二三年雲南軍を以て陳炯明軍を破り孫文等廣東に入る。孫文大元帥に推され再び北伐の師を出せしも利あらず。一方支那各地に於ては學生團體（中國共產主義青年團、中國共產黨最も有力）に指導せられて國民運動勞働運動により、對內的には

軍代官僚に對外的には列國資本主義に打擊を與ふる大なるものあり、上海方面に於ける此等新青年團體の意向か國民黨との共同戰線を主張し、又露國との國交恢復による露國革命人との交通により其の方略に倣つて國民黨改組をなさんとする氣運盛となり、一九二四年一月國民黨全國代表大會となり、國民黨が大衆政黨としての組織と訓練を成就せしめた。

中國國民黨全國代表大會宣言（支那の現狀、國民黨の主義、國民黨の政綱、施行方法）に於て、封建軍閥の跳梁と帝國主義列國下の半植民地狀態の支那を救ふためには、在來各黨――立憲派、聯省自治派、平和會議派、商人政府派――の能くするところに非ずして、三民主義――民族、民權、民生――に則る國民革命運動によるの外なき所以を述べ、國民黨は其政綱として對外的に一切不平等條約を撤廢し半殖民地狀態の脫離を要求し、對內的には、省縣自治主義をとるも、中央と地方とは其權限を均分して地方分權に偏せしめず、民衆の自由を確認し、農民、勞働階級の生計を保證し、敎育の普及を計る。社會的には土地法の制定と獨占企業の國營を以て資本節制の目的を達するとなし、其革命事業施行時期を、軍政、訓政、憲政の三期に分け、憲政期に達したる時、中央政府に五院――行政、立法、司法、考試、監察――と五權――創制、複決、罷免、選擧、を試行し、憲法は其成績によつて立法院をして議定せしむる。憲法發布の日は憲政告式の日で全國國民の選擧權を行使し建國成るの秋である。

國民黨々規十二章八十六條を制し、其重要なる部分を摘錄すれば、其黨部の組織に於て、各地に黨部をおき共に包括される小黨部（團體、小區等）とにて上下關係をなし、其機關としては、地方黨員大會、地方代表大會、全國代表大會あり、常務執行機關として、本黨の基本組織（細胞として）區分部執行委員會（區分部黨員大會）全國執行委員會（全區黨員大會又は代表大會）全縣執行委員會、全省執行委員會、中央執行委員會（最高黨部）である。特別行政區（省黨部と同格）重要都市（縣と同格）には特別地方黨部をおく。最高黨部は全國代表大會にて其閉會中は中央執行委員會により執務し、其中より常務委員を互選し秘書處を組織する。中央委員は全國代表大會にて選擧され（同時に候補中央委員及中央監査委員同候補委員も）第一回大會には中央執行委員二十四人（第二回は三十六人）候補十七人（第二回は十二人）監査委員五人（第二回は十人）候補五人（第二回は十七人）を選擧した。監査委員は黨の財政、黨務の監査職員の黨規及黨の方針に對し忠實なりや否やを糾彈する。其他秘密公開の各種團體內に黨團なる組織を有し、所屬黨部の執

行委員の指揮管轄に屬し、非常團體内に於て宣傳擴張を計る。

國民黨總黨部内には、組織、宣傳、勞働、農民、青年、婦人、商民、海外の各部をおき、勞働運動は中華全國總工會により、(殆ど全國の勞働組合を結合して居る)農民は農民協會により(廣東一省に過ない)商民部は商民協會により、青年部は中華全國學生聯合會(上海にあり大部分の各地學生聯合會を統轄す)により、組織と訓練とを進めて居る。勞働者は總工會と共同して對香港罷工と經濟斷行に鞅掌して大成功を收めて居る。第一回及第二回(一九二六年一月)大會に於て各部部長は所謂共産系と稱せられる人々によつて占められて居るが、最近(五月十五日の評議會にて國民黨五人共産黨三人と分野を決した如くである。

本改組に於て最も注意すべきは中國共産黨員の參加である。中國共産黨は一九二一年の成立にして、今日尚秘密結社である。共産黨は支那の勞働運動學生運動の發展に非常な寄與を與へて來た。國民黨が共産黨員を其黨内に誘引したのは、其組織的技術と訓練を以て國民黨を改造し、新運動と新生命を得んとしたのに外ならぬ。共産黨側は國民黨の傘下に於ては極めて便利なるを以て共同戰線に立つ限り差支なきを以て孫文の勸誘に對し悦んで應じたのである。同時に國民黨の聯露政策は決定したのである。共産黨員が改組に際し、其綱領黨規の起草に共産組織的技術と鬪爭性氣分を織り込んだことは大なる貢獻である。

一九二四年末廣東奉天天津(安福派)の三角同盟は、直隸派を討平し、所謂甲子革命の善後策のため、孫文は國民黨を率いて不平等條約撤廢、國民會議召集を標榜して北上し段祺瑞と協働せんとしたが安福派官僚は遂に孫文を理解せず、北京は依然として軍閥勢力の根底深く、南方精神を容れ得なかつた。一九二五年三月孫文は宿痾昂じて遂に起たず、革命六十年の生涯を閉ぢた。民國革命の父は逝た。されど其蒔きし種子は各地に廣く芽生えて今や覆すことの出來ぬ丈けの根を、青年智識階級の中に張て居る。

×　×　×

孫文の死後、國民黨は左右兩派に改組以來の大分裂をなした。即ち國民黨が共産黨を抱括して以來黨內には之に對する賛否の論が對立した。近代國家建設を目標とする、國民革命戰上に於ては充分問題となり得る。殊に中國共産黨は第三國際の支那支部の關係を有するを以て、問題は更に複雜であつた。孫文は之に對し共産黨員の各個が國民革命の精神と活動とを以て共働する以上、抱括差支なしといふ意見であり、民主主義は……主義を抱擁し得るとまで說いた。斯くて孫文の死後、右派(馮自由、張繼等)は北京に留て、國民黨同志俱樂部を創立して正系と稱し、左派は胡漢民、汪兆銘等に率いられ南歸し、七月一日には國民政府を樹て對北方の陣營を繼續することになつた。北京の同志俱樂部は軍閥勢力の中心地に在りては何事をもなす

能はず、上海に移り一部の非革命自由主義者と合同し（唐紹儀章炳麟）支那に於ける中間勢力たらんとしつゝある。

廣東國民政府は創めて完全な「以黨治國」精神に則る政府を形成し、國民黨中央執行委員會の指揮監督の下に政府委員（十一人第二回大會後十八人となる）及主席委員を以て委員會議制度となし、政務機關として、軍事部（部長始め許崇智後に譚延闓）外交部（部長胡漢民）財政部（始め廖仲愷後は宋子文）の三部をおき別に監察委員（監察院）懲吏委員（懲吏院）大理院（大審院）をおく。政府委員は五名の常務委員を以て平常の事務を處理し、必要な場合には各種委員會を組織する。（軍事委員會政治委員會、教育行政委員會等の如し）省には省政府（廣東と廣西に在り）をおき民政、財政、教育、交通、實業、農工、軍事各廳をおき廳長により組織せらるゝ省務會議（主席一人互選）により執政する。廣東市は市政委員會（各職業團體より委任せる委員十八名より成る）により別に公安局を以て治安事務に當る。特殊な機關として「徐盜安民委員會」「廣東大學調査委員會」「黃埔築港委員會」等あり。

軍制は中央政治軍事學校（軍官學校）により革命精神の軍事政治教育を施し、將校を養成し、教導團學生軍（七千）を中堅とし在來軍隊七軍（三三制）を有し、政治訓練部より各隊に黨代表を派して……精神を宣傳し、……軍隊の養成に當る。教育に關して目下教育行制委員會に於て學制其他を研究調査中に在る。

國民黨改組後三年に達し（本年一月第二回全國代表大會を開き二年の間黨務報告をなせるに徵すれば成績極めて良好である。國民政府の成立後約一ケ年に垂んとし、これ亦非常な成績にして、其建國革命軍は省內に於ける反動勢力を統率せるのみならず、廣西をも完全に協同者とし、今や北方湖南へ進まんとして居る。湖南江西方面に於ける、宣傳亦非常に有効なるものあり、長江進出難事に非るを思はしめる。只共產派を中心とする左右兩派の爭鬪は政府部內の唯一の暗礁である。

七　明日の支那と日本

私は結論として、明日の支那と日本に就て數言を費す積りであつたが、今や其必要をあまり認めない。以上六項の敍述に於て讀者各位の自由なる判斷に訴ふるの賢明なるを思ふが故である。唯自分の遺憾に思ふのは、頁數の關係にて、廣東對香港の罷工及經濟絕交の模樣を詳述することの出來なかつたことである。國民黨が反帝國主義政策として香港の英國資本家に對する挑戰は、日本の利害に關し對岸の火視せられぬものなきを保し難いし、國民黨の北方政權に對する關係の將來も亦日本の立場に重大なる關係を生ずるものであることは明である。

現在支那の北方の混亂と素朴に比して、南方の理智と秩序の對立は、現場偏目の自分として斷言し得る。

（一九二六・六・一）

在支外人記者の支那觀

現代支那の眞相

ユナイテツト・プレス
北京通信員　ランドル・グールド

世界歴史の如何なる時代に當つても、そこには或る一つのきまつた焦點が見出され得る。すなはち、最も重大な事件が集中されてをる所の舞臺が見出されるのである。

所で吾々は、現代に於けるさうした重要な舞臺といへば、直ぐヨーロツパだと考へるといつた風に習慣づけられてゐる。多年の間、否幾世紀に亘つてすら、ヨーロツパは全世界の思想と經濟的發達とを指導してきてゐるのである。北米合衆國及び南アメリカの最近の發達は最も保守的な西洋の思想家連をしてさへ世界は既に昔の世界より一層大きくなつてゐるといふ事實を種々の點に於て認めさせかけてゐるのである。斯くほかの點では然うであるにも拘らず、ヨーロツパの政治的優越を確信することの一點に至つては、南北兩米の發達といふ事實もその信念に微動をだに與へかねてきてゐるのである。

而して支那は、或る未開拓の經濟的資源と時代遲れな學問の一からげとで知られてゐるに過ぎないやうな一大人類貯藏所だぐらいにしか一般には考へられてきてゐないのである。歴史に於ける支那の過去の地位は承認せられてきてゐる。併し其の將來の地位は看過せられ無視せられてきてゐるのである。

が、しかし、私の個人的見解を陳べるならば、今日の世界に於ける事件の焦點は支那に集つてゐるものである。支那は死ん

でゐない。支那は立派に活きてゐる。而して支那の四億の人民が、ヨーロッパの小つぽけな諸國民を遙か後方へと掃きやつてしまふやうな事柄に干與するに至る日も遠くはないかも知れないのである。

若しヨーロッパが今日支那を閑却してゐるものとすれば、支那の方も亦それに劣らずヨーロッパを度外視してゐるものである。ヴエルサイユ條約、ドーズ案、國際聯盟、ロカルノ會議、といつたやうなものは今日の支那に於て無意義のものである。――そしてそれは主として、支那は支那自身の問題の解決に沒頭してをるといふことに因由してゐるものである。

こゝにある一つの要素が支那を支配してゐるといふ閑却出來ない事實が存する。その要素とは即ちミリタリズムである。ミリタリズム以外のものについて喋々することは愚である。實に、ミリタリズムは鐵道を占領して居り、貿易を窒息せしめてをり、農民を掠奪してをり、何百萬といふ人民を生產工業から離隔してをり、そして、如何なる政府が存立せしめられようともそれに號令を下してゐるものである。

しかし、それは事の半面に過ぎない。

ミリタリズムはこゝでも亦外の所でと同樣に單に一時相に過ぎないものである、と私は確信してゐる。此の世界はある經濟的基底の上に打建てられてゐる所の世界である。ミリタリズムは、吾々人類が總て滅亡してしまふものでない限り、世界の如何なる處に於てゞも永く存續せしめられ得ないものである。近代の兵器の上に行はれた改良は既に、全世界を破滅に陷れて了ふやうな戰爭が今日のところでさへ不可能なとではない、といふくらゐの點にまで達してゐる。……が併し、人類は幸に狂つてはゐない。而して、戰爭に對する人類の思潮は方に變轉しつゝあるのである。ミリタリズムはやがて餘りに浪費的な一つの贅澤沙汰だと認められるやうになるであらう。この事は結局支那に於て特に眞理たることが立證されるべきである。本來、支那人は平和主義者として生れついてゐるものである。といふことは次のことを意味するものである。すなはち、若し軍國主義者達は何等か支配的地位らしいものを贏ち得るならば、――そしてそれを彼等は今日の支那に於て現に得て來てゐるのだが、――ミリタリズムは一時その暴威を逞しうすることであらう。併し乍ら、支那の平和主義的な實際的な精神はつひに勝利を占めるに至るであらう。そしてミリタリズムが終に倒壞せしめられる場合には、それは恐らく世界の何處に於てよりも支那に於て最も完全に覆滅せしめられることだらう。

今日世界で最も重要な地點は支那であるといふ私の信念は實

に今述べたやうな理論的根據に立脚してゐるものである。もし支那が際限もなくその分裂を繼續するものとしたならば支那は早晩厄介な敗殘者以外の何ものでもなくなつてくるだらう。しかし、支那は然うならないだらうと信ずる。私は支那が遠からず或る轉換期に到達するものと信じてゐる。そして、その轉換期が經過した曉に於ては——支那が其の其の軍國主義者輩の脅威を除去して、産業に發展の機會を與へるやうになつた曉には——支那はヨーロッパや兩アメリカを驚倒せしめるやうなやり口で近代的な西洋流の技術方法を利用してのけることだらう、といふことを私は信ずるのである。

今、所要の平和と安寧とが與へられたとしたならば、支那はこの豫示せられた發達に向つて果して如何なる仕事をやつてのけることだらうか？支那は有らゆるものを持つてゐるのである。支那は豐富な天然の資源を持つてをる——單に一例を擧げたのみでも、支那の炭鑛的資源の擴りはどの程度まで及んでゐるものか今日何人も概略的にすら測知出來ないくらゐで莫大なものである。且つ、支那人は民族心理的にもまた個人心理的にも西洋の人民達と競爭して之を打破るといふ仕事に對しては理想的な適應性を持つてゐるのである。

支那人は非常に勤勉である。着實である。機械に對する十分な觀念を持つてをる。彼等は溫和な資性の持主であり、學問は益々發達して行つてをるし、從て外國思想も十分に攝取して行つてをる。私は彼等が豫想外に發明の才があり工夫に富んでゐるものだといふことが判つてくるやうになるだらうと信じてゐる。

かくの如く多忙なる支那に對抗するために、吾々は緖に疲弊し廢頽したヨーロッパと容易に自分自身の破滅となるかもしれないやうな物質的繁榮を以て方にはちきれさうな危險に瀕してゐる南北アメリカとを持つてくることしか出來ないやうな有様である。

私はロシヤ、印度、並びに日本に關して論及することは思ふ所あつて差控へる。が、たゞ、印度と日本が東洋國であることは動かしやうもない事實として、ロシヤも亦現に益々東洋化して行つてゐるのである。で、私は何か大袈裟な東洋同盟が出來上つて、人脅しの人文者流によつて誠しやかに描寫されてきたやうに西洋撃退のために蹶起するだらうといふやうな考へは少しも持つてゐないが、それはしても、ロシヤ、印度、並びに日本は、共通の利害關係の存在することに由ても亦自衞の一方法としても早晩何等かの形式に於て支那と相黨(くみ)しなければならないものである、といふことを私は信じて疑はぬものであるこ

でゐない。支那は立派に活きてゐる。而して支那の四億の人民が、ヨーロッパの小つぽけな諸國民を遙か後方へと掃きやつてしまふやうな事柄に干與するに至る日も遠くはないかも知れないのである。

若しヨーロッパが今日支那を閑却してゐるものとすれば、支那の方も亦それに劣らずヨーロッパを度外視してゐるものである。ヴエルサイユ條約、ドーズ案、國際聯盟、ロカルノ會議、といつたやうなものは今日の支那に於て無意義のものである。―そしてそれは主として、支那は支那自身の問題の解決に沒頭してをるといふことに因由してゐるものである。

こゝにある一つの要素が支那を支配してゐるといふ閑却出來ない事實が存する。その要素とは即ちミリタリズムである。ミリタリズム以外のものについて喋々することは愚である。實に、ミリタリズムは鐵道を占領して居り、貿易を窒息せしめてをり、農民を掠奪してをり、何百萬といふ人民を生産工業から離隔してをり、そして、如何なる政府が存立せしめられようともそれに號令を下してゐるものである。

しかし、それは事の半面に過ぎない。

ミリタリズムはこゝでも亦外の所でと同様に單に一時相に過ぎないものである、と私は確信してゐる。此の世界はある經濟的基底の上に打建てられてゐる所の世界である。ミリタリズムは、吾々人類が總て滅亡してしまふものでない限り、世界の如何なる處に於てゞも永く存續せしめられ得ないものである。近代の兵器の上に行はれた改良は既に、全世界を破滅に陷れて了ふやうな戰爭が今日のところでさへ不可能なことではない、といふくらゐの點にまで達してゐる。……が併し、人類は幸に狂つてはゐない。戰爭に對する人類の思潮は方に變轉しつゝあるのである。而して、ミリタリズムはやがて餘りに浪費的な一つの贅澤沙汰だと認められるやうになるであらう。この事は結局支那に於て特に眞理たることが立證されるべきである。本來、支那人は平和主義者として生れついてゐるものである。といふことは次のことを意味するものである。すなはち、若し軍國主義者達は何等か支配的地位らしいものを贏ち得るならば、――そしてそれを彼等は今日の支那に於て現に得て來てゐるのだが、――ミリタリズムは一時その暴威を逞しうすることであらう。併し乍ら、支那の平和主義的な實際的な精神はつひに勝利を占めるに至るであらう。そしてミリタリズムが終に倒壞せしめられる場合には、それは恐らく世界の何處に於てよりも支那に於て最も完全に覆滅せしめられることだらう。

今日世界で最も重要な地點は支那であるといふ私の信念は實

に今述べたやうな理論的根據に立脚してゐるものである。もし支那が際限もなくその分裂を繼續するものとしたならば支那は早晩厄介な敗殘者以外の何ものでもなくなつてくるだらう。しかし、支那は然うならないだらうと信ずる。私は支那が遠からず或る轉換期に到達するものと信じてゐる。そして、その轉換期が經過した曉に於ては——支那が其の共の軍國主義者輩の脅威を除去して、産業に發展の機會を與へるやうになつた曉には——支那はヨーロッパや兩アメリカを驚倒せしめるやうなやり口で近代的な西洋流の技術方法を利用してのけることだらう、といふことを私は信ずるのである。

今、所要の平和と安寧とが與へられたとしたならば、支那はこの豫示せられた發達に向つて果して如何なる仕事をやつてのけることだらうか？支那は有らゆるものを持つてゐるのである。支那は豐富な天然の資源を持つてをる——單に一例を擧げたのみでも、支那の炭鑛的資源の擴りはどの程度まで及んでゐるものか今日何人も概略的にすら測知出來ないくらゐで莫大なものである。且つ、支那人は民族心理的にもまた個人心理的にも西洋の人民達と競爭して之を打破るといふ仕事に對しては理想的な適應性を持つてゐるのである。

支那人は非常に勤勉である。着實である。機械に對する十分な觀念を持つてをる。彼等は溫和な資性の持主であり、學問は益々發達して行つてをるし、從て外國思想も十分に攝取して行つてをる。私は彼等が豫想外に發明の才があり工夫に富んでゐるものだといふことが判つてくるやうになるだらうと信じてゐる。

かくの如く多忙なる支那に對抗するために、吾々は縱に疲弊し廢頽したヨーロッパと容易に自分自身の破滅となるかもしれないやうな物質的繁榮を以て方にはちきれさうな危險に瀕してゐる南北アメリカとを持つてくることしか出來ないやうな有様である。

私はロシヤ、印度、並びに日本に關して論及することは思ふ所あつて差控へる。が、たゞ、印度と日本が東洋國であることは動かしやうもない事實として、ロシヤも亦現に益々東洋化して行つてゐるのである。で、私は何か大袈裟な東洋同盟が出來上つて、人脅しの人文者流によつて誠しやかに描寫されてきたやうに西洋擊退のために蹶起するだらうといふやうな考へは少しも持つてゐないが、それはしても、ロシヤ、印度、並びに日本は、共通の利害關係の存在することに由ても亦自衛の一方法としても早晩何等かの形式に於て支那と相黨(くみ)しなければならないものである、といふことを私は信じて疑はぬものであること

とを附言しておきたい。

現在のところでは、支那に於て最も重大な地位を占めてゐるものとして考へられることを要する外國民は三つに過ぎない。すなはち、ロシアと日本と北米合衆國の三つである。イギリスは外見上巨大な勢力を持つてゐるやうに見えるけれども、イギリスの重要性はもはや減退に傾いてゐると私は信ずるのである。イギスリはその貿易業者等の欲求してゐる特權を支持して行くことが出來ないのである。而して、時日の經過するに隨て此等イギリスの貿易業者達は可成りの程度までその貿易先を他の領野に求めるに至るだらう。といふことが信ぜられてをるのである。こゝに述べたことが事實それに相違ないことだといふことは、今日現に支那に居住してゐるイギリス人の大抵のものによつて無論烈しく否定されるにきまつてゐる。しかし、イギリスの見地は、支那に於てある永久的根柢の上に立つて成功を收めるためには、餘りに融通の利かなすぎるものだといつた感じが私にはするのである。それについては、昨年の夏に起つたボイコットの委曲がよく這般の消息を物語るものとして重要な意義を持つてゐる。すなはち、當時日本の貿易上の地位は、ある程度まではそれがあつたにしても、イギリスのそれに比べれば遙かに惡いものであつた。然るに、日本は策を用ひ常識を働せかて臨機の處置をとつた。之に反して、イギリスはその傳統的な頑固さを棄てることを嫌つて强硬な態度を以て一貫したものである。その結果は、イギリスが取引を失したに反して日本は之を獲したといふことになつたのである。

國際的諸勢力がどんな風な結果を支那に齎するものだらうかといふことを判斷することは尙ほ時期が早すぎるので、それについて今日的確な豫測を行ふことは困難である。例へば、合衆國は、現在のところ普通支那人の觀察者の頭の中ではイギリスと緊密に結びつけられて考へられてゐるのである。が、その理由は、合衆國がイギリスの政策に追隨してきてゐるものだからといふのではなくて、合衆國がその他の總ての列强と協調を保つて仕事をしようと盡力してきてゐるものだといふことに出來してゐるものである。しかしそれでもなほ、合衆國がかうした方針を廢めて再びもつと單獨的な對支政策を採らねばならぬやうになる日がくるかもしれないのである。そして、さうした政策變更の行動は合衆國の支那に於ける地位を更に强めるものであるといふことは疑ひのないところであらう。但し、それは合衆國以外の列强に對しては、更に支那それ自身に對してすらも、危害を及ぼすものではあるかもしれないだらうが。

印度も亦かうした國際的關係の豫測圖中には入り難い、印

度は矢張り支那と同じことで、今や一の多難なる階程を切拔けつつある最中なのである。しかし、やがて何時かは印度が世界的な事件の領野に於て非常に重要なものとなつてくることであらう。

日本とロシヤは今日でもなほ支那に於ける利益に對する優先を爭つて戰鬪してゐるものである。少くとも滿洲に於てはその戰鬪を休止しさうな氣振りも見られないのである。が、讀者諸君は私が斯う云つてゐる意味を傳統的な兵語で解釋しないやうにして戴き度い。劍を執つた戰爭ばかりが戰爭ではない。將來の戰爭は經濟戰爭だ。——といふことを心得られ度い。ところで、支那が一度その內部の紛爭を奇麗に一掃してしまつて、近代世界に於けるその當然の部署に着き出した曉に於ては、如何なる經濟戰爭が如何なる場所で起きようとも支那はその大立物となるであらう。

本稿を結ぶに當て、支那はその國內の經濟的並びに政治的諸問題を如何に解決するだらうか、といふ點を一寸考察してみることも興味がある。支那は今、ギルド的系統の上に發展してきた數世紀に亘る經濟的發達をその背景として持ち、そして、恐ろしい混亂狀態を呈するまでに啓發されてきた近代的政治觀念をその前景として持つてゐるのである。ところでこの二つのものが一緒にされることが出來る、といつたやうなことも有り得ないことではないと私には考へられるのである。今、もし私が『ソヴイエツト』といふ言葉を持出さうとしてゐるとしたならば、大抵の讀者諸君は直ぐさま赤色ロシヤと共產主義といつたものを想ひ浮べられることであらう。然り、ロシヤの經驗は支那に對しても價値を有するものだといふことは早晩判つてくることであらう。が、併し乍ら、共產主義が支那に於て假にも成果を收めるものだらうとは私は考へないのである。共產主義を拔きにした所の何かソヴイエツト式政治經濟組織の案といつたやうなもの、それが今私の考へてゐる所の腹案である。それに對する專門的な術語を用ふれば則ち『機能代表制』と名づけられてゐるものである。新しい政治組織の建設に當て古くからのギルドを活用せよ、といふのが私の考へである。支那人の心性と生活法とによく適合してゐるやうに思はれる所のギルドもしくは勞働的集團といつたものを保存して、それを政治的機構の一部として利用せよ、といつた次第である。さうした支那古來のギルドは所謂新しき支那を建設することに於ける一つの柱石として十分利用されることの出來るものである。

支那の救濟を論ずるに當て所謂『覇者』の出現とか皇帝の復

辟とかいつたことに望みをかけることは囈語の類ひだ。支那の救済は決して上の方からは來ないであらう。それは必ず底の方からやつてくるだらう。支那はもし其の儘に放つて置かれたならば經濟的には健全である。而して、支那の經濟的發達を通じて支那の政治的發達は十分達成され得るであらう。すなはち、各ギルドに代表者を選出させ、順にそれらの代表者は更に他の代表者を選拔する、といふことにすれば、最後に或る種類の有力な政府を形成するといつた工合になるのである。而もさうした政府は、現在に於て民意が代表せられ得べき殆ど唯一の方法に於て人民を代表するものであるだらう。もとより、こゝに述べた案は何等最終的のものであるのではない。しかし、それは、實際に用ひられる場合には其の他の更に特殊的な諸觀念と結合することを必要とするものであることは無論だが、兎に角、實際に統治することの出來るやうな政府を造り上げるに際して用ひられるべき一つの健實な觀念であるやうに私にはおもはれるのである。政治と經濟とを支那に於て手を握らしめよ。さうすれば、この支那といふ國は世界の政治經濟的支配への道程へと上るであらう。

過渡期に於ける支那

ロスタ特派員　エム・ロウズン

支那に於ける諸事件は、最近數ケ月來所謂『赤化』の魔手に對する陣營內に集中されたかたちとなつてきてゐる。一年以前發した支那の不穩狀態はボルシエヴイキの思想が支那へ侵入してきたことに歸せられてゐるのである。洛陽の巨頭と奉天の大御所との間に盟約が成立したといふ事の根柢も亦畢竟所謂赤色の脅威に對して共同の戰線を張るといふ點にあつたのである。そして此の兩者の共同陣營は最近兩三月の間支那の政局を支配してきてゐるものである。『赤色の脅威を驅逐せよ』——是れが國民軍に對する戰ひの旗印しであつた。そして、その本意は支那に於ける民衆的運動を抑壓するといふことにあつたと謂はれて

ゐるのである。

併し乍ら、支那に於ける最近の不穏の狀態並びに國民黨側の運動をボルシエヴイキの思想が侵入してきたことの結果だと考へることは、支那の事象について歪められた見解を採る結果となり、從て又その因由と趨勢を理解することに全然失敗するといふことに終らねばならぬものである。で、此等の運動の原動力についても少し入念に檢討してみたならば、それは支那の社會其れ自體の内に繼承されてゐる固有の社會狀態に由來してをるものだ、といふとが開示されてくるであらう。必ずしもボルシエヴイキの思想とか過激思想とかに限らず、外來思想の侵入してきたといふことは此の國の最近の歴史過程の上に莫大な影響を及ぼしてきてゐるものだといふことは疑ひのない事實である。併し乍ら、さうした外來思想の影響が實際に何かの効果を結んでゐる點が認められるものとするならば、それは單にもともと支那の社會内の中に在て眠つてゐたやうな力を呼び覺して動き出すやうにさせたといふだけの點に限られてをるものである。近代的思想並びに生産技術が支那の社會に接觸したといふとは、その接觸が行はれるやうになつてきた前から既に長い間支那の社會内に蓄積してきてゐる所の諸要素の發動に對して刺戟を與へるといふこととなつたのである。支那の社會生活の上に及ぼした外來思想の影響は、例へば、それを時計の振子に運動を開始させるために與れるハズミに比したらよからう。かく時計は外部の力を俟つて始めて動き出すものであるが、一旦その運動が誘致された以後の運動は時計の内部に彈條が卷きこまれてゐるために繼續して行くものである。ところで、その上に、一支那の歴史といふ時計の振子にハズミを與れた外來思想なるものは、ソヴイエツト露國の思想ではなくて、實は、寧ろヨーロツパやアメリカの資本主義的思想であるといはなければならぬのである。

吾々は、支那は沈滯した狀態を續けて來てをる、といつたやうなことを口にし慣れてゐる。が、支那は發達を妨げられた狀態の裡に在つたものだ、といつた方がもつと本當だらうとおもふ。支那の歴史の中に起きてゐる所の諸革命は、徐々たる社會的醱酵が支那にも直ぐ近代の時世に至るまで不斷に進行を續けてきてゐたものに違ひないといふ事實を立證してゐるものである。すなはち、古いものに對抗して、新しい階級が形成せられ、新しい利害關係が創始せられつゝあつたのである。西洋の文化が支那の孤立の防壁を打ち崩した時に當て、商人や貿易業者等の新しい一階級が、謂はば突破ることの出來ぬ厚い殼の中に封じ込まれて胎芽の狀態で存在してゐたのである。その殼が

西洋との衝突によつて破られるに至つたので、新しい社會的諸要素が急速に發達し始めたといつたやうなわけである。程度に於ては同じでなくとも、この點に關する支那の經驗は種類に於て日本のそれと同樣のものである。

右の樣な歷史上の見地から眺めたならば、現代の支那の事象はずつと容易に理解出來ることとなるだらう。――もつとも、絶えず目眩るしく形勢が變轉してゐて、その變り方の唐突なのにびつくりさせられ、又その型破りな變り樣に驚ろかされる、といつたやうなことも度々であつて大にまごつかされることも否めないが。支那は中世の狀態――支那のその期間は隨分長年月に亙つたものであつたが――から近代的狀態への過渡期に在るものである。最近三十年間の支那はその間の進歩の度がそれ以前の三世紀分の進度を凌ぐくらいに長足の進歩を遂げてきてゐる。斯うした急激な變化が靜穩に平和的に爲され得るものだといふことは期待され得ないところである。何百年もかかつて積み上げられてきた所の社會的諸形式や傳統は崩壞しつつある。而も新しい形式の採用はその古いものに取つて代るに足るほど迅速には行はれてゐない。已に廢れたるものであり命數の定つたものであるにも拘らず古い社會的勢力はなほ未練がましく生き延びようともがいてをり、新興勢力の侵入に對して必死に抗爭してをる。これが實に支那の混沌たる形勢の因由であり、その內亂の因由であるのだ。而して、斯の如きはたゞ支那に於て展開しつゝある社會的變革の大過程に必ず附物となつてゐる事象たるに過ぎないものである。

支那が現在通過しつゝある所の歷史的段階は、總ての近代諸國の歷史に於ける同樣の時期と對較され得るものである。支那の現狀と同樣な混亂と內爭の狀態がイギリス、フランス、ドイツ等のヨーロッパ諸國に於ても一樣に經過されたのである。しかし、ヨーロッパに於けるさうした狀態は各國に於てそれぞれ時期を異にして且つ長い間隔を挿んで經驗せられたものであつた。ところが、支那に於ては此の段階が、ヨーロッパ全體よりもつと大いやうな國で一齊に經驗せられつゝあるのである。支那はヨーロッパに存在する同等の人口を有する國々の數よりも更に多數の諸省を持つてゐる。そして、それらの諸省はヨーロッパに於ける各國が事情を異にしてゐると同程度に亦相互の事情を異にしてをるものである。從て、國內を統一して新しい民主々義的根抵の上に中央集權的の政府を建設するといふ過程は、ヨーロッパ諸國の場合に於ける同一の過程に比して一層多大の日子と辛苦とを要するものであらうといふことはまた當然の事理である。

右の事由は亦支那の過渡期的段階を他の諸國のそれから區別

せしめてゐる所の今一つの特徴を決定してゐるものである。その特徴といふのは則ち支那に於ては中流階級の統一と組織とが缺けてゐるといふ點である。――而もその統一と組織の媒介を通じてこそ彼等中流階級は始めて權力を達成し得るものであるのだが。所謂舊制度が潰崩した際に支那の中流階級は權力を把握すべき地位に居らなかつたのである。そこで權力は所在に割據してゐる軍閥者流の掌中に轉り込んだのであつたが、この軍閥といふ輩は彼等自階級の利害以外に社會に於ける如何なる階級の利害關係をも代表してゐさうにも見えない代物である。それ故に、支那に於ける民主々義を奉ずる諸階級の當面の問題は軍閥の掌握する權力を中央政府の意志の下に服從せしめるといふことにあるやうに見える。支那に於ける反軍閥運動は、それ故に、變革されたた社會狀態に一層適合するやうな制度を支那に確立して此の國の商工業の發達を助長するといふとを使命としたた一九一一年の革命の繼續に外ならないものである。で、吾々は、支那の特殊な國情がその事態に亦獨特な特徴を附與してをるといつた半面に於て、支那に於ける革命は概括的に觀て西洋に於ける革命の場合と同一の方向を取つて進行しつつあるものだ、といふとを看取するのである。卽ち、西洋に於ける革命は所謂ブルジョア資本家的政府の樹立といふ成果を、又西洋に於ける近代の產業的發達を將來せしめたた社會的諸勢力の解放といふ成果を得たものであつたが、支那の革命の結果も亦さうした所へ歸着するものだといふことが豫見され得るのである。

斯うした支那の民主々義化の過程は、併し乍ら、それに更にも一つの要素が加はつてをることによつてまた複雜なものとなつてゐるのである。その要素は最初一見したところではさうした過程から離れた全然別個のもののやうに見えるが、しかしこの兩者は引離すとの出來ない緊密な關係を有するものである。さて、その要素といふのは則ち國民的要素――外國の列强に對する支那の國際關係上の地位、がそれである。が、この點に於ても亦支那の地位は史上他に比類を見ないやうなものではないのである。多くの國々に於て民主々義化のための鬪爭は國民的解放のための鬪爭に依て隨伴されてゐるものである。イタリーがオーストリアに對して鬪爭した場合の如きはその例である。近代に於てはロシヤの舊帝政の治下に於けるポーランドの事例が擧げられるであらう。その東洋國家についての例證は、且つ支那の現勢に一層近似してゐるやうなそれはトルコによつて供せられてゐるのである。彼等の祖國をスルターンの腐敗した治下から解放するための戰ひに當て、トルコの自由主義的ブルジョアジーは亦外國の勢力の支配を蒙つてゐるといふ制度に對して

も力鬪したのであつた。支那の場合と同樣に、近代的諸條件との接觸はトルコに於ても亦近代的商工業の發達を刺戟した。隨て、當然近代的商工階級の發達を促すことゝなり、その階級的利害は遂に所謂舊制度と衝突するに立ち至つたのである。この新興商工階級の利害關係は亦トルコに於ける外國人のそれとも衝突するに至つたものであつた。そしてそれには二つの理由がある。先づ第一には、外國人々は所謂舊制度に對する一つの藩屏として行動したといふことである。そしてそれは彼等外國人が公債や鐵道の擴張といつたやうな形式に於て彼等の資本を舊制度の中に投じ、彼等の諸種の特權を後者から得てきてゐたものであつたがために生じてきた行動であつたのである。次に第二には、トルコの新興ブルジョアジーが件の外國人達を目して同國に於ける彼等の特權的地位を利用して土着資本の發達を阻害してゐるものだとみてゐたといふ點である。之に由て、所謂青年トルコ黨の運動は自由主義的民主々義運動であつたと同時に亦國民運動でもある半面を有するものであつた次第である。而して、この青年トルコ運動の勝利の結果はトルコ共和國の創建と所謂投降條約として知られてゐた治外法權の廢止といふことになつたものである。所で、トルコに於ては其のブルジョアジーの統一がつきそれ自身の軍隊を組織することが出來たのであつた。で、ケマル・パシヤを首領に戴いた青年トルコ黨は、その權力の達成と自國の經濟力の發達の增進とに對する諸障碍を見事に克服し得たのである。

右に述べたトルコの場合と同一の理由によつて、治外法權の問題は支那に於ても亦その近代的土着資本の發達によつて紛糾を極めるに到つてゐるのである。そして、その土着資本の發達は矢張り西洋人に依て近代的產業が導き入れられたことによつて促成された者であるのである。所謂國民主義的運動は支那に於ける政治的改革を要める一般的運動の一部を成すものであつて、近代的狀態が愈々進展するに隨てこの國民的解放問題は、それが解決されるに至るまでは、益々鋭さを加へて行くであらう。

支那の中流階級は未だなほその階級的統一を成就するに至つてゐない。で、他の國々に於ける同樣の歷史的狀態に際會した同じ中流階級が開示してきてゐるやうな政治的活動力を發揮しないでをるのである。實際に於て、支那の中流階級の老成者達は、一面に於ては國民主義的運動を支援してゐるものであるにも拘らず、自分達自らの政治的活動は見せてゐないのである。で、支那の國民的解放の要求を大聲に叱呼してゐる者は其の階級の青年達なのである。一般に學生や有識者の群は、恰も彼等が社會に於ける獨立した一階級を代表するものであるかのやう

に論ぜられてゐる場合が屢々あるのである。が、實際のところは、彼等の中では支那に於ける中流階級の子女が壓倒的多數を占めてゐるものであつて、彼等はその階級的利害關係を表白して支那の國內狀態上の變革並びにその國際關係上の變革を要望してをるものである。老齡の連中は今なほ古い慣習が身に浸みてゐて容易に拔けきらない。之に反して、若い青年達は其等の舊慣を更に迅速に且つ完全に拋棄しつゝある。從て又、青年は政治的鬪爭に於て一層能動的であり一層斷乎たる態度を示してをるといつたわけである。で、國民黨は、支那の中流階級の利害を代表して民主的內政と國民的獨立のために戰つてをる所の政黨と見做されてよいものである。又、廣東政府は中流階級の支配といふ理想に最も近く歩み寄つてゐるものだと考へられてよからう。廣東政府に對して共產黨政府だといふレッテルを貼るのは全然間違つてゐるものである。それは一の革命時代に際してその機能を行使しつゝある所の國民主義的民主政府である。それが共產主義的でないといふことは、猶ほイギリスに於けるオリヴア・クロムウエルの政府が共產主義的でなかつたといふことゝ同然のものである。が、たゞ支那の中流階級は一人のクロムウエルをも未だ出してゐないといふまでのことである。廣東政府の諸活動──すなはち、その支配の下に國土を統一するといふこと、軍隊を統一して之を同政府の指令の下に服從せしめるといふこと、財政の集中を圖り商工業の獎勵を行ふといふこと等は、支那にブルジョアの國民的中央政府が建設せられた場合に、さうしたブルジョア政府の行ふべき代表な事例として考へられてよいであらう。

が、斯う言つたからといつて、共產主義の要素が支那には缺けてゐるものだ、といふ論結がそれから當然に引出されるわけのものではない。近代的產業が支那に勃興したことは無產勞働階級の出現を將來してゐるものであり、使用者側と勞働者側との間の利害關係の對立は他の資本主義國の場合と同樣に支那にも矢張り存在してゐるのである。この勞資間の鬪爭は他の諸國に於ては勞働條件を改善しようといふ努力と組合組織權並びに團體契約權を獲得しようといふ努力との中に表白せられてをるものである。これらが即ち、無產勞働者階級と資本家階級との間の階級鬪爭の窮極的目的が……………………限りに於ては、…………の要素と呼ばれ得るものである。然るに支那に於ては、現在の發達段階では、これらの要素は未だ胎芽的狀態に在るのである。共產主義的革命といつたやうな觀念は支那に於ては極端に空想的なものに屬してゐるのであつて、何人かゞ少しでもさした觀念を眞面目に懷持してゐるかどうかといふことさへ疑

しい位である。實際、現在の狀態に於ては、支那の資本家と支那の勞働者との間の階級的對立は、外國側の支配的制度に對する勞資共同の抗爭といふとに依て緩和されてをるのである。最近に於ける事象は經濟的な鬪爭すらも強い國民主義的性質を帶びるに至つてゐるといふとを示してきてゐるのである。支那に於ける勞働運動は現在の所共產主義革命の先鋒と謂ふよりは寧ろ國民主義運動の先驅隊といつた役を演じてゐるものである。

支那が赤色共產主義的脅威に捕れてゐるといふことを證明するために用ひられてゐる一つの有力なる議論は、ソヴィエット・ロシアが支那に於ける國民運動に對する同情を公然と表明してをるといふことがあり、前者のかうした同情が後者の運動に於ける活動的分子によつて如何なる態度を以て報いられてゐるかといふことを勘校するならば蓋し思ひ半ばに過ぎるものがあらう、といふのである。しかし、かういふ風に論ずることは此の兩國間の關係を全然誤つて解釋することである。疑ひもなくソヴィエット・ロシアは支那に於て相當の思想上の勢力を持つてゐるものである。が、何もそれは支那の場合だけに限つたとではないので、……………ソヴィエット・ロシアの思想的影響を蒙つてゐない所はないのである。かうした現象が何に因て生じたかといへば、ロシアが……………………………………てゐるといふことにそれは由來してゐるものである。一九一七年のロシア革命は、單にロシア勞働者と農民を解放したのみに止まらず、更にその舊帝政の壓制の下に苦んでゐた多數の弱小諸民族をも解放したものであつた。而して、……………………………………。彼等はロシア革命の結果としてそれぞれ彼等自身の國民經濟並びに國民的文化を發展せしめるべき自由を達成してきてゐるのである。斯くして所謂ソヴィエット・ロシア聯邦の中にはタータール共和國、ブーリアット共和國、ウヅベキスタン、トウルコマンスタン、ヤクート自治區域、其の他多數の自治的東洋民族國家が存在するのである。そして、それらの東洋民族の自治共和國は、ソヴィエット・ロシア聯邦を形成してゐる西洋民族の諸邦と協同して、それぞれ自身の國民的特質を發揮しつつ近代の文明に向つて大股に歩み寄つてをるのである。で、所謂十月革命は亦國民主義的革命でもあつたわけであつた。

この革命は、……………

……………………………………

……………………………………

……………………………………

……………………………………

てこなければならないことは極めて自然の事理である。更に、ソヴィエツト・ロシア聯邦全體としては新たに解放された所の一個の人民を代表してゐるものであり、……………………………………。といつたやうなわけで、共同の敵に對する鬪爭の中に相互的同情の羈絆が伴生せしめられるのである。吾々は此こゝにも亦、イギリスの治下から獨立を圖るために戰つた時代に於ける革命的アメリカと古い封建制度を破却するために鬪つてゐた革命的フランスとの間に曾て存在したやうな友誼關係との歷史的對較を試み得るであらう。當時アメリカとフランスとは共にヨーロツパの反動政治に對する共通の敵意を感ぜしめられてゐたのであつたのである。今また上述のやうな理由で、自國の主權を回復し民主的自由を確立するために戰つてゐる支那に對してソヴイエツト・ロシアの友誼が示されてゐるのである。が、併し乍ら、ロシアのその友誼は決して支那のさうした自由主義的鬪爭を變じて一躍共產主義革命と化せしめ得る力があるものではないのである。或る人は共產主義は一つの病氣だといつた風に考へるのであるけれども、而もなほ、それは決して歷史の各發達段階を超越して傳染し得るやうな種類の病氣ではないのである。支那は未だ今のところ『共產主義の病毒』に對しては免疫狀態に居るものである。

今日の支那は中世的社會狀態から近代的社會狀態への過渡期にあるものである。その過渡的過程は西洋の——といふよりは寧ろ資本主義的技術並びに文化との接觸によつて促醒させられたものであつた。それは資本主義社會の終末期に於ける××××××××せられつゝあるのであるが、しかしその過程が進展を續行することを得てゐるのは支那の社會それ自體に內在する原動力のお蔭げに依るものである——すなはち、西洋の國國を其の現在の段階にまで持つて來た所のその社會法則と同一の社會法則の力によるものである。

本稿の執筆最中に當て筆者は、イギリスの全國學生聯盟に對して述べられたアーチボールド・ロウズ氏の支那に關する講演についての報道を受領した。同氏は東洋に於ては知名の士であり、又ボルシエヴイズムの辯護者として少しも臆測を加味せずに考へられる人である。ところで、その講演の全體の趣旨は亦本稿の筆者の論旨を裏書きするものゝやうにおもはれるので、吾々は無躾ながらその中から下記の一文を引用することとしたい。

『先に經濟的革命を經驗してをつたものは西洋であつた

いふことはその儘動かさずにおいておくとしても、もし其の經驗を支那に傳達することが西洋人の手に依てではなく絕對に支那人自身の手によつて從事されたものであつたとしたならば、支那には果して如何なる事象が生起してきてをつただらうか、といふことは暫時の考究に價すべき問題である。といふのは覺醒された世界に於ては何等かの通路によつて必ず交通が行はれるといふことは避けられないことだ、といふことを吾々は假定しなければならないものだからである。ところで、右のやうな場合を想像してみるならば、支那に於ける例の特殊的な人種問題はその場合には起きてゐなかつたことだらう。そして、更にもつと廣汎な問題をその場合の生產技術の變革は生起せしめてをつたことだらう。西洋に於けるそれと同一の衝突が少壯者の群と老成者の群との間に表明せられてきてをつたことだらうし、又西洋のそれと同一の原因から生起してゐる同一の社會問題が出現してきてをつたことだらう……かうした諸問題はそれが西洋に於ても生起してきてゐるものであるが故に亦支那に於ても發生してきてをつたものであらう。すなはち、かうした諸問題は、人種についての問題であるのではなくて、近代の發明と發見の結果として解放せられるに至つた且つ今後の成りゆきを豫想することの出來ないやうな廣汎な社會的諸勢力についての問題であるのである。』

支那に於ける赤化運動

大每特派員　布施勝治

◇

私は、さきに、新聞記者としての生活を、ロシヤでふり出し、今、支那へ來て、同じ生活をつゞけてゐる。

ロシアと支那とは、幾多の點において「似た國」である。ロシアも、支那も、尨大な領土を占め、多數の民族を包含してゐる。兩國はともに天產無盡藏であるが、文化の進步おくれ、天

產の開拓遲々たるために、多數人民の富の程度は甚だ低い。兩國はいづれも、舊い歷史をもつてゐるが、まだ老衰はして居らぬ。見ようによつては、多望な將來をもつてゐる。支那は、淸朝を覆して、共和國を樹立し、ロシアも亦、ツアリズムを倒して、サウエート聯邦を建設した。サウエート聯邦は、六ツの共和國をもつて、聯邦を形成し、支那も亦「五族の共和國」と稱してゐる。

斯の如く、兩國を對照し來れば、その間、幾多の類似點を發見する。然し、兩者は、果して「似て、而して同じ國」であるか。少しく仔細にわたつて、兩者を比較研究するに、ロシアと支那とは、似てはゐるが、決して同じくはない。所謂「似て、而して非なるもの」である。

ロシアは、ツアール政府の倒壞後、一時、老大な領土が、稍々中央から分離せんとした。（ケレンスキー時代）しかし、ボリシエウイクが、政權を握り、強固なサウエート政府をうちたつるや、僅かにポーランド及びバルチック沿海の小邦を除く外、舊露領の全土は悉く、モスクワ政府のもとに統一され、おとなしく、その威令に畏服してゐる。

然るに、支那の共和十五年間は、全く混純たる內亂裡に打ち過ぎ、將來も亦いつ統一が出來るか、見當さへつかぬ。軍閥は諸方に割據し、北京政府の威令は少しも行はれない。

革命當初のロシアは所謂「赤」と「白」との分野狀態にあつた。即ち、ロシアは國をあげて、政權を握れる共產黨と、之に反對して立つた反革命黨との政爭渦亂裡におちた。しかし革命亂が、いかに紛糾しても、「赤」と「白」との色別さへすれば、大勢の趣くところ、これを洞察するに、難くなかつた。モスクワ政府のいよ〱中央集權を完成し、全國を統一した今日に至つては、政局の動搖は、たゞ共產黨內の「赤の同志」の小內訌に限られ、何等大した變化がない。然るに支那の政界は、「赤」もしくは「白」の如き單純な色彩でなくて、どの方面を見ても―ある支那通の云へる如く―「灰色」「鼠色」「紺鼠色」と言つたやうな極めて複雜、曖昧な色彩の政治家のみで、支那の時局に適確な判斷を下すことは、實に容易の業でない。

かくして、ロシアと支那とは、その外觀、頗る似てゐるやうに見へるが、その實質に至つては寧ろ、正反對の點が多い。私がロシヤから支那に來て、兩者を比較對照しての第一の印象は「兩者は似て、而して非なるものである」と云ふにある。

◇

ロシアと支那……この二つの「似て非なる」因は、その歷史、地理、經濟等、種々の關係に於て　常に密接離るべからざ

る運命をもつてゐることは、いふまでもないが、革命後の兩國は、更らに、も一つ重大な關係によつて、結びつけられることになつた。それは、即ち「ボリシエヴイズムの東漸」である「露國の支那赤化運動」である。ロシアは、支那を赤化して世界革命の新らしい味方を得んとし、支那は、又ロシアによつて、列强の勢力を驅逐し、その羈絆から脫却せんとすると云ふ新しい傾向である。

私が、支那へ來て、殊更ら深い興味に打たれたのは、兩國這般の關係に外ならぬ。

◇

私が一九二〇年の夏、赤露の旅行を終つて、シベリアと蒙古の國境、トロイツコサフスクに到着した時、同地には、私と同じく蒙古を經て、支那入を企てたユーリン氏が來て居つた。私は七月末、庫倫を經て、北京に來たが、ユーリン氏の支那入りはたしか、安直戰爭に妨げられ、二三ケ月遲れたと思ふ。サウエート政府の支那赤化運動は、實にユーリン氏の北京入りによつて、始めて着手されたのである。

ユーリン氏は、一九二〇年の末頃から、約半年、北京に居た。翌年夏、大連で日露會議開かるゝや、彼は最初の露國側代表として來連し、私は再び彼と大連でおちあふた。

支那に於けるユーリン氏は、一向なすところなくして去つたらしい、當時の世評では、彼は宣傳費ばかり撒き散らして何等成績をあげないとの非難で、召還されたといふことであるが、事實はどうであつたか、よくわからぬ。彼の後に、パイケス氏が北京にやつて來た。しかし彼も亦、これといふ成績をあげ得なかつたらしい。これは、時機が早かつたからであらうが、又ユーリン氏や、パイケス氏の如き、三流どころの役者にとつては、支那は、あまりに大きな舞台であるからでもあつた。こゝに於て一九二二年、サウエート政府はいよ〳〵、「一流の役者」ヨツフエ氏をおこして極東に派遣した。

◇

ヨツフエ氏とは、私は、一九一九年、エストニアのドルバツト講和會議の時、しば〳〵面晤した。當時、彼は「私は西洋專門で、東洋のことは少しも分らぬ」など語つたこともあつたので、この「西洋專門」のヨツフエ氏が、東洋にやつて來ると聞いたときは、私は些か意外の感に打たれた。しかし、その後、彼と、長崎や熱海で會つて、親しく彼の抱懷を叩くに及び、彼は實に東洋赤化の一大抱負をもつて來たものであることを察知した。彼が、わが後藤子に「自分はサウエート政府から、支那及び日本に對する絕對の全權を委ねられて來たもので

ある」と語つた如きも、決して、法螺ではなかつたらしい。

しかしヨッフェ氏の名が、あまりに有名であり、又實際稀有の辣腕家であつて、且つその權限の大きくあつただけ、それだけ、彼の東洋に來るや、彼に對する一般の恐怖と、反感熱は頗る猛烈であつた。彼は、一九一九年獨逸で試みた赤化革命を支那に於て再演せんとするものとおもはれた。支那の朝野は擧つて、彼を目して「赤化の魔物」となし、極端に、危險視した。彼の北京に來て、間もなく、健康を害するや、諸方から、彼に、轉地療養を勸めて、北京を去らしめんとし、彼の上海に來るや、そこでもまた、廣東に轉地を勸めたものがあつた。

彼はかくして、何處へ往つても、恐怖され、忌避され、指彈された。流石剛腹の彼も、一時は途方に暮れた……恰度、その頃、折よくも、後藤子から「溫泉の多い日本」へ轉地を勸誘して來たので、彼は、「渡りに舟」と、よろこんで日本へやつて來た。しかし、彼の東京に來るや、日本でも中々ウケが惡く、且つたよりにして來た溫泉が却つて、彼の健康を惡化し、折角無理に始めた日露會議も中途で斷絕し、遂ひに、病體起つ能はさるの重態のまゝで、日本を去るの止むなきに立ち至つた。

かくしてヨッフェ氏の極東滯在は、たゞ露國に對する反感を强め、また自分の健康を惡化したに過ぎなかつたやうに考へられた。しかし、所謂「極東赤化の種子」を蒔いたものは、誰れかと云へば、何んと云ふてもヨッフェ氏を指さねばならぬ。殊に私のヨッフェ氏に對して、敬服おく能はぬところは、彼が、短かい北京滯在中、幾多の武將の中に、たゞ一人、露國と事を共にし得るものは、馮玉祥であるとなし、此の將軍との提携をはかつたことである。唯物主義のコンミュニストたるヨッフェ氏が、クリスチヤン・ヂェネラルの馮玉祥に着目したことは、面白い事實でもあり、又實に、ヨッフェ氏の慧眼の鋭さを證するものである。

もう一つヨッフェ氏の支那に於ける事績の大なるものは、彼が上海にある間、孫逸仙氏と手を握り、廣東政府のために、極力援助すべきことを約し、特に、最高顧問として、ボロヂン氏を紹介したことである。

北京に於ける馮玉祥氏との默契、上海に於ける孫逸仙氏との提携、及び廣東政府に對するボロヂン氏の紹介の三つは、ヨッフェ氏の短かい支那在中の三大功績であつて、露國の支那赤化史上に特筆大書すべきところである。

ヨッフェ氏にして、健康さへ許したならば、大に赤化の辣腕をふるひ、おそらく、彼に對する一般の恐怖をして、單なる杞憂に終らしめなかつたであらう。一九一九年のドイツ赤化革命

の再演とまでは行かなくても、大い支那を騒がせたことであらう。しかるに、彼は幸か不幸か、中途にして、殆んど不治の重患に襲はれ、横臥のまゝで歸國した。

◇

ヨッフェ氏と入れ代りにやつて來たのが、カラハン氏である。

當時カラハン氏とヨッフェ氏とは、互ひに、排撃し、兩者は、政策上到底兩立出來ぬ讐敵であるかの如く傳へられた。その結果、ヨッフェ氏に對する反感が強かつただけ、夫れ丈け、カラハン氏はウケがよく、その着任當時は、支那の朝野から熱誠な歡迎をうけた。

しかし、私の親しく、二人に接して得た印象では、兩者は必らずしも、政策上の敵だとは思はれぬ。北京に腰を据ゑて以來のカラハン氏は、その先輩たるヨッフェ氏の政策をそのまゝ踏襲した。

即ち、彼は、馮玉祥との提携を繼續し、又廣東政府の援助に多大の努力を傾けた。その結果、國民軍は、最近の敗退にも係らず、依然、西北の一隅によつて、支那の大勢を睥睨してゐる。廣東政府に至つては、その基礎益々かたく、今や、廣東及び廣西兩省を統一して、着々南方獨立の實をあげてゐる。即ち、ヨッフェ氏の蒔いた「赤化の種子」が、カラハン氏の時代になつて芽をふき出し、カラハン氏によつて培はれ、徐々成長せんとしつゝある。

◇

第二奉直戰後、中央の實權が、馮玉祥氏の手に歸するや、露國の勢力は、國民軍のそれと比例して、益々増大し、四方にその根をはつた。昨年五月三十日の上海事件突發に際しては、支那各方面に、しこみこんだサウエートの潜勢力は、一時に表面にあらはれ、「帝國主義の打破」「不平等條約の撤廢」等、赤化宣傳の標語は全支那を風靡し、カラハンの一擧一動は、支那の大勢を左右してゐるかに見えた。

しかし、當時頻りに傳へられた如く、ロシアは、この勢に乘じて、一氣呵成、支那の中央赤化の陰謀を企てたと云ふは、果して事實であつたらうか。馮玉祥は昨年秋、西北及び直隸から更らに河南、陝西に手をのばし、段祺瑞の執政府を傀儡として、意の如くこれを翻弄した。加之、郭松齢の叛起によつて、奉天軍閥の勢力をも、一擧に覆へさんとした。當時、識者の中には、早くも「北京はやがて第二の廣東たるであらう」との危惧を抱いたものであつた。しかし、私は、當時も、今と同じく、それには、あまりに時期が早や過ぎると觀てゐた。

昨年十一月二十七日、民衆運動の前夜、徐謙、李石曾、吳稚

匪などの左傾派國民黨の巨頭は、馮玉祥の諒解を得て、執政府を倒し、委員制政府を樹立せんとの計畫をたてたとの説が傳はつた。しかし、二十八日の大示威運動は、段祺瑞邸の包圍、二三大官邸及び新聞社の燒打ちに終り、執政府はそのまゝ存在を續けた。もし露國にして、眞に支那の中央赤化を志したとするならば昨年の秋、郭松齡叛起の時が、その絶好の機會であつたであらう。然し、十一月二十八日の大示威運動は、ついに、政權奪取に至らずして止んだ。これは、即ち、當時カラハン氏等の肚裏に、さる如き陰謀の熟してゐなかつた證左である。

◇

本年初春、國民軍は北京に於て、事實上の軍事專制をしき、大に暴威をふるつた。恰度その頃、モスクワから、露國共産黨極東部長クビヤツク氏、及び露國勞働組合幹部レプセ氏が來東し、極東革命委員長ガマルニツク氏、及び廣東政府最高顧問ボロヂン氏を北京に呼びよせ、カラハン大使司會のもとに、支那時局對策について、重要會議を開いた。この時も、頻りに、露國の京北赤化陰謀説が喧傳された。

しかし、昨年秋、國民軍の最も得意の時に於てすら、大事をとつて、この擧に出でなかつたカラハン氏等が、國民軍が四方に敵をうけて、北京に退却の餘儀なきはめに陷つた最も不利の時に於て、積極政策をとるやうなことは、勿論あり得ないことであつた。果して、僅かに、三月十八日の學生大示威運動が行はれたに過ぎない。しかも、この大示威運動は、國務院前の大慘劇で、頗るみじめな失敗に終つた。四月十日のクーデターに至つては、鹿鍾麟は、執政府に代るに、委員制政府でなく、却つて當の敵手の吳佩孚を推戴せんとしたやうな始末である。その後、間もなく、國民軍は、聯合軍の壓迫に堪へ兼ねて、南口以北に退却した。

國民軍の敗退とともに、張作霖の露國に對する態度は、俄かに強硬となり、つひに、カラハン大使の召還を要求するやうなことになつた。同時に、廣東でも、共産黨及び露國排斥の政變が行はれたとの説が傳はり、更らに吳張提携の進展とともに赤賊討伐の聲が全支那を蔽ふの勢となつた。

こゝに於て、世人は氣早やにも、露國の對支政策は、根本から覆へされ、やがてサウエートの赤化勢力は地を掃つて、支那から驅逐さるゝであらうとなし、カラハン氏は、今直ぐにも、モスクワへ逃げて歸るものと速斷した。しかし、さきに、國民軍が時めいた頃に、北京赤化の危險を叫んだことの餘りに早計に過ぎ、露國の勢力を買ひかぶつたものであつたと同様に、今、張作霖のカラハン排斥、廣東政府の共産黨驅逐説を耳にし

て、直ちに、赤化勢力の殲滅を云々することも、餘りに輕卒な觀察である。

◇

私の觀るところでは、露國の對支政策は、今尙ほ、試驗期にある。ボルシエウイクは、露國に於ける赤化革命の試驗を完成した。若し支那が、露國と「似て、而して同じ國」であるならば、露國の革命を、そのまゝ移して以て、支那に植ゑつけることが出來たであらう。しかし支那は、露國に「似て、而して非なる」國である。支那に於ては、更らに又新らたに赤化革命の試驗を行ふ必要を生じた。

露國は、今や大きな支那の一局部、即ち廣東及び蒙古をとらへて「試驗管」の中に投じ、赤化の實驗を行ひつゝある。試驗の目的を遂げんがためには、いろ〳〵の「藥」を用ゐねばならぬ。甲の藥を用ゐて赤化せぬ時は乙の藥を用ゐて見る。廣東に對する政策と、蒙古に對する政策とは、目的を一にして、手段を異にしてゐる。

廣東に於ては、あくまで、國民黨を表面におし立て、政治の實局に當らせ、露國はたゞ、顧問として、助言を與へ、武器その他の物質を供給するに止め、又敢て急激な革命の徹底を强ひない。寧ろ、濫りに、極端に走らず、內は國內の資產階級と妥協し、外は、列國との親交恢復に努める方針をすゝめてゐるらしい。最近、親しく、廣東を視察して來た駐支大使館參事官ソロウイヨーフ氏は、私に次の如く語つた。

廣東の現狀は、國家的組織が完全に出來上つたものとはいへない。尙ほ幾多未成の點がある。然し、廣東當局の方針がブルジョア國家主義の建設にあることは既に一點の疑ひを容れない。彼等はブルジョア國家主義（ソ氏は語調を高めて、この言葉を繰り返へした）に向つて邁進し、これが都市（產業、地方の農業、各方面、各階級に向つて徹底せしめんと努力してゐる。たゞこの政策の遂行に、支那共產黨も參與してゐることからして、世人は今なほ、廣東當局の方針を疑ひ、赤化の脅威を叫ぶものがある。しかし、支那共產黨も、亦、支那の現狀では、ブルジョア・ナショナリズムの他に、とるべき途がないとの信念から、自家の主義と相容れざる政策に向つて進みつゝあるのである。

蒙古に於ける露國は、廣東におけるよりも、遙かにより積極的な政策をとつてゐる。即ち、蒙古國民黨、及び蒙古青年革命團を、背後から操縱して、意のまゝに蒙古の政局を左右し、あくまで、積極的に蒙古革命の徹底に向つて、勇往邁進してゐる蒙古は「獨立國である」と云ひ、又「蒙古は支那の領土だ」とは云

ふもの丶、現在の蒙古は、事實上、サウエトの屬領のやうなものである。蒙古政府の與黨は『國民黨』と稱してゐるけれども、その實、露國共産黨の支部の如きものであると云ふ説さへある。蒙古青年革命團に至つては、最初からロシアで「赤色教育」を受けた極端な左傾青年によつて組織された團體であつて、露國は此の青年團によつて、最も積極的に蒙古革命の進行をはかつてゐるのである。

◇

露國が、今現に、支那において赤化の力を入れてゐるのは、主として蒙古と廣東であるが、この兩地に對する政策は、上記の如く、全然相異つてゐる。之れが、即ち、露國の對支赤化政策の今尙ほ試驗期にある何よりの證據であつて、ことさらに、異つた「藥」を用ゐ、孰れが早く赤化するかを見てゐるのである。或は兩方共、赤化しないかも知れない。しかし、たとひ二つ共、失敗に終つても、それが試驗である以上、これに絶望して、手を引く筈がない。更に別の「藥」を用ゐて、試驗を繰返すであらう。而して、この二つの「試驗管」のいづれかが見事に赤化の實をあげた曉、初めて之を支那の全局に及ぼし、北京を化して、第二の廣東、若しくは第二の庫倫となすであらう。しかし、それまでには、まだ〳〵幾多の時日をまたなければなるまい。或はそんなことにならずにすむかも知れぬ。從つて露國の對支赤化運動については、一面、その分部的成功を見て、直ちに支那全局の赤化をおもふの早計であると同時に、他面、その一度や二度の失敗を見て、直ちに、露國が赤化の手を引くものと思ふも亦、當らぬ。寧ろ、露國の支那赤化運動は、今まさにその試驗時代にある。試驗であればこそ、失敗しても絶望しない。更らに政策を代へてその目的を達成すべく、先づ試驗を行ひ、その結果によつて、そのさきの政策を定める……といふやうな極めて周到な用意をもつて進んでゐるのである。露國の赤化勢力の、あくまで、根強く、その前途の決して侮るべからざる所以は、實にこゝに存するのである。或は結局、失敗に終るかも知れぬ。しかし又、その成功の絶無を保證するとも出來ぬ。少くとも、今後の支那に對するロシアの赤化勢力は、歐米列强のいづれよりも强く、露國の勢力を無視して、支那の問題を斷ずるとの出來ないとは、いよ〳〵明白となつて來た。

私はさきに變轉極まりなき革命のロシアを目撃し、今又、この赤化革命の延長を、支那において觀んとしてゐる。この二つの「似て非なる國」において、その最も興味深い時代に會することは、たとひ、その間、幾多の勞苦があるにしても、新聞記者として、心ひそかに、幸運としてゐる次第である。（五月廿八日）

列強對支關係の新紀元

ダブルユー・エイチ・ドナルド

何れの商工界なりとも對支取引關係の擴張を望むものは、從來支那に對する通商的發展策の上に採用されてきてゐるやうな態度と方法を一變してしまはなければ到底成功は覺束ない、といふやうな狀勢となつてきたのである。外國の金融業者や通商業等が從來親しんできてゐたやうな支那の古い秩序は今や急激な變革過程の中にある。過去に於て、或は利權を獲得し、或は産業關係を開拓し、或は商業の分枝を伸張するために非常な好成績を以て株守されてゐた方法は俄かに廢滅に遭つた恰好である。ひと頃は、どんな種類方法の經濟的企業に對する協約でも何の手間暇をかけず極めて無造作らしく締結できたものであつた。例の有名な『利權獲得戰』時代には、支那政府の官僚が諸種の利權を分配し、諸種の借款を締結し、諸種の産業的計畫に無成算に放縱に這入りこんでをつたものであつたかのやうに傍觀者の眼には映つたのである。北京は利權漁りの亡者共に對する紛れもない鬧雜場であつた……そして語るも不思議なくらゐだが、さうした大小利權屋の手先共が彼等の親分共の樂天的な期待に背かず皆何か彼かの利權を土産に持歸ることが出來たものであつたやうに見えたのである。有象無象の山かん師や亦相當な團體の確つかりした財政的根據を持つてゐる代表者等が支那の中央政府並びに地方政廳の官僚輩に依て提供された玉手箱の周りに我勝ちに猿臂を伸して犇めき合つてゐるのである。そして其の結果は、鐵道敷設の利權讓渡に次ぐに鐵道敷設の利權讓渡、鑛山採掘の特權許與に次ぐに鑛山採掘の特權許與、といつたやうな報道の連續に接し、其等の皆『金のなる木』でも手に入れたやうないゝ氣になつてゐる利權獲得交渉者連の肚裡に蓄へられた凡百の計畫を聞いて、世界中が間斷なく有頂天にさせられてをつたのである。で當時は、外國の公使連が一切の運命に對する支配權を握つてゐたのである。殊に、支那の行政に對する責任を負ふてゐた所の支那の大臣諸公に對する支配權を掌握してゐたものである。ほんの微々たる小國の公使からの

抗議でさへも即座に殷懃を返させるだけの力があつたのである。況んやもし大國の公使の一人が毅然として卓を打つに至つては支那官人の腦天を破裂せしめるものがあつたのである。當時に在つては、支那の信用狀態は高かつたし、國内は比較的平和であつたし、商賣は繁昌してをつた。鐵道も――當時敷設されてあつた限りに於ては――正規に運轉されてをつた、貨物や旅客を相當た賃率で輸送して居つた。外國人と雖も國内の如何なる地方を旅行しても全く安全であつた……殊に最も奥地まで入込んでも少しも不安を感ずる要がなかつたものである。一切の貿易路は開放されてをり、支那人は敏捷な買手であり且つ賣手であつた。そして、一般的に言つて、外國の商工業者は其の開拓的努力の效果を收獲し致富の實績を舉げてゐたものであつた。

靜かに過去を回想して之を眼前直下の現在と比較してみるに當つて、外國の對支實業家は天上の樂園から突如として宛ら地獄の底に投げ落されてきたものであると想ふやうな心持ちでをるものである。普通の凡人がこの悲劇について冥想してゐる場合の哀れな特徴は、何故かうした變化が生起してきたのか、或は何故かの樂園が昔、驗のあつた所の方法に依て再び贏得られないのであるか、といふ根源を理解し得ない、もしくは理解しようとおもはたいといふ點である。が、それは實に極く簡單な事柄なのである。すなはち、進化の過程が進行し續けてきてゐて思ひきつた建直しを必要としてゐるのである。而も現時の支那に親んだ外國人は未だ立止つて斯うした變化の原因を推究してみることをしないでゐる、或はまた其の結果を摑むべき最善の方法に關する決心をつけかねてゐるのである。昔日の支那は所謂官人の一階級によつて政が行はれてをつた。そして其等の官人達は一般人民の眼中には優等な人間と映つてをつたものであり、又彼等は人民に對しては大風に振舞つてゐたものであつた。且つ、彼等は自ら支配階級として彼等の行爲に對する批議は一切許すべからざることであるといふことを原則としてをつたのである。當時にあつては官人の言葉は直ちに法律であつた……而して其の法律の强制手段は死刑執行人の劍であつたのである。他國では『民の聲』は即ち『神の聲』であるものかもしれないが、しかし支那では『神の聲』なんかてんで問題にされない。從て又人民が少しでも協調的な努力を試みて官僚の行ふ取引に何等かの方法に於て干渉するといふやうなことは支那には見られない圖である。もし誰か大膽な者がゐてどんな行爲なりとも問題にしようものなら、彼れの辮髮が死刑執行人の手に捕へられたが最後忽ち彼れの身首は處を異にせられたものであつた。といつたやうな次第で、所謂官人達は最高の地位に立つ

列強對支關係の新紀元

ダブルユー・エイチ・ドナルド

何れの商工界なりとも對支取引關係の擴張を望むものは、從來支那に對する通商的發展策の上に採用されてきてゐるやうな態度と方法を一變してしまはなければ到底成功は覺束ない、といふやうな狀勢となつてきたのである。外國の金融業者や通商業等が從來親しんできてゐたやうな支那の古い秩序は今や急激な變革過程の中にある。過去に於て、或は利權を獲得し、或は產業關係を開拓し、或は商業の分枝を伸張するために非常な好成績を以て株守されてゐた方法は俄かに廢滅に遭つた恰好である。ひと頃は、どんな種類方法の經濟的企業に對する協約でも何の手間暇をかけず極めて無造作らしく締結できたものであつた。例の有名な『利權獲得戰』時代には、支那政府の官僚が諸種の利權を分配し、諸種の借款を締結し、諸種の產業的計畫に無成算に放縱に這入りこんでをつたものであつたかのやうに傍觀者の眼には映つたのである。北京は利權漁りの亡者共に對する紛れもない鬪雜場であつた……そして語るも不思議なくらゐだが、さうした大小利權屋の手先共が彼等の親分共の樂天的な期待に背かず皆何か彼かの利權を土產に持歸ることが出來たものであつたやうに見えたのである。有象無象の山かん師や亦相當な團體の確つかりした財政的根據を持つてゐる代表者等が支那の中央政府並びに地方政廳の官僚輩に依て提供された玉手箱の周りに我勝ちに猿臂を伸して犇めき合つてゐるのである。そして其の結果は、鐵道敷設の利權讓渡に次ぐに鐵道敷設の利權讓渡、鑛山採掘の特權許與に次ぐに鑛山採掘の特權許與、といつたやうな報道の連續に接し、其等の皆『金のなる木』でも手に入れたやうないゝ氣になつてゐる利權獲得交涉者連の肚裡に蓄へられた凡百の計畫を聞いて　世界中が間斷なく有頂天にさせられてをつたのである。で當時は、外國の公使連が一切の運命に對する支配權を握つてゐたのである。殊に、支那の行政に對する責任を負ふてゐた所の支那の大臣諸公に對する支配權を掌握してゐたものである。ほんの微々たる小國の公使からの

抗議でさへも即座に殷懃を返させるだけの力があつたのである。況んやもし大國の公使の一人が毅然として卓を打つに至つては支那官人の膽天を破裂せしめるものがあつたのである。當時に在つては、支那の信用狀態は高かつたし、國内は比較的平和であつたし、商賣は繁昌してをつた。鐵道も——當時敷設されてあつた限りに於ては——正規に運轉されてをつた、貨物や旅客を相當た賃率で輸送して居つた。外國人と雖も國内の如何なる地方を旅行しても全く安全であつた……殊に最も奥地まで入込んでも少しも不安を感ずる要がなかつたものである。一切の貿易路は開放されてをり、支那人は敏捷な買手であり且つ賣手であつた。そして、一般的に言つて、外國の商工業者は其の開拓的努力の效果を收獲し投富の實績を擧げてゐたものであつた。

靜かに過去を回想して之を眼前直下の現在と比較してみるに當つて、外國の對支實業家は天上の樂園から突如として宛ら地獄の底に投げ落されてきたものであると想ふやうな心持ちでをるものである。普通の凡人がこの悲劇について冥想してゐる場合の哀れな特徵は、何故かうした變化が生起してきたのか、或は何故かの樂園が昔、驗のあつた所の方法に依て再び獲得られないのであるか、といふ根源を理解し得ない、もしくは理解しようとおもはたいといふ點である。が、それは實に極く簡單な事柄なのである。すなはち、進化の過程が進行し續けてきてゐて思ひきつた建直しを必要としてゐるのである。而も當時の支那に親んだ外國人は未だ立止つて斯うした變化の原因を推究してみることをしないでゐる、或はまた其の結果を摑むべき最善の方法に關する決心をつけかねてゐるのである。昔日の支那は所謂官人の一階級によつて政が行はれてをつた。そして其等の官人輩は一般人民の眼中には優等な人間と映つてをつたものであり、又彼等は人民に對しては大風に振舞つてゐたものであつた。且つ、彼等は自ら支配階級として彼等の行爲に對する批議は一切許すべからざることであるといふことを原則としてをつたのである。當時にあつては官人の言葉は直ちに法律であつた……而して其の法律の强制手段は死刑執行人の劍であつたのである。他國では『民の聲』は即ち『神の聲』であるものかもしれないが、しかし支那では『神の聲』なんかてんで問題にされない。從て又人民が少しでも協調的な努力を試みて官僚の行ふ取引に何等かの方法に於て干渉するといふやうなことは支那には見られない國である。もし誰か大膽な者がゐてどんな行爲なりとも問題にしようものなら、彼れの辯疑が死刑執行人の手に捕へられたが最後忽ち彼れの身首は處を異にせられたものであつた。といつたやうな次第で、所謂官人輩は最高の地位に立つ

列強對支關係の新紀元

ダブルユー・エイチ・ドナルド

何れの商工界なりとも對支取引關係の擴張を望むものは、從來支那に對する通商的發展策の上に採用されてきてゐるやうな態度と方法を一變してしまはなければ到底成功は覺束ない、といふやうな狀勢となつてきたのである。外國の金融業者や通商業等が從來親しんできてゐたやうな支那の古い秩序は今や急激な變革過程の中にある。過去に於て、或は利權を獲得し、或は產業關係を開拓し、或は商業の分枝を伸張するために非常な好成績を以て株守されてゐた方法は俄かに廢滅に適つた恰好である。ひと頃は、どんな種類方法の經濟的企業に對する協約でも何の手間暇をかけず極めて無造作らしく締結できたものであつた。例の有名な『利權獲得戰』時代には、支那政府の官僚が諸種の利權を分配し、諸種の借款を締結し、諸種の產業的計畫に無成算に放縱に這入りこんでをつたものであつたかのやうに傍觀者の眼には映つたのである。北京は利權漁りの亡者共に對する紛れもない鬪雞場であつた……そして語るも不思議なくらゐだが、さうした大小利權屋の手先共が彼等の親分共の樂天的な期待に背かず皆何か彼かの利權を土產に持歸ることが出來たものであつたやうに見えたのである。有象無象の山かん師や亦相當な團體の確つかりした財政的根據を持つてゐる代表者等が支那の中央政府並びに地方政廳の官僚輩に依て提供された玉手箱の周りに我勝ちに猿臂を伸して犇めき合つてゐるのである。そして其の結果は、鐵道敷設の利權讓渡に次ぐに鐵道敷設の利權讓渡、鑛山採掘の特權許與に次ぐに鑛山採掘の特權許與、といつたやうな報道の連續に接し、其等の皆『金のなる木』でも手に入れたやうないゝ氣になつてゐる利權獲得交涉者連の肚裡に蓄へられた凡百の計畫を聞いて 世界中が間斷なく有頂天にさせられてをつたのである。で當時は、外國の公使連が一切の運命に對する支配權を握つてゐたのである。殊に、支那の行政に對する責任を負ふてゐた所の支那の大臣諸公に對する支配權を掌握してゐたものである。ほんの微々たる小國の公使からの

抗議でさへも即座に飜意を返させるだけの力があつたのである。況んやもし大國の公使の一人が毅然として卓を打つに至つては支那官人の膽玉を破裂せしめるものがあつたのである。當時に在つては、支那の信用狀態は高かつたし、國內は比較的平和であつたし、商賈は繁昌してをつた。鐵道も──當時敷設されてあつた限りに於ては──正規に運轉されてをつた。貨物や旅客を相當な賃率で輸送して居つた。外國人と雖も國內の如何なる地方を旅行しても全く安全であつた……殊に最も奧地まで入込んでも少しも不安を感ずる要がなかつたものである。一切の貿易路は開放されてをり、支那人は敏捷な買手であり且つ賣手であつた。そして、一般的に言つて、外國の商工業者は其の開拓的努力の效果を收穫し致富の實績を舉げてゐたものであつた。

　靜かに過去を回想して之を眼前直下の現在と比較してみるに當つて、外國の對支實業家は天上の樂園から突如として宛ら地獄の底に投げ落されてきたものであると想ふやうな心持ちでをるものである。普通の凡人がこの悲劇について異想してゐる場合の哀れな特徴は、何故かうした變化が生起してきたのか、或は何故かの樂園が昔、驗のあつた所の方法に依て再び贏得られないのであるか、といふ根源を理解し得ない、もしくは理解しようとおもはたいといふ點である。が、それは實に極く簡單な事柄なのである。すなはち、進化の過程が進行し續けてきてゐて思ひきつた建直しを必要としてゐるのである。而も舊時の支那に親んだ外國人は未だ立止つて斯うした變化の原因を推究してみることをしないでゐる、或はまた其の結果を摑むべき最善の方法に關する決心をつけかねてゐるのである。昔日の支那は所謂官人の一階級によつて政が行はれてをつた。そして其等の官人輩は一般人民の眼中には優等な人間と映つてをつたものであり、又彼等は人民に對しては大風に振舞つてゐたものであつた。且つ、彼等は自ら支配階級として彼等の行爲に對する批議は一切許すべからざることであるといふことを原則としてをつたのである。當時にあつては官人の言葉は直ちに法律であつた……而して其の法律の强制手段は死刑執行人の劍であつたのである。他國では『民の聲』は即ち『神の聲』であるものかもしれないが、しかし支那では『神の聲』なんかてんで問題にされない。從て又人民が少しでも協調的な努力を試みて官僚の行ふ取引に何等かの方法に於て干渉するといふやうなことは支那には見られない圖である。もし誰か大膽な者がゐてどんな行爲なりとも問題にしようものなら、彼れの辯疑が死刑執行人の手に捕へられたが最後忽ち彼れの身首は處を異にせられたものであつた。といつたやうな次第で、所謂官人輩は最高の地位に立つ

て彼等の欲するまゝに取引を行ふことを得たものであつた。人民が默れば、隨て外國の投資家や利權獲得運動者が繁昌する、といつたわけであつた。ところが、併しながら、滿州朝廷の顚覆は支那官界の人物を相當時日の經過するに隨て完全に一變せしめたといふ結果を齎したのであつた。往時の官人輩は外國のやり口に就て無知であり、徒らに外國の勢力を畏怖し、そして、必要な機會には容易に借款締結の交渉が行はれるようにといふので始終國家の信用狀態を高く維持することに念慮を費してゐたものであつたが、かうした官人輩は袁世凱の沒後漸時全く其の姿を消すに至つたのである。そして彼等に代つて更に啓發された型の人物が現れてきて支那の官邊を占めるやうになつたのである。之に併せて、軍隊の分散といふ現象が亦將來されてゐるのである。今日に至るまで軍隊には何等の結合もついてゐない。その將校達の間にも何等の訓練がない。又、一つの政府と稱し得るやうな何等かの中樞機關による統制が毫も存しないのである。この軍隊の分散に伴つて亦殆ど永久的なものに見えるやうな各省間の爭鬪狀態が現出するに至つてゐるのである。そして、さうした各省間の爭鬪は中央政府の統制の弛緩してゐること〻相俟つて渾沌に近い狀態に支那を陷しいれてゐるのである。國庫の收入は空しく浪費されてきてをり、諸種の公的奉仕は軍閥の首魁達に對する私的奉仕と化せしめられてきてをる。そして、商人は、否人民全體は其の最善と信ずる自衛の途を講ずるに放任せしめられてきてゐるのである。さうした混亂狀態が極端まで至らずに辛うじて或る程度に止つてゐるといふのは、たゞ、農夫は飢餓を避けるために耕作を續けなければならず、亦同上の理由で支那の商人は賣買を續けるためには自暴自棄と鬪はなければならない、といふ餘儀ない事由が存するためのみである。

昔日の小膽な官人輩に代つて權力の座を占めるやうになつてきた所の新官僚は外國の外交官を逡巡せしめるに至つてゐるのである。此等の新官僚の多くの者達は、卓を鳴らして威嚇を試みるといつたやうな舊式の外交手段に依て左右されるやうなものではないのである。彼等は自分達を總ての外國人達と對等のものだと考へてをる。そして彼等は一切の條約がたゞ獨り外國諸邦と其の利害關係のみを利するものであると思考し、其等の條約を改締すべき決意を固めてをるのである。彼等は外國の勢力を恐れてゐるものではない。且つ彼等は外國のやり口をよく呑込んでゐるものである。更に加之、外國は條約問題に關して戰爭を開始することを困難としてゐるものであるといふことを彼等はちやんと見拔いてをり、而も彼等はこれまで他のことでは

一つも戰爭の原因を與へないだけの十分な賢明さを具備してゐるのである。彼等は所謂帝國主義なるものに對して盛に反發の聲を擧げをり、彼等の國家主權回復の要求を叫んでをり、又、支那に在任する外國人を困らせるやうに計畫された宣傳はどんなものでも、それを停止させるやうなことは何事もしないやうにしてをるのである。そして又、其の他の政治家連や軍閥者流もかうした官僚並びに國民の精神狀態を前者自身達にとつて有利なものだと考へてゐるのである。何となれば、斯ういふ風に一般公衆の注意の焦點を帝國主義者の上に聚めさせておくといふことは自然自分達自身に對する注意を他に逸らしておけるといふことになるからである。更に又、かうした事態は、世界革命のための陣營を張りつゝある所のソヴイエツト・ロシア、資本主義的利害關係の破壞、近代國家に於て行はれてゐる階級的政治の倒壞のための戰ひを續行しつゝある所のソヴイエツト・ロシアに依て利用せられるところとなつてゐるのである。すなはち、ソヴイエツト・ロシアの連中は容易に支那の社會運動家や學生等を動かして、支那人以外の有ゆる國民に對して完膚なき嘲罵を浴せかけてゐるやうな人氣に投じた言葉を後者に與へることで出來るのである。此等の運動者や學生等は、彼等が其の生業運を脅かして彼等の先導の下にさうした罵詈讒謗の戰ひに參加するやうに立到らしめうることが出來る。といふことを發見してきてゐるのである。そしてまた、例のボイコツトといふ怖物が所謂帝國主義者側に對する最も有力な武器だといふことが發見されてきてゐるので、彼等は何時でもさういふ氣持ちが起きた場合には即座にその武器を利用する用意を整へてゐるのである。もし此のボイコツトが彼等の願望を實現させることに成功しなかつたやうな場合には、そのときには彼等は彼等の運動の所期の目的——即ち支那人のための支那——を達成するために大規模の條約廢棄を提唱するものである。

支那の全國を通じて外人經營の事業を粉碎しつゝある大洪水に直面して一つの地歩を維持しようといふには、吾人は此の支那の市場に於て永久に保障せられるべき接近方法を愼重に再考しなければならないのである。支那人は彼等の需要する一切の工業生產品の自給を所期しつゝある。又、早晩其の輸出入業を彼等自身の手に依つて處理して、外國の仲介者を除斥せんと圖るに至るであらう。日本は之を達成することに成功してきてゐる。そこで支那人も亦日本と同樣のことを成就することを望んでゐるのである。併し乍ら、さうした事が達成され得るまでにはなほ多年の日子を餘してゐることであらう。で其の間に於ては、一面に於て支那の原料品を使用し一面に於ては支那に加工品を賣込むことを望んでゐるといつたやうな諸國が、支那の採るべき最善の政策の方針を決定する重大な要素であらねばならぬものである。ところで、支那の市場に接近する途といふのは

二つ存する。其の一つは武力の利用に依るものであり、他の一つは新規の外交手段の採用に依るものである。武力に依る接近はその國に高價な犠牲を必要とする戰爭を敢行する用意を整へてゐない限り不可能なことであり、且つ、その方法は殊に後日に怖恐を殘すやうな場合には問題にならない方法であるやうにおもはれるのである。從て、唯だ一つ殘されてゐるものは外交手續に於ける改革があるのみである。さて、この外交手段の改革といふのは、先づ第一に支那人が從來外國人に對して懷いてゐた惡感情を除去することを求めてゐるものであり、支那の野心を滿足させるために何等かの努力をすることを求めるものであり、そして純然たる友誼の基底の上に取引關係を設立することを求めてゐるものである。支那の新しい狀態に對して最初に適應し得る所の國民が先づ第一着手に且つ最も多大に利得する所の國となるであらう。適者殘存は自然の大法則である。その適者とは即ち環境の變化に對して能く己れを適應せしめ得るものゝ謂ひである。所で、環境は支那に於て今や顯著に變化しつゝあるが故に、對支取引の上で殘存者たらんと欲する者は、最初は氣に染まぬかもしれないにもせよ、其の新しい狀態に對して適應して行く心掛けがなければならないのである。物凄い音を立てゝ漲り流れてゐる河水も一時は制しきれる。が結局は、その氾濫を制してゐる防壁はそれが撤去されて無事を得るか、然らでなかつたならば押流されて亡失して了ふのである。支那の事象も亦氾濫して遮るものもなく奔流してゐる河の樣なものだと見えるであらう。それは諸々の舊因緣を激流にのせて海の彼方へと運び去りつゝあるのである。それらの或るものを救助して、荒廢に歸せしめられた地域を再び開墾するためには、勇敢、大膽、且つ堂々たる政治家的行動が何よりも肝要である。女波を手で爬きまはすやうな姑息な手段を弄することは何の役にも立たないだらう。大膽と小心を以て激流の中に跳込んで行き、手に掴み得るものを救助してそれを岸まで引上げなければならない。そこでそれは偶然その洪水から助つて生延びてきた皆のものとの友情の根基の上に再び蘇生せしめられるかもしれないのである。換言すれば、支那に於ける諸國民は其の支那との關係を新しく改締することが必要である。さうすれば支那の人民は其等の諸國民が恐ろしい妖怪ではないといふことに滿足の意を表するに至るであらう。そして彼等外國人は外國の活動の背後には善良なる意圖が實際の動機となつてゐるものだといふことを示現するやうに生活するに至るであらう。そして又、支那人側の局面が保護されるやうになるであらう。もし此の改締が斷行されないとするならば、依然として猜疑と不平と不安とボイコットとに對する原因が存續する外ないであらう。

二つ存する。其の一つは武力の利用に依るものであり、他の一つは新規の外交手段の採用に依るものである。武力に依る接近はその國に高價な犧牲を必要とする戰爭を敢行する用意を整へてゐない限り不可能なことであり、且つ、その方法は殊に後日に怨恨を殘すやうな場合には問題にならない方法であるやうにおもはれるのである。從て、唯だ一つ殘されてゐるものは外交手段に於ける改革があるのみである。さて、この外交手段の改革といふのは、先づ第一に支那人が從來外國人に對して懷いてゐた惡感情を除去することを求めてゐるものであり、支那の野心を滿足させるために何等かの努力をすることを求めるものであり、そして純然たる友誼の基底の上に取引關係を設立することを求めてゐるものである。支那の新しい狀態に對して最初に適應し得る所の國民が先づ第一着手に且つ最も多大に利得する所の國となるであらう。適者殘存は自然の大法則である。その適者とは即ち環境の變化に對して能く己れを適應せしめ得るものゝ謂ひである。所で、環境は支那に於て今や顯著に變化しつゝあるが故に、對支取引の上で殘存者たらんと欲する者は、最初は氣に染まぬかもしれないにもせよ、其の新しい狀態に對して適應して行く心掛けがなければならないのである。物凄い音を立てゝ漲り流れてゐる河水も一時は制しきれる。が結局は、その氾濫を制してゐる防壁はそれが撤去されて無事を得るか、然うでなかつたならば押流されて亡失して了ふのである。支那の事象も亦氾濫して遮るものもなく奔流してゐる河の樣なものだと見えるであらう。それは諸々の舊因緣を激流にのせて海の彼方へと運び去りつゝあるのである。それらの或るものを救助して、荒廢に歸せしめられた地域を再び開墾するためには、勇敢、大膽、且つ堂々たる政治家的行動が何よりも肝要である。女波を手で爬きまはすやうな姑息な手段を弄することは何の役にも立たないだらう。大膽と小心を以て激流の中に跳込んで行き、手に摑み得るものを救助してそれを岸まで引上げなければならない。そこでそれは偶然その洪水から助つて生延びてきた皆のものとの友情の根基の上に再び蘇生せしめられるかもしれないのである。換言すれば、支那に於ける諸國民は其の支那との關係を新しく改造することが必要である。さうすれば支那の人民は其等の諸國民が恐ろしい妖怪ではないといふことに滿足の意を表するに至るであらう。そして彼等外國人は外國の活動の背後には善良なる意圖が實際の動機となつてゐるものだといふことを示現するやうに生活するに至るであらう。そして又、支那人側の局面が保護されるやうになるであらう。もし此の改造が斷行されないとするならば、依然として猜疑と不平と不安とボイコットとに對する原因が存續する外ないであらう。

トロツキー原著
茂森唯士譯

文學と革命

定價貳圓
送料二十一錢

新刊

無產階級革命の曉、文學は如何なる位置にある乎――。現實無產階級革命の指導者たりしトロツキイが、本題を捉へ來たつて、彼一流の論爭的で力強い潑溂たる筆致もて、何人をも推服せしめずには措かぬ見解の適確さを以て滔々數萬言を費したのが本書である。而して本書をして永久に價値づけてゐる第一要素は、何よりも彼が批評の尺度たる唯物論的辨證法の正確さである、近時斯くの如く新味あり條理ある文學論は、吾等の未だ知らざる所である。譯文は正確にして且つ流麗、新人必讀の書

東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二

自然科學 第二號出來

第二號

（定價壹圓送料十二錢）

創刊號

（定價壹圓三十錢送料十二錢）

改造社發行

支那小說の話

田中貢太郎

(1) 馬琴の著書

この比私は下の室へ書棚を作つたので、二階の押入の中にぎつしり詰めてあつた雜書をおろしてそれに乘せたが、その時古い書籍を彼方此方と弄つてゐると、『曲亭馬琴翁叢書』と云ふ明治二十年比に活版になつた帙入の古本が見つかつた。それには八犬傳とか美少年錄とか、朝夷巡島記とか、さうした大部の物はないが、弓張月、俊寛島物語、三七全傳南柯夢、賴豪阿闍梨怪鼠傳、松染情史秋七草、皿皿鄉談、夢想兵衛胡蝶物語、質屋庫など云ふ私が少年の時に好んで讀んだ物語が二十五篇收めてあつた。

私はその標題を見たり、昔の記憶を辿つてそこここ頁を繰つて、七五調になつた美文的な文章を讀んでゐるうちに、馬琴の作物に就いて從來漫然と考へてゐたやうなことを復た考へだした。それは馬琴の小說の大部分が支那小說を飜案したもので、その意味において馬琴は眞の創作家でないと云ふ從來の批評である。從來の批評家は外形によつて、馬琴の八犬傳は水滸傳を飜案したもので、弓張月は雁宕山樵の水滸後傳の飜案。美少年錄と松染情史は今古奇觀と平妖傳。俠客傳は女仙外史から換骨脫胎して、それに好逑傳を交へたもの。金比羅船利生纜は西遊記。傾城水滸傳は水滸傳。金瓶梅は金瓶梅の飜案としてある。なるほど弓張月、美少年錄、俠客傳はじめ飜案の匂の高いものもあるが、八犬傳などに至つては、立派な創作であつて一口に飜案などとけなし去るべきものでない。ただ八犬傳の八豪傑は、水滸傳の百八人の豪傑を模倣した痕跡はあるが、それは大體の輪廓であつて、內容は全然違つたものである。水滸傳が宣和遺事を模倣したよりも模倣の程度の微弱なものであり、亦現下の文壇でよく見かける外國の脚本を燒き直した脚本よりも罪

自然科學

第二號出來

第二號

（定價壹圓送料十二錢）

口繪（樺太奥鈴谷嶺頂鐵道沿線ポドゾール自然斷面）

創刊號

（定價壹圓三十錢送料十二錢）

改造社發行

支那小說の話

田中貢太郎

(1) 馬琴の著書

この比私は下の室へ書棚を作つたので、二階の押入の中にぎつしり詰めてあつた雜書をおろしてそれに乘せたが、その時古い書籍を彼方此方と弄つてゐると『曲亭馬琴翁叢書』と云ふ明治二十年比に活版になつた帙入の古本が見つかつた。それには八犬傳とか美少年錄とか、朝夷巡島記とか、さうした大部の物はないが、弓張月、俊寛島物語、三七全傳南柯夢、賴豪阿闍梨怪鼠傳、松染情史秋七草、皿皿郷談、夢想兵衛胡蝶物語、質屋庫など云ふ私が少年の時に好んで讀んだ物語が二十五篇收めてあつた。

私はその標題を見たり、昔の記憶を辿つてそこここ頁を繰つて、七五調になつた美文的な文章を讀んでゐるうちに、馬琴の作物に就いて從來漫然と考へてゐたやうなことを復た考へだした。それは馬琴の小說の大部分が支那小說を飜案したもので、その意味において馬琴は眞の創作家でないと云ふ從來の批評である。從來の批評家は外形によつて、馬琴の八犬傳は水滸傳を飜案したもので、弓張月は雁宕山樵の水滸後傳の飜案。美少年錄と松染情史は今古奇觀と平妖傳。俠客傳は女仙外史から換骨脱胎して、それに好逑傳を交へたもの。金比羅船利生纜は西遊記。傾城水滸傳は水滸傳。金瓶梅は金瓶梅の飜案としてある。なるほど弓張月、美少年錄、俠客傳はじめ飜案の匂の高いものもあるが、八犬傳などに至つては、立派な創作であつて一口に飜案などとけなし去るべきものでない。ただ八犬傳の八豪傑は、水滸傳の百八人の豪傑を模倣した痕跡はあるが、それは大體の輪廓であつて、內容は全然違つたものである。水滸傳が宣和遺事を模倣したよりも模倣の程度の微弱なものであり、亦現下の文壇でよく見かける外國の脚本を燒き直した脚本よりも罪

支那小說の話

田中貢太郎

(1) 馬琴の著書

この比私は下の室へ書棚を作つたので、二階の押入の中にぎつしり詰めてあつた雜書をおろしてそれに乘せたが、その時古い書籍を彼方此方と弄つてゐると、『曲亭馬琴翁叢書』と云ふ明治二十年比に活版になつた帙入の古本が見つかつた。それには八犬傳とか美少年錄とか、朝夷巡島記とか、さうした大部の物はないが、弓張月、俊寛島物語、三七全傳南柯夢、賴豪阿闍梨怪鼠傳、松染情史秋七草、皿皿鄕談、夢想兵衞胡蝶物語、質屋庫など云ふ私が少年の時に好んで讀んだ物語が二十五篇收めてあつた。

私はその標題を見たり、昔の記憶を辿つてそここゝ頁を繰つて、七五調になつた美文的な文章を讀んでゐるうちに、馬琴の作物に就いて從來漫然と考へてゐたやうなことを復た考へだした。それは馬琴の小說の大部分が支那小說を飜案したもので、その意味において馬琴は眞の創作家でないと云ふ從來の批評である。從來の批評家は外形によつて、馬琴の八犬傳は水滸傳を飜案したもので、弓張月は雁宕山樵の水滸後傳の飜案。美少年錄と松染情史は今古奇觀と平妖傳。俠客傳は女仙外史から換骨脫胎して、それに好逑傳を交へたもの。金比羅船利生纜は西遊記。傾城水滸傳は水滸傳。金瓶梅は金瓶梅の飜案としてある。なるほど弓張月、美少年錄、俠客傳はじめ飜案の匂の高いものもあるが、八犬傳などに至つては、立派な創作であつて一口に飜案などとけなし去るべきものでない。ただ八犬傳の八豪傑は、水滸傳の百八人の豪傑を模倣した痕跡はあるが、それは大體の輪廓であつて、內容は全然違つたものである。水滸傳が宣和遺事を模倣したよりも模倣の程度の微弱なものであり、亦現下の文壇でよく見かける外國の脚本を焼き直した脚本よりも罪

の輕いものである。嚴密な意味から云へば、そこに缺點がないでもないが、模倣を奇智として崇んでゐた當時にあつては、當然赦さるべき缺點である。しかし、そこいらあたりによくあるやうに、恩人京傳の作物を無名氏の名に隱れて惡口を云つたり、一方には、傲岸不遜な國士的態度を見せながら、一方では鈴木牧之など云ふ所謂花友に對して、おべつかを使つてゐた馬琴の作物であるから、いつたいに厭味だらけのものであるが、日本第一の小說家として彼の大手腕を認めないわけにはゆかない。

飜案模倣は別として、馬琴が衣食を節して、あまし得た金で支那小說を買つて讀んでゐた事は、感ずべき事である。從つて水滸傳の評をした半閑窓談、新西遊記國字評、後西遊記國字評、平妖傳國字評等の記錄に見るも、如何に彼が支那小說に造詣の深かつたかと云ふ事が判る。從つて馬琴の作物の中には、支那小說から持つてきた面白い挿繪が到る處にある。有名な八犬傳の發端となつてゐる八房の犬の話は、搜神記にある盤瓠の話である。この盤瓠の傳說は、後漢書の南蠻傳にも出てゐるが、搜神記の話をしてみると、高辛氏の時に房王と云ふ者が亂を起した。そして、房王の勢が甚だ猖獗で、國家が危くなつてきたので、天皇は天下に詔して、『房王の首を取つて來た者には、千金と美女を與へやう』と云ふ約束をした。群臣は金と美女は欲しかつたが、房王の軍勢の盛なるを見て、進んで敵陣を冒さうとする者はなかつた。その時、天皇の可愛がつてゐた犬に、盤瓠と云つて毛が五色になつてゐる犬があつたが、ある日、その犬が急に見えなくなつた。見えなくなつた犬の盤瓠は、その時房王の陣中へ往つてゐた。房王は盤瓠を見つけると、『高辛氏は亡びるよ、犬でさへ主人を見捨て俺の所へ來た』と云つて、大宴會を催し、犬のために樂譜まで作らした。そして宴會の後で房王が非常に醉つて寢てゐると、盤瓠が來てその首を咬み切つて、天皇の許へ逃げ歸つた。天皇はひどく喜んで、犬の好きさうな御馳走をかまへさしたが、盤瓠はどうしても喫はない。天皇は己の云つた詞を思ひだして、『それではその方に約束どほり金と美女をやらうか』と云ふと、それまで呼んでも見向きもしなかつた犬が、急に體を起して吠えながら、そのあたりを駆け歩いた。そこで天皇は、盤瓠を會稽侯に奉じ、五人の美女を與へて、會稽郡の一千戶を食ました。後にその美女から三男六女が生れ、子孫はますます繁生して、犬戎の國となつた。周の幽王は、この犬戎の殺すところとなつたのである。

盤瓠の話ばかしでなしに、八犬傳の中にはかうした挿話が隨所にある。庚申山の怪猫の話も、麻布狸穴の兇賊の話も、皆そ

れぞれ支那の説話から持つてきてゐる。嘗て少年の比、隅田川梅柳新書を讀んだ私は、その中に珍らしい挿話のあるのに氣がついた。それは一疋の老狐が草原で書物のやうなものを見てゐるので、石を投げて狐を追ひ、それを拾つてみると、たくさんの若い女の名を書いて、それに朱で點をつけてあつたが、これは狐が人に化けて女を犯し、既に犯した女には、點をつけてあると云ふ話である。私は不思議な話だと思つてゐたが、後になつてそれが搜神後記の中にある話だと云ふことを知つた。それには、獵師が獵のかへりに、古い塚の中で老狐が簿書を見てゐるので犬をけしかけて咬み殺さし、それを取つて見ると、その獵師の女の名もその中にあつたと云ふ話である。

要するに馬琴等がかうして支那小説から、構想なり材料なりを取つて努力したことは、小説を黄表紙洒落本の域から獨立さす結果になり、從つてその小説は士大夫の間にもてはやされるやうになつたのである。由來日本の小説は王朝時代から支那小説の影響を受けてゐる。神典古事記にしたところで、支那の文字で支那の文章で書かれてゐるところから推すと、その血肉の中に支那文學の片鱗が交つてゐないとも斷言することはできない。王朝時代の小説で、竹取物語は寶樓閣經と漢書西南夷傳から來てをり、齋藤拙堂はその拙堂文話の中で、源氏物語はその構想を漢武内傳、飛燕外傳、長恨歌傳、霍小玉傳などから得、枕草紙は李義山雜纂に習ひ、伊勢物語は唐本事詩、章臺柳傳から來たものであると云つてゐるが、なかには牽強附會と思はれることもないではないが、しかし決して荒唐無稽な言ではない。故森槐南博士なども源氏物語は飛燕外傳から來たもので、それらの支那小説は、王朝時代に日本に渡來してゐたから、それらの趣向を用ゐたと云ふことは疑ひないもののやうに思ふと云つてゐる。やはり王朝時代に日本に渡來した支那小説の一つで、今では支那に無くなつてゐると云はれてゐる遊仙窟も、源氏物語に影響した小説の一つとせられてゐるが、この遊仙窟には當時の學者文人が如何に支那小説を讀むに苦心したかと云ふことを語つてゐる逸話が殘つてゐる。それは早くから邦譯になつてゐる遊仙窟鈔の序文に、「嵯峨天皇、書卷の中に撰んで遊仙窟を得、紀傳の儒者を召して傳受を欲す。諸家皆傳なる無し學士伊時深く愁歎す。時に木島の社頭、林木欝々たる所に、木を焼き草を結びて老翁有り。兩眼を閉ぢて常に之を誦す。問へば遊仙窟を讀むと。伊時聞きて、潔齋すること七日、衣冠を整理して、愼んで陪從を引いて翁の所に參詣す。誰か來ると云ふ。唯々として跪きて申す。遊仙窟を得んが爲に參れりと。翁曰く、我れ幼少にして自ら斉、此書を受く。年闌けて事に倦

み、僅に學ぶ所を誦するのみと。重ねて申す。願くば此書を教へよ、僕術も王家に侯して、學士の職に居るも、少幼より文に暗く讀む無し。哀矜を垂れよと。翁之を暗讀す。伊時假名を付して一帙を讀み畢る。還歸の後、種々の珍寶を送る。菴の跡、異香郁々として、其跡無し、其後感じて書す。大明神の化現たるに幾し。』と云ふやうな話が載つてゐるのでも知れる。

王朝時代に於ける支那小說の研究の結果が、王朝時代の文學に影響したのは自明の理である。王朝時代から鎌倉時代となり室町時代となると、世の中の擾亂のために文學も衰頽してゐたが、德川時代に入るに及んで、又新しく支那文學を吸收すると共に、旭日冲天の勢を以て日本文學が勃興して、近松、西鶴、京傳、馬琴などが輩出して、小說戲曲の隆盛を極めたが、その中でも馬琴がこの方面の立物であつたのは云ふまでもない。

(2) 剪燈新話

德川時代の初めに當つて日本文學に直接影響した支那小說は、剪燈新話であらう。剪燈新話は明の瞿佑、字を宗吉、號を存齋と云つた人の筆になつたもので、四卷二十一篇の說話からなつてゐる。宗吉は錢塘の人であつた。博學の才人で、洪武年中に臨安の教諭となり、永樂の初めに周王府の長吏となつたが、その六年、詩によつて罪を得、關外の保安城に貶謫せられてゐたが、洪熙になつて釋されて歸り、內閣辦事となつた。

この剪燈新話は同書の前後にある自序によると、もと剪燈錄と云つて四十卷あつたものゝ一部分と云ふことが判る。この說話集は宗吉が事を好む者から聞いた話を材料として書いたものだと云つてゐるが、その中の金鳳釵記は唐の陳元祐の離魂記を改竄敷衍したものである。離魂記では倩娘の體が二つになつて一つは家にをり、一つは男と一緒に奔つてゐて、二人の子供を生んだうへで、家に歸つて來て、家にゐた體と合して一つとになつてゐるが、金鳳釵記の方では、許婚になつてゐる姉が死んで、その靈が妹の姿になつて男の前に現はれ、男と一緒に奔つてゐたが、後に家へ歸つて來たところで、靈が消えて、久しく病床にゐた妹に憑き、妹と結婚さして未だ斷たざるの緣を續かしてくれといつて結婚さすと云ふことになつてゐる。又滕穆聚景園に醉遊する記の話も、唐の常沂の靈鬼志の中の顏濬の話に髣髴するものがある。綠衣人傳も粉本があつたことを記憶してゐるが、ちよと思ひ出せない。他にも精しく檢べたならその說話の由來する所が判るだらうと思ふ

要するに剪燈新話は當時の街談巷說ばかりでなしに、晉唐あたりの小說家にも負ふ所も多いのである。剪燈新話四卷二十一

篇の說話は、それぞれ特色のある怪奇談で、搜神記、太平廣記、夷堅志、聊齋志異、觚賸、夜譚隨錄、雨夜秋燈錄などは、これと同系のものである。この剪燈新話は早くから日本へ舶載せられたと見えて、慶長活字板に翻刻せられ、尋いで慶安元年に整板に再刻せられてゐる。今、坊間に見うける大判紙形の四冊本がそれで、それには二條鶴屋町書林仁左衛門刊行と云ふ出版書肆の名が入つてゐる。

由來日本の文學で支那文學の影響を受けないものはないが、わけて德川期になつて非常な影響を受けた。それは德川期になつて漢學が盛に行はれると共に、史子百家の書に交つて舶來した小說隨筆の類が一部學者の好奇心をそそつて翻譯紹介する者が出て來たがためであつた。そして、その支那の小說の翻譯紹介者として知られてゐるのは、岡島冠山、岡白駒、都賀庭鐘などである。その中で冠山は長崎の通事で、水滸傳を翻譯した通俗忠義水滸傳、唐話便用、小說字法、唐譯便覽の著がある。白駒は今古奇觀から說話を拔き出して、小說精言、奇言など云ふ短篇集を編み、庭鐘はやはり今古奇觀を翻案して、英草紙、繁夜話などをこしらへてゐる。雨月物語の著者として有名な上田秋成は、この庭鐘に師事したと云はれてゐる。

支那小說が學者文人の間に愛玩せられるやうになつたのは、享保比からで、寶曆にはもうその翻刻翻譯が盛になつてゐたが、しかし、この初期の元祿比までの支那文學は、古文で書いた隨筆短篇の類で、白話、即ち俗文で書いた長い小說類は、文化文政比までは翻刻翻譯にならなかつた。それは古文で書いた、若しくは俗文で書いてあつても今古奇觀のやうな簡單のものは、普通の漢文の力で容易に讀むことができたが、俗文の長い小說は、ちよと讀めなかつたからであらう。

この支那小說流行の中で德川期の小說の大系をなした所謂讀本の骨骼となつたものは、今云つた剪燈新話である。その剪燈新話が日本文學に交渉を持ち出したのは、奇異雜談集と云ふ中村豐前守の子と稱する僧侶の手になつた怪談集からで、それには日本諸國の怪奇談の中へ金鳳釵記、牡丹燈記、申陽洞記の三篇が翻案せれてゐる。この奇異雜談集は享保年間の刊行になつてゐるが、朝倉無聲氏、藤井乙男氏などの說では、著作になつた年代は文明年間であるとのことであるから、さうなると剪燈新話の日本に來たのは餘程古いことになる。

奇異雜談集に次いで林羅山の著と云はれてゐる怪談全書も剪燈新話と交渉がある。怪談全書は元和年間に刊行されたもので、それは說海、說淵、搜神記、異聞錄、太平廣記の中から怪異談を拔いて翻譯したもので、その中に金鳳釵記の一編が交つ

てゐる。かうして一方に天文から慶安にかけて飜刻せられ、一方飜案によつて怪談小說の礎石となつてゐた剪燈新話は、寬文六年淺井了意に飜案せられて、御伽婢子となつて世に出るに及んで、その血肉を日本文學に混交したのである。

御伽婢子は全編十三卷六十七篇の說話集であるが、その中で剪燈新話の飜案が十八篇あつて飜案になつてゐないのが富貴發跡司志、鑑湖夜泛記、附錄の秋香亭記の三篇である。了意は近松西鶴以前の文章の第一人者であるうへに。原文の奇想が讀書子の好奇心をそそつたので、御伽、百物語、諸國物語の名の下に類似の怪奇談集が續出した。今、御伽婢子と剪燈新話との原話を對照すると、水宮慶會錄は龍宮上棟、三山福地志は黃金百兩、華亭逢故人記は眞谷九右衛門、金鳳釵記は眞紅の撚帶、聯芳樓記は歌を媒として契る、令狐生冥夢錄は地獄を見て蘇る、天台訪隱錄は十津川の仙境、滕穆醉遊聚景園記は金閣寺の幽靈に契る。牡丹燈記は牡丹燈籠、渭塘奇遇記は夢のちぎり、永州野廟記は邪神を責殺す、申陽洞記は隱里、愛卿傳は遊女宮木野、翠翠傳は幽靈書を父母につかはす、龍堂靈會錄は幽靈評ニ諸將一、太虛司法傳は鬼谷に落て鬼となる、修文舍人傳は了仙貧窮附天狗道、綠衣人傳は易ㇾ生契となつてゐる。有名な圓朝の牡丹燈籠はこの牡丹燈籠を材料にしたもので、人物の名もこの牡丹燈籠の人物の名をそのまゝ用ゐてある。ただこの牡丹燈籠の場所は京都にしてゐるが、圓朝のは東京になつてゐて谷中三崎町の方から下駄を穿いた幽靈がカランコロンとやつて來るのである。

剪燈新話には別人の手になつた剪燈餘話と云ふものがあつて、それにも面白い話を集めてある。この剪燈新話の怪談物や古今奇觀を飜案した英草紙繁夜話の奇事異聞物が一緒になり、建部綾足の本朝水滸傳、西山物語など云ふ演譯小說の反動に出た擬古體の小說を交へて、上田秋成の雨月物語が生れて、初めて讀本の形體がそなはつた。この雨月の中で有名な蛇性の婬は、西湖佳話の中の雷峰怪蹟の飜案で、夢應の鯉魚は說海の中の魚服の飜案である。最近室生犀星氏はこの夢應の鯉魚を書きなほして小說にしたことがある。その他雨月の淺茅が宿は、御伽婢子の遊女宮木野から來、佛法僧は御伽婢子の幽靈評ニ諸將一の蹤を踐んだ所があり、吉備津の釜は後半を牡丹燈に交へ、白峯は釋仙抄の材料を支那小說の何かの型へ入れてこしらへたものである。この白峯の話は馬琴も書き、明治になつてからは幸田露伴氏も書いてゐるが、いづれも原話には及ばない。

雨月物語を生んだ文藝の主流は、幼稚であつた江戶の作家を刺激した。寬延から明和にかけて彼の英草紙や繁野話が刊行に

なる比から文學の東漸が始まつて、支那小說翻譯翻案の隆盛を極めた文化文政期を出現し、その結果馬琴京傳の讀本が大成したが、明治になつてから泰西の文學思想が入つて來たために、支那小說的な傳奇的作風は殆んどすたれてしまつたかの觀があつたが、歐羅の文學思潮の行き詰りの結果として、この比になつて亦支那の文學が注目せられるやうになつた。

明治の萎靡時代になつて支那小說の雰圍氣に籠つて創作をやつてゐた人の中で知られてゐるのは泉鏡花氏であつた。鏡花氏の有名な高野聖は、唐の小說の幻異志の中にある板橋三娘子を扮本にしたやうに思はれる。この板橋の三娘子は、蕎麥の餅を喰はして旅人を驢馬にしたが、高野聖の妖女は、旅人をさんざん弄んだうへで、飽いて來ると蝙蝠にしたり、猿にしたり、時に馬にしたのは下男に云ひつけて賣りにやり、大あぐらを搔いて酒を飲んだ。この三娘子の話は明治二十七八年比刊行になつた妖怪府とか何とか云つた薄つぺらな翻譯の活字本の中にあつたから讀んでゐる人もあるだらう。

谷崎潤一郎氏の初期の作で有名であつた秘密と云ふ怪しい女に淺草の雷門から目隱しをして車で伴れて往かれることを書いた小說は、晋の賈后の故事の翻案である。晋の時、盜尉部に美貌の小役人がゐたが、ある日、道を歩いてゐると、老嫗が來て箱車に乘せて伴れて往かれた。そこは賈后のゐる宮殿であつたが、老嫗は此所は仙宮で、たくさんゐる美しい女は仙女であると云つた。そして小役人はその夜仙妃と云ふ中年の女の枕席に侍して、翌日錦繡の衣裳をもらひ、また彼の箱車に乘せられて前日の場所へ送り返された。ところでもらつた衣裳が普通平民の著る衣裳でなかつたので、竊盜の嫌疑を受けたが、その係が賈后の親戚であつたから判つて赦された。この賈后の故事は既に吉田御殿の扮本になつてゐる。その他翻案ではないが、芥川龍之介氏にも佐藤春夫氏にも、支那の奇談を取りあつかつた作がたくさんある。

一　支那小說の起原

支那で初めて小說的な說話の發生したのは、漢になつて燕齊迂怪の徒が出て、荒誕不稽の說を唱へたがためであつた。燕齊は今の山東から直隸にかけての地域で、海に臨んでゐたために、風水の變化があり、その登州から萊州へかけた山東の岬角は、蜃氣樓の常現地として有名であるから、燕齊の方士どもは、この蜃氣樓から不老不死の神仙譚をでつちあげて、齊の威王、宣王。燕の昭王。秦の始皇など云ふ主人に說いたものだ。史記の封禪書にも「威宣燕昭より、人をして海に入つて、蓬萊、方丈、瀛州を求めしむ。この三神山は、傳へて渤海の中に

在り、人を去る遠からず、且に至らんとすれば、則ち船、風を引いて去るを患ふと、蓋し嘗て至る者有り、諸僊人及び不死の藥皆在り、其物は禽獸盡く白くして、黄金銀を宮闕と爲す。未だ至らずして之を望むに雲の如し。到るに及んで三神山反つて水下に居り、之に臨むに風輙ち引き去りて終に能く至る莫しと云ふ。世世の主甘心せさるなし、秦の始皇天下を并すに至り、海上に至れば、則ち方士の之を云ふもの數ふるに勝ふべからず。始皇自ら以爲らく、海上に至るも恐くは及ばずと、人をして乃ち童男女を齎らし、海に入りて之を求めしむ。船、海中に交る。皆風を以て解となし、曰く未だ至る能はず、之を望見すと。』と云つてある。その蜃氣樓の宮殿へ現實の船を持つて往かうするところに、夢幻的な文學が生れて來なければならない。

神仙の說は漢の武帝に至つてますます盛になつた。武帝は英雄の資を以て、北、匈奴を逐ひ、西域の道を通じて、廣大な土地を漢の版圖にした天子である。その武帝が現世の快樂を永久に縦にしやうと云ふところから、神仙の說を喜ぶやうになつたので、燕齊迂恠の方士どもが續續と集つて來た。そして、一番に武帝の前に出たのは、李少君と云ふ方士であつた。李少君は『竈を祠れば、丹沙化して黄金となすべく、壽增すべく、蓬萊の仙見ることを得べし、之を見て封禪すれば、即ち死せず。』と云ふやうなことを云つた。

李少君の後では、少翁、欒大、公孫卿など云ふ方士が來た。中でも少翁は武帝の寵姫李夫人が亡くなつて、武帝が歎いてゐると、幻術でその姿を髣髴さしたと云ふので、大に信仰を得てゐたが、後に牛に文字を書いた帛を喰はして、その術を神怪にしやうとしたために、殺され、欒大も公主まで妻あはされて信仰を受けてゐたが、これまた詭詐が露はれて腰斬せられた。李少翁はとうに病で死んでゐた。

武帝は方士どもの姦謠を見てもやはり眼が醒めないで、宮殿を建てたり、燕齊の海濱へ人をやつたり、後には公孫卿を伴れて、自分で出かけて往つた。その時武帝の前に出て神仙のことを云つた方士の數は、一萬を越えたと云はれてゐる。しかし、いくら捜しても神仙などのゐやうはずがない。武帝はくたびれ儲けで歸つてきたが、しかし、それは無駄な骨をりではなかつた。彼は神仙の代りに小說と云ふ文學的の收獲を得たのであつた。

燕齊迂恠の方士の一人に虞初と云ふ者があつて、武帝に仕へてゐたが、この虞初が周說九百四十三篇の說話集をこしらへると云ふことが漢書の中にある。班固の註にも、『河南の人、武帝

の時、方士を以て侍郎となり、號の黄車使者たり、應劭曰く、その説は周書を以て本となす、顔師古曰く、史記に云ふ、虞初は洛陽の人と、即ち張衡の西京賦、小説九百、虞初より本づく者なり。』と云つて、虞初の人となりなり、地位なりを云つてあるが、この虞初が支那の小説の開祖と云ふことになつてゐる。後世になつて虞初新志と云ふ説話集ができて、日本でも多く讀まれ、又それを眞似て日本でも本朝虞初新志と云ふやうなものも出てゐるが、それはこの虞初の名を冠したものである。

武帝の左右には虞初の他にまだ一人の小説家がゐた。それは滑稽家として有名な東方朔である。東方朔は純粋の方士ではないが、その人物は方士的人物で、滑稽諧謔を以て愛せられてゐた。この東方朔に小説二十篇の著があつて、神異經、海内十洲記は、その一部であると云はれてゐるが、それは虞初新志に虞初の名を冠したやうに、東方朔の名に依託した六朝文士の作だと云ふことである。

漢書藝文志によると、虞初をはじめ小説家の名やその篇數などが載つてゐて、『右小説十五家千三百八十篇』と云つてあるが、後世に傳はつてゐるものはない。ただそれによつて小説の萠芽の多かつたことが伺はれるだけである。ぜんたい小説と云ふ詞は、藝文志に出たのが初めで、それには『小説家者流は蓋し稗官に出づ。街談巷語、道聽途説者の造る所なり。孔子曰く、小道と雖も必ず觀るべき者有り。遠きに致すは恐くは泥まん。是を以て君子は爲さざるなり。然して亦滅びざるなり。閭里小知の者の及ぶ所、亦綴りて忘れざらしむ。如し或は一言采るべくんば、此れ亦芻蕘狂夫の議なり。』と云つてゐる。稗官に就いては『細米を稗と爲す、街談巷説、其れ細碎の言なり。王者閭巷の風俗を知らんと欲す。故に稗官を立て之を稱説せしむ。』と云つてゐる。要するに此所で云ふ小説は、道聽途説的な噂話と云ふことになつて、今の所謂小説とは大に逕庭があるが、しかし、世界各國の小説の一度は經過すべき道程であると云ふことを知らねばならぬ。

二　山海經

支那は古來、南方は人鬼を信じ、北方は狐狸の妖を談ずと云はれてゐる。閎誕で、恢奇で、蠱惑的なのが支那小説の特色であつて、内部の生命よりも外形を描き、事件を描き、誕漫を描き、眩惑を描いてゐる。即ち支那小説は、龍を信じ、雷公を信じ、水神を信じ、竈官を信じ、考城隍を信じ、人魚を信じ、神仙を信じ、人鬼を信じ、狐妖を信じてゐる民族が傳へた神話と傳説から出發したものである。

支那で小説的説話の先驅をなしてゐるものは山海經である。

山海經は先秦時代のもので、史記の大宛傳の賛に山海經を見たと書いてあるに徴しても知れる。この山海經は荒唐無稽な異聞傳說を集めたもので、楊愼の序には、夏の禹が九州の金を集めて九鼎を鑄た時、民をして神姦をしらしむるために、山川草木、禽獸魚介、金石の性を別ち類を分ちて、それに鑄つけた物の畫の說明であると云つてゐる。その序文の中には亦太史、即ち史官の終古と云ふ者が、古今の圖を藏してゐたところで、夏の桀王が黃畫を焚くやうになつたので、所藏圖を抱いて殷へ投じたと云つてあるところを見ると、鼎の彫刻の畫を史官などが保存してゐて、それに說明を加へてあつたのが、眞物の鼎は元より畫も亡くなつてしまつて、その說明文ばかりが山海經となつて殘つたものであらう。楊愼の序文にはまだ晉の陶潛の詩に山海圖を流觀し、阮氏の七錄に張僧繇山海圖が有るから證とすべきのみと云ふてゐるが、陶淵明の時代にはまだ畫があつたらしい。要するにこの山海經は、支那古來の壁畫や彫刻の模寫に添へた綺詞で、數年前平福百穗氏が畫いた『豫譲』の原畫になつたと云はれた、山東省にある武氏の石室の壁畫のやうなものに添へた說明的の詞であらう。

　山海經は山や川に珍らしい鳥や獸がゐたり、また珍らしい石や金があるといふことをのべつに書いて、その中に詩や小說の原說になつた傳說が交つてゐる。その南山經の章には、鳳凰のことを書いて、『又東五百里を丹穴の山と曰ふ、其上に金玉多し。丹水出づ。南に流れて渤海に注ぐ。鳥あり、其狀鷄の如し、五采にして文あり。名づけて鳳凰と曰ふ。首の文を德と曰ふ。翼の文を義と曰ふ。背の文を禮と曰ふ。膺の文を仁と曰ふ。腹の文を信と曰ふ。是の鳥や飲食自然にして、自ら歌ひ自ら舞ふ。見はるときは則ち天下安寧なり。』と云つてある。かうした傳說から神異經にある不孝鳥のやうな話が生れてくる。不孝鳥の話と云ふのは、『不鳥は孝狀人身の如し　犬毛にして齒有り、猪牙なり、額上に文あり、不孝と曰ふ。口下に文有り、不慈と曰ふ。背上文有り、不道と曰ふ。左脅文有り、愛夫と曰ふ。右脅文有り、憐婦と曰ふ。故に天此の異畢を立て以て忠孝を顯はすなり。』と書いてある。馬琴はこの不孝鳥の話を夢想兵衛へ持つてきてある。

　山海經の中の北山經の章には、精衛の傳說がある。『又北二里にして發鳩の山と曰ふ、其上に桔木多し、鳥有り、其狀烏の如く、文の首、白き喙、赤き足、名づけて精衛と云ふ。其鳴くや自ら訴ふ。是れ炎帝の少女、名づけて女娃と曰ふ。女娃、東海に遊び、溺れて返らず、故に精衛と爲る。常に西山の木石を銜みて、東海を堙ぐ。』

この精衛の故事は馬琴あたりの小說にたくさん引用してある。山海經の中で有名なのは、西王母の傳說である。西王母は周の穆王が天下を周遊した時、崑崙山の瑤池で逢つて宴會をしたと云ふ美しい女であるが、山海經では、『又西三百五十里を玉山と曰ふ、是れ西王母が居る所なり。西王母は其狀人の如く、豹の尾、虎の齒ありて善く嘯く、蓬髮にして勝を戴く。是れ天の厲及び五殘を司る。』としてある。これは山海經の中の山西經の文であるが、大荒西經には、『西海の南、流沙の濱、赤水の後、黑水の前、大山有り、名づけて崑崙の丘と曰ふ。神有り、人面虎身、文有り、尾有り、白あり、其下弱水の淵有りて之を環る。其外炎火の山有り、物を投ずれば、輒ち然ゆ。人有り勝を戴く。虎齒豹尾ありて穴處す。名づけて西王母と云ふ。』として、皆虎齒豹尾の怪物となつてゐるが、これが次第に變化して玄宗帝に愛せられた楊貴妃のやうな美人の仙人となつて來る。この西王母の考證は今にやる人があつて、その說によると西王母とは一人の人でなしに種族の名であるとのことである。

山海經に次いで古いものは、穆天子傳と竹書紀年である。この二書は、晉の太康中に、汲縣にあつた春秋戰國時代の王魏の墓から堀りだしたもので、やはり先秦時代の遺物と云ふことになつてゐる。その中で、穆王が八駿に乘つて天下を周遊した時、崑崙へ往つて、瑤池で西王母に逢つたことを書いてあるが、その西王母が山海經より進化して、虎齒豹尾の怪物でなしに女王のやうな美婦になつてゐるところから、漢以後の文士の手になつたものだとせられてゐる。竹書紀年は、黃帝から周の愼靚王までのことを書いたもので、變則な歷史である。

小說的說話の先驅となつたものは、まだ他にもたくさん在つたであらうが、なにしろ周末の戰亂を經たうへに、秦の劫火があり、そして漢になつてみると、今度は儒教が國教となつて、怪力亂神を語る異端の記錄に對する壓迫が烈しかつたので、神話も傳說も說話も散佚してしまつたものであらう。そして、武帝の時になつてその緊縛がゆるんだので、穆天子傳が漢時代のものだと云はれるやうに、山海經からは稍進步した說話が生れるやうになり、神異經、十洲記など云ふ物ができてきた。

神異經は山海經から出たもので、淺薄な敎訓的の寓意を含ましたものである。海內十洲記は、武帝が西王母から祖洲、瀛洲、玄洲、炎洲、長洲、元洲、流洲、生洲、鳳麟洲、聚窟洲の十の仙島のことを聞くと共に、東方朔が神仙であることを知つたから、曲室に召して十洲のことを精しく聞いたが、これによつて、祖洲に不死の草のあることを知つて、徐福に童男童女五百人を附けて、樓船に載せ、祖洲へやつたが、遂に返らなかつ

たと云ふやうな話である。

三　漢武故事

神異經は山海經から出たものであるが、山海經に較べると、淺薄であると云つたが、要するに山海經は單純な異聞傳說で、そこに何等の情意の動いてゐるところがない。話は面白くて、後世の詩や小說や戲曲の材料になつたとは云へ、小說的說話としては甚だ不完全なものであるが、神異經の方は淺薄でも情意が動いてゐるところに、小說的說話としては一步を進めたものがある。しかし、まだ神異經や十洲記は傳說の域を離れてゐないが、漢武內傳、漢武古事、飛燕外傳、雜事秘辛、洞冥記など、になつてくると、小說物語の體裁を具へてゐる。

そのうちで漢武故事、漢武內傳の二書は、漢書の著者班固の著といふことになつてゐるが、これも六朝あたりの文士が書いて、班固に假託したものであらう。その中で漢武故事は、神仙を信じ、宮女を熱愛した漢の武帝の一代記とも云ふべきもので、鎖聞答話を思ひだし思いだし書いたと云ふふうに書いてあつて、文章も雜駁であるが、話の筋は面白い。

話は武帝の母から始まつてゐる。それによると武帝の母は王仲と云ふ者の女であつたから、初めは王夫人と云はれてゐた。王夫人の母は王仲の許へ緣づいて、一人の男の子と二人の女の子を生んだ。その女の子の一人が王夫人であつた。ところで、王仲が間もなく亡くなつたので、母は三人の子女を伴れて、田と云ふ人のところへ再緣した。そのうちに王夫人は年頃になつたので、金と云ふ者のところへ嫁いらして、男の子を生んだ。そのじぶん、姚翁と云ふ人相見があつたが、ある時、王夫人を見て、『あなたは天下の貴人だ、きつと天子を生む方だ、』と云つたので、田は王夫人を金の手から取り戻して、景帝の宮中へ入れた。そこで王夫人は、景帝の寵愛を受け、妊娠して乙酉の年の七月七日、武帝を猗蘭殿で生んだ。

武帝は四歲になつた　東王に封ぜられた。甚だ聰明で、後宮で皆と遊ぶ時などには、相手の氣持をのみこんで、それぞれ惡感を抱かせないやうにした。天子の前にをる時には、非常に禮儀が正しくて、大人のやうであつたから、皆がそれに注意してゐた。

薄皇后がそのとき皇后であつたが、皇子がないので、栗姬の生んだ皇子を太子とした。その時、景帝の女兄弟に、長公主と云はれてゐる女があつて、他所へ緣づいて女の子を生んでゐたが、長公主はその子を太子に妻あはさうとした。栗姬は嫉妬心の深い口喧しい女であつたから、景帝の寵愛がすこし衰へてゐた。王夫人は太子と長公主の女と結婚さして、長公主の氣

に入られよと思つたので、栗姫の所へ往つて『長公主は上に信用がおありになりますから、あなたも、長公主の女と太子を結婚さして、長公主と結んでは如何でございます、』と云つたが、この比たくさんの宮女が長公主の手から天子の前へ出て、それが皆寵愛せられてゐるので、栗姫は長公主を恨んでゐた。で、頭として承知しなかつた。そこで長公主は非常に怒つて、それから何かにつけて、栗姫の缺點を景帝の前で云ふやうになつた。

王夫人は思慮深い女であつたから長公主を非常に大事にした。そこで長公主は、王夫人の生んだ武帝の膠東王と己の女を結婚さしたいと云ひだしたが、景帝が許さなかつた。そのうちに長公主は、事情があつて宮中へ歸つて來た。武帝は五つか六つであつた。ある日、長公主は、武帝を膝へ抱きあげて『あなたは何人を奧さんにします、』と云つて、そのあたりにゐた宮女へかたつぱしから指をさしてみせたが、皆頭を振つて承知しない。最後に己の傍にゐた女の阿嬌に指をさすと、武帝ははじめて頷づいて『阿嬌なら金屋を造つて置きます、』と云つた。長公主は非常に喜んで、景帝にせがんで婚約をした。

そのうちに薄皇后が廢せられたので、栗姫が皇后になる順序となつたが、栗姫と仲の惡い長公主が、その缺點を擧げて皇后にすることを勸めない。そのうへ、景帝も栗姫に對して怒つてゐることがあつた。ある時、景帝が他の宮女の生んだ皇子や皇女のことを話して、『俺が亡くなつたら、お前がよく世話をしてやつてくれ、』と云ふと、栗姫は怒つて、『私はそんなことはできません、』と云つた。またある時、景帝と喧嘩をして、『この老犬、』と罵つたことがあるので、皇后にすることを躊躇してゐる、と、王夫人は長公主に云つて、栗姫を皇后とするやうにと大臣に云はさした。それは栗姫が大臣をつッついて、己を皇后にさせる運動をしてゐると云ふことを、景帝に思はせて憤らせやうと云ふ謀であつた。そこで長公主に命令を受けた大臣は、景帝の前へ出て、『早く栗姫を皇后になされるがよろしうございます、』と云つた。景帝は果して栗姫の奴が大臣をつッついて、こんなことを云はしてゐるだらうと思つて、非常に立腹した。そして、その場で大臣を斬り殺して、栗姫の生んだ太子を廢したので、栗姫は自殺してしまつた。で、王夫人が皇后となつて、武帝の膠東王が太子となることができた。

武帝は十四になつて位に即いて、年號を建元と號した。武帝が天子になつたのは長公主の力であるから、長公主はその功に誇つて、いろいろのことを要求するので、武帝もてあましした。さうなると、皇后の阿嬌に對する寵愛もしぜんと薄らいで

きた。お母さんの皇太后がこれを見て、『お前は太皇太后の怒にも觸れてゐるうへに、今また長公主の心に逆らふてをるが、甚だ宜しくない、女はちよつとしたことで喜ぶものだから、注意するがよからう。』と云つた。武帝は皇太后の詞を聞いて、長公主の機嫌を取り、皇后も元のやうに寵愛しだした。

建元六年になつて太皇太后が崩じたので、武帝ははじめて自分で政治をするやうになつてくると、神祭を始め、また四方を征伐して漢の版圖を擴めやうとする謀をめぐらした。その一方では、長公主が何時までも己の功を誇つて、いろいろの要求をしたが、武帝はもうその要求を入れないので、長公主は恨んで惡口を云ひだした。武帝は怒つて長公主を廢しやうとすると、皇后が、『長公主が無かつたなら、あなたは聖位に登ることができなかつたではありませんか、恩を忘れてはよくありますまい。』と云つて母をかばつたので、武帝も長公主を廢することはやめたが、皇后の寵愛は衰へてしまつた。

皇后はどうかして武帝の寵幸を元のとほりにしようと思つて、女巫を近づけた。巫は男の衣冠をつけて、皇后の寢室にをり、夜晝怪しい神を祭つて、武帝の心を元のとほりにすると云つてゐた。武帝がそれを知つて、詮議して見ると、口にも云へないやうな奇怪なことをしてゐたので、遂に皇后を廢して、長門宮へ移したが、衣服飮食の手あては元のとほりであつた。

さうなつても長公主は武帝と接近してゐた。そのじぶん長公主は、董偃と云ふ男を可愛がつてゐた。武帝は長公主とその男を己の室へ呼んで、酒宴をしたり、また長公主の家へ往つて、三人で酒宴をしたりした。東方朔や司馬相如などがそれを諫めたが聞かなかつた。そのうちに董偃は財産が出來てきて、他の女に戯れ、長公主を疎むやうになつたので、長公主が怒つて、董偃を一室に押込めて赦さなかつた。武帝はこれを見ると、董偃に自殺を命じたが、後に長公主が亡くなると一緒に葬つてやつた

元朔元年、衛子夫を皇后とした。衛子夫はもと平陽公主の家に使はれてゐた者であつた。ある時、武帝が公主の家へ往つて、酒宴をしてをると、唄を歌つて酒宴の興を添へてゐる女の中に、武帝の注意を惹くやうな意味をこめた唄を歌ふ者があつた。それが衛子夫であつた。武帝が著物を更へる時、衛子夫はその傍に隨いてゐた。衛子夫は黑いつやつやした髮をしてゐた。衛子夫は遂に武帝の宮中へひきとられた。しかし、宮中には數千の宮女がゐて、順を追ふて武帝の寵愛を受けてゐたので、衛子夫は一年あまりしても武帝の前に出ることができなかつた。衛子夫は失望して、ある日武帝の前へ出て、宮中を出た

いと請ふた。武帝は、『わしは昨夜、お前の家の中庭へ梓の生へた夢を見た、これは天意である。』と云つて、衛子夫を寵愛した。その衛子夫は二人の皇女と一人の皇子を生んだ。その皇子が戾太子であつた。

淮南王安が方士を呼んだが、皆神仙のことを口にした。武帝は神仙の道によつて現世の快樂を永久に縦にすることができると云ふことを聞いて非常に喜んだ。天子が神仙の説を喜ぶと云ふことが知れると、燕齊の地方から方士が續續とやつてきた。武帝はそこで先づ李少翁を信用して文成將軍にしたが、べつに不思議なこともないので飽いてきたところで、李夫人が亡くなつた。武帝がそれを悲しんでゐると、少翁が方術でその姿を髣髴さしたので、武帝はまた少翁を信用した。その少翁は他のことは皆驗があつたが、ただ太乙を祭ることだけは旨くゆかなかつた。武帝は怒つて少翁を殺してしまつたが、一箇月ばかりして、朝廷の使者が關東から歸つてゐると、澗亭で少翁に逢つた。少翁は使者に向つて、『朝廷へ歸つたなら、上に、すこしのことを忍ばないと大事を破ることになる、今から四十年の後には、私と蓬山で逢つて、事をともにする約束があるから、決して恨んでゐないと云つてもらひたい。』と云つた。使者が歸つて奏上すると、武帝は非常に後悔して、また方士どもを呼びだした。

武帝は何時も輕い服装をして微行した。丞相の公孫弘が諫めたけれどもきかないので、弘は死んで諫めると云つて自殺した。武帝は非常に悲しんで自分で誄詞まで作つて弔つたが、匈奴を討伐しようとして弘に諫められて中止してゐる時であつたから、けつきよくそれを疎にして、將軍霍去病に數十萬の將卒を與へ、懸軍萬里、匈奴を驅逐して漠南に王廷なからしめた。

武帝は又昆明池を堀り、柏梁臺を起したが、柏梁臺には神君と云ふ神を祭つてあつた。その神君は長陵の生れで、人の細君となつて男の子を生んだが、二三年してそれが亡くなつた。神君は悲しみのあまり死んでしまつたが、死んでから不思議があつたので、嫂の宛若と云ふのがそれに祈ると人の吉凶禍福が知れた。武帝はそれを聞いて、神君を祭つて不老長壽の術を請ふことになつた。

將軍の霍去病も微賤の時に、神君を祈つたことがあつた。すると、ある時、神君が美しい女になつて現はれて、夫婦の交をしようと云つた。霍去病はその猥褻を怒つて、それ以來神君を祈ることをやめてゐたが、その時になつて病氣になつた。武帝は人に云ひつけて、霍去病のために神君を祈らした。すると、神君が現はれてきて、『將軍は、精氣がすくなくて、壽命が長く

ないから、いつか太一の精を以て補ふてやらうとしたけれども、將軍はわしの意を覺らなかつた、今度の病氣はとても癒らない、』と云つたが、間もなく死んでしまつた。

武帝は神君から不老長壽の道を得て、それを行ふてみるに效があつた。その神君は、衞太子が失敗する前年になつて何處へか往つてしまつたが、間もなく柏梁臺が燒けた。神君の嫂の宛若も神君の道を得てゐて、もう歳が百あまりであつたに係はらず、顏は少女のやうであつた。その宛若は、東方朔の細君となつて、三人の小供を生だが、後に東方朔と同日に死んでしまつた。

東方朔が生きてゐる比、武帝は東方朔に二十人の宮女を與へた。東方朔はその宮女達と道を行ふた。その宮女達は百歳になつて死んだが、たゞ一人長陵生れの徐と云ふ女は死なずに、儀君と號して東方朔の術を傳へ、孝昭帝の元延年間には百三十七歳であつたが、容貌は小兒のやうであつた。貴人諸侯は代る代る儀君を迎へてその道を問ふた。それは一つの奇怪なことを行ふのみであつた。それがために市中の猥雜の徒が集まつて來たので、董丞相が奏上して儀君を死刑にしようとしたが、帝はきかないで燉煌へ徙した。

武帝は明光宮を起して、燕趙の美女二千人を集めた。皆十五歳以上二十歳以下の者ばかりであつた。宮女で三十歳になつた者は、出して他へ嫁いらした。宮殿に入れてある美女の數は一萬八千人であつた。武帝はその女を代る代る寵愛した。ある時、巡狩して河間を過ぎたところで、遙に紫青の氣の立つてゐるのを見た。望氣の者が『あの氣の下には、不思議な女がをりますが、そこには天子の祥瑞があります、』と云つた。武帝が使をやつてみると、果して一軒の空屋の中に一人の女が坐つてゐた。その女は兩手の拳を握り締めて掌を開けなかつた。數千人の者が開けやうとしたが開かない。武帝が手をかけるとすぐ開いた。そこで武帝は、その女に拳夫人と云ふ號をつけて、婕妤にして鉤弋宮に置いた。

拳夫人は黄帝素女の術を解してゐた。武帝はそれを寵愛したので、姙娠して十四箇月目に孝昭帝を生んだ。後、一緒に甘泉宮へ往つたところで、拳夫人は『私は、今日ここで死ぬることになつてをりますから、あなたは御自愛なされてくださいまし、宮中には巫蠱の氣が多うございますから、お氣を注けないと、お體を破ります、』と云つて、そのまま火の消えるやうに死んでしまつた。武帝は悲しんで雲陵に葬つたが、どうも普通の人でないと思ひだしたので、墓をあばかして見ると、著物と履があるばかりであつた。

武帝は年が六十あまりであつたが、髪はすこしも白くなく、小供のやうな容貌であつた。武帝はとうに穀類を避けて仙人生活をしてゐたが、ある日群臣に向つて、『世の中に仙人と云ふ者はない、皆人をまどはす者の云ふことぢや、食物を節し、藥を飲めば、病はすくなくなる、』と云つて、それからは仙藥も飲まないやうになつたが、體がしだいに瘦せて來た。そして、二三年の間、鬱鬱としてゐたが、五柞宮へ行幸した時、霍光に、『わしは老いたから、鉤弋の皇子を立てて、お前がよく世話をしてやつてくれ、』と云つた。霍光は、『陛下は御健康ではありませんか、』と云ふと武帝は、『わしは病氣ぢや、お前には判らない、』と云つた。

三月になつて、武帝は午睡してゐてそのまま覺めずに、翌日になつて眼を閉ぢた。そこで未央宮の殯殿に移したが、供物をあげて置くと喫つたやうな痕があつた。葬式が畢つて、宮女を茂陵へやつて置くと、武帝が出てきて、平生のやうに寵愛したが、他人には見えなかつた。霍光が聞いて、宮女を五百人に增すと、それ以來は出て來なかつた。

四　漢武內傳

漢武內傳は、武帝が生れる前に赤龍の瑞祥があつたと云ふことから筆を起してゐる。そして、十四箇月目に生れた武帝は、三四歲の時、景帝の膝の上に抱かれて、伏羲以來群聖の錄せしところの陰陽、診候、及び龍圖、龜策、數萬言を暗誦したが、一字も落さなかつた。これがために景帝は武帝の名を徹と改めさした。位に即くに及んで、神仙の道を好み、常に名山、大川、五嶽等に禱つて神仙を求めてゐた。

元封元年正月甲子、嵩山に登つて道教の寺を起し、その祭を終へて歸つてきたが、四月戊辰の日、承華殿に閒居してゐると、靑衣の女が眼の前に來て、七月七日に西王母が來ると云つた。その日になつて武帝が坐を大殿に設けて待つてゐると、その夜の二更過ぎ、王母が紫雲の輦に乘り、群仙を供につれてやつて來た。その王母は黃金の褡襡を著け、靈飛の大綬を帶び、腰に分景の劍を佩び、頭上の大華髻に太眞晨嬰の冠を戴き、元璚鳳文の舄を履んでゐたが、年は三十ばかりの眞の麗人であつた。王母はそこで武帝と一緒に坐り、自分で天厨を設けて、天上の御馳走をかまへ、又七顆の仙桃を出して、その四顆を武帝に與へ、自分で三顆を喫つた。喫つた後で武帝がその核をしまつておいてまかうとすると、王母は『此の桃は三千年に一たび實を生ず、中夏は地薄し、うゑるも生ぜず、』と云つた。

酒宴の後で王母が歸らうとするので、武帝がとめると、王母は侍女を天にやつて上元夫人を迎へに往かしたが、間もなく上元

夫人が千餘人の仙女に送られてやつて來た。夫人は二十年ばかりで、天姿精耀、青霜の袍を着け、九雲夜光の冠を戴き、六出火玉の珮を曳き、鳳文林華の綬を垂れ、流黄揮精の劍を腰にしてゐた。王母は武帝に向つて、『これは眞元の母にして、尊貴の神なり、汝當に起ちて拜すべし』と云つた。

武帝は王母の云ひつけどほり起つて上元夫人を拜した。夫人は笑つて修性の道を説いた。王母の巾笈の中に紫錦の嚢に入れた一卷の書があつた。武帝が訊くと五嶽眞形圖であると云つて説明した。上元夫人は侍女を扶廣山にやつて、六甲左右靈飛致神の十二事を書いた書を取つてこさした。それは八色の玉笈鳳文の蘊に入れてあつた。上元夫人はそれを武帝に授けた。王母も亦五嶽眞形圖を授けたが、その朝の明方になつて、二人は一緒に雲に乘つて歸つて往つた。

武帝は王母から授かつた五眞圖、靈光經。上元夫人から授かつた六甲靈飛十二事を撰して一卷の書となし、それを諸經圖とともに黄金の箱に入れ、白玉の函に收めて柏梁臺に置いてあつたが、心が高ぶつて、臺館を興し、降卒を坑に入れ、又匈奴を征するなど、悪逆を行ふたので、太初元年十一月天火が柏梁臺を燒いて、經も撰文も皆無くなり、續いて東方朔が龍に乘つて飛び去つたが、元狩二年二月になつて病氣になつて崩じた。そして三月になつてそれを茂陵に葬つたところで、その夕、棺が動いて聲がした。陵の工事が畢つたところで、大霧が起つて門柱が壊れた。そのうちに、武帝の梓宮の中に入れてあつた玉箱と玉杖が、扶風の市中から出、同じく梓宮に入れてあつた雜經三十卷が、上黨の抱犢山から出たので、玉箱と玉杖は太廟に收め、雜經は廟中に收めた。

五　飛燕外傳

飛燕外傳は漢の成帝の皇后趙飛燕と、妹の昭儀合德とが寵を爭ふことを書いたもので、著者は伶玄と云ふことになつてゐる。この飛燕外傳や遊仙窟などから源氏物語が生れたと云ふことは初めにも云つた。今、飛燕外傳によつて思ひ出したのは、祇王と佛の物語である。私の考へでは、祇王と佛の物語は飛燕外傳から脱化したものである。即ち飛燕の名の宜主から祇王祇女の名が出、それで祇王と佛とが、飛燕と合德が成帝の前で寵を爭ふたやうに淸盛の前で寵を爭ふたことが生れたやうに思はれる。飛燕外傳の話をしてみやう。

馮萬金といふ音樂の巧い男があつて、江都王に仕へて、協律舍人と云ふものになつてゐたが、そのうちに王の孫の姑蘇と云ふ女が、江都の中尉趙曼と云ふ者に嫁いだので、萬金も姑蘇づきになつて趙曼の許へ伴れてゆかれた。趙曼は亂暴な男で、

おまけに嫉妬深い質であつたが、この若い音樂家を非常に可愛がつて、平生も己の傍へ置き、同じ器で食事をすると云ふ有様であつたから、それがために姑蘇と萬金の間が接近して、二人の間に女の雙生兒が生れた。姑蘇は病氣と云ふことにして趙曼に知れないやうに、その兒を萬金の許へ送つた。

雙生兒の一人は、宜主と云ふ名で、それが姉といふことになり、一人は合德といふ名で、妹と云ふことになつてゐた。二人ともそろつて容貌が美しかつたが、宜主は才はじけな體の輕い女であつたから、人が飛燕と云つた。合德の方は、おちついた詞の可愛らしい女であつた。

萬金が死ぬと、飛燕合德の姉妹は、長安の方へ出て往つた。長安には趙臨と云ふもと隣に住んでゐた知人がゐたが、その趙臨は當時、陽阿主といふ皇族の家令をしてゐた。二人はそれをたよつて往つて、その世話になつてゐるうちに、妹の合德が陽阿主に仕へて、宿直をやることになつた。で、二人はその僅な給料で暮すことになつたが、歌や舞が好きで、聞き出すと飯を喫ふことも忘れる有様であつたから、一生懸命にそれを習ひ、傍ら人が笑ふのもかまはずに化粧ばかりしてゐた。

何時の間にか飛燕は、己の家の隣に住んでゐる羽林の兵士で、鳥を射るのを仕事にしてゐる若い男と關係ができた。鳥を射る男は雪の夜も飛燕の許へ通ふてきた。飛燕の行を知らない趙臨は、飛燕を成帝の宮中へ入れた。宮中には飛燕姉妹の姑の妹に樊嬺と云ふ者が仕へてゐた。その樊嬺は飛燕の行を知つてゐるので、心配してゐた。しかし、寵愛を受けてみると、『流丹浹藉』で、非常に天子の信用を得た。嬺は安心したが、それでも氣にかかるので『鳥を射る者と關係はなかつたか、』と訊くと、飛燕は『吾れ內視すること三日、肉肌盈實せり、』と云つた。これは飛燕が家にをる時、彭祖の分脈を見て、行氣の術を心得てゐたからであると、例によつて神秘的な筆まはしをしてある。

飛燕は後宮に入れられて、趙皇后と云はれるやうになつた。成帝は非常に飛燕を寵愛してゐると、ある日、嬺が、『飛燕に女弟合德なる者あり、容體美に、性醇粹にして信ずべし、飛燕に比せず、』と云つた。成帝は呂延福と云ふ者を使にして、合德を迎へにやると、合德は姉が召すのでなければ往くことができないと云つて、來なかつた。そこで嬺は、飛燕の貼つきを使に渡して、これが飛燕の召す證據だと云はした。合德はほんとうにして宮中へきたが、姉の呼んだものでないと云ふことが判つたので、決して天子の前へ出なかつた。成帝は飛燕を傍へ置いては、合德が遠慮するだらうと思つて、遠條館と云ふ御殿をかま

へて飛燕を入れた。媛は飛燕の所へ往つて、皇子がないから將來のことを考へるがよからうと云ふやうなことを云つて諷したので、飛燕はその晩、合德を成帝の前へ出した。成帝は『溫柔鄕』と云つて非常に喜んで、合德を婕妤にした。

飛燕は嫉妬深いわがままな女で、侍郞、宮奴などと關係した。合德は母に仕へるやうに飛燕に仕へて、成帝の前へ出ては平生かばつてゐたので、飛燕の不品行を云ふ者は、皆死刑にせられて何の咎めもなかつた。

姉妹の者は晝も夜もきれいに化粧をなし、體には香を燒きしめ、室を飾りたてて、天子の寵愛を一身に集めやうとした。飛燕は五蘊七香湯に浴し、通香沈水を坐に踞し、降神百蘊香を燎き、合德は荳蔲湯に浴し、露華百英粉をつけた。あるとき成帝が、媛に二人の比較をして、『后は異香ありと雖も、婕妤の體の自ら香しきに若かざるなり。』と云つた。珍らしい貢物があれば成帝は二人に分け與へた。眞臘夷から萬年蛤と不夜光珠とを獻上すると、萬年蛤を飛燕に與へ、不夜光珠を合德に與へた。飛燕が皇后となつた時、合德がその祝ひに二十六種の珍らしい品物を贈ると、飛燕はその返しに、雲錦五色帳と、沈水香玉壺とを贈つてきた。合德は成帝を恨んで『姉がくれなければ、こんな結構な品物は一生見えなかつた。』と云つて泣いた。成帝はしかたなしに、雲錦の産地の益州に詔して三年の租稅を休め、七成の雲錦帳を作らして合德に與へた。

太液池に瀛州と云ふ島があつて、そこへ物見臺をこしらへた。成帝は皇后を伴れてその島へ往つた。皇后の飛燕は南越から獻上した雲英紫裙、碧瓊輕綃を衣て、臺の上で舞ふた。成帝は文犀簪を持つて玉甌を擊ち、飛燕の愛してゐる侍郞馮無方は笙を吹いた。船へ乘つてからも飛燕はまた歌つた。歌の半で風が吹いた。飛燕は風の中で鳥の飛ぶやうに手を擴げて、『仙か仙か、故を去りて新に就くも、寧ろ懷に忘れんや。』と云つた。飛燕は已の寵が衰へて妹の愛せらるることを恨んだのであつた。

合德はますます貴幸せられて昭儀となつた。彼は姉の住んでゐる遠條館の近くに住みたかつたので、成帝に願ふと、成帝は小媛館を造つてそこへ入れたが、ある日、それは十月五日、姉の飛燕が遊びにきた。その日は宮中の靈安廟を祭る日で、塤を吹き、鼓を打つて、赤鳳來の曲を奏することになつてゐた。その時、飛燕とも合德とも關係のある宮奴の燕赤鳳と云ふ者が、合德の所へきてゐて、歸つてゆかうとするところへ、飛燕が入つて來た。飛燕はこれを見ると、赤鳳來の曲にかこつけて、『赤鳳は何人のために來るだらう。』と云つた。合德は、『姉さんのために來るのでせう。』と云つた。飛燕は怒つて杯を投げつけて、

『この良、』と云つた。合德はもうなんにも云はなかつた。傍にゐた婢が合德の代りにあやまつた。合德は泣きながら、『姉さんと二人で、寒い晩に寢た時に、私に脊中を抱かしたことを覺えてをりますか、私は姉さんと喧嘩をすることは厭でございます、』と云つた。飛燕もこれに心がをれて、泣きながら合德の手を握つた。このことを知つた成帝は、ある時、合德に喧嘩の原因となつた赤鳳のわけを訊いた。利巧な合德は、『漢は火德でございますから、私達は赤龍鳳といふてをります、』と云つたので成帝は喜んだ。

成帝は合德が湯あみしてゐる時に、その豐艷な肉體を覗かうと思つて、夜、そつと蘭室の戸張の陰へと寄つて往つたが、侍女が見つけて、それを合德に知らした。合德は燈を他へ持つて往かした。そこで成帝は、たくさん金を持つて往つて、侍女を見つけると、かたつぱしから口止料を渡して、戸張の陰へと往つた。

成帝は遂に『綏弱』を病んで、名醫が手を盡しても癒らなかつた。そのうちに奇藥が見つかつたので、合德から勸めた。成帝はその藥を飲むと『一丸一幸』した。ある晩、合德が醉ふて七丸を勸めたところが、その晩のうちに崩御した。昭儀の合德は血を吐いて死んでしまつた。

六　雜事秘辛

漢武故事、漢武內傳、飛燕外傳の三書に次いで擬つてゐる小說的の說話に、雜事秘辛があるが、これは明の時代に楊升庵と云ふ學者の僞作したものだと云ふことである。話の筋は漢の桓帝が皇后を冊立するに當つて、大將軍乘氏忠侯商の遺女で、大將軍參錄尙書事乘氏侯冀の女弟である瑩の許へ、吳姁と云ふ宮女をやつて、體格檢査をさし、そのうへでいよいよ皇后として宮中へ迎へたと云ふことになつてゐるが、そのうちで有名なのは、吳姁が瑩の燕處で、その體格を細かく檢べる一段である。『時に日晷辰に薄り、牕隙を穿照して、光を瑩の面上に送著す。朝霞の雪に和するが如く、艷射正視する能はず、目波澄鮮、眉嫵連卷、朱口皓齒、修耳懸鼻、輔靨頤頷、位置均適せり、』『瑩を伸ばし髮を度る、黝髹の如く鑒すべし。圍十盤に入り地に墜ちて半握を加ふ。』『顚より底に至る長さ七尺一寸、肩廣さ一尺六寸、肩より指に至り長さ各二尺七寸、指、掌を去る四寸、髀、足に至りて長さ三尺二寸、足長さ八寸、』『痔せず瘍せず、黑子創陷無し、』文章は古雅で奇艷であるが、穢褻な文句があるために全譯することはできないが、しかし、本書の有名なのは、その穢褻があるためである。

以上の四書に次いで、漢時代の物に、洞冥記、吳越春秋など

云ふものがある。そのうちで呉越春秋は、呉越興亡の歷史である。洞冥記は漢の郭憲の作で、零細な珍聞奇話を集めたものであるが、そのうちに東方朔と武帝に關する話が多い。

洞冥記は山海經から出發して、武帝の左右の神怪譚と一緒になつてできあがつたもので、漢武故事、漢武內傳、飛燕外傳などのやうに、文字になつた時は六朝以後であつたかも判らないが、創作せられたのはやはり武帝の左右の雰圍氣であつたやうに思はれる。要するに宮中の情話と神怪譚を書いた支那小說は、武帝を俟つて生れたと云つていい。

七　搜神記

漢の時代が過ぎると六朝時代になる。六朝とは普通歷史上では、吳、晉、宋、齊、梁、陳の六朝間を指して云ふが、文學上では、魏、晉、南北朝を通じて隋に至る凡そ四百餘年間のことを總稱して呼んでゐる。その六朝の小說としては、搜神記、拾遺記、博物志、西京雜記、搜神後記、續齊諧記、異苑、述異記、還冤志、世說新語、金樓子、高士傳、神仙傳、華陽國志、洛陽伽藍記、荊楚歲時記、水經注などがあるが、これらの小說說話の中に、佛教の影響のあることを見逃してはならぬ。佛教は後漢の始めから支那に傳來したもので、魏晉以後、支那僧で入竺する者もあれば、竺僧で支那にくる者もあつて、從つて佛典の飜譯も盛んであつた。有名な達磨大師が支那へ來て、梁の武帝に信仰せられたと云ふのもこの間のことであるから、支那の文學に佛教の影響したのも不思議はない。

六朝の小說の中で有名なのは、搜神記である。この搜神記は支那小說の特色であるところの閎誕、恠奇、眩惑の醱酵となつてゐるものである。山海經をはじめ楚辭などにも、それの原話となつてゐるやうな傳說的の說話はあるが、なにしろ、文學的の形態を具備して、人心を刺激し、支那文學の特色の一つを作つたのは、この搜神記である、搜神記は唐時代の傳奇小說となり、それから剪燈新話となり、聊齋志異となつて、結末はそれほど振はなかつたが、平板な支那文學を幽遠にしたのは、この荒唐不稽な說話の功を多とせねばならぬ。又支那ばかりでなしに、この搜神記は日本文學に非常な影響を及ぼしたもので、馬琴などがこれを自家藥籠中のものとしてゐたと云ふことは初めにも云つておいた。著者は晉の干寶、元帝の時に著作郎になつた人で、晉紀の著もある。搜神記は卷數三十卷とも云ひ二十卷とも云ふが、今、坊間に傳つてゐるのは八卷になつてゐる。二つ三つその中の話をしてみやう。

隴西に辛道度と云ふ者があつた。他國へ遊學して旅費が無くなり、喫べる物も喫べずに雍州城の西へまで往つたところで、

一軒の屋敷がまへの家があつて、靑衣の女が門口に立つてゐた。道度は飧(めし)にありつかうと思つて、傍へ往つて事情を話すと、女は內へ入つて往つて女主人に話した。女主人は秦と云ふ者であつた。秦女は『遊學して高藝を尋ねてゐる方なら賢人だ、おあげするがいい、』と云つて道度を呼び入れさした。

道度が喜んで入つてゆくと、秦女は西榻に坐つてゐた。道度が挨拶すると、秦女は道度を東榻へ坐らして、食物を出さし、それが終ると傍へきて、『私は秦の閔王の女で、曹國に聘せられて往つてゐるうちに、亡くなつて、それからずつとここに獨りでをる者ですが、あなたと夫婦になりたいと思ひます、なつてくれますか』、と云つた。道度は、『あなたは貴人でせすから、そんなことは出來ません、』と云つて斷つたが、秦女は聞かずに、強いて道度に迫つて夫婦になり、三日三晩一緒にゐると、秦女が、『あなたは生人で、私は鬼であるから、これ以上一緒にゐることはできません、』と云つて、床の後から小箱を取つて、その中にあつた金枕を出して、記念にと道度にくれた。

道度は金枕を持つて、女と別れて外へ出て見ると、もう家は無くなつて荊棘の中に一つの塚があつた。道度はそれから秦國へ往つたが、やはり旅費に困るので、彼の枕を賣つた。ちようどその日、秦王の妃が車で市を通つてゐたが、道度が金枕を賣らうとしてゐるのを見て、『その枕を何處から持つて來たのか、』と云つて訊かした。道度が事情を話すと、妃は自分の女のことであるから、泣きだした。しかし、妃はまだ全然道度を信用することができないので、人をやつて王女の塚を發かした。他の物はそのまま在つたが、たゞ枕ばかりがなかつた。白骨を包んでゐた着物を開けてみると、情交宛若たるものがあつた。妃ははじめて道度を信用して、『私の女は、大聖だ、死んで二十三年にもなるが、生人と交際してゐた、この人こそ私の眞實の婿だ、』と云つて、道度を駙馬都尉として、金帛車馬を與へて本國へ歸らした。

秦の始皇の時、王道平といふ男があつた。若い時、同村に棲んでゐる唐叔偕の女と夫婦になる約束をしてゐたが、そのうちに道平は、徵發せられて軍人となり、南の國へ征伐に往つて、敵の中へ陷つて九年の間も歸ることができなかつた。女の家では、女が年比になつたのを見て、生きてゐるやら死んでゐるやら判らない男を待たしておくわけにもゆかないので、劉祥と云ふ者の家へ嫁いらさうとしたが、女が承知しない。それを強いて云ひ伏せて、無理やりに往かした。

女は道平のことばかり思ふて、沈んでゐたが、とうとう氣

のやうになつて、三年の後に死んでしまつた。道平は女が死んでから三年目になつてやつと家へ歸つてきたが、夢にも忘れなかつた女が死んでゐるので、力を落して、その墓へ往つて泣いた。そして、『わしの歸りが遲かつたために、こんなことになつてしまつた、殘念でたまらない、お前に靈があるなら、一度だけ顏を見せてくれ、』と云つて、まだ泣いてゐると、何處からか女の顏が見えてきて、『私は、お父さんにしいられて、劉祥に嫁づかされましたが、あなたのことを思ひつめて死にました、しかし、私の體は、まだほんとうに死んでをりませんから、あなたと夫婦になることができます。塚を發いて、棺の中から私の體を出してください、』と云つた。道平はその詞に從つて墓の門を開けて中へ入り、棺の蓋を取つてみると、女は生きかへつたので、伴れて家へ歸つてきた。すると、女の夫の劉祥が州縣に訴へた。州縣では法律に當てはめて裁判しやうとしたが、その法律がない。しかたがないので秦王に奏上すると、秦王は王道平の妻にすべきものであると云つたので、道平は女と夫婦になつた。

彭蠡湖のほとりに李進勍と云ふ魚商人があつて、彭蠡湖の魚を大きな船に積んで、金陵や維陽へ往つて販いでゐた。ある時、平生のやうに魚を積んで金陵の方へ出かけて往つたが、途で三山の浦に碇泊した。それは月の冴へたすこしの風もない靜な晩であつた。進勍は船からあがつて、そのあたりをぶらぶら歩いてゐると、船の中からたくさんの者がお經を讀んでゐるやうな聲が聞えてきた。不思議に思ふて、船の傍へひつかへして聞いてみたが、やつぱりお經を讀む聲で、しかもその聲が淸しい澄みきつた聲であつた。進勍はますます不思議に思ふて船へあがり、聲のしてゐるところを尋ねてみると、それは生簀の中の魚からであつた。進勍はこれを知ると、『衆生輪廻の身を販易するは測るべからざるなり、』と云つて、その魚を逃がしてしまつた。逃がす時に、『諸魚既に各通靈せり、他日某若し困苦せしときは、敢て方便して恩を垂れんことを希ふ、』と云つた。

進勍はそれから魚商人をやめて、薪商人となり、筏へ薪を積んで、金陵へ持つて往つて賣つた。ある時、金陵へ往く途で、大風に遇ふて、筏が沈み、薪なども流れてしまつたが、進勍のみは不思議にも溺れずに、水の中に立つてゐることができた。そのうちに數本の竹が風に吹き流されて來た。進勍はその竹を持つて水の中を歩きかけたが、氣が注いてみると、己が足で踏んでゐるのはたくさんの魚の頭であつた。進勍はその魚に體を持つて往つてもらつて、洲へあがり、魚の方を見ると、もう魚

は見えなかつた。

　そのうちに夜となつたが、船が無いので前岸へ渡ることができない。困つて坐つてゐると、傍の荻の中に光るものが見えた。手をやつて探ぐつてみると二斤の金であつた。進勳は喜んでその金を懷に入れたところで、眼の前の水の上に、白い着物を着た者が出てきて、『朝來性命を存するを得、及び金を獲しは、乃ち前者に於て放ちし所の諸魚、今、各、子の恩に報ぜしなり。』と云つて、そのまま見えなくなつた。朝になるを待つてゐると、數十頭の魚が一艘の小舟を曳いてやつてきた。船には櫓や棹が著いてゐた。進勳はその舟で前岸へ渡つた。

八

　搜神記は六朝小說の白眉で、その說話は後世の小說戲曲の原話となつてゐると云ふことは、既に云つたが、右にあげた話の中の王道平の話は、湯臨川の牡丹亭還魂記となつてをり、又李進勳の魚を放した話は、浦島傳記に髣髴たるものがあるとは、鹽谷溫氏の說である。とにかく搜神記は意義ある小說の一つである。

　剪燈新話に餘話があるやうに、搜神記にも後記がある。その搜神後記は陶淵明の撰と云ふことになつてゐるが、それは頗る怪しい。何故搜神後記が淵明の作と信ぜられるやうになつたかと云へば、桃源の話があつて、その話は淵明の書いた桃花源記と云ふ有名な雜文の話と一緒であるから、それで淵明の作と云ふことになつてゐるらしいが、別人の假託したものであることは明である。しかし、隋志あたりに淵明の撰と云ふことになつてゐることから考へると、できたのはやはり六朝時代であらう。要するに搜神後記の桃源の話は、數句の相違があるのみで、桃花源記とすこしも變らないので、淵明の名があるなら何人でも一度は欺かれる。それに搜神後記の中には桃源の話ばかりでなしに、その前後にも二つ三つ仙境の話があつて、隱逸の士の性情と離れないものがあるので、筆者を淵明と思はすにはいい記事である。

　會稽の剡縣に二人の獵師があつて、一人を袁相と云ひ、一人を根碩と云つてゐた。ある日、二人は山の奧深く入つて獵をしてゐると、山羊が六七頭遊んでゐるのを見つけたので、追つて往くと、山羊は谷の間の狹い石橋を渡つて逃げて往つた。二人もその後から渡つて往つたが、向ふは赤い岩が屛風を立てたやうに聳え立つてゐて、上流には布を懸けたやうな瀧の水があつた。

　徑の傍に岩穴があつて、門のやうになつてゐるので、覗いてみると中は豁然と開いてゐた。二人は不思議に思ふて、その中

へ入つて往つた。そこは土地が平坦になつて、四邊に生えてゐる草や木が佳い香をさせてゐる。見ると一軒の小さな家があつて、その中から青い着物をつけた二人の女が出てきた。皆年ごろは十五六であつた。女達は二人の來るのを待つてゐるやうにしてゐたが、傍へ寄つてゆくと、『あなた達のいらつしやるのを待つてをりました。』と云つた。

二人はその女達に伴れられて家の中へ入つて、それぞれ夫婦の交りをした。そのうちに女達は、『またお婿さんのできた者がありますから、これから祝ひに往つてまへります。』と云つて、二人を殘して置いて、岩をあがつて何處へか往つてしまつた。その後で二人は歸りたくなつたので、逃げだして歸つてゐると、二人の女が後から追つかけてきた。そして、女達は袋に入れた椀のやうな物を一つづつくれて、『決してこれを開けてはなりません。』と云つた。

二人は家に歸へつて、その袋を置いてあつたが、家内の者が好奇心を起して、留守の間に開けてしまつた。袋の中は蓮の花を重ねたやうになつてゐるので、それを一枚二枚開けてみると、五枚になつてゐて、五枚目の下から青い小鳥が出て飛んで往つた。

後に根は田へ往つて耕してゐた。飯時になると家の者が辨當を持つて往つた。ある日、平生のやうにまた家の者が辨當を持つて往くと、根は田の中へ立つたまま動かないので、不審に思ふて往つてみると、蛇が皮脱けをしたやうに脱け殼ばかり殘つて體はなかつた。

この獵師の話は、遊仙窟の原話になつてゐるやうに思はれるが、もすこし詮議をしないとはつきりしたことは云へない。ぜんたいこの捜神後記は、話も單純で、捜神記とは較べものにならないが、文章の古雅なところにすてがたいところがある。

附記　私はもと支那小説と日本文學との關係を書くつもりでこの稿を起したのであつたが、書いてゐるうちにみやうなものになつてしまつた。そしてこの稿を纏めるに當つて參考にしたのは、支那の文書以外に、馬琴の著書、作詩法講話(森槐南)、支那小説戲曲小史(笹川臨風)、支那文學史(古城貞吉)、支那文學概論講話(鹽谷溫)、國譯漢文大成晉唐小説(鹽谷溫譯註)、江戸文學研究(藤井乙男)支那人文講話(今關天彭)などの諸書であつた。

太原、大同の佛頭

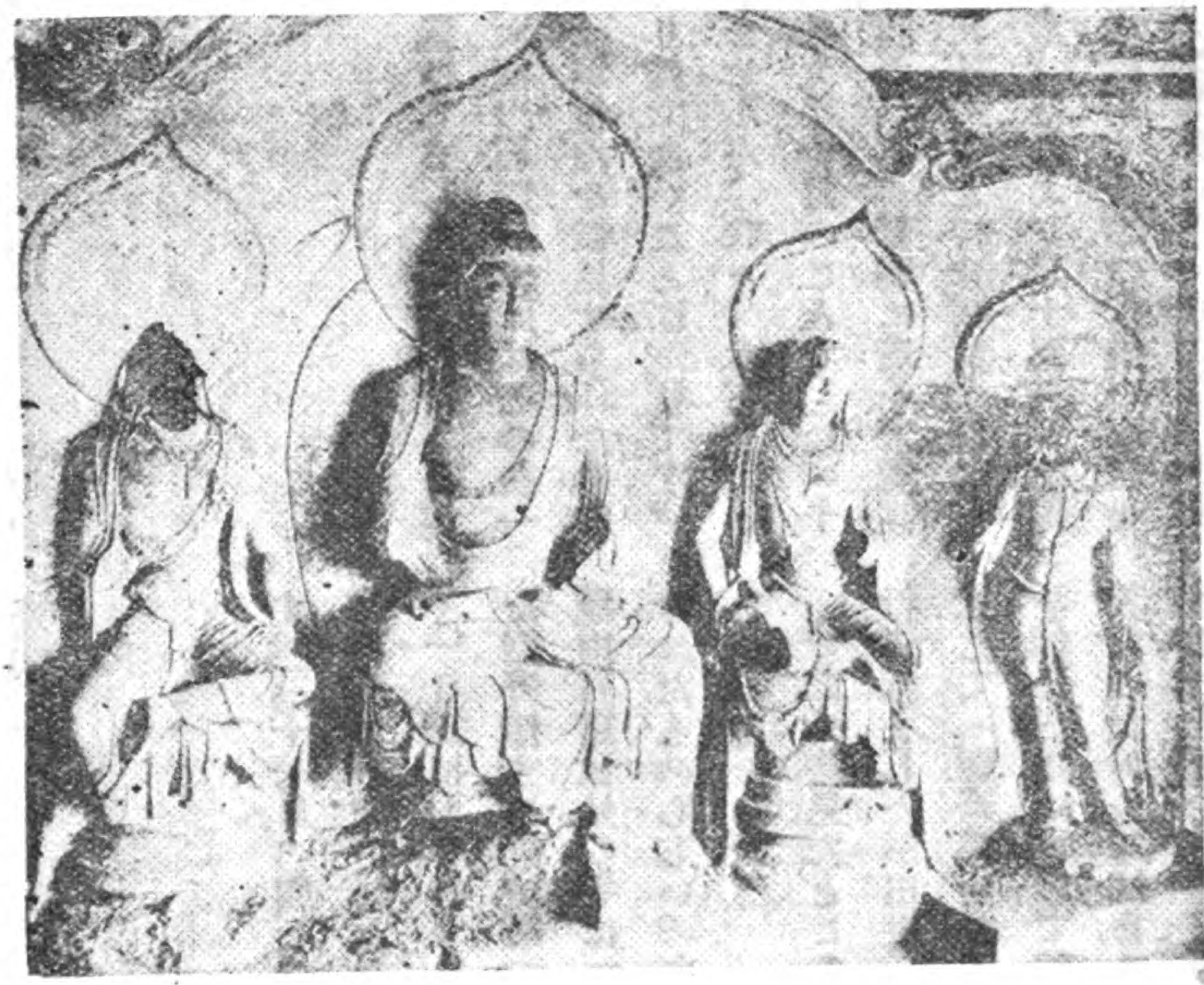
木村荘八

一

先達て或る席で關野貞博士にお逢ひしましたが、關野さんが云はれるのに、支那山西省太原の天龍山石窟の佛頭はその後一つ殘らずとられて了つた。關野博士が彼地を發見せられたのは大正八年？　少くも、大正八年より後でないことは確實です。つい此の年月を逸して申わけありませんが、我々、木下杢太郎と私とが天龍山へ行つたのは、大正九年十月のことでした。「十月十四日、朝十時太原府發。五時間の車行、晉祠に着く。清泉あるところである。晉祠泊」「十五日、朝九時晉祠發、馬車十里、一時間にて眞君祠ある牛家口着。それより二十五里、驢馬にて天龍山へ出發。午後二時聖壽寺に着く。寺の背後の石窟を見る。東方部に止どむ。寫生十余。聖壽寺泊。」「十六日、今日太原へ返る筈だつたがもう一日此所に滯在することゝなつた。朝、東方崖にて拓本。午後西方崖に移り寫生、見分、丸一日費す。」「十七日、朝七時より早立ちにて聖壽寺出發、山中を歩いて牛家口着。それより馬車。午後五時過ぎ、太原府岐鳳棧に着く」日記にかうあります。此の道筋は凡て杢太郎君の持つてゐた關野博士の講演筆記をたよつたもので、關野さんの講演は天龍山石窟發見の年にたしか漢口（或ひは北京）の日本人會かでされたものらしい。新聞に連載されたところを杢太郎君が切りとつてゐました。

で此の時見たところでは、この後我々の翌年か川中萬宗氏が行かれましたが川中氏は我々の行つたことを知られなかつたと見えて「關野博士の後日本より第二回目の踏査だ」と云ふことを朝日新聞に書いて居られました。して見ると我々が二度目の者だつたかも知れません。幸にして夙に見たところでは、東方の崖に上下十一窟、西方に八窟を見ました。猶東方の更に東寄りのところに半ば以上土中に埋まつた窟跡とおぼしきものを見たと思ひますが、之れは數へません。川中萬宗氏は、更に此の

他に東に一窟を、西に一窟を數へましたが、恐らくは我々の見殘したところでせう。我々の見たところでは關野博士の踏査發表と同じ、それ以上を出でませんでした。——此所には佛體の有樣に就てを主として傳へたいと思ふのですが、西方八窟のものは悉く當時完全と云はろ可き狀態でした。就中數體の等身大脇侍と大きな本尊の並ぶ、關野博士はこの作像を唐時代と推定されてゐますが明斷と思ひます。此の窟の深いレリーフは、此所の作像が天龍山の中でも一番立派なもので、且、殘存する佛像の有樣も殆んど遺失なしとおぼへました。今では比較的古い刊行物となつた天龍山石窟探險記念會（田中萬宗氏等の）の影寫（第一圖）で見ますと、首の無い脇侍が二體現はれてゐますから、當時既でに此の程度の損傷はあつたものでせう。然



第一圖

し印象せられなかつた程でしたが、手足や天衣の部分の破損に至つては之れは止むを得ぬところ、少しも「損傷」と特別には感知されません。私の寫生圖（第二圖）は同じ石窟の此の第一圖レリーフと對になる個所の脇侍一體を寫した圖であります。細部と云ひ凡てかなり完全なものです。

關野博士の最近のお話しに寄ると、之等の佛體が近頃殆んど悉くその頭部を失つたとのことなのです。若干の第二圖が化して凡て第一圖左右の如く、その他悉く居並ぶ太原石窟の佛像が全部第三圖の如くになつたものと想像せざるを得ませんが、——「どうもあゝ云ふところは見付ければ一般に發表しなければなりませんし發表すれば五年と經たぬ中にもうこんなことになりますし」と述懐、さこそと思はれます。關野さんは殆んど雲を掴む樣に、「天龍寺。縣西南三十里。北齊皇延元年建。內有石室二十四龕。石

佛四尊。隋開皇四年鐫石室銘」たつた之れだけ「山西志輯要」その太原縣のところに出てゐる記事、切りつめて云へばこの中「縣西南三十里」六字をたよりに、然も確實に發見せられたものです。道中の險難は我々後輩猶思ひに余ります。……或ひは此の地は門外不出として、只博士の學界への發表報告だけに止どめておけばよかつたものかも知れません。なまじ我々が追隨見學などしてその記行を錄する。彌次馬を招致する先棒たるに過ぎなかつたものとすれば、不愉快に、恥多きことです。彼の大同石窟の佛頭もその後しきりと破壊せられ、持去られる。壞して持來つたと云ふ話なども往々聞くところですが、某外國の學者?が、西方窟の一部、大部大きな壁面を其まゝ機械工事で切り取つて行つたと云ふ話も聞きました。續々無くなることでせうが、只大同石窟のものはそれが聞き及ぶ龍門の様な慘狀となる迄にはまだ年月がありませう。無慘なる哉佛頭が無數にあるからであります。それに比べては、仕事の少ない太原天龍山は或ひは一九二〇年以降數年の間に悉く斬首せられて了つたものかも知れません。首の有り場に不名譽の伴なふを深く遺憾としなければなりません。



第二圖

Jean Lartigue氏の Revue der Arts Asiatiques. Ire Année, No.1. Mai, 1924 にある——天龍山を歐洲に傳へたのは氏を以って嚆矢とします——論文には、挿繪に特に第一圖右端の佛體を大きく掲出してあります。氏をして特に之れを掲出せしめたものは、一九二〇年以降頓に荒廢したあの石窟の有りやうを語るものではないかと思はれます。

掲出第三圖は大正九年當時、天龍山東方石窟の上層一窟に見ました殘體で、手にて運び得る程度の小さな佛體です。首は定

めし此頁に二つ乘る程度のかさとなりませう。合計七個圖の如き殘體が森閑たる窟内に鎭座してゐまして、凄慘の感がしました。——然し當時は天龍山の最も甚だしい損傷と雖もこの位のもので（此の殘體ある石窟内へは非常に苦心して屈み入らなければ至れぬ樣、目立たぬところです）、その他は、概して目立つ佛像には取り立てゝ云ふ缺損は少ない方でした。そればかりでなく、西峯東端の窟には一個所だけ木造寺院の連築を岩面へ取り付けてあるところがある。中には極く年代の新らしい大きな彩色の佛體が存置されれた。之は我々は殆んど鑑賞に値するものと考へませんでしたが、清朝初期の修像、明とすれば末期の仕事だらうと考へます。佛頭に不足無きのみならず、此の大佛の足部のところや其所此所には泥製の頭部が大小五つ六つ壓の中にごろ／＼轉がつてゐまし



第三圖

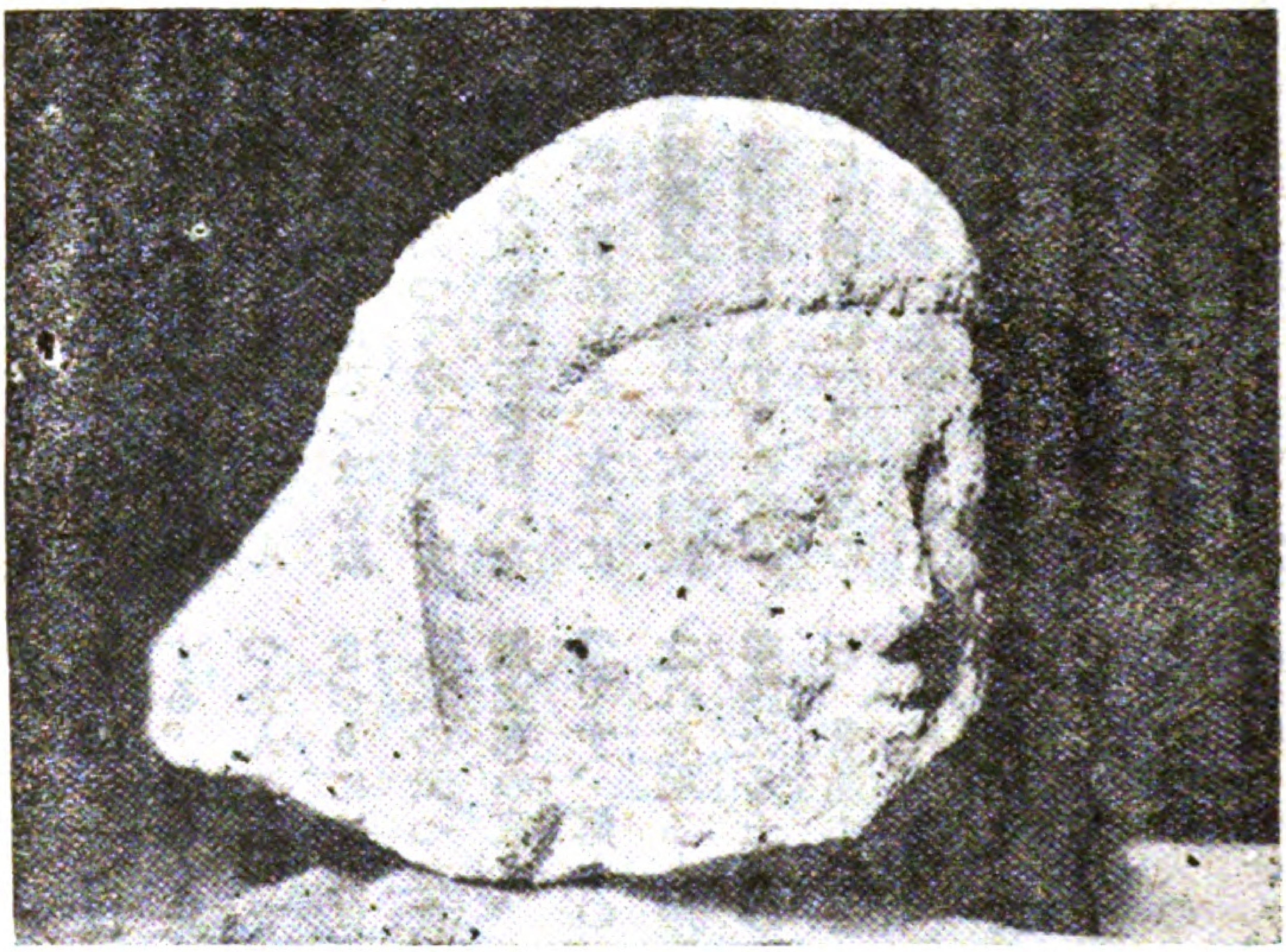
た。例へば文珠菩薩に於ける善財童子の、その首がもげて轉川した。胴體はいつか壞れて壓の中に埋もれて了つたと云ふ樣の殘體でせう、私は之を二三拾ひ上げて手にとつて見ましたが、どうも余り結構な作でないし、重いので、そのまゝ元通り轉がして來たわけです。若し好んで拾ひ歸つたとすればあれでも東京市本郷區あたりで見ると、相當面白い頭像だつたかも知れません。——と云ふ、太原石窟は規模は小さけれ、佛像は中々いゝ、その殘存の工合も觀賞に充分な好個の遺跡でしたのを、近頃散々にして了つたとは、それも自然に壞れるのは止むを得ないが人爲に壞される場合の夥しいのは、殘念なわけです。

二

次ぎに私は第四圖掲出の佛頭を持つて居りますが、只今吉田白嶺氏方に保存してあります。大正九年九月二十五日、大同府雲崗で得ました。少々私事に類しますが此の首の次第を記しておきたく思ひます。私は

いつも前節の樣に佛頭破壞を嘆じ、破壞作業を悲しみながら、然も一頭かなり立派な此の北魏の首を所持してゐる。それで、大分クサイと噂される由を聞きます。無理からぬことに思ひますし之を杢太郎とも話しましたが「一度由來を書いておくのだな」とあります。只今その機會とするわけです。――少々滑稽にもなりますが、一通り御聞き下さい。

　或ひは私は「惡事」を働いたものかも知れませんが惡事とすれば指彈を辭しませんし、佛頭破壞と相去る五十步百步だ、とすれば、その五十步であります。乃至「善事」かも知れません。私身邊の者は善事として、白嶺子の如き大ひに保在して私をトクとして居りますが、然らば身邊諸友、私。悉く惡人となります。――取捨判別、讀む方の御自由として、私は之れを持つてゐたいのであります。願はくは痴情、御憐察を冀ふ。



第四圖

大同石窟には私は杢太郎君、及び大同東華客棧の案内人白玉堂、晰方方喜と此の四人で、九月十一日に至り、九月二十六日に歸來する迄ゐました。十六日間です。――此の間の仔細に就ては今は悉く略します。既でに悉く書き盡しましたから。只以前に書かなかつたこと一件を余すに止どまる。佛頭由來に關してです。

　何故之れを書かなかつたと云ふと、拙著の頃冗漫に流れてよく書けなかつたのが一つと、拙著大同の記にはずい分と他所事があり、盛り澤山です。或ひは食事のことを云ふとか、便所の有無迄に及ぶ。此の上に更に一層刺戟的な佛頭由來を錄するのは賑はし過ぎて氣に入らなくなりました。まゝよ、うまくも書けぬしするから、この大切所作事はよしにしやうと、打切りました。――側聞するに此の佛頭由來だけを記さなかつたことが殊更あらぬカンニングに見えるとある。此所に

至り重々無理からぬことで、恐縮です。左の様なわけです。

一所に十六日居りますと、殊に箱根と云ふ様のわけとも異なり、ずい分細かくその地に通じます。私は今もイヤになる程雲崗の工合はおぼへて居りますが、殊につまらぬ個所々々に至り、記憶の微細なものがある。肝心の佛像に就ては例へば後に吉田白嶺氏の見たと云ふ西方の全裸體の像と云ふのを知りませんが、見聞人に在りとす可きかも知れません。いろんなつまらぬ見ても見なくてもいゝ様のことを私は澤山に知つてゐる様です。――大同石佛寺を、その門を出て、稍下り氣味の石を敷いた道が切れます。と、雲崗村へぶつかる。西へ折れると、左手に神樂堂の様なものがあつてその右側に當時纏足を禁じた大總統令の繪入ポスターの貼つてある、云はゞ雜貨店ともす可き家が一軒ありました、雜貨とは云へ殆んど何にも商品はマッチ等の以外には無いと云つていゝ。時々郵便切手があつたかも知れません。此所に一人中年の支那人がゐましたが、長らく横濱にゐたことのあるものだ想で、日本語に巧みで驚きました。或る時寫生中をいきなり話しかけられて、それが語音と共に忽ち語意了解出來るので場所柄却つて耳を疑つた程でした。その前の家には又李太郎を舊著大同石佛寺一一二頁で嘆賞せしめた立派な美人が住まつてゐましたが、吉田、小杉、芥川諸君……何れも之等の狀勢は殆んど詳しくしない様です。云々、

その雜貨店の角から四五軒先きを右(北)へ折れると、羊腸の字そのまゝの路次へ出ます。低い土塀が廻り廻つて、その民家一軒に一匹位ひづゝ猛犬がゐては、通行の者をきびしく誰何する。恐らく此の犬難には誰しも大同を訪ねた者、困惑しなかつた人は無いでせう。多分犬に恐れて近づかないからそれで行きづりには發見せられないのだらうと思ふ。(小杉氏には如何も私の云つた次ぎに示す在所がわかり兼ねたとのことです)一體支那の家は、申さば品の字形に前面を土塀の擁ふてあるのが常です、眞中の一寸奥まつたところの塀を隱塀と云ふ様です。之れを廻ると屋内へ達する。――と、今云つた犬の澤山にゐる羊腸たる土塀の迷路の、然し極くわかり易いとつつきのところ、普通土塀よりは一歩奥まつたその個所の隱塀の中央部に、方一尺、奥行一尺位いの角穴を穿つて、その穴の兩側に細長い赤紙を貼り、文字は忘れましたが、たしか土地神とあつたと思ひます。九月十五日頃計らず西方窟から拓本の返りに此の隱塀を、その中央の穴を、覗いて見るに、通りすがりですから判然とは覗へません。然し確かに土地神と貼紙のある小暗いくぼんだ中には佛頭があります。その素描味が只ならず見える。恐らくはいつか石窟の何所かで缺けて下ちたものを、(佛頭を見ると

故意に缺いたものとは思へない。それにしては形ちの無理なものです。)この邊の人が拾ひとつて此所へ安置したものでせう。(猶あとでより近づいて見ると佛頭の他に小さな手の部分の殘缺も入れてありました。)

揭出の圖、その後私所持の首がその土地神です。

まだもう一通りそれには仔細があるのだが、――云ふ迄もなく、私は彼地で佛頭を得たいと思つたこと實正です。然し破壞することは、この考へは到底浮びませんでしたが、一度、石佛古寺東隣の茶種園の民家の奥に當る石窟に、之れは常住その家の納屋に使はれて、うづ高く秣が入れてあります。之れを踏んで窟内へ入ると、殆んど下半身を沒する程でした。と、身體の重味で秣の沈下した、その影のところに、誠に立派な小さな佛體が數座浮彫りせられて、積み草のいきれに濡れ、その顏を出しました。「こんな所にこんな立派なものがあるとは、勿體ない」と思つたのです。實に身にしみて。私は數回大ひに此の佛頭を三脚を束ねて投ぐつて見ましたが、その位ひのことでは捥げません。「どうも勿體ない土地だね。今日から云ふわけだ」とあとで李太郎に話しましたところ、沈痛に「フフム」と云つてゐました、

盜罪へ既でに一歩のところ迄は行つて見たこと、確正です。僕がわるいよりは以上先方がわるからうて。然し此の次ぎの一歩が我れながら思ふに所謂藝術的良心にとつては致命傷大のものらしく、我々は石佛古寺第二窟上下の數體の脇侍の修理面を剝がし、原石を現はしました。上窟の如意輪觀音? を剝がした時にはその足下に跪く馬の首が(パルテノンの馬頭位ひ立派な作です)捥げかゝつてゐるのを見ましたが、それが盜れゝば盜賊です。よしや馬頭ならず佛頭としても。どうも私にはこの場合反對で、せめて油彩のホワイトを胴體との繼ぎ目へ眞似事にねばりにくれて、正位置に据へ、ほんの少しセメントがあればいゝと思つたわけでしたが、自他以上、實情のところと回想されます。

美術家は必らず壞しては首をとりはしません、とれば盜賊と化します。偶々私の中にはその美術家と賊と兩方共有るので、誠によくわかる。一歩の差、然しながら萬里で、ずい分賊になるが、それ以上ずい分美術家にされます。彼の地は。若し彼の地で佛頭を壞して取つてそれを所持して晏如たる者ありとすれば、私はその心理を懐ふに慄然となる。賊心は一寸面白い様のところも有るが、賊心まで。一朝賊となつては、不愉快だからです。且不可能でもあるし――この說我田引水とすれば、敢て引水しませう。

で、その他方々と、せめて落ちたる首は無いかと彼の邊はよく探したものですが、東方最端の窟の近邊に砂礫のスロープを成したところが一個所あります。石窟の前面がくずれて傾斜面

へなだれ落ちたものですが、小一時間も掘つて見ましたが指一本ありませんでした。又、西方露佛の近所に、騾馬のゐる人家の上部の崖のところに方三四尺の大石塊があります。疑ひなく大露佛（十九窟）の上唇が缺けて落ち散つた、その時の殘片で、大石塊を注意して見ると右手の石面にレリーフの跡がある。然し風雨に打たれた爲めと見え、一見は只の砂岩石としか見えません。僕思ふに、若しあの地上に横たはる石をもう少し起して見たら？或ひは地に接する方の斷面に輕羅の飛天でも窺へはしまいか、と、之れ可憐の「盜心」でせう。あの落下石なら持來れゝば持來つてもかまはぬでせうが、運般は殆んど大事業です。

それこれの間に前說、民家の隱塀にある土地神の首を發見したわけでしたが、毎日之れを見ました。だがどうもトル事は出來ませんでした。痛ましいことには見れば見る程その穴中に安置せられた首が只物でないことを益々感知せしめられます。思ふにその眉根や頭髮の工合、頰のふくよかな所等から推して、飽ならず、矢張り第十九窟崖面の崩壞した時、一所にくだけ下ちた、光背の小飛天か何かの首に相違ないと思ふ。作味簡古のものです。古寺のものならず、馬場のところの中期作とも異なる。上乘の首です。――賊心を起しました。

然し何と云つても隱塀とあれば一歩にせよ人家の外ならず、內ですから、この首をとり出す事業は拾ひものとは異なる。家宅浸入罪でせう。かなり立派な盜人です。だが然しどうも放棄するに堪へぬ、この業に執心するものがあつて、何しろ手をのばせば通路からほんの一步ですからな。予罪に五十步百步とすれば佛頭は落つこちたると五十步百步だらうと考へた。あたりに犬は在れ、人は無し、前論からすれば、この一步が矢張り天地、地獄極樂の差、墮するに至つては俱に齡せぬ破廉恥のところでせうが、僕服罪します。最もいけないことは此の業に津々と興味熱注して來た成行です。李太郎以外には人語も通はぬ遊地の十何日目ですから、少々御推了下さい。

一日、九月二十四日でしたか、寺僧に金錢を與へたところ、一個の鍵を渡して、平常は閉鎖して前面を院としてある石佛寺第三窟を我々に開けて見せてくれたのです。此の窟は全壁古色を帶びて後の修理（實は改惡）を經ず、ドナテロとも比す可き豐麗な菩薩の高浮彫などを見ましたが、之等も舊記に擧げたと思ひます。窟內の深い塵埃の中で、私は三個の佛頭を拾ひました。之れは明淸時分の修理工がつかねたと思ふ泥細工で、然しながら後に太原に轉在してゐた泥首と比べれば遥かによく出來てゐます。私は之れを拾ひ返つて、東客殿（居室）の机上に置

きました。大ひに滿足と喜びを感じました。偶然最後に至つて第三窟が開いて、そこで忽ち佛頭を拾つたが、これ等が運だらう。彼の土地神は之れで思ひ切らう、と、安然たる心理になりました。大きさも一見の感じも土地神の佛頭とよく似て居ります。――同夜更けてからのことでしたが、ムラムラと惡心を兆して、私は一案發起しました。直ちに机上の泥首をその最も格好の一つを先づ油彩で彩どつて、或る程度迄ドロをまぶして古色になぞらへ、その他大ひに苦心製作しました。武部源藏の故智です。

もうあとは申さずとも御諒解でせう。翌二十五日、午後六時頃、夕闇に乘じて、白玉堂を先登に李太郎君と三人、直ちに隠堺に至り、風の如く當秀才を奪ひ小太郎の首を代りに穴中へ置いて、大ひに鼓動を昂めて東客殿へ引上げ、道で白玉堂が好了と聲を立てますから制しました。揭出第四圖をその觸感に於てとうとう親しく觀じた次第です。異樣の心持でした。



謝秀卿

村松梢風

一

劉は深切な男だつた。だから彼は劉が好きだつた。劉は齢は廿六だと云つてゐた。けれども劉は俳優だから一つや二つ年齢をかくしてゐるかも知れなかつた。何處の國でもそうだが、支那では殊に、俳優にとつての大敵は年齢だつた。餘程の大立物でない限り、支那では俳優も廿五六といふ聲をきくともう人氣が褪せてしまふのが普通だつた。劉なぞも三四年前までは上海では可成り鳴らした俳優だつたが、現在はもう見る影もなく凋落してゐた。以前の名殘りで時々一幕位は彼の出し物もあるけれども、大ていの場合先輩の大立物と、後進の花形と、兩方から壓迫されてしまふ形で、あつてもなくてもいゝやうな働き甲斐のない舞台を勤めてゐた。

彼が劉を知るやうになつたのは、其の年彼が上海の有名な俳優であるK―を日本へつれて行つた時、劉もその一座に加はつてゐたからだつた。日本へ行つては劉は唯一つの文武老生として、K―に劣らぬ立派な伎藝を見せた。

けれどもそれは日本に居た間だけのことで、上海へ還れば再び影のやうな俳優になつてしまふのだつた。

二三日前の晩彼が初めて劉の出勤してゐる丹桂第一台の樂屋に訪ねて行くと、劉は非常に喜んで迎へた。其の舞臺には支那劇壇切つての新人と云はれるO―をはじめとして、有名な俳優が多勢出勤してゐた。彼は劉の紹介ではじめてO―と近付きになつて、樂屋でいろんな談をした。O―は往年早稲田大學に學んだことがあるので日本語を達者に話した。けれども、彼にとつて懐しいのは矢張り劉だつた。

「いつこちらへいらつしやいました」と劉は尋ねた。

彼は實は十一月の初めに此の土地へ來たので、そして其の月もすでに廿日頃になつてゐた。ある秘密の用務を帶びてやつて來た彼は、それ迄ほとんど誰にも逢はないでゐたのだつた。

「二三日前に來たんです」と彼は答へた。

其の晩劉は芝居がハネてから彼の旅館へやつて來て遅く迄遊んでいつた。翌日は午過ぎからやつて來た。劉は非常に日本を懐しがつてゐた。華やかな日本の舞臺に立つたことは、おそらく今後も劉にとつて非常に懐かしい思ひ出となるに違ひはなかつた。

「京都の女の事が今もつて忘れられません」と劉は彼の通辯をする木下の口を通して云つた。

京都で、彼が劉とほかに四五人の者をつれて或る所へ行つた時、劉の相手に出た女は其の中で一人際立つて美しかつた。其の女の事を劉は話してゐるのだつた。

「あなたも當地（こちら）でいゝ相手が見付かりましたか」と劉は彼にきいた。

「いや目付からない。大世界の野雞（ヤチー）だの、阿片の中毒者みたいな朦朧藝妓には、私はもう興味を有つてゐないのだよ」彼は笑ひ乍ら答へた。

「ぢやあ私がある婦人をあなたに御紹介しませう」と劉は眞面目になつて云つた。

劉は、體は小造りだけれども、舞臺で鍊へ上げた人に見る引き緊つた體つきをしてゐた。色が淺黑くて、ねばりけのあるやうな皮膚をしてゐた。漆黑の頭髪をオールバツクして、眼元の涼しい、口元の愛らしい容子が、日本の女達にも騒がれたのだつた。

それから一日二日經つてのち、彼は午すぎから一人で用達しに出て、戻つて來ると、彼は自分の部屋でマージヤンをやつてゐる音を廊下から聞いた。木下と劉と、それに女が二人まじつてマージヤンの駒をカチン／＼と彈いてゐた。

「あなたもおやんなさい」彼が這入つて行くと劉が云つた。

彼は木下と替つて其の仲間へはいつた。けれども彼はろくに駒を動かすことさへ出來ないので其の遊戯には餘り興味を有つてはゐなかつた。彼は直きに木下に席を讓つて、自分は寢臺の上へ行つて腰を掛けてみんなのする處を見物してゐた。

さうしながら彼は今日の女客に對して觀察の眼を注いだ。入口の方へ脊を向けてゐる女は、齢も若くて、顔立ちも美しかつた。それと相對してゐる女は、齢はまださう老けてはゐないが、色が黑く、そして鼻がぶざまに低くて、一がいに下品な醜い顔つきだつた。

丁度彼の方へ顔を向けてゐる若い女の容子を彼は十分に觀察することが出來た。支那の女には稀らしいほど活き／＼した大

きな眼を行つてゐた。下唇が、眞つ紅で、かなり厚ぼつたいのも特徴だつた。一本の歯に翡翠の義歯(いれば)をしてゐた。翡翠の歯が彼には珍らしく感じられた。其の耳には、眞珠の房を澤山つけた耳飾が下つてゐた。テーブルの上で劇しく動かしてゐる其の双つの手には、五つ六つの指輪と、二つの腕輪が、贅澤な光を放つてゐた。

「劉が紹介すると云つた女は是れだな」

と彼は最初一と目見た時思つた。それから彼は藝妓かしら？と思つて見た。が、藝妓にしては少しちがふやうでもあつた。ふだん着らしい、少し汚れた、紫地の羽二重繻子の滿州服を着てゐた。

彼が腰をかけてゐる寢臺の上には華美な女のマントが脫ぎ捨てゝあつた。

「此の人達は何者だらうね？」と彼は木下に訊いてみた。

「劉があなたに紹介すると云つて伴れて來たんですよ」

「藝妓ですかね」

「さうではないでせう」

「君一つ訊いてみてくれませんか」

「何を話してゐるのか」と劉は木下に尋ねた。

「此の二人の婦人は藝妓か素人かとMーさんが訊いてゐるんです」と木下が支那語で答へたので、女達も初めて自分達のことを云はれてゐるのだと分つて、大きな眼をみはつて笑つた。

「藝妓ではありません、けれども以前藝妓をした人です。そして二人は姉妹です」と劉は眞面目な顏をして云つた。

マージヤンを止していろんな談話をした。

「此の旅館は幾許ですか」と姉さんの方が訊いた。

「四元――」と木下が答へた。

「御飯は？」

「御飯は別、」

「すると此の方は」と彼の方を見て「一日滯在するのに幾許掛りますか」

「まあ十元位ですね。旅館の拂ひだけが」

「お、大變」と姉は首を肩の中へ埋めるやうにして云つた。

「Mーさんは上海語を覺へ度いと云つてるのだが、あなた方の家へ下宿をさせて、上海語を敎へて上げてくれませんか」

と劉が云ふと、妹が早口に何か答へた。

「非常に歡迎しますつて云ふんですよ」木下はさう云つて笑つた。

「下宿をするもいゝが、一ケ月幾許でせう」

「十元」

「あはゝゝゝゝ」とみんなが笑つた。
　木下は、眼も利きもしないくせに、女達の持物などを評價したりした。ベッドの上に捨てゝあるマントを珍らしさうにひろげてみながら。
「是れは幾許掛りました」と訊いたりした。
「四十元」と姉は妹に代つて言下に答へた。
　女達は能く喋り乍らノベッに香煙をふかして、口中がねばつくと「つッ、つッ」と床の上へ唾を吐いた。
　折惡しく其の日彼は或人から招待されて大西洋菜社と云ふ西洋料理店へ行くことになつてゐて、もう其の約束の時間が過ぎてゐた。其の事情(わけ)を話して「明日一緒に御飯を食べ度いから、夕方四時半頃に遊びに來て下さいませんか」と木下に云はせると、女達は機嫌よく承知して直ぐ歸り支度をした。飾襟のついた綠色の長いマントを着て起ち上つた時の妹の姿は今迄見てゐたよりも美しく見えた。

二

　翌日約束の時間を一分も間違へずに昨日(きのう)の姉妹がやつて來た。姉は、今日は三つ位の小兒を伴れてゐた。其の上彼女はお腹にもう一人兒を持つてゐて、はち切れさうな腹をしてゐた。
「お腹の子は何時生れるのです」と訊くと、
「來月——」と云つた。
　彼等は雜談をしながら劉がやつて來るのを待つてゐた。
　彼女達は今日は素晴らしく立派な衣裝をつけてゐた。妹は滑かな膚へほんのり知れる位白粉をつけてゐた。
　妹は、彼が獨習してゐる上海語の手引草の薄ッぺらな本を手に持つて、窓際のソッアーへ行つて讀んで見たりした。
「脊中が痒い、搔いておくれ」其の時突然彼は上海語で云つた。
　女達は駭いて彼の顏を見た。それは彼が最近に覺えたばかりの上海語だつた。
「そんな言葉が本にありますか？」と一人が訊いた。
「有る」と彼は答へた。
「何處に有るか見せて御覽なさい」妹はかう云ひ乍ら本をひろげて彼の鼻の先へ押し付けて來た。
　其の言葉は本にはなかつた。
「それ御覽なさい。そんな言葉を、貴郎は誰から習つたのです。」
　妹は敏感らしくさう云つて輕い女の嫉妬を現はした。劉がや

つて來た。一同は揃つて旅館を出て黄包車へ乘つた。男は一人々々乘つたが、女達は合乘をした。お負けに小兒を膝の上に載せた。腹の中の兒まで數へると一台の人力車へ四人乘つてゐるわけだつた。四馬路の料理店へ行つた。料理店の前で車を下りると、彼は姉の手から小兒を受け取つてやつて、一番後からまつ急な階段を上つた。階段を上つた處の板の間に一間位の金網の箱が置いてあつて、其の網の中には幾百とも數知れぬ蟹がモヤモヤと動いてゐた。それはみんな料理に使ふ蟹だつた。家の中は何處も彼處も古寺のやうに荒びて眞つ黒に煤け切つてゐる。彼等は廊下の兩側に幾つも小部屋のある其の一つへ這入つた。其の家は汚ないけれども料理はうまかつた。流しの藝人が客席へ入り込んで騒がしく胡弓を彈いてゐた。

女達もよく食べた。劉は舞臺の時間が迫つてゐると云つて中途から歸つてしまつた。木下は電話を掛けに行つた。三人きりになると姉は突然彼に向つて、妹の方を指さし乍ら

「貴郎は此の娘を好きですか。嫌ひですか」と云つた。

姉は非常に眞面目だつた。妹も默つて私の顏を見つめてゐた。其の緊張した樣子はてうど彼の返辭一つで彼女達の大きな運命を決するものでゞもあるかのやうに見えた。

「非常に好きです」と彼は答へた。

女達は其の一言ですつかり安心したやうな表情をして顏を見合つた。

木下が戻つて來ると女達は木下に何か云つた。

「此の人達がね、今夜自分達の家へ遊びに來て下さいと云つてるんです、どう云ひませう？」木下は彼に相談した。

「有難いけれども、今夜は少し用事があるからと云つて謝絶つて呉れたまへ、直ぐから家へ行くのも少し圖々し過ぎやうからね」

「どうしても來て呉れと云ふんです。一寸行つて直ぐ歸つてもいゝと云ふんです」

「困つたな」

彼が躊躇するには別の理由があつた。

「ぢや、お宅まで送りませうと云つて呉れたまへ」

それから直ぐ彼等は其處を出た。無數の金看板が極樂世界のやうに燿いてゐる四馬路の雜閙の中を再び黄包車を走らせた。一旦彼の旅館のある西藏路へ出ると、競馬場に沿つた薄暗い道路を走つて行つてそれから道幅の廣い愛多亞路の通へ出た。それを何處迄も南へ〳〵と行つた。やがて彼の不案内な街へはいつた。其の邊はどれも家なみが新しくて何となく新開地らしい趣があつた。車はその邊の平安里と書いてある新らしい露地の前

でとまつた。彼女達の家は其の露地の奥にあつた。一丈にも餘るやうな厳丈な眞つ黒い門扉に附いてゐる鐵の環をカチ〳〵と鳴らすと、中から下婢が扉を明けた。門の内には四坪位のタタキの庭があつた。玄關の室も廣々と出來てゐた。其の直ぐ奥の長方形の廣間へ彼と木下は通された。

家は可成り廣いらしかつた。其の奥にもまだ小部屋が幾室もあつた。長方形の室には、兩方の端に寝台が一台宛置いてある。向うの眞鍮柱の寝台には純白の絹の帷が掛つてゐる。側面の壁の方にはソファーが置いてあつたり、紫檀製の置戸棚だの、台だのがあつて、其の上には蓄音器や、茶道具や、寫眞や、いろんな物が置いてある。大きな衣裝戸棚がある、一見して可成り富裕な生活を思はせる住居だつた。

姉妹は、よそいき着物を脱いで昨日彼の宿へ來た時のふだん衣に着替へて出て來た。それが一層親しみを現はしてゐるやうに感じられた。

多くは姉が獨りで喋つて、妹は時々姉の言葉について何か云つた。姉は、妹の身の上を、木下を通して話すのだつた。

「妾達は紹興の生れですが、親達と一緒に幼い時故郷を出ました。そして妹は上海で藝妓に出てゐましたが、十六の年に旦那がついて落籍されました。其の旦那は上海に銀樓を三つも有つてゐる大きな商人でした。處が、去年の五月旦那が突然死んでしまつたので、それ以來此の娘は家へ歸つて獨身で暮してゐるのです。此の娘は今年廿二なんです。旦那は大へん深切な人でしたのに、若くて亡くなつたので、此の娘は不幸な身の上になつてしまひました」

さう云つて姉は壁間に掲げてある大きな引きのばし寫眞の肖像の方を振り向いて見せた。それは四十二三位の、いかにも富裕な商人らしい穏やかな容貌の持主だつた。

「貴女の旦那様は？」と彼は姉に訊いてみた。

「私の良人は漢口に居ります。けれど、私は良人と意志が合はないのです。私達の夫婦も幸福ではありません」

「ぢやあ貴女方は、二人切りで此處にゐらつしやるんですね」

「えゝ、しかし親達が近い所で小さな商賣をして居りますから、朝晩來て世話をして呉れるのです

「妹さんの旦那はあんなに若くてどうして亡くなつたんです？」

すると妹が答へた。

「あの人は毎晩夜遊びをする人でした。それで或晩も馴染の藝妓屋へ行つてゐて、お酒を飲んだあとで冷たい物を澤山飲んだのです。すると急にお腹が痛くなつて到頭其の晩のうちに死ん

でしまひました」

「とにかくなんですね」と木下は彼に向つて云つた。「此の妹は、旦那が亡くなつたんで餘程澤山の財産を貰つて暇を取つたものですね。此の家だつて家賃が八十弗ださうですからね、餘程金をもつてなけりや此の暮しは出來ませんよ。劉の話でも、大變金持の女だつて云つてましたよ」

「さうかも知れないね。處で、此の二人は眞の姉妹かしら」

「ほんとの姉妹だつて云つてますよ、しかしちつとも似てゐませんね、」

「僕はそれは嘘だらうと思ふ」

「貴君方は何を話していらつしやるんです?」

姉は叱るやうに云つた。

「妾達の悪口を話したのでせう」

「否、さうぢやない、あの寫眞の人は、あんなに福相をした立派な人だのに早死をしたと云ふのは、こんな愛らしい人があるのに浮氣をした罰だらうと云つたばかりです」と彼は木下に云はせた。

姉は大きな腹を抱えて笑つた。

「あの人は、そんなに善い人ぢやありませんでした、妾は本當は好いて居なかつたのです」と妹の方が云つた。

「妹は非常に變り者なんです。かうして獨身で居るのでいろんな處から申込みがあるんですが、此の娘の氣に適つた相手が一つもないのです。けれども、貴郎なら一生を托してもいゝと云つてるんですが、日本へ伴れて行つて下さいますか。此の娘は昨日からさう云つてゐるんです」と姉は大まじめに云つた。

それから姉妹は替る〲自分達の希望を語るのだつた。戯談とは思はれぬ眞劍な様子が二人の顔に出てゐた。彼は先刻料理屋で云つた言葉に思ひ當つた。

木下は閉口したやうな顔をして頭髪をムシヤ〱掻き乍らいろ〱通辯してゐた。

「それでね、かういつてるんです。貴君さへ宜ければ、明日からでも宿屋を引き拂つて此處へ移つて來て差し支へないさうです。どう云ひませうね」

彼は誰にも負けないやうな空想家だつたが、彼の空想以上に相手が突飛に出て來るので面食つてゐた。

「一兩日中にきめるから少し待つて貰ひ度い」と彼は木下に答へて貰つた。

すると姉妹はすなをに承知して、それから明日の晩は家の手料理で御飯を上げたいから、四時迄に家へ來て下さいと云ふの

だつた。

「必ず參ります」と彼は答へた。

部屋の壁には例の肖像のほかに、掛物だの、小さな寫眞だのが澤山掛つてゐた。其の掛物には彼女が二十の年の誕生日の祝宴に列して、と云ふ題書があつて

秀質天然不媿東山絲竹。卿雪呈端好開北海琴樽

と書いてあつたりした。彼女の名前は『謝秀卿』と云ふのだつた。齢は廿二だつた。

三

彼は旅館のベットに腰を掛けて取り留めもない空想に耽つた。鼠色によごれてゐる壁を明るい電燈が無意味に照らしてゐた。

ふくよかな頬を有つた可憐な女の顏が絶えず空間に映つてゐた。彼は自分の現在の境遇や、時代や、國籍や、其のほか現實的ないろんなことをすつかり忘れたやうな氣持になつてゐた。いつとも分らないある時代に一人の男があつて支那の國土を旅をして歩いてゐた。其の男は偶然一人の少女と相逢ふて戀をする。男と女との間には前世からの深い宿縁が結ばれてゐるのだつた。古來の物語の中へ無數に現はれて來るさう云ふ場面を彼は今自分の身の上に當てはめて考へて見るのだつた。彼は自分を見る時の情熱的な女の眼ざしを思ひ浮かべた。彼は今彼女に對して戀を感じた。そして、彼女に對して戀をするのが自分の運命であるやうな氣持がした。

しかし、突然彼は幻滅に襲はれた。彼は自分の懐中の金のことを考へたのだつた。

彼はこの半月餘りの間に所持金を悉くつかひ果してしまつた。旅費や、滯在費や、運動費も相當につかつたけれども、其の大半は競馬と賭博館で費消したのだつた。そして彼が目的にして來た或る事件はまだ何にも解決の曙光さへ見られなかつた。彼は日本への金の請求の手紙を出した。がまだその返事は來なかつた。五日目毎に書出しを持つて來る此の旅館の最近の支拂には、彼は懇意にしてゐる日本の紳士の處へ行つて金を借りて來て支拂つたのだつた。今日彼女達と一緒に料理屋へ行つて食事をする時、彼の懐中には八弗となにがしかなかつた。それで今は餘す處僅かに一弗しかなかつた。一弗の金を持つて戀愛を始めることがいかに無謀であるかは彼にも分り過ぎてゐた。そこで彼は今日も一人二人知合ひの人の處へ電話を掛けて金の融通を頼んで見たが、あひにく今日明日は土曜日曜であるのを口實にして體裁よく斷られてしまつた。明日にも日…

から送金があつたにしても、月曜日迄待たなければ現金を受取ることはできないのである。それも當てにはならない。明日は彼女の處へ招かれて行かなければならないのに、たつた一圓銀貨一枚では仕方がないではないか。

其の時彼はふッとある事を考へた。

「Y子の處へ行つて小遣を借りて來よう」と思ひ付いたのだつた。

Y子は彼の以前の戀人だつた。三年程前に彼がはじめて上海へ來た時、ダンスの師匠をしてゐたY子と戀して二人は一緒に日本へ歸つた。けれども日本へ歸ると直きに二人は別れてしまつた。そして其の儘双方の消息が絶たれてゐた。今年の春になつた。彼は劇團の用事を帯びて上海へ來た。すると思ひ掛けなくもY子が二た月ばかり前から此の土地へ來てゐるのだつた。彼女は非常に窮迫してゐた。以前彼女のパトロンだつた男も今では彼女を顧みなかつた。零落してゐる彼女に對して誰一人同情する者もなかつた。彼女は下宿代も拂へないでくすぶつてゐたが、彼が來てゐることを聞くと恥をしのんで此の旅館へ男に會ひに來た。彼は變り果てた女に對して戀心を復活させることとはできなかつたけれども、滯在中に若干かづゝ小遣を貢いでゐた。一度日本へ歸つて、六月になつてから彼は再び上海へ來た。其の時もなほY子の状態は以前と變りがなかつた。彼はまた些かの小遣をやつた。しかし、今度來て見ると、彼女の境遇も少しいゝ方へ向つてゐた。いゝと云つても大していゝわけではないが、彼女は近頃西洋人の經營してゐるカフエーの踊り子になつて毎晩其處へ通つてゐた。そして下宿屋を引き拂つて西洋人の貸間へ移つてゐた。彼は先達て一度其處を訪問して彼女に會つたのだつた。彼女は自分の仕事について話した。彼女が通つてゐるカフエーは外國の船員、それも下級の船員が主なる客で、踊り場としては、一番下等な場所だけれども、それだけ收入が多い。一流の踊り場は外見ばかりよくても收入が尠ない。さう云つて、外國人の踊り子ばかり二十人以上も居る其のカフエーの様子を彼に話して聞かせたのであつた。

「Y子は十圓や廿圓の金は持つてるだらう。そして持つて居れば快く貸して呉れるだらう」

と彼は考へた。「新しい戀の遊戯を始めるために、昔の戀人から金を借りて來ると云ふことも面白いぢやあないか」と思つて見た。けれどもそれは思つて見ただけで、やつぱりやましい氣持がした。

可憐な支那娘の顔と、金と云ふ文字とを、彼は空間に描き乍ら彼は夜の更けるのも知らなかつた。

翌朝彼が眼を醒ました時には、東の窓からキラめくやうな朝日がさし込んで、寢臺の内部まで燃えるやうに明るくしてゐた。彼は眼を明いたまゝ仰向けに寢てゐて、てうど西洋蚊張のやうになつてゐる帳の天井のあたりを眺めてゐた。金錢の事が直ぐ頭にのぼつてゐた。

「しめた」と彼は獨言を云つた。彼はいゝ方法を考へ付いたのだつた。

それは、時計さげの翡翠をＹ子に賣り付けようと云ふことだつた。彼の氣持から云へば、時計も鎖も全部犠牲にしたつて惜しくはないのだが、それは體裁上困ることだつた。其の翡翠は先年五十弗ばかり出して買つたのだが、非常に安く買つたので、今賣らうとしても矢張り元價位の價格はあると商人でさへ云つた。今朝これから彼女の處へ行つて此の翡翠を出して「おい、是れで二十圓でも卅圓でもこしらへて呉れないか」から云ふのは確かに名案だつた。彼は急に元氣づいて起き上ると、張をシューッと開いた。

ベツドに腰を掛け乍ら、襯衣を着、ヅボンを穿き、チョツキを着た。時計は枕もとにあつた。まつ白い朝の日光が彼の腰から下にあたつてゐた。彼は右の手で金側の時計をつまんでそれを身に附けようとした。プラチナと金とのなひまぜの鎖が蚊のやうにスル／＼とシーツの上を滑つて彼の側へ引き寄せられた時、其の端がだらりとベツドの角から床へ向つて垂れた。すると忽ち「カチン」と音がした。鎖を引き上げて見ると、翡翠は、丁度其の眞下にあつた水こぼしの陶器の壺の縁にあたつてまつ二つに割れてしまつてゐた。鎖には三分の一程しか殘つてゐなかつた。片割れの翡翠は、朝日のあたつてゐる汚ない床の上に、丁度罪人の首かのやうに轉がつてゐた、

其の日約束の四時より一時間もおくれて彼は木村と二人で彼女の家へ行つた。彼女達は非常に待つてゐた。

「妹はいつも寢坊なのに今朝は七時に起きてマーケツトへ買物に行つて、おひる頃からあなた方の來るのを待つてゐました。あまり遲いから入らつしやらないのかと心配してゐた」と姉が云つた。

妹は、袖をまくり上げて、白い腕を露はして、お勝手の方からやつて來ると、

「どうしてこんなに遲く來たんです」と叱るやうに云つたかと思ふと、其の濡れ手のまゝで斉烟をつまんでふかし始めた、彼女は非常な元氣だつた。

御馳走は廣間へ運ばれた。始めに蟹が出た。姉妹も卓へついた。蟹は掌よりも小さい川蟹で、それは茹でたまゝで、目ざるへ容れて持ち出された。料理が來る前に先づ共の蟹を腹存分食べるのだつた。妹は彼の右手の方へ座つて、慣れた手付きで細い銀の箸を動かし乍ら蟹の肉をほじり出しては甲羅へ山盛りに盛り上げ、それに酢と醬油を等分に掛けて彼の前へやつて食べさせるのだつた。蟹が了ると料理がきりなく持ち出された。

食卓の談話は主に日本の事が話された。日本人の生活に關するいろんな事を彼女達は務るく訊きたがつた。

「お父さんとお母さんにも相談した處が、娘が行く氣なら自分達は反對しない。たゞ自分達は年を取つてゐるから、年に一回は親の顏を見せに歸して與れるといふ條件さへ承諾して下されば少しも異議はない、と云ひました」と姉が云つた。

昨日と今日のことで、彼女たちはもう日本へ行くこと、遣ることにきめてしまつてゐるのだつた。彼は此の國の女の、人生に對する冒險心に驚嘆してしまつた。

「此の人は、日本で幾人奥さんを持つてゐるんですか」と妹は訊いた。

「さア、事が面倒になつて來たぞ」木下は笑ひながら「M―さん、幾人あると云つときませう?」

彼は非常に面食つてしまつた。

「獨身だと云つちや不可ないんですか」

「不可ない〳〵、紳士が獨身であるべき筈がないからね。こつちなら先づ三人とか五人とか云ふところですか」それから彼女に向つて「二人ださうです」と木下は答へた。

すると彼女は、「第一夫人はどんな性質の人か」なぞと云つて訊いた。第一夫人には服從しなければならないのだが、其の人が若し氣性の荒い人で、打つたり蹴たりされると自分は體が虛弱だから堪へられないと云つたりした。

食事をすました後でみんなで芝居を見に行くことになつた。彼が眞先きにそれを唱導したので木下は妙な顏をした。女達は着物を着替へた。彼女は桃色の羽二重の上衣に、黒い絹へ花の刺繡をしたスカートをつけて、踵の高いエナメル靴をはいた。

一同例に依つて黃包車をつらねて四馬路へ向つた。其の途中で木下は車上から體をねぢ曲げて後の車に乘つてゐる彼に

「大丈夫ですか、金は?」と云つた。

彼は街燈の光の中でうなづいて見せた。其の日の晝彼は二人の知人を訪問して明日月曜日の金策を賴んだ上に、或る新聞の特派員から十弗借金をして、それで日本へ向けて四五通の電報

を打つた。餘す處は二三弗に過ぎなかつた。が、翡翠がこわれたのでY子の處へだけは行かなかつた。それでも其の二三弗の金を懐中して木下と二人で黄包車を走らせて彼女の家へ向ふ途中で、彼は最後の運試しのやうな氣持で財布の中を丁寧に調べて見た。すると何と云ふ奇蹟だらう？名刺や書付などの間から十弗紙幣が一枚現はれて來た。

彼のポケツトには其の十圓札一枚と白い大きな銀貨が二三枚あつた。かうして危うくつながつて行く戀愛の綱渡りを彼は皮肉にも考へるのだつた。

日本から來る電報爲替の金額を彼は胸で數へてゐた。そこに今迄經驗したことのないどんな人生が湧き出して來るかと考へると胸が躍つた。

五六間先きを走つてゐる黄包車の上の彼女のうしろ姿を、彼は夜の光の中に見た。

（完）



支那青年と自然科學

木下杢太郎

「ラ・プレッス・メヂカル」といふフランスの醫學雜誌（昨年十一月廿八日發行の號）にD, A. legendre と云ふ人が支那學生の心理に就いて論ずる文章が、載つて居て甚だ面白い。此人はTchentou（成都？）の醫學校を創立しそこで教授をしてゐたと云ふが、其支那學生の行狀を批評するや痛快である。殊に泰西自然科學に對する支那學生の能力に就ては頗る悲觀的の口吻を漏らして居る。今少しくそれを抄譯して見よう。曰く始めて上海香港等に來て支那勞働者を看る外國人は彼等の頗る勤勉なるに驚くが、是れは海港に在つて彼等の間の生存競爭が激甚なる爲めであつて、一旦内地に入ると此等の階級の者と雖も寧ろ頗る怠惰である。ボタンシアルに缺けて、始終筋肉上の休息を要求し、持續的の仕事が出來ない。

この怠惰が仕事に表はれて紡績工は平等の太さの絲を作ることが出來ず、染工は同じ濃さの藍壺を二つと設けることが出來ない。」

それと同じやうな性質が未來の支配階級たる學生にも見られるのである。その第一の特徴は同じ仕事を續けてゆくことの出來ない點である。始めの數日間或は數週間はたいへん好く勉强する。然しそのうちに學校へ出て來なくなる。即ちその郷里に歸つて一日十八時間も煙草や茶を飲みながらむだ話をする爲めである。また第二の特徴は自己滿足である。試驗の時など出來なくてもそれは自分の不勉强のせいではなくその先生のせいであると揚言する。

いろんなものに手を出して一時熱心にやるが、早倦がする。先生を換へて見たりするが、結局何にも仕遂げない。そして一般的興味の問題に就いて最も好んで饒舌して直ぐ社會的の事件に關與したがる。

これは一般に支那人の性質と謂つていいのであるが、それが學生に於ても明瞭に現はれる。それ故泰西の自然科學の如きには彼等は甚だ不適當である。彼等は自國の文學に就いて大なる

自負を有して居り、歐羅巴の科學の如きこれに較べれば何でもないと考へてゐる。

第三の特徴は秩序やメトヂックといふ觀念の無いことである。自分の氣儘に勉强をして見たり、遊んで見たり、その教師を困らしたり、之に對して陰謀を起したりする。殊に豫備教育といふものを辛抱して受けるものは殆どない。豫備教育などは受けないで一足飛びに正味の學問へと進みたがる。解剖學は習はないで直ぐ外科を覺えたがる。科學などはつまらないからといつて解析幾何や動物學を習つて見る。

また物理や化學を習ふ場合には、それで直ぐ金まうけが出來るとか或は途方もない不思議な事が出來るとかいふ目的からである。そして其眞相が漸々分つて來るとすぐ厭きて止めてしまふ。そして鑛物學をやつて見たり、國際公法を習つて見たりする。それは之によつて地中の寶を發見したり、歐羅巴人を手玉にとる大政治家にならうといふのである。

また官憲も是等の學生を監督することが出來ない。彼等は翰林院學士かも知れないが、その文學の知識はいざ知らず、酸素も哺乳動物も、少しく自然科學的の事はかいもく無知識である。

又あんな動搖常なき中央政府では、學政の秩序を保たせる力はない。で支那で本當の學校と云つたら唯外國人の經營してゐるばかりだと謂つていい。

そして學生は公立學校の委員と稱するものと一緒になつて大事な、時間を政治談演説や政事運動に費消してしまふ。から云ふ狀態であるから科學的には彼等は進歩しやう筈がない。あれやこれやの歐羅巴の學問を食ひ散らしそれに自國の文學を併せて作り上げる所は結局實のないえせ學問で眞に歐羅巴の文物を同化するといふやうなことは到底望まれない。

そして彼等のから云ふ氣象は確かにその國民性と深い關係があるのであり、その上に此國民の幾世紀の間の結晶化の結果であるのであるから一部の人の考ふるやうにさう容易くは眞の效果のある發展を期待することは出來ないのである。數年の間に歐羅巴に負けぬ工業を起さうなどと夢みてゐるがその結果は皆失望に終るのである。

又政治的社會的にも支那の今の無政府狀態は支那學生の焦燥の氣分を憎惡せしむるより外の役には立たない。然し彼等の神經衰弱的の發作は早晩疲勞して鎭靜すべきであるが、ボルシエキク思想の支持がある爲めにいつまでか續くのである。それで彼等は昔からの先祖崇拜族長制度の傳統を度視しよくも知らぬ新思想へ走るのである。亞米利加やロシヤから來るいろいろの

思想の間に選擇をなす能力なく、そして國家の無秩序は一層増大する。

この無秩序は第一に外國人嫌惡として現はれる支那の事情を好く知らない外國人は之を支那人の愛國心だと誤認する。

學生は學窓に在るよりも街頭に出づるを喜び、自由、デモクラシイを合言葉にして政治的の直接行動をなし。いかにも世界的の大運動を行ふかの如く慢心してゐる。然し政府は今の如く腐敗し、無力である間は支那の學生は惠まれないだらう。

右は少し過激な意譯であるが、この佛蘭西のドクトエルは支那學生に對し甚悲觀的な觀察をかなり不遠慮に表白してゐる。

同年の十二月に至つて同じ雜誌が L.Avenir du Tonkin の十一月號を引いて香港の英國太守 Sir Reginald Stubbs の同年十月廿二日に香港の立法會議でした演説の一節を紹介してゐる。

「終に臨み余は教育問題に就いて一言しよう。支那人に對して泰西の教育法を課した結果はあまり、好調でないと認めざるを得ぬ。此方法に由つて教育せられたるものは然らざるものに比して遙かに卓絶たる叡智を有するならむといふ豫想に反して、其者は寧ろ却つて甚だ劣るのである。

我々の過誤は畢竟泰西風の教育といふものに對して過大の價値を置いた所に在る。そして支那風の普通教育を出來るだけ奬勵しなかつたといふことは、確かに我々の過失である。今や、教育部長は此問題に就ては長い間研究した末に將來適當の時機に於て小學校から大學までを通ずる支那風教育の階梯を制定しようとしてゐる。云々」

所で香港の大學は其建立以來相當の年月を經過して居、寄附金でそれが建立せられた當時多大の感激を與へてゐるだけに、香港大學の演説のこの一節は一層興味がある。英國側は支那青年に英國風の教育を與へて多少は英國の感化を期待して居つたのに、支那青年はその教育風の如何に拘らず、畢竟支那青年で英國側の希望に副はなかつたのである。

さて是等の悲觀的評論は、一、支那青年が西洋風の教育、殊に自然科學の教育に不向であるといふことと、二、其の教育の精神（英國風なり、又一般に歐羅巴風なりの）に薫陶せられないといふことを結論とするものである。

この第二の問題はわたしは今ここで批評しようとは思はない。わたしが奉天に居た當時、滿洲で日本人が行つてゐる支那人教育の場所（中學堂等）では支那青年を全く日本人同樣に取扱ひ日本の祝日を祝し、日本の國歌まで歌はせた（？）といふ評判であつたが、わたしは夙く滿洲を去つて其結果如何を觀察

する機會を得なかつた。

第一の支那青年は西洋風の教育に適せぬ、殊に自然科學には不得手であるといふことは、今直に決論は出來ないにしても、後來の支那の文化に關心するほどのものは一たび攷究する必要のある問題と思ふ。

民國は既に十數年の齢を重ねたが、支那人自身の手に由る自然科學の教育並に研究は未だ與らないと曰つて差支ない。北京大學はあの始末だし物理化學、動物植物等の純粹なる自然科學、或は地理、地質其他の應用科學をそれ自身の爲に研究してゐる支那人が支那廣しと雖も現今幾人あるだらうか。

應用科學のうちでは醫學教育が先づ比較的廣く行はれてゐる。大正九年の秋にわたくしは支那の山西、河南、湖南、湖北浙江等の諸省を旅行した時醫學校及び大病院は必ず之を參觀した。そのうち支那人自身で經營してゐるのは、北京、太原(山西省)、蘇州、杭州の四つの官立醫學專門學校でありわたくしはその孰れをも見た。孰れの學校にも日本に學んだ醫學者が教授となつてゐるのがあつたが、然し、概して云ふと、是等の學校が後來、教育及び研究の府として發展するだらうかといふことに就いては多大の疑問なきを得なかつた。どこにもまだ不完全と不秩序とが存して居た。然しそれは大半は經費不足、換言すれば政府なり、地方廳なりの無秩序の處に歸すべきものであると思はれた。

何となれば、たとへば長沙における湘雅醫院、及び其醫學校、南京における金陵大學及び其附屬の、鼓樓醫院、浙江に於ける大英醫院、呉淞に於ける獨逸醫學校(是れは大正九年は大戰爭中とて甚だ閑散であつた)殊にわたくしの自ら勤務した南滿醫學堂(今の滿州醫科大學――尤もこれは支那人教育を主としてはゐないが)等の如く外國人の經營するものは、上述の官立學校に比して遙かに整頓して居り成績も擧げてゐるからである。

然し最後の問題、支那青年は自然科學の學習に適しないか否か。――此問題はさう容易く解決することは出來ないと思ふ。わたしの五箇年の經驗ではまだ何ともいはれぬ。北京のロツタフエラアの醫學校の如き(大正九年にまだやつと建築の落成を見たばかりで、其後果してどの位の成績を擧げて有るか、わたくしは好く知らない。然し滿州大學に於ては臨床醫學の他に基礎醫學を專門に修める支那青年も出來、その一人の如きは最近日本の醫學博士になつてゐる。

それでわたくしは支那青年の自然科學研究に關しルジヤンドル氏のやうな悲觀說を爲すものではない。支那學生が自然科學を喜ばないのは、支那の政情の惡るい事が最大原因である。往

年わたくしは北京に於てそこの大學教授周作人氏に會つた時、氏は文科に入學した學生の殆ど全部が法科に轉じたといつてこぼして居られた。今や支那に於ける立身の道は法科を修めて官吏になるより外の道がないから、勢さうなるのである。

でわたくしは支那青年が自然科學の學習に不向だとは考へないが、支那に純粹なる自然科學が興るのは前途遼遠だとは思ふのである。

支那人は今や學問の爲めに學問をするといふ興味をまるで失つてゐる。日本で所謂「漢學」と稱せられる古典學も清朝以來の學者の死し去つたのちは太だ廢れるだらうといふことである。然るに支那青年はその後を繼がないのみならず、歐羅巴文明の根本精神をも受入れようとしてゐない。それはわたしもルジャンドル氏と同意見である。故に今醫學に於て少數の能才があつた所で恐らくその次の次の代にならなければ「功利主義」以上の意味に於ける泰西の學問の精神を理解するものは出て來まいと思はれる。

支那を旅行する人はこの國の古くして且つ廣いことを痛感する。而も新しいメトヂックを以てする科學的研究に向つては、是れ全く鋤鍬の入れられざる處女地である。然し支那人の手を持つては地理學に於て、考古學に於て、又博物學等に於て、急には好研究が興らないとすれば、その爲に我々が一臂の勞を盡すことが正當である。近時對支文化事業といふ名目で上海に自然科學研究機關が設立せられるといふが、然しさう云ふ制度の他にも、たとへば各地に於ける同仁病院のやうなものを利用し、日本の教授なり、學生なりが、夏休みなり、又は相當の年月なり支那に止まつて、個人としては部分的でも、結局は統一的になるやうな方角で、地方地方で、自然科學的研究を行つたら、だんだん成績が擧つてくるだらうと思ふ。

今までも商業取引の上、又は工業的事業の上に、日本の會社は或は地質學者或は、特殊の技師を支那に派遣して、その報告を徵してゐる。これ等は然し全く世間には傳はらない。一方に文化的の意味では滿鐵の中央試驗所のやうなもの、又は上海の同文學院のやうなもの其他支那或は日本內地に於て、公の職務として又は個人的趣味として多くの支那文物自然に關する研究が施されて居る。然しそれ等を統轄する機關がないから、何れも斷片的の狀態に止まつて聯絡を缺いてゐる。

で日本としては、今後支那研究に向つて中樞機關を設けて連絡と、統一をつけることが必要だらうと思ふ。

わたくしは支那を去つてからもう七年になる。この間は餘り支那の事に就いて注意をしなかつた。今回「改造」から原稿を求められたが、今述ぶる所は七年前の思想智識から出ない。唯蕪文を以て責をふさぐだけである。（六月十八日夜）

中國新文學談瑣

西　瑩

一

支那の新文學運動は頗るその新政體に似てゐる。新文學運動も新政體も實に容易く事實となつたが然し乍らかれらの成績も亦た兩方共、我々の期待に滿足を與へて與れなかつた。政治方面は誰も知つてゐる。千九百十一年十月武昌で旗を擧げてから、大した戰爭も衝突も起らず、四ケ月の後には、もう中華民國が成立してしまつた。此の事件は全く世界を驚ろかした。もう慢性嗜眠病にでも陷つてしまつたかと思はれて來た此老大國が又た復活した。又た光が東方に現はれた。多くの人々の希望には輝ける朝暾が昇つた。やがて、燦たる正午が來るだらうと期待された。だがこの十五年間と云ふもの、中華民國は全く幽暗な雨空の下に息づいてゐた。

新文學は民國六年の初め、胡適先生及び陳獨秀先生が「新青年」（雜誌）に文學革命の旗を飜へすや、忽ちに風起り浪怒り立つ有様、當るべからざる勢となつた。彼らは古文を「死文學」と宣言し、古文の爲に葬式を擧げた。彼らは「國語の文學」を建設しやうと主張した。而して「白話」を炊所から客間に移し、庶子の地位から文學傳統の玉座に祭り上げた。果せるかな、號泣するものが現はれ、怒罵するものが跳び出た。然し乍ら、彼らの聲は微弱であつた。而して、哭き叫びも罵り怒りも暫らくすると精盡きて止んだ。白話は天下を風靡した。白話の新聞さへ現はれ、而して一日一日と増加した。千九百十九年、「或る人の統計によると少くとも四百種の白話新聞が出た」と云ふ。實に、十年此の方、國内に發生した白話新聞は數千種に達し、思想、文學に多少、貢獻したものも多くあつた。然るに、文言で書かれる新聞は全く寂寥の感を與へ、比較的に觀るに足るものは「學衡」とか「甲寅」の數種に過ぎなかつた。

我々の希望が餘り贅澤かも知らないが、この十年以來の新文學の成績に對して、我々が滿足してゐるとは實際云ふことが出

來ない。然し我々は新文學が民主政治と同様に名實伴はずとか、同様に、風雨の中に曝されてゐるとは言はない。只だ光が少し淡す過ぎたと言ひ度いのだ。要するに、白話の出版物は澤山あつても「白話文學」の産物と稱するに足るものは極めて少ない。一寸、二三冊の本を擧げ、非常に得意になつて、全世界に向ひ、

『見よ！我々の新しい偉大にして不朽なる傑作を！見よ！』

と云ひ度ひが―頗る困難だ。而して、この様な傑作がなければ、一箇の文學運動も遠大な影響を與へることが出來ないのだ。

或は思ふ―新文學も、民主政體と同様、事實となつたことが餘りに早く、餘りに容易かつたのではないか。幾千年の傳統的な觀念は一擊で根本的に打ち消すことは出來ない。古文は既に「強弩之末」となり、弱つてしまつて、積極的に此の革新的運動に抵抗することが出來なくなつたが然し乍らそれが長い傳統の爲に、深く人心に喰ひ込んで居て、我々の見えない處に、有形無形に、消極的な障碍となつてゐるのである。

今日、確かに多くの人が（文をなすに）運用してゐるのは白話であるが彼らの思想や見方は矢張り古文の勢力圏から脱して居らず、彼らが使つてゐる文字もこれが爲に多く古文の弊害を持つてゐる。然るに、惰力が強くなければ、反動もひどくならない。若し、潮流の通過する處、皆な危石險峽なれば、自づと奔流急湍を激成するし平沙千里に至れば自然に順流直進し、彼はその淙々たる音響も聽こえなくなるであらう。

又た、各國の新文學運動の先鋒は大方、皆な天才的創作家であつた。彼らは、流行の文體が積弊深か過ぎて、彼らの內心の蘊藏を表現し得ない時に當つて、新しい路を開闢し、手に應ずる新しい工具を採用せざるを得なかつた。が宣言や文學の討論などは、單に彼らの作品の辯護を務めたに過ぎなかつたのである。然し支那の新文學運動を提唱した人は、多くの學者、大學教授、及び思想家であつた。胡適先生の主張が先づ歷史進化の觀念を以て根據とした。彼は第一篇の文章の中で「今世の歷史進化の見方を以て之を觀れば白話文學が中國文學の正宗となり、又た將來文學に必用の利器となるは斷言し得る也」と云つてゐる（文學改良芻議）。他の國では大抵先づ試練（嘗試）があつて、然る後に學理を有するが中國に於ては、之に反し、先づ學理があつてから、再び特に故意に嘗試をやる。他の國では、恰かも、一種の奇異な花草が咲いてゐる時、或は咲いた後に始めて、その特殊な色香が標示されるのであるが中國にあつては、如何にも此の花の奇なる艶や異なる香りを先づ陳述して、

それから、種を蒔いて、培植する様である。而して、種を下ろして、すぐ芽を出し、葉を出し、蕾を含み、花を咲くことが出來ないから傍觀する人をして退屈せしめ、失望せしめるのであらう。我々は此の一つの解釋が部分的理由を有するものであると信ずる。少くとも、十年以來の作品を見るに我々は既に後の五年の成績が前の五年のそれより餘程進んでゐることを發見するのである。

二

新文學運動の張本人は胡適先生と陳獨秀先生であつて、彼等の機關は新青年であつた。陳先生は一個の戰士であつた。彼は、何處かに殺伐の聲があると聽きさへすれば、すぐ走つて行つて、その革命的な方に加はつた。彼は以前は曾つて政治革命に參與したこともある。「新青年」時代には彼は文學革命のキャップテンであつた。近く數年來、彼は文學運動を棄てゝ、專ら共產の宣傳を指導する方へ去つた。「彼の特別なる性質は彼の一往直進の定力にして、彼の信ずる所は必ず「是非甚だ明らかにして、必ず反對者に討論の餘地を有せしめず吾輩の主張する所のものを以て絕對の是となし、而して、他人の匡正を容れざる」たりとす。彼が新文學に爲した功大の貢獻は結局、彼の此樣な精神に外ならなかつた。

胡先生は「自ら常に彼の歷史癖が深か過ぎたるを以て革命事業をなすに足らずと說く。」想もよらず、かの筆を提げて起ち、文學新運動を起したのは正に彼れであつたとは造化もよく人を弄したものだ。是は新文學の幸福であり亦た不幸である。白話文學が文學の正統となることは遲かれ早かれ必ず實現されるであらうが若し胡先生の提唱がなければ此の意義ある運動も或は數年後れたかも知れない。しかも、彼は自分の主張を歷史の觀念に基いた爲に、一般平和な人も革命は即ち進化の別名であると知つて、油然として之れに同情心を起す樣になつた。

然し乍ら、彼は了史學者であつた爲に、繼續的に彼のかの國語的文學を建設することに努力することが出來なかつた。彼はその後の時間を大部分中國の國故の整理に消耗した。國學を論じた「胡適文存」の第二集は第一集に比べると容量と重要さを加へ、且つ彼は青年達の爲に「最低限度の國學書目錄」を作つておいた。彼の樣に懷疑的態度と科學的方法とを用ひて「幾千年來の出鱈目な帳簿」を整理することは非常に重要である。此の種の仕事は彼自身にとつて非常なる興味であるばかりでなく、國學の方面に於ても極く良好なる影響を生ぜしめてゐる。顧頡剛先生の「古史辯」は即ち此の方面に於ける極く注意すべ

來ない。然し我々は新文學が民主政治と同樣に名實伴はずとか、同樣に、風雨の中に曝されてゐるとは言はない。只だ光が少し淡す過ぎたと言ひ度いのだ。要するに、白話の出版物は澤山あつても「白話文學」の產物と稱するに足るものは極めて少ない。一寸、二三冊の本を梨げ、非常に得意になつて、全世界に向ひ、

『見よ！我々の新しい偉大にして不朽なる傑作を！見よ！』

と云ひ度ひが—頗る困難だ。而して、この樣な傑作がなければ、一箇の文學運動も遠大な影響を與へることが出來ないのだ。

或は思ふ—新文學も、民主政體と同樣、事實となつたことが餘りに早く、餘りに容易かつたのではないか。幾千年の傳統的な觀念は一擊で根本的に打ち消すことは出來ない。古文は既に「强弩之末」となり、弱つてしまつて、積極的に此の革新的運動に抵抗することが出來なくなつたが然し乍らそれが長い傳統の爲に、深く人心に喰ひ込んで居て、我々の見えない處に、有形無形に、消極的な障碍となつてゐるのである。

今日、確かに多くの人が（文をなすに）運用してゐるのは白話であるが彼らの思想や見方は矢張り古文の勢力圏から脫して居らず、彼らが使つてゐる文字がこれが爲に多く古文の弊害を持つてゐる。然るに、壓力が强くなければ、反動もひどくなない。若し、潮流の通過する處、皆な危石險峽なれば、自づと奔流急湍を激成するし平沙千里に至れば自然に順流直進し、或はその淙々たる音響も聽こえなくなるであらう。

又た、各國の新文學運動の先鋒は大方、皆な天才的創作家であつた。彼らは、流行の文體が積弊深か過ぎて、彼らの內心の蘊藏を表現し得ない時に當つて、新しい路を開闢し、手に應ずる新しい工具を採用せざるを得なかつた。が宣言や文學の討論などは、單に彼らの作品の辯護を務めたに過ぎなかつたのである。然し支邦の新文學運動を提唱した人は、多くの學者、大學教授、及び思想家であつた。胡適先生の主張が先づ歷史進化の觀念を以て根據とした。彼は第一篇の文章の中で「今世の歷史進化の見方を以て之を觀れば白話文學が中國文學の正宗となり、又た將來文學に必用の利器となるは斷言し得る也」と云つてゐる（文學改良芻議）。他の國では大抵先づ試練（嘗試）があつて、然る後に學理を有するが中國に於ては、之に反し、先づ學理があつてから、再び特に故意に嘗試をやる。他の國では、恰かも、一種の奇異な花草が咲いてゐる時、或は咲いた後に始めて、その特殊な色香が標示されるのであるが中國にあつては、如何にも此の花の奇なる艶や異なる香りを先づ陳述して、

それから、種を蒔いて、培植する樣である。而して、種を下ろじて、すぐ芽を出し、葉を出し、蕾を含み、花を咲くことが出來ないから傍觀する人をして退屈せしめ、失望せしめるのであらう。我々は此の一つの解釋が部分的理由を有するものであると信ずる。少くとも、十年以來の作品を見るに我々は既に後の五年の成績が前の五年のそれより餘程進んでゐることを發見するのである。

二

新文學運動の張本人は胡適先生と陳獨秀先生であつて、彼等の機關は新青年であつた。陳先生は一個の戰士であつた。彼は、何處かに殺伐の聲があると聽きさへすれば、すぐ走つて行つて、その革命的な方に加はつた。彼は以前は曾つて政治革命に參與したこともある。「新青年」時代には彼は文學革命のキヤツプテンであつた。近く數年來、彼は文學運動を棄てゝ、專ら共產の宣傳を指導する方へ去つた。「彼の特別なる性質は彼の一往直進の定力にして、」彼の信ずる所は必ず「是非甚だ明らかにして、必ず反對者に討論の餘地を有せしめず吾輩の主張する所のものを以て絕對の是となし、而して、他人の匡正を容れざる」たりとす。彼が新文學に為した最大の貢献は結局、彼の此樣な精神に外ならなかつた。

胡先生は「自ら常に彼の歷史癖が深か過ぎたるを以て革命事業をなすに足らずと說く。」想もよらず、かの竿を提げて起ち、文學新運動を起したのは正に彼れであつたとは造化もよく人を弄したものだ。是は新文學の幸福であり亦た不幸である。白話文學が文學の正統となることは遲かれ早かれ必ず實現されるであらうが若し胡先生の提唱がなければ此の意義ある運動も或は數年後れたかも知れない。しかも、彼は自分の主張を歷史の觀念に基いた爲に、一般平和な人も革命は即ち進化の別名であると知つて、油然としてそれに同情心を起す樣になつた。

然し乍ら、彼は史學者であつた爲に、繼續的に彼のかの國語的文學を建設することに努力することが出來なかつた。彼はその後の時間を大部分中國の國故の整理に消耗した。國學を論じた「胡適文存」の第二集は第一集に比べると容量と重要さを加へ、且つ彼は青年達の爲に、「最低限度の國學書目錄」を作つておいた。彼の樣に懷疑的態度と科學的方法とを用ひて、「幾千年來の出鱈目な帳簿」を整理することは非常に重要である。此の種の仕事は彼自身にとつて非常なる興味であるばかりでなく、國學の方面に於ても極く良好なる影響を生ぜしめてゐる。顧頡剛先生の「古史辨」は即ち此の方面に於ける極く注意すべく

き一書である。顧先生は古書の中から澤山の大きなアラを捜し出した。例へば彼は懷疑的に且つ力強く、夏の禹は恐らく神(シン)にして人(ジン)でなかつたらうと指摘してゐる。然し乍ら、新文學運動の方面に於ては胡先生の國故整理の影響は不健全であつた。彼自分がやつてゐるのは整理の仕事であるが、多くの青年は只だ胡先生が糸綴りの書本を讀むことを提唱したとしか知らず、皆な、盲目的に、胡先生が以前、既に「死んでから二千年」になると指摘した古文を又た朗讀し始めた。

三

若し、一時の聲望を負ふてゐる大先輩が幾人も加入しなかつたならば、新文學運動の成功も我々が今に見てゐる様な速さはなかつたであらう。

一人は北京大學の校長たる蔡元培(孑民)先生であつた。新青年の同人が大抵北京大學の教授であつた爲に、世間は往々新青年を攻撃することから北京大學をも攻撃するに至つた。古文大家林紓(琴南)は蔡先生に手紙を送つて新文學運動を攻撃し、結末に『今、全國の父老は子弟を以て公に托す、公に願くは留意せられよ……國民の爲に、その趨向を端せ』と云つた。蔡先生は回答の中に、彼が大學に對する主張を說いた。『學說に對しては世界各大學の通例に倣ひ、思想自由の原則に循ひ、兼容並包主義を取る。……如何なる學派も、苟も其言にして理を成し、主張にして理由ありて、尚ほ自然淘汰の運命に逢せざるものは、彼れと此れと相反すと雖ども、悉くその自由發展に任ず』と。彼自身も白話を主張し、且つ亦白話文を作る。彼は「我々は改めて白話を用ひざるを得ない」と云ひ、又た「私は白話派が必ず優勝を占めることを斷言出來る」と云つてゐる。

早くも此の運動に加入したのは梁啓超先生であつた。梁先生は三十年前に既に自分の文體を解放し「務めて平易暢達をなし、時には俚語、韻語及び外國語法を雜ぜ、筆の至る所に縱つて、檢束せず」と云つた。その時、彼の文章は學ぶ者の競ふて倣ふ所の新文體であつた。新文學運動が生まれると、彼は又少しも遲疑せず、先鋒隊に加つた。近く數年來、彼の著作は白話のと文言のと殆んど數量に於て等しかつた。

吳敬恒(稚暉)先生は極度に青年に崇拜さる一人であつた。彼が白話を用ひたのは新文學運動ずつと以前であつた。彼は極端に物質主義を主張する人である。彼の「一個新信仰としての宇宙觀と人生觀」は中國思想界に對する重要なる貢獻の一つであるが茲で之れを說き及ぼすことが出來ない。彼は古文を蔑視

するばかりでなく、尙ほ文學をも輕視する。彼に云はすれば文學は「小技」であり、文學者は「閑散生活を暮らす」もの、「果實の害蟲」である。又た文學者は上層社會の飾り物であつて、裝飾には必要だが「究竟するに廢物だ。」彼は、若し何か云ふべきことがあれば、勿論、云ひ度い時に云ふがよい。何ぞ必ず文章を做すと云ふが如き名詞を心頭に存すべけんや？」と主張する。因つて、彼自分が書いたものは全く「喜笑怒罵、純に自然に任かせた」ものであるが、それでも彼のものを文章と呼ぶことを恐れるから、昔しの文章家が極度に忌み禁じたことを犯し、必ず故意に、文言の中に白話を混ぜ白話の中には文言を混ぜてゐるのである。彼は極端に文學者を輕視するが、彼自身は然し中國の稀有なる文學天才である。彼は、文學的作品の爲に彼の豐富な經驗、鋭敏な觀察、脈々として絕えざる諧謔と諷趣、深刻な描寫を用ふることを肯んじなかつたことは新文學にとつて一大損失である。但し、彼の文章と看做さゞる文章も既に「魚龍の變化、捉摸すべからず、文章奇恣の能事を極めたり」と云ふべきである。

四

「何か云ふべきことがあれば、勿論、云ひ度い時には云ふがいゝ」が吳先生にあつては、思想は獨特、意像は奇幻、諧趣は風の如く生ずるが故に、自づとかの模擬すべかざる風格を成してゐるが思想素樸な常人が彼の主張を實行しやうなら失敗に陷いるであらう。白話が初めて行はれ出した頃には多くの人々は恰度此の病ひに陷つてゐた。彼らは出まかせにかいたものがすぐ文章になると思つたが結局、あの頃の文學は讀み終はらせないものが多かつた。

梁啓超先生などの如く文言に長じた作者が書いた白話は亦た自然に條理が文明、辭句が流暢である。それが爲に、ある人は文言を善くするものは必ず白話をも能くすと云ひ、甚しきは、文言を善くする人のみ初めて明暢なる白話を能くすると說くものもある。こんな言說は固より「靴を隔てて痒さを掻く」樣なもので、中らないものである。白話文は文言文の變相ではない。又た一句の文言文（文話）を二三句の白話文に引き延ばしたとて白話文にはならない。的や麼や呢や啊を以て古文の之や乎や者や也やに直ほしたとて白話文にはならないのである。白話文は自づと白話文の語調があり風格がある。且つ現在の白話文には既に紅樓夢や水滸傳の白話文でなくなつてゐるのである。

胡適先生の白話文は非常に明暢にして清澈、且つ構造が甚だ

嚴密、造句が頗る精警である。彼の文は初期白話文の最良の代表者である。然し乍ら彼の白話文は構造の方面に西洋文法の影響を受けてゐるが氣息は矢張り紅樓、水滸の嫡派である。後期の作家の内には、歐、美、日本文學に醉心するものが澤山現はれ、新文學の最も幸福な希望は外國文學からインスピレーションを求めることであると考へ而して思想の方面に西洋化を力めるばかりでなく、文章の構造、字の使ひ方、句の造り方までも有意無意に、日本西洋文學の影響を受けてしまつた。且つ彼らは皆な文學の中に力めて、個性の表現を求めてゐる。彼らは種々特殊の格調を鍛錬し、その良手の筆の下にあるものは婉曲にして達意、風韻も亦た清新、深く人造自然の美を得てゐる。彼らは大抵三十前後の人である。彼らが受けた文の毒は餘り深くはないが畢竟、既に纏足から解放された足である。彼らの背後には呶々と文言の束縛を殆んど受けない少年達が成長してゐる。白話文は彼らの手に至ると、始めて充分にその能事を發揮すること出來やう。(完)



支那の寄席

井上紅梅

一

江南に書場といふものがある。書場は日本の寄席に當る。設備は茶館の內部に講壇を設け廣間に多數の方桌を並べ、客は方桌の前に坐して茶を飲みながら聽く。

書場で行はるゝ藝事は讀みもの語りものに限られ、日本のような色物席はない。近頃上海では娛樂場が發達し大世界、新世界のような大建築物の中に凡ての興行物を寄せ集めてある。そこには芝居もある、書場もある、活動寫眞、手品、物眞似、手踊、輕業までもある。

支那の讀みもの語りものは地方に依て名目を異にし、讀みかたも語り口も言葉も發音も皆變つてゐる。例令ば北京の欒子、天津の太皷、揚州鎭江の六書、紹興の平調、蘇州の說書、上海の灘黄などである。その中で一番かたちの整つてゐるのは蘇州の說書である。

一たい蘇州語は支那ぢうで一番癖のないたいらな言葉である。此言葉を用ゐて、長い人情話をするのは非常に都合のいいことだらうと思はれる。それは感情を現はすときに上下に延びが利いて變化が多い。北京語は澄んではゐるが一本調子で一種懇切なるカン高い癖がある。廣東語は撥ねる音が盛んに這入つて尻を引く。その他の地方語は或は濁り或は角張り、歌としてみればそれ〴〵特徵があつて面白いが、讀みもの語りものを續けるには蘇州語が一番具合がいいようである。支那講談が蘇州で大成されたのも偶然でない。

說書の名の起りは宋史に「仁宗は太后の年老ゐたるにより、特に崇眞殿に說書官なるものを設け、古今の軼事を講演して太后を娛ましむ。後ち遂に例となり南宋に傳る」とあるが、これは今行はるゝ說書ではない。一種の宮中侍講である。だが此種の藝事は矢張り宋代から始まり、皷子詞と搊彈詞から出たように思はれる。鹽谷溫氏が南曲發達の經路を說かれた中に、唐の

元稹の會眞記を題材にして、宋の趙德麟が商調「蝶戀花詞」を編み鼓に合せて唱つたのが鼓子詞である。又金の董解元が同じく會眞記をタネにして「絃索西廂」を編み、琵琶に合せて唱つたものが廂彈詞で、北曲西廂記の基ゐをなし、明代に至つて更に南曲西廂記が大成された云々と

これは西廂記に就いて支那劇の發達振りを示されたものであるが、寄席の方も實に此會眞記のお蔭を蒙つてゐるのである。會眞記は格別面白いものでもないが、只崔鶯鶯の

待月西廂下、迎風戸半開、隔牆花影動、疑是玉人來、

の詩がいかにも美しい處女の優情を示してゐるので、後世の文人を刺戟し、幾度も同じ題材を以て面白い歌狂言が仕組まれたのである。說書の中にも西廂記はある。又說書の珍珠塔の中の翠娥と采蘋の主從關係は、西廂の鶯鶯と紅娘の關係によく似てゐる。これは燒きなほしではないが西廂の感化を受けることが多く、又支那の家庭の狀態が唐代も清代も格別變りがなく、あまりに貴族的な彼等の生活は、召使の意志に左右され易く、遂に主人は人形のようになつて仕舞つたのである。

二

鼓子詞は一名盲詞と言つて、盲人が人中へ出て鼓を叩いて唱つた大道藝である。これはいつ頃からそうなつたか知らないが、陸放翁の詩

斜陽古柳趙家莊、負鼓盲翁正作場、死後是非誰管得、滿村聽說蔡中郎、

がよく引合ひに出るところを見ると、宋時代には盛んに行はれてゐたのである。わたしは此詩を見ると今の算命先生（サンミンシイサン）を想ひ出す。算命先生は瞽の占內者で、子供に手を見かれながら蛇味線を脊負ひ、磬と撞木を片手に提げて、チーンチーンと擦り乍ら步く。若し占內を求める者があると、彼は先づ年齡をきいて干支を繰り、蛇味線に合せて身の上判斷を唱ふ。その歌が今の天津太鼓などに似てゐる。昔の盲詞は今の算命先生の歌に類似してゐるのではなからうか。

商調蝶戀花詞十二闋が語りもの丶前驅をなしてゐるのは、恰度小町お通の淨瑠璃姬十二段が、日本淨瑠璃の草分けをしてゐるのと一致してゐるように思はれて面白い。

今の鼓書は八旗の子弟が創作したもので一名子弟書といふ。文句は上品で聲は穩かである。東城調、西城調の二派に分れてゐる。西城調は尤もゆるく低く節廻しが長い。北京城內、旗人の得意とする者。瞽藝人の鼓書は聊か落ちる。北方の鼓書は南方の說書に當るものである。

といふ露南氏の説は、我が徳川時代に御家人が歌澤を案出したやうなもので、まことにさうありさうなことである。

鼓書の中で、天津太鼓(テンシンタイク)と梨花太鼓(リーホワタイク)は山東から出たものである。天津太鼓は平話が少し這入るが、それは歌を引出すための言葉でせりふではない。昔の鼓子詞の散序と同じものである。

天津太鼓の長い節は算命先生の歌によく似てゐるが、その短い節、殊に疊込んでゆくときには非常な早言である。それは單音語を一瀉千里で讀み飛ばし一分間何百語を唱ひつゞけるのだから、これほど意味の多い言葉を、これほど短時間に述べ立てるとは世界中類例のないことである。太鼓は直徑一尺二寸位のもので細いバチで叩く。同時に調板(チヨナバン)といふものを左手にかかげ、揺り當てて拍子を取る。調板は乾燥した二枚の木片である。

梨花太鼓は劉鶚氏の老殘遊記にある通り、清末山東地方といふ白妞といふ少女が工夫したもので、京劇の名家程長、庚張二奎、余三勝などの節を取入れ、それに南方の歌を加へて一種の新調を發明したのである。近頃上海でも非常にはやつてゐる。その唱ひ振りは京劇を逆にしたようなかたちで上から下へ抑へつける。なるほど天津太鼓よりも餘程艶ッぽくなつてゐる。梨花太鼓は調板の代りに梨花簡(リーホワカン)を用ゐ、太鼓と太棹の蛇味線で合せる。梨花簡は月形の鐵片二枚である。この鐵片は太鼓と調子を合せることは勿論であるが、アイアイ、アイアイ、アイアイ、アーーイと節を聽かせる時には單獨で振る。歌詞の內容は宣卷と同じように、或る故事の輪廓を述べたもので、文學的價値は甚低いやうに思はれる。以上は北方の語りものである。

三

灘黃(タンワン)は上海附近の田舍歌で五六人一座になり、胡弓、琵琶、笛、尺板、梆子などで囃し立て、歌のあひまあひまに男女老幼の説白が這入り、身振りや仕草などがあつて、先づ日本の法界屋に當るものである。歌詞は極めて猥褻なもので私通姦通を題材に取り、上海の土語を丸出しに使つてゐる。

だが灘黃の歌詞を味つてみると中々面白い處がある。それは古樂府の中にあるような數え歌の調子があり、又吹腔にあるような問答體の歌があり、又童謠などにある母が娘に教へる嫁入十訓といふようなものが仕組まれてある。問答體は歌の格調を聽かせるために、口から出任せの問答を長く續ける。これを見ると歌の文句などはどうでもいいのである。いろ〳〵の小唄を一つに集めて、一時間位語れる段物を作つたのである。

支那の七言詞は日本の七五調に當るもので、それに韻脚があるから極めて流暢なものである。上記の鼓書も灘黃もたいてい

七言詞から成立つてゐる。灘黄の內容は最近東京發行の日刊「支那事情」で紹介したから此處では省略する。只一言して置きたいのは近頃支那でも地方唄が流行し、上海灘黄の外に蘇州灘黄寧波孟黄、武林假裝劇などといふ芝居とも寄席ともつかないものが流行してゐる。又小唄の手踊が行はれてゐるが、どうも一定の振付けがないようで、滅茶苦茶に踊つてゐるようである。例令ば孟姜女(チャヤニュ)とか、四洲調(スーチュウテヲ)とか、打牙牌(ターヤーパイ)とかいふ簡單な歌を手拍子足拍子を取つて踊る。けれど極めてまづいもので、未だ踊といふほど目鼻がついてゐない。踊は京劇の中に立派なものがある。支那の踊は簡單ではあるが型が大きい。

鼓書も灘黄も聲を聽かせるのが重なる目的であるから、文句は寧ろ二の次ぎで規模が小さく、時に依ると隨分筋の通らない杜撰極まるものでも大に歡迎せられ、一篇一時間乃至數時間で畢る。ところが說書はこれと反對に話を聽かせるのが主意であるから、その讀みものは半月乃至一箇月に渡り、內容の擇擇に就ても充分注意し、言葉がハッキリして聲や節廻しが好く、そのうへ平仄までも正さなければならない。說書藝人が台本を寶物のように扱ふのは當然のことである。

四

說書は評話と彈詞の二種類に分かたれてゐる。一般には評話を說書といひ、彈詞を唱書といふ。

評話は日本の講談と同じで張り扇と木を用ゐ、軍記物、武勇傳、俠盜傳、神怪傳などを說く。

彈詞は日本の浪花節に相當するもので、歌が短く話は長い。恐らく瑯彈詞から變化したものであらう。これには單擋(タンタン)と雙擋(サンタン)とある。單擋は彈き語りで琵琶のみを用ゐ、雙擋は掛合ひで、一人琵琶を持ち一人蛇味線を持つ。琵琶も蛇味線も極めて音が小さく閨女の呼きのような可愛らしい聲を出す。聲柄は哀れになつかしく江南水鄉の軟かい趣きがある。琵琶は崩れのやうな場合には五指を悉く用ゐ旋轉して彈く。一方これに合せる蛇味線は段梯子を昇り降りしてゐるような調子である。

現在のような話がいつ頃から行はれたかといふに、鄉下人氏の說に據ると、明末柳敬亭が水滸傳の武松打店酒甕を說き四公子に依て稱導されたのが始まりで、清朝に入り乾隆年間高宗南巡の時、吳人黃周士が白蛇傳の御前彈唱をしてから、說書は蘇州人獨特の藝となつた。だが當時は流行の範圍も狹く、僅に嘉興、湖州、蘇州、松江、常熟、太倉の六七府に過ぎなかつた云々と。

此柳敬亭說は我が曲亭馬琴翁が愚民を敎化するため講談席に

現はれたのと甚だ類似してゐる。曲亭翁は何から何まで支那流儀にやつてのけた人であるから、恐らく柳敬亭の眞似をしたのかもしれない。それかあらぬか、日本の講談の口演振りは頗る支那臭いものである。わたしは嘗て金瓶梅と今古奇觀を譯してみたが、これを忠實に翻譯すると、日本の講談ソツクリの文體になつて仕舞ふ。例令ば「三姑六婆は姦盗の媒と申しまして第一はこれ〳〵第二はこれ〳〵」と一々婆の色分けをして餘談は措て措きと本文に入るところや、「聞かずにゐればそれまでだが、一旦聞いたからにはそのまゝにしては置かれない」といふ風な頓挫抑揚がくゝどく繰返へされる。又或る事件があると町内の人が途轍もない鬧をする。又或る偉い人が貧しい身裝りをして門前に來ると、門番などが頗る横柄に出る。ところが間もなくそれが解つて急に手の裏を返へす、いはゆる端敵の小人氣質を見せて笑はせる。此等の骨法が呆れ返るほど、支那と日本とよく似てゐる。以上の通り評話すなはち講談の方は日本と格別相違がないから、わたしは彈詞に就て重に述べようと思ふ。

五

彈詞の體裁は先づ初めに開篇といふものがあつて、琵琶、蛇味線に合せて唄ひ本文に入る。本文に入つても詞十字、開場賦、などといふものがあつて、それから初めて人物が出て來る。主要人物が出る前には必ず、引を以て簡單に現在の境遇を述べ、それから說白になる。說白は先づ姓名、來歴、目的などを自問自答し、やがて相手を喚び出す。喚び出された相手も亦引を以て簡單に形容された後ち說白に移る。かうして甲乙互に問答し、事件が進行するに從つて感情や形容は凡べて歌を以て現はし、說明は地の言葉を用ゐ、二人が三人になり、三人が四人になり、だん〳〵複雜になる。

說白は芝居と同じように立役、立おやま、實悪、端敵、ふけやく、ぬれごと師、子役などとそれ〳〵聲をつかひ分けるが、芝居ほど極端ではない。只いくらか匙加減がしてある位である。物の音はたいてい口眞似である。銅鑼の音など中々旨く眞似る。そうして一面の畢りはたいてい歌で結ぶ。その結び方は「何々の件はどうなりまするか、明日の前講で、詳しく申述べまする」と日本と同じである。

開篇は本文とは全く關係のない獨立した章句で、王昭君とか西施とかいふやうな古人の小傳を唱ふ。これは長くも三十句以上を越えてはならないのである。一時歌に重きを置いた時には、百句、二百句續けて唱つたことがある。本來開篇は歴史的遺物で、今は全く無用の添えものに過ぎないが、習慣としてこ

れを唱ひ、聲をならし樂器の小手調べをする。だが歴史上からいふと開篇は甚だ重要なものである。搊彈詞よりもモット前に白居易が聽いた潯陽江の琵琶歌は、恐らくかういふ類ゐのものであつたにちがひない。それが後世發達して搊彈詞といふ段物が出來、續いて平話を入れ、筋道を語り、説白を述べ、唱を以て景情を現はすようになつたのであらう。

讚十字は結婚などの時に述べる禮讚と同じようなもので、唱のような艶聲はないが一種の調子はある。これは十字づつに區切り、全篇の要領を述べる。例令ば「春何事ぞ春日遲し鳥啼き花開く」また「談詞は總べて名敎に關する此珍珠塔」また「先づ最初に蓋を開けると孝子慈親あり」また「姑母あり心腸薄し書生怒て走る」などである。

開場賦は六言、七言、五言といろ〳〵取り交ぜてあるが大抵對句になつてゐる。例令ば「四季晴陰轉瞬、百花開謝隋時、天公位置總無私、何必趨炎附勢、女子千金聲價、書生繡虎文詞」などである。かういふものは凡べて平仄を注意して讀む。

引は説白を引出す序で文章體ではあるが平話で讀む。例令ば「慈親に奉ず白髮の親、願くば寸草を以て長春に答へん」などである。其他表白、官白、私白などがある。

表白は地の言葉である。例令ば「偕て方鄕は陳府に參りますと、門前は馬くるまで押すな押すなの騷ぎ、門番は横柄に」の類である。

官白は立役、わき役、立女役、二枚目などの主要人物が眞面目になつた場合、暑さ寒さの挨拶、禮儀正しい應待、など皆官白である。これは中國共通の官話である。

私白は冗談、無駄口、交ぜ返へしの類で、必ず蘇州語を用ゆ。即ち主要人物が打ち解けた時、或は喧嘩口論した時、又端役の言葉は必ず私白である。例令ば

王本「おい皆の衆、一寸用事があるから此處へ」

雜役「來哉（レーツエ）、來哉（レーツエ）、阿爹（アァ）、何の御用で」

王本「明後日は殿の御誕生日に當るに依て、おの〳〵受け持ちを守り、廳堂の內外を整理し、なんどきお客様がお見えになつても、萬一の粗漏のないやうに申付ける」

雜役「委細承知しやした。何から何まで阿爹（アァ）のお指圖通りテキパキやつてのけます。そんならこれから早速取掛らうぢやねえか。おい、兄弟、どうだ」

雜役「ちげねえ、さうだとも」

右の內、王本の言葉は官白で、雜役の言葉は私白である。

次に彈詞の台本「珍珠塔」の內容を略叙しよう。珍珠塔は二十四回に別れ、毎回の初めに開篇が添えてあるところを見る

と、これは二十四日で讀切の本である。

六

方鄕は河南祥符縣の名門の生れで、祖父は、宰相、父は吏部尙書の顯官にあつた。彼が十九歳のとき父は惡人の民に繋つて殺され、財產を官に沒收された後で火事に遭つて家を失ひ、已むなく先祖の墓場の隅に引移つて來たが、もうあすにも困る身の上となつた。母は其時六十餘りの誥封一品夫人であるが、もうどうにも仕樣がないので、方鄕に對ひ

「本統に困つたね。ほかにしようがないから、襄陽の叔母さんの處へ行つて金を借りておいでなさい。旅費は黄州まではどうやらあるから、あすこへ行つて張通判に話をして、旅費を借りて襄陽へおいでなさい」

襄陽の叔母さんといふのは、方鄕の父の實妹で三十何年前に同地の陳家に片づいた人である。又黄州の張通判は父の門下生である。方鄕は母の仰せを受けて直ぐに黄州に向けて出發した。黄州へ着くと張通判はすでに九江へ轉任したあとで、方鄕はなかば失望しながら許習仙といふ占卜者に身の上判斷をして貰ふ。許習仙は、財運はないが女運はあるといふ。なんだ馬鹿々々しい、肉身の叔母が我れ〳〵おやこを棄てるものか、とムキになつて襄陽に向ふ。

叔母のつれあひは元都察院左都御史を勤めた陳璉といふ人で、今役目を引いて襄陽に閑居してゐる。かつて方鄕の父から教を受けたこともあり、又姻戚の關係上方家の沒落を心配し、人を出して彼等母子を引取らふと思ふ。ところが戰亂が初まつて便りをする機會がない。彼と夫人の間には翠娥といふ一人娘がある。それがもう妙齡になつてゐたので、陳璉は方家の恩義に酬ゆるため方鄕を迎へて婿にしようと思つてゐた。折ふし陳璉の五十の誕生日に當り、大勢の客を招いて酒宴を開き芝居を催したが、その中に若い男も隨分來てゐた。陳夫人は夫と丸切り反對の考を持つてゐた。自分の身内でありながら沒落した方家にはもう用がない。以前は里方の榮耀を鼻に掛け、ずゐぶんヒケらかしたものであるが、今はそんなことをオクビにも出さない。そうして金持の若い婿を撰み出さうとしてゐる。

方鄕は何百里といふみちのりを夜晝歩いてやうやく襄陽に着いた。見ると陳家の門前はうま車でゴタ〳〵してゐる。方鄕は構はず名刺を差出すと門番は彼の汚い姿を見て、てんで相手にしない。

陳家の執事王本はもと方家の家來で、陳夫人が此處に片附いて來たとき、供をして來た者であるが、それからずつとゐすわ

りになつてゐた。彼は方郷の幼な顔を覺えてゐたので門番をたしなめ、方郷の來訪を陳公に取次ぐ。陳公は喜んで會見し、目下の窮狀を聽取つた上、陳夫人に逢はせる。陳夫人は肉身の甥が來たので喜ぶと思きや、意外にも小六ツかしい理窟を並べ立てその姿は方家の恥辱、と一も二もなく追ひ返へさうとする。方郷は烈火の如く憤り、叔母とろんぱんして、結局陳家の厄介にならぬと言つて退く。夫人附添ひの腰元紅雲は、乞食のやうな方郷の姿と主人の口振りを見て、方郷を頭から馬鹿にしてかかり、運んで來た方郷の行李を花園の中途でおツぽり出す。

一方翠娥附添ひの腰元采蘋は、方家の若樣が來たときいて覗いて見ると、いかにも汚ない風體ではあるが、男らしい立派な人物と見込む。そうして陳夫人との問答を盜み聽き、慌てゝ此由を翠娥に知らせる。

翠娥は幼な心に方郷の母が優しくして吳れたことを覺えてゐて、日頃戀慕つてゐたが、今自分の母がそれに報ゆることを知らぬ薄情の仕方を見て胸痛く思ひ、花園の中で方郷を引止め、母の無禮を詫び、若干の旅費を贈らうとしたが方郷は受取らない。ではお饅頭ならいいでせう。みち／＼おなかのすひたとき、めしがあつて下さい　と一つのふくさ包を渡す。方郷は翠娥の眞心に感じ、やうやく怒をおさめてそれを受取つて立去る花園の門を出ようとする時、そこまで送つて來た采蘋は「わたしはお孃樣の腹心の女中です、采蘋といふ名をどうぞ覺えてゐて下さい」といふ。

方郷は城外九松亭まで來たとき空腹を感じふくさ包を解いて見ると、饅頭の下の方から珍珠塔が出る。これは大變と驚いたが、返へせば翠娥に迷惑が掛ると察してそのまゝ取り收める。そこへ陳璉は王本と共に馬を飛ばして馳付ける。方郷はテッキリ今のがバレたのだらうと思つて胸をどきつかせると、そうではなかつた。陳璉は夫人の仕方に不滿を抱き、方郷を引留めて立派な人物に仕立てたいと思ひ、その事を述べたが、方郷は叔母の態度が氣に食はないのでどうしても承知しない。そこで陳璉は娘を方郷に許す約束してぜひなく別れる。

翠娥が方郷に贈つた珍珠塔は彼女の母が陳璉と結婚するとき方郷の母が祝つて寄越したもので大層な値打ちものである。

七

方郷は陳公に別れて幾日か旅路を續け、黃州境まで來ると大雪になり、强盜に出遭つて珍珠塔を奪はれ、雪中に倒れて瀕死の狀態に陷る。

提督畢雲顯は母の病氣のため賜暇を乞ひ受け、故郷南昌さし

て歸る途中、雪崩れのうちに人の呻く聲が聞えたので、船をとどめて救ひ出して見ると、その人は父の恩師の孫で、且つ自分の恩師陳璉の婿であると知れ、手を盡していたわり南昌に連れゆく。

畢雲顯には高齢の老母と一人の若い妹がある。正月元宵の夜、母は方郷をかいまみ、其人物を見拔いて娘繡金の婿にしたいと望む。雲顯は方郷に勸めて名を方正と改めさせ、彼のために江西監生の株を買ふ。又河南には使を出して三百兩の金を方郷の母に贈る。かういふ恩義が重なるので方郷は此縁談を無下にも斷り兼ね、途に三つの條件を持出す。其條件は、第一母の許しを得ること、第二陳翠娥と先約を濟したあとで畢家の令孃と結婚すること、第三高等試驗に及第したあとで天子の上意を得る事等で、畢老夫人はそれでもいいと喜んで、處の李太守を媒人に立てる。そこで方郷は急に旅仕度して北京に向ふ。

雲顯が河南に出した使は李進といふ者であつたが、途中金を紛失して申譯なく何處へか逐電して仕舞ふ。方郷はむろんこれを知らなかつた。

一方襄陽の陳家では陳公が翠娥を方郷に許したときいて夫人は腹を立て女の兒は女親に權利があると主張し夫婦喧嘩を初め、部屋の道具をぶちこわして尼寺に入る。翠娥は心配して母を迎へにゆくと、別居するなら歸つてもいいといふ。陳公も別居を承知したので夫人は家に歸り西院に住む。陳公はそれから前廳に出たきり奥へはゆかない。だから內の者は外邊老爺（ワイベンラオイエ）と彼を呼ぶ。そのうちお正月になり、夫人五十の誕生日が近づいたので、翠娥は何とかして父母の仲を調停したいと思ひ、新年のお禮にかこつけ、父母を一席に集めて機嫌を取るが、ふと方郷の話が出て、又も大喧嘩となり、老殺才、老不賢と互につかみ合ひ、翠娥と王本は双方を引留めて、夫人は持佛堂に入り、陳公は書齋に引込む。そのうち春になつた。

陳璉の投資してゐた質屋に或日醉拂が現はれ、身分不相應の品物を持出して質に取つて呉れといふ。番頭は出所を疑つて斷る。醉拂は暴れ出す。陳璉はその品物を取寄せてみると、我が家の重寶珍珠塔なのに驚き、娘に訊き糺すと方郷に贈つたことが知れ、同時に彼の身の上が案ぜられ、醉拂を其筋へ突出す。此奴は邱六喬といふ黃州切ての兇盜で、方郷から品物を奪つたことは自白したが、彼を殺した覺えはないといふ。だが强盜などの言ふことは信ぜられないので、王本を河南に遣はして方郷の安否をたづねる。

翠娥は方郷が死んだものとばかり思ひ込み、それから食事も進まず、うつらうつらする。又父母が始終喧嘩するので心勞の

あまりどつと床につく、今にも息を引取りさうになつた時、王本が歸つて來て、河南には若旦那はおろか、老夫人の姿も見えないといふ。そんな事を今娘に聞かせたら大變、と陳璉は心配する。そこで一策を案じ、方郷の僞書を作つて翠娥の枕邊で讀み上げる翠娥はこれを聞いてやうやく安心し、病氣もだん〳〵よくなる。

八

河南に殘つた方郷の母は水粥に露命をつないで、方郷の歸りを待ち詫びてゐたが、いつまで經つても便りがないので遂に意を決して襄陽に向ふ。途中旅費盡き乞食をしながら九松亭に着く。折柄重罪犯人の死刑が行はれ、町ではいろ〳〵の噂がある。よく聽くとそれは方郷の身の上にかかわることで、賊は彼の財物を奪つた上、彼を殺害したものと認められてゐる。此話を聽いた老夫人は全く手賴りの綱が切れ果てゝ失望のあまり附近の河に投身を圖る。折よく白蓮庵の靜芳尼が通り掛り老夫人を助けて連れ歸る。尼達は概して迷惑がつたが、中には善良な尼もあつて、近々陳家の令孃がお禮參りをするので人手が足りないから此婆さんを使つてやらうといふ。そこで老夫人は白蓮庵の厄介になる。翠娥は觀音菩薩の命日を參詣の日と定め、前から其旨を尼寺に通じて置いたので、尼達は無禮の無きよう懇々老夫人に申含める。偖て當日翠娥は白蓮庵に來てみると、品のいいお婆さんが、ひどいみなりをしておづ〳〵働いてゐたが、忽ち翠娥の顏を見て涙をこぼす。翠娥は不審に思つて身許を訊き糺すと河南と答へる。そこで人無き處へ連れゆき、祥符縣の方家の模樣をたづねてみると、老婆は悲しさに胸せまり俄に物が言へない。やうやくボツリボツリと語り初め、遠廻しに方郷の母である事を匂はせ、やがて翠娥の生年月日や翠娥の胸にある赤痣のことまで語り出した時、翠娥は驚いて跪き、無禮を詑びた上、すぐに轎を呼んで家に歸り父に知らせる。

靜芳尼は陳令孃が急に寺を去つたので、何か機嫌を損じたものと思ひ込み、慌てゝ陳家に馳付けていひわけすると、令孃は笑つて、お前の處にゐる汚ないお婆さんは、わたしの姑で誥封一品夫人だといふ。そうして救命のお禮として銀十兩を出し、なほ當分尼寺に置いて貰いたいと賴みその禮は別に出すといふ。靜芳尼は腰を拔かさんばかりに驚き、むやみにお辭儀をしてすぐに尼寺に取つてかへし、老夫人をいたはり、いい部屋に移す。翠娥は王本に吩咐けて米と着物を老夫人に贈り、又釆蘋を毎日通はせて身の廻りの世話をさせ、自分もたびたび顏を出して慰める。

或時白蓮庵に提督衙門の令孃が來たので釆蘋は佛壇の裏から覗いてみると、令孃は佛の前に立つて線香を上げ、先づ第一に母張氏の無病息災を祈り、續いてもう一本の線香を立てた時、令孃は「河」と言つて口籠つた。釆蘋は「河」といふ字が氣になつてじつと聽いてゐると令孃はあたりを見廻し「河南開封府祥符縣、方門の婦、楊門の女、誥封一品太夫人の身の上に恙なかれ」と祈つた。それは誰れあらう、此處にゐる方鄕の母のことなので、驚いて前に進み出てそのわけを糺すと、令孃は畢提督の妹繡金といふ者で、すでに方鄕と婚約し、今度兄が襄陽詰めとなつたので母と共に此處に來てゐることが知れた。そこで繡金を老夫人に引合はせる。老夫人は方鄕の背約を怒つたが事情をきいてみれば、救命の大恩があるので如何ともしやうがない。只翠娥の思惑を氣遣つたが、兎に角方鄕の所在が知れたので大に喜んだ。

九

方卿は北京に行つて試驗を受け、第一等の成績で狀元に及第した。けれど籍は江西、名に方正となつてゐたので陳家では此事を知らなかつた。當時年貢米の取立に情實が多かつたので新狀元の彼は七省盤査監察御史に任ぜられ、嚴重の取締をなすべく命ぜられた。方卿は陳畢兩家と緣組のことを上奏すると、先づ襄陽に行つて同日兩家と結婚せよと有難き御沙汰があつた。そこで彼は大勢の供人を引連れ官船に乘つて襄陽に向つた。襄陽に着く一日前に彼は官職の旗や、お上みの威嚴を示す凡べての道具を取りおさめ、民船のような體裁を作つた。そうして彼自身も官服を脫ぎ、道士姿に身を窶し木魚を手に持つた。これは地方の役人に不意打ちを食はせる積りであるが、一つは又翠娥孃の心を試みす積りであつた。次の日方卿は陳家の裏門から花園に入り、釆蘋を呼び出して陳公夫妻に面會を求めた。彼は何處までも道士の風を裝つてゐたので叔母のきげんは益々惡かつた。彼はからかひづらで叔母の前で木魚を叩き、道歌を唱つて蘇秦の嫂とあてつけた。陳公は昔のように方卿を憐み、花園の一室に彼を迎へ入れ翠娥を喚び出した。その時畢提督が來訪したので陳公は席をはづして前廳に行つた。

翠娥は顏をあからめて何事も言はなかつたが、釆蘋は方卿の背約を諷したので、彼女がどうしてこんなことを知つてゐるのだらうと內々驚いた。その席には王本も來てゐた王本は翠娥の病氣で河南に行つてみると、老夫人はそこにゐなかつたことを告げて方卿を驚かしたが、結局襄陽に來てゐることを打ち開けた。そこで方卿も試驗に及第したことを打ちあけ、監察御史の官

印などを見せて一家大喜びとなつた。方卿はすぐに王本の案内で尼寺に行き母に逢ふ。陳家の召使と尼寺の尼達は乞食道士が七省盤査監察御史の榮職にあるので喫驚した。畢提督が陳公を訪ねたのは妹の結婚の件であつたが、陳公はそこで初めて方卿の出世を知り大に驚いた、間もなく老夫人は方卿と一緒に陳家へ來て、翠娥に逢つて方卿の重婚を謝し、陳夫人に逢つて方卿の無禮を詫び入れた上、陳夫妻の和解に盡力し、その晩無理に老夫婦を一つ部屋に押込む。ここで陳夫人が拗ねたり、陳公が年にも似合はず羞しがつたり滑稽な場面がある。

やがて老夫人は方卿のために吉日を擇み、陳畢兩家と同時に縁組する。婚禮の裝飾は凡てが二組づゝ揃つてゐるので頗る奇觀をなした。酒宴と芝居は二更頃まで續いて客は散じた。方卿は先づ東院にゆくと翠娥は金繡に讓り、西院にゆくと金繡は翠娥に讓り、庭内を幾度も行つたり來たりして狀元になるよりも婿さんになる方六つかしいとかこつ。結局其晩は翠娥と同衾し、翌晩は金繡と同衾する又金繡のはからいで采蘋を妾に入れ、老夫人の世話をさせる。方卿はむかし采蘋の言つた事を覺えてゐる。「わたしは孃樣の腹心の女中です、どうぞ采蘋といふ名を覺えてゐて下さい」彼は此言葉をしよつちう忘れなかつた。そうして今も昔も彼女の義俠心に感服する。老夫人は旅行中の辛苦が原因となつて胃弱に惱つてゐたが、采蘋は身を粉にして介抱する。醫療に手を盡したが更に利き目がないので白蓮庵に七重の塔を建立したい希望を述べる。方卿は見積を立てゝみると建築材料二萬五千兩、工費一萬兩合計三萬五千兩の金が要る。此内二萬二千兩は内輪の者で集まつたが、あと一萬兩不足し、恰度工事費だけ足りない勘定である。靜芳尼は其不足高を公募すると言つてゐたが急場の間に合ない。そのうち老夫人の病氣はます／＼重くなつた。そこで珍珠塔を賞に懸け名醫を募る。

或日一人の道士が突然訪ねて來た。見ると黄州の許智仙である。彼は懸賞の珍珠塔を申受け、一粒の金丹を授け、二月十九日觀音菩薩の命日に、白蓮庵内に七重の塔がおのづから建立されると豫言して去つた。

老夫人は一粒の金丹を服むと、身體が輕くなつて病氣は忽ち拭ふがごとくに癒えた。すると二月十八日に大雷雨があつた。翌朝雨晴れて白蓮庵の境内に金碧燦爛たる七重の塔が聳ゑ立つた。靜芳尼は驚いて此事を陳家に知らせる。皆々夢ではないかと呆れたが昔愚公が山を移し女媧が五色の石を煉つた例があるから不思議なことではないと思ふ。方卿は母の病氣のため、許可を得て出發を延期してゐたが、是に至つて賜暇の期限も切れたので匆々船を出し任務に就いた。そのとき三人の妻妾は皆孕んで

ゐた。又五十一歳の陳夫人も陳公の胤を宿してゐた。翌年の正月元宵節に先づ陳夫人が男の子を生み落し瑞生となづけた。次いて三月三日翠娥嬢さんが分娩し、四月十五日采蘋姐さんが分娩し、又五月五日金蓮嬢さんがお節句の雄黄酒を飲み畢るとすぐ分娩した。端午節の子供は好くないといふが、玉管君や天竺の阿羅漢のためしもあるから、そんな心配は無用である。以上は皆男の子で長男を茂典　次男を茂官、三男を茂蘭となづけた。

畢雲顯夫人も同じ年に女を分娩した。方郷はその後工部侍郎に榮進し、畢雲顯は河南巡撫に轉し、二人は協力して水災を防いだ。兩家は後ちに襄陽に築り　子女を結び合せて、二重にも三重にも縁を繋き、ます〳〵親密の度を増した。方郷は三十になるやならずで五男二女を得た。老夫人は孫の守やお參りをして日を暮し、薬が利いていつまでも長生きした。王本の倅小榮は贖金の女中玉琴を娶り桐油雜貨店を開いて五六千兩の身代をこさえた。紅雲も亦嫁に行つたが夫がぶをとこで喧嘩ばかりしてゐた。そうして姑と夫をいびり殺し、喜んで再嫁しようとした時、俄に悪性の吹出物を發し全身うみ爛れた。采蘋はこれを哀れに思ひ、靜芳尼に頼んで紅雲を白蓮庵に入れ、毎月若干の仕送りをした。境内の珍珠塔はます〳〵光り輝きお賽錢がどつさり上るので尼達は陳家の德を感じた。

（をわり）

嚴密、造句が頗る精警である。彼の文は初期白話文の最良の代表者である。然し乍ら彼の白話文は構造の方面に西洋文法の影響を受けてゐるが氣息は矢張り紅樓、水滸の嫡派である。後期の作家の内には、歐、美、日本文學に醉心するものが澤山現はれ、新文學の最も幸福な希望は外國文學からインスピレーションを求めることであると考へ而して思想の方面に西洋化を力めるばかりでなく、文章の構造、字の使ひ方、句の造り方までも有意無意に、日本西洋文學の影響を受けてしまつた。且つ彼らは皆な文學の中に力めて、個性の表現を求めてゐる。彼らは種々特殊の格調を鍛錬し、その良手の筆の下にあるものは婉曲にして達意、風韻も亦た清新、深く人造自然の美を得てゐる。彼らは大抵三十前後の人である。彼らが受けた文の毒は餘り深くはないが畢竟、既に纏足から解放された足である。彼らの背後には岐々と文言の束縛を殆んど受けない少年達が成長してゐる。白話文は彼らの手に至ると、始めて充分にその能事を發揮すること出來やう。(完)



支那の寄席

井上紅梅

一

江南に書場といふものがある。書場は日本の寄席に當る。設備は茶館の内部に講壇を設け廣間に多數の方桌を並べ、客は方桌の前に坐して茶を飲みながら聽く。

書場で行はるゝ藝事は讀みもの語りものに限られ、日本のような色物席はない。近頃上海では娯樂場が發達し大世界、新世界のような大建築物の中に凡ての興行物を寄せ集めてある。そこには芝居もある、書場もある、活動寫眞、手品、物眞似、手踊、輕業までもある。

支那の讀みもの語りものは地方に依て名目を異にし、讀みかたも語り口も言葉も發音も皆變つてゐる。例令ば北京の樂子(ローツ)、天津の太皷(タイク)、揚州鎭江の六書(ロッシュー)、紹興の平調(ピンチョウ)、蘇州の說書(セーシュウ)、上海の灘黄(タンワン)などである。その中で一番かたちの整つてゐるのは蘇州の說書である。

一たい蘇州語は支那ちうで一番癖のないたいらな言葉である。此言葉を用ゐて、長い人情話をするのは非常に都合のいいことだらうと思はれる。それは感情を現はすときに上下に延びが利いて變化が多い。北京語は澄んではゐるが一本調子で一種懇切なるカン高い癖がある。廣東語は撥ねる音が盛んに這入つて尻を引く。その他の地方語は或は濁り或は角張り、歌としてみればそれ〴〵特徴があつて面白いが、讀みもの語りものを續けるには蘇州語が一番具合がいいようである。支那講談が蘇州で大成されたのも偶然でない。

說書の名の起りは宋史に「仁宗は太后の年老ゐたるにより、特に崇眞殿に說書官なるものを設け、古今の軼事を講演して太后を娯ましむ。後ち遂に例となり南宋に傳る」とあるが、これは今行はるゝ說書ではない。一種の宮中侍講である。だが此種の藝事は矢張り宋代から始まり、皷子詞と搊彈詞から出たように思はれる。鹽谷溫氏が南曲發達の經路を說かれた中に、唐の

元稹の會眞記を題材にして、宋の趙德麟が商調「蝶戀花詞」を編み鼓に合せて唱つたのが鼓子詞である。又金の董解元が同じく會眞記をタネにして「絃索西廂」を編み、琵琶に合せて唱つたものが搊彈詞で、北曲西廂記の基ゐをなし、明代に至つて更に南曲西廂記が大成された云々と

これは西廂記に就いて支那劇の發達振りを示されたものであるが、寄席の方も實に此會眞記のお蔭を蒙つてゐるのである。會眞記は格別面白いものでもないが、只崔鶯鶯の

待月西廂下、迎風戸半開、隔牆花影動、疑是玉人來、

の詩がいかにも美しい處女の優情を示してゐるので、後世の文人を刺戟し、幾度も同じ題材を以て面白い歌狂言が仕組まれたのである。說書の中にも西廂記はある。又說書の珍珠塔の中の翠娥と采蘋の主從關係は、西廂の鶯鶯と紅娘の關係によく似てゐる。これは燒きなほしではないが西廂の感化を受けることが多く、又支那の家庭の狀態が唐代も淸代も格別變りがなく、あまりに貴族的な彼等の生活は、召使の意志に左右され易く、遂に主人は人形のようになつて仕舞つたのである。

二

鼓子詞は一名盲詞と言つて、盲人が人中へ出て鼓を叩いて唱つた大道藝である。これはいつ頃からそうなつたか知らないが、陸放翁の詩

斜陽古柳趙家莊、負鼓盲翁正作場、死後是非誰管得、滿村聽說蔡中郎、

がよく引合ひに出るところを見ると、宋時代には盛んに行はれてゐたのである。わたしは此詩を見ると今の算命先生(サンミンシイサン)を想ひ出す。算命先生は瞽の占內者で、子供に手を曳かれながら蛇味線を背負ひ、磬と撞木を片手に提げて、チーンチーンと擦り乍ら步く。若し占內を求める者があると、彼は先づ年齡をきいて干支を繰り、蛇味線に合せて身の上判斷を唱ふ。その歌が今の天津太鼓などに似てゐる。昔の盲詞は今の算命先生の歌に類似してゐるのではなからうか。

商調蝶戀花詞十二闋が語りもの〻前驅をなしてゐるのは、恰度小町お通の淨瑠璃姬十二段が、日本淨瑠璃の草分けをしてゐるのと一致してゐるように思はれて面白い。

今の鼓書は八旗の子弟が創作したもので一名子弟書といふ。文句は上品で聲は穩かである。東城調、西城調の二派に分れてゐる。西城調は尤もゆるく低く節廻しが長い。北京城內、旗人の得意とする者。瞽藝人の鼓書は聊か落ちる。北方の鼓書は南方の說書に當るものである。

といふ繁南氏の說は、我が徳川時代に御家人が歌澤を案出したやうなもので、まことにさうありさうなことである。

鼓書の中で、天津太鼓（テンシンタイコ）と梨花太鼓（リーホワタイコ）は山東から出たものである。天津太鼓は平話が少し這入るが、それは歌を引出すための言葉でせりふではない。昔の鼓子詞の散序と同じものである。

天津太鼓の長い節は算命先生の歌によく似てゐるが、その短い節、殊に疊込んでゆくときには非常な早言である。それは單音語を一瀉千里で讀み飛ばし一分間何百語を唱ひつゞけるのだから、これほど意味の多い言葉を、これほど短時間に述べ立てるとは世界中類例のないことである。太鼓は直徑一尺二寸位のもので細いバチで叩く。同時に調板（チョウバン）といふものを左手にかかげ、振り當てて拍子を取る。調板は乾燥した二枚の木片である。

梨花太鼓は劉鶚氏の老殘遊記にある通り、清末山東地方といふ白妞といふ少女が工夫したもので、京劇の名家程長、庚張二奎、余三勝などの節を取入れ、それに南方の歌を加へて一種の新調を發明したのである。近頃上海でも非常にはやつてゐる。その唱ひ振りは京劇を逆にしたようなかたちで上から下へ抑へつける。なるほど天津太鼓よりも餘程艶ッぽくなつてゐる。梨花太鼓は調板の代りに梨花簡（リーホワカン）を用る、太鼓と太棹の蛇味線で合せる。梨花簡は月形の鐵片二枚である。この鐵片は太鼓と調子を合せることは勿論であるが、アイアイ、アイアイ、アイアイ、アーーイと節を聴かせる時には單獨で振る。歌詞の内容は宣卷と同じように、或る故事の輪廓を述べたもので、文學的價値は甚低いやうに思はれる。以上は北方の語りものである。

三

灘黄（タンワン）は上海附近の田舍歌で五六人一座になり、胡弓、琵琶、笛、尺板、拂子などで囃し立て、歌のあひまあひまに男女老幼の說白が這入り、身振りや仕草などがあつて、先づ日本の法界屋に當るものである。歌詞は極めて猥褻なもので私通姦通を題材に取り、上海の土語を丸出しに使つてゐる。

だが灘黄の歌詞を味つてみると中々面白い處がある。それは古樂府の中にあるような數え歌の調子があり、又吹腔にあるような問答體の歌があり、又童謡などにある母が娘に教へる嫁入十訓といふようなものが仕組まれてある。問答體は歌の格調を聴かせるために、口から出任せの問答を長く續ける。これを見ると歌の文句などはどうでもいいのである。いろ／＼の小唄を一つに集めて、一時間位語れる段物を作つたのである。

支那の七言詞は日本の七五調に當るもので、それに韻脚があるから極めて流暢なものである。上記の鼓書も灘黄もたいてい

元微之の會眞記を題材にして、宋の趙德麟が商調「蝶戀花詞」を編み鼓に合せて唱つたのが鼓子詞である。又金の董解元が同じく會眞記をタネにして「絃索西廂」を編み、琵琶に合せて唱つたものが廂彈詞で、北曲西廂記の基ゐをなし、明代に至つて更に南曲西廂記が大成された云々と

これは西廂記に就いて支那劇の發達振りを示されたものであるが、寄席の方も實に此會眞記のお蔭を蒙つてゐるのである。會眞記は格別面白いものでもないが、只崔鶯鶯の

待月西廂下、迎風戸半開、隔牆花影動、疑是玉人來、

の詩がいかにも美しい處女の優情を示してゐるので、後世の文人を刺戟し、幾度も同じ題材を以て面白い歌狂言が仕組まれたのである。說書の中にも西廂記はある。又說書の珍珠塔の中の翠娥と采蘋の主從關係は、西廂の鶯鶯と紅娘の關係によく似てゐる。これは燒きなほしではないが西廂の感化を受けることが多く、又支那の家庭の狀態が唐代も淸代も格別變りがなく、あまりに貴族的な彼等の生活は、召使の意志に左右され易く、遂に主人は人形のようになつて仕舞つたのである。

二

鼓子詞は一名盲詞と言つて、盲人が人中へ出て鼓を叩いて唱つた大道藝である。これはいつ頃からそうなつたか知らないが、陸放翁の詩

斜陽古柳趙家莊、負鼓盲翁正作場、死後是非誰管得、滿村聽說蔡中郎、

がよく引合ひに出るところを見ると、宋時代には盛んに行はれてゐたのである。わたしは此詩を見ると今の算命先生（サンミンシイサン）を想ひ出す。算命先生は瞽の占内者で、子供に手を曳かれながら蛇味線を脊負ひ、磬と撞木を片手に提げて、チーンチーンと擂り乍ら步く。若し占内を求める者があると、彼は先づ年齡をきいて干支を繰り、蛇味線に合せて身の上判斷を唱ふ。その歌が今の天津太鼓などに似てゐる。昔の盲詞は今の算命先生の歌に類似してゐるのではなからうか。

商調蝶戀花詞十二闋が語りもの丶前驅をなしてゐるのは、恰度小町お通の淨瑠璃姬十二段が、日本淨瑠璃の草分けをしてゐるのと一致してゐるように思はれて面白い。

今の鼓書は八旗の子弟が創作したもので一名子弟書といふ。文句は上品で聲は穩かである。東城調、西城調の二派に分れてゐる。西城調は尤もゆるく低く節廻しが長い。北京城內、旗人の得意とする者。瞽藝人の鼓書は聊か落ちる。北方の鼓書は南方の說書に當るものである。

といふ靈南氏の說は、我が德川時代に御家人が歌澤を案出したやうなもので、まことにさうありさうなことである。

鼓書の中で、天津太鼓（テンシンダイコ）と梨花太鼓（リーホワダイコ）は山東から出たものである。天津太鼓は平話が少し這入るが、それは歌を引出すための言葉でせりふではない。昔の鼓子詞の散序と同じものである。

天津太鼓の長い節は算命先生の歌によく似てゐるが、その短い節、殊に疊込んでゆくときには非常な早言である。それは單音語を一瀉千里で讀み飛ばし一分間何百語を唱ひつゞけるのだから、これほど意味の多い言葉を、これほど短時間に述べ立てるとは世界中類例のないとである。太鼓は直徑一尺二寸位のもので細いバチで叩く。同時に調板（チョウバン）といふものを左手にかかげ、振り當てて拍子を取る。調板は乾燥した二枚の木片である。

梨花太鼓は劉鶚氏の老殘遊記にある通り、清末山東地方といふ白妞といふ少女が工夫したもので、京劇の名家程長、庚張二奎、余三勝などの節を取入れ、それに南方の歌を加へて一種の新調を發明したのである。近頃上海でも非常にはやつてゐる。その唱ひ振りは京劇を逆にしたようなかたちで上から下へ抑へつける。なるほど天津太鼓よりも餘程艶ッぽくなつてゐる。梨花太鼓は調板の代りに梨花簡（リーホワカン）を用ゐ、太鼓と太棹の蛇味線で合せる。梨花簡は月形の鐵片二枚である。この鐵片は太鼓と調子を合せることとは勿論であるが、アイアイ、アイアイ、アイアイ、アーーイと節を聽かせる時には單獨で振る。歌詞の内容は宣卷と同じように、或る故事の輪廓を述べたもので、文學的價値は甚低いやうに思はれる。以上は北方の語りものである。

三

灘黃（タンワン）は上海附近の田舍歌で五六人一座になり、胡弓、琵琶、笛、尺板、梆子などで囃し立て、歌のあひまあひまに男女老幼の說白が這入り、身振りや仕草などがあつて、先づ日本の法界屋に當るものである。歌詞は極めて猥褻なもので私通姦通を題材に取り、上海の土語を丸出しに使つてゐる。

だが灘黃の歌詞を味つてみると中々面白い處がある。それは古樂府の中にあるような數え歌の調子があり、又吹腔にあるような問答體の歌があり、又童謠などにある母が娘に教へる嫁入十訓といふようなものが仕組まれてある。問答體は歌の格調を聽かせるために、口から出任せの問答を長く續ける。これを見ると歌の文句などはどうでもいいのである。いろ〳〵の小唄を一つに集めて、一時間位語れる段物を作つたのである。

支那の七言詞は日本の七五調に當るもので、それに韻脚があるから極めて流暢なものである。上記の鼓詞も灘黃もたいてい

七言詞から成立つてゐる。灘黄の内容は最近東京發行の日刊「支那事情」で紹介したから此處では省略する。只一言して置きたいのは近頃支那でも地方唄が流行し、上海灘黄の外に蘇州灘黄寧波灘黄、武林假裝劇などといふ芝居とも寄席ともつかないものが流行してゐる。又小唄の手踊が行はれてゐるが、どうも一定の振付けがないようで、滅茶苦茶に踊つてゐるようである。例令ば孟姜女とか、四洲調とか、打牙牌とかいふ簡單な歌を手拍子足拍子を取つて踊る。けれど極めてまづいもので、未だ踊といふほど目鼻がついてゐない。踊は京劇の中に立派なものがある。支那の踊は簡單ではあるが型が大きい。

鼓書も灘黄も聲を聽かせるのが重なる目的であるから、文句は寧ろ二の次ぎで規模が小さく、時に依ると隨分筋の通らない杜撰極まるものでも大に歡迎せられ、一篇一時間乃至數時間で畢る。ところが説書はこれと反對に話を聽かせるのが主意であるから、その讀みものは半月乃至一箇月に渡り、内容の撰擇に就ても充分注意し、言葉がハッキリして聲や節廻しが好く、そのうへ平仄までも正さなければならない。説書藝人が台本を寶物のように扱ふのは當然のことである。

四

説書は評話と彈詞の二種類に分かたれてゐる。一般には評話を説書といひ、彈詞を唱書といふ。

評話は日本の講談と同じで張り扇と木を用ゐ、軍記物、武勇傳、俠盜傳、神怪傳などを説く。

彈詞は日本の浪花節に相當するもので、歌が短く話は長い。恐らく搊彈詞から變化したものであらう。これには單擋と雙擋とある。單擋は彈き語りで琵琶のみを用ゐ、雙擋は掛合ひで、一人琵琶を持ち一人蛇味線を持つ。琵琶も蛇味線も極めて背が小さく閨女の囁きのような可愛らしい聲を出す。聲柄は哀れになつかしく江南水鄉の軟かい趣きがある。琵琶は崩れのやうな場合には五指を悉く用ゐ旋轉して彈く。一方これに合せる蛇味線は段梯子を昇り降りしてゐるような調子である。

現在のような話がいつ頃から行はれたかといふに、鄉下人氏の説に據ると、明末柳敬亭が水滸傳の武松打店酒棄を説き四公子に依て稱導されたのが始まりで、清朝に入り乾隆年間高宗南巡の時、吳人黄周士が白蛇傳の御前彈唱をしてから、説書は蘇州人獨特の藝となつた。だが當時は流行の範圍も狹く、僅に嘉興、湖州、蘇州、松江、常熟、太倉の六七府に過ぎなかつた云々と。

此柳敬亭説は我が曲亭馬琴翁が愚民を教化するため講談席に

現はれたのと甚だ類似してゐる。曲亭翁は何から何まで支那流儀にやつてのけた人であるから、恐らく柳敬亭の眞似をしたのかもしれない。それかあらぬか、日本の講談の口演振りは頗る支那臭いものである。わたしは嘗て金瓶梅と今古奇觀を譯してみたが、これを忠實に翻譯すると、日本の講談ソツクリの文體になつて仕舞ふ。例令ば「三姑六婆は姦盗の媒と申しまして第一はこれ〳〵第二はこれ〳〵」と一々婆の色分けをして餘談は偖て措きと本文に入るところや「開かずにゐればそれまでだが、一旦開いたからにはそのまゝにしては置かれない」といふ風な頓挫抑揚がくど〳〵繰返へされる。又或る事件があると町内の人が途鐵もない噂をする。又或る偉い人が貧しい身裝りをして門前に來ると、門番などが頗る横柄に出る。ところが間もなくそれが解つて急に手の裏を返へす、いはゆる端敵の小人氣質を見せて笑はせる。此等の骨法が呆れ返るほど、支那と日本とよく似てゐる。以上の通り評話すなはち講談の方は日本と格別相違がないから、わたしは彈詞に就て更に述べようと思ふ。

五

彈詞の體裁は先づ初めに開篇といふものがあつて、琵琶、蛇味線に合せて唱ひ本文に入る。本文に入つても詩十字、開場賦、などといふものがあつて、それから初めて人物が出て來る。主要人物が出る前には必ず、引を以て簡單に現在の境遇を述べ、それから說白になる。說白は先づ姓名、來歷、目的などを自問自答し、やがて相手を喚び出す。喚び出された相手も亦引を以て簡單に形容された後ち說白に移る。かうして甲乙互に問答し、事件が進行するに從つて感情や形容は凡べて歌を以て現はし、說明は地の言葉を用ゐ、二人が三人になり、三人が四人になり、だん〳〵複雜になる。

說白は芝居と同じように立役、立おやま、實惡、端敵、ふけやく、ぬれごと師、子役などとそれ〳〵聲をつかひ分けるが、芝居ほど極端ではない。只いくらか此加減がしてある位である。物の音はたいてい口眞似である。銅鑼の音など中々旨く眞似る。そうして一面の畢りはたいてい歌で結ぶ。その結び方は「何々の件はどうなりまするか、明日の前講で、詳しく申述べまする」と日本と同じである。

開篇は本文とは全く關係のない獨立した章句で、王昭君とか西施とかいふやうな古人の小傳を唱ふ。これは長くも三十句以上を越えてはならないのである。一時歌に重きを置いた時には、百何、二百何續けて唱つたことがある。本來開篇は歴史的遺物で、今は全く無用の添えものに過ぎないが、習慣としてこ

れを唱ひ、響をならし樂器の小手調べをする。だが歴史上からいふと開篇は甚だ重要なものである。搊弾詞よりもモット前に白居易が聽いた潯陽江の琵琶歌は、恐らくかういふ類ゐのものであつたにちがひない。それが後世發達して搊弾詞といふ段物が出來、續いて平話を入れ、筋道を語り、說白を述べ、唱を以て景情を現はすようになつたのであらう。

讚十字は結婚などの時に述べる禮讚と同じようなもので、唱のような音聲はないが一種の調子はある。これは十字づつに區切り、全篇の要領を述べる。例令ば「春何事ぞ春日遲し鳥啼き花開く」また「談詞は總べて名教に關する此珍珠塔」また「先づ最初に蓋を開けると孝子慈親あり」また「姑母あり心腸薄し書生怒て走る」などである。

開場賦は六言、七言、五言といろ〳〵取り交ぜてあるが大抵對句になつてゐる。例令ば「四季晴陰轉瞬、百花開謝隨時、天公位置總無私、何必趨炎附勢、女子千金聲價、書生繡虎文詞」などである。かういふものは凡べて平仄を注意して讀む。

引は說白を引出す序で文章體ではあるが平話で讀む。例令ば「慈親に奉ず白髮の親、願くば寸草を以て長春に答へん」などである。其他表白、官白、私白などがある。

表白は地の言葉である。例令ば「慌て方郷は陳府に參りますと、門前は馬くるまで押すな押すなの騷ぎ、門番は横柄に」の類である。

官白は立役、わき役、立女役、二枚目などの主要人物が眞面目になつた場合、暑さ寒さの挨拶、禮儀正しい應待、など皆官白である。これは中國共通の官話である。

私白は冗談、無駄口、交ぜ返へしの類で、必ず蘇州語を用ゆ。即ち主要人物が打ち解けた時、或は喧嘩口論した時、又端役の言葉は必ず私白である。例令ば

王本「おい皆の衆、一寸用事があるから此處へ」

雜役「來哉（レーツエ）、來哉（レーツエ）、阿爹（アァ）、何の御用で」

王本「明後日は殿の御誕生日に當るに依て、おの〳〵受け持ちを守り、廳堂の內外を整理し、なんどきお客様がお見えになつても、萬一の粗漏のないやうに申付ける」

雜役「委細承知しやした。何から何まで阿爹（アテ）のお指圖通りテキパキやつてのけます。そんならこれから早速取掛らうぢやねえか。おい、兄弟、どうだ」

雜役「ちげねえ、さうだとも」

右の內、王本の言葉は官白で、雜役の言葉は私白である。

次に彈詞の台本「珍珠塔」の內容を略叙しよう、珍珠塔は二十四回に別れ、毎回の初めに開篇が添えてあるところを見る

と、これは二十四日で讀切の本である。

六

方鄕は河南祥符縣の名門の生れで、祖父は、宰相、父は吏部尙書の顯官にあつた。彼が十九歳のとき父は惡人の罠に繋つて殺され、財産を官に沒收された後で火事に遭つて家を失ひ、已むなく先祖の墓場の隅に引移つて來たが、もうあすにも困る身の上となつた。母は其時六十餘りの誥封一品夫人であるが、もうどうにも仕様がないので、方鄕に對ひ

「本統に困つたね。ほかにしようがないから、襄陽の叔母さんの處へ行つて金を借りておいでなさい。旅費は黃州まではどうやらあるから、あすこへ行つて張通判に話をして、旅費を借りて襄陽へおいでなさい」

襄陽の叔母さんといふのは、方鄕の父の實妹で三十何年前に同地の陳家に片づいた人である。又黃州の張通判は父の門下生である。方鄕は母の仰せを受けて直ぐに黃州に向けて出發した。黃州へ着くと張通判はすでに九江へ轉任したあとで、方鄕はなかば失望しながら許習仙といふ占内者に身の上判斷をして貰ふ。許習仙は、財運はないが女運はあるといふ。なんだ馬鹿々々しい、肉身の叔母が我れ〳〵おやこを棄てるものか、とムキになつて襄陽に向ふ。

叔母のつれあひは元都察院左都御史を勤めた陳璉といふ人で、今役目を引いて襄陽に閑居してゐる。かつて方鄕の父から教を受けたこともあり、又姻戚の關係上方家の沒落を心配し、人を出して彼等母子を引取らふと思ふ。ところが戰亂が初まつて便りをする機會がない。彼と夫人の間には翠娥といふ一人娘がある。それがもう妙齡になつてゐたので、陳璉は方家の恩義に酬ゆるため方鄕を迎へて婿にしようと思つてゐた。折ふし陳璉の五十の誕生日に當り、大勢の客を招いて酒宴を開き芝居を催したが、その中に若い男も隨分來てゐた。陳夫人は夫と丸切り反對の考を持つてゐた。自分の身內でありながら沒落した方家にはもう用がない。以前は里方の榮耀を鼻に掛け、ずゐぶんヒケらかしたものであるが、今はそんなことをオクビにも出さない。そうして金持の若い好い婿を撰み出さうとしてゐる。

方鄕は何百里といふみちのりを夜晝歩いてやうやく襄陽に着いた。見ると陳家の門前はうま車でゴタ〳〵してゐる。方鄕は構はず名刺を差出すと門番は彼の汚い姿を見て、てんで相手にしない。

陳家の執事王本はもと方家の家來で、陳夫人が此處に片附いて來たとき、供をして來た者であるが、それからずつとゐすわ

りになつてゐた。彼は方郷の幼な顔を覺えてゐたので門番をたしなめ、方郷の來訪を陳公に取次ぐ。陳公は喜んで會見し、目下の窮狀を聽取つた上、陳夫人に逢はせる。陳夫人は肉身の甥が來たので喜ぶと思きや、意外にも小六ッかしい理窟を並べ立てその姿は方家の恥辱、と一も二もなく追ひ返へさうとする。方郷は烈火の如く憤り、叔母とろんぱんして、結局陳家の厄介にならぬと言つて退く。夫人附添ひの腰元紅雲は、乞食のやうな方郷の姿と主人の口振りを見て、方郷を頭から馬鹿にしてかかり、運んで來た方郷の行李を花園の中途でおつぽり出す。

一方翠娥附添ひの腰元采蘋は、方家の若樣が來たときいて覗いて見ると、いかにも汚ない風體ではあるが、男らしい立派な人物と見込む。そうして陳夫人との問答を盗み聽き、慌てゝ此由を翠娥に知らせる。

翠娥は幼な心に方郷の母が優しくして吳れたことを覺えてゐて、日頃戀慕つてゐたが、今自分の母がそれに報ゆることを知らぬ薄情の仕方を見て胸痛く思ひ、花園の中で方郷を引止め、母の無禮を詫び、若干の旅費を贈らうとしたが方郷は受取らない。ではお饅頭ならいいでせう。みち〳〵おなかのすひたとき、めしがあつて下さい　と一つのふくさ包を渡す。方郷は翠娥の眞心に感じ、やうやく怒をおさめてそれを受取つて立去る花園の門を出ようとする時、そこまで送つて來た采蘋は「わたしはお孃樣の腹心の女中です、采蘋といふ名をどうぞ覺えてゐて下さい」といふ。

方郷は城外九松亭まで來たとき空腹を感じふくさ包を解いて見ると、饅頭の下の方から珍珠塔が出る。これは大變、と驚いたが、返へせば翠娥に迷惑が掛ると察してそのまゝ取り收める。そこへ陳璉は王本と共に馬を飛ばして馳付ける。方郷はテッキリ今のがバレたのだらうと思つて胸をどきつかせると、そうではなかつた。陳璉は夫人の仕方に不滿を抱き、方郷を引留めて立派な人物に仕立てたいと思ひ、その事を述べたが、方郷は叔母の態度が氣に食はないのでどうしても承知しない。そこで陳璉は娘を方郷に許す約束してぜひなく別れる。

翠娥が方郷に贈つた珍珠塔は彼女の母が陳璉と結婚するとき方郷の母が祝つて寄越したもので大層な値打ちものである。

七

方郷は陳公に別れて幾日か旅路を續け、黃州境まで來ると大雪になり、强盗に出遭つて珍珠塔を奪はれ、雪中に倒れて瀕死の狀態に陷る。

提督畢雲顯は母の病氣のため賜暇を乞ひ受け、故郷南昌さし

て歸る途中、雪崩れのうちに人の呻く聲が聞えたので、船をとどめて救ひ出して見ると、その人は父の恩師の孫で、且つ自分の恩師陳璉の婿であると知れ、手を盡していたわり南昌に連れゆく。

畢雲顯には高齢の老母と一人の若い妹がある。正月元宵の夜、母は方郷をかいまみ、其人物を見拔いて娘繍金の婿にしたいと望む。雲顯は方郷に勸めて名を方正と改めさせ、彼のために江西監生の株を買ふ。又河南には使を出して三百兩の金を方郷の母に贈る。かういふ恩義が重なるので方郷は此縁談を無下にも斷り兼ね、遂に三つの條件を持出す。其條件は、第一母の許しを得ること、第二陳翠娥と先約を濟したあとで畢家の令孃と結婚すること、第三高等試驗に及第したあとで天子の上意を得る事等で、畢老夫人はそれでもいいと喜んで、處の李太守を媒人に立てる。そこで方郷は急に旅仕度して北京に向ふ。

雲顯が河南に出した使よ李進といふ者であつたが、途中金を紛失して申譯なく何處へか逐電して仕舞ふ。方郷はむろんこれを知らなかつた。

一方襄陽の陳家では陳公が翠娥を方郷に許したときいて夫人は腹を立て女の兒は女親に權利があると主張し夫婦喧嘩を初め、部屋の道具をぶちこわして尼寺に入る。翠娥は心配して母を迎へにゆくと、別居するなら歸ってもいいといふ。陳公も別居を承知したので夫人は家に歸り西院に住む。陳公はそれから前廳に出たきり奥へはゆかない。だから內の者は外邊老爺（ワイベンラオイエ）と彼を呼ぶ。そのうちお正月になり、夫人五十の誕生日が近づいたので、翠娥は何とかして父母の仲を調停したいと思ひ、新年のお禮にかこつけ、父母を一席に集めて機嫌を取るが、ふと方郷の話が出て、又も大喧嘩となり、老殺才、老不賢と互につかみ合ひ、翠娥と王本は双方を引留めて、夫人は持佛堂に入り、陳公は書齋に引込む。そのうち春になつた。

陳璉の投資してゐた質屋に或日醉拂が現はれ、身分不相應の品物を持出して質に取つて呉れといふ。番頭は出所を疑つて斷る。醉拂は暴れ出す。陳璉はその品物を取寄せてみると、我が家の重寶珍珠塔なのに驚き、娘に訊き糺すと方郷に贈つたことが知れ、同時に彼の身の上が案ぜられ、醉拂を其筋へ突出す。此奴は邱六喬といふ黄州切ての兇盗で、方郷から品物を奪つたことは自白したが、彼を殺した覺えはないといふ。だが强盗などの言ふことは信ぜられないので、王本を河南に遣はして方郷の安否をたづねる。

翠娥は方郷が死んだものとばかり思ひ込み、それから食事も進まず、うつらうつらする。又父母が始終喧嘩するので心勞つ

あまりどつと床につく、今にも息を引取りそうになつた時、王本が歸つて來て、河南には若旦那はおろか、老夫人の姿も見えないといふ。そんな事を今娘に聞かせたら大變、と陳璉は心配する。そこで一策を案じ、方郷の僞書を作つて翠娥の枕邊で讀み上げる翠娥はこれを聞いてやうやく安心し、病氣もだん〳〵よくなる。

八

河南に殘つた方郷の母は水粥に露命をつないで、方郷の歸りを待ち詫びてゐたが、いつまで經つても便りがないので遂に意を決して襄陽に向ふ。途中旅費盡き乞食をしながら九松亭に着く。折柄重罪犯人の死刑が行はれ、町ではいろ〳〵の噂がある。よく聽くとそれは方郷の身の上にかかわることで、賊は彼の財物を奪つた上、彼を殺害したものと認められてゐる。此話を聽いた老夫人は全く手頼りの綱が切れ果てゝ失望のあまり附近の河に投身を圖る。折よく白蓮庵の靜芳尼が通り掛り老夫人を助けて連れ歸る。尼達は概して迷惑がつたが、中には善良な尼もあつて、近々陳家の令嬢がお禮參りをするので人手が足りないから此婆さんを使つてやらうといふ。そこで老夫人は白蓮庵の厄介になる。翠娥は觀音菩薩の命日を參詣の日と定め、前から其旨を尼寺に通じて置いたので、尼達は無禮の無きよう懇々老夫人に申含める。偖て當日翠娥は白蓮庵に來てみると、品のいいお婆さんが、ひどいみなりをしておづ〳〵働いてゐたが、忽ち翠娥の顏を見て涙をこぼす。翠娥は不審に思つて身許を訊き糺すと河南と答へる。そこで人無き處へ連れゆき、祥符縣の方家の模樣をたづねてみると、老婆は悲しさに胸せまり俄に物が言へない。やうやくボツリボツリと語り初め、遠廻しに方郷の母である事を匂はせ、やがて翠娥の生年月日や翠娥の胸にある赤痣のことまで語り出した時、翠娥は驚いて跪き、無禮を詫びた上、すぐに轎を呼んで家に歸り父に知らせる。

靜芳尼は陳令嬢が急に寺を去つたので、何か機嫌を損じたものと思ひ込み、慌てゝ陳家に馳付けていひわけすると、令嬢は笑つて、お前の處にゐる汚ないお婆さんは、わたしの姑で誥封一品夫人だといふ。そうして救命のお禮として銀十兩を出し、なほ當分尼寺に置いて貰いたいと頼みその禮は別に出すといふ。靜芳尼は腰を拔かさんばかりに驚き、むやみにお辭儀をしてすぐに尼寺に取つてかへし、老夫人をいたはり、いい部屋に移す。翠娥は王本に吩咐けて米と着物を老夫人に贈り、又釆蘋を毎日通はせて身の廻りの世話をさせ、自分もたびたび顏を出して慰める。

或時白蓮庵に提督衙門の令孃が來たので釆蘋は佛壇の裏から覗いてみると、令孃は佛の前に立つて線香を上げ、先づ第一に母張氏の無病息災を祈り、續いてもう一本の線香を立てた時、令孃は「河」と言つて口籠つた。釆蘋は「河」といふ字が氣になつてじつと聽いてゐると令孃はあたりを見廻し「河南開封府祥符縣、方門の婦、楊門の女、誥封一品太夫人の身の上に恙なかれ」と祈つた。それは誰れあらう、此處にゐる方卿の母のことなので、驚いて前に進み出てそのわけを糺すと、令孃は畢提督の妹繡金といふ者で、すでに方卿と婚約し、今度兄が襄陽詰めとなつたので母と共に此處に來てゐることが知れた。そこで繡金を老夫人に引合はせる。老夫人は方卿の背約を怒つたが事情をきいてみれば、救命の大恩があるので如何ともしやうがない。只翠娥の思惑を氣遣つたが、兎に角方卿の所在が知れたので大に喜んだ。

九

方卿は北京に行つて試驗を受け、第一等の成績で狀元に及第した。けれど籍は江西、名に方正となつてゐたので陳家では此事を知らなかつた。當時年貢米の取立に情實が多かつたので新狀元の彼は七省盤査監察御史に任ぜられ、嚴重の取締をなすべく命ぜられた。方卿は陳畢兩家と緣組のことを上奏すると、先づ襄陽に行つて同日兩家と結婚せよと有難き御沙汰があつた。そこで彼は大勢の供人を引連れ官船に乘つて襄陽に向つた。

襄陽に着く一日前に彼は官職の旗や、お上みの威嚴を示す凡べての道具を取りおさめ、民船のような體裁を作つた。そうして彼自身も官服を脫ぎ、道士姿に身を窶し木魚を手に持つた。これは地方の役人に不意打ちを食はせる積りであるが、一つは又翠娥孃の心を試みす積りであつた。次の日方卿は陳家の裏門から花園に入り、釆蘋を呼び出して陳公夫妻に面會を求めた。彼は何處までも道士の風を裝つてゐたので叔母のきげんは益々惡かつた。彼はからかひづらで叔母の前で木魚を叩き、道歌を唱つて蘇秦の嫂とあてつけた。陳公は昔のように方卿を憐み、花園の一室に彼を迎へ入れ翠娥を喚び出した。その時畢提督が來訪したので陳公は席をはづして前廳に行つた。

翠娥は顏をあからめて何事も言はなかつたが、釆蘋は方卿の背約を諷したので、彼女がどうしてこんなことを知つてゐるのだらうと內々驚いた。その席には王本も來てゐた王本は翠娥の病氣で阿南に行つてみると、老夫人はそこにゐなかつたことを告げて方卿を驚かしたが、結局襄陽に來てゐることを打ち開けた。そこで方卿も試驗に及第したことを打ちあけ、監察御史の官

印などを見せて一家大喜びとなつた。方卿はすぐに王本の案内で尼寺に行き母に逢ふ。陳家の召使と尼寺の尼達は乞食道士が七省盤査監察御史の榮職にあるので喫驚した。畢提督が陳公を訪ねたのは妹の結婚の件であつたが、陳公はそこで初めて方卿の出世を知り大に驚いた、間もなく老夫人は方卿と一緒に陳家へ來て、翠娥に逢つて方卿の重婚を謝し、陳夫人に逢つて方卿の無禮を詫び入れた上、陳夫妻の和解に盡力し、その晩無理に老夫婦を一つ部屋に押込む。ここで陳夫人が拗ねたり、陳公が年にも似合はず羞しがつたり滑稽な場面がある。

やがて老夫人は方卿のために吉日を擇み、陳畢兩家と同時に緣組する。婚禮の裝飾は凡てが二組づゝ揃つてゐるので頗る奇觀をなした。酒宴と芝居は二更頃まで續いて客は散じた。方卿は先づ東院にゆくと翠娥は金繡に讓り、西院にゆくと金繡は翠娥に讓り、庭内を幾度も行つたり來たりして狀元になるよりも婿さんになる方六つかしいとかこつ。結局其晩は翠娥と同衾し、翌晩は金繡と同衾する又金繡のはからいで采蘋を妾に入れ、老夫人の世話をさせる。方卿はむかし采蘋の言つた事を覺えてゐる。「わたしは孃樣の腹心の女中です、どうぞ采蘋といふ名を覺えてゐて下さい」彼は此言葉をしよつちう忘れなかつた。そうして今も昔も彼女の義俠心に感服する。老夫人は旅行中の辛苦が原因となつて胃弱に罹つてゐたが、采蘋は身を粉にして介抱する。醫療に手を盡したが更に利き目がないので白蓮庵に七重の塔を建立したい希望を述べる。方卿は見積を立てゝみると建築材料二萬五千兩、工費一萬兩合計三萬五千兩の金が要る。此内二萬二千兩は内輪の者で集まつたが、あと一萬兩不足し、恰度工事費だけ足りない勘定である。靜芳尼は其不足高を公募すると言つてゐたが急場の間に合ない。そのうち老夫人の病氣はます／＼重くなつた。そこで珍珠塔を賞に懸け名醫を募る。

或日一人の道士が突然訪ねて來た。見ると黃州の許習仙である。彼は懸賞の珍珠塔を申受け、一粒の金丹を投け、二月十九日觀音菩薩の命日に、白蓮庵内に七重の塔がおのづから建立されると豫言して去つた。

老夫人は一粒の金丹を服むと、身體が輕くなつて病氣は忽ち拭ふがごとくに癒えた。すると二月十八日に大雷雨があつた。翌朝雨晴れて白蓮庵の境内に金碧燦爛たる七重の塔が聳え立つた。靜芳尼は驚いて此事を陳家に知らせる。皆々夢ではないかと呆れたが昔愚公が山を移し女媧が五色の石を煉つた例があるから不思議なことではないと思ふ。方卿は母の病氣のため、許可を得て出發を延期してゐたが、是に至つて賜暇の期限も切れたので匆々船を出し任務に就いた。そのとき三人の妻妾は皆孕んで

ゐた。又五十一歳の陳夫人も陳公の胤を宿してゐた。翌年の正月元宵節に先づ陳夫人が男の子を生み落し瑞生となづけた。次いて三月三日翠娥孃さんが分娩し、四月十五日釆蘋姐さんが分娩し、又五月五日金蓮孃さんがお節句の雄黄酒を飲み畢るとすぐ分娩した。端午節の子供は好くないといふが、孟嘗君や天竺の阿羅漢のためしもあるから、そんな心配は無用である。以上は皆男の子で長男を茂典 次男を茂官、三男を茂蔭となづけた。

畢雲顯夫人も同じ年に女を分娩した。方郷はその後工部侍郎に榮進し、畢雲顯は河南巡撫に轉し、二人は協力して水災を防いだ。兩家は後ちに襄陽に栞り 子女を結び合せて、二重にも三重にも緣を繋き、ます〳〵親密の度を増した。方郷は三十になるやならずで五男二女を得た。老夫人は孫の守やお參りをして日を暮し、藥が利いていつまでも長生きした。王本の倅小榮は綉金の女中玉琴を娶り桐油雜貨店を開いて五六千兩の身代をこさえた。紅雲も亦嫁に行つたが夫がぶをとこで喧嘩ばかりしてゐた。そうして姑と夫をいびり殺し、喜んで再嫁しようとした時、俄に惡性の吹出物を發し全身うみ爛れた。釆蘋はこれを哀れに思ひ、靜芳尼に賴んで紅雲を白蓮庵に入れ、毎月若干の仕送りをした。境内の珍珠塔はます〳〵光り輝きお賽錢がどつさり上るので尼達は陳家の德を感じた。

(をわり)

社會雜事

北京　汪　俠　公

歌曲

北京で普通行はれる歌曲は、頗る雜多で其種類も少くないが、今戲曲以外のものに就て、余の知れる限りを述べて見よう。

大鼓書曲。　之を更に左の數種に分類する。

一、梅花調。　此調は元來北京のもので、詞句淸雅、韻味悠揚として、鼓書曲舊派の一種である。節廻しにウマ味の乏しい爲、新人に喜ばれない。

二、衞調。　即ち天津調で、俗に小口といふ。此の調は梅花調と反對に新派に屬する。

文鼓武鼓の二種に分れ、懸臺のあるのが武鼓で、懸臺の無いのが文鼓である。久しく此の曲を聽き慣れた者には、區別が六ケしくない。此の曲は劉寶全、白雲鵬、張小軒以外に、歌妓にして之を歌ふものが最も多い。殊に北京天津の間に盛に流行し、天津日本租界の落子館、北京天橋の落子館及び四海昇平の如き、皆此の歌妓の演唱の場所として殷賑を極めたものである。此等の所謂鼓妓は、毎日その歌をうたひ終れば、兼て酒宴に侍して應酬を事とする。唯普通の藝妓と違ふ點は、幾分か體面を重んじて、輕々しく身賣をしないことである。併し人の妾などになるものも少くはない。

三、梨花片。　直隸省のもので、鼓は隷の端に置く。梅花調や衞調の臺を使つて地面に支へるのと異つて居る。また木板を用ひず鐵片で聲を出す。その音が稍細いので、大雅の取らざる所である。

四、西河調。　此調も直隸のもので、音が矢張り細いけれども、梨花片に比較すれば遙に聽くに足りる。歌妓王諷詠の歌ふのが即ち此調で、高尙な人達の中にも、これを喜ぶものが可成に有る。

五、切大鼓。　田舍歌の一種で、詞句は俗俚、聲音は泥濁、大鼓曲の最下の者に屬する。

八角鼓。　元は奉天省の長白山から起つたもので、淸朝八旗の子弟の爲に、凱旋を祝する意味の一種の歌曲である。單絃、岔曲、快書など皆之に屬する。始めは專ら票友の歌つたものであるが、後には商賣人も之を歌ふ様になり、傳流して今日に及んで居る。

什不閑。　一に太平歌詞といふ。蓮花落及び包頭の諸種の小戯は皆之に屬する。什不閑の名は雅でないので、淸の西太后が國政に當つて居た頃、此の曲が好きで名を太平歌詞と名を改めた。包頭の俳優で髯髭趙と呼ばれた者が、極めて西太后の御氣に入りで、技藝殊に勝れ、什不閑包頭の女形の中で第一に數へられた。

秧歌。　跳蹻競走會のもので調子が高く、純粹子弟に敎へるだけで藝を賣らない。淸朝の盛時には最も流行したが、今は殆んど廢れて仕舞つた。

雜曲。　其の種類繁多で枚擧に暇がない。靠山調の各曲や小下棋、嘆十聲、十二重樓の類、新しいもの舊いもの、男の歌ふもの女の歌ふもの、到る處にある。要するに小曲に過ぎない。

焰口曲。　死人の有つた家で僧侶を邀へて御經をあげる。其の第三日を放焰口といふ。此の日僧侶は御經を讀む外に、興に乘じて小曲を歌ひ出す。それが焰口曲で、鋸大缸などの類がある。風化を紊すことであり、葬儀に對しても宜しくない。文明國には見られないことである。

瞽者曲。　盲者が生活のために歌ふうたで、北京には常に多い。彼等は專ら單絃を用ひて鼓を擊たない。邸宅に入つて歌ふので、大概の繩張りがあり、師匠にも家元がある。

單絃。　一人で絃を持つて諸曲を歌ふもの、雜牌子と呼ぶ。南城調、金鏈蓮花落の如き其の一である。此の派では德壽山が第一で、自ら諸曲を作り、詞句文雅で、就中聊齋誌異が最も絕妙と稱せられる。

相聲。　滑稽物の一つで、專ら談話を用ひ、偶々歌ふこともあるが餘り多くない。此の藝は必ず二人でするので、甲は表になり乙は裏になる。甲の言ふことは乙が必ず能く答へる。古今東西様々の事に亘つて、その面白さ人の頤を解く。同光年間に北京の人姓は朱別稱窮不怕と云ふものが、此の藝を發明した。弟子が二人有つて、一人は貴といひ、一人は范と云つて之を傳へた。今日北京で有名なのは、陳子貞と焦德海だが、何れも遠く朱に及ばない。

骨董

骨董品は内外人の重んずる所で、近年外國人にも之を購求する者が少くない。骨董屋は客の好みに乘じて極力品物の搜索に

努め、或は北京内の舊家に就て之を買集め、或は遠く人を四方に派して尋ねさせる。隨て大金を儲けるものも有るので、中には僞物を作つて人を胡麻化す樣な不正漢も隨分多い。陶器類は西洋人が喜んで買込む所から、泥で似而非物を作り、數年間地中に埋め、さびが附いてから店に陳べると、一見して儼然たる古物とあつて、大金を取つて賣り付ける。陶器以外の骨董も皆然りで、此の眞贋を見別けるのは、餘程の具眼者でなければ出來ない。

書畫

書畫も亦古い物程貴重であることは云ふ迄もない。唐宋時代のものが値段の昂いことは勿論であるが、淸朝名人の書畫でも、今日得難いものが少くない。光緒帝の師傅翁同龢の書ですら、その價値は加はるばかりで減ずることが無い。然し眞物を求めると百に一つを得られないといふ有樣である。近年繪畫では、金拱北（浙江人）林琴南（福建人）二人が最も有名である。求める者が愈々多く成つて、値段は愈々昂るばかりである。林氏の逝去前に、曾て大病を患つて再起の見込の無かつた時、平日之を賣捌いて居た店で、忽ち其の畫を暴騰させ、甚しきは騰貴を見込んで仕舞込んで售らなかつた位である。林氏が卒すると果して騰貴したが、思ふに百年後には今日の十倍には上るであらう。金拱北君は甚だ健康で、繪は精細である。以て他日を想見することが出來る

圍碁

俗に大碁と云ひ、一に手談と云つて、高尙の遊戲である。上中下三派に分れ、上派は高官顯要の人、中派は家計小康を得て閒暇の者、下派は茶館酒肆で氣晴しにやるてあいである。軍人にも碁好きはあるが、併し能手は無い。前淸の肅親王善耆、貝勒載朗は、いづれも斯道を喜んだが、此二人の中では肅親王の方が遙に高い。民國の段祺瑞は最も碁が好きで且つ上手である。其の下に汪雲峰と云ふ者があるが、北京の人で、精明銳敏なるが爲に、小神童と號せられた。嘗に北京で黑碁國手と呼ばれたが、近年北支に敵無きに及んで、進んで白碁國手と呼ばれるに至つた。汪が段祺瑞と碁を打つのは、表面は御相手であるけれども、實は敎授である。多少の手當を給する以外に、年幾回かの節句每に必ず謝禮を贈つて居る。汪の着手は奇想天外的で、岡目には料り知られないものがある。又王又宸と云ふ人がある。（俳優の王又宸とは別人）內務部の辨事員で、圍碁に於ては部中第一である。此人汪を重視せず僅に二目を置く。併し王が汪と對局の際は、其打方が甚しく緩慢なので、頗る汪に喜ばれない。或日此の二人が東安市場の某茶樓で碁を打つた。王

が、一石を下すに十五分以上を費すので、汪は竟に座を離れて散歩に出掛け、時分を見計つては歸つて來た。是は從來の碁客に例の無いことで、汪の性情の狂傲なる點が看取される。汪は國手ではあるが、それは北方に限られ、南方には彼以上の名人が果して何の位有るものか、よく分らない。日本には名手が頗る多い。汪を訪ねて對戰するものが皆汪に勝つと稱せられる。併し兎に角汪の如きは、支那の碁客中稀有の人物である。

麻雀

麻雀は麻將ともいふ。もと南方から初まつたもので、二十年前北京には明に此物が頗る少なかつた。近年に至り日增に盛んになり、今日では殆んど知らない者はない程である。一般に婦人が尤も之を好み、每日玩ぶことが常習に成つて居る。この麻雀を戰はすことを、南方では撥麻雀と云ひ、北方では打麻將或は打牌と云ふ。四回勝負から八回勝負までを普通とし、多いものは十六回から二十四回にも至り、甚しいのは徹夜したり、夜も甚も眠らなかつたり、樂みより苦みが多い程で、大に精神を疲勞させる。余も斯の道を樂むものではあるが、それには贊成しない。以前には各地の麻雀牌の値段はずつと廉かつたが、米國で盛に流行し初めてから、大に騰貴した。普通の牌は骨や竹で出來て居るが、上等のものには象牙を用ゐる。遊び方は、先づ四人を一組とし、一人多い場合は之を作夢（夢を見る意）と云つて代り番に休む。三人で行ることが無いでもないが、これはホンの家庭內一時の遊戲で、輸贏を賭けるわけには行かない。麻雀牌の製造は上海が最も盛んで、北京人が上海に往けば必ず土產として持つて歸る。友人の張佩泉君は、商賣にかけて拔目の無い人だが、近頃一種の布張の匣を作つた。外面から見ると立派な一部の書籍だが、此の匣を開けば中には麻雀牌がいつぱいに秩序正しく入つて居る。平日書棚に飾つて置けば、誰が目にも其中に賭具ありとは氣付かない。近來北京では勝負に柫（俗に嘴とも云ふ）と云ふものを付けるが、試にその數件を擧げれば、

加當　邊張　二五八心　二八將二八贏　通天　三十點　么九麻將　自摸　前三碰　後碰對

などで到底詳說し得ない。一勝負ごとに、この柫を計へるに隨分時間を要する。匆忙の際忘れたり見落したり、色々の手違の出來ることは免れられない。

園藝

支那人は好んで花物を栽培するが、大抵は普通の草花が多い。珍奇な花は、富貴の家で、植木屋を雇つたり、花園を作つたり溫室を建てたりして培養する。普通の家では每年淸明の節に、鳳仙花、茉莉花、夜來香、西番蓮、荷花、昌蒲蓮などを種

ゑるに過ぎない。

花木では柘榴と夾竹桃が一番多い。日本の朝顔も近來北京で流行して、植ゑる者が多いが、大輪を咲かせ得るものは少い。余の知る所では、海軍部の楊某と、李際良と、俳優の梅蘭芳とだけである。楊と李は唯朝顔ばかりでなく、其外の日本の草花を上手に仕立上げる。菊花は素人中にも自分で巧く接種などして栽培する者が少くない。近年益々進歩して名稱も次第に殖えて來た。諸花の中で菊花の栽培が、矢張り支那人の特色である樣に考へられる。

飼鳥

鳥類の飼養は、北京人が支那第一である。暇人の多いのと、仕事が見付からないから鳥でも飼つて氣を晴せと云ふ手合が多い爲である。

これにも色々あつて、上等の家では鸚鵡、八哥、碧玉鳥を飼ひ、中等の家では畫眉、百靈を飼ひ、下等の家では靛頦、鶘鷵、(一名蠟嘴鳥)老西、交嘴、雛分球、家雀、黄鳥などを飼つて居る。八哥は人の口眞似が出來、客を見ると「入らつしやい」位の簡單な言葉を話す。畫眉、百靈、靛頦、黄鳥などは、何れも外の鳥どもの鳴聲を擬る。頗る味をやるが、惟黄胆と馬鶏とのだけは眞似ない。口穢いのを嫌ふのだと云はれる。蠟嘴鳥と老西は能くツレ鳴をする。どちらも極めて靈敏である。蠟嘴はツレ鳴の外は、叉打旋盤といふ一種の藝をやる。近年蠟嘴鳥會といふものが出來て、互に競爭させて勝負を決する。要するに暇人の暇潰しに過ぎない。交喙(交嘴鳥、いすか)には紅青の二種あつて、嘴で小箱を開けて色々のおもちやを拾ひ出すこと、人の思ふ通りになる。極めて賢いものである。雛分球は、雌雄を飼つて、雌を籠の中に置けば、雄を外へ放しても決して逃げない。黄鳥は最も煙を忌む。煙に中ると眼病になる。此の外に粉眼といふ極めて小さい鳥があるが、飼養者は多くない。家雀は一種の野鳥で、生長したものは捕つても活きて居ないから、飼ふには子飼にしなければならぬ。鴿(鳩)の飼養も北京に非常に多い。鴿には家鳩と山鳩とあつて、家鳩は羽毛が細かく美しく、性溫雅で愛すべきことは、普く人の知る所である。卵は食用として尊重される。

妓女

雅名を校書といふ。南北二派に分れ、南派には江蘇省の者が多く、北派には直隸省の者が多い。南派即ち南班の班名(屋號)は比較的雅馴で、南林房、聚美園、艶鳳院などは、最も繁昌な家である。北派即ち北班では多く二字名を用ひる。桂蓮、全德、德順などは其一例で、枚擧に遑がない。南北二班の極め

て見別け易い點は、南班の入口には屋號の下に清吟小班の四字が書いて無いが、北班には必ず清吟小班と書いてあることである。南班は多く百順胡同、韓家潭などにあり、北班は多く石頭胡同、陝西巷、王廣福斜街などにあり、其の中間は幾分入り交つた所もあるが、それは少數で兩班の分界は頗る判明である。南妓は北妓よりも客あしらひが旨く、口數が多く、商賣氣のために客を恐れず歡ばすといつた風である。北妓は體面を重んじて、應酬の點は聊か劣つて居る。時には乙にスマして人の齒を浮かせることもある。その最も好い點は、お客に對して野心が少く、無理强ひなどをしないことである。されば南妓が凄腕を振つて、客の財布をカッさらふなどの藝當には、到底及ばない。南妓の侍婢を普通に娘姨と呼び、北妓では老李老張などゝ姓を呼ぶ。これも南北班の違ふ點である。南妓は甚だ派手で贅澤で、家屋なども華麗であるが、北妓は之を氣に掛けながらも、大體に於て到底及ばない。歌は二黃大鼓や北方の小曲を歌ふのだが、發音の關係上北妓が優つて居る。男優と連立つて毎日劇場に出入りすることは、南妓の流行で、上海よりは少いとは云へ、近年增加する一方で、此の勢では何處まで行くか分らない。此外南妓には女優を伴ふのがある。香妃の碧雲霞に於ける、柳媚の金少梅に於けるが如きもので、これは特別である。

妓が客席に呼ばれて歸りしなに、そのお客との關係の冷熱や、一交誼の新舊に關らず、南妓は「明早會」(明日御目に掛ります)と挨拶し、若し初會の客ならば「今天簡慢」(今日は御粗末致しました。)と附け加へるが、北妓は唯「明兒見」(明日また御目に掛ります)と曰ふだけである。妓名を調べると、南妓は多く姓を冠らせないが、北妓は殘らず姓を附けて呼ぶ。妓女が人に嫁ぐことを從良と云ふ。多分不良の者が善良の者に從ふ意味であらう。嫁いで妾となる者は多いが、正妻となるものは實に少い。人に嫁いでから忍耐して性情を改め、永遠に添ひ遂げようと覺悟する女もあるが、又家內には落付かず、もとの贅澤に身を持崩して、再び商賣人に立戻る者もある。彼の金秀卿が賤業を捨てゝ良結果を得たといふ樣なのは、百人に一人も無い。金秀卿は北方の産で、名妓第一と歌はれたが、人と爲り才能があり、三十を越えてから人に嫁ぎ、平常の貯蓄を以て、北京の李鐵拐斜街に女の浴場を開いた。(其名を潤身女澡堂と呼んだが、蓋し支那に於ける女湯の開祖であらう)北京の風氣を開發し、諸妓をして淸潔を重んじ衞生を尊ぶに至らしめた、其志誠に嘉すべきである。開設以來十年に近いが、內容極めて完備し、妓女や良家の婦女の入浴するに、各別に室をわけて、決して混同しない。給仕には凡て女を使ひ、限制頗る嚴である。故に該浴場は今日迄猶商賣繁昌を續けて居る。

一體妓女が此道に入つて商賣を營む樣に成るには、凡そ三つの原因がある。一、家計貧困の者。二、匪徒に拐かされて賣られた者。

三、主人が幼時から養ひ育てた者等是である。貧困の爲め自ら營業するものは、主人が無いので頗る不自由で、遷移も隨意だし、客に出る出ない局に住む住まないも、個人の權内で出來る。匪徒に賣られた者及主家で育て上げられた妓は、苦痛が最も大きい。客の應酬につとめたり、歌曲を習つたり、客を無理に引留めて泊らせたり、少しでもそれを失策ると、直に打たれ責められ、筆紙に表はせない樣な仕置をされる。そこで之を救ふべく濟良所が設立された。

濟良所は、故京話日報總理彭翼仲氏の創立したものである。彭氏は熱心な慈善家で、北京で首唱した義擧が頗る多い。花柳界の暗黑狀態を目に視耳に聞いて、毅然として官廳の許可を請うて此の濟良所を設立した。凡そ虐待を受けた妓女は、警察から事實を調査した上で、命じて此所に入れて配偶者を擇ばしめる。或は妓女が主人老鴇などの虐待を受けて堪へられぬ時は、自ら警察に訴へ出て、其保護の下に入所することが出來る。實行以來諸家の主人老鴇に一大恐慌を起して、一般の妓女は從前の如き虐待を受けることが無くなつた。

配偶を擇ぶ法は、先づ各妓に寫眞をうつさせ、之を濟良所の門前に懸け、若し妻に申受け度い者があれば、寫眞を看た上で、三人の保證人を立て、相當の費用を支拂ひ、更に其の妓の同意を得て、初めて申受けて出ることが出來る。最初は申込者が隨分多かつたが、今では頗る減少した。濟良所辨理の進步は、其の功を彭翼仲氏に推さければならない。

名妓金秀卿の外に、余の最も佩服するのは小鳳仙である。小鳳仙も亦北妓で、梁玉樓、李小順と時を同じうする。袁世凱の執政時代、極めて民黨の發展を忌んだが、蔡鍔、尹昌衡二人は孰れも革命の健將であつた爲め、北京に居る間袁の猜忌を招くことを恐れ、尹は梁玉樓と相識り、蔡は小鳳仙と親み、終日花天酒池の大浮れ、酒色に惑溺して毫も大志無き樣を示して、生命の安全を計つた。當時袁世凱は民黨の要人に對して、一々探偵を尾行させ、蔡尹二人が每日八大胡同に出入することを探知し、（八大胡同は妓女の營業する小路で八埠ともいふ）漸く安心して二人は政治的志望無きものとした。袁氏が帝號を潛するに及んで、蔡鍔は忽ち潛行して北京を出で、雲南に歸つて義兵を擧げたが、各省響應して洪憲を推倒し、袁氏は卒去するに至つた。蔡の偉業は沒すべからざるものである。尹昌衡も亦梁玉樓の爲に脫走することが出來た。偶然とは云へ大幸と云はねばならぬ。其後蔡鍔病死し、各界の人々中央公園を假りて追悼會を開いたが、小鳳仙も蔡の生前の英名を慕つて參列した。之を哭すること甚だ哀しく、且つ好事者あつて代つて輓聯を書いて贈つたので、此の事遍く都下に傳つて、小鳳仙の名を知らぬもの無きに至つた。筆を花柳界の記事に運んだ序に、此の事を附記する。洵に民國以來の有趣味の佳話である。

苦心孤詣(支那式小說)

董謌聲

武林の北門外に姓を徐と呼ぶ一人の紳商があつた。

界隈に善人の譽高く、彼の居宅は謂ゆる門牆高峻、門閭莊嚴で、まことに儼然たる一鄕の舊家である。

或朝、突然一人の男がこの邸宅に飛込んで來て、案內も乞はずに玄關に押上り

男　徐の野郎は全く人間の皮を被つた犬畜生だ。少許の小金を身にかけて竹馬の友誼も忘れてしまひ、他人(ひと)の妻子が凍え死うが飢え死しやうが、知らぬ顏をしてゐる。こんな奴を暫くでも長者扱ひしたのは全く俺の見損ひで、今となつては殘念で堪らぬ。

と、この家の主人卽ち徐乃堃を、口を極めて罵倒し始めた。

扉を開いて內から出て來た主人は

徐　誰かと思つたら……。久しぶりだナア。何をそんなに騷いでゐるのだ、マア厭でも御して、俺の言ふことを聽き給え。

さて、この不意の侵入者は劉青堂といふ、徐とは少年時代に同じい村塾に通つてゐた時からの仲の好い友達で、貧乏人の劉が金持の徐に助けられたことは三度や四度ではなく、而も二人の間には不思議なくらひ、曾つて氣粗い話も持上らずに續いて來たものだ。

徐の家は祖父が蠶絲業で家を興してから今まで、三代不易の素封家である。徐は小さい頃から、讀書嫌ひの遊び好きではあつたが、商賈上の機略だけは人一倍鋭かつたので、家業は益々繁盛し、今では、蠶絲業の外に立派な吳服屋と刺繡屋さえ持つて、店構(みせがまへ)から何から、名實ともに巷一番の金滿家であるし、それに情深くて、絕えず他人(ひと)の難儀を見てやつたため、鄕黨の評判は大したものであつた。

一方劉は極く若いうちに、彼の父が共同出資して雜穀屋を開いてゐたある人の娘、周氏と結婚したが、周氏はちつとも締のない女で、その後數年、双方の兩親が亡くなると、暫く間に遺產を叩き上げてしまひ、旁々劉も商賈人の子に似合はず算盤が嫌ひで、始終讀書人の眞似ばかりしてゐたので、店は白鼠共の喰物にされ、十年ばかりの間に負債山積、整頓無璧の文字通りに、二進も三進も行かなく、とう／＼店は人手に渡つてしまつた。

倖に徐の盡力で、新主人の下に使はれて、どうにか口だけは過して行けたのだが、根が商賈嫌な劉のことゝて、居ること歲餘でお拂箱を喰つてしまつた。

仕事を追はれた劉は、每日することもなく、取り止めのない事ばかりを思ひ暮してゐた。子供の頃、村塾の馮君錫先生に煽てられたのがもとで讀書人の眞似を始めたが、徒にブラ／＼癖がついたばかりで結局ものに成らず、今度は、徐の世話で商賈の道に這入つたが之も今また失敗して、夫婦と子供二人の口も過せない仕末となつて泣言も出ず、徐は相變らず心切にして吳れるとはいふものゝ、どうせ一つ時逃れで、この先の貧乏がどうなるものでもない。

事業に失敗してからは、一族親戚中一人の話相手になつて吳れるものもなく、徐の時々

の助が無かつたなら、一家は疾つくに飢え死してゐるのだなどゝ、今日しも亦下らない思ひに沈んでゐる際、珍しく門口に郵便屋の聲がして、思掛けない馮君錫先生からの手紙が舞込んで來た。早速開いて見ると次のやうな文面だ。

拜啓違敎數年、疚忝甚歉候一別以來一と度官命を得て北上仕候得共又擯せられ、倖に親族共の助力に依つて任官金を納むるを得、長沙に赴いて候補官に居り、此間辛楚備に味ひ申候、本春に至り初めて某縣知事の印を授り候得共、地瘠民貧、僅に風俗淳樸なるに因つてのみ任に堪え候

過日鄕人某來處し、足下大故に遭會し苦難一方ならざる由を申聞け候同學の誼に維り乍ら御助力も致さざる段慚愧之至に候

近狀果して如何哉、若し萬般意の如くならざれば、弊地への御來遊も或は窮餘の一策かと存候、乍然萬已を得ざるに非れば、決して千里の道を輕々しくするには當らず候云々

手紙を讀了つた劉は大喜びで、早速妻君を呼び

劉　馮先生が自分を招いて呉れたのは願つても無い好機會だが、今家に殘るものは四壁ばかりで、後々の仕末どころか當面の旅費の算段もつかない。行き度くはあるし、金は無しサ、實際弱つたことに成つた

周氏　それこそ徐さんに御相談なすつたら如何です

劉は默つて首を横に振るのみであつたが、やがて太息とゝもに

劉　どうもこの上彼の人に迷惑を賴むわけには行かない

周氏　こう事が切破詰つては、外にどうしやうも無いぢやありませんか

劉はまた默り込んで考へてゐたが、矢張徐に賴むより外に途がないので、夜になつたことを幸、手紙を携えて徐を訪ね、一部始終を話した徐は一寸の間、いつに無く考へてゐたが

徐　君は行くんだね。この機會を逃すわけには行くまい。僕は君え餞別として五十金を贈らうし、尙あとの事は萬事引受けるから思ひ切つて行き給え。

劉は徐の常に變つた慷慨深い態度、音色を見思はず感激の涙にくれた。

徐は言葉を繼いで

サア早く歸つて行李の準備をするが好い、俺は明朝金を持つて、君の門出を見送りに行くから

やがて劉は厚く禮を述べて家に歸つた。

劉は周氏との間に一男一女あり、女の兒の方はもう十五歲になつてゐたが、男の兒はやつと乳を離れたばかりであつた。

劉の話を聽いた一家は徐を神樣のやうに讃め稱えた。

翌朝になると徐翁は旅費の外に彼が平常身に着けてゐた羊裘一領を贈り、尙後に殘る家族の當座の糊口料として錢三千、米五斗を與え、劉とその妻子をしげ〳〵と見較べながら、後のことは心配するに及ばない、必ず俺が世話を見てやるからと力づけるので、一家の者は今更ながら徐の厚意に感じ、古人の仁義も亦之には及ぶまいと拜まんばかりにしたが、徐は只管に謙遜して、劉の門出を慰めた、劉は妻子と暫しの別を惜みながら門を出て行つた。蓋し征人婦を思ふは今古の道理で、妻子を友人に托して遠く離れて行く劉の心中は感慨無量、而かも徐の示して呉れた好意は夢の間も之を忘れることは無かつた筈である。あとの家族も寢ても覺めても徐の恩義を稱え、どうしてこの厚恩に酬ひたら好いのかなどと、話し合つてゐたが、光陰流水、坐食山空で、二十日餘も經つと、五斗米三千錢はもう殘り尠くなつて來た。そろ〳〵徐の方か

ら何とかして呉れる頃だと心待ちに待つてゐたが、數日を經ても何の音沙汰なく、そのうちに一文の錢、一合の米も無くなつてしまつた。

隣の婆さんを頼んで使に遣つたが、徐は會つて呉れなかつたと言つて歸つて來た。

家族は驚きながらもその理由が判らず、猶又今更徐が約束に背くとも思えないので、周氏が直く徐の許に出掛けて行くと、徐は一向と用向に氣附かないやうな面持で、何用があつて遣つて來たかと尋ねた。

周氏、實は先頃戴いた米も錢も、すつかり無くなつたので御座ります。昨日隣家の婆さんを使に差上げたのですがお目に掛ることが出來ませんでしたとかで、私の夫は、貴方が一切後の面倒を見てやると仰言つたのを力にして旅立つたので御座いますが、よもやあの時の御話をお忘れになつたのではありますまいし、何か別にわけでもお有りなのかと思つて、出掛けました次第で御座いますので、

徐は爭ひながら

果て、合點の行かぬことを言はれますナア。わしは貴女の御主人と懇意にしてゐましたので、今までも時々御助力もし、出發の際にも、旅費や米錢を贈つて、自分の考では出來るだけのことはした積ですが。成る程引繼いで御助力をしやうとは申しましたが、それは萬一切迫詰つた場合には何とかして差上げやうと言ふ意味に過ぎなかつたのです。お考になつても判ることですが、既に歴つきとした主人のある人達を、唯、その主人の友人であるといふだけのことで、一年中の生活凡てを引受けるなんて言ふことが出來るものかどうか。こゝは一つ奥さんに誤解のないやうにして頂かんけりやならんところですが、わしがそうまでするとすれば世間に五月蠅い噂がたつやうなことが無いとも限りません。

改めて貴女にお約束しますが、年末などの物入り時には必ず御手助しますが、若し不常一切の生活まで保證しろと言ふやうなお話なら、私はどうにも、御相談に乘るわけには行きません。

こゝまで聽いて來た周氏は、余く胸も潰れる想で、泣からにも涙が出なかつた。

徐は更に言葉を續けて

然し差當り今日食べるものも無いと仰言るのだから、今度に限つて錢一千、米二斗だけを屆けさせますが、この後之を例とするのではありませんよ、瓜李の嫌もあることですから、奥さん、もうお引取り願ひませう

周氏は息も詰りそうで言葉も出ず、碌々挨拶もせずに、睫を濕らして出て行つたが、徐は別段之を慰めやうともせず、薄笑を浮べて見送つてゐた。

周氏が逃げるやうにして家に歸着いて見ると、先刻徐が約束した錢一千、米二斗が、ちやんと卓子の上に堆んであつた。

それを見るにつけても何更に氣逆加沔で、珠兒―女の兒の名前―の側に泣伏しながら、

あれ程頼みにしてゐた徐さんはすつかり嘘つきで、彼の人はもと／＼こんな考を持つてゐたのだ。言はれて見れば理窟は先方にあるのだから文句のつけやうもない。

卓上の米錢を指しながら

私達母子の命の種もこれ限りだが、もう何うしやうにも仕樣がない

と言つては又泣出した。

珠兒　樣子はすつかり判りました。死んでも好いから、こんなものは食べますまいよ

周氏　まあお前のやうに腹を立てゝも仕樣がないのだから、濟んだことは濟んだことゝして置いて、今から先をどうして暮して行くか、よくお前とも相談しなくてはなりません。

の氣助が無かつたなら、一家は疾つくに飢え死してゐるのだなどゝ、今日しも亦下らない思ひに沈んでゐる際、珍しく門口に郵便屋の聲がして、思掛けない馮君錫先生からの手紙が舞込んで來た。早速開いて見ると次のやうな文面だ。

　拜啓違敎數年、奕葛甚敷候一別以來一と度官命を得て北上仕候得共又擯せられ、倖に親族共の助力に依つて任官金を納むるを得、長沙に赴いて候補官に居り、此間辛楚備に味ひ申候、本春に至り初めて某縣知事の印を授り候得共、地瘠民貧、僅に風俗淳樸なるに因つてのみ任に堪え候

　過日鄉人某來處し、足下大故に遭會し苦難一方ならざる由を申聞け候同學の誼に維り乍ら御助力も致さざる段慚愧之至に候

　近狀果して如何哉、若し萬般意の如くならざれば、弊地への御來遊も或は窮餘の一策かと存候、乍然萬已を得ざるに非れば、決して千里の道を輕々しくするには當らず候云々

手紙を讀了つた劉は大喜びで、早速妻君を呼び

劉　馮先生が自分を招いて吳れたのは願つても無い好機會だが、今家に殘るものは四壁ばかりで、後々の仕末どころか當面の旅費の算段もつかない。行き度くはあるし、金は無しサ、實際弱つたことに成つた

周氏　それこそ徐さんに御相談なすつたら如何です

劉は默つて首を横に振るのみであつたが、やがて太息とゝもに

劉　どうもこの上彼の人に迷惑を賴むわけには行かない

周氏　こう事が切破詰つては、外にどうしやうも無いぢやありませんか

劉はまた默り込んで考へてゐたが、矢張徐に賴むより外に途がないので、夜になつたことを幸、手紙を携えて徐を訪ね、一部始終を話した徐は一寸の間、いつに無く考へてゐたが

徐　君は行くんだね。この機會を逃すわけには行くまい。僕は君え餞別として五十金を贈らうし、尙あとの事は萬事引受けるから思ひ切つて行き給え。

劉は徐の常に變つた慷慨深い態度、言色を見思はず感激の涙にくれた。

徐は言葉を繼いで

サア早く歸つて行李の準備をするが好い、俺は明朝金を持つて、君の門出を見送りに行くから

やがて劉は厚く禮を述べて家に歸つた。

劉は周氏との間に一男一女あり、女の兒の方はもう十五歲になつてゐたが、男の兒はやつと乳を離れたばかりであつた。

劉の話を聽いた一家は徐を神樣のやうに讃め稱えた。

翌朝になると徐翁は旅費の外に彼が平常身に着けてゐた羊裘一領を贈り、尙後に殘る家族の當座の糊口料として錢三千、米五斗を與え、劉とその妻子をしげ〴〵と見較べながら、後のことは心配するに及ばない、必ず俺が世話を見てやるからと力づけるので、一家の者は今更ながら徐の厚意に感じ、古人の仁義も亦之には及ぶまいと拜まんばかりにしたが、徐は只管に謙遜して、劉の門出を慰めた、劉は妻子と暫しの別を惜みながら門を出て行つた。蓋し征人婦を思ふは今古の道理で、妻子を友人に托して遠く離れて行く劉の心中は感慨無量、而かも徐の示して吳れた好意は夢の間も之を忘れることは無かつた筈である。あとの家族も寢ても覺めても徐の恩義を稱え、どうしてこの厚恩に酬ひたら好いのかなどと、話し合つてゐたが、光陰流水、坐食山空で、二十日餘も經つと、五斗米三千錢はもう殘り尠くなつて來た。そろ〴〵徐の方か

ら何とかして呉れる頃だと心待ちに待つてゐたが、數日を經ても何の音沙汰なく、そのうちに一文の錢、一合の米も無くなつてしまつた。

隣の婆さんを頼んで使に遣つたが、徐は會つて呉れなかつたと言つて歸つて來た。

家族は驚きながらもその理由が判らず、猶又今更徐が約束に背くとも思えないので、周氏が直ぐ徐の許に出掛けて行くと、徐は一向と用向に氣附かないやうな面持で、何用があつて遣つて來たかと尋ねた。

周氏、實は先頃戴いた米も錢も、すつかり無くなつたので御座ります。昨日隣家の婆さんを使に差上げたのですがお目に掛ることとが出來ませんでしたとかで、私の夫は、貴方が一切後の面倒を見てやると仰言つたのを力にして旅立つたので御座いますが、よもやあの時の御話をお忘れになつたのではありますまいし、何か別にわけでもお有りなのかと思つて、出掛けました次第で御座いますので、

徐は笑ひながら

果て、合點の行かぬことを言はれますナア。わしは貴女の御主人と懇意にしてゐましたので、今までも時々御助力もし、出發の際にも、旅費や米錢を贈つて、自分の考では出來るだけのことはした積ですが。成る程引繼いで御助力をしやうとは申しましたが、それは萬一切迫詰つた場合には何とかして差上げやうと言ふ意味に過ぎなかつたのです。お考になつても判ることとですが、既に歴つきとした主人のある人達を、唯、その主人の友人であるといふだけのことで、一年中の生活凡てを引受けるなんて言ふことが出來るものかどうか。こゝは一つ奥さんに誤解のないやうにして頂かんけりやならんところですが、わしがそうまでするとすれば世間に五月蠅い噂がたつやうなことが無いとも限りません。

改めて貴女にお約束しますが、年末などの物入り時には必ず御手助しますが、若し平常一切の生活まで保證しろと言ふやうなお話なら、私はどうにも、御相談に乘るわけには行きません。

こゝまで聽いて來た周氏は、全く胸も潰れる想で、泣かうにも涙が出なかつた。

徐は更に言葉を續けて

然し差當り今日食べるものも無いと仰言るのだから、今度に限つて錢一千、米二斗だけを届けさせますが、この後之を例とするのではありませんよ、瓜李の嫌もあることですから、奥さん、もうお引取り願ひませう。

周氏は息も詰りそうで言葉も出ず、碌々挨拶もせずに、涙を濕らして出て行つたが、徐は別段之を慰めやうともせず、薄笑を浮べて見送つてゐた。

周氏が逃げるやうにして家に歸着いて見ると、先刻徐が約束した錢一千、米二斗が、ちやんと卓子の上に堆んであつた。

それを見るにつけても尙更に氣逆如湧で、珠兒―女の兒の名前―の側に泣伏しながら、

あれ程頼みにしてゐた徐さんはすつかり嘘つきで、彼の人はもと〳〵こんな考を持つてゐたのだ。言はれて見れば理窟は先方にあるのだから文句のつけやうもない。

卓上の米錢を指しながら

私達母子の命の種もこれ限りだが、もう何うしやうにも仕様がない

と言つては又泣出した。

珠兒　様子はすつかり判りました。死んでも好いから、こんなものは食べますまいよ

周氏　まあお前のやうに腹を立てゝも仕様がないのだから、濟んだことは濟んだことゝして置いて、今から先をどうして暮して行くか、よくお前とも相談しなくてはなりません。

終夜まんじりともせず、色々と相談はしたもの丶、何んとて、急に好い考が浮ぶ筈もなかつた。

朝になつて、それでも久方ぶりに米の顏を見たのだから、少しばかりのお粢でも做えやうと、珠兒は市場に出掛けた。

門を出て間もなく、後の方で「珠兒、珠兒」と呼ぶ聲がする。振返つて見ると一人の蒼髯の老人が懷しげに自分に見入つてゐるが、然し見覺えもない人なので俄に返事も仕兼ねてゐると、老人は馴れ〳〵しげに微笑んで、

「大きく成つたね、暫く會はないから見忘れたかね、わしは何聘三だよ、うちではお父さんもお母さんも變りはないかね

ところで、この何聘三といふのは徐麵翁がやつてゐる蠶絲業の支配人で、徐家の先々代の頃から小僧に住込んで以來數十年を勤め上げ、今では徐翁の厚い信任を受けてゐる。ずつと以前、劉と同じ街に住まつてゐたことがあつて、その頃何聘三にはやつと子供上りの年頃の息子があり、ある商店の徒弟に入りたく思つてゐた。然しその子は算盤が出來なかつたので父親の何は之では到底勤まるまいと心配、し劉に賴んで手をつけて貰ふことにした。半年ばかりで充分一人前の仕事が出來るやうになり、今では或る立派な兩替屋の勘定方になつてゐる。斯うした關係で、兩家は非常に親密な交際を續け、珠兒が幼かつた頃には、何を伯父さん、伯父さんと呼んでゐたのであつたが、その後、他の街に轉居したので、近頃では余り行來もしないやうになつてゐた。

珠兒はゆふべからの事で、朝からブリ〳〵してゐたが、今思はぬ人に出遇つて、急に淚が押え切れずなり、何の袖に倚つて位きぢやくりながら、父の旅立から、徐翁の食言、今では母子三人が明日の暮しにも困つてゐる次第を殘らず話した。一部始終を聽いた何聘三は一緒になつて徐の不信を罵り、自分が掛合つてゝ必ず話をつけてやるからと珠兒をなだめ、珠兒に案內させてその家に行つた。

寒暖の挨拶も濟むと

何　もう心配することはない。わしが聽いたからには、貴女方母子を飢死させるやうなことはしない

と、萬事を引受けたので、周氏は居住ひを正して禮を述べ、尙附加へて

周氏　私共の下らない事から、數十年來の御主家との間に氣まづいことでも出來てては、全く相濟みませんから、出來るだけ穩便にお話下さりますやうに

何　それはそれとして、元來人に賴つて生活して行くのではどうせ永續きのしないのは當り前で、何事でも、人に求める先に、まづ自分達で出來るだけの事をしなければいけない。

貴女方母子にしたところで、立派に手がついてゐるのだから無暗に人に賴るとはないではないか。貴女が夜に日を繼いでまでも働く氣にさえなれば、食つて行くぐらいのことは何んでもない事だ。それに、貴女が非常な苦勞をしながらも自活して、旦那の歸りを俟つてゐるといふとになれば、徐の老爺にしたところで、隨分胸に應えるに違ひなしだ。貴女方は一體どう思はれる。

周氏　仰有る通りで御座いますが、然しどうして好いのか判りませんので

何　いや、貴女さえその氣になられるなら、その方法についてはきつとわしが考へませう

何聘三は周氏母子の切な賴みを引受けて辭去した。

さて、この巷に一軒の大きな裝身具店があつて、華麗鮮麗を極めた店構と、製造の美、針繡の精は、巷の紳士淑女の人氣を集めてゐたが、製品の大半は巷の婦人の家庭手工によ

つてゐた。

その翌日、何翁はこの店の仕事をどつさり持込んで來て呉れた。

周氏母子は片時の手休めもなくこの仕事に精を出したので、判布楚々ながらに、どうにかかうにかやつてゆけるやうになり、徐翁への面當の氣持も手傳つて益々働いたので、日の經つに從つて多少の餘裕さへ出來、その後はつひぞ、徐家には足踏もしなかつた。

藥砧一去、數年不歸、劉からは時折のたよりはあつたが何時も旅先の無事を知らせるのみで、一文の金も送つては來なかつた。何翁に相談して故鄕の現狀を知らしてやらうと思つたことはあつたが、何翁はいつも不贊成で家庭の瑣事を知らして旅の者に心配させるには當らないと言つて聽かなかつたし、それに何翁も年の加減でか、詳い手紙を認めることも容易ではないらしかつたので、ついそのまゝになつてゐた。

だから、旅先の劉は、故鄕の樣子は今でも矢張良友の世話で暮してゐるものとばかり思つてゐるのだ。

劉は江蘇の地に赴いてからは、舊師の手で文書の整理などの手傳を爲し、一年ばかりも經つた頃には、大部仕事も出來るやうになつてゐたが、突然、舊師が官命によつて雲南、貴州方面に出張することになつたので、色々と身の振り方を考えた揚句、あり金を拂つて江蘇地方の特產物を買込んで舊師の行のお供をし、一年餘り雲南に滯在して再び江蘇に返る時には、今度は雲南、貴州地方の珍貴な產物を購つて江蘇に持返つたが、遠く離れてゐる兩地の特產物貿易は豫想外の大成功で、元利金を合せて數千金の纏つた金が手に這入つた。

懷が溫つて來ると、今更に故鄕戀慕の念に堪え難く、その旨を先生に打開けると、もともと官吏生活に飽き／＼してゐた馮先生は、自分もいつその事に官を辭して歸らうと言ひ出し、行李も匆々、兩人は故鄕に向つて出發した。

成功して故鄕に歸る劉はまことに意氣軒昂。里門に到り、家門に入れば、稚子候門、妻女歡迎、このときの景象たるや、正しく南面の王も亦易からざる勢であつた。

歸つて見ると、家內の者は衣服も小ざつぱりしてゐるし、皆よく肥つて色艷も好いので、之も一重に、良友の心盡しに因るものだらうと、感謝の念措かず、旅裝を解く間ももどかしく、早速に、徐翁の許に挨拶に行かうとした。

然るに、妻子はみな、行かなくても好いと言つて止めて聽かないので、劉は不審に堪えず、そのわけを質すが默つて答えない。

劉は愈々疑念を生じて

徐さんに、別段變つた事があつたわけではないだらうね

周氏は初て口を開いて

あんな奴に、障りなんかあるものですかと言ひ放つたが、劉は何がどうしたのか、一向合點が行かない。

周氏は促されるまゝに言葉を繼いで

若し何聘三さんが居なかつたら私達母子三人は疾つくに飢え死してゐます

その後の一切を聽いた劉は全く驚き、裏切られた事を知つた念から、直ぐにも徐のところえ押掛けやうとした。然し妻子がまあ明日にしても遲くはないと言ふのに留められたが、明る朝は、起き上ると朝飯もそくそこにして徐の家に怒號り込み、さてこそ揭頭の如き罵倒を始めたのであつた。

〰〰〰〰〰〰

徐、俺は君のためにどんなに心を費つたか知れないのだ。それに今、君はお禮どころか、口を極めて俺を罵るのは何としたものだらう。

俺は君から受けた依托を、どうしたら完全に果すことが出來るかと、隨分苦心した。惡くすれば、心切が却つて仇になつて、俺達二人に飛んでもない恥をかくやうになることを心配したのだ。俺達二人の友誼は、

單に衣食を充分にしてやりさえすればそれで好いのではないのだからこそ、斯んな手段を取るのも亦已を得なかつたのだ。俺は考えた。

奥さんにしたところで、勞すれば即ち善を思ひさ、逸なれば即ち淫を思ふに違ひなく、煖衣飽食、逸居無事では、實際碌なことは思附かないものなので、若し君の留守中に、碌でもないことでも出來上つたら、俺は君に合せる顏がない。而かも問題がそこまで行つてしまえば、俺にしたところで何うしやうもない事になるので、これは俺が恃むに足らず、どうしても自分の力で遣つて行くより外に致方がないと思込ませ、出來るだけ働かせるに限ると考えた。そこで老友何勝三に旨を含めて何知らぬ顏で奥さんに而台させ、結局無駄事を思ふ暇のない程に働かせるやうに仕上げたのだ。

働きさえすれば、身體の疲れで夜はぐつすれ寢込んでしまふから、全く、下らないことなど考える餘地がないわけで。

又奥さん達の仕事には、ちやんと相當にやつて行ける位の報酬を出してあるし。まあ何や彼やと、君のためには、實際俺は最上を盡した積なのだ。

君が、まだ俺を信じられないのなら、先づこれを消て呉れ

と、立上つて、劉を隣室に案內し、二つの大きな長持の蓋を取つた。

この中に在るのは、みな君の妻子が年來心血の結晶だよ。何れも日常の役に立つものばかりだし、尚又娘さんの嫁入道具としても無くてはならないものだから

召使の男を呼んで

この二つの長持を劉君の宅に擔いで行つて、奥さんと娘さんに、これは徐某からの贈物だと言つて置いて來い

更に劉に向つて、笑ひながら

何勝三は全く俺の手先に過ないのだ、俺はこの位い君及び君一家のために心を碎いたのだが、それでも、今君はお禮を言ふどころか、口を極めて俺を罵倒するのだね

徐の始終を、狐につままれたやうにして聽いてゐた劉は、急に惡夢から甦つた心地で、頓には言葉も出ず、唯感激の涙に浸りながら

あゝ、俺こそ、本當に、人間の面を被つてゐて畜生の聲を出す奴だ。

人を見る目が晦んで、君を怨みに思つたなど、全く申譯もない。實際、人非人とは俺のことだらう

徐　いや、俺が何にも事情を話さなかつたのだから、君が俺を怨んだのも無理ではない

劉は徐の手を握締めて泣き

いくら言葉を盡したとて、到底一つ時にはお禮も、お詫びも言ひ完せるものではないから、今はもう、敢て言ふまい

劉が家に歸つての物語に、妻子も今更何の言葉も出でず

劉氏　徐さんの手のうちに生きてゐながら、徐さんを怨んでゐたのだ、初からあんなにも徐さんを信じて居りながら

爾來幾年、徐と劉の交りは永久に變らなかつた。

編者曰く。

西哲に言あり、有膽者は錢無く、有錢者は膽無しと、況や、餘り學問もない大商賈人などでは、その富貴を以つて人に驕らないものは殆ど稀である。

今徐翁がその友の爲めに圖るところを觀るに懇款の周、體貼の術、まことに驚くべきものがある。

晩近道目に衰え、財相等しき者に在つても、而も後著岑無間なれば、車笠の盟既に渺然として又視るべからず。時に相逢ふことがあつても、僅に一揖するのみで更に顏貌も改めず、社會も之を怪しまない。そうかと思えば、偶然錢金相通れば、無間に親しくはなるが要するに酒飯の友に過ぎない。

徐翁徐稱心孤詣、貧友の名を冒すを甘んずるその卓識熱腸、廻に俗人の及ぶどころではない。正に相傳ふべきである。

新支那雜俎

在北京 辻聽花

私は今春初めて貴社の上村君に遇ひまして、種々談話しました結果、遂に同君から寄稿を需められましたので、一寸而喰ひましたが、貴社が遠からず支那記念號といふやうなものを特刊せらるゝといふことを聞いて、新支那雜俎といふのを書くことに致しました。

新支那と舊支那

私がこゝに新支那といひますのは、即ち舊支那といふのに對するのでありまして、種々穿鑿的に云ひますと、一寸六ケ敷なりますから、それは止めとして、私が申す舊支那とは、單に前清時代のことで、新支那とは、民國以來のことであります。

そこで私が書きます新支那雜俎は、概して民國元年以來のことでありますが。可成は最近のことや、現在のことを、なるべく多く書いて見たいと思ひますし、又時には將來の新々支那にも及ぶことがあるかも知れません。

辮髮と散髮

新支那といふのは、一寸人々の頭髮丈を見ても、直ぐに判ります。前清の頃には、すべて男子は辮髮でありまして、若しも五分刈りか、分け髮にでもしましたならば、直ぐに犯法で、重刑に處せられたのでありますが、今日では、散髮が普通になつて、前の辮髮は、骨董扱ひになつてゐます。

又前清時代には、人の敬稱に、大人とか、大老爺とか、老爺とか、一定の規則があつて、なか〱むづかしくありましたが、革命と同時に、此等の敬稱は、全然取消され、多くは先生といふ文句を使用することになりました。

けれどもが、頭髮のことは、今日でこそ餘り問題ではありませんが、民國の初手、袁世凱氏が在世の頃までは、北京の市中でも、辮髮を垂らしてゐるものが、老人にも、壯年にも、子供にも、まだ非常に多くありましたので、とにかく革命の趣旨に背くといふ名目で、種々な理窟を附け、警察に命じ、各戶各人に、強制的に剪髮せしめたものであります。

中にも面白かつたのは、白晝市中で、巡査が理髪師を伴ひ、途上若し辮髮を垂らしたものを見附けますと、否應なしに直ぐ捕つて、プツツと髮を剪つたものであります。その頃辮髮に、まだ一種の愛戀があり、又或る道德心を持つてゐたものは、頭髮をグル〳〵捲いて、帽子の內に隱くして、一時を晤ましたものであります。

ところが習慣と一種の信念といふものは、ナカ〳〵堅くて面白いもの、革命後十五年の今日になつても、國都の北京にさへ、邊隅に住んでゐるものや頑固な老人や、又前淸の遺臣等には、依然として辮髮を改めないものが、隨分多く居ります位ですから、一般の田舍には、まだ辮髮姿が多うございます。又その中には、頭の周圍は、すべて五分刈りにしながら、頂の中央に、尙幾何かの長毛を存してゐるものがあります。僅に頭髮の革命でさへ、ナカ〳〵一朝一夕には成功されないものでありまます。

革命十五年

支那も辛亥の革命から、早や十五年目になりますが、每年〳〵、種々な動亂や、戰爭が引續いてありますので、邦人も、西洋人も、これについて、種々と記載したり、評論したりしてゐます。そしてその評論者の中には、大別して樂觀論者と、悲觀論者と二種あるは、面白い對象であります。

けれども私をして云はしむるならば、支那の革命は、決して、已に終つたと云ふことは出來ません、否終つたと云ふことが出來ないのみならず、まだ今日も尙革命の初幕を演じてゐるものと見て差支へありません。

併し十四年前の辛亥の革命は、とにかく第一の有力な投石であつたには違ひありません。徐元洪氏が滅滿興漢の大旗幟を飜したその波紋は隨分と四方に波及し、四百餘州の各都會は勿論のこと、遠くは隣りの日本から、歐米諸國にも震動を及ぼしたものであります。

ところが私は常に思つてゐます、支那の革命が、若し二十年か、三十年で、一段落が附いたならば、非常は幸福だ、なるべくは、その位な期間で、一段落を附かせたいものだと。併し實際のところはそれは全くの空想で、そんな期間には、到底收まりは附きますまい。

私が觀るところでは、辛亥の秋から、今日に至るまでは、まだ支那革命の第一步と見てよろしい。それに邦人や、西洋人など、眞實何事も判らない癖に、厄氣となつて、もはや支那も統一しさうなもの、中央も地方も、共に全く平和に歸して、共和

の恩澤に浴してもよからうなど、希望したり、臆測したりするのは、實は非常に無理な注文で、抱腹に堪へません。

革命の前途

私が支那國民の本性と、古來の歴史と、又對外關係から考へて、支那革命の前途を推測しますと、今日から一番早くて先づ五十年、並みで一百年、遲くて二三百年も經つたならば、善かれ惡しかれ、所謂革命の一段落丈は、多分附くだらうと思ひます。

その一段落が、ハッキリと附く迄には、種々な動亂や、種々な戰爭や、又種々雜多な問題や、事件が、絶えず發生して、社會に、國家に影響を及ぼすことは、實に自然の數でありまして、決してそれから脫却したり、無關係でゐることは、到底出來ません。

彼の近年行はれた安直戰爭でも、奉直戰爭でも、又今度の奉國戰爭でも、將右の革命の第一段落に附かんが爲めの、避くべからざる條件でありまして、又先年張勳氏が演じた腹辟も、矢張この道程に於て、避くることの出來ない一狂言であります。

戰亂の本質

さて支那革命について、六ケ敷い理窟は暫く措いて、支那には、民國以來、年中行事のやうに、毎年或は隔年に、種々な動亂や、戰爭があります。そしてその動亂や、戰爭が、日本や外國などのと較べますと、その本質が、餘程違つてゐるやうであります。その本質とはどんなものかと云ひますと、支那のは、動亂でも、戰爭でも、初めから餘程妥協性に富んでゐるのであります。

それですから、最近でも、今日でも、動亂なり、戰爭なりが、すべて徹底的でなく、即ち眞劍勝負でなくて、いはゞ互に相談し合つて、動亂でも戰爭でもしてゐるやうな氣分が、十分鮮かに見えもし、又確かに多く證據立てらるゝのであります。

このことは、近年の安直戰爭を見ても、奉直戰爭を見ても、又目下演ぜらるゝ奉聯軍と國民軍との戰爭模樣を見ても、善く鮮かに見られます。所謂戰はずして勝つは戰の善なるものなるかも知れませんね。又支那の戰爭には、眞正の追擊を演ることが、非常に少うございます。

この追擊をしないことについて、或る人は、支那人の道德觀念から來てゐるだらうと言つてゐますが、必ずしもさうではないやうであります。これ等も、畢竟双方の心の奧底に、妥協性が潛んでゐますので、追擊をしないで、敵軍に相當の餘裕を與

へその中から、何等かの道程を見付け出さするのではないかとも思ひます。

婦人問題

革命後最近に至り、社會上に盛んに勃發しかゝつてゐるのは、婦人問題であります。西洋各國には、早くからこの婦人問題が起り、種々と研究されたり進行したり、實行されたりしてゐますし、日本にも、近年は、この婦人問題が、大分騒がしくなつて來たやうであります。

支那でも、いくら孔聖孟賢の古邦五倫の道は堅固動かすべからず、徒らに威張て安心してゐましても、それはとても駄目なもので、時勢の潮流といふものは、實に恐ろしいものであります。この兩三年といふものは、支那でも、南北を通じて、婦人問題が、ダン〳〵と擡頭しかかつてゐます。例へば結婚問題とか、戀愛問題とか、夫婦問題とか、或は女子の勞働問題とか、その一端であります。

これ等の問題についての意見や主張が、常に種々な新聞紙や、雜誌に載せられてゐるのがありますが、ナカ〳〵盛んなものであります。舊支那の婦人などには、到底見られない程のもので、そしてその意見や主張は、男子の手に成つたものもありますが、女子自身で作つたものも多うございます。

結婚問題は、無論從來の許嫁主義を打破し、一足飛びに自由結婚を主張するものが多うございまして、父母の意見などは、一馬耳東風、少しも尊重せられてゐません。戀愛問題でも、その通り、異性愛とか、同性愛とか云つて、昔から各家庭に守られて來た道德や禮儀は、全然打ち壞はして仕舞ふと云ふ大氣焔であります。

又夫婦問題では日本でも隨分問題になつてゐるやうでありますが、支那でも、ダン〳〵と問題になりかゝつてゐます。五倫の一に『夫婦有別』とありますが、彼等婦人論者の頭腦には、別とか何とかは、一切認めないで、夫婦平等の地位に立ち、互に權利義務に依りて、一家を維持して行かうと云ふのであります。古語の『夫唱婦隨』などは、以ての外の愚言だと云つてゐます。

女子の勞働

次に女子の勞働問題でありますが、これはまだ極小部分の方面で、少しづゝ調査されたり、研究されたりしてゐるばかりので、まだ活動實行の境域に達してゐないのでありますが、若し今日の勢で進み行きますならば、早晩活動實行的になり、女子

が働いてゐる各種の工場や、その他の場所に、波及するだらうと思ひます。

婦人問題のことを一寸書きました序に、支那の新婦人のことを引き出しませうか。支那にも、近年は、新しい婦人が非常に殖えました。彼等は多くは外國留學歸りとか、教會學校出身とか、或は師範學校出でありまして、その思想や感情は勿論、その頭髪や、服装さへも、普通の婦人（殊に從來の）とは、非常に違つてゐる處があります。

女子の政治運動その他

思想や感情についての詮索は、面倒臭いから先づ拔きにして、たゞ風俗の上から一瞥しましても、自轉車に乘つたり、馬上に姿を現はしたりすることは勿論のこと、或はその良人と腕を組んで歩行したり、或は若い青年の男女同伴で散歩したりします。又斷髪婦人になつて、一見男子と思はせる風體のものも往々見受けます。

殊に昨年から今年にかけて、北京の天安門（舊皇居の第一本門）の廣場で、種々な集會が催されたり、示威運動が行はるゝ際には、必ず一種の新婦人が少からず加はつてゐまして、種々と働いたり、意見を發表してゐます。そしてこれ等の女子は、決して中流以下のものばかりでなく、時には上等社會の妻君や、令嬢が、加はつてゐることもあります。

現に本年の三月十八日、國民軍が段執政府を取り圍んだ際にも種々な新しい婦人が澤山加はつてゐて、各方に奔走したり、種々と働いてゐるのを見受けましたが、やがて例の衛兵隊から、一齊射撃に出遇つても、此等新婦人の擧動は一般の男子に較べて、却つて落付いてゐて、餘りに周章狼狽せず、而かも其の間に立つて、尚種々と多少働いてゐたやうであります。

文學革命

新婦人のことは、これ位にして置いて、支那の文學界にも、革命の氣分が、次第に濃厚になりつゝありますのは、實に爭はれない事實であります。私はそれを一種の文學革命と名づけたいのであります。そして私は之が爲めに梁啓超氏と胡適氏との兩人を、最初に擧げねばなりません。

私は今支那文學界の革命について、先づ梁君と胡君とを擧げましたが、それは決して深刻的の意味からではなくて、たゞ文學上の大局上からであります。そして茲にはたゞ大局上の一方面たる文章、しかも僅にその文體のみに就いて書くのであります。

単に衣食を充分にしてやりさえすればそれで好いのではないのだからこそ、斯んな手段を取るのも亦已を得なかつたのだ。俺は考えた。

奥さんにしたところで、勞すれば即ち善を思ひさ、逸なれば即ち淫を思ふに逸ひなく、煖衣飽食、逸居無事では、實際碌なことは思附かないものなので、若し君の留守中に、碌でもないことでも出來上つたら、俺は君に合せる顔がない。而かも問題がそこまで行つてしまえば、俺にしたところで何うしやうもない事になるので、これは俺が恃むに足らず、どうしても自分の力で遣つて行くより外に致方がないと思込ませ、出來るだけ働かせるに限ると考えた。そこで老友何聘三に旨を含めて何知らぬ顔で奥さんに両替させ、結局無駄事を思ふ暇のない程に働かせるやうに仕上げたのだ。

働きさえすれば、身體の疲れで夜はぐつすれ寝込んでしまふから、全く、下らないことなど考える餘地がないわけで。

又奥さん達の仕事には、ちやんと相等にやつて行ける位の報酬を出してあるし。まあ何や彼やと、君のためには、實際俺は最上を盡した積なのだ。

君が、まだ俺を信じられないのなら、先づこれを消て吳れ

と、立上つて、劉を隣室に案内し、二つの大きな長持の蓋を取つた。

この中に在るのは、みな君の妻子が年來心血の結晶だよ。何れも日常の役に立つものばかりだし、尚又娘さんの嫁入道具としても無くてはならないものだから

召使の男を呼んで

この二つの長持を劉君の宅に擔いで行つて、奥さんと娘さんに、これは徐某からの贈物だと言つて置いて來い

更に劉に向つて、笑ひながら

何聘三は全く俺の手先に過ないのだ、俺はこの位い君及び君一家のために心を砕いたのだが、それでも、今君はお禮を言ふどころか、口を極めて俺を罵倒するのだね

徐の始終を、狐につままれたやうにして聴いてゐた劉は、急に悪夢から醒つた心地で、頓には言葉も出ず、唯感激の涙に浸りながら

あゝ、俺こそ、本當に、人間の面を被つてゐて畜生の脣を出す奴だ。

人を見る目が晦んで、君を怨みに思つたなど、全く申譯もない。實際、人非人とは俺のことだらう

徐　いや、俺が何にも事情を話さなかつたのだから、君が俺を怨んだのも無理ではない

劉は徐の手を握締めて泣き

いくら言葉を盡したとて、到底一つ時にはお禮も、お詫びも言ひ完せるものではないから、今はもう、敢えて言ふまい

劉が家に歸っての物語に、妻子も今更何の言葉も出でず

劉氏　徐さんの手のうちに生きてゐながら、徐さんを怨んでゐたのだ、初からあんなにも徐さんを信じて居りながら

爾來幾年、徐と劉の交りは永久に變らなかつた。

編者曰く。

西哲に言あり、有腦者は錢無く、有錢者は腦無しと、況や、餘り學問もない大商賈人などでは、その富貴を以つて人に驕らないものは殆ど稀である。

今徐翁がその友の爲めに圖るところを觀るに擘畫の周、體貼の密、まことに驚くべきものがある。

晩近道日に衰え、財相等しき者に在つても、而も後者岑無問なれば、車笠の盟既に渺然として又視るべからず。時に相逢ふことがあつても、僅に一揖するのみで更に禮貌も改めず、社會も之を怪しまない。そうかと思えば、偶然緩急相通れば、無端に親しくはなるが要するに酒飯の友に過ぎない。

徐翁徐稱心氣誼、負友の名を冒すを甘んずるその卓識熱腸、迥に常人の及ぶどころではない。正に相傳ふべきである。

新支那雜俎

在北京　辻聽花

私は今春初めて貴社の上村君に遇ひまして、種々談話しました結果、遂に同君から寄稿を需められましたので、一寸面喰ひましたが、貴社が遠からず支那記念號といふやうなものを特刊せらるゝといふことを聞いて、新支那雜俎といふのを書くことに致しました。

新支那と舊支那

私がこゝに新支那といひますのは、即ち舊支那といふのに對するのでありまして、種々穿鑿的に云ひますと、一寸六ケ敷なりますから、それは止めとして、私が申す舊支那とは、單に前清時代のことで、新支那とは、民國以來のことであります。

そこで私が書きます新支那雜俎は、概して民國元年以來のことでありますが。可成は最近のことや、現在のことを、なるべく多く書いて見たいと思ひますし、又時には將來の新々支那にも及ぶことがあるかも知れません。

辮髮と散髮

新支那といふのは、一寸人々の頭髮丈を見ても、直ぐに判ります。前清の頃には、すべて男子は辮髮でありまして、若しも五分刈りか、分け髮にでもしましたならば、直ぐに犯法で、重刑に處せられたのでありますが、今日では、散髮が普通になつて、前の辮髮は、骨董扱ひになつてゐます。

又前清時代には、人の敬稱に、大人とか、大老爺とか、老爺とか、一定の規則があつて、なか／＼むづかしくありましたが、革命と同時に、此等の敬稱は、全然取消され、多くは先生といふ文句を使用することになりました。

けれども、頭髮のことは、今日でこそ餘り問題ではありませんが、民國の初手、袁世凱氏が在世の頃までは、北京の市中でも、辮髮を垂らしてゐるものが、老人にも、壯年にも、子供にも、まだ非常に多くありましたので、とにかく革命の趣旨に背くといふ名目で、種々な理窟を附け、警察に命じ、各戸各人に、強制的に剪髮せしめたものであります。

中にも面白かつたのは、白晝市中で、巡査が理髮師を伴ひ、途上若し辮髮を垂らしたものを見附けますと、否應なしに直ぐ捕つて、プッツと髮を剪つたものであります。その頃辮髮に、まだ一種の愛戀があり、又或る道德心を持つてゐたものは、頭髮をグル／＼捲いて、帽子の內に隱くして、一時を晦ましたものであります。

ところが習慣と一種の信念といふものは、ナカ／＼堅くて面白いもの、革命後十五年の今日になつても、國都の北京にさへ、邊鄙に住んでゐるものや頑固な老人や、又前淸の遺臣等には、依然として辮髮を改めないものが、隨分多く居ります位ですから、一般の田舍には、まだ辮髮姿が多うございます。又その中には、頭の周圍は、すべて五分刈りにしながら、頂の中央に、尙幾何かの長毛を存してゐるものがあります。僅に頭髮の革命でさへ、ナカ／＼一朝一夕には成功されないものであります。

革命十五年

支那も辛亥の革命から、早や十五年目になりますが、每年々々、種々な動亂や、戰爭が引續いてありますので、邦人も、西洋人も、これについて、種々と記載したり、評論したりしてゐます。そしてその評論者の中には、大別して樂觀論者と、悲觀論者と二種あるは、面白い對象であります。

けれども私をして云はしむるならば、支那の革命は、決して、已に終つたと云ふことは出來ません、否終つたと云ふことが出來ないのみならず、まだ今日も尙革命の初幕を演じてゐるものと見て差支へありません。

併し十四年前の辛亥の革命は、とにかく第一の有力な投石であつたには違ひありません。徐元洪氏が滅滿興漢の大旗幟を翻したその波紋は隨分と四方に波及し、四百餘州の各都會は勿論のこと、遠くは隣りの日本から、歐米諸國にも震動を及ぼしたものであります。

ところが私は常に思つてゐます、支那の革命が、若し二十年か、三十年で、一段落が附いたならば、非常は幸福だ、なるべくは、その位な期間で、一段落を附かせたいものだと。併し實際のところはそれは全くの空想で、そんな期間には、到底收まりは附きますまい。

私が観るところでは、辛亥の秋から、今日に至るまでは、まだ支那革命の第一歩と見てよろしい。それに邦人や、西洋人など、眞實何事も判らない癖に、厄氣となつて、もはや支那も統一しさうなもの、中央も地方も、共に全く平和に歸して、共和

の恩澤に浴してもよからうなど、希望したり、臆測したりするのは、實は非常に無理な注文で、抱腹に堪へません。

革命の前途

私が支那國民の本性と、古來の歴史と、又對外關係から考へて、支那革命の前途を推測しますと、今日から一番早くて先づ五十年、並みで一百年、遲くて二三百年も經つたならば、善かれ惡しかれ、所謂革命の一段落丈は、多分附くだらうと思ひます。

その一段落が、ハツキリと附く迄には、種々な動亂や、種々な戰爭や、又種々雜多な問題や、事件が、絶えず發生して、社會に、國家に影響を及ぼすことは、實に自然の數でありまして、決してそれから脱却したり、無關係でゐることは、到底出來ません。

彼の近年行はれた安直戰爭でも、奉直戰爭でも、又今度の奉國戰爭でも、皆右の革命の第一段落に附かんが爲めの、避くべからざる條件でありまして、又先年張勳氏が演じた腹辟も、矢張この道程に於て、避くることの出來ない一狂言であります。

戰亂の本質

さて支那革命について、六ケ敷い理窟は暫く措いて、支那には、民國以來、年中行事のやうに、毎年或は隔年に、種々な動亂や、戰爭があります。そしてその動亂や、戰爭が、日本や外國などのと較べますと、その本質が、餘程違つてゐるやうであります。その本質とはどんなものかと云ひますと、支那のは、動亂でも、戰爭でも、初めから餘程妥協性に富んでゐるのであります。

それですから、最近でも、今日でも、動亂なり、戰爭なりが、すべて徹底的でなく、即ち眞劍勝負でなくて、いはゞ互に相談し合つて、動亂でも戰爭でもしてゐるやうな氣分が、十分鮮かに見えもし、又確かに多く證據立てらるゝのであります。

このことは、近年の安直戰爭を見ても、奉直戰爭を見ても、又目下演ぜらるゝ奉聯軍と國民軍との戰爭模樣を見ても、善く鮮かに見られます。所謂戰はずして勝つは戰の善なるものなるかも知れませんね。又支那の戰爭には、眞正の追擊を演ることが、非常に少うございます。

この追擊をしないことについて、或る人は、支那人の道德觀念から來てゐるだらうと言つてゐますが、必ずしもさうではないやうであります。これ等も、畢竟双方の心の奥底に、妥協性が潜んでゐますので、追擊をしないで、敵軍に相當の餘裕を與

へその中から、何等かの道程を見付け出さするのではないかとも思ひます。

婦人問題

革命後最近に至り、社會上に盛んに勃發しかゝつてゐるのは、婦人問題であります。西洋各國には、早くからこの婦人問題が起り、種々と研究されたり進行したり、實行されたりしてゐますし、日本にも、近年は、この婦人問題が、大分騒がしくなつて來たやうであります。

支那でも、いくら孔聖孟賢の古邦五倫の道は堅固動かすべからず、徒らに威張て安心してゐましても、それはとても駄目なもので、時勢の潮流といふものは、實に恐ろしいものであります。この兩三年といふものは、支那でも、南北を通じて、婦人問題が、ダン／＼と擡頭しかかつてゐます。例へば結婚問題とか、戀愛問題とか、夫婦問題とか、或は女子の勞働問題とか、その一端であります。

これ等の問題についての意見や主張が、常に種々な新聞紙や、雜誌に載せられてゐるのがありますが、ナカ／＼盛んなものであります。舊支那の婦人などには、到底見られない程のもので、そしてその意見や主張は、男子の手に成つたものもありますが、女子自身で作つたものも多うございます。

結婚問題は、無論從來の許嫁主義を打破し、一足飛びに自由結婚を主張するものが多うございまして、父母の意見などは、一馬耳東風、少しも尊重せられてゐません。戀愛問題でも、その通り、異性愛とか、同性愛とか云つて、昔から各家庭に守られて來た道德や禮儀は、全然打ち壞はして仕舞ふと云ふ大氣焔であります。

又夫婦問題では日本でも随分問題になつてゐるやうでありますが、支那でも、ダン／＼と問題になりかゝつてゐます。五倫の一に『夫婦有別』とありますが、彼等婦人論者の頭腦には、別とか何とかは、一切認めないで、夫婦平等の地位に立ち、互に權利義務に依りて、一家を維持して行かうと云ふのであります。古語の『夫唱婦隨』などは、以ての外の愚言だと云つてゐます。

女子の勞働

次に女子の勞働問題でありますが、これはまだ極小部分の方面で、少しづゝ調査されたり、研究されたりしてゐるばかりで、まだ活動實行の境域に達してゐないのでありますが、若し今日の勢で進み行きますならば、早晩活動實行的になり、女子

が働いてゐる各種の工場や、その他の場所に、波及するだらうと思ひます。

婦人問題のことを一寸書きました序に、支那の新婦人のことを引き出しませうか。支那にも、近年は、新しい婦人が非常に殖えました。彼等は多くは外國留學歸りとか、教會學校出身とか、或は師範學校出でありまして、その思想や感情は勿論、その頭髮や、服裝さへも、普通の婦人（殊に從來の）とは、非常に違つてゐる處があります。

女子の政治運動その他

思想や感情についての詮索は、面倒臭いから先づ拔きにして、たゞ風俗の上から一瞥しましても、自轉車に乘つたり、馬上に姿を現はしたりすることは勿論のこと、或はその良人と腕を組んで步行したり、或は若い靑年の男女同伴で散步したりします。又斷髮婦人になつて、一見男子と思はせる風體のものも往々見受けます。

殊に昨年から今年にかけて、北京の天安門（舊皇居の第一本門）の廣場で、種々な集會が催されたり、示威運動が行はるゝ際には、必ず一種の新婦人が少からず加はつてゐまして、種々と働いたり、意見を發表してゐます。そしてこれ等の女子は、決して中流以下のものばかりでなく、時には上等社會の妻君や、令嬢が、加はつてゐることもあります。

現に本年の三月十八日、國民軍が段執政府を取り圍んだ際にも種々な新しい婦人が澤山加はつてゐて、各方に奔走したり、種々と働いてゐるのを見受けましたが、やがて例の衞兵隊から、一齊射擊に出遇つても、此等新婦人の擧動は一般の男子に較べて、却つて落付いてゐて、餘りに周章狼狽せず、而かも其の間に立つて、尙種々と多少働いてゐたやうであります。

文學革命

新婦人のことは、これ位にして置いて、支那の文學界にも、革命の氣分が、次第に濃厚になりつゝありますのは、實に爭はれない事實であります。私はそれを一種の文學革命と名づけたいのであります。そして私は之が爲めに梁敬超氏と胡適氏との兩人を、最初に擧げねばなりません。

私は今支那文學界の革命について、先づ梁君と胡君とを擧げましたが、それは決して深刻的の意味からではなくて、たゞ文學上の大局上からであります。そして玆にはたゞ大局上の一方面たる文章、しかも僅にその文體のみに就いて書くのであります。

とにかく今日の新聞や雜誌や、一般の著書に書き現はさるゝ普通の文章の體裁は殆んど梁君がその開山、少くともその鼓吹者、實行家とも云つて善いのであります。窮屈で六ケ敷い古文體から脫して、一種の新文體、即ち今様式を書き出したのは、實に梁君であります。

梁君は、本來古文の研究や涵養が、十分有つた上に、外國の思想や感情や、又は翻譯語を、自己の鎔爐の中に取入れ、それを善く融化したり、接續したりして、別に一種の新文體を書き出したのであります。殊に日本に使用せらるゝ種々な名詞や文句を、程よく支那文の中に借用し活用したのであります。

それで梁君を、日本の新文章家に譬へて云ひますならば、幾分か故福澤諭吉氏や故福地櫻痴居士に似たところもありますが、寧ろそれよりか降つて、徳富蘇峰氏に似てゐる處が澤山あります。日本の今日の一般の文章が、前記の三氏、殊に徳富氏に負ふところが多いやうに、支那の今日の新聞や雜誌や、普通の著書に現はるゝ文章は、實に梁君に負ふところが一番多うございます。

胡氏と白話文

それから胡君でありますが、それは口語體の文章、即ち所謂白話體（俗話）の文章を書き初めたもの、少くも極めて巧妙に、而かも世人の有勢力的に愛讀せらるゝのは實に胡君の書きものであります。今日種々なものに書かれたり、小說などに書かれてゐる一種の新式的白話文は確かに胡君がその元祖と云つても差支ないのであります。

それで胡君を日本文章家に、譬へて云ひますならば丁度故山田美妙齋氏に似寄つてゐませう。とにかく明治の文壇に於て、即ち言文一致の文章を書き初め、そしてそれを鼓吹しましたのは、實に山田氏でありまして、今日の新聞や、雜誌や、小說や、その他種々のものに、言文一致の非常に多いのは、山田氏に負ふところのものが莫大であります。

支那でも、流石に文字の國丈あつて、種々澤山な佶屈聱牙な文字や文句を巧みに陳列して、冏結せる眞中に於て、嶄然と白話の大旗幟を飜へし、自分で盛んに書いたり、鼓吹したもの、否今日でも盛んに之を書き之を鼓吹してゐるのは、實に胡君でありまして、今日の支那文學界に於て、白話文の色彩が、一方に灼々と輝き出してゐるのは、實に胡君の努力に負ふところが決して少くはありません。

新舊思想の衝突

今日の支那は、新舊の兩思想が、或る一部分の社會には、盛んに衝突し始めてゐます。この衝突は、何れの國にも免かれませんごとで、日本でも、長い間新舊思想の衝突がありましたばかりでなく、今日でも現に種々な方面に於て衝突がありますやうに、流石に固陋極まる支那にも、民國以來は、ダン〲と衝突が萠し出し、殊に歐洲大戰以來は、急に激しく衝突が始まつたのであります。

この新舊思想の衝突は、各種の方面に始まつてゐますが、一番手近かな實例は、家庭問題であります。支那人の家庭は、誰も知つてゐますように、太昔から聖賢五倫の道德が、基礎となつて成り立ち、それに財產の分配法や、親族との關係が、種々な原因からして、確定してゐまして、勿論たとへその中には、之れが爲に却つて種々な弊害もないではありませんが、とにかく一定動き難い家庭が組織せられてゐるのであります。

ところが近年新しい思想が、ダン〲一部分の國民間に浸潤し來り、殊に歐米や日本に留學して歸つて來たものや外國を遊歷したりしたもの、云はゞ一種の新智識階級の間には、家庭問題につき、從來抱いて來た思想の上に、ダン〲と疑團を生ずるやうになつて來たのであります、支那では、それを家庭革命と唱へてゐます。

この家庭革命の中には、種々なものがありますが、中にも家庭間の關係、例へば親子とか、夫婦とか、兄弟姉妹とか、又は結婚のこと、妾のことゝか、財產のことゝかが、その中心となつてゐるやうであります。殊に夫婦間のことや、結婚のことや、財產のことなどは、隨分と種々動搖しかゝつて來てゐます。

ある特別な一ツの實例でありますが、私の友人に有名な學者で文人であつた、故某君がゐましたが、その息子は、日本に留學したことがあります。そしてその友人は、妾を二人家に蓄へてゐたのであります、が、それは從來の支那でいへば、先づ當り前で、二人といふのは寧ろ少ない方であります、のみならず其人は、別に淫亂などいふことは少しもなかつたのであります。ところがその息子は、日本の學校に學び、又種々の書籍を涉獵してから、自分の父が妾を、蓄へてゐることに、大不滿を起し、その生前にさへ、その事を文章に書き散らして、新聞や雜誌に載せて、父親の不道德なことを、種々世間に發き出して、大に氣焰を吐いたのであります。

しかるにその父親は、間もなく病死したのでありますが、その際が大變でありました。それは何かと云ひますと、その長男である息子が、自分の主義と違つてゐて、妾を蓄へるなどいふ

不倫なことをやつた父親であるからといつて、遂に父の喪に服せず、その葬儀にも携さはらなかつたので、已を得ず、その叔父が、代つて喪主となつて、葬式を濟ませたのでありますが、その頃北京では、家庭革命の一ツだといつて、一時大評判でありました。

とにかく右の例は、一種特別な事實ではありますが、畢竟するに、新舊思想の衝突が、その腹底に潜んでゐる爲めでありまして、その思想衝突は、第一は辛亥の第一革命が、最初の導火線となり、そして欧洲大戰後の世界思潮が、廻はり〱て、非常に影響してゐるのであります。

支那の劇界

それから今度は、方面を一變して、支那の劇界を覗いて見ませう。劇界も、矢張革命の影響を受けて、舊支那の芝居と、今日のとは、種々の點に於て可なり、相違してゐるのがあります。それ等も要するに、共和民國になつてから、觀客の頭も、餘程變つて來ましたし、又役者の考へも、昔とは多少新しい方に向ひつゝあるからであります。

申すまでもなく、支那の芝居を大別しますと、舊劇と、新劇と、女優劇の三つになりますが、中にも新劇と女優劇とは、民國以來、初めて盛んになつたのであります。

先づ舊劇の方から云ひますと、舊劇は革命以前までは、たゞ昔から傳はつて來たまゝの脚本と型とで、演つてゐたのでありますが、(固より多少の新脚本は前清の末年にも出來ました)民國になつてからは、ダン〱と、新しい脚本が出來始め、殊にこの兩三年には、新脚本が割合に多く世に現はれ、舞臺に演ぜらるゝやうになりました。

蘭芳と小雲

そしてその新脚本を多く演じますのは、北京の名優では、例の梅蘭芳を初め、尚小雲や、程艶秋や、朱琴心や、徐碧秀など(女優は別に書きます)でありますが、殊に面白いことは、その新脚本といふのが、何れも〱皆花衫といつて、女方の『をやま』が主人公になるものばかりであります。

それで男役が主人公になる脚本といふのは、民國十五年間、至つて稀で、(勿論新劇物にはありますが)殊に老生と云つて老人の影役や、武生といつて武劇を演る役や、大花臉といつて、敵役や、老旦といつて老女役などが演る脚本は、たゞ現に無いばかりでなく、作者の頭にも、毛頭そんな考へがないのであります。

營業の利益

その花衫が演る新脚本ばかり出來る重なる原因は、何かと云ひますと、一ッは此の種の脚本は、割合に編し易いばかりでなく、又一ッは劇場の營業上、老生のよりも、武生のよりも、大花臉のよりも、又老旦のよりも、矢張花衫の演る新脚本を登場する方が、客を呼ぶに易く、利益が非常に多いからであります。

次に支那の新劇は、矢張前清光緒の末年から萠芽を放ち、宣統を經、民國に入つてから俄かに長足の進歩をなし、今日でも矢張上海が、その根據地になつてゐます。そして新劇の起因は、略日本の壯士芝居と同じく、もと〳〵一種の新思想を抱き、格別の技藝の出來るものが、自國の振はないのと、社會の腐敗せるとに不平を起し、それを矯正振興せんが爲めに、新劇といふものを、作り出したものであります。

それでありますから、最初新劇を編したり、それを演じたりしましたのは、多くは日本留學生とか、日本や西洋の翻譯書を讀んだもの、詳く云ふならば嶄新な智識階級、若くは一種の志士論者等でありまして、夫の有名な劉藝舟君の如きは、新劇壇上にかける有數な立役元勳であります。

こんな塩梅で、支那の新劇が出來たのでありますから、自然とその人々の頭腦中には、革命思想があり、又廣東其の他の往年の革命黨とも關係があり、隨分激烈な分子が、その中に混づてゐましたので、民國の初年には、時の大總統袁世凱氏は、新劇團の北京に入り來るのを、非常に憎惡し、或は演劇を禁じたり、或は役者を監視、若しは放逐したりしたものであります。

城南遊藝園

それで新劇は、北京では一向に流行せず、發達せず、又北方人の頭は、全然從來の舊劇觀に固結してゐますので、今日でも、新劇の役者は、容易に入京せず、又普通の劇場では、更に新劇を興行せず、僅かに北京唯一の娛樂場である城南遊藝園で、時に上海登りの新劇團が、芝居を演つてゐるばかりであります。

そして今日の新劇はと云ひますならば、最初のよりか、餘程進歩しては來ましたが、丁度日本で、二三十年前一時流行した、川上音二郎式のが多く、素人には固より判り易くて面白くもありますが、劇として詳細に批判しましたならば、まだ非常に幼稚で、簡單で、淺薄なものであると云つて、決して差支

ありません。

支那の女優

次は支那の女優でありますが、支那には、大昔から歴代一種の女優がありまして、舞臺に登つて歌舞を演つたものであります。ところが今日の女優といふものは、重に前淸の末年から興りましたもので、殊に民國になつてからが、ダン／＼と盛んになりました。

今日の處で、支那の女優と云ひますのは、南北を通じて、すべて三四千人位はゐませうが、その中で、北京と、天津と、上海とが、一番多く、次が廣州（廣東省の）と漢口とであります。そして藝も上手で、評判の善いのは大低北京に集まつてゐまして、廣州の女優は、一寸特別なものになつてゐます。

碧雲霞

今日の女優で、評判の最も高いのは、碧雲霞とか、琴雪芳とか、息曉峰とか、奏鳳雲とか、孟小冬とか、蘇蘭舫とか、金桂芬とか、蕋榮萱とか、小蘭英とかでありまして、今春日本に遊つて來ました十三旦なども、女優としては。第一流の株になつてゐます。

此等の女優は、矢張り男優と同じく、種々な專門な役柄がありまして、帮の立役もゐれば、立ち廻りを演る武劇の役柄も居り、顏を種々に塗り立てる敵役や惡方もゐれば、靑衣とか、花旦とかになる女優も居り、又鼻の先きを一寸白く塗つて、滑稽を演ずる役もゐます。

中にも一般の素人が觀て、一寸女優と思はれませんのは、立ち廻りをやる役の武生と、敵役や惡方をやる大花瞼とでありまして、その武生が舞臺の上で、劍を振り廻はしてたり、槍を使つたりする際などは、如何にも活潑で激げしく、電光石火觀客の目を炫せんばかり、到底もか弱い女子の技とも思はれません位であります。

それから 大花瞼が、顏を眞黑や、眞赤や、眞白や、時には種々な鬼面に塗つて、舞台に現はれ、その態度が、如何にも傲慢無禮、それに一種破鐘見たやうな大音聲で、種々な曲を歌ひます時などは、どう見ましても本當に男優としか思はれないで、とても異性の女優として承知することが出來ない位であります。

その女優劇が、一時は非常に流行し、殊に民國の四五年から七八年にかけては、非常な景氣でありまして、北京の劇場でも、有名な女優は、大競爭で奪ひ合ひ、從つてその給料も、莫

大な金額に上つたものであります。

しかるに爾來女優の勢力は、ダン〱と少しづゝ降坂になり、殊にこの二三年間は、略ぼ男優と對立して、營業を維持する位になりましたが、併しどんなに云ひましても、目下の處では、女優の技藝は、男優に較べまして、とても及ばない處がありますので、支那人のその道に精しいものに聞きましても、女優の藝は、矢張男優のに比べて見劣りがするものだと云つてゐます。

革命と劇場

又革命以後は、支那芝居の、劇場と舞台とにも、多少新しい生面を開いて來たのであります。その以前には、全國の各劇場は、すべて千篇一律的に、今日でも北京や、各地方(上海天津漢口などは除く)に多く見受けるやうな、舊式のものばかり(上海の一二は除く)でありましたが、民國以來は、ダン〱と、新式の劇場が出來るやうになりました。

その新劇場と云ひますのは、普通に改良舞台と稱へ、その建築は、いはゞ一種の洋館式で、外部は煉瓦が、半木半瓦の構造に係り、舞台は多くは、廻り舞台を用ひ、それに舊來の芝居と違ひ、種々な一種の背景や、道具を使ひ、時としては引幕をも用ふることもあります。(舊式の劇場では一切幕を引かない)

そして觀劇席は、普通舞台に對して、半圓形になつてゐて二階か三階かに、座席は後部が次第に高くなつて居り、舊式の劇場が、光線が充分でなく、白晝さへも薄暗く、又通氣も悪いのに引き較べて、新劇場のになりますと、光線にも、通氣にも、可なり注意が加へられてゐますので、見物人の方でも、芝居を見るのに、餘程便利であります。

活動寫眞

芝居のことを書いた序に、一寸活動寫眞の方面を覗いて見ますと、支那では、それを電影戲と云ひ、隨分舊くから映寫され、民衆娛樂の一に算せられかゝつたのでありますが、その影畫は、すべて西洋から運ばれて來たものばかり、稀には西洋人の手で、支那で製作せられたものもありました。

ところが何れの國も同じく、活動寫眞は、到る處民衆に歡迎せられますので、次第に流行し始め、第一に常設館が上海に建てられ、その後ダン〱と、各地に波及して、今日ではまだ至つて少數ではありますが、支那全國に於ける常設館が、百餘軒もあり、その中で、上海のがその四分の一を占めてゐます。

活動寫眞の營業がダン〱と盛んになり、又一方には、自

國で作つた自國の映畫が、最も必要であると云ひますので、一種の小さな投機者などが、少許の資本を以て、民國の二年に、映畫會社が、初めて上海に出來ましたが、その後ダン／＼と殖え、大小五十餘の該會社がありまして、作品を發表してゐます。

北京にも、今日では、西洋人が經營してゐる平安活動を始め、眞光とか大觀とか、明星とか、中天とか、三四軒の常設館では、毎晩開幕していづれも相當の營業成績を擧げてゐますのは支那に於ても、活動寫眞は、今後ます／＼流行發達して行く趨勢が、十分に看取せられます。

新聞雜誌

次に支那の新聞や、雜誌のことを、一寸書いて見ましよう。支那では一種の、新聞は、隨分舊くからありましたが、そのことは先づ拔きとして、西洋式の新聞が、初めて上海に支那に現はれましたのは、今から約五十年前でありましたが、最初の分は間もなく廢刊し、繼いで矢張上海で發行せられましたのが、今日でも續いて發行してゐる『申報』であります。

この『申報』は、日本の新聞に譬へて云ひますならば、先づ前の郵便報知新聞とか、最初の讀賣新聞とか、昔の東京日日新聞とかいふ格の新聞でありまして、支那今日の新聞紙中では、最も舊い新聞であります。この『申報』は、もとは普通の薄い唐紙に刷り、それを折り疊んであつたものでありますが、今日では、紙質も體裁も、普通の新聞と同樣になつてゐます

それから上海ではダン／＼と新聞が殖え、又北京でも、民國以來は、俄かに新聞社が出來、袁世凱氏生存の際にも一番多かつた時は、百二十餘社もあり、その後一時頓挫を來たし、新聞社の數も、非常に減りましたが、この四五年來は、又た雨後の筍のやうに、新聞社が現はれ、今日では、上海に三十餘社、北京に七十餘社といふ、澤山な新聞社が、看板を掛けてゐる有樣であります。

發行紙數その他

ところが、その各新聞社が賣り出す發行部數を、一寸調べて見ますと、驚く勿れ、支那新聞界の大王である、上海の『申報』と『新聞報』でさへ、一日僅々四五萬枚、次が『時報』で約一萬枚、以下いづれも一萬枚以下普通多い處で、二三千枚から四五千枚であります。

それから北京の新聞紙は、上海のよりかズット發行紙數が少く、公平に算して一番多いのが、僅かに一ッの順天時報で、し

かも約二萬枚の間を上下し、次が『眞報』で、約一萬枚次が『益世報』で七八千枚、その次が、『世界日報』で三四千枚、その他は多くて二三千位に過ぎません。何と情ない憐むべき言論界の狀態ではありませんか。

そして上海の新聞社と、北京の新聞社とは、その經營の仕方が、全然相違してゐるのは一寸面白い現象であります。そしてその仕方が相違してゐます丈に、その社の基礎が亦從つて相違してゐますので、その紙面に現はるゝ言論や、記事までも自づと違つてゐるのであります。

その經營の仕方が違つてゐると云ひますのは、上海の新聞社は、重に營業本位でありますが、北京の新聞社は、殆んど皆某要人（有力な大官政客）の機關であります。それで上海のは、相當の資本金を備へてゐますので中央政界の波瀾如何に拘はらず、年中依然發行を續けて行かるゝのでありますし、從つて一般讀者の信用も次第に厚くなります。

しかるに北京の新聞社は、殆んど皆某要人の機關でありますから、その要人が、政界に於て時めく間は、錢の融通も相當に利きますので、賣れても賣れないでも、景氣よく新聞を發行しますが、一旦政變が起り、その要人が沒落しますと、その新聞は、一落萬丈で多くは停刊閉門するのが普通であります。

右のやうな次第でありますから、その關係は每日紙上に現はるゝ言論や、記事に及び、上海の新聞は割合に公平で、確實なことが多いのに反し、北京の新聞は常に某要人の爲めに盛んに提燈を持ち、從つてその言論や、記事に公平を缺き、確實でなく故意に論言を捏造することが往々有るのであります。

上海の雜誌

それから雜誌の方面を覗きますと、約三十年前に、上海に時務報（汪康年氏等）といふのがあり、日本の橫濱に、淸議報（梁啓超等）といふのがあり、その後上海に於て、種々な雜誌が發行せられ、殊に革命以後は、急速に增加しまして、一時は二三十種の多きに及び、今日でも相當に販路の多い雜誌は、大約十餘種位ありまして、その中でも、東方雜誌とか、小說月報とか、兒童世界とか、いひますのは、今日の雜誌界では、一番評判の高いものでありまして、從つてその販路も可なり多いのであります。

ところがその各雜誌の販路の模樣を調べて見ますと、實に驚くべく、又憐むべきではありませんか、一番多く發行するのが、東方雜誌で、每號約一萬部、次が兒童世界で、每號八九千部、次が小說月報で、每號三四千部、その他は割合に有名なの

で、僅かに一千部か、四五百部に過ぎません。

概して云ひますと、支那では、新聞の方は、割合に發達し、その發行高も、可なり多くなりましたが、雜誌の方は、最初から今日に至るまで、一向に發達しないで、全國中誰でも知らないものはないと云ふ位に、有名で發行部數の頗る多い大雜誌は、まだ一種もありません。のみならず從つてその評判とか、勢力とかいふものは、全く零でありまして、日本の雜誌などは、到底比較することの出來ないものであります。

その有名な文字の國である支那であり乍ら、新聞と雜誌とが、一向に發達しない所以のものには、種々な事情と關係とがありまして、決して一概に速斷することは出來ませんし、又その新聞と雜誌との內容と營業振りにも、固より非常に關係するのでありますが、その最大の原因は、左の二ツだと思ひます。

その一ツは、國民敎育、即ち普通敎育の發達しないのと普及しない爲めで、他の一ツは、交通機關の不備の爲めでありまして、この二ツが發達し、普及し、完備さへしますならば、支那の新聞と雜誌とは、必ず非常に發達し進歩するに違ひないと思ひます。

政黨政派

それからトンダ處に飛びますが、支那でも、民國以來は、一時國民黨とか、統一黨とか、民主黨とか共和黨とか、進步黨とかいつて、種々な政黨や、政派があり、國會(參議院と衆議院)でも、澤山な議員等が、いろ〳〵と騷ぎ立てたものであります。

ところが彼等政客の生活振りは、概して相應に贅澤でありまして、中には素晴らしい榮華を極めたものもゐました。しかるに、政變は、幾度も繰り返され、國會も解散されたり、議員も壓迫されたりして、その收入は、從つて激げしく增減するものであります。

日本でならば、幾度も議員選擧を爭つたり、政界に奔走したりするものは、多くは自己の財產を傾けたり、家屋敷や、田畑迄も、賣り飛ばし、その擧げ句は、非常に貧乏になるものが少くないやうでありますが、支那の議員や政客には、そんなことが、殆んど絕對にありません。

それは何故かと云ひますと、支那の政客も、多くは一種の道樂的とか、投機的とかで、隨分烈げしく奔走したり選擧を爭つたりしますのでその運動費や、生活費にも、隨分澤山な金錢を要するのでありますが、支那人は、その費用を自己の財產には、少しも手を着けず、全然その外から錢を工面して來て、使用するのであります。

ですから政變で、その地位や仕事が、俄かに變動しても、又選擧運動に失敗しても、毎日の生活振りは、以前とは餘程違ふやうにはなりましても、自己の財產は、依然として存在し、故郷にある家屋敷も、田畑も、完全に維持されてゐますので、實際毎日の生活に困窮するといふことは更になく、日本の政客のやうに、之が爲めに財產を無くしたり、家屋敷や田畑までも、人手に賣り渡すといふやうな事は、滅多に無いのであります。

支那人と錢

それから支那人は、金錢に非常に汚ない、吝嗇である、狡猾であると、一般の邦人は、誰でも善く言ふことでありますが、私が見るところでは、支那人は必ずしも金錢に汚ないでもなく、吝嗇でもなく、又狡猾でもないやうであります。

若し邦人ならば、他人の前では、買物を餘り値切つたり、少しばかりの俥代を爭つたり、二三錢か、五六錢の釣錢は要らないとか云つて、一寸體裁を作つたりしますが、支那人は、こんなことは、決して爲さず、否そんな人をば一種の馬鹿として笑ふのであります。

それはどんな緣故から來てゐるかと云ひますと、支那人の頭では、品物と値段は、相當なのが本則である、(廉ければ尙善いのは勿論でありますが)それに相當以上の値段で、物を買つたり、十錢相當の俥代を、二三錢でも高く拂つたりするのは、無法である、馬鹿である、五錢のならば五錢拂へばよろし、九十八錢の物を買つたらば、一圓遣つて、二錢を受取つてよろしい、と云ふのであります。

一寸邦人の頭で考へて見ると、何だかケチ臭くもあり、可笑しくもあるやうでありますが、よく〳〵細かに考へて見ましたならば、それは少しもケチでもなく、可笑しくもなく、全く當り前のことで、寧ろ少しも怪むに足りないことが、善く判るでありませう。

私が先年上海で實驗しました一例を擧げて見ませうか、或る日支那の友人が、料理屋で馳走をするといふので、途中で俥を雇はうとしましたが、値段が少し貴い(外國人がゐるから尙更であります)ので、ナカ〳〵談判が纒らないで、一丁餘も引きづられて歩き、ヤツトのことで、俥に乘つたのであります。

その時、私は竊かに車代の二三錢を、あんなに厄氣になつて爭つた位であるから、御馳走は、どんなものであらう、とても旨い料理は食べられまいと思つたのであります。ところが私の考へは、全く裏切られて、やがて料理は上等なのが、ドシ〳〵と運ばれ、お負けに、五六人の藝者までも呼び込んで、一時の盛會になつたので、私は一寸ビツタリ致しました。

右は一寸した一例でありますが、支那人にはその外にも、これに似寄つた種々なことが、澤山ありますが、私に云はしめますと、支那人は、眞に善く金錢を使ひ、使ふべからざるものは、決して一錢も使はず、使ふべきものは幾何でも使ふといふので、最も善く眞の經濟主義に適つてゐると思ひます。

日本古典文學に就て

謝　六　逸

東洋諸國の文學に就て、その萌芽は稍遲れたるも、結實は却つて極めて華麗なるものには、日本文學を數へざるを得ない。印度や支那の文學は、其發源こそ日本に先んじて居るが、今日に至つて何處に偉大な收獲が有ると云へるであらう。明治大正時代の文學は、之を經濟政治などに較べて、更に一段の進歩をなしたことは、是れ顯著の事實である。此の三十餘年間に、日本文學は已に世界文壇の裡に於て確定的位置を占むるに至つた。これ固より一朝一夕の仕事ではない。日本文學が斯る長足の進歩を爲し得たことは、實に東洋の他の民族をして驚異と羨望の心を起さしめた。されば日本文學の研究は、東洋人——就中支那人の一個の重要なる仕事であらねばならぬ。

支那に於ける一般の人士は、日本文學の研究なる一語を耳にする毎に、直ちに一種輕蔑の心を生じ、「日本文學が果して研究に値するであらうか」と云つた樣な懸念が、始終談話の中に見出される。長い間日本に居た留學生でも、その多くは政治經濟法律科學等を研究した人々で、矢張日本の文學を輕視することを免れない。眞に嘆かはしい次第である。其の原因を究むれば、即ち彼等が日本の古代文學或は近代文學に對して、一人として勉めて之を研究しようとするものが無かつたからである。彼等は想へらく、「日本古代の一切の文化は、隋唐の時代に支那から朝鮮を通過して、日本に流れ込んだものでないものはない。衣服飲食家屋は皆支那の模倣である。文字は猶更云ふ迄もない。片假名は支那文字の邊旁であり、奈良朝の末葉に發明されたといふ平假名は、即ち支那の草書である。今日に成つても、深山の日本語研究者の中には、日本文を目して一種の外國文字と考へて居るものがある。人をして失笑せしむる次第である。であるから日本文學の内容と價値とは、現在の支那に在つては、誰一人之に意を注ぐものがない。」

余は日本の古代及近世の文學に對して、頗る嗜好の深い一人である。刺身、風呂、江戸川の櫻などの嗜好以上である。余の

日本文學研究には二つの目的がある。(一)日本文學を以て東洋に於ける最も發達した文學として研究すること。(二)中日文化關係の密接なること。之に加へて余が世界文學研究に對する趣味は、余をして日本文學をも愛好せしめること。此等に因て余は略日本文學の知識を有し、日本の古典文學に對して亦幾多の感想を有する。今其一二を略說して見よう。

第一、日本人は創造力と模倣力との最も强い民族である。古事記、萬葉集、古今集、源氏物語等に就て觀察するに、その偉大さは、人をして驚異せしめるものがある。古事記第一卷中に、諸神の產生が、兄妹二人の交歡に由つて行はれたことを敍してある。斯る赤裸々な原始的な天眞な記載は、實に世界の各民族中に無い所で、之を希臘印度の擬人化した開闢神話に比較すれば、更に人間性に近い。此の一部の極めて想像力に富んだ日本の神話は、人をして嘆服の外無からしめるもので、無上の美と素樸とを具へて居る。支那の「搜神記」「三五歷記」等の書中にも、實際斯る描寫を發見することは出來ない。

……こゝにいざなぎの命、我身は成り成りて成り餘れるところ一處あり。かれ、この吾身の成り餘れるところを、汝身の成り合はざるところに刺し塞ぎて、國生み成さむと思ふは如何にと詔ば、いざなみの命、然か善けむと答曰ふ。……

かくも「無邪氣」に神の戀愛を寫すところに日本民族の想像力の偉大さが窺はれる。これ決して矯揉した小刀細工の作ではない。

「萬葉集」中の歌句には、數多の頗る傑出せるものが存在する。東洋詩歌としては、自ら第一に指を支那に指を屈せねばならぬが、支那には嘗て三十一字形の短歌がない。此れは日本特有の產出物と云はざるを得ない。短歌は一見簡陋にして深意無きに似たるも、然も能く一時の情感を捉へて、三十一字の形式を以て寫し出したところ、實に一種單純なる情趣がある。萬葉詩人中で余の好む者は、矢張山部赤人と柿本人麿である。余は曾て此の兩人の歌各十四首を譯して、之を上海の「文學週報」紙上に載せたことがある。「柿本人麿妻死之後泣血哀慟作歌」は、余をして頗る輕淡なる凄涼味を感ぜしめる。今余の譯詩と原詩とを次に掲げて見よう。

天飛ぶや輕の路は　吾妹子が里にしあれば　ねもごろに
見まくほしけど　やまず行かば人目も多み　まねく行か
ば人知りぬべみ　さねかづら後も逢はむと　大船の思ひ
たのみて　玉かぎる磐垣淵の　こもりのみ戀ひつつある
に　わたる日の暮れゆくがごと　照る月の雲がくるごと
沖つ藻の靡きし妹は　もみじ葉の過ぎていにきと

玉づさの使のいへば　あづさ弓音に聞きつつ　言はむすべ　せむすべ知らに　音のみを聞きてあり得ねば　わが戀ふる千重の一重も　なぐさむることもありやと　わぎもこがやまず出で見し　輕の市にわが立ち聞けば　玉だすき畝火の山に　鳴く鳥の聲も聞えず
たまぼこの道行く人も　ひとりだに似てし行かねば　すべを無み妹が名呼びて　袖ぞ振りつる

輕是妻的鄉里，
到輕去的路途，時時可見，
若竟去了、要惹人家的注意，
常々去呢，人家會知道的。
我心這般思忖．
橫竪日後要相逢，
便坐在屋裡戀想着渡日，
不去又何妨呢！
水藻般附在我身旁的妻呀！
儞如落日夕陽
儞如浮雲蔽着的月兒，
――逝了，逝了，逝了。
使者來告時，
聽着他的聲音，
我無所措，忐忑不寧。
我深深戀着的情，能有幾分得着安慰！
我妻平日眺望的輕市，
我在那裡佇立着聽――
畝火山的鳥聲猶昔，
何處能聽妻的聲音！
路上來往的行人，
更無一個似我妻，
吁嗟！萬事皆休，
喚着妻的名兒，
拂袖而歸。

詩歌は本より翻譯し難いもので、萬葉の佳句に至つては殊に然りである。余が此の翻譯も努めて原詩の感情を表出しようとしたけれども、その結果は唯幾分を達し得たに過ぎない。

日本固有の詩歌は、世界文學上極めて優秀なる位置を占めて居る。萬葉古今二集の外、芭蕉の俳句の如き、能く純撲の調子を以て微妙の感情を傳へる。然るに余の最も不可解なのは、日本に斯樣な美しい韻文が有るのに、何故多くの人が「漢詩」を作りたがるかと云ふ事である。彼の「大鏡」の作者が、白樂天

の

遺愛寺鐘欹枕聽　香爐峯雪撥簾看

と云ふ詩を模倣して、

都府樓纔看瓦色　觀音寺只聽鐘聲

の二句を作つたと云ふが如き、余より見れば幼稚笑ふべきである。實際また日本人は漢詩を作る必要がない。余が見た漢詩では、只夏目漱石先生の「思ひ出す事など」の中にある二句だけが、最も好いもので、それは──斜陽滿徑照僧遠、黃葉一村藏寺深、と云ふのであつて、斯樣な漢詩を作られることは、眞に欽佩に値するが、惜しい哉多くない。要するに日本には自ら其の情感を表現するに適當な詩形が存在するのに、漢詩を作るといふことは、余のどうしても贊成しない所である。日本人士の中にも、疾くにかゝる意見を有つて居るものがあること〻考へる。

日本の物語文學では、余の偏見より、自然に源氏物語と竹取物語とを以て白眉とする。前者は縱令ホーマーの叙事詩とは比較されないにしても、シエークスピヤの戲曲とは肩を並べることが出來る。且つそれが女性の作なるが故に、一層得難くして貴い。東西洋の何人を問はず、若し日本の古典文學に就て尋ねる者があつたならば、余等は躊躇なく答へるであらう。「韻文には萬葉あり、散文には源氏あり」と。これ實に誇るに値するもので、我等東亞の寶庫である。源氏物語の如き斯る偉大なる著作は、應に努力して世界に向つて之を宣傳すべきである。現在已に Mr. Walley の英譯本があり、余も亦翻譯を試み中である。併し余は早稻田文學五月號の五十嵐力氏の批評を讀んで、紹介者の責任の重大なることを感じたから、極めて愼重に從事して居る。已に數種の原本も有るし、一切の研究的批評的註釋的書物も全備した。唯部數の宏富なるために、急に完成し得ないだけである。余は此書を國人に紹介することを以て、余が生涯の事業の一つとする覺悟である。又「竹取物語」は日本お伽文學の先驅で、想像力の偉大さが、また此中にも看取される。以上二種の物語文學は、支那文學の裡には見出されぬもので、眞に他國人の欣羨する所、且つ余の極端に崇拜する所のものである。

鎌倉時代の「能」や、微笑的の狂言や、其後に出た淨瑠璃なども、余は此等日本特有の珍寶に對して、亦極めて大なる興趣を感ずる。

他日暇を得ば、別に一文を草して之を論じて見たいと思ふ。

（五月十九日、上海にて）

留學所感二三

—留學生に與ふ—

何畏

日本の現代人の活潑な精神生活を最も代表的に指示し從つて智識階級の最も多くを讀者に持つ高級の思想發表機關たる「改造」が特に我が國の各方面より論文や創作の寄稿を求めて民國研究號を發行するに至つたことは、最近兩國が種々の方面に於て接近しつゝある折、更に斯の如き研究號の出現によつて、一層兩國の各方面を接近せしめる機運が活潑になるであらうことを考へ乍ら、私は心から喜びと贊意且つ感佩を表し度く思ふものである。殊に山本社長より親しく私にも「何か書いて貰はう」と囑せられた時、私は自分の拙なき筆の跡が最も高級な思想發表機關に載せられるとの非常なる光榮に感激しつゝ、且つ自分の空虛さを顧みて、初めは即答出來なかつた程であつた。

然し私が留學の名の下に十數年間日本に居て、日本の生活に浸り、日本の文化に育まれ、日本民族の精神的雰圍氣を呼吸して居り乍ら、此の紀念すべき留學生活が自分に何らの回想や反省や評價を齎らさなかつたことはないし又た留學が我々の社會に變革を齎らす爲に必要であり又た實際變革を齎らしつゝある重要な素因である以上、私と同じく留學の爲に異國へ來、又た來るであらう人々と共に私は留學の使命や文化運搬者としての留學生の立場、殊に私と同樣に日本の教育、文化の影響、環境の作用を受けた、或は受けつゝある、或は受けるであらう日本留學生と云ふ特殊な立場などを反省し考察すべきであると思ふ。固より留學は環境の作用、文化の影響、特に教育の働きから離れて考へられない以上、これを新しい文化學或は社會學の觀點から見ることも出來るが茲では學的見地を離れて思ふ儘に私の氣付いたことを書いて私と同樣の立場にある人々に贊意を求め度いのである。私と同じ立場の人々には必ず私と似た意見を持つてゐる人々も居るだらうと信ずるのである。

最近、上海實業團の來訪に關して、東京朝日新聞は六月六日の社論に於て「從來日支の親善は」「政策上一部と一部とが利用し合つたに止まつて、相互の國利民福に寄與するところどならなかつた」こと、及び「政略のための親善が如何に兩國の眞の親善を妨げ來つたか」を認め、而して「日本も支那も各自の本來の立場と使命とに顧み、自他の長短を相知り、翻然として、過去を過去として葬り、過去の經驗を教訓として再び過去の失敗を繰返さぬ覺悟で進み、……過去の政策の爲に取殘されてゐる不合理な關係、……面白からぬ關係を清めて新たなる關係の下に立ち直るのは日本にも支那にも必要なことであり、今やその新しき發芽の時が來たと云へる。古き關係が清めらるゝのは政策を離れた純なる國民的提携によつてのみ可能であり……相信頼することによつてのみ過去の政策の汚點も拭ひ去らるゝ望みがある。」と論じてゐる。實際今迄、兩國の間に軍人と軍人、政治家と政治家とが陰に陽に提携して、利己主義を滿足し、社會生活を妨げ且つ毒して來たのである。かくの如く、一部と一部との極端に利已的な親善關係がある爲に、兩國民の意識にはわだかまりが存してゐるに拘らず一方、社會的進展は兩國の各方面に接近を惹こし、關係を結ばしめつゝあるのである。軍人は相變らず軍人と接近し、政治家は相變らず政治家と接近してゐるが一方ブールヂョアはブールヂョアと接近し勞働者は勞働者と接近し文人は文人と接近する樣になりつゝあるのである。最近の上海實業團や北京の畫家達の來訪はその例であつて、彼らが夫々の方面に親善關係を結び、尙ほ一般的親善を促進しつゝあることは喜ばしいことである。我々留學生としては、かゝる團體が實際親善關係を結ぶに當つて、修學の餘暇あれば、相當に自分の力を貸し與へることも必要であらうが、殊に我々數年間も日本に滯留し得る留學生は自分の求智的生活の特殊な立場から、特に日本の智識階級や新しい青年と友誼關係を結ぶことが必要であり、殊に平和的な、賢明にして感じのよい智識階級や青年と交を結ぶことは容易であり必ず非常に有益であると思ふのである。然るに留學生の上海實業團歡迎會に、我々の一部が實業團の立場を困惑せしめ、又た日本を少しも知らない樣な熱狂を演じて、歡迎を無意味にしたことは我々の立場を反省しない遺憾の事であると言はなければならないと思ふ。日本に來て見たこともない祖國の青年學生が兩國の一部と一部との利己的提携によつて、我々の社會生活が惱まされてゐることをのみ注目する故に亢奮を感ずるのも無理はないが日本に來て居り乍ら日本の正しいところを發見し得ないとすれば我々は留學に對して責めを負ふべきではあるまいか。我々は舊い野心家と野心

家の結托から生じた多くの國民的損失を知つてゐる。然し我々は我々の野心家が自國人なる故に赦してはならない。否な却つて、彼が自國人である故に憎むべきである。かゝる損失から我々が日本に對して疑惑と怨恨を持つたものも當然であらうが然し、かゝる疑念と怨恨を持して何時までも解けないことは永久の未來の民族生活に如何なる影響を來たすか測られず實に寒心に堪えない所があるのである。せめて、新しい關係の新芽が發生しつゝある近頃、我々留學生が日本の正しい處を認識すべきであるのに、何時迄も反感を持して、此の國の新しい思潮に觸れず、此の國の新しい青年、及び彼らを指導しつゝある思慮深き先驅思想家の思想感情を知らず或は知る關心を持たず、反つて彼らの折角の心持を知らない樣な言説や擧動を振舞つて、我々と親しみ度い心情を冷却せしめ、絶望や反感を抱かしめたならば、假令今の政略家の一部に抱かせた樣な考へが再び新しい日本の青年の魂を襲はないだらうと信じても、彼らの絶望や反感がどんな場合に我々の生活に反動するだらうか解らないのである。――我々こそ、眞劍になつて、此の東洋の永久の平和を考へるべきであつて、然かも日本留學の間に、充分に之を考へる機會があるのではないか？

日本の軍國主義が何時までも東洋を壓迫するであらうと云ふ信念や恐怖はもう段々薄めて行くべきである。社會關係の進化は軍國主義の野暮さを自づと排除しつゝある。我々は軍國主義に對抗することよりも、進展する社會を理解することが必要であるし、殊に先進國の進展した社會關係を理解するには相當な困難が存するのである。只だ此困難があつても、正しく日本の社會を理解しなければならず、又た理解し得る立場にあるのは我々日本に於ける留學生である。然し、我々は日本を知る爲に、餘り、用意も持たず、關心も持たなかつた。十數年も日本に居乍ら、日本を知らず又た知る爲の準備を持たずに來たことは今の私にとつて一つの悔恨である。而して、全體に言へば我々の留學は云はゞ暗中摸索を長く繰返してゐたに過ぎなかつた。長い留學の歴史は何ら我々後參者を教育し我々の參考となる樣な著述上の業蹟がなかつた。先輩が繰返した失策は何時も我々の繰返す所となつた。その爲めに、日本に來る人々は豫備知識を持たず、國內に居る人々は只だ傳へ話を聽きかぢる外になかつた。日本に對する想像は十人十色であつて、又た、各人の實に僅かな手掛かりによつて造られてゐた。私の如きは上海でよく日本領事館や正金銀行や郵船會社を見た爲か、日本を西洋の樣な國に想像する癖があつた。初めて、山城丸の甲板の上から夕映に輝く長崎沿岸の山々を見守り乍ら、その奥には立派な建築

の都合があると想像して、到着を待ち焦れたが、入港して見れば燈影がちらつき初めた頃であつたので、何んとなく薄暗い寂しい街と云ふ印象が今でも腦に殘つてゐるのである。私は破滅の感で暫らく寂しかつた。その後、幾度も通うたが然しそれが日本最初の開港場であり、近代西洋文化とキリスト教の入口であり、文化史上、實に重要な港であることを私は知らなかつた。平凡な眼には平凡なものしか映らない。今から見れば、此の日本の近代文化に重要な役目を來した港を素氣なく幾度も通うたとは如何にも惜しいことである！ 此の嘆息を私と同様に南から長崎を通うて日本の各地に留學に來た人々に私は洩らし度いのである。此の日本の近代文化の門戸に這入り乍ら、それを知らないで感興もなく通うてしまふとすれば日本の眞中に來ても日本の文化を知るかどうか疑はないでは居られないのである。實際日本の中心に來て、長く專門的研究をやつて居る人々でも日本の民族を考へるとすぐ徐福の子孫であると思ひ、文化を思ひ付くと、すぐ漢文明の模倣と思込み、而して、かの徐福の子孫は西洋文明を借りて、その祖先の國に敵對し、その文化の源泉に謀反したと考へ、そして時々憤慨を感ずるのである。かくの如き誤つた信仰と誤つた判斷ほど日本人及びその文化に對する理解を妨げるものはない。こんな陳腐なお伽話を一刻も速く放棄しなければ日本を知る望みがないのである。日本民族は實に我々の夢にも知らない複雜な人種的要素を持つてゐる民族であり、その文化も複雜な要素を持つてゐるのである。我々は日本に對する一切の偏見と迷信を打破しなければ日本を理解することが出來ず、又た、自分の民族及び文化に對する迷信と誇りをも放棄しなければ、容易に他民族とその文明に對して謙遜であることが出來ない。同時に自分の民族も文明も正當に理解し得ないのである。

もう數年前のことであるが、我々は白話文學が勃興し初めた頃にアメリカ式のセンチメンタリズムを白話詩の形式で表はして、一時有名になつた北京大學の一青年學生に就いてまだ記憶を持つてゐるであらう。私は偶然ある雜誌で・此青年がアメリカへ留學に行く途中、日本を通過した時の感想を述べた通信を讀んだことがある。此青年は非常に紐育邊の魔天閣を憧憬し乍ら途中此の日本の低い家屋と暗かつた夜の街を聊か蔑意に洩らしてゐたのである。此れを讀んだ私は留學は我々に必要ではあるが洋行する前には是非充分に文化史的教養を授くべきであると思つた。此の調子では留學は憧憬の國へ行く子供の夢の様なものだ。それでも植民文明しかないアメリカが此の青年詩人にあれほど憧憬される美しい國であるかどうか私には解らない。

卑俗な眼には驚嘆に値ひするかもしれないがアメリカの文明は一目で澤山だ。アメリカの文明は物質主義の野暮な露出である。然し日本のそれは一目丈では解らない。豊富な歴史的知識と詩人の想像とがなければ、日本の文化は解るものではない。日本文化の一小部分でも、恰度深い地層から掘り出された古代文化の一破片の様に、深い歴史の知識と明るい科學的想像がなければ吟味することが出來ない。野人の俗眼にはそれが一枚の瓦であるかも知れないのである。日本の文化に對しては詩が必要である。感情移入が必要である。譬へて云へば日本の文化はつゝましやかな然かも含蓄の深い、餘韻に富んだ一箇の藝術である。日本の文化はアメリカのそれの様に我々の感覺を壓迫することなく、我々に崇拜や降服を強ひることはない。日本の文化は只だ敏感な人々を誘ひ、しみ〴〵と玩味させ、優しさを感じさせる。此の日本文化の一特長は實際習慣となつて日常生活にも遺憾なく現はれてゐる。私が日本人に接して何時も感じさせられてしまふことは彼らが遠慮深くて、つゝましやかで滅多に感情を露出しない事である。感情の露出は野暮と云はなければキザと云はれるのである。その代り日本人は驚くべき敏感さを習慣的に訓練されてゐる樣に見える。私は日本人のデリカシーやつゝましやかさや敏感さに對して何時も自分の鈍感、粗忽、及び思ひ遣りの足りなさを感ずるのである。それは私の先天的缺陷かも知れないが、若し私が充分によく日本の社會生活を知つてゐればその缺陷は補はれる可能性もあるだらうと思ふのである。

實際、私ばかりではなく、我々全てが此の復雜な日本、此の含蓄深い日本の文化を簡單に考へ過ぎ、それに對して無智過ぎしかも無關心過ぎて一體何時になれば、此の日本の文化を見落して殘念だと後悔し且つ自ら咎めることがあるだらう。一方、日本人は着々と我々の文化に興味を感じ濟々として新しい東洋史家、支那史家が現はれ、我々の盲目的な自己崇拜でない爲に、充分に客觀的な研究が出來、我々自國人が却つて企て得られない業績を擧げてゐるではないか。それに我々は少しも日本の歴史に關心を持たないのに日本を專制國家だの、軍國だのと指彈し、而して、進化論を議會の決議で禁止したアメリカを自由な共和國と呼ぶことに少しも躊躇を起さないのは何故であらう？　自由の國とは一ツの美しい迷信だ。此の迷信の爲に我々は餘りに高い旅費を拂つて來た。しかもその國の資本專制をつひ知らずに歸つて來た者もあるやうである。我々はもつとアメリカに對しては鋭く、聰明な眼で觀察しなければならないと共に、日本に對しては今迄の偏見を捨てゝ賢明に觀察しなけれ

ばならないのである。共和的なアメリカは巨大の富を擁して、世界を壓倒しやうと夢みる傭兵が居るに反して、專制的軍國と云はれる日本は我々が考へる程、人民の意志を沒却した政治を施して居らず、我々の軍國の横暴なる專制よりは遙かにデモクラチックであり、人民の秩序に對する精神も社會的に訓練されて居り、互助の精神に富み、連帶の意識は強く、自立の氣風が盛んで、道徳感も強いのである。か丶る精神は日常生活や家族生活に禮儀となつて現はれ、それが我々のそれの様に誇張されて居ない爲に、虚禮に終つて居ない。此の禮儀にも日本文化の一特色たる含蓄性と洗練さが現はれてゐるのである。此の日本人の社會的訓練を知ること丈でも、我々の自分の社會に關する考察を益することが多いと思ふのであるが、これとても容易でなく、又た、日本文化全體に關係せしめなければ恐らく充分に理解出來ないものであらうと思ふ。

　我々の長い留學の歴史が餘り効果を收めて居らなかつた譯は確かに我々の留學生活を教室と實驗室或は實習所と下宿とに限つて、その國の社會生活一般、及び文化一般には僅かな注意しか拂はなかつた爲である。勿論我々は各々自分の專門を求めに來たものであるが然し、我々が專門の智識、學問を先進國に求める根本理由は我々が各自に求め得た新文化要素を自國に輸入し、それを以て、自國の古い生活狀態を改變しやうと云ふ一般文化的な要求に存してゐるのである。然かも我々は先進國が如何に新しい文化要素を取り入れ、如何に、それを以て、古い生活狀態を改變し、而して今は如何なる文化様相を呈し、如何なる社會狀態を現出してゐるかと云ふ點には少しも關心を持たず只だその國の一般の學生の様に、ノートの勉強にのみ力を費やして來たのである。然かも我々留學生は自づとその國の學生と條件を異にしてゐる。同じ經濟學の講義を聽いてもその國の學生の様に我々が理解し得ないのは單に我々が言葉に不自由であるばかりでなく、實際我々がその國の學生の様に、その國の經濟狀態、社會條件をよく知らないからである。しかも、先進國の社會が要求しつ丶ある經濟智識を以て、すぐ我々の社會生活に適應しやうとし、而して、その適應不可能を知ると、彼は自分の學問が高尚な爲であると考へてしまひ、遂には、自分の社會から仙人のやうに超越してしまふ様になる。殊に硬化したと云はれるほど發達したヨーロッパやアメリカから學んで來た應用的學問は我々の生活狀態に適用出來ず、その專門家は勢ひ、その學問を放棄して他の職業を選ぶか或は、外人經營の會社に這入つて行くか孰れも不本意な生活をしてしまふのである。却つて日本から實業教育を受けて歸つた人々が小規模にや

れるのは、日本の實業教育がまだ全然大量生産主義に偏して居らず小規模の經營にも餘地を與へる方針の爲でもあるが留學生も日本の小規模工業の經營を目擊し得、且つかゝる經營は自國の生活狀態にも適應し得ることを發見する爲でもあらうと思ふ。アメリカの教育の要求は個人に社會生活の古い狀態を改變させることよりは個人を制度の一番人にしやうと云ふ處にあるのではあるまいか。若しそれならば我々の留學の要求に添ふことが出來ない所があるのではないか、又た日本の教育の方が比較的に自分の過渡的狀態を考慮する丈に我々の參考になるのではないか？

日本に留學した人は歸國すれば大概日本留學の廢止を說くが私の見解から云へば日本が發達する限り、決して日本留學を廢止してはならないと思ふのである。見樣によつては日本が最も我々の參考となる國であらうと思ふ。只だ我々留學生の日本に對する關心と注意と謙遜とが必要である。我々は西洋人の口吻を借りて、日本の近代文明を西洋文明の模倣と云ふが、我々は一體日本が西洋文明を輸入してから今日に至つて、社會生活一般に如何なる進展を來たし、思想に如何なる進歩、藝術、學問に如何なる進化、又た社會思想には如何なる煩悶があり、新しい青年は如何なる思想や煩悶を抱き、藝術は如何なる表相を呈し、學問には如何なる問題が注目されてゐるかを知つてゐないだらうと思ふのである。而かも我々は進んで求めず、徒らに日本の此の創造的過程に對して無關心を吐露するのみである。日本程、敏感に新しい文明を感受し乍ら、しかも、これが爲に煩悶し、新しい文明に問題を提出すると共に自分の舊い生活に問題を提出して、或は哲學の對象となり或は科學の研究となり、或は藝術の題材となり或は社會的な運動となつてゐる所は東洋の何處にもないばかりか世界にも稀である。東洋の凡ゆる世界の波動を感受する此の鋭敏な、この第一線を我々大陸の民が此の防波堤に來て居り乍ら知らないことは如何に我々の留學生活が怠慢であるかを意味するのではないか。それでも我々は決して取返しの付かない迄に陷つてゐない。若し、誠實に自分の使命や立場を反省し、日本の社會に充分なる關心と謙遜とを持ち、日本の新しい謙遜な青年に親しみを感じ、彼らと思想を語り而して日本の文化史、社會史、及び、現代の文學、藝術、社會問題生活問題に注意し殊に、最近日本の智識階級が自分の民族が歩み來つた生活の跡を冷靜に客觀的に研究する爲に創生した日本學、民族學或は文化學の業績を注意し、彼らが如何に自分の民族や文化を誇りもなく又た、偉りもなく說明してゐるかを傾聽すべきである。それが例へば自分の專門と直接に關係がない場

合でも間接には或は參考となるかも知れないし、又た、我々大陸の社會狀態の變遷の觀察に資する處があると信ずるのである。

若し、我々が、かくの如くして、漸次に日本を理解して來れば今迄の國民的わだかまりが自然に消滅する樣になり、日本を愛することが出來日本も孤獨な感を持して、險に走る樣なこともしなくなるであらう。恐らく日本の全體に對する無智ほど日本と握手することを妨げる觀念的障碍を增張するものはない、我々の經濟觀念は未だ一般的に進化して居らない爲に、土地所有は我々の觀念には第一次的な經濟原則となつてゐる。然し日本の經濟思想は近代的發展を遂げて軍國主義の色彩も濃厚さを失ひつゝあるのである。現代的社會に軍國主義色彩が薄らぎつゝある一原因は恐らく、此土地所有慾が漸次に一般的減退にも存するであらうと思ふ、何故なれば軍國主義の土地侵略は要するに土地所有の一原始形態であつて、或る程度迄軍國主義に依存する資本主義は土地經營にあまり利益を見出せず、或る場合には土地所有を不可能ならしめ、厄介荷と看做しつゝある傾向を有し、國家的にも土地侵略を不利益と考へる樣になつたらしく、又た事實非常なる問題を惹起す爲に、土地不侵略が殆んど國際的な約束となつてしまつてゐるからである。只だ人口增加が齎式な人間の軍國主義を刺戟する外に、軍國主義は段々その原始的經濟機能の根據を失ひ單なる市場の番兵となりつゝあるのである。かゝる經濟觀念の進化及び土地侵略の國際的又た經濟的困難がある爲に、人口增加の刺戟はあつても軍國主義の策動は容易に成功出來なくなつて來たのであるが我々は一般に尙ほ土地所有を大切な經濟原則であると思ひ、土地を失ふことを亡國であると迄思ひ込むのは滑稽の樣である。それよりも尙ほ他のものを大切にする必要があるのではないか？日本の軍國主義的侵略に對する恐怖は殆んど觀念錯誤に近い不必要な杞憂である。若し我々が日本の人口問題を日本の政治家のみに任かせず、自國の國民生活を考慮すると共に、日本政治家の配慮の一部を了解する雅量があれば日本は進んでその時代後れの軍國主義を放棄するに至るかも知れないのである。日本人の生活を了解せず、徒らに排斥を叫び或は無條件に日本に軍國主義の放棄を求めやうとすることは餘り空想的である。我々が空想に熱狂してゐる間に、軍閥は軍閥と結托し、政略家は政略家と結合して固よりそれが爲に日本人の生活問題が解決されるよりも却つて障壁を築いてゐるがそれにも勝して我々の社會生活が受ける打擊が大きいのである。一軍閥の巨頭がその氣儘な好意によつて、一二の日本の私人に、恰かも私財を與へる樣に輕々しく

望な權利を與へて日本に媚を賣つた積りでゐるがこんな無思慮なことには絶對に贊成出來ないのである。こんなことは徒らに、新しい成金を製造し、彼らの散財によつて、精々、妓樓や料理屋を賑はす丈で、一向日本の國民生活の解決には勿論影響も齎らさないのである。若し眞に賢明な政治家が居るならば日本現在の生活問題や人口問題に一考を費やすべきである然らば我々の軍閥專制は排除される樣になるであらう。我々留學生も此方面に考慮を要すべきであり、同時に日本民族全體の生活狀態心理狀態を理解し洞察し日本の思慮深き青年と美しい友誼或は親切關係を結んで隔意なき相互扶助を示し、且つ大陸の青年に日本青年の謙遜な心、聰明な思想を傳ふべきであり、殊に日本民族の精神的努力には尊敬し且つ學ぶべきであると思ふ。

玆が我々の努力すべきところである。此努力が効を奏して他日大陸と此の翡翠の樣な島々とが美しい友誼關係或は親戚關係を結んで、親類の樣に往來し、兄弟の樣に睦じく戀人の樣に相愛し、我々の子孫が日本の土を踏むこと宛も叔母樣の家にでも行く樣な氣樂さと親しさを感ずるに至れば如何に兩國の爲に慶賀すべきことであらう！私と同じ立場にある人々は必ず私に同感して與れるであらう。



北京間話

小畑薫良

○

去年八月、私は米國から九年振り、二度目に日本に歸つた。郷里大阪に一ケ月、東京に一ケ月、荷物船で巴奈馬など廻航した旅の疲れの未だ休まらぬまに、又日本をとび出して北京に急行した。

北京飯店、二階の一角に行李を解いて、大きな窓を明け放つと、西山の秀を背景に紫禁城の赤い壁、黄い甍が畫の如く眼下に浮び出る、この壯景に接した瞬間に、私の多年支那に對して抱いて居つた憧憬と期待とが一時に滿足された氣がした。

○

田舍の舊い家に生れて、漢學趣味の阿爺をもつた私は幼い時から支那（それは想像の支那であるとしても）といふものに親みを持つてゐた。小學校にゆかぬ先から三字經を習ひ出し、孝經、忠經、四書、五經の素讀を家庭で又は村のお寺の和尚さんから教つた。十八史略などで支那國史の概念も得た。殊に東周列國誌、三國誌、漢楚軍談、呉越軍談、などを耽讀してたもので、此頃夢にも私の小さい魂は常に半架空的な、半神話的な傳說の支那をめぐり廻つて居つた。

兄哥達は田を作る間に詩を作つてゐた。阿爺は時々奥座敷で香を焼き、わけの分らぬ唐音の歌を唱しつゝ七絃の琴を彈じて居た。こんな變な眞似をしてをる老人は廣い日本にも恐く二人とあるまいと思はれた。然しそれはまだ無難でよいが私等子供達が最も恐れをなしたのは阿爺が朝となし夕となし亂發する東洋一流の手嚴いお目玉であつた、それが多くは孔子や孟子の金言でかためられてゐたやうに思ふ。

兎に角恐ろしく支那思想支那趣味に浸潤した私は、時代の風潮と持つて生れた浮浪性に誘はれて、アメリカ三界に轉々半生を送る中にも支那を忘れなかつた。否、永らく外國生活をする

と日本が戀しいのみならず、支那まで懷くなるものだ。

英語や、佛蘭西語が解り出すと、少年時代に强制的に詰め込まれた漢字が、記憶の底から異樣に貴い光を放つて來た。金字と刷りこんで華でやかに裝幀された靑、赤、黃、藍の洋書でうづめられた大學圖書館のなかで私は兄弟が代る〱使ひ古るした木版の大字の漢籍が俄かに欲しくなる、私は平易な唐詩などを英譯して徒然と慰めたこともあつた。

ウインコスシン、市俄古、コロンビアなどの大學で私は多數の支那人留學生に接近する機會を得、努めて彼等と交はり、共に詩文を語り、時事を論ずることを樂みにしてゐた。

堯舜禹湯より六千年帝王の國で續けて來た支那を一朝にして共和國とした大革命も、歐洲の大戰も、二十一ヶ條問題も、巴里會議山東問題も、華府會議もみな私が在米中に起つた事件だが。私の「想像の支那」は「現實の支那」によつて次第にその領域を浸蝕されてた。これは私に少からぬ恐慌を與へた、元來私は支那を羅馬や希臘の如き趣味の國として保存したかつたのである。物語りの國、詩文の國、聖人の國、名所舊跡の國として愛玩したかつた。それで、支那を旅行するにしてもバイロンかマーク・トヱーンを氣取つて見物し、文人墨客の態度でその好風淸月を弄びたかつたのである。從つて私は大膽にもわざと現實を無視して、丁度二三の畫や書物から支那に憧がれる西洋人が夢想するやうな支那を腦裏に描いて、遂に北京まで來て了つた。

到着の當日私が北京飯店の樓上から見下ろした紫禁城がこの美化し、詩化した支那に對する私の期待を裏切らなかつたのは幸せであつた。

然し支那は畢竟私にとつて單に偉大なる骨董品ではない。もつと眞劍に取扱はるべきものである。

歐米の諸國を遍歷して得た異國情緖を再び支那で味ふと思つたのは間違つて居つた。支那は私にとつて第二の母國であるのだつた。

○

北京の町を步るく。店頭の看板が讀める。支那新聞の見出しも大抵解かる。これは外の國を見ず、日本から直接に支那へ渡つた人々につまらぬことかも知れぬが、コンスタンチノープやアゼンスの市中をまごついて來た私には深い意義がある樣に感ぜられる。書物屋にゆくと見馴れた經書史書がザラリ並んでをるのも懷かしい。中年の支那人のうちには三字經から初めて私と同じ階梯を踏んで四書五經を習つたといふ人が澤山ある。殊

に列國誌や三國誌が支那でも今に廣く愛讀されてをると聞くのも嬉しい、成る程、觀劇に行つても、曹操、孔明、魯肅などに出會はす。子供の時代のお馴染みであるこれ等の面々が、意想外の奇態な扮裝ちで舞台に現はれて來るのは痛快なものだ、

未だうら寒い早春の或る日、私はある處にお茶に招ばれた。そこに居合はせた白頭の琴師が千年の古琴に對して數番の名曲を彈じた、家の若い娘さんが靜かに低い聲で唱つた。卓上の香爐から淡い煙がうねくくと立ち上ぼつて盆栽の梅の枝にからまる、私は大阪の田舍で同じに七絃の絲から古い支那の響きを誘ひ出しをる私の阿爺を思ひ出した。北京以外、世界いづれの都でもこんな饗應にまたと預かることが出來やうか。

私はこんな些細な經驗にも、またもつと些細な、もつとありふれたことにも日支兩國の思想文物の共通點を見出した、支那は日本人にとつて外國ではない、第二の母國であるといふ事實を切實と感じた。

○

去年十月二十六日、私は關稅會議開幕式を見物して南海居仁堂へ出掛けた。會場に這入るや、接待員の徽章をつけた眉目淸秀の一靑年か、アール、ユー、ナット、オバタと云つて私の側へ駈け付けて來た。十年前の同窓、而かも同期生で、一緒に机をならべて英作文を習らつひ、同じ外國人學生の倶樂部で遊んだ、W君であつた。彼は其後結婚し、任官し子供を持ち、髭を蓄へて見違へるやうに變つて居るか、昔ながらの書生である私は一瞥、舊友の認識するところとなつた譯だ、同じ會場に支那側委員の一人として出席して居たL君も亦同窓の上級生で、私が新入の當時、學校から私のアドバイザーに指命されて、勝手の分らぬ私を、なにくれとなく指導してくれた恩友であつた。

早速、彼等は歐美同學會に、同窓生の晩餐會を開いてくれた。これには米國代表隨員ホーンベック博士初め數名の米國人を交へて集まるもの二十名、（外に城外淸華學校の先生で夜間西直門が閉鎖されるため出席出來なかつた同窓生が數名をつたさうだ）、マヂソンの昔を語り、校歌を唱ひ、一宵の觀を盡した。

この夜再會した舊友支那人のうちに銀行の重役をして財政整理會委員であるT博士、參政院參政の肩書をつけたP君などの先輩絨氈會社の番頭になつた風變のC君などあつたが多くは外交部、交通部で鹽務省などに務めてをる若い官員連であつた。

其の後、私は或る時、北京大學で刊行されてをる週刊雜誌「現代評論」誌上に、コロンビア大學で最も親く交つてをつた、そして二年前巴里でも僻逅したY君の名を見た、早速同社に宛て

と日本が懸しいのみならず、支那まで懷くなるものだ。

英語や、佛蘭西語が解り出すと、少年時代に强制的に詰め込まれた漢字が、記憶の底から異樣に貴い光を放つて來た。金字と刷りこんで華でやかに裝幀された靑、赤、黃、藍の洋書でうづめられた大學圖書館のなかで私は兄弟が代る〴〵使ひ古るした木版の大字の漢籍が俄かに欲しくなる、私は平易な唐詩などを英譯して徒然と慰めたこともあつた。

ウインコスシン、市俄古、コロンビアなどの大學で私は多數の支那人留學生に接近する機會を得、努めて彼等と交はり、共に詩文を語り、時事を論ずることを樂みにしてゐた。

堯舜禹湯より六千年帝王の國で續けて來た支那を一朝にして共和國とした大革命も、歐洲の大戰も、二十一ヶ條問題も、巴里會議山東問題も、華府會議もみな私が在米中に起つた事件だが。私の「想像の支那」は「現實の支那」によつて次第にその領域を浸蝕されてた。これは私に少からぬ恐慌を與へた、元來私は支那を羅馬や希臘の如き趣味の國として保存したかつたのである。物語りの國、詩文の國、聖人の國、名所舊跡の國として愛玩したかつた。それで、支那を旅行するにしてもバイロンかマーク・トヱーンを氣取つて見物し、文人墨客の態度でその好風淸月を弄びたかつたのである。從つて私は大膽にもわざと現實を無視して、丁度二三の畫や書物から支那に憧がれる西洋人が夢想するやうな支那を腦裏に描いて、遂に北京まで來て了つた。

到着の當日私が北京飯店の樓上から見下ろした紫禁城がこの美化し、詩化した支那に對する私の期待を裏切らなかつたのは幸せであつた。

然し支那は畢竟私にとつて單に偉大なる骨董品ではない。もつと眞劍に取扱はるべきものである。

歐米の諸國を遍歷して得た異國情緒を再び支那で味ふと思つたのは間違つて居つた。支那は私にとつて第二の母國であるのだつた。

○

北京の町を步るく。店頭の看板が讀める。支那新聞の見出しも大抵解かる。これは外の國を見ず、日本から直接に支那へ渡つた人々につまらぬことかも知れぬが、コンスタンチノープやアゼンスの市中をまごついて來た私には深い意義がある樣に感ぜられる。書物屋にゆくと見馴れた經書史書がザラリ並んでをるのも懷かしい。中年の支那人のうちには三字經から初めて私と同じ梯梯を踏んで四書五經を習つたといふ人が澤山ある。殊

に列國誌や三國誌が支那でも今に廣く愛讀されてをると聞くのも嬉しい、成る程、觀劇に行つても、曹操、孔明、魯肅などに出會はす。子供の時代のお馴染みであるこれ等の面々が、意想外の奇態な扮裝ちで舞台に現はれて來るのは痛快なものだ、

未だうら寒い早春の或る日、私はある處にお茶に招ばれた。そこに居合はせた白頭の琴師が千年の古琴に對して數齣の名曲を彈じた、家の若い娘さんが靜かに低い聲で唱つた。卓上の香爐から淡い煙がうねうねと立ち上ぼつて盆栽の梅の枝にからまる、私は大阪の田舍で同じに七絃の絲から古い支那の響きを誘ひ出しをる私の阿爺を思ひ出した。北京以外、世界いづれの都でもこんな饗應にまたと預かることが出來やうか。

私はこんな些細な經驗にも、またもつと些細な、もつとありふれたことにも日支兩國の思想文物の共通點を見出した、支那は日本人にとつて外國ではない、第二の母國であるといふ事實を切實と感じた。

○

去年十月二十六日、私は關稅會議開幕式を見物して南海居仁堂へ出掛けた。會場に這入るや、接待員の徽章をつけた眉目清秀の一靑年か、アール、ユー、ナツト、オバタと云つて私の側へ駈け付けて來た。十年前の同窓、而かも同期生で、一緒に机をならべて英作文を習らつひ、同じ外國人學生の倶樂部で遊んだ、W君であつた。彼は其後結婚し、任官し子供を持ち、髭を蓄へて見違へるやうに變つて居るが、昔ながらの書生である私は一瞥、舊友の認識するところとなつた譯だ、同じ會場に支那側委員の一人として出席して居たL君も亦同窓の上級生で、私が新入の當時、學校から私のアドバイザーに指命されて、勝手の分らぬ私を、なにくれとなく指導してくれた恩友であつた。

早速、彼等は歐美同學會に、同窓生の晩餐會を開いてくれた。これには米國代表隨員ホーンベツク博士初め數名の米國人を交へて集まるもの二十名、（外に城外淸華學校の先生で夜間西直門が閉鎖されるため出席出來なかつた同窓生が數名をつたさうだ、）マチソンの昔を語り、校歌を唱ひ、一替の親を盡した。

この夜再會した舊友支那人のうちに銀行の重役をして財政整理會委員であるT博士、參政院參政の肩書をつけたP君などの先輩絨壇會社の番頭になつた風變のC君などあつたが多くは外交部、交通部で鹽務省などに務めてをる若い官員連であつた。

其の後、私は或る時、北京大學で刊行されてをる週刊雜誌「現代評論」誌上に、コロンビア大學で最も親く交つてをつた、そして二年前巴里でも邂逅したY君の名を見た、早速同社に宛て

手紙を送つたら、數日後ホテルの私の部屋にY君自身がその巨軀を現はした。武昌から昨日北京に來たばかりだとのこと。彼れは同じくコロンビア時代の友人、T君が藝術專門學校にをるからといつて早速連れて來てくれた、間もなく同じ仲間の一人だつた河南中州大學のF君が上京した。彼等を通じて私は幾多の新舊友人を北京の學界、操觚界に見出した。

私は此等の友人と頻繁に往來しその家族の人達とも知り合ひ、彼等の家族の內輪話も聞き、彼等の社會政治問題に關する公憤の言葉も聽いた。同時に屡々天安門前に催された學生演說會や軍閥打倒、不平等條約取消の示威運動行列や張紙を見、殊に三月十八日執政府前の慘案を経つた悲慘な運命に縛られて進み行く行列のホテル前を通過するのを目擊した。國民軍の退城と奉天軍の入城を前にして城上に襲來する飛行機と城外に轟く砲聲に脅かされ四方八方にあわてふためく市民の憐むべき姿を見た、私自身も友人の家の若い娘さん二人を一週間ほどもホテルの私の部屋に預かつておいたこともあつた。現に城內城外、荒れ果てた光景戰難民の窮狀を目の前に見て現實の支那、生ける支那、悩める支那、侵かされてをる支那、辱められをる支那、憤ふれる支那、哭せる支那、に對し、同情の淚がこぼれる。

然し私は絕望せぬ。

私は最近數ケ月間、北京における一部、新進智識階級の人と交つて、新らしき文學、新らしき思想、新らしき藝術、新らしき新しき努力のある、新らしき支那を發見することが出來た。十五年前の政治的革命は失敗に終つたかも知れぬ、然しそれと前後して發生した社會的文學的革命は失敗しなかつた。挫折しなかつた。

胡適一派の人が提唱した白話文學は今や全國を風靡して、若い白話詩人、白話小說家、白話劇作家が到る處に輩出してをる。而して彼等の努力によつて白話そのものが次第に琢磨され、精練され、思想發表豐かなる、力ある、美しい、ミデアムになりつゝある、祖先傳來の重寶とされた文章體を弊履の如くに捨てゝ、貧弱で而かも野卑だと侮られた口語體を採用した、支那曠古の文學革命は完全に成功した、國語運動なるものも起つ白話は支那全土を統一せんとしてをる、

更に注意すべき、支那新人の間に、强い「探求の精神」—Spirit of Inquiry—が動いてをることである。大膽な批評、研究が行はつゝあることとである。代々金科玉條として褒蹟された儒學も異端者として排せられて、諸子百家も一律に新らしい標準によつて評價されつゝある。梁啓超先生の其の他學者によつて墨子研究の流行はその一例だ、國史の新研究がある、考

古學や金石文學か新興してをる、民謠の蒐集も初まつた、紅樓夢桃花扇なとの考證も出來てをる、これに携はる人々は北京大學を中心として、政爭に關係せず、自身の月給の減滅にも一見沒交で、貧困に甘じて孜々とし倦むところなく各々其の研究を續けてをる。

かうした各方面の新らしい努力は冬枯れの野に萠え出ずる春草の始に勢よく芽を吹いて如何る迫害も蹂躙をも恐れず。やがて天下の春を領する氣合ひかあるやうに見える。

歐洲に「暗黒時代」といふ歷史の一期間が百年もつゞいた。然しそれが決して名の如く暗黒でなく、政治的に破產し來た大陸に早くも「文藝復興」の曙光がこの時期を通じて輝いてゐたことは近代史學者の擧つて認めるところである。

支那は政治的暗黒時代に沈淪しつゝある。然し、同時に傳統の破壞、思索の自由、革新の氣運があつて、新らしき支那は已に生れてをる。新支那ルネーサンスの黎明を認めないものは盲人である。

○

私は支那語を語ることが出來ぬ。私の交際する支那人は男子も婦人も英語の出來る。若い人である。且つ此の經驗と觀察の範圍極小に限られてをる。隨つて私の說も、單に一面に眞理を含むに止まること、自から信じてをる。

然し私は多年支那に在住した、英國人や日本人の、所謂「支那通」なる連中の支那觀や支那に對する態度に慊らざること多大である。

彼等は、支那人は怠惰者である、信賴が出來ぬ、自ら救ふ能はず他から助けることも出來ぬ、三國誌時代と全然同じ狀態で進步したることなしと言つたやうなゼネラリジエーションを振り廻はし、その例證を豐富に並べ立てることを得意としてをる。そんなにつまらぬ見込の立たぬ支那ならばうちやつて置けばよいではないか。結局列國は私利のために支那と交涉をつゞけ、「支那通」諸君も小さいながら支那を食ひ物にして在留してをるといふことゝなる。殊に歐米で留學して歸つた新智識階級を半可通だの淺薄だの、支那を亂するものだのと攻罵して、その例として學生運動を擧げる人が外國人のみならず支那人の間にも多い。凡てこれ、舊人で支那を知つて新支那の存在を認めないものである。

學生運動は過去において一再ならず、亂暴な輕燥な形式を取つたかもしれぬ。然しその裏には覺めたる青年の愛國の至情と不屈の精神が宿つてをる。現今の若き學者文人、藝術家の產物

は幼稚であるかも知れぬ。然し新らしい支那の文化は彼等によつて培はれてをる。支那に輿論ありとすればそれは彼等の舌と筆とによつて作られてをる。

新らしい支那は生れてをる。これを舊人が舊式の取扱ひ方によつて動かさうとするのは無理である。日本の對支外交も事業も、とかく蹉跌するのは或はかうした時代錯誤に起因してをるのであるまいか。私は思ふ我々日本人は大に若い支那人と接觸せねばならぬ『新らしい支那』『黎明の中國』を研究せねばならぬ。するとそこに新らしい理解と新らしい感情と新らしい希望が生れるだらう。

この理解と感情と希望こそ日支親善の眞要素となるだらう。

支那繪畫の派別とその變遷

國立藝術學校教授　鄧以蟄

一

西洋藝術の歴史的發展を見るに、風景畫が初めてヨーロッパに現はれたのは十八世紀頃であつたが支那の山水畫は既に（七世紀頃から十世紀に亘る）唐代に盛に行はれてゐたのである。西洋の風景畫と支那の山水畫との本質的異同に就いては後に譲るとして、單なる年代的比較から見て、支那の風景畫の發達の早かつたことは驚くに足ることである。

繪畫が人物畫から發達したものであることは一般的事實であるが、支那に於て、それが人物に始まつた原因は事蹟を圖形にして、將來に教示を遺さうと云ふことにあつて、漢の宣帝がその左右の臣下の形相を麒麟閣に描かせて彼らの官爵姓名を註明させたことはその例である（漢書蘇武傳）。かくの如く觀察すれば繪畫の機能は初め、文字のそれと相似て、前代の事蹟を記載する時に用ひられたものである。

然し人間にはものを造る能力があるばかりでなく、ものを製作する時に必ず自分の製作が美的境地に達しなければ止まないと云ふ努力がある。かゝる努力の爲に彼は推敲し、反復して一切の美的形式の構成をして必ずその意に合せしめ、その心を滿足せしめなければ止まないのである。かくの如くして、初めて、人類に藝術が生まれるのであるが藝術とは製作の効用的機能を無視して專ら創作的及び美的悅樂を求めることであり、繪畫の如きは假令それの効用が宗教的或は勸戒的であつても、それが畫家の手によつて成る以上、畫の中の色彩の諧調、線の勁き、形式の構成などが藝術の問題となるのである。

上述の如く、繪畫は人物畫に始まつたのであるが漢以前の繪畫はもう既に見られない。漢代の繪畫も傳へられてゐないが山東省濟寧縣武梁祠の畫像石は漢代の遺物である。その内、或るものは極く薄い浮彫であるが或るものは全く素描である。此の種の素描に於ける線は顧凱之の人物畫蹟（大英博物館藏）と殆

んど異なる處がない。畫像行に刻されたものは恐く當時の風俗、人情及び孝行の故事である。これらの故事の表現に現はれる車馬の動靜、人物の情態などは全く鈎描された線に依賴して居て文字はそれに使用されてゐない。かくの如く、線が表現上、從つて藝術上の用具であつたのである。

晉代の顧凱之に至ると、我々は線の表現の力强さを感ずることが出來る。顧氏の人物畫は往々畫材を風俗故事に取つてゐるがこれらの畫材の內、藝術の點から見れば只だ人物の狀態のみが彼の線描を充分に發揮させてゐるのである。かくの如く、顧氏の藝術は線の藝術であつた。然し彼の線は人事の情趣を表現するに適するものであつて、所謂る佛畫の線紋とは筆致が稍や異なつて居るのであるがこれに就いては後に讓る。此處で我々が是認し度いのは顧凱之が線畫の宗師であつて、人物畫（風俗畫）の先驅者であると云ふことである。人物畫は唐代に盛であつた。閻氏兄弟（立德、立本）、周昉、滕葉などは皆な顧氏の直傳を承けて人物畫の名家であつた。盛唐以後、人物畫の題材は日に廣くなり、道家の寫眞（寫實主義）の如きは幽人逸士の雅集から漁（釣り）樵（木伐り）農事、商賈に至る迄題材とならないものがなく、その甚しいのは單于騎獵の圖や牛の背に跨がる牧童の圖もあつた。又た、曹覇、韓幹の描いた馬、韓滉戴嵩の描いた牛などは皆な顧派の人物畫から發展して來たものである。取材も豐富になれば人事、情態の變化も亦た多くなり、時代の文物風俗も此れが爲に保存される。顧派の人物畫は誠に支那畫派中鄕土性に富んだ藝術であつた。

人物畫の表現手段は線であつて、而して線描は上述の如く、漢代の頃に既に頗る發達したことは武梁祠の畫像行の證明する所である。かく見れば線畫は支那固有の藝術でなければならず、又た佛像を見るにその興りは必ず佛敎傳來の後でなければならない。東漢の明帝が使を天竺に遣はして佛法を問き、遂に佛像を圖畫にして支那に傳へた（後漢書西域傳）と云はれてゐるが此種の畫圖は既に考證出來ないものとなつた。然し謝康樂が善く佛像を描いて著名になつたとすれば佛畫は六朝に既に支那藝術に於ける一派別をなしたであらう。謝氏の佛畫は世に既に罕に見る所となつたが六朝の造像（石彫）及び唐代の佛像を見ると佛像の表現も亦た線を以て主とすることが解る。只だ佛畫の線描と人物畫の線描との間には異なる點が存してゐる。佛像の表現は鎭靜的で內練的であつて、藝術家の眼には只だ一箇不動の姿があるのみで、その姿を表現する線も簡緻こそ必要とすれども波動を必要とせず概して、だらくした平直細潤なるのである。然るに人物畫の表現は人間の情態に重きを置き、人

間の情態の發露は全く動作に依據し、動作が多ければ線の波動も曲折も複雜になり、從つて、線紋の筆致に變化を求め、力强さを求めなければ充分に表現が出來なくなるのである。宋代の張昉、馬遠、夏珪諸家の人物畫の筆法が敏速にして峭折特に變化が多いのは此の爲である。これは蓋し佛像と人物畫との觀點が異なつてゐる爲にその藝術的表現も亦た趣を異にするからであらう。

佛畫の宗師と謂はれる唐代の呉道子の線は固より、畫像石や顧凱之の人物畫の筆致と異なる處がなかつた。支那固有の呉氏の線描藝術に若し外來の影響があつたとすればそれは佛教が與へた人生の靜的觀照でなければならなかつたであらう。而して、佛畫の表現が動作にあるのでなければ呉道子の佛像が世に推崇された所以は矢張り呉氏の線描の力强さにあつたであらう。支那藝術が佛教の影響を受けたと云ふ説が藝術の取材の增加を意味するものならば承認し得るが若し藝術そのものが佛教輸入の爲に變化したと云ふならば聊か當を得てゐないではあるまいか。

呉氏の後に於ける佛畫の線紋は段々と細潤になるにつれて、表現の獨自な力强さを失つて色彩に依存する樣になつた。人物畫に於ける線紋も波動はあつても、濃重に陷り、畫家は筆に力を用ひることを知るのみで、もの丶動作情態の表現を忘却して遂に止むを得ず、因襲に依り、舊形を模倣することによつて人の意會を求める樣になつた。此時に於て、人物畫の筆致、情態は俗套（マンネリズム）に陷つて仕舞つて、唐以後の佛畫人物畫は殆んど觀るに足るものがなくなつた位ひである。唯だ宋代の李龍眠は恰度唐の詩僧、貫休が人物畫の線描法を運用して佛像雜淡を描いた樣に人物描寫に佛畫の線法を運用して白描派の宗師となつたが此二人丈は前にも後にも追隨者がなかつた。人物畫は元明時代になつて殆んど繪畫の俗流になつて仕舞ひ、倪雲林の山水の中には全く人物の跡が絕えて仕舞つた。或人が佛畫、道教繪畫の人物、士女、牛馬などは近代が古代に及ばず、山水林石竹禽魚は古代が近代に及ばないと云つてゐるのは所以あることであると思ふ。

二、

山水畫は六朝頃に旣にあつた。梁の張僧繇はかの沒骨皴と云ふ筆法を創めた人であるから彼の畫風は此の筆法によつて想像すれば略ぼその大概を想ひ到るであらう。唐代に至つて、山水畫は律詩と同時にして、大に興り、これより以後支那の山水畫は全く詩人獨占の藝術の觀を呈した。唐宋の山水大家、王維、鄭

史、郭忠恕、范寛の人々は皆な詩人であつた。而して支那山水畫の表現は詩人の心境であつて、自然その儘の寫實ではなかつた。謝赫の繪畫六法には何よりも先づ氣韻の生動と骨法とが重ぜられ、而して、物に應じて形を寫し、類に隨がつて彩色を施し又たは位置を構成する模寫、移植（傳模移寫）の如きは畫家の學習の初歩に過ぎないものとされてゐる。若し眞の畫家たらんと欲すればその陶冶の努力は詩人のそれと變らないのである。先づ自然の景物の變化に對して深く觀照し、心境に萬有の精神を包攝し同時に繪畫の諸法も亦た必ず久しく錬磨の功を積み筆墨骨法を運用して描かるゝものをして生動せしむる如く氣韻あらしむる様にしなければならない。かの、心の動く儘に筆を揮ひ、墨汁を灑ぎ筆の赴るところ、雲烟忽ちに生ずと云つた境地は必ず心境にかゝる氣運の醸成と筆法の円熟を待たなければ達し得られないのである。かくの如く、山水畫家には心境と筆法とが最も重要であつて此の二つを具へて初めて創造と云ふことが云はれ得るのである。

支那の山水畫と西洋の風景畫とは藝術の點から見ても畫家の資格から見ても根本的に相異なる點がある。西洋の風景畫家が畫を作る時に、豫め、心境に神韻の醸成を待つ必要がなく只だ、自然が與へた印象を忠實に模寫すれば足りるのである。それ故、色彩、距離、ダイメンジオンなどが繪畫の構成要素と看做され、此れらの要素の外には彼らの藝術の依據する處がなくまた此れらの要素を除けば理解される根據を失つて仕舞ふのである。極端に言へば西洋風景畫家には自から表現すべく、自分の内在するものがないとも言へるのである。支那畫家は然うではない。夏士良が趙大年の畫を批評して、惜しいことに遠く旅びして思ふ儘に眼界を擴げ、山脈や流河を展望し、以てこの畫筆に資し得なかつたことであると云ひ、又た萬卷の書を讀まず萬里の路を歩まずに畫派の宗祖たらんと欲しても如何にして得られやうかと云つてゐるがその萬里の路を歩み、視野を擴げ眼望を廣くする云々は西洋畫家が繪具箱と三脚と畫板を携へて山間林中に坐して寫生することゝは趣を異にしてゐる。視線を延ばして展望を廣くすることは單に目を動かすのみで手は使はないのである。かゝる時に、作者は只だ充分に自然の波動する神韻を呼吸し、光のニユアーンスを感受するのである。王維の山水論、郭熙の山水訓等は孰れも陰晦晴明の理即ち光のニユアーンスの原則を主として説き、構圖に關しては只だ泉石林木、屋樓凉障を如何に配置するかを説き及ぼしたのみで自然に於ける各物の實在的位置、距離は決して論ぜず、色彩も山水畫の要素とされてゐなかつた。彼らにとつて、色彩が山水畫の中で餘り

大きな意味を持たなかつたのは色彩の變化は大自然の中に於て全く光の明暗に左右せられ、殊に遠い展望にあつては餘りに多くの藝術的效果を與へないからであらう。それ故に山水畫は只だ墨色を考究し、墨色の濃淡を以て充分に光のニユアーンスを表現し得ると考へられたのである。晴雨晦暗、木石林泉は或は春日の烟霞に籠され、或は夏空の下に濃陰に蔽はれ、四季を分たず一切は光の明暗に包まれてゐる。畫家は科學者の樣に物體の要素を研究し、もの丶距離を量り、光の分析を企てる必要がない。西洋畫に於ける色彩とダイメンジオンの原理を以て、支那の山水畫を批評することは當を得ないことである。西洋畫は色彩の順序に從ひ除々に筆を動かして繪具を塗り付けるのであるが山水畫の要訣は所謂る一氣呵成とか筆を下すこと神あるが如しと云ふ處にあつて、筆の到る處必ず意が具現されなければならないのである。

宋代は唐の畫法を承繼いて山水畫の極盛時代を現出し、名家を輩出した。郭忠恕、范寬、董源、李營丘、巨然和尚諸家の作品の氣韻筆法は唐の王維、韓滉、荊浩、關同諸大家に比べて、これに過ぎても及ばないことはなかつた。郭熙、馬遠、夏珪は畫院の中の人であつたがその作風は純然唐人の筆法であつた。米氏父子になると少しく唐人の作風を變へて、専ら氣韻を主とし、時に用筆も骨法も沒却するに至り、之れに師事する人々は更に骨法を閑却して仕舞つた。然し米氏は畢竟一派の宗師となつて院派と對峙して居た。院派と米派は派別は異なるけれども同じく筆の尖を以つて骨法を傳へる原動者であつた。元代に至ると黃子久、王蒙、吳鎭、倪瓚の四家が起つてそれ迄の畫風を矯正することに意を用ひて専ら筆法を主とした結果、遂に所謂る皴擦と云ふ方法が山水畫の手法となり、恰かも線が人物畫に於ける如き重要な役目を持つに至つて、清朝の諸王（王煙客、王圓照、王石谷）の宗とする所となつた。人物畫が徒らに線紋の鈎描に止まりその表現が動作情態にあるべきを忘れた時に墮落せざるを得なかつた如く、山水畫が皴擦法の推積となつて氣韻を失つた時には觀るに足らなくなつた。王石谷自身の作品には佳作も多く殊に晩年の作には頗る蒼韻に富んでゐるが彼に追隨する亜流の作品になると　畫幅の中の疎密、虛實な處、樹石林泉の處は全部皴擦法の運動であつて何ら氣韻を感ぜしめる所がない。此れは全く山水畫の末路を意味するものである。

清朝の初期には二石と云はれた奇才石濤と石谿とが現はれ、その天賦の奇才を揮り、筆墨を驅使して紙の上に縱横し、その藝術の奔放な處とその性格を想はせるものがあり眞に宋元以後畫派の祖師の資格を具へた大家であるが惜しいことに後人に凡

庸の才が多く―彼らは諸王（烟客、石谷、麓臺）を以て至上の宗師とし殊に、王石谷の筆法は簡單にして遵守するに容易であつた―若し乾隆時分の雜聘の作品に二石の影響を覗はせる處がなかつたならば此の二人の天才の藝術は跡絶えたであらう。

民國初年頃に江西省の詩翁陳三立の子、陳師曾は家庭的薫育から優雅な性格は啓發され、繪畫に對して眞に賞鑑と批評の眼を有し、時流の頽風を挽回せんと試み四十歳以後には深く二石の藝術を會得したが惜しいことに壽命がなかつた。而して彼と交友する人々も凡庸であつたと見え、彼が誰れの影響を受けてゐるかを知らなかつた樣である。

三

唐代に李將軍と呼ばれた李照道はその父李思訓の金碧輝映の法を受けた界畫の先驅となつた。宋代に至つて畫によつて人才を選ぶ畫院が創立され、界畫は界畫中の一派を形成した。界畫の特長は建築物花園の内部、所謂房樓臺閣石欄玉砌及び苑花臺柳の如きものを精巧に描寫し、生動する氣韻の崇高は衰へたが鈎勒と彩色とは明るい氣分を與へ、實に妙境に達したと云へる。劉文通、趙伯駒、伯驌は實に此派の大家であつて殊に吳元瑜の描寫は纖細にして色彩が鮮潤、後に青綠山水の風を開くことゝなりかくの如く、畢竟するに青綠山水は界畫から出たものである。

四

花鳥（花卉翎毛）は支那繪畫の内、色彩を重んずる藝術である。宋代の畫院が創設されてから支那繪畫は凡ゆる畫格を具へるに至り、花卉翎毛等生き物を寫す所謂る寫生も亦た此時に盛になるに至つた。徐崇嗣、趙昌、徽宗、劉松年などは唐代の邊鸞、刁光胤と前後相照應して寫生界の泰斗となつた。寫生は一方に自然を手本とし、他方、色彩を研究するに至つた。作家の意匠は往々造化と明艶を爭ひ、又た、造化と爭はん爲に、自から繪の具を手製し或は發明しなければ色彩の精妙を致すことが出來ないと思はれた。かくの如く支那の畫家は獨立に色彩を求めて寫生に運用したが支那藝術に徹底的な寫實を求めることは無望である。明代の邊文進及び淸の初め頃の惲壽平の寫生は深く氣韻生動の法を得て稍や宋人の風格を變へ一代の作家となつたが之に師事する者は邊惲二氏の才に及ばなかつた爲か徒らに柔媚細膩に趨き甚しく煩雜に陷いつた。

宋代の寫生藝術には猶ほ別派があつた。文與可と蘇東坡の如きは墨竹を描いて名を著はし錢希白も亦た善く墨を用ひた。墨

を用ひて生き物を寫すに重きを氣韻に置くのは理の當然であるが創始者は才が高く、藝も精練されてゐたが彼らを模倣する群流は前人の特長を誇張し極端に走つて墨戲となつた。墨戲の典型的代表者は八大山人であつて、彼の墨戲は哭き笑ひの間に出來別に胸襟を具へたもので、自らそれを藝として論ずる譯には行かない。之に師事するものの罪は花鳥の色彩を奪つたのみならずその亂塗亂抹が徒らに絹素を汚がす處にあるのである。

明代の張圖南、丁南羽が出て、人物畫と佛畫とを同時に復興し清朝の金冬心はその風を承け、その門人羅聘になると大いに此風を發展せしめ彼の山水人物、佛像、鬼神などは妙ならざるものなしと云はれた程清朝では第一の天才である。唐宋の藝術が亡びなかつたのは羅氏の功勞であつて、彩色を使はず、氣韻と骨法とを重んずる彼の畫風は墨法をもよく保存した。彼の夫人方白蓮は花卉に絶妙を得、描寫も墨法を用ひ氣韻も羅氏の作に劣らなかつた。初め、柳如是、馬湘蘭寇白門等明末の名妓が居て、多く當時の名士に接近する爲に深く彼らの影響を受け筆墨を學んで弄ぶ時孰れも巧妙の域に達し、氣韻の豐潤は前賢に敵し、蘭石竹柳等の小品は殆んど一代の風格を見せたものであるか方白蓮の藝術もこれら明末の女流の風致に近い所がある。

東坡の墨戲と明末女流の氣韻とは淸朝末期の藝術を形成した山水人物は全く跡を絶え花木禽魚が好尙の的となつた。畫の體裁は猶ほ明末諸妓の習用した所のものであるが畫法は、文人の墨戲であつた。その內、趙撝叔は衆輩を凌駕して崇望され、吳昌碩は之に師事した。所謂支那現代の藝術は吳氏を中心としその門人は南北に遍してゐる。然し吳派の藝術は畢竟女流、文人の習癖を脫し得ない。女子は纖弱である爲に山水に接することが出來ず只だ花木禽魚にその能を盡し得るのみ、文人は概して深刻な鍛練をしなくなつて只だ墨戲を能事とした。墨戲の亂塗亂抹はよく女性の氣風を打破し得るか取材に至つては餘り女流のそれと變りがないのである。



前列向って右より小畑薫良氏、林風氏（藝術學校長）凌叔華女史（閨秀作家）陸小曼孃、本社員上村、王世杰（北京大學）後列向って右より馮友蘭氏（燕京大學）丁西林氏（北京大學）馬寅初氏（中國銀行）楊振聲氏（北京大學）陳西瀅三氏（北京大學）徐志摩氏（北京大學）陳博賢氏（晨報主幹）陶孟和氏（北京大學）高一涵氏（北京大學）任鴻雋氏（北京大學）唐有壬氏（中國銀行）周頤生氏（北京大學）

民國寄稿家略歴

○徐志摩君。英米に留學し、目下北京大學に英文學を講じてゐる。民國著名の新詩人且つ創作家にして、隨分勝手な新しい形容詞や熟語を使つて、その詩、文共に光彩陸離たるものがある。且つてタゴールと同伴で日本に遊んだことがある。

○丁西林君。北京大學の物理の教授だが、なかなか愉快な人で頻りに獨幕劇を書いてゐる。已に小集「一隻馬蜂」が出版されてゐる。

○馬寅初君。中國銀行重役にして、同時に師範大學の教授。おそらく支那に於て最も優れた經濟學者であらう。多くの演説集を出版してゐる。

○高一涵君。北京大學教授。民國に於ける最高級の雜誌「現代評論」社の同人。有名なる政論家。日本に留學したことがある。

○凌叔華女史。西洋の學問をして然も、支那固有の美點を具備した珍らしい女性である。小説を書きその上書畫に堪能で七絃琴を彈ず。北京の内外人社交界の明星である。

○楊振聲君。コロンビア大學教育部出身。北京大學に心理學を講ず。詩人である。現代評論の文藝の編輯擔當をしてゐる。

○馮友蘭君。コロンビヤ大學の哲學博士である。故郷河南省の中洲大學文科長であつたが戰亂を避け暫く廣東大學に教鞭をとり、目下北京燕京大學哲學科の教授、新進篤學の士である。

○朱彬夏女史、上海大學校長胡氏の妹で米國に留學し、支那に於ける「新らしい婦人」である。

○鄧心畬君。清朝随一の書家完白山人を先祖に持つ人だけあつて、優れた藝術家としての天分を多分に持つてゐる。現に國立藝術學校の美學の教授である。

○陳源君（西瀅）北京大學文科教授、閒話大家として知られゐる。諧謔、諷刺に富み、時に筆鋒鋭きに過ぎ敵を作ること多し。

○田漢君、東京高師の出身。上海大學講師。時々戲曲を書き、目下は南國電影社を創始して、民國活動寫眞界を指導してゐる。

○謝六逸君。上海復旦大學で日本の古文學を講ず、別に神州女學校を經營して上海女子教育界に著名である。

○陳望道君。上海大學教授。日本に留學し法律經濟學を專修したのだが、上海大學では中國國學を講じてゐる。

○林騤君、上海の青年獨立黨の領袖にして、新支那興亡の爲めに獻身的に働い

てゐる。

○何畏君。東京帝國大學の文學士で、目下鵠沼に住居し大學院で研學してゐる。眞面目に日支親善のことを考えてゐる人である。

○樊山君。樊山は增祥氏の雅號である。現代の民國最大の書家にして漢詩人として著名である。

○梁啓超君。民國に於ける操觚界の元老である。目下清華大學の教授である。

○顧頡剛君。北京大學の教授で、非常な篤學家である。民國歌謠の研究に沒頭して、殆んど民國全部に渉つて蒐集する歌謠數萬に達してゐる。

○饒孟侃君。北京大學教授である。その作詩は麗美であつて、民國新詩人として著名である。

○聞一多君。詩の題材を多く現代支那の社會相にとり、熱血詩人である。

○郭沫若君。日本に留學し、現に廣東大學文科長である。創造月刊を創刊して南方支那文藝界の重鎭である。

○張資平君。上海に住し、創作家とて著名の人である。

○呂孫熾君。九州大學醫學士にして目下東北大學理學部の學生である創造月刊の同人である。

○胡適君。ドクター・フウとして民國で最も著名な「新人」である。北京大學文學部の教授にして、英國の對支文化事の民國側委員でもある。文學革命の指導者としての彼はおそらく政治革命家としての孫文に匹適するであらう。

○李人傑君、民國に於ける革命家であり又、勞働運動の指導者である。京漢鐵道從業員の大罷業の隱れたる指導者は彼れであるといはれてゐる。曾つては中部支那の某大學、某々大學等の教授であつたが目下は、南部支那の某大學に教鞭を執つてゐるが、都合あつてその大學名は秘しておく。彼れが常に三、四の變名を使つてゐることでも彼の現在の立場が推知されるであらう。彼は實に日本文に洪能である。本誌の原稿は彼が日本文で寄書したものだ。

海のひびき

徐志摩

『少女(をとめ)よ、伴(つれ)もない少女！
　おん身は、何故にそれほどに
　このたそがれの海を慕ふ？
少女よ、家に歸れ、わが少女』
『いえ、いえ、わたくしは歸りませぬ、
夜風に吹かれてゐたいのです』
砂山のほとり、夕もやのさなか
斷髮の少女ひとりとゆくかくゆき
　そぞろ歩き。

『少女よ、斷髮の少女！
　おん身は、何故にそぞろ歩く
　かくもさびしい海のほとりを？
少女よ。家に歸れ、わが少女』
『いえ、いえ、わたしの歌をお聽き、
大海よ、さあ、わたしとお歌ひ』
星空のもと、涼風のさなか
ほがらかに少女の歌は心ゆく
　　　高く、また低く。
『少女よ、氣性の強い少女よ！
　空の果てには黑雲が出た
　今にあらしが來るだらう——
少女よ、家に歸れ、わが少女！』

いえ、いえ、わたしの舞ふのを御覧
　空に舞ひ上つて鴎になつて波に浮かう』
宵闇のさなか、砂山のほとり
なよやかに身をひるがへす
　　　ひら、ひらと。

『お聴き、あの大海の怒つたのを
　少女よ、家に歸れ、わが少女！
ごらん、猛獸のやうに狂ふ波
　少女よ、家に歸れ、わが少女！』
『いえ、いえ、波はわたしを呑まぬ
　わたしは海の荒波が好き』
潮とどろに、きらめく波に
　あなや、少女は身を踊らせた

ひらりとばかり！

『少女よ、いづこ、わが少女？
　お前の歌は今はどこだ
　お前の影は今はどこだ
どこだ、勇ましいわが少女？』
黒い夜は星の光を呑み
　海のあたりはもうきらめかぬ
潮は砂山を呑み盡し
　砂山にはもう少女は見えぬ——
　　また再び見えぬ少女！

——佐藤春夫譯——

春光

聞一多

ひそやかに死せるにも似たるかの呉竹、
その呉竹のしげり葉をもれて見ゆる珊瑚、そは桃の實。朝日子を浴びてさきはふ雀。
春の光は綠の一葉一葉の上を爬ふ。
ましぐらに一筋の日の光、わが眼を射ると見れば
わが眼の内よりは萬本の金の箭ぞ飛び出づ。耳のあたり又はたく／＼と翅音聞え、
天使のあまた、なか空にまふとも思はる……

忽ちに露路のかなたより一陣の淸風ぞ吹き來る、
『かはいさうなはこの盲で御座い、お旦那様や奥様がた。』

三月十八日

――大總統府前の大流血を紀念して――

鐃孟侃

『平や、お歸り』

『お母さん、只今。』

『お前どうして着物の襟を折りまげて歩いて來たの』

『途で一寸汚したのです、』

『心配なさいますな、あちらで着換させて下さい。』

『弟は？何うして一しよに歸つて來ないの。』

『あれは、あれは私に追つかなかつたのです――何でもありませぬ、お母さん、何でもないんです、弟だつて、まさか一人で歸れないこともないでせう。』

『平や、今日街はこんなにひつそりして居る、まさか何か起つたのではあるまいね。』

『でも、こんなこと近頃は度々です、

何うしてうるさくそんなことを聞くのです。』

『そうぢやありませぬ、昨夜私はお前達兄弟の夢を見ました、

それに今朝起きると又烏が騒いで居りました。』

『お母さん、お年寄りの迷信はいけませぬ、烏に何で人間のことが分るものですか。』

『何うしたの、お前の兩の眼は眞紅に腫れ上つて居る』

『これは、これはほこりが眼に入つたのです。』

『おや、お前の襟には血が……まあ。』

『なに、これは途で羊殺しに出會つたので、其時着物につけたのです。』

『まあ、平やお前ほんとに嘘言つてるのね。さあ云つてお呉れ、あれは、あれは一體何うしたの？』

——十五年六月一日——

三月五日雨
一夜杜陵洗
兵馬保全壯
士積銀河祁
祁雲遲天心
精煦煦嘉溫
地脈和草木
回首銷戰血

近詠

樊山（增祥）

沁園春　貽孫邀飲酒樓遂詣華樂園觀二姚新劇

滄海橫流。解散千愁。惟憑二酒巵一。且蛤蜊同食。那知許事。鱸魚正美。託二甚先ㇾ幾。新釀二梨花一。香羹薺菜。大好江南春社時。憑ㇾ高望。又五城之火。萬壑琉璃。

歌樓玉合蜍脂。羨並蒂花開姚女兒。看風鬟霧鬢。教三成歌舞一。狸袍玉帶。忽幻鬚眉。梅蕚雙身。柳詞三變。冰雪聰明煙電衣。不ㇾ當ㇾ作ㇾ門。明朝菘管。來也休ㇾ遲。

無悶　二月六日快雪得晴謾賦

明日春分。偏遣二玉妃一施散九。（作平）龍法水。甚紙帳春眠。曉寒催起。着地瓊瑤即化。似ㇾ新蓋二芳田鷄茸被一。（俗以積雪爲麥蓋被）一年好景。梅花未ㇾ落。柳花爭墜。

誰會海棠意。正撰ㇾ借二春陰一。綠章言事。縱勒ㇾ索停ㇾ朱。不ㇾ嫌二遲貫一。坐對二梨雲二晌。又一段霞拖二篤黃綺一。且佇立。幽草斜陽。俛仰晚晴身世。

黍苗如青起
農歌溟濛去
是芳生淚灑
向暮戲勸止
戈雨實莫春
改造社委托屬
公卅一翁增祥書
于北京大条巷

如夢令

閒把玉簫拈弄。戲裊釵頭金鳳。詩到玉溪生。任是無情也動。情動情動。翠壓眉山愁重。

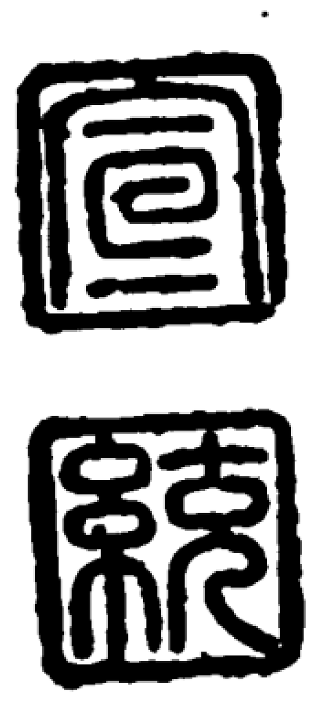
東風第一枝 竹勿星橋皆以風雲爲歌臺第一余無以難之戲成此解兼調蘭芳

鎖恨看長。含嬌眼瞷。蕭娘天賦姿媚。競誇翠袖無雙。不屑紅瓊第四。風流二老。算擎得美人雲起。把魏姚嬌紫嬌黃。伴作雒陽花瑞。驚舞處。桂旗旖旎。驚囀處。王聲清脆。退紅杏子衫輕。養鹽桃兒粉膩。桑娥多妒。海棠要梅花爲壻。戲謂蘭芳 待撮合碧難成雙。玉郎未知誰是

三部樂 花朝用美成體

早起鈎簾。驗一日雨晴。百花生熟。花朝無雨爲百花熟 柳煙吹霧。紅煞樓東清旭。屈指百五韶光。正遠山淺綠。凍樹微綠。玉瓢酌酒。持向花神稱祝。花顏祝永好。祝紫鴛綉燕。並飛雙宿。相將采珠拾翠。羅襪屐撲。試踏青鳳鞋一掘。渾不用雕鞍繡轂。銅陌十里。閙蜂蝶。無限追逐

書曰爾惟弗矜天下莫與汝爭功爾惟不伐天下莫與汝爭能以齊桓公之盛業片言勤王則九合諸侯一匡天下葵邱之會微有振矜而叛者九國



(四)伏虎

長着低瞑，
坐待毒沱冷；
坐下山君呼不應，
眼着闍黎入定。
堂堂月照空林，
琅琅泉奏鳴琴。
後夜欠伸一吼，
眼前大地平沈！

右調清平樂

近詞寫寄
改造雜志社
梁啓超 丙寅首夏

題宋石門羅漢畫像(四首)

梁啓超

一、戲貓

晴晝日烘花、
篩破一堦花影。
花底貓兒打架、
問有無佛性？

眞晝の日は輝きて花を灼き、
かげろへる影はゆるげり
花のもとに戯れるは貓、
問はまほし佛性のありやなしや

霎時熱惱更淸涼、
雨過竹逾靜。
院院悄無人語、
猛一聲寒磬！

右調好事近

二、托鉢

香積炊煙散淡、
祇桓齋供完時、
各人受用各些兒、
鉢裏醍醐一味。

達磨十年作甚？
黄梅半夜傳誰？
不如搥碎這銅皮！
免得慧能搗鬼。

右調西江月

一村雨のふりてとみに涼しく、
雨過ぎて竹のいよよ靜けし。
庭ぬち寂として人聲もなみ、
たけく響けり、一聲の寒磬。

香積の國、かしぎの煙散じ、
祇桓の園、齋終るころしも、
おのがじし得たらんか、
鉢ぬち醍醐の味。

達磨は十年何をか作し、
黄梅（禪師の名）は夜なかば誰にか傳きし。
如かづ打碎かんには、この銅鈸子、
慧能（禪師の名）の迷ひも免れなん。

三、菖蒲

朝朝料水量沙、
眠巴巴、
要看石。蒲。結子又生花！
菩提葉
落還長、
且由他。
若會得時一例沒根芽。

右調相見歡

朝な朝な、水を料り砂を量り、
眼見ひらき、
石菖の花咲き、實らんを待つ。
菩提の葉は、
しぼむも又長ぶ、
亦佛によるところ。
汝會得する時はしも根も、芽もあらばこそ。

四、伏虎

長看低眠、
坐得盤陀冷！
坐下山君呼不應！

仰いでは見、俯しては眠る、
うづくまる光が根や冷たし。
山下より見呼べども應へず、

眠著闍棃入定。
堂堂月照空林、
瑯瑯泉奏鳴琴。
淩夜欠伸一吼、
眼前大地平沈！

右調清平樂

近詞寫寄改造雜志社梁啓超 丙寅首夏

闍梨入定の後をや追はん。
堂々の月は空林を照らし
瑯々の泉は琴をぞ奏づ。
夜深み一あくび吼ゆれば、
見はるかす大地は眠る。

(註) 香積――國、香積如來の止住する國、芳香馥郁たり

祇桓――Jete vana 勝林と譯す、祇陀太子の有せる樹林、太子須達の求めに應じて此地を賣りそれと同時に自ら其樹林を佛陀に献ず、祇樹給孤園と名づけらる。

蘇州の歌謠

顧頡剛

歌謠はこれまで注意されなかつたものだけに、書籍のなかに殘されてゐるものは極く少い。唯、當時の人が見て國家の情勢に關係があると思つたものだけはやつと、國史の「五行志」のなかに載せてある位なものだ。この方面の損失は、甚だ大きなものである。近來になつてわが國でも世界の風潮の感化で、北京大學では民國七年になつて歌謠の蒐集に着手した。それで現在では、集つてゐるものももう二萬首はある。みな研究所國學門の歌謠研究會に藏めてある。しかし、學校の經費が不如意なためにまだ整理して刊行するところまでいかぬ。

蘇州は支那近古に於ける文化の一中心であり、その地の歌は甚だ有名である。『辭源』を繰つて見ると『山歌＝榜人（舟人）の歌ふ所、吳（蘇州一帶）人多く之を能くす。卽ち謂ふ所の水調なり』とある。しかし實は、山歌（卽ち民謠）なるものはどこにでもあるので、ただ蘇州の人は水鄉の影響を受けてその聲調は靡曼にして纏綿、聽く者をして容易に感心させる。

歷史上より蘇州の歌謠を研究するに、最も早く記載に見えるのは、楚辭招魂篇の『吳の歈、蔡の謳、大呂を奏すること些し』とあり。又漢書藝文志の歌詩類中に『吳、楚、汝南の歌詩』一種がある。ただし、此等は皆樂曲であつて徒歌ではない。其上所謂『吳』なる地域も一定して居らず、或は國を稱することあり、或は郡を稱する場合があるからこれ

が蘇州の作品であると確說することは出來ない。宋の郭茂倩の『樂府詩集』中に『吳聲歌曲』四卷がある、是は六朝より唐代に至る樂曲を集めたものであるが、大抵は金陵（六朝の國都）を中心としたものである。

吾人の今說かんとする歌謠は、吳縣の蘇州市を中心とし、それより太湖地方（江蘇省の東南部と浙江省の西北部）に及ぶものである。此の區域内に於て我々の蒐集した歌謠の中では、五代時代の吳越國王、錢鏐の唱つた所を最も古いものとする。宋の僧文瑩が著はした『湘山野錄』中に記する所によれば、錢鏐が故鄕に還つて鄕人と宴會した其時彼は先づ一首の文言體の歌を唱つた。

三節還鄕兮挂錦衣、吳越一王駟馬歸……

處が鄕人は皆之を解せず。彼は興を盡す能はざるを覺り、即ち吳音を用つて山歌を謳した。

儞輩見儂底歡喜、　　君がたが儂に見せてくれる喜び
別是一般滋味子、　　これがまた格別の馳走です
永在我儂心子裏。　　きつといつまでも儂の心にのこります

歌ひ終るや連中の喜ぶこと非常であつたと云ふ。是れも平民文學の貴族文學に勝ることを示す一故事ではあるまいか。

明の王世貞の『藝苑卮言』の中に曰く『吳中の人の棹歌は俚字鄕語、俗を離るゝ能はずと雖、而も古の風人が遺意を得たり。其辭も亦採るべきものあり。例へば

月子彎々照九州、　　月はかがやかに天下を照す
幾家歡樂幾家愁？　　樂しみみる家は幾つぞ歎けるは幾つぞ
幾人夫婦同羅帳？　　幾人の夫妻が一つ蚊帳にゐるか

幾人飄流在他州。　幾人は流寓して他鄕にゐるか

の如き、或は又

約郎約到月上時、　月が出たら逢はうと約束した
只見月上東方不言渠。　月は東にのぼるのにあの人は見えぬ
不知奴處山低月上早？　わたしの處は山が低くて月が早く出るか
又不知郎處山高月上遲？　あの人の處は山が高くて月の出がおそいか

の如き、子建、太白をして降つて俚談を爲さしむるも尙恐らくは亦過ぐる能はさらん』と。彼の此批評も決して溢美と云ふことは出來ない。民間文字を識らざる天才詩人も亦眞に多いのである。

民國八年、余蘇州の故鄕に在つた時蘇州市並に其附近の歌謠二百餘首を採集した。併し惜しいことには間もなく離鄕したので此仕事も繼續進行することが出來なかつた。若しそうでなかつたら此七八年の間には必ず一千首以上を採收することが出來たであらう。此等の歌詞の內百首だけは旣に淸書して注音、釋義、考證を加へて『吳歌甲集』と云ふ册子に編纂し、北京大學歌謠研究會から印刷する筈になつて居るから間もなく刊行されることゝ思ふ。今余の蒐集した蘇州歌謠と他人の蒐集に係る太湖地方の歌謠中から若干を撰出して見やう。

歌謠中で最も面白いのは矢張り情歌であるが併しこれは皆田舍の方で發達したもので城市中の人間は皆禮敎の束縛を受け、爲に戀愛は祕密なものとなつてしまつたのである。

（一）　（一）

姐拉田裏摘菜心、　姐さんは畑で菜を摘んで

田岸頭上丢條裙。
『郎呵、郎呵、
要吃茶心拿一把去、
要想私情別起心！
長裙短裙爺娘擇、
着仔儂個紅裙實仔我個身！』

野良の姐さん裙(はかま)もない
「もし、もし、郎(あなた)、
お茶が入るなら上げますわ
浮いた事なら言はないで頂戴
裙(はかま)が入つたらお父さんお母さんにたのみます
あなたが下さる紅いのをつけれや、わたしはあなたのものですわ」

(二)

吃々粥、呷呷湯、
看々情哥看々郎：
情可好像正月裡個梅花、二月裡個
杏花、三月裏個桃花、白裏泛紅、
紅裏泛白能樣好、
我郎好像四月裡個茶花黃！

お粥を啜り、お汁を吸うて
よくよく姿(なり)のいい人を見たらば(譯注以上二句は音からみの來る對句)
あのひとは正月の梅の花、二月の杏か、三月の桃、白から浮き出た紅の色、
紅から浮き出た白い色。
四月の茶穜の花にも似てゐる。

(三)

結識私情結識恩對恩、
做双快鞋送郎君。
薄々哩個底來密々哩紮、——

結ばれていつか結んだ深い仲
あなたに上げたい輕い鞋
薄い底でもしつかり縫つて

情哥郎着仔脚頭輕！

（四）

結識私情結識隔條河、
手攀揚柳望情哥。
娘問女兒『儂拉浪望啥個？』
『我望水面上「穿條」能個多！』

（五）

昨日夜裡滿天星、
今朝落雨弗諒應。
情哥郎儈帶釘鞋傘、
小奴々急斷肚腸根！

（六）

一隻小船彎勒彎、
雨邊花樹到南海。
千葉牡丹薔薇裡、
看花容易採花難！

あなた身がるに來るように

（四）

結ばれていつか深間の河向ひ
お家見たさに柳にのぼれや
「何を見るの」と母さんが言つた
「水に目高がどつさりよ」

（五）

ゆうべの空は星だらけ
思ひがけない今日の雨
簑笠足駄は持たせずに
ほんに氣が氣ぢやないわたし

（六）

ゆらり〳〵とゆく小舟
花の雨岸行く手は南
薔薇に雜つて咲く牡丹
見えは見えても折られやせぬ

城市中の女子の唱ふ歌は、大部分家庭生活の方面に偏して居る。家庭生活の中では姑と嫁との不和、小姑と嫂との不

和、夫姑の不和、妻妾の不和等あり、その故に歌も大部分は此等の痛苦の情を歌つたものである。

（一）

油菜花、黄々黄。
嫁了女兒哭殺娘。
娘談嫁了心肝女；
嫂談嫁了孽舍姑！

（二）

月亮圓々、
荷花囡々
出來張娘。
娘説道、『金和寶轉來哉！』
爺説道、『寶知金轉來哉！』
阿爹説道、『敲背囡轉來哉！』
好婆説道、『荷花囡轉來哉！』
嫂々説道、『敗家精轉來哉！』
哥々説道、『攪家精轉來哉、
攪得黄河水弗清！』

（一）

菜の花は金色に咲く
女(むすめ)をとつがせて母親は泣く
母親は言ふ「可愛いいあの子は去つた」
嫂(あによめ)は言ふ「行つてしまつたよ、やかましやが」

（二）

月がまんまるなところ
荷花ちやんが
お母さんのところへ會ひに來た
お母さんは言ふ「好い子がよくも歸つた！」
お父さんは言ふ「よくもいい子が歸つた！」
お祖父さんは言ふ「肩をたたく子がよく歸つた！」
お祖母さんは言ふ「荷花ちやんやよく歸つた！」
嫂(あによめ)は言ふ「やつかい者が來たよ！」
兄貴は言ふ「引掻きまぜ屋め來やがつた
引掻きまはして黄河はにごることだ！」

『吃爺飯、着娘衣、
倒吃哥々稟裡米、
倒着嫂々嫁時衣！』

（三）

湯山頭上花小籃、
新做新婦多許難。
朝晨提水燒粥飯、
下晝提水燒浴湯。
姑娘澀浴娘施背、
阿嫂澀浴白淴湯、
一雙新鞋蕪踏溼、
眼淚汪々哭進房。
丈夫說道、『勿哭哉！勿哭哉！
廿年新婦廿年婆、
再歇廿年做太婆！』
『太婆弗是容易做、
想々前々後々一段苦！』

「お父さんが食べさせて下さる、お父さんが着せて下さる。
いつ兄さんの御米櫃の御世話になりました？
いつ嫂さんのお嫁入着をお借り申しました？」

（三）

湯山のほとり花がこんもり
新らしく來た嫁は苦勞がどつさり
朝は早くから水汲んで御飯たき
午(ひる)がすぎれば水汲んでお風呂の仕度
お姑さんが這入れば背中をながす
兄嫁さんが這入ればお湯を足す
新らしい鞋(くつ)も濡れてびしよ〳〵
涙ぽろ〳〵部屋へかへれば
夫は言ふ「泣くのではない！泣くのではない！
二十年は嫁でも二十年後は姑さん
また二十年すれば大姑(おほしうと)さん」
「その大姑さんまでが大變だわ
思へば思ふほど苦勞があとから〳〵」

(四)

堂上一對小夫妻、
說々談々把家事提、
『娘子呀！
樓上茶坊多聽話、
兩個浮生談我妻。
娘子呀！
勸儞腰結汗巾秋香色、
勸儞娘子依不依？
娘子呀！
芙蓉面上何必搽脂粉、
小口櫻桃何必用胭脂點、
三寸金蓮算不得大、
繡花鞋內襯什麼內高底！
娘子呀！
儞可季鮮花何必戴、
家常何必穿新衣！

(四)

部屋には一對の若夫婦
ちん〱かも〱の內輪話
「女房や！
今も茶坊で聞いて來たよ
のらくら者がふたりお前の噂
女房や！
お前鬱金色の帶をするかい
どうだ、女房、いいか、いやか？
女房や！
蓮のやうな可愛い顏だからお白粉などはするな
花びらのやうな脣に紅はいるまい
三寸の足が何で大きい
飾り履のうらにはつぎ底はいらない！
女房や！
きれいな花などかささずともいい
うちにゐるのに新の着物は何事だ！

空閒何必在門前立、
不可對人笑微々、——
儂是無心他有意』。
『相兮呀！
我穿的衣都是件々嫁時衣。
若說不穿衣、
在家絹箍貼封皮、——
封皮幵拉何方地？
女人不足穿新衣、
何等人家穿何等的衣？
可手鮮花、娘家都挿借、
胭脂花粉原是年輕揭。
相兮呀！
儂自己不要引人看、
別人不希奇儂妻。
勸君莫要太多疑！』

手が空いたからつて門へ立たずともいい
何だつて人を見てはにこ〳〵する——
お前にそのつもりはなくとも相手が意味ありげに思ふわさ」
「あなた！
わたしの着るのはみな嫁入仕度
着ていけないと仰言るなら
葛籠に封をしませうよ——
封印はどこにございます？
若い女に新らしい着物がいけなけや
どんな人がどんな着物を著るの？
時折の花は、みんな娘が挿すわ、
紅や白粉だつて若いうち。
あなた！
あなたが人に見せたくないと仰言らなくとも
誰もあなたの女房なんぞ見るものですか
餘り悋氣はおよしなさいな！」

此種閨閣中の歌は章節の長いものが極めて多い。而して此地の女子達は大抵多少の文字を解するからして彈詞唱本を

詠むことが出來、從つて此等歌謠の風格も自然と彈詞唱本に接近して來て居る。

現在太湖地方に於て最も流行して居るのは『孟姜女十二月花名』である。之が歌へない女と云つては殆で一人もなからう。孟姜女の故事の大意を云ふと、秦の始皇が萬里の長城を築造した時、萬喜良と云ふものが土工に徴發されて行つたが工事中死んだので長城の中に埋められた。其妻孟姜女は彼の歸つて來るのを待ち焦れて居たが、久しく便りもなく、遂に已むなく自分で長城まで探しに出かけた。長城に着いて見ると自分の夫が死んだ事が分つたので城に向つて痛哭し、遂に城壁を哭き崩したと云ふのである。此『十二月花名』は原と『唱春調』の樂歌であつたのであるが、其記する所、孟姜女の故事ではなくて孟姜女の夫を懷しむるの情を寫したものであつたから、能く女の心情を捉へ非常に流行する樣になつたのである。即ち樂歌から徒歌に變つたものゝ一種である。今其其十二首中から數首を下に節錄する。

正月梅花是新春、　　正月梅の花おめでたい
家々戸々點紅燈。　　戸毎に紅いお提灯
『別家大夫團圓聚、　　「よその家では夫婦のまどゐ
奴家的大夫去造長城！』　　うちのお方は長城普請！」

四月薔薇養蠶忙、　　四月は薔薇よ蠶どき
姑嫂双々去採桑。　　小姑お供の桑摘みは
桑籃挂拉桑樹上、　　桑籠木に掛け木のかげに
勒把眼淚勒把桑。　　涙一拭き桑一葉

六月荷花熱難當、
蚊蟲飛來叮胸膛。
『寧可吃奴千口血、
莫叮奴夫萬喜良！』

六月蓮(はす)の暑い事
蚊が來て私の胸を刺す
『わたしを千度刺さうとも
刺してくれるなあのひとを』

九月菊花是重陽、
重陽美酒菊花香。
『滿々斟杯奴不吃、
無夫飲酒不成雙！』

九月はお節句菊の花
菊の杯よいにほひ
『どうしてわたしが飲まれよう
相手の主もないものを』

此等は皆夫婦離別の哀傷を歌つたもので、彼の『四季相思』の諸歌と正に相同じきものである。若し唐代の詩であつたら『閨怨』と行く所である。

子供の歌の中には聲調の極めて諧和して而も全く意味のないものが多く、或は滑稽味に富んだものが多い。

（一）

小人小山歌、
大人大山歌。
蚌殼裡搖船出太湖。

子供の小歌、
大人の大歌。
ギツチラコ貝殼の中でお船が太湖に出た。

燕子啣泥丟斷海、
鰟鮍跳過洞庭山

（二）

搖々船、
搖到外婆家。
外婆出來留吃茶、
娘舅上山採枇杷。
枇杷園裡剛開花、
胡蜂螫仔半爿巴。
拆仔天來補仔花、
拆仔地來補仔天、
拿塊方磚補仔地

（三）

和尚、和尚！
光頭浪湯。
一記耳光、
打到裡牀。

燕が泥を啣へて海に擲げこんだ、
小はぜが洞庭山（太湖の中の山）を跳び越えた。

（二）

ユラ〳〵小船、
ユラ〳〵お婆さんの家に着いた。
お婆さん出て來てお茶飲ましよ、
お爺さん山へ枇杷採りに。
枇杷畑には花が咲いた、
蜂が片方の頰ぺた螫した。
天を突缺いで來て花に接いだ、
地を突缺いで來て天に接いだ、
瓦の破げで地を塞いだ。

（三）

和尚さん、和尚さん！
坊子頭テーカテカ。
頰ぺたを打叩かれ、
牀儿の後に打倒された。

裡牀一隻缸、
缸裏一個蛋、
蛋裏一個黃、
黃裡一個小和尙、
唔呀唔呀要吃荳瓣湯！

（四）

一個小娘三寸長、
茄科樹底下乘風凉。
撥拉長脚蟢蟢扛仔去、
笑殺仔親夫哭殺仔娘。

（五）

嬰阿嬰阿踏水車、
水車溝裡一條蛇、
遊來遊去捉鞋蟆、
鞋蟆伴拉靑草裡、
靑草開花綉牡丹。
牡丹娘子要嫁人、

牀几の後に缸があつた、
缸の中に卵があつた、
卵の中に黃味があつた、
黃味の中に小坊子が居た、
アーン、アーン、靑豆の汁が喰べたい。

（四）

一寸法師、
茄子の木の下で凉んでた。
足長蜘が引擔いで逃げた、
お父さん笑ひ死に、お母さん泣き死んだ。

（五）

水にぐる〳〵水車、
水車の溝に蛇が一匹、
あつちに行つたりこつちに來たり、お玉じやくしを探してる。
お玉じやくしは靑草の根に隱れた
靑草は花が咲いたら牡丹となる。
牡丹娘がお嫁に行く時や、

石榴姐々做媒人。
桃花園裡鋪行嫁、
梅花園裡結成親。

石榴姐さんお媒人。
桃の花園嫁入行列、
梅の花園嫁取り酒盛。

夏秋の夜、若い男女が夕顔棚の下あたりで涼みながら屢々山歌を以て問答することがある。之を「對山歌」と云ふ。甲が問の歌を唱つて、乙が之に答へることが出來なかつたら即ち負けとなり、乙の方で答が出來て甲がも一度問を發することが出來なかつたら、これも敗けと云ふことになるのである。それだからよく歌へるものは往々問答が甚だしく長くなることがあるのであるが唯誰れも之を記錄して殘したものがないので保存されて居るものは極めて少い。今試みに一例を擧げると、

甲唱

山歌好唱口難開。
櫻桃好吃樹難攀。
白米飲好吃田難種。
鮮魚湯好吃網難張。

甲の歌

山歌は旨まけれど、口を開くのは辛い。
櫻桃は旨まけれど木登りは辛い。
米の飯は旨まけれど田植は辛い。
魚の汁は旨まけれど網打は辛い。

乙問一

哈人對係說『山歌好唱口難開』?
哈人對係說『櫻桃好吃樹難攀』?
哈人對係說『白米飯好吃田難種』?

乙問の一

誰がお前に曰つた『山歌は旨まけれど口を開くのは辛い』?
誰がお前に曰つた『櫻桃は旨まけれど木登りは辛い』?
誰がお前に曰つた『米の飯は旨まけれど田植は辛い』?

哈人對儂說『鮮魚湯吃網難張』?

甲答の一

唱歌郎對我說『山歌好唱口難開』。
販桃郎對我說『櫻桃好吃樹難攀』。
種田漢對我說『白米飯好吃田難種』
捉魚郎對我說『鮮魚湯好吃網難張』

乙問二

落裡碰着唱歌郎?
落裡碰着販桃郎?
落裡碰着種田漢?
落裡碰着捉魚郎?

甲答二

上山碰着唱歌郎。
下山碰着販桃郎。
田角落裡碰着種田漢。
西太湖裡碰着捉魚郎。

誰がお前に日つた『魚の汁は旨まけれど網打は辛い』

甲答の一

歌ひ男が私に日つた『山歌は旨まけれど口を開くのは辛い』
桃賣男が私に日つた『櫻桃は旨まけれど木登りは辛い』
田植男が私に日つた『米の飯は旨まけれど田植は辛い』
魚捕男が私に日つた『魚の汁は旨まけれど網打は辛い』

乙問の二

何處で遇つた歌ひ男?
何處で遇つた桃賣男?
何處で遇つた田植男?
何處で遇つた魚捕男?

甲答の二

上の山で遇つた歌ひ男。
下の山で遇つた桃賣男。
田の畔で遇つた田植男。
西太湖で遇つた魚捕男。
(西太湖は太湖の西南の部分)

乙問三

納亨樣式唱歌郎？
納亨樣式販桃郎？
納亨樣式種田漢？
納亨樣式捉魚郎？

甲答三

長長大大唱歌郎。
矮矮短短販桃郎。
黑鐵襪搭種田漢。
赤腳零丁捉魚郎。

乙問四

送樣啥個唱歌郎？
送樣啥個販桃郎？
送樣啥個種田漢？
送樣啥個捉魚郎？

甲答四

送本小書唱歌郎。

乙の問三

何んな樣子の歌ひ男？
何んな樣子の桃賣男？
何んな樣子の田植男？
何んな樣子の魚捕男？

甲答の三

のつぽうの歌ひ男。
ちんちくりんの桃賣男。
眞黒けの田植男。
徒足の魚捕男。

乙問の四

何をやらう歌ひ男？
何をやらう桂賣男？
何をやらう田植男？
何をやらう魚捕男？

甲答の四

小本を一冊やらう歌ひ男。

送隻篛籃販桃郎。
送雙蒲鞋種田漢。
送兩生絲捉魚郎。

乙問五

一本小書幾許葉？
一隻篛籃幾許眼？
一雙蒲鞋幾許根？
一兩生絲幾許頭？

甲答五

只買小書朆數葉。
只買苗籃朆數眼。
只買蒲鞋朆數根。
只買生絲朆數頭。

乙問六

納亨死法唱歌郎？
納亨死法販桃郎？
納亨死法種田漢？

班竹の籃を一つやらう桃賣男。
草鞋を一足やらう田植男。
生絲を一兩やらう魚捕男。

乙問の五

一冊の小本には紙が何枚ある？
一つの班竹籃には眼が幾つある？
一足の草鞋には藁か何本ある？
一兩の生絲には糸が幾卷ある？

甲答の五

小本買つたばかりで紙はまだ數へぬ。
班竹籃買つたばかりで眼はまだ數へぬ。
草鞋買つたばかりで藁はまだ數へぬ。
生絲買つたばかりで卷はまだ數へぬ。

乙問の六

何うして死んだ歌ひ男？
何うして死んだ桃賣男？
何うして死んだ田植男？

納亨死法捉魚郎？　　何うして死んだ魚捕男？

甲答六　　甲答の六

唱歌郎死起來爛牙牀。　　歌ひ男は齒齦が腐つて死んぢやつた。

販桃郎死起來攧橋上。　　桃賣男は橋の上に打倒れて死んぢやつた。

種田漢死起來下泥潭。　　田植男は泥田中に陷つて死んぢやつた。

捉魚郎死起來氽長江。　　魚捕男は大川に入つて死んぢやつた。

余はこれ迄書いて打切るが、併し對山歌は尙引伸ばして歌はうとすれば『齒齦、橋の上、泥田、大川』から尙幾らでも此種の問ひの句を附け足して何處までも歌ひ續けらるゝのである。此種の歌詞は單に書かれたものを讀んだだけでは勿論甚だ單調なものであるが、それでも若い男や女達が夏の夜をさゞめきながら歌つて居るのを聽いて居ると全く面白いものである。

蘇州の歌謠の種類と形式は大抵斯んなものである。他の地方の歌謠も大體同じ樣なものである。唯支那の地域の大にして人民の多き、若し能く力を盡して蒐集することが出來たとしたら、自分の計算では恐らく二十萬首以上に達するであらうと思ふ。最近學校が設立されて以來都會の子供等は多く學校の唱歌を歌ふ樣になり又敎育が漸次普及するにつれ田舍に於ても亦そうなつて來つゝあるのである。從つてこれから二三十年の內に蒐集を果すのでなければ、此等愛すべき歌謠も全く滅びてしまう危險がある。此點に關し吾人は全く心配して居るのである。



戯曲

壓迫

丁酉秋

人物

男の客
女の客
貸間をする女主人
婆や
巡査

舞台

支那舊式の部屋、正面に庭に通ずる扉、上下兩手の壁にも扉ありて各々寢室に通ず、部屋の中央より稍上手に寄りて白い卓布の掛かつた四角のテーブル、之を圍つて倚子、卓上にはランプ及茶道具、下手壁に近く茶卓（テーブル）、椅子二脚、椅子の背にレーンコートを掛け其傍に手提鞄が置いてある、正面下手寄りの壁に寄せて鏡附の化粧臺、時計、花瓶等載つて居る、其他壁に額椽等宜しく、唯凡べて簡單質素である、

霎時熱惱更淸涼、
雨過竹逾靜。
院院悄無人語、
猛一聲寒磬！

右調好事近

二、托鉢

香積炊煙散後、
祇桓齋供完時、
各人受用各些兒、
鉢裏醍醐一味。
達磨十年作甚？
黃梅半夜傳誰？
不如捏碎這銅皮！
免得慧能搗鬼。

右調西江月

一村雨のふりてとみに涼しく、
雨過ぎて竹のいよよ靜けし。
庭ぬち寂として人聲もなみ、
たけく響けり、一聲の寒磬。

香積の國、かしぎの煙散じ、
祇桓の園、齋終るころしも、
おのがじし得たらんか、
鉢ぬち醍醐の味。
達磨は十年何をか作し、
黃梅（禪師の名）は夜なかば誰にか傳きし。
如かず打碎かんには、この銅鈸子、
慧能（禪師の名）の迷ひも免れなん。

三、菖蒲

朝朝料水量沙、
眠巴巴、
要看石蒲。給子又生花！
菩提葉
落還長、
且由他。
若會得時一例沒根芽。

右調相見歡

朝な朝な、水を料り砂を量り、
眼見ひらき、
石菖の花咲き、實らんを待つ。
菩提の葉は、
しぼむも又長ぶ、
亦佛によるところ。
汝會得する時はしも根も、芽もあらばこそ。

四、伏虎

長看低眠、
坐得盤陀冷！
坐下山君呼不應！

仰いでは見、俯しては眠る、
うづくまる光が根や冷たし。
山下より見呼べども應へず、

眠著闍黎入定。

堂堂月照空林、
琅琅泉奏鳴琴。
淩夜欠伸一吼、
眼前大地平沈！

右調清平樂

近詞寫寄改造雜志社梁啓超 丙寅首夏

闍梨入定の後をや追はん。

堂々の月は空林を照らし
琅々の泉は琴をぞ奏づ。
夜深み一あくび吼ゆれば、
見はるかす大地は眠る。

（註）香積——國、香積如來の止住する國、芳香馥郁たり

祇桓——Jete vana 勝林と譯す、祇陀太子の有せる樹林、太子須達の求めに應じて此地を賣りそれと同時に自ら其樹林を佛陀に獻ず、祇樹給孤園と名づけらる。

蘇州の歌謠

顧頡剛

歌謠はこれまで注意されなかつたものだけに、書籍のなかに殘されてゐるものは極く少い。唯、當時の人が見て國家の情勢に關係があると思つたものだけはやつと、國史の「五行志」のなかに載せてある位なものだ。この方面の損失は、甚だ大きなものである。近來になつてわが國でも世界の風潮の感化で、北京大學では民國七年になつて歌謠の蒐集に着手した。それで現在では、集つてゐるものも もう二萬首はある。みな研究所國學門の歌謠研究會に藏めてある。しかし、學校の經費が不如意なためにまだ整理して刊行するところまでいかぬ。

蘇州は支那近古に於ける文化の一中心であり、その地の歌は甚だ有名である。『辭源』を繰つて見ると『山歌＝榜人(舟人)の歌ふ所、吳(蘇州一帶)人多く之を能くす。即ち謂ふ所の水調なり』とある。しかし實は、山歌(即ち民謠)なるものはどこにでもあるので、ただ蘇州の人は水鄕の影響を受けてその聲調は靡曼にして纏綿、聽く者をして容易に感心させる。

歷史上より蘇州の歌謠を研究するに、最も早く記載に見えるのは、楚辭招魂篇の『吳の歈、蔡の謳、大呂を奏すること些し』とあり。又漢書藝文志の歌詩類中に『吳、楚、汝南の歌詩』一種がある。ただし、此等は皆樂曲であつて徒歌ではない。其上所謂『吳』なる地域も一定して居らず、或は國を稱することあり、或は郡を稱する場合があるからこれ

が蘇州の作品であると確說することは出來ない。宋の郭茂倩の『樂府詩集』中に『吳聲歌曲』四卷がある、是は六朝より唐代に至る樂曲を集めたものであるが、大抵は金陵（六朝の國都）を中心としたものである。

吾人の今說かんとする歌謠は、吳縣の蘇州市を中心とし、それより太湖地方（江蘇省の東南部と浙江省の西北部）に及ぶものである。此の區域内に於て我々の蒐集した歌謠の中では、五代時代の吳越國王、錢鏐の唱つた所を最も古いものとする。宋の僧文瑩が著はした『湘山野錄』中に記する所によれば、錢鏐が故鄕に還つて鄕人と宴會した其時彼は先づ一首の文言體の歌を唱つた。

三節還鄕兮挂錦衣、吳越一王駟馬歸……

處が鄕人は皆之を解せず。彼は興を盡す能はざるを覺り、卽ち吳音を用つて山歌を謳した。

你輩見儂底歡喜、　君がたが儂に見せてくれる喜び
別是一般滋味子、　これがまた格別の馳走です
永在我儂心子裏。　きつといつまでも儂の心にのこります

歌ひ終るや連中の喜ぶこと非常であつたと云ふ。是れも平民文學の貴族文學に勝ることを示す一故事ではあるまいか。明の王世貞の『藝苑巵言』の中に曰く『吳中の人の棹歌は俚字鄕語、俗を離るゝ能はずと雖、而も古の風人が遺意を得たり。其辭も亦採るべきものあり。例へば

月子彎々照九州、　月はかがやかに天下を照す
幾家歡樂幾家愁、　樂しみゐる家は幾つぞ歎けるは幾つぞ
幾人夫婦同羅帳、　幾人の夫妻が一つ蚊帳にゐるか

幾人飄流在他州。　　幾人は流寓して他郷にゐるか

の如き、或は又

約郎約到月上時、　　月が出たら逢はうと約束した

只見月上東方不言渠。　　月は東にのぼるのにあの人は見えぬ

不知奴處山低月上早？　　わたしの處は山が低くて月が早く出るか

又不知郎處山高月上遲？　　あの人の處は山が高くて月の出がおそいか

の如き、子建、太白をして降つて俚談を爲さしむるも尚恐らくは亦過ぐる能はざらん』と。彼の此批評も決して溢美と云ふことは出來ない。民間文字を識らざる天才詩人も亦實に多いのである。

民國八年、余蘇州の故郷に在つた時蘇州市並に其附近の歌謡二百餘首を採集した。併し惜しいことには間もなく離郷したので此仕事も繼續進行することが出來なかつた。若しそうでなかつたら此七八年の間には必ず一千首以上を採收することが出來たであらう。此等の歌詞の内百首だけは既に清書して注音、釋義、考證を加へて『呉歌甲集』と云ふ冊子に編纂し、北京大學歌謡研究會から印刷する筈になつて居るから間もなく刊行されることゝ思ふ。今余の蒐集した蘇州歌謡と他人の蒐集に係る太湖地方の歌謡中から若干を撰出して見やう。

歌謡中で最も面白いのは矢張り情歌であるが併しこれは皆田舎の方で發達したもので城市中の人間は皆禮教の束縛を受け、爲に戀愛は祕密なものとなつてしまつたのである。

（一）　　（一）

姐拉田裏摘菜心、　　姐さんは畑で菜を摘んで

和、夫姑の不和、妻妾の不和等あり、その故に歌も大部分は此等の痛苦の情を歌つたものである。

（一）

油菜花、黄々黄。
嫁了女兒哭殺娘。
娘談嫁了心肝女；
嫂談嫁了孽舍姑！

（一）

菜の花は金色に咲く
女(むすめ)をとつがせて母親は泣く
母親は言ふ「可愛いいあの子は去つた」
嫂(あによめ)は言ふ「行つてしまつたよ、やかましやが」

（二）

月亮団々、
荷花囡々
出來張娘。
娘説道、『金和寶轉來哉！』
爺説道、『寶知金轉來哉！』
阿爹説道、『敲背囡轉來哉！』
好婆説道、『荷花囡轉來哉！』
嫂々説道、『敗家精轉來哉！』
哥々説道、『攪家精轉來哉、
攪得黄河水沸清！』

（二）

月がまんまるなところ
荷花ちやんが
お母さんのところへ會ひに來た
お母さんは言ふ「好い子がよくも歸つた！」
お父さんは言ふ「よくもいい子が歸つた！」
お祖父さんは言ふ「肩をたたく子がよく歸つた！」
お祖母さんは言ふ「荷花ちやんがよく歸つた！」
嫂(あによめ)は言ふ「やつかい者が來たよ！」
兄貴は言ふ「引掻きまぜ屋め來やがつた
引掻きまはして黄河はにごることだ！」

『吃爺飯、着娘衣、
[redacted]、
借着嫂々嫁時衣!』

（二）

湯山頭上花小籃、
新做新婦多許難。
朝晨提水燒粥飯、
下晝提水燒浴湯。
姑娘洗浴娘施背、
阿嫂洗浴白添湯、
一雙新鞋無踏逕、
眼淚汪々哭進房。
丈夫說道、『勿哭哉!勿哭哉!
廿年新婦廿年婆、
再歇廿年做大婆!』
『太婆弗是容易做、
想々前々後々一段苦!』

「お父さんが食べさせて下さる、お父さんが着せて下さる。
いつ兄さんの[redacted]になりました?
いつ嫂さんのお嫁入着をお借り申しました?」

（二）

湯山のほとり花がこんもり
新らしく來た嫁は苦勞がどつさり
朝は早くから水汲んで御飯たき
午(ひる)がすぎれば水汲んでお風呂の仕度
お姑さんが這入れば背中をながす
兄嫁さんが這入ればお湯を足す
新らしい鞋(くつ)も濡れてびしよ〳〵
涙ぼろ〳〵部屋へかへれば
夫は言ふ「泣くのではない!泣くのではない!
二十年は嫁でも二十年後は姑さん
また二十年すれば大姑(おほしうと)さん」
「その大姑さんまでが大變だわ
思へば思ふほど苦勞があとから〳〵」

(四)

堂上一對小夫妻、
說々談々把家事提、
『娘子呀！』
纔上茶坊多聽話、
兩個浮生談我妻。
娘子呀！
勸儞腰結汗巾秋香色、
勸儞娘子依不依？
娘子呀！
芙蓉面上何必搽脂粉、
小口櫻桃何必用胭脂點、
三寸金蓮算不得大、
繡花鞋內襯什麼內高底！
娘子呀！
儞可季鮮花何必戴、
家常何必穿新衣！

(四)

部屋には一對の若夫婦
ちん〳〵かも〳〵の内輪話
「女房や！
今も茶坊で聞いて來たよ
のらくら者がふたりお前の噂
女房や！
お前鬱金色の帯をするかい
どうだ、女房、いいか、いやか？
女房や！
蓮のやうな可愛い顔だからお白粉などはするな
花びらのやうな脣に紅はいるまい
三寸の足が何で大きい
飾り履のうらにはつぎ底はいらない！
女房や！
きれいな花などかざさずともいい
うちにゐるのに新の着物は何事だ！

空閒何必在門前立、　手が空いたからつて門へ立たずともいい
不可對人笑微々、——　何だつて人を見てはにこ〱する——
儂是無心他有意』。　お前にそのつもりはなくとも相手が意味ありげに思ふわさ」
『相令呀！　「あなた！
我穿的衣都是件々嫁時衣。　わたしの着るのはみな嫁入仕度
若說不穿衣、　着ていけないと仰言るなら
在家箱籠貼封皮、——　葛籠に封をしませうよ——
封皮卅拉何方地？　封印はどこにございます？
女人不足穿新衣、　若い女に新らしい着物がいけなけや
何等人家穿何等的衣？　どんな人がどんな着物を著るの？
可季鮮花、娘家都挿慣、　時折の花は、みんな娘が挿すわ、
胭脂花粉原是年輕搨。　紅や白粉だつて若いうち。
相令呀！　あなた！
儂自己不要引人看、　あなたが人に見せたくないと仰言らなくとも
別人不希奇儂妻。　誰もあなたの女房なんぞ見るものですか
勸君莫要太多疑！』　餘り悋氣はおよしなさいな！」

此種閨閣中の歌は章節の長いものが極めて多い。而して此地の女子達は大抵多少の文字を解するからして彈詞唱本を

讀むことが出來、從つて此等歌謠の風格も自然と彈詞唱本に接近して來て居る。

現在太湖地方に於て最も流行して居るのは『孟姜女十二月花名』である。之が歌へない女と云つては殆で一人もなからう。孟姜女の故事の大意を云ふと、秦の始皇が萬里の長城を築造した時、萬喜良と云ふものが土工に徴發されて行つたが工事中死んだので長城の中に埋められた。其妻孟姜女は彼の歸つて來るのを待ち焦れて居たが、久しく便りもなく、遂に已むなく自分で長城まで探しに出かけた。長城に着いて見ると自分の夫が死んだ事が分つたので城に向つて痛哭し、遂に城壁を哭き崩したと云ふのである。此『十二月花名』は原と『唱春調』の樂歌であつたのであるが、其記する所、孟姜女の故事ではなくて孟姜女の夫を懷しむるの情を寫したものであつたから、能く女の心情を捉へ非常に流行する樣になつたのである。即ち樂歌から徒歌に變つたものゝ一種である。今其其十二首中から數首を下に節錄する。

正月梅花是新春、　　正月梅の花おめでたい
家々戸々點紅燈。　　戸毎に紅いお提灯
『別家大夫團圓聚、　　「よその家では夫婦のまどゐ
奴家的大夫去造長城！』　　うちのお方は長城普請！」

四月薔薇養蠶忙、　　四月は薔薇よ蠶どき
姑嫂双々去採桑。　　小姑お供の桑摘みは
桑籃掛拉桑樹上、　　桑籠木に掛け木のかげに
勒把眼淚勒把桑。　　淚一拭き桑一葉

六月荷花熱難當、
蚊蟲飛來叮胸膛。
『寧可吃奴千口血、
莫叮奴夫萬喜良！』

六月蓮の暑い事
蚊が來て私の胸を刺す
『わたしを千度刺さうとも
刺してくれるなあのひとを』

九月菊花是重陽、
重陽美酒菊花香。
『滿々斟杯奴不吃、
無夫飲酒不成雙！』

九月はお節句菊の花
菊の杯よいにほひ
『どうしてわたしが飲まれよう
相手の主もないものを』

此等は皆夫婦離別の哀傷を歌つたもので、彼の『四季相思』の諸歌と正に相同じきものである。若し唐代の詩であつたら『閨怨』と行く所である。

子供の歌の中には聲調の極めて諧和して而も全く意味のないものが多く、或は滑稽味に富んだものが多い。

(一)

小人小山歌、
大人大山歌。
蚌殼裡搖船出太湖。

子供の小歌、
大人の大歌。
ギツチラコ貝殼の中でお船が太湖に出た。

燕子啣泥丟斷海、
鰟鮍跳過洞庭山

(二)

搖々船、
搖到外婆家。
外婆出來留吃茶、
娘舅上山採枇杷。
枇杷園裡剛開花、
胡蜂螯仔半爿巴。
拆仔天來補仔花、
拆仔地來補仔天、
拿塊方磚補仔地

(三)

和尙、和尙！
光頭浪湯。
一記耳光、
打到裡牀。

燕が泥を啣へて海に擲げこんだ、
小はぜが洞庭山（太湖の中の山）を跳び越えた。

(二)

ユラ〱小船
ユラ〱お婆さんの家に着いた。
お婆さん出て來てお茶飲ましよ、
お爺さん山へ枇杷採りに。
枇杷畑には花が咲いた、
蜂が片方の頰ぺた螫した。
天を突缺いで來て花に接いだ、
地を突缺いで來て天に接いだ、
瓦の破げで地を塞いだ。

(三)

和尙さん、和尙さん！
坊子頭テーカテカ。
頰ぺたを打叩かれ、
牀几の後に打倒された。

裡牀一隻缸、
缸裏一個蛋、
蛋裏一個黃、
黃裡一個小和尙、
唔呀唔呀要吃菉[illegible]湯！

（四）

一個小娘三寸長、
茄科樹底下乘風凉。
撥拉長脚蠨蛸扛仔去、
笑殺仔親夫哭殺仔娘。

（五）

嬰阿嬰阿踏水車、
水車溝裡一條蛇、
遊來遊去捉蛙蟆、
蛙蟆伴拉青草裡、
青草開花結牡丹。
牡丹娘子要嫁人、

牀几の後に缸があつた、
缸の中に卵があつた、
卵の中に黃味があつた、
黃味の中に小坊子が居た、
アーン、アーン、青豆の汁が喰べたい。

（四）

一寸法師、
茄子の木の下で凉んでた。
足長蜘が引擔いで逃げた、
お父さん笑ひ死に、お母さん泣き死んだ。

（五）

水にぐる〱水車、
水車の溝に蛇が一匹、
あつちに行つたりこつちに來たり、お玉じやくしを探してる。
お玉じやくしは青草の根に隱れた
青草は花が咲いたら牡丹となる。
牡丹娘がお嫁に行く時や、

石榴姐々做媒人。　　石榴姐さんお媒人。
桃花園裡鋪行嫁、　　桃の花園嫁入行列、
梅花園裡結成親。　　梅の花園嫁取り酒盛。

夏秋の夜、若い男女が夕顔棚の下あたりで涼みながら屢々山歌を以て問答することがある。之を「對山歌」と云ふ。甲が問の歌を唱つて、乙が之に答へることが出來なかつたら即ち負けとなり、乙の方で答が出來て甲がも一度問を發することが出來なかつたら、これも敗けと云ふことになるのである。それだからよく歌へるものは往々問答が甚だしく長くなることがあるのであるが唯誰れも之を記錄して殘したものがないので保存されて居るものは極めて少い。今試みに一例を擧げると、

甲唱　　甲の歌

山歌好唱口難開。　　山歌は旨まけれど、口を開くのは辛い。
櫻桃好吃樹難攀。　　櫻桃は旨まけれど木登りは辛い。
白米飲好吃田難種。　　米の飯は旨まけれど田植は辛い。
鮮魚湯好吃網難張。　　魚の汁は旨まけれど網打は辛い。

乙問一　　乙問の一

啥人對儂說『山歌好唱口難開』?　　誰がお前に曰つた『山歌は旨まけれど口を開くのは辛い』?
啥人對儂說『櫻桃好吃樹難攀』?　　誰がお前に曰つた『櫻桃は旨まけれど木登りは辛い』?
啥人對儂說『白米飯好吃田難種』?　　誰がお前に曰つた『米の飯は旨まけれど田植は辛い』?

喰人對係說 鮮魚湯吃網難張？

甲答の一

唱歌郎對我說『山歌好唱口難開』。

販桃郎對我說『櫻桃好吃樹難攀』。

種田漢對我說『白米飯好吃田難種』

捉魚郎對我說『鮮魚湯好吃網難張』

乙問二

落裡碰着唱歌郎？

落裡碰着販桃郎？

落裡碰着種田漢？

落裡碰着捉魚郎？

甲答二

上山碰着唱歌郎。

下山碰着販桃郎。

田角落裡碰着種田漢。

西太湖裡碰着捉魚郎。

誰がお前に曰つた『魚の汁は旨まけれど網打は辛い』

甲答の一

歌ひ男が私に曰つた『山歌は旨まけれど口を開くのは辛い』

桃賣男が私に曰つた『櫻桃は旨まけれど木登りは辛い』

田植男が私に曰つた『米の飯は旨まけれど田植は辛い』

魚捕男が私に曰つた『魚の汁は旨まけれど網打は辛い』

乙問の二

何處で遇つた歌ひ男？

何處で遇つた桃賣男？

何處で遇つた田植男？

何處で遇つた魚捕男？

甲答の二

上の山で遇つた歌ひ男。

下の山で遇つた桃賣男。

田の畔で遇つた田植男。

西太湖で遇つた魚捕男。

（西太湖は太湖の西南の部分）

乙問三
納亨様式唱歌郎？
納亨様式販桃郎？
納亨様式種田漢？
納亨様式捉魚郎？

甲答三
長長大大唱歌郎。
矮矮短短販桃郎。
黒鐡襍搭種田漢。
赤脚苓丁捉魚郎。

乙問四
送様啥個唱歌郎？
送様啥個販桃郎？
送様啥個種田漢？
送様啥個捉魚郎？

甲答四
送本小書唱歌郎。

乙の問三
何んな様子の歌ひ男？
何んな様子の桃賣男？
何んな様子の田植男？
何んな様子の魚捕男？

甲答の三
のつぽうの歌ひ男。
ちんちくりんの桃賣男。
眞黒けの田植男。
徒足の魚捕男。

乙問の四
何をやらう歌ひ男？
何をやらう桂賣男？
何をやらう田植男？
何をやらう魚捕男？

甲答の四
小本を一冊やらう歌ひ男。

送隻篛籃販桃郞。
送雙蒲鞋種田漢。
送兩生絲捉魚郞。

乙問五

一本小書幾許張？
一隻篛籃幾許眼？
一雙蒲鞋幾許眼？
一兩生絲幾許頭？

甲答五

只買小書偷數張。
只買苗籃偷數眼。
只買蒲鞋偷數根。
只買生絲偷數頭。

乙問六

納亨死法唱歌郞？
納亨死法販桃郞？
納亨死法種田漢？

斑竹の籃を一つやらう桃賣男。
草鞋を一足やらう田植男。
生絲を一兩やらう魚捕男。

乙問の五

一冊の小本には紙が何枚ある？
一つの斑竹籃には眼が幾つある？
一足の草鞋には藁か何本ある？
一兩の生絲には糸が幾卷ある？

甲答の五

小本買つたばかりで紙はまだ數へぬ。
斑竹籃買つたばかりで眼はまだ數へぬ。
草鞋買つたばかりで藁はまだ數へぬ。
生絲買つたばかりで卷はまだ數へぬ。

乙問の六

何うして死んだ歌ひ男？
何うして死んだ桃賣男？
何うして死んだ田植男？

納享死法捉魚郎？　　何うして死んだ魚捕男？

甲答六　　甲答の六

唱歌郎死起來爛牙牀。　　歌ひ男は齒齦が腐つて死んぢやつた。

販桃郎死起來摜橋上。　　桃賣男は橋の上に打倒れて死んぢやつた。

種田漢死起來下泥潭。　　田植男は泥田中に陷つて死んぢやつた。

捉魚郎死起來氽長江。　　魚捕男は大川に入つて死んぢやつた。

余はこれ迄書いて打切るが、併し對山歌は尙引伸ばして歌はうとすれば『齒齦、橋の上、泥田、大川』から尙幾らでも別種の問ひの句を附け足して何處までも歌ひ續けらるゝのである。此種の歌詞は單に書かれたものを讀んだだけでは勿論甚だ單調なものであるが、それでも若い男や女達が夏の夜をさゞめきながら歌つて居るのを聽いて居ると全く面白いものである。

蘇州の歌謠の種類と形式は大抵斯んなものである。他の地方の歌謠も大體同じ樣なものである。唯支那の地域の大にして人民の多き、若し能く力を盡して蒐集することが出來たとしたら、自分の計算では恐らく二十萬首以上に達するであらうと思ふ。最近學校が設立されて以來都會の子供等は多く學校の唱歌を歌ふ樣になり又教育が漸次普及するにつれ田舍に於ても亦そうなつて來つゝあるのである。從つてこれから二三十年の内に蒐集を果すのでなければ、此等愛すべき歌謠も全く滅びてしまう危險がある。此點に關し吾人は全く心配して居るのである。



戯曲 壓迫

丁西林

人物

男の客
女の客
貸間をする女主人
婆や
巡査

舞台

支那舊式の部屋、正面に庭に通ずる扉、上下兩手の壁にも扉ありて各々寢室に通ず、部屋の中央より稍上手に寄りて白い卓布の掛かつた四角のテーブル、之を圍つて倚子、卓上にはランプ及茶道具、下手壁に近く茶卓（テーブル）、椅子二脚、椅子の背にレーンコートを掛け其傍に手提鞄が置いてある、正面下手寄りの壁に寄せて鏡附の化粧臺、時計、花瓶等載つて居る、其他壁に額椽等宜しく、唯凡べて簡單質素である、

納享死法捉魚郎？　　何うして死んだ魚捕男？

甲答六　　甲答の六

唱歌郎死起來爛牙牀。　　歌ひ男は齒齦が腐つて死んぢやつた。

販桃郎死起來損橋上。　　桃賣男は橋の上に打倒れて死んぢやつた。

種田漢死起來下泥潭。　　田植男は泥田中に陷つて死んぢやつた。

捉魚郎死起來氽長江。　　魚捕男は大川に入つて死んぢやつた。

余はこれ迄書いて打切るが、併し對山歌は尚引伸ばして歌はうとすれば『齒齦、橋の上、泥田、大川』から尚幾らでも別種の問ひの句を附け足して何處までも歌ひ續けらるゝのである。此種の歌詞は單に書かれたものを讀んだだけでは勿論甚だ單調なものであるが、それでも若い男や女達が夏の夜をさゞめきながら歌つて居るのを聴いて居ると全く面白いものである。

蘇州の歌謠の種類と形式は大抵斯んなものである。他の地方の歌謠も大體同じ様なものである。唯支那の地域の大にして人民の多き、若し能く力を盡して蒐集することが出來たとしたら、自分の計算では恐らく二十萬首以上に達するであらうと思ふ。最近學校が設立されて以來都會の子供等は多く學校の唱歌を歌ふ樣になり又教育が漸次普及するにつれ田舍に於ても亦そうなつて來つゝあるのである。從つてこれから二三十年の内に蒐集を果すのでなければ、此等愛すべき歌謠も全く滅びてしまう危險がある。此點に關し吾人は全く心配して居るのである。



戯曲

壓迫

丁西林

人物

男の客
女の客
貸間をする女主人
婆や
巡査

舞台

支那舊式の部屋、正面に庭に通ずる扉、上下兩手の壁にも扉ありて各々寢室に通ず、部屋の中央より稍上手に寄りて白い卓布の掛かつた四角のテーブル、之を圍つて倚子、卓上にはランプ及茶道具、下手壁に近く茶卓、椅子二脚、椅子の背にレーンコートを掛け其傍に手提鞄が置いてある、正面下手寄りの壁に寄せて鏡附の化粧臺、時計、花瓶等載つて居る、其他壁に額椽等宜しく、唯凡べて簡單質素である、

納享死法捉魚郎？　何うして死んだ魚捕男？

甲答六　甲答の六

唱歌郎死起來爛牙牀。　歌ひ男は齒齦が腐つて死んぢやつた。

販桃郎死起來摜橋上。　桃賣男は橋の上に打倒れて死んぢやつた。

種田漢死起來下泥潭。　田植男は泥田中に陷つて死んぢやつた。

捉魚郎死起來氽長江。　魚捕男は大川に入つて死んぢやつた。

余はこれ迄書いて打切るが、併し對山歌は尙引伸ばして歌はうとすれば『齒齦、橋の上、泥田、大川』から尙幾らでも別種の問ひの句を附け足して何處までも歌ひ續けらるゝのである。此種の歌詞は單に書かれたものを讀んだだけでは勿論甚だ單調なものであるが、それでも若い男や女達が夏の夜をさゞめきながら歌つて居るのを聽いて居ると全く面白いものである。

蘇州の歌謠の種類と形式は大抵斯んなものである。他の地方の歌謠も大體同じ樣なものである。唯支那の地域の大にして人民の多き、若し能く力を盡して蒐集することが出來たとしたら、自分の計算では恐らく二十萬首以上に達するであらうと思ふ。最近學校が設立されて以來都會の子供等は多く學校の唱歌を歌ふ樣になり又敎育が漸次普及するにつれ田舍に於ても亦そうなつて來つゝあるのである。從つてこれから二三十年の内に蒐集を果すのでなければ、此等愛すべき歌謠も全く滅びてしまう危險がある。此點に關し吾人は全く心配して居るのである。



戯曲　壓迫

丁西林

人物

男の客
女の客
貸間をする女主人
婆や
巡査

舞台

支那舊式の部屋、正面に庭に通ずる扉、上下兩手の壁にも扉ありて各々寢室に通ず、部屋の中央より稍上手に寄りて白い卓布の掛かつた四角のテーブル、之を圍つて倚子、卓上にはランプ及茶道具、下手壁に近く茶卓（テーブル）、椅子二脚、椅子の背にレーンコートを掛け其傍に手提鞄が置いてある、正面下手寄りの壁に寄せて鏡附の化粧臺、時計、花瓶等載つて居る、其他壁に額椽等宜しく、唯凡べて簡單質素である、

幕開くと粗末な洋服に長靴の男の客は茶卓の傍の椅子に腰掛けてパイプを啣えて居る、婆やは扉の外に立つて手を軒の下に延ばし雨が降つて居るか何うかを見て居る。

婆や　(部屋に入つて)もう雨は歇んでるのに何うしてまだお歸りがないのでせうね。

(テーブルから茶碗を取つて客に茶を勸める)。

男の客(堪らなそうに起上つて)ネー、それよりも何か僕は喰べるものが欲しいんだが、

婆や　喰べ物はそこにあるにはありますけれど、何卒奥様のお歸りまでお待ち下さいませぬか

男の客　アーア、一寸喰べるものにしてからが奥様のお歸りを待つて居なくちやならないのか。

婆や　(吐息をついて)左樣で御座います、お食事のこともお部屋のことも奥樣のお歸りになつてからにして下さい。

男の客　マー好い、奥さんのお歸りを待つとせう。どうせ同じことだ、奥さんが歸らうと歸るまいと。(又腰を掛ける)

婆や　(小首を傾けて)どうも奥樣のお樣子ではあなたにお部屋をお貸ししたくない樣なので御座いますがね。

男の客　僕に貸さないつて。だつてもう手付を受取つて居るではないか。

婆や　それは左樣で御座いますがこれは全くお孃樣がいけないんで御座いますよ、何しろ奥樣の御氣性が隨分と變なんで御座いましてね。あなた見たいなお方でしたら何も心配なんか要りませぬし、それに夜なんぞ男氣のある方が却つて用心にも宜しんですのに。

男の客　此部屋は前に誰か借りたことがあるの。

婆や　否え、もう一年の上も空いて居るので御座います。

男の客　此部屋なんぞ何處と云つて惡いところもないのに何うして借り手がないんだ。

婆や　何の借り手のないことが御座いますもんか、こんなに綺麗で、明るくてそれに前に庭までついて居るのですもの。

男の客　ぢや何うして一年の餘も貸さなかつたんです。

婆や　マーあなただから申上ますがこちらの奥様はそれは麻雀がお好きで御座いましてね、朝から晩まで一日中お留守なんです、家にはいつでもお孃樣と私と二人切りで御座います。お部屋を見にいらつしやる方は皆お孃樣がお相手なさいますが世帯持の方で奥様やお子供があると云ふ事でしたらお孃樣は直ぐ其場でお斷りになり、獨身の方でしたら早速御承諾なさるんで御座いますよ、處が今度は奥様がお歸りになりますと獨身者はいけないと云ふので又お斷りなんです、と云つた樣な譯で御座いますから一年はおろか五年十年經つたつて部屋をお貸しすることはなからうと存じます。

男の客　へエ、そんなことはもう幾度もあつたのですか。

婆や　エーエー、貸間の事では毎度奥様とお孃樣は喧嘩で御座います。いつもはお孃樣はお一人でお極めになる樣なことはないんですけれど、今度だけはあなたの手付までお受取りになりましたのでマーこんなことになつたので御座います。

男の客　お孃さんがズツト以前から一人でお極めになるのだつたら此部屋も、もう凧に貸してあつたんでせうね。

婆や　それは左樣で御座います。併しこれまでの借り手はもう貸せないと云はれたらそれ切りであなたの樣な方は御座いませぬでしたよ。

男の客　可怪しな話だね、確かに此處の奥さんの氣性は一風變つて居る、僕も隨分變り者だが今度は此變人が二人出會

したのだから厄介だ。併し何にしても此部屋は惡くないね。殊に此の前の庭が氣に入つた。

婆や　あなたは大層静かな處がお好きの樣で御座いますね。こちらでしたら全くお静でそれにお勤めの會社へも近う御座いますし、ですから私何とか工夫致しませう。

男の客　あなたが何とかしてくれる？

婆や　さう〳〵かう致しましては如何でせう、あなたは世帶はお持ちで居らつしやるけれども奥樣は近々に後から見えるんだと云ふことにして置いたらこちらの奥樣だつて御承諾なさいますよ。

男の客　そりや好い、だが暫らく經つてもその奥さんが來ないとなると何うなるんだ。

婆や　それは暫らくお住ゐになつて居る内に奥樣があなたの好い所をお見込になつたら其儘で通りますよ。

男の客　それはいけないよ。一體人が未だ結婚してないつて事は別に罪惡でも何でもないんだのに何うして貸して呉れないつて云ふのだらうね。

婆や　マー私餘りあなたが此部屋がお氣に入りの樣で御座いましたから若しか借れないとなると吃度お氣を惡く遊ばすだらうと存じましたので、つい斯んな馬鹿なことを思ひついたので御座います、全く譯の分らぬものですから。オヤ、奥樣がお歸りの樣です。（門の方へ出て行く、聲高く）奥樣で居らつしやいますか（外の方に答へて）ハイ、ハイ、只今

（此間に男の客は椅子から離れて突立つて居る、女主人正面の扉より登場、婆やは後に跟いて來る）

女主人　何うも濟みませぬ、お待たせ致しました。

男の客　私こそ、お邪魔致します。

女主人　何う致しまして、（財布の中から一枚の札を取出す）サー、是はあなたがお置きになつた手付のお金です、何卒お受

取下さい。

男の客　濟みませぬが僕は今日引起して來たので手付の取戾しに來たのではありませぬ。

女主人　マー何う云ふ譯で？昨日私は此部屋をお貸し申すことは出來ませぬとはつきり申上げた積りですが。

男の客　エヽ左樣です、はつきり仰しやいました。

女主人　では今日お荷物を此方へ御送りになつたのは何う云ふお考へなんですか。

男の客　（揚々と）併し奧さん、僕に來ない樣にと云つたのはあなたであつて僕ぢやないでせう、僕は未だあなたの來るなと云つたのを承認した覺えはありませぬ。

女主人　（漸く不愉快を感じて來る）何だかあなたの仰しやることは些とも分りませぬが、あなたのお考へでは此部屋を貸すか貸さないかはあなたが勝手にお極めになるものの樣ですね。

男の客　イヤ左樣ではありませぬ、此部屋を貸すか貸さないは勿論あなたがお極めになるのですが、併しもう此部屋を私にお貸しになつた以上此部屋をお返しするか何うかは私の自由なのです。ですから今や問題は此部屋を貸すか貸さないかではなくて、返すか返さないかに在るのです。

女主人　（漸々怒つて來る）私は何時此部屋をお貸ししまして？

男の客　手付をお受取になつた以上もう貸して下さつたと同じです。

女主人　馬鹿馬鹿しい、何時私が手付を受取りまして？あれは娘のした仕事です、あれは何にも分らないのです。

男の客　だつてお孃さんももう子供ぢやありますまいし。

女主人　マー餘計な話は廢しませう。私は決してお部屋をお貸ししない譯ではありませぬ。唯與樣のある方に貸したい

のです。あなたが奥様と御一緒にお住ひになるんだつたら何も文句なしにお貸し申すんです。

男の客　それは無理ですよ、あなたは部屋をお借りする時には此點に就ては何も仰しやつては居ませぬ、それとも私はあなたを騙して借りやうとしたんでせうか。

女主人　（一變して穏かに出る）お貸しする時には申しませぬでした、併し昨日私は家には一人も男が居ませんから……

男の客　（女主人を止めて）マア、マア、ぢやお尋ねしますが部屋を貸すつて仰しやつた時には男が居たんですか。何うして今頃始めてそんなことを思出したのです。

女主人　あなたつて何と云ふ沒曉漢なんでせう、私こんな人と言ひ合つてる暇はありませぬ。

婆や　（取りなし顔で）マー奥様、今日は時間ももう遲う御座いますし雨も降つて居ることですから、此お方もこれから別に宿をお探しなさるのも大變ですから今晩一晩だけでもお泊めすることにして明日又何とか御都合なさる樣に致しましては。

男の客　（頑固に）いけませぬよ、そんな譯のものぢやない、若し私が未だ此部屋を借りてないのだつたら此儘出て行きます、併し手付をお取りなつた以上此部屋は私が借りたことにして貰はなければ駄目だ。

女主人　でも私何うあつても今晩出て行つて貰ひます。

男の客　（冷笑的に）フーン！（腰掛ける）

女主人　（男の前に立つて）あなたはお出になりませぬか。

男の客　出て行きませぬ。

女主人　婆や、巡査(おまはり)さんを呼んで來てお呉れ。

婆や　マー奥様！

女主人　お前行つて巡査(おまはり)さんを呼んでおいで。

男の客　巡査が來て何うするんです、巡査だつて理屈は分るでせうよ。

婆や　ネー奥様、私考へますに——

女主人　巡査さんを呼んでおいでと云つてるぢやないの、聞こへないのかい。お前行かないのかい。

婆や　宜しう御座います。（正面の扉から出て行く）

女主人　直ぐ來て頂戴つてネー（續いて正面の扉より出で後をきつく閉めて去る）

男の客　（せう事なしにポケットより刻み煙草入とパイプを取出す、煙草入の中に煙草の切れたるを見て鞄の中から煙草の罐を取出しそれを開けて先づ袋に入れ次にパイプに詰める、丁度煙草を吸はうとする時に扉を敲く音が聞へる、聲を張上げて）お入り、（矢張り扉に背を向けて立つて居る）

女の客　（扉を開けてそつと入る、レーンコートを着け片手に手提、片手に洋傘を持つ、入ると直ぐ口を開く、喋り出すと止め度もなき勢ひあり）オヤ、是は何うも。御免下さいませ。（男の客急に振返りこの時始めて新入者に氣づく）飛んだ失禮を致しました。つい御門が開いて居りましたし、それにいくら叩いても誰方もお見えにならなかつたものですから御案内も乞はずに入つて參りました、何卒お許し下さいませ。

男の客　（怒氣未だ去らないが抑えたパイプをテーブルの上に置くことだけは忘れない）何の御用ですか。

女の客　私？私は當地の大成株式會社に勤めに參つたもので御座います。今日午後三時の汽車で北京を發ちまして丁度六時にこちらへ着いたばかりなんで御座います。たつた四十哩の處ですのに三時間も費かりました。處で私、今宿を

のです。あなたが奥様と御一緒にお住ひになるんだつたら何も文句なしにお貸し申すんです。

男の客　それは無理ですよ、あなたは部屋をお借りする時には此點に就ては何も仰しやつては居ませぬ、それとも私はあなたを騙して借りやうとしたんでせうか。

女主人　（一變して穩かに出る）お貸しする時には申しませぬでした、併し昨日私は家には一人も男が居ませんから………

男の客　（女主人を止めて）マア、マア、ぢやお尋ねしますが部屋を貸すつて仰しやつた時には男が居たんですか。何うして今頃始めてそんなことを思出したのです。

女主人　あなたつて何と云ふ沒曉漢なんでせう、私こんな人と言ひ合つてる暇はありませぬ。

婆や　（取りなし顏で）マー奥様、今日は時間ももう遲う御座いますし雨も降つて居ることですから、此お方もこれから別に宿をお探しなさるのも大變ですから今晩一晩だけでもお泊めすることにして明日又何とか御都合なさる樣に致しましては。

男の客　（頑固に）いけませぬよ、そんな譯のものぢやない、若し私が未だ此部屋を借りてないのだつたら此儘出て行きます、併し手付をお取りなつた以上此部屋は私が借りたことにして貰はなければ駄目だ。

女主人　でも私何うあつても今晩出て行つて貰ひます。

男の客　（冷笑的に）フーン！（腰掛ける）

女主人　（男の前に立つて）あなたはお出になりませぬか。

男の客　出て行きませぬ。

女主人　婆や、巡査（おまはり）さんを呼んで來てお呉れ。

婆や　マー奧樣！

女主人　お前行つて巡査さんを呼んでおいで。

男の客　巡査が來て何うするんです、巡査だつて理屈は分るでせうよ。

婆や　ネー奧樣、私考へますに——

女主人　巡査さんを呼んでおいでと云つてるぢやないの、聞こへないのかい。お前行かないのかい。

婆や　宜しう御座います。（正面の扉から出て行く）

女主人　直ぐ來て頂戴つてネー（續いて正面の扉より出で後をきつく閉めて去る）

男の客　（せう事なしにポケットより刻み煙草入とパイプを取出す、煙草入の中に煙草の切れたるを見て鞄の中から煙草の鑵を取出しそれを開けて先づ袋に入れ次にパイプに詰める、丁度煙草を吸はうとする時に扉を敲く音が聞へる、聲を張上げて）お入り、（矢張り扉に背を向けて立つて居る）

女の客　（扉を開けてそつと入る、レーンコートを着け片手に手提、片手に洋傘を持つ、入ると直ぐ口を開く、喋り出すと止め度もなき勢ひあり）オヤ、是は何うも。御免下さいませ。（男の客急に振返りこの時始めて新入者に氣づく）飛んだ失禮を致しました。つい御門が開いて居りましたし、それにいくら叩いても誰方もお見えにならなかつたものですから御案内も乞はずに入つて參りました、何卒お許し下さいませ。

男の客　（怒氣未だ去らないが啣えたパイプをテーブルの上に置くことだけは忘れない）何の御用ですか。

女の客　私？私は當地の大成株式會社に勤めに參つたもので御座います。今日午後三時の汽車で北京を發ちまして丁度六時にこちらへ着いたばかりなんで御座います。たつた四十哩の處ですのに三時間も掛かりました。處で私、今宿を

のです。あなたが奥樣と御一緒にお住ひになるんだつたら何も文句なしにお貸し申すんです。

男の客　それは無理ですよ、あなたは部屋をお借りする時には此點に就ては何も仰しやつては居ませぬ、それとも私はあなたを騙して借りやうとしたんでせうか。

女主人　（一變して穩かに出る）お貸しする時には申しませぬでした、併し昨日私は家には一人も男が居ませんから………

男の客　（女主人を止めて）マア、マア、ぢやお尋ねしますが部屋を貸すつて仰しやつた時には男が居たんですか。何うして今頃始めてそんなことを思出したのです。

女主人　あなたつて何と云ふ沒曉漢なんでせう、私こんな人と言ひ合つてる暇はありませぬ。

婆や　（取りなし顏で）マー奧樣、今日は時間ももう遲う御座いますし雨も降つて居ることですから、此お方もこれから別に宿をお探しなさるのも大變ですから今晩一晩だけでもお泊めすることにして明日又何とか御都合なさる樣に致しましては。

男の客　（頑固に）いけませぬよ、そんな譯のものぢやない、若し私が未だ此部屋を借りてないのだつたら此儘出て行きます、併し手付をお取りなつた以上此部屋は私が借りたことにして貰はなければ駄目だ。

女主人　でも私何うあつても今晩出て行つて貰ひます。

男の客　（冷笑的に）フーン！（腰掛ける）

女主人　（男の前に立つて）あなたはお出になりませぬか。

男の客　出て行きませぬ。

女主人　婆や、巡査（おまはり）さんを呼んで來てお呉れ。

婆や　マー奥様！

女主人　お前行つて巡査(おまはり)さんを呼んでおいで。

男の客　巡査が來て何うするんです、巡査だつて理屈は分るでせうよ。

婆や　ネー奥様、私考へますに——

女主人　巡査さんを呼んでおいでと云つてるぢやないの、聞こへないのかい。お前行かないのかい。

婆や　宜しう御座います。（正面の扉から出て行く）

女主人　直ぐ來て頂戴つてネー（續いて正面の扉より出で後をきつく閉めて去る）

男の客　（せう事なしにポケットより刻み煙草入とパイプを取出す、煙草入の中に煙草の切れたるを見て鞄の中から煙草の罐を取出しそれを開けて先づ袋に入れ次にパイプに詰める、丁度煙草を吸はうとする時に扉を敲く音が聞へる、聲を張上げて）お入り、（矢張り扉に背を向けて立つて居る）

女の客　（扉を開けてそつと入る、レーンコートを着け片手に手提、片手に洋傘を持つ、入ると直ぐ口を開く、喋り出すと止め度もなき勢ひあり）オヤ、是は何うも。御免下さいませ。（男の客急に振返りこの時始めて新入者に氣づく）飛んだ失禮を致しました。つい御門が開いて居りましたし、それにいくら叩いても誰方もお見えにならなかつたものですから御案内も乞はずに入つて參りました、何卒お許し下さいませ。

男の客　（怒氣未だ去らないが啣えたパイプをテーブルの上に置くことだけは忘れない）何の御用ですか。

女の客　私？私は當地の大成株式會社に勤めに參つたもので御座います。今日午後三時の汽車で北京を發ちまして丁度六時にこちらへ着いたばかりなんで御座います。たつた四十哩の處ですのに三時間も費かりました。處で私、今宿を

探して居るので御座いますが停車場の處で幾個所か敎へて貰ひましたので直ぐ其足で四五軒見て廻つたのですけれども一つも氣に入つた所が御座いませぬの、これで一寸こちら樣に空間が澤山あるやうに聞きましたので上つたので御座いますが。

男の客　（相棒を見つけた氣になつて）ぢや、あなたは貸間を探しにいらしたのですね。

女の客　左樣で御座います、如何で御座いましやう、お宅のお部屋は最うお約束濟で御座いませうか。

男の客　（稍狼狽して答へる）何うもお氣の毒樣ですが此の部屋はたつた今極つたばかりです。

女の客　マー何んて私は運が惡いんでせう、折惡く雨には降られるし、それにこちらの田舍道と來たら迚も歩き難いんで御座いますからね、一寸御覽下さいませ、私の着物はビショ濡れになつちまいました。アー草臥れた。（溜息を吐く）一寸私にも椅子を貸して暫らく休まして下さいませんか。

男の客　何うぞお掛け下さい（怒氣全く癒えて居る）

女の客　（手提と洋傘を置く）有難う御座います（茶卓の傍の椅子に腰掛けて部屋中を見廻はす）

男の客　（漸次興味を感じて來て中央の椅子に座す）大成株式會社では何のお係りですか、お伺ひして宜しければ。

女の客　伺つて宜しければですつて、何も人樣に打明けられないことでもないぢや御座いませぬか、二週間許り前にあの會社で書記を一人採用するつて廣告を新聞に出しましたでせう、何の新聞にも出ましたからあなたも屹度御覽なすつたでせう。

男の客　（首肯く）

女の客　それから又前週の金曜日に大成會社が書記一人採用の件は既に決定したが各方面の應募者からの申込に對して

は一々通知を發しないから惡しからずつて廣告が出ましたでせう。御覽になりまして？

男の客　（又首肯く）

女の客　其採用した書記と云ふは即ち斯う云ふ私なんです、あなたもまさかあれが女だらうとはお考へにならなかつたでせう。

男の客　全く思ひも寄りませぬでした。

女の客　（頗る得意の態）けれども是から何うしたら好いでせう、あなたも考へて下さらない？明後日は何うしても曾社へ行つて仕事を受持たなくてはならないのに今にまだ宿が見つからないんですもの、六時半から今まで休みなしに駈けずり廻りましたのにネー。それに實は私お夕飯も未だなんですの（立上つて荷物を直し又化粧臺の前に行つて化粧を直す）

男の客　（十分同情的に）夕飯も未だでしたか、それはいけませぬね、それだけは私が何とかして差上ませう（立上つて茶をいれる）

女の客　何うも有難う御座います、併し何もお夕飯の無心に上つた譯ではありませぬのよ。

男の客　イヤ、是れは惡いことを申上ました、マーお茶でも一杯召上れ。

女の客　有難う（再び元の處に座る）

男の客　（ポケットから煙草入を取出して）あなた煙草は吸ひませんか。

女の客　私は頂きませぬ、けれど傍で、お吸ひになつたつて些とも構ひませぬ。（茶を一口飲む）

男の客　失禮（煙草入をしまつて女に背を向け煙草をふかす）

女の客　（自分の足を擦つて）オー神様、私の足を御覽下さい、これでも人間の足と見えませうか。

男の客　（吃驚して振返る）何うしました。

女の客　濡れただけなら好いんですけれどもまるで泥まみれなんですもの。

男の客　（優しく立上つて）それはお氣の毒、靴下をお取換になりませぬか、お取換になるなら其間外に行つて待つて居ませう。

女の客　有り難う、取換なくても好いんです、取換へるつたつてあなたを外に追出す必要はありませぬ。

男の客　構ひませぬよ、若し靴下をお持ちでなかつたら私がお貸ししても好いです。

女の客　有り難う、御親切はほんとに感謝しますけれど取換たつて何にもなりませぬわ、何うせ又水の中を歩いて行かなくてはならないのですから。

男の客　何うして？

女の客　だつて水の中を歩いて行かなければ仕様がないぢやありませぬか、こんな眞黒闇の街を歩いて行くのに水溜も何も分りやしないぢやありませぬか

男の客　（考ふる所ある態）

女の客　（又茶を飲む、吐息をついて起上り暇を告げる）何うもお邪魔致しました　私もう失禮致します。（手提と洋傘を取つて出て行かうとする）

男の客　（止めて）そう急がなくとも好いでせう　も少し休んで居らつしやい。エーとあなたは部屋が借りたいつてお話でしたね？

女の客　（彼に面と向って）何ですつて、あんなに永い間話して居ましたのに未だお分りにならなかつたんですか。

男の客　イヤ、分つて居りますよ　唯ね――………兎も角此三つの部屋を御覧になりませぬか。

女の客　アラ　何うして？あなたはもう約束済だつて仰しやつたぢやありませぬか（手提を又下す）

男の客　もう貸したことは貸したんですがあなたにお譲りしても好いかも知れませぬ。

女の客　（嬉しさうに）譲れますつて…眞實ですか（洋傘を又置く）

男の客　勿論眞實です。（彼女に更に茶を注ぐ）

女の客　（腰かけて彼から茶を受ける）けれども何う云ふ譯で私に譲られるんです、私が借ると云へば先方の人に貸して上げなくても好いんですか。

男の客　（頭を横に振る）

女の客　ぢや先刻仰しやつたのは出たらめで未だ誰にも貸してないのですか。

男の客　いえ眞實なんです、もう貸しちやつたんです。そして又それを断るつて譯でもないのです。あなたにお譲りしても好いと云ふのは其借りた御本人が頗る喜んであなたに譲らうと云ふのです。

女の客　何うもさつぱり話が分りませぬのね、何うして其方が喜んで私に譲らうと仰しやるのです、私未だ其方にお會ひしたこともないのに。

男の客　そんなことは構はないぢやありませぬか。

女の客　此部屋には幽靈でも出るんぢや御座いませぬの？

男の客　何うして？幽靈が怖いんですか。

女の客　いゝえ、私は怖かありませんけれども或は其人が幽靈でも怖がるのではないかと思つて。

男の客　ナーに、其人も幽靈なんか怖がりやしませぬよ。――マー幽靈が出るか何うかそんなことは何うでも好いとして兎に角部屋を見やうぢやありませぬか。（テーブルからランプを取つて彼女を導く）

男の客　是は寢屋です（上手壁の扉を開けて女を入れる）天井は漆喰で床はセメントの敲石(たたき)です。洋式のベッドにはチヤンと蒲團も備へてあります、窓の外には小庭もあり　晨には鳥の囀りを聞き、晝はカーテンを開くれば日が部屋一杯に映します（女の客出て來る、又彼女を導いて下手の部屋へ行く）是も寢屋です、ベットやフアニチユアは一切完備して居ます、廣さも同じです、唯多少日當りが惡いだけです。お一人で居らつしやるのならこれを寢屋にして向ふの部屋を書齋になさい。そして眞中の部屋は應接兼食堂になさつたら好いでせう。（中央テーブルの處に歸りランプを置く）全く此部屋は綺麗で明るくて、そして閑靜ですからねエ。何も騷音を聞きませぬよ　その上又お勤めの會社へも近いし、あなたに取つて是以上恰好の庭はありませぬよ。

女の客　此三部屋で間代はお幾何で御座いますか（腰かける）

男の客　大層安いんです、皆で月五元です。

女の客　お部屋はほんとに結構だし、間代も高いことはなし（一寸考へる）眞實に私に讓つて頂けますの。

男の客　勿論眞實です、何もあなたを擔ぐ必要はありませぬ。

女の客　併し今晩の内に參つてはいけませぬでせう？

男の客　宜いですとも。（突然思出した樣に）ですがあなたはもう結婚なさつてるんですか。

女の客　跳ね上つて胸を突き出し眉を逆立てる）何ですつて？

男の客　あなたは結婚なさつたんですか。

女の客　(怒る)餘り失禮なお尋ねです。

男の客　餘り失禮な?

女の客　そうですとも、侮辱ぢやありませぬか。

男の客　(嬉しげになつて來て)侮辱!全く其通りです、僕もそう思ふんです、併し現に此部屋を貸さうと云ふ人は何より
も先きにあなたは結婚して居るか何うかつて聞くんですよ。

女の客　私が結婚して居やうと居まいとそんなこと餘計なお世話ぢやありませぬか。

男の客　左樣です、全く其通りです。僕が結婚してるか何うかつて事が彼の女達に何の關りがあるものですか。けれど
も彼の女達は何よりも第一にそれを聞くんだから怪しからぬぢやありませぬか。

女の客　又何うもあなたの仰しやることが分らなくなりました。

男の客　それやお分りになりますまいとも、分る筈がありませぬ。あわてないでマー聞いて居らつしやい。——先刻あ
なたはこちらの大成會社へお勤めだつて仰しやいましたねェ。

女の客　マー隨分覺えの惡い方!たつた今話した事ではありませぬか。

男の客　怒らなくても好いですよ、實は僕も大成に勤めにやつて來たんですよ。

女の客　あなたも?

男の客　左樣です。まさか御存じぢやなかつたでせう。

女の客　それやそうですとも。そして大成では何をなすつてるんですか。

男の客　技師です。
女の客　ナーンだ、それではあなた此家の御主人ぢやなかつたのね。
男の客　誰れも主人だなんて云ひはしませぬよ、あなたが唯そう思つただけでせう。
女の客　やつと分りました、あなたが又借り手なのね。借りて見たけれども今になつて氣に入らないから返さうと仰しやるんでせう？
男の客　返すんだなんて誰もそんなことは云ひはしないぢやありませぬか、
女の客　だつて先刻此部屋を私に譲つても宜いつて仰しやつたではありませぬか。
男の客　譲つても宜いとは云ひました、併し返すとは云ひませんでしたよ。
女の客　愈々分らなくなつちやつた。返し度くないものを何うして譲らうつて云ふのです？
男の客　眞とに分りませぬか。
女の客　分りませぬとも。（腰掛ける）
男の客　譯は斯うです。あなたを見てからねエ——イヤここの主人が私に貸さないつて云ふんですよ。
女の客　何う云ふ譯で？
男の客　それが即ち結婚問題なんです。ようやつと話が本筋に這入りました。一週間程前に私はここに貸間を見に來たんです。お嬢さんにお會ひしましたらいきなり私をつかまへて奥さんがあるか、子供はあるか、兄弟は？と、矢繼早に訊問されたんです。私は未だ獨身だと答へてやりますとお嬢さんはやつと滿足しました。そして間代のことなんかも餘り話しせずに貸して呉れることになつたんです。

女客　それは吃度お嬢さんがあなたが技師だつて事を知つて居てあなたのお嫁さんになりたいのよ。

男の客　まさか、そうまでは考へられませぬがね。處が昨日の午後こちらへやつて來て見ますと奥さんの話は全で違ふんです。家内と一緒に來るんでなければ貸せないつて云ふのですけれども、私に家内のないことは知つてる事なんです、それにこんなことを持出すなんて酷いぢやありませんぬか。

女の客　何故御家内と一緒でなければいけないんです？

男の客　ここの家に男氣がないからだつて云ふのです。

女の客　御冗談でせう。

男の客　全く侮辱ぢやありませんぬか。

女の客　そうよ、それから何うなさいまして？

男の客　それから私がウンと彼女を教訓してやつたんです

女の客　理解しまして？

男の客　理解するものですか、四十過ぎた人間の頭は古い道理で凝り固つて居て新しい道理なんか受入れる餘裕なんてありませぬよ。

女の客　これから何うなさるお積り？

男の客　これから？出て行きはしませぬよ。

女の客　こちらの御主人は？

男の客　主人ですか、巡査を呼びに行きましたよ。

女の客　巡査を呼びに？呼んで來て何うするんです？
男の客　私を引張つて行かせやうと云ふんでせう。
女の客　眞とに？
男の客　かつぎはしませぬよ。待つてて御覽なさい、今に巡査がやつて來ますから。
女の客　これは面白くなつて來た。併し眞とに巡査があなたを引張らうとしたら何うなさいます？
男の客　あなたが見えない前は何うして宜いか分りませぬでしたが今になつて好い考へが出て來ました。
女の客　何う云ふ風の？
男の客　僕は巡査の奴を痛快に打毆る積りです、そして私は警察へ連れて行かせ此部屋はあなたに貸させるつてことにしませう、そしたらお互二人とも宿にありつくと云ふものです。
女の客　それはいけませぬ（考へる）
男の客　何故いけないです。
女の客　まだそんなに怒らなくつてもよくつてよ。──アー私にもつと好い考がつきました。
男の客　何んな？
女の客　（稍間を置いて）私あなたの奥様になりませうよ。
男の客　飛んでもない
女の客　そんなに吃驚しなくても好いわ。私別にあなたに婚約を求めるんでもないんだから。
男の客　イヤ、別にそんな意味で驚いたんぢやありませぬ、僕もそんな手段までは思ひつきませぬでしたよ。

女の客　何と妙案ぢやなくつて、こゝの主人はあなたが奥さんと一緒でないからと云ふので部屋を貸されないと云ふんですから今奥さんがあるつて事になれば文句は云へない譯でせう。

男の客　それは文句はありませぬさ。併しあなたはそれで宜いんですか。

女の客　構ひませぬとも、何も私の損になることではなし――それに眞とにあなたの奥さんになるんぢやないんですもの。

男の客　イヤハヤ、誠に何うも有難う御座いますよ。

女の客　マーいやだ。そんな風に誤解なすつては、私あなたの奥様になつたつて又別に損する譯でもないんですから氣を惡くしないで頂戴。それとこれとは全で別問題なんですから。

男の客　左樣です、全く別問題です。唯あなたのお蔭で住宅問題が解決出來たのに對してあなたに感謝することは當然なんです。

女の客　ヘエ、感謝ですつて？プロは何時でもブル共に壓迫されて居るんですもの、吾々プロが彼等に對抗する爲に團結するのは當然ですわ。（聞耳を立てる）

男の客　左樣です、左樣です。

女の客　話聲が聞えるのね。

男の客　吃度巡査でせう（忙しく）ネエ、私は家内はないと云つて置いたんだが今何と云つたものでせう。

女の客　斯う仰しやい、私達が夫婦喧嘩をしてあなたが逃出したのだがこんなことを他人には聞かせ度くなかつたんだと〻。

男の客　（巡査は既に扉の所までやつて來て居る。忙しく首肯いて彼女にもう口を利くなと云ふ態）エエ。

（男の客は中央のテーブルの傍の椅子に腰掛け怒つた風をして居る、女の客は茶卓の傍に腰掛けて居る。正面の扉より巡査入り來る。手に提燈を持つて居る。婆やと女主人其後に從ふ。皆部屋の中に女の居るを見て非常に驚く。女の客は立上つて彼女達に丁寧に挨拶する巡査は提燈をテーブルの上に置いて怒つて居る男の客に一禮して

巡査　あなたの姓名は？

男の客　（平氣で）呉です。

巡査　（首肯く）ウン、住所は？

男の客　住所はありませぬ。

女の客　（虐められて居た妻君の樣な態で立上り）エー此の人と云つたら、あなたは家なんぞ要らないつて云ふお積りなんでせう、否え、吃度左樣です。

巡査　（横合から飛出した女の客に驚いて男の客に向つて）こちらは何と云ふ方です。

男の客　（口籠る、一寸女客を見る、女客も困つて居る。彼はまだ怒つた夫の態を續けて居る）僕は知りませぬ、彼女自身にお聞きになつたら宜いでせう。

巡査　（直接彼女に向つて）あなたの名前は？

女の客　私？私――も呉と申します。

巡査　フーン、あなたも呉さん、

女の客　左樣です

巡査　お宅は？

女の客　宅で御座いますか、宅は北京西四牌樓大平胡同關帝廟前、三百七十五番地、電話西の四千六百九十二番です。何卒書留めて置いて下さい、其内お忘れになるといけませんから。

巡査　（小さな手帳を取出す）北京……（と書く）

女の客　西四牌樓太平胡間（彼の書くのを待つてゐる）關帝廟前。

巡査　番地は？

女の客　三百七十五番地、電話西の－四千－六百－九十二番。

巡査　（書終つて）有難う（手帳を收つて又男の方に向直る）あなたは此處に間を借りに來たのでせう？

男の客　違ふ、僕は此處に引越して來たんです。此部屋は僕がズツト以前に借りといたんです。

巡査　（困つて仕方なく彼女の客の方に向直る）あなたは何うしてこちらに？

女の客　私？私人を探しに參りましたの。

女主人　（堪らなくなつて）あなたは此處に誰を探しに入らしたのです。

女の客　（遠慮深く女主人に挨拶をする）私はうちの主人を探しに參つたのです。

女主人　御主人を？あなたの御主人は一體何方です？

女の客　御存じでも御座いませうがこちらの御部屋をお貸下さつたもので御座います。

女主人　オヤ、此方があなたの御主人ですか？

女の客　私存じませぬ、その方に聞いて下さいませ、あの人が何と申しますか。

婆や　（矢張り堪らなくなつて）奥様如何で御座います、私最前からあれ程この方は吃度奥様がおありで御座いますと申上げましたのに何うしても御承知なさいませぬでしたが。

巡査　（譯が分らなくなつて）一體全體何うしたと云ふことだ。先刻あんた達は此人には奥さんはないと云つてぢやつたがそれに今になつて何うしてあることになつたんぢや。

婆や　馬鹿を云つちやいけませぬよ。先刻は奥様が居らしやらなかつたんだから私達に分らう筈はありませぬや、ほんともう一足早く此奥様がいらして下さつたら何も雨の中をズブ濡れになつて歩き廻ることもなかつたのに。

女の客　何とも濟みませぬ何とも仕様がなかつたのです、三時の汽車で發つてやつと六時にこちらへ着いたものですから。

婆や　否え、何もそう仰しやることはありませぬ。私は唯餘りこの巡査さんが物が分らな過ぎると云ふんですよ。

巡査　ぢや話は斯う云ふ譯なんだね、此處の奥さんがわしを呼びに見えたのは此お方がこちらの二部屋を借りて一人でお住ひになるのは此家の人が女計りだから都合が悪いと、云ふ様なことだつたが最早此方の奥さんが見えた以上、事は圓滿に落着するナ。もう御夫婦同居と云ふことになればもうわしに用もあるまい。併し奥さんが同居しないと云ふことになると、この問題は又——

婆や　何を餘計な口を利いて居るんです。奥様は無論御一緒にお住ひになるんですよ。まだ分らないんですか。お二方は一寸した事で云ひ合ひなさつただけぢやありませぬか、それをあなたと云つたら仲直りでもさせるどころかまだツベコベと馬鹿を云つて、奥様はこちらへ居らつしやらないで何處へ行かれるんです、さア、もうあなたの御用は濟みましたからサツサと歸つて又麻雀でもなさい、サー行つた行つた。

巡査　そう云はれればわしの用もなささうだ、宜しい、チヤ左様なら。

女の客　左様なら、巡査さん、御安心なさい、其内又私が此處に居なくなつたら御知らせしますから。

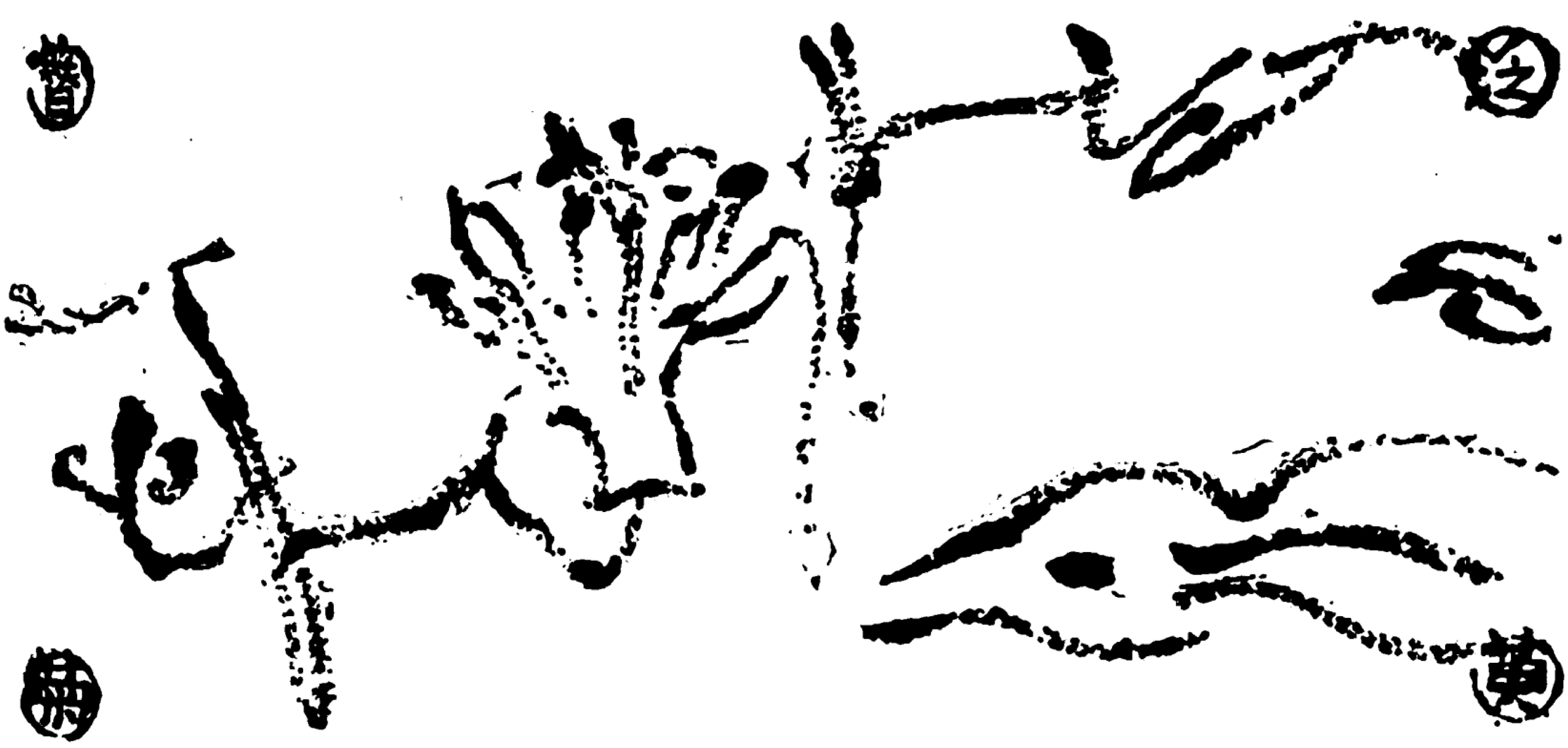
巡査　済みませぬ、お邪魔致しました。

（巡査出て行く、婆や如何にも嬉しげに茶具を持つて出て行く。女主人は自分の敗北を認めて客に一瞥を與へ、難しい顔をして出て行く）

男の客　（扉を閉めてズート以前から聞かう聞かうと思つて居て聞けなかつたと云ふ風で突然彼女に向つて）ネエあなた名は何と云ふの？

女の客　私——アノ——私——

（幕）



キユラソー

張資平

一

「文如先生」靜媛は入校の日からずつとけふまで、此四年間いつもかういふ風に劉文如を呼んで、呼び慣れて仕舞つた。じつさい教員の稱呼に就いて、先生の二字の頭の上に、別の字を冠ぶせるのが決して何も珍しいことではない。たゞ學校の中にゐる生徒等は一般にみな文如を劉先生として、一人も文如先生と呼ぶ者がない。それにこの劉先生といふ人は教員の中でも格別年若だ。同級生は靜媛が劉教員に對つて文如先生と呼ぶのを聽いてみなあざわらつた。けれど彼女の辯明があつてから、同級生は、彼女が劉教員に對して特別親密の稱呼を用ゐる權利があると認めた。彼女の辯明は、劉文如は彼女の父の學生であつて、彼女が女子師範に入學しない前からよく知つてゐたのだ。

こんばん彼女は顔をあかくしてゐるが、彼女の態度に全く、少しも不自然なとこ

ろはない、いつもと同じように「文如先生、文如先生」と呼ぶ。

「文如先生、わたしは貴方に一杯ついで上げますわ。けれどこれを飲んで仕舞つたら、もう飲んではいけませんよ」靜媛の左の手は食卓の上をおさへて、右の手にシヤンペンの瓶を高々とさゝげた。

K公園のそばの或る珈琲店の二階の隅に長方形の食卓があつて、文如と靜媛はあかるい電燈の下で食卓を中にして對き向つて坐つてゐた。

「よし、よし、承知して呉れそうもないから見積りを立てゝ置かう。お前はわたしに二杯注いで下さい。此一杯を飲んで仕舞つて、もう一杯足せばあとは飲まない」文如は頬が眞赤になるまで飲んで微笑を含んで靜媛を見た。

「文如先生ほんとに醉つたのね。あなたは全く先生らしくないわ」靜媛も亦にツこりして二列になつてゐる貝のような齒を見せた。

靜媛は斬髪で、短い髮が肩に垂れ後ろの方にかぶさつてゐるのが、別に一種の趣きをそなへてゐた。けれど彼女の顔色は白色といふよりは寧ろ蒼白色だ。彼女の特徴は文如から見ると、つまりあの二列の貝の齒と、二つの黑水晶のような瞳だ。

「お前、もう一杯お飲みな。キユラソー！　飲むともつと顔色が好くなるよ」

「なにを言ふのよ。好く見えたつて仕様がないわ」靜媛は笑顔を斂めて口をおさへてうつむいた。

「そんなら、も一つタンシチウを取らうよ。お前の好きなタンシチウを」と彼はそういひながら卓上の呼鈴を押した。

「いりませんよ。わたしはもうおなかが一ぱいなの」

呼鈴を聽いた女給仕は忙しなく下から上つて來て、彼等の食卓の前へ來て、靜媛の方に頭をさげ



キュラソー

張資平

一

「文如先生」靜媛は入校の日からずつとけふまで、此四年間いつもかういふ風に劉文如を呼んで、呼び慣れて仕舞つた。じつさい教員の稱呼に就いて、先生の二字の頭の上に、別の字を冠ぶせるのが決して何も珍しいことではない。たゞ學校の中にゐる生徒等は一般にみな文如を劉先生として、一人も文如先生と呼ぶ者がない。それにこの劉先生といふ人は教員の中でも格別年若だ。同級生は靜媛が劉教員に對つて文如先生と呼ぶのを聽いてみなあざわらつた。けれど彼女の辯明があつてから、同級生は、彼女が劉教員に對して特別親密の稱呼を用ゐる權利があると認めた。彼女の辯明は、劉文如は彼女の父の學生であつて、彼女が女子師範に入學しない前からよく知つてゐたのだ。

こんばん彼女は顏をあかくしてゐるが、彼女の態度に全く、少しも不自然なとこ

ろはない、いつもと同じように「文如先生、文如先生」と呼ぶ。

「文如先生、わたしは貴方に一杯ついで上げますわ。けれどこれを飲んで仕舞つたら、もう飲んではいけませんよ」靜媛の左の手は食卓の上をおさへて、右の手にシャンペンの瓶を高々とささげた。

K公園のそばの或る珈琲店の二階の隅に長方形の食卓があつて、文如と靜媛はあかるい電燈の下で食卓を中にして對き向つて坐つてゐた。

「よし、よし、承知して呉れそうもないから見積りを立てゝ置かう。お前はわたしに二杯注いで下さい。此一杯を飲んで仕舞つて、もう一杯足せばあとは飲まない」文如は頰が眞赤になるまで飲んで微笑を含んで靜媛を見た。

「文如先生ほんとに醉つたのね。あなたは全く先生らしくないわ」靜媛も亦にツこりして二列になつてゐる貝のような齒を見せた。

靜媛は斬髮で、短い髮が肩に垂れ後ろの方にかぶさつてゐるのが、別に一種の趣きをそなへてゐた。けれど彼女の顏色は白色といふよりは寧ろ蒼白色だ。彼女の特徴は文如から見ると、つまりあの二列の貝の齒と、二つの黑水晶のような瞳だ。

「お前、もう一杯お飮みな。キュラソー！ 飮むともつと顏色が好くなるよ」

「なにを言ふのよ。好く見えたつて仕樣がないわ」靜媛は笑顏を斂めて口をおさへてうつむいた。

「そんなら、も一つタンシチウを取らうよ。お前の好きなタンシチウを」と彼はそういひながら卓上の呼鈴を押した。

「いりませんよ。わたしはもうおなかが一ぱいなの」

呼鈴を聽いた女給仕は忙しなく下から上つて來て、彼等の食卓の前へ來て、靜媛の方に頭をさげ

「奥様、なにか御用ですか」
「あらいやだわ」靜媛は兩手を膝の上におろし、雪のやうな肩掛を引ッ張つて、さう言つたあとで壁の向ふの方へ顏をそむけた。
「もう一つタンシチウが欲しい。下へとほして呉れ」文如は笑つて女給仕に言ひつけた。女給仕はこの中の妙味を知らう筈がない。
「いらないと言つたらいりませんよ。もうおやめなさい」
「お前がいらなければ、わたしが食べる」と文如は笑つて靜媛の方から女給仕の方へ顏を向け「下へ行つてとほしてお呉れ」
「はい」と女給仕は答へて下へ行つた。女給仕は此二人を夫婦とは思つてゐないが、いづれ夫婦になるべき戀愛の仲間と見做した。

靜媛は小さな時から身體が餘り丈夫でなく、高等小學を卒へた時にはもう十七歲であつた。その年の秋の初めに彼女の父胡博士は腸チブスに罹つてころりと逝つた。靜媛は父が死んだ當座は十八歲になつても學校に這入らなかつた。彼女の母陸氏は、彼女は身體は弱し、家内の人手が足りないので、そのうへ學校へ上げようとは思はなかつた。けれども靜媛はどうしても母の意見に從ふことが出來ない。是非とも女子師範に這入らなければならないと言ひ張つた。文如は胡博士が高等師範に教鞭を取つてゐた時代の自慢の弟子で、中學時代からいつも胡博士の家に出入りしてゐた。高師卒業のあとでも博士の推薦に依て女子師範の或る教席を占め得たのであつた——數學教員。

陸氏は娘の强情にもてあまし後ちにはとう〳〵靜媛の入學をゆるし女子師範に上げた。幸に彼女の家は女子師範とあ

まり遠くはなかつたので、靜媛は通學生となり、朝行き暮に戻つた。

靜媛はつい此ひと月このかたに、全く樣子が變つて仕舞つた。彼女はふだんクラスの中で喋つたり笑つたりするのだが、この幾日といふものは、一人つくゑの前に坐して沈默してゐる。同級の者が彼女に話し掛けると、訊かれた丈けの答はするが全く元氣がない。

陸夫人は亡夫の遺言を正直に守り、文如に對しては絕對に信用してゐた。それといふのも文如は妻を持つてゐる人で——結婚濟のうへ子供まである。——だから陸夫人は文如と靜媛の交際に就いては曾て一度も疑つたことはない。けれど彼女はほかの者に對して、靜媛の周圍にある若い男に對しては警戒が非常に嚴重であつた。

「お前は學校で何か面倒な事があつたら、文如先生におねがひすればいい」陸夫人はいつもこんな風に娘に言ひ含めた。

去年の冬、靜媛は第一等の成績で女子師範を卒業した。いま又新年が過ぎて、彼女の二十三歲の初春が來てゐた。

靜媛はそう想つた。今年の夏は男女混合教授の高等師範の入學試驗を受けようと——文如先生のゐる母校を卒業してから、たいてい每日、文如の家に來た。文如の留守のときには文如夫人と相談して、何とか旨い知慧を出して、母親の同意を得るまで漕ぎつけ、高師へ入學の許容を得たいと想つた。

陸夫人は娘が相當の年齡に達し、婿を擇む年頃になつてゐるので、もう此上はどうあつても自分の娘に三十歲まで本を讀ませてうつちやつて置くことは出來ない。

「お母さん、あなたが入學を許さなければ、わたしは誓つてお嫁に行きません。」靜媛はしまひに哭いてこんなことを言ひ出した。彼女は母親が彼女のためにいい婿を見つけ出したときいたので、それは或る大きな米屋の若旦那で內にどつ

さりお金があるのだ。

「考へて御覽。本を讀んでゐるうちに白髪が生えて仕舞ふよ。そうなつてからお前さん、いい口を捜し出すことが出來ますか」

「女は嫁に行かなければなぜ活きてゐられないのでせうかね」靜媛はかん聲を出して母親に對抗した。

娘は母親が頑固に戀愛の自由を認めないので、急いで文如先生の許に馳付け、此話をして彼女の母親を說きつけて貰ひたいのであつた。母親も亦むすめが反抗の態度を取つたので、彼女が千辛萬苦して捜し出した金持の婿の話がぶち壞れることを恐れ、使を文如の家にやつて、彼に來て貰つて談合の上「母の命に逆ふなかれ」と娘を戒しめて貰いたいのだ。

二

「わたしも奥さんと同様の意見で、むすめが相當の年齢に達したら、意外の事が起らないやうに、少しも早く結婚した方がいい。只いくらか娘自身の自由意志を汲み取つてやる必要もあります。あの人が若し果して全くいやなものなら、我慢することが出來ないでせう」

けふの午後文如は果して胡師母（陸夫人）の要求に應じて、靜媛の家へ行つて、胡博士生前の書齋の中で陸夫人と對き合つて坐し、その長たらしいお談義を聽いたあとで、初めて彼の意見を述べ立てた。

「あの兒の近頃の顏色は一層悪くなりましたよ。これに又しよツちう頭痛がするとか言つてね。あの兒の身體をみると、本を讀むといけなくなるやうです、女が年頃になるといろいろ口に出して言へない心配事がありますから、少しも早く

似合の婿を捜してやつて嫁にやらうと思ふのに。いやだ、いやだといふのです。さういふのは女としてあたりまへで、結婚して仕舞へばもういやだとは言ひません。劉先生、わたしは安心しました。貴方もあの兒の入學には不贊成だといふ、今のお話を聽いて、わたしは本當に安心しました。そこで結婚に對するあの兒の考はどういふものか。どうぞ内々あの兒に聽いてみて下さい。あの兒は羞しがつてわたしを見るとツケツケ言つて仕舞ふのです。劉先生、御迷惑ですが」

「あの人はどういふ積りでゐるか知らんが、お母さんにも言へないことを、わたしども男の前で打ち明けませうか。兎に角一度内へ寄越して下さい。内の奴からもう一度きかせてみます。内の奴の話では、靜さんはどうあつてもあの一家と緣組するのはいやだと言つてゐました」文如も靜媛と同樣、無學の米屋の息子に反對だ。

「劉先生、貴方が勸めて下されば、ひよつとして行く氣になるかもしれません。おとゝしからあちこち口があつたのですが、あの兒はみないやだといふのです。その時は學校も未だ卒業してゐませんから、あの兒の勝手にさせて、話が壞れても構はなかつたのです。隨分さがしましたよ、釣りあひのいゝ家を！あの兒の年を數えてみても、ほかの娘と比べて何年か遲れてゐるのです。今此口を取りにがして仕舞へば、これから先き、あんないゝ口を捜し出すのは六ツかしいでせうよ」

「ことによるとあの人自身、意中の人が無いとも言へませんね」と文如はほゝゑんだ。彼は彼の心のうちに一種の矛盾を感じた。一方には陸夫人の意見を贊成して、少しも早く靜媛の緣談を纏める必要があると言つたが、又一方には一種の嫉妬を感じてゐた。こんな愛らしい小鳥を、かういふ風に無條件で、他人にやつて仕舞ふのは甚だ惜しむべきことのように思はれた。けれど自分には定まつた妻があると思ふと、自分の醜劣を感ぜずにはゐられない。

「劉先生、笑つてゐなさるが、わたしはもう娘の此事に就いて氣がついてゐます」陸夫人は此話になると、聲を低めて前の方へにぢり出した。「わたしどもの家庭はなぜ世間の口の端にかゝるでせう。若い者に何の見識がありませう！自由戀愛が何です！つまり良家の娘を傷つけて親の氣を腐らせるのです。あなたの出た高等師範の評判は甚だよくありません。時に據ると男學生は女學生を連れて外泊するそうです」

「そりや嘘だ。彼奴等の出鱈目だ。なんでそんな事があるもんですか。今の校長は頗る嚴格で、寄宿舍にゐる男女の學生は毎晩殘らず點呼されるのです」

「そんな事があるか無いか。わたしはぢかに見たわけではないが、直接見た人の話をきゝました。その人は眞面目な女で、決して作り事は出來ません」

「誰れがそう言つたのです。」

文如はそう言はれると、彼の母校に對して少しく保證し兼ねた。彼は高等師範の校長が辭職したことを想到すると――彼に反對する若干の學生に罵られて――もう二三日學校へ出て來ない。學校の紀律は校長が去つたあとで責任を負ふ者が無くなり、滅茶苦茶になつたかもしれない。

「今度内へ來た婆が言つたのです。その話だと、男は貴方の母校の學生で、女は貴方が今敎えてゐる學校の生徒です」

陸夫人はそう言つて笑つた。

「まさか」と文如はほんに嚇かされて跳び上つた。

「女子師範の學生ですよ」

「女子師範？」

「貴方のあの學校の取締規則が本來あまり嚴重でないのです。だから寄宿舍にゐるといろんな宜しくないことが起るのです」

「その婆さんは何といひました。」

「あの人は此處へ來る前に、N街のお屋敷の中で働いてゐました。あの人が行つたあとで、初めて氣が付いたのは、その屋敷は一種の魔窟でした。女あるじは女郎あがりで、老ゐ込で仕舞つたもんだから、學生の風儀のよくない此K地へ來て、年の若い不良男女の誘惑をしてゐるのです。あの家を借りて晝間は賭博場、夜は女郎屋をしてゐるのです。夜晝休みなしに流れる河のように澤山の男女が往き來をしてゐたが、幾日か過ぎてそれが皆學生であるのを知つたのは、その人達が麻雀を打ながら冗談言つてゐる話が皆學校の話でした。婆さんは其處にゐると十二時になつても寢ることが出來ないので、ついに辛棒し切れず出て來たそうです」

「今の學生はつまり學問の暇が彼等の敵となつてゐるのだ。氣が向けば講堂へ出て講義を聽くが、氣が向かなければ寄舍で晝寢をしてゐる。復習の暇があつてお浚ひをしない。試驗がいやで免狀が欲しい」文如はそう言つて笑ひ出した。

「靜娥は寄宿舍にゐなかつたお蔭で、卒業が出來たようものですね」

「寄宿舍にゐてもあの人は、ほかの女のように自墮落にはなりません。だいたい極く愼しみ深い方ですからね」

「あの兒は卒業したもの丶、わたしはまだなかく氣がゆるせません。ですからあの兒を少しも早く片附けたいのです」

「こういふ事は父母たる者の注意の及び難いことです。いくら親でも、いつもいつも大きな娘の見張番ばかりしてゐら

ません。又外へ出るな、といふことも出來ません。ですからわたしはそう思ひます。適當の範圍内で自由戀愛や自由結婚を大目に見てやれば差支えないのです」

「おやおやいけませんよ。先生と言はれる人が、そんたことを言つて下すつては、わたしは貴方からあの兒に意見して貰はふと思つたのに、こりやあ全く望みがなくなりました」陸夫人は文如のあとへ跟いて笑ひ出した。彼女は文如が冗談を言つてるものと信じ、彼は結局彼女の主張を贊成せずにはゐないと想つた。

道義上から言へば文如はどうあつても陸夫人の依賴を拒むわけにはゆかない。彼は此機會を借りて靜媛とより多く親密になることは喜ばしいことだし、又一方には陸夫人に對して義理を盡すことになるのも有難い事であつた。彼は靜媛の心をよく知つてゐるといふ自信はないが、只一點に就いて――――靜媛が自分に對して少くも一種の好感情を持つてゐるといふ點に就いて充分自信があつた。三四年このかた打ち解けた師弟の間の話振りが、此際一層深みへ進んで、互に冗談さへ言ふようになつた――――いろ／＼暗示の冗談が含まれて來る。文如は陸夫人のこの種の賴み事から一種の幻想を引起した――――それは愉快な幻想だつたけれど、彼は同時に決して少しも不忠實な考を持つてゐなかつた。――――陸夫人の依賴を實行しないといふ不忠實な考。たゞ彼はこんな考を持つてゐた。出來る丈け、彼女の母の希望通りに彼女を勸めてみる。自分は彼女に對して言ふことの出來ない程度の戀愛に達してゐた。もうなるべく早く彼女に勸めて結婚させた方がいい。そうすればどんなに苦勞が省けるかしれない。――――のち／＼どうしても免れない、二人の間に發生する苦勞だ。けれど彼はこういふ苦勞を豫想した丈けでも、彼は彼女に對して一種の愛惜心のある事が證明された。――――彼女を他人に奪はれるのを見てゐるに忍び難い愛惜。あとになつて彼は悟つた。彼はその時もう苦悶の中に深く浸つてゐたことを。

あの人をやつて仕舞ひませう。あの人に勸めて、なるたけ早く嫁入させたがいい。嫁入りしたあとでも自分は一層自由に彼女と交際が出來る。師弟の關係以外に、も一つおまけに年に差別のない馴染といふことにして貰はふぢやないか。更にもう一歩進めてひよつとすると……彼はこゝまで想像すると、二つの頰がカツとして來た。隨分用心して陸夫人にけどられまいとする彼の此種の態度。

たゞ一瞬間文如は頭の中がぐら〳〵して幾度も考へなほした。彼はあとで一つの決心が出來た。すなはち出來る限り忠實に彼女に勸めてみて承知するや否やは彼女の自由に任せる。假りに彼女の心が自分の方に向いてゐた時には、自分はもう拒絕する力はない。

三

劉文如は結局陸夫人の依賴を引受け、靜媛が母の意見に從ふように說き勸めることを承諾した。陸夫人の同意を得た文如は靜媛を彼の家へ連れて來て一晩泊めることにした。彼は彼の妻と一緒になつて追々彼女を說き伏せてみるつもりだ。

文如は陸夫人の家で晩飯を食べたが、そのあとで靜媛は大層嬉しさうに文如に跟いて家を出た。

陰曆二月の初春の天氣は、ほんに幾日も太陽を見なかつた。此半月以來けふのやうに氣溫の低いことはなかつた。空一面に暗灰色の雲が亂れて今にも雪降り出しさう。

靜媛は純白の毛織の襟卷をピツタリと頸の邊に卷きつけ、文如の跡に跟いてぶら〳〵歩いてゐた。彼女の爪先と指の先は氷の塊りのようだつた。

ません。又外へ出るな、といふことも出來ません。ですからわたしはそう思ひます。適當の範圍內で自由戀愛や自由結婚を大目に見てやれば差支えないのです」

「おやおやいけませんよ。先生と言はれる人が、そんなことを言つて下すつては、わたしは貴方からあの兒に意見して貰はふこと思つたのに、こりやあ全く望みがなくなりました」陸夫人は文如のあとへ跟いて笑ひ出した。彼女は文如が冗談を言つてるものと信じ、彼は結局彼女の主張を賛成せずにはゐないと想つた。

道義上から言へば文如はどうあつても陸夫人の依賴を拒むわけにはゆかない。彼は此機會を借りて靜媛とより多く親密になることは喜ばしいことだし、又一方には陸夫人に對して義理を盡すことになるのも有難い事であつた。彼は靜媛の心をよく知つてゐるといふ自信はないが、只一點に就いて――――靜媛が自分に對して少くも一種の好感情を持つてゐるといふ點に就いて充分自信があつた。三四年このかた打ち解けた師弟の間の話振りが、此際一層深みへ進んで、互に冗談さへ言ふようになつた――――いろ〳〵暗示の冗談が含まれて來る。文如は陸夫人のこの種の賴み事から一種の幻想を引起した――――それは愉快な幻想だつたけれど、彼は同時に決して少しも不忠實な考を持つてゐなかつた。――――陸夫人の依賴を實行しないといふ不忠實な考。たゞ彼はこんな考を持つてゐた。出來る丈け、彼女の母の希望通りに彼女を勸めてみる。自分は彼女に對して言ふことの出來ない程度の戀愛に達してゐた。もうなるべく早く彼女に勸めて結婚させた方がいい。そうすればどんなに苦勞が省けるかしれない。――――のち〳〵どうしても免れない、二人の間に發生する苦勞だ。けれど彼はこういふ苦勞を豫想した丈けでも、彼は彼女に對して一種の愛惜心のある事が證明された。――――彼女を他人に奪はれるのを見てゐるに忍び難い愛惜。あとになつて彼は悟つた。彼はその時もう苦悶の中に深く浸つてゐたことを。

あの人をやつて仕舞ひませう。あの人に勸めて、なるたけ早く嫁入させた方がいい。嫁入りしたあとでも自分は一層自由に彼女と交際が出來る。師弟の關係以外に、も一つおまけに年に差別のない馴染といふことにして貰はふぢやないか。更にもう一歩進めてひよつとすると……彼はこゝまで想像すると、二つの頰がカツとして來た。隨分用心して陸夫人にけどられまいとする彼の此種の態度。

たゞ一瞬間文如は頭の中がぐら〳〵して幾度も考へなほした。彼はあとで一つの決心が出來た。すなはち出來る限り忠實に彼女に勸めてみて承知するや否やは彼女の自由に任せる。假りに彼女の心が自分の方に向いてゐた時には、自分はもう拒絕する力はない。

三

劉文如は結局陸夫人の依賴を引受け、靜媛が母の意見に從ふように說き勸めることを承諾した。陸夫人の同意を得た文如は靜媛を彼の家へ連れて來て一晩泊めることにした。彼は彼の妻と一緒になつて追々彼女を說き伏せてみるつもりだ。

文如は陸夫人の家で晚飯を食べたが、そのあとで靜媛は大層嬉しさうに文如に跟いて家を出た。

陰曆二月の初春の天氣は、ほんに幾日も太陽を見なかつた。此半月以來けふのやうに氣溫の低いことはなかつた。空一面に暗灰色の雲が亂れて今にも雪降り出しさう。

靜媛は純白の毛織の襟卷をピツタリと頸の邊に卷きつけ、文如の跡に跟いてぶら〳〵步いてゐた。彼女の爪先と指の先は氷の塊りのようだつた。

「あすこへ行くのはいやよ。城隍廟の裏町は眞ツくらでこわいわ」文如と靜媛の二人は或る分岐點まで來た。左の大道は繁華な大馬路（ヌマロ）の方へ行く路で、右の小路は文如の家の裏の方へ拔ける近路、城隍廟の後ろの一筋の町を通らなければならぬ。靜媛は此分岐點に立つて文如に向つて答へるように首をかしげた。「そんなら大通りを一廻りして文昌路のあすこから行かう」文如は笑つて靜媛を見返つた。靜媛はうなづいた。

「お前は寒くないのかえ」文如はもう一度彼女にきいた。彼女は又頭をふつた。

二人は大街へ來た時、まちぢうは皆燈火だ。彼等二人は大きな洋品店のショーウヰンドウの前へ立つて、中に並べてある品物を眺めた。彼等二人は又此町で名高い寶石商の店の中に這入つた。石油ランプの光と電燈の光から成立つた光線の中に、金や珢でキラ〳〵して裝身具と寶石が彼等の視線を迷はして入り亂れた。

「あれを買つて上げようか。あのダイヤの指環を」文如は靜媛を顧みて笑つた。「いくらだらう。」彼は笑つて首をさげ、ガラス箱の中のその指環の正札を覗いた「五百八十元!」彼は低い聲で言つたあとで笑つて舌を出した。

「夢ぢやないの？先生は。先生の半年分の月給でも未だ追ツ付かないのよ。一年分の月給でどうやら買へさうね。奥さんが金の指環が無いと言つてコボしてゐましたよ。あの十八金の七八元のものを一つ買つておやんなさいな。可愛さうに」と靜媛は笑つた。

二人は寶石屋を出てX劇場の前へ來た。」

「芝居を見て行かうか」と文如は立ち止つて、劇場の壁の上に貼つてある紅紙を見た。紅紙の上には「時髦新裝」「百里爰遇妻」などといふ題目が記してあつた。

「よさう、芝居を見てゐると遅くなるから。それよりこれから何處かへ行つて一休みしやう」文如はすぐに自分の動議

を取消した。

「遅くなると叱られるでせう。奥さんに叱られますよ！」靜媛は笑つて文如の肩のうしろに立つてゐた。

「あしたは日曜でないから、學校へゆかなければならん」と文如は笑つた「向ふのカフエーへ行つて紅茶を飲まう。一寸洋食を食べてもいい。お前の家にはお酒がないから、スツポリ飯を頂戴して、どうも腹一ぱいに食べられない。お前はタンシチウが好きなんだらう。何か一皿二皿食べようぢやないか」

「ローズ、カフエー？」靜媛は仰向いてきいた。

「…………………」文如は只うなづいた。

二人が珈琲店に這入ると、三四人の給仕女が立つて迎へた。

「二階はあいてゐるかね」

「はいあいてをります」年嵩の方の女給仕は彼等を樓上に導いた。家族伴れの男の客には、年若の綺麗な女給仕は決してお取持ちをしないものだ。K市の珈琲店に女給仕を置いたのは、此二三年來の新しいおもひつきだ。彼等はこのような飲食店の給仕女を、女接待と言つてゐる。だが近頃又警察で女給禁止の噂がある。

靜媛はこの女接待の不自然な態度と音聲に接して頻りに眉がしらを壁めた。

「公園に行かうといふのに、貴方はなんでもかんでも此處へ來たがるんですもの」靜媛は流石に雙頰と二つの耳朶をほてらせて、文如の後ろへ跟いてやつとのことでこの一ことを言つた。

「公園はついこの側に御座います」先きへ上つた女給仕は甚だ念入りに彼等に告げた。

「そんなことは誰れでも知つてゐるよ」と文如の後ろに跟いて來た靜媛は小聲で言つた。

「二三杯酒を飲んで行かう。おゝ寒くなつた」文如は二階の裏部屋の隅の食卓を擇み、自分は部屋の入口の方に坐つて、內側の方にある椅子に靜媛を坐らせた。

二人が對きあつて坐つた時、側に立つてゐた女給仕は、どんな酒を飲むかときいた。

「靜媛、お前は何が好きだえ」

「わたしも一二杯のんでもいいのよ」と靜媛は頰をあかくして、彼女の教師に向つて笑みを含んだ。文如の眼の中にある今夜の靜媛——電氣の光に浴してゐる靜媛は殊の外美しい。

「なにがいけないことがあるものか」文如はほゝゑんで彼の前に坐つてゐる可愛らしい小さな女學生をおもふさま見詰めた。

「なにをのむの」

「わたしは一番ハイカラの酒がのみたい」靜媛は首をかしげて笑つた。

「どんなのがハイカラか、言つて御覽」文如も招伴笑ひをした。

「洋酒！西洋の酒！、支那の酒でない」

「シャンペン！」

「俗惡ね。そして强過ぎますわ」

「俗惡でもなんでもいい。わたしはあの位の强さでないといかん」

「あなたはシャンペンをお飲みなさいな」

「でお前さんは。ペツバミント？　ベルモツト？」

「いゝえ」

「マラスキノ」

「マラスキノもいいけれど、キユラソーがのみたいわ。緑のキユラソー」靜媛はさう言つてから、何か想ひ出した様子でそつと頭を下げた。

「あれは飲んでも醉はない酒だぜ」

「あの位のものがいいのよ。飲んでも赤くならないからいい」

「柑桂酒？（キユラソーの支那語）あれも澤山召上れば、矢張り顏へ出ます」そばに立つてゐた女給仕は其話をきいてほほゑみながら嘴を入れた。

「それではシヤンペン一瓶と柑桂酒二杯、持つて來て呉れ」

「はい〳〵」女給仕は身體を向けかえて下へゆかうとした。

「それに先づタンシチウ二皿作つて呉れ」

「かしこまりました」女給仕は下へ行つた。

「お前はフオークがつかえるかえ」文如は笑つた。

「まさか」彼女は笑ひかけて、おこりかけた。

「お前は洋食を食べる時、手で摘んで食べるさうだね」

「誰れからおききなすつて、あなたは嘘いふのよ」

「わたしはお前がそんなハイカラな酒を知つてゐようとは思はなかつた」

「わたしどもの同窓はいつもこれを買つて來て置くわ。同窓會のある時、いつもいつもこれをのむのよ」

「始末におへないね。今の女學生は」

「何が始末におへないのです。あなたがた男に限つて酒をのんでいいといふ事がありますか」

「そういふ意味ではない。わたしは近頃の女學生が酒と煙草をのむ者が日々に殖ゑてゆくのを感じたからだ…………………」

「…………」靜媛は頭を下げて彼女が初めてキュラソーをのんだあの晩の光景を囘想した。

四

去年の暑中休暇の或晩、去年と言つてもそのじつ、僅々六個月前の醒めかかつた夏の或晩。靜媛は母を伴れてW海のほとりへ來て避暑した。

胡博士が世にある頃、北海岸の避暑地に一軒の家を買つて、陸夫人と交替するのが博士生前のならわしで、毎年眞夏になると娘を連れてW海のほとりへ來て避暑した。

或日の午後、靜媛は沙地の上で同窓の石登雲と林昭に出逢つた。いづれも一冊の音譜をかかへて何處へか音樂をならひにゆく樣子であつた。

「貴方がたはどこへ行くの」

「あ、あなたも一緒においでなさいな。洛夫人は屹度歡迎しますよ。わたしたちも又一人仲間が殖ゑていい」

「何處へ行くの」

「ピアノを習ひに行くの。洛牧師の家へ行つてお浚ひするの」

「アーメンをやるやうな處へは、わたしはゆかない」靜媛は小さいうちから父の偏狹な國家主義の教育、宗教に反對し、教育權の回收云々に就て聽き慣されてゐた。彼女は、歐米から支那に來た宣教師といふ者が何處までも嫌ひであつた。

「あなたのやうなわからずやもないもんだ。」石登雲は先づ笑つて、教訓的口吻で靜媛に言つた。

「あの人達はあなたに宗教の押賣をしてゐないのに、あなたはあの人達の宗教に反對するのはどういふもんでせう」登雲は熱心な基督教信者の一人であつた。

「貴方は色に染つて仕舞つたのです。彼等のために辯護する資格はありません。」

「さうです。わたしに一つ道理を爰に說き出しませう。僞善の徒教に反對するのはいいとして、宗教の本體に反對するのはいけません。基督教、あのやうな宗教に反對するのはなほさらいけません。わたしどもの支那には基督教よりももつとひどい宗教があるからです。わたしどもが若し宗教に反對するならば、先づ自分の國の中の一層腐敗した宗教を排斥しなければなりません。貴方は基督教を信仰しない自由を持つてゐるが、彼等は信仰の自由を持つてゐます。わたしは基督教と比較しても結局より正しくより好きものだと認めてをります。われ〳〵はトルストイとドストイフスキ等の文豪の作品を喜んで讀む、さういふ者が基督教に反對するのは間違つてゐます」

「懲罰主義は永久に持續するものではありません。永久に持續するものは感化主義です！殊にわれ〳〵教育にたづさわる人間は感化主義の精神を持たなければなりません。わたしはさういふわけから耶蘇教を好むので、彼の精神は感化主義と愛他主義にあるのです」

靜媛は登雲と林昭の誘引に爭ひかねて、遂に彼等と一緒に洛牧師の家へ行つた。

洛牧師は亞米利加人で海岸の小さな禮拜堂の敎主であつた。彼の家はその小さな禮拜堂の右側にあつた。彼の夫人はかつて女子師範で何時間かの英語の授業を受持つたことがあるので、彼女等は皆識合ひであつた。たゞ靜媛の方のクラスには出て來なかつた。

彼女等は洛牧師の門口へ來て未だ中へ這入らぬとき、靜媛は洛牧師夫婦が一人の青年と話をしてゐる英語の笑ひ聲を聽いた。林昭は顏を石登雲の方に向け

「けふは金曜日？」

「そうです」と靜媛は答を奪つた。

「けふは祈禱會があるのよ。禮拜堂へ行きませう。けふは宗先生の說敎があるのよ」

林昭はほほゑんで石登雲を見た。石登雲は頭をさげて聞こえぬ振りをしてゐた。

この日の午後、靜媛は傍聽生の資格で、洛牧師の書齋の中で三人のあとへ跟いて唱つた。

林昭と石登雲はピアノの前に坐つていづれも一通り彈奏した。

「ミス胡、あなたもやつて御覽なさいな」年若の宗禮江は靜媛を見てほほゑんだ。

「し、しりませんわ」と靜媛は顏をあかめてうつむいた。

林昭と石登雲の眼の中の宗先生は、けふの午後、甚だ不熱心であつた。彼はひたすら靜媛に向つて、何がいいとか何が惡いとかきいた。風琴が好きですか、ピアノが好きですかときいた。あなたの今唱つた歌は前に歌つたことがないのですかときいた。あなたはK市のどこにゐらつしやるの、ときいた。ことしおいくつになるのですときいた。宗先生の眼

には此三人の女の中で靜媛が一番年若に見えた。

けふの午後の宗先生の態度は林昭が見たところでは只隨分可笑しかつたが、石登雲の方では胸の中が苦しく酸ッぱく感じた。

つゞいて靜媛は宗先生がどういふ風の人物であつたかを知つた。彼は上海の教會管理の大學卒業生で、去年夏休み、卒業後K市へ歸つて來て教會管理の中等校につとめてゐた――――教員として。彼は靜媛の最も嫌ひな基督教徒の一人であつた。彼はことし未だやうやく二十二歳で、三年の勤務を濟ましてからすぐに新大陸に洋行するといふ。そのうへ彼は未だ未婚の美少年――――ハイカラな洋裝に美の分量を增した美少年。

宗といふ美少年に具はつたところのものが、能く靜媛の心を振り動かした――彼女のむねをドキ〳〵躍らせた要素は彼の美ではない。彼の美の外にまだあつた。彼女と同じ音樂の嗜好と、將來博士にならうといふ希望。

同じW海の濱邊に避暑してゐた宗禮江と靜媛は、此日識合ひになつてからあとでも、朝晩海邊を散歩する時、幾度も逢つた。最初は互に會釋して行き過ぎた。二度目は向ふも笑へばこつちも笑つた。三度目には言葉を交しえた。それからすぐに親しみが深くなつた。

月のいい晩には海岸の沙地は丸で一重の白雪を敷いたよう。海の上に風がさざなみを立てなかつたら、誰れでもこれを一つの大きな鏡と見做すだらう。風がそよ〳〵と吹きゆるがす單衣の肌さわりは一種さわやかな快感を引起す。

「あれは漁船でせうか」靜媛は海の上にきらめく一つの星あかりを指差して宗禮江にたづねた。

「あゝ波に任せてゆく舟――詩のような景色、本統に詩のような景色だ」

「れうしの生活も羨しがる丈けのことはありますね」

「貴女は林琴南の譯した紅礁畫槳錄をお讀みになりましたか」

「讀みました。だがたいていは忘れて仕舞ひました。」

「英文の原書を讀んだことはありますか」

「ありません」

「原書は紅礁畫槳錄ではありません。紅礁畫槳錄は林先生がつけた名前です。原書の名はすなはち女主人公の名ビートリスです」

「そうねえ、ビートリスは大層可愛さうなのよ」

「最初一緒に水に飛込んだ時、二人ともみな死ねばよかつたのに」

「あすこが一寸無意味ですね。あの人達はあの時になつて知つたのでせう。あとで女の方が死んだ時、男も一緒に死ねば好かつた。ジオツフリーはとう／＼死ねなかつた。あのお方はお氣の毒です」

「そうです、二人は情死するのが至當です」宗禮江はそう言つて仕舞ふと靜媛の方によう向き得ないで、海の方を眺めてそつと溜息をついた。

「…………」

「…………」

海面は死んだように靜まり返つた。月の色は白色から轉じて碧色になつた。彼等は二人ともからだが少し冷やついて來たことを感じた。

「歸りませう。いつまで見ても同じことだわ。無意味です」靜媛は默つて岸の上まで來ると漁家の中の赤坊の哭聲が吹

き送られて彼女の耳朶の中に這入つた時、初めて遲くなつたと氣が付き、禮江に催促した。

「何處へ歸りませう。果て知らぬさすらひの、我に家無し」そう云つた彼の聲は潤んでゐた。忙てゝハンケチを出して自分の眼と鼻の間をおさへた。

五

この半ケ月以來、靜媛はあらまし禮江の身の上を知つた。

宗禮江は生れて半年たつたばかりで彼の母はやもめになつた。幸ひ母の賃仕事の收入で、彼は學校に通つて中學の二年級まで進んだ。彼は國立中學に這入る學費がないので、K市の教會管理の中學校の入學試驗を受けた。入學試驗から卒業試驗まで彼は一度も首席を取逃がしたことはなかつた。中學二年から教會の世話になつた。そういふわけで餘儀なく基督教を信じなければならなかつた。上海の教會大學の第二年級に在學中、彼の母は傳染病に罹つて死んだ。彼が靜媛に言つた話に據ると、彼はその時すでに自殺を思ひ立ち、命などは要らないものだと思つた。彼には本統にいくらか禮義を重ずる道學先生の所謂「苟も殘喘を延ぶ」といふものがあつて、それからずつと未だ死ぬことが出來ない。

神經衰弱の靜媛は禮江の感傷主義の感動を受けることが少くなかつた。彼女は一面には獨立有爲の少年として彼を慕ひ、一面には又しんそこ彼の氣の毒な身の上に同情した。

禮江は靜媛の同情を受ければ受けるほど、彼の感傷主義を深めた。慥かに彼自身もその奥底がわからない。靜媛と識合ひになつてからますく自分の淋しみを感じた。恰度彼女に對して求むる所のものがあつて、その目的を達することが出來ないように、彼の感傷ははてしがなかつた。

「貴女は林琴南の譯した紅礁畫槳錄をお讀みになりましたか」

「讀みました。だがたいていは忘れて仕舞ひました。」

「英文の原書を讀んだことはありますか」

「ありません」

「原書は紅礁畫槳錄ではありません。紅礁畫槳錄は林先生がつけた名前です。原書の名はすなはち女主人公の名ビートリスです」

「そうねえ、ビートリスは大層可愛さうなのよ」

「最初一緒に水に飛込んだ時、二人ともみな死ねばよかつたのに」

「あすこが一寸無意味ですね。あの人達はあの時になつて知つたのでせう。あとで女の方が死んだ時、男も一緒に死ねば好かつた。ジオツフリーはとう／＼死ねなかつた。あのお方はお氣の毒です」

「そうです、二人は情死するのが至當です」宗禮江はそう言つて仕舞ふと靜媛の方によう向き得ないで、海の方を眺めてそつと溜息をついた。

「…………」

「…………」

海面は死んだように靜まり返つた。月の色は白色から轉じて碧色になつた。彼等は二人ともからだが少し冷やついて來たことを感じた。

「歸りませう。いつまで見ても同じことだわ。無意味です」靜媛は默つて岸の上まで來ると漁家の中の赤坊の哭聲が吹

き送られて彼女の耳朶の中に這入つたと氣が付き、禮江に催促した。
「何處へ歸りませう。果て知らぬさすらひの、我に家無し」そう云つた彼の聲は潤んでゐた。忙てゝハンケチを出して自分の眼と鼻の間をおさへた。

五

この半ケ月以來、靜媛はあらまし禮江の身の上を知つた。

宗禮江は生れて半年たつたばかりで彼の母はやもめになつた。幸ひ母の賃仕事の收入で、彼は學校に通つて中學の二年級まで進んだ。彼は國立中學に這入る學費がないので、K市の教會管理の中學校の入學試驗を受けた。入學試驗から卒業試驗まで彼は一度も首席を取逃がしたことはなかつた。中學二年から教會の世話になつた。そういふわけで餘儀なく基督教を信じなければならなかつた。上海の教會大學の第二年級に在學中、彼の母は傳染病に罹つて死んだ。彼が靜媛に言つた話に據ると、彼はその時すでに自殺を思ひ立ち、命などは要らないものだと思つた。彼には本統にいくらか禮義を重ずる道學先生の所謂「苟も殘喘を延ぶ」といふものがあつて、それからずつと未だ死ぬことが出來ない。

神經衰弱の靜媛は禮江の感傷主義の感動を受けることが少くなかつた。彼女は一面には獨立有爲の少年として彼を慕ひ、一面には又しんそこ彼の氣の毒な身の上に同情した。

禮江は靜媛の同情を受ければ受けるほど、彼の感傷主義を深めた。慥かに彼自身もその奥底がわからない。靜媛と識合ひになつてからますます自分の淋しみを感じた。恰度彼女に對して求むる所のものがあつて、その目的を達することが出來ないように、彼の感傷ははてしがなかつた。

彼等二人は前になり後ろになり海岸の裏町へ來た。或る曲り角へ來て彼等は別れようとした時

「貴女は未だ一遍も來たことはないが、わたしの下宿へ寄つて行きませんか」

靜媛は一寸考へたが彼の後ろへ跟いて來た。彼は或る小さな旅館の中に住んでゐた。旅館の名はW灣酒店と言つた。名は頗る拙づいが中の設備はなか〳〵行屆いてゐた。禮江は奥の二階の部屋に住んでゐた。南の窓を開けるとW灣の風景が一々映射してつくえの前にひろがつてゐる。

「これはあなたの四絃琴ですか」靜媛は卓上にねかしてあるヴアイオリンを見ると、すぐにそばへ來て取上げてそつと撫でてみた。禮江が籐椅子を持出して、お掛け、と言つたが取合はずに。

「貴女、坐つてそれを御覧なさいな」

「いゝえ、わたしは貴方のお部屋を見に來たの。すぐ歸りませう。大變おそいのよ」

「未だ早いですよ。未だ九時にもならない」

「一寸彈いてみて御覧なさい」靜媛は禮江の彈奏を聞きたかつた。禮江はもちろん仰せにそむきはしない。一曲彈いて仕舞ふとそれがはなはだ高過ぎて悲しみをそそり過ぎた。二度目の時には彈き語りをした。靜媛は大方それを聽きわけてゐた。

„Safe in the arms of yours, Safe on your gentle breast. There by yours love o' ershade l. Sweetly my soulpushell rest.„

「今唱つたのは何？讃美歌？」

「えゝそうです。この歌のやうにして就きたいので、此讃美歌を唱つてみたのです」

「…………………………」靜媛は頭をさげた。

「あゝ愁ひを消すのは唯一つ酒あるのみです。あゝ酒！酒！酒！酒以外には何物もありません、酒はわたしの命です」

禮江はバキオリンを投げ出して、後ろへ行つて押入れの中から酒瓶を出した。

「貴方、酒を飲むの？」靜媛は疑はしい眼付きで禮江を見た。

「えゝ、だが強い酒は飲めません。わたしの好きな酒は、あなたの知らない酒です」

「教會の人も酒を飲むのですか」

「教會では酒を禁じてゐますが、基督教は決して酒を禁じません。新舊約全書を通じて禁酒の條文を捜し出すことが出來ませうか」彼は押入れの中から出して來た酒を卓上に置いた。靜媛は見てゐると瓶の中の酒はみどり色であつた。

「なんていふ酒？」

「キユラソーといふのです。見た事も聞いた事もないでせう」

「ありません」靜媛はほゝえんだ「その酒は強くはないでせうか」

「飲んでも醉ひません」

「少しついでみて下さいな。いいか惡いか一寸飲んでみて」

禮江は一つの脚高のグラスに一ぱい注いでやつた。靜媛はテーブルの前に坐つてゐたが、禮江は彼女の後ろに立つて、彼女の肩越しにコップを出した。彼女が未だ手を出さない中に、コップは彼女の口許に來た。彼女はそこで一口吸つて、吸つたあとですぐにコップをうけとつた。

禮江の頭は靜媛の肩の上に垂れかかつて來た。彼の嗅覺は一種人をして陶醉させるような刺戟を感じた。大概それは

處女の匂だつたらう。なんにたとへんようもない貴き處女のかほり。彼の感じた今晩の彼女は何物にもまさる貴さ、美しさ。英皇帝の冠の上にコヒヌーアも及ばぬ氣高さ、美しさ。

「わたしはつひ知らなかつた。こんないい酒があるとは、みんなに知らせてやらう」幾口か飲み續けた靜媛の息は、すーすーと禮江の額の上へ吹きつけて、人に當つて醉はさうとする。彼女の息の中の醇分は、酒の中のものよりも一層强烈だ。彼はうつとりと彼女を見つめて暫くの間は話もきき取れない。彼女も亦心臟の中の血液が最高率の速度で頭の上に噴き上げて來るのを感じて急に頭をさげた。

禮江は機會が來たと想つた。自分の心を打ち開ける機會が來たのだ。俺れの右の腕を彼女の肩の上に載せ掛けようか。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、………、、、、……………、、、、、、、、、、、。

………おう！彼女の紅い唇！曲線美のある紅い唇！未だ一度も男の蹂躙を受けない唇！

禮江はこゝまで想ひ及ぶと、身內が熱く脹れて來た。彼の腕は彼女の肩へのしかかつた。だが彼女は只頭を下げてゐる丈けで一點の表示がない。彼の腕は彼女の蒼白い頸にまきついた。彼は頭を下げてすりよらうとした時、彼女は突然立上つた。彼は駭いて後ろへ飛びすさつた。

「い、いけません。そんなことをしては」靜媛は突き出しさうになつて籐椅子の上に立上つた。

靜媛が歸つたあとで、禮江の胸の中の心臟は日曜日の朝の敎會の鐘のように激動した。彼は惡魔のようなかたちで部屋を行きつ戻りつした。彼は感じた「もう駄目だ！」

半月の苦心が結局水の泡になつた。彼は後悔せずにはゐられなかつた。自分が餘りせつかちだつたことを後悔した。口許まで來た一塊りの肉を自分のせつかちのために振り落した。彼は思へば思ふほど胸痛く感じた。どうもかうも仕様

がなくなつて電燈を消して床の上に這ひ込んだ。けれどどうしたつて睡むれやしない。二つの眼をしつかりと瞑いでゐるばかりだ。

心臓の鼓動は一時間經つても未だ靜まらない。彼は、自分が彼女に對する今の行動は随分厚釜しいものだと思つた。幾日も蓄め込んでゐた妄想は甚だ卑劣なものだつた。彼女が自分を輕蔑するのは當然だ。はてしなき悔恨と羞恥は刻々に彼のムネを刺して、それからずつとおツとほして、時計が三つ鳴つても未だ睡れなかつた。

外ではひどい風模様で窓の戸がガタガタした。あしたはあらしだらう。今度いつあの人に逢へるかしら。逢つたら是非ともあやまらう………けれど絶望だ！もう逢はない方がいい。もう見ない方がいい。

「どうしたら此失敗が補へるか！取りかへしのつかぬ恥を暴露して仕舞つた。彼女は屹度、今夜の事をミス石とミス林に話すだらう」禮江は夜どほし寝られないでごろごしてゐたが、そとの風雨がだんだん烈しくなるので彼はとうとう寝床から起き上り、電燈をつけて抽出しの中の時計を見ると、もう四時に近い。明かるくなりかけてゐる。彼はつくゑの前に坐してしばらくぼかんとしてゐたが、つひに意を決して手紙を書いて靜媛に謝罪した。

「靜媛ねえさま、われ／＼は數え年は同じだが、あなたはあたしより幾月か年上で、この前あなたはあたしにねえさんとお言ひなさいと言つたでせう。否もうすでにおゆるしになつた。前の土曜日にあなたはわたしに本統の弟と倣すことを許した。

あなたのお話では、あなたは兄弟もないし姉妹もない。姉妹はなくとも構はない。學校の中に同性の友達が多いから、姉妹の愛情を汲み取ることは難くない。けれども珍しく思はれるのは男の兄弟だ。われ／＼が姉弟の約を結んだのもあの晩の出來事です。

處女の匂だつたらう。なんにたとへんようもない貴き處女のかほり。彼の感じた今晩の彼女は何物にもまさる貴さ、美しさ。英皇帝の冠の上にコヒヌーアも及ばぬ氣高さ、美しさ。

「わたしはつひ知らなかつた。こんないい酒があるとは、みんなに知らせてやらう」幾口か飲み續けた靜媛の息は、すーすーと禮江の顏の上へ吹きつけて、人に當つて醉はさうとする。彼女の息の中の醉分は、酒の中のものよりも一層強烈だ。彼はうつとりと彼女を見つめて暫くの間は話もきき取れない。彼女も亦心臟の中の血液が最高率の速度で頭の上に噴き上げて來るのを感じて急に頭をさげた。

禮江は機會が來たと想つた。自分の心を打ち開ける機會が來たのだ。俺れの右の腕を彼女の肩の上に載せ掛けようか。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、……、、、

……、、、、……おう！彼女の紅い唇！曲線美のある紅い唇！未だ一度も男の蹂躙を受けない唇！

禮江はこゝまで想ひ及ぶと、身内が熱く脹れて來た。彼の腕は彼女の肩へのしかかつた。だが彼女は只頭を下げてゐる丈けで一點の表示がない。彼の腕は彼女の蒼白い頸にまきついた。彼は頭を下げてすりよらうとした時、彼女は突然立上つた。彼は駭いて後ろへ飛びすさつた。

「い、いけません。そんなことをしては」靜媛は突き出しさうになつて籐椅子の上に立上つた。

靜媛が歸つたあとで、禮江の胸の中の心臟は日曜日の朝の教會の鐘のように激動した。彼は惡魔のようなかたちで部屋を行きつ戻りつした。彼は感じた「もう駄目だ！」

半月の苦心が結局水の泡になつた。彼は後悔せずにはゐられなかつた。自分が餘りせつかちだつたことを後悔した。口許まで來た一塊りの肉を自分のせつかちのために振り落した。彼は思へば思ふほど胸痛く感じた。どうもかうも仕樣

がなくなつて電燈を消して床の上に這ひ込んだ。けれどどうしたつて睡むれやしない。二つの眼をしつかりと瞪いでゐるばかりだ。

心臓の鼓動は一時間經つても未だ靜まらない。彼は、自分が彼女に對する今の行動は隨分厚釜しいものだと思つた。幾日も蓄め込んでゐた妄想は甚だ卑劣なものだつた。彼女が自分を輕蔑するのは當然だ。はてしなき悔恨と羞恥は刻々に彼のムネを刺して、それからずつとおツとほして、時計が三つ鳴つても未だ睡れなかつた。

外ではひどい風模様で窓の戸がガタガタした。あしたはあらしだらう。今度いつあの人に逢へるかしら。逢つたら是非ともあやまらう…………けれど絶望だ！もう逢はない方がいい。もう見ない方がいい。

「どうしたら此失敗が補へるか！取りかへしのつかぬ恥を暴露して仕舞つた。彼女は屹度、今夜の事をミス石とミス林に話すだらう」禮江は夜どほし寢られないでごろごしてゐたが、そとの風雨がだんだん烈しくなるので彼はとうとう寢床から起き上り、電燈をつけて抽出しの中の時計を見ると、もう四時に近い。明かるくなりかけてゐる。彼はつくゑの前に坐してしばらくぼかんとしてゐたが、つひに意を決して手紙を書いて靜媛に謝罪した。

「靜媛ねえさま、われ〳〵は數え年は同じだが、あなたはあたしより幾月か年上で、この前あなたはあたしにねえさんとお言ひなさいと言つたでせう。否もうすでにおゆるしになつた。前の土曜日にあなたはわたしに本統の弟と倣すことを許した。

あなたのお話では、あなたは兄弟もないし姉妹もない。姉妹はなくとも構はない。學校の中に同性の友達が多いから、姉妹の愛情を汲み取ることは難くない。けれども珍しく思はれるのは男の兄弟だ。われ〳〵が姉弟の約を結んだのもあの晩の出來事です。

靜媛ねえさま、わたしにお約定して下さつたあなたを誤解した。わたしは姉弟の關係を乘り越えて餘り深入りをして仕舞つた。これは全くわたしの癡愚です。どうぞ充分わたしの心を汲み取つて、きのふの無禮をゆるして下さいな。

わたしは今晩自分の醜惡を見出しました。同時にねえさまの崇高を見出しました！想へばもうこれからねえさんに顏向けが出來ません、すぐにも海に飛込んで自分の罪惡を洗い清めたいのです。靜媛ねえさま、どうぞわたしを憐れんでわたしの癡愚を憐んで下さい。わたしを恕して、わたしの罪をゆるして下さい。靜媛ねえさま、あなたは御存知でせうか？ゆうべあなたが歸へつた後で、どんなに涙を流したでせう！

あゝもう言ひません。是非ともわたしのこの心を汲み取つて下さいな。

一寸どうぞ御返事をねがひたい。矢張りわたしをあなたの弟として下すつて。今晩若し御返事がなかつたら、それこそ我れ〳〵は恐らく永久に顏を合せる時がないでせう！ひよつとするともうこれで……」

禮江はこゝまで書き續けると、もうその上は書かなかつた。彼は用箋の末に署名し、よく封じて宛名を書き、宿屋のボーイに賴んで屆けさせた。

手紙を出したあとでも彼は一日もぢ〳〵して書齋の中から出なかつた。外は風がしづまつたが小雨がしと〳〵降つてゐた。彼は返事の來るのを待つてゐた。彼は今度の衝突で二人の仲が一層親密になることを希望してゐた。

手紙を持つて行つた男は歸へつて來た。その男は只こんなことを言つた。手紙をぢかに渡すと彼女はあけて見た。返事はありませんかときくと、彼女は只首をふつて奥へ這入つて仕舞つた。この男の報告に據ると彼は絶望に陷つた。

彼女はおれを馬鹿にしてゐる。彼女はもうおれを相手にしない！禮江は急に床の中へ這込んで枕の上につツぷし、止め度なく涙を流した。彼はどうしても何か一つの貴重品を振り落したやうに思はれてならない。そうして自分の前途が

全く暗黒になつたように感じた。

晩飯をすましても彼はボカンと机の前に坐して、あしたはウンと早起してK市に歸へらうなどと思つてゐた。彼はもうW海岸に未練はない。

そうだ、そうだ！これも普通の女に過ぎない！近頃の女學生は傲慢千萬だ。自分の彼女に對する希望が到達しても將來それが屹度幸福であるとは言はれない。彼はそんなことを思つて自ら慰めた。彼は同時に又自分を冷笑つた。棚の上の葡萄は酸つぱいといふ狐の話を想ひ出して。

「そとに出てゐるのではないでせうか」

彼は林昭女士の聲をきいて、急に身をひるがへして部屋の入口に立つた。彼は林昭の肩の後ろで笑つてゐる女を見て驚き又喜び、心臓がどきん／＼跳ね上つた。

靜媛は丸でゆうべのあの事はわすれたように、又けふの午後のあの手紙のことも忘れたようにほほゑんでゐる。彼女は只テーブルの側の四角の腰掛によつて腰をおろした。

「この人は一生懸命になつてわたしを引張り出して來たの。あなたのバイオリンがききたいと言つて」林昭はほほゑんで靜媛をゆびさし、彼等の訪問の目的を語つた。禮江はそう言はれると涙が出さうになつたが急に我慢した。彼の心の内の感激は非常なものであつた。

「ミス石（シー）はなぜ來ないの」禮江はテレかくしに訊いてみた。

「あの人ですか。あの人とこの人は兩立しないのよ」林昭は靜媛をゆびさした。

「あらこの人は冗談ばかり言つて」靜媛は顏をあかめて二つの眉を竪めて苦笑した。禮江は二人にお茶を飲ませたあと

で、御注文のバイオリンをひいた。

「宗先生、あなたのバイオリンはピアノに比べるとどう？」

「ピアノはずつとやさしい。誰れでもおぼへられます。バイオリンはいくらか天才が要るので上手になるのは中々六ツかしい」

「では貴方はバイオリンの天才ですね」

「わたしは「人才」です天才ではありません、ハハハ」

三人は皆笑ひ出した。

林昭はからだに一寸差支えがあると見えて、下の人のゐない處へゆく必要があつた。

「あなたがたは仲よくお話しなさい。わたしは一寸向ふへ行つてすぐ返つて來ます」彼女は出て行くとき二人にこんな冗談を言つた。

「昨夜は本當に相濟みません。どうぞ麁相をゆるして下さい」

禮江は林昭の立去つたのを見濟まし、急に靜媛に御辭儀をした。

「なんでもありませんわ。わたしは少しも氣にしてゐないのよ。それといふのもわたしが悪いので貴方に心配掛けたのです。貴方はおこつてゐるのでせう？わたしはお手紙を頂戴して本統に心配しました。もつと早く來ることが出來なかつたのは、あなたの性質が隨分感傷的ですからね。何か意外のことでも起りやせぬかと思つて…………まあ好かつたこと。もういいわね」

「…………」禮江は只頭を下げて言ふだけのことを皆彼女に言はせて仕舞つた。

「わたしはゆうべは一晩ぢう睡れません。我れながら情理に缺けてゐたので、甚だお氣の毒なことをしました」

「そんなことがあるもんですか。わたしこそ無禮をしたので、矢張り睡れませんでした」

彼等は電燈の下で互に見詰めた顔はいづれも眞蒼になつてゐた。

「わたしどもはもうきのふのことを想ひ出さぬことにしませう。仲直りに來たのよ」靜媛は笑つて雙手をさしのべた。

禮江は立つてゐられなかつた。彼は彼女の袴の下に倒れかかつて膝をついた。彼の頭は磁石に吸ひつけられたように、彼女のやわらかな胸のところに枕した。彼女の處女の匂――うるほひのあるかんばしい息は彼の頭の上に吹きかかつた。彼の脣は忽ち一種の暖かい柔かい、たとしへない微妙の感觸を感じた。

ほんの一瞬間、全くほんの一瞬間、彼等はだん〳〵近寄つて來る林昭の足音を聴きつけた。彼は急に立つて彼女のふところから離れた。

六

「もつと飮まないか。もう一杯キュラソー？！」文如は靜媛の憂鬱的態度を見て彼女に酒を勸めた。同時に彼は心のうちで果して間違ひない。彼女の母の言つた言葉に間違ひない。彼女はスヰートハートを想つてゐるのだ。文如はそう思ふと一種の嫉妬心さえ感じた。

「…………………」彼女はたゞ首をふつた。

「もう一杯お飮みな。飮んでから一ついい話をしましよう」文如はほほゑんだ。彼は學校の控室で冗談ばなしをするとき、いつも女生徒に一人一人問題を出してきいた。たちのいい者、餘り好くない者、結婚を濟したもの、未婚の夫ある

者、情人のある者、無邪氣な處女。文如もかつて靜媛と宗禮江のローマンスを耳にしたことがある。
「いい話つてどんなこと。あなたすぐ話して下さいな。それを伺つてから飲みませう」彼女は一寸流し眼になつてほほゑみながら彼を見た。
「ではすぐ話さう。」彼は笑つて手を伸ばし、卓上の呼鈴を押した。
「わたしはお前の不贊成を承知してゐるのだが、お母さんがお前の腹をきいてみて呉れといふのだからね。お前はあの家に片附く氣があるのかね？」
「いやだわ」靜媛は丸で蜂にさされたやうに顏色を變へた。
「では取合はないつもりでゐるのだね」
「お母さんにさう言つて下さい。わたしは一生お嫁にゆきません。餓死しても本望です」
文如はこれを聽いて心の中に一種の快感を呼び起した。彼は彼女が嫁入しないで、こんな風にゆききして呉れるに越したことはない。けれども彼の晴やかになつたばかりの心の中に又暗い蔭が下つて來た。彼女は絶對に嫁入りしないのではないのだらう。彼女は心の中の人以外に嫁入りしないのだらう。文如はどう考へても靜媛の一生涯の生活は自分の負へる責任で、同時に彼は又彼女に對して責めを負ふことが出來ない自分を憐んだ。
「お前は外に考へがあるなら、お母さんに言つて具合の惡い事でもわたしに話すがいい。わたしは程よくお母さんに言つて上げるから。わたしは絶對に戀愛の自由を主張しないが、相當の年齡に對した娘の意志を尊重する必要がある、と

お母さんに話したのだ」

「…………………」靜媛は只首をさげてゐた。

女ボーイが來て、何か御用ですかときいた。
「柑桂酒(カンフアイチユ)！もう一杯キユラソーを持つて來て呉れ」文如は吩咐けると女ボーイは出て行つた。
「どんなもんだね。お前の考へは。構はずお話よ。獨身主義は或る理想の名目に過ぎない。實行されるものではない。殊に女としては一層六ツかしい」
「…………………」靜媛は未だ頭をさげて默つてゐる。
文如は彼女の憂鬱的態度を見て、そのうへ口をひらかうともしなかつた。
女ボーイは一杯の青いキユラソーを持つて來た。そのコツプは靜媛の前に置かれた。
「わたしはたくさん」彼女はぼんやりとそのコツプを見詰めた。小さな脚高グラスの中のキユラソー！　甚だ强烈に彼の頭の中に起つた痛ましい追懷。彼女は久し振りでそのものに逢つたような有様だ。
「おや、なにか氣に障つたことがあるの」文如は靜媛が白いハンケチを出して眼のふちを拭いてゐるのを見た。「わたしは何も間違つた話をした覺えはないが、間違つたところがあつたら取消しませう」彼は自分ながら可笑しいほどうろたへた。
「いえなんでもないのです。わたしはもとから神經衰弱に罹つてゐるのをあなたも知つてゐるでせう。刺激の多い話を聽くことが出來ないのです。自分乍ら可笑しいように」靜媛は涙を拭いて頭を上げ、文如を見てほほゑんだ。
涙を流したあとで笑顏になつた靜媛の可憐の姿態は、文如の眼の中に一層なまめかしく感じた。彼は幾たびか彼女を懷にかかへて慰めてやりたいと想つた。たゞ師弟の名分に限られ、それに又、も一つ自分は教職にあると云ふことで、迚も已れの愛慕を彼女に示す勇氣はない。こんな苦悶は無理にも腹の中に呑み込んで仕舞つた方がいゝ。

静媛も文如に對して全く氣がないのでもないが、只二つの原因で彼女が彼に對する好感はついに發展の餘地がないのだ。第一、文如は今年三十五歳だ。第二、彼はもうとつくに妻のある身だ。若し文如の年が宗禮江とおつかつで又未婚の獨身者ならば、彼女は或は宗禮江に對する愛を以て文如にゆるしたかもしれない。

文如先生は彼女の喜ぶところのものだ。だが先生は矢張り先生で、單に先生として敬愛するのが至當だ。

「禮江の一件を先生に話してみよう。ひよつとすると彼は或る方法を考へ出して、わたしを助けて吳れることが出來よう」静媛は此瞬間に彼女と禮江の關係を說き出し、文如の援助を乞はふかと想つた。

「いや、いや、言つてはならん。この前禮江の話を一寸洩してみたが、あの時の不機嫌たらありやしない。文如先生は事によると禮江を輕蔑してゐるのかもしれない。あんなわけのわからぬ嫉妬を起すいわれはない」静媛は自分の秘密を文如に說くことに就いて、甚だ心苦しく想ひ、結局口に出して言ふ勇氣はなかつた。

禮江はとふから静媛と家庭を持たうと思つて曾つて彼女に相談したこともあつたが、それが愚圖々々進行しない原因は經濟の制限を受けてゐたのだ。宗禮江が敎會から受ける月給は僅に二十元であつた。莫大の結婚費用を調達するのは偖て措いて、これでは彼の獨身生活を維持することさへ覺束ない有樣であつた。よしんば結婚を濟ましてもそのあとの生活をどうしよう?これが彼女と禮江の結婚前に要する先決問題であつた。命のように金を愛する自分の母が多額の仕度金を要求しなければもつけの幸としなければならないのに、その上母に金錢の援助を請ひ得ることが出來ようか。

彼女の母が彼女を米屋に嫁にやらうとするのは、八百元の仕度金に眼が眩んだにちがひない。

文如の現在の收入──學校の月給──彼一家の生活費が甚だ充分であることを彼女は知つてゐた。文如の父は可成り金を蓄め込んだ老商人で、彼は一昨年父の遺產を承け繼ぎ、銀行に据え置きにして手をつけないことも彼

女は知つてゐた。文如の夫人は豪農の娘で一寸位の金の融通はわけもないことである事を彼女は知つてゐた。考へてみると彼女と禮江の間の戀愛を完成させるには文如先生の外に賴む人がない。彼女はやうやく腹を極めた。

「先生、わたしに學校の口をさがして呉れませんか。わたしは小學教員にならうと思ふのです」靜媛の大きらひなものは教員になることだ。彼女が師範學校を卒業したあとで、彼女の行つて然るべき小學校の口は無かつた。男の卒業生に皆奪はれたからだ。彼女は決してしんから小學教員になりたいのではない。只これを借りて文如先生に經濟問題の意見をもとめようとしてゐるのだ。

「小學教員はずゐぶん苦しいよ。お前さんには勤まるまい。月給の安いと言つたら毎月たつた十元だ。一番上でも十二元を越すことはない。それで一週間二三十時間も受持つて御覽。神經衰弱のお前さんが迚もやりきれるもんぢやないよ。內へ來て「理科の本」の編輯を手傳つて呉れといへば、お前さんはいやだといふし」

靜媛が師範を出たあとで、是非とも高師に這入りたいと言つたとき、文如は彼等親子のために一つの調停方法を案出し、靜媛を彼の家に連れて來て、理科教育研究の道作れをさせようとした。この調停方法に就いては靜媛はどうあつても反對であつた。彼女は虛榮の資格を完全にしたいために入學を想ひ立つたので、決して何も學問を研究するつもりではない。靜媛ばかりではない。近代一般の女學生は皆こんなもんだ。女學生ばかりではない。近頃一般の男學生も大ていこんな風で、ひたすら虛榮を求めて實力を養はない。

「うちへ歸つてもう一遍考へさせて貰ひませう。あした御返事します」靜媛は母親と一緒にゐるのが甚だ不便に感じた。禮江は彼女に氣兼ねするにちがひない。そこで先づ文如先生の所へ連れて來て、引合せたあとで自分と禮江の關係を文如先生に話さうときめた。

七

米屋の緣談は靜媛の積極的反對と文如の消極的反對でついに打消された。幾日か過ぎて、靜媛は母親の同意を得て、文如の家に引移つて來た。

はじめ文如の家に移つて來たとき、彼女は來なければ好かつたと悔んだ。晚飯をすますと文如夫婦は子供を連れて彼女の部屋の中へ――文如は二階に彼女の部屋をあてがつて吳れた――來て、いろ〳〵話をした。生れて二歲になつたばかりの文如の女の兒はじつと靜媛を見詰めてゐた。靜媛はいくども手を拍つて子供を抱かうとした。子供はその都度母親の蔭に隱れた。

「もう夜が更けてゐるのよ。寢ませう」奥さんは小さな女の兒を抱へて先きへゆき、文如はそのあとへ跟いて下へおりた。靜媛は一人二階に坐つてゐると、宛ら氷のあなぐらに入れられたようだ。

春は深し、幾日か曇りつゞけた天氣に靜媛は窓口に立つて、黑い空の下に一つの市街の建物が薄暗く畫かれてゐるのを彼女は只望み見た。遠い遠い一列の電柱の上にいくつかの星あかりの外には彼女の眼の前の世界は眞黑だ。この暗い空の景色は彼女の胸の中に少からぬ哀愁を增した。知らず覺えず淚がそゝ幾滴の淚。

いつも晚飯のあとで八時から十時までは文如と靜媛の共同研究の時間であつた。彼等が此時間に研究する場所はとりもなほさず二階の書齋だ。靜媛の仕事は圖面を取るのと速記であるが、彼女はそのきめた仕事をする多くの時間がない。晝間圖面の下拵へをして置くのだが、彼女はいつも外出してゐた。晚は速記の時間だけれど彼等はたいてい無駄話をして仕舞ふ。文如と靜媛は近頃互に均しく愧かしいような氣がしてどちらも甚だ元氣がない。

或日天氣のいい日曜日――この半月以來滅多にない好い日和のその日――文如一家は――夫婦と小さい女の兒――と靜媛と一緒に郊外へ出て散歩した。買つて來た少しばかりの麵包と乾肉をさげてゐた。

小さい女の兒は籐の乳母車に載せて、三人が代る〴〵押した。果して長雨の晴れた初めての日曜日の郊外は殊の外雜踏した。泥の中の水は蒸し上つて苦しいほど人を蒸した。

小松園はK市郊外第一の名所であつた。半分は天然のまゝで半分は人手を借りた小さな公園、彼等が小松園に行きついた時は正午に近かつた。或る客の少ない比較的閑靜な茶店を撰んで、三人は一緒に店の中の椅子に腰掛けてゐたが、息苦しくて口がきかれない。一番しつかりしてゐた劉おくさんは、一寸休むとすぐに立上つて茶を飲み、茶をのむとすぐに子供を抱へて茶店を出た。公園の中にある珍しい動物を見るために。

その時原狀に恢復した文如は夫人の出てゆくのを見て、自ら急須を取つて靜媛に茶をついでやつた。

「どうしたのだらう。具合が好くない。お茶でも飮まふよ」

文如は椅子のへりに枕してゐる靜媛を見て言つた。靜媛は只頭を動かした。

「お前は身體が惡いのだらう。頭も腕も汗だらけになつてゐるよ」

わたしの胸は…………ひどく騷いでゐます…………」靜媛は頭をふつて苦しさうに息をついた。

「どうしたの。醫者を喚ばふか」文如はあわてゝきいた。

「大丈夫ですよ。今少しよくなつたのよ。此處へ來たときには目がくらんで、何もかも見えませんでした。もう大分なほりました。たゞ汗がとまらないの。けふはいつそ蒸し熱いわね」

「うむ時候が好くない。春の天氣はどうしても秋のやうなわけにはゆかない。お前の身體はだいたいよくないのに、二

七

米屋の縁談は靜媛の積極的反對と文如の消極的反對でついに打消された。幾日か過ぎて、靜媛は母親の同意を得て、文如の家に引移つて來た。

はじめ文如の家に移つて來たとき、彼女は來なければ好かつたと悔んだ。晩飯をすますと文如夫婦は子供を連れて彼女の部屋の中へ――――文如は二階に彼女の部屋をあてがつて吳れた――――來て、いろ〳〵話をした。生れて二歲になつたばかりの文如の女の兒はじつと靜媛を見詰めてゐた。靜媛はいくども手を拍つて子供を抱かうとした。子供はその都度母親の蔭に隱れた。

「もう夜が更けてゐるのよ。寢ませう」奥さんは小さな女の兒を抱へて先きへゆき、文如はそのあとへ跟いて下へおりた。靜媛は一人二階に坐つてゐると、宛ら氷のあなぐらに入れられたやうだ。

春は深し、幾日か曇りつづけた天氣に靜媛は窓口に立つて、黑い空の下に一つの市街の建物が薄暗く畫かれてゐるのを彼女は只望み見た。遠い遠い一列の電柱の上にいくつかの星あかりの外には彼女の眼の前の世界は眞黑だ。この暗い空の景色は彼女の胸の中に少からぬ哀愁を增した。知らず覺えず灑がるゝ幾滴の淚。

いつも晩飯のあとで八時から十時までは文如と靜媛の共同研究の時間であつた。彼等が此時間に研究する場所はとりもなほさず二階の書齋だ。靜媛の仕事は圖面を取るのと速記であるが、彼女はそのきめた仕事をする多くの時間がない。晝間圖面の下拵へをして置くのだが、彼女はいつも外出してゐた。晩は速記の時間だけれど彼等はたいてい無駄話をして仕舞ふ。文如と靜媛は近頃互に均しく愧かしいやうな氣がしてどちらも甚だ元氣がない。

或日天氣のいい日曜日——この半月以來滅多にない好い日和のその日——文如一家は——夫婦と小さい女の兒——と靜媛と一緒に郊外へ出て散歩した。買つて來た少しばかりの麵包と乾肉をさげてゐた。

小さい女の兒は藤の乳母車に載せて、三人が代る〲押した。果して長雨の晴れた初めての日曜日の郊外は殊の外雜踏した。泥の中の水は蒸し上つて夥しいほど人を蒸した。

小松園はK市郊外第一の名所であつた。半分は天然のまゝで半分は人手を借りた小さな公園、彼等が小松園に行きついた時は正午に近かつた。或る客の少ない比較的閑靜な茶店を撰んで、三人は一緒に店の中の椅子に腰掛けてゐたが、息苦しくて口がきかれない。一番しつかりしてゐた劉おくさんは、一寸休むとすぐに立上つて茶を飲み、茶をのむとすぐに子供を抱へて茶店を出た。公園の中にある珍しい動物を見るために。

その時原狀に恢復した文如は夫人の出てゆくのを見て、自ら急須を取つて靜媛に茶をついでやつた。

「どうしたのだらう。具合が好くない。お茶でも飲まふよ」

文如は椅子のへりに枕してゐる靜媛を見て言つた。靜媛は只頭を動かした。

「お前は身體が惡いのだらう。頭も腕も汗だらけになつてゐるよ」

わたしの胸は…………ひどく騷いでゐます…………」靜媛は頭をぶつて苦しさうに息をついた。

「どうしたの。醫者を喚ばふか」文如はあわてゝきいた。

「大丈夫ですよ。今少しよくなつたのよ。此處へ來たときには目がくらんで、何もかも見えませんでした。もう大分なほりました。たゞ汗がとまらないの。けふはいつそ蒸し熱いわね」

「うむ時候が好くない。春の天氣はどうしても秋のやうなわけにはゆかない。お前の身體はだいたいよくないのに、二

時間も歩かせられたから堪らない。こゝに仁丹がある。のまないか」

「仁丹？」彼女は一寸身を起して文如を眺めたが、すぐにうつむいて仕舞つた。

「仁丹はいやよ」靜媛は椅子のへりに伏してしばらく頭を上げない。文如は彼女が泣いてゐるように思はれてならなかつた。

靜媛は結局小松園のそばの或る一軒の旅館の中に病み伏した。文如は初じめ自働車で彼女を送りかへさうとしたが、醫者は少しも早く靜かな處で寢かせる方がいゝと言つた。

醫者は隨分せッかちな男で、二人の女醫者を喚んで來た。それは甚だ都合の惡い部分があつて、彼自身では診察することが出來ないと言つた。

自働車が來たけれど文如は醫者に附いて旅館に行つて靜媛の看護をした。自働車は急に模樣變へして、彼の夫人と子供を先づ町へ送り返へした。彼が小松園のそばの旅館に馳け付けた時、靜媛の病室はもう誰れも這入ることを禁止された。彼はその中で二人の女醫者が何だか知れないが低い聲で話をしてゐるのを聽いた。

おほよそ六時頃かしらんと思はれる頃、さつと小雨が降つて來た。雨が歇むと一人、四十餘りの白服の女醫者が出て來た。この女醫者は文如を見るや否や顏の表面に輕蔑の色を浮べた。

「病人のからだはどんな具合です」文如は甚だ恐縮して前へ近寄つてきいた。彼女は口を歪めて一言もいはないで廊下を眞直ぐに過去つた。彼女は多分急いで主任醫に報告するのだらう。文如は教會經營の病院の中の人は、たいていこんな傲慢であるのを思つて、彼女のあとに跟いて旅館の表の間に來た。

この老ゐたる女醫者——年頃は多分四十餘りの老處女の報告に據ると、靜媛の身體は姙娠三ケ月になつてゐて

半時間前に流產した。

文如は初めてわかつた。あの女醫者が彼に對して示した侮蔑の顏色のわけを。彼等——彼等ばかりでなく文如夫人までも——文如を或る嫌疑犯と見做した。

「醫者は彼に孕娠三ケ月だと說いた。けれど彼女は家へ來てから未だ一ケ月にもならない」文如のこの辯解は只夫人の前だけに効力を發生することが出來る。社會一般は矢張り靜媛は文如に蹂躙されたものと見做す。

靜媛流產後の病弱の身體が恢復しないうちに、文如は女子師範の教職を解かれた。それは彼の生徒等は皆、彼は女性を蹂躙したから先生の資格が無いと言つたからである。

八

今度の事件で文如は社會上彼の地位を失つた。けれど彼は少しも氣に留めなかつた。彼の夫人は、靜媛を家に連れて來たのが惡いと怨んだ。

「おれはまさに受くべき罪がある。耶蘇がそう言つてゐる。女を見て不純の心を起した時には、もはや罪を犯してゐるのだ。おれは全く罪がないとは言へない。おれは一方には人のために罪を贖ふ羊になつてゐる。けれど一方には十字架を負ふだけの自分の報ゐを負はなければならない」

この事件のために彼は陳夫人とも絶交して仕舞つた。それからずつと夏までも靜媛と顏を合せなかつた。けれど彼は是非とも一度逢ひたいと思つた。

陰曆六月の初めに彼は一封の手紙を受取つた。此手紙は靜媛が此の方のT海岸から寄越したものである。彼は全く意

意外に喜んだ。

「文如先生……

本統に先生にはお氣の毒です。わたしは人のために罪を負ふ羊となつてゐましたが、まさか先生がわたしのために罪を贖ふ羊とならうとは。本統に先生にお氣の毒です！

先生が私に對する恩惠、同情、眷愛、わたしは決して一生忘れません。いつも先生がわたしを愛してくださる苦心を思ひ及ぶと、わたしは涙が止め度なく流れ出ます。

先生がわたしを愛するので、少からぬ苦悶と少からぬ煩惱がありました。

わたしの淪落は頑固の母親がおもなる原因をなしたと言つていいけれど、自分の無定見と虚榮も亦みづから害ふ一因をなしてゐたのです！　自ら害ふだけならいいが、それがために先生までも傷けたかと思ふと、實に心苦しくて堪りません。先生、わたしは今貴方に自白しませう。わたしはしんじつ先生を愛してゐたのです…先生はわたしの最初の戀人です！　、、、、、、、、、、、、、先生を戀人にしていいといふことが出來ないと思つてゐました。その實これは全くの偏見で、此偏見が結局わたしに災ひして又先生にも累を及ぼしたのです！　わたしの自然の戀愛は、、、、、、、、、、、、人工的改削をされ得べきものではない…　年齢の相違が何でせうか？　妻のある夫も亦絶對に處女の愛を受け得る權力がないといふわけがありません！

おくさんおやこの將來を思つたのも、わたしが先生に對する戀愛の進行をさまたげる一原因でした。今考へて見ると自分は本統に及びもつかない馬鹿でした！　名義に支配された戀愛は純正の戀愛ではない。生活の保障から發生した戀愛も純正の戀愛ではない。純正の戀愛は盲目的です。まつすぐに進行して彼の一切の障礙を顧みない。

わたしの彼に對する戀愛は名義に支配されてゐたのです。つまり足を削つて履に嵌めるような一般社會の心理に適合するような戀愛を求めてゐたのです。おくさんが先生に對する愛は、生活の保障を以て條件とする戀愛です。只わたし、、、、、、、、、、、、、、、、、、、わたしはこれを知つてゐながら敢て進まふともしなかつた、何たる卑怯なことでせうよ！

わたしは今、過去の一切を先生に發表しませう。わたしは先生のために苦悶してゐたのは、ちツとやそつとの間ではありません。實を言へばわたしは奥さんに對して前から嫉妬を抱いてゐたのです。彼女がわたしの深愛なる先生を獨占してゐる嫉妬。わたしは奥さんに對して復讐を想ひつきました。少くも先生のような完美の配偶者を求めて奥さんと對抗してみたいと想つたので、すぐに彼の奴隷になつて仕舞ひました。

彼と識合ひなつて半年以來、精神も肉體も二つながらみな彼に蹂躪され盡しました。彼の肉的虐待を受けた上に金錢の供給をしなければならないので、先生と母と雙方から哄し取つた金を、皆彼につぎ込んで浪費させました。あとになつて結局彼のためにたゞならぬ身體になりました。

ほんに恨しかつたのは小松園にゆく二日前の事です——土曜日の午後——わたしは彼の下宿に行つたとき、石登雲が彼のふところに坐つてゐるのを見出しました！わたしのその時の驚と失望は想像するに難くはありません。わたしは其時すぐに引返へしてそれから二度とゆきません。多分彼もその時わたしを見たでせう。だが今になつても一通の懺悔書を寄越しません！御覽なさい。彼はそんな風のサタンです！

石登雲は資本家の娘で、彼は彼女と結婚したそうです！

先生、わたしの心は破れて仕舞つて不完全なものになりました。わたしの身體は靈魂の無い殘骸です。病弱のこのさ

意外に喜んだ。

「文如先生……

本統に先生にはお氣の毒です。わたしは人のために罪を負ふ羊となつてゐましたが、まさか先生がわたしのために罪を贖ふ羊とならうとは。本統に先生にお氣の毒です！

先生が私に對する恩惠、同情、眷愛、わたしは決して一生忘れません。いつも先生がわたしを愛してくださる苦心を思ひ及ぶと、わたしは涙が止め度なく流れ出ます。

先生がわたしを愛するので、少からぬ苦悶と少からぬ煩惱がありました。

わたしの淪落は頑固の母親がおもなる原因をなしたと言つていいけれど、自分の無定見と虛榮も亦みづから害ふ一因をなしてゐたのです！　自ら害ふだけならいいが、それがために先生までも傷けたかと思ふと、實に心苦しくて堪りません。先生、わたしは今貴方に自白しませう。わたしはしんじつ先生を愛してゐたのです…先生はわたしの最初の戀人です！　、、、、、、、、、、、、、、先生を戀人にしていいといふことが出來ないと思つてゐました。その實これは全くの偏見で、此偏見が結局わたしに災ひして又先生にも累を及ぼしたのです！　わたしの自然の戀愛は、、、、、、、、、、、人工的改削をされ得べきものではない…　年齢の相違が何でせうか？　妻のある夫も亦絕對に處女の愛を受け得る權力がないといふわけがありません！

おくさんおやこの將來を思つたのも、わたしが先生に對する戀愛の進行をさまたげる一原因でした。今考へて見ると自分は本統に及びもつかない馬鹿でした！　名義に支配された戀愛は純正の戀愛ではない。生活の保障から發生した戀愛も純正の戀愛ではない。純正の戀愛は盲目的です。まつすぐに進行して彼の一切の障礙を顧みない。

わたしの彼に對する戀愛は名義に支配されてゐたのです。つまり足を削つて履に嵌めるような一般社會の心理に適合するような戀愛を求めてゐたのです。おくさんが先生に對する愛は、生活の保障を以て條件とする戀愛です。只わたし、、、、、、、、、、、、、、、、わたしはこれを知つてゐながら敢て進まふともしなかつた、何たる卑怯なことでせうよ！

わたしは今、過去の一切を先生に發表しませう。わたしは先生のために苦悶してゐたのは、ちッとやそつとの間ではありません。實を言へばわたしは奥さんに對して前から嫉妬を抱いてゐたのです。彼女がわたしの深愛なる先生を獨占してゐる嫉妬。わたしは奥さんに對して復讎を想ひつきました。少くも先生のような完美の配偶者を求めて奥さんと對抗してみたいと想つたので、すぐに彼の奴隷になつて仕舞ひました。

彼と識合ひなつて半年以來、精神も肉體も二つながらみな彼に蹂躙され盡しました。彼の肉的虐待を受けた上に金錢の供給をしなければならないので、先生と母と雙方から哄し取つた金を、皆彼につぎ込んで浪費させました。あとになつて結局彼のためにたゞならぬ身體になりました。

ほんに恨しかつたのは小松園にゆく二日前の事です——土曜日の午後——わたしは彼の下宿に行つたとき、石登雲が彼のふところに坐つてゐるのを見出しました！わたしのその時の驚と失望は想像するに難くはありません。わたしは其時すぐに引返へしてそれから二度とゆきません。多分彼もその時わたしを見たでせう。だが今になつても一通の懺悔書を寄越しません！御覽なさい。彼はそんな風のサタンです！

石登雲は資本家の娘で、彼は彼女と結婚したそうです！

先生。わたしの心は破れて仕舞つて不完全なものになりました。わたしの身體は靈魂の無い殘骸です。病弱のこのさ

まは決して先生の想像され得べきものではありません。醫者は暑中の間は此T海濱で靜養せよといひました。その當わたしの此病氣は決して恢復の見込みがありません。醫者の話はわたしを慰めるお世辭に過ぎないのでせうよ。ぜひどうぞ、死ぬ前に我が深愛なる先生を一目見ることが出來れば………」

文如は此手紙を受取つた晩、すぐにK省北行きの汽車に乘つて北上した。T海濱はK省北部の相當に賑やかな都市だ。二日目の午後六時になつてT停車場に着いた二等客車の箱から數多の客が吐き出された。文如もその中にまじつてゐた。

客車を下りたばかりの時に、一人の斷髮の年若い女が微笑を含んでプラットホームに立ち、彼を迎へた。彼は汽車の途中で向ふへゆきつかぬ前に、彼女は死んでゐるだらうと大に心配したが、いま彼は彼女を見て驚き喜んだ。

彼等二人は一緒に停車場を出た。停車場前で自働車をよんで同乘して彼女の旅館へ向つた。自働車は曲りくねつた狹い山路を走つた。

「旅館はこれからどの位あるの」

「十二三里でせうね」

二人の自働者の中に並び座してゐると、あたりはだん〳〵暗くなつて來た。彼女の指先きは無意識に彼の手にふれた。

「先生………」靜媛はほほゑんで頭をさげた。

「ゑ！」

「先生………」靜媛は低い聲でもう一度言つた。幸にあたりは眞暗になつてゐた。でなければ彼は彼女の嬌羞な眞赤になつてゐたのを見たかもしれない。

「なんだえ」文如はすぐにききかえした。

「言つて仕舞つたあとであなたが承知しないといけない…………………本統に羞かしい！」彼女は笑ひ出した。

「なんだえ、早く言つておしまひな」彼も亦笑つた。

「あの人達はわたしに騙されたのですよ」彼女は笑ひ聲で話した。

「そうだ。お前はわたしをだましたのだよ」

「いゝえあなたのことではないの。宿屋の人達を」

「あの人達をどんな風にだましたの」

「わたしは一人で此海岸に來てゐるが本統にいやだわ。あの人達はわたしを女と見て、一人で此處にゐるのを見て、町むらの人は殘らず驚いて、一寸外へ出ても一人一人目をみはつて見るのよ。わたしは羞かしくつて堪りやしない。あとであの人達にわたしは病氣保養に來て ゐるのだから、一二三日經つと内の旦那が見舞ひに來ると言つてやりました。先生、宿屋についたらもう先生と言ひませんよ。いいでせう」

「…………」文如は只しつかりと彼女の手を握つた。

二すじの白い光りは車前を照し、車の速度は一層早くなつた。

「おれの半年のあいだ擔つてゐた罪は、無駄骨ではなく相當の値打ちがあつた。」文如はほつと一息ついた。

「あなたは前と同じように奥さんを愛してやつて下さい。われ〳〵にはわれ〳〵の樂土があります」

自動車は急にとまつた。彼女は急に彼のふところから立上つた。一つの高大な西洋館が彼等の面前に立つて彼等を歡迎した。

（をわり）

まは決して先生の想像され得べきものではありません。醫者は暑中の間は此T海濱で靜養せよといひました。その實わたしの此病氣は決して恢復の見込みがありません。醫者の話はわたしを慰めるお世辭に過ぎないのでせうよ。ぜひどうぞ、死ぬ前に我が深愛なる先生を一目見ることが出來れば………」

文如は此手紙を受取つた晩、すぐにK省北行きの汽車に乘つて北上した。T海軍はK省北部の相當に賑やかな都市だ。二日目の午後六時になつてT停車場に着いた二等客車の箱から數多の客が吐き出された。文如もその中にまじつてゐた。

客車を下りたばかりの時に、一人の斷髮の年若い女が微笑を含んでプラットホームに立ち、彼を迎へた。彼は汽車の途中で向ふへゆきつかぬ前に、彼女は死んでゐるだらうと大に心配したが、いま彼は彼女を見て驚き喜んだ。

彼等二人は一緒に停車場を出た。停車場前で自働車をよんで同乘して彼女の旅館へ向つた。自働車は曲りくねつた狹い山路を走つた。

「旅館はこれからどの位あるの」

「十二三里でせうね」

二人の自働者の中に並び座してゐると、あたりはだん〴〵暗くなつて來た。彼女の指先きは無意識に彼の手にふれた。

「先生………」靜媛はほほゑんで頭をさげた。

「ゑ！」

「先生………」靜媛は低い聲でもう一度言つた。幸にあたりは眞暗になつてゐた。でなければ彼は彼女の雙頰が眞赤になつてゐたのを見たかもしれない。

「なんだえ」文如はすぐにききかえした。

「言つて仕舞つたあとであなたが承知しないといけない……………本統に羞かしい！」彼女は笑ひ出した。

「なんだえ、早く言つておしまひな」彼も亦笑つた。

「あの人達はわたしに騙されたのですよ」彼女は笑ひ聲で話した。

「そうだ。お前はわたしをだましたのだよ」

「いゝえあなたのことではないの。宿屋の人達を」

「あの人達をどんな風にだましたの」

「わたしは一人で此海岸に來てゐるが本統にいやだわ。あの人達はわたしを女と見て、一人で此處にゐるのを見て、町ぢうの人は殘らず驚いて、一寸外へ出ても一人一人目をみはつて見るのよ。わたしは羞かしくつて堪りやしない。あとであの人達にわたしは病氣保養に來てゐるのだから、二三日經つと內の旦那が見舞ひに來ると言つてやりました。先生、宿屋についたらもう先生と言ひませんよ。いいでせう」

「…………」文如は只しつかりと彼女の手を握つた。

二すじの白い光りは車前を照し、車の速度は一層早くなつた。

「おれの半年のあいだ擔つてゐた罪は、無駄骨ではなく相當の値打ちがあつた。」文如はほつと一息ついだ。

「あなたは前と同じように奥さんを愛してやつて下さい。われ〱にはわれ〱の樂土があります」

自動車は急にとまつた。彼女は急に彼のふところから立上つた。一つの高大な西洋館が彼等の面前に立つて彼等を歡迎した。

（をわり）



酒後

閨秀　凌叔華

客を送つて仕舞つて客間に歸つて來た若夫婦はフアイヤ・プレースの前に腰をおろし、醉に顏を染めて、思ひ出される此宵の歡びを睦まじく呼き合ひ續けた。ソフアに殘つた一人の三十あまりの男が醉ひ倒れて、ぐつすり睡込んでゐた。部屋の中はしつとりと甘美な空氣が滿ちて、夜は更けてゐた。

突然女は立ち上がつた。

『あら、うつかりして居たわ。子儀さん、そこにやすんでゐらしやるのね！まあ、なんにも掛けないで。あなた、今、毛布を持つて來ますから、掛けて上げてください。そちらの電燈も消してね――睡心地がお惡いでせうから』

『僕が取つて來よう』男も早速立ち上がつた。女はしかし、それに返事もせず、すつと身を廻して、他の部屋から、毛布を抱へて來た。

『そうつと、あの人のお靴を脫がせて、これをお掛けしませう』

男は彼女の云ふ通りにした。

『私達は、矢張り、こゝで話してゐませうよ。今にあの方が、お目醒めになると、きつとお茶か水でも欲しいとおつしやるでせうから。……先つき、あの方、今夜歸宅らないと云つてゐらしたのよ。こゝのソファの方がご自分の家のベツドより、ずつと氣樂なんですつて。』側で夫の樣子を見てゐた彼女は元の椅子に戻つた。

『可哀相に！　あの方の家庭はほんとに詰らなさうだわ』彼女は獨語を呟いた。

男は、相變らず妻の傍に坐つて居た。部屋の中には只つた一つ、カヷアーを掛けた電燈があるばかりでほの暗く、赤々と燃え盛つてゐるフアイヤ・プレースの火がほゝゑむ二人の顏を明るく照らし出して居た。植木鉢の蔭に、梅は室内の温かさで、甘い醉ひ心地する匂を吐息してゐた。

『朵君、僕も醉つちやつたよ。』

醉眼を細くして男は妻に笑を見せた。

『あなた、あまり、お飮みにならなかつたと仰しやつてらしたぢやないの？』

女は微笑んだ。

『僕は酒で醉つたのぢやないのだ。僕はこんな魅惑的な環境に醉はされたのさ。……僕の眼、僕の鼻、耳、口――靈魂までも醉はされてしまつた。……僕の心はもつと、もつと醉つてゐる――抑えてごらん、ずゐぶん動悸が速いだらう？』

彼は朵君に身を近づけた。

朵君は笑をつくりながら、男をちらと眺めた。

『それでもまだ、あなたはお酒で醉つたとおつしやらないの？　隨分ね！　御自分に聽いて御覧なさいな。耳だの、鼻だの、靈魂だの、心だのつて、また始まつたぢやないの！　だけどあなたの顏は子供さんの樣に赤くはないことよ。



酒後

閨秀　凌叔華

客を送つて仕舞つて客間に歸つて來た若夫婦はファイヤ・プレースの前に腰をおろし、醉に顔を染めて、思ひ出される此宵の歡びを睦まじく囁き合ひ續けた。ソファに殘つた一人の三十あまりの男が醉ひ倒れて、ぐつすり睡込んでゐた。部屋の中はしつとりと甘美な空氣が漲ちて、夜は更けてゐた。

突然女は立ち上がつた。

『あら、うつかりして居たわ。子儀さん、そこにやすんでゐらしやるのね！まあ、なんにも掛けないで。あなた、今、毛布を持つて來ますから、掛けて上げてください。そちらの電燈も消してね——睡心地がお惡いでせうから』

『僕が取つて來よう』男も早速立ち上がつた。女はしかし、それに返事もせず、すつと身を廻して、他の部屋から、毛布を抱へて來た。

『そうつと、あの人のお靴を脱がせて、これをお掛けしませう』

男は彼女の云ふ通りにした。

『私達は、矢張り、こゝで話してゐませうよ。今にあの方が、お目醒めになると、きつとお茶か水でも欲しいとおつしやるでせうから。……先つき、あの方、今夜歸宅らないと云つてゐらしたのよ。こゝのソファの方がご自分の家のベッドより、ずつと氣樂なんですつて。』側で夫の様子を見てゐた彼女は元の椅子に戻つた。

『可哀相に！　あの方の家庭はほんとに詰らなさうだわ』彼女は獨語を呟いた。

男は、相變らず妻の傍に坐つて居た。部屋の中には只つた一つ、カヴアーを掛けた電燈があるばかりでほの暗く、赤々と燃え盛つてゐるファイヤ・プレースの火がほゝゑむ二人の顏を明るく照らし出して居た。植木鉢の蔭に、梅は室内の溫かさで、甘い醉ひ心地する匂を吐息してゐた。

『朵君、僕も醉つちやつたよ。』

醉眼を細くして男は妻に笑を見せた。

『あなた、あまり、お飮みにならなかつたと仰しやつてらしたぢやないの？』

女は微笑んだ。

『僕は酒で醉つたのぢやないのだ。僕はこんな蠱惑的な環境に醉はされたのさ。……僕の眼、僕の鼻、耳、口――靈魂までも醉はされてしまつた。……僕の心はもつと、もつと醉つてゐる――抑えてごらん、ずゐぶん動悸が速いだらう？』

彼は朵君に身を近づけた。

朵君は笑をつくりながら、男をちらと眺めた。

『それでもまだ、あなたはお酒で醉つたとおつしやらないの？　隨分ね！　御自分に聽いて御覽なさいな。耳だの、鼻だの、靈魂だの、心だのつて、また始まつたぢやないの！　だけどあなたの顏は子供さんの様に赤くはないことよ。

あの方は今晩ほんとにお醉ひになつたわ』

彼女の眼差は睡つてゐる男の上に落ちた。

男は妻が何を云つたか聽かなかつたやうに相變らず、眼を細くして、彼女の手を取つた。

『……どうして僕は全身醉つて仕舞はないでゐられよう。この佳人、この良夜、この幽美な客堂、すべて享樂が出來るのだ。身は美の宮殿に、眼前には天女が微笑み、耳には霊界の樂音、鼻には魂もとけそうな匂ひ、そして口には、今しがた、お前が僕に味はせた、あの甘美な味……おいも一度、あの花の様な蜜の様な、甘い酒の様な……』彼は妻の手を引緊めた。

『もういゝことよ、あなた、ほんとに、お醉になつたのね。また、そんな小説的なことをおしやつて私を揶揄はうとなさるのね――……だけどもつと低い聲でお話しなさらないこと? 子供さん、お目さめなすつてよ。』

男は女の言葉が解らなかつた様に、彼女の手を烈しく嗅ぎ入つた。そして頭を擡げて彼女の顏を覗きこんだ。

『君も少しは醉つた様だ。此の美しい頬のほんのりとした紅味は何の花に譬へられやう――桃は俗過ぎる、牡丹は餘りに艶ぽい、菊は冷たすぎ、梅は寂し過ぎる……どんな花もこの生命みなぎる紅味に比べられない』

彼はもつと女にひしよつた。

『そうだ他のことはさておき、此の二本の眉だけでも譬へるものがなさゝうだ。遠山? それぢや淡過ぎる。蛾眉ぢや曲がり過ぎる。駄目だどれだつて比べられない。眉の美しさは決して眼の美しさに劣るものぢやない、それに何うして人は眉のことを云はないのだ』

尖君はいつもなら夫、永璋の話を一字づゝ心の底まで飲み込むのだが今夜はいつもと違つて、時々視線をソファに睡

むつてゐる人に注ぐばかりで、寧ろ彼の話をうるさく思つたがとうとう此の時になつて彼の話を止めさせやうとした。
『私、今夜、何んだか頭が重くて——私お酒を飲むと話が厭になるのにあなたは却つておしやべりになるのね！　ちつとも喉がお乾きにならないか知ら？』
永璋の好い氣持はそんなことではやまない、頭を振り振り續けてゐた。
『ほんとの話だよ、采茗！　眉の美しさも非常に重要なんだよ。然し普通のファースト・イムプレッシオンでは眉の美醜なんかは見屆けられないものだ、靜か夜に二人で相向ふと、初めて眉の美しさが解るよ。ほんとに君の眉は不思議に美しいな』
『あなた！　私もう聽かなくてよ。あなたは私をおもちやにしてゐらしやるのですもの』
彼女は少し眉を顰めさせて、永璋に背を向けた。
『どうして、どうして、そんなことがあるものか。』
忙いで辯解しながら、輕く采茗を自分の方に向けさせた。
『僕は大自然がこんな美しい天女を下界に下して、僕にお附け下さつたことを讃美する。僕は神に感謝する。實際僕は君の外面の美しさばかりを崇拜してゐるのではない。君の心臓だつて、僕に愉悅と讃美を與へない時はないのだ。此部屋の配置にしても一緒、一物だつて君の手によつて動されて始めて人の讃美を買ひ得るのだ。だから何人か一國の王位を以つて來ても君の美しさとは勿論、此の家のもの一品だつて換へられないのだ』
采茗は此の時、聽くでもなく聽かぬでもない風で、少し醉ひ氣味の頭を永璋の肩に凭たせながらぢいつと睡むつてゐる人を眺めていた。永璋はまだ續けてゐる。

『そうだ。再明後日は新年だ。何を君にプレゼントしたらいゝかな。君が僕に與へて呉れた多くの光榮と幸福は今夜一晩話したつて話し切れやしないだらう。ね、云つて御覧、君は何が欲しい？ 遠慮は要らないのだよ』

釆若はそれを聽きながらぢつと考へ、睡つてゐる人の顔を眺めてゐた。子儀はもう深い熟睡に陥込んで居た。兩頰は胭脂で染めた様に眞紅になつてその神秘に滿ちた様な眼も安かに閉ぢて居た。眞つ黑な二筋の眉は眞一文字に並び、平生諧謔と議論に滿ちた彼の口は今、弓形に輕く結んで腮のところには微笑さへ漂つてゐるやうに見えた。平常に優雅な彼の顔が醉つた時に持つこんなに艶やかな蠱惑的な容貌を彼女は未だ見たことがなかつた。その容貌を暫らく眺めると、釆若は不思議に心が落着かなくなり、顔がほてつて來るのを感じた。

突然、彼女は夫に向き直つた。

『私、何も要らないのですけど、只つた一つ……ー…只つた一秒時間が欲しいの』

『何んだろ！、はやく云つてごらん』永琮は喜んだ。『僕のものは皆んな君のものだ。一秒なんて千萬年だつていゝよ。』

『私、そうね、一寸云ひ難いわ』

『構はないさ』

『あの方……』

『あの男？ なに、眼など醒ますものか。安心してお云ひよ』

『ぢや云ふことよ。私……たつた、一度でいいからあの方にキツスし度いんです！ いゝ？』

『本氣かい、釆若？』

『え、本氣よ、全く本氣なのよ』

『本氣だつて？　そんなこと出來ると思ふか？　君醉つたんだね！』
『いゝえ、私、醉つてなんかゐなくてよ！　一寸も醉つてやしないわ。——私、譯があるの。聽いて下さる？　そしたらあなたきつと許して下さるわ。——私、子供さんと初めて交際した時からもう彼の方の態度を尊敬してゐたの。ほんとにあの方の擧動と云ひ、語し振りと云ひ、文章と云ひ、人に接する親切な態度と云ひ、私すつかり感心してしまつたの。只だあの方にはもう奧さんも、御子さんもあるのです。ですから、別に深い話なんなかしたことはありませんけれど、あのやうな方が面白くない家庭に生活して居らつしやるのを思ふと私、全くお可哀相になつてしまふの』
『そう云へばあの男もよく僕の前で君を讃めたり僕を羨やんだするんだがね。あまり、僕を羨む奴が多いもんだから僕は別に氣に懸けてもゐなかつた。また君が彼の男を尊敬してゐることも知つてゐるけれど、まさか、こんなに愛してゐやうとはね。一寸思はなかつたなあ』
『まあ、そんなに大きな聲などしないで、私の云ふことをすつかり聽いて下さい。私が生れ付き文學や藝術が好きなのはあなただつて御存じの筈です。私ほんとに、好い文章を見るとつい作者の風采を想像して見るのです。けど文章の美しい人だつて必ずしも、言葉や風采までも美しいとは限らないものね。だけど、あの方だけは敬服させるわ。なんでも皆な揃つてゐらつしやるのですもの。私、今迄、誤解されるのが厭やで、こんなことを誰にも話さなかつたのですけど、今日、醉つた後のあの方の言葉や樣子には、ほんとに醉はされてしまつたんです。それにね、あの方の家庭の雰圍を想像すると、私、可哀相でならなくてよ。あんな情愛のない奧さんに、お金ばかり欲しがる叔父さんや叔母さんが側に居るのでせう……ほんとにお可哀相だわ。ね、あなた、あの方の樣な崇高な人を愛したり、同情してあげる人、一人もないのよ！　ほんとに、お氣の毒ぢやないの。』

『うん！　それで君がキツスしてやり度と云ふんだね、采若？』男はぎこちなく笑つた。

『えゝ、さうよ！　今の今まであの方の顔を見て居ると見て居るほど、私、お可哀相で、たまらなくなつたんです、そして何とかして上げなくては濟まなくなつたんです……ねえ、あなた、きつと聽いて下さるでせう、──聽いてね！』

彼女は烈しく男の手を引寄せた。男は顏に困つた樣子をつくろつて笑を見せた。

『采若、もつと、他の要求を一つ考へたらどうだ？　これだけは一寸……』

采若はすぐ彼の言葉を奪つた

『私はあなたが一番、私を愛して下さるのを信じてゐるのに、なぜ、あなたは私の要求を聽いて下さらないの？　あなただつて子儀さんを愛してゐらしやるのでせう？……』

『采若、君はほんとに醉つたんだね。夫婦の愛と友人の愛とは全く違ふものなんだよ。だが僕は何うして僕が愛して居ると同じ樣に君が此友人を愛してくれるのを喜んで居ながらこの男との接吻を許せないのか自分も解らないが…』

男は辯解した。

『私、少しも醉つてゐないのよ。ほんとに醉つてゐないの』采若は忙しく云つた。『聽いて下さらなくて？　たつた一秒間のキツスなんです。それで、すつかり滿足してしまふんですから。ねえ！　…それともあなたは私を信じ切れないんですの？』

彼女は夫の顏を見つめた。永璋は彼女の決心を見て取つたがそれでも承諾する勇氣はなかつた。

『信じ切れないのではない。然し僕としては君の此要求を承諾する譯に行かないやうだ』

『信じ切れないのでなければ、なぜ承諾して下さらないの？』彼女は立上がつた。

永璋には彼女の決心を動かす方法がなかつた。

『ほんとに、彼の男にキツスしなければならないのか?』

『えゝ！ 一度して上げないと私どうしても氣が濟まないのです』

『ぢや、いゝ！』永璋も決心して云つた。

『あなた、私について行つて下さらない?』

『此處で待つてゐるからいいぢやないか?』

『いゝえ、ついて行つて下さらなくちやいやよ』

『ついてなんぞ行けはしないよ。若し君に隨いて行つたら如何にも君を信じ切れないつてことになるんだからね、そうだらう?』

『そうね』

話を止めて、睡むつてゐる人の方へ少し歩みを運ぶと彼女は急に停まつた。

『まあ！ こんなに動悸が。恐いわ。あなた！ 他へ行かないでね！』

『うむ居るよ。此處で待つてゐるよ。』

『ぢや行くわ』

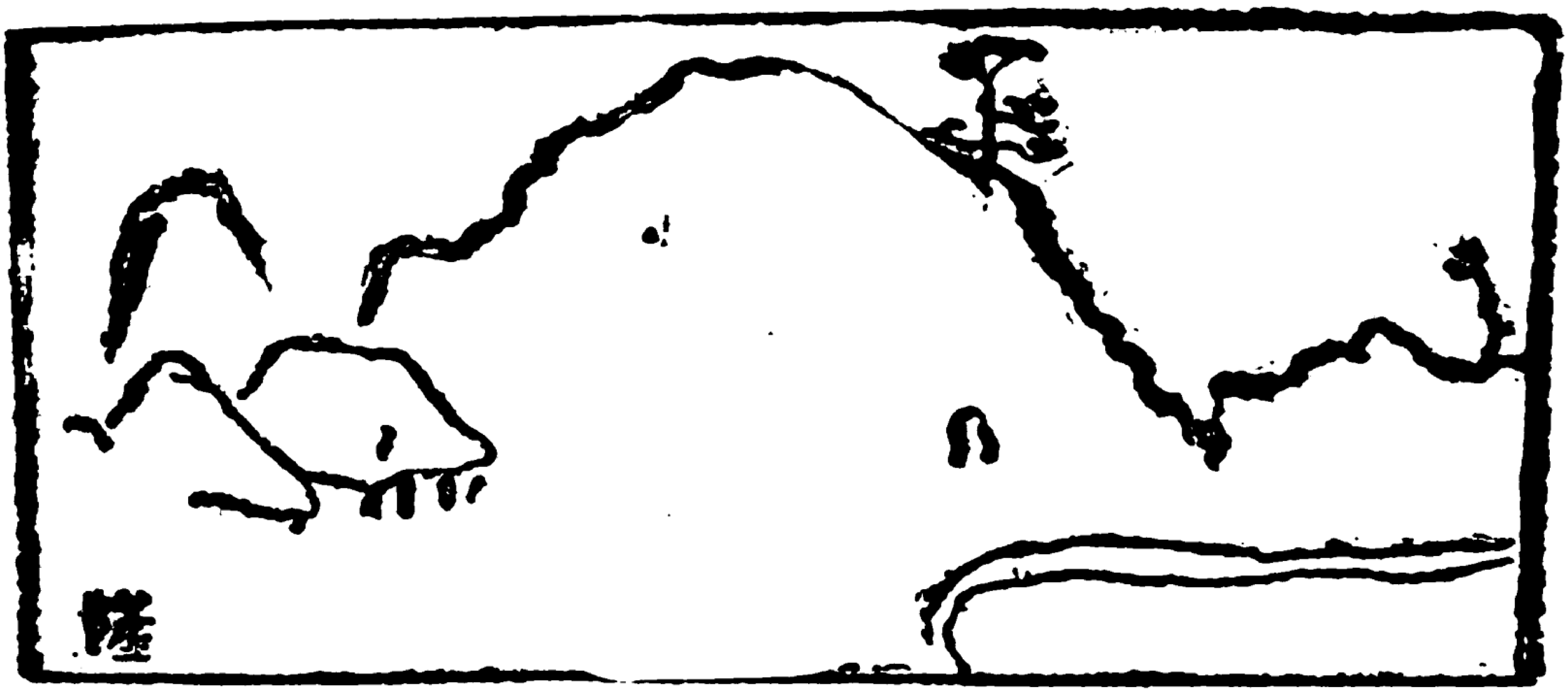
彼女は徐かに子供の睡むつてゐるソフアに向つて行つた。だん／＼ソツアに近づくに從つて子供の顏が益々はつきりとなり、それを見守る米若の動悸は速くなつた。ソフアの前に立つたとき、彼女の心臟の鼓動はますます烈しくなつて、その響さへも自分で聽きとれた。蠱惑的な子供の顏にはふだん彼女を惹つける溫雅さも保たれてゐた。彼女の顏は

熱り胸は早鐘を衝く様な激しい動悸を抑へて貪るやうに子供の顔に見入つてゐた。と、其瞬間——彼女の熱りは冷め、動悸も靜まつた。そして突然よろ〳〵と夫の傍に歸つて來て體を投げ出す様に坐つた。俯いたまま、一口も口を開かなかつた。

『どうしたんだ？　おい君？』

男は驚いて、覗き込んだ。

『いゝえ、何んでもないんです。私もうキッスなんかしたかありませんわ』



王昭君（二幕）

郭沫若

登場人物

毛延壽（畫師）
龔寛（延壽の弟子）
漢元帝
延壽の娘、淑姫
王昭君
王昭君の母
其他侍衛、侍醫等數人

第一幕　毛延壽の畫室

後景は一帶の油碧と紗の窓、窓外ほのかに園景見ゆ　窓下に長卓横に置かれ、卓上に文房具數多置かる。兩端には畫軸堆集す左隅に戸ありて後園に通じ、閉ざされてある。

左右の壁は中央に戸口ありて互に相對す。左壁に沿ふては書櫥置かれ右壁には書畫數幅掛かる。前端壁に倚りて竹榻あり。中央には炉火一缸、炭火盛んに燃ゆ。爐傍に茶机、棋具、湘妃椅等置かる。

（幕開く前に女子讀書の聲聞こゆ。）

「暾は將に東方より出で、
吾が扶桑の檻を照さんとす。
余が馬を撫して何處へか馳せんとする、
夜は皎々として既に明けたり。」

（歌の聲中斷す、幕開き毛延壽の娘竹榻の上に横はりて楚辭を讀んでゐる。）

「青雲の衣、白霓の裳、
長矢は擧げて天狼を射る。
我が弓弦は引いて淪降に反し
北斗を援つて桂漿を酌まん。
我が轡を撰り駝の翔けるが如く、
冥々を杳んで東行せんとするなり。」

延壽（内より）淑姬よ、お前は又、そんな荒唐無稽な書物を讀んでゐるな。

毛女（起き上り）あらお父樣、お庭へ被入しつたと思ひましたら内にいらつしやいましたの？

延壽（戸より出で）行かなかつた、今日は皇帝陛下が俺達の家に御微行で圍棋をなさりにいらつしやるさうだから今龍寛をお迎へに遣つたのだ。もうすぐ正午だのにまだ陛下はお見えにならない。龍寛も間も無く歸るだらう。（窓邊に到

り湘妃椅に坐る）お前又そんな荒唐無稽の楚辭などを讀んでゐるな。

毛女　えゝ、楚辭ですの、私楚辭が好きですわ。お父樣がいくらお嫌いでも、私には此のうちが皆美しい繪で滿たされてゐる樣に思はれて、お父樣のお描きになる繪よりか余計に趣がある樣に見えますわ。

延壽（爐の火をかき起し）お前はどうも出鱈目を云ふね。どう見たつて、字で書いたものは字じや、どうしてそのうちに繪があると云へる……

毛女　お父樣、無いとおつしやいますの？　此の「東君」の一首でも立派な繪ですわ、此の太陽の神東君は青色の雲衣と、白色の霓裳を纏ひ、馬車の上で手に長い箭を持ち、長弓を引いて、暗黒の中に跳梁する狼犬を逐はうと……

延壽　あアいや、もう澤山ぢや、もう澤山ぢや、そんな事はお前達女子供だけが誑らかされるのぢや。何で繪ぢや、それは氣狂ぢや。

毛女　氣狂ですつて……囈言ですつて……

延壽　氣狂ぢや。屈原は氣狂ぢや。彼奴は自分が氣が狂つた上に、弟子入りした宋玉景差の如うな奴等迄も皆似而非者にしたのぢや。俺達の先代賈誼も學問し過ぎて瘋癲になつた末に泣いて泣き死んだのだ。俺は、だから秦始皇帝が書を燒いた時に、なぜこの楚辭を絶やさなかつたかと恨むのぢや。

毛女　お父樣、それは余りでございます。お父樣はどうしてさう屈原をお恨みなさいますの？

延壽　俺は彼奴が似而非を造るのが嫌いぢや、試しに聞くが、今の東君にしろぢや、世間に誰が太陽神を見た者があろ？それに青い衣と、白い袴とやら、馬車に乘るとか。又世間に誰れが天に狼のゐるのを見たか？本原(もともと)無い物事を作り出すのが夢語と云ふのぢや、似而非といふのぢや。

王女　お父様、さうお仰るものではありません。お父様は余りに眼に見えるものごとを精神より重く見ていらつしやいます。例へば私どもが穴居の時代、何もなかつた時に、利口な人が樹を伐り土石を運んで、大きい家を建てたとしましたら、私共はその人々が囈語を云つてゐるとか、似而非を作るとか、奴は狂人だとか申したでせうか。私共がまだ衣裳を着る事を知らないで獣皮樹葉を被つてゐたとき、賢い人が、棉を植えることや、養蚕や、紡織を教へ、又は布で初めて立派な衣裳を作ることを教へたとしたら、その人は狂人であるとか、囈言を云つてるとか似而非を作るとか云へませうか。

延壽　お前はそれで太陽神があると云はうとするのか？　裁縫は俺達の見える材料で、俺達の見える衣裳を作るのぢや。大工は俺達が見える材料で俺達が見える家を造るのぢや、お前は太陽神が見えるか。天狼をお前は見えるか？

王女　ではお父様の精神は見えますか。

延壽　見えない。

王女　ではそれは見えないから似而非でせうか

延壽　似而非じや。人間は唯一魂の肉ぢや。

王女　おゝ、お父様、私もう何も申上げられませんわ。

延壽　お前達子供は、お前達女は、余計なことを云はんが宜い。大人の話はお前達は耳糞掻きほじつて聴くのが當然ぢや。お前に云ふが、詩を作るにも、文學繪畫を作るにも、凡そ邪道には入つてはならぬ。屈原一派のやうな嘘八百は詩文上の邪道ぢや。幸に俺達は今此奴等とはさつぱり縁を絶つたのぢや。俺達の繪を作るには何よりも肖る事が一だ、似さへすればもう大功をも奏ふのだ。空々洞々として考へたつて駄目なのぢや、何を描いても肖る事だ、肖る

事だ。俺は二十四遍もおまへに「眥る事だ」と云ふぞ、此の外は何も彼も嘘ぢや、似而非ぢや。

毛女　おや、お父様は似而非がお嫌ひなくせに人が元々醜いのを美しく描いたり、人が美しいのを醜く描いていらつしやるではありませんか。

延壽（眼を瞋らし、拳を握り、椅子の背を打つ）何ツ、何といふ？　父の事に余計な嘴を入れるな。俺が千辛萬苦してゐるのは家名を擧げ、家を興し、業を立て、お前達に安樂させやうとする爲めぢや。俺は一管の彩筆に頼つて稼いでいる。それにお前達は樂しみ盡して、次には俺を罵倒しやうと云ふのか。

毛女（立ち立り延壽の傍に行き書物を卓中の椅子に置きて、その背を撫す）お父様、御立腹なさらないで下さい。別に罵つてゐる譯ではありません。娘に生れてどうしてお父様を罵りなど致しませう。

延壽（氣色温和になり）へん、ひとを罵りはしないと？　俺は知つとる、お前はいつもひとを罵つて置いては後で慰めるのぢやな。

毛女　お父様、本當にお父様を罵りはしません。

延壽　ヘン、俺を罵らん？　兎に角、俺の畫の美醜にお前の干渉を許さんのぢや

毛女　でもお父様………

延壽　何だ。

毛女　お父様はお父様の藝術を一番貴く見て人を欺かないやうにするのが本當だと存じます。

延壽　さうぢや、お前が云ふまでもなく、俺は俺の藝術を貴く見てゐるのぢや、俺がどうして人を欺いてゐると、云ふのぢや。

毛女　お父様、さうお仰るものではありません。お父様は余りに眼に見えるものごとを精神より重く見ていらつしやいます。例へば私どもが穴居の時代、何もなかつた時に、利口な人が樹を伐り土石を運んで、大きい家を建てたとしましたら、私共はその人々が囈語を云つてゐるとか、似而非を作るとか、奴は狂人だとか申したでせうか。私共がまだ衣裳を着る事を知らないで獸皮樹葉を被つてゐたとき、賢い人が、棉を植えることや、養蚕や、紡織を教へ、又は布で初めて立派な衣裳を作ることを教へたとしたら、その人は狂人であるとか、囈言を云つてるとか似而非を作るとか云へませうか。

延壽　お前はそれで太陽神があると云はうとするのか？　裁縫は俺達の見える材料で、俺達の見える衣裳を作るのぢや。大工は俺達が見える材料で俺達が見える家を造るのぢや、お前は太陽神が見えるか。天狼をお前は見えるか？

毛女　ではお父様の精神は見えますか。

延壽　見えない。

毛女　ではそれは見えないから似而非でせうか

延壽　似而非じや。人間は唯一魂の肉ぢや。

毛女　おゝ、お父様、私もう何も申上げられませんわ。

延壽　お前達子供は、お前達女は、余計なことを云はんが宜い。大人の話はお前達は耳糞掻きほじつて聴くのが當然ぢや。お前に云ふが、詩を作るにも、文學繪畫を作るにも、凡そ邪道には入つてはならぬ。屈原一派のやうな嘘八百は詩文上の邪道ぢや。幸に俺達は今此奴等とはさつぱり緣を絕つたのぢや。俺達の繪を作るには何よりも肖る事が一だ、似さへすればもう大功を奏ふのだ。空々洞々として考へたつて駄目なのぢや、何を描いても肖る事だ、肖る

事だ。俺は二十四遍もおまへに「附る事だ」と云ふぞ、此の外は何も彼も嘘ぢや、似而非ぢや。

毛女　おや、お父様は似而非がお嫌ひなくせに人が元々醜いのを美しく描いたり、人が美しいのを醜く描いていらつしやるではありませんか。

延壽（眼を瞋らし、拳を握り、椅子の背を打つ）何ツ、何といふ？　父の事に余計な嘴を入れるな。俺が千辛萬苦してゐるのは家名を擧げ、家を興し、業を立て、お前達に安樂させやうとする爲めぢや。俺は一管の彩筆に頼つて稼いでいる。それにお前達は樂しみ盡して、次には俺を罵倒しやうと云ふのか。

毛女（立ち立り延壽の傍に行き書物を眞中の椅子に置きて、その背を撫す）お父様、御立腹なさらないで下さい。別に罵つてゐる譯ではありません。娘に生れてどうしてお父様を罵りなど致しませう。

延壽（氣色温和になり）へん、ひとを罵りはしないと？　俺は知つとる、お前はいつもひとを罵つて置いては後で慰めるのぢやな。

毛女　お父様、本當にお父様を罵りはしません。

延壽　へン、俺を罵らん？　兎に角、俺の畫の美醜にお前の干渉を許さんのぢや

毛女　でもお父様………

延壽　何だ。

毛女　お父様はお父様の藝術を一番貴く見て人を欺かないやうにするのが本當だと存じます。

延壽　さうぢや、お前が云ふまでもなく、俺は俺の藝術を貴く見てゐるのぢや、俺がどうして人を欺いてゐると、云ふのぢや。

毛女　今上の天子樣はお父樣を兄弟のやうに思つておいでになります。又私を娘のやうにお扱ひ下さいます。私どもは陛下を欺いてはならないでせう。

延壽　勿論欺いてはならぬのだ。俺は何で陛下を欺いて居るのぢや。

毛女　何處にも愬へられないやうな可憐な人々をも、私どもは欺いてはならないでせう。

延壽　勿論欺いてはならぬのだ。俺が何時誰を欺いたことがある。

毛女　あの掖庭の待詔（註、皇の後園に宿れる新來の待命中の宮女）王昭君を、お父樣はどうして欺きなさいます？

延壽　俺が何で彼女を欺いた、彼女が俺の藝術を見下げたのだ。俺は兼ねてから宮廷で畫像を描いてゐるのだから、莫大な報酬を受けるのは當然ぢや。後宮の佳麗達は、俺の彩筆の點染を經て今上皇帝の恩寵を受けるのぢや。俺の藝術はだから貴重で人の輕視を許さぬのぢや。だのに、今度、新しく僻境貧困の鄉から來た王待詔が獨り俺を輕視する、俺が遜つて彼女に請求すれば、彼女は却つて俺を辱める、俺を卑鄙な畫匠だといふ、俺は今上陛下の尙方畫伯だのに、人が俺を卑鄙と云つて好いものか。俺は、俺の藝術を尊重するからして、彼女に潤筆の料を請求したのだ。それで俺が卑鄙だと云はれる道理は無いのだ。潤筆の料を求めたとて何も彼女に負ふ處もない、彼女の容姿に俺の彩筆の傳神を加ふれば、彼女は李夫人、鈎弋夫人に成らぬことを愁ふる必要もないのだ。ところで奴は、金を惜しんでその上惡劣な辭で俺を罵る、奴は、將來の福分を享けやうとしないのぢや。俺は、何で奴に負ふところがあるか

毛女　お父樣は、さうお仰いますが、私はあの人も可哀相だと思ひます。先月お父樣が、私を畫代の勸說に行かせたときも、あの人は琵琶を彈きながら泣いてゐました。私がは入つて行つたのを見て涙を收めました。あの人の生れつきの麗質は、ちやうど雨上りの明月のごとくです。私はあの人の前に立ちますと自分は一點に閃く星のやうにしか思は

れません。お父様、私は嘘は申しません。お父様は私をお金の話をしに行かせなさいましたが、私は何遍行つてもあの人の前ではお金といふ詞は口から出すことが出來ませんでした……

延壽　ヘン、お前は實に高潔ぢや、道理で一二ケ月も騒ぎまわつても金は影も見せぬ、お前は嘘は云はんと……ふん、お前は……

毛女　お父様、どうぞお怒りにならないで下さい。先きを聽いて下さい。

延壽　云ふなら云へ。そんなに俺の肩に觸れずに坐つて云へ。

毛女　（退いて椅子に腰を下ろす）あら、私本の上に掛けてしまひましたわ。（急ぎ立上り本を書棚に乘せる）

延壽　そんな本は尻の下に敷くのがちやうどいゝ、この次には俺はそんな下らない囈言を書いた書物はみな火にくべるぞ。

毛女　お父様どうぞ聽いてください。本のことでお怒りにならないで下さい。

延壽　へん、云へ。（茶盃を取り啜る）

毛女　お父様、一番初めに王待詔を訪ねたときから、私は大變なことを發見しました。お父様はお氣付きになりませんか。

延壽　どんな事ぢや。

毛女　王待詔の身邊にいつでも影のやうにつき添つてゐる老婢がおりますね。

延壽　どうしたと云ふ。老婢がどうしたのだ。

毛女　お父様はあの老婢を本當の侍老女とお思ひになりまして？　それは間違つて居ますよ。私が最初にあの人を訪ね

たときに、あの方は琵琶を弾いてゐましたが、私を見るとすぐ琵琶を傍へやつて、それをその老婢に壁に掛けさせましたが、その時あの方が老婢を呼ぶのに「姆媽」と呼びましたが、すぐにもう一度「王媽」と呼び直しました。そのとき、私は直ぐ變なことだと思ひまして、老婢の擧動と兩人の顏付を注意しましたが、二人がよく似てゐるのでございます。ですからどうも親子ぢやないかと思ひましたけれど、聞くのも如何かと思ひましたが、後で……

延壽　唔、後で？

毛女　後で私は機會を捉へて悠くり老婢が如何な人かを聞きました。あの人はあの人の同族の叔母だと申ます――で私は叔母樣が如何して貴女と一緒に來て居られます？」と聞きました。あの人の答は「去年の冬、私が、朝廷の詔勅を奉じ選ばれて京に上るときに家の父母が、私を獨り遠くへやるに忍びないでこの叔母を頼んでよこしました。」といふのです――で私はすぐ申ました。「でも隨分よく似ていらつしやいますことねえ、まるで親子見たいに……」そうしましたら、あの人はそれを聞いて呆然として暫くは返事も出來ませんでした。

延壽　唔、返事も出來なかつた？　で、どうした、

毛女　處があの人のお母さんが……

延壽（掌を鼓つ）はゝゝゝあ奴の母親。本當に母親か。

毛女　本當の母親なんですの、あの人のお母さんはあの人が返事が出來ないのを見ると私の前に來て跪いてしまひました。私はどうも。濟まないことに思つて、お母さんを扶け起さうとしますと、お母樣は「どうぞお孃樣、此の受難の親子をお憐れみ下さい」と云ふのです。――「まあ、小母さん、そんな事をなさつては、私は悲しくなつて了ひます。」と云つて起して上げました。

延壽　唔、唔、お前は利口ぢや、何故もつと早く俺に云はんのだ。
毛女　私は疾つくに韓寛には申しました。お父樣にも申し上げやうとは思ひましたが、又何か人困らせをなさるかと思ひまして。……あの人達は兎に角可哀相な人々で御座います。あの人達の生ひ立ちをどうぞお聞き下さい。私も始め王待詔の母親から、受難の母子だときいたときには吃驚しました。大選を受けて宮廷に入るのは兎に角、祖宗の名榮だといふことだのにと思つたのです。けれどもあの人達の來歷をきゝますとまた別に事情が……
延壽　（欠伸をする）あゝ、いゝや、韓寛はもう先刻行つたのにまだ歸らぬとはどうしたことぢや。
毛女　お父樣は、私の云ふことを聽いてはいらつしやらないのですね。
延壽　云へ、俺は聞いとる。
毛女　あの母親が云ふには、あの人達は秭歸縣の人ださうです。秭歸縣は有名な山水明媚な處で、巫山十二峯があり、長江の水は浩蕩として刻々水音を立てゝ流れてをります。で、それを聞きますと、もう私は、大好きな楚辭の中をさまよう樣な氣がしました。私の前に居る王昭君は、宋玉高唐賦から拔け出た神女かと思ひましたの、あの人達は、あんな佳い故郷から、こんな重疊した宮垣に鎖された宮殿には入つて來たのだから、さぞかし彼の人達は悲しからうと思ひました。それに思ひ掛けもないことには、あの人達は倘我慢出來ない……
延壽　（身を起す）あゝゝ我慢出來ん。暑苦しうて我慢出來ん。（中央の紗窓二枚を開ける。庭園一帶の景色見ゆ、彼は室中を歩き廻る。）
毛女　（間）お父樣は、私の申上げることを聞いてはいらつしやいませんでしたのね。
延壽　俺はきいとるよ。勝手に云へ――あゝ韓寛の野郎如何して歸つて來ないんだ。（欠伸、更に一杯の茶を掛み啜る）唔、

云へ

毛女　申しますがきいて下さらなければいけません。

延壽　聽く、聽く、俺は別段耳に蓋はして居ない。

毛女　あの王待詔は、ほんとう孤兒ださうです。あの人が三歳になつたときに御父さまがなくなりました。その後、お母さんはまた王待詔より一年年上の貰ひ子をしました。そして親子三人、平穩無事に十五年間暮しましたが、去年の大選で王昭君が當選したのです。それは何でも、同族の人が財産に眼をつけて母娘に隱して役所を志願してしまつたのださうです。王昭君の當選が確立して役所から京へ上れと催促が來た時、その憐れな異姓の養子（註、支那にては男子なき時は同姓より養子を取る。偶同異姓より貰ひ子をすれば同族より蔑視される。）は、長江に身を投じて了ひました……あの人母娘にはこの悲しみも勿論ながら、續いてまたこの母娘同志も永久に別れなければならなくなるのです。ところへあの人達の財産を狙つてゐた人々が、畫策した結果王昭君の母親も、侍婢に仕立てゝ護送の役人を瞞かしました。それで二人は今まで離れずに蕭條として茲まで來たのです。お父樣、可哀相な人達では御座いませんか。

延壽　可哀相だとも、彼奴等がお上を欺いた罪は萬死に當るのだ。

毛女　（悍然として）おゝ、お父樣、お父樣はそんな事を仰言る事は出來ませんわ。さう仰言るならばお父樣のなすつたこともお上を瞞かして居るのではなくつて、人の生れ付きの器量を……

（龔寬左の戸口より蹌踉として登場）

延壽　（龔寬を見て怒聲を爲す）龔寬、この豚め、お前は半日の間何を爲て來やがつた。

龔寬　先生、どうぞ御許し下さい。あゝ私どもの罪は勘辨出來ません。先生、私どもは悪い事をしました。私どもの罪

は赦されません。

延壽　何だ、何事があつてお前のそんな誇張になつたのだ。

毛女（坐つて動かず、目を見張り龔寬を見て默として一語も發せず）

龔寬　先生、あゝ、私共のした事はどうしても良心に訴へて申譯が立ちません。（頭を抱へた苦痛の狀をなす。延壽が先きに掛けたる椅子に腰を下す）

毛女（目を轉じて龔寬を仰視し、語無し）

延壽（龔寬に逼りその前に坐す）やいお前は氣が狂つたのか。一體何事ぢや、

龔寬（暫し沈默。間あつて頭を昂げて延壽に向ひ）先生、匈奴の呼韓邪單于が來朝しました。先生はご存じですか。

延壽　その位の事を俺が知らんで如何する。昨日、皇帝陛下御自身俺に仰言つた。

龔寬　單于が來朝して大漢と和親する爲め、皇帝陛下の詔で後宮の佳麗の中から容貌の一番惡いのを選拔して單于に嫁入らせる事になりました。ところが掖庭の王昭君は先生の爲めに畫像をあまり醜く描かれましたのでその撰に入りましたのです。

毛女（大に驚くさまを作し、立つて行かんとしてまた坐す）

延壽（貌、更に冷酷の度を加へ、首肯く）……

龔寬（頭を垂れ氣喪へるが如し。間あつて斷れ斷れに云ふ）あゝ計らず私共はこんな失敗を仕出來しました……先生は私が今朝外へ出る時にこの消息を聞きました。詔書は昨晩下つたのです。王昭君は「寧胡閼氏」に封ぜられ、十日以内に呼韓邪單于に隨つて匈奴に嫁入らなければなりません、可哀相なのはあの娘です。——あゝ先生はあの二人が

母娘だといふ事を御存じですか。

延壽　大袈裟に云ふな。俺がお前よりもつとよく知つてゐる。

龔寛　先生、もし先生がそれを御存じでしたら、もつと憐れみの御心が出るといふものです。哀れな親子は昨日詔勅に接しますと母親は驚きの餘り氣を失つて、今朝私が掖庭へ行つた時にはもうすつかり狂人になつて居りました。

毛女（前と同じ仕草）……

延壽　お前は半日も行つてどんな事を爲て來たんだ、金は？

龔寛　先生、私共は人をあんな哀れなところまで陷れてまだ金の事が云へるでせうか。

延壽　ヘン、役に立たない豚奴、お前も婆さんと同じやうに氣が瘋れたな。婆さんの狂氣はお前達のやうな馬鹿野郎しか騷がせはしないのだ。……俺にくれる金を持つて來さへすれば奴等は匈奴へ行かないでもすむのぢや、又た、彼の婆の氣違ひ沙汰も治療してやるのぢや。それぱかしぢやない。王待詔は立所に雲上に出世する事が出來るのぢや。俺に錢をよこさなければ、俺は彼奴等が朝廷を瞞着した罪を告發する積りぢや。奴等の罪は正に九族に及ぶ。氣が瘋れたとか、匈奴へ嫁に行く位はまだ〳〵有難い方ぢや……。馬鹿ものども、お前達はそんな木造の鷄の樣に呆然として居ないで、誰でも好いから掖庭へ行つて來い。そして彼奴の處へつ行つて俺には回天の術が有る、と云へ。俺の云ふ詞は今上の天子樣は言々句々御採納になるのぢや。ただ、彼等が、俺に莫大の報酬を出しさへすれば彼等を助けてやる。俺が皇帝に先きに獻上した王昭君の畫像は人違ひで本當のは今朝見つけ出したと云ひさへすれば好いのぢや、あれを皇帝に獻ずれば、一眼御覽になつただけで陛下は先きの詔勅を御取消になること、請合ぢや――お前達のうち、誰か行つて最後の勸誘をして來い。彼等が果して榮華何れの道を取るか聞いて來るが好い

（兩人眼を見合せて詞無し）

おゝお前達は二匹とも木造の鷄ぢや、何つちも行きたくないのか。

（兩人詞無し）

お前達が行かなけれや俺が行く。陛下は今日はお見えにならんかも知れん。だが、俺が行つた後で陛下がお見えになつたら、俺は『匈奴人騎馬射箭之圖』を描きに行つたと云つて異れ

（兩人依然として瞠若として詞なし。延壽、左の戸口より退場、）

龍寛（獨語）おゝ私は人の不良さがこれ程とは思ひ寄りませんでした。孔子は「仁に當つては師に讓らず」と申ます。私の先生の此の行を私は……

毛女（立ち上り龍寛の手を執る）龍寛、お前はもう父を師と見ないで下さい。私も父とは思ひません。虎豹も及ばない毒惡です、あゝ私は不幸にも女と生れて……（啜り泣く）

龍寛（毛女の額に接吻し沈默、間あり）淑姬、今は私共は傷感してゐる時ではありません。人が井戸に落ちたら即刻救はなければなりません、その上に人が石を投げ落すのを見てゐる譯には行きません。

毛女　さう、さう、私どもはあの人を救はなければ、井戸に突落すも當然です。では斯うしませう。私は、皇帝にお願ひして私を王昭君に仕立てて匈奴へ降嫁することにしませう。

龍寛　それはいけません！どうしてそんなことをなさいます？それは私を殺すやうなものです。

毛女　貴方を殺しますつて？貴方は本當に私の爲めに死ねて？

龍寛　私が貴女の爲めに死ねないとお言ひですか。あゝ、貴女は私の心を御存じにならないのです。

毛女　それは私とても知らない譯ではありませんが、では、何故貴方は父に私のことを仰言らないのです。

龍寛　たゞ貴女のお父樣がお許しにならないと思ふからです。

（此時紗窓に人影現はる）

毛女　おゝ龍寛、貴方は用心深過ぎましたわね。――いゝえ、あの方はもう私の父ではありませんわ。

龍寛　貴女は彼の人を犧牲にすることが出來ますか。

毛女　あゝ龍寛、どうして貴方の爲めに犧牲にしないでせう。あの人はもう私の父ではありません、又人でもありませんｏ今は貴方の爲めに彼の人を犧牲にしても惜しみませんわ。

龍寛　本當ですか。

毛女　まだ私を疑つていらつしやるの？

龍寛　では、こうするといゝのです。（四圍を見廻し毛女に耳語す）

毛女　（首肯く）唔、好い方法ですわ。

龍寛　しかし事は遲れてはなりません。急がなければなりません。先生がお歸へりになつたらもう駄目です。

毛女　えゝ、私取つて來ます。（右の戸口より退場）

龍寛　（立ち上り、歩み來り、歩み去り、得意氣なり。）

（漢元帝、窓口より現る）

元帝　龍寛――

龍寛　（驚ろき）おや陛下、陛下は何時おいでになりましたか。（急ぎ左側の戸を開き元帝を室內に迎へる）

娥寛　（茶を捧げて元帝に獻ず）……

元帝　俺はもう先刻から來てゐる。俺は裏門からは入つたのだ。朝來る約束だつたが遲くなつて了つた。雪の景を見やうと思つたから召人の案內を斷つておいて道を繞つて花園から來た。來るとお前が淑姫と何か議論して居るのでお邪魔すまいと思つては——（毛女畫軸を携へ、右の戶口より出で、元帝を見て驚き喜ぶ）

毛女　あら陛下もうお出で遊ばしましたか。

元帝　もう先刻から來て居る。御尊父は出かけたのかね。

毛女　陛下、父は掖庭へ參りました。

元帝　掖庭へ行つた？

毛女　はい、掖庭へ參りました。陛下、先づこの畫像を御覽じ下さい。

元帝　何の畫像ぢや。

（毛女畫軸を開いて娥寛と各一端を執り元帝に示す）

元帝　（立ち上り畫を見る）あゝ立派な一幅の美人畫ぢや（暫し歎賞する事、間あり）これは何人ぢや。……これは正に奔月の嫦娥か……いや院紗の西施ぢや……正に雲の如く雨の如き巫山の神女ぢや……おゝ、而し着てゐるのは現代の衣裳ぢや　彈いてゐるのは琵琶ぢや（間）俺は思ふ、俺の此の四十年の生涯で未だこんな美女を見たことはない。まあまあお前達よくこれを卷いて藏つておけ、でなくては、この畫像は浮世から離れて天界へ飛んで歸つてしまひさうだ。娥寛よ、お前知つてゐるか。此れは一體誰人の肖畫ぢや。これは誰を描いたのぢや。

（毛女畫を捲く）

韓寛　陛下、何卒、臣等の死罪を御許し下さい。此の畫は臣の師延壽が描いたものでございます。

元帝　唔、延壽をまつて初めて此の筆ありぢや。描かれたのは何人ぢや。

韓寛　陛下、此れが新しく寧胡閼氏に封ぜられた掖庭の待詔王昭君で御座います。

元帝　おゝ、此の神技、此の神技。昨日俺はあの人々の畫像を調べたが王昭君の相貌はこんなではなかつた。

韓寛　陛下、何卒臣等の死罪をお恕し下さい。是れは臣等が陛下を欺いたので御座います。

（毛女畫軸を元帝に差出す）

元帝　さうかな。お前達畫家の手腕は惡く云へば正に瞞かしぢやな。自然の裡にはあんな美が無くとも、お前達畫家の手にかかれば色も艶も出ると云ふものぢや。詩人もそんなもんぢや。此れが畫家と詩人が此の世で感謝される所のものぢや。天地の間にお前達無かりせば、俺達は醜惡の爲めに壓し潰されて了ふ。あゝ、延壽の腕前は非凡だ、どうもいつも彼奴の描く畫像は本物よりも美しいと思つてゐたが、この王昭君の畫像も本物とは大分違つてゐるに相違ない。

韓寛　陛下、左樣では御座いません。左樣では御座いません。

毛女　陛下、父は一たい惡い人でございます。

元帝（驚き疑ふ）何を云ふ。

毛女　陛下はあの人がどれ位陛下を欺き申したかを御存じになりません。美しいのを彼の人は醜く、醜なるを美に描きました。それは唯、彼の人に送つた賄賂に比例したのです。王待詔本來の面目は此の繪よりもずつと美しいので御座います。あの方の天稟の美は、父の濁つた精神と汚れた手では、とても表すことは出來ません。只だ王待詔は父に賄

賂をつかはなかつたので、父上は故意とあんな鹽のない菜のやうな畫を造つて陛下を御瞞し申したのです。

元帝　爾、そんな事があるのか。これは全く意外なことだ。道理で彼の畫はいつも實物と違ふと思つた。やあ彼奴は俺を大分誤らせたな。こんな美人だと知つたら、和親の爲に嫁になど遣るのではなかつたのぢや。

毛女　陛下、王待詔が和親の爲めに出嫁するのは、あの方御自身は甘んじるかも存じません。陛下にはもう一層、あの方の受けた苦しみを御存じでは御座いませうか。

元帝　さうだ、俺も大體は知つてゐる。だが、俺は彼女を匈奴へやらないでも濟むのぢや。お前達は掖庭へ行く道を知つてゐるか。俺は行つて慰めて來る。

毛女　陛下は未だ御存じありません。王待詔の母はもう氣が狂ひました。

元帝　淑姫、何だとて？彼女の母が如何にして此處に居る。どうして又、氣が狂つたのだ。

毛女　陛下、もう斯うなつては御説明申し上げなければなりません。王待詔は、本と秭歸縣の者で御座います。三歳の時に父親を失ひました。その母親が別に異姓の養子をしましたら、同族の異議を買ひ、昨年、大選の時に同族の人が、王待詔が自ら志願した様に縣知事に申し出ました。いよ／＼王待詔が當選して、京に向つて發足するその前に、その異姓の兄は長江に身を投じて了つたさうです。

元帝　おゝ――（不安の狀）

毛女　あの方のお母さんは、あの方を遠くへ遣るのに忍びず、天涯地角へ眼をやつては案じ悲しんだので御座います。この哀れな母娘の別離の悲しみに乘じて、同族共が謀りまして王待詔の母親を侍女に仕立て、二人で京に上らしたので御座います。……

元帝　お前、それを何處から聽いて來たか。

毛女　此れはあの方が御自分で私に申しました。あの方たちが京に來てからは又私の父に苦しめられ、その爲に今以つて掖庭に在つて陛下に見える事が出來ないのでは御座います。それで、きけば昨夜、和親の詔書が下つてから王待詔の母親は悲しみの余り己を失ひ狂人となつた由で御座います。

元帝　おゝ、もう云ふな。云はないでも宜しい。お前達は掖庭へ行く路を知つて居るか。

毛女　存じております。陛下。

元帝　早く俺を連れて行け（匆々として後の戸より退場）もう一刻も猶豫出來ん。一刻も猶豫出來ん。

（顯寬は急ぎ前門を開け、毛女と共に默しつゝ元帝に隨ひて退場）

第二幕　王昭君居所の掖庭

背景。右側一帶は石の築山、左後ろは掖庭の一部を現はす。庭外に欄干ありて之を圍む。庭前に溝一すじ斜に流れ、溝上に太鼓橋懸り、橋に石の欄干あり。左の道は斜に掖庭に通ず。路傍に大理石の獅子一對あり。右の道は築山の中に通ず。溝の岸には老いたる槐樹多く葉は已に脫落せり。槐樹の下に梅數株、花正に開けり。

背面は一帶に宮殿の遠景。

王昭君は髮を編んで下げ髮にしてゐる。黑き長衣を纏ひ、全然修飾せず。狂母を扶けて樹下を徘徊す。狂母は、何物かを尋ぬる如く、「人は何處へ行つた、人は何處へ行つた。」と叫びてやまず。白髮、黃衣、兩眼はじつと据はつてゐる。

毛延壽は左端石橋の欄干の上に腰を下ろせり。

延壽（母子が橋の近くに來たるをまつて）王昭君……

昭君（母を扶けて立ち止る）…

狂母（脱れんとして）人は何處へ行つた。……人は何處へ行つた、……

延壽　王昭君、あんたが悧巧でしたら、俺の云ふ詞もわかる筈ぢや、あんたがお上を誑かした罪は兎に角容赦は出來ないのですぞ。

昭君（低聲）では貴方はお上を誑かさないと仰言るのですか。貴方が獻上した畫像は贋物です。私はとつくに知つて居ます。貴方の目的はたゞ、お金が欲しいのでせう。でも私にはお金は有りません。あの人達が私達母子を殺すのでしたら、どうぞ早く來てほしいのです。さうすれば私達母子も苦痛から脱れる事が出來ます。（次第に激昂して）毛延壽、……さあ早く行つて下さい。早く行つて彼の人々を呼んで來て私達母子を殺して下さい。（また母を扶けつゝ雪の上を徘徊する。）

延壽（暫し沈默の後）王昭君、あんたは隨分頑固ですな。……あんたは俺に手向つてゐるのでなくて、あんた自身の運命に手向つて居るのですぞ！………今日、俺が來たのは、あんたを助ける爲めに來たのぢや。あんたは恩人を讐と思つてはなりませんぞ。……あんたはこの事を知つて置くがいゝ。俺の勢力は尋常の人とは違ふのですぞ。俺は今上陛下とは極めて親しいのぢや、俺が一こと云へば十ことも聽いて下さる。俺があんたの醜い像を獻上したのも、——これは龍寛からあんたに云つたのぢやらうが——何もこんな結果を生ませる爲ではない、たゞ何時か貴女から尊重されたい爲なのぢや。俺が皇帝にあれは人違いだと申し上げて、あんたの本當の像を獻上すれば、あんたの榮達は望みのまゝじや……だが、誰もこんな結果になるとは思ひも寄らなかつたのぢや……（獨り言の樣に）

（母子は復た徘徊して橋の袂に來る）

王昭君、しかしまだ遲い譯ではない。俺の力量はまだあんたを、救へるのぢや。俺が本當の畫像を獻上しさへすれば

あの詔勅はお取消ぢや。

昭君（詞無く、母を扶けて、又徘徊し去る）

延壽（立ち上り、橋上を一二遍來したる後、母子の傍へ行く）王昭君、あんたはきつと俺に報酬する積りだが、今は持合せが無いに違いない。それでも俺はあんたを救ける事が出來るのぢや。（二人に尾行て行く）王昭君、御らんなさい。あすこは鴛鴦殿で、此方は披香殿ぢや、彼處の室は玉に滿たされ、壁は金で飾られて素地を露はさず、梁も柱も隱れる程ぢや。明月は燦爛として輝き、珊瑚琪樹は並び飾られてゐる。あの中に住む人々は皆、綺羅をまとひ、俯仰すれば神の如しぢや。王昭君、あすこの榮華は、あんたに向つて微笑んで居るのですぞ。……王昭君、腥凄な北風が砂漠から吹いて來る。齎す所の消息は慘淡天に連り、黄砂地に滿つるの景、人は野獸の如く、腥肉のみを逐ひ、淫なること山羊の如く、兇なること狼犬の如く、しかも住むところは穹廬にして卑陋ぢや。夏は酷熱、冬は避寒も能はずぢや。王昭君、あすこの淫風は獰猛なせゝら笑ひをあんたに向けてゐるのぢやぞ。……王昭君、あんたの運命はいま二つの路に面してゐる。どうです、近路をお通りですかそれとも遠い路をお好みですか。

昭君、（詞無きこと前の如し）

延壽（愈々昭君の近くに迫り）王昭君、俺は實は——あんたを愛してゐるのぢや、——あゝ、梅花もあんたほどの清艷はない、白雪も此の純潔には及ばない。春の意は寄せて女の心の中にあるのぢや。あんたも、よもや枯木の枯寂に似たい積りでもありますまい。（手で昭君の脊を撫でる）王昭君

昭君（彼を顧みてその手を避けて去る）何ですッ。

延壽（立ち行り、又後をつける）王昭君、俺は貴女が今こゝに金の持合せのない事を知つてゐる。だが……あんたは金錢よりも貴い花園をもつてゐる、あんたの花園の門は閉されて、誰も欣賞した事がないのぢや、あんたがもし……（欲しそうな顏付をして昭君の面前に到る）

昭君　何ですッ

延壽　おゝ乃公は……（左右を顧み）乃公は此の櫻桃を食はうと云ふのぢや。（兩手で昭君の肩を押へ、接吻せんとす）

昭君（母を放し、力任せに延壽の頰を打つ、頰を打つ音がする。）犬め、犬にも劣る奴め。

狂母（樹の中に走りつゝ倘呼ぶ）人は何處へ行つた、人は何處へ行つた。

昭君（母の傍へ馳せて之を扶く）姆媽、私は此處に居ます、姆媽。

延壽（自らその頰を抓る）はあ、お前、お前、お前は乃公を打つたな、お前は乃公を打つた、打つた、打つたな、よくも打つたな。乃公は今晩にも、お前達、この雌雞二匹を活かせ……活かせては置かないぞ。（匆々として橋上より走り去る）

（出合ひ頭に、元帝手に畫軸を執り、毛女、龔寛及侍衞數人と、築山の後より歩み出づ。）

延壽（驚惶措く所を知らず）おゝ陛下。

元帝　王昭君は？　あゝ、あすこぢや、あの人ぢや、（昭君と母親を指し）彼處で狂母を扶けて梅樹の下でゆき來してゐる。おゝ、可憐なものぢや。（毛女を顧み）貴女は行つてあの人達をこの橋の上に連れて來て下さい。私は話があるから。（龔寛に向ひ）龔寛、お前は侍醫を呼びに行け。

龔寛　はい。（退場）

元帝と毛女は橋の上に行く、延壽と侍衞數人は默して橋の右側に侍す。）

毛女（母子の傍に行き）王待詔、皇帝陛下が貴女方と、橋の上でお話を遊ばされると申されます。

王昭君（首肯いて、母を扶けて毛女の後に隨ひて橋上に來る）

元帝（欄干の上にかけて）おゝ王昭君、俺はお前達一家に災を及ぼした。俺は今様の桀紂だつた。今日、やつと俺が小人を誤信したのに氣が付いたのぢや。（毛延壽を顧み）毛延壽、此處へ來い。

延壽（遲々として前に進む）

元帝（畫軸を延壽に示し）延壽、お前が此の繪を描いのは有難い、だが、お前が今此處でやつた掛引は、俺は梁山の後からきいて、一切が分明（わか）つた。延壽、俺はお前がこんな禽獸の心を有つてゐやうとは夢にも思はなかつたな。

延壽（俯して詞無し）

元帝　むゝ、人の心は實にはかりがたいものぢや、俺は、平常、お前に疑つに、決して薄いものぢやなかつたと信ずる。俺はお前を尙方畫伯に封じ、お前に尠からぬ年俸を遣つてゐる。これは天地始つて以來破格の例ぢや。考へて見るがよい、一個の畫匠で、誰が一天萬乘の君と、互に兄とか弟とか呼べるものかどうか？

延壽（前と同じ仕草）

元帝　うむ、お前がそんなに貪慾下郞とは思はなかつた。お前の、その一管の禿筆で女人の錢を騙し、俺の宮殿を汚したのだ。この禽獸、禽獸にも如かさる野良犬め、お前はまだ此處に來て、此の孤兒と寡婦を凌辱して、禁裡の女を偷み食ひしやうとするのか。此の禽獸め、此の禽獸にも如かさる色魔め。

延壽（首を垂れ平伏して）陛下、どうぞ此の度はお許しを……次からもつと澤山描き……

元帝（怒つて侍衞を招く）來い。お前達はこの獸奴を引いて行つて首を刎ねて持つて來い。

（侍衛數人、延壽を縛る）

延壽（白眼をむき出して）やい、漢皇帝、乃公を殺すつて云ふのか。乃公を殺すつて云ふのか。春宮の畫を描く時には、乃公が入用で、今、絕代の美人を手に入れたら、もう乃公を殺すつて云ふのか。そんな仁慈の面構えして、その實、お前の顏から下の亂毛は、正に山羊よりも五寸も長いといふものぢや。あゝ、乃公は死んでも好いのぢや、乃公は死ぬ、ついでにお前は今年中に乃公の後を跟けてこいと呪つておく。（その娘に向ひ）淑姫、お前も榮達が出來るといふものぢや。お前の商賣は好いものぢやな。お前は、自分の父親を賣りやがつた。だが、可哀さうにお前は寵寛に欺されたのだ。知つてるかね。寵寛には、妻も子も居るのぢや。おまけに、花柳の巷の狂ひ者だ、奴は女の紅い裙を見れば氣が瘋れるのぢや。お前は、奴が品行方正と思つてゐるのか。お前が信じなけれや、王昭君に聞いて見ろ。（侍衛、延壽を引立てる）おゝ、乃公は死んでもいゝのぢや、死んでも憾はないといふのぢや。王昭君の纖手が、乃公の頰を打つたから、死んでも憾みはないのぢや。さあ、王昭君、どうぞ一生お娘さんでいらつしやい、だ……

（引立てられて退場）

毛女（隨つて行かんとして止り、橋の欄干に倚りて俯き視る）

（舞臺は沈默、只、狂母が何、「人は行處へ行つた、人は行處へ行つた」と呼びつゞける）

元帝（一刹呆然としたる後）おゝ、此れは何といふ神秘な天啓ぢや、この世にはもう眞實のあるものは一人もなくなつたのぢや。おゝ婆よ、お前だけが、人の心を喚び醒ましてくれる聖母だ、婆よ、お前の娘はもう匈奴へ行かないでも好いのぢや。

狂母（呼ぶ事をやめ、呆然と視凝める）

元帝　婆さん　王昭君はもう匈奴へ行かないのぢや、俺は他の者に代りを命ずるのぢやから。

狂母　おゝ、何人がわしに話してゐるのぢやらう。

元帝　俺は今の天子ぢや。

狂母　（跪き倒る）おゝ今上陛下、萬歳、萬歳、萬々歳。

元帝　（狂母を扶け）婆、起て、お前の娘王昭君は匈奴へ行かない事になつた。

狂母　本當かな。

元帝　俺は噓は云はん、お前の娘を俺は匈奴へ行かせない事にした。

狂母　（起き上り昭君を抱き）ははゝゝゝゝ娘よ、はゝゝゝ娘や、お前は匈奴へ行かないのぢや、ははゝゝゝはゝゝゝ。：

……（笑ひ倒れて死す）

昭君　（跪いてその母を勞はる）姆媽、姆媽！

元帝　（母の手を探り）おゝ、もう脈がない。如何してかうなつたのぢや、如何してかうなつたのぢや、おゝ、侍醫はまだ來ない。

毛女　（趨りて王母の屍を撫し、昭君の傍に立て詞なし）

（龍寛、侍醫、侍衛數人を連れて登場）

昭君　（哭く聲）姆媽、姆媽、何故返事して下さらないの？私を捨てゝ行くの？姆媽、姆媽も一度返事して頂戴………もう一度眼を開けて娘を見て頂戴。姆媽、私を捨てゝ行くの？お眼を開けて、もう一度娘を見て頂戴。……

元帝　昭君　あまり悲しまぬがよい。婆は喜びの余り一時息が塞つたのぢや。お前は婆さんを靜かにしておかなければ

いかん。

昭君　姆媽、姆媽や、私を捨てゝ行きなさるの？姆媽、姆媽や、もう一度娘を見て頂戴。………

（龔寛と侍醫、橋の右に侍す）

龔寛　陛下、御醫が參りました。

元帝　おゝ　お前達は何をぐづ〳〵しおる、早く來て診察しろ。

（龔寛と侍醫、橋を渡る）

昭君　姆媽、姆媽。どうぞ眼を開いてもう一度娘を見て頂戴……

元帝（昭君に向ひ）昭君、お前は少し落付かなければいかん。まづ侍醫に診察させろ。（侍醫に向ひ）此の姆媽は笑ひ過ぎた爲めに息がつまつたのだ　早く癒してやれ。

侍醫　何卒臣に診させて戴きませう。（王母の額と手を觸れ、衣を解いて胸腹を撫で首をかしげる）陛下、臣の見る所では此れはも早救へませぬ。腹部には尙微溫がありますが、心臟は已に皷動を失ひました。脈も停りました。額は冷くなつてゐます。假令扁鵲が再生しても、恐くは回生の術はありませんでせう。

昭君（泣き崩る）おゝ、姆媽……（泣き崩れる）

元帝　ヘン、お前達は役に立たん、消えて失せろ、龔寛、者共を呼んで此の亡骸を片付けさせろ、何處ぞ好い所へ埋葬しろ、毛延壽の首を持つて來い。

（龔寛、侍衞等を指揮して屍を運び共に退場す。）

昭君（顏を掩ひ、跪いて泣たる儘、立たず）

毛女　昭君姉さん、何卒そんなに悲しまないで頂戴、私共は同じ事です。同じ様に何も彼も失つてゐる人です。私を御覽下さい、私は、涙ももう出得ません。

元帝（毛女に向ひ）淑姫、お前、もう行つてよいのぢや。

毛女　おゝ、私もう行つて宜しい……？　でも私は何處へ行つたら好いのでせう。（昭君の側を離れて行かんとす）

昭君（毛女の袖を取り）淑姫姉さま。

毛女（立ち佇る）……

元帝　昭君、もうあまり感傷(かなしみ)なさるな。人は死んだらいくら泣いても生き返らない、泣いて身を壞してはならぬ……。

昭君（立ち上り）淑姫姉さま、私を連れて行つて下さいまし。

元帝（驚愕）昭君、お前は行つてはならぬ。何處へ行かうといふのぢや。

昭君　私は匈奴呼韓邪單于の幕下へ參ります。

元帝　昭君、行つてはならぬ。俺はお前に和親に行つて貰はぬのぢや。俺は即刻他の人をお前の代りに立てるのぢや。

昭君　貴方が私をやらなくとも、私は參ります、私は、今はもう何も持たない人間です。私には歡樂もありません。苦痛もありません。私の歡樂は、兄が私に代つて持つて去きました。私の苦痛は、姆媽が持つて行つて呉れました。あゝ、私は今はたゞ肉魂が殘るのみで御座います。私は此の一魂の肉が灼熱の砂石で燒かれるのを待ちます。犬狼の爪牙に裂かれるのを待ちます。私は犬狼が私の心肝を齒牙の間に啣へて嚼み、私の眼玉が野鴉に啄まれて北海の水島の上に納涼するのを見たら、或は多少の苦痛を感じませう、或は多少の快樂の感をするでせう。

元帝　そんなに悲惜なさるな、俺は即刻お前を皇后にするであらう。お前は兎に角安樂が出來るのぢや。

昭君　皇后とて、何がありませう。私の母を再び活かせるでせうか？私の可愛い兒を復活させることが出來ませうか？

元帝　お前は、俺れがお前を鍾愛する事を知つてゐなければならぬ。

昭君、例へ貴方が本當に私を愛しなさいましても、それは無益です、私にはもう人を愛する精魂は御座いません。

元帝　お前が假令俺を愛せずとも、お前は宮中に留まつてさえ居れば、邊僻窮乏の極北へいつて苦痛を嘗めるよりはましなのぢや。

昭君、まあ、貴方のやうに九重の奧深く垂れこめて居らつしやる方でも、極北の荒野が何んなに苦しいものだか、おわかりで御座いますの？九重の方は、己れの淫欲を滿たす爲めには、天下の良家の子女を無理強いに引き攫へて來て、欲望を恣いまゝになさいます。御自分の國を保つて行く爲めには、天下の良家の子弟を徴し上げて、御自分の豺狼の欲望をお滿しになります。今では、もう男が用ふるに足りなくなつたといふので、妾ども女子まで用ひやうとなさいます、私ども貴方の御欲望をお滿たし出來ないやうな女を使はうとなさるのです。貴方は極北の荒野が苦しいところだといふことがお解りでございますか？貴方は生殺の權力を御持ちでございます。今日御氣に召さなければ、荒野に棄てやうとなされ、明日御氣に召せば、又玩みにしやうとなさるでせう。そして玩みの用にならなくなると又荒野に御棄てになるので御座いませう。貴方は荒野に棄てらるゝことの苦痛は御存知のやうでございますが、貴方のお玩みになつて居る女子の苦しみは御考えにならないので御座いますか？貴方は一體ゝゝゝゝゝゝゝゐて、獨り萬民の上に立つて勝手に威虐をほしいまゝになさるのでございます？貴方の醜さ？それを御自分でおわかりでございますか？狼だつて貴方ほど醜くは御座いません。この華やかな宮庭は、豺狼の巣窟より、もつと穢れてゐます。私はもう一刻も我慢が出來ません。さあ、淑姬よ、私を連れて行つて下さい。でなければ、私があなたを砂漠へ連れてまいります

（龔寛毛延壽の首を捧げて登場）

毛女（趨りて首を受く）おゝ、此れはお父様の首です。お父様、あなたは一世の僞り事をなさいました。その結果はこの通りです。しかし、私は今になつてはじめて醒りました。初め、私は、あなたの悪はあなたの罪だと思ひました。でも、私は今、あなた一人を咎めることの間違であることを知りました、このやうなゝゝゝゝ世の中に、あなたの金を好む欲があり、此の一夫が萬人を殺し得る時代に、あなたの漁色があるのです。これをどうして私共は怪めるでせう、お父様、私は間違つてあなたを咎めました。おゝしかし、あなたは今、奇麗さつぱりと死にました。これで世の中に少しばかりは悪も減り、あなたの悪の爲めに人の苦しむこともなくなります。（元帝に首を渡す）陛下、此れは一枚の鏡でございます。これで御自分のお顔をお寫し下さい。（昭君を招き）昭君姉さま、まいりませう、私は砂漠へ御供致します。

龔寛（畏れ怯きて）淑姫、どうして、どうして貴女は行くのです……

昭君、龔寛先生、私は貴方に御禮申しませう。今朝、貴方は私に駆落ちをお勧め下すつたぢやありませんか。私はこれから淑姫姉さまへと駆落します、砂漠へ駆落ち致します。

（二女退場。元帝と龔寛、瞠若として此を見る）

（舞臺沈默）

元帝（温和に）龔寛よ。

龔寛（畏れ戰き）陛下、王侍詔の詞は無實のことで御座ります。

元帝　お前も可哀さうぢや、今日は、俺れはお前をよく了解した。お前もよくおれを了解しただらう、もうお前は下つ

てもよい。俺を一人この掖庭に殘しておいてくれ、俺はもう宮殿には歸らない。

龍寛　陛下の御盛德に感激し奉ります。では、下つて陛下の御旨をものどもに傳えませう。

元帝　よし、下れ、もう二度と此處に來るな。後宮の內には、お前勝手に繪を描きに行つてよろしい。お前誰れか好きなものがあれば、お前の勝手に任すぞ

龍寛（叩頭して）臣は死罪に値ひ致します。臣は恐れて敢えて致しません。

元帝　お前は、もう俺を恐れるには及ばない。俺は皇帝ではあるが、しかし女の前では、俺とても全くの素裸體だ。もうよい、お前は下つてゐよ。

（龍寛身を起して退場す）

元帝（沈默、間）おゝ、匈奴の單于呼韓邪よ、おまえは天の寵兒ぢや……（延壽の首を欄干の下に置き、王昭君の畫像を開き眺めたる後、又延壽の首に向ひ）延壽我が友よ、お前は結局、俺より幸福ぢや、この美人の繪を描いたお前の名聲は永久に消えぬ。お前は死んだが、お前の頰は、美人に一度はたたかれたのぢや、おゝお前は結局俺より幸福ぢや。（繪を置き、延壽の首を捧げて）おゝ、延壽我が友よ、女がはたいたのは何ちの頰ぢや。左の頰か、それとも右の頰か、云つてくれ。お前の頰の上には、まだ女の餘香が殘つてゐやしないか、俺にその殘り香を分けて與れぬか（續けざまにその左右の頰に接吻する）おゝ、お前は眼をむいて俺を睨み、俺に今年中にお前の後を追えと呪つたな、だが、俺はもう今からお前の後を追つてゐるのぢや。おゝ、俺はもう生きるのが嫌ぢや。延壽、お前は俺とこの掖庭に、もう一年だけ住んで與れ、（首を置き、繪を捲く）俺はお前の描いた繪を壁に掛け、お前を俺の書架の上に置かう。俺は死誓つて此處を離れない。延壽、お前は俺れの伴をして掖庭にいつてくれ。

（畫軸を肘の下に挾み、延壽の首を捧げて、續け樣にその左右に接吻しながら掖庭に向つて步み行く）　——幕徐々に下る——



阿蘭の母

揚振聲

張無遺が死んだとき、彼の夫人は悲しみの餘り一度は自殺を計つた、が、間もなく又生歸つた。全く彼女がこの突然にやつて來た孤獨に直面したときは、彼女には死より外ない氣がしたのである。しかし彼女が生歸つたとき、其父を失くした三つになる女の子、阿蘭が彼女の首に抱きついて『ママ』と泣きながら呼びかけ、そして母親の蘇つたのを見てニツコリと微笑んだ其無心の笑は、深くも母親の涙眼を通して心の奧底を突刺した。そしてそれは、ちやうど播かれた種子のやうに母親の心に新しい生命を芽ぐみ、生長さしたのである。母親の心には新しい生氣が充ちて來た。そして彼女の死を願ふ心はいつの間にか春風に吹かれて融けて行く薄氷のやうに全く消え去つてしまつた。

阿蘭の生長につれて、母親の生活には張合が出て來た。彼女は阿蘭に新しい着物を着せてそれで自分に暖かみを感じ、阿蘭に美味しい物を喰べさせてそれで自分に其美味を味はふのであつた。阿蘭の悲しみは母親の涙であり、阿蘭の笑は母親の喜

びであつた。ただ、阿蘭のためのみに母親は生きて行く欲望と、勇氣と、樂しみとがあつた。

阿蘭は母の傍を離れなかつた。母親も阿蘭を離さなかつた。母親が縫物をして居ると、阿蘭は傍で糸を卷き、母親が洗濯をすると、阿蘭は傍でそれを學んだ。夜、彼女は阿蘭に讀み書きを教へて居ると冬の夜長でもちつとも長いと思はなかつた。

阿蘭が學校に行くやうになつて、最初の幾日と云ふもの、母親は何年か別れて居る様な氣がして寂しくて堪らなかつた。阿蘭が出て行つてしまうと家の中がガランとした。阿蘭は學校が遠いのでお晝はいつも學校ですました。そして彼女が學校へ行つてから一時間も經たないうちに彼女の母は二度も街中を駈つて様子を見に出かけた。そして學校の退けるのが晩過ぎると怨めしげに待ちわびるのであつた。阿蘭が歸つて來ると彼女は失つた寶が又手に還つたやうに嬉しがつた。そして抱き上げて『ほんとによく歸つておいでだつたね』と、なつかしむのである。

こうした風で幾年か過つて阿蘭が十四になつた春の初めの或日、阿蘭は熱を出して學校から歸つて來た。母親はちやうど庭に仕事を持ち出して着物を解いて居たが、阿蘭の兩の頰は紅く、額に觸つて見たところ熱が高かつたのですつかり驚いてしまつた。

それから三晩と云ふもの彼女は一睡もしないで阿蘭を看護した。そしていつも寂しい薄暗い燈火の影で夫のありし日のことや、その臨終の折のことなど頻りと思ひ出して居たが、一度阿蘭にもしものことでもあつたら…と想ひ至ると、もうそれ以上考へるにも忍びなかつた。

幸にして阿蘭の病氣は癒つた。母親は看護につかれたとも思はなかつた。阿蘭は尙二三日家で保養して居たが其日、それは支那が共和政體になつてから十五年目の三月十八日と云ふ其日であつた。——になつて阿蘭は是非學校に行くと

云ひ出した。母親はもと〳〵遣りたくはなかつたのであるが、丁度天氣は好し阿蘭の身體も囘復したことであるから、餘り學科を後らすのもよくあるまいと思つたので許すことにした。ちやうど其日は市民が大沽事件に對する八箇國の最後通牒に反對して行列を押立て、執政府に請願に行く日であつた。阿蘭も其學校の隊伍に隨いて行つた、そして執政府の衞隊が民衆を殺戮したときに阿蘭は繊弱い小羊のやうに屠られてしまつたのである。

阿蘭の學校の先生である馬夫人は衞隊が發砲したときに逸早く身を伏せたので危く死を免れた。彼女は銃聲が止んでから屍體の間から這ひ出したときに阿蘭の死骸を見出したのである。彼女は阿蘭の母親とは識合の間ではあるし、殊に學校の先生として直接、家に知らせてやらねばならなかつたのでそのまゝ阿蘭の家へ驅けつけた。

先生が家へ入つたとき、阿蘭の母は子供の袷を縫つて居る處であつたが、先生の入つて來たのを見るとあわてゝ縫物の手を休め、坐を勸めて、『先生は學校から來らつしやいまして？』と彼女は云つた。

『否え』と、馬夫人はやつとそれだけしか答へられなかつた。

阿蘭の母はそれに接いで、『道理で阿蘭と御一緒でないので御座いますわね、今ちやうど三時十五分ですから、もう直き歸つて參りませう』

そして椅子の上に置いてある半分程仕上げた藍色の綾緞子の袷を指して、

『漸々お暖かになつて參りますから、いま、丁度あれの爲に袷をこしらへてやらうとして居るところで御座います、私の古いのを仕立直したのですが、この色なら屹度、阿蘭に似合ふだらうと思ひます。御存じのやうに藍は、殊に深藍は却て着られないもので御座いましてね、色の白い人でないと色に壓されて仕舞ひますから。此切れ地が丁度、あれの彩織になるだけ御座いますの。もう二年もしたら、足りなくなるのですけれども。一寸あれを御覽くださいまし——』

彼女は又別な紅の湖縮の古い着物を指さした。

『然し……』

馬夫人は口を挿挾んだ。

『然し此色合は時代後れだと仰しやるので御座いませう』阿蘭の母は話を横取りして曰つた『近頃は皆印度紅を着る様になりましたからね。ですから私これであれの下着をこしらへてやらうと思ふんで御座いますよ、あれが歸つて參りましたら一つ着せて見ませう。』

さう云つて彼女は時計を見た。

『あ、もう直ぐ歸ります、藥を溫めて置きませう、歸つたらすぐ飲めますやうに。』

そして彼女は馬夫人にはお構ひなく台所の方へ急いで行つてしまつた。

馬夫人はきつかけがあつたらと、母親に話し出す機會をのみ待ちねらつていたが、何にしても彼女と來ては娘の事となると一圖になつてお客も放たらかす位一心なのであるが、その娘はもう死んで終つて居るのに彼女は今でも娘の爲に着物を造つてやらうと云つて、一枚一枚の色合の品定めをして居る様な事であるから、もし、彼女が娘が死んだと云ふことが分つたら何んなことにならうも知れぬ。ひよつとすると……と考へると、馬夫人も全く困つてしまつた。併し云はない譯には何うしても行かないから矢張り彼女が台所から歸つて來たら、心を鬼にして云つてしまはう、そして彼女が餘り歎くのを見て居られない様だつたら、そのまま逃げ出しても好い……

馬夫人が斯んなに思ひ惱んで居る處に、阿蘭の母親は又笑ひながら這入つて來た。馬夫人は娘の死を知らせる外には全く外の無駄口を利く餘裕はなかつた。彼女は一寸身體を動かし、輕い咳をして聲を作りながら云つた

『あなたまだ阿蘭さんに藥を煎じて居らつしやる樣ですけれど、阿蘭さんはもう……』

斯う云つて又咳ばらひをした。阿蘭の母親はすかさずそれを横取りした。

『左樣ですの、もう二三日前から快いのですけれど、まだすつかりと云ふ處までは行かないかと思つて、今でも藥を服まして居るのでございますよ。御存じの通りあれの父親が亡くなりましてからと云ふもの、私、あれより外に何にも頼りにするものはないのでございます。父親が亡くなりましたときに、もし、あれでも居なかつたら私、迚も今日まで生延びて居る樣なことはなかつたので御座います。こんなことを申上げたつてお笑ひ下さいますな、私、あれと別れて居りますと、まるで茫然致してしまひます、學校から退けるのが少しでも晩いと心配で、動悸が打つので御座いますよ。』

そして又机の上の時計を眺めながら額に皺を寄せて云つた。

『もう時間なのに何うして未だ歸らないので御座いませうね？。』

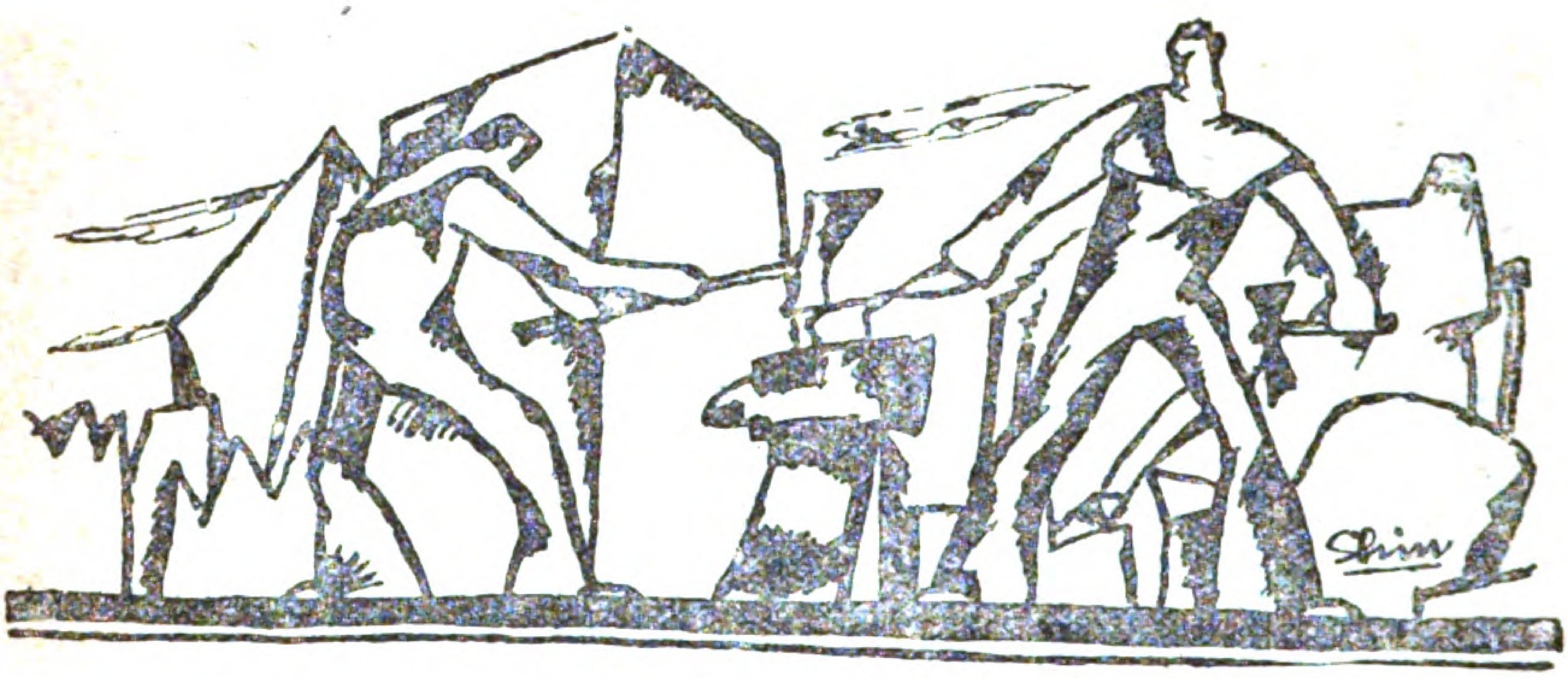
しかし、又直ぐ機嫌を直して笑ひながら曰つた。

『でもあれも此四五日の間、家にばかり引籠つて居てお友達もなし、大そう窮屈して居りましたから學校が退けてからお友達と一緒に遊んで來たつて構ひませぬわね、餘り取越苦勞するものですから、つい』

そう云ひ終ると、彼女は又急いで阿蘭の本立の前に行つて本を整理したり、インキ壺を拭いたり、腰掛をはたいたりした。今にも阿蘭が歸つて來るのが分つてるやうに。

馬夫人の唇は幾度か動いたが、いつも顫へたまゝで口は利けなかつた。突然彼女の眼には涙が溢れた。彼女は慌しく顔を背け、口の中で『又參ります』と云つたまゝ戸外へ駆け出した。後ではまだ阿蘭の母親の云つてるのが聞えて居た。

『何うしてもう少しお待ち下さいませぬの？阿蘭もすぐに歸つて參りますのに』。



美しい肉體を見た話

徐志摩

僕の巴里に居た頃、終中(しよつちう)訪ねて居た友人がある。畫家であるが、とあるうす汚い露路奥の古い家の頂邊、天井のA字型をした屋根裏に住んで居た。薄暗い陰惨な室で、光線と云つたら眞晝でも僅かに、二つの小窓から入つて來るだけなのであるが御本人はそれで些とも不都合はないのである。彼は、何時も正午を過ぎてから起き出し、夜明け近くになつて、床に入るのが普通、午後は午後で又家に居たことがないと云つたやうな譯で、結局灯ともし頃になつてからやつとその美しい破屋(あばらや)の中で彼の製作を始めることになるのである。

美しい破屋——これこそ一幅の妙畫である。と云ふ譯はこうだ。見渡した所一方の壁にくつ附けて一つの狭い寢臺、それに黒い毛布が掛けてあるが、これが彼のベツドである。この寢臺には極めて行儀正しく寢るのでないと、起つたり坐つたりの間に天井に頭を打つけるは必定、更に身直りするにしても轉げ落つる危險があると云ふ譯である。屋根の一番高い處の眞下、部屋中で最も寛やかなあたりに彼のデス

クが置いてある——デスクとは云ふもの丶其實デスクと名づける程の代物ではないが。其机の上には又ありとあらゆるものが載つかつて居る。畫帖、稿本、木炭、繪具皿、破れ靴下、ネクタイ、カラー、ひしやげた魔法瓶、焦げついたアルコール・ランプ、懷中電燈、種々さまざまの藥瓶、繪具、汚れ手巾、頭のとれた筆の軸、蓋のないインキ瓶、ピストル、但しこれはサン・ミツシエルの通りの古物の露店で七フラン以上には値踏みの出來ない代物だ、寫眞挾み、手鏡、齒の缺けた櫛、蜂蜜、晩に飲み殘したコーヒー茶碗、——まだある、怪しげな紙箱、ワセリンに似た油藥、等、等……。箱の壞れを其儘用ひて上に灰色の布切を掛けたのが彼の化粧臺兼書架である。瀬戸引きの洗面器には使つたまゝの石鹼水が半分程殘つて居る。瀬戸物の水差しの把手には帽子を引掛け、あたりには銅貨が散らばつて居るところ、一寸土耳古人のお符呪見たいな格好である。幾つかの小さな腐れ林檎の眞中に一本の黒くなつたバナナが交つて居る。これは又北京あたりの大學教授連が教育部次長を取卷いて月給の支拂でも要求してゐると云つた形……

壁は又更に一段と紛亂を極めて居る。彼の口吻を借ると是は我輩が最も得意の一品でルノアールの素描を屑屋から掘出して來たものである、これは我輩がモネーの裸體を摹したのであるが、十分に行つて居ない。もつと燈を明るくしてはつきり見えるやうにするが草の色が少し濃過ぎた、それに足の處を描き間違つてしまつた。此小品は更に貴重なんだ、誰のだと思ふ、ロダンだぜ、巴里に古く居るとこう云ふ點は有難いね。半年や一年食へない樣なことはあつても、こんな眞ものを手に入れる機會があるからね。あちらの眞中で繼ぎ合はした油繪を見たかね、あれにも却々由來があるんだ。あれは我輩が、マークの暴落を利用して獨逸に行つた時、フランクフルトで手に入れたものだがこれはメンチエルの眞筆なんだ。破れて居たのを繼ぎ合したのだが今では君が三千フラン出したつて讓れない。いや其倍も、三倍ものの價値があるんだ。全くだぜ。さらにあの長い一幅に至つては………

まつたく、彼があれや、これやと其秘藏の珍寶を披露する時は、誰でも自分が立つて居る所が、一坪にも足りない屋根裏の一室だと云ふことを忘れて終うのである。そして、頭の上に斜に下りて來てゐる兩方の屋根も、彼の藝術談につれて何時の間にか消え去つて快濶な天空を暴露して來るのである。壁面のひびや、蜘蛛の巣や、黴や、釘を打つた痕や、それ等の悉くがコロー畫中の點景となり最も美しい森や、輕快な谿流やに化してしまうのだ。卓上のぼろネクタイ、汚れた半巾、腐つたバナナ、臭い靴下、それ等もすつかり姿を變へて鍔廣の麥藁帽を被つた牧童の群になり、或は樹に倚りかゝつて居眠り、或は牛を谿に率いて水を飼ひ、或は手枕で青草の上に仰臥しながら大空を見つめ、或は彼方より驅け來る娘達を横目で見ながら、笛を吹いて居るもの——それに、何とそこにやつて來る娘達の若々しいことか、豐滿の胸も露はに、頭髮を風に吹かせながら白い脚を高く跳ね上げて青草の上を飛んで來るではないか……ポツト、氣をつけなければ頭を打つけるよ、全く此部屋は天井が馬鹿に低いんだから。何を思ひ出したんだ。大方君のベラミーのことでも思つてたのだらう、圖星を指されたらう？君も巴里に來てもう半月にもなるんだから、當然いゝ處が出來ても然るべきだ。近頃はそれが非常に容易だからね、容易過ぎする位だ。時に、君はパイプを吸ふか、マッチは此處にあるよ、濟まないが僕の家にはベッドを除いては、そこのバネの利かなくなつたソファより外に何もかけるものはないのだから、君それに掛けて呉れ給へ。クションをやらう。それが此家中で最上の温柔なる一品なのだから。

まつたく其ソファが、もし此樓上になかつたら主人公の風格は最も重要なる一要素を失ふであらう程、それ程此部屋に相應しいものなのである。バネが全く利かないと云ふことは主人公自身の言葉としては謙遜したことなのであるが、僕の言葉として云つたら全く侮辱したことになるのだ。と云ふのは、そのソファは未だ決してバネはすつかり利かなくなつた譯ではないからだ。丁度その眞中の處は一つの分水嶺見たやうにぽつこり持上つて居てそれを中心に左右に傾斜

クが置いてある――デスクとは云ふもの丶其實デスクと名つける程の代物ではないが。其机の上には又ありとあらゆるものが載つかつて居る。畫帖、稿本、木炭、繪具皿、破れ靴下、ネクタイ、カラー、ひしやげた鐵法瓶、焦けついたアルコール・ランプ、懐中電燈、種々さまざまの藥瓶、繪具、汚れ半巾、頭のとれた筆の軸、蓋のないインキ瓶、ピストル、但しこれはサン・ミツシエルの通りの古物の露店で七フラン以上には値踏みの出來ない代物だ、寫眞挾み、手鏡、齒の缺けた櫛、蜂蜜、晩に飲み殘したコーヒー茶碗、――まだある、怪しげな紙箱、ワセリンに似た油藥、等、等……。箱の壞れを其儘用ひて上に灰色の布切を掛けたのが彼の化粧臺兼書架である。瀬戸引きの洗面器には使つたまゝの石鹸水が半分程殘つて居る。瀬戸物の水差しの把手には帽子を引掛け、あたりには銅貨が散らばつて居るところ、一寸土耳古人のお符呪見たいな格好である。幾つかの小さな腐れ林檎の眞中に一本の黑くなつたバナナが交つて居る。これは又北京あたりの大學教授連が教育部次長を取卷いて月給の支拂でも要求してゐると云つた形……

壁は又更に一段と紛亂を極めて居る。彼の口吻を借ると是は我輩が最も得意の一品でルノアールの素描を屑屋から掘出して來たものである、これは我輩がモネーの裸體を摹したのであるが、十分に行つて居ない。もつと燈を明るくしてはつきり見えるやうにするが草の色が少し濃過ぎた、それに足の處を描き間違つてしまつた。此小品は更に貴重なんだ、誰のだと思ふ、ロダンだぜ、巴里に古く居るとこう云ふ點は有難いね。半年や一年食へない樣なことはあつても、こんな眞ものを手に入れる機會があるからね。あちらの眞中で繼ぎ合はした油繪を見たかね、あれにも却々由來があるんだ。あれは我輩が、マークの暴落を利用して獨逸に行つた時、フランクフルトで手に入れたものだがこれはメンチエルの眞筆なんだ。破れて居たのを繼ぎ合したのだが今では君が三千フラン出したつて讓れない。いや其倍も、三倍もの價値があるんだ。全くだぜ。さらにあの長い一幅に至つては………

まつたく、彼があれや、これやと其秘藏の珍寶を披露する時は、誰でも自分が立つて居る所が、一坪にも足りない屋根裏の一室だと云ふことを忘れて終うのである。そして、頭の上に斜に下りて來てゐる兩方の屋根も、彼の藝術談につれて何時の間にか消え去つて快濶な天空を暴露して來るのである。壁面のひびや、蜘蛛の巣や、黴や、釘を打つた痕や、それ等の悉くがコロー畫中の點景となり最も美しい森や、輕快な谿流やに化してしまうのだ。卓上のぼろネクタイ、汚れた半巾、腐つたバナナ、臭い靴下、それ等もすつかり姿を變へて鍔廣の麥藁帽を被つた牧童の群になり、或は樹に倚りかゝつて居眠り、或は牛を谿に牽いて水を飼ひ、或は手枕で青草の上に仰臥しながら大空を見つめ、或は彼方より驅け來る娘達を横目で見ながら、笛を吹いて居るもの——それに、何とそこにやつて來る娘達の若々しいことか、豐滿の胸も露はに、頭髮を風に吹かせながら白い脚を高く跳ね上げて青草の上を飛んで來るではないか……ホツト、氣をつけなければ頭を打つけるよ、全く此部屋は天井が馬鹿に低いんだから。何を思ひ出したんだ。大方君のベラミーのことでも思つてたのだらう、圖星を指されたらう？君も巴里に來てもう半月にもなるんだから、當然いゝ處が出來ても然るべきだ。近頃はそれが非常に容易だからね、容易過ぎする位だ。時に、君はパイプを吸ふか、マツチは此處にあるよ、濟まないが僕の家にはベツドを除いては、そこのバネの利かなくなつたソフアより外に何もかけるものはないのだから、君それに掛けて呉れ給へ。クシヨンをやらう。それが此家中で最上の溫柔なる一品なのだから。

まつたく其ソフアが、もし此樓上になかつたら主人公の風格は最も重要なる一要素を失ふであらう程、それ程此部屋に相應しいものなのである。バネが全く利かないと云ふことは主人公自身の言葉としては謙遜したことなのであるが、僕の言葉として云つたら全く侮辱したことになるのだ。と云ふのは、そのソフアは未だ決してバネはすつかり利かなくなつた譯ではないからだ。丁度その眞中の處は一つの分水嶺見たやうにぽつこり持上つて居てそれを中心に左右に傾斜

を僞して居るのである。僕は最初坐る時はもう彈力はないつもりだつたから、坐つて見て一寸當が狂つた感じがしたのである。ソフアのもたれのカバーと來ては全く垢に染つてしまつて黑とも、黄とも、何とも名狀し難い色々の色彩をもつて居ること恰かも主人公のシヤツの袖口そのまゝである。丁度僕が腰を下した時、彼は唇を咬みながら眼球をぐるつと一轉してニヤ〳〵笑つた。

何が可笑しいんだ?

今君がソフアに掛ける樣子を見て居てエイリーンを想出したんだよ。

エイリーンて何者だ。

彼女——彼女は我輩第一等のモデルさ。

モデル? 君の? 君の此破屋にも尙且つモデルが來るのか。君の樣なこんな貧的でも——

マーそう吃驚しなくても好い。何う云ふものか支那から初めて來たものはモデルと聞くと直ぐこう昂奮するんだからね、そして、顏を赤くしてさ、元來そんなこと何でもない、當然の事なんだ。

併しだね、君のやうなこんな壞れた雞小屋……

壞れた鷄小屋だつたら何うしたと云ふのだ。イエス・キリストは厩舍の中で生誕し、エンゼル達は馬の小水の中に跪いて禮拜したと云ふではないか。慌てなくたつて、今說明してやるよ。一體巴里人には非常に好い處があるんだ。それや勿體ぶらないと云ふ點だ。支那人は此點に於て最もいけないね。貧乏人には貧乏人の威飾があり、金持には金持の氣取りがあり、プチ・ブルジオアにはプチ・ブルジオアの氣障がある——併しこいつは未開、野蠻のやることだね。君、僕の此風體を見て吳れ給へ、頭の髪と云つたら豪猪見たいだし、顏と云へば一週間も十日も剃らない不精髮の延び放

題、着物は半年も手を入れない汚れたまま、靴は靴紐も碌に結べないと云つたていたらく、もしこれが支那だつたら西洋乞食としか呼ばれない所だ。何うして北京ホテル見たいな勿體ぶつたところに入れてくれるものか。併し巴里では僕がこんな風姿(なり)をして居たつて、最も美々しく着飾り、最も美々しく粧ひした娘に向つてダンスの相手を求めても十中の八九までは成功するんだ。決して嘘ぢやないよ。モデルなどに至つては問題ぢやない。巴里で美術を修業して居るものは金が有らうが有るまいがそんなことはお構ひなく、一年の内に十人以上もあの眼の美しいモデルを取換へないものはなからう。部屋の見窄らしいなんか何でもない。ボヘミアンの生活と云ふものは大體かやうなものなんだ。君の言ふやうだとモデルは破れたソファなんかに坐らせちやいけないと云ふやうなことになるが、それだと君は錦繡の褥を置いた玉の寢臺でも用意して彼女を請はねば安心出來ないと云ふんだね。況んや……

況んやもう澤山だ。全く僕が世間知らずの田舎者だから解らないだけの事だ。もう解つたよ。併しモデルと云へば僕も少からず好奇心を持つて居るんだが君の經驗を話して僕の見聞を廣めて呉れる譯には行かないだらうか。

我々が、美術院の中で見る所のヴイナス・ド・ミロだの、メヂチのヴイナスだの、或はチチアン、ルユーベンス、ボチチエルリ、チントレツト、ジオルジイオネ等の裸體は實際あまりに美しくあり過ぎる。あまりに理想過ぎ、あまりに不可能であり、あまりに不可思議なんだ。これと反對に、新しい派のシニヤツク、マチス、セザンヌ、コツテ、フランツ・マルク等のものに至つては又あまりに醜く過ぎる。餘りに破壞的であり、非寫實的である。而して同じやうにあまりに不可能でありあまりに不可思議なんだ。人體美とは一體何であるか。吾々は不幸にして支那、即ちこの女は身體全體を一様に纏つてしまつて居て、腰と臀部とは全く隠れて見ることの出來ない國に生長したので實に此點に於ては甚しく無知なんだ。ちつとも啓發されて居ない。しかし一方から曰へば又吾々東洋人は此點に關して根本的に外國人から啓發され

てはいけないのだ。君はジョン・パリスの「さよなら」を讀だんことがあるか。彼が日本の裸體の舞姫を形容した所に――白粉を塗つた顏は今しも棺桶の中から這ひ出して來た樣な色をして居る。それに首から下の肉體の色は半煮えのとろもろこし見たやうだ――と云つて居るが、これを讀むと全く反感を起させるぢやないか。

併し人體については君のやうに美術をやつてゐるものにして始めて第一義的な經驗を持つて居るのだ。僕はむしろ……君はむしろ羨ましいのだらう。ね？不思議ではない、人間は要するに人間なんだから。僞らない所を言ふと僕の網をやる本來の動機も要するに、この人體の秘密に對する好奇心からなんだ。君は僕を貧乏だと云ふが、全く貧乏なんだ。飯も碌に喰へない。着物も着られない。併しモデルだけは何うしても廢せないのだ。人體美の觀賞といふことは僕にとつては今では一種の生理的要求なんだ。必要的奢侈、脫却することの出來ない嗜好になつて終つたんだ。僕は寧ろ衣食を減らしても幾フランかを殘し、それでモデルを雇ひたいのだ。君は僕を惑溺だとか、病的だとか、狂ひだとか云ふであらうが、何と言つたつて宜い。僕はそのすべてを甘んじて承認するよ。僕は一日として僕の目の前に横はつて佳姿し、慰安し、僕の眼を滿足さして吳れる裸體の女人なくては堪へられないのだ。初期のロダンもやつぱり僕と同じやうな欲求があつたのではないかと思ふ。彼の部屋には常に幾人かの裸體の女があり、而もそれは啻に坐つた形だけでなく彼女達の日常生活に於ける「實際的」變化の多くの姿態を見る爲めであつたと云ふ事だ。――彼は一人の羊飼ひであり、一日中多くの毛皮を剝がれた羊を看守つて居た譯である。ルューベンスに至つては一層ひどい。彼はいつでもその夫人をモデルにしたがその結果、彼が一日中畫を描いてゐると彼女は一日中パンツを着ける暇さへなかつたと云ふではないか。しかし、もしこの話がほんとうだとするとリューベンスも馬鹿げて居るね、だから彼の畫中の女はみんな皮を剝いだ豚のやうに、單調な、變化の少ないものになつてしまつて居るのも不思議ではないのだ。人體に於ける美の配合と云ふことは、

非常に神秘的な現象だね。僕は全體として理想的な人體と云ふものは男女を論ぜず存在しないと思ふ。それは殆ど不可能だと思ふのだ。例へば神樣が繪具を一握り地上めがけて撒いたとする。薔薇や、蘭や、ダリヤや、椿や、それ等は皆、思ひ思ひに一色或は幾色かの色彩を取つたんだ。しかし、一種の花であらゆる色彩を悉く取り入れると云ふことは、決してあり得ない事なんだ。もしそれがあつたとすればそれは理論の上から當然本來の無色に還元することになるのだ。人體美も亦これと同じだ。美が胸の部分にあるものがあり、腰のまはりにあるものがあり、身體の下半身にあるものがある。或は頭髮に、或は手、或は脚にあるものがある。要するに人體と云つても、骨格と、筋肉と、皮膚との綜合に過ぎないのであるが、この綜合が神秘なのである。其神秘が各人各樣の曲線と、色彩の變化と、皮膚の緊張の度合、髮毛の分布の具合、姿態、表情と云つた樣なものの變化を造り出すのである。だから美を判斷するには面倒でも一々これを比較研究せなければならないのだ。神樣は決して絕對的美なるものを現實に造つては居ない。もしそれがあるとすれば吾々のあらゆる藝術的努力なるものは全く意義がないことになるのであるが、さうではなくて吾々は神樣の造つたものゝ内から眞の美を探し出さなければならないのだ。丁度此山には黃金の脈があることが分つて居ても、さてそれが何處にあるのだかは工夫して探さなくちやならぬと云つたやうな譯だ。

神樣が藝術家の審美的本能と云ふものを與へて下さつたことに對しては、大に感謝せなければならないね。さもなかつたら、あらゆる人體美も要するに墓場にあると同じで、埋れたまゝ、遂に見出される機會もないことになるんだ。

後で君にそのベッドの下にある僕の秘寶を見せて上げやう。僕がこの十年間心血を注いだ辛苦の結晶だ。人體の寫生が數百枚あるが、その大部分は君の謂はゆるこの鷄小屋の中で出來たものだ。僕のこのバネのゆるんだソフアだつてあまり輕蔑したものでもあるまい。この上には少くとも百人や、二百人の頭に美の字のつく女が坐つたことがあるんだから

ね。モデル専門家なんて聞きつこなしさ。巴里の誰れだつて僕の面の皮の貴ろいなんか問題にはしないんだから、そんなことは格別問題ぢやないさ。そんなことより僕の誇りたいのは僕の到達した、僕獨得の境地なんだ。第一、僕はあまりに多く見たから女の肉體の誘惑と云ふものが、全然美の觀賞と云ふことに壓倒されてしまつたんだ。その結果、僕の目には一絲も掛けない裸體も、幾重にもつつまれた屍體も要するに同じことで、些かも性的に挑發することはないのだ。其反面には又いくら着物を着こんで居る女でも、それが人混みの中だらうが、街を歩いて居やうが、僕の眼さへ屆けば彼女の着物の障壁は立どころに消滅してしまふのだ。丁度老練な鑛山師が山を一見して鑛脈のありかを發見するやうに、僕の審美的本能は一見して女の『美脈』のありかを發見するのだ。それも百發百中、曾つて間違へたことがない。いつもそんなのに出會すと何とかしてその女に賴んで裸になつて貰ひ、心ゆくまで觀賞したいと願はないことはないよ。いつぞやこんなことがあつた。ある時劇場で一人の貴婦人を見つけたのだ。しかしこれは全く何うにも仕様がなかつた（勿論僕は試みやうと思つたんだが）。僕のそのときの惱みと云ふものはなかつた。病を病んだよりもつと苦しかつた――――彼女の特長はお腹のところと…………

もう好いよ。君はまだうづ〱して居る様だね。それはそうと人體美と云ふものについては、吾々不幸にして東洋に生れたものは全く研究の機會がなかつたのだ。處が僕は今こうして巴里にやつて來、しかも幸にも君の様な先達に逢つたのだから何とかして君のお陰で僕も啓發されたいものだね。何とか方法はないか。もし君のその豐富な經驗の中で最も理想的なものを見せて貰れたら、…………

君は未だ十分解つて居ないよ。何か、君の考へでは花と云へば巴里の花ばかりだと思ひ、人體美と云へば巴里人の美だけだと思ふのか。自己の威嚴を沒却するも亦甚しいね。パリスの『さよなら』の出たらめなんか信じてはいけないよ。

マー聽き給へ、ちやうど東洋の薔薇の美と西洋のそれと如何な差等があるか比較出來ると思ふか。それと同じで東洋の人體美と西洋の人體美との間に如何たる優劣があるかと云ふことを比較することは、自然的の差違、例へば骨格の大小、皮膚の色澤と云ふやうなことを除いて、絶對的美に關する限り到底不可能なんだ。人體美は巴里の女に限つたことはないのだ。と、同時に君自身の内に審美的獨自性を有しなければこの宇宙のあらゆる美も、神秘も結局君においてはむだだよ。僕は巴里で十年と云ふもの大に苦しんで來たが、その苦しみを經て、今や前途に一大曙光を抱いて居る。それは僕のこの訓練した眼をもつて行つて、東洋の人體美を發見したいことなんだ。僕は屹度、大發見をして見せるよ。

それはそれとして、君が僕によつて啓發されたいと云ふことは、それ程難問題ぢやないが、美しい肉體と云ふと——あ、殘念したね。マダム・ランシーと云ふのが居たつけ。これはもと、巴里大學の物理の講師をして居たが、此頃倫敦に行つちやつた。これは素敵だつたがね。それからマダム・ストアイヤンと云ふのが居たつけが、これは南の方の田舍でパン屋をやつて居る。彼女こそは有らゆるチントレツト、チチアン、ジオルジオネー等の作品も決して及ばない所の美の持主だつたよ。殊に君に見せてやりたいのは其肉の發育の素破らしいことだ。彼女の全身を通じて骨の存在すら疑はれるやうな匂やかな肉だ。興味を帶びて、潤ひのある律動的な、其美しさは、たとひ盲のクーチユールを以てしても完全に寫し出すことは不可能だ。殊に彼女の腰から下の結構はまつたく奇蹟と云つて好い。君は伊太利から來たかあのフローレンスのヴイナスを見て來ただらう。あれのみが僅かに彼女の美を髣髴せしめるかな。それに君はあの生きた呼吸の神秘は知るまい。如何なる藝術家、天才と雖もこれだけは畫布の上に、或は石膏の上に移植することは出來ないのだ。だからして僕は常に自分の心の中で考へるのだが、結局藝術は自然の上に出づることが出來るものであるか、それとも自然は到底藝術以上であるかとの疑問が起る。しかし結局神様の方が人間よりも優れた場合が多い樣だ。

、餘事はもう此位として、さて其處に彼女が立つて居るとしてまあ見給へ。ふくよかな腹の輪廓の線は兩側から次第に中央に向つて相迫つて來る、そして兩股の交會する上のところで相交はつて其處に美妙な孤線を描く。それから起つて又一直線に下に向つて地上にまで達する一線となるのであるが、其線が──また──例へば──實際例ふべき何者もないが──夢裡に聞く縹渺たる音樂か。信すべからざる溫柔、信ずべからざる勻淨、信ずべからざる餘韻──更に說明を加ふれば、其兩股の相接して作る所の一線は眞直に下半身を貫き一毫の破綻をも來さない、一毫一絲と雖も其間を通すべからざる密着──而もそれは決して肥り肉の密着ではない、と云ふだけのことだ。全く夢だ！あゝ、併し惜しいかな、この美しい一個の藝術も何と云ふことだ、背の高さ六尺三寸と云ふ紅毛兒、而も一パン屋輩の爲に蹂躙されやうとは運命の神も皮肉だ。まつたくこの世の因緣程おかしいものはないね。美しい女の、猿か牛か河馬見たいな醜男と一緒になつて居るのを餘りにも多く見るではないか。しかしこれは飛んだ横道に入つた。君への御接待として充分資格のあるのはまだ外に澤山あるよ。さうだ、先刻君が此ソファに坐つた時、エイリーンを想ひ出したが矢張り君と彼女とは緣があるんだ。君の爲に彼女を呼んで上げやう。容易に呼べるよ。併し何處に行つたものかな──。何れにしても此部屋は美しい女を觀賞するに理想的な背景ぢやないからね。第一、美の十分な展開に不充分だし、それに光線も不充分だから。少くとも畑遊ひの君見たいな人の爲に考へるんだからと──あ、最も好い趣向を思ひついたよ、君は遠來の客だし、僕も何とかして一度御歡待せうと思つて居た處だ。幸ひ、エイリーンは僕に特別にいいんだから、僕の要求なら何でも肯く。ぢや明後日と極めやう、君は正午十二時に此處へ來給へ。一緒にフォンテンブローの森へ行かう。あそこはいつも僕の遊びに行く處だが、その中でも四阿や、築山のあるあたりには自然の毛氈見たいな芝生がある。ちやうど新鮮の頃だし草も木も翠滴らんとして居るだらう。それに人馴れた栗鼠は樹から樹、芝から芝へ遊び戯れて居るだらう。そこ

に秘密のピクニックに行かう。——僕が引受けて十分君を啓發してやらう。それは屹度、君が歐羅巴から國へ持つて歸る御土産の内で最も印象の强いものに相違ない。膳立は一切僕がやる、が、もしか何かやりたいと云ふのなら何も要らないから果物でも買つてくれ給へ。それからレモナードとペパーミン位持つて來給へ。それで吾々は半日の清福を享樂しやうと云ふものだ。餘り話し過ぎたので少し草疲れちやつた。僕は暫らく横になるが、このベットの下の例の秘寶を貸してやらう。先づそれによつて多少でも見當をつけて置き給へ。

× × × × ×

中一日置いて吾々がフオンテンブローの森から巴里へ歸つた時、僕は全く今まで最も荒唐な、最も美しい、秘密の夢を見て居た樣な氣持であつた。

（終）



短篇三つ

陶晶孫

絶壁

瑞巌寺の石段を途中で外れて森の中に入つた。彼はすばしこく歩く彼女に跟いて行かなければならなかつた。登り切つた所で

「もう此れでおしまひかい？　何にも無いぢやないか」

彼女はさつさと歩きながら

「もう少しよ。」

と云つてどん／＼徑を分けて行く。

「奇麗でせう。」

云はれたので見れば、眼覚める如くに眼の前に——湾を越してSの市が半分見える。足の下にはU字状の海が細く絶壁の下にある。

崖の高さは二百メートル、一足踏み出して見れば眼が眩暈する程どに切り立つて

ゐる。U字形の奥は淵で、入口は小石の一粒づゝ見える水の平野、それが一條の勾配をなして雲のやうな波が立つてゐる。

彼女の説明によれば

「あすこの細い杵のやうなのが錢橋で、バラツクが停車場で、あらツ、學校よ、ほらつ、まあ學校だわ、何て奇麗でせう、好いところにあるわね。學校は、それから學校の後ろに見えるのは北山の墓地で、その後が惠泉山で鈴蘭のある所その右の太湖の中の洞庭山みたいのが錫山で、雪の積つてゐるのが二百里先きの龍山よ、まあSの町もこつちから見れば好いところだわ、本當に家がみな森に圍まれてゐるは。あすこが家で――見えないわ、森に隱れて――あれが體育場であの杉の眞黒い森が好いことね、森は好いわね、まあこの海の水。」

「森も海も皆日本みたいだ。」

彼はのう〳〵と一句云つた。彼女の大きい呼吸の度に着物の隙間から押し出される匂がエーテルの様に彼の鼻を刺す、薔薇と體臭と麝香の和え物だ。

彼の女は此の濶と此の海と此の市とその女學校の佳人だ。女學校を卒業する年に西湖へ旅行した時に彼を山の中腹に見付けて英語で話掛けたら、彼の返事は

「我不懂英文」(俺は英語は分らん)

だつた。それ以來、彼女は彼と友達になつて居た。今は彼女が修業して來た洋琴で女學校に住み、彼は久しぶりでわざ〳〵春を遊ぶ爲めに學校を休んで歸省した。

彼女は獨りではしやぎ、獨りで饒舌つた。ちやうど、彼女が、彼の着てゐる日本製の洋服、その爲めに日本臭くみえ

る彼を見たくないかの様に。

「あら此の絶壁は好い處だわ、妾今日ほど、此處から飛込みたくなつた事はないわ。」

「日本ぢやそれが流行るよ。」

彼女の話は腰を折られた。彼女は新しく出なほさなければならない。

「日本ぢや妾どもの學校のやうな戀は流行りませんの？」

「どんな戀か知らないが、日本の大都會には何でもある、無いのは世界各國產の乞食だけだ。」

「あなたはしよちゆう妾と云ふ乞食を連れていらしやるわけね。」

「美しい乞食をね。」

「さうだわ、まだ美しい間にどうしてもあなたが私の云ふことをきく迄妾ついて行くわ。」

「……」

「いゝ風だこと、此處から東の方をみると日本へ通ふ船が見えるかも知れないわ、そこにはあなたを戀してゐると云ふかたもいらしやるのね――であなたが歸へるとかたはきつと××さんを他へ遣つて迎ひに來て下さるわ――あら風、あなたのやうな細い方は絶壁の上ぢや危いことよ、本當にお獨りで風に吹き飛ばされて此の下の淵に落ちたりしたら如何なさいますの――妾だつたら獨りでは決して絶壁から落ちやしないわ――」

女は忽ちそのはち切れさうな兩腕で彼に飛び付いた。女の顏の粉の匂ひが彼の鼻を拍つ、彼は眩暈を感じた、思はず後退りしたら岩から飛び出した松の根を踏んだ。

引張るやうにして女は彼を絶壁から後退りさせ細長い松の林の草の中に連れて行つた、彼は啞然として居るのであ

る。

「ね、妾、是非此の上から丁度花を投げたときのやうにふわりと落ちてみたい。」

…………………………………………………………………。

…………………………………………………………………──

……。

「ね、ふわりと、薔薇の花を投げたやうに」

「うん、さうしやう、ふわりと薔薇の花が女の胸の中へ落ちるやうに落ちるんだよ、抱いて上げやう」

彼は、女を抱き上げた、松の木は飛び出した、松の木の間を青空が走つた。彼の氣息は空に向いて吹かれ、彼女の兩腕は彼の首にしがみ付いた。彼は勿論走り出したのである。

彼は躓いた、絶壁の片面を爲す草の斜面を兩人は投げ出された。空、草、空、松、柔い草、青い空、松の梢、それから彼、それから彼の女の白い足。

しかし海は、海、海、松の木は幸ひ兩人を止めなかつた。淵を爲てゐる海はやがて、別々に離れた兩人を滑り台から池に落ちるやうに受け取つた。

飛沫、飛沫、その白さ、それから眼に映るのは淺黄色の海水の感觸、口に吸ふ水と空氣、吐く水、青空の切れ端、それから──それから彼、それから彼の女の白い衣。

時計

彼女は電報を受け取つたけど、さつぱり停車場へ迎ひに行く氣はしなかつた。それで朝飯の後ベツトにもぐり込んで寢てしまつた。

彼女はときどき時計を見た、女持にしては大きい男持としては小さすぎる時計だ。

「まだ九時だな」

彼女は何となく物憂い、Fの大學へ赴任してゐる夫が今久し振りで歸つて來るのも飛んで行つて迎へるほどの熱がない。

布團の中にいさゝか瘦せた肉體を彼女は動かして居ながら片手には時計を握つて居る。

「何時の汽車で歸るのかしら」

彼女は又た時計を見た。

「いゝわ毎月のものつて云へば迎ひに行かなくたつて」

彼女は又た銀時計を見た。

「あら、さつきから此の時計を見てゐるわ」

彼女は急に氣が付いた。急に顏がほてつて來た。咽喉が乾いて來た。明るい所に顏を出してゐるのが恥かしいやうな何とも云へない氣がするので布團の中に潛り込んだ。

彼女は三年前、ある大學生に戀した、その大學生はPに居たので休みには彼女を訪問した。冬休みに此の時計を貰つた。彼女は此の時計が彼の戀の印に思はれて肌身離さず持つて廻つた。併し春の休みになつても、彼女の焦慮に拘らず彼は彼女に少しも強烈な戀を云つて來ない——もし彼女が彼の手紙をしらべたらそのうちに、何の戀も云つてない筈である、何故なら彼はPで新しい戀人との戀に陶醉してゐたから。

そこで最後が來た、彼の不誠意を詰る文句を彼女は書いて書留で出した（記念に交換したものをもどしませう）彼女は斯云ふ文句を書き込んだ。

しかし音沙汰がなかつた。彼はもうてんでに彼女の相手をする氣はないのだ、殊に（記念に交換）なんて彼は彼女の寫眞二枚持つてゐる丈だ、此れは折角だから貰つておきたい。

だが、彼女はさう行かなかつた。さういつまでも義兄と姉の家に厄介になつて居たくない、さつさと片付けて他へ嫁に行かなければならない境遇にある。だから、三ケ月間彼の手紙を待つた揚句彼女は彼からの多くの手紙を涙と共に瓦斯七輪の上で燃やして、その灰を庭へ棄てた、一枚皺くしやになつた彼の寫眞はとても燒くには惜しいが、彼から返事が來ないで肝癪を起したときに二つに破いた。それでもスカートのポケットに入れておいたがデパートメントストアで便所に入つたとき紙を出す時に糞壺へ落した。彼女はもう一度見てかたにしたかつた。

しかし、此れで彼女は新しい夫のところへ行くにはもう差支がない——時計は彼女は棄てる氣はしなかつた。持つていつたつてどうせわからないし、僅かながら金目のものではあるしするから、自分が買つたことにしたつて、死んだ母が買つてくれたのだとしたつて差支ないのだ。

彼女は今の夫と一緒になつてもう一年になる、そのうち同居したのは六ケ月ほどしかない、[illegible]たが

遺産に貰つた廣い家に居る。淋しいが夫が居ないから煩ひが少ない、それで彼女も時計の由來もそろ〳〵忘れて新刊の少女物語を讀んだりして日を暮して居た。

今、時計は彼女に一つの事を思ひ起させた。それは此の時計を貰つた日のことだ、東門で乘換へて西城へ歸らうとする彼を無理に送らせての歸路に、彼女から彼の手を抱へて可成に暗い胡同の中途で袂ねてきいてゐた戀人のすると云ふ接吻を爲たのを向ふから來た巡警に見られたことだ。

「S！」

彼女は吃驚して飛び上つた。

「あらお歸り」

「どうもないのか」

玄關の扉を開けると同時に夫の聲が爲た。

「えゝ一寸、何でもないの、一寸ね、あれ、で頭が痛いの」

「何だ迎ひに來ないから心配したよ」

「まあわるかつたわ」

「まあ寢ておれ」

彼女は起き上つて白い下衣を引ずりながら夫の洋服を脫がせた。

「本當に大丈夫か、お前は少し弱いからな」

男は兩腕を差延べた、それを彼女の肩において彼女を覗き込んだ。

彼女は急に周章した、顔を見られたくない、――。

彼女は急に男の首に兩手をからみ付かせた、そして男の大きい愚な學者のやうな頬へ………。

彼女は悲しかつた、…………………………彼女の夫は接吻を解する人間ではなかつたから。

「オイ論文で賞金を貰つたよ、お前が始終留守番だから何か買つてやらうと思ふ、さうだ一つ腕時計を買つてやらう、いつもさう思つて居るが忘れたり金がなかつたりするからな。」

「私いらないわ、此れで澤山」

「その時計はお前の姉さん所の大きい娘にやつてしまへ、時計を持つたことがないから喜ぶよ。その代り金の腕時計を一つ買て來やう。」

「でも、此の時計案外正確なのよ」

「何にもその時計だけが、正確つてわけではないよ。」

「でも――」

彼女は口籠つた。

「癒つたらT街へ散歩しやう、そして時計を見て來やうぢやないか。」

彼女は何となしに戀人を取られさうな氣がした。

胡亂と女學生

ある日、胡亂はある女學生と道を歩いた。彼に取つては若い女性と歩くことは誠に久し振りだ。

何を饒舌つたのかも覺えない。たゞ滅法嬉しかつた。何しろその女學生は、若くて、美しい上に愛嬌がたつぷりで、絶えず新鮮な話題を提出して女らしく羞む、胡亂と歩いたからたまらない。二人は情意投合して暗い道から明るい道へ、明るい道から暗い道へと肱と肩を觸れ合せながら突進した。

――だつて音樂會の晩に明日の七時に丁蕾書社に來て下さいつて、バックに入れて下すつた方があつたわ。

――で行つたの

――あらゆかないわ、

――なも如何な人か一寸見たつていゝな。

――だつて

――さう云ふ時には僕を衛兵にすればいゝんだよ。

――衛兵の鐵砲が恐い事よ。

――何でもSちやんその人と話して見るのさ。横からこれはいけないと思つたら僕が出るのさ。

――ぢや私「まあ兄さん」と云つてそれきりで歸つて來ませうね。

――だけどね「何です兄さん私はこの方とお友達です」つて云つて二人で行かれてしまひさうだ。

――そんな事ないわ。

――だけど此の次のプログラムはどうするの

――散歩？　海岸？

――それはいゝが僕もうお宅へ尋ねて行くわけにいかない。

——どうして？

——だつてひとの娘さんを何べんも尋ねるのが家の人に

——

——

——ぢやT書肆にしませうよ。

——それとも老鳥咖啡店か

——あとできめるわ

明るい道も暗い道も通り過ぎた。併し話はまだ盡きない。胡亂の戀心は面白くなつて來た。…………

……彼は一種風變りな女性尊重家だ。彼は健氣にも女性の友である。併し女性はだれも彼を知らぬこと勿論だ。だから彼の話術はさううまくない。彼は只喃々とすることが出來るだけで彼の話とは皮肉も掛け引きもない。だから彼は女學生の活潑な者の外——即ち カフエの女と内氣な女學生とは相手が出來ない。

——ポストへ投げ込まれない葉書が書かれた……………………………………

……………………………………………………我々は青年

…………………………………………………………。

彼はちつと思案する必要に迫られて來た。

と云ふのは彼女の彼に對する氣分を想像しなければならなくなつたからだ、好意、たしかに好意だ、友情、彼は彼女の友情を信じてゐる。愛、戀、そこだ、彼は別に彼と女學生とが戀して居ることにしなくたつて好い、だが彼は知り—

い、たゞ知りたい。

翌日、彼は彼女の手紙を受け取つた、充分に彼女の利口さが現はれてゐる。

――お便りありがたう御座りました

昨夜はいろ〳〵なお話を伺つて面白う御座いました。どうも有難う御座います。

どうぞ遊びにお出で下さい

日曜日はいかゞですか、御用おありですか、教會へは？

私は參ります

又た暑くなつて參りました、海へでもゆきたい日です。

――僕はフエミニストです、フエミニストは女性に好かれたことがありました、だけどさうして仲好くなつた兩人はある泥濘道を歩いて女學生のエナメル靴が泥に取られた時その人は女學生に手を貸したが好いかどうかを思案して居ります。

わかりました日曜日には――

胡亂は此處まで書いてしかし氣が付いた――勿論彼のかいた此の二つのはがきはポストに投込むのではない、此の次逢つた時に手渡しするのだ、だが、此の次出會ふのは日曜だから今日曜のことを書いたつて無益だ。

胡亂は別に戀を偽た氣も偽ない、たゞ彼の女友達と歩くことを樂しんでゐる。だが彼が彼の日課である所のピアノの練習の時に譜の間にはさまつてゐる彼女のはがきが不意に出ると彼は何とはなしのどよめきを胸に感ずる、達筆な紫色のインク、もし女學校の一年生だつたら確に此のはがきの主の姉にならうと云ふのであらう。

日曜、教會、教會、日曜、日曜、胡亂は數日間待つた。

いよ〱日曜だ。

胡亂は凛として出動した。

教會の門で出てくる彼女に逢ふ。

「おや」

「おや」

女學生はわけがわかつてゐる、教會を覗いたらもう時間は來てゐるのに彼が來て居ないから歸る所だ。

その教會の隣りに住んでゐる某洋人がステッキを振り〱出て來た、勿論教會は嫌ひである。

それを見た二人は丁度暗示が成立してその人と反對の道へ教會を退却した。

さて何處へ行かう。

どうも町が狹すぎる、歩くとすぐ人に出會ふのである。

――人に出會はない所へ。

――出會つたつていゝわ。

――でも、

――まるで媾曳するやうね。

――媾曳でなくて何です。

――だつて奥樣もちやんとある方と歩いたつて、

――でも女はケチだから彼此云ふよ。

――歩くのは好き?

——えゝ大好き、

——ぢや原を歩かう。

原は暗かつた。行き盡すと森があつた。森は暗かつた。森を越えると畑があつた。

……………………………………

——香水は何にが好き？ヴアイオレツト！ぢや今度是非一つ上げる——でも僕は香水屋へ入るとすぐ腦貧血を起してしまふ。だつて男が香水買ふのは變だもの。女性は物を買ふと嬉しい。それをつけ込んで物を賣る。カフエに猫を見付けて香水を持つてゆく者があつたが、でも今香水を上げると云ふてみると何となく賑かな氣分になつた。

ある友がある少女に香水を遣つた、少女はそれを付けて來た、彼女はその匂する胸をひろげてゐる、友は是非その胸に接吻したい、彼女は逃げ廻る。

友は甘く接吻をしたのにちがひない、彼の少女は此の樣な技術には慣れて居たから、彼は云つて居る、いくら熱心にしてもつひにいやな顏をしてまで接吻一つさせないやうな女は——駄目だと。

女學生は胡亂に無暗に同感した、胡亂は嬉しさの餘り何を彼女が云つたかをきゝ漏した。

胡亂の手は時に馬鹿に彼女の手に近よつた、でも胡亂は勇氣が少し足りなかつた、胡亂の鼻は時々彼女の頭の上に來た、でも彼女は彼女の髮の臭をかいだ丈けで濟んだ。

彼女は勿論その位の事は意識してゐる、勿論彼女も女だつた、矢張り別れ惜しい氣持でとう／＼別れる所迄歩いて行つた、そして内心は仕方なく兩人は別れた、

——（翌日のはがき）昨日は教會でいろ／＼お話を承つてありがとう御座いました。すつかりお伺ひ出來ないで殘念でした。

——此の次だ。

彼はさう云つてみた。



晝飯の前（一幕）

田漢

人物

母　五十六歳、元はある政客の夫人

その三人の娘

大姑娘（ダーグーニョン）　二十四歳 ┐
二姑娘（アルグーニョン）　二十二歳 ├ 紡織工場の女工
三姑娘（サングーニョン）　十五歳 ┘

鄰の少年　張吉（ツヨンキ）

鄰の少女　妙姑娘（ミヤウグーニョン）

地　長沙か何處かの都會の近郊。

時　一九二二年末

景

舞臺を二つに分けて、右の三分の二を客室兼厨房、化粧室、三妹の書齋にする。左の三分の一は、母と三人の娘の寢室になつて居る。大きい門があるから、母の寢て居る寢臺が見られる。蚊帳を掛けてある。二番目の娘が母の傍に居る光線暗澹。舞臺正面の部屋には、右の方に野原の道に通ずる門と大きい窓がある。其處から野原と場末の市街が見える。いい天氣だから陽光がきらきらと射し入る。小さい可愛らしい三番目の娘が窓際に座つて着物を縫つて居る。火爐に煎藥の罐がある。窓外の何處から、「三ちやん、三ちやん」と掛聲が聞える。三は吃驚して窓外に首を出す。

三。どなた、どこに居るの、まあ、妙姑娘(ミヤウグーニヤン)ぢやありませんか、なぜ隱れてるの、見えないと思つて？　さあ、どうぞお這入りなさいよ、ね、ね。

妙。(窓外に現はれる) いいえ、あたし上れませんわ、要があるの、お母さんの御病氣は少しはよくなつて？

三。ええ、今朝は少しよくなつたやうよ、今ちやうど寢て居ますの。

妙。大姉さんは、家(うち)にいらつしやる？

三。いいえ、今日は日曜で教會へ行きましたわ。小さい姉さんだけ家に居ますの。あなたこんな綺麗な着物を着て何處へいらつしやるの？

妙。あてて御覧なさい。

三。お祖母(ばあ)さんのところ？

妙。いいえ。

三。どこか城内の御親戚のところ？

妙。いいえ。

三。では何處？

妙。あの、仙姑廟のお寺へ芝居を見に行くの。仙姑廟には今日面白い芝居があるのよ。陳さんの細姑娘や張さんの杏如娘もみんな行くのよ。あなた、いらつしやらない？　私と一緒にいらしつたらどう？

三。（ふと元氣づいて）ええ、行くわ。（と云つてから、やがて陰欝の色を現はす）あたしね、一緒に行きたいのだけれど行かれないわ。

妙。どうして？　ああ、さう、お母さんがお惡いからね。そんなら明日一緒に曲馬を見に行きませうよ。

三。明日も行かれないと思ふわ。

妙。三ちやん、あなた此の頃あたしと遊んだことがないのね。明日曲馬を見に行つたつていいじやないの？　お母さんも今日は少しはいいんでせう。

三。あたしも行きたいんですけれど………。（自分のなりを見て黯然とする。）

妙。着物がないの？　構はないわ、大姉さんからお貰ひになつたあれを拵へ直したらいいわ。

三。あたし、今あれを縫ひ直して居るところなの。（窓から其れを妙に示す。）見てちやうだい、斯う云ふ風にしたらどう？

妙。大變いいわ。早くなさいよ。あたし明日の朝早く誘ひに來ますからね。今日はもう失禮しますわ、芝居が始まつて

居るでせうから。

三。さう、では行つてゐらつしやい。お饅頭とお餅を買つて來てちようだい、忘れちやあ駄目よ。

妙。ええ、きつと。(去る)

(三妹窓際に坐つて専心に着物を縫ひ直して居る。左の室から二番目の姉の呼聲がきこえる。)

二。三ちやん!

三。あい。

二。藥はどうしたの?

三。もうできましたよ。

二。そんなら早く持て來て頂戴、お母さんが起きて居ますから。

三。だけど、姉さん、お母さんはこつちへいらしつたら何うでせう? もう半月も其方の部屋にばかりいらつしやるのですもの。

二。お母さん、あちらへいらつしやいますか? あちらは此處よりずつと日當りがいいんですから。

母。さうですね、歩けるかしら。お前の肩に捉まらしておくれ。

三。(室の戸口へ行く) お母さんは今日は大變元氣になりましたね。(急いで椅子を塩梅する、窓を閉める。)さあ、これへお掛けなさい。(テーブルのところへ行て何を思ひ出したのか、「アー」と云つて、右の戸口から外へ驅けてゆく。)

(二番目の姉母を扶けて舞台正面の室へ出て來る。)

母。ああ、この部屋はよほど氣持がいいね。あんまりあの部屋に籠つて居ると、つい氣持まで滅入つてしまつて。ま

あ、今日はいいお天氣だこと、お前あの窓を開けておくれ。
二。風邪をひいたらいけませんよ、お母さんの病氣はまだすつかり直つては居ないんですから。
母。こんなお天氣なら構はないでせうよ。
二。(窓を開けて)ほんとうにいいお天氣だ、まるで春のやうですわ。
母。三姑娘(サングーニヨン)は?
二。(窓際へ行つて)三ちやん、三ちやん。
三。(窓の外で)あい。
二。お前、何して居るの?早くいらつしやい。
三。(窓の外で)はい、すぐ行きますわ。
二。お前、梅の花を取つて居るのね?まあ、お轉婆ね!樹へ登つてはいけませんよ、氣をつけないとおつこちますよ。その、一番下の小さい枝を折つたらいい、それでもう澤山よ。
隣の少年。(遠いところから)こら!誰だ!自家(うち)の梅の花を採つてゐるのは!誰だ、怪しからん!
三。(窓の外で)あたしよ。
隣の少年。誰?(だんだん近くなつて來る)あ、三姑娘(サングーニヨン)か。待て待て、其の樹へ登つたら池ん中へおつこちるぞ。僕が取つて上げよう、どのくらひいるの?
三。(窓の外で)一枝だけで澤山よ。
隣の少年。(窓の外で)では早くお降り、取つてあげるから。これはどう?

三。(窓の外で)それがいいわ。
隣の少年。ああ、これはあれよりずつといいや。
二。どうも有難う。
隣の少年。あ、もつといいのがある。
三。張の兄さん、もう澤山よ。
隣の少年。いいよ。もつと取て上げるよ。
二。(窓際で母を顧みて微笑む。)ほんとうにこの二人の子供は面白いね。
母。(微笑みながら)あの面白さうな聲をきくと、病氣も何も忘れてしまふよ。
三。(窓の外で)張の兄さん、ほんとうにもう澤山よ、あんまり取るとお父さまに叱られてよ。
隣の少年。構ふもんか、もう二つばかり取てやるかな。
三。あら、危い! 氣をおつけなさい、今もう少しで池の中へおつこちるところよ。あたし、どきつとしたわ。
隣の少年。なあに、大丈夫だ。あの山の上のあんな高い樹の上へでも僕は平氣でのぼるんだ。この梅の樹なんか何でもないよ。さあ、下りるぞ、へいッ——(樹から下りる音)さ、みんな僕に持たしておくれ、持て行つてあげよう。
三。いいえ、いいのよ、張の兄さん、どうも有難う。
隣の少年。いいえ、ああ、さう、三姑娘(サンクーニヨン)、あなたは今日お寺の芝居を見に行かないの?
三。行かれないの、お母さんが病氣なんですから。
隣の少年。僕は今日も城内へ行くよ、藥を買はないでもいいの?

三。今日はいいの、明日またお願ひします。

隣の少年。あなたは？何かいらない？

三。さうね、では石鹸を二三本買つて來て下さいな。もう此の前のはすつかり使つてしまつたの、だけどわたし、今日お金がないの。

隣の少年。いいよ、買つて來てあげるよ。(去る)

三。どうも有難う。(と、一束の梅の花を抱いて窓際に來る。)姉さん、御覽なさい、いい梅の花でせう。

二。まあ、きれいな花。

三。お母さんは？あ、あそこ。(と、急いで右の戸から花を抱いて這入る。)お母さん、御覽なさい、きれいな花でせうそれにいい香がするでせう。

母。ほんとうにいい香がしますね、わたしが病氣になる前に、あの梅の木はまだ蕾も出して居なかつたね。半月にもならないうちに、もうこんなきれいな花が咲いたのかね。

(その小さい枝の一つを摘んで三番目の娘の髮に挿す。)さあ、お前、これをあの瓶に生けておくれ。

三。はい。

二。(湯藥を持て)お母さん、藥が冷くなりましたよ、早くお飮みなさい。

母。ああ、飮みませう。

二。(藥碗を持て母に飮ませながら)お母さん、此の藥は大變によくききましたね。

母。それはさうだか、これを三服飮んだらば止めませうよ。

二。いいえ、陳先生は、此の藥がよかつたら少くとも六服飲まなければいけないと仰つしやつたぢやありませんか。

母。(藥を飲みながら)陳先生はそんなことを仰つしやつたけれど、こんな値段の高い藥は、わたし達のやうな貧乏人にはどうして飲めるものですか。「金があれば金であたる。金がなければ命であたる」といふ言葉があるけれど、ほんとうによく云つたものだね。お母さんの病氣も、やはり命であたるより外に仕方がないよ。

二。お母さん、またそんなことを仰つしやるのですね。あたし達三人がどんなに力が弱くつても、お母さんのお藥代ぐらひはどうにかなります。お母さんのお病氣はきつと直して見せますよ。

母。お母さんが病氣にかかつてから、もうお前達の働いたお金をよほど使ひましたね。あれからお前達三人は一日だつて樂に暮したことはなかつた、お母さんはお前達が、花のやうに萎れて居る姿を見ると、もうどうしても寢床にぢつとしては居られないよ。

二。お母さん、あなたはさうお思ひになりませんの、自分達の働いたお金でお母さんの御病氣を直すのが、娘としてのわたし達のこの上もない誇だといふことを?

母。それはお母さんも知つて居ますよ。お前達のやうな孝心の篤い、健氣な娘達を持つて居るのも、お母さんとしてのわたしの誇ですよ。然し矢張りお前達はお母さんのために誤まられてゐる氣がしてならない。

二。そんなことはありませんよ。お母さんはいろいろの苦勞をなすつて、わたし達三人をこんなに大きく育てて下すつたんですもの、今度はわたし達三人が、力を合せてお母さんを養ふのがあたりまへではありませんか。

母。お前達三人がみんな相當の教育を受けて、相當の人と結婚して、お母さんが三人の家へ住み廻ることができるなら、どんなに嬉しいことだらう。殘念なことに一番お前達を可愛がつていらしつたお父さんは、お前の三妹(サンメイ)のまだ歩

けない時分、政敵の手に暗殺されておしまいになつた。お母さんはかよわい女の手でお前達を育てゝゆかねばならなかつた。その時分近所の人達は口を揃へて「お前さんの娘達を早く人にやつた方がいい」と、お母さんに勸めたものです。お母さんは「うちの娘達は世間の娘達のやうに、さう輕々しく人にはやれない」と云つてやりました。すると近所の人達は「あなたの娘さんは王孫公子の夫人にでもなるのでせう」と嘲つたりしたものです。お母さんも亦、こんなことを云つてやりました「わたしの娘は王孫公子にやりたくはないけれど、少くとも娘達の愛に値する人でなければやらない」つてね。それからといふものお母さんも隨分苦しい思ひをしました。内職をしながら、出來るだけお前達に本を教へたりしたけれど、然しお母さんは幼い時分、お祖父さんから少し讀み書きを教はつただけで、とてもお前達の時代に適する學問を授けることは出來ないのです。それにあんなに人の善いお父さんが、あんな死方をなされたので、お前達の結婚もつい今まで遲れて來ました。お母さんはどうしてお前達のことが心配にならずに居られよう。

二。お母さん、あなたは何も心配なさることはありません。あたし達はお母さんを有難いと思つて居るので、些ともお母さんを怨んでなんかゐないのです。お母さんが授けて下すつた教育は完全な教育でないかもしれませんが、人格的な教育でした。あたし達はお母さんの御教育を受けたればこそ、こんなに貧乏してゐても猶あたし達の行き易い途を取りませんでした。お父さんの遺産と云つては何もありませんけれども、お父さんの死ぬまで正義をお守りになつた精神は、あたし達にとつて確に貴重な遺産でした。ですからあたし達姉妹はお父さんにもお母さんにも感謝して居るばかりなのです。

母。でも、お前達を相當なところへ嫁けないうちは、お母さんはどうしても安心が出來ない。

二。お母さんは、そんなに娘達から離れたいとお思ひですの？

母。出來ることなら、斯うしてお前達と水入らずに暮したいけれど、でもお前達は一生お母さんの傍に居るわけにもいくまい。お前達は二度とない黄金のやうな青春を、毎日工場の中にばかり捨てゝしまつて居るところを見ると、お母さんは自分の倖な娘時代を思ひ起さずには居られないよ。さうしてお前達のために泣きたくなる。お母さんは此のことを思ふと、自分の病氣以上に心を痛めてゐます。

二。お母さん、あたし達の事を心配しないで、體を大切になすつて下さい。あたし達は、愛する人があれば無論結婚しますよ。けれども人を愛することは必ずしも人と結婚する意味ではありません。人に愛されないでも生きてゆかれない事はないと思ひます。

母。お前の云ふことも道理があるけれど、何しろ是れはお前達の一生の事ですからね。

二。然しお母さん、あたしの考へでは一生の事よりも目前の事の方が餘程大切ですわ。今あたし達が一番心配して居るのは、明日何うして御飯を頂けるのか、何うしてお母さんのお藥代を拵へるか、と云ふことだけです。其れさへきまれば愁りと私達の結婚問題を談しませう。ね、さうでせう、お母さん。をや、お湯が沸いたわ。早くお母さんに含嗽の水をおあげなさい。

三。はい。

母。（含嗽して）大姉さんはどうして未だ歸らないかね？

三。大姉さんは、朝の七時頃もう教會へ行たのです。

母。今日はどうしてそんなに早かつたのかい。

三。伊牧師の奥さまのお宅へお寄りするのだと仰つしやつたわ。
母。あの奥様はほんとうに親切な方ね。
三。だけどね、お母さん、息子さんは隨分厭な人ですのよ。
母。どうして？
三。いつか大姉さんと牧師さんのお宅へあがつたとき、あの人が門の傍に匿れて、變な眼をして凝と大姉さんを凝視めて居ましたの。歸途に、なぜこんな厭なところへ來るのつて訊くと、大姉さんは「そんなことをお云ひでない、息子さんは厭な人でも牧師さまも奥様もそれは親切な方なのよ」つて、云ひました、だけどあたしは、あの家の人はみんな厭な人だと思ふわ。
二。あたしまた、牧師だの神甫だのつてものはみんな嫌ひなんです。いつか眞耶蘇教會の牧師があたし達の工場へお說教に來たときも、私と林の兄さんとが、みんなに話して、うんと反對してやつたわ。大姉さんがキリスト教信者になることもあたし初めつから贊成しなかつたのです。
母。大姉さんがキリスト教信者になつたのは無理もない、あの子はお前程性格が强くないし、それに一年前にはあんな不仕合せもあたしするからね。あの子は洗禮を受ける前の晩にもお母さんの膝の上に顏を伏せて「お母さん、わたしこれからはエスさまの御手に縋らなければ生きてゆかれませんから」と云つて泣いた。あの子になつて見れば、さうでもするよりほかに道がなかつた氣もするね。（嚔をし續て嗽をする。）
二、アラ！　お母さん、風をひきますわ。やつぱりあちらの部屋でお休みなさいな。三ちやん、はやくあちらへ蒲團を敷いて下さいな。

三。ハイ。(立ちかける)

(窓外の野道に上の姉の姿が現れる)

三。アラ！　大姉さまだわ。(急いて右手門から出て迎へる。)

(やがて妹に手を取られて長姉現はれる。)

大。唯今。——おや、お母さん、此處にいらつしつたの、風を引きますよ。でも今日は餘程よささうね。

母。さつき、藥を飮みに二姑娘(アルゲーニョン)を肩杖にして此方へ來ました。今日はお天氣のいいせいか、わたしも些とはよくなつたやうな氣がします。

大。神様は御惠み深いのね、あたし此の半月の間、お母さまの御平癒をどんなにお祈りして居たことでせう。

(母、また二姑娘に扶けられて、もとの部屋へ歸らうとする。)

大。母さん、もつと日にあたつていらしつたらどう？

母。もう隨分坐つて居ました。それにまた、何だか風を引いたやうですから。

大。そうですか、ではやつぱりお休みになすつた方がいいでせう。

(倶に母を扶けて左室に行く。)

大。(左室にて)三ちやん窓を閉めてお呉れ。

三。(左室にて)ハイ。

(長姉と下の妹と登場)

大。(几の前に座つて鏡に映つた自分の寂しい姿を發見して、つい悲しさが堪へられなくなり、泣きさうになる。)……。

三。（小さい聲で）大姉さん、どうかしたの？

（仲の姉登場、姉の様子を見て。）

二。姉さん、どうした？（聲を細くし）お金を借りて來なかつたの？ 構はないわ、どうにかなるわ。

大。（仲の姉の手を取つて。）お金なんかどうだつていいんだけれど、…………いつでも人を信じてばかり居るわたしが、どうしていつも人から騙されてばかり居るのでせう。

三。大姉さん、どうしたの？ 誰に騙されたの？

大。いいえ、これもみんな神様の試煉（こころみ）ですもの、お前、きかないでおくれ。

二。お姉さん、どうぞあたしに事情を話して下さい、だれがお姉さんを騙したか分れば、きつと復讐してやりますから。

大。二姑娘（アルグーニヨン）、姉さんのことは構はないでおくれ。あの人達には神様の教訓（をしへ）がほんとうに解つて居ないんだから、姉さんは宥してやつたの。

二。では、お姉さんはさつき、なぜ泣いて居たの？

大。あんまり悔しかつたから。

二。そんなら、妹の私にそれを打ちあけて下さいな。

大。お前達も宥してあげると約束しなければ、姉さんは話さないわ。

二。宥すべきことなら宥しもしますけれど。

大。ちや、やつぱり話さないでおかう、お前達に恨みを起さすよりも、わたしだけで耐へ忍んでゐる方が、ずつと平意（こころ）

江かなうでせうから

二。ぢや、兎に角宥すとして置きませう、さ、話して下さい。

大。わたしたちの僅かばかりのお給金は、もうすつかり使つてしまつたけれど、お母さんの御病氣は些ともよくはならならないでせう。それに歲暮だといつて他の家ではお年越の仕度もして居るのに、私達は先月の家賃がまだ滯つて居るといふ始末でせう、ですから姉さんは心配してね、それで先日伊牧師の奥さまにお話したら、非常に同情して下つて今日幾らかお金を貸してやると仰つたので、教會の祈禱が濟むと直ぐお宅へあがつたのです。

二。さうして？

大。そしたら奥さまは、喜んで貸して下さると仰つしやつたけれど、なかなかお金は出して下さらず、わたし達一家の先々のことに就て、いろいろお考へを聞かして下さるのです。奥さまの云はれるのには、お前さん達一家の苦勞はよく知つてゐる、然し三人の女の手でお母さんを養ふことはとても覺束ないだらう、それにお母さんの病氣は支那の醫者では直す見込みがない。それからお前の小さい妹は器量も良いし、性質も溫順で、利口だから、學校へ入れないと惜しいつて。

二。それはさうですね、お姉さんはどうお云ひでしたの。

大。わたしもさうは思ひますが、何しろ家が貧乏ではしやうがない、とお答へしたの。さうしたら奥さまは非常に敬虔な顏をなすつて「神さまはお前達のやうな貧しい人々には非常にお惠み深いのです、今はお前の神さまに感謝する時が來たのだ」と仰つたの。奥さまは牧師さんと相談して、牧師さんのお金で、お母さんをエール醫院へ入院させ、三ちやんを益智學校へ入學さすやう、その時もう定めていらしつたのです。

三。まあ！　矢張り牧師さん御夫婦は御親切な方でしたのね。

二。三ちやん默つておき。お姉さん、それからどうなつたの？

大。但し、それには一つの條件が附いて居ますの。

二。
三。｝どんな條件ですの？

大。わたし、奥樣の嫁にならねばなりません。

三。まあ姉さまは、いつか門の傍で姉さまに變な眼付きをした、あの厭な人の奥さんにならなきやならないといふの？

大。……………

二。まあ、さうですの。……………

大。これがお前達一家を救ふわたしの唯一の道だと奥さまは仰つしやるの。それから、あの息子さんの人品や學問を自慢なすつたあとで、「よし倅がやくざ者であるとしても、倅との結婚でお母さんの病氣が直り、妹が文明教育を受けることが出來ればお前は犧牲にならねばならぬ。キリストの教訓のうちで最も大きなものはこの犧牲である。キリストは世の人々の罪を贖ふために、盜賊と一緒に十字架に付けられたではないか」と仰つしやつたの。

二。そんなら、お姉さんは犧牲になるおつもりなの？

大。わたし、其のことで苦んで居るのです。

三。大姉さん、大姉さん、あなたはどんなことがあつても、あんな厭な人の所へ行つてはいけません。あんな馬鹿息子があたし達の兄さんになれるものか！　それに、あたしお姉さんを犧牲にして文明教育を受けるよりも、一生涯ABC

のAの字も知らずに終る方が、ずつと幸福ですわ。ね、ね、二姉さん、さうでせう。

二。さうですとも、ほんとによく云つて呉れましたのね、お前はほんとうにあたし達の可愛い妹ね。………お姉さん、三ちやんは姉さんを犠牲にするよりは文明教育なんか受けない方が幸福だと云つて居ますが、お母さまだつて矢張りさうだと思ひますわ。可愛い娘を犠牲にしてまでも二三年の長生きはしたくないでせう。今度の病氣であたし達の働いた僅のお金を使つたばかりでも、ひどく濟まながつて居るお母さんですもの。

大。わたしだつて、さう思はないでもないのです。だから苦んでゐるのだよ。牧師さん御夫婦が今日までわたしに持つて下すつた好意も同情も、みんなそんな目的から生れて居たのかと思ふと、何だか人間が淺間しく思はれてならない。」それに不仕合はせな私がこんなに幾度も人に騙されたことを思ふと、つい泣きたくなつたの。姉さんは、宗教生活に這入つてから、今日ほど心を亂したことはなかつた。…………(間)………、でも平和がまた戻つて來ました。…わたしはさう云ふ人達を宥すことが出來たのですもの。

三。本當に憎らしい奴だわ。

大。お前も、さつき宥して上げると云つたぢやないの?

二。でも、姉さんの主義ももうすぐ破産よ。今のところあの人達を宥す宥さぬの問題よりか、お母さんの藥代と明日の御飯をどうするかが重大問題よ。お姉さん、これから一緒に工場へ行きませうよ。

大。わたし達の給金はもうすつかり貰つて居るぢやないの。

二。お給金は貰ひましたけれど、工場では毎年年末の手當を出して居るでせう、だからあたし達三人で、少くとも十元くらいは貰へますわ。

大。そんなものがあてになるもんですか。この前、張さんが總代で重役の彭さんにお頼ひした時だつて、今年は不景氣だから出せないと云つて、撥ねつけられたではありませんか。

二。それは嘘を云つてるのだわ、今年のやうな棉紗相場で、儲らないことがあるものですか。

大。さうかも知れないけれど、人の言葉は信ずる方がいいことよ。

二。姉さんは幾度欺されても矢張り人を信じたがるのね、陳の兄さんにも、キリスト敎にも、また資本家にまでも欺されて居るのに、矢張りその人達を信じやうとなさるの。

大。二妹！お前なんだつてそんな亂暴なことを云ふの？　陳の兄さんはわたしを棄てたけれど、わたしはあの人の善良な魂を信じてゐるわ、あの人はいつかはきつとまたわたしの傍に歸つて來ますわ。牧師さん夫婦にはほんとうに基督のお言葉が解つて居ないんです、だからあの人達が何をしようと其れは基督敎の罪ではありますまい。それからわたしが人をお信じなさいと云つたからつて、其れは資本家のでたらめを信用なさいと云ふことではありません。ただもしも彭さんの言葉を信じなければ、勢ひ喧嘩になるにきまつて居ます。此頃あの工場には過激な人達が少くないし、それに林さんを會長にした勞工會が組織されたばかりだし、何うせ唯の喧嘩では納まりますまい、結局やればやるほど相方の損失が大きくなるばつかりだと思ひますわ。

二。それは無論よ。澤山の人々の利益の爲に資本家と鬪ふ段になれば、それだけの事は覺悟の前だわ。資本家なんてものは放つて置けばいい氣になつて、たとひわたし達が殘らず餓死しようが、自分たちは平氣で酒を飮み、女を買ひ、自動車を驅け廻はらすんです。

大。でもね、わたし達は御飯を戴くだけで、…………ければならないんでせうか？

二〇　お姉さん、あたしは決してあなたの謂はれる生命の糧を輕蔑するわけではありません。その方が御飯よりも貴いかも知れませんけれど、御飯の方が確かに切迫した問題なんです。今わたし達はまだ朝飯をいただかないので、隨分お腹が空いて居ます。さうしてあんまり饑くなると、神樣が女性のために設けて下さつた唯二つの道を思ひ出します、一つは勞力を賣ること、もう一つは肉體を賣ることなんです。今の世の中では女工の賃銀は男工よりもずつと低いし、生活は以前よりずつと高くなつて居るから、勞力を賣つて御飯を戴くのは肉を賣るよりも餘程むづかしい。私達が他の女と違ふ點は、その難しい險しい道を歩いて居ることなんです。

大。二妹、それはわたし達三人が、お母さまから精神的なお乳をいただいたお蔭なんです。わたしは人と鬪ふよりも餓え死にした方がましだと思ふわ。わたし達は神樣から與へられた境遇に滿足して、それをお受けしなくてはなりません。たとへ此の世では誰一人顧みてくれないでも、天國へ行つたら神さまが私たちの傷口を撫でて下さり、涙を拭つて下さるでせう。

二〇　ほんとうに私たちは、姉さんのやうな信仰が持てたら、どんなに幸ひなことでせう。

大。(喜の色を現はす)　二妹(アルメイ)！　お前が本當に耶蘇さまを信じるなら、きつと今迄にない幸福を感じるでせう。耶蘇さまはわたし達のやうな貧い者の救主です。お前が本當に信じるなら、お前の生は欣びに充ちるでせう、お前の愛はどんなにか神さまに祝福されるでせう。

二〇　悲しいことに、わたしの考へはどうしても姉さんと一致しません。わたし達は此の世に來たくもないけれど、來た以上は、どうにでもして生きて行かねばならないわ。生の歡びも味はなければならないわ。然し此の世の中はわたし達のやうな善良な人々の歡びを奪つたばかりか、生きて行くだけの御飯や肴物をも奪つてしまつたではありませんか？

ですからわたし達は此の不合理な社會と鬪はなければならない、此の社會が改造されない限り、わたしはどうしても姉さんと一緒に愛や平和を語ることは出來ませんわ。

大。二妹(アルメイ)、お前はあんまり林の兄さんの主義にかぶれ過ぎて居ると思ふよ。

二。さうでせうか？　でもあなたの二妹(アツルメイ)は蓄音機とはちがひますよ。これこそわたし達のやうな人間の普通の悟りですわ。正直一點張りだつたわたし達のお父さまは、此の不合理な社會の生んだ不合理な政爭のためにお斃れなすつたではありませんか？　十幾年もの間苦勞して、わたし達を育てて下すつたお母さまもやはり此の不合理な社會に虐められて、病氣になつてもお藥すら飮めないではありませんか。わたし達の小さい可愛い妹はやはり不合理な社會の犧牲になつて、他家の子供はみんな着飾つて跳ね廻る歲暮が來ても、あれだけは陰鬱な心で、陰氣な屋根の下で、小さくなつてお姉さんの古着を拵へ直して居るではありませんか。

三。(噓晞)…………。

二。ですから、あたしは欣びに充ちた生を求めません、ただ苦みの少しでも少い生を求めます。永遠の生も欲しくありません、二度と來ない青春をあまり無駄にしたくないだけなのです。

大。二妹(アルメイ)、お前はそれで安心して働いて行けるの？　お前はまだ苦みの海に船を出して居ないから、とても生の苦みの價が分らないよ。それにわたし達の境遇では、青春を無駄にしなければならない時もあるけれど、その時お前は絕望しないでせうか？　姉さんは其の絕望の淵が怖さに神樣の御手にお縋りしたわけですわ。

二。あたしだつてそんな不安と絕望は感じて居ますけれど、然し死ぬまで鬪つてゆくつもりで居りますわ、神さまの手なんかに縋りたくはないわ。

大。（微笑して）それはお前が姉さんよりも幸福だからだよ。お前は耶蘇さまの手がなくとも愛の神さまの手に縋ることが出來るからだよ。とにかくお前は林の兄さんと手を携へて、みんなの利益のために鬪つておゆきなさい。わたしはお前達の幸福を神さまにお祈りしませう。

二。（顏を赤くしながら）お姉さん、どうも有難う。しかし私達は馬鹿でしたね、長話をしてお腹を空らしてしまひましたわ。さあ、今日は九時頃、會社の事務室に集る約束があるんですから、早く行きませう、ね、姉さん。

大。いいえ、今日はやつぱり行かない方がいいと思ふわ、明日のことは、わたしもう歸途に×のおぢいさんに賴んで置いたのです。明日の朝早く持て來るつて云つてましたわ。

二。でもお姉さん、みんなの事ですから是非とも行かなければなりませんわ、あなたがどうしてもお厭なら、わたし一人で行つて來ますわ。

三。小さい姉さん、お晝飯を食べてからいらつしやいよ、すぐ支度しますから。

二。いいえ、林の兄さんと朝の九時頃行くと、堅く約束したのだから、やつぱりあたしは直ぐに行くわ。姉さんは三ちやんと家にいらしつて、お母さんの看護をして下さい。あたしは行て參ります。

大。二妹（アルメイ）、お前是非行くのなら、なるべく早く歸つておいで。例へ要求が聞かれないでも、決して彭さんと喧嘩をするんではありませんよ。お母さんと姉妹が家に居て、お前を待てゐることを忘れてはいけませんよ。

二。はい、よござんす、わたし直ぐ歸つて來るわ。（鏡の前でちよつと髪形を直し、左室へ行つて母を覗いてから大、三に）お母さんはよく睡つて居らつしやるのよ。これだけは神様のお惠みね、では行つて參ります。（右門から出て行く。窓外の路から微笑をもつて姉妹に）うまくゆけば、あたし家でお晝飯を食べますから待て居て頂戴ね！

三。え〻、待つてますわ。

大。ほんとに早くお歸りなさいよ。

二。直ぐよ、心配しなくてもいいわ。(去る)

(左室で母の叫ぶ聲が聞える)

母。あ〻娘や、往つてはいけませんよ！　往つてはいけませんよ。(哭聲)

大。お母さま(左室に驅け入つて)お母さま！　どうなすつたの？　わたし達みんなここに居ますよ。

三。あたしも居ますわ、お母さん、どうしたの？

母。(周圍を見廻し)あ〻、夢を見たのか！　汗がびつしよりですよ。

三。お母さま、どんな夢でしたの？

母。わたしは今、かう云ふ夢を見ましたよ。澤山の兵隊が此處いらへやつて來たので、お母さんはお前達を部屋の中へ隱して、出ないやうに吩付けて置たのに、門の外で陳の兄さんの呼聲が聞えたものだから、大姉さんがお母さんの吩付けにそむいて門の戸を開けると、直ぐ兵隊に捉まつてしまつたのです、それで聲を出して泣いたのですよ、馬鹿な夢でしたね。

大。あ、(三妹を顧て)お母さんはまた去年の事を思ひ出したのね。

母。ほんとうに女ばかりでこんな道ばたに居るから、始終はらはらして居なければならない、お母さんが直つたら、みんな工場をよして、どこか山の中へ引越しませうよ。

大。さうですね。

三。アラ！お母さんの額の熱いこと！

大。アラ！ほんとうにこんなに熱い！きつとあつちの部屋で風を引いたのよ。

母。さうかも知れませんね。(あたりを見廻し、小さい娘に)小さい姉さんは？

三。小さい姉さんは今工場へ行きましたの。

大。アラ、お母さんの手の熱いこと。三妹(サンメイ)、お前お母さんの傍に居ておあげ、あたしお醫者の陳先生をお迎へに行つて來るから。

母。お前、行かなくともいいよ。少し風を引いただけで大したことではないからね。それに今あんな馬鹿な夢を見て、汗がびつしより出たんですからすぐ直るでせうよ。それよりも、お前達みんなお晝飯を食べたかい？

三。まだ戴きませんわ。小さい姉さんのお歸りを待て居るのですもの。

母。さうかい、それなら大姉さんは三妹(サンメイ)に着物を直しておやり。可愛さうに三姑娘(サンクーニヨン)にはいい着物が一枚もありはしない。さつき三姑娘が自分で縫て居るのを見たが、お前もつと針仕事を教へてやらなけりや駄目ですよ。

大。さうですね。

母。さあ、もう少しわたしを寢させてお呉れ。お前たちは、あちらで裁縫(しごと)をなさい。

大。(母の蒲團を叮嚀に押へて三妹と一緒に出て來る。)三妹(サンメイ)、急いで店へ行つて紅砂糖と白砂糖とを買つて來てお呉れ。

三。生薑のお湯をこしらへるの？

大。えゝさうよ。(小聲で)お母さんは御病氣が直りきらないのに、また風を引いたんですから、早く直さなければいけませんわ。此の前の生薑がまだ殘つてゐる？

三。まだ少しくらひあるわ。
大。わたしは生薑を搗くから、お前はやく砂糖を買つて來ておくれな。
三。(お金を受け取て)ぢや、あたし行つて來ますわ。
大。(窓際にて)お前、急いで行つて來ておくれ。
三。ハイ。(姿が見えなくなる)
(大姉、三妹の着物を縫ひながら母の方へ氣を配る。そして思ひあまつて合掌し祈禱する。)
(三妹、窓外の路まで歸つたとき、向ふから妙姑娘の呼聲が聞へる。)
妙。三姑娘(サングーニヨン)!
三。ああ、妙姑娘(ミヤウグーニヨン)!お芝居はもう濟んで?
妙。(やはり窓外の路に姿を表はす。)ええ、もうお晝御飯ですもの。今日のお芝居、面白かつたのよ、あなたがいらつしやらなかつたのは本當に惜しいわ。どこへいらしつたの?
三。あたしね、むかうの店へ紅砂糖と白砂糖を買ひに行つて來たの。
妙。誰か風を引いたの?
三。家のお母さんが。
妙。さう?御病人ですからよくお氣をつけねば。あ、三姑娘(サングーニヨン)、あたしあなたにお饅頭とお餅を買つて來ましたわ。(一緒に窓際に來る。)
三。さう、よく覺えて居て下すつたのね、どうもありがたう。

妙。いいえ。(家の中を遠から覗く) 大姉さまはもう歸つていらつしたの？
三。ええ。もう歸つて來ましたは。小さい姉さんだけ一人で工場へ行きましたの。
妙。ああさう。今日はね、何でも紡織工場の方が大騷ぎだつたさうよ。
大。(吃驚して急いで窓際に來る。)まあ、妙姑娘(ミヤウグーニヨン)ぢやありませんか？
妙。(窓外から) 大姉さま、今日は。わたしお寺へ芝居見に行て來ましたの、面白い芝居でしたわ。
大。さう、ああ妙ちやん、紡紗工場に大騷ぎが出來たつて本當ですか？
妙。本當らしいわ、芝居で工場の方から來た見物はみんな其の噂をしてゐました。何でも澤山の職工達が工場の事務室へ押し掛けて年末手當を要求したけれど、重役の彭さんが頑固な人で、其れを容れなかつたと云つて、皆で重役を毆つたので大騷ぎになつたんですつて。お寺の見物人はその話をきくと、芝居をそつちのけにして潮のやうに工場の方へ駈けだしたものですから、あたし怖しくなつてお餅を買ふと急いで歸て來ましたの。
大。まあさうですか？あなた途中で家の二姑娘(アルグーニヨン)に逢はなかつたの？
妙。いいえ逢ひませんでしたわ。
大。まあどうしませう。妙姑娘(ミヤウグーニヨン)、お茶をあげますから、ちよつと家へおはいりなさいな。
妙。ありがたう。でも今日は失禮しますわ。明日また小母さまをお見舞に來ますわ。
大。ありがたう。
妙。さよなら。
三。さよなら。妙姑娘(ミヤウグーニヨン)、お餅とお饅頭をありがたうよ。

妙。いいえ。(去る)

三。(右の門から入つて、砂糖を置き、饅頭と餅を姉に見せる。)お姉さま、はやくこれを喰べませう。このお饅頭はまだ暖かよ。

大。三妹(サンメイ)、お前何にも氣にならないで饅頭なんか喰べられるの？(小聲で)小さい姉さんが何うなつたか、わからないぢやありませんか。

三。(饅頭を手から落して)アラ、お姉さん、どうしませう。

大。わたしがあんなに止めたのに小さい姉さんがどうしても聞かないものだから、とうとうこんな騷ぎになりました。こんなことがあつたら、お正月になり次第、わたし達は馘首されるでせう。本當に小さい姉さんはあの林さんに誤られて居たのですね。

三。お姉さん、どうしませう。

大。叱！小さい聲で。お母さまに聞えたら大變よ。でも小さい姉さんもそんなに世間知らずでもないから、お母さまや姉妹に心配させるやうなこともしないでせう。兒に角生薑湯を拵へて、お母さまに差し上げてから、お晝飯の支度をするんですよ。御飯の出來る頃には屹度小さい姉さんも歸て來るにちがひないよ、さ、お前早くお湯を沸かしておくれな。

三。ハイ。(吩付けられたことをしながら)お姉さま、あたし何だか心配でしやうがないわ。彭さんのやうな頑固な人が職工に毆られたんで、もしかすると衛兵に發砲を命令しはしないでせうか。もし小さい姉さんが其の彈に當つたらどうしませう。

大。三ちやんや、そんな馬鹿なことお言ひでないよ。そんなことがあるもんですか！重役や事務長は資本家でも矢張り人間ぢやないの、そんな殘忍な事が出來ますか？それにお母さんのやうな善良な人が、大切な娘をなくすなんて、そんな不仕合はせなことがある筈はない。

（遠い所から銃聲が聞えて來る）

三。（悚然として大姉の手を握る）大姉さま！鐵砲の音！

大。しッ！

（聞えなくなる）

大。お前の氣のせいですよ。お前、ほんとうにしつかりなさいよ。お母さまに知れたら大變よ。

三。あたし、心配でなりません。

大。無理もないけれど。でも神さまを信じて居れば大丈夫よ。神さまは決してあたし達を失望させないからね。

（また二三發聞える。）

三。アラ！またよ！

大。（顏色が變る、强ひて押鎭める、祈禱する。）神さま！

三。（姉を抱いて）お姉さま！ああ、どうしませう。

大。三ちやん！しつかりなさい。大丈夫ですよ。第一お母さまに知らしてはなりません。小さい姉さんがきつと今に歸つて來るからはやく御飯の支度をなさい。

三。でも　あたしどうしても安心が出來ませんわ。（遂々泣きだす）ああ、あたしの可哀さうな小さい姉さま！

大。（妹を抱き其の口を押へ）しつ！　馬鹿な子ね！　大丈夫だよ。泣かないでね。お母さんに聞えたら……。

（緊張と沈默の數分間）

隣の少年。（遠い路から駈けて來て、愴惶として窓際に現はれる。）三姑娘（サングーニヨン）！

三。（驚く。）ハ！

隣の少年。石筆を買つて來たよ。

三。ありがたう。

隣の少年。大變だよ、小さい姉さん居るかい？

大。いいえ吉弟（ギテイ）！紡織工場のことを知て居るの？

隣の少年。それを知らせやうと思つて一生懸命駈けて來たのさ。大變だよ。

大。しつ！吉弟、小さい聲で。（二人窓際に寄る。）

隣の少年。さつき城内へ行つたらね、學校の近所で、紡織工場の職工が重役を包圍して手當を要求してゐるつて話を聞いたんだ。それから半時も經たないのに、政府は鎭壓の軍隊を派遣したんだ。僕も面白半分に皆と一緒に工場へ行つて見たら、大騷動の最中だつたよ。そのとき聞たら、職工側の代表者は林と云ふ人なんだつて。

大。
三。　あ！

隣の少年。重役の彭さんを毆つたのは他の人だつたけれど、代表者だと云ふので軍隊は林さんを捉まへて、直ぐに銃殺してしまつたんだつて。

大。——あゝ林の兄さん！
三。——

隣の少年。さうしたら一人の若い女が、外から駈けて來て、林さんの屍骸に縋つて大聲で泣いたんだつて。それからその女が憤慨して今度は多勢の職工の先頭に立つて、もう一度事務所を包圍したもんだから、軍隊がまた發砲して、二三人の職工が續けさまにやられて、その女工もとうとう彈にあたつて、林の屍骸の側に倒れて死んでしまつた。

大。あ、わたしの妹！

三。あ、あたしの姉さん！

隣の少年。僕は工場の外で聞いただけで、よくは解らないけれど、見た人の話ではその女工の着物や顏容が何だか小さい姉さんのやうに思へたので、小さい姉さんが家に居るかどうか確めやうと、一生懸命駈けて來たんだよ。途々居てくれればいいがなあと心の中で祈つて來たんだが、居なかつたのかいそしていつ出掛けたの？

三。（大姉を堅く抱く）お姉さん、どうしませう。吃度小さい姉さんに違ひないわ。

大。わたしの二妹（アルメイ）！　お前とうとうやつてしまつたのかい？　あつてはならぬことがとうとう事實になつてしまつた！　神さま、あなたは私の愛したお父さまを奪ひました。お母さまを病床に就かせました。そしてとうとうわたし達の愛する姉妹の一人をもお奪ひになつたのですね？　神さま、今日までわたしはあなたのお力と教へを堅く信じて居ました。でも今となつては、もう何の頼りにもなりはしません、わたしは一體どうすればいいんでせう？（夢幻的に）ああ、わかりましたわ、あなたは……………！「眞理と正義……………」と仰つしやいますのね！　わかりました。さあ、わたしの二妹（アルメイ）！　姉さんが行きますよ。（右門から電光のように走り出す。）

三。大姉さま、大姉さま、小さな姉さまを捜しに行くの？　待つて下さい、あたしも行くは。(右門から續て行く。)

隣の少年。三姑娘(サンクーニョン)、僕も行かう。(みんな駈け出す。)

(藥罐の水が沸いて居る。砂糖が卓上にある。)

母。(左室の臥床に呻吟しながら)ああ熱い！　喉が渇いた！　三姑娘(サンクーニョン)、お茶を一杯お呉れ！　お茶がなければ水でもいい、聞えないかい。大姉さんや、お湯を飲ましておくれよ。三姑娘や。小さい姉さんや。お母さんは口が渇いた。ああ熱い。目眩がして來た。だれか早く水を一杯お呉れ。二姑娘、まだ歸らないかい。あ、あ。(聲が段々低くなる。)

——幕——

一昨日の晩これを譯了しました、仕事が忙しいので思ふやうに推敲が出來ない。然し大體の意味は出て居ると思ふ。「獲虎の夜」を譯すつもりですが少し長くて譯しにくい所があります。次の機會に譲りませう。

一九二六年五月　於上海　田漢

大。┐あゝ林の兄さん！
三。┘

隣の少年。さうしたら一人の若い女が、外から駈けて來て、林さんの屍骸に縋つて大聲で泣いたんだつて。それからその女が憤慨して今度は多勢の職工の先頭に立つて、もう一度事務所を包圍したもんだから、軍隊がまた發砲して、二三人の職工が續けさまにやられて、その女工もとうとう彈にあたつて、林の屍骸の側に倒れて死んでしまつた。

大。あ、わたしの妹！

三。あ、あたしの姉さん！

隣の少年。僕は工場の外で聞いただけで、よくは解らないけれど、見た人の話ではその女工の着物や顏容が何だか小さい姉さんのやうに思へたので、小さい姉さんが家に居るかどうか確めやうと、一生懸命駈けて來たんだよ。途々居てくれればいいがなあと心の中で祈つて來たんだが、居なかつたのかいそしていつ出掛けたの？

三。（大姉を堅く抱く）お姉さん、どうしませう。吃度小さい姉さんに違ひないわ。

大。わたしの二妹（アルメイ）！ お前とうとうやつてしまつたのかい？ あつてはならぬことがとうとう事實になつてしまつた！ 神さま、あなたは私の愛したお父さまを奪ひました。お母さまを病床に就かせました。そしてとうとうわたし達の愛する姉妹の一人をもお奪ひになつたのですね？ 神さま、今日までわたしはあなたのお力と敎へを堅く信じて居ました。でも今となつては、もう何の賴りにもなりはしません、わたしは一體どうすればいいんでせう？（夢幻的に）ああ、わかりましたわ、あなたは……………………！「眞理と正義…………」と仰つしやいますのね！ わかりました。さあ、わたしの二妹（アルメイ）！ 姉さんが行きますよ。（右門から電光のやうに走り出す。）

三。大姉さま、大姉さま、小さな姉さまを搜しに行くの？ 待つて下さい、あたしも行くは。（右門から續て行く。）

隣の少年。三姑娘（サングーニョン）、僕も行かう。（みんな驅け出す。）

（藥罐の水が沸いて居る。砂糖が卓上にある。）

母。（左室の臥床に呻吟しながら）ああ熱い！ 喉が渴いた！ 三姑娘（サングーロョン）、お茶を一杯お呉れ！ お茶がなければ水でもいい、聞えないかい。大姉さんや、お湯を飲ましておくれよ。三姑娘や。小さい姉さんや。お母さんは口が渴いた。ああ熱い。目眩がして來た。だれか早く水を一杯お呉れ。三姑娘、まだ歸らないかい。あ、あ。（聲が段々低くなる。）

——幕——

一昨日の晩これを譯了しました、仕事が忙しいので思ふやうに推敲が出來ない。然し大體の意味は出て居ると思ふ。「獲虎の夜」を譯すつもりですが少し長くて譯しにくい所があります。次の機會に讓りませう。

一九二六年五月　於上海　田漢

ブハリン原著
横田千元
富士辰馬 共譯

唯物史觀

（菊判）

定價參圓五十錢
郵送料二十八錢

濃霧を拂ふ旭日の偉觀！
我全學徒より待たれたる一書

現代最高の大思想たるマルクス學——之を哲學としては辨證法的唯物論、之を社會學としては唯物史觀、之を經濟學としては資本論である。然るに世の俗學者流或はマルクス經濟學を其の根本たる唯物社會學から、或は唯物史觀を其の根本たる辨證哲學から切離さうとし、その外、唯物史觀の改造、變造、埋造、マルクス學の曲解、誤解、無理解が、殆んど到る處に續出する今日、本書の出現は實に濃霧を拂ふ旭日の偉觀である。本書は堅く辯證法的唯物論に立脚して、詳かに且つ平易に親切に唯物史觀の原理と應用を解說し、一切の社會科學に對して唯一正確なる研究の方法、觀察の態度、批判の見地を指示するものである。著者の國際革命運動に於て地位に多言を要せず、思ふに日本現時の社會思想は、本書の出現に依つて一大時期を劃するであらう。

忽六版發賣

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

菊池寛著

文藝當座帳

定價金壹圓五十錢　送料十八錢

新刊

肱ついてゆつくり讀める文藝雜筆だ。かざらず、氣取らず云はんと欲する處を大膽卒直にのべたもので菊池氏の全生活、全人格が談笑の間に窺はれる愉快無比の書。文藝批評、演劇論、作家と生活、身邊雜事、讀書餘錄、世相觀、人物談、回想錄、將棋、抗辯等々何でもある。汽車の中、涼臺、避暑地の伴侶として此上なし、今後の文壇の茶話は本書を中心としてなされるであらう趣味の一本。好評無比であれば旬日にして數萬部を賣飛ばすだらう

菊池寛著　第二の接吻（四十七版）　定價貳圓　送料二十錢

菊池寛著　啓吉物語（十三版）　定價貳圓　送料廿二錢

菊池寛著　戀愛病患者（十四版）　定價壹圓五十錢　送料十八錢

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　改造社

蘇子瞻米元章

露伴學人

宋一代の文豪書聖といふべき人は二三には止まらない。歐陽永叔や、曾子固や、王荊公やは勿論のこと文豪である。爲政者としての名の方に掩はれてゐるが、司馬温公も亦椽大の筆を有した人である。朱文公も道學先生の名の方に掩はれてゐるが、其の文豪たるを否むわけにはゆかぬ。呂東萊も粹然たる好人物で、篤學温厚の長者であるが、どうして中々の文豪である。其の若い時の文であるから絢爛で、そして少し駢儷的であるが、左氏博議などは藻思の豐富であることを示して餘りあるのであつて、特にそれが先生の新婚當時、友人も遠慮して餘り訪問などをせぬ其間に做し出された文字で有ると聞くと、實に其の人柄も思はれて、ひとしほ嬉しい。蜜月文學で、あれほどのものは、古今に先づ類例があるまい。朱子や呂公の向側に立つて、道學的で無くて、豪傑的で、書齋的で無くて、實際的で、正々の陣、堂々の旗、一世の知勇を推倒して、今古の心胸を開拓するに於ては私に謂ふに一日の長ありと任じた陳同父は、一生に三たび獄に入りて生死の岐に臨み、一擧廷魁となつて天子と上皇と東宮とをして欣喜せしめたほどの奇異な運命、英偉の才の人であり、朱子をして畏敬せしめた位であるが、不幸短命にして終つて力を伸ぶる事を得無かつた。然し其の文は發揚暢達、人をして神氣を浩然たらしむるに足りる、もとより一文豪である。蘇老泉の手固い文、蘇子由の温籍で而もしつかりした文、いづれも其人の文豪たるに於て世論已に定まつてゐるものである。が、蘇子瞻東坡居士に至つては、天子の知を受

菊池寛著

文藝當座帳

定價金壹圓五十錢
送料十八錢

新刊

肱ついてゆつくり讀める文藝雜筆だ。かざらず、氣取らず云はんと欲する處を大膽卒直にのべたもので菊池氏の全生活、全人格が談笑の間に窺はれる愉快無比の書。文藝批評、演劇論、作家と生活、身邊雜事、讀書餘錄、世相觀、人物談、回想錄、將棋、抗辯等々何でもある。汽車の中、涼臺、避暑地の伴侶として此上なし、今後の文壇の茶話は本書を中心としてなされるであらう趣味の一本。好評無比であれば旬日にして數萬部を賣飛ばすだらう

菊池寛著　第二の接吻（四十七版）
定價貳圓　送料二十錢

菊池寛著　啓吉物語（十三版）
定價貳圓　送料廿二錢

菊池寛著　戀愛病患者（十四版）
定價壹圓五十錢　送料十八錢

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　改造社

蘇子瞻米元章

露伴學人

宋一代の文豪書聖といふべき人は二三には止まらない。歐陽永叔や、曾子固や、王荊公やは勿論のこと文豪である。爲政者としての名の方に掩はれてゐるが、司馬温公も亦椽大の筆を有した人である。朱文公も道學先生の名の方に掩はれてゐるが、其の文豪たるを否むわけにはゆかぬ。呂東萊も粹然たる好人物で、篤學温厚の長者であるが、どうして中々の文豪である。其の若い時の文であるから絢爛で、そして少し駢儷的であるが、左氏博議などは藻思の豐富であることを示して餘りあるのであつて、特にそれが先生の新婚當時、友人も遠慮して餘り訪問などをせぬ其間に做し出されたと文字で有ると聞くと、實に其の人柄も思はれて、ひとしほ嬉しい。蜜月文學で、あれほどのものは、古今に先づ類例があるまい。朱子や呂公の向側に立つて、道學的で無くて、豪傑的で、書齋的で無くて、實際的で、正々の陣、堂々の旗、一世の知勇を推倒して、今古の心胸を開拓するに於ては私に謂ふに一日の長ありと任じた陳同父は、一生に三たび獄に入りて生死の岐に臨み、一擧廷魁となつて天子と上皇と東宮とをして欣喜せしめたほどの奇異な運命、英偉の才の人であり、朱子をして畏敬せしめた位であるが、不幸短命にして終つて力を伸ぶる事を得無かつた。然し其の文は發揚暢達、人をして神氣を浩然たらしむるに足りる、もとより一文豪である。蘇老泉の手固い文、蘇子由の溫籍で而もしつかりした文、いづれも其人の文豪たるに於て世論已に定まつてゐるものである。が、蘇子瞻東坡居士に至つては、天子の知を受

けながら大に用ゐらるゝに至らなかつた其人に取つての不幸は然る事ながら、其代りに如何にも文人的詩人的の一生を終つて、後の人をして無限の思慕と同情とを寄せしむるに至り、其の詩文はもとより、一片の書でも瑣々たる行事でも、皆各炳燁の光を擧げて後人の眼を射り、曠達風雅の韻を遺して後人の胸に親みの多いものとなつてゐる。勿論文忠公はたゞに文豪詩豪を以て目すべき人では無い。其の大節讜論は史上に煥然としてゐるので、今更言ふまでも無いことである。で、公の流風餘韻を拾つて其の瑣事などを語るのは、むしろ公を尋常一樣の文人韻士として扱ふやうで、却つておもしろく無いとも云へば云はれるのであるが、今はたゞ其大を舍て其小を談り、公の燕居閒坐の時のおもかげを寫す。といふのは此の大才とも仙才ともいふべき人の日常平生の坦然夷然眞率風雅のところ、今の人の所謂生活の狀態を斷片的に語るのが、今の人には却つて親しみも有り、理會もあるところとして迎へられ、公の所謂頰上の三毛、眉後の三紋、人を寫して神を傳へるものであるからである。若し夫れ公の眞骨頭眞本領は、歷史が之を語り、公の詩詞文章がこれを語つてゐる。眞に深く公を知らんとする人は、直ちに史に就て公を知り、公の詩文に就て公を解するが宜い。

宋一代の書聖もまた甚だ少くない。聖の字を贈るには異論を申立てる人もあるか知らぬがそんなに窮屈に考へなければ、前に擧げた東坡居士も文豪であるばかりで無く書聖である。傳統師承を重んずる上から云ふと、東坡は誰の筆法傳授を受けたといふのでも無く、誰の書を學び傳へたといふのでも無いから、玄抄類摘みたやうな書では、何だか外道かなんぞのやうに、師承無くして獨自で一家を成したとしてあるが、何も蔡邕王羲之以來の筆法傳系に屬さなければ好くないといふ究屈な理合は無いから、崛起して一家を成したとて、それで結構なことである。腕に故障が有つたらしい人だつたので、左へ引く畫は勢があつて伸びて居るが、右へ下つて引く畫は縮んで短いと云はれてゐる。然樣かも知れないが、然樣いふ腕でも、あれだけの書が出來てゐるとすれば、愈々以て立派なことで、稱するにこそ足れ、貶するには

當らない。定家卿は中氣の氣味が有つて妙な筆つきであると云はれても、後の定家樣を書く人は一生懸命に其の中氣的のところを學ぶのである。宋人の字は、と云つて一概に貶する人もあるが、其字は其人から出るのであるから、晉魏の字をまる出しに出來したところで却つて褒めた談でもあるまい。宋人の字、明人の字で差支は無い、好くさへあれば好いでは無いか。蔡襄も當時に在つて一世から師として仰がれた人である。これは羲之以來の系統を引いてゐる立派な、云はゞ傳統的な端正優雅なものである。黄山谷は詩に於ても書に於ても東坡に雁行して、自ら弟子のやうに謙遜して居るが、どうして詩も書もおのづから一大家を成して居る。米南宮は勿論宋に於ける書の世界の偉人である。一ト癖も二タ癖も有つて、而も恐ろしい大天狗であつたので、後の人に厭氣を持たれて、惡くも云はれるが、容れられずして其の大なるを見るといふものである。當時米、蔡、蘇、黄と云はれて尊崇されたのは決して偶然では無い。水滸傳の聖手書生蕭讓が蔡太師の僞筆をする段に、四大家の書は天下に行はれて居るから、蔡太師の書を贋作するのは譯は無いといふところがあるが、あれは蔡襄と蔡京と同じ蔡氏なので、一寸打掠めて書いてゐるので、襄太師即ち蔡京も立派な書家であるが、四大家の日に入つてゐるのは、蔡京では無くて蔡襄なのである。此等の四大家の中でも、蔡君謨は地位もあり學術もあり、蘇子瞻、黄魯直は詩文の才を以て勝つてゐて、よしや其書が然程で無くても世人に重視さるべき傾が有るが、米元章に至つては、まつたく其書の俊逸を以て他の三家に伍して居るのであるから、單に書だけを以て論じたなら、むしろ三家に優つてゐる故に三家に伍したと云つても宜いか知らぬ。兎に角に南宮は書畫を生命とした風雅の人で、そして其の人となりも甚だ面白いのであるから、今文豪としての蘇東坡の生活の瑣談を雜然として傳ふるに對し、書聖としては米南宮を撰んで其の生活言動の興趣ある瑣談を傳へる。

下らない奴の想像した俊秀な人ほど厭はしいものは無い。彼邦の小説に、東坡に聰明敏慧な妹があつたとして、兄妹

互に嘲笑戯謔する談を、詩詞など挿んで記して居る。所謂世に傳ふるところの蘇小姐がそれである。其小説の記するところに據ると、東坡は非常の近視で、小姐は非常のおでこであつたといふ。それで近視を笑ふ詩だの、おでこを嘲る詩だのがあるが、詩は勿論皆俳諧體で、いづれも卑淺、取るにも足らぬものゝみだ。東坡の筆墨は妾の朝雲にまで及んでゐるが、妹の事に及んでゐるのは、祭亡妹德化縣君文が有るのみだ。其文に依ると、姑に事ふる母の如くにし、夫を敬する賓の如くにす、と有るから嚴貞の人の如く思はれる。小説戯謔の詩の如きは蓋し妄人の妄作で有らう。然し東坡が近視で有つたの、其妹がおでこで有つたのといふのは、面白い。近視やおでこの人に味方が出來るわけだから。

東坡の妻は王方の女で、名は弗といふのであつた。十六才で子瞻に嫁したのだが、子瞻其時は十九であつた。子瞻三十歳の時、二十七で王氏は先だつた。識の有つた夫人で有つたことは、子瞻が自ら草した墓誌に見えてゐる。娶つた時十九才といへば如何に子瞻でも勉强盛りで有つた。で、しきりに讀書してゐると、夫人——といふのも未だかはいさうな程の若い王氏は、たゞ默つて侍坐して終日去らなかつた。後に子瞻が一寸何か忘れた時に、えゝと、あれは何といふのだつたナ、といふ調子で、ふと書中の事を尋ねると、王氏はすつかり記臆してゐて答へた。それから他の書の事を問ふと、皆略之を知つてゐた。そこで後に東坡先生も、其の敏にして靜なるを知つたといふことだが、實に好い妻を得たもので、勉學相手の女房などは、如何にもかはゆらしくて宜かつた。此の王氏が死んだ後に、其妹を娶つた。死んだ妻が邁といふ一子を遺したから、且又賢良な人で有つたから、といふ譯で有つたらう、後妻は即ち同安郡君で、これも立派な人であつた上に、東坡居士五十八歳まで連添うて、元祐八年に亡くなつた。東坡が此人を祭る文に、我實少恩、惟有同穴、尚蹈此言、嗚呼哀哉。と云つてゐるのは、實に欺かざるの語だ。何人も妻を亡くした曉には、あゝもして遣れば宜かつた、斯樣もして遣れば宜かつたとは思ふものゝ、其の生前を振返つて見れば、吾が妻に對して吾が恩愛の足らな

かつたのを覺えて、そして心悲しく思ふのを免れないものであらう。これは情の深い人ほど然様あることが事實の心持で有らう。そして又今はたゞ如何ともすることの出來無い死別の後の、眞の愛情の逼り立つて來ることを覺えて、今たゞ墓墳を同じうして此の心を明かさうと思ふに至るので有らう。そこを單に八字でもつて、「我實に恩少かりし、惟穴を同じうする有らん」と云つてところは、眞に東坡先生が文を論じた時に自ら言つた通り、言盡きて意盡きざるもので、至情の到るところ、おのづから妙を爲してゐるものである。僅々八字で、千萬無量の思が籠つてゐる。そして先生の人からも、王夫人が數十年を先生に侍した有様も、すつかり人の眼に浮んで來て、まざ／＼と見える。こひねがはくば此言を蹈まん、嗚呼哀い哉、とあるが、其言の通りに八年ほど後に先生も終られたのである。夫人の卒した時、先生は五十八、日既に西山に薄るの年に於て夫人を亡つたのは不幸で有つたには相違無いが、十九の年から六十近くまで、賢淑な前王氏と後王氏とにかしづかれたのは、實に寡福では無かつたのである。

侍妾の朝雲は東坡が六十一の時に三十四歳で惠州に卒つた。先生が自ら記した朝雲の墓誌銘に、字は子霞、姓は王氏、錢塘の人、敏にして義を好み、先生に事ふる二十有三年、忠敬一の如し、とあるから、十二歳の時から先生に仕へたので、先生の朝雲の詩に、經卷藥爐新活計、舞衫歌扇舊因縁の句が有るから、前身歌舞場裏から出た人にはせよ、純な、かはゆらしい少女であつた時から、其の敏慧を見出されて身邊に使はれたものである。かつて東坡が自分の便々たる腹を撫して、此腹は、と女達に問うた時、或者は、滿腹の忠義と答へたり、或者は錦繡の腸肚と答へたりしたが、皆東坡の心には面白いとも思はなかつた。朝雲は笑つて、一肚皮不レ合二時宜一と答へたので、東坡が笑ひ崩れたといふ談が傳はつてゐるが、事實は何様か知らず、おもしろい、名高い談である。美しかつた人か何様かは知らぬが、如何にも聰明で、すいとしたところの有る人だから、さも美しい、風神のすぐれた人らしく思へる。東坡も榮えて居た頃は、自分で記して

居る通りに、家に數妾が有つたが、遷謫されたりなどして悲しい境界になつてからは、それ等の妾は四五年に相繼いで辭し去つたが、朝雲は東坡に隨つて南遷した。昔の白樂天の妾の樊素も、「春は樊子に隨つて一時に歸る」といふ樂天の詩句に據れば、樂天が老衰した頃には去つたのであるが、朝雲は東坡が惠州に謫されても猶隨從してゐたのである。晩年には佛を愛して、比丘尼義沖といふに從つて粗々佛理を識つて居たところから、東坡の詩に「天女維摩總解レ禪」の句があるのであるが、死に臨んでは金剛經を誦して大往生を遂げたといふ。中々超脫したところのある才女だ。で、東坡も、「如二汝宿心一、惟佛之歸。」と其の墓銘に記してゐる。東坡が悼詩に、「駐レ景恨無千歲藥、贈レ行惟有小乘禪。傷心一念償二前債一、彈指三生斷二後緣一。」とあるのも、如何にもふさはしい。朝雲に子は遯といふのが一人有つたが育たないで死んで終つた。それは東坡の四十九の時で、人の世を悟り盡して居る東坡にもそれは餘程痛かつたと見えて、二篇の詩が作られてゐるが、中に「歸來懷抱空、老淚如レ瀉レ水」といふ句や、「仍將二恩愛刃一、割二此衰老腸一」などゝいふ哀しい句がある。「母の哭する聞く可からず、汝と與に俱に亡びんと欲す。故衣は尙ほ架に懸り、漲乳は已に牀に流る」などゝいふ寫實的の句の人を感ぜしむるものがあるが、朝雲は誕生にもならずに死んだ此兒のために、ひとしほ佛に心を寄せたことでもあらう。然し娑婆は忍土である、會者定離は今更始つたことでも無い、文豪でも詩仙でも運命は仕方は無い。前妻の王夫人にも別れ、此の人の好い朝雲にも別れて、東坡の晩年は淡然泊然として、天命を靜觀して終つたのである。

豚肉を熟煮して柔脆ならしめたものを東坡肉といふ。それは全く東坡が文火を以て心長く豚肉を煮ることを可なりとしたのから起つたのではあるが、東坡肉東坡肉などゝいふと、さも東坡は肉食すきの人でゝも有つたやうに思はれるが、それは大間違で、東坡は普通の所謂支那料理黨では無い。「元祐四年十月十八日夜、王元直と酒を飮む。薺菜を啜つて之を食ふ、甚だ美なり。頗る蜀中の巢菜を憶ひ、悵然之を久しうす。」などゝ自記してゐる。薺は所謂ペンペン草である。つ

まらないものだ。然し東坡は此樣なもので酒を飮んでゐたのである。又同十一月二十八日、王元直と蕪蜜酒一杯を飮む、醺然として徑ちに醉ふ。親しく鈴匕を執つて薺青蝦羮を作る。之を食ふに甚だ美なり。なぞと自記して居る。薺と小えびの吸物である。紹聖二年正月初五日。成都の舟閣黎と夜坐す飢うる甚だし。家人鶏腸菜の羮を煮る、甚だ美なり、などゝある。よめ菜の汁である、甚だ美ではなさゝうだ。元符二年三月には儋耳の漁者が鯽二十一尾を賣りに來たのを、坐客と共に買つて、吳氏の客の陳宗道といふものに十二因緣の說法などをさせて小さな放生會をして居る。鮒膾と洒落ては居ない。元祐八年八月十一日の曉の夢には、故鄕の蔬圃を夢み。庄客が土を運び池を塞ぐとて働き、土中から蘆菔を得て客が喜んで之を食ふたところなどを見てゐる。大根の夢で、牛や豚やの夢では無い。記惠州土芋と題しては、「丙子除夜の前兩日、夜飢うる甚だし、吳遠遊、芋兩枝を煨いて啖はせらる。美きこと甚し」などゝ記してゐる。老先生も諸生と同じことに自然羊羮を賞美してゐるのである。東坡肉は「豬肉頌」といふ一文で後世に其名が傳はつたのだが、同じく「食豆粥頌」もある、豆粥なども賞してゐるのである。いやそれどころでは無い、先生自ら「東坡羮」と名づけて、其の引と頌とを作つてゐる「東坡羮」は不幸にして無風流にして油濃い物ずきの後人には持囃されないで忘れられたが、蓋し先生の得意なもので有つたらう。それは蔓菁や大根や例の薺やに薑などを加へて煮る其上に甑を置いて飯を炊くので、飯が熟すると同時に羮も亦爛れて食ふ可きに至るのである。「東坡居士煮る所の菜羮也、魚肉五味を用ゐず、自然の甘有なり」と記してある通り、魚も肉も用ゐないところが、先の喜んだところで有らう。應純道人といふ者が廬山に適らうとした時に其法を求めたから詳しく傳授したので、それで今に於て知られるのであるが、法の妙は蓋し釜の緣や瓷盌に生の油を少し塗つて、羮の沸涌を抑へるところに在る。生油が物の沸涌するのを抑へるのは、豆腐を造る時に「泡消し」といふことを油によつて行ふのでも知られるが、東坡羮はまだ實際に試みたことが無いから、何樣なものか知らぬ。但し材料が皆菜蔬で有るから、

そして甘鹹の味をも附けぬのであるから、至つて淡然たるものであらう。斯樣なものに東坡羹の名を命じてゐることや、前に擧げた通り淡泊なものを好んでゐるところから考へると、東坡は蓋し脂肪とろ〱の所謂支那料理黨では無くて、奈良茶粥に甘んじた元祿の俳諧黨の方に傾いてゐたらしい。東坡羹の頌もまたおもしろい。「甘苦は嘗つて極處より回る、鹹酸も未だ必ずしも是れ鹽梅にあらず。師に問ふ此箇の天眞の味、根上より來る塵上より來るや。」塵は物質だ、根は舌根だ。根上より來るや塵上より來るやと東坡羹の至眞至淡の味の來處を問うたところなぞは、流石に溪聲山色の偈を遺した人だけに洒落たものである。然しされば と云つて何も東坡はヴェジタリアンといふ譯では無い、雉子を賞した詩も遺してあれば、鱸魚を賞した詩も遺してある。赤壁賦では鱸に似た何だか知らぬ魚をも食してゐる。「江瑤柱」は大好物だつたに相違無い。非常に面白い俳諧體の「江瑤柱傳」といふ一篇の文を遺してゐる。江瑤は我邦の「たひらぎ」と少しは異ふか知らないが、先以て「たひらぎ」だ。白玉のやうなたひらぎに綠玉を削つたやうな竹の小串を打つた江戸は廢れて、東京ツ兒が豚ばかり賞味し、たまに之を知つた者も「たひら貝」なぞと變な訛をいふやうになつた今から七百年ばかり前に「たひらぎの傳」を立てゝゐる東坡は流石に老先生だ。近處に住んでゐる人なら青柳の柱でも獻じたい氣がする。鯉や鮒をも好んだと見えて、魚を煮る法を記して居るが、それも「からあげ」にして煮る今の支那風のコッテリとは似ず、二十餘年前に其法に依つて試みたことが有るがイヤでも無かつた。英國のウォルトン翁の酒煮と難兄弟のものであつたと記憶する。然し要するに坡仙は淡泊黨で、脂肪黨では無い。東坡羹の引及び頌を前に擧げたが、あれが藝術的になつたのが「菜賦」で、蔓菁(かぶ)や大根や、なづなを一流の煮方で煮て食ふ、それを立派な文學で一々如實に描寫し、任情に賦出する、何といふウソの無い、雅趣の有る、自由自在の事であらう。賦は坡集の卷二に見え、頌は卷二十に見えてゐる。且又坡翁が蔓菁や大根を食ふ、それは一は不如意の爲もあつたらうが、一は殺生が餘り好きで無かつた爲で、内心は殺生戒を保ちたく思つてゐる、然

し俗人で、生身であるから、食慾も動いて美味なものは食ふ、そこで「食鷄卵說」の中には、「吾久しく殺を戒めしが、惠州に到つて忽ち戒を破り、數數蛤蟹を食ひき」と懺悔してゐる。蛤や蟹を食べたとて、それが何で有らう。それでも後には食はねば好かりしものを思つてゐたのである。これを程朱學派の者は、晩年の東坡は弱蟲になつた、雜駁の學で、眞に得るところが少かつたそうだなぞと、野暮の口から行き過ぎなことを云つてゐるが、老いて心が優しくなるのが何の惡いことが有らう、當り前の推遷若くは進步と云ふものである。程伊川を東坡が好まなかつたので、反對派の流の例に立つ者は兎角東坡を惡口したがるが、東坡は人情を重んずる人で、人情に遠いことは大嫌ひの人である、超脫的のことは好きであり英雄的のことも好きであるが、ヘチ理屈やクソ禮式で人情に遠いことは嫌ひ、優美で無い感情を無忌憚に露はしたり抱持することは嫌ひな人である。蓋し然樣いふ人が老いて自然の勢で生物に對して慈愍の情が深くなるのに何の怪むべきことがあらう。平生萬事足る、欠く所はただ「一死」と云つたやうな豪氣の人が年老いてから、蛤や蟹を食つたのを、みづからオヤオヤと悔いたとて、それが何のをかしいことがあるものか、却つてそこに自然の情の美を着るべきで有る。西湖の秋涸に、東池の魚が窘んでゐるので、網師を呼んで之を西池に遷してやつた、其夜の詩が一篇有るが、中に「東坡また是れ可憐の人、泥沙を披抉して細碎を收む」といふ句がある。眞に「東坡也是可憐人」である。今年四五月、九段牛が淵邊から御溝に沿うて電車で麴町の方へ走ると、御溝の對岸の石垣は震災後崩れたまゝで今だに修復も出來ず、又御溝の水が甚だ汚く且つ涸れて、點々と白いものが泥上に見えてゐる。眼力が乏しくて其の數百千點の白い者の何たるかゞ解せなかつたが傍人に問うたら、人々は口々に、鯉です、鯉です、と云つた。七百年ばかりも進步してゐる今の世であるから、所謂蘇堤を築いて西湖の美觀を成したやうな閑事業をする蘇先生如きの人が無いのは勿論、皇居近い御溝の石垣が崩れても四年も五年も捨て置いて顧みず、西湖東池の魚を西湖に遷す如き愚なことをするものも無くて、汚したり涸らしたりした御溝の中に數千の

魚の腹の白さを日に曝して醜く爛れさせても、そんな小さなことに心を動かす如き人は無いエライ現代氣質をあらはして居るのであると、丁度其時懷中して居た坡集の卷八十の放魚の詩に思ひ合せて、一種の感を起さずには居られ無かつた。それは兎に角、東坡には又岐亭五首の詩が有る。其詩の叙に依れば、元豐三年正月、坡翁が黃州へ謫された時、陳季常が白馬青蓋で、岐亭の北二十五里の山上に迎へに出て來た。其翌年正月復往いて季常と相見えたが、坡は季常が自分を饗する爲に多く禽畜を殺すことを恐れて、殺を戒むるの詩を作つた。季常はそれから教を奉じて復殺すことを仕なくなつた、とある。五首の詩の其第一首は、季常の盛饌款待を享けた時ので、「掌を拊して隣里を動かし、遶村鵝鴨を捉ふ、房櫳器聲鏘き、蔬果巾幂に照る」などいふ句がそれを現はして居るのである。が、こゝにも東坡の趣味は現はれてゐて、「久しく聞く蔞蒿の美、初めて見る新芽の赤きを」なぞといふ句があつて、蔞蒿を賞美してゐる。其の第二首は即ち殺戒の詩で、「我は哀れむ籃中の蛤、口を閉ぢて殘汁を護るを。又哀れむ網中の魚の、口を開いて微濕を吐く」といふのから始まつて、廚公、王子を引いて、御馳走が尋常で無くても宜い、寒酸も却つて妙である、豪華も未だ可ならずである、と生物を多く殺すことの感心できないことを歌つてゐるのである。季常は東坡の友であり弟子である人であるが、坡の言は季常を動かし、岐亭の人も多く之に化して肉を食はざる者有るに至つたといふのは、子瞻と季常と皆仁慈の性の美、人を動かすに足る者が有つた結果である。猶又東坡の雜文に鵝の事がある。曰く、「鵝は能く盗を警む。錢塘の人喜んで之を殺し、日に百鵝を屠つて之を市に鬻ぐ。予湖上より夜歸り、屠者の門を過ぐ。群鵝の皆號びて、聲衢路に振ひ、訴ふる有る者の若きを聞く。予愴然として其死を贖はんと欲す。終に之を置く所無きを念ひて 故に果さゞりき。然れども今に至つて予が心に往來する也。鵝は獨り盗を警むるのみならず、亦能く蛇を却く、其糞は蓋し蛇を殺す、蜀人園池に鵝を養ふ、蛇即ち遠く去る。此の二能有りて、而して死を免る能はず、且つ雨を祈るの厄有り。悲しかな。安んぞ人々逸少の如きを

得んや。一逸少は即ち鵞を愛した王右軍である。文中、然れども今に至つて予が心に往來すといふところ、情の眞なることと人に逼るものがある。徐州殺狗を記する文には、「孔子曰く、弊れたる帷の棄てざるは、馬を埋めんが爲なり、弊れたる蓋の棄てざるは、馬を埋めんが爲めなり、」と權威ある孔子の言を引いて、「死するも猶ほ當に埋むべし、其肉を食ふに忍びず、況んや得て殺す可けんや。」と斷じて、狗を殺すはけしからぬと主張してゐる。鵞を愛して死を贈けんと欲し、狗を哀しんで死狗ほ埋むべしと云つてゐる。此の心の優しさから、晩年には殺生を戒むるに至つてゐるのである。其の猶ほ雞など食つてゐる時に當つても、「煎雞疏」が有つて、雞の冥福を祈つた文字を遺し、佛事を僧にさせて居る。佛に佞するといつて謗る者は謗るのも勝手だし、理に逆せぬと云つて嘲る者の嘲るのも、當つて居るか知らぬが、此の心に已む能はざる者があつて、此の文や此詩や此事を爲したのも、其の人がらの然らしむるところである。病氣で死んだ牛の肉などを喫つて、用舍酒を叩つて駄氣燄を揚げる奴には相手になれぬ、と此の美はしい性情を有つた人が云つたのは、實にホントの事である。「虔州に孤魂齋醮を薦するの疏」を作つたり、「枯骨を葬るの疏」を作つたり、「惠州祭枯骨文」を草したり、「徐州祭枯骨文」を草したり、自分が室を築かんとして地をならして古塚に及んだので、遂に命じて掩はしめて、「祭古塚文」を爲つたのも、皆此の優しい情の發露からである、其の思想が佛教に傾いて居るからばかりでは無い、雜學で徹底した信條が無い爲に老いて軟弱になつたといふからでは無い。成程東坡は佛教を容れてゐる。然しそれも卑小な小乘的見地を脫し得ないで、輪廻應報を恐れてゐるために、小善小戒に拘泥してそれを大切にするなどゝいふのでは無い。虛實は不明だが、自ら姓は「秤」だと稱して、天下老和尚の輕重を勘破するものである、と云つたといふ談さへ傳へられてゐる位である。佛經中の高深幽奥な楞伽や華嚴にさへ參しきつてゐるのである。參寥佛印等の高僧とも朋友づきあひであることは、淵明が惠遠をして虎溪橋を渡過せしめたと同樣である。何で佛に佞するところから故

生戒殺の事を敢てする如き下らない卑い見地に立つてゐるものであらう。斬猫撈蜆阿呵々の境界に到つてゐたらしいのである。老いて慈悲心の充實廣大するのが雜學無信據の爲ならば、雜學で信據無い方が化石的哲學者などより何程有趣有意義だか分らない。それ等の野暮な議論は姑らく擱いて、東坡の此の優しい性格及び感情の傾向は蓋し母に負ふところが多かつたと考へられる。東坡の母は、優秀な東坡兄弟を有しただけでも其の賢婦人たることは伺ひ知らるゝのであるが、其の賢であつたと同時に慈悲深い立派な人であつたことは爭はれない。東坡の少い時居た書堂の前には、竹柏雜花叢生して庭に滿ちて居り、いろ／＼の小鳥が其中に巣くうて居た。母の程氏は兒童婢僕を戒めて、決して鳥雀を危ぶめしめなかつた。それで小鳥も安心して、低い枝に巣くつて居たので、其の鷇は俯して窺ふ可くあつた。そんななので、桐花鳳といふ羽毛の綺麗な見ること少い仙禽のやうな鳥さへ來て、人を畏れずに馴れ遊んでゐたので、里人も異事と爲したといふことが傳はつてゐる。東坡も其弟の轍もおとなしい良い兒であつて、能く母の命を奉じてゐたこと、母の程氏の慈愛誠信の小禽にまで及んださまが窺ひ知られる。此の程氏は東坡の二十二歳まで存してゐたのである。東坡の性格の優しい一面や感情の動き方が、此の懐かしい程氏に本づくところ有るのは疑へ無い。又程氏は學問も有り、見識も有り、凛然たる氣節も有る人で有つて、東坡の幼時は此母から歴史知識其他を得たのであつて、程氏が漢の范滂傳を讀んで太息した時の談は、東坡の弟の子由が作つた坡の墓志、欒城後集卷二十二に載つてゐるのに見えてゐる。范滂は後漢の人で、慨然として天下を澄清せんとするの志の有つた人であるが、其の清廉剛直の爲に却つて罪せられて終つた。罪なはるゝに臨んで、滂と其母との訣別は涙の出る談であつて、滂の母が死刑にさるゝ吾が兒に對つて、汝今李膺、杜密と名を齊しうす、（李杜は皆當時の名賢）死も亦何ぞ恨みん、既に令名有り、復壽考を求むるも兼ね得可けんや、と云つたのは名高い談だ。子は其の節に死して、母は其の義を樹ぶ、實に悲壯な又慘悽の一場である。東坡の母は

毎日東坡に讀書を教へたり、古今の史實を語り聞かせたりしたのであるが、程氏が范滂傳を語り聞かせた時、事が母子に關するのであるから、思はず慨然としたのであつた。坡は其時僅に十歲の小兒であつたが、其談を聞いて、これも感じたのであらう。母の樣子を見て、「軾が若し范滂と爲るならば、母さんも亦之を許して下さいまするか」と問うた。すると程氏は、「お前が能く滂と爲るならば、なんで私が滂の母となれまいものであらうぞ」と語つたといふことである。そこで小兒心にも東坡は奮勵する、母は喜んで、「吾、子有り」といつたと云ふが、東坡の父の老泉も勿論堅確な偉い人であるが、母もまた凡常の人で無い。是の如き母の血を享け感化を受けた東坡が確乎として、そして優しい情緒の所有者で有つたに何の不思議が有らう。飮食の事から、談は少し橫路に逸し進ぎたが、要するに東坡の趣味は世俗的で無い、そんなところは通り越してゐるのである。豚や牛やの脂膩濃厚なのも嫌つた譯では有るまいが、コテ／＼した御馳走を悅ぶところは通り過ぎて、蔓菁でも大根でも、ちよいと其の「扱ひ」に味の有るのを嬉しがるところに到つてゐるのである。滋養だの、珍奇だの、馬鹿手數がかゝつてゐたり、クソ贅澤であつたり、紅樓夢に見えてゐる茄子一つ煮るのに澤山の鷄を用ゐたりするが如き、又は田舍成金が大御馳走するやうな大騷ぎ、そんな事は一切好まぬらしく見える。そして物の生命を取つたりするのは欲しない、何方といへば菜菓の方に傾くらしく見える。おもへば陳眉公だの、袁隨園だの、李笠翁だの、支那の文人で食單なぞ作つてゐるも有るが、大概我が邦の所謂茶人よりも低いやうに見える。坡翁は食單なぞ作るほど小さな人では無いが、たま／＼其の飮食に關することを書いてあるのを見ると、おのづから其中に染俗と撰を異にするものがあるやうに思へる。柑橘の爲に傳を立てたほかに、茘枝だの、龍眼だの、檳榔だの、菓物に關する詩文もちよい／＼見えるが、それは南方の邊鄙へ謫されたからのことだらう。

酒に關して東坡の筆墨は隨分多く費されてゐる。實際東坡は能ふ限りは毎日酒を飮んだらしい。然しそれは極めて少

最で、自記してゐる通りに、那方かと云へば樂物視して飲んで居たので、其の「飲酒說」に見える如くであつたらしい。酒量も元來劉伯倫や李太白の徒には及びもつかず、人に惡強ひなどされるのは大嫌ひであつた。至つて品の好い飲み方であつたのだ。そこで自らに隨分興のある談が出來てゐる。それは醉道士の圖に東坡が跋して、「僕もと酒を喜ばず、正父の醉士の圖を觀る、甚だしく盃を執つて耳を持つの翁を畏るゝを以てなり」と書すると、後に蓮子厚が其の跋を見て、「僕醉道士の圖を觀、卷末諸君の題名を展す、子瞻が題する所に至つて、發噱絕倒す。」といふ跋を書いた。日として盃を執らざる無しと自ら記したほどの人が、「僕素不喜酒」もをかしいが、餘ほど醉ひどれた風情を畫いてあつたものと見えて、盃を執つて耳を持つやうな翁には子瞻が畏れたのであらう。子厚は蓋し酒は子瞻より餘ほど強いので、そこで子瞻の跋を見て發噱絕倒すと書したのだらうが、他人の跋を批評をした跋もおかしくて洒落てゐる。すると其後また子瞻が其跋を觀て、子厚の文を見たから、再び跋を書いた。熙寧元年十二月二十九日、再び長安を過ぎ、正父に邢済臣の家に會し、再び醉士の圖を觀、子厚の題する所を見て、其の予の爲に噱するを知る也。耳を持つ翁は余固より之を畏る。子厚の若きは乃ち其の持たんことを求めて而も得ざる者。他日再び見ば、當に復一噱すべし。時に濟臣、堯夫、子山と同じく觀る。子瞻書す。」とやつた。跋で、やりあつて居るのなぞは、實に洒落てゐる。子厚の如きは耳を持たるゝ閒も無く、ぐいぐい飲む方と見えてをかしい。ところで正父が面白がつただらう、またそれを子厚に見せたら、子厚が復書いた。「酒の中間より味多し、之を知る者の寡きを恨む耳。持耳翁の若きは已に太だ苛なり。子瞻は作山水を好む、尙ほ仙游潭を渡るを肯んぜず。況んや此に於て味を知るをや。宜なり其の畏るゝや。正父豐闕に赴く時、子厚武進に令たり、復此を閱して以て子瞻の後に繼ぐ。己酉午後一日。」と題した。何の事はない、大酒黨と小酌黨との揶揄の仕合のやうなものだ。仙游潭は景色の好いところであるが險危なところであるので子瞻は渡らなかつた、それを子厚は

擧げて、子瞻が大醉淋漓の境地に入り醉鄕の眞味に參得せざるを道つたのでもあらう。實際東坡の性質は、馬鹿飲みなぞを喜ぶのでは無くて、一寸赤壁の賦などで見ると、痛飲淋漓したやうでもあるが、それも文氣を熟味すると、洗盞更酌などゝいふ文字でも知れる通り、鯨飲派では無くて、上品に樂んで飲む方である。東方朔が搦醉して、金殿の中に小便を垂れ流したり、李白が管を卷いて、高力士に靴を脫がさしめたなんといふ、さういふ品の人をば、却つて苦々しく思ふ方の人で有つたらう。それだから「中山松醪賦」に「顚倒白綸巾、淋漓宮錦袍」の如き句は有つても、それはたゞ松の酒を頌揚したゞけで有り、「酒隱賦」「濁醪有妙理賦」「酒子賦」等の文字は有つても、何の賦にも酣酗の姿を衒つて禮法を蔑如するやうな氣味は見えないで、却つて濁醪有妙理賦には、「我眠らんと欲す而も君且つ去らば（陶語）客有るも何ぞ嫌はん、人皆勸む而も我聞かず、其れ誰か敢て接せん。」などゝいふ句が有つて、まことに和らかにおとなしい醉を讚美してゐるし「酒子賦」には、酒の未だ大に熟するに至らざる時の醅液、即ち酒子といふものを王介石、許珏の二人から餉られて、其の淡く漓くて力弱いのを喜んで「吾稱酒の初めて泫するを觀るに、嬰兒の未だ孩たらざるが若し、其の溶流して走空するに及んで、又時女の方に笄するが若し」などゝ骨を折つて面白く稱讚して居るし、又「吾飲むこと少くして而も輙ち醉ふ、百榼と其れ均しく齊し」と自ら僬僥なことを歌つてゐる。此等の酒の賦や又多くの詩文の中に、酒の事の多いのを見て、率然として思ふと東坡も李太白劉伯倫の流のやうに感ぜられるが、それは「老饕賦」が有つても別に饕餮漢でも無く、東坡肉の名を遺しても却つて菜食ずきの人で有つたやうなものである。決して下品な噬酒漢では無かつたのである。

茶に關して東坡の筆墨は甚だ多く費されてゐる。茶の好きであつたこと、其の香味風韻を悦んだことは疑ふ可からざるものが有るし、證を詩文雜著より引くには餘りに多過ぎるほどである。從つて水を論じてゐることも甚だ多い。張又新あ

たりから水を談ずることは雅趣ある人のすることになり來つて居るが、人に最も適切なものは水と空氣とである。これを後廻しにして生活を論じたり趣味を談じたりする文明は豚の文明である。松花堂や祇庵や俯軒のやうな人ばかりが水を論ずべきであるのでは無い。低くない生活を欲するならば第一に水の論や、空氣の談に立入らなければならぬ筈であるから、品水の談が高雅の人に提唱されるのは至當の事で、支那には非科學的ながら古より著書も有り、談論もあるが、我邦では茶經といつたら乘化亭の名水品等位のもので小羞かしい氣がする。東坡がをり／＼水を談じてゐるのは流石に東坡居士である。唐人は茶の中に生薑を入れたり鹽を入れたりしてゐる、歐人は砂糖を入れたり牛乳を入れたりしてゐる。人の好みならば酢を入れても苦味丁幾をおとしても味噌を點じても蕃辛を投込んでも咎む可くは無いのであるが、唐の薛能の詩の句を引いて、東坡は唐の人が鹽を茶に入れたりするのを不可としてゐる。嗜好の相違は何樣することも出來ないもので、腫物のカサブタは干魚の上乘の味がすると云つて、他人を血だらけにして其の痂を喫つた人さへあるのだから、何とも致し方は無い、傍から是非するのは野暮のやうなものだが、千年も前の人が鹽を入れたやうに二十世紀の人は砂糖を入れて茶を賞味する。其の中間で東坡は東坡の意を立てゝ居る。我は彼にあらずである。自家の飲みたいやうにして飲んでゐるところは好い。

文房四具に就ては恐ろしく心を寄せてゐる。これは文雅の人の自ら然るべきであることだが、諸葛氏の筆、澄心堂の紙、李氏の墨、端、歙の硯といふやうに、いろ／＼さま／＼の物に就ての評やら感想やらを記してゐることは夥だしいものである。筆だけでも、宣州諸葛氏の筆を首にして、石晉の筆仙の筆、錢塘の程氏の筆、郎奇の筆、徐偃の筆、吳説の筆、嶺南に佳筆の無いこと、南方の兎毫の役立たぬことなどを記してゐる。おもしろいのは徐偃の筆を試みたところを記して、「筆鋒鹽を着くる曲蟮の如し、紙上に詰曲す」と僅々十一字で有筋無骨の筆を形容し盡し、數百年を距てた今

の人をして黄山谷が有つてゐた其筆の如何なるものかを知り得しむることで、實に文章自在である。蜂は蚯蚓である。又謫地で所有して居た筆が皆腐敗して、雞毛筆を用ゐるに至つたが、拒手殊劣、如何ともし難くて、魏元忠の謂はゆる窮相の驢に騎りて脚は鐙に搭ぐ者の如しと罵つてゐるあたりは、流石の書家も雞毛筆を用ゐかねて忌々しがつたさまなど眼に見えるやうだ。硯に至つては、奇談がある。建州鳳凰山の石でもつて玉版といふものが硯を爲り初めた。それに坡が鳳凰蛛といふ名を與へて、且つ戯れに其底に銘して、「坐ろに龍尾をして牛後を羞ぢしむ」と云つた。龍尾石は即ち歙州の名石だ。龍尾鳳咮で、牛後雞口の古語に因んだ一句を作つたのだが、歙人は大に此言を忌々しがつて、後に東坡が人をして歙硯を求めしめたところ、歙人は「鳳咮石さへ御使用になつたら宜いでしやう」と云つて、卒に東坡をして善硯を得ざらしめたといふ談である。一句の洒落が歙人の怨を買つた、東坡の當時文墨界に重きを爲してゐたさまが想知せられる。墨に至つては、坡は數百挺を蓄へて居て、暇日には之を試みて品するのを娯樂にしてゐた。交遊にも李公擇などいふ墨好きが有つて、人が佳い墨を持つてゐるのを見ると、直に掠奪して終つて、室中に墨を懸け滿たしてゐたなどゝいふ人もあり、東坡自身も黄山谷が承晏の墨の用ひかけ半挺を有してゐたのを强ひて奪ひ取つて終つたりしてゐる。それどころでは無い、謫地の儋耳に居た時、金華の潘衡といふ墨作りが儋耳に來たのに、東坡自身が煤烟精良なのを得る法を敎へて、そして墨を作らせて「海南松煤」などゝいふ印文を附し、李廷珪、張遇の墨にも劣らぬと大喜びでゐたが、己卯の十二月二十三日に、煤を取る室からボヤを出して、幾んど大事に及ばんとした。そこで流石の物ずきも閉口して、遂に墨を作るのを罷めたが、それでも佳墨大小五百丸を得たので「以て一世を了するに足る、仍つて以て人に遺る、知らざる人は何人なるか也」と云つてゐる。工人を延いて墨を造り、火發して屋を焚かんとするに至るなどは、實に風流好事の甚だしいもので、しかも老境に五百挺もの佳墨を得たとて用ゐきれぬのを自覺してゐるところなんぞは

洒落たものだ。それより墨に就ての東坡の傑作は、「馮當世西府に在りて、潘谷をして墨の銘を作らしめ、樞庭東閣と云ふ。此墨是れなり。阮孚云ふ、一生當に幾緉の屐を著くべきぞと。僕云ふ、知らず當に幾丸の墨を用ゐるべきぞと。人常に墨を惜みて磨らず、終に當に墨の磨する所と爲るべし。」といつたので、「墨磨人」の一語ほど警抜沈痛の好語は有るまい。石昌言といふ者が李廷珪の墨を蓄へてゐて、人の磨るのを許さなかつたが、昌言は死んで終つて、墨は故より恙無かつた。或人昌言の存生中戯れて、「子墨を磨せず、墨當に子を磨すべし」と云つた其の或人は東坡で無くて誰で有らう。李廷珪の墨は貴きこと金玉の如くで、今でも眞贋は知らず幾挺か世に存してゐるが、それらの墨には今に至るまでに何十人何百人かの人が磨られて終つた事だらう。人が墨を磨らないでゐる、墨が人を磨つてしまふ、といふは實に妙言だ。同じ意を東坡が詩の句にした「非人磨墨墨磨人」の一語は、隨分悟りの悪い人をも凄然たらしめるに足りる。人錢を使はず錢人を使ふ。むかし胡椒八百石を蓄へて居た馬鹿者が有つたが、泰山が平地になるまでゞも生きて居なくては八百石の胡椒は嘗め盡せない。墨に磨られてゐる者が實に世に多い、が、それを知りきつてゐて、そして澤山な墨を作り、「足以了一世、仍以遺人、所不知者何人也」と云つてゐるところは好い好い。

儋耳に謫居した東坡は隨分悲しい朝夕であつた。賢妻王氏は既に死し、たゞ一つの老後の手中の玉と愛した末子は死し、其母の朝雲も疫病で彼世へ逐はれ、王氏の生んだ末の子の過といふのと、六十二の老軀を七月初の暑氣猶烈しく殘る南方の邊鄙へ運んだのである。初は官屋を僦ひて風雨を免れたが、役人がいけないと云ふので追立てた。で、是非なく子の過と、天慶觀の側に湫隘な地を買つて小さな菴を結んだ。金がなし人手が無いから慘憺たるものであつたが、東坡を慕ふ十數の學者が手助けをして、泥水の役を躬づからすとあるから、左官屋仕事さへ仕たのである。儋耳は藷を糧とすること、幾んど米の十の六といふやうな地であるから、先生も隨分みじみな朝夕を送つてゐたこと〻想はれ

る。弟の子由の消息さへ遠方の地なので久しく斷えたから、憂の餘りに自ら易筮をして渙の內三爻變を得て考へてゐるところなどは、流石に達觀證悟の先生に在つても涙ぐましい情況である。物思ひをするのが人間といふものであるもの、困頓疲憊の極に海南邊陬に在つて、兄弟の情の至つて深かつた先生が、大切に大切に思つて居る子由が、これも罪を得て雷州に謫されてゐる其の上を案じ煩つたのは、自然の眞實である。然し先生の事であるから、吳子野だの、姜唐弼だのゝやうな人に時々尋ねられたり、老いて且つ窮して仕進の心も灰になつてゐる符秀才を伴侶にしたり、譏謔の心を以て田舍のつまらない人達をも相手にしたりして居て、そして自分は書傳を作つて上古の絕學を推明するのを日夕の樂にして居られた。田舍の人達も此の外を飾らない眞率な、高くとまらない、博學高才の、如何にも自然的の好い老先生には、尊敬の情をも懷いたし、又心安く馴れ親しみもしたのである。先生は所謂東坡笠をかぶり、瓢を負ひ、「哨遍」の歌を歌ひながら田畝の間を步して、黎子雲を訪ひなどしたのである。ある時、我が邦ならば飯鉢を右に大藥罐を左にして野良働きをしてゐる女に晝飯を持つて行くといふ型の饁婦、しかも七十ばかりのお婆さんが先生に行き會つた。お婆さんは誰かゝら、先生が昔は翰林學士で立派な官人であつたが、今はお氣の毒に斯樣な邊鄙に見すぼらしい生活をしてゐらるゝのだ、といふことを聞いて知つてゐたのだらう、老婆の質樸な同情から、慰めるつもりでゝもあつたらう、「旦那さまもハア昔の榮華は一場の春の夢となりましたナア」とやらかした。東坡先生もほかに挨拶の仕樣は無い、「ア、ほんとに然樣さ」と點頭くばかりだつた。なんぼとぼけた婆さんでも、面とむかつて先生にそんなことを云つたので里人は其の婆さんを其れから「春夢婆さん」と呼んだ。坡の詩に「換扇惟逢春夢婆」の句あるのは、其のお婆さんの事だといふことである。又、先生の詩に「父老爭看烏角巾、應緣曾現宰官身。谿邊古路三叉口、獨立斜陽數過人」とあるのも、所謂東坡巾を被つた先生が、白鬚朱顏で田舍路に居らるゝさまを幻燈的に映出して居る。諸黎氏を訪ふ時の詩に、「半醒半醉諸黎

を問ふ、竹刺藤梢歩々迷ふ、但牛矢を尋ねて歸路を覓む、家は在り牛欄の西復西に」とあるのも、牛の糞などの落ちてゐるところを、愛犬の「烏嘴」といふのを連れて歩いてゐる先生の姿を眼前に泛べさせる。烏嘴といふ狗は其名で想像すれば、蓋し西洋狗のやうに口の突出てゐる、鼻の長い、即ち怜悧な相の狗だが何様か淋しい先生を慰めて居たことであらう。謫居の三適といふ詩で考へれば、朝夙く起きて、歯の疎い櫛で髪を理める。それが一適で、「老櫛我に從ふこと久し、歯疎にして清風を含む。一洗耳目明らかに、習々萬竅通ず。」といふ句にも窺ひ知られる。午はまた安穩に午睡を取るのが一適で、「身心兩つながら見えず、息息安く且久し。」と詩に見える通り、非夢非覺の境に身心兩忘を樂む。夜臥濯足が又一適で、「瓦盎深さ膝に及ぶ」温湯の中へ足を浸して之を濯ひ、「天低くして瘴雲垂れ、地濕くして海氣浮ぶ」不健康な土地の夜を安く送つてゐたのである。濯足、午睡、理髮、たゞ此を夜、晝、朝の三適としてゐる、皆是れ他に須つ無きものである。何といふ幽な、淡い、靜かな清い、おとなしい取適の法であらう。殆んど人世の業繋を解脱してゐるものである。妻無く妾なく、婢僕無く、たゞ孝心の深かつた末子の過を相手に、斯樣にして謫地の瘴厲の氣の中に、迫らず懼れず悶えず惑はず、悠然として自ら保つて月日を送つて居たところは、流石に英邁の資を抱き、超悟の域に至つてゐると云ふべきである。

當時のそんな邊鄙の惡地に竄かれたのは、もとより死地に竄かれたのである。然し天機全き者は車より墮ちても怪我の少いことを莊子の指摘した如くに、理に達し命に安んじて、困厄の中にも詩を樂しみ學を樂しんでゐた老先生は、別**に何事も無く日を送られた。それは確に都の人々には奇異に思へた位であらう。そこで都では奇怪な風說をさへ生じ**た。人は自己の理解の及ばぬものには奇妙な想像を押被せて理解したがる傾のあるものである。そこで京師では、東坡は道を得て小舟に乘つて復返らないといふ風說が立つた。もつとも其前に黄洲に謫居した時も、丁度曾子固が死んだ時

に、東坡も同日に死んだと云はれたことがある。坡が自記した「書謗」の文に其事が見えてゐるが、「今日廣州より來るもの有り、云ふ、太守何述言ふ、吾儕耳に在りて、一日忽ち失去し、獨り道服在るのみと。」とある。そして呪ふやうな斷樣なことを云はれるのも、吾が命であると、東坡は書いてゐる。此の何述は京師の風說を傳へて噂したるに過ぎないが、何述は即ち高述では有るまいか、何と高とは聲が相近い。何述ならば東坡と同時の人で、餘り聞えた者では無いが、東坡の書に倣つて眞を淆つた者で、趙子昂の弟子で子昂通りの字を書いた郭天錫、董其昌の弟子で董其昌の御用を承はつて贋筆代書をした吳楚侯、我が太田蜀山の弟子の岡田文寶亭等と同じく、倣つて眞を淆ることに於て今に其名の傳はつて居るものだ。兎に角東坡はそんな噂をされたので、「戒禪師の生れ代りだ」といふ說と共に一つ話である。勿論佛理にも精通してゐたから、戒師再生の談も自然に生じたので、仙道をも喜んだから、得道入海の說もおのづから起つたので有らう。さもなくても仙風道骨のある人なのに、海南の惡地に悠然として時に或は仙道を談じなどしたところから、然樣いふ噂も起つたのでがな有らう。

東坡は實に煉丹の事をも試みたのである。金丹の道、そんなことを東坡ほどの人が信ずることがあらうか。といふやうに考へる人も有るか知らぬが、其は其人が丹道といふものを知らないのである。東坡はたしかに丹を煉つたのである。丹を鍊つかたらとて、佛に參したからとて、何が怪むべきことが有らう。勿論丹を煉つたからとて、秦皇漢武淮南の窮の跡を追うて、不老不死の癡望を抱いたのでは無い。死といふことが今の一息の次には吾を待迎へてゐるかゐぬか何樣か知れたものでは無いといふ位なことを知りきつて居らぬほど間拔なそんな人では無い。又東坡の頃の趙抱一、徐登、張無夢、朱元經、みんな立派な仙家では有つたが、いづれも百歳に近くて確に死んで終つたことを明らかに東坡の知つてゐたことは、其の雜記の文に據りて徵知すべきである。然し東坡は鍊丹の道を得て、之を行はんとしたことも明

らかである。丹道は易に通ずる、とは云はないが、易を假りて丹を談ずれば丹道は解し易い。易理を知る者にあつては、丹道を解することも出來、疑を執らないことも出來るのである。東坡は易解を作つて居るほどである。そこで仙家煉丹の談を受けても直に悟れたのであらう。弟の子由に寄せた龍虎鉛汞説を見れば、東坡が丹道を解し、解し得て實修せんとしたのは、確として儼存する事實だ。自分が何も好んで烏有の談を提出して、此の大詩人、此の英邁の人を誣ひんとするやうなことをする要は無い。然し東坡が丹を煉らんとするに至つたのは、一分はまた甚だ哀しむべきである。弟の子由に寄する語の中に、「吾今年已に六十なり、名位破敗し、兄弟隔絶し、父子離散し、身は蠻夷に居り、北歸は日無し、區々たる世味、亦知る可し」と云つて居る。區々たる世味、亦知る可し、といふところに、無限の淒涼の情と英邁の氣と幽玄の感と高明の念との渾融錯綜してゐるところを看取することが出來る。煉丹の道が小術であるか否は今論ぜぬが、其の期するところは生記の源頭に立ちて乾坤の起處に遊ばんとするのである。其道を修せんとすることが何の悪いことで有らう。然し伊洛一點張りの徒が東坡にあきたらずとするところは、蘇程の相容れぬのに本づき、それから又蘇に斯樣いふところがあるのに因るのである。けれども程朱の學は何だ、堯舜以下周孔の學に、あんな靜坐斂氣の教があるか、華山の道士の餘唾剩涎がまじつて居るのではないか、むしろ東坡が直ちに坎離龍虎の説に參した方が公明である。恩を程朱に荷ふことも多い自分等が今遽に程朱に背かう氣は勿論無いが、程朱の末派が獨り自ら高しとして他を排するのは、却て些かあきたらず思ふまでゝある。坡翁煉丹何ぞ病むに足らんやである。

是の如くにして東坡は六十五歳まで儋耳に居たが、元符三年、詔が有つて廉州に徒され、それから又永州に至り、又潮奉郎に復し、成都玉局觀提擧にされたが、旅中眞州で瘴毒大に作つて、常州で病死して終つた。文の其體渾涵光芒、百代に雄視すと、宋史に記された此人の一生はこれで終つたが、高宗帝の時に及んで、太師を贈られ、文忠と謚され

た。

東坡を談ることは先づこれまでとして、米芾字は元章の上に移らう。米元章も一代に傑出した人で其傳は宋史四百四十四に見えて居るが、もとより翰墨の人に止まり、蘇子瞻のやうな政治上に意見を有したり、牧民上に治績を遺したりしたといふ方の人では無いから、傳に記するところも甚だ少い。しかも亦東坡居士の方は其の文集も詩集も存して今に至り、其弟の欒城集や其子の斜川集までも遺つて居るから、それらを縦横に讀破りさへすれば、いくらでも種々の事を考へ得られるが、元章の方は、其の書畫は珍重されて存して居り、又書史だの畫史だのの類こそ遺つて居れ、其の詩文集の寶晉齋集は全く佚して傳はらないのか、兎に角に自分も人も寓目を得ないから、たゞ雜書隨筆に談材を得るに止るおそれの有るのが遺憾である。成るべく虚妄作爲の說は傳へたく無いが、元來が奇人で、ピン〱生きて居る時から米顚米顚と世間で呼ばれた、——顚といへば狂の義である、然樣いふ超常的の人であるから、隨分信じかねるやうな變な談が多く遺つてゐる。其代り無斟酌に詩人氣質藝術家氣質が發揮された興味の饒い談が多い。其談は斷片的で、まるで故造にかゝるやうなのみだが、然し大抵はウソでも無からう、東坡が仙人になつて行方知れずになつたなどと云はれるやうに、此の奇異な俊人の上を兎角云はないでも、其人が現に自分自身で、いろ〱と妙な談材を供給して居たのであるから。惜いことに此人の文集が遺つてゐたら定めし面白いことで、永晝幽窓、睡魔の襲ふを覺ゆる時などに繙讀したら、莞然の笑を發して、惰氣を洗刷することだらうと思ふが、それは傳はらぬとは遺憾千萬だ。

宋史本傳にも「芾の文を爲るや、奇險にして前人の軌轍を蹈襲せず」と云つてゐるが、前人の軌轍を蹈襲せずといふのは、即ち是れ定跡破り、脫線氣味といふことに當るが、如何にも然樣で、畫史の書するところ必ずしも誤らずと思へる。一例を擧げると、「畫史の敍」がそれである。原文が妙に所謂奇險だから、今さつと其意を取つて云へば予斯樣な

のだ。「杜甫の詩に、薛少保のことを、惜い哉功名迕ひ、但だ見る書畫の傳はるを、とあるが、甫も好い先生だ、分らないことは有るめえぢやないか。少保の筆精墨妙なこと、石が泐けりや重ねて刻され、絹が破れりや重ねて補はれるし、」―又其の名を假りてゐるも何程有るか知れやしない。だから世の氣の利いた者が、寶鈿瑞錦、十重二十重に包んで大切にしてゐる。功名なんぞが遂げたところで何だい。え、おい杜二、一杯酒を酹いでやらう、何樣だよ。そこで書史を作つた。」まさかこれ程でも無いが、如何にも奇險だ。又「書史の叙」も「有がたい古い筆蹟は、みんな傳錄だ。えらさうに沮誦蒼頡なんぞを引張り出して、古證文で物を云つたつて、何處にもほん物は無いや。いゝ加減に若い奴を欺く、分つてゐるものは罪とするところだ。後の馬鹿どもの妄作に至つては神さまやおばけをこしらへる、笑はせるどころぢやない。おれはたゞ此の目でちやんと確に見たところで、集めて書史と曰ふのだ。識者に指南するのだ、俗目に點ずるのぢやない。」すべて意味も恐ろしく鼻の高いのだが、文章も腋の下から髭の見えさうな氣合だ。これだから隋唐から自分の時代までの十四人の書家を評して、「智永は十四五の華族のせがれの癖性のものが、禮義に循つてると思ふと、忽ち勝手をするやうだといひ、褚遂良は馴らされた軍馬がチヤンと人に從ふやうだが、どうも一種のえらがつた樣子があると云ひ、虞世南は斷食してゐる道士のやうで、樣子は淸げだが、くたびれ面をしてゐる、歐陽詢は病氣上りの奴が、おつくうさうにしかつべらしくしてゐる、李北海は成金がえらげに振舞ふが禮義作法がまるで駄目だ、蔡襄は若い女がしやなしやなと氣取つて歩いてゐるやうだ、蘇舜欽は道樂の若旦那が不行跡をして居るやうなものだ」などゝいろいろ名人上手を勝手に評してゐる。面白いことは面白いが隨分小憎らしいことを云ふ人だ。けれども熟く此人を味はふと、小憎らしいと云ふよりは、をかしいと云つた方が適してゐると思はれる。かつて徽宗皇帝の命を奉じて、周官の篇を御屛に書いたが、書き畢つて筆を地に擲つて、大言をほざいた。其の言葉はといふと、「二王の惡札を一洗して、皇宋を萬古に照耀した」―

といふのであつた。二王は言ふまでも無く王羲之王獻之で、苟くも筆を持つほどの者は皆崇敬してゐる人である。それを、其の拙惡な筆札を一洗して、我が宋朝の藝術を耀かした、といふのである。今日は鞍馬人種が多いから此位なことを云へる人も有らうが、宋明時代にはマア無敵の大言だ。徽宗皇帝も藝術家肌の天子だが、潜かに屏風の後に立つて居られて、此の大言を聞いて、殆んど呵喝されたのだらう、覺えず歩き出して、其の書を觀たところが、なるほど大言を放つただけは有つて、實に立派なもので有つたらう、歎賞これを久しうしたといふことである。

かういふ人だけれども、流石に外に發するところの雄剛なのみでは無い、內に修むるところは實に深邃精刻である。其の自ら謂つてゐるのに、「一日書せざれば、便ち思の澁るを覺ゆ。古人の未だ嘗て片時も書を廢せざるを想見する也」といふ語がある。それでこそで、それで無ければ眞の誇大妄想狂である。又嘗つて蔡君謨即ち當時の一大明星の蔡襄に謂つて、「書を學ぶは急流に泝るに、氣力を用ゐ盡せども、船舊處を離れざるが如し。」と云つたから、君謨も、まことに能く實を取つて書を學ぶ者の境地をあらはしたと云つたといふことである。米顚自身日々精苦のところを自白したのである。書でも彫刻でも何の藝術でも、氣力を用ゐ盡せども船が原の所を離れないことを確知して、そして篙を突張り艣を剗ぐ無益のやうな勞に滿身の意氣精神を勵まし、熱汗眉を決して流れて眼に入る底の苦を敢てするところから、五寸一尺と進前してゆくのである、そして或は能く急流を泝過して、或時には玄潭蒼淵水に波無く、岸花映發して仙禽啼くやうな光景のところにも到り得るのである。流石に米老だ、好いことを云つてゐる。其の自ら評するの語に「壯歲未だ家を立つる能はず、人吾が書を謂つて古字を集むると爲す。蓋し諸の長處を取つて、總べて而して之を成す。旣に老いて、始めて自ら家を成す。人之を見て、何を以て祖と爲すを知らざる也。」と云つてゐるが、集古字と謂はれた頃の、あらゆる前人の長處に參した間の長い苦學のところを看取せねばならぬ。隨分彼を習ひ此を學んで、歷參遍學の功勞を

積んだのであらう。人から古い書を借りると、自ら臨して、臨し竟ると原書と併せて自らの臨書とを其家に送つた。臨書が悉く眞に逼つて居るので、其家では臨書の方を眞書だと思つて、眞書の方を元章へ還すことがある。然樣すると元章はそれを奪つて終つて自家の藏品としたといふことである。眞物を奪つて終ふのは甚いことで、所謂巧偷だ、感心することは出來ないが、然し所有者をして眞書と臨書とを辨ずる能はさらしめたといふのは恐ろしい技で、尋常一樣の人なら描虎類狗の醜に陷るのだが、實に非常な熱心と天與の靈腕とで始めて出來ることであり、そこにあらゆるものを吞ひ泛めて吞込んでゐるところが有ればこそである。關蔚宗といふ人が、褚遂良が摹したところの虞世南の枕臥帖があつた。落筆精微で、絲髮の如く、骨氣精神、兼ね備はり、甚だ珍重すべきものであつた。元章はこれを視せられて、非常に喜んで熟視欣賞した。其後蔚宗が死んで、其子の長源の代になつた時、京口で元章が遇つた。そこで元章が、君の家のあれが欲しくて仕方が無いが、と求めると、長源は愛惜して承知しない。でも猶しきりと求めるので、それなら公の有してゐる陸探微の師子と易へるなら、と云つた。では師子をあげる、といふと、復惜んで、イヤ其の上に公の案上にある盈尺の硃砂を副へて呉れなければ、と云つた。元章餘程欲しかつたと見えて、それも御需め通りにする、と從つた。ところが然樣云はれると、猶ほ手放しかねて、よく考へて見ると、其の二物はどうも僕の帖に當るには足らない。公の頭をくれるので無ければ進ぜることは出來ない、と斷つた。如何に米顚先生でも頭をやる譯にはならぬから、それで物別れになつたが、其後元章は前年目にした其帖の筆法筆跡を追想して、一通を寫して、長源に示した。ところが驚くべし殆んど眞帖に同じくして、また辨ずることが出來ないほどだつた、といふ談が遺つてゐる。此談は殆んど虛談の如くで有るが、必ず事實で有らう。明治の初年、自分がまだ十歲位の頃である、吾家の近所の吉野といふ雜誌や板紙や文房具を賣つてゐる店の兒で自分と大抵似寄りの年齡の兒が、其店へ物を買ひに行つた時、一板の賣品で無い、黑いた

繪を手にして觀て居て、自分にも觀せて呉れた。それは一目すると直に判知された淺草の觀音堂にかゝつて居る武士が弓を張りながら攻寄せて來る族の手を見る圖であつた。後に知つた菊池容齋の御厩の喜三太の圖だが、それを如何にも原畫通りであると感じさせるほど上手に美濃紙に畫いたものであつた。吃驚して、うまいナアを連發したところ、店の兒は得意になつて、これは君、僕の友達の海野といふ兒が、昨日淺草へ行つて、歸つてから描いたのだぜ、僕より少し大きいが、實に巧いネ、といふ談だつた。で、驚いて自分は家へ歸つて人々にも話して、實に恐ろしいエライ兒が有ると深く〳〵感動したが、其後海野といふ表札のかゝつてゐる家の前を度々通つたことが有るので、其家は知つたが其兒とは知合にもならずして終つた。ずつと後になつて彫金家の海野美盛といふ人に會つて、段々と談話を交換したら、其の江戸育ちといふことから、其の住居の位置などを知るに及んで、自分の幼年の時深く感服した彼の繪を描いた兒は即ち氏であつたといふことを悟つた。思ふに物の形象を扱ふ藝術の人になれるやうな天賦を有つた者は、自然に物の形象から衝動された場合は之を吾が腦府に印記し得、又其の物の形象の構成、及び其の構成が人に與へる感じを捕捉もし解釋もし得て、そして吾が手腕が伴なひさへすれば之を明瞭に復現し得る能力を平凡人より非常に多量に有つて居るのである。幼童でさへ海野氏のやうな實例が有る、まして既に鑑賞力も印記力、解釋力、復現力も高度に達してゐた米元章が其位のことの出來たに何の不思議は無い。非常の天才と强烈な藝術慾と深刻な勉强心とを兼備した鹿門居士の其の談は、事實で有らうこと疑ふ可くも無いことである。今日現存の士でも田中親美氏の復現能力の如きは非常なもので、其の技能は世界的に具眼者からは認められ、たしかに精巧な寫眞機よりも勝つた腕力を有してゐる人もある。咫尺の間に法帖を置いて臨模しても微な字も書けぬやうな分際の者から卓絶した人の上の事を疑ふ可きでは無い。

斯樣いふ人だつたから元章の勉强修養の時代には必定種々の談が有つたらうと思はれるが、何にせよ其の詩文集さへ

富貴出來ない位であるから、多くを語ることは出來ない。然し斯様いふ談が傳へられてゐる。長沙の湘江の西に道林寺岳麓寺といふ二名刹がある。そこに唐の沈傳師の道林の詩が有つて、大字で、實にすばらしいものであつたから、寺でも大切にして別に一閣を以て之を藏してゐたほどであつた。元章先生まだへボ官吏か何かであつた時、官務で其處を過ぎた。で、舟を湘江に艤して置いて、寺僧にいろ〳〵さま〴〵にして、やつと其の詩卷を借り出して熟覽したが、やがて堪らなくなつたと見えて、とう〳〵或夕に帆を揚げて、舟を走らせて、失敬ッとやらかしたといふのだ。餘り品の好い談ではないが元章のことだから、其位の事はやり兼ねない。蔡京は水滸傳では惡い奴だが、元章に取つては有難い人で、京も能書の人であり、元章の人となりや技能を愛して呉れて、しかも此上無しの權力者であつたから、元章は舊交の有つたのを幸に、京に縋つて、やつと出世させて貰つたのである。それだのに天子が今の世に書を以て鳴つてゐる人の事を御尋ねになつた時、「蔡京でござるか、彼は筆を得て居ませぬ」などと酷評を下し、「蔡卞は筆を得ては居ても韻に乏しく、蔡襄は字を勒し、黄庭堅は字を描き、蘇軾は字を畫いてる」なぞと云つた。それもまだ可いが、其の大恩の有る蔡京の子の蔡攸に、眞州で舟中に謁した。其時舟旅の途中では有つたが、攸が携へて身近に持つてゐた秘愛の王羲之の帖を視せた。すると素敵なものだつたから、米顚は堪らない、自分の有つてゐるものと交易しようと申し出たが、攸は何様しても承知しない。まさか失敬する譯にもいかぬ、腕づくも出來ない、權柄づくでは相手の方が上手だし、富力も及ばない。仕方が無いから誠心誠意で、泣きさうになつて執念深くに口説たが、元章がそれほど欲しがるほどの品だから蔡攸も如何なこと承知するものでは無かつた。すると元章だ、「いよ〳〵願を納れて下さらなければ、是非もござらぬ、あゝ、生甲斐も無い、それがしは此の江に身を投げて死んでしまひ申す、えゝ死んぢまへ」といふので飛び込まうとする、人々が止めても止まればこそ、ワア〳〵云つて舷端で揉みあつて飛込まうとするので、攸も一廉の人物だが貴

公子だからとう〳〵負けて終つて、「いゝよ米老、進上するよ」といふ結局になつて終つた。帆を揚げたのも甚いが、身を投げようも甚い。まるでダダツ兒だ。しかし「惚れたに遠慮がなるものか」といふ調子だから仕方が無い。其の代りに其の帖の事では無からうが、自らの有つてゐた晉の眞蹟に「墨王」と稱してゐたのがあつた。それを日として机上に展べぬことも無く、手に筆を釋かないで、のべつに臨學して、夜は小篋に置いて枕頭に寘いて離さなかつた、といふことが傳へられてゐる。如何にも然樣であつたらう。元章自ら「揩帖」といふ文を書いて、王著が無見識であつたことを罵つたりなんぞした末に、自分は「全く富貴の願無し、獨り古人の筆札を好む、一硯を漱ひ、一軸を展ぶる毎に、疾雷の傍に在るをも知らず」と云つてゐるし、又「陶宏景、主書令史と爲るを願ふ、大に是れ高致なり。一念除かず、行年四十。恐らくは死して蠹書魚と爲り、金題玉躞の間に入り、游んで害せざらん。」とも云つてゐる。自分で蠹魚になるだらうと云つてゐるほど、古人の筆札が好きなのだから、何樣も仕方が無い、欲しいものがあると、交換だの、帆を揚げるだの、身を投げるだの、巧偸豪奪だのをも敢てするに至つたものだらう。其中で交換は自分でも最も正當なことだと思つて居たらうが、米元章のやうな眼の利いた者に交換された日には、元章は好からうが、相手は大抵損をさせられさうなことだ。然し元章は交換が大好きで、熱心に主張してゐる、其論もをかしい。曰く、「書畫は價を論ず可からず、士人は貨を以て取り難し、ゆゑに書畫交換は自ら是れ雅致である。今人一物を收むれば、性命と倶にす、亦大に笑ふべし、人生目に適するの事、看ること久しければ即ち厭く、時に易へ新に翫び、兩つながら其の欲に適する、乃ち是れ達者なり。」なるほど理屈はひとゝほり立つてゐるが、氣に入つたものを性命と倶にして一生離さないのも、何も大に笑ふ可しといふ道理も無さゝうだ。唐の太宗は天下を取つたほどの英主だが、義之の書を棺桶の中へ携へて行かう、と云つたのも、愛着の餘りの無理ならぬ情で、理には違せぬにしても情には然るべきことで無いか、畢竟米芾の言は自分が住

いものを欲しいのから出た交易主張論のやうに思へてならない。東坡の米芾二王書跋尾に次韻した二首の詩が、坡集卷七十九に出てゐるが、其中に「怪む君が何の處より此本を得たるを、上に有り桓玄の寒具の油、巧偸豪奪は古來より有り、一笑す誰か似たる癡虎頭」の句は、元章があやしいことをして佳いものを手に入れたことを言つたのだと、後人の評したのも、まんざら然樣で無いことも無さゝうだ。又其の第二首に「地に畫いて餅を爲す未だ必ずしも似ず、癡兒をして饞水を出さしむるを要す、錦囊玉軸來つて趾無し、粲然眞を奪つて聖智を疑ふ」と言つたのも、元章の手のきゝ過ぎるのを譏つたのだといふ說が當つてゐるらしく、山谷がこれに和して、「百家の傳本略相似たり、月の天を行いて諸水に見はるゝが如し」と云つたのも、何樣も交易に當つて元章が御手製の何かを頂戴させることをあてたらしい。然し元章の御手製なら結構なことで、麩屋町ものを頂戴して光何とかだと思ひ、二朱づゝ拂つたのだから印だけは眞物に疑無い譌匡を嬉しがるなぞよりは、元章の利いた手を戴いてゐる方が何程好いか知れない。東坡がかねて元章は自分も能書であり、鑑識評論も長けて居ながら、其の所藏の古い書が眞僞相半してゐるのを疑つてゐたところ、元祐四年六月、張致平と共に元章のところを訪ふた時、致平が一寸あてたら、元章が笑つて長史や懷素十餘帖を出した、それは皆佳いものであつたので、平日人に示すのは好い加減なものであつたことを悟つたといふ談もある。かう云ふと元章は惡骨董屋のやうにも聞えるが、元章のは自分が盜然になるか知れんといふほど、たゞ眞に古の優品を得たいところから物品交易をしたのであるから、甚いことをしたとて恕せば恕すべきところがある、帆を揚げ水に投ぜんとする位の偏奇な性格であるのだもの。

で、交易は如何に元章が好い事だと云つても、元章の方に勝手の好過ぎる談であるが、其の交易の中でも大出來なことがある。それは元祐の末に元章が雍邱縣の知事だつた時、東坡がそこを過ぎた。元章は東坡を饗した。東坡が宴に赴

くと、大きな机を對ひあはせて置いて、そして精筆佳墨を備へ、紙三百枚を置いて、饌を其傍に置いたあつた。東坡が之を見ると大に笑つて座に就いたが、酒が一行するたびに、紙を伸べては二人が字を作つた。二小史が墨を磨つたが間に合ひかねたほどて、薄暮になつて酒も足り紙も盡きた。そこで二人が互に書いた分を交易して携へ歸つて、二人とも平日よりは善く書けたと云つて興じたといふことである。これは如何にも氣持の好い面白い談で、誰でも入場料ぐらゐ拂つても倍觀したかつたものだなぞと思ふことである。米老主張の交易論は、是に至つて大出來大出來である。東坡は元章を好いて居て、元章に與へた尺牘の今に其辭を知るべきもの二十八通もあるほどであるから、盃酒筆硯、三百紙を二人で費盡したのは實に佳話であるが、同じ元章を愛した人でも、楊次公などは惡い洒落をしてゐる。次公が丹陽の守だつた時、元章がそこに數日留まつた。其時次翁が羹を作らせて、「今日君の爲に河豚を料理させたよ」と云つた。其實河豚では無い、他の魚なのだつたが、河豚と云はれたので米顚も疑つて食はないで居た。すると次公は笑ひながら、「ナーニ君、安心したまへ、これは贋本さ」とやつた。河豚の贋本は好かつた。

米顚は書畫の佳品を欲しがつて狂に類したばかりでは無い。其の石を愛したことも有名なことで、無爲軍の知事になつた時に州の役所の庭にあつた石を見た折は、大喜びで禮服を一着し、笏を手にして、恭しく拜して石丈と呼んだところ、後に其事を人に詰られたら、「おれは拜しはしないが、揖したばかりだ」と云つたといふのも名高い話だ。臨江の守となつた時は、河の岸から大怪石を取つて來させて役所の庭へ置き、其石の着いた時は命じて席を設けて、大冠面目で拜して、「吾石兄を見んと欲したると二十年なり」とやつたので、其の馬鹿げたことを言立てたものが有つたので、御役御免。それから倚の攷州といふものから、端州の石で、山が有り池があつて、其池で墨を磨ることの出來るのを得たから、嬉しくて堪らないので、三日抱いて寢て、おまけに東坡を口説いて銘を作つて貰つた。其石のことではないら

しいが、坡集の巻十九に元章の石鍾山硯銘といふのがある。實にをかしな銘で、「盜有り禦がれず、奇を探り瑰を發す。攘むこと彭蠡に於てし、鍾を斵つて取追す。米楚狂なるもの有り、惟れ盜の隱なり。山に因つて研を作る、其詞や貢つる如し。」といふのであるから、これも山形の硯だ。これは彭蠡地方からかつぱらつて來た、と文の作意で面白く言つたので、追は鎚琢の鎚、石を治むることであるが、隨分、一體が、奇な銘である。東坡も石の好きな仲間であるから、幾度も賴まれたことが有るのだらう。元章が大切にした石は所謂「寶晉齋研山」で、其形は林仁甫の譜に圖が出てゐるから、大抵想像することが出來るが、南唐からの名石で、勿論素敵なものである。何と交易したか知らぬが、後に薛紹彭に讓つて終つた。ところが元章が其石戀しくて堪らないで、「硯山復見えず、詩を哦して徒らに歎息す」なぞと泣きさうな未練を詩に洩して居るばかりか、其後かつぱらはれさうなので再び見せて吳れない。友達と共に往つても視せてくれない。そこで其圖を畫いて、長々しい文を題し、「予今黙想して圖を成す、彷彿として目に在り、これより吾が齋の秀氣、當に復混びざるべし。」なぞと、去つた女房の寫眞見る背、といふやうな愚癡をこぼし、「紹彭公は眞に忍人也。」ひどい人だと恨んで居るところは實に面白い。それから又も一つの所謂「海嶽庵研山」も南唐の李後主以來の名石で、これも林氏の圖があるが、三十六峰環列して居る中に墨の磨れるところがある稀品だ。元章が丹陽に歸つて、住宅地が欲しくてゐた時、蘇仲容が甘露寺の傍に晉唐からの名士の跡の好い地を有つて居て、仲容は又其石を欲しがつた。そこで王彥昭侍郎兄弟が口をきいて、例の元章の好きな交易が成立つた。元章の名高い海嶽庵は即ちそこに出來たのである。一片石でそんな地を得たのだから、石の素ばらしさは知る可しであるが、元章は素敵な石を合せて二個とも交易主張論で有るとは云へ人に讓つて終つてゐるので、後世の石好き連中からは石に對して不實な奴だと攻擊されてゐる。然し米顚は顚も亦甚だしいが、「今人一物を收むれば、性命とともに倶せんとす、亦大に笑ふべし」といふ例の一派

の交易哲學信條を有してゐるのだから仕方が無い。其の顛狂の甚だしいのに至つては、或時徽宗皇帝の御前で一大屛を書せしめられた時、天子が御前の一大端溪硯を指して其を用ゐさせられた。實に佳い立派な硯で、米顛ぞく／＼するほど欲しい。で、字を書いて終ふと、其大硯を目八分にさゝげながら、「恐れながら此硯は臣の使用を經ましたる以上、復び御用ゐに相成るのは勿體無いことにござりまする」と中々巧くやつてのけた。天子も大笑ひで、もとよりケチな心は持てないところだから、「ウム、汝に賜はるぞ」と來た。しめた、と思つたらう、狂喜舞踏して御禮を申し上げ、抱きかゝへて趨り出たが、餘墨が澤山あつたから、墨瀋迸り散じて朝服の領も袂も淋漓となつたけれど、そんなことは全く氣もつかないで、大ニコ／＼の眼つき眉つきは包むに包まれぬ喜悦を溢らせた。徽宗も復笑つて、「なるほど顛だ」と云はれたといふのも名高い談である。

米顛に河豚の贋本を食はせた楊次公は、何様いふ譯だか知らないが、時に或は次翁とされてゐることがあるが、宋史に據れば次公が正しいのである。名は傑と云つて、これは中々偉い人で、當時朝庭禮樂の議は皆討論に預つたとあり、范鎭と音樂を論じて之を破つた人である。勿論米顛よりは先輩で、官位も高かつたのであるが、此人がまた別に面白い談を米顛の石ずきに關して遺しゐる。元章が一時漣水の守になつた。漣水は奇石を産するを以て今日に至るまで名高い靈璧縣に接して居るところだから、米章が頻りに珍奇の石を手に入れては喜んでゐる、一々名を付けたりなんぞして、撫摩愛玩の癡を盡して、役所の事などはほつたらかしであつた。そこへ次公は察使の官でやつて來た。地方官たる元章は心易い間とは云へ、本來ならば察使に見廻られたのだから、小さくなつて終ふべきだ。次公は役目を負うてゐるのである、ずつと役所へ入つて來ると、色を正して儼然として曰つた、「朝庭が千里の郡邑を以て公に付してあるのでござる、公は何で石なぞを玩んで日を終ることが出來よう、公は役向を怠り、郡の事をも等閑に付してゐるといふことであ

るがそんな事で濟むと思はるゝか、一本の彈劾狀が上つたら、後悔されても追付くことではござるまい。」と聲色まことに嚴厲であつた。ところが相手が惡い、天子面前でも狂態を發揮する名うての米顚だ。つか〳〵と前むと、自分の左の袂から小さな石を一つ取り出した。石は峰もあり巒もあり、洞もあり窗もあり、色は淸く潤ひが有つて、極めて愛す可きものであつた。米顚はそれを、あちらへ向けたり此方へ向けたり、宛轉翻覆して次公に示しながら、「とは仰あるが、かくの如き石を、安んぞ愛せずに居られませうや」と云つた。次公は默つてゐて受付けなかつた。そこで元章は其石を袖に納れて、また更に一石を出した。今度のは、高く聳え重なり秀でゝ、仙山神境の趣が有つて、一段と優れたもので、顚は自分でもう悅に入りながら、「是の如き石でござるもの、愛せざるを得んやで」と云つたが、それでも次公は難い顔をしてゐた。すると米老はそれを納めて、最後の一擊、素敵なものを出したが、それはもう造化が精神を用ゐ盡して造つたかと思はれるやうな、何とも云へない面白いものであつた。で、元章はもう得意滿面で、「かくの如き石、いづくんぞ愛せざるを得んや」と眼も何も熔けさうになつて居る。と、次公は突然として、「獨り公の愛するのみならず、我も亦愛する」と云ふかと思ふと、米老の掌中から其石を引攫つて、さつさと車へ登つて、ふと歸つて終つた。元章がポカンとなつて、開いた口の閉ぢられなかつた態は想像に餘りある。

元章は顚と云はれたゞけ隨分怪奇な性癖の所有者だが、それでゐて非常の淸潔ずきで、自分の帽子を從者の手にあづけるのさへ穢されるを恐れて敢てしなかつたと云はれてゐる。長い柄をつけた銀の斗のやうなものを作つて、これを水斗と做し、奴僕をして柄を執つて水を手に瀉がせるやうにした。手を洗ふ時は然樣して水をかけさせて、しかも手巾で拭ふのは穢汚いと思ふのであらう、兩掌をピタリピタリと相拍つて自然に乾かして終ふのを例としたといふ話で、此人に友仁といふ兒が有つたのは不思議なくらゐである。儀式用の靴に他人の手が觸れるといふので、屢々洗つたので、靴は

損じて終つた。太常博士だつた時、太廟に奉祀するのに、定まつた祭服を着なければならぬ。其の祭服を矢鱈に洗はせたから、繪模様の藻火が亡せて終つた。それで御役御免になつて終つたほどである。婿を撰ぶにあたつて、建康の段拂、字は去塵といふもののことを聞いて、「現に拂で、又去塵だといふ、これ眞に吾が壻だ」と云つて女を與へたといふのだが、まさかに何だか嘘らしい談だ。しかし拂、字は去塵といふのに惚れて壻にしたと云はれる程の人であるから自分の硯などは何程自分で清潔にしたか知れない。黄寶師といふ人が淸淮樓といふので見て居ると、暑い時の事で、米老サルマタ一つになつて一生懸命に淮口で硯を滌つてゐるのを見つけた。そこで急に一寸した贈り物を持たせた使者を遣つて、「疾く、疾く、彼奴が硯を滌つて終はぬ中に往け」と云つて面白がつたといふことである。こんなに潔癖なので、友の周仁熟はよくそれを知つてゐた。或日元章が大した硯を得たと云つて誇つた時、周は「法螺を吹くのだらう」と云つた。そこで元章が取出して示さうとしたから、周は水を索めて手を洗つて、敬み視んとした、元章は喜んで硯を出して見せる。成程好い硯だつた。周はしきりに賞めた後、「誠に尤物だ、然し潑墨は何樣だらう」と云つて、元章が水を持つて來させない間に、プツと硯面に唾して墨を磨つたから、元章は色を變じて怒り且つ恨んだが、爲て終つたことだから仕方が無かつた。「硯はもういらない、君に獻じる」と云つた。「マア然樣云はずとも」と周は云つたが、米老は終に納れなかつた。で、硯は周のものになつて終つた。徽宗皇帝から硯を奪つた事も有つたし代りに、友だちに硯をして遣られた事もあつて、誰も知つてゐる因果應報的な逸話を留めた。

是の如く潔癖なのは、普通支那人には稀有である。そこで元章はマホメット教徒だつたらうといふ説もある。回教徒は清潔を好むからである。然し米顚が回教徒だつたか否やは疑はしい。東坡が元章に與へた手紙の中の辭に、元章の寶月觀賦を褒めて、「兒子何れの處に於てか寶月觀の賦を得て、琅然として之を誦す。老夫臥して之を聽く、未だ半ならず

るがそんな事で濟むと思はるゝか、一本の彈劾狀が上つたら、後悔されても追付くことではござるまい。」と顏色まことに儼厲であつた。ところが相手が惡い、天子面前でも狂態を發揮する名うての米顚だ。つか〳〵と前むと、自分の左の袂から小さな石を一つ取り出した。石は峰もあり巒もあり、洞もあり竅もあり、色は清く潤ひが有つて、極めて愛す可きものであつた。米顚はそれを、あちらへ向けたり此方へ向けたり、宛轉翻覆して次公に示しながら、「とは仰あるが、かくの如き石を、安んぞ愛せずに居られませうや」と云つた。次公は默つてゐて受付けなかつた。そこで元章は其石を袖に納れて、また更に一石を出した。今度のは、高く聳え重なり秀でゝ、仙山神境の趣が有つて、一段と優れたもので、顚は自分でもう悅に入りながら、「是の如き石でござるもの、愛せざるを得んやで」と云つたが、それでも次公は澁い顏をしてゐた。すると米老はそれを納めて、最後の一擊、素敵なものを出したが、それはもう造化が精神を用ゐ盡して造つたかと思はれるやうな、何とも云へない面白いものであつた。で、元章はもう得意滿面で、「かくの如き石、いづくんぞ愛せざるを得んや」と眼も何も熔けさうになつて居る。と、次公は突然として、「獨り公の愛するのみならず、我も亦愛する」と云ふかと思ふと、米老の掌中から其石を引攫つて、さつさと車へ登つて、ふと歸つて終つた。元章がポカンとなつて、開いた口の閉ぢられなかつた態は想像に餘りある。

元章は顚と云はれたゞけ隨分怪奇な性癖の所有者だが、それでゐて非常の潔癖ずきで、自分の帽子を從者の手にあづけるのさへ涴されるを恐れて敢てしなかつたと云はれてゐる。長い柄をつけた銀の斗のやうなものを作つて、これを水斗と做し、奴僕をして柄を執つて水を手に瀉がせるやうにした。手を洗ふ時は然樣して水をかけさせて、しかも手巾で拭ふのは穢いと思ふのであらう、兩掌をピタリピタリと相拍つて自然に乾かして終ふのを例としたといふ話で、此人に友仁といふ兒が有つたのは不思議なくらゐである。儀式用の靴に他人の手が觸れるといふので、屢々洗つたので、靴は

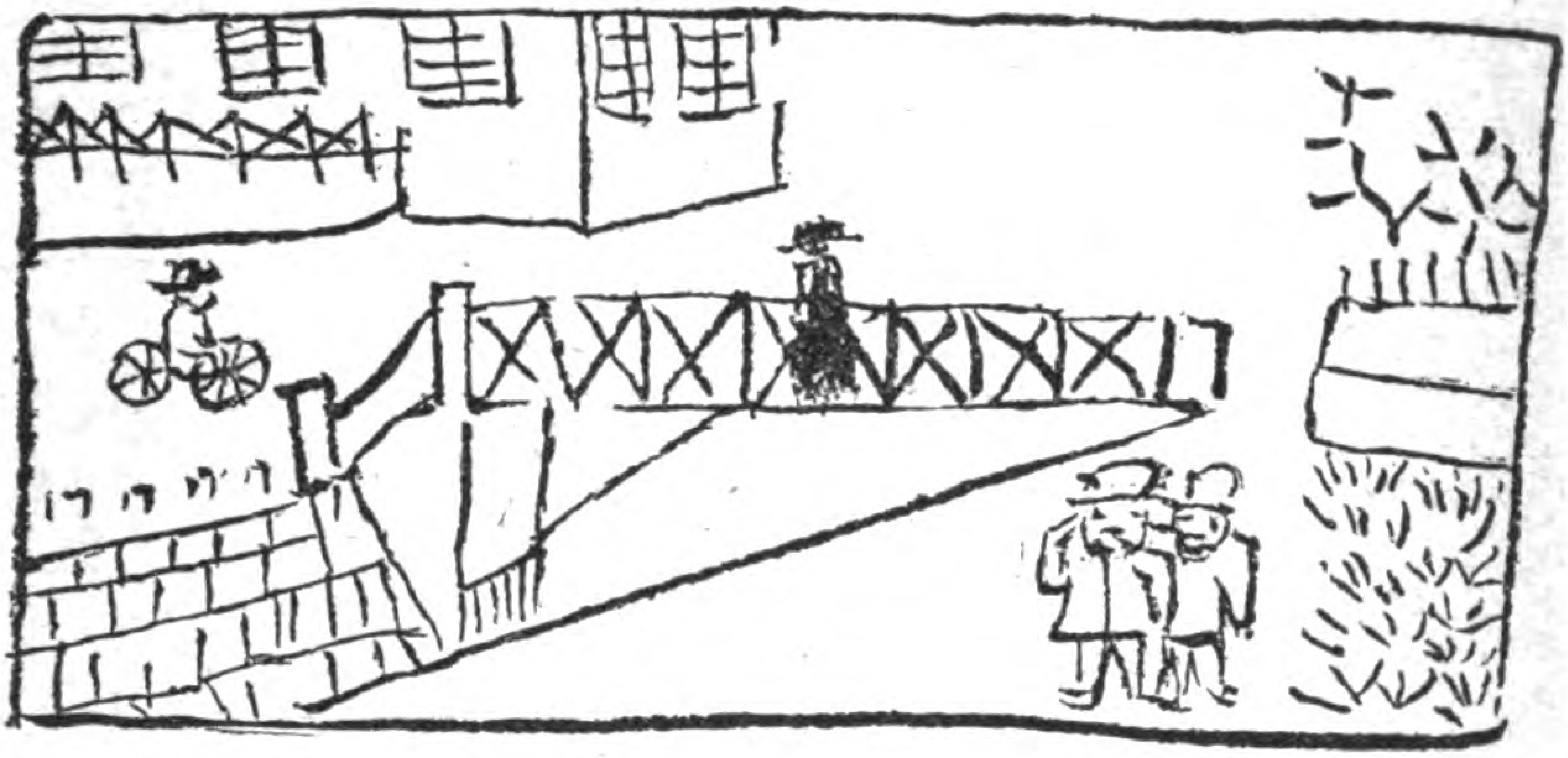
損じて終つた。太常博士だつた時、太廟に奉祀するのに、定まつた祭服を着なければならぬ。其の祭服を矢鱈に洗はせたから、繪模樣の藻火が亡せて終つた。それで御役御免になつて終つたほどである。婿を撰ぶにあたつて、建康の段拂、字は去塵といふもののことを聞いて、「現に拂で、又去塵だといふ、これ眞に吾が壻だ」と云つて女を與へたといふのだが、まさかに何だか嘘らしい談だ。しかし拂、字は去塵といふのに惚れて壻にしたと云はれる程の人であるから自分の硯などは何程自分で清潔にしたか知れない。黃賓師といふ人が清淮樓といふので見て居ると、暑い時の事で、米老サルマタ一つになつて一生懸命に淮口で硯を滌つてゐるのを見つけた。そこで急に一寸した贈り物を持たせた使者を遣つて、「疾く、疾く、彼奴が硯を滌つて終はぬ中に往け」と云つて面白がつたといふことである。こんなに潔癖なので、友の周仁熟はよくそれを知つてゐた。或日元章が大した硯を得たと云つて誇つた時、周は「法螺を吹くのだらう」と云つた。そこで元章が取出して示さうとしたから、周は水を索めて手を洗つて、敬み觀んとした、元章は喜んで硯を出して見せる。成程好い硯だつた。周はしきりに賞めた後、「誠に尤物だ、然し發墨は何樣だらう」と云つて、元章が水を持つて來させない間に、プツと硯面に唾して墨を磨つたから、元章は色を變じて怒り且つ恨んだが、爲て終つたことだから仕方が無かつた。「硯はもういらない、君に獻じる」と云つた。「マア然樣云はずとも」と周は云つたが、米老は終に納れなかつた。で、硯は周のものになつて終つた。徽宗皇帝から硯を奪つた事も有つたし代りに、友だちに硯をして遣られた事もあつて、誰も知つてゐる因果應報的な逸話を留めた。

是の如く潔癖なのは、普通支那人には稀有である。そこで元章はマホメツト教徒だつたらうといふ說もある。回教徒は清潔を好むからである。然し米顚が回教徒だつたか否やは疑はしい。東坡が元章に與へた手紙の中の辭に、元章の寶月觀賦を褒めて、「兒子何れの處に於てか寶月觀の賦を得て、琅然として之を誦す。老夫臥して之を聽く、未だ半ならず

して翻然として起ち、二十年相從ひて元章を知り盡さゞりしを恨む。此の賦の若きは當に古人に過ぐべし、今世を論ぜざる也。天下豈常に我輩の憤々たる如くなるか」云々といふのがある。（坡集卷五十五）これは東坡は雅量ある人で、山谷に對しても誰に對しても、少しでも其の佳作を耳目にすると、大に褒美して、たゞ其の及ばざらんことを恐れたやうなのであるから、是の如くに言つたので、又無論米元章の才能技術を愛してゐたのでもある。元章を知り盡さゞりしを恨む、といふのは、何といふ謙虚な、人を愛することの厚い、懷かしい、好い言葉だらう。然るに元章のこれに答へた手紙は又例の大言自高の、怪僻のものであつて、それも米章の性質が見はれてをかしいが、「更に知り盡さゞるの處有り。楊許の業を修めて、帝宸碧落の游を爲す。異時相見えなば、乃ち知らん。」といふのである。楊許の業とは、蓋し楊義、許玉斧の業であつて、楊許は皆仙人とされてゐるものである。近頃は其等仙人の業を修行して、天へ上つて遊んだりなぞ致してゐるのでござるが、そこまでは御承知ござるまい、御目にかゝつたら御分りにならう、といふのである。東坡先生も此手紙を見た時には、また米顚めが圖に乘つてエラがりを云つて居る、と一嘘を發された事であらう。が、それは兎に角に、大言戯語でも有らうが、回教徒ならば、楊許の業を修むとは云ひさうもないことである。又元章の晩年は禪を學んで、死ぬ前一月頃に、朋友には別書を作り、書畫玩好を處分し、香楠木の棺を造らせて、其中に入つて居り、死前七日からは葷を茹はず、淨い衣を被て、沐浴し、香を焚いて寂坐し、最後には偏く群像を請待し、拂子を擧つて、「衆香國中より來り、衆香國中に去る」とか云つて、拂子を擲つて、合掌して逝いた、といふことである。これも芝居がゝり過ぎて居て、おやしい談だが、何にせよ、然樣いふことが傳へられてゐる。回敎徒らしいといふに就ては、何か特別の徵證が無い限りは想はれぬのである。

元章の畫に就ては、最初元章は畫くことは出來なかつたが、居をトする每に、必ず山水明秀の處を擇んで、目の見る

ところを以て、日に漸く之を模倣し、遂に天趣を得たのであると云傳へられてゐる。これは自然を師とするといふことで、甚だ吾人の意に適ふことではあるが、これも疑はしい傳說だ。元章が多く古書を藏したことは分明である。書に於ては既にあらゆる古筆を學んでゐる米章が、畫に於ては毫も古人に學ぶところが無かつたといふことは疑はしい。英雄人を欺くの類で、元章が自ら然様いふことを云つたことは有るかも知れないが、全然古を學ばなかつたらうとは受取れない。しかし書も畫も文章詩賦も、古人以外に米老の機杼、おのづから一新様を出してゐることは爭へない。然し、偏倚な性の發するところ、後人のこれを喜ばぬもの丶有ることも爭へない。書は王獻之、褚遂良、柳公權に得るところの有つたのに、柳公權の事を、惡札の祖で、古法これより蕩然として亡し、など丶云つてゐるのは甚い。黃山谷などは、元章に同情もあり友誼もある人だが、「快劍の陣を斫り、强弩の千里を射つて當る所札を穿つが如し、書家の筆勢も亦此に窮まる、然れども仲由の未だ仲尼に見えざる時の風氣の如きのみ」と言つて居るし、王弇州は、「米元章は王大令、褚河南より來り、神采奕々たれども終に大雅に愧づ、」と云つてゐるし、元章に異論を爲すものは少くない。是の如く元章に就て談つても、何も自分の如きも米元章を蔡君謨より好いて居る譯でも何でも無い。然し元章は有宋一代の巨宗である。翰墨の事の全く泯びぬ限り、其の快劍斫陣の風格は、永く藝壇に雄視するであらうといふことに就ては何人も異論はあるまい。



剝げた假面

正宗白鳥

(一)

瀨木三津野は老牧師や若い事務員に見送られて教會堂を出ると、今まで待たせてゐた車に乘つて家路へ向つたが、途中でふと思立つて、車の方向を轉じさせて、裏町の田上といふ知合ひの小商人の家へ寄つた。

「まあ奧樣」と、其處の主婦は、客の小娘に塵紙を渡して代金を受取りながら、三津野を見上げて、懷つこさうに云つた。

「別に用事はないんですけど、暫くお目に掛らないので、どうしてゐなさるかと思つて」

「本當に御無沙汰ばかりいたしまして申譯が御座いません。……まあ、奧へお通んなすつて下さいまし」

主婦は、年頃の娘を呼んで店番をさせて、自分は三津野を奧の座敷へ導いた。座敷と云つても、一方にはシャボンだの白粉だの塵紙だの、いろ／＼な蕪雜な商品が

積重ねられてあるし、一方には箪笥や鏡臺や針箱などが置かれてゐるし、狹つ苦しくて狹苦しかつた。三津野は膝掛に坐つて、嚙々した高聲で、打解けた話をはじめた。

「さつき瓦紙を買つてゐた女の子は、見たことがあるやうに思はれるのだが、誰れだつたか知ら」

「あの子は角の青物屋の二番娘で御座います」

「あ。あの子が鍛冶の二番目の娘ですか。姉のおきくは伊勢松へ奉公してゐた時分に、わたしの家へたび〳〵お使に來てゐたので、よく知つてゐるんです。妹には會つたことがなかつたけれど、姉妹だからよく似てゐるんですね。姉よりもよつぽど顏立がいゝぢやありませんか」

「誰れもみなさう申して居ります」

「青物屋の娘にしては、奇麗過ぎるくらゐぢやありませんかね」

「あの家では娘自慢なんですから、奥樣がお褒めになつたことを聞いたら、喜びますでせうよ」主婦の言葉には多少の皮肉がまじつてゐた。

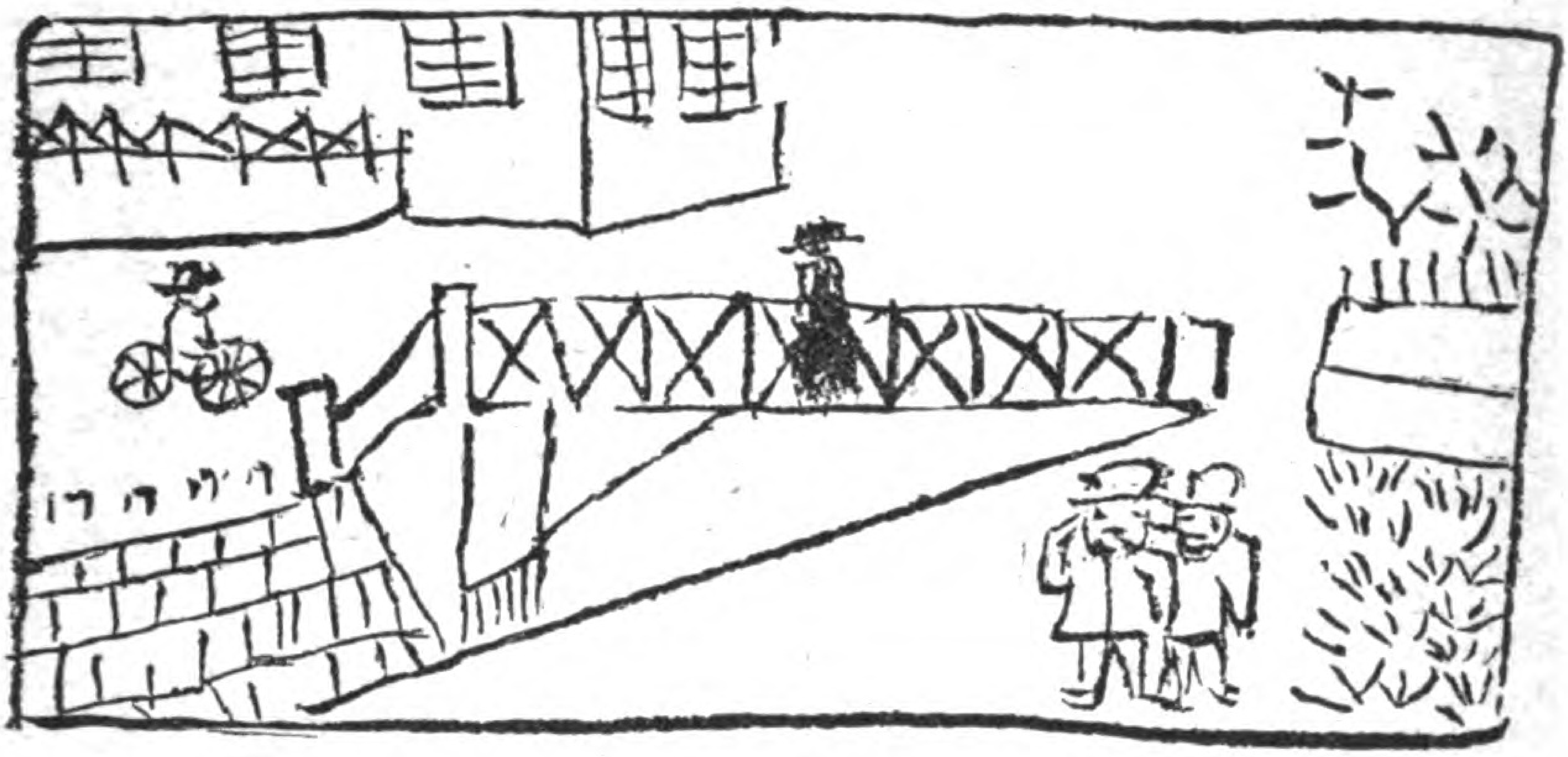
「だしぬけのやうだけれど、あの子はわたしの家へ手助けに來て呉れないでせうか知ら。あの子も一生の運の極る年頃になりかゝつてゐるのだから、傍でよく氣をつけてやらなければいけないと思はれますよ」

「……それは奥樣のお宅へ御奉公が出來ますれば、おせきさんもこんな仕合せのことはないんで御座いますわ」

「早速あの親達に訊いて見て下さらない？」

「え、承知いたしました」

「今日は教會の祈禱會の歸りなんですがね。教會でも、この市の風儀の取締りの方法を相談してゐたんですよ。男ばか



剝げた假面

正宗白鳥

（一）

瀬木三津野は老牧師や若い事務員に見送られて教會堂を出ると、今まで待たせてゐた車に乘つて家路へ向つたが、途中でふと思立つて、車の方向を轉じさせて、裏町の田上といふ知合ひの小商人の家へ寄つた。

「まあ奥樣」と、其處の主婦は、客の小娘に塵紙を渡して代金を受取りながら、三津野を見上げて、懐つこさうに云つた。

「別に用事はないんですけど、暫くお目に掛らないので、どうしてゐなさるかと思つて」

「本當に御無沙汰ばかりいたしまして申譯が御座いません。……まあ、奥へお通んなすつて下さいまし」

主婦は、年頃の娘を呼んで店番をさせて、自分は三津野を奥の座敷へ導いた。座敷と云つても、一方にはシャボンだの白粉だの塵紙だの、いろ／＼な蕪雜な商品が

積重ねられてあるし、一方には箪笥や鏡臺や針箱などが置かれてゐるし、埃つぽくて狭苦しかつた。三浦野は膝掛に坐つて、嗄らした高聲で、打解けた話をはじめた。

「さつき巻紙を買つてゐた女の子は、見たことがあるやうに思はれるのだが、誰れだつたか知ら」

「あの子は角の青物屋の二番娘で御座います」

「あゝ、あの子が鐵治の二番目の娘ですか。姉のおきくは伊勢松へ奉公してゐた時分に、わたしの家へたび〳〵お使に來てゐたので、よく知つてゐるんです。妹には會つたことがなかつたけれど、姉妹だからよく似てゐるんですね。姉よりもよつぽど顏立がいゝぢやありませんか」

「誰れもみなさう申して居ります」

「青物屋の娘にしては、奇麗過ぎるぐらゐぢやありませんかね」

「あの家では娘自慢なんですから、奥様がお褒めになつたことを聞いたら、喜びますでせうよ」主婦の言葉には多少の皮肉がまじつてゐた。

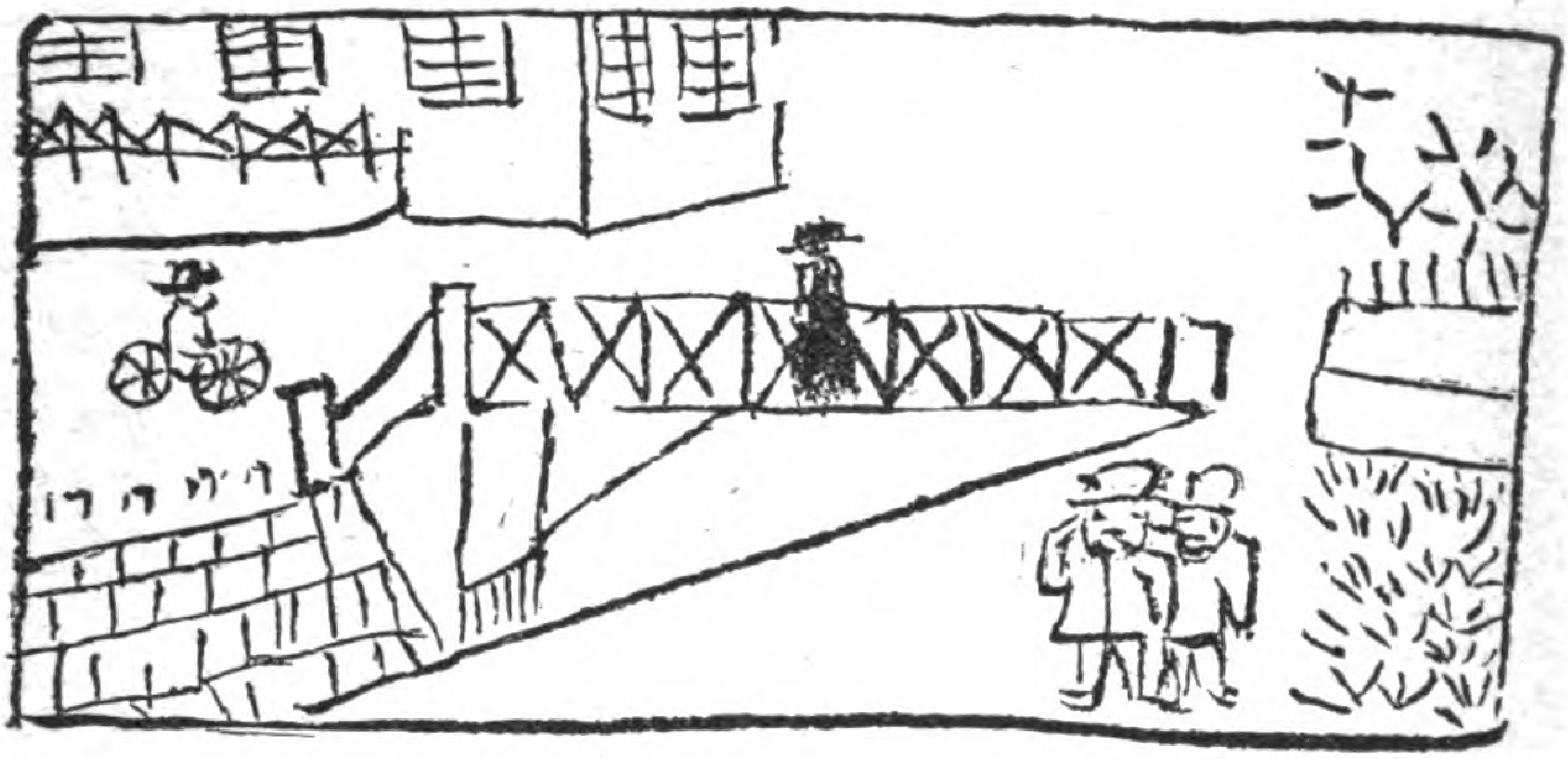
「だしぬけのやうだけれど、あの子はわたしの家へ手助けに來て呉れないでせうか知ら。あの子も一生の運の極る年頃になりかゝつてゐるのだから、傍でよく氣をつけてやらなければいけないと思はれますよ」

「……それは奥様のお宅へ御奉公が出來ますれば、おせきさんもこんな仕合せのことはないんで御座いますわ」

「早速あの親達に訊いて見て下さらない？」

「えゝ、承知いたしました」

「今日は教會の祈禱會の歸りなんですがね。教會でも、この市の風儀の取締りの方法を相談してゐたんですよ。男ばか



剝げた假面

正宗白鳥

（一）

瀬木三津野は老牧師や若い事務員に見送られて教會堂を出ると、今まで待たせてゐた車に乗つて家路へ向つたが、途中でふと思立つて、車の方向を轉じさせて、裏町の田上といふ知合ひの小商人の家へ寄つた。

「まあ奥様」と、其處の主婦は、客の小娘に塵紙を渡して代金を受取りながら、三津野を見上げて、懐つこさうに云つた。

「別に用事はないんですけど、暫くお目に掛らないので、どうしてゐなさるかと思つて」

「本當に御無沙汰ばかりいたしまして申譯が御座いません。……まあ、奥へお通んなすつて下さいまし」

主婦は、年頃の娘を呼んで店番をさせて、自分は三津野を奥の座敷へ導いた。座敷と云つても、一方にはシヤボンだの白粉だの塵紙だの、いろ／＼な蕪雜な商品が

積重ねられてあるし、一方には簞笥や鏡臺や針箱などが置かれてゐるし、埃つぽくて狭苦しかつた。三津野は腰掛に坐つて、嗄やした高聲で、打解けた話をはじめた。

「さつき塵紙を買つてゐた女の子は、見たことがあるやうに思はれるのだが、誰れだつたか知ら」

「あの子は角の青物屋の二番娘で御座います」

「あゝ、あの子が鐵治の二番目の娘ですか。姉のおきくは伊勢松へ奉公してゐた時分に、わたしの家へたび〱お使に來てゐたので、よく知つてゐるんです。妹には會つたことがなかつたけれど、姉妹だからよく似てゐるんですね。姉よりよつぽど顏立がいゝぢやありませんか」

「誰れもみなさう申して居ります」

「青物屋の娘にしては、奇麗過ぎるぐらゐぢやありませんかね」

「あの家では娘自慢なんですから、奥樣がお褒めになつたことを聞いたら、喜びますでせうよ」主婦の言葉には多少の皮肉がまじつてゐた。

「だしぬけのやうだけれど、あの子はわたしの家へ手助けに來て呉れないでせうか知ら。あの子も一生の運の極る年頃になりかゝつてゐるのだから、傍でよく氣をつけてやらなければいけないと思はれますよ」

「……それは奥樣のお宅へ御奉公が出來ますれば、おせきさんもこんな仕合せのことはないんで御座いますわ」

「早速あの親達に訊いて見て下さらない？」

「えゝ、承知いたしました」

「今日は敎會の祈禱會の歸りなんですがね。敎會でも、この市の風儀の取締りの方法を相談してゐたんですよ。男ばか

りじやない、若い女もこの頃は眞面目な奉公なんかはしたがらないで、身持を崩していけないから、わたしは、一人でもさういふことのないやうに救上げたいと思つてゐるんです。鐵治の娘さんだつて、容色がいいから打やつといたら、どんな間違ひが出來ないとも限りませんよ」

「さうで御座いますね」と、主婦は可笑しさを忍んで合鎚を打つて、「奥様もこの頃は苦勞性になりなさいましたのね」

「ほんとに、他の娘のことで取越し苦勞をしたりして、わたしも隨分物好きなんですね。」三津野は快活に笑つて、「でも人一人助けると思ふと、わたしは何よりもいゝことをしたやうで樂みになります」

彼女は、田上の店がこの頃可成りに繁盛してゐることを喜んだり、此處の夫婦仲の睦じいことを喜んだりして、暫く世間ばなしをして、五月の長い日の暮れかゝつたころに其處を出た。

「瀬木の奥さんの元氣のいゝこと」と、店番をしてゐた娘は、土間へ下りて三津野を見送つた母親に向つて云つた。

「何のつもりで、あの人は今日わたのし家へ寄つたのだらうね」母親は詰らなさうな顔して云つたが、その時、道の曲角まで行つてゐた三津野は、車の幌の間から此方を顧みて、田上の主婦が詰らなさうな顔して突立つてゐるのを目に映じて、自己の優越を感じてゐた。

「あの奥さんは、今日はなんにも持つて來て呉れなかつたのね」と、娘が云つたが、母親はそれは耳に留めないで、

「あの人はわたしと同じ歳なんだよ。運がいゝと人間に箔がつくんだね。三十年も前に東京で隣合せに住んでゐた時分には、あの人は貧相で、目鼻立ちもそんなによかあなかつたんだよ」と、云つて、上り口に腰を掛けた。

「三十年前と云へば、わたしなんかよりも、もつと若かつたのね」娘は、三十年前の母親の顔を想像しながら、三津野よりも痩せてしなびて老人染みてゐる母親の横顔を見つめてゐたが、「奥さんはおせきさんを雇ひたいと云つてらしたの

ね。おせきさんよりもわたしが奥さんに使つて頂けないか知ら」

「馬鹿なことお云ひでない」母親は叱りつけるやうに云つて、その拍子に下駄を脱いで店先へ上つた。

「昔のことを思出すと、あんな人を奥さま〳〵と崇め奉るのは、自分が甲斐性がないやうでいやになつちまふ」

「だつて、お母さんはあの奥さんにはいろ〳〵お世話になつてゐるぢやないの？。」

「だから、一生あの人には頭があがらないことになつてしまつたのさ。お前は成べく瀬木さんの厄介にならない方がいいよ」

「だつて、あの奥さんはわたしなんかに柔しんだから」

「上べは柔しくつてもお腹の中は分りやしないさ」

「目で見えもしないお腹の中はどうだつていゝと思ふわ」

「若いうちはそれだから間違ひが起るんだよ」母親は蚤にでも嚙まれたやうに首筋を掻いて、「さあ、お夕飯の仕度をしなきやならないよ。お父さんもゝう歸つて來るだらう」と、臺所の方へ行きかけると、

「わたし、お酒を買つて來ようか。今日はお父さんは遠方へ行つて飛廻つてるんだから、草臥れ直しに一本お燗をつけて上げたらいゝだらう」と、娘はませた口を利いた。

親思ひのその言葉は、母親には快く感ぜられたので、「ぢや西村へ行つて、さう言付けてお出でよ」と云つて、母親は奥へ入つた。

娘は懷中鏡で顏を見てから外へ驅出した。酒屋の西村へ寄つて、「いつものお酒を五合ばかし、直ぐに屆けて頂戴」と聲を掛けて、そこを出ると、往來の人の樣を見ながらぶらり〳〵元の道を戻つたが、青物屋の前まで來ると、内を覗い

て、おせきの名を呼んだ。呼ばれたおせきは、いゝ音信でも聞けさうに胸を躍らせて、表へ飛出した。そして、トタン塀の側で、お互ひにニコ／＼しながら、取留めのない噂をはじめたが、田上の娘は、三津野の云つてゐたことを相手に知らせた。

「あなたはあの奥様のお家へ御奉公に上つて?」とさうだつたら羨ましいと思ひながら訊くと、

「いやなこと、わたしどんな家へでも女中奉公なんかに行かなくつてよ。姉さんを見ても分つてるわ。他人に使はれるなんていやなこと」とおせきはツン／＼と答へた。

「それはさうね。……」と、田上の娘は何となく安心して、「わたしにもそんな話があるんだけど、わたし斷はらうと思つてゐるのよ」

「それに瀨木さんの奥さんはイケ好かない人なのよ。わたし、姉さんに聞いてよく知つてるわ。

「イケ好かないつて、あの奥様は性質の惡い人なのか知ら。柔しいゝ人のやうだけれど」

田上の娘は、相手がイケ好かないといつた譯を聞糺したがつたが、おせきが父親に呼立てられて行つてしまつたので、自分も思ひを殘してフラ／＼家へ歸つた。

（二）

三津野は、その晩、例の如く夫の博一や、彼女の甥で養子に貰つてゐる文吉や、寄寓者である老爺小間使がはりに預つてゐる知人の娘などゝ食事を共にしたが、その座で荷物屋の鐵治の二番娘を自分附の女中に雇入れる話を持出した。

「あんな女は打つちやつといたら墮落するばかりだからわたしの側に置いてよくしつけたいと思ひますよ」と云ふと、

夫の博一は、淡白に同意した。

博一は七十近い漢法醫であつた。一ころ流行つた時代もあつたが、資產は醫術によつて殖えたのではなかつた。實業家であつた弟の子供のないのに附込んで、その遺產を横領したとも云はれてゐるし、それよりも、昔三津野の美貌を利用してある富豪から少なからぬ財產を捲上げたといふ噂が、昔を知つてゐる人々の間に傳つてゐた。三津野はこの頃でも、月に三四度は東京へ出掛けて、市中に一軒構へてある瀟洒たる別宅に泊つて來るのであつたが、氣力の衰へてゐる博一は、二十歲近くも年齢の相違してゐる妻と一しよに出掛けることは滅多になかつたし、妻の所行に對して非難らしい文句をつけもしなかつた。

食事の際にも、博一はムツヽリして、老人らしい軟い食物をモグ〳〵させて、あたりの話から超然とした風をしてゐたが、三津野は一座の中心となつてよく喋舌つた。このO市の出來事でも、東京での見聞でも、神樣の噂でも男女間の情事でも、同じやうな快活な調子で話して、皆んなの耳を喜ばせた。

食後の話が濟むと、彼女は、常例によつて、夕暮れ時の暫くの間を、密室で靜かに神と交るといふ口實の下に、二階の自分の居室に閉籠るのであつた。そこへは誰れの出入りをも許さなかつた。その蟄居の一つの理由は、彼女の信仰の深いことを、牧師をはじめ教會員などに知らせて讃美させたいためであつたが、もう一つの理由は、そこで煙草を吸ひながら、猥雜な書物を讀耽ることであつた。貸本屋がひそかに持つて來る、さういふ淫らな書物は、祈禱本や聖徒の傳記と一しよに、袋戸棚の奥へしまはれてあつた。

彼女はその夜も、皆んなの笑ひ聲を後にして階子段を上つて、狹くつても整頓してゐる自分の居室へ入つた。そこには、をり〳〵の假睡をするための小さな寢臺が、羽蒲團を添へて片隅に置かれてあつた。床の間には菖蒲が生けてあつ

て、おせきの名を呼んだ。呼ばれたおせきは、いゝ音信(たより)でも聞けさうに胸を躍らせて、表へ飛出した。そして、トタン塀の側で、お互ひにニコ〳〵しながら、取留めのない噂をはじめたが、田上の娘は、三津野の云つてゐたことを相手に知らせた。

「あなたはあの奥様のお家へ御奉公に上つて?」とさうだつたら羨ましいと思ひながら訊くと、

「いやなこと、わたしどんな家へでも女中奉公なんかに行かなくつてよ。姉さんを見ても分つてるわ。他人に使はれるなんていやなこつた」とおせきはツン〳〵と答へた。

「それはさうね。……」と、田上の娘は何となく安心して、「わたしにもそんな話があるんだけど、わたし断はらうと思つてるのよ」

「それに瀬木さんの奥さんはイケ好かない人なのよ。わたし、姉さんに聞いてよく知つてるわ」

「イケ好かないつて、あの奥様は性質の悪い人なのか知ら。柔しいゝ人のやうだけれど」

田上の娘は、相手がイケ好かないといつた譯を聞糺したがつたが、おせきが父親に呼立てられて行つてしまつたので、自分も思ひを殘してフラ〳〵家へ歸つた。

(二)

三津野は、その晩、例の如く夫の博一や、彼女の甥で養子に貰つてゐる文吉や、寄寓者である老婆小間使がはりに預つてゐる知人の娘などゝ食事を共にしたが、その座で荒物屋の鐵治の二番娘を自分附の女中に雇入れる話を持出した。

「あんな女は打つちやつといたら墮落するばかりだからわたしの側に置いてよくしつけたいと思ひますよ」と云ふと、

夫の博一は、淡白に同意した。

博一は七十近い漢法醫であつた。一ころ流行つた時代もあつたが、資産は醫術によつて殖えたのではなかつた。實業家であつた弟の子供のないのに附込んで、その遺産を横領したとも云はれてゐるし、それよりも、昔三津野の美貌を利用してある富豪から少なからぬ財産を捲上げたといふ噂が、昔を知つてゐる人々の間に傳つてゐた。三津野はこの頃でも、月に三四度は東京へ出掛けて、市中に一軒構へてある瀟洒たる別宅に泊つて來るのであつたが、氣力の衰へてゐる博一は、二十歳近くも年齢の相違してゐる妻と一しよに出掛けることは滅多になかつたし、妻の所行に對して非難らしい文句をつけもしなかつた。

食事の際にも、博一はムツヽリして、老人らしい軟い食物をモグ／＼させて、あたりの話から超然とした風をしてゐたが、三津野は一座の中心となつてよく喋舌つた。このO市の出來事でも、東京での見聞でも、神樣の噂でも男女間の情事でも、同じやうな快活な調子で話して、皆んなの耳を喜ばせた。

食後の話が濟むと、彼女は、常例によつて、夕暮れ時の暫くの間を、密室で靜かに神と交るといふ口實の下に、二階の自分の居室に閉籠るのであつた。そこへは誰れの出入りをも許さなかつた。その蟄居の一つの理由は、彼女の信仰の深いことを、牧師をはじめ教會員などに知らせて讃美させたいためであつたが、もう一つの理由は、そこで煙草を吸ひながら、猥雜な書物を讀耽ることであつた。貸本屋がひそかに持つて來る、さういふ淫らな書物は、祈禱本や聖徒の傳記と一しよに、袋戸棚の奥へしまはれてあつた。

彼女はその夜も、皆んなの笑ひ聲を後にして階子段を上つて、狹くつても整頓してゐる自分の居室へ入つた。そこには、をり／＼の假睡をするための小さな寢臺が、羽蒲團を添へて片隅に置かれてあつた。床の間には菖蒲が生けてあつ

て、鏡臺も備へつけられて地震後の新築の木の香がして、部屋の中は派手であつたが、それとは不似合に、十字架に掛けられたキリストの姿が一方の壁に掛つてゐた。三津野はいつもなら、最後の苦悶を現はした神の子の裸體姿を一瞥してから、煙草を一服吸ふと、われともなく恍惚境に入つて、猥雜な書物を手に取るのであつたが、今夜は、教會などであまりにハシヤギ過ぎたせいか、夕餐を喰べ過ぎたせいか、靜かな所に身を置くと、禮拜する氣にも讀書する氣にもなれなくつて、堪へがたい睡魔に襲はれた。寢臺に横たはつて目を瞑るや否や、正體なく寢息を洩らして夜の更けるのを知らなかつた。家の者は、主婦の御信心部屋へ入ることは禁ぜられてゐたので不斷よりは時が過ぎても打ちやつて置いて、十時の就眠時刻にはめい〳〵の寢室へ入つて眠りに就いた。博一は腹こなしに謡曲を唄つて、寄食者の婆さんに寢床を伸べさせて、腰から下だけ按摩を取らせて、早くから眠つた。

　三津野が目を醒ました時は、眞夜中頃であつた。何といふダラシのない眠り方をしたのであらうと思ひながら身を起して、階下の寢室へ下りようとしたが、ふと、二階の次の室から、そこを居室にしてゐる文吉が、階子段を下りようとしてゐるのに氣がついた。便所へ行くのかと思つたが、その足音があたりを憚つてゐるやうな忍足であつたので、變に思つて、襖をば開けないで耳を欹てゝゐると、階子段のとつ附きの部屋へ入つて行くらしかつた。そこには、預り子のきみ子がゐるのだつた。さてはと、三津野はちよつと驚いたが、意外に感じるよりも、むしろ豫期した通りに事が運んだと思つて微笑を洩らした。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。そして、彼女はかねて二人の言語擧動に注意を拂つてゐた。

　今襖を開けて階子段を下りたなら、二人に勘付かれる恐れがあるので、彼女は再び假りの寢床に横たはつて時を過した。波の音が微かに聞える外には、世間は寂としてゐたが、若い男女の囁きは、心を凝らした三津野の耳にも入つて來

なかつた。彼女はそれをもどかしく思つた。しかし、さうしてゐるうちに、彼女自身の若い時分の樂しかつた夢が、不斷の思出に浮ぶよりも、一層强くあり〳〵と、自分の肉體から絞り出されるやうに描かれた。最初の抱擁や最初の男の甘い言葉や、最近のある戲れなどが五體に喰入るやうに感ぜられだした。

彼女は兩手を堅く組合せて自分の胸を壓えた。そして、エス樣々々々と呟いて、額面の苦悶の姿に目を注いだ。何だか神に祈つてゐるのであつたが、祈りの心は言葉となつては口から出なかつた。

間もなく、以前の忍足の音が階子段に聞えて、二階の次の室まで來て消えると、三津野はホツと息を吐いた。胸の動搖もやうやく鎭まつた。しかし、階下の寢室へ下りて老人と枕を並べる氣にはなれなかつたので、そのまゝ、夜明け頃まで假りの寢床を離れなかつた。

翌朝階下へ下りると、女中を指揮して朝の雜用を足してゐた老婆は、忝しく腰を屈めて挨拶して、「昨夕は大變遲くまでお籠りになつていらつしやつたぢやありませんか。お邪魔をしちやいけないと思つて、皆んなお先きへ休ませて頂きました」と言譯らしく云ふと、

「老婆さんはよく眠れて仕合せですね。わたしはどうかすると寢づらくて、夜中にたび〳〵目が開いて爲樣がないんですよ」と、三津野は云つて、預り子のきみ子の持つて來た齒揚子と練齒磨きを持つて、湯殿の方へ行つた。きみ子は洗面器に湯を滿へて運んで來たが、三津野は齒を磨きながら、きみ子の方をチヲ〳〵見て、可笑しさ憎らしさ嫉ましさを覺えてゐたが、

「わたし、今日は午後から東京へ行かうと思つてゐるのよ。きみちやんを連れてつて上げようか」と云つた。

「えゝ、お伴させて下さいまし」

て、鏡臺も備へつけられて地震後の新築の木の香がして、部屋の中は派手であつたが、それとは不似合に、十字架に掛けられたキリストの姿が一方の壁に掛つてゐた。三津野はいつもなら、最後の苦悶を現はした神の子の裸體姿を一瞥してから、煙草を一服吸ふと、われともなく恍惚境に入つて、猥雜な書物を手に取るのであつたが、今夜は、教會などであまりにハシヤギ過ぎたせいか、夕餐を喰べ過ぎたせいか、靜かな所に身を置くと、禮拜する氣にも讀書する氣にもなれなくつて、堪へがたい睡魔に襲はれた。寢臺に横たはつて目を瞑るや否や、正體なく寢息を洩らして夜の更けるのを知らなかつた。家の者は、主婦の御信心部屋へ入ることは禁ぜられてゐたので不斷よりは時が過ぎても打ちやつて置いて、十時の就眠時刻にはめい〳〵の寢室へ入つて眠りに就いた。博一は腹こなしに謠曲を唄つて、寄食者の婆さんに寢床を伸べさせて、腰から下だけ按摩を取らせて、早くから眠つた。

三津野が目を醒ました時は、眞夜中頃であつた。何といふダラシのない眠り方をしたのであらうと思ひながら身を起して、階下の寢室へ下りようとしたが、ふと、二階の次の室から、そこを居室にしてゐる文吉が、階子段を下りようとしてゐるのに氣がついた。便所へ行くのかと思つたが、その足音があたりを憚つてゐるやうな忍足であつたので、變に思つて、襖をば開けないで耳を欹てゝゐると、階子段のとつ附きの部屋へ入つて行くらしかつた。そこには、預り子のきみ子がゐるのだつた。さてはと、三津野はちよつと驚いたが、意外に感じるよりも、むしろ豫期した通りに事が運んだと思つて微笑を洩らした。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。そして、彼女はかねて二人の言語擧動に注意を拂つてゐた。

今襖を開けて階子段を下りたなら、二人に勘付かれる恐れがあるので、彼女は再び假りの寢床に横たはつて時を過した。波の音が幽かに聞える外には、世間は寂としてゐたが、若い男女の囁きは、心を凝らした三津野の耳にも入つて來

なかつた。彼女はそれをもどかしく思つた。しかし、さうしてゐるうちに、彼女自身の若い時分の樂しかつた夢が、不斷の思出に浮ぶよりも、一層強くあり〳〵と、自分の肉體から絞り出されるやうに描かれた。最初の抱擁や最初の男の甘い言葉や、最近のある戯れなどが五體に喰入るやうに感ぜられだした。

彼女は兩手を堅く組合せて自分の胸を壓えた。そして、エス樣々々々と呟いて、顏面の苦悶の姿に目を注いだ。何だか神に祈つてゐるのであつたが、祈りの心は言葉となつては口から出なかつた。

間もなく、以前の忍足の音が階子段に聞えて、二階の次の室まで來て消えると、三津野はホツと息を吐いた。胸の動悸もやうやく鎭まつた。しかし、階下の寢室へ下りて老人と枕を並べる氣にはなれなかつたので、そのまゝ、夜明け頃まで假りの寢床を離れなかつた。

翌朝階下へ下りると、女中を指揮して朝の雜用を足してゐた老婆は、恭しく腰を屈めて挨拶して、「昨夕は大變遲くまでお歸りになつていらつしやつたぢやありませんか。お邪魔をしちやいけないと思つて、皆んなお先きへ休ませて頂きました」と言譯らしく云ふと、

「老婆さんはよく眠れて仕合せですね。わたしはどうかすると寢づらくて、夜中にたび〳〵目が開いて爲樣がないんですよ」と、三津野は云つて、預り子のきみ子の持つて來た齒揚子と練齒磨きを持つて、湯殿の方へ行つた。きみ子は洗面器に湯を湛へて運んで來たが、三津野は齒を磨きながら、きみ子の方をチラ〳〵見て、可笑しさ憎らしさ嫉ましさを覺えてゐたが、

「わたし、今日は午後から東京へ行かうと思つてゐるのよ。きみちやんを連れてつて上げようか」と云つた。

「えゝ、お伴させて下さいまし」

「今度は文吉を連れて行く筈だつたのだけれど、木村がゐなくなつて、藥局の方が忙しいだらうから、あの子は家に置いて、あなたを連れて行くことにしようね」

「えゝ」

「梅雨にならない前に四五日、東京へ行つて遊んで來ませうよ。それに、二三軒を人を訪ねて用足しをしなきやならないの」

三津野は、ぶよぶよ肥つた兩肌を脫いでシヤボンで顏を洗ひながら、「それまでに昨夕話した鐵治の娘に會つて置きたいんだから、用上へ使をやつて、主婦に連れて來させるやうにしてお呉れな」

「承知いたしました」

きみ子は湯殿から出て行つた。三津野は顏を洗つて髮の亂れを直して、朝餐の膳に向ふまでに、文吉ときみ子とをどう取扱つてい〻かと考へてゐた。二人を妻合せようかとかつて夫と相談したこともあつて、文吉にそのことを微見かしたことさへあつたのだが、文吉の前に養子にするつもりで五六年も家に置いて可愛がつてゐた夏雄といふ男を、ふとい や氣が差して、用捨なく追出した時のやうに、文吉にも飽きが出か〻つてゐるのであつた。文吉は自分の甥ではあるし、養子に貰ふ時に、先方の親達と堅い約束が取りかはされてあるので、無雜作に緣を切つてしまふ譯には行かないのであるが、適當な口實が出來たなら、いくらかの喰扶持をやつて別居させて、此家の後嗣者には、外の男を見つけて來ようと思つてゐることもあつた。それには、昨夕の事などがい〻口實になるのであつたが、三津野は直さまそれを持出して文吉を取つちめようとはしなかつた。自分の身のまはりに、さういふ若い男女の情事が起つてゐるのは、彼女に取つては、實は賑かで面白いのであつた。

「今朝はわたしが寝坊したものだから、朝御飯がおそくなつて、皆んなお腹が空いたらうね」と云つて、文吉やきみ子なぞと食卓を圍んだ。彼女は一人淋しく食事をするのをいやがつて、自分がおそくなる時には、他の誰れかれを待たせて食事の相手をさせるのであつた。きみ子は、三津野に命ぜられたので、今朝は皆んなを代表して、いや〳〵ながら、食前の感謝の祈禱を捧げた。

「今夜は、牧師さん御夫婦を呼んで御飯を上げる筈だつたけれど、東京へ行くことになつたからお斷りしなきやならない。急用が出來て母は東京へまゐりますと、文さんは手紙を書いて牧師さんところへ使に持たせてやつてお異れよ」と、三津野が命ずると、文吉は承知して、「ぢや、牧師さんは失望しますね。昨夕から當てにして喜んでゐたでせうのに」と笑つた。

「そのかはり東京から歸つて來たら、ウンと御馳走をして上げようよ。……あの人は素直で辯舌も下手ぢやないけど、チョカ〳〵してゐて人間に重味がないからいけない。あれぢやいくら熱心に運動しても信者は殖えはしないよ。わたし今度東京で××さんに會つたら、よく譯を話して、もつと重味のある人を寄越して貰ふことにしよう。私達が熱心になつてお金も遣つても、肝心の牧師さんがあんな風ぢや、張合ひがありやしない」

「でも、あの人は此方へ來てから身體がよくなつたと云つて喜んでるのに、今排斥して歸しちや氣の毒ですね」

「だつて能のない人は爲方がないぢやないか。今の時世に若いくせに、こんな土地へ來て牧師になるのは、能無しの證據なんだよ」

　三津野の毒口に反感を起した文吉は、若い牧師に多少同感して、

そんならはじめから呼ばなければよかつたんですね。」

「今度は文吉を連れて行く筈だつたのだけれど、木村がゐなくなつて、藥局の方が忙しいだらうから、あの子は家に置いて、あなたを連れて行くことにしようね」

「えゝ」

「梅雨（つゆ）にならない前に四五日、東京へ行つて遊んで來ませうよ。それに、二三軒を人を訪ねて用足しをしなきやならないの」

三津野は、ぶよ〳〵肥つた兩肌を脫いでシャボンで顏を洗ひながら、「それまでに昨夕話した鐵治の娘に會つて置きたいんだから、田上へ使をやつて、主婦に連れて來させるやうにしてお吳れな」

「承知いたしました」

きみ子は湯殿から出て行つた。三津野は顏を洗つて髮の亂れを直して、朝餐の膳に向ふまでに、文吉ときみ子とをどう取扱つていゝかと考へてゐた。二人を妻合せようかとかつて夫と相談したこともあつて、文吉にそのことを微見（ほのめ）かしたことさへあつたのだが、文吉の前に養子にするつもりで五六年も家に置いて可愛がつてゐた夏雄といふ男を、ふとや氣が差して、用捨なく追出した時のやうに、文吉にも飽きが出かゝつてゐるのであつた。文吉は自分の甥ではあるし、養子に貰ふ時に、先方の親達と堅い約束が取りかはされてあるので、無雜作に緣を切つてしまふ譯には行かないのであるが、適當な口實が出來たなら、いくらかの喰扶持をやつて別居させて、此家の後嗣者（あととり）には、外の男を見つけて來ようと思つてゐることもあつた。それには、昨夕の事などがいゝ口實になるのであつたが、三津野は直さまそれを持出して文吉を取つちめようとはしなかつた。自分の身のまはりに、さういふ若い男女の情事が起つてゐるのは、彼女に取つては、實は賑かで面白いのであつた。

「今朝はわたしが寝坊したものだから、朝御飯がおそくなつて、皆んなお腹が空いたらうね」と云つて、文吉やきみ子なぞと食卓を圍んだ。彼女は一人淋しく食事をするのを嫌がつて、自分がおそくなる時には、他の誰れかれを待たせて食事の相手をさせるのであつた。きみ子は、三津野に命ぜられたので、今朝は皆んなを代表して、いや／＼ながら、食前の感謝の祈禱を捧げた。

「今夜は、牧師さん御夫婦を呼んで御飯を上げる筈だつたけれど、東京へ行くことになつたからお斷りしなきやならない。急用が出來て母は東京へまゐりますと、文さんは手紙を書いて牧師さんところへ使に持たせてやつてお呉れよ」

と、三津野が命ずると、文吉は承知して、「ぢや、牧師さんは失望しますね。昨夕から當てにして喜んでゐたでせうのに」と笑つた。

「そのかはり東京から歸つて來たら、ウンと御馳走をして上げようよ。……あの人は素直で辨舌も下手ぢやないけど、チョカ／＼してゐて人間に重味がないからいけない。あれぢやいくら熱心に運動しても信者は殖えはしないよ。わたし今度東京で××さんに會つたら、よく譯を話して、もつと重味のある人を寄越して貰ふことにしよう。私達が熱心になつてお金も遣つても、肝心の牧師さんがあんな風ぢや、張合ひがありやしない」

「でも、あの人は此方へ來てから身體がよくなつたと云つて喜んでるのに、今排斥して歸しちや氣の毒ですね」

「だつて能のない人は爲方がないぢやないか。今の時世に若いくせに、こんな土地へ來て牧師になるのは、能無しの證據なんだよ」

三津野の毒口に反感を起した文吉は、若い牧師に多少同感して、

そんならはじめから呼ばなければよかつたんですね。」

一呼んだから何時までも置かなきやならい譯はありやしないよ。極つたお禮はちやんとしてゐるんだから。わたしだつて、あの人のためには隨分お金を遣つてるんぢやないかね。宗教家なんて者は、見たゞけでも威厳があつて、その人の前に出ると、自然に頭が下るやうな人でなきやいけないね。」

伯母さんはそんな威厳のある方にお會ひになつたことがあつて？」きみ子は傍から口を出した。

「さうねえ、以前は一人二人、そんな人に會つたこともあつたけれど、この頃は、何處にもそんな人は見當らなくなつたよ。見たゞけで頭の下るつていふ人は、世の中に種切れになつたらしいのね」

「でも、お母さんだつて、二階にかゝつてる十字架のキリストの姿の前には、自然に頭が下るんでせう」

「それは極つてるぢやないか。」三津木は愼みある顏付して云つた。「お前の居室にあゝいふ尊い繪姿を掛けて置くと、夜中にも罪な心が無くなつて安らかに眠れるのだよ」

「わたしは繪像なんかなくつても、毎晩正體なしに熟睡されますよ」

「どうだか分つたものぢやない」

三津木はふと、相手の白々しい言草を憎さげに感じて、目を尖らせて、皮肉な口調でさう云つたが、文吉が何とも感じないので、

「お前なぞの信仰は附燒刃だから駄目さ」と、も一度突つゝくと、文吉は照れかくしにニヤ〳〵笑つた。

「惡いことをするにも、コソ〳〵泥棒見たいな眞似をするのはいけないよ。神樣のお目は光つてゐるのだから」

さう云はれても、神經の鈍い呑氣な文吉は、ニヤ〳〵笑ひを續けるばかりであつたが、きみ子は胸を騷がせて目を伏せた。」

「きみちやんにはわたしが話したいことがあるんだけれど、それは東京に行つてからにしようね」

一度尖つてゐた三津野の顏もあたりまへになつたので、きみ子も稍々安心したが、東京へ行つてから話があるといふのが、薄つ氣味惡かつた。

「サア、台所の跡仕末はお春に賴んでおいて、あなたは髪を洗つて仕度をおよしよ　あなたは久し振りに東京へ行くんだから　氣をつけて勢一杯おつくりをしなきやいけないの、わたしが連れて行くところがあるんだからね。」

三津野は一人で面白さうに云つて、自分は診察室へ顏を出して　知合ひの患者に、親切さうに容態を訊ねたり　世間話をしかけたりした。現代の病院風でなくつて　家庭的なのが一部の患者の意に投じて、耄碌しかけた老醫師も多少の尊敬を得てゐるのであつた。三津野が老夫を勵まして　いつまでもこんな稼業をやらせてゐるのは、幾分の利益の得られるためでもあつたが　子供のない自分の世を賑やかにするためでもあつた。

「どうせ收支はつぐなはないんですけど、不幸な方のお世話をするのは　何よりも私どもの樂みなんで御座います」

と、よく人に向つて云つてゐた。

（三）

彼女がきみ子の側に立つて　髪の結ひ振の差圖をしてゐるところへ　田上の主婦が訪ねて來たが、鐵治の娘は連れて來ないで、あの子がゐなくては家が困るから、折角の思召しだがお斷りすると云ふ先方の意志だけを傳へたのであつた。

「あしこでも人手がないからさうだらうね」と三津野は何の氣なしに聞流したが、今おつくりをしてゐるきみ子の顏を、昨夕見た不斷のまゝのおせきに比べると、却つて此方が餘程見劣りするやうだつたので、どうせ傍に置いて自分

の用を足させるには、美しいおせきの方を撰びたかつた。東京などへ連れて行くにしても、おせきの方を撰りたかつた。それで、主婦がお世辭に、きみ子の髮を褒めたりするのに聯合つたあとで、

「鍛冶の主婦(おかみさん)にわたしが會つてよく譯を話したなら、あの子を寄越さないことはないでせうけれど。……わたしの手に置けば決して惡いやうにはしませんよ。氣をつけて仕付けて、時が來たら、いゝ緣談を搜して、わたしの方で立派な仕度をしてお輿入れをさせるつもりなんですけれど」と、昨夕一度見たばかりのおせきに、口先きばかりで惚込んで云つた。

「さうで御座いますわね。お宅樣へは願つても使つて頂きたいのが當り前なんですのに」と、主婦は調子を合せた。

「も一度さう云つて勸めて下さらない?。わたし、八百屋の主婦に直接話したいから、近いうちに、あなたが誘つて連れて來て下さい」

「承知いたしました」

主婦は、二三切包んで吳れたカステラを持つて暇を告げた。そして、家へ歸ると、「てんでおせきさんの方で行く氣がないんだから駄目なんだけれど、さうは云はれないし、困つちやつた。詰らない暇潰しをさゝれるよ」と、夫や娘に向つてこぼした。

「奧さんはなぜあたしにさう云つて吳れないんでせう。おせきさんばかりを贔負にして。あたしだつたら、直ぐに出掛けて行くんだけど」と、娘は不平らしく云つた。

「あの人に僕は亂ていゝことがあるものかね。碌なことを覺えやしないよ。廿年程ど前に、東京からおさきさんを連れて來て、初心(うぶ)な女一人を玩具にしにしてしまつたんだからね。あの奧さん閒あの年齡(とし)をして面喰郞なんだから呆れてしま

ふよ。容色のいゝ女だと、自分の側へ置きたがるんだ」

「素無しにしたつて、どんなにしたの？」

「自分で唆かして詰らない男に關り合ひをつけさせて、あとでは因縁をつけて追出して、知らん顔をしてゐるんだからひどいよ」

「おせきさんが、あの奥さんはイケ好かない人だと云つてたのは、さういふことがあつたせいか知ら。………詰らない男つて誰れのことなの？。わたしの知らない人？」

「そんなことはお前は知らなくてもいゝんだよ」

母親はそんなに云つてゐても、娘は、たまに覗いても華美に見える瀨木の家へ奉公に行くことを何よりも望んでゐた。時々會つて顏だけは知つてゐるきみ子のやうに、派手な身裝をして、奥樣のお供をして、教會堂へ行つたり町を歩いたり、東京へも遊びに行つたりすることが、またとなく樂しいことのやうに想像された。それで、母親がかまつて呉れないのなら、母親には秘密で、自分で瀨木の家を訪ねて、直かに奉公を賴んで見ようかと思ひついた。幸ひ、その日は、父親の命令で、瀨木の近くに住んでゐる家主へ家賃を收めに行かされたので、それを機會に、三津野を訪問しようとした。直ぐに入りかねて、暫く門の前をウロ〳〵してゐたが、そこへ、東京行の仕度をした三津野がきみ子を隨へて、皆んなに見送られながら出て來たので、極り惡さうに門の片隅へ身を寄せた。

「ときちやんはわたしの家へ來たの？」と、三津野は娘を見付けて訊ねた。

娘は口のうちで答へた。

「何か用事があるの？」三津野は側へ近づいて柔しく訊ねた。

の用を足させるには、美しいおせきの方を撰びたかつた。東京などへ連れて行くにしても、おせきの方を撰りたかつた。それで、主婦がお世辭に、きみ子の髮を褒めたりするのに聯合つたあとで、

「鍛冶の主婦にわたしが會つてよく譯を話したなら、あの子を寄越さないことはないでせうけれど。……わたしの……に置けば決して惡いやうにはしませんよ。氣をつけて仕付けて、時が來たら、いゝ緣談を搜して、わたしの方で立派な仕度をしてお輿入れをさせるつもりなんですけれど」と、昨夕一度見たばかりのおせきに、口先きばかりで惚込んで云つた。

「さうで御座いますわね。お宅樣へは願つても使つて頂きたいのが當り前なんですのに」と、主婦は調を合せた。

「も一度さう云つて勸めて下さらない？。わたし、八百屋の主婦に直接話したいから、近いうちに、あなたが誘つて連れて來て下さい」

「承知いたしました」

主婦は、二三切包んで呉れたカステラを持つて暇を告げた。そして、家へ歸ると、「てんでおせきさんの方で行く氣がないんだから駄目なんだけれど、さうは云はれないし、困つちやつた。詰らない暇潰しをさゝれるよ」と、夫や娘に向つてこぼした。

「奥さんはなぜあたしにさう云つて呉れないんでせう。おせきさんばかりを贔屓にして。あたしだつたら。直ぐに出掛けて行くんだけど」と、娘は不平らしく云つた。

「あの人に使はれていゝことがあるものかね。碌なことを覺えやしないよ。廿年ほど前に、東京からお妾さんを連れて來て、初心な娘一人を臺無しにしてしまつたんだからね。あの奥さんはあの年齢をして面喰なんだから呆れてしま

ふよ。容色のいゝ女だと、自分の側へ置きたがるんだ」
「臺無しにしたつて、どんなにしたの？」
「自分で唆かして詰らない男に關り合ひをつけさせて、あとでは因緣をつけて追出して、知らん顏をしてゐるんだからひどいよ」
「おせきさんが、あの奥さんはイケ好かない人だと云つてたのは、さういふことがあつたせいか知ら。………詰らない男つて誰れのことなの？。わたしの知らない人？」
「そんなことはお前は知らなくてもいゝんだよ」
母親はそんなに云つてゐても、娘は、たまに覗いても華美に見える瀨木の家へ奉公に行くことを何よりも望んでゐた。時々會つて顏だけは知つてゐるきみ子のやうに、派手な身裝をして、奥樣のお供をして、教會堂へ行つたり町を歩いたり、東京へも遊びに行つたりすることが、なにとなく樂しいことのやうに想像された。それで、母親がかまつて呉れないのなら、母親には秘密で、自分で瀨木の家を訪ねて、直かに奉公を賴んで見ようかと思ひついた。幸ひ、その日は、父親の命令で、瀨木の近くに住んでゐる家主へ家賃を收めに行かされたので、それを機會に、三津野を訪問しようとした。直ぐに入りかねて、暫く門の前をウロ〳〵してゐたが、そこへ、東京行の仕度をした三津野がきみ子を隨へて、皆んなに見送られながら出て來たので、極り惡さうに門の片隅へ身を寄せた。
「ときちやんはわたしの家へ來たの？」と、三津野は娘を見付けて訊ねた。
娘は口のうちで答へた。
「何か用事があるの？」三津野は側へ近づいて柔しく訊ねた。

「いゝえ、用事があつて伺つたのぢや御座いませんの」

「遊んでいらしやいと云ひたいのだけれど、わたし今出掛けるところなのよ。生憎だつたわね」

三津野はさう云つて、ふと、この娘に自分を見送らせようと思ひついて、停車場まで連れて行くことにした。娘は大人しく隨いて行つた。娘は相手に親しくされるのに甘えて、思慮もなく、八百屋の娘おせきが、奉公に出たがらない譯をアケスケと話した。

「さうだつたのか。ぢや、あなたのお母さんが打明けてさう云つて呉れゝばよかつたのに。……あの八百屋の娘は隨分生意氣なのね」

なんだ、八百屋の娘風情がと腹では思つたが、信者としての見榮から、それを口へ出しては云はなかつた。そしてその代り自分を使つて呉れと、田上の娘が頼んでも輕く聞流した。

汽車に乘ると知合ひの男と隣合せになつたので、暫く世間話がはずんだ。話が止切れると、三津野は、おせきを自分の側へ引寄せる手段を考へたが、あんな小娘を手に入れることくらゐ知慧を絞る必要は何もなさゝうであつた。近づいて優しい聲を掛けて、氣に入つた柄を一反も貰つてやらうなら、尾を振つて隨いて來るに違ひないと思はれた。

東京へ着くと、留守番代りに知合ひの夫婦者に貸してある麻布の別邸へ、きみ子だけを先きへやつて、自分の來たことを知らせて置いて、彼女自身は豐かな手土産を持つて、二三軒知人の家を訪問した。何處でも氣さくな奥様として歡迎された。不斷はよく知人の若い息子や娘を誘つて物を食べに行つたり、芝居を見に行つたりするのであつたが、今度はそんなことよりも、新たな養子を物色するのに骨を折つた。どうせ簡單に事が運ぶのではなかつたが、あの子がいゝ、この子がいゝと知人の子供を養子の候補者として考へるのに興味を寄せてゐた。

麻布の別邸へ行くと、風呂が立つてゐたので、きみ子と一しよに入つたが、この女の子がいつの間に、人の目をかすめて、文吉と知合つたのかと思ふと、その發育盛りの裸體姿が小癪に觸つた。きみ子に自分の脊を流させたあとで、わたしが「あなたを洗つて上げよう」と云つて、シャボンをつけたタオルで相手のふくらんだ脊をこすつたが、この若い肌が最早男に汚されてゐるのかと思ふと、そこへ「この女處女でない」といふ燒印でも押してやらうかと、ひそかに薄笑ひを洩らした。

「きみちやんなぞ若いから、磨けば磨くほど身體に艶が出て奇麗になるのね」と、悅れしがらせを云ふと、きみ子は顏を綻ばせて、

「伯母さん、今夜、活動へでも連れてつて下さらない？」と、甘えた口調で云つた。

「活動へ？」三津野は意外に感じて、「わたしは活動だけは御免だよ」

「わたし、暫く東京の活動は見ませんのに」

「でも、田舍の活動はよく見てるぢやないの？文吉でもきみちやんでも、活動は好きなんだね」

三津野は、自分は殆んど見たことがなかつたのが平生若い二人がよく活動寫眞の話をしてゐるのを聞いてゐて、活動の繪はどんなものであるかをよく知つてゐた。そして時々は二人が一しよにO市の活動小屋へ出掛けて行くのを許してゐた。

「明日は何處かへ連れてつて下さるんでせうか」

「さあ、何處へ連れて行かうかね」

三津野は、きみ子の脊を意地の惡い目で見ながら、「岩井先生の御都合を伺つて、今夜にでもあなたを連れて行かうか

「いゝえ、用事があつて伺つたのぢや御座いませんの」
「遊んでいらしやいと云ひたいのだけれど、わたし今出掛けるところなのよ。生憎だつたわね」
三津野はさう云つて、ふと、この娘に自分を見送らせようと思ひついて、停車場まで連れて行くことにした。娘は大人しく隨いて行つた。娘は相手に親しくされるのに甘えて、思慮もなく、八百屋の娘おせきが、奉公に出たがらない譯をアケスケと話した。
「さうだつたの?。ぢや、あなたのお母さんが打明けてさう云つて呉れゝばよかつたのに。………あの八百屋の娘は隨分生意氣なのね」
なんだ、八百屋の娘風情がと腹では思つたが、信者としての見榮から、それを口へ出しては云はなかつた。そしてその代り自分を使つて呉れと、田上の娘が賴んでも輕く聞流した。
汽車に乘ると知合ひの男と隣合せになつたので、暫く世間話がはずんだ。話が止切れると、三津野は、おせきを自分の側へ引寄せる手段を考えたが、あんな小娘を手に入れることくらゐ知慧を絞る必要は何もなさゝうであつた。近づいて柔しい聲を掛けて、氣に入つた柄を一反も買つてやらうなら、尾を振つて隨いて來るに違ひないと思はれた。
東京へ着くと、留守番代りに知合ひの夫婦者に貸してある麻布の別邸へ、きみ子だけを先きへやつて、自分の來たことを知らせて置いて、彼女自身は豐かな手土産を持つて、二三軒知人の家を訪問した。何處でも氣さくな奧樣として歡迎された。不斷はよく知人の若い息子や娘を誘つて物を食べに行つたり、芝居を見に行つたりするのであつたが、今度はそんなことよりも、新たな養子を物色するのに骨を折つた。どうせ簡單に事が運ぶのではなかつたが、あの子がいい、この子がいいと知人の子供を養子の候補者として考へるのに興味を寄せてゐた。

麻布の別邸へ行くと、風呂が立つてゐたので、きみ子と一しよに入つたが、この女の子がいつの間に、人の目をかすめて、文吉と知合つたのかと思ふと、その發育盛りの裸體姿が小癪に觸つた。きみ子に自分の脊を流させたあとで、わたしが「あなたを洗つて上げよう」と云つて、シヤボンをつけたタオルで相手のふくらんだ脊をこすつたが、この若い肌が最早男に汚されてゐるのかと思ふと、そこへ「この女處女でない」といふ燒印でも押してやらうかと、ひそかに薄笑ひを洩らした。

「きみちやんなぞ若いから、磨けば磨くほど身體に艶が出て奇麗になるのね」と、悅れしがらせを云ふと、きみ子は顔を綻ばせて、

「伯母さん、今夜、活動へでも連れてつて下さらない？」と、甘えた口調で云つた。

「活動へ？」三津野は意外に感じて、「わたしは活動だけは御免だよ」

「わたし、暫く東京の活動は見ませんの。」

「でも、田舍の活動はよく見てるぢやないの？文吉でもきみちやんでも、活動は好きなんだね」

三津野は、自分は殆んど見たことがなかつたのが平生若い二人がよく活動寫眞の話をしてゐるのを聞いてゐて、活動の繪はどんなものであるかをよく知つてゐた。そして時々は二人が一しよにO市の活動小屋へ出掛けて行くのを許してゐた。

「明日は何處かへ連れてつて下さるんでせうか」

「さあ、何處へ連れて行かうかね」

三津野は、きみ子の脊を意地の惡い目で見ながら、「岩井先生の御都合を伺つて、今夜にでもあなたを連れて行かうか

知ら」
「岩井先生のお宅へ?」きみ子は驚いたやうに云つて振返つて、三津子の顔を見上げた。
「いゝだらう。爲めになるお話が聞けて」
「えゝ、それは爲めになるお話は承はれるでせうけれど、……わたし、岩井先生は怖う御座いますわ」
「先生が怖いことがあるものですか。お柔しい方ぢやないの?自分に後暗いことさへなければ、神さまだつて岩井先生だつて、ちつとも怖いことないぢやないか」
きみ子は默つてゐた。
「それとも、きみちやんには何か後暗いことがあるの?」
「いゝえ」きみ子は目を伏せて小聲で答へた。
「わたしなぞ、よくないことがあつたら、岩井先生の前で懺悔をして、先生から神樣にお詫びをして頂くんです。どんな罪でもおとなしく懺悔をしたら、心が奇麗になるんですからね」
三津野はさう云つて浴槽へ入つた。きみ子は機械的に足を磨きながら、三津野の目を恐れてビク〳〵してゐたが、ふと、反抗的に、
「伯母さんは、わたしを岩井先生の前へ連れて行かうとお思ひになつて、今日東京へわたしを連れていらしつたんでせうか」
「さうぢやないよ。……でも、きみちやんがそんなに岩井先生を怖がるのは、わたしには腑に落ちないよ」
「ぢや、伯母さんのお伴して先生のお宅へ伺ひますわ」

「それは今夜でなくつてもいゝんだよ」
三津野は、今夜人を訪問することなんかは大儀になつてゐたのであつた。湯に浸つてゐると、今夜は按摩でも取らして氣樂に睡りたかつた。きみ子の出たあとから、ユツクリ浴室を出て、留守居の妻君に剪刀を持つて來させて爪を切つてゐたが、そこへ出て來たきみ子は、念入りにお化粧をしてゐた。
「わたし、小村さんのお家へ遊びに行かせて頂きますわ」と、自分にさう極めてしまつたやうに云つて、お辭儀をして行きかけたので、三津野は驚いて、
「お待ちよ。あなたはまだ御飯も食べないんだらう」
「御飯はよろしいんです。まだお腹が空きませんから」
「……あなたに何か考へがあつて、外へ出て行くんだね。でも、今夜は何處へも行つちやいけないよ」
「わたし、直きに歸りますわ」
「伯母さんがいけないと云つたら、いけないことは分つてるだらうのに」
三津野が斷じて許さない氣振りを見せると、きみ子は、そこへぺつたり坐つて目は横へそらした。
「きみちやんも見かけによらない剛情つ張りなんだね」
三津野は案外に思つてさう云つたが、それなら、自分がかねて企んでゐる折檻のし甲斐があるやうな氣がして昂奮した。
「明日の日が差したら何處へ行かうと、あなたの勝手にしていゝけれど、今夜はいけないよ。……分つたかい」
「えゝ」

（四）

三津野は、その夜きみ子を前へ呼びつけて、文吉との關係を白狀させて、その關係の經路や白狀の爲振りによつて、自分の手で二人の絲を締めてやつて別に一家を持たせるか、あるひは二人の仲を裂いて自分の目から遠ざけるか、どちらかに自分の氣持で決めようと思つてゐた。人目の多いO市の本宅から、東京の別宅へ泊りに來たのも、一つはそのためなので、此處では、きみ子が泣かうと叫ばうと、それに遠慮する必要はないのであつた。

きみ子は嘴に擂つた小雀のやうだと、當人よりも三津野自身でさう思込んで得意になつてゐたが　留守居の夫婦と晩餐を共にした後で、自分達の居室に當てゝゐる二階へ上らうとすると、そこへ、意外にも文吉が入つて來た。

「どうしたの。何か急用が出來たのかい」と、三津野は呆氣に取られた。

「わたしも今日の用事が濟みましたから、遊びに來ました」文吉は平氣で云つて、まだ片付けられてゐない茶の間の食卓に近づて、「わたしは大急ぎで來たから、まだ飯前なんですよ」と、たべ殘しの食器を見た。

「殘り物でおよろしければ、直ぐ召上りましな」と、留守居の妻君が云つて、台所へ立つて仕度に取掛つた。

文吉の勝手な來訪や、平然たる態度は、三津野には不愉快だつた。一家に對し絕對權を有つてゐる自分の尊嚴が傷けられたやうな氣がした。

「それで、お前は今夜こちらへ泊つて行かうと云ふのかい」

「いや、今夜の終列車で歸つてもよろしい」

「都合によつたら、お前だちにはO市へ歸つて貰はないことにするかも知れないよ」

「それはどうしてです？」

「まあ、御飯を食べてあとで二階へお出でな」

三津野はきみ子を促して二階へ上つたがいや〳〵隨いて來た彼女に向つて、

「あなたには文吉が今夜。無理にわたし達の後を追つて來た譯が分つてるのだらう」と、冷かな訊問をした。

「存じませんわ」

「白ばくれたつて駄目だよ。わたしには何でも分つてるんだから」

「伯母さんに分つてるつて、それはなんのことで御座いますの？」

「きみちやんはわたしを盲目だと思つてゐるの？」

「……昨日までお柔しかつた伯母さんが急に變なことを仰有るのはどうしたんでせうか。……伯母さんは昨夕いやな夢でも御覽になつたんぢやないでせうか」

「わたしが夢を見たつて？　昨夕のお前達の不しだらがわたしの夢だつたとお云ひなのかい。見かけによらない、お前の根性は圖太いんだね」

さあ白狀おしと、三津野が肥つた膝でにじり寄ると、きみ子は後退りしたが、三津野は、ムシヤクシヤ腹を堪えきれなくつて、ふと、手を伸してきみ子の胸くらをつかんだ。

「伯母さん、何をなさるんです」

きみ子は相手の手を振放さうとしたが、三津野は負けまいとして兩腕に力を籠めた。思ふ存分にピシ〳〵打擲したい慾望に驅られてゐたが、二階の異樣な物音を聞きつけて、箸を投じて驅けて來た文吉は、「どうしたんです」と、目の色

（四）

三津野は、その夜きみ子を前へ呼びつけて、文吉との關係を白狀させて、その關係の經路や白狀の僞振りによつて、自分の手で二人の緣を締めてやつて別に一家を持たせるか、あるひは二人の仲を裂いて自分の目から遠ざけるか、どちらかに自分の氣持で決めようと思つてゐた。人目の多いO市の本宅から、東京の別宅へ泊りに來たのも、一つはそのためなので、此處では、きみ子が泣かうと叫ばうと、それに遠慮する必要はないのであつた。

きみ子は網に掛つた小雀のやうだと、當人よりも三津野自身でさう思込んで得意になつてゐたが　留守居の夫婦と晩餐を共にした後で、自分達の居室に當てゝゐる二階へ上らうとすると、そこへ、意外にも文吉が入つて來た。

「どうしたの。何か急用が出來たのかい」と、三津野は呆氣に取られた。

「わたしも今日の用事が濟みましたから、遊びに來ました」文吉は平氣で云つて、まだ片付けられてゐない茶の間の食卓に近づて、「わたしは大急ぎで來たから、まだ飯前なんですよ」と、たべ殘しの食器を見た。

「殘り物でよろしければ、直ぐ召上りましな」と、留守居の妻君が云つて、台所へ立つて仕度に取掛つた。

文吉の勝手な來訪や、平然たる態度は、三津野には不愉快だつた。一家に對し絕對權を有つてゐる自分の尊嚴が傷けられたやうな氣がした。

「それで、お前は今夜こちらへ泊つて行かうと云ふのかい」

「いや、今夜の終列車で歸つてもよろしい」

「都合によつたら、お前だちにはO市へ歸つて貰はないことにするかも知れないよ」

「それはどうしてです？」

「まあ、御飯を食べてあとで二階へお出でな」

三津野はきみ子を促して二階へ上つたがいや〱隨いて來た彼女に向つて、

「あなたには文吉が今夜。無理にわたし達の後を追つて來た譯が分つてるのだらう」と、冷かな訊問をした。

「存じませんわ」

「白ばくれたつて駄目だよ。わたしには何でも分つてるんだから」

「伯母さんに分つてるつて、それはなんのことで御座いますの？」

「きみちやんはわたしを盲目だと思つてゐるの？」

「……昨日までお柔しかつた伯母さんが急に變なことを仰有るのはどうしたんでせうか。……伯母さんは昨夕いやな夢でも御覧になつたんぢやないでせうか」

「わたしが夢を見たつて？　昨夕のお前達の不しだらがわたしの夢だつたとお云ひなのかい。見かけによらない、お前の根性は圖太いんだね」

さあ白状おしと、三津野が肥つた膝でにじり寄ると、きみ子は後退りしたが、三津野は、ムシヤクシヤ腹を壓えきれなくつて、ふと、手を伸してきみ子の胸ぐらをつかんだ。

「伯母さん、何をなさるんです」

きみ子は相手の手を振放さうとしたが、三津野は負けまいとして兩腕に力を籠めた。思ふ存分にピシ〱打擲したい慾望に驅られてゐたが、二階の異樣な物音を聞きつけて、箸を投じて驅けて來た文吉は、「どうしたんです」と、目の色

を變へて云ふや否や、渾身の力を揮つて二人を擯分けた。きみ子は涙ぐんでゐたが、三津野は唇を歪めてせか〴〵しい息を吐いてゐた。そして、彼女の方から何とも云出さないさきに、文吉は、

「あなたの方から何も仰有らないさきに、わたし達二人は出て行きます。……あなたが伊藤とおみちとをそゝのかして關係をつけさせといて、あとで二人を慘い目に會はせて追放り出したやうに、わたし達は慘い目に會はされちやたまりませんからね」と言放つてきみ子の手を執つて行きかけた。

「生意氣なことお云ひでない」

「わたし達がおとなしく出て行くのは、あなたには幸ひなんでせう。……また八百屋の娘でも誰れでも、外の者を家へ入れたらいゝぢやありませんか。左樣なら」

さう云つて、文吉は昂奮した顏して別れの挨拶をして、階子段を下りて行つた。三津野は追驅ける力もなく、氣拔けのした顏してじつとしてゐた。玄關の格子戸の開く音や、二人の出て行く履物の音が微かに彼れの耳に入つた。

「奥さま、あの二方はお歸んなすつたんで御座いませうか」と、留守番の妻君は、やがて二階へ來て訊ねた。

それには答へないで、「折角來たのだけれど、わたし、直ぐに彼方へ歸らなきやならなくたつたから、大急ぎで自働車を呼んで下さい」

「ハイ」妻君は相手の不機嫌を恐れて、理由を迅返さないで出て行つた。

（五）

三津野がO市の家へ歸つた時は、いつもの就眠時刻にまだ間のあるころだつたが、家の中はヒツソリしてゐた。伜を

下りて聲を掛けても誰れも出迎へに出ないので、不機嫌な足取りで茶の間へ入ると、そこでは、婆さんが一人で居睡りをしてゐた。

「みんなどうしました?」と呼起して訊くと、婆さんは、夢を見てゐるやうな氣で、

「お歸んなさいまし、大變お早く」とお辭儀をした。

「みんなどうしたんですよ」と、腹立たしげに云ふと、

「お揃ひで活動寫眞へ行つたやうで御座いますよ」と、婆さんはオド〳〵しながら答へた。

「わたしがゐないとそんな所へ行つて。……いつもさうなんだらう。あなたは老人のくせに家の取締りがつかない」

三津野は、腹癒せにこの老婆を打つか蹴るかしたかつたが、相手が枯木のやうな婆さんでは張合ひがなかつた。

寢室には老朽ちた夫が早くから寢てゐるのであつた。廣い家の中には若いものは誰れもゐなかつた。で、彼女は自分の知らない活動寫眞館で、若い男女が樂みにうつゝを拔かしてゐる有樣を想像した。そして、身の遣り場のないやうにイラ〳〵しながら、かういふ時にこそ眞心から救ひを求めようとして、二階の密室へ驅け上つたが、彼女は部屋の電氣を點けるとゝもに、愕然として立ちすくんだ。ちやんとしてゐた筈の寢臺の蒲團は取亂され、他人禁制の書物は袋戸棚の中から取出されて机の上に置かれてあつた。

彼女は、假面を剝がれた女のやうに、氣力もほこりも失つて、十字架上の繪姿の前に跪いて合掌した。

大同城内外

(雲崗紀行のうち)

犬養健

一

八月二十一日の夕方、北京日本公使館の官舍の二階で、私の姉は身仕度をしてゐる私の傍に立つて、支那内地の旅行に必要な品々を手落ちのないやうに整へてくれた。戸外の薄あかりのなかで、もう輪廓を失つた楊がしきりに葉を擦れあはせてゐる。それほどの風があるとも思へない。この輕く連續した音を馴れないうちは朝なぞ雨かと思つて眼を覺ましたものだ。私は毛布、毛の襯衣、罐詰、ゲートル、南京蟲よけの袋形の寢具、參考書なぞをひと包みにした。それから九時十五分の京綏線の夜行に乘るために西直門外の停車場に向つた。發ちぎはに姉は私を呼びとめて、山西名物の西瓜を土産に賴んだ。

同行は公使館研究生の太田一郎氏だつた。二人で山西省大同府(タートン)の西三十支里ほどにある雲崗石佛寺(ユンカンシーフオスー)の石佛を觀にゆかうといふのである。——旅のをりには妙な事が頭に殘るものだ。宵の北京の町を公使館區域から西單牌樓(シイタンペイロウ)の大街へ出ようといふ邊りの電車通で、ある商店の屋根をへだてゝ無氣味な石づくりの古びた塔が、イルミネーションの反射をうけて高く浮き出てゐた。走り去らぬうちにもう通り過ぎてしまつた塔だつたが。——それが湖北の石佛寺に泊るといふ。

私のどこか不安な空想に結びついたのだ。

西直門驛の人氣（ひとけ）のない、暗いプラットフオームに入つて待つたが、落ちあふ筈の太田氏がなかく來ない。運搬夫に勝手に操せ歩かれる心配のために、私は荷物の前を離れずにゐた。見送りの僕が歸つて私は全ぐの獨りだつた。私は仕方なしに星を眺めてゐた。また北京の市はづれで星なぞを眺めてゐる自分を興味をもつて考へてゐた。影繪に見える改札口は一向に人のせはしい出入りがなかつた。思ふに角停車場は、ことに異邦の停車場は活氣づいてゐた方が樂しい。私はやがて貨物列車のやうな陰氣な見かけでゴトくと構内に入つて來た夜行車を前にして、外交部が今外國人にあまり護照（旅券）を渡したがらぬ事實を思ひ合せて、稍々心もとなかつた。

發車間際に太田氏が顏を見せた。話を聞くと、その日知人を長城見物に案内したのだが、歸りの汽車が遲れてたうとう大同行の荷物を寓家へとりに戻る暇がなく、その儘馳けつけたのだといふ。

「どうにか間にあふだらうと思つて出かけたのですが」太田氏はまだ學生としか思はれない肉づきのいい頰を汗ばませてゐた。「やはり支那の汽車にあつては敵ひませんね」

だがこの無頓着さはむしろ私にとつて心丈夫だつた。それに旅具も私の持ち物でほゞ事足りた。旅行案內の命令するとほりに十二分の用意を整へたことが、早速出發驛で効能をあらはした譯だつた。

某高官の包車（パオチヨ）（特別車）を連結したゝめに發車は十數分遲れた。偶然張家口の馮玉將軍祥を訪問のため同車した公使館付武官竹本中佐の紹介で、私達はその高官から包車（パオチヨ）で晩餐をうける事になつた。だが私は正直のところ、連日の支那料理の食傷で腸をこはしてしまつてゐた。私はたゞ申しわけに葡萄酒を少しづゝ啜めながら、車の動搖のために大聲になつてゐる中佐と高官との會話を傍聽した。車室の電燈は妙に薄黄ろく、窓の金網に羽蟲が夥しく集（たか）つてゐる。北京で

は都會と田舍とは城壁一重ではつきり區別がつくのだ。窓のそとはすでに絶えず變化のない闇だつた。竹本中佐は勇敢にも私に日露戰役の懷舊談をはじめた。私は最初それを日清戰役と聞きちがへて當惑したのであつた。車は益々揺れ、私達は自然となほ聲を高めてゐた。その上氣したやうな高聲は、窓の金網をいつまでもかすめて行く靜かな闇と、何か趣のある對照をなしてゐた。

私はさらに何かの行き違ひで、太田氏と私が竹本中佐に伴はれて、張家口の馮玉祥將軍に面會する手筈になつてゐると聞いて、全く意外に思つたのだつた。私は張家口といふ關門、其處の沙漠からの匂と賣買の毛皮の匂とに前から空想を持つてはゐた。しかし私は用事で二十五日にはどうしても北京にゐなければならなかつた。私はすでに雲崗への日程をかなり切り詰めてしまつてゐた。これ以上石佛寺の内に居る時間を割く事は苦痛だつた。もと／＼雲崗行きは私が東京で渡支の支度をしてゐる頃からの主な目的の一つだつたのだ。

「それはいけませんな」と高官は日本語で云つた。そして私達のために熟慮してくれたあげく、かうも云つた。「よろしい。ひとつ日程を工夫しませう」

だが高官の工夫する日程とは、實は私自身の日程の事だつた。――私は辭退した。高官は私の不作法、京綏線を通過してしかも承諾を得られる機會に、馮玉祥將軍に面會しようとしない不作法が、どうも腑に落ちないといふ樣子だつた。それで私は遅ればせに、この地方の馮將軍の勢力を實見する事が出來た。

私達は寢臺に戻るとすぐに寢支度にかゝつた。だが長城見物のをりに下車した事のある青龍橋（チンルンチヤオ）驛か――或ひはもつと先きの驛かでしばらく停車すると、レールの枕木に啼いてゐる蟲の音が急に耳に近づいて來た。一體大陸ではもう秋に間もないのだ。秋の寢臺は土に近い――かういふ詩が私の知つてゐる或る人の本に引いてあつた事を思ひ出した。實際

私のゴツ〳〵した、南京蟲のゐる恐れのある寢臺はその時大變[illegible]に近かつた。私は痛々しい感興をもつて、詩は人のある限りどこの土地の隅にもあると感じた。私は包車(パオチョ)のをりの單調な心を棄てる事が出來た。私は車が動き出すまでその音いろに聽きとれた。それらの蟲は日本の線路の秋草に啼く蟲と同じ種類のものらしかつた。

二

明け方の五時過ぎ、私は扉の外の物音で目を覺した。「日本人が二人乘つてはゐなかつたか」——こんな聲が聞える。例の旅券の檢査だなと考へて用意してゐると、入つて來たのは思ひがけず日本の紳士だつた。この紳士はさらに根津張家口領事であつて、萬一の場合を案じて——山西省は一帶に土匪の心配のない地方ではあるが——領事館付の警官を附けてあげやうとの事だつた。護衞と云へば大袈裟だが、何かの事故が起つた際に國家的なめんどうになるのを厭つて、支那當局でも多くの場合進んで、或る特殊な地方への外人旅行者には兵士を附ける習はしだつた。領事がそれを同胞の警官に替へられたのは、私達の便宜を計つての厚意に依るものらしかつた。——寢ぼけ眼の太田氏は最初「何の用か」などと支那語で訊したが、この闖入者が自分の上官と分つて急に狼狽してゐた。領事の細かい配慮を謝しながら、私は眠い頭にわき起る可笑しさを堪えるのに骨が折れた。領事はまた馮玉祥將軍の署名のある寫眞を記念にと手交された。領事を送りながら車窓から覗いた朝まだきの張家口の步廊(プラットフォーム)は青白く肌寒く、こゝでも黄ろく衰へた燈火の下で馮軍の兵士が往き來してゐた。汽車は大ぶんの延着らしい。また眠る。

陽高縣(ヤンカオシエン)。

驛の名を呼ぶ聲で九時ごろ、私は再び鎧戶から外を覗いた。陽高縣といへば北京から二百哩ほどで、もう大同府に近

いのだ。私は窓をすつかり開け放した。物凄い曇り日だつた。霧を帶びた驛内の柳の並木を透して、空地に馬がまばらな草をあさつてゐた。淡灰色の土と淡綠色の草。それに低い屋根と低い煙突とを持つた脊景の僅かな土造の民家。それは覗き眼鏡の寫眞のやうに不思議な閑かな構圖だつた。私の去つて來たばかりの北京内城もまた眠つた靜かさをたゝえた市だつた。だがそれはこの風景にくらべては、まだしも都會としての動きと音とを認めての靜かさだつた。形容的な靜かさだつた。だがこゝでは、少くも停車の數分間、窓に區切られた四角な光景には動きがなかつた。音がなかつた。――ふと眼を覺ますとその二つを除いた高地へ運ばれてゐる。不意打ちを受けたこの印象は、しばらくの間私の頭のなかで調子が整はなかつた。

顏を洗つて給仕を呼ぶと大同驛はあと三つ目だといふ。汽車は低い、樹のない山脈と山脈とに挾まれた、乾いた、粘土質と云つた感じの高原を走つた。ところ〴〵に雨の日の川痕を見せた龜裂が鋭くうねつて單調を破るばかりだつた。それでも線路はもう四千尺に近い高度にあるらしかつた。私達は珈琲とパンとを取り寄せた。そのパンに附いてゐるジヤムの名を私は知らなかつた。恐らく支那特產の果實でもあらうか。だが前夜食事をぬいたあとで、この單純な朝食はすばらしく美味だつた。私は子供のやうに鼻息をたてゝ食つた。

服裝をとゝのへて、私達は張家口から乘り込んだ警官勝木氏にあらためて挨拶した。

十時近く、線路の左に雨の日の土呂の飛沫を一面に浴びたと云ひたいやうな、廢墟としか思はれない一つの城市が現はれた。ひと眼で古い歷史を持つ市に思はれる。それが大同府だつた。大同府の存在は秦漢時代以來のものだといふ事である。

列車の昇降口には宿の名を染めぬいた旗をかざして、宿引が喊聲をあげて群つた。「東華棧。東華棧」――私は辟易し

て目的の客棧の名を呼んだ。東華棧といふその宿がこゝでは日本の旅客に一番馴染ふかいのだつた。すると、青い旗を手にした番頭が雜沓を押し分けて、われわれを驛前の廣場に連れ出した。

東華棧は近かつた。停車場から荒れた空地づたひに五六町、市の城門に入らうといふ際に、その汚れた白壁と衙門とが目立つてゐた。文字どほりの城下の宿だつた。

衙門を入ると「東華棧」の三字を刻した影壁(イエンピ)——衝立(ついたて)の形をした壁——が院子の眺め(ながめ)をさへぎつてゐた。石だたみの院子は存外廣い。百坪より多いだらう。その院子を取り卷いて煉瓦建の平屋が一周してゐる。白壁のうへにくつきり浮んだ、一つ一つの客室の窓枠の上半部の朱と下半部の黑との色どりが單純で簡素で、何となく明治初年の繪草紙の質朴な愛らしさを思ひ出させた。こゝには廊下がない。番頭はすべて一つの房(ヘヤ)から放射線をつくつて院子を横ぎりながら、部屋々々の客の用を足すのだつた。その活動を窓硝子越しに見てゐるのは面白い。

室をあてがはれるとすぐに、太田氏は馬三頭、荷馬車、寢具、米、茶などを頼んだ。私達の憩つてゐる窓の横手は家族の住んでゐるらしい後房に通ずる門だつた。鴻禧といふやうな文字を刻した扉の前に小椅子を据ゑて、十五六の娘が靴下を編んでゐた。中庭の上の空は明け方よりも曇り模樣が濃かつた。城市からはチヤルメラに似た、一種悲しげな喇叭の音が傳はつてゐた。

變つた土地へ來たものだと、私は泌々考へた。

私は早めの晝食を待つ間、アンペラを敷いた床に寢轉んで木下杢太郎、木村莊八兩氏合著の「大同石佛寺」を取り出して拾ひ讀んだ。それは私のその頃の第一の愛讀書だつたのだ。

袴の音が院子をわたつて來た。若い小綺麗な番頭——さう思つたのは實は宿の主人であつたが——その若者が書物の表題を覗くやいなや、

「あゝ、木村先生（ムウツンセンシャン）！」

と親しげに叫んだ。

「お前覺えてゐるのか」太田一郎氏が訊ねた。

「覺えてゐる。——先生（センシャン）は雲崗に永く泊つた。もう三年になる。——太田（タアテン）先生と一緒だつた」

「これが、その太田正雄先生の別名なのだ」

と、私は覺束ない支那語に手眞似を加へて、木下杢太郎といふ文字を指さした。

「そしてこの本は木村先生から借りて來たのだ」

「先生はいま日本に在る？」

「あゝ、日本にゐる」

主人の去つたあと、私は七月の日中のぎら／＼と眩しかつた本郷の細い坂道を思ひ出した。簾や金魚や浴衣（ゆかた）のことを思ひ出した。なぜならば私が石佛寺の智識を得るために木村氏を訪ねた時は、木村氏は浴衣の尻を端折つてセメントづくりの池に新らしい水を入れてゐるところだつたから。——私は要するに日本の夏の眞晝を思ひ出してゐたのだ。懷郷病（ホームシック）の心もちだつたのかも知れない。

私達の食事の濟む頃は後房からそろ／＼油をいためる匂がひろがり、厨へ手傳ひに行つたのか、娘は編物を椅子に殘したまゝ扉の前にもう居なかつた。

午近くに、道案内の二十前後の宿の若者を先頭にして出發した。この若者はまた行先で厨夫の役をも勤めるのだ。われわれの乘者は蒙古馬だつた。のろい荷馬車は城門をくゞる際にもう半町ほど遲れた。

三

大同府の城壁は大きい褐色の土づくりである。こゝでも城外に街の連なりを溢れさせたりしてゐないので、地面と城との關係は海と巨きい船とのそれのやうに單純だつた。城壁は地面と一緒に私の左右に走つて、澄んだ遠近法を見せてゐた。城門の木材も朽ちて土の色と同化してゐた。すべてが寂しく澄んだ見かけだつた。「このお城は何百年も洗はなかつたのでした」――こんな書き出しの童話が出來ないものか。

外城の關門である玄冬門から內門の關門である「北門」までは、合歡木の植つてゐる快い平らかな並木道だつた。私は早速手馴らしに馬を走らせて見た。ふと私は二三町先きの路傍の塀の陰から、先刻宿屋で耳にしたものと同じチャルメラ風の悲しげな喇叭の音が、また響きはじめたのに氣がついた。宿屋のをりにはぼんやり聞き流したが、この時私ははじめてそれを何だらうと疑つた。すると、塀の角から二小隊ほどの汚れた青衣の兵士が縦列をつくり、歩調をとつて道に現はれて來た。兵士が出揃ふやいなや、士官が何か號令を下した。と、兵士はひと足ごとに癇高い掛け聲を發しながら、ジャケン跳びに似た大跋で「馳け足」にうつつた。悲しげな喇叭の音は早まつた。十數町つゞくこの並木道は閑かであつて、奇異な喇叭の音いろと、掛け聲と、「跳ね足」といひたいその足どりの反響とは、曇つた空の下でよく徹つた。して見ると並木道の存外整つて改修されてゐるのは、軍事のためかも知れなかつた。縦隊は北門のなかに消えた。私達は一町ほど遲れてそこを潜つた。番兵に名刺を示してゐる間、私は「雪中鎖鑰」としるした高い題額を瞻んだ。雪

中の鎖鑰とは何か大きいところのある、浪漫的な文字だと詩情を起しながら。

　門一つ隔てた内城の市街は極だつて人出が多かつた。それは外見がひつそりして内部が案外に騒々しい蜂の巣のやうなものだつた。肉屋、衣服店、棺桶屋、銀行、洋品店、兎も角も鄙びてはゐるが市民の生活が成立つてゐるのだ。人口も三萬はあるやうだ。數町進んで四つの牌樓(パイロウ)に飾られた十字路に行きつくと、街の雜沓は高潮に達してゐると云つてよかつた。ごた／＼と竝んだ露店では野菜や果物――ことに黑びかりを帶びて熟した西瓜の夥しい積み重なりが色どりの中心になつて、人間の雜沓を强調してゐた。それに犬の群が混る。犬は騎馬で割り込んで行く異人のわれわれに吠えついた。

　其處ではまた纏足の女の多いことが目についた。その纏足の形は北京のそれよりも一段と小さいのだ。女の小さい足を殊に愛するのは山西省の特徴だといふ事だつた。纏足は近來各省でやかましい筈だ。事實私は何度か市門の壁に貼られた纏足の禁札を讀んだ。

　この賑やかな十字路で案内人は西に折れた。そして私達はそれまでと同じ經路で幾つかの朽ちた門をぬけ、空ろな濠をのぞきながら、不意に平野を貫いてゐる街道に放たれた。つまりあの十字路は城市の中點にあたつてゐたのだ。

――彩色のはげた牌樓、濃い影を含むで茂つた十數株の柳、そして明代以前のものらしい風趣のある馬つなぎの石標――これが旅びとを送る大同府の最後の境界だつた。

　そこに開けた二里あまりの平野は少しづつ地勢を高めて、行く手に見えるなだらかな山脈に接してゐた。それで平野全體が行く手の山のゆるい斜面だとも云へた。道ははじめの間、二つの堤にかこまれた川底に近いかたちだつたが、次

第に周圍の地勢と同じ高さに近づき、やがて左右の十數里を見渡す野なかに拔け出て行つた。前夜の汽車のなかで私は秋の間近いことを感じたが、此處ではもう本當の秋の風物だつた。廣い眺望にみちた透明な大氣のなかで、私の麻の服とヘルメットとは不釣合だつた。畑の高粱(カオリヤン)は至るところ熟してゐた。楊、ポプラなぞの老木が二三株づつ塊りながら處々に點在してゐるほかは、その高粱畑の焦茶の縞模樣はさまざまに屈折しながら遠く展がつてゐた。廢寺、壞れた墓地、空屋(あきや)の關羽廟、草に脚を沒した石人石馬――そんなものが最初の一里のあひだに出會つた路ばたの存在だつた。風土のためか野花はわりに貧しかつた。振り返つて見て、私は知らぬ間に相當な登り道を來たことを知つた。大同府の黃ろい城壁が豫想外に低い地點に殘されてゐた。

村が一つ南に見えた。村はづれの空で足に笛をつけた鳩が、微かな圓を畫きながら高く舞つてゐた。太田氏はそれを、北京なぞでは冬の日永に行はれる支那人の風流ごとだと云つた。大陸的に冴えた寒空にひゞくその笛を窓際で聞くのは、北京の冬の落ち着いた生活に附きものなのだと云つて、北京といふ市(まち)に對する私の愛着を刺戟した。

ふと、私は前方に變(へん)な唄に似た叫び聲を耳にした。荷馬車が一臺近づいて來た。車には三四人の男女が乘つてゐた。そして唄に似た聲は車の後へ足(しり)を垂れてゐる女が發してゐるのだつた。私は擦れちがつてまた訝つた。女は眼に布をあて、悶えてゐるやうな身振りを續けてゐるのだ。だが泣いてゐるにしては聲が或る一定の調子をとり過ぎる。そして伴れの男女もあまりに無關心だつた。私は醉つてゐるなと考へた。事實女の顏は上氣して赤かつた。

だが太田氏の返答は簡單だつた

「誰か死んだんですよ。――あれが支那の女の泣き方のやうですよ」

私は呑み込めなかつた。

「要するに大袈裟なのでせうね。僕が前にゐた家でも同じやうな事がありましたよ。支那人の細君が夫にもらつた指輪か何かを失くして泣いてゐるのです。僕はまだ馴れなかつたのでハラ〳〵しましたよ。そのうちに主人が歸つて來ると、なほ聲を張りあげて、床のうへを轉がつたりしてゐるのです。聞いてゐられない聲です。ところが主人が宥めて、また買つてやるとでも云つたのでせうか、急に泣くのをやめて忘れたやうな顔をしてゐるのです。――これくらゐの場合にはこれくらゐ泣かないと悪いとでもいふのですか。――形式主義だとしても、あの氣ごころは一寸分りませんね。――今のもその泣き方ですよ」

叫び聲の續く荷馬車は小石に揺れながら遠のいた。近在の村から大同府の寺へ行くのでもあらうか。だがそれが哀しみのごく普通な表現だとすれば――私達に旅行者にありがちな獨斷がないとすれば――此處では自然な喜悲のあらはれさへ隣國人に通じなかつた譯になるのだ。――何か不毛の地に齊しい、住むに堪えない、寂れた地方を歩いてゐるやうな嫌厭を私はちよつと感じた。言葉から來る孤立した氣持なぞは、これに比べればずつと安樂なものだつた。

二時間かゝつて私達は山脈の中腹に達した。傾斜の緩さがそれほど大がゝりなのだ。道は山と山との切れ目を縫ひなら、二十戸ばかりの小さい村を過ぎてゐた。あの女が不幸に遭つたのはこの村ではないかと私は思ひ出した。村を見下すあちこちの山頂には夏草に彩られた烽火台が半ば壊れて晒されて居た。羊の群が礎を取り巻いて、その豊かでない草をあさつてゐた。

山峡をぬけると、せゝらぎの音が思ひがけず私達の顔にせまつた。果して私は赤、海老茶、暗青なぞの珍らしい色どりの岩床をあらはした溪流に突き當つた。この川が目的の雲崗村を過ぎてゐるのだと聞いて、平野の單調さに稍々倦んでゐた一行は快活になつた。橋のないために、しばらくしてその淺瀬を私達は渉らなければならなかつた。

さらに第二の村。第三の村。——第三の村の入口で私は柳の枝の鞭を折つてしまつた。それで或る農家の前に投げ棄てられてある青枝を所望したが、戸口に蹲つてゐた若者は心よく立上つて、それを手渡してくれた。向日葵が平和に日光を吸ひ、鶏がその莖の間を出入して、粘土で固めた儘の半未開の小舍ではあるが、住むあるじはいかにも噂どほりの温良の民だつた。

こんな風に頭に浮べて行つては限りがない。行きちがつた男や驢馬、路傍で私をふと見上げた子供の顔、立木の陰の白い一軒家までが、何か意味あつたやうに現はれて來るのだから。——兎も角も、沿道は平野を横切つてゐた頃ほど興味を惹くものがなかつた。平凡な峽と平凡な畑地の連續だつた。たゞ一つ、馬上のまゝ小憩した觀音堂は、街道がその床下にあたる墜道をくゞる組み立てになつてゐる、中世紀の西洋の築城法にでもありさうな様式の建物だつた。それは堂宇であると同時に關門なのだ。關門であると同時に裝飾なのだ。山間の地の事で、建物の敷地に不自由したゝめの工夫でない以上、その思ひ切つた設計は旅行者の眼に與へる變化を考に入れてゐるとしか思はれなかつた。いかにもそれは旅びとの心を爽やかにした。大膽でしかも細かい雅致を知つてゐる設計者に違ひなかつた。道を隔てゝ堂の前に建つてゐる大きい影壁(インピ)の濃い碧琉璃と、その上に彫つてゐる黄ろい龍との對照も、旅人の倦んだ心に呼びかける効果は鮮やかであつた。これほどの艶やかな影壁(インピ)を私は北京でも知らなかつた。

——私達は村に入るごと、人に逢ふごとに雲崗までの道のりを尋ねた。だが返答は申し合せたやうに「一半(イーパン)」だつた。半道の意味なのだ。里數にして尋ねても十二支里と云ひ、十支里に減り、また十五支里に増えたりして、少しも頼りにならなかつた。終ひに私達はあきらめて、たゞ乘り心地のわるい支那鞍の規則的に揺れるまゝに委せてゐた。三人

「要するに大袈裟なのでせうね。僕が前にゐた家でも同じやうな事がありましたよ。支那人の細君が犬にもらつた指輪か何かを失くして泣いてゐるのです。僕はまだ馴れなかつたのでハラ〱しましたよ。そのうちに主人が歸つて來ると、なほ聲を張りあげて、床のうへを轉がつたりしてゐるのです。聞いてゐられない聲です。ところが主人が宥めて、また買つてやるとでも云つたのでせうか、急に泣くのをやめて忘れたやうな顔をしてゐるのです。──これくらゐの場合にはこれくらゐ泣かないと惡いとでもいふのですか。──形式主義だとしても、あの氣ごころは一寸分りませんね。──今のもその泣き方ですよ」

叫び聲の續く荷馬車は小石に搖れながら遠のいた。近在の村から大同府の寺へ行くのでもあらうか。だがそれが哀しみのごく普通な表現だとすれば──私達に旅行者にありがちな獨斷がないとすれば──此處では自然な喜悲のあらはれさへ隣國人に通じなかつた譯になるのだ。──何か不毛の地に齊しい、住むに堪えない、寂れた地方を歩いてゐるやうな嫌厭を私はちよつと感じた。言葉から來る孤立した氣持なぞは、これに比べればずつと安樂なものだつた。

二時間かゝつて私達は山脈の中腹に達した。傾斜の緩さがそれほど大がゝりなのだ。道は山と山との切れ目を縫ひながら、二十戸ばかりの小さい村を過ぎてゐた。あの女が不幸に遭つたのはこの村ではないかと私は思ひ出した。村を見下すあちこちの山頂には夏草に彩られた烽火台が半ば壞れて晒されて居た。羊の群が礎を取り卷いて、その豐かでない草をあさつてゐた。

山峽をぬけると、せゝらぎの音が思ひがけず私達の顔にせまつた。果して私は赤、海老茶、暗靑なぞの珍らしい色どりの岩床をあらはした溪流に突き當つた。この川が目的の雲崗村を過ぎてゐるのだと聞いて、平野の單調さに稍々倦んでゐた一行は快活になつた。橋のないために、しばらくしてその淺瀨を私達は渉らなければならなかつた。

さらに第二の村。第三の村。——第三の村の入口で私は柳の枝の鞭を折つてしまつた。それで或る農家の前に投げ棄てられてある青枝を所望したが、戸口に蹲つてゐた若者は心よく立上つて、それを手渡してくれた。向日葵が平和に日光を吸ひ、鷄がその莖の間を出入して、粘土で固めた儘の半未開の小舍ではあるが、住むあるじはいかにも噂どほりの溫良の民だつた。

こんな風に頭に浮べて行つては限りがない。行きちがつた男や驢馬、路傍で私をふと見上げた子供の顔、立木の陰の白い一軒家までが、何か意味あつたやうに現はれて來るのだから。——兎も角も、沿道は平野を横切つてゐた頃ほど興味を惹くものがなかつた。平凡な峡と平凡な畑地の連續だつた。たゞ一つ、馬上のまゝ小憩した觀音堂は、街道がその床下にあたる隧道をくゞる組み立てになつてゐる、中世紀の西洋の築城法にでもありさうな様式の建物だつた。それは堂宇であると同時に關門なのだ。關門であると同時に裝飾なのだ。山間の地の事で、建物の敷地に不自由したゝめの工夫でない以上、その思ひ切つた設計は旅行者の眼に與へる變化を考に入れてゐるとしか思はれなかつた。いかにもそれは旅びとの心を爽やかにした。大膽でしかも細かい雅致を知つてゐる設計者に違ひなかつた。道を隔てゝ堂の前に建つてゐる大きい影壁（インピ）の濃い碧琉璃と、その上に彫つてゐる黄ろい龍との對照も、旅人の倦んだ心に呼びかける効果は鮮やかであつた。これほどの艶やかな影壁（インピ）を私は北京でも知らなかつた。

——私達は村に入るごと、人に逢ふごとに雲崗までの道のりを尋ねた。だが返答は申し合せたやうに「一半（イーパン）」だつた。半道（はんみち）の意味なのだ。里數にして尋ねても十二支里と云ひ、十支里に減り、また十五支里に増えたりして、少しも賴りにならなかつた。終ひに私達はあきらめて、たゞ乘り心地のわるい支那鞍の規則的に揺れるまゝに委せてゐた。二人

とも次第に默りがちになつた。空模樣は益々重苦しく、山路の草いきれが小うるさかつた。私達は自然、案内の若者から遲れた。

單純なその若者は、騎馬そのものが肉體的に樂しいといふ樣子で、獵に出た土人のやうにせゝこましく馬を焦立(いらだ)たせたり、また愛撫したりしてゐた。

突然、若者が半町ほど先きに待ち合せて、朗らかな聲で合圖した。路は遽かに下り坂にかゝつてゐた。坂を下ると眼の前に廣々とした河原が展開した。それから十町彼方の右岸に碧い甍の三層樓が二棟、小さく横向きに竝んで見えた。

私達は思はず聲を發した。疲勞を不意に疲れた。

「石佛寺(シーフオスー)。石佛寺(シーフオスー)」

と、若者は私達が頷いて見せるまで繰返した。

三層樓の後ろを庇つてゐる斷崖の連なりには、さまぐの案内記に敎へられたとほりの洞穴がまさしく散らばつてゐた。そのなかに北魏の石佛が昔の儘の無表情で集つてゐるのだ。

左岸はそれにくらべて一段と圓みと優雅さを帶びた、なだらかな丘陵だつた。すべての色がその丘では薄かつた。土の淡灰と草の淡綠との取り合せが此處でも再た繰り返された。それに處々の蕎麥畑が空の險しい雲行きを反射して、花の微かな白さを一層內氣なものに匿めてゐた。

丘の端に炭坑の痕が一個所、畫面の汚點のやうに發かれてゐた。だがそれは却つて周圍の陰影の多い靜かさを深くしてゐた。

この突然に展けた地勢のなかで、動いてゐるのは私達ばかりだつた。

われわれは誰からともなしに馬を驅け足に移らせた。河原を平行して走る四頭の馬はあちこちの水溜りで互ひに飛沫をあげあつた。最初三層樓が近いと感じたのは私の眼の錯覺だつた。降り出した雨が抵抗して頬を打つた。それで私達はなほ、正面の碧硫璃瓦の屋根の下に急ぐ理由を見つけたかのやうに、柳の枝の鞭を交る交る鳴らした。

四時過ぎて、われわれは「石佛古寺」としるした山門の前にたうとう立つた。住持に刺を通じてゐる間、本降りになつた雨のしぶきを門の中ほどまで避けながら、私は後ろの崖に隱れてゐる大小の石佛の無表情さを、背に近く感ずるのだつた。それは何か壓迫される感じに近かつた。太田氏は遲れた荷馬車をしきりに氣遣つた。

「雨にまで會つて」と、私は手巾で肩先を拭つてゐる勝本氏を振り向いた。「本當にお氣の毒しました」

「いや、明日はどうせ日曜ですから」

濡れた牧羊の群が門の前を通つた。牛糞を焚くやうな匂が民家から漂つて來た。私にはこの光景と「日曜日」とがどうもしつくり結び付かなかつた。

住持が出て來て內へ招じた。石段はもう小さい瀧だつた。

この文章ははじめ「雲崗紀行」と題して、石佛寺での二日間の生活と、北京への歸路の出來事までを記す筈だつたが、期日が切迫したゝめ、急に標題をも替へ、前半だけを獨立させる事にした。後半の文章は——もとく後半の方を主要な部分として書き始めたのだが——いづれ改めて、別の獨立した紀行として發表する。雲崗石佛寺へ出かけるに就 は、文中のとほり根津張家口領事、及び同領事館の勝木政七氏に一方ならずお世話になつた。また北京公使館の岩村書記官、原田書記官、國際觀光局の佐藤汎愛氏の樣々な助言や敎示を労はした。文末でかへつて失禮かとも思ふが、この機會に厚く御禮申しあげたい。筆者識。

とも次第に默りがちになつた。空模樣は益々重苦しく、山路の草いきれが小うるさかつた。私達は自然、案內の若者から遅れた。

單純なその若者は、騎馬そのものが肉體的に樂しいといふ樣子で、獵に出た土人のやうにせゝこましく馬を焦立（いらだ）たせたり、また愛撫したりしてゐた。

突然、若者が半町ほど先きに待ち合せて、朗らかな聲で合圖した。路は遥かに下り坂にかゝつてゐた。坂を下ると眼の前に廣々とした河原が展開した。それから十町彼方の右岸に碧い甍の三層樓が二棟、小さく橫向きに竝んで見えた。

私達は思はず聲を發した。疲勞を不意に疲れた。

「石佛寺（シーフオスー）。石佛寺（シーフオスー）」

と、若者は私達が頷いて見せるまで繰返した。

三層樓の後ろを庇つてゐる斷崖の連なりには、さまざまの案內記に敎へられたとほりの洞穴がまさしく散らばつてゐた。そのなかに北魏の石佛が昔の儘の無表情で集つてゐるのだ。

左岸はそれにくらべて一段と圓みと優雅さを帶びた、なだらかな丘陵だつた。すべての色がその丘では薄かつた。土の淡灰と草の淡綠との取り合せが此處でも再た繰り返された。それに處々の蕎麥畑が空の險しい雲行きを反射して、花の微かな白さを一層內氣なものに竦めてゐた。

丘の端に炭坑の痕が一個所、畫面の汚點のやうに發かれてゐた。だがそれは却つて周圍の陰影の多い靜かさを深くしてゐた。

この突然に展けた地勢のなかで、動いてゐるのは私達ばかりだつた。

われわれは誰からともなしに馬を驅け足に移らせた。河原を平行して走る四頭の馬はあちこちの水溜りで互ひに飛沫をあげあつた。最初三層樓が近いと感じたのは私の眼の錯覺だつた。降り出した雨が抵抗して頰を打つた。それで私達はなほ、正面の碧琉璃瓦の屋根の下に急ぐ理由を見つけたかのやうに、柳の枝の鞭を交る交る鳴らした。

四時過ぎて、われわれは「石佛古寺」としるした山門の前にたうとう立つた。住持に刺を通じてゐる間、本降りになつた雨のしぶきを門の中ほどまで避けながら、私は後ろの崖に隱れてゐる大小の石佛の無表情さを、背に近く感ずるのだつた。それは何か壓迫される感じに近かつた。太田氏は遲れた荷馬車をしきりに氣遣つた。

「雨にまで會つて」と、私は手巾で肩先を拭つてゐる勝本氏を振り向いた。「本當にお氣の毒しました」

「いや、明日はどうせ日曜ですから」

濡れた牧羊の群が門の前を通つた。牛糞を焚くやうな匂が民家から漂つて來た。私にはこの光景と「日曜日」とがどうもしつくり結び付かなかつた。

住持が出て來て內へ招じた。石段はもう小さい瀧だつた。

この文章ははじめ「雲崗紀行」と題して、石佛寺での二日間の生活と、北京への歸路の出來事までを記す筈だつたが、期日が切迫したゝめ、急に標題をも替へ、前半だけを獨立させる事にした。後半の文章は――もと〳〵後半の方を主要な部分として書き始めたのだが――いづれ改めて、別の獨立した紀行として發表する。雲崗石佛寺へ出かけるに就 は、文中のとほり根津張家口領事、及び同領事館の勝木政七氏に一方ならずお世話になつた。また北京公使館の岩村書記官、原田書記官、國際觀光局の佐藤汎愛氏の樣々な助言や教示を勞はした。文末でかへつて失禮かとも思ふが、この機會に厚く御禮 申し げたい。筆者識。

支那の大人物

長與善郎

客　君は支那の事は多少知識があるらしく見るが、さうかい。

主　うむ。時々そんな風に人から見られるが、なにその實何にも知りやしないのだよ。

客　だつていろんなものを書くぢやないか「項羽と劉邦」だの「孔子の歸國」だの「五祖と六祖」だの「陶淵明」だの「韓信の死」だの。脚本だけでもカナリあるぢやないか。

主　その他「支那を稱贊す」などと云ふ隨筆見たいなものを書いた事もある。が、そこがつまり創作家のあり難い點で、どんな間違つた出鱈目を書いても、なに之は創作だと云やア別物扱ひをうけて通用するんだから、僕のやうなものにとつては大いに都合のいゝわけさ。尤も僕は親の感化といふのか、子供の時分から支那には何と云ふ事なしに親しみを感じてゐる。いかにも隣國と云ふ親しい感じだ。僕は只支那が親しみ深いのだ。さうして實に大したえらい國だと心から敬服してゐるのだ。知れば知るほど。

客　知れば知るほどと云ふ以上ちつとは知つてゐるんだらう。なにも中學の生徒が知つてるやうな事を訊かうと云ふんではないが、まずどう云ふ風にえらいんだ。

主　支那は人間で云へばまづ大人物と云ふ國だ。大人物が生れるやうに出來た國と云ふのか、何しろあんなに大人物

の澤山生れた國は少いだらう。

客　その大人物論を訊き度いね。實例について。

主　まあ冷やかさずに聞いてくれ。そして君の異存があつたらそれを敎へてもらい度い。まづ堯舜と云ふ大人物がゐる。その前にも伏羲、神農、黄帝などと云ふ人？　がゐるが……なぞと云ふと、なんだか少し歷史の講義見たいになつて來たな。だがまあ笑つて聞いてゐろよ。橫になつて。眠むくなつたら眠ちまふがいゝ。それが支那式だ。どうせ話も居睡りして聞いてゐりやいゝやうな話だから、君より先きに此方が眠むくなるかも知れないが。何しろ支那はえらいよ。堯が國を治めてゐる時、ある日田舍を散步して村人の長閑に歌を唱ふのを聞いてゐたら

日が出りやはたらく
日が入りや休む
のむにや井戸ほれ
くふにや田を耕け
××樣には用はない

と樂し相に歌つてゐるのを聞いて堯はうれしくてたまらなかつたなぞと云ふ話は實にユートピアさながらの美しい話ぢやないか。さう云ふのがもし僞でなかつたとすりや孔子や老子があの通り過去憧憬主義になつたのは無理もないと思ふね。

客　うむ。君は老子は好きかい。どう思ふね。

主　老子については實はその中もつとよくしらべて一論を書いて見たいと思つてゐるんだがね、老子を孔子と對照さ

せて論じて見る事は非常に面白いと思ふのだ。實は前には僕は老子は喰はず嫌いと云ふんではないが、何だかどうもあの一寸つかみにくい、現實離れのした神秘主義のために、一寸の衒學者趣味の輩から少しかつがれてゐはしないか。實はどこ迄深いのかたしかた事は分らないがそのために實際どこ迄深いのか分らない人物のやうに多少買ひ被られて、少くとも尊敬されすぎてゐるんではないか、なぞとも思つたりしたものだつた。何だか孔子が好きで老子が嫌いだなぞと云へばそれ丈けで深遠幽玄な消息の分らぬ平凡な俗人と見做され相だからね。だが、實は去年の秋、初めて僕は「道徳經」と云ふものを讀んだのだが、老子はたしかにさう云つて、只ペダントを喜こばせるやうな、俗人に分らぬ仙人じみた奇警な言を弄する神秘論者として簡單に片づけられる代物でない事は云ふ迄もない。尤もあゝ云ふ本は一度一通り眼を通した位いでは本當に讀んだ事にはならない。折々にその本をひらいて何氣なく讀む事が度重なる間に或る時には何とも感じなかつた言葉が突然に稲妻のやうにひらめいてぴたりと同感され、かくしていつとなくその作者の實感と眞面目とに合體するのでなければ本當の理解とは云へない。さう云ふ點で論語はわりに子供の時から親しむでゐたおかげで、古くから暗誦してゐたやうな言葉がいかにも掬めども盡きぬ味となつてしみぐ心をうるほしてくれる。どうもこんな事を喋つてゐるとつい老子と孔子との對照論と云ふやうな大仰なものになつて來て厄介だが、まあくはしい事は何れ又論ずるとして、兎に角老子は孔子よりは、氣むつかしい、圭角のある男だつたやうである。老子も實にゆつたりはしてゐるが、孔子の素直さに比べては較々旋毛の曲つた男のやうに見える。孔子もよく當代を嘆息して、「筏に乘つて海に遊ばん」なぞと云つてゐるが、元來の本質から云ふと、勿論修養の力が大なるものではあらうが、温健で實社會の常識に通じどちらかと云ふと樂天家だつたやうな氣がする。最も深い意味での處世法、生きたる術と云ふか、さう云ふ點、孔子は實に融通自在な、又最深な意味での要領のいゝ、リアリストであつたやうに思へる。いさ何もかも自分の望みが世

に達せられぬとなつたら唯一片の雲、一流の水を友としてゞも悠々自適して樂しむ事の出來た人だつたと思ふ。孔子の說く忠は素より伯夷叔齊の忠の如き小さいものではないから、一國のために餓死するやうなつまらぬ事はしないにきまつてゐる。老子を見て孔子に眼をうつすと謂はゞ哲人と賢者とのいろ〳〵の色あいの相違が見えて面白い。孔子素より仁者であり、君子であつたが、何よりもまづ賢者、——賢者の中での賢者であつたやうに思ふ。かう云ふ事は實例について云ふともつと生き〳〵として來て面白いのだが、どうも知識が足りないのでそれが出來ないのが殘念だが、大體孔子は社會的であり、老子の性質は非社會的に出來てゐたやうだ。老子だつたら、たとへ孔子のやうに諸國から迎へられたにしてもあんなに遍歷はし相もない。孔子の姿を想ふと多くの弟子にかこまれてゐる何となく賑やかな壯觀が眼に浮ぶが、老子を想像すると何だか一人つぼつちでぽつねんと牛にでも乘つて間拔けたやうな顏をして逍遙してゐる姿が偲ばれる。孔子は平氣で群衆の中にも行けば、社交の巷にも姿をあらはして道を說く事が出來、さうかと思ふと又一人なら一人で充實した樂しみを味ふ事の出來る人であつたやうに思へるが老子には何分世間の小さかしげな、生半可な人間が嫌でたまらなかつたらしい。當時の人間の一言一行がこの大きな變人にはどうも純でなく、色氣たつぷりで、わざとらしく、見榮坊で不自然で、臭く見えたのだらう。仁だの、義だの、禮だの、忠だのと云ふ事を多く口にする者が殊にさうだつた。彼には人間が想つた學問をすればするほど小さかしく、利に拔け目がなく。ペダントになりパリサイになり臭味が增す一方に思へたらしい。だから一寸氣に食はない質問をされるとすぐ言葉が尖つて辛辣になる。孔子なら「巧言令色鮮なし仁。」と云つてすましておく處を老子は「言ふ者は知らず。知る者は云はず」「信言は美ならず。美言は信ならず。」善なる者は辯ぜず。辯ずる者は善ならず。」と云ふ風に云つて了ふ。又「上士は道を聞きて勤めて而して之を行ひ、中士は道を聞きて存するが如く、亡するが如く、(半信半疑) 下士は道を聞きて大いに笑ふ。笑はざれば以て道をなすに足ら

ず。」なぞと云ふ言葉もある。上士は道を信仰して勤めて行ふ……以下非常に善い言葉だが、笑はざれば以て道となすに足らずなぞは少し辛辣すぎるやうに思ふ。孤獨な實感から出た言葉で穿つてはゐるし、殊に老子の時代には大いに當つてゐたかも知れないがから云ふ言葉は孔子の云はない言葉である。孔子の趣味から云ふと、なるべく言辭は平明にしてつとめて奇警を避けてゐる。當り前のやうな事を平氣で述べる大人であつた。彼は水のやうな味を好んだ。老子も亦時には「正言は反するが如し」なぞと云つて、常識の逆のやうに見える辛い言葉を言はずにはゐられなかつた。朋あり遠方より來る云々の如き平淡な言葉は老子には一寸出せない言であるが、又一方では「希言は自然なり」とも云つて徒らに異を立て奇を衒ふ事を好んだのでは勿論ない。自分では「吾が言甚だ知り易く、甚だ行ひ易きも天下能く知る莫く、能く行ふなし」と云つてゐる。又「上善は水の如し」と云ひ、又「大道は夷(平坦)にして而も民は徑を好む」と云つてゐる。「無味を味ひ、無事を事とし、無爲を爲す」事を道人の道としてゐた。しかし兎に角世の中は人智が増すに從つてますます衒學的になり、上べ丈けの見せかけになり、氣の利いたやうな小ざかしげなオッチョコチョイや、僞せ仁者や、技巧家が増へるばかりのやうに思へたのであらう。だから老子のやうな神經を持つた人には世人が仁義禮忠を學び口にすればするほど、その實本來のそれらからは、遠ざかる。そこで「大道廢れて仁義あり。智慧出でゝ大僞あり。國家混亂して忠臣あり。」とか「學を絶てば憂なし」とか、「聖を絶ち智を捨つれば民利百倍す。仁を絶ち、義を捨つれば民孝慈に復る」とかと云ふ警句のやうに見える反語を云はずにはゐられなかつたのであらう。それ故、「孔子禮を老聃に問ふ」なぞと云ふ説もあるが、孔子を讀んで老子を讀むとまるで老子は孔子の後に生れて孔子の教えに反感を持ち、一々その逆を云つたかの如き觀がある。孔子が老子の影響をうけてゐるとは殆んど思はれない。

客して見ると、老子が世の亂を避けて關を出で、西遊しやうとして、關令尹喜に逢つたなぞと云ふ事があるがあれ

はつまり厭世から出た事なのかね。

主　何しろ老子の傳はよく分らないらしいし、其哲理も、孔子の教が四書によつてはつきりしてゐるのとはちがつて、道德經だけでは一種の教外別傳不立文字で、言葉が十分とは云へないが、兎に角老子が一面厭世觀を持つてゐた事は疑へまいと思ふ。勿論さう云へば大抵の思想家が皆さうだとも云へるがね。又實際、その時代も隨分わるい事はわるい時代だつたらしいし、云つたつて通じない氣もしたらうし、人間は利慾の道にばかり發達して、邪智に長じ、僞善を以て欺き合つてどこ迄惡く墮落して行く事かと老子はつく〴〵情けなく感じたのだらう。孔子も同じ亂世に生れて矢張りさう云ふ悲觀の味を嘗め、一方堯舜の世をあこがれたが、老子の過去憧憬は一層ひどいやうに思へる。但し厭世は必しも厭生でない事は云ふ迄もないが、諄詐、自然、「含德の厚きは赤子に比す」と云つて嬰兒を理想とし、聖人を以て一見痴愚のやうに見える者とした老子が過去の原始時代をあこがれた事は當然で、之については僕は少し意見があるのだが、一體人間は歷史と云ふものがあまりに短かいとどんな智者でも一寸未來の人文と云ふものを豫想し樣がなく、人類の文化の潮流がどんな風に流れて行くか見當がつかないのだらうと思ふ。從つて、現代を見るに常に過去のみを對照として比較批判するよりないのではなからうか。既に千年以上と明かな文化の歷史が經過した處に生れて見れば、人類にはいろ〳〵の意志があり、どう云ふのが根本の意志で一時どう云ふ現象になつても結局又どう引つくり返へつてくるか、さう云ふ事が經驗的に見渡されてくるから、一時の時代現象を以て、全文化史の潮流を悲觀したり、見そこなつたりする事はないが、何分にもその道程があまりに短かいと、只百年か二三百年か先きの過去、或は漠然たる空想上の原始時代のみを考へて、それが限りなくいい美しい時代であつたやうに見え、あゝして見ると、現代は何とまあわるくなつたものであらうと云ふ風にばかり思へるのではないか。せめてもし唐の太宗の時代に之等の人が生れたとするなら彼等の世界文

化史觀は恐らくずつと變化してもつとも積極的なものになつたらうと思へるね。人類の原始時代の諄樸などと云ふ美しいお伽噺の空想にだまかされず、凡そ煩惱の火のあるところはどこでも又いつでもユートピアでない事は同じ事で、眞のユートピアは只解脱と涅槃と、天國と丈けにあると達觀した事は流石にえらいもんではないか。

客　そこへ行くとさすがに釋迦や基督は又えらいものだつたではないかね。

主　まあそれはさうにちがひないとも云へるが、この上なほ釋迦基督迄話をひろげた日にはいよ〳〵以て始末がわるくなるから、まあこの邊で範圍を止めるとして、しかし又これらの人には老子なり孔子なりの獨特の大きさと、えらさのある事は云ふ迄もない。ところで孔子の事は近頃至極適任者の武者小路君が「改造」に一流の面白い意見を連載してゐるから、その方はまあ武者小路君に委せるとして、僕は此頃老子も中々好きになつてゐる。前にはさつぱり眞意の呑み込めなかつた「無」とか「無爲」とか云ふ事も今の僕にはカナリ同感出來て來た。

客　話はちがふが、夏目さんが死ぬ少し前に「則天去私」と云ふ事をモツトーとしてゐたが、老子の謂ふ處の無爲も結局あゝ云つた趣意ではないのかね。

主　さう思ふね。「無爲」と云ふ事は淺薄に解釋すれば實に仕樣のないノンセンスになるが、深く解釋すれば人間の最も宗敎的な態度は無爲の態度でなければならないと僕は此頃感じてゐる。言葉をかへて言へば、出來るだけ純粹に神によつて生き、出來る丈け神意に忠ならんとする者は無爲、——小さな私の思慮分別や、意識や、何かする處あらんとする要々たる意志を捨てゝ最も玲瓏無礙な境におり、澤庵和尚の所謂太虚一片の雲の如き輕い心でゐる事、一言一行天地の心に押され動かされて生き、動作し、言行する事にあると思ふ。その意味に於て基督なぞは最も無爲の人であつた。老子の言葉で云へば爲す事なくして爲さざる事なき人であつたと思へる。唯、自分を通し、自分を動かし、自分を

言はしむる者が基督に於ては父なる神であり、老子に於ては「道」であり、孔子に於ては天であつた丈けの事である。要するに則天去私である。「私無きが故に是を以てよく私を成す」と老子は云ふ。孔子は老子のやうに無爲自然をのみ力說せず、一方人文主義者であつたが、一方無爲を體現してゐた事は、「固なく、必なく、意なく、我なし」と云ふ言葉を見れば分る。但、孔子はそこを理想としてゐて、その理想境の事ばかりは云はなかつた。無爲の究極は即ち「己れの慾する處に從つて則を踰へず」と云ふ處にあるのだが孔子はいきなりそこへ達せられるものではないからそこへ行く道程をいろ〳〵に具體的に分けて說いた。そこが孔子のリアリスチストであつたえらい處で又孔子が吾々に親しまれる所以である。老子はそこへ行くと、殆んど人を教育する事を考へてゐないやうに見える。老子の性質と、哲學とは孔子のそれのやうに教育敎化と云ふ事に向つてゐない。從つて謂ふ事が皆いきなり理想的である。「戶を出でずして天下を知り、牖（窓）を窺はずして天道を見る。其出づる事彌々遠ければその知る事彌々少し。足を以て聖人は行かずして而して知り爲さずして而して成る。」「天地は仁せず。百姓を以て芻狗（祭祀用の草人形。祭終れば用なくして忘れられて了ふ）となす。聖人は仁せず。（仁を施さうなぞと云ふ意識を持つてゐない。）百姓を以て芻狗となす。」と云つたやうな風である。

孔子は素より仁と云つてもその仁に種々の階梯あり、いきなり最上の仁の行はれ難いことは知りぬいてゐる。仁を說けば僞仁者も出る事は知つてゐる。だがそれかと云つて仁と云ふものを病のやうに見る事は甚しい僻見である。故に仁を說く事は善いとした。老子はその中途半端の仁、似而非仁に我慢が出來ない。だから一々「上」の字をくつつけて上善、上仁、上禮、上義なぞと云つてゐる。

しかしエピクロスとツェノンとが期せずして同じやうな生活をしてゐたやうに孔子も老子も天を樂しむ事の深さに

於ては似てゐた。無爲境に入つてゐた事は似てゐた。茶道でも名人になると一旦前に教はつたすべての法式を忘れ去つて了ふ。一旦きれいに忘れ去つて了つて然る後一擧一動自から法式に合する處を以て名人となすと聞いてゐる。之も無爲だ。さうしてこゝが最上の理想境である事は實際さうにちがいないと思ふね。

老子が一見馬鹿のやうなぼんやりした人間を以て聖人を形容してゐるのは實に老子らしい深い實感から出たで觀照であり、趣味としても實に最高のものと思ふ「我は愚人の心なる哉。沌沌たり。俗人は昭々として我獨り昏きが如し。俗人は察々として我獨り悶々たり。澹（談）としてそれ海の如く、飂として止る事なきに似たり。」なぞと云ふ文章は實に讀むだに氣持がいゝ。だが孔子はそんな事、愚人のやうに見える事を問題としてゐない。人はどこ迄も賢者たらん事を努むべきであり仁者たらん事、義者たらん事を努むべきである。そして只己れの足らざる事丈けを嘆いてゐる。そこは孔子の道が實に永劫なる所以であり、えらい處である。「聖人の天下に在るや怵々（危ぶみ惧れて）として天下の爲に心を渾ず。」なぞと云ふ言葉もあるにはあるがどつちかと云へば孔子に比べて老子は餘程小乘的な觀があり、消極的である。老子はどこか淋しい人で自からさうなつたのであらう。心境の高さとしてゞはなく、常意識の持方に於て孔子の方がより積極的であり、人類的であり、從つて大乘的であつたと云へるやうに思ふ。だが人類、社會に對する以外の感情、天、道に對する宗教的な氣持に於ては老子は實に實感が豐富で徹底して居り、又その道の働き、正義を信じてゐる事は極めて厚いものである。有名な「天網恢々疎にして漏さず」と云ふのは老子の言葉である。又「天道は親（私の親しみ）なし。常に善人に與みす」とも云つてゐる。

之等の言はいかにも簡單のやうで、詮議をすればいくらも詮議の出來る言葉であり、流石に二千年前の人の言葉と思へるが、それも老子の人生觀の深さを信用するかしないかの問題である。利口な孔子は流石にそんな事ははつきりは云は

はない。「積善の家必ず餘慶あり」位の名言にとゞめてゐる。が、勿論老子も前提の説明が足りない丈けで實感を云つてゐる事は云ふ迄もない。「恍たり惚たりその中に物あり。窈たり冥たり。其の中に精あり。その精甚だ眞にしてその中に信あり。古より今に及ぶ迄その名去らず以て衆甫（萬物）を閲ぶ。我れ何を以て衆甫の然るを知るや、之を以て也。」なぞの言葉にもその實感味が明かである。

「根に歸るを靜と云ひ、靜を命に復へると云ひ、命に復へるを常と云ひ、常を知るを明と云ふ。」「吾れ大患ある所以は吾れ身を有するが故也。吾れ身を無みするに及ばゞ吾れ何の患かあらん。」「人を知る者は智也。自ら知る者は明也。足る事を知る者は富み、死して亡びざる者は壽し。」「人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り道は自然に法る。」「善く行く者は轍迹なし。」「天地すらなほ久しき能はず、況んや人に於ておや。道に同じふする者は道も亦之を得るを樂しむ。德に同じふする者は德も亦之を得るを樂しむ。」「禍は足るを知らざるより大なるはなし。」「道之を生じ、德之を畜ひ、物之を形し、勢之を成す。是を以て萬物道を尊びて、德を貴ばざるなし。」「文采を服し、利劍を帶び、飲食に厭き、資材餘りある、是を盜誇と謂ふ、道に非ざる哉。」「知りて知らざるは上、知らずして知るは病。夫れ唯病を病とす。是を以て病まず。聖人病まず。その病を病むを以て是を以て病まず。」

皆老子の言葉で、いゝ言葉を擧げてゐたらキリはないが、要するに老子の一番えらい特色は天道に對する信仰の深さ、その歸命の氣持の忠順さ、そこからくるゆつたりした水のやうな味、すなほさ、大きさなぞにあると思ふ。

客　さう云ふ話を聞いてゐるとどうも禪を聯想するが、老子の世界觀無爲主義は大分禪宗に似てゐはしないか。

主　勿論大いに似てゐる。禪宗が本場の印度でよりも却つて支那に於てあんなに深く根をおろして榮へたのは元來支那に道教的思想と云ふ下地があつたからだらう。禪と老子の思想とは似てゐるどころか殆んど一致してゐる處もある。

そんな事を云つて禪の事はよく知らないがね。

要するに老子教は道徳であるよりも、哲學であるよりも先づ何よりも宗教であると云ふべきである。老子の一切の自然主義、無爲の態度は凡てその宗教心、天地大道に對する歸依の心から來る。即ち無爲とは天道に對する一つの信心、歸依の心であつて、先づその信心あつてこそのもの、自分の「我」といふ有限な小さき「有」の代りに「道」と云ふ普遍「無窮なるものをその座に代つて座せしめんとする純粹な態度より生ずる一種の無我境の謂に他ならない。だからその「我」が「無」になつて、「道」が有になる事多ければ多い程、凡てはよくなり、道がよく現はれるわけで、その根本的態度に依らずにこざかしき才智の技巧によつて善を、現はさうとする主義を老子は、輕蔑したのである。さう云ふ技巧的な「作りもの丶善」に比べれば「上善は水の如し」で、自然に押されるやうに流れる、流動的なものであると云つたのであらう。即ち「道」を出來るだけ「有」ならしめんために、發揮せしめんために基督教的に云へば「御心のまゝならしめんため」に出來るだけ、私を無とするの謂で、つまり、則天去私」の心である。一旦その心になつて出來るだけ純粹に、忠に天に則して生きる以上、唯自然にすなほに生きればよい。座したければ即ち座し、臥したければ、即臥す。かくてかういふ徹底した自然主義の立ち場にゐる老子が凡て、意識的な感じを不純として嫌つた事はいかにも當然な事とは云はなければならない。老子は實に意識的に事を爲し、故意に、爲す處あらんとして構へて爲す態度を、道の水の如き美しさを穢がすものとして嫌つてゐる。同じやうな事が禪にも「至道無難唯嫌ニ揀擇一」などと云ふ言葉で云はれてゐるが、從つて又故らに「無爲」「無爲」と狙らつてその又無爲の觀念に囚はれ、そこに意識を轉り、しやちこばらせてゐる事も亦素より一の偏執であり、迷忘であつて、大いに無爲の精神に反する事云ふ迄もない。故に努力所動する事が自然である時は、所動努力も亦一つの「無爲」であつて、その時に故ら無爲にしてゐる事は一つの愚かな有意である。この老子の所

謂無爲がよく誤解され勝ちな「何でもない單なるゼロ」である消極的無爲と根本的に異なる所以は「上志は道を聞きて信じて努めて之を行ひ云々」の言葉を一つ取つて見ても明白すぎる處である。

客　禪僧にも支那には隨分えらい者が大勢ゐたらしいね。

主　うんとゐる。ちつとは本を讀み嚙つた事もあり、提唱を聽いた事もあるが、どうも支那の坊主のえらい處を聞いてから日本の坊さんの話にうつるとまるで支那の南畫と日本の南畫とのちがい位い感じがちがふのでがつかりする。大燈國師とか、關山國師とかの話でもそれ丈け聞いてゐると感心するがそれに一々お手本があり、その又お手本の大きな強い感じといつたらないので、實に氣の毒な程影が薄く、貧相に見える。何しろ一々模倣なのだから敵いつこはない。勿論自分のものにはなつてゐるのだが。

客　何にしろどうも支那と云ふ國はおそろしい國だつたものだね。美術なぞの上に於ては之は又露骨だが。

主　まつたく大變な國だな。こゝ迄くると今度はちつと絲の方の話がし度くなるが。まあくたびれた。又此次ぎにしやう。

一五・六・二三



『眞生活』へ、

——ル・トライヤスからクロ・ド・キヤアニユ

武林無想庵

La Maisonnette, Le Terayas, Var, France. にて

——一千九百二十六年二月五日。

二日にこゝへ來た。さうして四月一日まではこの瀟洒なバンガロウにとどまることができるのだ。なんといふ幸福であらう！

ル・トライヤスの名は六年以前に知つた。それはアンリ・バルビユスの家のあるところとしてであつた。さうしてそのころ共産主義者として家宅捜索を受けたバルビユスの手紙と寫眞との載つたユーマニテの紙上でおぼえた名だ。

去年の二月、サン・ジヤン・キヤプ・フエラへ妻子の顏を見に、巴里から汽車でこの沿岸をとほりすぎた時、赭岩と碧海と松とミモザからつくられた、妖艶で

同時に原始的なこゝの風光をながめながら、どうかして一度はバルビユスその人の謦咳に接したいものとねがつた。

はじめてバルビユスの創作「地獄（アンフエル）」を讀んだとき、その書に盛られたるバルビユスの生命觀はどうしても般若だと思つた。さうしてすくなくとも甚だわが意を得た稀代の傑品だと讃嘆した。が、笑止にもその時はまだ、バルビユスなるこの一個の文人が、なんとなくヰリアム・ゼームスの所謂ラデイカル・エムピリストめいた、同時にまた怪しく古代の神秘主義者、宿命論者めきもした、異彩ある現代フランスの一詩人小説家が、意外にも熾烈なるコンミユニストであり、爭ふべからざるボリシエヰキのクヴーリシチであつたことも、從つて又かの所謂『クラルテ』運動の發意者であり立案者であつたことすら、はづかしながらわたしは全く知らなかつた。

諸法因緣生――すぎしある年のある雪夜、比叡山東塔の宿院第三號室で、龍樹大士がふとわたし自身の心魂にさゝやき鏤刻した、この大智度論の鐵印は、その後十年、聚落から聚落へと、さすらひつゞけたる近代人間生活の、言語道斷なる、心行處滅なる、まことにたゞ〳〵微妙をきはめたる幾變遷のジグザグを經て、所謂不自生、不他生、不共生、不無因生の不知不識的過程のうちに、いつともなしにかうした人生の une étape まで、わたし自身の形骸をして、天衣無縫にウカウカと辿りつかしめて了つたものだ。

――二月九日。

ミモザの丘、ミモザの谷、到るところミモザの花のまつさかりだ。小さなテラッスへ出てながめやると、山吹いろにうづまつた谷の底には、P.L.Mの鐵道線路が橫たはる。そこに赭色の岩塊から岩塊へと、弓形をなして架けわたされた鐵橋がある。弓形の間からはカンヌ・サン・ラフアエルの海岸道を越えて、世にもあさやかな地中海の紺碧がのぞく。一ト際

濃厚なる赭色の岩礁が見える。岩礁を嚙む白い波が見える。さうして或は雲か山かのコルシカ島から莊嚴を極めた日の出が見える、La Maisonnette, ——新進の佛國女流小說家、マダム・マルセル・ヴイウー女史のバンガローだ。食堂兼サロン、厨、浴室、寢室、テラッスのうしろにはそれだけの部屋がある。それからこの日記を書きはじめた一室がテラッスの下にある。さうしてどの部屋の隅々まで、繪畫と骨董と計り知られざる新舊の書籍が、高雅な趣味の豐かさと心にくさとをば、奥床しさのかぎりをつくして、充分にゆきわたらしてある。

——二月十日。

はじめてこの家をたづねて來たのはちやうど一ト月まへだ。

Kの恨みの拳銃に、思ひもよらずその左頰を打ち貫かれて、天下の景勝をほしいまゝにした懸崖の上のモナコ病院の、パヴイヨン・ラヴランの病床に横たはつてゐた妻が、世にも親切を極めたマダム、マルセル・ヴイウー女史の手紙をわたしに示して、子供をつれて是非一度訪問して來いと云つた。

Madame Marcelle Vioux …… かうした名前の小說家がゐることは、わたしは去年の十月七日まで知らなかつた。

その日、妻は世界的に有名な巴里の書肆ユージエヌ・フアスケル氏から、リユー・ロワイヤルのシエ・マキシムスで、マアテルリング夫妻を主賓とした晩餐に招待された。さうしてその夜の紀念として、主なる列席の文士たちが妻のために扇面へ寄せ書をしてくれた。

——Pour ma future autoresse qui a charmé de sa présence notre petit diner.——Eugène Fasquelle, 7. Oct.
25 ——Je croyais que le Japon des grands siècles classiques n'existait plus, C'était une erreur Je l'ai vu aujo

ur d' hui.——Maeterlinck.

——J'ai admiré aussi cette Resurrection.——Rénee Maeterlinck

——Zitaijna qui fut japonaise.

——Sauveuir d'im soir de Paris.——Gomez Carrillo,

——A ma petite socur de lettres, souvenir dime belle soirée. Marcelle Vioux.

この寄せ書の一番最後に署名してくれてゐるのが、すなはち、Marie du peuple の著者で、同時にこのバンガローの持主であるところのマルセル・ヴイウー女史その人だ、

その後、妻はたび〳〵女史をその巴里なるリユ・ド・ヴロアのアパルトマンに訪れた。さうして訪れるたびごとに、だん〳〵深くなつてゆくこの人の親切ぶりに、心から感激させられて了ふやうになつた。

——二月十一日。

一ト月まへには、妻の病院へ通ふ便宜のため、わたしはイヴオンヌと共に、モナコ古城の城壁の眞下なる、コンダミンのホテル・コツト・ダジユールにゐた。

モナコからル・トライヤスまでは、オムニビユス列車で約三時間かゝる。ル・トライヤスには急行列車は一つもとまらない。それほど鐵道驛としてはこゝは小さなところだ。

カンヌをすぎると、海岸の景色がガラリとかはる。別荘のかずが急にすくなくなる。橄欖の林が眼界から消える。山

が迫る。岩が赤くなる。ミモザの花が枝もたわゝに到るところ黄金色に咲きほこる。海の色が一層紺碧を増す。一層原始的になる。氣分がひき締る。

小さな停車場を出ると、坂の下なる海岸に、たつた一軒、簡素なホテル・レストランがあつたので、マダム・マルセル・ヴイウー夫人のラ・メーゾネツトはときいて見る。わからない。それでは、バルビユスの家はときくと、そばにゐた十七八の若者が、バルビユスの家なら、ル・トライヤスではない、そのさきのミラマルだといふ。こゝからどのくらゐあるかとたづねると、三キロメートルあると答へる。乘りものはとかさねてきくと、こゝには全くないと、小さなジヤポネーズのイヴオンヌをば、ものめづらしさうにながめながら、いかにも氣の毒さうに答へた。

仕方なし海岸の眞赤な道を辿りはじめる。

いゝ景色だ。ダンテに比較されたバルビユスの最近の大作 Enchaînements の中に、力を籠めて描寫された岩と海とが、そのまゝにまざまざと眼前に展開する。

ミモザの花蔭をくぐり、松林の間をぬけ、極彩色の友禪縮緬の袂をヒラヒラさせて、イヴオンヌは嬉しげに路ばたの名も知らぬ草花を摘みあつめながら、ついて來る。一キロばかりの間には、全く人家がない。海には小舟一艘見あたらぬ。又その間には人つ子ひとりにゆきあはぬ。シンとして、たゞ自然そのものと同化する。

さういふ海角を幾まがりして、はじめて家のあるところへ出る。L'au berge blanche とあるホテル・レストランが左手の崖ぎはに立つ。さうしてそこらあたりから、山にも岸にもすこしづゝ別莊のかずがふえて來る。

ミモザの枝を腕一杯にかゝへた二人づれの少女に、再びマルセル・ヴイウー女史の家をきいて見る。と、その少女の一人がニツコリして、——あゝ、ヴイウーさんのお家へお出でになるのですか。それではもうとうに通りすぎておしま

ひになりですよ……ホラ、ね、あすこに汽車の橋が見えるでせう？　ヴイウーさんのお別荘は丁度あのうしろになつてゐるのですよ。と、親切に指をさして敎へてくれた。

――メルシ、ボークー。と云つてひツかへす。

オーベルジ・ブランシまでひツかへすと、松林の間を貫いて、道がもう一ト筋山手の方へ、そこから岐れてついてゐた。と、また分らなくなる。で、オーベルジ・ブランシで再びきゝたゞす。と、そこの娘さんらしい人が出て來て

――オヤ、あなたは停車場で、小さいマルセル・ヴイウー孃にお逢ひになりませんでしたの？　あなたをお迎へにおいでになつたのですよ。すると、あなたは海岸をおいでになつたんですね……山の方の道が近いのです…どうぞ、まア、こゝでお待ち下さいまし。ぢきにお見えになるでせうから…と云つた。

――けふはあひにくマダム・ヴイウーがよんどころない御用事でカンヌまでお出かけになりましたので、おひるは爰で小さいヴイウー孃と御一緒にたべて下さるやうにとの事でございました。それから孃があなたをバルビユツスのところへお案内なさいますさうです。さうしてバルビユスとお話なさつておいでになつてゐらつしやる間に、マダム・ヴイウーは自働車であなたをお迎ひにカンヌからバルビユスのお宅へおよりになるといふことで厶います……どうぞ、まづ、御ゆツくりなさいまして……と、あとから出て來たオーベルジ・ブランシの女將が云つた。

崖上の明るい見はらしのいゝ食堂の一隅には、それらしい三人分の食卓がこしらへてあつた。

犬がゐた。キキといふ。猫がゐた。ミスタンゲツトといふ。イヴオンヌは庭へ出て、キキとミスタンゲツトとたはむれ遊びはじめる。イヴオンヌには、この世の中は『到處吾家』だ。犬も猫も、草も木も、いかなる國のいかなる人間も、彼女にとつては、すべて同程度に彼女のお友達だ。

小さいヴイウー嬢が、やがてわたしの前にあらはれた。頭に更紗の布を卷いて、質素に、古風に、いかにも謹みぶかさうな、はなはだ利發な十二三の娘さんであつた。

——二月十五日。

——二月十七日。

——二月十八日。

——二月十九日。

一日は二十四時間といふことになつてゐる。さうしてそれは何人にも同じことだ。從つてわたしにも同じことだ。が、さうした二十四時間のうち、かうした日記に沒頭できうる時間といふものが、どうしてわたしにはかう乏しいのであらう？

わかりきつてゐる。目前にせまるその日々の時の生活が、容易にわたしをしてしづかに落ちついてこの隨自意三昧の机に親しませる時間をば與へてはくれないからだ。云ひかへれば、一切の周邊に簇出する八萬四千の煩累を突破して、端的にこの日記にばかりしがみつく精進波羅密を行ひ得るだけの熾烈なる意志作用が、不幸にして生來のわたしには甚だ稀薄に植ゑつけられてゐるからだ。

わたしは今更それを嘆いてゐるのではない。また同時にその所謂熾烈なる意志作用をば fanatiquement に强ひてそそりたつべく努めもしない。わたしにとつては、さうした大抵の場合、とかく未得謂得の附燒刃に陷りがちであるからだ。さうして自分自身で充分にそれを知りぬいてゐるからだ。さうして未證謂證の附燒刃ぐらゐまた世の中で不愉快き

はまるものはないからだ。

わたしはふと臨濟の四料棟を思ひだす。

——人境倶奪、奪人不奪境、奪境不奪人、人境不倶奪。

わたしはまた普化の四打咒を思ひだす。

——明頭來也明頭打、暗頭來也暗頭打、虚空來也連枷打、四方八面來也旋風打。

* * *

——バルビユスはすぐお見えになりますから、どうぞ。と云つて、下からあがつて來た、黒い着物に白いダブリエをかけた。小肥りにカツチリした女中が、わたし達を一室に案内した。

机の上にはタイプライターが置いてあつた。打ちかけの原稿がちらばつてゐた。壁には濃厚な色彩を湛へた繪畫が懸つてゐた。又壁そのものゝ上には、墨色淋漓たる希臘壁畫がはなはだ忠實な筆勢をもつて模寫されてあつた。又床の一隅に立てかけてあつたデッサン風の肖像は、まさしくかつてクラルテの紙上に活躍してゐたアンリ・バルビユスその人にちがひなかつた。又反對の一隅には自轉車二臺がよせかけてあつた。入口にちかく大きやかなカンヷスが一臺すゑつけられてあつたがそれにはどうやらルネッサンス時代を示した古繪畫の恰も今まさに模寫最中にあるらしいものゝかたちがなすられたまゝになつてゐた。到るところに書籍の堆があつた。さうして簡素な椅子が二三脚——いふまでもなく好奇の念に充されながら、わたしはそのうちの一つに腰をかけた。

バルビユスはすぐ出て來なかつた。

小さいヴイウー嬢とイヴォンヌとは女中と共に、この一室に續いた。小砂利の敷かれたヴエランダへ出た。わたしは椅子の上に殘つたまゝシガレットに火をつけた。

——二月二十日。

この部屋の海に向つた一面は、ほとんど全部、すばらしく大きな一枚硝子をとりつけた、遮ぎるものゝ全くない展望窓になつてゐた。空が見える、海が見える、赭色の岩塊ばかりなる尖角が見える。さうして空と海と尖角との外には何一つ見えないのだ。なんといふ雄大な眺望であらう？

——二月二十一日。

かゝる眺望の雄大とさうしてかゝる閑居の寂靜とをほしいまゝにしつゝ、バルビユスは原始このかた今日まで、連綿として虐げつゞけられてのみ來つた一切プロレタリアの非業に對して、憤つたり唱つたりしてゐたものだ。さうしてダンテ以來の大作を完成したものだ。

—— Communiste aristocrate! と、クレマン・ヴォテルは指摘した。

わたしはさうしたクレマン・ヴォテルのことばがこの場合に適切であるか何うかを知らない。が、あらゆる人世のプロレタリアが若しことごとくかうした家に住んでかうした生活がほしいまゝに出來る日が來たら、どんなに人類は幸福であらうと思つた。

バルビユスはやがてわたくしのまへにあらはれた。

——二月二十二日。

——二月二十四日。

——Vladimir Lenine est mort, Les haritiers de sa raisou et de sa volouté sout vinants.——

——En délimtive, La victoire reste toujemu, au bien et à la justice creés par l'homme, à ce saur quoi l'Homme n'existe pas.——Gorki.

——二月二十五日。

——Le secret pour moissonner l'existance la plus feionde et plus grande jouissance de la vic, éeat de vime dangeren ment! Constrnissez vos villes pris du Vésure! Euvoyez ves naisseaux dams les mers inexplories! Vinez en guerres avec vos semblsbles et avec vans-mêmes!——Nietzshe

——二月二十六日。

*

*　*

——三月十一日。

三週間、妻に臥込まれて了つたので、まるで机へ向ふひまがなかつた。

起きると、まづ竈の火をたきつける。都會とちがつて瓦斯がないから、枯枝と生木の薪とそれから工場用の石炭とで、フルノオの中へもやすのだ。珈琲を入れる。食事の用意をする。掃除をする。子供に着物をきかへさせる。食料品の買入れに出る。

このル・トライヤスには、食料品を賣る家がたつた一軒きりしきやない。牛乳も毎日午前十一時半にカンヌから汽車でそこへ屆く。みんな空瓶をブラさげて、それを買ひにゆくのだ。

赭い岩、赭い道、滿開のミモザ、したゝるやうな空の碧、雄大な地中海の眺望、點綴する別莊、さうした背景の中をば、トボ〳〵と瓶と袋とをブラさげながら坂をのぼつてゆく。のぼりきつたところに、小さな郵便局がある。食料品屋は丁度その前だ。

高い。葱が一本六十文もする。

* * *

病床の妻を看護する事と、子供の世話をする事と、食事の用意をする事と、そのあとかたづけをする事とで、朝七時から夜十一時までは、ほとんど寸暇がない。さうしてそれから原稿を書かうとしても、身神がつかれきつて、到底不可能だ。せめて寢床の中で、書物なりと讀まうとするけれど、十行よまぬうちに、いつのまにか、ぐツすり睡込んで了ふ。

* * *

思ひもよらぬル・トライヤスに、いや、それよりもなほ思ひがけなかつたこのラ・メーゾネットに、このマルセル・ヴ

イヴー女史の別莊に、よしそれがたとへ二ヶ月かぎりにせよ、もとより家賃の心配なく、電燈から石炭まで、一切女史の好意の下に、かうして親子三人きりが、のび〳〵と水入らずに暮らし得られるといふ、まことに得難い、あまりに夢のやうな、そのよろこびの消えぬうちに、とりあへず、まづ、この生活にまで、われ〳〵親子三人が、自然と推移して來るやうになつた因緣の徑路をば、とにかく一とわたり辿りかへして置いて見ようとして、かうして書きはじめたこの土地の第一印象記が、まだその十の一にも達せぬうちに、日は遠慮なくドシ〳〵經つて、もういつのまにか四十日すぎてしまつた。

* * *

——三月十二日。

妻の病氣はなほつた。併しもうこの別莊にはあと三週間きりしきやゐられぬのだ。われ〳〵は次に移るべき家さがしに歩かなければならぬわけだ。さうしてわれ〳〵の全財產は三千フランきりだ。さうしてその三千フランの費消されぬうちに、費消されたあとの生活費をかせぎださなければならぬのだ。生活の不安は依然としてわれ〳〵に附纏ふ。

* * *

放浪者に居所の定まらぬことはあまりにあたりまへだ。

——三月十三日。

一昨日は午後から妻と子供とわたしとの三人で、ミラマルのバルビユスをたづねた。

わたしがバルビユスに會つたのは、これで五回目だ。

第一回目には、二月二十一日の日記にかきかけたとほり、展望窓のある瀟洒な應接室で、はじめてわたしの目の前にあらはれたバルビユスその人は、そのそばに立てかけてあつた肖像畫とはまるで異つた感じの持主であつた。鶴のやうに痩せて、すばらしく脊の高い、さうして非常に脊中のまるい、なんとなく憔悴した顏色の蒼白い、どことなく底力のある眼光の炎々とした、はなはだ多分に太古の隱者豫言者をしのばせる風格をたゝへて、飄忽としてそこに立つた。

バルビユスはまづわたしにシガレツトをさし出した。それは paquet bleu の一番やすい普通のフランス煙草であつた。

——人間と人間とが internationalement に共存しようとする場合に、一番障害になるのは、わたしは國語の相違だと思ひます。と、わたしはまはらぬカタコトのフランス語で、まづ口をきつた。

バルビユスは頷いた。

それから話題は文藝と…………關係に及んだ。バルビユスは日本の勞働者について質問した。わたしは現代の日本には少數の熱烈な若い純眞な勞働者達がゐて、…………

…………………………………………

バルビユスは滿足らしくあまたゝびうなづいた。さうして最後に力づよく、

——Ça viendra！と云つた。さうして、たとへこの歐羅巴のまん中ですら、眞正のコンミユニストの數は、まだ本

實にすくないのだ。ことに文士としてのコンミユニストに到つては、寥々として曉天の星のやうにすくないと、慨然として附加へた。

さうして更にもう一度力をこめて、

――Ça viendra! と云つた。

バルビユスの妹さんが這入つて來た。この人は畫家であつた。さうしてこの家の一切の壁畫はすべてこの人の手によつて成つたものだといふ。

――今のフランスの作家のうちで、日本では誰が一番よまれますか？と妹さんはカンヴスに向ひながら、わたしにきいた。

わたしは困つた。

――アナトル・フランス？……が、アナトル・フランスはもう過去の人です。ロマン・ロラン？………―か―ロマン・ロランはもう新しい日本人には甚だあきたらなくなつてしまつたでせう……バルビユス？……今まさによまれつゝある、さうしてこれからます〳〵よまれなければならぬ作者は、どうしてもバルビユスだと思ひます。と、思ひきつて云つてのけた。

妹さんは安心したやうに頷いた。バルビユスは平然としてゐた。

第二回目にはル・トライヤスの停車場で逢つた。

切符を買はうとして待合室に這入ると、そこにバルビユスがゐた。わたしは妻をよんで來て紹介した。妻はわたしよりフランス語が達者に話せるので、マルセーユから來る汽車を待つ間、赭岩を背負い碧海に臨んで、いかにも僻地の停

車場らしいプラットフォームで、なが〳〵と舊知のやうに話してゐた。バルビュスはカンヌへ行つた。われ〳〵はニースまで赴いた。

——三月十四日。

第三回目は雨風の烈しい日であつた。ヅッシリと雨を含んだ滿開のミモザの枝々が、雫をたらして、たわゝにふりうごかされてゐる、なやましい暗澹たる午後であつた。

一時病氣のすこしばかり怠つてゐた時代の妻が、山から拾つて來た太い木の根がさかんにもえあがつてゐるシユミネーを背中にして、サロンの食卓へ向ひながら、しきりと『血祭のあと』——Après la Fête sanglante——と題する文章に沒頭しつゝある最中であつた。

テラッスへ出る硝子窓へ、大きな蝙蝠傘を肩にした、恐しく丈の高い、一人のムッシユウの姿が、忽然として現れた。それがバルビュスであつた。意外にもバルビュスがわざわざたづねて來てくれたものだ。

バルビュスは一時間ばかり親しげに妻と物語してかへつた。さうして妻に向つて、くれ〳〵も原稿を書くことに一生懸命になれと、師のやうに、親のやうに、やさしく力づよく奬勵してかへつた。かへりぎはに、バルビュスは妻の寫眞を求めた。妻はその上に「バルビュス先生へ」と、日本字と佛語と兩樣に、光榮にふるへる手で署名してわたした。と、そばにゐたイヴオンヌが、

——イヽ公のも、イヽ公のも………と云つて、自分の寫眞をさがし出して來て、「バルビウスのおぢさまへ」と、同じやうに母に署名させて、いそ〳〵とわたした。

バルビュスは思はず破顔して、いくたびも禮を述べて、その二つの寫眞をば内がくしへをさめてかへつた。

第四回目には、とある夕ぐれ、わたしはイヴオンヌの手をひきながら、バルビュスの家のすぐ山手にあたる煙突屋（フユミスト）の板小屋へたづねて行つた。臺所のフルノオが四五日以來けむつて／＼仕様がないので、それをなほしに來てもらふためであつた。

カンヌがよひの自動車道路から、このフユミストの板小屋に達するには、ほとんど全く足だまりのついてゐない、懸崖の岩から岩へとよぢのぼらねばならなかつた。イヴォンヌはしかし喜んだ。

――イヽ公はかういふところがすきなのだ。イヽ公が大きくなつてお金をもうけたら、かういふところへパパ公にお家をこしらへてあげようね、と云つた。

やうやう懸崖の上まで登りきると、そこには松林があつた。

――イヽ公、キヤキヤがしたくなつた。

フユミストの板小屋をつひそこの頭の上にして、かの女は岩の間なる枯杉葉のうへへ、たちまちキユロットをはづして、しやがみこんだ。

シンとした深山幽谷のやうな氣がせまる。山ひだと山ひだとの間からは、しづかな日の落ちかゝる地中海がみえる。ル・トライノヤスの全景が見える。

――大德のくそひりおはす枯野哉。

わたしの心にはゆくりなく蕪村の句がうかび出た。わたしは思はずほゝゑんだ。

日曜だつたので、フユミストの板小屋には誰もゐなかつた。入口の板戸はピタリと鍵がかゝつてゐた。わたしはその

鍵の間へ用件を書きつけた紙きれを挾んで懸崖を下つた。

そのかへりみちにバルビユスの家へ立よつて見たのだ。

もう薄ぐらくなつた應接室の中で、バルビユスは窓の前へ腰かけて、一層背中をまるくしながら、釘箱の中をかきさがしてゐた。

——Bonjour, Comment ça va? と云つて、丈の高い人はヒヨロ〳〵と立ちあがつた。さうして、爰はさむいから下へ來い、と、先へ立つて案內した。

日本畫の模寫が壁畫になつた小さなアントレエをぬけて、戸を一つ滑ると、二階を一階にぬいた、天井の高い、埃及式の客室の途中へ出る。同樣に妹さんの描かれた埃及の壁畫を眺めながら、壁畫に沿うた階段を下る。下つたところの暗い一隅には、そこにほとんど實物と異らない貝細工のガクの花があつた。

わたしとイヴオンヌとをこの埃及サロンへのこして、バルビユスは其のまゝ次の部屋へ去つた。

外套をぬぎながら、やゝ驚嘆の目を見はつて、わたしはこの詩的なサロンを見まはした。さうして心の中にマルセル・ヴイウー女史の言葉を思ひ出した。

——Tons les bolchevikis sont très riches maintenant, Barbusse aussi. il est très, très riche.

はじめてこの土地へ來た日のかへり、ヴイウー女史の小さな自働車で、カンヌ停車場まで送られる途中、自働車を運轉しながら、そゞろにわたしの小耳へさゝやいた。これは女史の言葉のはしだ。わたしはそれを思ひ出したのだ。さうして、なるほどな、と思つた。

バルビユスはやがて出て來て、わたしたちを次の部屋へ導き入れた。

わたしはハッと動轉した。この小さい、非常に上品な書齋の、そこの高雅な長椅子の上に、あまりに思ひがけなく、若い、はなはだ美しい人がゐたからだ。さうしてそのかたはらには、小牛ほどある、すばらしく大きなムク犬と、どこかの宮殿にゐさうな、例の口のとがつた、これもムク犬以上に大きな、ひどく貴族趣味の犬とがゐたからだ。

いふまでもなく、バルビュス夫人とその愛犬であつた。

シュミネエには木の根がもえてゐた。

バルビュスはまだブルーパッケのマリイランをわたしの前にさし出した。

ムク犬はリヽットといふ。もう一つの方はアリエルといふ。アリエルはイヴォンヌに向つてしきりに吼え立てた。この犬は子供がきらひなのだと奥さんが云つた。かれは次の間へ追ひ込まれた。それには反對に、リヽットはすぐイヴォンヌに馴れ親しんだ。さうしてころ〳〵ころがつて彼女と戯れた。

――三月十五日。

一ケ月まへ、一度三人でバルビュスをたづねたが、入口のベルをなんべん押しても、だれも出て來なかつたので、空しくかへつた。

五回目には、道の二つに岐れてゐる、さうしてホテル・レストランが一つ、半分できかけて、そのまゝ立ちぐされになつてゐる一角をまがつて、すこしばかりのぼつたところで、例の大きなムク犬の綱を曳きながら、鳥打帽をかぶつたバルビュスが飄然と降りて來るのにでツくわした。

―― Bonjour. Comment ça va? Vous allez mieux? と、バルビュスは嬉しげに妻の方へ手をさしのばした。さう

してそのまゝ散歩はやめにして、われ〳〵をつれて、すぐ上の自分の家へひッかへした。奥さんはやがて出て來た。手づからお茶を入れてくれたりした。さうして妻とイヴォンヌとの日本服姿をば、良人をすゝめて、カメラの中へをさめたりした。

かへりには、バルビュスが石炭の注文がてら、オーベルジ・ブランシまで、われわれを送つてくれた。途中であふほどの勞働者といふ勞働者は、一人としてバルビュスのそばへ來て、いかにも親しみぶかさうに、丁寧に挨拶せぬものはなかつた。

――三月十七日。

――三月二十二日。

妻はまた病氣になつた。かの女の子宮からは血塊が出る。もう一ケ月半にもなるが、引きつゞき、あとから〳〵出る。熱の高い時がある。併し高いと云つて、三十八度二分より以上にのぼつたことはない。尤も衰弱してゐるので、それでなくても異常に弱く生まれついてゐるかの女の神經が、死が今にも目前に迫りつゝあるかのやうにかの女を脅やかす。

このル・ライヤスには醫者は一人も住んでゐない。筋向の立派な別莊に住んでゐる人は醫者だつたさうなのだけれど、歐洲大戰前に何かで金儲けして、それ以來醫者をやめて、その別莊を建てたのだといふ。その別莊に屬するオランジ園は、このラ・メーゾネットの庭つゞきになつてゐるが、そこの夫婦が毎日勞働者を使役して、一生懸命にオランジ園の手入に精を出してゐる姿が見える。

あんまり妻が不安でたまらぬ様子だから、そこへ行つて賴んで見る。一言にしてハネつけられて了つた。やなことを得ず郵便局へ行つて、そこの電話掛に賴む。さつそくサン・ラファエルへかけてくれたが、さうしてさつそく來るには來てくれたが、自働車賃とあはせて二百五十フランとられた。三千フランのうちからだしぬけに二百五十フランとられては大きい。さうしてその醫者はたのみもせぬに、四五日たつてから、しかも日曜の午後、散歩がてらにやつて來て、又百 フランもつて行つた。

* * *

Villa Max Lolotte, Cros de Cagnes, Alpes Maretimes.

にて。

——三月三十日。

一昨年の八月、その年のはじめ、いろ〱工面して日本からもつて來た英貨四百四十六磅なにがしの金が、ぐず〱してゐるうちに、やがて百磅までに減じた時、さうしてまだそれだけの金があれば、そのさき四ケ月や五ケ月は、たとへそれが巴里のまんなかにせよ、われ〱親子三人ぐらゐ、尤に支へられる程度であつたにも拘らず、その四五ケ月後に迫つた一文なしの境涯に對して、われわれ夫婦の覺悟も態度もが甚だわるかつた。さうしてその結果、とんだ了見ちがひの生活が、われ〱の眼前にまざ〱と出現して了つた。わたしはそれをはづかしく思ふ。

——三月三十一日。

ル・トライヤスの二ケ月はすぎた。さうしてその二ケ月にまつたく妻の病氣を看護するだけですぎた。一月十一日と二月の末と兩度に改造社から送つてくれた金は、見る見るうちに減じて行つて、二十八日に爰へ引越した時には、二千フランになつて了つた。われわれはどうにかしてあとの金のこしらへられるまでは、それだけをば出來るだけ儉約して、日々の費用にあてなければならぬのだ。

このヴイラの第一階が、われわれのル・トライヤスから移つて來たアパルトマン・ムーブレだが、何よりもまづ値段がやすいので、一も二もなく爰にきめて了つたわけだ。寢室が二つあつて、食堂があつて、化粧室があつて、大きな便利な臺所があつて、それで月三百五十フランだ。それに電燈と水道とが三十フラン合計三百八十フラン拂ひさへすれば、毎日海の空氣を吸ひながら、いつまでゞも靜に落ちついて勉强が出來るわけだ。それでわれわれの生活費は日にいくらかゝるかと云ふと、三十フランあれば充分だ。月に千五百フラン、して見ると、四月一杯はまだ安心してゐられることになる。併し五月からは……

―野の鳥を見よ！

キリストの云つた言葉どほりとすると、まア、シツカリ落ちついて、一生懸命原稿にせいを出すにかぎる。」

*　*　*

ル・トライヤスにゐる間、毎日朝珈琲をすますと、例によつて便所に腰かけに行つてゐたが、その間の時間をば一行でも本をよむことにあてゝゐた。（さうした時間のほかは、わたしには讀書のひまが全くないのだ。）

そのうちにハルペリン・カミンスキーの佛譯したトルストイの遺著『眞生活』があつた。

眞生活――ほんとうの生活だ。うそいつはりのない生活だ。

ものごゝろづいて以來、わたしはこのみじかい一生をばどうかしてほんとうの生活に献げたいものと念じながら、かく今日までかうして生きつゞけて來たものだ。

わたしはまづこのトルストイの遺著の題目に惹きつけられた。そこでポツリ〳〵讀みはじめた。

――四月二日。

八卷、四百四章、言々句々、一としてわたし自身の心魂に透徹せぬ文字はなかつた。さうして、なるほどトルストイといふ人は、近代世界人中の尤も偉大なる、尤も眞面目なる、尤もまツ正直なる、さうして尤も頭腦の明晰なる文士であつたことが、十二分にうなづかれた。

龍樹大士、天台大師、臨濟、白隱、さうしてわたしにとつては、あらたにトルストイが附加へられたやうにまで考へられた。

一千八百二十八年、露國の僻村ヤスナヤ・ポリヤナに生まれいでゝ以來、一千九百十年、アスタポヴオの一寒驛で、人しれず野たれ死を遂げるまで、前後通じて八十二年間、そのながい〳〵トルストイの全生涯は、一刻としてなま〳〵しい血みどろなる靈と肉との休みなき悪戰苦鬪でなかつた瞬間もなかつたといふ事實が、あまりに灼礫として人の心眼を射りつける。かくてこそ本當に人間らしい人間の一生だと思ふ。かくてこそ人生そのまゝのいた〳〵しい眞實の姿だと思ふ。

仰天俯地、たゞ不可思議と不可解にのみ充ち滿ちた、この現象世界のまつたゞ中に立つて釋迦は堂々として佛國の嚴

在を說いた。キリストは架上に天父の所在を指さしつゝ壯烈に叫んだ。佛陀も天父の所在も全く同一なる宇宙そのものゝ內容ではないか？ 一切人間の全生活にとつて、何を措いても、何よりもまづ、決して欠くべからざる、兩つながら價値そのものゝ、生活價値そのものゝ第一源泉ではないか？ 人はその源泉に觸れ得た時、さうしてそれを掬した時、その時にのみ、はじめて世に處して眞正の幸福が體驗味驗でき得るのではないか？

――四月三日。

法第一章――なにびとをもきずつけぬこと。他人に惡をそゝらぬやうに振舞ふこと。なにとなれば、惡は惡を生むゆゑに。

法第二章――女をむさぼらぬこと。ともに住む女を棄てぬこと。なにとなれば、女を棄て、また女を變へることは、姦淫(デボーシユ)を生むゆゑに。

法第三章――ちかはぬこと。なにとなれば、人はなにごとをも約束出來ぬゆゑに。それはすべて天父の權內にあるがゆゑに。また誓約はたゞ……惡行爲のためにのみ求めらるゝものであるがゆゑに。

法第四章――惡に抵抗せぬこと。侮辱に耐へること。また人々のそれを求むるより以上になすこと。裁(さば)かぬこと。正義にたのまぬこと。なにとなれば、人は過失に充されてゐるがゆゑに、さうしてその同輩の裁斷者ではあり得ぬがゆゑに。復讐はたゞ復讐をのみそゝのかす。

法第五章――同國人と異邦人との間に區別をなさぬこと。なにとなれば、われ等はすべて一切同じ天父の子供等であるがゆゑに。

——四月四日。

天父——理性——人類愛。

そこにトルストイの『新生活』がある。

佛國——般若——菩薩行。

そこにわたしの『湯印』がある。

文字は異ふけれど、内容は全く同じだ。

トルストイの遺著は、わたしにとつては、要するに六波羅蜜の提唱の一面だ。止觀の二十五方便の新解釋だ。

開權現實、上求菩提下化衆生、——人類のあらんかぎり、そのほかに人間の無上道は決してない。

いかなる國のいかなる言葉も古い。さうして古今東西を一貫した道德は新しい。恒に永遠に新しい。

孔夫子はそこに湯の盤の銘を引いた。

——日に〳〵あらたにして、また日にあらたなり。

それは刻々瞬々に明らかにすべき『明德』だ。

老子にとつては、いふまでもなくそれが『虛無』だ。『玄の又玄、衆妙の門』なる內容を具備した『虛無』だ。

カントの『ライン・フエルヌンフト、』ベルグソンの『エラン・ヴイタル、』ことごとく『妙法蓮華』の別名でないものもない。

存を說いた。キリストは架上に天父の所在を指さしつゝ壯烈に叫んだ。佛國も天父の所在も全く同一なる宇宙そのものゝ內容ではないか？　一切人間の全生活にとつて、何を措いても、何よりもまづ、決して欠くべからざる、兩つながら價値そのものゝ、生活價値そのものゝ第一源泉ではないか？　人はその源泉に觸れ得た時、さうしてそれを掬した時、その時にのみ、はじめて世に處して眞正の幸福が體驗味驗でき得るのではないか？

——四月三日。

法第一章——なにびとをもきずつけぬこと。他人に惡をそゝらぬやうに振舞ふこと。なにとなれば、惡は惡を生むゆゑに。

法第二章——女をむさぼらぬこと。ともに住む女を棄てぬこと。なにとなれば、女を棄て、また女を變へることは、姦淫（デボーシュ）を生むゆゑに。

法第三章——ちかはぬこと。なにとなれば、人はなにごとをも約束出來ぬゆゑに。それはすべて天父の權內にあるがゆゑに、また誓約はたゞ……惡行爲のためにのみ求めらるゝものであるがゆゑに。

法第四章——惡に抵抗せぬこと。侮辱に耐へること。また人々のそれを求むるより以上になすこと。裁（さば）かぬこと。正義にたのまぬこと。なにとなれば、人は過失に充されてゐるがゆゑに、さうしてその同輩の裁斷者ではあり得ぬがゆゑに復讐はたゞ復讐をのみそゝのかす。

法第五章——同國人と異邦人との間に區別をなさぬこと。なにとなれば、われ等はすべて一切同じ天父の子供等であるがゆゑに。

――四月四日。

天父――理性――人類愛。

そこにトルストイの『新生活』がある。

佛國――般若――菩薩行。

そこにわたしの『渇仰』がある。

文字は異ふけれど、内容は全く同じだ。

トルストイの遺著は、わたしにとつては、要するに六波羅密の提唱の一面だ。止觀の二十五方便の新解釋だ。

開權現實、上求菩薩提下化衆生、――人類のあらんかぎり、そのほかに人間の無上道は決してない。

いかなる國のいかなる言葉も古い。さうして古今東西を一貫した道德は新しい。恒に永遠に新しい。

孔夫子はそこに湯の盤の銘を引いた。

――日に〳〵あらたにして、また日にあらたなり。

それは刻々瞬々に明らかにすべき『明德』だ。

老子にとつては、いふまでもなくそれが『虚無』だ。『玄の又玄、衆妙の門』なる内容を具備した『虚無』だ。

カントの『ライン・フエルヌンフト、』ベルグソンの『エラン・ヴイタル、』ことごとく『妙法蓮華』の別名でないものもない。

カインの如く、放蕩息子の如く、群を逸した小羊の如く、四十余年の彷徨は、最後に天父の發見によつて、トルストイの提唱にあつて、わたしに盤石の如き確定的のレーゾン・デートルを與ふることによつて終つた。

* * *

――四月五日。

ル・トライヤスとは正反對に、クロー・ド・キャーニュは極めて平凡な海濱だ。散漫な、とは云へ、のどかな、どことなくひろ／＼とした白い小砂利の波打際には、いたるところに大きな網が干してある。いたるところに小さなさまざまな色彩の漁舟が曳きあげられてゐる。ばかにあかるい日光だ。それがクッキリと濃い青空と海岸に建てつゞく白堊の家々とに反射して、いたくなるほど目をチカ／＼させる。

このヴイラ・マックス・ロロットもその海岸にならんだ家々のうちの一つだが、お寺を中心にした、パン屋、八百屋、荒物屋、珈琲屋、肉屋、さうした商賣屋のかたまつてるところからすこし離れてゐるので、思つたよりは大變靜かだ。恐らく自働車の通らぬためであらう。

芽をふきだしたマロニエが二本、まだ花のさかぬ夾竹桃が二タ株、まつたく氣節のすぎてしまつたミモザが一本、それから石造の屋形井戸、それに接した洗濯臺、そんなものゝ森閑と配置された、全部タヽキの小前庭、小さな鐵格子の出入門、――妻の寢室にあてられた小窓からそれが見下される。鐵門の外の濱邊、濱邊の小舟、さうして夜は遙かに地中海へ突出したアンチーブの岬の燈臺が、ポカリ／＼光る。

隣りも裏もこの土地の漁師たちの住居だ。きたない神さん達がゴチヤ〳〵ゐる。サッパリわからぬこの界隈の言葉で、あちらでもこちらでも、さかんに喋り立てゝゐる。濱には澤山の餓鬼小僧(ガマン)が群をなして遊んでゐる。イヴオンヌは家を外にして、もうそこら中へ友達をこしらへては遊びに出る。

——妾はいゝけれども、あんまりきたない子供が多すぎる。今度お金ができたら、やつぱりもつと小ぎれいなところへ引越したい。

妻はそろ〳〵心配をしはじめた。

孟子の母は子供のために三度居を移したゞけであつた。イヴオンヌの母はその子供のためになんべん引越しをしなければならなくなるであらう？

——四月十日

フランシス・カルコの Perversité を讀んで、わたしは現代のフランスに、最も多量に小説家らしい素質をそなへた小說家の、最も多量に小說らしい。云ひかへれば、人生そのものゝ眞實の描寫に成功した、滅多に得難い一小說を發見した。これでこそ本當の小說だと思つた。

ジョルジ・デュアメルの Confession de minuit 及び Hommes abandonnés を讀んで以來、わたしは久しぶりで人生の核心に觸れたやうに感じた。

*

* *

ロスアンゼルスの篠原夫人が、アメリカへかへられるまへに、その歐羅巴見學の紀念の一つとして、このコット・ダ・ジユールを見物に來られたついで、二三日以前からわざ〳〵妻のところへたづねて來て下さつてゐる。ところが、わたしの家には、殘念ながら夫人をお泊め申して置く寢臺がないので、失禮だけれど、やむを得ず、つい近所の、この別莊の持主なる、ペロン・マルクスといふ魚問屋の二階の一室をおかりしてあげてある。で、朝七時すぎると、夫人はきまつてわたし達の寢坊を起しに來て下さるのが例だ。

恰もけさは夫人お一人で、例の Excursion Car で、ニースからグラッス見物に赴かれることになつてゐたので、わたしはすこしいつもよりは早目に珈琲を入れたが、あいにく肝腎の牛乳がいぢわるくいつもより遲いので、わたし達はぢれッたくそれを待つてゐた際だ。

と、やがて、表の小鐵門の前へ、小さな驢馬車がとまつたのを見つけて、

——牛乳が來た！　と、寢卷のまゝのイヴオンヌが叫びながら、バタ〳〵と暗い階段を降りて行つた。

それから間もなくあがつて來たイヴオンヌが、どうしたのかあやしく物に襲はれた時のやうな表情にすくみながら、眼をまるくしてわたしのそばにすり寄つて默つた。

——どうしたんだい？　ときくと、

——イイ公、いま怖いもの見て來たの。とます〳〵身をすり寄せながら、小さな聲で答へた。

食堂の中も、窓の外も、一ぱいに日光が輝いて、南歐特有の素晴らしい明るさのうちには、イヴオンヌのいふやうなもの〻影は、藥にしたくもありさうに見えなかつた。

——何を見たのだ？　と、かさねてきくと、

——イイ公、怖かつたの……怖かつたから、すぐ逃げて來たの……ルネのパパが……

——ルネのパパが下にゐたのかい？ と、わたしはギクリと或不吉な豫想に脅かされて、いそいできいた。

ルネはわたし達の下のアパルトに住む夫婦者の一人息子だ。本年四歳だそうだが、イヴオンヌの遊び相手にはすこしまだ小さすぎる。がそれでもよく二人は前庭のタヽキの上で、いろんなことして始終遊んでゐる。

ところがゆふべの事だ。夕飯をすまして、篠原夫人がかへつて、それから臺所をかたづけて、いざ床の中へ這入らうとする時、いつもねる前にのむ妻の藥の水をとりに、もう一度臺所へ出かけてゆく途中、下から上つて來るルネのパパにひよつくり出つくはした。(わたしの家の臺所は、そこだけ別に戸外についてゐるので、わたし達の寢室やサロンからそこへ出這入りするのは、一度どうしても階段のとこまで出なければならぬのだ。)

——ボン・ソワ。と云つて、ルネのパパはもう一つ上の階段をのぼつて行つたが、しばらくすると、下りて來て、又。

——ボン・ソワ。と同樣にニツコリ挨拶して、もう一つ降りて、そのまゝ自分のアパルトへ降つた。

わたしは何だか、變だとは思つた。

下の夫婦のだん／＼聲高に何かしきりと云ひ爭ふ聲が、それから夜中の一時頃まで、娓々綿々とつゞいた。わたしたちはうるさくて容易に寢つかれなかつた。

最後に下の妻君は大聲あげて泣きだした。さうして入口の戸をバタンと、どうやら外へ出て行つた氣勢がした。と、ワツと目をさましたらしいルネが、

——ママン、ママン……と、むせび泣きをつゞけながら、前庭のタヽキの上を、パタパタと母親のあとを追ひかけ

て行つたやうな氣勢もした。

それから物音はパタリと靜まつて了つた。わたし達はそのまゝ睡て了つたものだ。

——ルネのパパが一人だけゐたの………と、云ひよどみながらイヴオンヌは答へた。

——ママンもルネもゐなかつたのか?

——パパひとりだよ………窓のリドオのところで、向ふむいて立つてゐたよ………動かないのだよ………上からブラさがつたフイツセルが爰のところへかういふ風にまきついてゐたんだよ………ちツとも動かないのだよ………イイ公こはいからすぐあがつて來たんだよ………

わたし達はギヨツとして顏を見合せた。

しばらくすると、隣の人々が大勢下のアパルトへ集まつた。

——モン・デユウ、モン・デユウ………と人々は口々にのゝしりあつてゐた。

* * *

下のムツシユウはこのごろ政府から三千フランもらつて、それで小間物を賣りあるく商賣をしてゐた人だが、まだろくに商賣もしないうちに、その三千フランをば大方キヤフエに奉公して、とう〳〵二百フランきりになつて了つたからだといふ。乳呑兒をかゝへた、モロツコへ戰爭に行つてる軍人の若い美しい妻君が、わたし達の上のアパルトに住んでゐるが、その人がブルブルふるへながら、もうすこしさつき、さうわたしの妻に話してゐた。

——モウパツサン! と、わたしは心のうちで絶叫した。さうして一生モウパツサンの苦しんだ、いつでも同じにが

いにがい人生のどんぞこに、再び面とむかはされたやうに感じた。

――せつかくいゝ安いうちが見つかつて、やれ嬉しやと思ふと、すぐにこれだ。と、妻はがツかりした。さうしてしきりと氣味をわるがつてゐる。

――今月きりで又引越すとするか。

――さうねえ。こんな不吉な家は一刻も早く出て了つた方がよさゝうだ。上の奥さんもすぐニースへ家をさがしに行くと云つてゐた。

＊　＊　＊

美術と支那の雜感

岸田劉生

○支那の裸體畫問題

近頃の新聞紙上で支那にも裸體畫問題が起つてゐるのを讀んで一寸不思議な氣もし、又興味を生じた。それも近頃の日本によく起る樣なのではなく、裸體畫といふものを全々禁止？しやうといふ可なり極端な發令だから面白い。尤も日本でも明治廿何年か、故黑田淸輝氏が發表した裸體畫に對して可なり極端な排斥、批難が起つた事があるが、これは政府の關り合つた事でなく一般人士たり批評家たちの間に興つた問題であつた。

が、今回の支那の同問題は政府の法令として發せられたものらしく、これに對して、劉何とかいふ多分洋畫家だらうと思はれる人が、反駁の文を公表したりしてゐる。

これについてはいろいろな興味ある問題が考へられる。第一に所謂裸體畫問題といふ事が一つの面白い問題であるがこれは先づ後まはしとして、支那にも裸體畫をかくハイカラ洋畫家がゐて――どころではない、問題を引き起す程に澤山ゐて、さういふ展覽會が開かれてゐるのかなといふ事が一寸、僕の樣な、支那といふと、いゝ「字」や、いゝ南畫や、いゝ篆刻のある國と思つてゐる人間、そのくせまだ〳〵一度も支那へ行つて見る勇氣を持たぬ人間には一寸妙な氣がする。こんな事をいふと支那通の美術家諸君に笑はれるかも知れないが、そして、支那殊に上海あたりは、一方日

本よりずつとハイカラ人種が多くゐて、新思想を持ち、社會問題を考へる眞面目な人種が多く居るのだらうといふ程な事は、考へてもゐるのだが。しかし、いきなり支那油繪で裸體畫が描かれてゐるのだといふ事を聞くと、實感ではどうも一寸、そぐはない樣な妙な感じがする。勿論そのすぐ後で、さもあらうそれがある方が尤もな感じはするのだけれど。

ところで支那のその裸體畫といふのはどんなものであらう。

日本で裸體畫の大家と云へば、裸婦といふ言を發明し流行せしめた梅原龍三郎君、綿細工のルノアールである長谷川昇君、お古いところでは岡田三郎助先生、其他澤山あるが、支那の裸體畫はどんなものかしら。一體支那の油繪なり洋畫といふものを全然知らない私には一寸見當がつかぬが、何かの美術雜誌で一寸見た支那人の油繪はへんに味が大味で、一方稚拙であり乍ら、いやみなところのないそして、南蠻味のどこかにあるものだつた。支那の古い繪に、勿論、仕入繪だが、油畫（ゆか）といふ描方のものがある。グロテスクな筆法、彩色で、半分模樣の樣な荒唐無稽に近い虎や、花鳥がかいてあるものだが、私の見たその支那人の油繪はさういふ、一味の野蠻味のあるものであつたと覺へる。がそれは決して、西洋の近代美術の洗禮をうけたものではなかつた。近頃描かれた青年作家か何かの畫だらうとは思ふが、その稚拙味や、東洋味は、洒落れてやつてゐるのでもなく、意識してやつてゐるのでもない。アンリールソーやセザンヌの追從では決してない。自然に出たものであつた。

一體支那人には、さういふ、民族性がすぐ生きる創造的と云ふか獨創的といふかの力が中に强いところがある樣に思ふ。

だから、一面支那人には、アクのぬけたもの、氣取つたもの、洒落たものは出來ない。勿論中にはハイカラさんもゐて、中々味なことをやるかもしれないが、結局日本人や、フランス人の樣な器用な輕い藝當は出來ない樣に思ふ。二十年

近くの昔、私が洋畫をやりはじめた頃、美術學校に、「劉」何とかいふ支那の留學生がゐて、洋畫をかいてゐたが、その頃にもう、その人はその頃の所謂印象派といふ、强いなまな繪の具をコテ〳〵とぬるやり方の繪をかいてゐた。今度の裸體畫問題の一方の立物である劉さんが、この劉さんかどうかは知らぬが、その後美術學校を出た劉さんは、支那で美術學校をおこしたとか、美術學校の校長?になつたとか聞いた樣に覺へるので、或はその劉さんがこの劉さんかとも思へる次第であるが、その劉さんにしても、「新しい事」が好きなところは如何にも支那人らしいがその繪はやはり鈍重で、アクのぬけない、つまり印象派らしくないものであつた。

ところで支那の洋畫といふものはかう考へて來ると、一面に中々新しがりがありさうに思へ、又一面に支那畫らしい、油繪がどうしても生れてゐさうに思ひ、(と云ふのは、支那人は畫圖や繪の氣分迄、歐風になり切る、器用さや融通さを持たぬから)一面には、今やうやく、アカデミツクな事が出來出して來たところ位にも思へる。

だから、どつち道、支那の裸體畫といふものはさう、洒落たものではあるまい、少くとも吾が梅原龍三郎君の樣なアクのぬけた、面白い裸體畫はみる事は出來まい。しかし、支那人の中で、つまり裸體畫などはかきさうもない支那人の中で裸體畫でもかこうといふのは中々ハイカラ人種の方で、かういふ人たちの事故、中々ハイカラな、西洋くさい裸體畫が生れてゐるかもしれない。

が見て來もしないこれ等の事を考へて要するに下手の考やすむに似たりに墮するし又、どうだつていゝのであつて、

私がこゝに考へて見やうと云ふのは、支那で生れる可き、本當の裸體畫――つまり支那人によつて作らる可き藝術的價値ある裸體畫はどんなものとなるかといふ事である。

裸體畫といふモティフは主として西洋から與つた。日本にも、浮世繪にこれをみる。が、それは極めて特殊な現象で

あつて、西洋の樣に一般的のものでない。

だから日本でも、裸體畫と云へばどうしても日本風俗の味はなく、西洋風の感じがする。ソフアの上に日本人が、洋風の頭で、洋風の布をつけ、バッタの幕を用ひ等してゐる。ところが、古い浮世繪などの裸體畫をみると、實に日本人の女であつて、今日の畫家が心配する樣に日本の女の裸形が決して美術的に不つり合ひのものでなく、むしろ、そこにはギリシヤやローマにない別個の東洋的な美しさがあり、又肉感味がある。が今日の洋畫工でかゝる裸體畫をかくものはなくこの不思議な、リアールの美を知るもの見得るものがない。

東洋婦人の裸形は不思議なミスチック形を持つ、その肌の色、艶も、西洋婦人の樣なものでなく誠に不思議な美しさを持つ、この肌を最も強く線を以て生かした人は歌麿である。西洋陶器の肌と、東洋陶器の肌とのちがひもこれと相似てゐる。

日本にはまだこの、東洋婦人の裸體畫を日本風俗畫として、自然なものとして生かした人はない、梅原君の裸婦圖が近來いちぢるしく、東洋風な味となり、南京古赤繪の樣な味を持つて來たが、これは同君が師宣あたりの、或る種の裸像を深く味識された結果であらう。が同氏の行き方が示す如く、そこにいまだ、リアルとしての日本美人の肌のにほひは描出されてゐない。が同君はリアリストではないのだからこれを以て同君の仕事を議する事は出來ない。

ところで、支那の人の生んだ支那風の裸體畫と云へば、先づ、支那のわ印を考へるよりあるまい、つまり秘戲圖である。支那の秘戲圖は日本のそれに比べて、惡く幼稚で、下手でつまらない。人物の描寫も多少、病的できみが惡く、色の感じも少し野蠻味のある幼稚さと病的さがきみがわるい。かゝる繪になくてならぬ、なやましさなどはあまりない。この點西洋のそれも同じであるが。

かくの如く、支那のわ印しといふものは絵としてつまらぬものでありながら、そこに寫されてゐる、支那婦人の裸像の形は、これを藝術的力量ある人が寫せばたしかに不思議な面白い味となる要素を示してゐる。西洋にはまるでない形、味、頭、顔が大きく、四肢短かく、細く、足は少さく、顔の感じ、髪の形や色、等皆不思議な東洋的ミスチックである。それは西洋風審美から云へば、不釣合で不健康である。しかしその味の如何に面白く、又魅惑である事それは決して本當の不釣合なのではなく、そこには不思議なそして、西洋には求められない底の複雑な均衡がある。

一體、日本の若い畫工は、肉感的と云へば太りじしのくさい様な、山出しのいわゆる相撲女の様な女をかけばいゝと思つて、無やみにもゝなどふくらかし、桃色や赤い色で肉色をかくがあれは肉感的でなくて、肉體的である、第一汚い。ルノアールをはきちがえたのだらうが、本當の裸體畫の持つ魅惑はかへつて本場の西洋のものより、日本の浮世絵の、いはゆるアブナ絵や湯殿絵にある。筆者を忘れたが紅繪（清滿風のもの）で湯殿に立つ女をかいたものゝ女の體の線なり形なりは實になまめいたものである、うで玉子のむいたのゝ様な、すべ〳〵した、中肉のしまつた肌の味などは單純な線で實によく表はされてゐる。ルーベンスもルノアールも遠く及ばない。チ、アンのあるものに稍これに近い裸女のなまめきがある。

支那美人の裸形も、決してルーベンスやルノアールの様に、まして今日の日本人の裸體畫の様な畫圖として描かる可きものではない。日本婦人とは又ちがつた、へんに大陸的な、一寸した野蠻味のある、それでゐてなやましい、あの玉子色の支那婦人の裸形は、たしかに支那人にとつて、又吾々にとつても面白い又新しいいゝ畫因でなければならない。支那のわ印にあるあの不思議な、裸圖はこれを深い靈妙的觀照によつて、寫したならば實にいゝ支那風俗畫としての裸體畫が生れやうと思はれる。支那の裸體畫問題を思ふにつけその裸體圖のかゝる裸體圖であつたならばと切りに思ふ次

第である。

さて、今度はその裸體畫問題の批判にうつらう、今回の問題の要點は、政府側の言ひ分は「裸形一は、支那の根本道德であるところの、禮敎に反するといふにある。成る程、人の前で肌を露すのみか、かくす可きところをもかくさぬのは無禮であるし、さういふ畫を人にみせるのは失禮かもしれない。

ところでそれに對する劉某氏の答へは、禮敎には反しない。古い佛像等は多く裸形である。裸體は眞の無邪であるといふ樣な意味であつたと記憶する。がこれはどうも少しこじつけである。

がこれはどちらも的をはづれて、云ふ可きことをかくしてゐるからいけないのだ。つまりどちらもこぢつけである。

即ち政府の方では、何も禮敎などを持ち出さず、人に劣情を起さすからイカンと云へばいゝのである。又答者の方では禮敎に反したつてかまはない、藝術と禮敎とはちがふ、禮敎に反したものが必ずしも存在の價値無しとは云はれないとやればいいのに、禮敎に反しないとて、古佛像や何かを引き合ひに出すから徹底しないのである。

が、かういふところが支那流なのかもしれない、尤も、支那では禮敎とかいふものが非常な、一般人民にとつての正義感を呼びさますものなのであつてこれには一言もないではあらう。少くとも輿論を呼びさますのには大きな効力があるのかもしれない。だから爲政者としては、劣情云々で、面倒な議論をするよりも、禮敎でやつつける方が面倒がないのかもしれない、昔の日本で、公方樣をかつぎ出す位の力があるかもしれないのだから、爲政者としてはあながち的はづれでないのかもしれない、しかし、藝術家の側の答の方はどうも的はづれである。藝術家は政策家でないのだから、民衆の輿論ばかりを力にしては困る。政府に反抗して迄も尊さ？ 裸體畫を描かうといふのである。禮敎糞を食へ位の答をしてもいいではないか。私としてはこの場合 むしろ、觀衆の劣情云々でやつて來られた方が、作者として困ると

思ふのである。禮敎でやつて來られたら反對出來ると思へるのである。

こゝで、私は序に、先頃やかましかつた、我國の裸體畫問題について、及び美術としての裸體畫といふものの價値について少しく考へてみやうと思ふ。

裸體畫といふものが全然いわゆる助平根性なしに生れるものであるといふ議論はものの眞にふれない淺薄な考へ方であると私は思ふ。裸體畫は神聖だといふ言はどうも本當には腑に落ちない。藝術が神聖だからといふ、三段論法から云へば、つまり三段目に神聖といふ事にはなるが、いきなり裸體畫は神聖と云はれるとちと首肯出來ない、他に神聖な少くとも猥褻?なる畫題はいくらもあるのであつて裸體畫といふものはむしろ神聖的でないところにその藝術的生命があるのだとも云へる。つまり裸體畫は神聖なりといふ考へ方は、裸體畫、即春畫といふ様な考へ方に對する、藝術家的熱情からほとばしる反語としてなら意味をなすといふに止まると思へる。

裸體畫を描く動機に一々性的要素を感じて畫家が作るといふのではない、とも角も裸體畫といふもののこの世に生れる動機には常に性的要素が多くあると云へると思ふ、さもなくて、チヽアンの肉體は描かれず、ルノアールの豐麗は生れまい。又支那人が今度云つてゐる古佛像にしても、その像が「佛」の像となる以前にあゝいふ様式があつたので、そこには、リンガ、生殖器神等の流れを汲む、性慾的な又は挑發的な神像が先存してゐたものだといふ事を忘れてはならない。尤も印度は熱い國だから、自然描寫としても人像をつくれば半裸的にはなるけれど、だからこの劉某君の禮敎に反しないといふ裸體畫神聖論は當を得てゐない譯である。

が、かう云つたからとて私は一部の人の様に藝術の起源を性的本能なり生殖器神崇拜に持つて行くものではない。藝術の起源に全然それがないとは云へないかもしれないが、そんなことは問題にならぬ程他のものと別な高い本能から藝

術は起つてゐると思ふ、がこれはここの本題ではないから省く。只ここでは裸體畫の動機が性的なところにあるといふ事を云ふ迄なのである。

女の肌なり裸形なりを美しいと見る、其處には勿論、純、審美的要素が多くある。しかし、それのみではない。其處には必ず、性的の蠱惑があり、なやましさがある、それがない、裸形への審美は玉の抔庭なき如きものであらう。ブレークの描いた、アダム・イブの圖は何といふ情のある繪である事か（日本浮世繪の事は、あまりに「情的」だから論ずる迄もあるまい。）

が、美術は、美の術である。必ずしもその取材なり、動機なりが、道徳的でなくても、「美」となり切つたものを、「美」として表し得てゐればいゝのである。そして美は絶對であり、又道徳を超越する。そして、先づ神聖である、しかしその動機なり、その動機によつて別れる美の性質には又自づから高下深淺の差別がある筈である。簡單に云へば、神韻びようぼうたる山水と、浮世繪とは「美」の出てゐる事にかわりなくとも美の性質なり、價値なりに變りがある。美の深さの程度に變りがある。

裸體畫とて、勿論美術として淺い境地にあるものゝみではない、しかし、本當に深い、本當に高い美を表はすには裸體畫はあまり適しないと思はれる。もし、裸體畫をかいて、さういふ深い美を表はし得たとするならばそれはリアリズムとして、形を寫すといふ境地に至つて、はじめて得られる、つまり眞をとらへ得るからであるが、しかし、その時は、浮いた心はとうになくなり、裸體畫ではなく、一個のリアリズムの作品となるであらう。ヴアンエツクのアダム。イブの嚴格さはリアルの持つ嚴格さであつて、其處にはなまめきはなく、多少きみ惡い程の男女の肌の實際感があるこれに對してチ、アンを思ひ、ルーベンスを思ふ時、その描寫の緊密が終に嚴格に至らないところに、裸體畫としての

生命があり、美しさがあるのを思ふであらう。

しかし、それだからとて裸體畫が美術として、高くないものといふ事は出來ない、より高い境地があるにしても、それぱかりが美術ではなく、裸體畫は又裸體畫としての美的價値があり、又深き境地をもつ。

だからこれを排する事は不當である。裸體畫を、この世から追ふといふ事は正に不當である。がしかし、これを展覧し、公衆に見せる事を排するは强ち不當とのみに云はれないと私は思ふ。

私が、彼の裸體畫問題が起つた時、多くの美術家が起つたが、私はこれに敢て加りたいと思はなかつたのには私には私としての別の考へ方があつたからである。

裸體畫も今日では相當に人目に馴れたとは云へ、しかし、彫刻などの如實な形をした全裸體などは素人がみて、へんな氣を起す方が自然である。裸體畫にも大して所謂劣情を起させない様なものがあるがこれは別論である。只、かくす可き處をかくさぬ程度の繪などはこれを公衆にみせるといふ事は如何かと思ふ、これは作者の方で遠慮す可きあらう。劣情を起したつていゝといふ考へならこれは又別である。又この考へ方が强ち不當ではない。劣情を起しつゝも、美しさは美しさとしてみられるのだし、=つまり藝術の鑑賞は出來るのだし、第一裸體畫の美といふものが既に、さういふ感じのないものではないのだから。

しかし、これを爲政者が心配して、つまり一國の爲政上なり、風俗、道德の上から云つて、よくないと心配して、展覧を禁止するのも決して無理ではない。

劣情を起したつていいからみせるといふのも勝手であるが、しかし、それは自分の藝術家としての良心に對してゞあつて、一般社會上の風俗なり道德なりを無視してしまふといふ事は考へものである。實際、春期發動期の學生や、店員

や、何かに五十錢の入場料で、日頃みたくてもみられないものをみせるといふ事はあまりい丶結果にはならない。神經衰弱者を多くするか、花柳病患者を多くするかが落である。緣日で賣る、如何はしい寫眞や繪はがきも、泰西名畫のダイヤナの像も、安く買へれば皆その用材となるのだから。

まして、この禁止に對して、裸體畫は決して劣しいものでないと辯解するが如きは愚である。裸體畫にはたしかに、春畫的要素があるのである。只、美的理解あるものにはそれが藝術的美として味へるから尊いのである。それのないものが助平心だけでみたとて、文句も言へないし、又、みせる方が悪いのである。

描くなと禁ずるのではない、あまり露骨なのだけを、みせて下さるなといふ態度なのである。

政府のする事は何でも後れてゐて、ガン迷不レイだと思ふのがモダーン人種の常識だが、しかし、あれで中々政府の人は後れてゐると言はれる事には臆病なのだから一方中々考へてもゐるのである。

が、何がさて、政府がどうした、かうしたと云ふ様な事に藝術家がさうむきになるのはおとなげない。禁じたら笑つてはづして、仕方がないナアと思へばい丶のである。

支那の裸體畫問題は、多少描くなといふ風なところ迄來てゐるらしいからこれでは一寸困ると思ふ、さうなると一寸戰はねばならぬ人は戰ふのが無理もないと思へる。

○日華展覽會に就て

此頃日本畫家の御歴々と、支那現代の御歴々?との合同展覽會が上野で開かれてゐる。實は暇を得ないでまだ拜見しないが、これに就て私は他の人々の樣に、日支の美術の盛んになる前提として喜ぶわけには行かない。日本の日本畫家は

もう、駄目である。これはどうならうと、駄目なものは駄目で仕方がないからかまわないが、この爲めに私は支那の畫家が頽落させられてしまふ樣な氣がして氣の毒でならない、勿論、さう云へば、支那の南畫だつてもう凋落の域には充分達してゐる、否、沈湎してゐるのであらうが、しかし、日本の日本畫の樣に「畫」でなくなつて了つてゐる樣な事はない。

即ち、會場藝術、年に一遍藝術、目先の新し藝術、素人感心サセ藝術、新聞雜誌藝術、チヤナリズム藝術、には支那の畫はなつてはゐない。

宋元明はしばらく問はぬ、明末淸初のあの潑剌とした、いゝ味の生きた南畫は今日の支那人の筆に求められないにしても、なほ、正統の味、自から樂しむ味、人に見せてもみせなくてもいゝといふ所から來る味、山氣や當氣のない正直さ、とも角も東洋畫として支那畫として別に異を樹てないで、コツ〳〵やつてゐる味などは、さすがに、大國の支那、展覽會や畫壇や、新聞の美術雜報などと小うるさくない支那だけの事はあると思つてゐたが、今度の會で、これがこわされはしないかといふ心配がどうも私にはするのである。

尤も支那人といふ人種は中々自信が强いから、一面大丈夫かとも思ふが、しかし、「勢」ひといふものゝ力は强い。

支那の人の描いた繪が、會場にかゝつてゐる寫眞をみたが幸にして、皆わりに小品（畫箋紙全紙が一番大きさう）で、日本の展覽會の樣に幅員でおどかさうとする樣な事なく、日頃かいてゐる繪を出したといふ味がしてゐたのはうれしかつたが、しかし、それがあの大きなバラツクじみた會場の中で、（少くとも部屋ではないから）日本人の器用で、人を驚かす樣な繪とならべられる時、支那人の繪はいかにも、拙く、素人じみてみへたり、又、少くとも、會場バエがしないといふ事は人々の感ずるところではあるまいか、支那の人々が、このイヤな、惡い、日本の會場藝術の感化をうけないと、誰が斷言出來やうか、大觀氏のいたちの圖を寫眞でみたが如何にも素人の感心しさうな器用なものであるが、

畫として少しの力もない。しかし今の支那人の畫家でこれが畫として、少しの力もないものだ、氣品のないものだと斷言出來る人が幾人あらうか。

私は東京日日新聞紙上であつたかと思ふが支那の畫家の一人と思はれる人が、日本人側の出品を批評してゐるのを讀んで一層この私の心配をうら書きされた樣に思ふ。同紙上に日本側の作家の支那側への評が出てゐたが、これは又恐の骨頂であつた。一體私は大きな展覽會といふものが決して美術をよくするものでなく、かへつて毒するものだといふ考を持つてゐるが、今度の日華合同展覽會の事を見聞して支那美術家の爲めに心配し、又惜しく思ふものである。

○支那の民族美術工藝の味

支那の土民の作るおもちやや、安物の茶椀その他の陶器、ぬりもの、等には一種別な稚拙感の美しさがある。不器用でゐながら、いやな意識や、工人的いやしさや、氣取つたしかも低級な趣味やがなくて、只盲目的に傳習的に、無智に造つてゐるそれ等のものの味はへんに美くしい。

これは個人の生半可な意識が加はらないから、つまり民族全體の力で作るのであるからこの美しさが出るのだと思ふ。

一體、個性的作品(即ち、繪や、彫刻、文學、等)でないところのものは、民族の心の美しさが出る事によつて、個性的作品にない美しさを出す。

ところが、今日の日本ではその民族的であつてもいいものを、個性的の作家にやらせたり、又民族的作者、即ち「職人」が、個性的作家を氣取つたり、眞似たり、又、さう注文されたりするので、あのへんに稚拙で美くしかつたマッチ

のペーパーでさへ、だん〳〵面白い味のものがなくなり、いかにも圖案でムいといふ様な、低級な新しがりのものが生れて來たりしてゐる。さもない時は只々手先のきれいごとのみ心懸ける職工的作品に墮するか、――(淸水燒の如き)――體さういふ點日本人は小才が利きすぎるところがある。

日本でも昔の大工の作つた家や、又橋などには別にへんな野心的要素がなく、只々盲目的に作つたところから來る民族文明の全體的な力があつてへんに根强く、美しいものであつたのだが、今日の橋や、建築はどうであらう。

いわゆる支那雜貨店へ行くと、實にフダンづかいに持つて來いのいゝ茶椀や何かゞある。支那はさすがに大きいところがある。

しかし、そのかわり、日本文明の生んだ「茶」「能」「芝居」「浮世繪」「俳句」「川柳」「さび」「庭」「茶室」「寺」かういふものは支那には一寸生れ難い。

尤も宋時代の支那人は實に一面纎細な、銳く細かいところがあり、同時に深い〳〵人種だつたが、これを思へば世界の中で、宋人が一番文明人として、完成されたものであつたかもしれない。

○淺野侯邸の宋元畫展覽

淺野侯邸の宋元の名品の展覽を私は忘れる事が出來ない、この催をして下さつた淺野さん若主人に私は心から感謝してゐるものである。

この展覽會によつて私は、骨法畫の眞諦であるといふ事、傅彩は如何に單純でも骨法によつて生かされるといふ事を一層よく知り、あわせて今日の日本畫工の仕事の頽落が骨法の價値を知らぬところから來てゐる事をしみ〴〵と感じ

させられたがこれ等の事の感想は又他にゆづるとして、こゝでは其處にならべられた、二三について少しく語らうと思ふ。

徽宗皇帝の鶉圖は何と云つても神品であつたが、私はそれとゝもに羅窓の雞を實に立派なものである思つた。神品というのはかういふものだと思つた。その深さ、その崇嚴さ今の日本畫工は手工の技により、他人にくわだてられぬ事をしてそれを藝だと思つてゐるが、手工の點から云へばこれ等宋畫は誠に簡單である。殊にこの羅窓の雞圖の如きは、筆を以てくまどり、顔にわづかに、細描をしたに止まる。がしかし、それがかくの如くに描けやうか。

それから、宋畫の林檎の花の畫がよかつた何といふ明るい、平淡な繪であらう、何の奇もない。又覇もない、彩色は別に何度も何もやつてあるのではない、相當の濃彩ではあるが、只骨法に從つて色をうづめた丈けで只手でするだけなら誰れにでも出來る事である。しかし、何といふ氣品であらう。よく見る時それは實に、深い心境から生れた、素直な用筆である。深い洞察と觀照から生れた靜かな寫生である、その骨法の靜かさ、深さそして强さ。

任月山の馬もよかつた。馬の描寫もいゝが、馬をつないである柱の線の、ふくよかさと强さには感心した、只の二本の線である。何といふ、畫家らしい、心であらう。そして深い心境であらう。

用田の栗鼠はあまり好まなかつた。何とかいふ人の魚の圖も好まなかつた。用田の栗鼠は少し器用すぎて、墨や筆が浮いてゐて、靜かでない、魚の圖は少し愚鈍の感じがし、しまりがなかつた。

淺野さんにはまだ／＼名品が多い由、又今秋あたりみせて下さるといゝとつく／＼思ふ。

序ながら日本でいわゆる唐畫のいゝのを持つてゐられるのでは淺野さんなどは筆頭であらう。其他黑田侯の筆耕圖、益田男、根津氏、原富太郎氏など中々羨ましい事である。いつか、かういふものを一堂にあつめて、みせる機會はないかと思ふ。かういふ展覽會なら私も展覽會有益論者になるのだが。

大分永くかいた。この邊で筆を擱かう。

大正十五年六月廿七日夜

明代の通俗短篇小說

鹽谷溫

明代流行の小說を蒐めたものに「三言」——喩世明言、警世通言、醒世恒言がある。皆、短篇小說集である。喩世明言は二十四卷、二十四篇の物語が收められて居る。又の名を重刻增補古今小說といふ。二十四篇の物語のうち二十一篇が古今小說に出て居るからである。古今小說といふのは四十卷、四十篇の物語集である。四十篇から二十一篇だけとつて而も增補といふのは、殘りの三篇をつけ加へたからである。この三篇はその二篇をのちの恒言と一篇をのちの通言と重複する。抑も古今小說といふのはその題言に、

小說如三國志水滸傳稱巨觀矣其有一人一事可資談笑者猶雜劇之於傳奇不可偏廢也本齋購得古今名人演義一百二十種先以三之一爲初刻云　天許齋藏版

とあるが如く購ひ得た一百二十種の三分の一を刻したもので、殘りの四十種が通言になり、更に殘りの四十種が恒言となつたわけである。醒世恒言に題して

本坊重價購求古今通俗演義一百二十種初刻爲喩世明言二刻爲警世通言海內均奉爲鄴架珍玩矣玆三刻爲醒世恒言種々典實事々奇觀總取木鐸醒世之意幷前刻共成完璧云　藝林衍慶堂謹識

といふによつて知られる。されば明言二十四篇の三篇が恒言と通言に重複することは自づとうなづかれるであらう。古今小說の序に

按南宋供奉局有說話人如今說書之流……茂苑野史氏家藏古今通俗小說甚富因賈人之請抽其可以嘉惠里耳者凡四十種畀爲一刻余顧而樂之因索筆而弁其首　綠天館主人題

といひ、喩世明言の序またこれをそのまゝに採る。その題言には、

綠天館初刻古今小說。十種見者侈爲奇觀聞者爭爲擊節而流傳未廣閣置可惜今板歸本坊重加校訂刊誤補遺題曰喩世明言取其明白顯易可此開　人心相親於善未必非世道之一助也　萩林　衍慶堂謹識

とある。茂苑の野史氏の藏書が購はるゝこと一百二十種而して先づその三之一が刻されて古今小說が世に出でついで喩世明言に至つた道程は右の引用文のいふとほりである。讀む人には自ら顯らかであらう。

警世通言は題して、

自昔博洽鴻儒兼採稗官野史而通俗演義一種尤便于下里之耳目奈射利者而取淫詞大傷雅道本坊耻之玆刻出自平々閣主人手授非警世勸俗之語不敢濫入庶幾木鐸老人之遺意或亦士君子所不棄也

といひ天啓甲子（四年）豫章無礙居士の序がある。前にも云ふとほり四十卷、四十篇の物語から成立つて居る。目錄を見るとき、第四卷拗相公飲恨半山堂に京本通俗小說の拗相公を第七卷陳可常端陽遷化に同菩薩蠻を、第八卷崔待詔生死寃家に同碾玉觀音を、第十二卷范鰍兒雙鏡重圓に同馮玉梅團圓を、第十四卷一窟鬼癩道人除怪に同西山一窟鬼を、第十六卷張主管志誠脫奇禍に同志誠張主管を想起する。

醒世恒言は四十卷、題言は前に引くとほり、序文には次の如く讀まれる。

明代の通俗短篇小說

鹽谷 溫

明代流行の小說を蒐めたものに「三言」——喩世明言、警世通言、醒世恒言がある。皆、短篇小說集である。喩世明言は二十四卷、二十四篇の物語が收められて居る。又の名を重刻增補古今小說といふ。二十四篇の物語のうち二十一篇が古今小說に出て居るからである。古今小說といふのは四十卷、四十篇の物語集である。四十篇から二十一篇だけとつて而も增補といふのは、殘りの三篇をつけ加へたからである。この三篇はその二篇をのちの恒言と一篇をのちの通言と重複する。抑も古今小說といふのはその題言に、

小說如三國志水滸傳稱巨觀矣其有一人一事可資談笑者猶雜劇之於傳奇不可偏廢也本齋購得古今名人演義一百二十種先以三之一爲初刻云　天許齋藏版

とあるが如く購ひ得た一百二十種の三分の一を刻したもので、殘りの四十種が通言になり、更に殘りの四十種が恒言となつたわけである。醒世恒言に題して

本坊重價購求古今通俗演義一百二十種初刻爲喩世明言二刻爲警世通言海內均奉爲鄴架珍玩矣玆三刻爲醒世恒言種々典蹇事々奇觀總取木鐸醒世之意并前刻共成完璧云　蓺林

衍慶堂謹識

といふによつて知られる。されば明言二十四篇の三篇が恒言と通言に重複することは自づとうなづかれるであらう。古今小說の序に

按南宋供奉局有說話人如今說書之流……茂苑野史氏家藏古今通俗小說甚富因賈人之請抽其可以嘉惠里耳者凡四十種畀爲一刻余顧而樂之因索筆而掛其首　綠天館主人題

といひ、喩世明言の序またこれをそのまゝに採る。その題言には、

綠天館初刻古今小說。十種見者侈爲奇覯聞者爭爲擊節而流傳未廣閣置可惜今板歸本坊重加校訂刊誤補遺題曰喩世明言取其明白顯易可此閈　人心相觀於善未必非世道之一助也　藏林　衍慶堂謹識

とある。茂苑の野史氏の藏書が賅はることゝ一百二十種而して先づその三之一が刻されて古今小說が世に出でついで喩世明言に至つた道程は右の引用文のいふとほりである。讀む人には自ら顯らかであらう。

警世通言は題して、

自昔博洽鴻儒兼採稗官野史而通俗演義一種尤便于下里之耳目奈射利者而取淫詞大傷雅道本坊恥之茲刻出自平々閒主人手授非警世勸俗之語不敢濫入庶幾木鐸老人之遺意或亦士君子所不棄也

といひ天啓甲子（四年）豫章無礙居士の序がある。前にも云ふとほり四十卷、四十篇の物語から成立つて居る。目錄を見るとき、第四卷拗相公飮恨半山堂に京本通俗小說の拗相公を第七卷陳可常端陽遷化に同菩薩蠻を、第八卷崔待詔生死寃家に同碾玉觀音を、第十二卷范鰍兒雙鏡重圓に同馮玉梅團圓を、第十四卷一窟鬼癩道人除怪に同西山一窟鬼を、第十六卷張主管志誠脫奇禍に同志誠張主管を想起する。

醒世恒言は四十卷、題言は前に引くとほり、序文には次の如く讀まれる。

此醒世恒言四十種所以繼明言・通言而刻也明者取其可以導愚也通者取其可以適俗也。恒則習之而不厭傳之而可久也之刻珠名其義一耳

天啓丁卯（七年）中秋隴西可一居士題白下棲霞山房

物語四十篇、第二十三卷、金海陵縱慾亡身に、京本通俗小説第二十一卷金主亮荒淫を、第三十三卷十五貫戯言成巧禍に同第十五卷錯斬崔寧を注意するか。

まことに「三言」は遠く宋元の舊作より近く明末盛行の新作に至るまで、一百二十篇の蒐集である。短篇小説界の寶庫といふべきではあるまいか。吾人はかくの如き寶庫をよく今日にのこした三言の編者彼の馮夢龍に多大の感謝をはらふべきであらう。

馮夢龍字猶龍、呉縣人、崇禎中由貢生官壽寧縣知縣官。（四庫提要、春秋衡庫の條參照）、また龍子猶ともいひ、墨憨齋と號す。春秋衡庫の他、別本春秋大全、智囊、智囊補、古今談概、等あり。墨憨齋定本傳奇三種、──蘆江記、新灌園、酒家傭──わが宮內省圖書寮の藏する傳奇四十種に收むる所。內閣文庫に見る中興偉略の序、七十二老臣馮夢龍の行は彼が萬曆の初年に生れ、民末憂國の士なるを示して居る。

三言に次いで短篇小説を集めたものに「拍案驚奇」がある。初刻三十六卷、序に云ふ、

宋元時有小説家一種多採閭巷新事爲宮闈承應談資語多俚近意存勸諷……龍子猶此所輯喩世等諸言頗存雅道時著良規一破今時陋習如宋元舊種亦被蒐括殆盡……因取古今來雜碎事可新聽睹佐談諧者演而暢之得若干卷卽空觀主人題於浮梅。

二刻三十九卷、宋公明鬧元宵雜劇一卷を附錄とする。序にいふ。

即空觀主人者其人奇其文奇其遇亦奇因取其抑塞磊落之才出緒餘以爲傳奇又降而爲演義此拍案驚奇之所以兩刻也。
壬申（崇禎五年）冬日睡鄉居士題并書。

自序にいふ。

丁卯之秋（天啓七年）……偶戲取古今新聞一二奇局可紀者演而成說聊舒胸中磊塊……同儕過從者。索閱一篇竟必拍案曰奇哉所聞乎。爲書賈所偵。因以梓傳請遂爲鈔撮成編。得四十種（僅に三十六篇を收む）……其爲柏梁餘材。武昌剩竹。頗亦少。意不能恝聊復綴爲四十則其間說鬼說夢亦眞亦誕然意存勸戒不爲風雅罪人後先一指也。
崇禎壬申（五年）冬日即空觀主人題於玉光齋中。

即ち空觀主人が凌濛初なること、宋元戲曲史に王國維の指す所、四庫提要聖門傳詩嫡家の條によれた、凌濛初字稚成烏程人。また國門集の條にいふ。於詩末附雜文數篇蓋歷蹭場屋之時故頗多抑鬱無聊之作云。

喩世明言を古今小說にかへて、通言、恒言とあわせて三言。更に拍案驚奇の兩刻を加へて、すべて五種、まことに長篇小說の四大奇書、三國志、水滸傳、西遊記、金瓶梅に相對する短篇小說の五大寶庫といふべきであらう。

此の五大寶庫のうち中國小說史略の著者魯迅氏の見るもの恒言及び初刻拍案驚奇の兩種である。而してその餘の古今小說、（重刻されて喩世明言、）及び二刻拍案驚奇のわが內閣文庫に藏せられ、警世通言の宮內省圖書寮に藏する船載書目によつて、その題言、序文、目錄の讀まるゝことは、まことに我國にあつて支那の小說を硏究するものにとつて、何ものにもかへがたい歡びである。繁雜に厭してこゝに多くの引用をした點はこの歡びを海外に分たんが爲めの微意に他ならない。

百二十種の古今小說及三言、三十六種の拍案驚奇、三十九種の二刻拍案驚奇、すべて百九十五、こゝにそれらの拔

梓、今古奇觀が生れ出づる運命がある。今古奇觀四十卷、節にいふ。

至有宋孝王以天下養太上。命侍從訪民間奇事。日進一回。謂之說話人。而通俗演義一種乃始盛行。……墨憨齋增補平妖。窮工極變。不失本末。其技在水滸・三國之間。至所纂喩世・警世・醒世三言。極摹人情世態之岐。備寫悲歡離合之致。……即空觀主人壺矢代興。爰有拍案驚奇兩刻。頗費蒐獲。足供談麈。合之共二百種。卷帙浩繁。觀覽難周。……而抱甕老人。先得我心。選刻四十種。名爲今古奇觀。

姑蘇咲花主人漫題

いかなるものを何れの書から採つたか、左に表を示さう、

今古奇觀

1	三孝廉讓產立高名	恒言2	
2	兩縣令競義婚孤女	恒言1	
3	滕大尹鬼斷家私	古今10	明言3
4	裴晋公義還原配	古今9	明言13
5	杜十娘怒沉百寶箱	通言32	
6	李謫仙醉草嚇蠻書	通言6	
7	賣油郎獨占花魁	恒言3	
8	灌園叟晚逢仙女	恒言4	
9	轉運漢巧遇洞庭紅	初拍1	
10	看財奴刁買冤家主	初拍35	

11 吳保安棄家贖友　古今8　明言21
12 羊角哀舍命全交　古今7
13 沈小霞相會出師表　古今40
14 宋金郎團圓破氈笠　通言22（宋小官…）
15 盧太學詩酒傲公侯　恒言29
16 李汧公窮邸遇俠客　恒言30
17 蘇小妹三難新郎　恒言11
18 劉元普雙生貴子　初拍20
19 俞伯牙摔琴謝知音　通言1
20 莊子休鼓盆成大道　通言2
21 老門生三世報恩　通言18
22 鈍秀才一朝交泰　通言17
23 蔣興哥重會珍珠衫　古今1　明言4
24 陳御史巧勘金釵鈿　古今2　明言2
25 徐老僕義憤成家　恒言25
26 蔡小姐忍辱報讎　恒言36（蔡瑞虹）
27 錢秀才錯占鳳凰儔　恒言7

28	喬太守亂點鴛鴦譜	恒言 8
29	懷私怨狠僕告主	初拍 11
30	念親恩孝女藏兒	(未攷)
31	呂大郎還金完骨肉	通言 5
32	金玉奴棒打薄情郎	古今 27
33	唐解元玩世出奇	通言 26 (出奇玩世)
34	女秀才移花接木	二拍 17
35	王嬌鸞百年長恨	通言 34
36	十三郎五歲朝天	二拍 5
37	崔俊臣巧合芙蓉屏	初拍 27
38	趙縣君喬送黃柑子	二拍 14
39	誇妙術丹客提金	初拍 18
40	逞多財白丁橫帶	初拍 22

今古奇觀は夙に日本に傳つたものらしい。今日大本はさうでもないが、通行小本に至つては種々の版式のものがそこらの古本屋にころがつてゐる。之をみてもいかに江戸時代に此の本が我國で盛に讀まれてゐたかゞ判る。故に之が飜刻があつてもよささうだが、事實は全部の飜刻より三言拍案驚奇と共に抜萃飜刻が行はれた。即ち小說精言小說奇言小說

粹言が是である。粹言は四卷五冊、寛保三年京都風月堂莊左衞門刊、岡白駒の
屬者有粹小說者。全譯以付之。又別爲之譯義。といふ自序があり、
小說亦一家已蔚非胡果于下體。海舶攸貢。年以百估。俚言駭人。徵直爰居之鐘鼓也。龍州先生所譯。意義渙釋。宛乎
如面聽西人謦欬。爰壽梨棗。以廣其傳。据此蔪之。三隅其庶矣。風月堂主人澤文拱識。
といふ題言が附いてゐる。收むる所四種、

十五貫戲言成巧禍（恆）
喬太守亂點鴛鴦譜（恆・觀）
張淑兒巧智脫楊生（恆）
陳多壽生死夫妻（恆）

句讀返點送假名が施されてゐる。
次が小說奇言五卷五冊、寶曆三年京都風月堂莊左衞門刊、

唐解元玩世出奇（通・觀）
劉小官雌雄兄弟（恆）
滕大尹鬼斷家私（古・明・觀）
錢秀才錯占鳳凰（恆・觀）

の四種に西湖佳話の梅嶼恨蹟一篇が加つてゐる。
岡白駒は支那の俗語に通じてゐた人である。此關係の著書は外にもある。ところが、第三に出た小說粹言五卷五冊に

は

余誦習暇日。耽小說家書。賞心觸感。隨抄隨譯。裝爲十回。篋藏帳中。以其汰淫媟猥褻。題日粹言。頃日命剞劂。以廣其傳。

寶曆丁丑（七年）三月既望奚疑齋主人書。といふ序がある。奚疑齋は白駒かとも思はれる理由がないでもないが未攷しておく。本書は寶曆八年京都風月堂莊左衞門刊、同じ本屋で出たらしい（悉く初印本を見る機會がないから少し疑はある）三書として、これだけが奚疑齋となつてゐるのが白駒の著かどうかといふ疑の存する所である。既刊五卷、

王荊公三難蘇學士（通）
轉運漢巧遇洞庭紅（拍・覯）
呂大郎還金完骨肉（通・覯）
包龍圖智賺合同文（拍・覯）
懷私怨狠僕告主翁（拍・覯）

奧附に未刊のものとして、

拗相公飲恨半山堂（通）
兩縣令競義婚孤女（恆・覯）
業小舍拚生覓佳偶（通）
杜十娘怒沉百寶箱（通・覯）
白娘子永鎭雷峯塔（通）

の五篇が擧つてゐるが、此は完く未刊らしい。今便宜上假に出處を略稱で表しておいたが、これとて正確には直接に何から取つたか、對校して一つを擧ぐべきであるが、此考證はあまりに專門的になるから略しておく。たゞ題の文字が少し異つてゐるのがあるから、それなどは煩しい對校がなくとも大體判るけれど、それも今は避けて、其話の載つてゐる民國の小說の名を附しておくことにする。

明治になつて服部誠一が今古奇觀の

三孝廉讓產立高名
杜十娘怒沈百寶箱
李汧公窮邸遇俠客
王嬌鸞百年長恨

を擇んで、原文に句讀返點送假名を施して、明治十六年、勸懲繡像奇談第一篇として二冊本にして公にした。

江戶時代には支那の小說を假名交りにしたものがかなり行はれた。此系統に屬するものとしては先づ通俗醒世恆言四卷四冊がある。

小水灣天狐貽書
吳衙內鄰舟赴約
一文錢小隙造奇冤
施潤澤灘闕遇友

を收め、寬政二年太田南畝の序と石川雅望の

匯書恒言本。多屬誠不可讀者。今略讀其可讀者。而譯以國字。先是西播岡氏譯戰奇言・精言諸書者。不復載也。

などといふ跋文がある。大阪加賀屋彌助刊。殘りの三十六種は近刻とあれど出來なかつたらしい。此本は燒版とかで傳本があまり多くない。巻頭に六樹園譯とある本と、逆旅主人譯とある本とあるがにどちらしても石川雅望の譯であることは確である。大本に通俗小說奇事といふ題簽のついてゐる本があるが、此が初印であらうかどうか。

通俗古今奇觀五巻五冊。棣園主人序、淡齋主人自序、文化十一年尾陽風月堂孫助刊。

莊子休鼓盆成大道

趙縣君喬送黃柑子

賣油郎獨占花魁

を收めてゐる。

通俗赤繩奇緣四巻二冊、寶曆十一年京都錢屋三郎兵衞刊。無懷散人序、近江贅世子（西田維則？）譯。此は賣油郎獨占花魁を更に八巻に分けて書き下したものである。此賣油郎の一篇は最も我國で流行したと見え、岩崎男爵の靜嘉堂文庫にも月池醒雲庵主の譯といふ通俗新裁綺史といふ假名交りの稿本がある。八巻に分れ、前書と各巻の名は異るが、此も此話の譯である。之を一層通俗化したのが螢本賣油郎で、此は日本の話に飜案したものである。こんな飜案物を今古奇觀系統から捜せばいくらあるか判らない。此類には今は觸れないがとにする。

江戸時代の日本の小說には種を支那小說から採つたものは數限りない。それであるのに我國の江戸文藝の研究者が本源をしらべないで何やかと述べたてゝゐるのはどうであらうか。いくらか出處が世に知られてゐるが、それ以外の多くを調べあげるのはその方々の御仕事として期待してやまない。

賢くなる法

里見弴

自分自身に嘘をつかない。——これくらゐ大切なことはないと思ふ。誰でも云ふことだし、私も可なり舊くから心懸けて來たことで、更に事新しくはないが、機縁あつて、つい二三日前にもつくづく痛感し、ちよつと書いてみる氣になつた。まつたく、これこそは、百行の基、とも云ひたいほどだ。

人として、誰しも忽諸にしてよからう筈のことではないが、殊に藝術の士などで、その點の怪しいのは、一生ものにならない。自分自身を詐ることは、同時に人を詐ることだ。いかに惡意から發してゐないでも、それは責めらるべきだ。「人はごくいゝんだけれど……」よく、さう云ふよりほかにないやうな場合に出ツくはすものだが、善良な氣持から、何かしら厄介ごとが生じて來るのは、みんな自分自身に對する眞實の不足が因をなしてゐる。以前には、さういふことも、無邪氣といつて許されたが、これからは、人々の間で、十分そこまで注意を拂ひ合はなければいけない。

これを、もう少しいかつめらしい言葉で云へば認識の慥さだ。自分自身を手ぬるく扱つてゐて、外界への認識が深められやう筈はない。自分自身を知る、本心を捉へる、そこに一點の嘘も間違ひも許さない、——その認識の慥さが、自分にも人にもほしい。今の世の中に持ち込んで、右から左にすぐ役に立ち、そして何より一番効果の多いのは、恐らく

これだらう。世の中が悠長だつた頃には、善良といふ美徳だけでもすんだが、これからは、その上にもう一つ、認識の聰さを加へたい。そこに欠陥のあるやつはいつさい相手にしないことにして了ひたい。さうすれば、いま賢がられてゐるやつらで、随分のけ者にされさうなのがある。「面を洗つて出直せ」といふ言葉があるが、もし「自分自身に正直になつて出直せ」といふのを標語にした新時代が來るならば、一體が保守的な私だけれど、喜び勇んでそのお仲間入りはしよう。——さういふ世の中では、一切の贋ものが通用しない。これは、ちよつと想像しただけでも氣持がいゝ。

賢愚といふことは、必ずしも生れつきの性によるのではない。

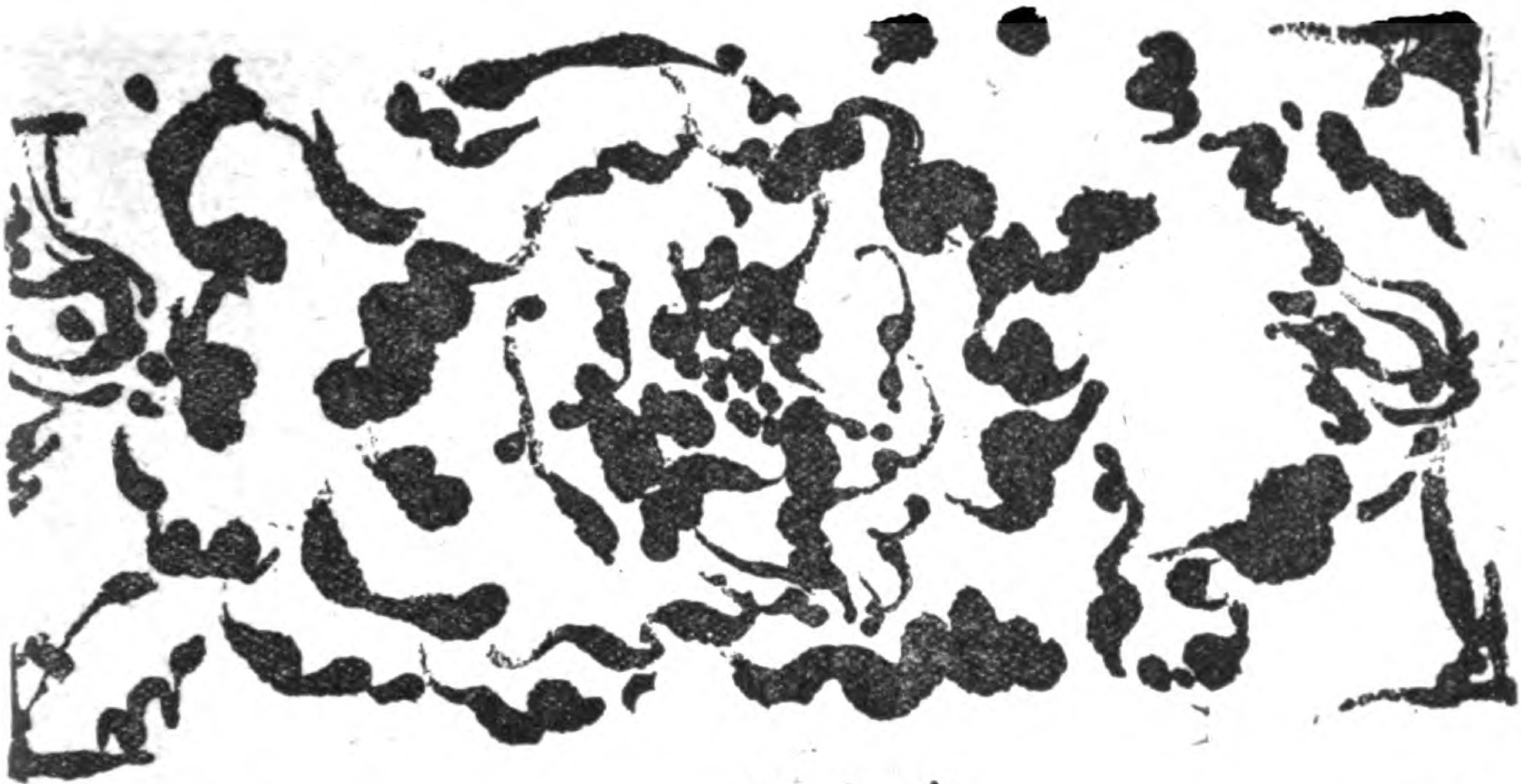
今の世の中を、いつぱしの利口者で通つてゐる、自分自身におそろしく手ぬるい馬鹿も澤山あるし、今の世の中からはのろま扱ひをされながら、一歩づゝしつかり進んで行かうとしてゐる賢者も少くはなからう。

どんな時にも、自分自身の本心をはつきり見ぬいてゐる、——さういふ、ほんとうに賢い眼をもつやうになるためには、たゞ自分で自分をごまかさない癖をつけさへすればいゝ。嚴しくそのことに心を入れて、四五年も癖をつければ、見違へるほど賢くなるだらう。だから、少しふざけた言ひ廻しをすれば、新時代の賢者たる、また易い哉、だと私は思つてゐる。

但し、その心懸は、よつぽど嚴しく守らなければいけない。何故ならば、嘘といふやつは、黴菌のやうな繁殖力をもつてゐて、一厘ほどの嘘も、見る間に一寸となり、一尺となり、一間となり、一里となつて了ふ。そのうへ、人についた嘘なら、あとでばれた時に、あいつは嘘つきだと云つて責められ、恥ぢて悛める機會もあるが、自分自身についた嘘は、自分さへ騙されてゐる氣になれば、一生涯でもばれつこはないのだ。それがどしどし繁殖して行くのだから、たまさか眼を内に向けても、我ながら汚らしくつて、永くは見詰めてゐられなからう。自然そんなこともしなくなる。——無反省が馬鹿の一大要素となる所以だ。

一せつ自分自身に嘘をつかない、「――口で云へば至極簡單だが、やつてみると相應骨は折れる。が、それにしても、一生を棒にふるかふらないかの別れ目と思へば、もうちつと辛抱がしにくゝつてもいゝ筈だ。

若年無經驗の私のやうなものが云ふのでは、誰も相手にしてくれないかも知れないが、ほんとにこれは、政治家にも、軍人にも、實業家にも、學者思想家にも、教育家、宗教家にも、勞働者にも、御婦人方にも、無論同業の方々にも、誰かれなしに、本氣でお勸めしたい方法なのだ。「惡筆矯正器」といふやうな「器」も要らず、講習錄も買ふに及ばない。元手要らずに賢くなれる新發明の………、と云ひたいが、決して「新」なことはない。わざと名を出さないが、二三千年前から今日まで、大きな聲で云ひ續けてゐる人もある。が、「眞」は「新」に通じて、これはいつの世が來ても古びの來ない言葉だ。それだけに、いつの世が來ても、誰かれなしに、一人殘らず採用するといふ時もなささうだ。無理にもそれを想ふのがつまり私の、ごく安値なユトピヤとか云ふものだらう。



返り討

菊池寛

殿の鷹狩のお伴をして來た健部新兵衛は、同僚六七人と、晝食の割籠(わりご)を開いてゐたが、それを喰ひ了ると、急に後架に上りたくなつて來た。それで、周圍を見廻すと十間ばかり向ふに、一軒の百姓家があるのを見つけたので、そこへ後架を借りに行つた。

七十を越したしはくちやの爺が、土下座をして迎へたので、

「はゞかりを借りるぞ」

と云つて土間から裏の方へ廻つた。裏口を出ると、すぐその前に後架があつたが、思ひがけなく其處の手水鉢で、同僚の左近太兵衛が、手を洗つてゐた。彼の袴が、すぐ傍の桃の木の枝にかゝつてゐる。新兵衛を見上げた左近が

「貴殿もか。」と、云つて苦笑した。

新兵衛も苦笑で答へて、すぐ袴を取つてから、後架へは入つた。

左近は、手早く袴をつけると、出て行くらしい氣勢がした。

と、突然家の裏庭あたりから激しい左近の叫聲が、聞えたかと思ふと、

「親の敵、覺悟せい！」

と、絶叫する青年の聲がひゞいて來た。

しやがんでゐた新兵衛は、自分の事ではないかと思はずぎくりとして、尾籠の姿のまゝ、飛び出さうとしたが、武士のたしなみ、用を足してからと思つたので、じつと氣を落付けてゐた。

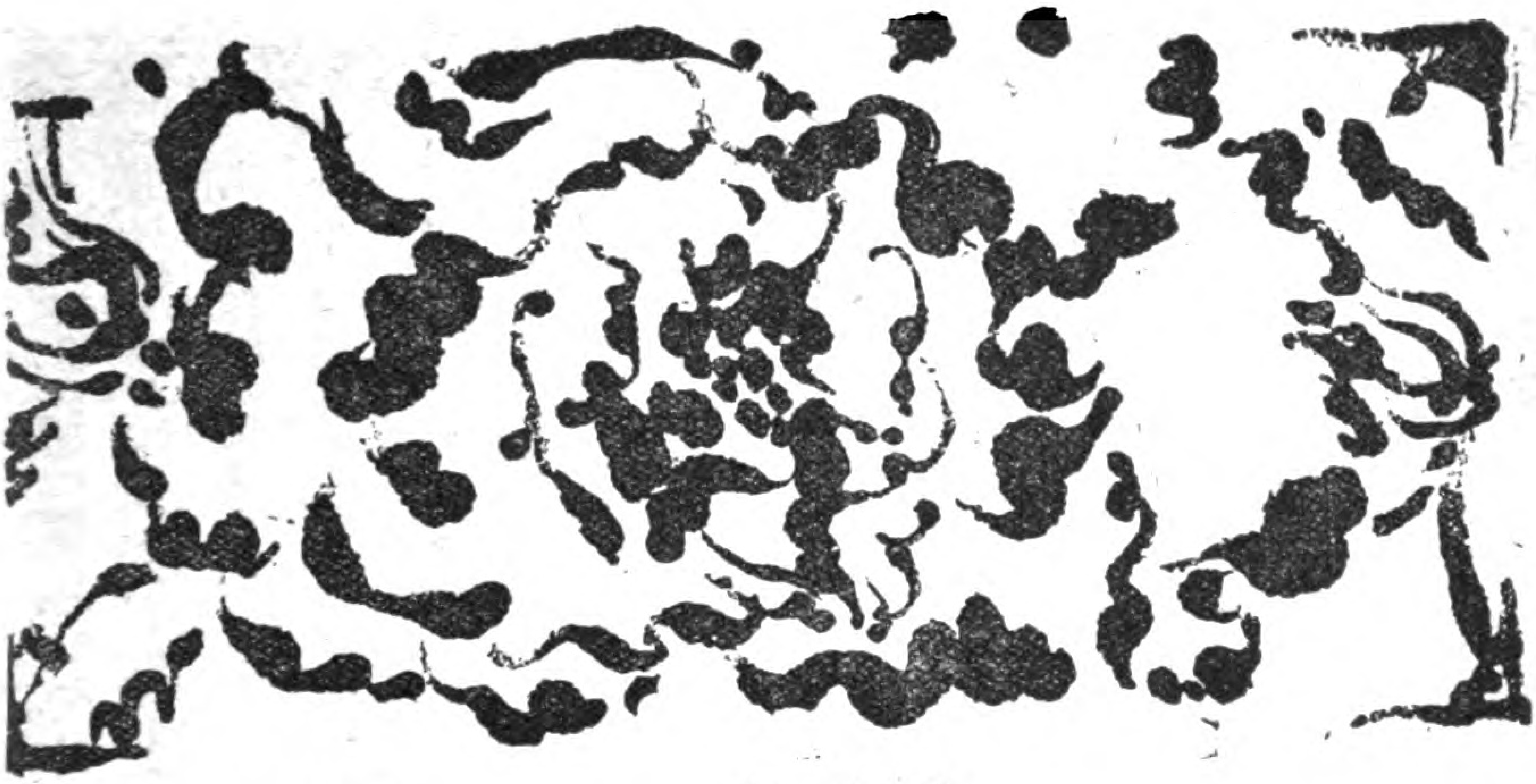
すると、二三合激しい太刀打の音がしたかと思ふと、バタ／＼と馳けつけて來る人の足音がした。怒鳴り合ふ雜音の中から

「うろたへ者め！　これは、左近氏ではないか。」

と、のゝしる同僚の用宮の聲が、ハツキリ聞えた。

新兵衛は、凡てがよく判るやうな氣がした。半年程前、自分を親の敵と狙ふ幸田助九郎が、大阪を徘徊してゐると云ふ噂を、風のたよりに聞いたことがある。大阪と讃岐では、海上わづかに五十里の旅程で交通も頻繁である。高松にゐる自分を探し當てゝ渡海して來るのは、當然である。今日鷹狩に出た自分を見かけ、狩場まで追いかけて、樹陰から自分を見守つてゐたに違ない。自分が百姓家へは入つたのを見屆けると、屈竟の機會と思つたので、出口で待ちかけてゐたに違ない。其處へ左近が顔を出す、同じ黑羅紗の陣羽織を着た左近が顔を出す。昂奮して血迷つてゐる上に、此家には入つてゐる武士は、自分一人と思つてゐる助九郎は、有無を云はさず左近に斬りつけたに違ない。いや、自分の腕前を知つてゐる助九郎は、物陰から躍り出て、不意に斬りつけたかもしれない。

さう考へて來ると、新兵衛は身の上の大事と思つたので、早々に後架を飛び出すと、それでも手早く袴をつけ、土間



返り討

菊池寛

殿の鷹狩のお伴をして來た健部新兵衛は、同僚六七人と、晝食の割籠（わりご）を開いてゐたが、それを喰ひ了ると、急に後架に上りたくなつて來た。それで、周圍を見廻すと十間ばかり向ふに、一軒の百姓家があるのを見つけたので、そこへ後架を借りに行つた。

七十を越したしはくちやの爺が、土下座をして迎へたので、

「はゞかりを借りるぞ」

と云つて土間から裏の方へ廻つた。裏口を出ると、すぐその前に後架があつたが、思ひがけなく其處の手水鉢で、同僚の左近太兵衛が、手を洗つてゐた。彼の袴が、すぐ傍の桃の木の枝にかゝつてゐる。新兵衛を見上げた左近が

「貴殿もか。」と、云つて苦笑した。

新兵衛も苦笑で答へて、すぐ袴を取つてから、後架へは入つた。

左近は、手早く袴をつけると、出て行くらしい氣勢がした。

と、突然家の表庭あたりから激しい左近の叫聲が、聞えたかと思ふと、

「親の敵、覺悟せい！」

と、絶叫する青年の聲がひゞいて來た。

しやがんでゐた新兵衞は、自分の事ではないかと思はずぎくりとして、尾籠の姿のまゝ、飛び出さうとしたが、武士のたしなみ、用を足してからと思つたので、じつと氣を落付けてゐた。

すると、二三合激しい太刀打の音がしたかと思ふと、バタ〳〵と馳けつけて來る人の足音がした。怒鳴り合ふ雜音の中から

「うろたへ者め！　これは、左近氏ではないか。」

と、のゝしる同僚の田宮の聲が、ハツキリ聞えた。

新兵衞は、凡てがよく判るやうな氣がした。半年程前、自分を親の敵と狙ふ幸田助九郎が、大阪を徘徊してゐると云ふ噂を、風のたよりに聞いたことがある。大阪と讃岐では、海上わづかに五十里の旅程で交通も頻繁である。高松にゐる自分を探し當てゝ渡海して來るのは、當然である。今日鷹狩に出た自分を見かけ、狩場まで追いかけて、樹陰から自分を見守つてゐたに違ない。自分が百姓家へは入つたのを見屆けると、屈竟の機會と思つたので、出口で待ちかけてゐたに違ない。其處へ左近が顏を出す、同じ黑羅紗の陣羽織を着た左近が顏を出す。昂奮して血迷つてゐる上に、此家には入つてゐる武士は、自分一人と思つてゐる助九郎は、有無を云はさず左近に斬りつけたに違ない。いや、自分の腕前を知つてゐる助九郎は、物陰から躍り出て、不意に斬りつけたかもしれない。

さう考へて來ると、新兵衞は身の上の大事と思つたので、早々に後架を飛び出すと、それでも手早く袴をつけ、土間

を驅けぬけて、外へ出て見た。彼は、むろん、助九郎を少しも恐れてはゐなかつた。

彼の想像は、物の見事に適中してゐた。左近が、後袈裟に斬られて倒れてゐる横に、助九郎が馳けつけて來た彼の同僚達に斬り斃され、蟲の息になつて倒れてゐた。

「うろたへ者め！」同僚の一人が蟲の息になつてゐる助九郎をまだ、のゝしつてゐた。

「健部氏、お喜びなされ！　貴殿をつけ狙ふこれなる若者、左近氏を貴殿と誤つて打ち果したにつき、われらが御覧の通に致した。」

「左近氏には、まことに氣の毒だが、貴殿にとつては祝着至極。」

「とてもの事に、貴殿とゞめをお刺しなされい！」

同僚達は、口々に新兵衛に云つた。新兵衛の重厚な性格が、新參にかゝはらず、三四年の內に同僚の信望を得てゐたのである。だが、新兵衛は同僚の祝辭を喜びはしなかつた。彼は、助九郎を怖れてゐなかつたと同時に、憎みもしてゐなかつた。

彼は、助九郎の母とは、從姉妹同志であつたし、淡い戀仲でもあつた。さうした戀仲に對する助九郎の父の嫉妬が、新兵衛と助九郎の父との刃傷沙汰の遠因にさへなつてゐた。從つて、横びんの所を斬られながらまだ口をピク／＼動かしてゐる助九郎の、つんと高い鼻の形などは、彼の母そつくりで新兵衛にとつてはなつかしいものだつた。彼は、蟲の息になつてゐる助九郎の姿を見ると、憐憫の情が胸に一杯になつて來る。敵と廻り合ひながら、人を取り違へて、斬りかけ、その場で成敗されてしまふ　そんな口惜しい――武士の面目も、たしなみも、衿持も悉く踏みにじられ云ひがたい不覺者と嘲られながら、死んでしまふ、そんなみじめな最期があるだらうかと思つた。彼は、今までも助九郎を運

命のやうに思つてゐた。自分から、訪ねて討たれる必要もないが、助九郎がやつてくれば、尋常に立ち會はふと思つてゐた。無理なことをして逃れたり、無理なことをしてまで、相手に勝たうとは思はなかつた。いな、助九郎の父を殺してから十年も生きのびたし、仕宜に依つては討たれてやつてもいゝとさへ思つてゐたのである。それだけに、助九郎が自分に指一本も觸れずに、一番皮肉に殘酷に殺されてゐるのを見ると、彼はどうにもたまらなかつた。彼は、何とか助九郎を慰めてやりたかつた。さう思ふと、急に名案が浮んだので、つか〳〵と助九郎に近づいて小腰をかゞめた。

「助九郎どの。氣をたしかに、人違ひではござらぬぞ。貴殿の打ち果した者は、たしかに健部新兵衞でござるぞ。天晴な御本懷ぢや。快く成佛なされい!」

助九郎は、ギクリと身體をゆすぶつた。新兵衞は、助九郎に自分の云つたことが通じたのだと思つた。

「せめて、死んで行く者への寸志でござる。」

立上りながら、小聲で新兵衞は、同僚達に辯解した。

「なるほど、御寛仁なお振舞ぢや。」

「さすがは、健部氏だ。」

皆は讃歎した。

鷹狩の歸途、新兵衞は馬上の殿からも、言葉をいたゞいた。

「先程の仔細きいたぞ、武士は相見互ぢや。ようしたぞ。」

新兵衞は面目を施して恐縮した。

だが、新兵衛はその夜、床についてから、どうしても眠れなかつた。初は、何と云ふ時にとつての機略だらうかと自分でも感心してゐた。

助九郎が死に臨んだとき、決してかへり打ではないことを、云ひきかせたことは、何と云ふ素破らしい機轉だらうかと思つた。もし、あゝ云つてやらなかつたら、助九郎は死ぬ間際まで、とりかへしのつかない身の破滅に、もがき苦しんだに違ない。

「あれを聞いて、極楽へ行つたゞらう。」

新兵衛は、さう考へてねむらうとした。

だが、よく考へて行くと、自分の安心が、だん／＼ぐらついて來た。同僚達に、「うろたへ者」「そこつ者」と、ののしられた助九郎が、左近の顔を見直さない筈はない。左近の顔を見直して、自分の不覺に、臍をかんだに違ひない。彼それを自分のあんな見せかけのしら／＼しい嘘で何うせうと云ふのだ。その上、助九郎と自分と最後に會つたのは、自の十五の年である。「伯父さま／＼」と慕つてゐた俺の聲音を、覺えてゐるに違ない。あきらめかねる妄執の前に、自分の生き殘つてゐる聲を、はつきりきかせ、しら／＼しい皮肉な嘘をきかせたかと思ふと、彼はたまらなくなつて來た。助九郎が、ぎつくりと、身體をゆすぶつたのは、安心どころか、やりどころない無念の最後の表情だつたに違ない。新兵衛は、自分の機轉のために、自分の武士を、めちやくちやにしてしまつたのに氣がついた。自分が、助九郎に對して、一番殘酷なことをしたのだ。なぜ、同僚のすゝめるまゝに、とゞめを刺さなかつたと、後悔した。

その後悔が、一生彼の心とさいなんだ。

支那の國家秩序と社會秩序

長谷川如是閑

A 中華民國の一青年
B ある日本人

A 私は何になつたらいゝでせうか？

B といふ意味は？

A 私の國は、今日はあの混亂狀態です。將來の支那國民としてこれに處するには、何ういふ生活態度をとつたらいゝでせうかといふのです。

B それは支那といふ國を何うかしやうといふ問題ですか、又はあなたの一身についての問題ですか？

A その兩方に關係した問題です。一方では、支那の國民は何人も、自國のあの混亂狀態を何うにかしなければならぬ責任を持つてゐます。だからその問題と、今一つは、その混亂の支那に於て一個の人民として生存する最善の途を撰ばねばなりませんので、それは何うしたらいゝかといふ問題です。

B それは到底私共にはお答の出來る問題ではない。支那といふ大きい謎をとく鍵を握つてゐる人でなければ、その問題に答へることは出來ますまい。

A 然しこれは私共には決して閑問題ではありません。あの混亂の支那で私共は何うしたら人間らしく生きていけるのでせう。

B 『混亂の支那』と頻りにいはれるが、私には、支那が混亂から成立つてゐるとは考へられません。

A 日々の新聞の報ずる通り滅茶〳〵な狀態ではありませんか。

B 私は最近貴國を歩るいて來ましたが、何處へ行つても頗る平和で、秩序立つて、田舍では農夫がのんきに耕作や牧畜に從事し、都會では商家がすばらしい勢で發展してゐるやうでした。どこに『混亂』があるのか少しも見當りませんでした。

A それはあなたが混亂の地方を歩かなかつたからです。

B 北京も丁度無政府で、新聞で見れば混亂狀態の下に在つた筈でした。つひ近所の南口附近では聯合軍と國民軍とが對峙して、北京の市內や郊外は出征軍で眼を突くやうでしたが、しかしどこにも『混亂』はありませんでした。

A 然し、それは表面で、裏面には、徵發の名で掠奪が行はれ、いざ戰爭となれば、軍隊の居る所は、人民達の生命財產は殆んど保障されてゐません。

B それはさうかも知れない、私達は驢馬を傭はうとしたが、どこへ行つても驢馬はない〳〵といつて決して借さなかつたが、これは徵發された故もあるが、又徵發を恐れて他所へ持つて行つて隱してしまつたといふことです。商家や飲食店なども軍隊の居る附近は皆『賣切』と稱して閉店してゐました。北京の市中の眼ぼしい街でも閉店してゐる店が多く、開店してゐる所も、商品を隱したりしてひどく警戒してゐるやうでした。

A それが即ち混亂狀態です。私の國では慢性的にその狀態が存在してゐるのです。

B　然し私達から見ると、それは支那が混亂してゐるのではない。支那はちつとも混亂してゐないが、支那を混亂させるものがゐるのです。

A　同じことではありませんか。

B　違ひます。そこには一方に、混亂してゐない支那があるのです、さうして他方に支那を混亂させるあるものがあるのです。そのあるものは支那とは別なものです。從つて支那は混亂してゐないのです。

A　混亂してゐない「支那」が何處にあります。支那の社會は全體が混亂です。

B　社會的『混亂』とは普通の言葉の意味では、生活の協同が破れて、一言にいへば、生きて行くやうに社會が動いてゐないといふことですが、あなたは、支那の社會は生存をつゞけるやうに組織立てられてゐないといふのですか？

A　さうです。支那といふ國家は、全く生存に適した過程をとつてゐません。

B　然し支那國民は猛烈な勢で生存を擴張させてゐるではありませんか。私も四五年ぶりに行つて見て驚きました。至る所の都會で、日本人始め外國人の生活が段々六かしくなつてゐると聽くのに、その反對に、支那人の生活は益々繁榮して、都會は膨張し、原野は開拓され、蒙古の荒原が、見る〳〵沃野に變つて行くといふ有樣でした。それでも支那の社會は『混亂』してゐるのでせうか。

A　然し、他方では、軍閥や職業政治家が跋扈して、一朝それらの勢力が何かの形で現はれれば、人民の生活は片ッ端しから荒らされて、都會も村落も一夜にして荒野に歸するといふ有樣です。此の狀態で支那の社會は果して生存を續けることが出來ますか？

B　それ程亂暴な侵入者が常に人民の生活を脅かしてゐるに拘らず、今云つたやうに、ぐん〳〵生活を發展せしめて

ゐるのが貴國の人民です。支那の社會は、それほど力强く統一され、秩序立てられ、頑强にその生存の過程を働いてゐるのではありませんか。日本人でゞもあつたら、十年もそんな目に遭つてゐたら恐らく滅茶〳〵になつてゐるでせう。それこそ『混亂』が日本の社會を支配するに至るでせう。反之、あなたの國の人民は、さういふ『混亂させる力』で常住に脅かされながら、あのやうに發展して行くのだから、私は支那は決して混亂してゐないといふのです。

A 然し、あなたの見られた都會の發展といふのも、そこには必らずそれを秩序立てる政治的統一があるから、そのおかげで發展して行くのです。日本の管轄地に沿ふて支那の都會が發展して行くのも、日本の政治的權力がその周圍の秩序を維持して、それに統一的組織を與へてゐるためで、張作霖のやうな軍閥でも、奉天といふ一都會だけの秩序は維持してゐるから、その權力の統一で奉天といふ都會に於て人民の生活が發展して行くのです。つまり支那に政治的統一といふものが何よりも必要なのは、それを見てもわかるではありませんか。然るに目下は支那全體にさういふ統一的秩序がないから、『混亂』してゐるといふのです。此混亂さへ治まつたら支那國民はどれほど發展するかわかりません。

B それは全くその通りです。然し一方から考へると、支那國民は古來、支那帝國といふ權力的統一に依つて生存を持續し、發展せしめて來たものではなく、むしろ常に、さういふ權力が生存を壓迫するのに對抗して、謂はゞそれ自らの生活力とその組織とを以つて發展してきたものでせう。統一的權力のおかげを蒙つた生活組織は、たゞさういふ中心權力の所在地たる都會だけです。所が都會といふものは何處の國でも、生存力を働き出す組織ではなく、それを交換消費する市場に過ぎません。都會はその背後に、より廣大な生産的地域を控へてゐなければならない。國民の生存を支える根本は、この生産地域の組織並に秩序にあるのです。どこの國でも都會は古來、軍國々家の權力を中心とし

て榮えました。然しこの都會といふ生活組織は、所謂文化的構造であつて、それ自身では生存力をもたない社會的組み立てをもつてゐるものです。支那でもこの都會の發展は成る程、軍國貴族の權力を中心としてゐたでせう。然しその都會生活は決して支那といふ一大民族の生存を支えてゐたものではない。都會は所謂文化の花であつて　軍國時代には軍國生活の花が咲き、資本主義時代には、資本主義的生活の花が咲く處です。そしてそれは、時代の社會的構造の移り變りに伴つて興つたり滅びたりする處です。民族の生活を支える根本組織は、その都會にあるのではなくて、その背景となり、その動力となつてゐるその國全土に擴がつた生產地域の組織にあるのです。農業なり工業なりが、それぞれその生產地域の生活に配分されて、國土はその平均狀態でその生存力が計算されるのです。而も、この生存の底力とも云ふべき生產地域の組織といふものは何處の國でも、それ自身の社會組織の秩序即ち、必ずしも政治的權力の統制を待たない――それ自らの組織に於て發生する――秩序に依つてゐるもので、所謂『帝力何ぞ我れに在らんや』といふ組織です。支那も恐らくこの社會的秩序を昔からの軍國々家のおかげで得たものではないでせう。政治的統一が出來なければ支那は滅びるとあなたは考へてゐるが、それならあなたは現在それ自らの組織でどし／＼發展してゐる支那の社會をどう觀てゐるのです。

A　然し何處の國も、政治的統一の鞏固の組織が、その國の生活をどれだけ進歩せしめるか分りません。日本が維新の前と後とで、あれ程の相違を來たしたのも政治の力ではありませんか。

B　社會の事は、量が違ふと質が違つて來ます。空間的條件が違ふ社會は、同じ原則では律しられません。支那のやうな國は昔から、唯だ所謂帝國主義によつてのみ統一されたもので、いはゞローマ帝國の發生によつてのみ支那は統一されたのです。だから、帝國主義の可能性がある間のみ、支那帝國といふものが存在したわけです。換言すれば、軍

國的統一以外に支那の政治的統一は不可能でした。現在の支那の不統一は恐らくローマ帝國はもう世界に成立の見込がないといふ一般的の事實に原因してゐるのでせう。

A 然らば貴方は、支那は國家的には統一されないといふ考へですか？

B さういふ大きな問題は一寸即答し兼ねるが、元來、帝國的統一といふものは、軍國階級の統一であつて、之れは原則として、社會的生活の組織とは沒交渉のもので、たゞ生活階級の生產所得を掠奪するといふ組織の上に立つてゐるのです。從つて帝國的統一は、社會的生活組織の統一をもち來すものではありません。無論、軍國的必要から、所謂交通網を敷く事が、帝國々家の特色ですから、それが、間接に生活組織の統一をもち來たして、ローマの統一がヨーロッパの生活を平均するもととなり、アレキサンダーの征服が、東歐と亞細亞の生活を平均するといふはたらきを持つたのですが、然し社會的生活秩序は、帝國的統一に拘らず、それ自らの生活を支持します。生產地域、商業地域は、それ自體の秩序をもつて、軍國的統制とは全く別な、そしてそれに對立し、それに反抗する組織をもつものです。支那でも恐らくそれは同じであつて、帝國的統一の結晶はたゞ極めて局部的な、都會文化の形ちで現はれ、軍國貴族の階級や政治階級の生活並にその生活に加擔する都會生活の組織を創造する事出が來たゞけで、支那全土の人民の生活の背景をなす所の、廣大な生產地域の生活秩序といふものを造り出す事も出來なかつたし、またそれに觸るゝ事も出來なかつたでせう。支那の人民は、中世紀の封建國家に於ける、職業團體の社會のやうに、鞏固に、積極的に、軍國貴族の統制に反抗する公然の組織はもたなかつたかも知れないが、支那の社會生活の組織並に秩序はそれ自體、頑強な自分の統制を持ち、それをもつて常に軍國的統制と對峙してゐたに相違ない。ヨーロッパの職業團體が、自己の秩序をチャーターによつて、公けに獲得したのに對して、支那のそれは、秘密結社によつて、軍國的統制に反抗したも

のと考へられます。今日でも支那程、秘密結社の多い國はなく、またその組織の廣汎であり、完全してゐる點でも外に類のないやうに言はれてゐるが、之れは要するに、支那の人民が自己の社會的生活の秩序をもつて、軍國的の統制に反抗するといふ當然の社會行動が、變態的に發達したものです。支那の軍國的統制は遂に人民自體の社會生活の秩序を如何ともする事が出來なかつたのでせう。

A　然らば支那の當面の問題として現在の軍閥の私鬪、職業政治家の政爭等に對して、今の御話がどう云ふ意味を持つといふのですか？　支那の人民はだからどうすればいゝといふのですか？　私が一個の中華民國人としてどういふ態度に出ればいゝのですか？

B　當面の問題としては、あなた方本國人の方が、判斷の材料を豐富にもつてをられると思ふが、今いつたやうな考へから、現在の支那を一つの歴史過程として觀察すると、私はあなた方と違つた認識の對象をもつてゐるとでも云はねばなりますまい。私の見てゐるものは、生活の歴史を組み立てゝゐる所謂生存過程の方面です。社會を集團生活の過程として觀ると、社會的生存を支えてゐる集團行動の組織が先づ眼に入らなければならない。どういふ集團的行動が、支那人民の社會的生存の過程を造つてゐるのであるかを觀るのです。そしてその組織に立脚して、生活態度を決定しやうとするのです。支那の社會の上層に今日行はれてゐる軍閥の爭ひや、政治の爭ひといふものは、これは絶對に支那の社會的生存の過程とは別なものです。北京の內閣が幾日出來上らずにゐても、それで直ぐと支那の社會生活の組織が混亂するのでも何でもありません。國民軍と聯合軍とが、戰爭をしてゐても、その近所は混亂せられるが、戰爭が終へれば農民は直ぐと、その戰場の跡へ、種を蒔き、羊を放つて生活を續けます。混亂は、恰度、地震が、或る局部を襲つたやうに一時其處を滅茶々々にしますが、人民の生活秩序そのものは、地震がおさまるとすぐにそのあとからその秩

序を立て直します。支那の社會的生存を支へてゐるものは、即ちこの生存組織自體の秩序です。軍國的秩序も政治的秩序も其處には沒交渉です。それは地震と同じやうに、生活秩序を一時混亂させるのです。その力が退きさへすればそのあとへ、直ぐと生活秩序が芽をふき返します。さういふ力は支那人が數千年來の軍國的統制のもとにそれ自らの秩序を支持する組織として、盛り立てて來た一つの社會的組み立てです。支那は數千年來人民自體の社會的秩序によつて生存を支えてきたのですが、將來も同じく、その組織的の生活力によつて榮てえ行くでせう。軍國的統一や、政治的統一はあつてもなくつても。それは支那人民の生活の死活の問題ではない。

A　然し、現在その生活を混亂させる力が、頑強に支那人の頭上に臨んでゐるのに對してどうすればいゝのでせうか？つまり軍閥と職業政治家とを支那から拂ひ退ける方法に就てはどう考へますか？

B　それは、既に貴方の國で盛んに論議されてゐる事で、私共が考へる迄もない事でせう。或は外國の勢力を支那から排斥しなければ支那の軍閥と職業政治家とは亡びない、といふ人もあります。それも誠に理由のある事です。然し、それは洪水をなくなすには、水素を排除すればいゝと考へるやうなもので、理屈はその通りだが、事實外國の勢力が世界に存在してゐる以上は、容易に解決出來る問題ではない。理論の多くは、所謂虎に向つて皮を提供せしめやうとするやうな、策ばかりだといふ事は現に貴方の國の人達がいつてをるがそんな理由で、當面の問題に對過しても極めて迂廻的な順序を考へる必要があるかも知れません、急がば廻れで、歴史的順序が、或意味で一番直線的な經路かも知れません。

A　歴史的順序といふと？

B　歴史を私共は社會的生存過程と觀てゐる事は前いつた通りだが、即ち社會史的發展が、どう支那に於て進行するかの問題です。社會史が軍閥の歴史、職業政治家の歴史を破壞してゆく、といふ過程が、今日の支那にどう進行してゐ

るかを、確的に認識する事からさきにせねばなりますまい。云ひ換えれば、支那人民の生活秩序が軍國的秩序、政治的秩序に打ち勝つ過程を促進せしめる努力が第一義でせう。

A 今日の支那はそういふ方面に發展してゐると認められますか？

B 私共が支那の都會を歩き、農村を巡つて見て、それが、軍國的秩序と別に、それ自體の發展を遂げてゐるといふ事に氣がついた時に、更に深く觀察すると、必ず軍國階級や政治階級が、その人民の發展と反比例に退縮してゐる事を見出すに違ひない。なる程、一つの軍國的勢力を中心とした都會に於て、商人は榮えてゆくといふ現象の表面を見れば、同時にその都會の貴族政治家の勢力が增大していつてゐるやうに考へられるが、併し事實は、決してさうでない。商人の組織にしてもそれは一つの經濟組織だが、その發展と同時に、軍閥や政治家の勢力は、二つの意味で退縮してゐる。一つは、彼等がその經濟組織から掠奪する方法の變化してゆくことで、また一つは、軍國的勢力、乃至政治的勢力が、次第に經濟的勢力に對する優越を失つてゆくことである、昔の軍國貴族は、商人からどし／＼掠奪する事が出來たが、今は、兵隊が僅かばかりのものを掠奪する事は出來るが軍閥が組織的に掠奪を行ふ事は出來なくなつた。從つて掠奪方法に變化を生じた。それは即ち軍閥自身が商業を行ふ事である。有力な軍閥は皆今では資本家である。從つて商人の共同者である。恰度イギリスの軍國貴族が、地代の掠奪者であつた事から、資本家に移つていつたのと同じ過程をとりつゝあるのです。即ち、武器による掠奪から資本により、搾取に移つて行きつゝあるのです。以前は、支那の或る地方の軍閥が、他の軍閥に追はれて退却する時には、根こそげ、その地方の掠奪をやつたものださうですが、今では、せい／″＼官の保管金だけを、さらつて行く位で、銀行の金にも手をつけないさうではありませんか。兵隊がさういふ場合に掠奪をやる事も、給料をやらなかつたりする事から起るので、軍閥は卻つて極力それを防かうと

してゐる。何故ならば、軍閥は今では、半ば資本家ですから、その信用が軍國的に亡びても、資本家として亡びないやうに努めなければならない。支那に於る商人の團結は非常に鞏固なもので、內部の信用破壞者に對しては、極端に嚴格な處置を執るそうですから、軍國的生命がない後は、資本家として生きなければならぬ軍閥は、もはや、昔の軍國貴族のやうに、經濟的秩序を無視する事が出來なくなりました。そこで、第二の事情、即ち軍國的勢力は自ら、經濟的秩序に對して優越を失つて行きつゝあるのです。政治家の如きは、一層その意味に於て、所謂軍國政治から資本政治に移る當然の過程をふんでゐるのでせう。かういふ事實が、全く存在してゐないとすれば、軍閥は、他の軍閥によつて、政黨は、他の政黨によつて、軍國的鬪爭の機構、政治的鬪爭の機構で甲から乙へと移動してゆくといふ過程を數千年來續けた如く、今後も續けねばなりますまい。然し今言つたやうな事實は、之れは世界的事實で、支那が世界的の商業組織に入つて既に百年からになつた以上は、同じ世界的事實が働いてゐると考へるは外はない。そうだとすると社會史が、軍國史、並に政治史に代つて新らしい支那を造つてゆくでせう。

A　すると、さういふ過程に於ける我々の努力はどちらの方面に向つてゆくべきでせうか?

B　つまり社會史の創造に向ふ外はありますまい。生存過程に於ける集團行動、即ち、生産地域の生活行動が恰度維新後の日本を造り變へたやうに支那を造りかへてゆくでせう。

A　それは一言で言へばどうなります?

B.　一言でいふのはむづかしいが、強いて言へば、生産の科學と、組織の科學とに一致する行動とでも言つたらいゝでせう。すべてが、社會史的創造の根柢を形ち造る行動に歸着します。

A　具體的にいふと?

B　具體的にいへば、生産階級の行動、組織、秩序だけが徹底的に過去の支那を支持するでせう。過去に於ける生産社會の行動、組織並びに秩序が、將來のそれと違ふ點はたゞ文明の科學を欠いてゐたといふ點だけです。過去の支那の生産地域の生活の行動、組織並に秩序に、科學が加はれば、それは完全に文明の支那を支持する生活過程の創造となるわけです。

A　するとそれは畢竟、軍國生活並に政治生活に對して、新たに經濟的生活を以つて對抗するといふ事になるのでせう？　すると貴方は、軍國運動並に政治運動に對しては、全然悲觀的ですか？

B　現在の情勢が、働いてゐる限り、それらの過渡的過程を行動する必要も充分あると思ひます。中世紀の職業團體は、軍隊をもつてゐなければならなかつた。今日支那の地方生活の秩序を維持するために自衛的の軍隊をもつてゐる者があるやうに、過渡的の過程としてそれらの行動も必要です。既に資本主義が、たゞに軍國主義を利用するばかりでなく、積極的に自巳の軍隊をもつこともあるやうに、中間過程の一時的行動としては、決して高遠の理想のみが行動を支配すべきものと考へてはなるまいと思ふ。行動は眞理の享樂ではなく、現實の生存の機構に從はねばならぬ極めて當面的の運動です。美味い米を食はうとすれば肥擔を舁がなければならない。

A　すると、軍國的行動、政治的行動も、現在の事情に於ては有力であると考へるのですか？

B　さうです。然しそれは、飽まで前に申した、社會史の創造に加擔する性質のものでなければ決して、支那の生活に貢献するとは考へられない。ギルドは、職業の秩序であつて生産行動がその集團の目的であつたが、それを支持するために自己の政治や軍隊を持たなければならなかつたといふ事情があつたのですが、やがてその主客が顚倒して、政治や軍隊が集團行動の目的となれば、ギルドは滅びる。僧侶が寺院を支持するために軍隊をもつた事さへあるが、それ

は既に、寺院といふものが、宗教團體たる性質を失つて、一つの政治團體、または財のやうなものに變化したために發生した變態現象です。支那の軍事、または政治に關する行動が、そのやうに主客の顚倒を導き出すならば、目的は亡びてしまひます。而も、軍事行動並に政治行動の性質は、當然新たな階級的生活意識を生み出すものですから、必ず主客顚倒に陷ち入るに相違ありません。確實にその傾向を離れたものは、支那でも恐らく生産階級の運動だけでせう。軍閥の軍事行動は無論の事、商務總會の軍事行動でも、完成すれば一つの軍國政治を產み出すに違ひありません。

A 私の一身上の問題が、とんでもない方に發展しましたが、つまり私は、何になつたらいゝのでせう？

B さあ‼



李鴻章

佐藤春夫

己はその時、偶々、上海の客舍にゐた。漢口の領事になつて任地に赴く途中だつた。當時、漢口は既に開港場になつてゐたのだが、そこの領事館敷地を決定する件、それに新條約の結果に基づいて、新たに沙市を開港場にする爲めの諸用件、これが己のその時の使命だつた。沙市といふのは漢口よりも一層上流にあるところだ。昔の荊州の地だ。新設の領事館の家具類などを買入れるにも上海に滯在をする必要があつて、そこの客舍にゐたのだ。たしか東亞洋行といふホテルだつた。當時での第一のホテルなのだ。今でこそあそこにもいろ／＼と立派なホテルなども澤山あるが、その頃はそれが第一、といふより唯一のホテルであつた。

何しろ、もう三十年の昔のことなのだ。日清戰爭のすぐあとなのだからね。明治二十九年だつたらう、さうだ、その三月の終りか四月初めだつた。何でも春になつたばかりで、江邊の揚柳が芽をふき出してゐたのを覺えてゐる。

その上海へ李鴻章が來るといふことなのだ。

當時、李鴻章は故郷の安徽省の合肥に隱退してしまつてゐた。さういふと悠々自適して閑日月を樂しんでゐたやうに聞えるが、どうして。不平滿々だつたに違ひない。——馬關の日清條約は不利だつたといふので、西太后の不興を蒙つて失脚してしまつたのだ。それがしかし、李鴻章ほどの人物がふたりと在るわけのものぢやない。戰後の、それも敗戰で三國干涉など支那にとつては、つまり三國から恩を受けてゐるだけに一層複雜になつた時局には、どうしたつてももう一度李鴻章をひつぱり出さずにはゐられなくなつたのだ。そこで李鴻章は故鄕の合肥から再び北京へ出る。その道すじで、江を下つて上海へ出て來るといふのだ。それは新聞や何かで讀んで己も知つてゐた。

しかし、彼が上海へ乘り込んだ當日の賑ひといへば實に意想外なものだつた。知つてゐながら、一體何の騷ぎだ、と傍人に念を押してみなけやゐられないほど大袈裟なものだつた。それはその筈ではある。もう一ぺん外務大臣にならうといふ人を迎へるのだから、あたり一めんの大役人小役人どもがわれ勝にそれぞれ屬僚をつれて集つて來てゐるのだ。それをまた見物しようといふ庶民の群集なのだ。その騷ぎが先づ水の上から初まつた。

銅鑼だの大鼓だの大小の鐃だの、支那一流の騷々しい音がわめき立てながら、李鴻章の船のぐるりには、官船やら民船やらそれこそ大小無數の船が、さまざまな色彩の旗や旒を押し立てゝ、それが水の上一面をうづめてる。旗にはさまざまに李鴻章を歡迎する文句を金で縫ひ出してゐる。例へば奉迎雙眼花翎太子大傅文華院大學士云々といふやうな長つたらしい文句を書きたててあるのだ。——雙眼花翎といふ字はたしかにあつた。今も目にのこつてゐる。官位なのだよ。冠のうしろへつける孔雀の尾の羽根に紋がある。その紋がつまり、眼なのだが、それが二つあるのが雙眼花翎だ。花翎といふのはよほど大官なのだ。多分親任官以上とか何とかいふのだらう。さうして眼の多いほどえらいのだ。三眼といふのは何でも親王だけだといふやうな事を後に聞いたが……

やがて長い行列が市街につづいた。あちらでもこちらでも爆竹の響がして、逆上したやうな街のなかを、行列はいくら通つてもきりがないのだ。無論、役人たちは肩輿のなかに垂れ込めて、たくさんの護衛にとりめぐられてゐる。さまざまな色に塗られた輿である。その輿の色にもやつぱりやかましい官制があつたのださうだ。その他、着物でも旗でも、また喧しい音樂と言ひ目もあやな色彩と言ひ、一たいが繁文縟禮な國柄が殊に清朝末期の最も爛熟した華麗な時代だつたし、そこへもつて來て、見る方の己はまた未だこの國へ來たばかりで物珍らしいところへ、然もそれが何もかも一時なのだから、ただもう目も耳も莫迦になつて呆氣にとられてゐた始末だ。そのうちにも己はふと、この豪儀な行列の主人公に會つて見たくなつたのだ。

李鴻章は、その時、上海第一の觀へ宿泊した。有名な大きな觀だが……名は思出さない。觀といふのは道教の寺院の事なのだ。

己はもともと李鴻章を人傑だと思つて、別に崇拜はしないまでも、とにかく會つて見る値のある人物と思つてゐたところへ、例の行列を見たものだから、そう好奇心が起つたのだね。それでその事を人に話すと、當時上海で、今の珍田伯爵が總領事に來られるまでの間その代理をして居られたのが永瀧久吉といふ人だつた。その人が己を李鴻章に紹介してやらうといふのだ。役柄ではありこの人は既に李鴻章がここへ來た當日に、早速刺を通じて挨拶もしてあり先方からも答禮があつて、顏は會はさなくとも名刺は交換してゐるわけなのだから、人を紹介するだけの資格は出來てゐたわけなのだ。——李鴻章の名刺といふのは大きな、長さが一尺五寸ぐらゐ巾も一尺ばかりもある。紅い紙の上に例の何とか長つたらしい官名が書き立ててあつたよ。己が、そこで賴んだものだから永瀧さんは早速紹介狀を書いてくれた。——これはわが國の領事として沙市に行く者だが、今假、この地に居て、折から久しく高名を仰いでゐるところの閣下がここを

お通りすがりになる機會をまのあたりにしながら、親しく御謦咳に接しないのは畢生の恨事だと申すから、御多忙中甚だ恐れ入るけれども、ちよつと御面謁を得させてやつて頂けまいか。もし願へるならば日と時とを御指定されたい。とまづかういふ風な丁寧に廻りくどい文言を連ねて、それと一緒に己の名刺をも通じてくれたのだ。

役人から役人へ紹介して、また會ひたいといふものが役人であつて見れば、特別の事情でない限りは會へるものなのだから、こちらからさう頼んでやると、たしか次の日か、それともまた次の日であつたか、午前十時ごろに來い、會はう、といふ返事であつた。

そこで當日になると、以前からその土地にゐて風俗や習慣をよく知つてゐる諸君が世話を燒いてくれた。乘るにも、馬車などはあつてもこの場合はやはり肩輿でなくてはいけない。それに己の乘る輿もやはり相當な格式のものぢやなくちやいけないのだ。そいつを仕立てるには、何でも莫迦に金がかかるものださうだ。それから、巡査が、支那の巡査だが、それが八人、これは向から迎へに來たといふ意味だつたか何だつたか今ではよくわからないが、何しろ支那の巡査が八人、己の輿を護衞した。その巡査やら輿丁やらには、先輩の注意があつたから豫め、己は一圓かそこらづつ心づけをくれてやつた。かうして置かないと、何かにつけて威勢よくやつてくれないと言ふことなのだ。

己の輿は李鴻章の旅寓してゐる觀の門まで來た。すると輿丁だの巡査どもだのが一度に聲を合せて、何か勢一杯の大きな叫びで、ウワ〱〱と言ふのだ。――きつと日本の大官が來たとでもふれるものだらう。例の祝儀などが少いと、かういふ時にきつと聲が小さかつたりするのだね。こちらからそんな大聲をかけると向ふからもやはり大きな聲を上げる――返事だ。さうして今まで閉めてあつた門が開けられるのだ。その門番のやうな連中にもやつぱり祝儀をやるのだが、これは向からちやんと手を差し出したよ。その門を這入ると庭のやうなところだが己のお供の連中がまた聲を上

げるから見ると、やつぱりまたそこに次の門がある。そいつを開けさせて進むと、また門がある。三つだつたか四つだつたか門を開けさせた。天子九重といふが成程この事なのだな、と己はその時さう思つたよ。

やつとその道觀の玄關のやうなところに着いたが、そのまた玄關には、さあ幾十人ぐらいだかそれとも幾百人だか、ちよつと一目ではわからぬ程の人間がうよ〳〵してゐて、それがそれ〴〵に何だか判らない事を勝手に口々に語り合つて、手にはめい〳〵長い煙管をもつて、その邊をぶらり〳〵してゐたものだ。己はまた門客三千といふ言葉を思ひ出して、この言葉も嘘ではないと思つた。

玄關を這入つてから廊下を通つたが、それから再び部屋をまた三つほども通り拔けたか知ら。何にせよ、我々、日本でだつてさう格式の高いお寺などといふものはよく知らぬ者にとつては、これがお寺かと思ふやうな豪壯な結構なのだ。案內によつて己が通つたのは、さう大きくはないがそれでも十八疊位はある部屋だつたらう。觀だから華美ではなかつた。黑檀と大理石とで出來た淸らかな几のある椅子がいくつか、部屋の壁なりに角に置かれてある。卓子のやうなものは中央には、別に、無かつたと思ふ。

其處で、さう、まあ十分ばかりは待つたらうか。李鴻章が出て來たよ。顏は己には珍らしくない——當時、寫眞やなんかで日本國民全體がよく知り拔いてゐたものだ。その後に從者を四人つれてゐた。己は立つて日本流に膝まで兩手を下げて頭を垂れると、向ふでは兩手を頭の方へ上げて所謂一揖した。それから、己にも腰を下すやうに手ぶりですすめてから、彼も己に對坐した。見ると四人の從者のうちの三人は部屋へ這入つて來て彼の後に直立してゐた。さて挨拶をしなければならないわけだが、この國へは來たばかりではあり言葉はわからずと困つたと思ふ間もなく、彼は直ぐに次の間の方をふりかへつて目顏で合圖をした。すると、それは四人の從者のうちのひとりだが、今までは次の間で通辯

してゐたらしいのだが、許しが出たので我々の室へ通つて、己と李鴻章との間に立つた。打見たところ只の從者ではなく、秘書だらうといふことが直ぐわかつた。さうしてそれが兼ねて聞いてゐたやうに通辯をするのだ。己たちが英語で話すのを、李鴻章は通辯させて聞くわけだ。その秘書といふのがどうして、格式が違ふとこの國ではかうも振舞ふものかと目につくほど料々如として、まるで機械のなやうに不動で直立してゐるのだ。その人の英語が、これがなかなかよかつた。どうして所謂 Pigeon-English とは違ふ。その筈さ、あとで知つたのであるが、それが吳廷芳で米國に永く留學してゐた人なのだ。

己は口を開いた――昨晩から考へて用意して置いたのだ。大たいは永瀧さんの紹介狀と同じやうなことを言つて、但、己は蘇轍が韓義公に上(たてまつ)つた書を思ひ出したものだから言つたのだ「わたしは兼ねてから貴國へもし來るやうになつたならば、古人も言つてとほり山として終南、嵩、華の高きを、水では黄河の大にまた深いものを見、さうして人に於ては閣下に謁すことが出來たならば、以て氣を養ふことが出來るだらうと夢みてゐたのだが、それが今日かうしてお目にかかれるのは實に本懐です」

「それは、よくお出下すつた」先方はごく輕くうけてから「時に、お見受け申したところまだ壯年のやうだが、年は一體お幾つになられたか」

「三十でございます」己は未だ三十にはならなかつたのだが、面倒だし、あの國では年のあまり若いのはよくないといふからさう答へてしまつたのだ。

「うむ、さうか。春秋に富んでゐられる。それにしてもそんなに若くつて、早くももうそんな大官になられたのか。また御名刺によると學士であられるといふが、よくもさう早く立身をせられたものだ。よほどの秀才でゐられるに違いな

い」彼はそんなことを言つた。日本の學士を向ふの翰林學士ぐらゐに思つたのかも知れない。彼は言ひつづけたものだ

「父母は御在世か」

「ふたりとも健全です」

「うむ、おふたりとも？　それは何よりの事だ。立身をせられて父母がこの世にゐられるとは、人としてこれほど幸福なことはない。定めし、御兩親も、かういふ賢息を持たれてさぞ御滿足なことであらう」

言ひながら李鴻章はちよつと口を噤んで、右手を右の方へ出した。すると從者のひとりが心得て、青い絹の上に金絲で縫取つた袋のなかから煙管をとり出した。それが一尺五寸もあらうかといふ長さを、全部一本の翡翠玉で出來てゐるものであつた。從者がそれを彼の手に持たせると、すぐにその皿のなかへ一つまみの煙草をつめた。するともう一人の從者が傍から燐寸をすつてそれに火を點じた。李鴻章はそれを二口三口吸つてから此度は、煙管の尖端をおもむろに左の方へ向け直すと、左側に立つてゐた第三の從者がそれを受取て、部屋の一隅へ行つて灰を振り落した。坐邊には別に灰吹のやうなものは無かつた。このやうに三人の從者が、それぞれに仕事を分擔して一人の主人に煙草を一服させる光景は、己には觀ものだつた――翡翠玉の煙管も同じくだが。

「父母あれば遠く遊ばずといふ教もある程だが、しかし」李鴻章は、あたりにまだ煙の漂うてゐるなかからその眼を己の方へ向けながら、言ひつづけるのだ「國の爲、世の爲とあらばそれも仕方がない。申すまでもない事だが、公務がどんな多端な場合にでも家鄕の通信だけは怠りたくないものだ。それにつけても大切なのは健康だ。父母は唯其疾を之憂ふで、殊にそれが他鄕にゐるやうな場合には尚更なのだから。折角、身を立てて父母の名を擧げても、さういふ事で父母に心配をさせるやうなことがあつてはならないのだか。とかく氣候や風土などが變ると、平素は健康な人でも、

よほど用心をしなければいけない。わけても、吾國は國土がだだ廣いだけで、貴國などのやうに衛生なども進歩してゐないのだ。そこへ行くと貴國などは、先年も、御承知のとほり、自分も行つて見て知つてゐるが、交通といひ何かにつけて實に進歩したものだ。貴國はいい……」

彼はさういふやうなことを言つてまた再び彼の手を從者の方へ出す。煙草だ。——彼は己と話をしてゐる間に三十分間ばかりだつたが、三度ほど例のやうに三人の從者によつて煙草を吸つた。それから殆んど彼ひとりで話をするのだが、その話といふのが、今も言ふやうな話題ばかりなので、「沙市へ行かれるさうだが」と言つてはそこの道程を敎へる。途中の名所のやうなところなどの話をする。さうして「何しろ、まだ不便なところなのだが、いづれは皆さんの御世話でいいところになることだらう」と結ぶ。すべての調子がまるで御爺さんが孫に敎へるやうなのだ。一言だつて天下の大勢などに關する話はない。

己は歸つて來て皆にその話をすると、諸君は大に笑ふのだ。考へればそりや可笑しいのだ。こちらはともかくもう一人前の新進氣鋭な外交官ぐらゐなつもりでゐる。そいつがまるで子供扱ひなのだ。しかし李鴻章にとつては孫のやうな年輩にしか過ぎないのだ——さあ、その時、李鴻章は幾つぐらゐだつたか、はつきりとはわからないが、道光の進士で長髮賊の亂には巡撫になつてゐたといふのだから、いづれもう七十だつたらう——死んだ年が何時で幾つだつたか調べればすぐわかる事だ。服裝か。よく寫眞などにあるだらう、頸に玉のやうな飾をつけてゐる——さういふ點では己は、寫眞の方をよく覺えてゐるやうだ……

諸君は笑つたものだが、ところが己自身には一向に可笑しくはないのさ。さういふ子供だまし見たやうな言葉も、直接その人の口から聞くと何か知ら本當に聞かれるのだ。話の順序などが自然なのだらう、それに春風駘蕩といふのはあ

の事だ。さうして己が今かうして君たちに話せば人を莫迦にしたやうな事柄ばかり言ひながら、それを彼から聞かされた己は、何だか高い氣持になつて、つまり精神が昂揚して親の門を出て來たものなのだ。——たゞシャルムされたと言つたゞけでは足らぬ。

李鴻章は北京へ出て、ロシヤの新帝の戴冠式へ參列した。日本からその時、使節として行つたのはたしか山縣公だつた。李鴻章はロシヤでその序に喀西尼條約といふものを結んで、それから世界を漫遊し出した。名は漫遊でもやはりそれは用事があつたのさ。言はゞ例の三國への御禮に歩いたやうなわけなのだ。露獨英の三國を歩けば、その足でアメリカへ渡つて歸ればつまり世界漫遊といふわけなのだ。ビスマルクが東洋第一の豪傑と李鴻章を賛美して、膠州灣を手に入れたのもその時だ。いい土産物をくれる筈なのだから、三國の新聞だの雜誌だのといふものは李鴻章のことを書き立てる。それでなくとも支那といふところがさうなところへ、殊に戰後ではあり、主人公は李鴻章ではあり彼の好奇的な人氣といふものは、それや實に思ひも及ばぬものだつたね。今日、ロイド眼鏡とか何とか言つて、現に君たちもかけてその龜甲ぶちの丸い大きな眼鏡なども、今日新らしく流行させたのは活動俳優かも知れないが、本當は李鴻章が歐洲へ掛けて行つたものなのだ。そいつが例の李鴻章の人氣の最中なものだから、向ふの風變りな伊達者が眞似たりしたのだよ、一時。

己は李鴻章が當時、歐米でどんなに騷がれたかよく知つてゐるさ。といふのは、己も支那にはほんの暫くしか居なかつたので、それは歐洲へ任命される序——とでもいふか、その一つの道程として支那へ行つたので、豫定だつたから己は間もなくパリへ行くことになつて李鴻章の持囃されてゐることは、パリの新聞で毎日詳しく見た。ほんの一度だが、ともかくも知つてゐる人物の動靜だから、特別に注意と興味とを覺えたものだからね。

よほど用心をしなければいけない。わけても、吾國は國土がただ廣いだけで、貴國などのやうに衛生なども進歩してゐないのだ。そこへ行くと貴國などは、先年も、御承知のとほり、自分も行つて見て知つてるが、交通といひ何かにつけて實に進歩したものだ。貴國はいい……」

彼はさういふやうなことを言つてまた再び彼の手を從者の方へ出す。煙草だ。——彼は己と話をしてゐる間に三十分間ばかりだつたが、三度ほど例のやうに三人の從者によつて煙草を吸つた。それから殆んど彼ひとりで話をするのだが、その話といふのが、今も言ふやうな話題ばかりなので、「沙市へ行かれるさうだが」と言つてはそこの道程を敎へる。途中の名所のやうなところなどの話をする。さうして「何しろ、まだ不便なところなのだが、いづれは皆さんの御世話でいいところになることだらう」と結ぶ。すべての調子がまるで御爺さんが孫に敎へるやうなのだ。一言だつて天下の大勢などに關する話はない。

己は歸つて來て皆にその話をすると、諸君は大に笑ふのだ。考へればそりや可笑しいのだ。こちらはともかくももう一人前の新進氣鋭な外交官ぐらゐなつもりでゐる。そいつがまるで子供扱ひなのだ。しかし李鴻章にとつては孫のやうな年輩にしか過ぎないのだ——さあ、その時、李鴻章は幾つぐらゐだつたか、はつきりとはわからないが、道光の進士で長髮賊の亂には巡撫になつてゐたといふのだから、いづれもう七十だつたらう——死んだ年が何時で幾つだつたか調べればすぐわかる事だ。服裝か。よく寫眞などにあるだらう、頸に玉のやうな飾をつけてゐる——さういふ點では己は、寫眞の方をよく覺えてゐるやうだ……

諸君は笑つたものだが、ところが己自身には一向に可笑しくはないのさ。さういふ子供だまし見たやうな言葉も、直接その人の口から聞くと何か知ら本當に聞かれるのだ。話の順序などが自然なのだらう、それに春風駘蕩といふのはあ

の事だ。さうして己が今かうして君たちに話せば人を莫迦にしたやうな事柄ばかり言ひながら、それを彼から聞かされた己は、何だか高い氣持になつて、つまり精神が昂揚して親の門を出て來たものなのだ。――たゞシャルムされたと言つたゞけでは足らぬ。

李鴻章は北京へ出て、ロシヤの新帝の戴冠式へ參列した。日本からその時、使節として行つたのはたしか山縣公だつた。李鴻章はロシヤでその序に喀西尼條約といふものを結んで、それから世界を漫遊し出した。名は漫遊でもやはりそれは用事があつたのさ。言はゞ例の三國への御禮に歩いたやうなわけなのだ。露獨英の三國を歩けば、その足でアメリカへ渡つて歸ればつまり世界漫遊といふわけなのだ。ビスマルクが東洋第一の豪傑と李鴻章を賛美して、膠州灣を手に入れたのもその時だ。いい土産物をくれる筈なのだから、三國の新聞だの雜誌だのといふものは李鴻章のことを書き立てる。それでなくとも支那といふところがさうなところへ、殊に戰後ではあり、主人公は李鴻章ではあり彼の好奇的な人氣といふものは、それや實に思ひも及ばぬものだつたね。今日、ロイド眼鏡とか何とか言つて、現に君たちもかけてその龜甲ぶちの丸い大きな眼鏡なども、今日新らしく流行させたのは活動俳優かも知れないが、本當は李鴻章が歐洲へ掛けて行つたものなのだ。そいつが例の李鴻章の人氣の最中なものだから、向ふの風變りな伊達者が眞似たりしたのだよ、一時。

己は李鴻章が當時、歐米でどんなに騷がれたかよく知つてゐるさ。といふのは、己も支那にはほんの暫くしか居なかつたので、それは歐洲へ任命される序――とでもいふか、その一つの道程として支那へ行つたので、豫定だつたから己は間もなくパリへ行くことになつて李鴻章の持囃されてゐることは、パリの新聞で毎日詳しく見た。ほんの一度だが、ともかくも知つてゐる人物の動靜だから、特別に注意と興味とを添えたものだからね。

ところが或日、例によつてまた Li Han-chang の噂が出てゐたものだ。もうアメリカへ渡つてゐて紐育通信だつたが、そこでも無論、彼は大持で、われも〳〵と人が面謁を申込んださうだが、そのうちにひとりの閨秀作家が、どういふお爺さんか一つ見物してやらうとでも思つたかだらう、出かけて行つて面謁したのだ。その事が珍談だといふので記事になつてゐるのだ。

會見すると李鴻章は、いきなり例のとほり年を問いたものと見える——己の時と同じことさ。これが又、歐米人にはきつと頗る奇妙だつたに違ひない。言ふまでもなく向ふで、婦人の年齢を問ふなどといふことは無作法な愼むべき事になつてゐるんだからね。それを李鴻章は、そんな習慣は知りもしなかつただらうが、構ひもしなかつたので。例のアメリカに永く留學してゐた呉廷芳などは、無論そんなことは知つてゐるが、そんなことを李鴻章ほどの人には別に傍からも何とも言はなかつたのだね。

問はれたものだから、客の方でも答へぬわけにはいかぬから、ともかくも、本當の年齢だか嘘のだか、二十幾つ——三十近いやうなこと答へたのだ。

すると李鴻章が重ねて尋ねる「では定めし夫君がおありだろう」

すると婦人は「いいえ。まだ獨身で居ります」

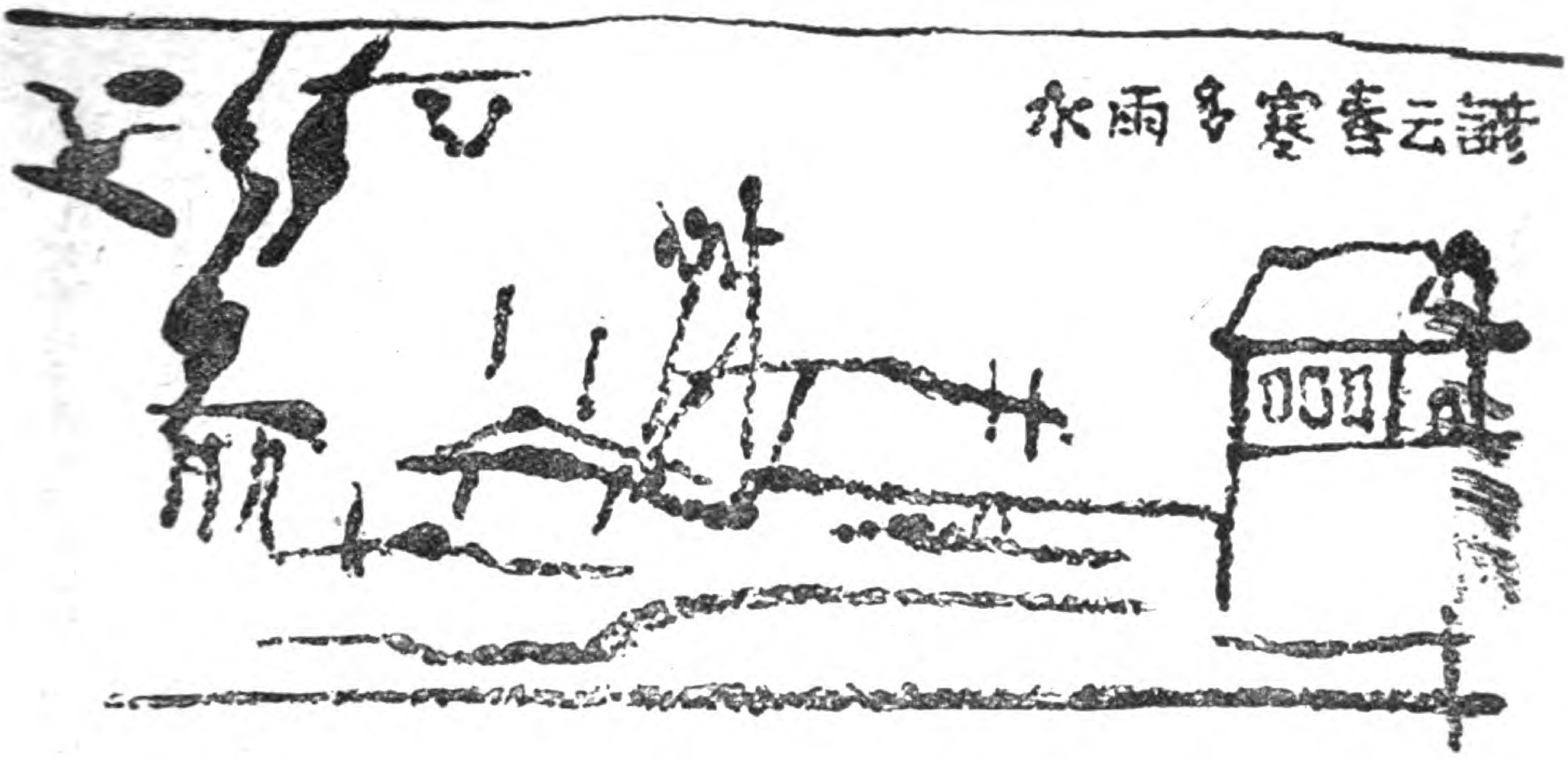
「獨身で？　獨身で！」李鴻章は自分の耳を疑ふ様子だつたが「これはまたお氣の毒なことだ。一體どうしたわけだといふのであらう。女のやもめ男のやもめ——怨婦曠夫を無からしめるといふのが、よく治まつた國の習ひだのに、これは何といふお氣の毒な事だらう。どういふ間違ひできた貴國のやうないい國にかういふ現象があつたものだらう？　それではあなたは配偶者をも持たないで、一たい何を生業として暮して居られるか？」

「わたしは小説を書く者です」

「小説を？　小説を！　小説をお書きになる!?」李鴻章は叫んだ。それから歎息しながら言つた「これは又、更に以ての外の事です。一たい小説などといふものは、たとひ男子でも、科擧には落第をする、郷黨には入れられない。――さういふのらくらの書生が、外にすることとてもなく、習ひ覺えて役にも立たない文字を仕方なしに並べては、日を消すために書くものなのだ。それならばこそ讀む方でもそのつもりで讀む。そんな輕んずべき事を、それも婦女子でありながらなされるといふのは、よく／＼のお考へ違ひだ。お見受け申したところ、美しい方ではありまたお悧巧な方のやうでもあるのに、それは一時も早くいい配偶者をお求めになつて、小説を書くやうな、さういふ筆は一時も早く折らなければなりますまい！」

――新聞の記事は、ごく簡單で、一つの笑話柄として傳へてゐるのであつた。いづれはその閨秀作家が、東洋の老爺の言ひ草ををかしがつて傳へたのであらうと思はれる。

それにしてもあの春風駘蕩たる李鴻章が、穏やかな顏つきをしてさういふ事を言つたのだらうから、閨秀作家もきつと慍ることも出來ず、笑ふより外には仕方がなかつたらう。さう己は、自分が李鴻章を見た時のことを目の前に思ひ浮べ「立身をして父母が世に在るとは、人としてこれほど幸福なことはない」といふ言葉をも考へた。それから今讀んだ新聞記事を更に思ひ合せて、この問答で李鴻章がその閨秀作家に與へたすべての言葉といふのは、やがて、そつくり、東洋風の文化が西洋風の文明に對して與へた評語だと氣がついた。つまり己は、その記事を見て歐米人がをかしがるだらう程には決しておかしくはなかつたのだよ。己もやつぱり東洋人だ。己はパリの客寓の朝を、かうして一瞬間、思ひがけない郷愁を味つたものだつた――別に、父母のことを思ひ出したといふわけではなかつたがね。



蒙古の太陽

ボリス・ピリニャーク

手紙の一節

(別に誰に宛てゝ書き送つたのでもないが、この物語の序詞として掲げる。)

『……僕はロシヤ人だ――この言葉が恐らくすべてを語つてくれる。運命は僕の生活の行路に流轉を與へた――旅から旅へと漂泊もし、數ある信敎や書物の横道にもまぐれ込んだ。もう彼是廿年と云ふものロシヤに歸らない――今日ではそれが社會主義共和國聯邦に變つてゐる。僕は世界のいろんな道を遍歴した。だから僕は此地球がもう大分老耄れてること、また非常に若いと云ふことを知つてゐる。地球が老耄れたと云ふのは、民族的文化や、民族的宗教や、民族的敵愾心やの老衰病、つまり文明の潰頽によつて死にかけてゐることなのだ。また若いと云ふのは、地球の人類が民族性と民族的文化の障壁を越して、その

上に新しい、ヨリよき人生を建設せんとする智識となり意志となつたこの時代に、僕が偶々生れあはせたからだ。

僕はロシヤ人だ――これですべてが言ひ盡されてゐる……』

一

ヨーロッパ人の眼にはどの支那人も同じ顔に見える。それで、このあたりに事業を經營してゐるヨーロッパ人に取つては、支那の苦力が大洋(ダーヤン)の百枚も稼ぎ込んで、自分の仕事を旅券ぐるみで二大洋やそこいらで、兄弟とか近所のものに讓つてサツサと國元の芝罘へ歸るのが、非常な災難に思はれてゐる。早い話が製造所の板塀の際などで交はされる會話ですら、ヨーロッパの人の眼と耳とでは聞き分けがつかないのである。

「おまへロシヤ人か？」

「いや支那人だ。ロシヤ人と一緒になりたいんだ。だがおまへはロシヤ人かい？」

「んにや、俺は蒙古人だ。一緒の汽車にシン・バルガ出の蒙古人のボーイが一人ゐる。二人ともクーオト・ウランのシンバルガの生れなんだ。俺達は革命ロシヤと一緒になりたいんだ。ではおまへの代りに俺が汽車に乘るよ。」

「シヤンゴ！」(宜しいと云ふ程との意味)

…………

板塀の此方側は支那人町、蟻塚そつくりの支那人町だ。――人間の群、人力車、提灯、佛塔、漢字で格言を書きつけたビラ、赤、青、黄、黑のケバ〳〵した繪具で塗りたてられた龍などで通路はぎつしりしてゐる。露天店では洋傘を直し、扇を張り、魚や葱を煮てゐる。男はスカート然たる黑い着物の背中に文字を書いたのを着、女は紺の綿入ズボンを

穿き、美しい足枷で片輪にされた足で歩いてゐる。お寺の中では念佛者が鬼に似た神様に對して、箱に一錢銅貨を抛り込んで、其神様の耳に自分の祈願が聞えるやうにと鉦をガン〳〵敲く。騒々しい鉦の音、叫聲、口笛、金切聲、怒鳴聲、人力車の鈴音がまぜくり返つてこの蟻塚の上に懸つてゐる。お寺の樹脂の香は製造所の豆油の臭と混じ、線香の薫煙、人間と豚の糞臭、にんにく、無花果、飴などの異様な臭が通りを領つてゐる。妓樓の周圍の提灯や格言を書いた赤紙など砂埃の中に飛んでゐる。通りからはまるで空が見えない——それは通りを隔てゝ商家と商家の上に張り渡された旗や、龍や、看板や、色紙で、空一面掩はれてゐるからだ。

で、若しイギリス人にとつて、凡ての支那人の顔がまるで一つものに見えるなら、千の支那人の眼にとつて、イギリス人の顔は大いに目立つ。微細なところにまで、ネクタイのピンまで、齲歯の洞の塡めたのまで目立つ。イギリス人は人力車に乘つてゐる。足は膝掛で掩はれてゐる。イギリス人の顔は支那の佛像の顔よりももつと平氣である。裸かな胸をした車夫は急いで駈けてゐる。群集はイギリス人の人力車の前で左右に分れる。やがて製造所の門前で車夫はイギリス人を下した。

「此の町には三十二箇所の豆油製造場がある。」とイギリス人の一人はも一人のイギリス人を顧みて言つた。「本線まで此處から十七露里ある。その間は支線を敷設すればいゝ。そして規定運賃の外に、一布度について二百分の一大洋(ターヤン)の値上げをするつもりだが、スミツト君、一つ計算して見てくれ。これでどの位の利益があがるかね?」

ミスター・スミツトは後ろの人力車から答へた——

「承知しましたグレーさん。何しろ百分の一の大洋も直ぐ幾百の大洋に變る性質を持つてますし、それに大洋はいつも磅(ポンド)に直りますからね。」

塀の向ふ側は豆油製造所である。製造所の門には支那風の格言が貼りつけてある外に、白い小さな瀬戸物の表札に青く英字で『リミテエド』と記したものなど掲げてある。構内には大豆の俵が山のやうに積んである。建物は木造のバラックで、レ氏四十度以上の熱さに支那人は裸かで働いてゐる。大豆は釜で蒸される。釜まで運ぶのは手押車ぢやない、支那人の背中だ。蒸し上げられた大豆は白い湯氣を立てゝゐる——湯氣の溫度はレ氏四十度以上でなければならぬ。大豆の臭で呼吸が塞るやうだ。かます一杯の蒸した大豆を裸かの人間が曳きづつて豆絞りの盤のところへ持つて行く。二人の裸かの男がその豆を盤の中に投りこむ。裸體の肉瘤が紫色に脹れ上つて、疲れ切つた人間の臀肉が熱いかますの重さにブル〳〵顫えてゐる。かますを曳きづつて來たものは、またもとのところに別なかますを取りに行く。それを受けとつて盤の中に投りこんだものは、直ぐその中に跳びこんで、踊りながら足で踏み潰す。實際踊るのだ——大豆の湯氣で自分の足をゆでながら非常な速さで、非常に亂暴なダンスを踊るのだ。大豆のはいつた盤は、盤の上に積み上げられ、とう〳〵天井まで——光線が漏れて來る天井の隙間まで盛り上げられる。その時支那人は此等の盤の豆を絞り初めるのだ——何のことはない、まるで馬車馬だ。絞り盤に打ちこんだ棒の上に四つん這に突んのめつて、豆から油を絞るために盤を廻すのだ。豆油は綠色を帶びてダラ〳〵流れる。人間は全身を棒の上に倒してウン〳〵力みながらそれを廻す。人間の皮膚の下では青黑い肉瘤が匍ひまわり、皮膚の上には濁つた綠がかつた湯氣——汚れた汗が流れる。

イギリス人は鼻をつまんでこの絞り場を見た。

豆を細かにする豆碎き場では女が働いてゐる。碎き盤の上には老婆か、でなければうら若い娘が腰卷一枚の裸かで立つてゐる。この女達は盤のまん中に位置を取つて、盤と一緒に廻轉しながら豆を選り分け、芥を除けてゐる。この仕事をやる女——老婆か小娘——どつちにせよ三ケ月交代だ。三ケ月もこんな仕事を續けたらたいがいは往生してしまふ。

これには先づ親達か、それとも息子たちとの相談の上、彼等に賃金を前拂ひする約束で女達を買つて來るのである。

二

雪はないが、地面は石がちだ。太陽は斧か鑿かで熱と色とを削り取つてるやうだ。日向が廿度、日蔭が零下廿度。此處では酷寒が藤紫色であるやうに日蔭も藤紫色だ。太陽が削つてる日向では金の光線も金ではなくて、淡青色の褪め果てた色だ。あれでよく熱なんかあるものだ。東洋藝術の線と色との特殊性は、つまりこの淡青色の太陽、この淡青色の光から來てゐるといふ學說も成り立ちさうだ。空氣は遠近の關係を見誤らせるほど透明だ。空も黃色で褪めてゐる。鐵道線路から遙か彼方には右と左に小山がある――まるで誰か空間の隙間から極めて正確に砂を撒いて盛り上げたやうな山、黃色で毛の脫けた不用な山、馬賊の棲家だ。

遙か前方には大興安嶺の青藍色の頂き、此處には支那、彼處には蒙古、更に彼方はウラルとロシヤ――正義を求めて進んだ多數民族の廣大なる土地、そのまた彼方はヨーロッパだ、イギリスだ。

プラットホームの傍に短かい列車が停つてゐる。特別車三輛と食堂車、展望車。昇降口には自動車がある。列車は機關車を蒙古に向けて停つてゐる。展望車の窓はカーテンが下ろされてる。そして其出口からプラットホームに向つて、赤い絨氈を敷いた道板が渡されてゐる。展望車といふのは列車から後ろに去る景色を居ながら眺めるために存在してゐるのだ。展望車は列車の後尾の車で、其後部はテラスになつてゐて、其處に腰かけて、トットと後ろに流れる景色を見ることが出來る。展望車には光澤のある青い染料が塗つてある。若しもつと注意して見るならば、この染料の下に鋼鐵板が匿れてゐるのが分る――展望車は窓の高さまで鋼鐵板が張つてあるのだ。これは馬賊に襲はれた場合、床の上に横

になつて助からうといふためだ。展望車の前のプラットホームには毛帽子に綿入のズボンをつけた支那兵の一隊が佇んでゐる。

正午だ。太陽は地面を削つてる。昨夜はまるで想像も及ばない月が出た。赤い殘酷な月、それは支那民族の存在の哲學で暗示されてるものなのだ。それは淡青い太陽の中華民國を不可解なものにしたその神秘的な被動性によつて暗示されてるものなのだ。——然しそれはともあれ今は覺醒の眞晝である。

展望車の入口に敷かれた赤い絨氈を踏んでイギリス人はゾロゾロ車内にはいる。海狸の毛皮の外套に毛帽を被つた、脊の高い、顏の色の白い人々だ。先頭の一番脊の高い一人が驛長を顧みて、

「出發は屹度一時十五分前だぞ。」

驛長はそれに答へた。

「承知致しました、グレーさん。」

展望車の廊下では、白い手袋に白い短上衣のボーイがイギリス人に低く頭を下げる——イギリス人には黄色人種の顏を見ることが許されてないらしい。ボーイはイギリス人から外套をとつてやる。展望車のサロン、空色の天鵞絨、人參色の皮張の中では、空氣も人參色で空色である。イギリス人は肘椅子に腰かける。ボーイはランチ前のソーダ・ウヰスキーを注ぐ。

「オール・ライト！」と、ミスター・グレーは愉快に語る、「支線を敷くことにしやう。日本人も僕等のと並行して敷く計劃だが、もつと南になるだらう。スミツト君、ちよつとした掛引をやらうぜ——僕等は本線の南へも北へも支線を敷かう。そして北方からの運賃は二倍にし、南方からのは……まア何うでもいゝや、思ひ切り運賃を安くするさ、そして日本人に鐵道を敷くなんか厄介をかけないやうにするさ！」

一時十五分に一分違はず、支那兵の一隊が捧げ銃の敬禮をする。殊更情ない音を立てゝ喇叭を鳴らす――列車が動き出す。ミスター・グレーは展望車のテラスに出て、兵士の敬禮に手を振つて答へて、それから無關心な眼付で附近を眺める――驛倉庫の傍の大豆の山、驛の木造家屋、踏切のところの牛車、牛車の傍の支那人、遠くの小山、――馬賊を防ぐ土壁を圍らした百姓小屋が谷に沿ふて三々五々。

ミスター・グレーの日々の儀禮、課程はイギリスの建國以來定まつてゐるイギリス人特有の儀禮と課程によつて行はれて行く。ランチのテーブルでも、白い手袋に白い尻尾のない燕尾服をつけたボーイが、一々儀禮に從つて皿をつける。ランチが濟めば、其日の儀禮が展望車に移る。

イギリス人のズボンの襞は頭の分目のやうにまつ直でなければならぬと云ふが、それは全然本當ではない。展望車内の三人英人はロシヤの神學生のやうに後ろにはね上げ、そのたわし然たるところもロシヤの神學生そつくりだ。一人は灰色の旅行服を着、ゲートルを穿いてる――服もゲートルも皺くちやだ。この男がミスター・スミットだ。ミスター・グレーは窓に向つて坐し、ドン／＼かけ去る線路を見送つてゐる。その灰色の服――昔は立派に縫はれたのかも知れないが、現在は皺くちやだ。しかし何處かに上等な裁縫師の腕を留めて、ミスター・グレーの石のやうな頑丈なからだを程よく保護してゐる。三人目は脊が低く、カーキ色の服だ。肘椅子の脊に凭たれ、足を重ね、眼鏡をかけて新聞を讀んでゐる。哲學者然たる恰好。ミスター・グレーはまつ直でなけりや坐つてることが出來ぬが、この男はソファか椅子の脊にからだを凭せないでは苦痛である。彼は萬事算盤で行く哲學者だ。

汽車は鋼鐵張だ。鋼鐵張の列車はレールの上を重々しく軋つて通るべきだ、悠つたりと車輪を廻して。鋼鐵の威嚴から

云つても然うあるべきだ。然し列車は急行だ――有りつたけの力で突進してゐる。列車は實際曠野を走つてる――少くとも殖民地を走つてる。展望車の中に納まつてるのが殖民地の開拓者だ。殖民地の開拓者には、胡瓜形の兜やズボンのバンドに二挺づゝぶら下げるモーゼル拳銃が是非とも必要とは限らない。この開拓者達は寒い山の中には、ロシヤ製の海狸の毛皮外套を着て出るのだ。展望車の窓外には全く貧弱な景色――曠野と支那の女、乳房に似た山、乳首を空につき出したやうな恰好の山、それに黄ろい空。日向は暑過ぎ、日蔭は寒過ぎる――何て馬鹿げた特色だ。だから時々岩の扉を展いて、中で眞赤に太陽の熱で焼かれた空氣を冷ましてやることが必要なのだ。稀に谷間に房子(ファンザ)の小砦が見える。が、だん／＼それも少くなる。

列車は大興安嶺の分水點さして進む。その峠の彼方が蒙古、帖木兒(テムチン)の國、イギリス人にはどうしても解らないカン、ホシユン、ワン、グン、ベイレ、バルグーツ、ダウール、カラチンの國だ。恐ろしい沙漠と曠野の國だ。誰にも知れない古代の財寶、文化、偉大な戰捷者、立法者の國だ。が、今は太陽に灼熱された砂の國、歴史の謎、朦朧たる國だ。

「君は哲學をやるね、スミツト君」と、ミスター・グレーは云つた。「僕の哲學は簡單明瞭だ。何でも人間の手で作り上げられるものだけを僕は考へることが出來る。早い話が、今僕等の渡つたあの橋だ、あの方が君がしきりにレンズに納めやうとしてる支那の提灯や興安嶺の景色よりも遙かに僕には詩趣があるよ。」

「グレーさん！」と、ミスター・スミツトは聲高く呼んで――「然し提灯だつて矢張り人間の手で作つたのでせう。」と、附け足す。

「それがさ、全く無用のものを作つたものだ。實際僕は土民共が誰にも解らぬ馬鹿げた言葉で話したり、自分達の風俗習慣とやらを持つてるので、いつも少からず不便を感じてるんだ。で、僕の云はうとしたのは、つまりヨーロツパ人の

手で作られたものなら何でも詩趣があると云ふことなのだ。だから今渡つた橋でも僕にははつきり解る。實際この哲學者の簡單な哲理は(ミスター・グレーはカーキ服で新聞を讀んでる男の方に手を振つて)其單純さに於て大いに正しいよ。所で僕達が蒙古のグンのところに到着するとする——確か蒙古の王族をさう呼ぶ筈だつたね？その王族のところには自分達の習慣、三百人の騎馬の親兵、修道院があつて、それにも一つ自分達の銀行をもつてる——銀行と云ふほどのものでは無論ない。其處にはロシヤ革命の時ロシヤから掻つさらつた印刷器械が備へつけてあつて、紙幣を印刷してるつてさ。それで僕達が到着するとする。そしてそのグンの御殿で一緒に午餐をやる。僕は彼に時計、卷煙草入、英國產の競馬を贈る。彼の答禮は——虎の皮に安坐します所のと云ふわけ……で、僕はベンガル虎の皮二枚を贈物にする……其後答禮の意味で此處の食堂車に招待する——それだけやればもう彼等と顏を合せないでいゝ。また合せる必要がない。だが、うちの哲學者はも一度行つて、も一度手づかみで馬肉を食ふだらう。それからそのグンやその家來の伯爵、子爵と云ふ連中に耳打ちして、整理をやつちやどうかと勸めるだらう——つまりそのちつぽけな銀行の整理をさ。さうすりや僕達がその株主になるかも知れんて。そして軍隊も貴族も皆、やたらな奴の口車に乘せられる心配がなくなるんだ。すれば僕等の地盤は堅固になり、騎馬の軍隊は此方のものさ——何うだ、タメルランやロシヤ韃靼の子孫だぜ。庫倫やモスクヴアからロシヤの共產黨共が如何なにギヤ／＼騷ぎたてたところでテコでも動くものか——これがうちの哲學者の哲理なんだ。それと云ふのは、先生は簡單明瞭な算盤哲學者で、それに君が國の議會で言つたあの、財政資本の學說とかを知つてるからだ。何せグンは其騎馬の軍隊もろ共僕の此のチョッキのポケットにはいるんだからね。」

例のカーキ服を着た算盤哲學者は肘椅子から立ち上り、眼鏡を額におし上げる——見るとこの洋服も一世紀も椅子に腰かけたやうに、ご念の入つた皺だらけだ。哲學者は手をポケットに突つこんで默つて立つてゐる。それから便所に行く。

ミスター・スミットは、パイプに火をつけ、大きく手を振つて燐寸を捨てる。

「ふむ、それはさうです。それはまつたくです、グレーさん。あなたにとつては其處に奮闘の詩、權謀術數の詩、組織の詩といふのがあるんです。そりやあなたは蒙古に鐵道を敷設するお考だから、是非とも其地盤を固める必要があります。が、然しです、如何にあなたでもまさか海の嵐や、奧樣への愛又は可憐な日本娘に對する愛に醉はない譯のものでもないでせう？あなたは蒙古王族の曠野をお手に入れさへすればそれでいゝでせう。が、僕は幾千年の蒙古の砂と、蒙古の馬群とが汽車に驚いて、その跡を追つかけるところを見たいんです。また蒙古式に食べてもムカ〳〵と嘔がつかへるやうなことがないやうに練習したいんです。また支那大鼓のあの音樂を理解したいんです……今日もこれから興安の分水嶺を通過するとき、列車を留めるやうに命じて置きました。僕はその附近を眺めるつもりです——それはこの僕が、リチヤード・スミットが、一箇無位のイギリス人が大興安嶺の絶頂に立つんです……さうだ、あなたは新しい支線を敷設するには是非墜道を掘らにやたらんと云はれましたね。そしたら僕も其處に行つて、人間の勞力が如何にして地面の中を潜るかと云ふところを見ますよ。明日、それとも何時でも沙漠に行つたら、喇嘛を見に蒙古の修道院に行きます。それから明日は、僕達の炭坑に行つて、支那人の勞働してるところを見やうと思つてますよ。」

ミスター・グレーは苦笑してゐる。

「僕はちやんと見てゐたよ、スミット君、今日の午前君は豆油製造所でたしかに鼻をつまんでゐたつけね、間違ひぢやなからう？」

カーキ服の算盤哲學者は便所から歸つて來た。

「どうもお二人とも話をするために話してゐるやうですね、もつと仕事らしい仕事がありさうなものですね。例へば

です、ソーダ・ウヰスキーは如何です。それから無趣味な話ですが是非共北と南の支線の運賃の計算を初めにゃなりませんよ。それからまた、蒙古王族や、その伯爵連中に賄ふのには、總額どの位を犠牲にするかも極めて置かにゃなりますまい。僕の折學は——金は勘定を好むと、單にそれだけのことです……一體僕達がこれから蒙古人對手に話する時の通譯はお二人のうちどちらがお骨折下さいますかな？」

ミスター・グレーは四角な足を延しながら自分の席から立ち上つた。イギリス人の足は扁平だ。彼の厚い底革の赤い靴は爪先が上に向いてゐる。

窓の外には不思議な太陽が地上に光つてゐる——この太陽は多分、小さな意地悪い心を持つてゐるんだらう。窓外の土地はほんとに無一物の裸かだ、木一本ない。一面の砂地か、でなけりや乾ききつた小山ばかり。たゞ前の方にばかり沙漠と沙漠を分界した大興安嶺の青い山が見えてる。其處には山のこつち側にもあつち側にも、溪合に人間が棲んでゐる——互に幾十基米の距離に散在して、草原の中に、貧苦と残酷な勞働の中に生きてゐる。太陽は黄色な空に列車と同じ道を西へ進んでゐる——列車を追ひ越しながら。朝から晩まで同じ景色ばかりが鋼鐵張りの列車の鋼鐵の軋みと一緒に走つてるかと思ふと、餘りいゝ氣持はしない。ミスター・グレーと、も一人の算盤哲學者とはテーブルに向つて數字を一々計算し初めた——二人の手にはパルケル式の赤い大きな萬年筆がある。二人の前には地圖と製圖が展かれてゐる。ミスター・スミツトは感傷的にチヨツキのポケツトから豆のやうな樂器を取り出した——それは天にも地にもたつた『チペレリ』一つだけを奏でる樂器で、ネチを捲いて耳にあてゝ聽くのである。彼は感傷的な顔付で聽き惚れてゐる。樂器のネチが解けると、彼はまた捲いて聽く。太陽は列車を追ひ越し、ズンズン興安の山陰へと自分の永遠の路を辿つてゐる。

展望車の中の一日はかくして過ぎる。食堂車はこの展望車と三輛の特別車とのまん中にある。その三輛の特別車の中には、人間の外に鹿爪らしい品位、鷹揚、馬鹿眞面目、折カバン、計數器、膝掛、地圖、製圖、設計案などがズラリと並んでゐる――此處は鐵道の人事、保線、牽引、運行等の各課長の移動事務所である。列車はつまり管內巡視に來たのである。竹の枯葉みたいな使者が、白い短上衣を着て、ドアの外に佇んで指圖を待つてゐる。綠のテーブルの前には固い椅子に腰かけて、勿體ぶつた各課長が鉛筆や計算器をもちながら葉卷の煙の中にゐる。此處では報告を書き、課題を解き、運賃や布度や露里に就ての複雜な計算をやる。計劃と品位と煙草の煙とを製造してゐる人々――計劃と品位と簿記の中に融けかゝつてる人々、彼等は皆キチンと立派な紺の制服をつけてゐる。命令は既に下つてゐた――それは夕刻時の茶の後、各課長は展望車に伺候して、各自自分の受持に關する報告をするのである。その際極めて重大な要件は、如何に制服をピンと延すか、如何に巧妙な言葉を操るかといふことである。――で、此の三輛の特別車にとつては高原の太陽も、貧弱な山も、山の間の支那人の貧苦も全く無用だ。特別車に必要なのはちよつとした事だ――如何に品位を展望車に持つて行くべきかと云ふだけのことだ。疾驅してる列車のこの品位ある速度――これはまつたく彼等の手になつたのだ。彼等の簿記、布度――露里――時間の計算の品位から出來たのだ。

展望車と特別車との間に食堂車がある。太陽は列車を追ひ越して興安嶺に沈んだ。太陽は殘酷な月の不可思議と入れ代らうとしてズン〳〵興安嶺の山蔭に沈んで行つた。ヨーロッパ人の考へに依ると、支那民族の夜の哲學はこの月の殘酷さによつて說明出來ると云ふことだ。七時に食堂車では正餐がある――その時は展望車からも特別車からも皆一堂に集まる。その時刻までは食堂車の中は薄暗い。薄暗がりの中でボーイは食卓の上に皿、スプン、ホーク、グラスなどをならべて、皿の前にはナフキンを花のやうに作る。コック部屋では、料理番がほどよく炎を上げてゐる。亞鉛張りのテ

です、ソーダ・ウヰスキーは如何です。それから無趣味な話ですが是非共北と南の支線の運賃の計算を初めにやなりませんよ。それからまた、蒙古王族や、その伯爵連中に贈るのには、總額どの位を犧牲にするかも極めて遥かにやなりますまい。僕の哲學は――金は勘定を好むと、單にそれだけのことです……一體僕達がこれから蒙古人對手に話する時の通譯はお二人のうちどちらがお骨折下さいますかな？」

ミスター・グレーは四角な足を延しながら自分の席から立ち上つた。イギリス人の足は扁平だ。彼の厚い底革の赤い靴は爪先が上に向いてゐる。

窓の外には不思議な太陽が地上に光つてゐる――この太陽は多分、小さな意地悪い心を持つてゐるんだらう。窓外の土地はほんとに無一物の裸かだ、木一本ない。一面の砂地か、でなけりや乾ききつた小山ばかり。たゞ前の方にばかり沙漠と沙漠を分界した大興安嶺の青い山が見えてる。其處には山のこつち側にもあつち側にも、溪合に人間が棲んでゐる――互に幾十基米の距離に散在して、草原の中に、貧苦と殘酷な勞働の中に生きてゐる。太陽は黄色な空に列車と同じ道を西へ進んでゐる――列車を追ひ越しながら。朝から晩まで同じ景色ばかりが鋼鐵張りの列車の鋼鐵の軋みと一緒に走つてるかと思ふと、餘りいゝ氣持はしない。ミスター・グレーと、も一人の算盤哲學者とはテーブルに向つて數字を一々計算し初めた――二人の手にはパルケル式の赤い大きな萬年筆がある。二人の前には地圖と製圖が展かれてゐる。ミスター・スミツトは感傷的にチヨツキのポケツトから豆のやうな樂器を取り出した――それは天にも地にもたつた『チペレリ』一つだけを奏でる樂器で、ネヂを捲いて耳にあてゝ聽くのである。彼は感傷的な顏付で聽き惚れてゐる。樂器のネヂが解けると、彼はまた捲いて聽く。太陽は列車を追ひ越し、ズン／＼興安の山蔭へと自分の永遠の路を遁つてゐる。

展望車の中の一日はかくして過ぎる。食堂車はこの展望車と三輛の特別車とのまん中にある。その三輛の特別車の中には、人間の外に鹿爪らしい品位、鷹揚、馬鹿眞面目、折カバン、計數器、膝掛、地圖、製圖、設計案などがズラリと並んでゐる――此處は鐵道の人事、保線、牽引、運行等の各課長の移動事務所である。列車はつまり管内巡視に來たのである。竹の枯葉みたいな使者が、白い短上衣を着て、ドアの外に佇んで指圖を待つてゐる。綠のテーブルの前には固い椅子に腰かけて、勿體ぶつた各課長が鉛筆や計算器をもちながら葉卷の煙の中にゐる。此處では報告を書き、課題を解き、運賃や布度や露里に就ての複雜な計算をやる。計劃と品位と煙草の煙とを製造してゐる人々――計劃と品位と簿記の中に融けかゝつてる人々、彼等は皆キチンと立派な紺の制服をつけてゐる。命令は既に下つてゐた――それは夕刻時の茶の後、各課長は展望車に伺候して、各自自分の受持に關する報告をするのである。その際極めて重大な要件は、如何に制服をピンと延すか、如何に巧妙な言葉を操るかといふことである。――で、此の三輛の特別車にとつては高原の太陽も、貧弱な山も、山の間の支那人の貧苦も全く無用だ。特別車に必要なのはちよつとした事だ――如何に品位を展望車に持つて行くべきかと云ふだけのことだ。疾驅してる列車のこの品位ある速度――これはまつたく彼等の手になつたのだ。彼等の簿記、布度――露里――時間の計算の品位から出來たのだ。

展望車と特別車との間に食堂車がある。太陽は列車を追ひ越して興安嶺に沈んだ。太陽は殘酷な月の不可思議と入れ代らうとしてズン／＼興安嶺の山陰に沈んで行つた。ヨーロッパ人の考へに依ると、支那民族の夜の哲學はこの月の殘酷さによつて說明出來ると云ふことだ。七時に食堂車では正餐がある――その時は展望車からも特別車からも皆一堂に集まる。その時刻までは食堂車の中は薄暗い。薄暗がりの中でボーイは食卓の上に皿、スプン、ホーク、グラスなどをならべて、皿の前にはナフキンを花のやうに作る。コック部屋では、料理番がほどよく炎を上げてゐる。亞鉛張りのテ

ーブルの上には、牛肉、七面鳥、魚を載せてある。部屋の中は蒸されるほど暑苦しい。頭に白い頭巾をのつけた支那人コックは竈の前でまつ赤になつてる。その傍には助手が働いてる。此處には哲學もなけりや、品位もない。此處では、ナイフやホークの持ち方のよく出來る人々のために、なるたけ美味しい料理を作らうと肉を切つてるだけだ。窓の外には月が上る。年上のコックは眼の上に、肉の一片を持つたまゝ片手を翳して暗がりの中をのぞいた。コックは云つた。

「ソー・ケ・シャンの傍を通つてる。此處は俺の腕白時代にかけ廻つた所だ。此處ならどの小山でも、どのタラバガンの穴でもよく知つてる……」

然し年上のコックは言葉を續ける暇を持たない――彼の言葉は煮えくり返る油に遮られた。コックたるものは何時でも油や肉やソースに氣を配らねばならぬ。

「アダ・ベキル！」と年上のコックは若いコックを顧みたが、その聲は油の煮え立つ音に殆んど消される。「若し蒙古人がシャン・バルグ、ヒチニン・バルグを支那から取るなら。若し君達がハルハ・ゴレン、ハン・チャンダマニ・ウライン、ズン・ウズム・チンを取るなら、ソー・ケー・シャンの土地は自然君達のものになる……」

若いコックは肉が柔かになるやうに肉切庖丁の脊で敲いてる――彼は頭を傾けて默つてる。ヨーロッパ人の眼にはどの支那人も同じ顏だ。然し年上のコックは東洋人の顏の相違を知つてゐる。それから自分の助手の蒙古人、自分にとつても、其他の支那人にとつても勇者であり、英國人にとつては名もないコックであるアダ・ベキルの眼と唇が何故あの樣に堅く引き緊つてるかをよく知つてゐる。若いコックは年上のコックのやうに白い頭巾を冠つてる。若いコックは靜かに窓を眺めながら大方自分の考へにでも答へるやうに言ふた。

「支那人の譬へ話にこんなのがあるんぢやないか――それは一人の男が房子（ファンザ）を建てやうとした。ところが、此の男には非常

に澤山の親友があつて、皆どう建てたら一番いゝかとそれぐ助言してくれた。そこでこの男は皆んなの親友の助言を容れるとにした!つまり彼は如何な房子も建てなかつたのさ。人が友達の助言だけを聽いてさへも斯んなとがあるんだ。」

其時コック部屋に展望車のボーイがはいつて來た。彼は云ふ。

「アダ・ベキル!また珍らしい事を聞いたよ。」

「どんなことだ?」

「一番上のイギリス人のグレーが、グンのところへ行くとき、僕を通譯に連れて行くつてさ。さうなれば僕はどこか途中の草原に降りなくちやならない。でないと結局自分の破滅になるからな。」

「何云つてる、大變いゝことぢやないか。イギリス人をグンのところまで送つてさ、其處で姿を匿くせばいゝぢやないか。イギリス人の奴等相かはらず地圖や圖面を見てるか?」と、アダ・ベキルは訊ねて――「山の峠で汽車が止まつて、イギリス人があの邊をぶらつくだらう。峠では僕を待つてる筈だ。で、僕は汽車から拔け出し、山道傳へに砂漠に下りるんだ。馬で一晩駈けりや百露里位大した事はない。イギリス人がグンのところに行き着くまでにはダウルに行けるだらう。僕等はどんなことしたつてバルギの土地をイギリス人なんかに渡しやしない。ぢやおまへダウルに行つたら汽車から逃げるがいゝよ。」

イギリス人のところでは夜の儀禮が行はれてゐる――イギリスの建國以來ちやんと定められてる通りの型で行はれてゐる。窓外の景色はもう見えない。汽車が溪合、懸崖、橋を匍ひながら上へ上へ、頂上へ、永遠の雪へ、月光に凍つた寒さの世界へと登つて行くのも見えない。

が、峠の頂上の廣々したところに來ると、イギリス人の指圖のまゝに列車は止まつた。僕はこの時刻はもうイギリス人が就寝する時であつた。それにもかゝはらずイギリス人は列車から下りてその附近の雪の上に出た。線路の左右には、森に掩はれた山脈の頂きが、月光に淡青い雪景色の中にぼんやり薄らんでゐる。が、前と後ろには蒙古と支那の闇の世界が無限に廣く展開されてゐる。月は零下四十度の寒さで照つてゐる。雪はカチ〳〵の岩となつて、靴で踏めば石のやうだ。ミスター・スミツトが先頭に立つて雪を踏んで行く。ミスター・スミツトの聲が甲高く響く。

「何と云つても僕の體内にはまだ野蠻人が巣喰つてゐる。拳骨を振り廻して、到るところ放火、掠奪、暴行をして歩き廻つた昔のサクソンの血が殘つてゐる。僕達の前に横はる國、この國こそ殘酷無比の武人、殘酷無比の血の國だ。僕達は今この國を征服しに來たのだ。僕はこの國に就いては知らないが、棒で脅かして、人を四ん這にして歩かせたり、棒で女を雪に跪かせたり、棒で女を眞裸かにさせたりすることの出來るやうな國が何故今日何處にも存在しないのだらう。それや無論僕が一番にそれをやると云ふことは出來ない。然し時には斯うした事も僕の血を躍らせる。何と廣々してることだ――あの月、あの遠景！　何といつてもブリタニヤがまだ母の懐にさへゐなかつた時代に、もう人間が這ひ廻つてゐたこの古い古い山の最絶頂に僕達は立つてるぢやないか、ブリテン人の僕が立つてるんぢやないか――あ、僕は野蠻人になりたい！」

ミスター・スミツトは非常に力強く人を説服する。が、寒氣は無言の中にもつと力強く肌を刺す。イギリス人は靴の踵で雪を鳴らしながら寒さにすくんでる。間もなく彼等は列車に歸る――雄大な自然の姿を其儘放棄して。車掌は車の傍を駈け廻つて燈火を振る。列車は靜かに動き出し、進行して、消え失せる。線路の上には夜の靜寂が殘る。月は雪の上にキラ〳〵してゐる。不圖線路の傍の雪から人が一人立上る。彼は周圍を見廻し、それから二本指で口笛を吹く、鋭

く山賊のやうに。すると左の松林の暗闇の中から安堵を傳へる口笛が彼に答へる。やがて松林の暗闇の中から騎馬の人影が現はれる。彼等は人の乘らない馬を一匹連れてゐる。鞍の一つには衣服類がくゝりつけてある。汽車から拔け出た男は早速羊皮のズボンをつけ、長い雪靴を穿き、山羊の毛皮の長い服に着更へ、先のとがつた帽子を冠る。彼（蒙古人）は彼を迎へに此處にやつて來た連中とまるで見分けがつかない。鬣の濃い背の低い馬は、寒さに絶えず鬣を振つてゐる。——人々は彼等のみが知つてゐる山の細道、斷崖の上をトツトと急いで行く。

三

騎馬のものが一人鐵道踏切のところに立つてゐる。毛深い、背の低い、頭の大きい馬である——驚いた樣子で驛に停つてる列車を見てゐる。馬に跨つてるのは蒙古人で、その乘馬姿は他の蒙古人と同じく背中を丸め、脚を思いきり高くして、みつともないが、同時に彼は馬とくつついてるやうにも見える。蒙古人は知らん顏で汽車を見てゐる——彼は一時間も二時間も身動きもせず眼ばたきもせず見てることが出來る。が、列車の中からは人々が現はれ、驛の前にある自動車に向つた——蒙古人は非常に早く眼ばたきした。人々は自動車に乘つた。蒙古人の馬はいきなり自分の頸の下に前脚を蹴込んで、一目散に驛の前の支那人部落を通り拔け、蒙古人部落の傍を掠めて墓地に砂漠の中へ駈け出した。

展望車の中でイギリス人は細心にブラウニング拳銃を調べて、それを外套のポケットに入れる。イギリス人はもう外套を着、帽子を冠つてる。三人目の外套は前があいて、その中からカーキ色が見える。この男のカーキ色は怒りつぽい。彼は四人目に話かける。四人目はドアのところに立つてゐる—帽子を手に持ち、鐵道從業員の制服をつけ、ヤクート人らしい顏をして。ヤクート人の顏は不機嫌で赤い。

「惡魔百匹！」と、算盤哲學者は云ふ、「おい技師君、僕等は君を信じて此の重要な地區を任せたのだ。それに君の報告は何です。間諜には逃げられるし、信用の出來るやうな通譯もないといふのか。僕等はあのボーイが蒙古語をどんな風に話すか全然知らないんだ。」

技師の答は低かつた。

「此の土地では働くことが殆んど不可能です。蒙古人共が片つ端から仕事をぶつ壞して行きます。今度の間諜にしたつて、もう二三ヶ月前からそろ〳〵使つて見ましたが全く忠實なやうでした。ところが昨日の夕方私と話などしてゐましたのに、もう晩には姿をかくしちまつたのです。何處に隱れてゐるのかも分りません、見たものさへないのです。」

算盤哲學者は技師の話を遮つた。

「然し僕等が來ると云ふことを一たい蒙古人は何處から嗅ぎつけたかね？　何かそんな電報でもあつたのか？　その逃げた奴は僕等のことを知つてたのかね？」

「電報は先程お眼にかけました。その時報告申し上げました通り、その中の一通はアダ・ベキルと云ふ若い蒙古人に宛てたものですが、彼奴は庫倫やロシヤにも居た事があるので、危險人物の嫌疑がありますが、然しあの電報だけでは何一つ知ることが出來ません。」

「よし、あつちで自動車を準備しておくがいゝ。二分間の後に出て行くから。」

線路管區長の技師が展望車から出た後で、三人目のイギリス人は思案げに言ふた。

「何か詰らんことだ、さつぱり分りやしない。おい諸君、昨夜コックの小僧が逃げたつて聞いたかね。――どうも彼奴は蒙古人らしいんですよ。まアそんなことはどうでも僕達は兎に角出掛けませう。ボーイ！」と、算盤哲學者に呼んで

——「寒くない服を着て僕等についてくるんだ。そして貴様はグンのところで通譯をするんだ、いゝか……」

太陽は依然地面を削つてゐる。日向は暑く、日蔭は寒い。日蔭は大寒のやうに藤紫色だ。踏切の彼方は無限の沙漠、嚴寒と太陽とに根こそぎにされた日蔭のない無限だ。前の自動車にはイギリス人、技師、通譯が乗る、後のには支那の護衛兵が。自動車は爆音を立てゝ廻る—蒙古人には不可解な力でたつた今騎馬の男が立止つてゐた踏切に向ふ。支那人の部落でも蒙古人の部落でも、子供達は犬つころと一緒になつて喚きながらバラ〳〵に散る。蒙古人の部落では馬が大あばれにあばれる。牛と羊は自動車の警笛に横に避けやうともせず、その前を夢中に駈ける。たゞ駱駝の一隊だけは、自動車にも騒がず、前の村の圍の彼方を悠々と通つてゐる—長い沙漠旅行を前に控へ、氣長な足どりで、長い頸の鈴を氣長にならしながら。自動車はすばらしい勢の品位を保つて地上に線を引く。

部落の中の小路は狭苦しかつた——輪具や漆がケバ〳〵しく、鉦の音と人聲が喧しく、それに人間が息苦しい——これは支那人部落のことだ。狭苦しくもなく、ケバ〳〵しくもなく、寂莫と沙漠の太陽に灼きつくされた色——それは蒙古人部落の色だ。砂埃が立つ、亞細亞の町の臭がする、酸ぱい腐つた臭がする。部落の圍を出ると直ぐ沙漠が展開される——沙漠、曠野の無限の廣さは曾て人間の足の觸れたことのない原始時代のそれを思はしめる。幾つかの小山で波を打ち、幾つかの谷で小皺を寄せてる廣い廣い沙漠——丁度蒙古人の顏のやうに太陽の熱で燒き焦がされた沙漠は、目の届く限り無限に廣い。

「若しイギリス人の方々がお望みでございますならば、途中蒙古人の修道院に立寄つて、蒙古の喇嘛をご覧になつても宜しうございます」と、ボーイの通譯は云ふ。

イギリス人は歸途に立寄ることに極める。

ミスター・スミットは云ふ。

「何でも蒙古人は長男が生れると、それを喇嘛僧にするんだつてね。その喇嘛は自分の修道院の圍りに棲んで仕事も何もせず、皆施物で生活してるんださうだ。何しろ半ば聖者としてあるんだよ。だから蒙古の道徳では、蒙古婦人は全部喇嘛のところに送り、喇嘛との關係は神聖なことになつてるんだよ。まあ三ケ月位なら喇嘛になつてみても惡かあないね。」

遙か遠方の砂山の上に赤く塗られた丸い棒が見え、其附近には犬が群をなしてゐる。

「あれは何だ？」とミスター・スミットは訊ねる。通譯のボーイは、あれは蒙古の墓地であると澁々答へる。

「あ、さうか、その事は本で讀んだ。蒙古人は死體を沙漠に捨てる、すると犬が集つてそれを喰ひ盡すのだが、この犬は神聖なものとされてるのださうだ。行つて見やう。」

自動車は赤い棒に向つて進む。犬は澁々逃げる。棒の附近には人間の死屍、死屍には何故か首がない。死屍は裸かのまゝ犬に喰ひ破られてる。ミスター・スミットは熱心に其棒と其死屍とをレンズに收める。彼は死屍の傍に立つ自分をレンズによつて永久の記念にしやうと、カメラをミスター・グレーに渡す。

再び自動車はすばらしい勢の品位を保つて沙漠を走る。ひどく寒い。自動車はターオット・ウランのシン・バルガの都、バウルに向つて進む。太陽は地面を削る、太陽は廣々と地平線を張る。然し何と言つても自動車の中は寒い。蒙古の太陽はイギリス人に對して小さな意地惡い心を持つてゐる――こんな時には毛皮の外套にしつかり繃つて默つてるに限る。默つてゐていろんなことを考へることも出來る――例へば前方左右に廣がる幾千基米の土地に就いて、又はこの曠野を過ぎた幾千年の歴史に就いて――匈奴、韃靼、蒙古の各種族がこの曠野を過ぎつたことや、黄金時代と流血時代

のこと、アレキサンドル大王をこの曠野に誘惑した時代のこと、この曠野が嘗て世界中に誇つた其權勢も、今は殘酷な太陽に滅ぼされてしまつたことなど。斯くして暫く行くと、自動車の行手の砂原の中に忽然騎馬の人影が現はれ、現はれたかと思ふと、直ぐ其姿が谷の中に消えた。そしてその谷から灰色の煙の柱が立つた。するとまた遙か前方に當つて、辛うじて肉眼に見えるあたりに第二の煙柱が立つた――この電信のない沙漠に於て、此等の煙柱こそ千古の電信であつたといふことを誰が知らうぞ

一時間ばかりの後、自動車は沙漠の都の死人のやうな靜かさの中にはいる。多分自動車が此處にはいり込んだのは、ペストがはいつたやうなものであらう――沙漠のやうな灰色の小路の粘土の狹苦しい中では生活が死んでゐる、人も、馬も、音もない――たゞ小店の椽先に、見向きもせず話もしない商人が、膝を折りまげてじつと坐つたまゝ動かない。此處を通る幾千の牛馬の蹄、幾千の人間の足で踏み固められ、その上嚴寒で凍結してゐる地面は、自動車の車輪の下で響いてゐる。が、通りも粘土の家も自動車を見ない、見やうともしない。

自動車はグンの棲んでる城に向ふ。灰色の石を疊み上げた重い城壁が城を繞る。水を湛へた深い堀が城を繞る。自動車はその堀に架した橋に近づく。イギリス人に附いて來た支那人の護衛兵は銃を捧げて敬禮をする。鐵を張つた門は固く鎖されて何の音もない。通譯は線路管區長と第一番に自動車を下り、半ダースばかりのイギリス人の名刺を持つて城門に近づく。イギリス人は自動車から出る。

そこでイギリス人は何を見たか。

橋の欄干の右側には柱が拵へ、枝が立つてゐる。その枝の先に人間の生首が刺してある。首は多分今日か、それとも昨晩斬つたばかりだ、血がまだ生々しく滴つてゐる。顏は物凄い、口をありつたけあけて――慘殺された人間の顏だ。

城門はイギリス人の前に開かれた。イギリス人の顔は度を失つた顏だ。ミスター・スミットは寫眞機のことも忘れ、口を開いたまゝ立つてゐる。

技師は慌てゝミスター・グレーに耳打ちした──「あなたに是非申上げねばなりません。」

「グレーさん、グレーさん！」と、ミスター・グレーは云つた──「技師君、報告は後程に伺ひませう。」

「皆んなあつちに行きませう。」と、必要以上に落ち着きぶつて、ミスター・グレーは云つた──「技師君、報告は後程に伺ひませう。」

ミスター・グレーの前には算盤哲學者が立つた。イギリス人は橋を渡り、城門を潜り、先づ第一の内庭に、それから第二の内庭に入つた。

「グレーさん！」と、技師はまた囁く。

「後で伺ひます！」と、ミスター・グレーは小聲で、然し強く云ふ。

イギリス人は第二の内庭、第三の内庭を通る。彼等は自分達の周圍に何があるかを見ることさへ出來ない。無論彼等の手は機械的に拳銃のあるポケットに入つてゐる。その瞬間彼等の顔が假面のやうであつたことは言ふまでもない。──昔それを被つて神秘劇を演じたと云ふイギリス人の苦痛を我慢する時の澁面によく似てゐた。イギリス人は蒙古人の群に圍まれて行く。酸ぱい臭─民族的臭─蒙古人の臭がすつかりイギリス人を包んだ。彼等は假面を被つて行く。第三の門の中にグンの御殿がある。その中にグンは豹の毛を敷いて安坐してゐる。イギリス人の眼は杙に刺された生首を見てから何も見えない。彼等は最早グンの安坐してゐる御殿さへも目に入らぬ──この御殿ぐらゐの家はロシヤにはザラにある。まあ中流どころの商家だ、屋根はトタン張りで、十四間に三十間ぐらゐ、ちよつとした玄關があつて、その左

右の戸は色ガラス入りだ。イギリス人の眼にはさまで廣からぬ内庭がきれいに掃かれて砂が撒いてあるのも、家の傍に坐ることの出來るやうに作つた台のあるのも見えない。玄關の階段は絨氈が敷きつめられてゐる。金で刺繍のしてある絨氈の上にグンが立つてゐる――支那貴族の帽子を冠り、白い細紐のやうに垂れた髯を生やし、空色のスカート然たる服を着てゐる。グンの周圍は宮内官、軍隊長官、顧問官、大臣、伯爵、子爵、等々の顯官で取卷かれてゐる。ミスター・グレーはグンの顔を見たいと思つてる――グンの顔は不愛想で砂漠の石のやうに焼けてゐる。沙漠の石のやうに表情がない。グンは表情のない顔で別に來客を見もせず――年のせいでもあるまいし、位のせいでもあるまいが――自分の頭をちよいと下げて下を見たきり眼を直ぐ閉じる。イギリス人はグンの帶の邊まで頭を下げて禮をする。グンの側の家來衆も同じく帶までの叩頭をしてイギリス人に答へる。グンは手を先づミスター・グレーに差し出す。(グレーがイギリス人の中の一番首座だと云ふことをグンはどうして知つたらう?)グンはミスター・グレーに恭しく手を握らせやうとして差し出す。グンの手には力が抜けてゐる。グンと並んでその扈從の中に、昨日までイギリス人の列車にコツクの助手をしてゐた若者がゐた。それをイギリス人は見もしなければ、また見附けることも困難だつた。その若者は今日は藤紫色の長上衣を着飾り、腰には斜に劍をつるしてゐる。彼は前方に進み、禮をして、イギリス人に附いて來たボーイの通譯に云つた。

「イギリス人の犬つころ共に傳へろ!」と蒙古人の若者は叩頭しながら、痛快に耐えぬ顔付で――「いゝか犬共に傳へろ、豹の皮に安坐してござるシン・バルガの王様はイギリス人の犬ころ共をお茶に招待遊ばすと。」

イギリス人は無論其言葉を解せない。線路管區長は哀願的な眼でミスター・グレーを見、その後から人波に混つて殿内にはいる。其處には豹の毛皮が敷かれてある。

城内を廻つて凝結した過去の姿を見ることも出來たであらうが、イギリス人はそれを見る眼を持たぬ——眼の前には絶えず枝の上の生首がちらつく。また有りと有ゆる國家組織の全性質を反映してゐる一分子の樣なこの封建制度の殘骸又は國家組織の萌芽に就いて考へることも出來たであらう。が、イギリス人は第一の門の傍を通つた時、只人間の生首を刺した枝を見たばかりだ——人間の首はグンの命令、グンの裁判で斬りもすれば吊しもする。グンは城壁の中に棲んでゐる——その城壁は野戰砲の一發でわけなく破壞されさうだが、それはどうでもいゝ。グンは麾下の軍隊に護衛されてゐる。廐にはグンの駿馬が繋がれてある。其處には獵犬も居れば、鷹も大切にしてある。鷹を連れて鷹狩にも出る。グンの中庭には地下牢がある。地下にはまた裁判やグンの命令で人を拷問にかける穴倉もある。それからまた偶然その牢屋と列んで、ロシヤ革命の時にロシヤから搔つさらつて來た印刷機がある——その印刷機で通貨やグンの命令を印刷する。第二の內庭にグンの居間や、閨房、后や子供の居間がある。第一の內庭にも、第二の內庭にも、城壁にもグンの騎兵の屯舍がある。第一の門をはいつて、第一の庭の左は屯舍で、右には土で粘塗り固めた勞働部屋のやうなグンの政務諸官衙が列んでゐる。其處にはグンの裁判、徵税、財政の命令、それから支那語で支那式に筆で認めた本が保存されてゐる。その中にはシン・パルガの歷史、グンの歷史、口傳、隣族との交戰媾和の文書、朝貢者調、門閥名家調、屬民調、それから如何なる者から幾干の金錢、馬、牛、勞力を裁判所や軍隊や官署に收むべきか、と云ふやうなことが書かれてある。其處では有ゆる國家組織の分子を見ることが出來る！然し神經の鼻綱をかぶつたイギリス人には考へることすら不可能だ。

豹の毛皮が澤山敷かれてゐるグンの應接間にはオランダ式ストーブが焚いてある。何せオランダから蒙古まで、永い歳月ロシヤ國內を彷徨つてるうちに、ストーブも餘程ロシヤ臭くなつてる――オランダ瓦に割目の出たところ、緣の羊や牧童の畫いてあるあたり、獨逸語で何が文句か書かれてあるなど、たしかに雅趣がある。壁には一ダースばかりの柱時計が掛けてあり、その內默つてるのもあれば、有つたけの音やバスでカチ〳〵カン〳〵云つてるのもある。壁にはまた蒙古や支那の偉人達の格言などが懸けてある。グンは豹の毛皮の上に安坐してゐる。イギリス人は家來衆に圍まれてグンの前に立つてゐる。家僕は椅子や丸い煤けたテーブルを運んで來る。

ミスターグレーは豫てから考へておいた長い挨拶を通譯を介して述べる。彼の聲は如何にも低い。挨拶の初めはこんなものだつた。

「グン大人、豹の皮に安坐ましますグン大人！　私共は新設鐵道の幹部であります。大人幷に其の高官の方々に敬意を表したいと思つて參りました。私共は大人に贈物を差し上げ、それから將來大人の御指導と御助言とに從つて、平和に親密にやつて行きたいと思ひまして、御相談旁々罷り出ました次第であります、それは私共の鐵道が大人の御領地を通らなければなりませんので……」

グンの顏は太陽に燒き焦された石のやう。彼は眼を落して坐つてゐる。彼の眼は黃色な瞼で掩はれて見えない。その姿はぢつとして、見通しがつかない。給仕は丸いテーブルの上に支那の茶椀や皿をならべ、箸もつけた。イギリス人の腰かける場所の前にはホークが置かれた――それも洗つた事も磨いた事もないものだ。通譯がミスター・グレーの挨拶を飜譯し終ると、グンは豹の皮から立上つて、壁に懸けられてある格言の文字の前に立ち、冷かな眼でそれを一瞥して云ふ。

「この書き物は、廢帝になつて目下隱居なされてゐる宣統帝が三歲の時賜つたものだ。帝の書かれたのは――我は鳥の

囀りを聽く、鳥の聲は到るところ同じ、何故に人間のみはいろんな聲や、いろんな言葉で話すのか？……」

グンは丸いテーブルの自分の席に近づく。テーブルの上にはたつた一本コニャクの瓶がある、それも本物ぢやなくて傳家句製の贋物。客とグンとは洋式に椅子や板張に腰かける。するとテーブルの上に次から次と限りない支那料理が運ばれる——なまこ、腐つた玉子、腐つたのが通り越して青く透き通るやうになつてゐる。それから豚の胎兒の油揚等皆これに類した、到底ヨーロッパ人には口にされさうもない料理が十種も十五種も出る。イギリス人は通譯を介して、グンに豹の皮の贈物の外にイギリス産の白馬を贈ると云ふ。グンはそれを聽いてる印に靜かに眼ばたきする。グンの手はのろい上に乾いて細い。が、指はヨーロッパ人が貴族的と云つてる美しい型で、恐ろしく長い。

然し支那の料理を出したのはたゞ食事の初めだけである。イギリス人は自分達の前の茶椀か皿を見てぼんやりしてる——なまこや蛙や豆油などのどの皿の中からも生首の眼がイギリス人を睨んでゐる。給仕はサモヴァル（玆では料理鍋のこと）を運んでくる——ロシヤものゝ先祖みたいな、銅製の青味がかつたものだ。サモヴァルはグラ／＼沸いてゐる——それに杓で木炭をくべる。給仕は木の盆の上に馬肉、牛肉、豚肉、鵞鳥、鷄、野猪、野鹿の肉を細く切つて來る。するとグンは自らその肉をサモヴァルの湯の中に入れる、鹽味をつける、胡椒を入れる、生薑、葱、にんにくを入れる、豆油を灑ぐ。これが皆サモヴァルの中で煮える。するとグンは自分の手でサモヴァルの中から肉を取り出し、客の前に置く——それを食べろと云ふ意味だ、無論蒙古式に手づかみで。グンの眼は瞬かない。壁の時計は勝手な音でバスやぼとゝぎすの啼聲など立てゝ喧ましい。グンは通譯を介して、ミスター・グレーに自分の一番上等な白馬を贈ると云ふ。ミスター・グレーは翌日彼の列車へ午餐にグンを招待する。グンは彼の云つてることを聽いた印に靜かに眼を瞬く。ミスター・グレーは——假面越しに遠廻しに——通譯を介して、グンの銀行や共通貨に興味をもつてること、並に

グンの銀行の株主になつてもいゝと云ふ。グンはそんなこと聞えないと云ふ印に眼を瞬かない。

其時ミスター・グレーは線路管區長がテーブルの下から手渡した紙片を見る。

「閣下、スチブン・グレー閣下！　どうしても一言報告しなければなりません。あの杖の先に刺してあつた首は昨晩見えなくなつた私の間諜の首です。」

ミスター・グレーは他の連中の顔を見ると、皆青い、皆馬肉が胸に塞へてゐる。ミスター・グレーの第一の仕事は早く立つて逃げ出すことだ。然し彼は假面をかぶつて腰かけてゐる。彼には最早何物も見えない。彼は從順に馬肉を手づかみで食べてゐる。彼は蒙古式の茶を飲む――茶は黍と鹽と羊の脂を入れて沸したものだ。彼は從順にグンのところにある古代の武器――劍、鈴、弓を眺める。口傳によれば帖木兒が持つたと云ふ弓と矢を眺める。グンは勿論自分を帖木兒の末孫の一人だと思つてゐる。グンは何も食べない。然しグンの近臣は手際よく熱い肉を手で掴み、手際よくそれを口に入れる。そしてテーブルの上にのしかゝるやうに脊中を丸くして噛つたり吸つたりしてる。イギリス人は品物が何であるかも見ずに夢中で食ふ。イギリス人に向つて誰も何も言はぬ。グンは蓄音器に支那のレコードをかける――ヨーロッパ人の耳には音樂の變形としか思はれぬ。時計は鳥の聲で囀づり、バスで歌ふ。

その時銅の盆の上に、グンとその伯爵や子爵の名刺を載せて、給仕がイギリス人の前にもつて來る。蒙古人の名刺は普通の四倍もあつて、それに漢字で書いてある。それで午餐の儀が濟んだ譯、イギリス人は歸ることが出來る。

イギリス人は急いで別れを告げ、俯向いたまゝソコ〳〵と入口に、馬群のやうに急ぐ。グンや其家來達はイギリス人を門まで見送る。イギリス人には、其護衛兵が捧げ銃で敬禮したのも眼に入らない。イギリス人は自動車に乘る。町の人氣(ひとけ)のない通りが後ろになり、周圍に廣い沙漠の帷が展かれた時、ミスター・グレーは自動車を止めて下りた。

ミスター・グレーは指を二本口に押し込んで物を吐き出した。それから魔法瓶の中の黑コーヒーにヒマシ油を融して飲む――ミスター・グレーの顏は青く、眼には涙が一ぱいたまつてゐる――一度に三十歳もふけた――彼が若くないことが分つた。其他のイギリス人もやはり車を下りて吐いた。通譯のボーイは平氣な顏で自動車の傍に立つてゐる。

「皆樣方は歸り途に蒙古の修道院に立寄つて喇嘛をご覽になるとの仰せでございましたが、これからその方に廻りますか？」

ミスター・グレーは力のぬけた手を振り、微かな聲で云ふ、

「いや、いや、もう澤山だ、俺はもう見た。早く列車に歸る、どうか急いで……」

自動車はすばらしい速力で空間を裂く。が、もう品位どころぢやない。日沒前の寒さはもう太陽で削られるのでなくつて、殘忍な嚴寒で削られてゐる。イギリス人は出來るだけ鼻を襟毛の中に入れ、手をポケット深く突つこんで、小さくなつて顫えてゐる……裸かの砂原のまん中に低い柵を繞らして、蒙古の修道院のお寺が建つてゐる。天然痘や黴毒で片輪になつた佝僂の喇嘛が門の傍でかぢけてゐる。第一番目の寺の本尊の左右には素的に恐しい形相をした、人の丈ほどの偶像が一對づつ並んでゐる。それ等の偶像は舌と牙を出し、眼は憤怒に血ばしつて眼窩からむき出し、眉毛は逆立ち、額には角が生えてゐる。手には大きな劍と丸太を持つてゐる。その足の下には人間の形をしたものが苦悶してゐる――この鬼のやうな偶像たちはその恐ろしい顏付で惡靈惡人を脅かし、これを拂ひ除けて本尊の神を守護してゐるのである。

佝僂の喇嘛は門の傍にかぢけてゐる。やがて彼は寺の中にはいつて鐘をたゝく――神々が彼の念佛を聽くやうに、彼が熱心にお寺の番をしてることを聽入れるやうに……イギリス人の自動車は列車に向つて疾走する。

…………………

夕刻にはイギリス人は展望車に納まつて、ぐつたりしてゐる、入浴の後だ。イギリス人は日中の凍えたからだを温めるつもりで、展望車の中が熱いほど火を焚いた。展望車の周圍には護衛の支那兵が増員されて見張つてゐる。イギリス人は默つてゐる。

「時にどうかね、君の計劃は？」と、ミスター・グレーは算盤哲學者を顧みて―「通譯のボーイも矢張り逃げたのか？奴もやつぱり枕の上に曝されると思ふかね、君？ それでも反對に奴は蒙古人の間諜だつたかな？ 何しろ線路管區長の話では、通譯の奴等僕達をいつも犬つころのイギリス人て惡口云つてやがつたさうだぜ――管區長は不幸にも少しばかり蒙古語が解るんだよ！時に君の計劃はどうかね？」

算盤哲學者は腹立しげに答へる。彼の顏は決して眠むさうではない、もうしつかりしてゐた。彼のカーキ服にはそれが似つかない。それに眼鏡もしつかり載つてゐる。

「なあに、僕達のところにも別な手段がありますよ。そりや無論野蠻人に對してはもつと手輕でなくちやなりません。まあご覽なさい、明日僕達の午餐が何を示すか。此處では僕は蒙古人と本氣で話しますよ、生首を持ち出すなんか巫山戲た眞似はぬきにして。それから僕達を犬つころつて……」

「ところが其犬が」と、ミスター・グレーは遮つて―「僕等に十分買收されてた間諜を沙漠のまん中で食つちまつたとさ。」

「で、その犬つころと僕達を嘲けつた事に就いてはです」と、算盤哲學者は言ふ、「今更彼等の道德を持ち出したところで毛皮の外套が出來ると云ふものでもありませんからな。それよりも算盤です、住民が幾人――僕の手帖に數字がちや

んと書きつけてあります、ご覧なさい——家畜が幾匹、面積が幾町と、勘定は明瞭です。若し此處に一萬パウンドも投資しましたら……」

然るに此處に不可解な事件が突發する。それが、何であつたかイギリス人に了解出來たのは、列車が信號もポイントも忘れて驅け出し、すばらしい勢で興安嶺の麓に驅け拔けた時であつた——何もさう狂氣の沙汰で馳け出すには及ばないのに。

實は初め列車の附近の群集が騷ぎ出したのだ。日直の驛員が展望車にやつて來て、ミスター・グレーにグンから贈られた馬を蒙古人が連れて來たから、直接ミスター・グレーに渡したいとの希望を傳へた。でミスター・グレーはプラットホームに出た。其處には騎馬の人々が群集してゐた。金色や銀色の糸で縫ひとられた鞍褥の馬が列車の前で鼻を鳴らしてゐた。グンからの使者の老人はまるで馬と一緒に生れ出たやうな形で馬に跨つてゐた。老人の顏はグンの顏と同じく沙漠の燒け石そつくりだ。彼の乘つて來た野性的な沙漠の馬——たしかに觀賞の値打はあつた——その馬は現在地球上に生存する名馬の一つに數へらるゝに十分であつた。使者の老人は馬から下りた。家僕はそれを引いてミスター・グレーの前に來て叩頭し、頭を帶まで下げたまゝ手綱をミスター・グレーに渡した。ミスター・グレーはグンに對する感謝の言葉を英語で云ひかけたが、それを云ひ終ることが出來なかつた——突然の銃聲が言葉を遮つた。彈丸は多分まつ直に名馬の腦髓を貫いたものらしい。手綱はそのまゝミスター・グレーの手の中にあつた。なぜなら馬は蹴立つ間もなく、バタリと斃れたからだ。周圍を取卷いてゐた騎馬の人々も一齊に馬を蹴出して四方に散つた。

それ以上銃聲は聞えなかつた。一瞬間の後プラットホームには人も、蒙古人も、護衛の支那兵も恐く影を消し、たゞ馬だけが可哀相に斃れてゐた——馬はたしかに見事な逸物であつた。ミスター・グレーは辛うじて發車の準備を命じた。

白馬はプラットホームに繋れてゐた。プラットホームには人一人見えなかつた。其時、驛の附屬家屋の中から人間とは思はれぬ勢で跳び出した男があつた──彼は展望車目蒐けて逸散に駈けた。彼は白馬に躓いたが、それを跳び越へ、展望車に跳び上つた。それは線路管區長の技師だつた。彼は眼窩からとび出したヤクート人の眼でイギリス人を見廻して呟いた。

「早く、早く、やつとの事で窓から逃げ出して來ました。蒙古人に摑まつたんです。まだあつちには子供と家内が殘つてゐます。早く、早く、助けて下さい！

此瞬間に列車は動き出した。裝甲板の鋼鐵が齒ぎしり立てた。其瞬間一發の彈丸が展望車の窓ガラスに當り、ガラスを破つて唸つた。イギリス人は床の上に俯伏して絨緞にへばり着いた。算盤哲學者は金切聲を立てて叫んだ。

「全速力、全速力！ありつたけの蒸氣！おい誰だ、其處にゐるのは、早く、早く！」

イギリス人の前にはヤクート人の顏した線路管區長が立つてゐる。

「早く、早く。子供と家内が殘つてゐます。助けて下さい、早く、早く！」

「全速力、ありつたけの蒸氣！前へ！」と、生れつき臆病な算盤哲學者は兇暴に怒鳴り吠えたが、すぐ絨緞にへばりつき、頭をかくして沈默した。

四

動亂！動亂！

夜の沙漠は黒く、涯がない。月は沙漠の上を死人のやうに歩く──ヨーロッパ人の眼には、アジア存在の哲學を暗示

してると思はれるその月が。沙漠はヨーロッパ人にとつては荒原であるが、蒙古人にとつては故鄕である。蒙古人アダ・ベキルが興安嶺の頂上で列車を乘り捨てたあの晩、彼は終夜馬を馳せた。數頭の馬が斷崖の上の細い山道を、自分の危險も脊中の主人の危險も別段氣にも留めずに進んだ時、蒙古人の間には斷片的な言葉が交へられた。

「興安のあつちぢやどんな事聞いたね？」

「支那にはいて見たが、あつちぢや何でもイギリス人が采配ふつてるんだぜ。」

「庫倫はもうロシヤに加擔したよ──俺達の進む道は一つだ。どんなことがあつても蒙古はイギリス人には渡すまい。」

「奥地の蒙古人は此方のグズ〳〵してるのを不滿に思つてる。俺のところにある手紙にも、機關銃や小銃で武裝された數千の騎兵が、もう準備出來てるんださうだ。そして今にも命令があれば、蹶起して庫倫、それから×××と手を握ると云つてるぜ。」

「グンだつて何處へも行けやしない──結局俺達と一緒になる外ない。」

「グンは無論、外國の奴隷になつた支那から獨立するつて宣言するさ。」

「庫倫からは義勇兵がもう此方を援けにやつて來てるし、軍事教官も來る。」

「沙漠地方の谷で、春に川になるところは、イギリス人から攻撃される時を顧慮して、革命軍のために橋を架けて置から。」

「ロシヤ國民はいま兄弟のやうにやつてるさうだ、俺達もロシヤ國民のところに行から。」

このすこぶる簡單な文句の中には、蒙古人にとつて動亂の非常な複雜さが──自由と革命の××な複雜さが含まれてゐた。

馬が斷崖の上の細い山道を辿つて進んだ時に、蒙古人達はこんな言葉を交へて自分達の見聞を同僚に分つた。

山の彼方には勢ひよく馬を飛ばす沙漠があつた——闇に消えて行く無限の自由境、大空には月の氷、星の信號、大地には馬の鼻息、馬の汗の臭ひ、飛躍の風、手には手綱、目に入るのは頂をさげた馬の首、壓しつかつた馬の耳、風に飛ぶ馬の鬣、馬上の人には——偉大なる感情と思想の嵐があつた。感情も思想も夜の暗を通して、幾千基米の沙漠を通してタメルランの時代を見た、蒙古の自由と偉大の日を見た、そして尙ほ限りない將來の日、鮮血の日、悲哀の日、歡喜の日を見た——闇に焚火のゆらぐ動亂の沙漠を見た。闇の中に馬の蹄、荷車の軋る音を聽いた。そして嗅いだ、同胞主義の血を嗅いだ、兄弟のため、信義のため、義務のため、自由のための死を嗅いだ。同胞主義のために起つ自由と血の勇ましい喜びを嗅いだ。馬は息の咽枯れるまで馳けた。そこで騎馬の人々は馬を代へて更に疾驅した——馬は代へても、其意志、其大きな心、其廣大な思想は變らばこそ——思想の眼は、呻きと號び、涙と叫び——喜びの叫び、勝利の叫び、輜重の軌音、馬蹄の響、群集の喊聲……を見るのであつた。沙漠の空が微かに白んで、名殘の星が輝く頃、いつも夜明一時間ほど前は沙漠の暗が一しほ濃くなる——その時分騎馬の人々はとある沙漠の宿場に着いた。其處には三四軒の粘土の小屋が低い所に立ち列んで、土着の蒙古人が棲んでゐた。その周圍には奥地から此處にやつて來た人々の天幕も張つてあつた。今夜この宿場では誰一人眠らない、然し火影は一つもなかつた。犬は宿場が騷ぎ出す餘程以前から、自分の遠吠でそれを豫告してゐた。この宿場には革命本部があつた、秘密本部があつた。宿場からも騎馬の人々が遠く沙漠の中に出て、今來た連中を迎へた。其時馬の蹄の音が感情と思想とを掩ふた——動亂の眞實な蹄の音、動亂の眞實な喊聲。人々は粘土小屋の中に集まつた。小屋の中は非常に狭苦しかつた。坐るものもあり、床に立つものもあり、入口の外にさへ立つものもあつた。小屋の中にはランプが點けられた。小屋の中は靜かで沈默勝であつた——最早互に語るべく殘された何の話も無かつたのであらう。

話があつても極めて短かい。

「今か、それとも永久に駄目か。ロシヤ國民か、それとも支那がイギリス人に……」

「今直ぐに全部馬に跨れ、沙漠の中へ向つて……ウラインもホシユンもアウールもウメートも皆起つた、沙漠中殘らず馬に跨れ……」

「今直ぐに庫倫へ、ロシヤへ、蹶起した兄弟達を助けに。そして東蒙古が兄達に習つてその後に續くと云ふことを言ひに……」

「グンに對しては死か、でなければ彼は、この沙漠が革命に參加し、反旗を擧げ、新しき人生の路に進むといふことを宣言するか、どつちかだ。」

「ヨーロツパ人を殘らず沙漠から追へ！」

「誰でもヨーロツパ人に組する奴には死だ。」

……小屋の粘土壁の内側は靜かで、口數少なく、默り勝だ。

と、間もなく一大事—動亂！動亂！沙漠の端から端へ騎馬が飛ぶ。馬は前脚を頭の下まで蹴り込み、人は馬の背中に根が生えたやう。心と思想は馬を追越し、沙漠一面に烽火が上る。一人の騎馬は幾百の騎馬となり、荷車が軋り、橇が修繕される。銃も手入される。劍も研かれる。……

太陽はまだ沙漠の上に目を覺まさない、まだ藤紫色の夜だ。グンの城内は無言のまゝ、城門の傍には番兵が眠つてる。其の時騎馬の人々が城門に近づく。門の傍で人が呻く—「貴様は蒙古人だ、蒙古人の群に賣國奴か？」—門の傍の枕の

先に人間の生首が出る――枝の先に！　「胴の方は犬の御馳走だ。イギリス人の通る道傍に捨てゝ置け、勝手に見せてやれ！」――するとその後からまた騎馬の人々が近づく。城門は既に開かれてある。騎馬の人々は城内に入る。グンは豹の皮の敷いてある居間で彼等を待つてゐる。グンの顔には太陽に燒かれた沙漠の石のやうなところが少しも見えない。グンはまつ直に立つて今はいつて來た騎馬の面々を鷲のやうな眼で見てゐる。

「まア坐るがいゝ」と、グンは云つて、自分が先づ坐る。別に豹の皮の上ではない、直ちに地面に胡坐をかく。人々はその周圍にやはり地面に胡坐をかき、手を下げる――「煙草をやるがよい」と、グンは云ふ。そして銀で被ふた古びた細長い煙管を出して靜かに吸ふ。人々も同じく吸ふ。給仕は圓形に居列ぶ人々のまん中に粘土製の火鉢を置く。

「で、イギリス人は？」と、グンは訊ねた。

「殿下、あなたはお歲を召されても智識が豊かで、奇智がおありだ。そりや支那人と一緒になつて私共臣下の心に反對して治められたこともありましたが、それは過去つた事です。で、私共は祖國の歴史を新しく建て直すために反旗を翻すつもりです。この城の入口にはその血祭として賣國奴の首がもう枝に刺してあります――それは今改めてお耳に入れて置きます。私共の望んでるところも既に御承知でござりませう。反旗は高く掲げられました。ですから直ちにシン・パルガの自由獨立を宣言なされればそれでよいのです――そして名譽をもつて庫倫に行つて戴くのです。」

「宜しい」と、グンは答へた――「が、イギリス人は大砲を持つてるか？」

「それは持つてます。然し私共も權利と沙漠をもつてゐます。私共の所には來客を好遇する神聖な風習があります。ですからあなたはイギリス人を迎へて適當に過せられたらよいです。そうしたら彼等も○の上の生首が何を意味するか位は解するでせう。私共の選擇はむづかしいものではありません。あなたは支那に於けるイギリス人のことを話されまし

た。が、私共には寧ろロシヤ民族と握手するのが近道です。」

「宜しい」とグンは云つた、「アダ・ベキル、おまへが旗擧げをしたのか？おまへはイギリス人と一緒に來たね。だからおまへがイギリス人を接待するがいゝ、そして送るものもおまへがすればよいのだ。だが今は俺は眠い、皆も眠るがよい。」

…………………

………動亂！　動亂！

馬は鞍下で嘶く。夜。夜明に間もない。鞍上の騎士は馬と一體だ。夜の闇に、沙漠の中に、闇を透し沙漠を透して見えるものは動亂のどよめき、荷車の軋み、騎士の叫び、馬蹄の響……恐しく廣い沙漠の中には狼煙が燃え上る、狼煙がくすぶる。遙か彼方には犬の遠吠が聞える……でも沙漠は依然として無言の靜かさだ、永遠の恐しい靜かさだ。馬は鞍下で嘶く。——動亂！　動亂！……

大きな太陽が沙漠の上にあがる。騎士の四肢は連續の驅足に感覺がなくなつた。馬は嘶く。太陽は上る——赤く、圓く、大きい。そこで騎士は悟つた——彼にとつて、蒙古人にとつて、この蒙古の太陽の胸には——大きな善良な心が宿つてゐることを。

丁度この時支那人町の豆油製造所では、イギリス人の監督が竹の棒をもつて、大豆の莢の上に寢轉ろがつてゐる支那人を朝の仕事に敲き起してゐた………

手紙の一節

（別に誰に宛てゝ書き送つたのでもないが、この物語りの結びとして掲げる。）

「……僕はロシヤ人だ――これですべてが言ひ盡されてゐる！　何故なれば、ロシヤ人は皆いつも擾亂を好むから。それに僕は丁度、舊い民族的文化と道徳のあらゆる形や…………………………、…………………………
……、…………、………………………………………………てる時代に生れ合せたのだ。そして僕はこの擾亂の嘶きの日に生きてゐる――…………………」

一九二六年五月十八日

東京麻布區箪笥町の客舍に於て、

編輯後記

◇日華間に政府と政府との儀禮交換はある。實業家と實業家との交歡もある。しかし文壇、論壇の交歡は今回の本誌の計畫がはじめてである。それだけいろいろの困難や、冒險やが伴つた。

◇第一どこに現代支那を流るゝ思想の主流があるか、そしてその代表的筆者をどこに求めるか、現在中華の文壇、論壇が何れの地位を世界に要求しているか、なかく考へねばならぬことが多かつた。

◇ただ單に、原稿をまとめるだけでも一苦勞も二苦勞もあつた。上村は硝煙の間をさへ馳驅した。お負けに飜譯なぞは英、佛、獨と異つてどこにいい譯者があるか、暗中模索の態であつた。しかし出來上つた成績は全體を通じて意想外の出來榮えを示した。本書は全く現代支那の縮圖として我大衆の誰もが一讀すべき趣味、實益兩つながらの有意義の文獻でジャーナリズム史上に須く特記さるべき價値あると共に、日華親善にこれ以上の好企劃はなかつたのであろうことを喜ぶものである。

◇こうした企劃は來年に於ても試みられるだろう、そしてその範圍が中華民國のみに限られないであろうと共に、その論ずる範圍も、趣味創作欄にもいろいろと新しい試みが展開されて行くだろう。

◇こうして我日本の雜誌で現代支那の思想文藝が綜合づけられたことは、たしかに東洋誌界の一記錄をなしたものであるが、今回の擧に衝動されて支那の文學、藝術、論壇が一層根深く掘り下げられ、世界的關渉を持つ上に一つの礎石となることが出來たらこれ以上の幸福はない。

◇今回の「現代支那號」をつくる上に小幡酉良、内山完造氏の與へられた多大の便宜は本社の厚く感謝するところである。

◇本誌七月號は藤森氏作「犧牲」倉田氏作「赤い靈魂」のために發賣禁止となりました。前者は創作中で姦夫に擬せられしものを賞揚したのは我國の良風美俗を紊るもの、後者は暴力肯定の辭があつたためだそうです。本社は震災後千辛萬苦して漸く舊態に回復の途上にあつたが、この厄難に逢つて益々努力猛進を强ひられた。夥多の讀者に本誌が總て行渡らなかつた事は遺憾であつたが、しかし今後に於て數倍せる質の改良が之によつて酬ゐらるるならば今回のこの事が幸となるかも知れぬ。何れ近く内務當局の執つた態度については嚴正なる批判を得たいと思つている。一言親愛なる讀者におことわりいたします。

◇有島武郎氏の遺稿でなかなか面白いものが發見されました。洋行中父母へ宛てた百に近き通信、手帖、愛妻通信等々、これは氏の令弟佐藤隆三氏によつて取りまとめられ、近々上梓の上、本社から發賣さるゝこととなつている。

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	台灣支那共郵税不用
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	台灣支那共郵税不用

本社は六月廿四日再び芝區愛宕下町一ノ一の舊位置に移轉しました。

(價壹圓五拾錢)

大正拾五年七月四日 印刷納本
大正拾五年七月六日 發行

編輯兼發行人 東京市芝區愛宕下町一ノ一 山本三生
印刷人

印刷所 東京牛込區市谷加賀町一ノ一二 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下一ノ一 改造社
振替東京八四〇二
電話銀座四五五八

改造社出版圖書目錄

（大正十五年五月現在）

（一）經濟及社會

著（譯）者名	書名	內容一斑	版數	型頁數	定價送料
法學博士 穂積重遠著	離婚制度の研究	○離縁狀と縁切寺（）縁切寺滿德寺○クリスト教の婚姻非解消主義○イギリス其他各國の離婚制度の研究	1刷	菊上 九四〇頁	一〇・〇〇円 内・三六
法學博士 河田嗣郎著	家族制度と婦人問題	（一）家族制度論（）家族制度の性質と機能○外五項（二）婦人問題○女子勞働問題等を檢討す	7版	四六上 三三三	二・〇〇 ・二〇
京大教授 宮本英雄著	婚姻の基調	婚姻法の將來○大籠制の貞操○寡婦の再婚○離婚防止○婚姻媒酌○家族制度と婚姻等結婚に關する研究	5版	四六上 三〇八	一・五〇 ・一八
法學博士 福田德三著	社會政策と階級鬪爭	（一）社會政策序論○「社會」の發見○外三項（二）階級鬪爭と其當事者等其他の深刻なる研究	30版	四六上 五七四	三・〇〇 ・二四
法學博士 福田德三著	社會運動と勞銀制度	（一）社會運動の理論的根據（二）勞働爭議の意義及種類（三）勞銀制度を博士一流に檢討す	15版	四六上 四三〇	二・五〇 ・二〇
法學博士 福田德三著	ボルシェヴィズム研究	○マルキシズムとしてのボルシェヴィズム○レニン破壞論○ボルシェヴィズム○「資本主義への降伏」等	10版	四六上 三九四	二・九〇 ・二二
慶大教授 小泉信三著	改訂 價値論と社會主義	○緒論○ロオドベルトス研究（）マルクス研究（）雜錄（三章）○追補河上博士との論戰記錄	8版	菊上 四三三	三・二〇 ・二八
商大教授 孫田秀春著	勞働法總論	○勞働法の基本觀念、研究方法の變遷、理想○勞働法の法源○勞働法の効力等勞働法概論	5版	菊上 三四〇	二・六〇 ・二六
ジノヴィエフ原著 高士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	○組合運動の原則的諸問題○ロシヤに於ける組合運動○勞働組合世界的名文獻の飜譯	4版	四六並 一六四	・九〇 ・一四
ニコライ・レーニン原著 茂森唯士譯	レーニニズム	○ロシヤ革命の國際的意義○ボリシエキキーの成功の一根本條件○ボリシエヰーズム發達の諸期等	4版	四六並 二二四	一・二〇 ・一六

編輯後記

◇日華間に政府と政府との儀禮交換はある。實業家と實業家との交歡もある。しかし文壇、論壇の交歡は今回の本誌の計畫がはじめてである。それだけいろいろの困難や、冒險やが伴つた。

◇第一どこに現代支那を流るゝ思想の主流があるか、そしてその代表的筆者をどこに求めるか、現在中華の文壇、論壇が何れの地位を世界に要求しているか、なか／＼考へねばならぬことが多かつた。

◇ただ單に、原稿をまとめるだけでも一苦勞も二苦勞もあつた。上村は硝煙の間をさへ馳驅した。お負けに飜譯なぞは英、佛、獨と異つてどこにいい譯者があるか、暗中模索の態であつた。しかし出來上つた成績は全體を通じて意想外の出來榮えを示した。本書は全く現代支那の縮圖として我大衆の誰もが一讀すべき趣味、實益兩つながらの有意義の文獻でジャーナリズム史上に褒く特記さるべき價値あると共に、日華親善にこれ以上の好企劃はなかつたのであらうことを喜ぶものである。

◇こうした企劃は來年に於ても試みられるだろう、そしてその範圍が中華民國のみに限られないであろうと共に、その論ずる範圍も、趣味創作欄にもいろいろと新しい試みが展開されて行くだろう。

◇こうして我日本の雜誌で現代支那の思想文藝が綜合づけられたことは、たしかに東洋誌界の一記錄をなしたものであるが、今回の擧に衝動されて支那の文學、藝術、論壇が一層根深く掘り下げられ、世界的關渉を持つ上に一つの礎石となることが出來たらこれ以上の幸福はない。

◇今回の「現代支那號」をつくる上に小幡酉良、内山完造氏の與へられた多大の便宜は本社の厚く感謝するところである。

◇本誌七月號は藤森氏作「犧牲」介川氏作「赤い靈魂」のために發賣禁止となりました。前者は創作中で畏大に擬せられしものを賞揚したのは我國の良風美俗を紊るもの、後者は暴力肯定の辭があつたためだそうです。本社は震災後千辛萬苦して漸く舊態に回復の途上にあつたが、この厄難に逢つて益々努力猛進を強ひられた。夥多の讀者に本誌が總て行渡らなかつた事は遺憾であつたが、しかし今後に於て數倍せる質の改良が之によつて酬ゐらるるならば今回のこの事が幸となるかも知れぬ。何れ近く内務當局の執つた態度については嚴正なる批判を得たいと思つている。一言親愛なる讀者におことわりいたします。

◇有島武郎氏の遺稿でなかなか面白いものが發見されました。洋行中父母へ宛てた百に近き通信、手帖、愛妻通信等々、これは氏の令弟佐藤隆三氏によつて取りまとめられ、近々上梓の上、本社から發賣さるゝこととなつている。

改造定價

冊數	定價	郵代
壹冊	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	台大鮮共郵税不用
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	台大鮮共郵税不用

本社は六月廿四日再び芝區愛宕下町一ノ一の舊位置に移轉しました。

大正拾五年七月四日　印刷納本
大正拾五年七月六日　發行

（價壹圓五拾錢）

東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯兼發行人　山本三生
東京牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷人
印刷所　秀英舍

東京芝區愛宕下一ノ一
發行所　改造社
振替東京八四〇二
電話銀座四五五八

改造社出版圖書目錄

（大正十五年五月現在）

（1）經濟及社會

著（譯）者名	書名	內容一斑	版數	型 頁數	定價 送料
法學博士 穗積重遠著	離婚制度の研究	○離緣狀と緣切寺○緣切寺滿德寺○クリスト敎の婚姻非解消主義○イギリス其他各國の離婚制度の研究	1刷	菊上 九四〇頁	一・〇〇 內・三六
法學博士 河田嗣郎著	家族制度と婦人問題	（一）家族制度論○家族制度の性質と機能○外五項（二）婦人問題○女子勞働問題等を檢討す	7版	四六上 三五三	二・〇〇 ・二〇
京大教授 宮本英雄著	婚姻の基調	婚姻法の將來○夫婦制の貞操○寡婦の再婚○離婚防止○婚姻媒酌○家族制度と婚姻等結婚に關する研究	5版	四六上 三〇八	一・五〇 ・一八
法學博士 福田德三著	社會政策と階級鬪爭	（一）社會政策序論○「社會」の發見○外三項（二）階級鬪爭と其當事者等其他の深刻なる研究	30版	四六上 七一四	三・〇〇 ・二四
法學博士 福田德三著	社會運動と勞銀制度	（一）社會運動の理論的根據（二）勞働爭議の意義及種類（三）勞銀制度を博士一流に檢討す	15版	四六上 四三〇	二・五〇 ・二〇
法學博士 福田德三著	ボルシェヴヰズム研究	○マルキシズムとしてのボルシェヴヰズム○レニン國家論○ボルシェヴヰズム○「資本主義への降伏」等	10版	四六上 五九四	二・九〇 ・二三
慶大教授 小泉信三著	改訂 價値論と社會主義	○緒論○ロオドベルトス研究○マルクス研究○雜錄（三章）○追補河上博士との論戰記錄	8版	菊上 四五三	三・二〇 ・二八
商大教授 孫田秀春著	勞働法總論	○勞働法の基本觀念、研究方法の變遷、理想○勞働法の法源○勞働法の効力等勞働法概論	5版	菊上 三四〇	二・六〇 ・二六
ジノヴィエフ原著 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	○組合運動の原則的諸問題○ロシヤに於ける組合運動○勞働組合世界的名文獻の飜譯	4版	四六並 一六四	一・九〇 ・一四
ニコライレーニン原著 茂森唯士譯	レーニニズム	○ロシヤ革命の國際的意義○ボリシェヰキーの成功の一根本條件○ボリシェヰーズム發達の諸期等	4版	四六並 二二四	一・二〇 ・一六

著者	書名	内容	版	體裁	定價・送料
經濟學博士 本庄榮治郎著	日本社會史	○日本社會史の觀念○氏族制度の社會○莊園制度の社會○分權的封建制度の社會○郡縣制度の社會等	25版	菊上 三九六	二・五〇 ・二四
法學博士 河田嗣郎著	農村問題と對策	○農村問題と對策○農業改造方策○都會と田舍との分裂○農民土地愛着心冷却の傾向等外數項の熱論	17版	四六上 三四四	二・〇〇 ・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	○序章○部落有財產と農村生活○永小作の法律關係○小作問題と小作法○小作爭議と小作調停法	22版	四六上 四一八	二・五〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	嘘の効用	○嘘の效用○改造問題と明治時代の省察○役人の頭○小智慧に捉はれた現代の法律學○其他八項	42版	四六上 四二四	二・六〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	新法學の權威が新しき國民はいかに法律を心得ねばならぬかを說いた法治國民への國民讀本	24版	四六上 四一三	二・五〇 ・二二
佛國藏相カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	○大戰の問題○世界的破綻○歐洲再生の力○佛國、一般財政經濟の混亂○佛國賠償問題と戰爭債務等	4版	四六並 三四〇	一・三〇 ・一六
森戸辰男著	靑年學徒に訴ふ	近時澎湃たる社會科學問題に關し政府者に對し巨砲を放つ。學生諸君は本問題の內容發展を本書で知れ	18版	四六並 六〇	・三〇 ・一二
ウンターマン著 森寧一譯	哲學思想の史的考察	○著者はマルクス派學徒で古代より近代に至る哲學思想の史的考察と共に進化學說の變遷を語るもの	3版	菊上 三一三	二・〇〇 ・二二
ヨゼフ・ディツゲン原著 山川均譯	無產階級の哲學	現代のブルジョア哲學に對し無產哲學の新提唱新時代學徒の必讀すべき文獻	5版	四六上 三八八	二・五〇 ・二二
賀川豊彦著	生存競爭の哲學	生存競爭の原理を闡明し生存衝動の哲理を說き生命力と愛の力が生存競爭を超越するを進化論的に認す	12版	四六上 三五〇	二・〇〇 ・二二
文學博士 高田保馬著	階級及第三史觀	(一)階級篇○階級の本質○マルクス的階級概念外一篇(二)第三史觀篇○經濟史觀より第三史觀まで等	5版	菊上 五〇四	二・八〇 ・二四
森戸辰男著	思想と鬪爭	○震災と主義者と反動勢力○國粹主義者と政治的殺人○大杉榮君の追憶○外四項	6版	四六上 三六六	二・〇〇 ・二〇
細井和喜蔵著	女工哀史	我國の工場及女工生活を知る世界的勞働記錄十五ケ年の氏の血と肉とから成る本書を國民は一讀せよ	24版	四六並 四六八	二・〇〇 ・二〇
トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	○非十月革命文學○○革命の文學的同伴者○アレクサンドル・ブロック○未來派○詩の形○外四項	4版	四六上 三九六	二・〇〇 ・二〇

著者	書名	内容	版	體裁・頁數	定價・送料
帝大助教 平野義太郎著	法律における階級鬪爭	○法律に於ける階級鬪爭○階級鬪爭と階級鬪爭○ローマ法○資本主義的法律組織の下に於ける階級鬪爭○外四章	9版	菊上 四三二	二・五〇 ・二六
法學博士 河田嗣郎著	農政四十三講	○農村問題解決の鍵鑰○小作爭議と農村破壞○外四十一項、農村問題を知らんとする人の必讀の書	5版	四六上 三六八	二・五〇 ・二二
法學博士 堀江歸一著	改訂增補 國際經濟と國民經濟	○世界平和と國民經濟並に國際經濟○世界經濟上より見たるゼノア會議○對外債務廢棄問題○外七項	9版	菊上 四一三	二・五〇 ・二六
法學博士 堀江歸一著	續國際經濟と國民經濟	○經濟組織の改造と政治の革新○政治的議會より經濟的議會へ○產業資金の供給○外九項	5版	四六上 三九四	二・五〇 ・二二
農學博士 小野武夫著	農村研究講話	○緒言○基礎的研究の必要及び其綱領○農村問題とは何ぞや○村落の研究○農家經濟の研究等	5版	四六上 三二八	一・五〇 ・一八
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理 (分册三) 需要・供給・價値の一般關係	現代の經濟學書中、此書程、學としての生命と光の鮮かなるものはない。本篇は主として生產を解く。	新刊	菊上 四九八	三・五〇 ・二六
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理 (分册四) 國民所得の分配	譯者は、晩年のマーシャルに親炙したる人、原理に流れつゝある血を其儘移植したる名譯。	新刊	菊上 五四〇	三・七〇 ・二八
經濟學博士 本庄榮治郎著	近世農村問題史論	經濟史の權威たる著者が近世日本に於ける農村問題を史的に考察したる日本農政史の一方面である。	6版	四六上 三六〇	二・三〇 ・二二
京大講師 山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	○序論○利子禁止思想の歷史○中世寺院法と猶太人○中世寺院法と商業○中世寺院法と組合及び會社等	4版	四六上 三二三	一・五〇 ・一八
ブハーリン原著 富士辰馬・廣田千元譯	唯物史觀	勞農露國第一の理論家たる著者が現代思潮の指導原理たる唯物史觀を平易に徹底的に譯述せるもの	最新	四六上 六二〇	三・五〇 ・二八
ロマン・ローラン著 大澤章譯	先立ちて來る者	深遠たる思想と熱意ある筆致を以て世界の思想界に牢乎たる位置を占むるローランの「先驅者」の翻譯。	1刷	四六並 二九六	一・五〇 ・一六

(2) 政治及法律

著者	書名	内容	版	體裁・頁數	定價・送料
法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	○序章○部落有財產と農村生活○永小作の法律關係○小作問題と小作法○小作爭議と小作調停法	22版	四六上 四二八	二・五〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	○法窓閑話○誤判賠償の根本原理○軍法會議廢止論○小作人と土地所有權○法律小話(十二話)○外二篇	20版	四六上 四二三	二・五〇 ・二二

帝大助教 平野義太郎著	法律における階級鬪爭	○法律に於ける階級闘爭○階級闘爭とローマ法○資本主義的法律組織の下に於ける階級闘爭○外四章	8版	菊上 三二	二・五〇 ・二六
商大教授 孫田秀春著	勞働法總論	○勞働法の基本觀念○勞働法の研究方法○勞働法制の變遷○勞働法の理想○外六章	5版	菊上 三四〇	二・六〇 ・二六
早大教授 大山郁夫著	現代日本の政治過程	(一)現代に於ける社會思想及び政治事實の進展(二)現代日本の政治過程(三)多元的國家觀の法理	5版	四六上 三二四	二・五〇 ・二二
法學博士 森莊三郎著	法制講話	○總論○親族法及び相續法○皇室法○憲法○全國の中學師範女學校の教科書、參考書としての最良書	6版	四六上 四四四	二・五〇 ・二二
經濟學博士 本庄榮治郎著	近世農村問題史論	經濟史の權威たる著者が近世日本に於ける農村問題を史的に考察したる日本農政史の一方面である。	6版	四六上 三六〇	二・三〇 ・二二
京大教授 宮本英雄著	婚姻の基調	○婚姻法の將來○夫婦間の貞操○寡婦の再婚○離婚の防止○婚姻媒酌○家族制度と婚姻	5版	四六上 二〇八	一・五〇 ・一八
京大講師 山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	○序論○利子禁止思想の歴史○中世寺院法と猶太人○中世寺院法と商業○中世寺院法と組合及び會社等	4版	四六上 二三三	一・五〇 ・一八
佛國藏相 カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	○大戰の苦悶○世界的破綻○歐州再生の力○佛國一般經濟の混亂○佛國賠償問題と戰爭債務○外三章	4版	四六並 二四〇	一・三〇 ・一六
ニコライ・レーニン著 茂森唯士譯	レーニニズム	○ロシヤ革命の國際的意義○ボリシエキキーの成功の一根本條件○ボリシエキズム發達の諸期○外五章	4版	四六並 二二四	一・二〇 ・一六
デー・ジノヴイエフ著 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	○組合運動の原則的諸問題○ロシヤに於ける組合運動○勞働組合――刻下最必要の一文献	4版	四六並 一六四	・九〇 ・一四
文學博士 朝永三十郎著	カントの平和論	○カントの平和論○カントと政治○思想問題と哲學的精神等――カント研究者に必要の一書	7版	四六上 二六六	一・五〇 ・一八
内務事務官 三宅司法書記官著	增補 普通選擧法要綱	普通選擧法に對する尤も信頼すべき當局者の釋義。各府縣警察署にては皆本書を參考として購買した	8版	菊半截 二七六	・八〇 ・一四

(3) 哲學及宗教

文學博士 松本亦太郎著	心理學講話	一般心理學を體得せんと欲する學徒のために解り易く書かれた我國で心理學の最良書	34版	四六上 三六六	四・二〇 ・二六

文學博士 松本亦太郎著	智能心理學	人間力の智能方面を、博士獨自の廣汎にして精緻なる立場より研究したるもの。	新刊	菊上 一〇四〇	九・〇〇 內・三六
文學博士 桑田芳藏著	ヴントの民族心理學	(一)序論(二)本論民族心理學(三)別論文化と歷史〇文化の領域〇文化の將來 四 附錄	7版	四六上 五二六	三・五〇 ・二四
文學博士 米田庄太郎著	文化哲學叢書第一篇 リッケルトの歷史哲學	〇リッケルトは現代哲學の巨星、氏の哲學を尤も解り易く說いた一書米田博士の懇到の釋義亦喜ぶべし	8版	四六上 六六六	四・七〇 ・二六
板垣鷹穗著	文化哲學叢書第二篇 新カント派の歷史哲學	〇歷史實在の意味〇歷史哲學の概念と歷史〇カントの批判哲學と科學方法論〇外三章	5版	四六上 三二八	一・五〇 ・一八
帝大教授 恒藤恭著	文化哲學叢書第三篇 ジムメルの經濟哲學	〇序說〇本論價値と貨幣〇貨幣と貨幣價値〇目的系列に於ける貨幣〇附錄著作年表參考書	改版	四六上 四四八	三・〇〇 ・二〇
廣島高師教授 勝部謙造著	文化哲學叢書第四篇 ディルタイの哲學	〇傳記及び重なる著作〇ディルタイの哲學的立場〇精神科學論〇世界觀說〇藝術論〇結語	9版	四六上 二八四	一・八〇 ・二〇
リッケルト原著 小川義章譯	生の哲學	理想の無き生の偶像を禮讚するの愚を悟り眞の生の意義を闡明せるもの新理想の巨擘たる著者の傑作	5版	菊上 五四六	二・八〇 ・二四
京大教授 植田壽藏著	藝術哲學	〇藝術的理念〇藝術的自然〇藝術家〇藝術作品〇觀照—藝術の進展性を新銳の氏が熱烈に論究す	5版	菊上 五四四	二・七〇 ・二四
佐藤繁彥著	體驗宗教の研究	(一)序論〇體驗宗教の意義(二)本論〇カント、シュライエルマッハー、ルッターの宗教(三)結論	4版	四六上 五五六	二・〇〇 ・二〇
スティルネル著 辻潤譯	自我經	(一)人間篇〇人生〇舊時代と新時代の人々〇古代人〇近代人自由人(二)自我篇〇所有〇所有人唯一者	8版	四六上 六六八	二・八〇 ・二二
理學博士 桑木彧雄著	物理學と認識	〇物理學と認識〇文藝上の描寫論と科學〇物理學上の認識の問題〇絕對運動論〇外四篇	6版	四六上 二三四	一・五〇 ・一八
東洋大學教授 關寬之著	學校兒童心理學	〇學齡兒童を研究の對象として實驗的にまた演繹的にその心理狀態を考究したる教育的心理學である。	3版	四六上 四七三	二・七〇 ・二二
ヨゼフ・ディフゲン著 山川均譯	無產階級の哲學	〇ディツゲンの爲人と其哲學〇哲學の實果〇一勞働者の觀たる人間の腦髓の働きの性質	5版	四六上 五六八	二・五〇 ・二二
ウンターマン著 森宏一譯	哲學思想の史的考察	原著者はマルクス派學徒で古代より近代に至る哲學思想の史的考察と共に進化學說の變遷を語るもの	8版	菊上 四三二	二・〇〇 ・二二

著者	書名	內容	版	判・頁	定價・送料
室伏高信著	靈の王國	獨逸の政治家ラテナウの思想神髓を傳へたもの人の心の崇高なものを抽出し靈の王國を建設せと高唱す	5版	四六上	一・五〇 ・一八
松崎實編	校註 切支丹鮮血遺書	三百年前キリシタンを信奉して長崎立山にて磔殺されし二十六人の殉教記錄、言々とれ血涙記	10版	四六上 六〇三	三・九〇 ・二六

(4) 文學

著者	書名	內容	版	判・頁	定價・送料
京大教授 植田壽藏著	藝術哲學	○藝術的理念○藝術的自然○藝術家○藝術作品○觀照○藝術の進展性—植田氏は藝術哲學の權威	6版	菊上 三四四	二・七〇 ・二四
文學博士 厨川白村著	苦悶の象徵	白村の唯一といつてもよい系統ある藝術を論じたもので千古の名文、情熱に富んだ立派な文學概論だ。	52版	四六上 二一四	一・八〇 ・二〇
吉江喬松著	近代文明と藝術	○近代思想と文藝○現代日本文明と藝術○大自然と文藝等を氏の流麗な文章で述ぶ。	5版	四六上 三三四	二・〇〇 ・二〇
里見弴著	文藝管見	○自序○自分自身の紹介○藝術の分野○文藝概觀○內容と表現等、文藝に志す人の必讀の良書	5版	四六上 一九八	一・二〇 ・一六
レオン・トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	○非十月革命文學○革命の文學的同伴者○未來派○詩の形式派とマルクス主義等	4版	四六上 三五四	二・〇〇 ・二〇
帝大教授 阿部次郎著	學藝論鈔	○若きゴーホ○ゴーホの藝術○フーゴー・ヴォルフの傳○晩年のロダン○美の問題について等	6版	四六上 四一三	二・二〇 ・二〇
昇曙夢著	露國現代の思潮及文學	露國現代の思潮文學を解剖した我國での唯一の大文獻。近代の露國文學を知る人の第一の參考書。	4版	四六上 七八六	四・八〇 ・三〇
文學博士 厨川白村著	近代の戀愛觀	○近代の戀愛觀（十三項）○再び戀愛を說く（七項）○三度戀愛に就て言ふ○結婚式を許す等實行日本一	1[illegible]版	四六上 三七〇	二・五〇 ・二二
理學博士 石原純著	戀愛價値論	○戀愛價値論○戀愛と道德○愛の一つの相としての戀愛の本質○戀愛と生活○現代女性の歩むべき道	7版	四六上 二八三	一・六〇 ・一八
親佛文學會編	ゆかり	クローデル大使を送る爲めに佛蘭西に關係ある文豪詩人畫家が自分の最もいい作を集めた趣味ある書	1刷	四六上 四四六	上三・[illegible] 特六・[illegible]

(5) 小說及戲曲

賀川豊彦著	長篇小説 死線を越えて（上巻）	我國第一の賣行きを示せる有名なる賀川氏の自叙傳的小說。此三卷は世界各國に飜譯された高名の書籍	288版	四六上 三七二	三・〇〇 ・二四
賀川豊彦著	長篇小說 死線を越えて（中卷）太陽を射るもの	氏の貧民窟教化實踐窟教化がいかに熱烈であることは我國の全民衆の承認する所。勞働記錄の聖書。	132版	四六上 四〇八	二・八〇 ・二二
賀川豊彦著	長篇小說 死線を越えて（下卷）壁の聲きく時	震災前後に氏が神の如く活躍せるさまは本書を讀むものの誰でも涙なしでは讀み得ぬところである。	60版	四六上 三一〇	二・八〇 ・二四
志賀直哉著	直哉傑作選集 壽々	○小僧の神樣○正義派の諸作の追憶○母の死と新らしい母○城ケ崎にて○眞鶴○和解等の十數名篇	5版	四六上 四三三	二・五〇 ・二二
芥川龍之介著	沙羅の花	○羅生門○系敎人の死○きりしとほろ上人傳○或日の大石内藏之助○南京の基督○秋山圖等	8版	四六上 四〇八	二・八〇 ・二二
里見弴著	文版 直輔の夢	○甘酒○直輔の夢等最近氏の代表作を集む。名人の名作といふ感じが橫溢す。	10版	四六上 二五四	一・五〇 ・二〇
武者小路實篤著	第三の隱者の運命	武者小路氏の創作中尤も力の這入つた傑作と稱せらるべきものだ。そして尤も考へさせられる大作。	廉價	四六上 三五〇	一・九〇 ・二〇
吉田絃二郎著	ダビデと子たち	○ダビデと子たち○叔父夫婦○救はれぬ人間○高原○○棒	10版	四六上 三五八	一・八〇 ・二〇
吉田絃二郎著	芭蕉	○芭蕉○草原○或る中學教師○二老人と彼○生れ來る者を集む。就中芭蕉は好評高し。	16版	四六上 三四八	一・六〇 ・一八
正宗白鳥著	戯曲 ある心の影	○ある心の影○人生の幸福○影法師○秘密○白壁の五篇、「人生の幸福」は氏の大力作	4版	四六上 二六八	一・六〇 ・一八
イバニエス原作 鈴木厚譯	血と砂	西班牙の鬪牛士の生活を描く。彼等がいかに社交界に持て、そしてその生活のいかに華かなるかを見よ	10版	四六上 三六八	二・六〇 ・二二
三上於菟吉譯	ゾラ傑作 獸人	失戀に狂ふ女、凡ゆる女をたらす色魔を描いて悄然の句に充ちた戰慄すべき作ゾラの作中深刻なるもの	品切	四六上	三・〇〇 ・二二
ジョルジュ・サンド著 田沼利男譯	鬼火の踊り	馥郁香る佛國の田園を背景として村乙女と若き農夫の淸新純朴なる戀を描く佛國文豪の一大傑作	4版	四六上 二四四	一・八〇 ・一八
藤森成吉著	東京へ	○東京へ○無心○少年の群○脫走者○若き修道者○山嘲等社會意識を明にせる絕品	4版	四六上 三〇〇	二・三〇 ・二〇

室伏高信著	靈の王國	獨逸の政治家ラテナウの思想神髓を傳へたもの人の心の崇高なものを抽出し靈の王國を建設せと高唱す	5版	四六上	一・五〇 ・一八
松崎實編	校註 切支丹鮮血遺書	三百年前キリシタンを信奉して長崎立山にて磔殺されし二十六人の殉教記錄、言々これ血涙記	10版	四六上 六〇〇	三・九〇 ・二六

(4) 文學

京大教授 植田壽藏著	藝術哲學	○藝術的理念○藝術的自然○藝術家○藝術作品○觀照○藝術の進展性—植田氏は藝術哲學の權威	5版	菊上 三四四	二・七〇 ・二四
文學博士 厨川白村著	苦悶の象徴	白村の唯一といつてもよい系統ある藝術を論じたもので千古の名文。情熱に富んだ立派な文學推論だ。	52版	四六上 二一四	一・八〇 ・二〇
吉江喬松著	近代文明と藝術	○近代思想と文藝○現代日本文明と藝術○大自然と文藝等を氏の流麗な文章で述ぶ。	5版	四六上 三三四	二・〇〇 ・二〇
里見弴著	文藝管見	○自序○自分自身の紹介○藝術の分野○文藝概觀○内容と表現等、文藝に志す人の必讀の良書	5版	四六上 一九八	一・二〇 ・一六
レオン・トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	○非十月革命文學○革命の文學的同伴者○未來派○詩の形式派とマルクス主義等	4版	四六上 三六四	二・〇〇 ・二〇
帝大教授 阿部次郎著	學藝論鈔	○若きゴーホ○ゴーホの藝術○フーゴー・ヲルフの傳○晩年のロダン○美の問題について等	6版	四六上 四一三	二・二〇 ・二〇
昇曙夢著	露國現代の思潮及文學	露國現代の思潮文學を解剖した我國での唯一の大文獻。近代の露國文學を知る人の第一の參考書。	4版	四六上 七八六	四・八〇 ・三〇
文學博士 厨川白村著	近代の戀愛觀	○近代の戀愛觀(十三項)○再び戀愛を說く(七項)○三度戀愛に就て言ふ○結婚式を訂す等實行日本一	122版	四六上 三三〇	二・五〇 ・二二
理學博士 石原純著	戀愛價値論	○戀愛價値論○戀愛と道德○愛の一つの相としての戀愛の本質○戀愛と生活○現代女性の歩むべき道	7版	四六上 二八二	一・六〇 ・一八
親佛文學會編	ゆかり	クローデル大使を送る爲めに佛蘭西に關係ある文豪詩人畫家が自分の最もいい作を集めた趣味ある著書	1刷	四六上 四四六	上三・二〇 特六・二〇

(5) 小說及戲曲

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價・送料
賀川豊彦著	長篇小説 死線を越えて（上巻）	我國第一の實行きを示せる有名なる賀川氏の自叙傳的小説。此三巻は世界各國に飜譯された高名の書籍	288版	四六上 [illegible]	三・〇〇 ・二四
賀川豊彦著	長篇小説 死線を越えて（中巻）太陽を射るもの	氏の貧民窟敎化實踐窟敎化がいかに熱烈であるとは我國の全民衆の承認する所。勞働記録の聖書。	132版	四六上 [illegible]	二・八〇 ・二〇
賀川豊彦著	長篇小説 死線を越えて（下巻）壁の聲きく時	震災前後に氏が神の如く活躍せるさまは本書を讀むものの誰でも涙なしでは讀み得ぬところである。	60版	四六上 [illegible]	二・八〇 ・二四
志賀直哉著	直哉傑作選集 壽々	○小僧の神様○正義派の諸作の追憶○母の死と新らしい母○城ケ崎にて○眞鶴○和解等の十數名篇	[illegible]版	四六上 [illegible]	二・五〇 ・二〇
芥川龍之介著	沙羅の花	○羅生門○奉敎人の死○きりしとほろ上人傳○或日の大石内藏之助○南京の基督○秋山圖等	8版	四六上 [illegible]	二・八〇 ・二〇
里見弴著	文版 直輔の夢	○甘酒○直輔の夢等最近氏の代表作を集む。名人の名作といふ感じが横溢す。	10版	四六上 [illegible]	一・五〇 ・二〇
武者小路實篤著	第三の隠者の運命	武者小路氏の創作中尤も力の這入つた傑作と解せらるべきものだ。そして尤も考へさせられる大作。	廉價	四六上 [illegible]	一・九〇 ・二〇
吉田絃二郎著	ダビデと子たち	○ダビデと子たち○叔父夫婦○救はれぬ人間○高原○○棒	10版	四六上 [illegible]	一・八〇 ・二〇
吉田絃二郎著	芭蕉	○芭蕉○草原○或る中學教師○二老人と彼○生れ來る者を集む。就中芭蕉は好評高し。	16版	四六上 [illegible]	一・六〇 ・一八
正宗白鳥著	戯曲 ある心の影	○ある心の影○人生の幸福○影法師○秘密○白壁の五篇、「人生の幸福」は氏の大力作	4版	四六上 [illegible]	一・六〇 ・一八
イバニェス原作 鈴木厚譯	血と砂	西班牙の闘牛士の生活を描く。彼等がいかに社交界に持て、そしてその生活のいかに華かなるかを見よ	10版	四六上 [illegible]	二・六〇 ・二〇
三上於菟吉譯	ゾラ傑作 獣人	失戀に狂ふ女、凡ゆる女をたらす色魔を描いて悽愴の句に充ちた戰慄すべき作ゾラの作中深刻なるもの	品切	四六上	三・〇〇 ・二〇
ジョルジュ・サンド著 田沼利男譯	鬼火の踊り	馥郁香る佛國の田園を背景として村乙女と若き農夫の清新純朴なる戀を描く佛國文豪の一大傑作	4版	四六上 [illegible]	一・八〇 ・一八
藤森成吉著	東京へ	○東京へ○無心○少年の群○脱走者○若き修道者○山彌等社會意識を明にせる絶品	4版	四六上 [illegible]	二・三〇 ・二〇

藤村千代著	脂粉の顔	○人間の意企○追憶の父○東京と云ふところ○巷の雑音○脂粉の顔等新人の力作を鏤む	4版	四六上 三五二	二・三〇 ・二二
野上彌生子著	海神丸 其他	○海神丸○多津子○所有等	1刷	四六上 二四四	一・三〇 ・二〇
佐藤春夫著	佗しすぎる	美文家として名聲高き著者の名作、傷々しき戀の記録、詞は花の如く想は星の如し藝術味饒なる作品	5版	四六上 二七七	一・六〇 ・一八
武林無想庵著	長篇小説 結婚禮讃	規模の廣大は古今に絶し人間の性慾を赤裸々に取扱つたものゾラのナナ以上に面白く一讀巻を掩ふ不能	11版	四六上 三六八	二・三〇 ・二〇
武林無想庵著	文明病患者	○續結婚禮讃○アナルキスタの悲○渾沌○日記よりでめとりずす○遊女くりじす○文明病患者等	5版	四六上 四六六	二・三〇 ・二〇
長與善郎著	青銅の基督	○青銅の基督○陸奥直次郎○シスカの一夜○Cの話	6版	四六上 三六六	二・〇〇 ・二〇
細井和喜藏著	工場	○暴虐な資本家無智なる女工煉瓦壁の裡の戰慄すべき奴隷生活は著者の體驗と靈筆により如實に描出す	21版	四六並 四一七	二・〇〇 ・二〇
中西伊之助著	農夫喜兵衛の死	小農喜兵衛の伜は滿洲で戰死し娘は賣れて朝鮮に行き彼は地主に虐られて水に溺れた現代社會の縮圖	5版	四六上 二八八	一・七〇 ・一八
葛西善藏著	哀しき父	○不良兒○仲間○西○本來の面目○椎○悪夢○父の歸郷○押雛そのほか○○千人風呂○M氏の失敗等	5版	四六上 三四四	一・九〇 ・二〇
里見弴著	縁談窶	縁談窶○無言の晩餐○伊籐すだれ○不貞○オードキニン○大臣の夜飯○らで玉○夢みたいな話○其他	6版	四六上 四二八	二・三〇 ・二二
佛フラマリオン著 高瀬毅譯	此世は如何にして終るか	精細なる科學的立場より世の終末を鮮明に描出せる特殊の文學、譯文亦些の澁滯なく原文の俤を傳ふ	9版	四六上	二・〇〇 ・二〇
近松秋江著	二人の獨り者	愛慾を描くに纒綿の名筆を有せる氏が最長篇力作し男ばかりの生活は寂しいが又別種の趣がある、	4版	四六上 三三三	二・〇〇 ・一八
犬養健著	一つの時代	○愚かな父○眼帶○初夏○弱い生徒○冬の出來事○姉弟と新聞配達○二人兄弟○朧夜	5版	四六上 三六六	二・五〇 ・二二
柳原燁子著	則天武后	題材を支那に採りて權力と戀とにまつはる女性の心理を深刻に描寫せるもの文章亦華麗香高き藝術品	4版	四六上 二四六	一・六〇 ・一八

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價・送料
山本有三著	嬰兒殺し	○津村教授○嬰兒殺し○生命の冠○女親○坂崎出羽守	10版	四六上 三〇八	二・〇〇 ・二〇
菊池寛著	戀愛病患者	○俏康仔子○浦の苦悶○ある記録○微苦笑○世評○震災餘譚○戀愛病患者○頸縊り上人○丸橋忠彌	14版	四六上 二六六	一・五〇 ・一八
菊池寛著	啓吉物語	文壇の雄菊池氏の自傳とも出世作とも見るべき短篇集若き氏が如何に才氣に富み力強きかを盛る絶好書	17版	四六上 四六九	二・〇〇 ・二〇
北村壽夫著	幻の部屋	貧乏な美術家資本家の娘、秘書役等を拉し來りて人生の各斷面を生々しく讀者の面前に投げ付けた傑作	4版	四六上 二七〇	一・六〇 ・一八
トマス・ハーディ著 内多精一譯	薄命のチュード	結婚と靈肉闘爭社會組織の欠陥と現代の學風信仰に對する皮肉を深刻に描けるプロ文學の代表小說	4版	四六上 七〇八	三・二〇 ・二四
長田秀雄著	戲曲 愛憎篇	○石山開城記○父の別莊	4版	四六上 二六六	一・六〇 ・一八
細田民樹著	或兵卒の記錄	○入營の日○最初の頃○多忙な初年兵○戰術道○ひとつの飯盒○厩○高原の廠舍○愛馬菊水○外九篇	4版	四六上 四六六	二・五〇 ・二〇
泉鏡花著	番町夜講	○眉かくしの靈○夫人利生記○假宅話○きん稲○光藍○胡桃○火のいたづら○栃の實○雨ふり○外二篇	4版	四六上 三三二	二・〇〇 ・二〇
谷崎潤一郎著	新選谷崎潤一郎集	○神童○炎○悪魔○續悪魔○あくび○前科者○異端者の悲しみ○人面疽等外數十篇	新刊	四六上 一二〇〇	五・五〇 内・二七
谷崎潤一郎著	戲曲 愛すればこそ	○愛すればこそ○永遠の偶像○彼女の夫○或る調書の一節等藝術品として我國第一の賣行を示す	104版	四六上 二八〇	一・六〇 ・一八
谷崎潤一郎著	戲曲 愛なき人々	○本牧夜話○お國と五平○白狐の湯○愛なき人々	34版	四六上 二四四	二・〇〇 ・二〇
谷崎潤一郎著	痴人の愛	マゾヒズムの代表作として世界的の名作。最近創作壇の第一人者、	52版	四六上 三九八	二・〇〇 ・二〇
吉田絃二郎著	運命の秋	○西鄉吉之助○來日○人間を悲しむ○孤の中○故鄉の町○花梨の下	10版	四六上 三六八	二・〇〇 ・二〇
志賀直哉著	雨蛙	○雨蛙○冬の往來○濠端の住ひ○偶感○轉生○梟○斷片○子供三題○廿代一面○或る男其姉の死等	6版	四六上 四[illegible]	二・五〇 ・二二

詩歌

著者	書名	解說	版	判型・頁數	定價・送料
齋藤茂吉著	現代代表自選歌集 朝の螢	天才詩人茂吉の歌は全く子規・漱石と共に文壇の寶玉である。此歌集は現代歌壇の一大權威。	5版	四六上 一三四	一・五〇 ・一八
島木赤彥著	現代代表自選歌集 十年	彫琢の殿堂に達す。かくの如く藝道に澄透の境地を有する歌人の自選集出るは歌壇の喜び	4版	四六上 一四〇	一・五〇 ・一八
古泉千樫著	現代代表自選歌集 川のほとり	未だ曾つて歌集を出さざりし氏の處女歌集にして併せて全集。左千夫を師として出藍の偉材	4版	四六上 一八八	一・八〇 ・一八
中村憲吉著	現代代表自選歌集 松の芽	アララギ新進歌人隨一、天才ありて視野に一新境地を發見せり茂吉、赤彥と併稱さる。	3版	四六上 一〇八	一・八〇 ・二〇
釋迢空著	現代代表自選歌集 海やまのあひだ	尤も幽寂な歌人。此人の歌を誦し居れば身はいつでも深山幽谷にあるの思ひがする。	4版	四六上 二六六	一・八〇 ・二二
木下利玄著	現代代表自選歌集 立春	白樺第一の歌人信綱を師としその和歌は師の發見せざる一別境を行く長閑なる感がある	3版	四六上 一七六	一・八〇 ・二〇
加藤一夫著	亂舞する焰	○亂舞する焔○悲劇の成長○寂しき道づれ○愛の復活	4版	菊半上 三〇八	二・〇〇 ・一八
北原白秋著	現代代表自選歌集 （題未定）	歌道各派に重大なる影響を與へた歷史的天才詩人その和歌は奔放雄大天馬空を行くの慨あり	近刊	四六上	一・八〇 ・一八
與謝野晶子著	現代代表自選歌集 人間往來	北原氏と共に歌壇の雄にしてその功勞は枚擧に遑あらず此人の自選歌集は歌壇の一重鎭だ。	4版	四六上 一七三	一・八〇 ・二〇
前田夕暮著	現代代表自選版集 原生林	歌集として見れば此人程意外に立派な歌が集まる人は又他に少いと思はれる。總てこれ名玉。	3版	四六上 二〇四	一・八〇 ・二〇
土岐哀果著	現代代表自選歌集 空を仰ぐ	啄木を知るものは哀果を擧げ、哀果を論ずるものは啄木を引合に出す、近時彼に一轉機あり	3版	四六上 一九六	一・八〇 ・二〇
若山牧水著	現代代表自選歌集 野原の郭公	その風格、その和歌共に脫俗して歌道以外の人々まで氏を仰ぎ見る氏が半生の史的集積。	3版	四六上	一・八〇 ・二〇
窪田空穗著	現代代表自選歌集 槻の木	この人の藝道に於ける境地は近時ますます展けて來た。此一書を讀みて近時に逍べば一段の味あり	3版	四六上 一九五	一・八〇 ・二〇

帝大教授 阿部次郎著	北郊雜記	○北郊雜記(十三項)○思潮雜記(二十五項)○雜纂(十二項)	18版	菊半上 四〇三	一・九〇 ・一八
倉田百三著	超克	○靈と肉との一致に就いて○人間主義と超克主義○卑しむべきものに就いて○心なき業に就いて等	34版	四六上 五九二	二・二〇 ・二〇
賀川豊彥著	星より星への通路	○星より星への通路○ディオニソスの誕生○混迷の巷より	49版	四六上 三〇八	二・〇〇 ・二〇
若山牧水著	樹木と其の葉	○氏の酒脫な旅行記、隨想、求道感、人生感、自然感を集めた面白く讃へらるる一書	4版	四六上 三六七	二・〇〇 ・二二
長谷川如是閑著	改造社隨筆叢書第一篇 犬・猫・人間	○ピヨトルの猫と私の猫○亡友四匹○猛犬ジャックの話○其他犬、猫、人間、家に關する隨筆	17版	四六並 四〇三	一・八〇 ・一六
堺利彥著	改造社隨筆叢書第二篇 野外劇の一幕	○野外劇の一幕○獄中を顧みつゝ○出獄後の世の中○過去の夢、未來の夢、現存の夢○外數項	5版	四六並 二六八	一・五〇 ・一六
中澤臨川著	改造社隨筆叢書第三篇 嵐の前	○嵐の前○余の態度○新藝術觀○思想藝術の超然性○感能のさま〴〵○庭の花等	18版	四六上 二三四	一・五〇 ・一六
高濱虛子著	改造社隨筆叢書第四篇 朝の庭	○所謂新傾向○雜感○二葉亭主人の俳句の草稿を見る○十九日間○机上觀能○螢○外二十五項	5版	四六並 三〇五	一・七〇 ・一六
武者小路實篤著	改造社隨筆叢書第五篇 筆の向くまゝ	○アンリ・ルーソーの畫を見て○詩十二○詩と感想○雜感○舞臺監督に就て○時事雜感その他	新刊	四六並 三〇四	一・一〇 ・一四
河東碧梧桐著	改造社隨筆叢書第六篇 二重生活	○肉體美○薔薇とコクリコ○縱の橋○外的二重生活○內的二重生活○縱斷的都市○外十數項	新刊	四六並 二三〇	一・二〇 ・一六
文學博士 新村出著	南蠻更紗	○雪のサンタマリヤ○吉利支丹文學斷片○遵主聖範の和譯本○切支丹宗の遺物○外三十二項	18版	四六上 三六八	二・六〇 ・二二
野口米次郎著	先驅者の言葉	○苦言○英雄崇拜の提唱○無用の長物○美感の調路○單純性○世界心○近代生活○隅田川外十一項	4版	四六上 三三〇	一・八〇 ・一六
野口米次郎著	坐る人間の評論	○母性禮讃○重大な結果○米國人○英國人○メレデスへ行け○詩に於ける想像の力○外數項	4版	四六上 三二六	二・〇〇 ・一八

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價・送料
柳澤健著	ジャン・ジョレス	○ジョレスの生涯及び思想○ジョレス（ロマン・ロラン）○ジャンジョレス（ブリユール）	新刊	四六上 三五二	一・五〇 ・一八
經濟博士 本庄榮治郎著	日本社會史	○日本社會史の觀念○氏族制度○郡縣制度○莊園制度○分權的封建制度（○集權的封建制度等	24版	菊上 二八八	二・五〇 ・二四
京大講師 山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	○序論○利子禁止思想の歷史○中世寺院法と猶太人○中世寺院法と商業（○中世寺院法と組合及び會社等	新刊	四六上 三三三	一・五〇 ・一八
松崎實編	校註 切支丹血鮮遺書	三百餘年の昔キリシタンを信奉して長崎立山にて誅殺されし二十六人の殉教記錄、言々涙なる實歷史	10版	四六上 六六二	三・五〇 ・二六
經濟博士 本庄榮治郎著	近世農村問題史論	經濟史の權威たる著者が近世日本に於ける農村問題を史的に考察したる日本農政史上の一方面である	6版	四六上 三五六	二・三〇 ・二二

(10) 紀行

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價・送料
槇有恒著	山行	○山と成る男○アルペンに於ける登山の發達○登高記○南側よりのアルペン○山村の人と四季等	6版	菊上 三七三	三・二〇 ・二二
野口源三郎著	オリンピアへの旅	○首途○太平洋上から○桑港より○プルマン車窓によつて○紐育の巷○太西洋日記等	4版	四六上 四四八	二・五〇 ・二〇
美術學校教授 矢代幸雄著	太陽を慕ふ者	○レオナルドに逢ふ日○悲しき眸○綠色のショパン○本寺の鯊影○スペインの誘惑○窓の少女等	6版	四六上 三三四	一・五〇 ・一八
室伏高信著	印象と傾向	（一）人の印象○ロオラン○ベルグソン外七人（二）世界の傾向○アメリカ見聞○混亂の英國○外六項	3版	四六上 四四〇	二・〇〇 ・二〇
芥川龍之介著	支那游記	詩情流麗神韻靈妙な氏の筆は支那の人事風物の聚れるを擱まし躍るを矯めて新綠背然の如き爽快味あり	16版	四六上 三六六	二・〇〇 ・二〇
醫學博士 木下杢太郎著	支那南北記	透徹したる美術眼と之を表現するに適しい才筆を載せて支那及び朝鮮全土の古跡名蹟を行脚したる記錄	8版	四六上 三六六	三・〇〇 ・二二

(11) 物理

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價・送料
[illegible]	アインスタイン全集（全四冊）	世界的頭浄の回天の新學說を熟烈正確に我が國學術界に紹介す、内容に就いては今更贅言を要せず。	10版	菊上	各冊 [illegible] 各冊 [illegible]

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價・送料
理學博士 桑木彧雄著	物理學と認識	○物理學と認識○文藝上の描寫論と科學○物理學上の認識の問題○絕對運動論外四篇	6版	四六上 二三四	一・五〇 ・一八
佐藤充 庄司彦六 共著	近代物理學概觀	(一)物質○分子及び原子○電子○原子の崩壞等(二)エネルギー○波動○輻射等	新刊	菊上 二三四	三・〇〇 ・二二
中澤臨川著	電子說から見た世界	一代の文豪として雷名を轟かせし臨川氏の理學的文藝品であり藝術的滋味に富める科學的世界觀である	6版	四六上 四一三	一・八〇 ・一八

(12) 兒童

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價・送料
佐藤春夫著	童話 ピノチオ	豐富な構想上品な滑稽適度の教訓空想や感傷に陷らず而かも子供の性情とぴつたりせる少年文學の上乘	6版	四六上 二九六	一・八〇 ・一八
東洋大學教授 關寛之著	學校兒童心理學	學齢兒童を研究の對象として實驗的にまた演繹的にその心理狀態を考究したる教育的心理學である。	3版	四六上 四七三	二・七〇 ・二二

(13) 運動

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價・送料
熊谷一彌著	改造社運動叢書 第一篇 テニス	世界的名手熊谷氏苦心の著述。硬球式庭球の唯一の指南書。スポーツを知らんとする人の好伴侶	24版	四六上 三二八	二・三〇 ・二〇
三宅大輔著	改造社運動叢書 第二篇 野球	野球界の三宅氏は淸理兼備の名將として好球兒に普く知らる本書は科學的研究の結晶にして文章亦雄健	11版	四六上 三三六	二・八〇 ・二二
梅澤親光著	改造社運動叢書 第三篇 水泳	○游泳術○水上競技○教導と指導○雜件○附表	7版	四六上 二六四	二・〇〇 ・一八
平井左門著	改造社運動叢書 第四篇 山岳スキー	○スキー沿革の概說○用具及び準備具○スキー・ツーリストとしての資格と訓練○外九項	3版	四六上 三二六	二・五〇 ・二二
香山蕃著	改造社運動叢書 第五篇 ラグビー	(一)總論(一)競技の精神○起原及發達○概說(二)本論(三)結論(一)注意事項○練習○規則	3版	四六上 三一八	二・五〇 ・二〇
槇有恒著	山行	○山と或る男○アルペンに於ける登山の發達○登高記(南側よりのアルペン○山村の人と四季等	4版	菊上 二七三	三・二〇 ・二二
野口源三郎著	オリンピヤへの旅	○首途○太平洋上から○桑港より○プルマン車窓によりて○紐育の卷○太西洋日記等	3版	四六上 四〇八	二・五〇 ・二〇

新刊及近刊

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價	送料
菊地寛著	長篇小說 第二の接吻	富、地位、名望、愛の卍巴と渦く中を、流れ、泳ぎ、藻掻き、溺るゝ、現代男女の苦悶と葛藤の活寫圖。	45版	四六上 三八八	二・〇〇	・二〇
谷崎潤一郎著	長篇小說 鮫人	林眞珠の奇しき運命と彼女を繞りて演ぜらるる痴態嬌態是現代の縮圖。	24版	四六上 三二四	二・〇〇	・一八
吉田絃二郎著	父	○父○カンスとカラー○石田老人○蛤○凡人の一生○秋をゆく○大谷刑事	13版	四六上 三二五	一・九〇	・二〇
武者小路實篤著	戲曲 愛慾	○愛慾○父と娘	16版	四六上 二三三	一・六〇	・二〇
佐藤春夫著	窓展く	寶笑婦マリ○窓展く○時計のいたづら○硝○アダムルックスが遺書○哀れ○鬆匪○秋立つ○ドOU	6版	四六上 三四六	二・〇〇	・二〇
藤森成吉著	惱み笑ふ	北見○ある體操敎師の死○親心○古陣二濟○路上○地主○京洛の秋○野人○菓子の傀儡○祭の夜○幼年○	5版	四六上 三〇〇	一・三〇	・一八
細井和喜藏著	奴隷	經濟的奴隷たる主人公が農村に生れ工場に追込まるゝ迄の生活を描き「工場」の前篇をなすもの	11版	四六並 四六四	二・〇〇	・二二
文學博士 幸田露伴著	蒲生氏郷	露伴道人の名作として盛名あるもの。文豪の見たる叛將と戰國の一雄豪の面目躍如たり。	新刊	菊上 三六三	二・〇〇	・二二
法學博士 堀江歸一著	國際經濟總論	○鎖國經濟○國際共通經濟○外國貿易と國際貸借○外國貿易と國際共通經濟○以下四項	4版	菊上 四一七	三・五〇	・二六
富田溪仙著 下店靜市編	溪仙八十一話	○浮世繪師○生活○紙屋川の地藏堂○觀音○冷○花嫁と投さし○夢○芝居の繪招牌○茶の話外七十餘項	新刊	菊上 三四三	三・〇〇	・二六
京大助敎授 太宰施門著	ロマンチク時代	○ロマンチク時代○ラマルチーヌ○ジョルジュサンド○バルザックの小說○レアリスムへ○附錄並註解	新刊	四六上 三六八	二・〇〇	・二〇
東京帝大スキー山岳部編	スキーイング初步	○スキー○締具○杖○スキー靴○服裝○スキー取扱方○着脫○平地行進○方向變換○登行○滑降○其他	新刊	四六上 二三三	一・五〇	・一八
法學博士 堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替(上卷)	貨幣の性質と職務○鑄造○流通○貨幣の移動分配○貨幣の價値○本位制度○紙幣○各國貨幣制度現狀	新刊	菊上 三八四	三・〇〇	・二六

法學博士 堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替（下卷）	銀行の本質職務○銀行の受信的業務○銀行の授信的業務○銀行組織○諸國銀行制度○外國爲替	最新	菊上 五二二	四・〇〇 ・三〇
慶大教授 野村兼太郎著	近世商業史	近世商業の本質と變遷を明瞭にし其の現代經濟組織に與へたる影響を詳述したる良書。	新刊	菊上 三五四	三・〇〇 ・二六
廣島高師教授 清原貞雄著	日本道德論	○總説○國家○國體○日本道德の要素○忠義○從順の德と犧牲的精神○武士道の發達○神道と國民道德	新刊	菊上 五四四	四・五〇 ・三〇
文學博士 幸田露伴著	賴朝・爲朝	露伴の筆たる名醫のメスの如し戀の賴朝を見よ島の賴朝を見よ縱横無盡讀者をして快感を叫ばしむ。	新刊	菊上 二六八	二・〇〇 ・二二
賀川豐彥著	雲水遍路	太平洋の彼方○大英帝國○藝術の國へ○斜に見た獨逸○瑞西の雜觀○伊太利紀行○聖地巡禮○エヂプト	新刊	四六上 五二六	三・〇〇 ・二六
帝大教授 河合榮治郎著	在歐通信	英國勞働運動○倫敦生活○夏の英國○オクスフォルドの學閥○大陸に立つ迄○獨逸學界の印象等。	新刊	四六上 三三三	二・〇〇 ・一八
河西太一郎著	農業問題研究	○農業問題の基礎的考察○農業理論及び政策研究○農民運動及び其他	新刊	四六上 四三三	・二三〇 ・二二
ブハリン著 富士辰馬譯	世界經濟論	國家社會主義的トラストより出づる帝國主義の諸形態と動向を明示せる名著。現代社會の嚴正なる批判。	新刊	四六上 三二六	二・〇〇 ・二〇
正宗白鳥著	安土の春	○安土の春○勝賴の最後○ある文學者の心○柿の木○老醜	新刊	四六上 一九七	一・三〇 ・一六
三宅やす子著	長篇小說 奔流	因襲の奴隷たりし淳子も最後に眞の愛を把握するには凡てを棄てゝ顧みなかつた女性の强さを示す作。	新刊	四六上 四四四	二・三〇 ・二〇
鈴木斐子譯	みつけもの	新しい感じ方で世界を感じてゐると稱讃さるゝ著者が種々の書物の中に人生の眞實を「みつけ」たる小品	新刊	四六上 二二四	一・五〇 ・一八
岸田國士著	言葉・言葉・言葉	近代的感覺の持主たる著者の隨感隨錄二十八篇を蒐めたものである。全篇悉く珠玉の如し	新刊	四六上 二四八	一・八〇 ・一八
リベイテンスキイ著 池谷信三郎譯	一週間	建設途上にある現代露國の各階級各典型の男女を拉し來りて彼等の苦惱と葛藤とを如實に描出せる名篇	新刊	四六上 三三四	一・八〇 ・一八
森戶辰男著	學生と政治	世上囂々たる學生の社會科學研究問題に明快なる批判と決定的の論斷を與ふ。青年學徒の必讀書	9版	四六並 六四四	・三五 ・一二

新刊及近刊

著者	書名	内容	版	判型・頁	定價・送料
菊地寛著	長篇小說 第二の接吻	富、地位、名望、は愛の卍巴と渦く中を、流れ、泳ぎ、藻掻き、溺るゝ、現代男女の苦悶と狂態の活寫圖。	45版	四六上 二九八	二・〇〇 ・一〇
谷崎潤一郎著	長篇小說 鮫人	林眞珠の奇しき運命と彼女を繞りて演ぜらるゝ痴態嬌態是現代の縮圖。	24版	四六上 三二四	二・〇〇 ・一八
吉田絃二郎著	父	○父○カンスとカラー○石田老人○蛤○凡人の一生○秋をゆく○大谷刑事	13版	四六上 三二五	一・九〇 ・二〇
武者小路實篤著	戲曲 愛慾	○愛慾○父と娘	16版	四六上 二三三	一・六〇 ・二〇
佐藤春夫著	窓展く	寶笑娘マリ○窓展く○時計のいたづら○硝○アダムルックスが遺著○哀れ○舞姫○秋立つ○○FOU	6版	四六上 三四六	二・〇〇 ・二〇
藤森成吉著	惱み笑ふ	北見○ある體操教師の死○親心○吉岡二造○路上○地主○京洛の秋○野人○草すの傳彦○祭の夜○幼年○	5版	四六上 三〇〇	一・三〇 ・一八
細井和喜藏著	奴隷	經濟的奴隷たる主人公が農村に生れ工場に追込まるゝ迄の生活を描き「工場」の前篇をなすもの	11版	四六並 四六四	二・〇〇 ・二二
文學博士 幸田露伴著	蒲生氏鄉 平將門	露伴道人の名作として盛名あるもの。文豪の見たる叛將と戰國の一雄傑の面目躍如たり。	新刊	菊上 二六三	二・〇〇 ・二二
法學博士 堀江歸一著	國際經濟總論	○鎖國經濟○國際共通經濟○外國貿易と國際貸借○外國貿易と國際共通經濟○以下四項	4版	菊上 四一七	三・三〇 ・二六
富田溪仙書 下店靜市編	溪仙八十一話	○浮世繪師○生活○紙屋川の地藏堂○觀音○冷○花嫁と捩さし○夢○芝居の繪招牌○茶の話外七十餘項	新刊	菊上 三四三	三・〇〇 ・二六
京大助教授 太宰施門著	ロマンチク時代	ロマンチク時代○ラマルチーヌ○ジヨルジユサンド○バルザツクの小說○レアリスムへ○附錄並註解	新刊	四六上 二六八	二・〇〇 ・二〇
東京帝大スキー山岳部編	スキーイング初歩	スキー○締具○杖○スキー靴○服裝○スキー取扱方○着脫○平地行進○方向變換○登行○滑降○其他	新刊	四六上 二三三	一・九〇 ・一八
法學博士 堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替（上卷）	貨幣の性質と職務○鑄造○流通○貨幣の移動分配○貨幣の價値○本位制度○紙幣○各國貨幣制度現狀○	新刊	菊上 三八四	三・〇〇 ・二六

著者	書名	内容		體裁	定價
法學博士 堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替（下卷）	銀行の本質職務○銀行の受信的業務○銀行の授信的業務○銀行組織○諸國銀行制度○外國爲替	近刊	菊上	四・〇〇 ・三〇
慶大教授 野村兼太郎著	近世商業史	近世商業の本質と變遷を明瞭にし其の現代經濟組織に與へたる影響を詳述したる良書。	新刊	菊上	三・〇〇 ・二六
廣島高師教授 清原貞雄著	日本道德論	○總説○國家○國體○日本道德の要素○忠義○從順の德と犧牲的精神○武士道の發達○神道と國民道德	新刊	菊上	四・五〇 ・三〇
文學博士 幸田露伴著	頼朝・爲朝	露伴の筆たる名醫のメスの如し戀の頼朝を見よ爲の頼朝を見よ縱横無盡讀者をして快感を叫ばしむ。	新刊	菊上	二・〇〇 ・二〇
賀川豊彦著	雲水遍路	太平洋の彼方○大英帝國○藝術の國へ○斜に見た獨逸○瑞西の雑觀○伊太利紀行○聖地巡禮○エヂプト	新刊	四六上	三・〇〇 ・二六
帝大教授 河合榮治郎著	在歐通信	英國勞働運動○倫敦生活○夏の英國○オクスフォードの學園○大戦に立つ迄○獨逸學界の印象等。	新刊	四六上	二・〇〇 ・一八
河西太一郎著	農業問題研究	○農業問題の基礎的考察○農業理論及び政策研究○農民運動及び其他	新刊	四六上	二・三〇 ・二〇
ブハーリン著 富士辰馬譯	世界經濟論	國家社會主義的トラストより出づる帝國主義の諸形態と動向を明示せる名著。現代社會の嚴正なる批判。	新刊	四六上	二・〇〇 ・二〇
正宗白鳥著	安土の春	○安土の春○勝頼の最後○ある文學者の心○柿の木○老僧	新刊	四六上	一・三〇 ・一六
三宅やす子著	長篇小說 奔流	因襲の奴隷たりし淳子も最後に眞の愛を把握するには凡てを棄てゝ顧みなかつた女性の強さを示す作。	新刊	四六上	二・三〇 ・二〇
鈴木斐子譯	みつけもの	新しい感じ方で世界を感じてゐると稱讃さるゝ著者が種々の書物の中に人生の眞實を「みつけ」たる小品	新刊	四六上	一・五〇 ・一八
岸田國士著	言葉・言葉・言葉	近代的感覺の持主たる著者の隨感隨録二十八篇を蒐めたものである。全篇悉く珠玉の如し	新刊	四六上	一・八〇 ・一八
リベヂンスキイ著 池谷信三郎譯	一週間	建設途上にある現代露國の各階級各典型の男女を拉し來りて彼等の苦惱と葛藤とを如實に描出せる名篇	新刊	四六上	一・八〇 ・一八
森戸辰男著	學生と政治	世上喧々たる學生の社會科學研究問題に明快なる批判と決定的の論斷を與ふ。青年學徒の必讀書	9版	四六並	・三五 ・一二

菊地寛著	文藝當座帳	菊池氏の隨感隨錄。讀史餘錄あり演劇論あり人物月且あり文藝批評あり將棋談あり多趣多面の好讀物。	新刊	四六上 二三四	一・五〇 ・一八
ブハーリン著 富士辰馬 横田千元 共譯	唯物史觀	現代最高の指導原理なるマルクス學の神髓をなす唯物史觀を平易に解説せるもの著者譯者共に定評あり	新刊	四六上 六三六	三・五〇 ・二八
廣島高師教授 長田新著	現代教育哲學の根本問題	○現代教育哲學○社會的教育學の理念○社會的理想主義教育○ペスタロッチと理想主義教育學。外三章	新刊	菊上 五九三	三・〇〇 ・二四
持地六三郎著	日本植民地經濟論	○總說○臺灣○朝鮮○滿洲○樺太○委任統治南洋諸島○結論○附錄日本植民地經濟現勢要覽。	新刊	菊上 三二〇	二・八〇 ・二二
細井和喜藏著	無限の鐘	○無限の鐘○或る機械○死と生と一緒○親○泥沼呪文○發明恐怖の頃○愛のテロリスト○外數篇	新刊	四六並 四一〇	二・〇〇 ・二〇
武者小路實篤著	文學に志す人	氏の文學論を纏めたもので文學志望者藝術鑑賞家に文學の眞の目標の何邊にあるかを指示する好著。	新刊	四六上 二六六	一・三〇 ・一八
東北大學教授 村岡典嗣著	吉利支丹文學抄	鎖國時代に西歐文化を象徵せし吉利支丹に關する文獻の大集成、抄と名付くるは著者の謙遜のみ。	新刊	菊上 三六三	三・五〇 ・二六
正宗白鳥著	歡迎されぬ男	○歡迎されぬ男○光秀と紹巴○わしが死んでも○さまざまな不安○溺死者の靴	新刊	四六上 二〇三	一・五〇 ・一八
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理(分册三)	第一篇序論・第二篇若干基本概念・第三篇欲望とその滿足	新刊	菊上 五二六	三・五〇 ・二四
佐藤春夫著	蝗の大旅行		近刊		
谷崎潤一郎著	畸人傳		近刊		
芥川龍之介著	三つの寶		近刊		
有島武郎著	有島武郎拾遺集		近刊		
小山内薫著	戲曲 森有禮		近刊		


夏はよし
青葉カルピス
ほとゝぎす
靜思の朝には……美味千金
活動の晝には……涼味萬斛
團欒の夕には……滋味無量
滋強飲料
カルピス
カルピス
CALPIS
酒店、食料品店、藥店にあり

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.

